aws

ユーザーガイド

AWS OpsWorks

API バージョン 2013-02-18

Copyright © 2026 Amazon Web Services, Inc. and/or its affiliates. All rights reserved.

AWS OpsWorks: ユーザーガイド

Copyright © 2026 Amazon Web Services, Inc. and/or its affiliates. All rights reserved.

Amazon の商標とトレードドレスは、Amazon 以外の製品またはサービスとの関連において、顧客に混乱を招いたり、Amazon の名誉または信用を毀損するような方法で使用することはできません。Amazon が所有していない他のすべての商標は、それぞれの所有者の所有物であり、Amazon と提携、接続、または後援されている場合とされていない場合があります。

Table of Contents

とは OpsWorks 1
OpsWorks サービス 1
AWS OpsWorks for Puppet Enterprise 4
OpsWorks for Puppet Enterprise のリージョンサポート 5
サポート終了のよくある質問 6
このサポート終了により、既存のお客様にはどのような影響がありますか? 6
何もアクションを実行しない場合サーバーはどうなりますか? 7
新規顧客 AWS OpsWorks for Puppet Enterprise を受け入れていますか? 7
End of Life はすべての AWS リージョン に同時に影響しますか? 7
どのレベルのテクニカルサポートを利用できます AWS OpsWorks for Puppet Enterprise か? 7
私は現在 OpsWorks for Puppet Enterprise の顧客であり、以前はサービスを使用していなかったアカウントでサーバーを起動する必要があります。これはできますか? 7
の新機能リリースはありますか AWS OpsWorks for Puppet Enterprise? 7
開始方法 8
前提条件 8
Puppet マスターの作成 12
設定を完了する 23
管理するノードを追加する 27
Puppet Enterprise コンソールへのサインイン 30
オプション: CodeCommit を使用 34
CloudFormation で Puppet マスターを作成する 41
前提条件 41
CloudFormationで Puppet Enterprise マスターを作成する 42
カスタムドメインを使用するようにサーバーを更新する 47
前提条件 48
制限事項 48
カスタムドメインを使用するようにサーバーを更新する 49
以下の資料も参照してください。 53
タグを使用する 53
でのタグの仕組み AWS OpsWorks for Puppet Enterprise 54
OpsWorks for Puppet Enterprise (コンソール)でのタグの追加と管理 55
OpsWorks for Puppet Enterprise (CLI) でのタグの追加および管理 58
以下の資料も参照してください。 63

サーバーのバックアップと復元 64
OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーをバックアップします 64
OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーを復元します 68
システムメンテナンス 69
システムメンテナンスの設定 70
オンデマンドでのシステムメンテナンスの開始 72
メンテナンス後のカスタム設定およびカスタムファイルの復旧 73
ノードの自動的な追加 73
ステップ 1: インスタンスプロファイルとして使用する IAM ロールを作成する 74
ステップ 2: 自動関連付けスクリプトを使用してインスタンスを作成する 75
ノードの削除 76
以下の資料も参照してください。 77
Puppet マスターの削除 77
ステップ 1: 管理されているノードの関連付けを解除する 78
ステップ 2: サーバーを削除する 78
以下の資料も参照してください。 79
Puppet サーバーを Amazon EC2 に移行する 79
ステップ 1: Puppet に連絡してライセンスを購入してください 80
ステップ 2: OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーの詳細を取得してください 80
ステップ 3: OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーのバックアップを作成してください 81
ステップ 4: 新規のEC2 インスタンスを起動する 81
ステップ 5: 新規 EC2 インスタンスに Puppet Enterprise をインストールしてください 83
ステップ 6: 新しい EC2 インスタンスにバックアップを復元してください 83
ステップ 7: Puppet ライセンスを設定してください 84
ステップ 8: ノードを移行してください 84
ステップ 9:OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーを削除します 87
の使用 AWS CloudTrail 87
CloudTrailのOpsWorks for Puppet Enterprise の情報 88
OpsWorks for Puppet Enterprise ログファイルのエントリを理解する 89
トラブルシューティング 91
一般的なトラブルシューティングのヒント 91
特定のエラーのトラブルシューティング 92
その他のヘルプとサポート 97
AWS OpsWorks for Chef Automate 98
のリージョンサポート AWS OpsWorks for Chef Automate 101

サポート終了のよくある質問 102
このサポート終了により、既存のユーザーはどのような影響を受けますか? 103
何もアクションを実行しない場合サーバーはどうなりますか? 103
どのような代替案に移行できますか? 103
このサービスはまだ新規顧客を受け入れていますか ? 103
End of Life はすべての AWS リージョン に同時に影響しますか? 103
どのレベルのテクニカルサポートが受けられますか? 104
私は現在 OpsWorks for Chef Automate の顧客で、以前はサービスを使用していなかったアカウントでサーバーを起動する必要があります。これはできますか? 104
来年に主要な特徴量のリリースは行われますか ? 104
Chef Automate 2 にアップグレードする 104
Chef Automate 2 にアップグレードするための前提条件 104
アップグレードプロセスについて 105
Chef Automate 2 にアップグレードする (コンソール) 105
Chef Automate 2 にアップグレードする (CLI) 106
AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを Chef Automate 1 にロールバックする (CLI) 107
以下の資料も参照してください。 108
開始方法 109
前提条件 109
Chef Automate サーバーの作成 111
設定を完了してクックブックをアップロードする 123
管理するノードを追加する 133
Chef Automate ダッシュボードにサインインする 139
CloudFormation で Chef Automate サーバーを作成する 142
前提条件 143
CloudFormationで Chef Automate サーバーを作成する 144
カスタムドメインを使用するようにサーバーを更新する 150
前提条件 151
制限事項 48
カスタムドメインを使用するようにサーバーを更新する 49
以下の資料も参照してください。 53
スターターキットの再生成 156
を使用して AWS OpsWorks for Chef Automate スターターキットを再生成する AWS CLI .. 156
タグを使用する 157
でのタグの仕組み AWS OpsWorks for Chef Automate 159

でのタグの追加と管理 AWS OpsWorks for Chef Automate (コンソール) 160
(AWS OpsWorks for Chef Automate CLI) でのタグの追加と管理 163
以下の資料も参照してください。 168
サーバーのバックアップと復元 168
AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーのバックアップ 169
AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーの復元 171
システムメンテナンス 173
ノードが OpsWorks 認証機関を信頼していることを確認する 174
システムメンテナンスの設定 175
オンデマンドでのシステムメンテナンスの開始 177
メンテナンス後のカスタム設定およびカスタムファイルの復旧 177
コンプライアンススキャン 178
Chef Automate 2.0 の Compliance 179
Chef Automate 1.x の Compliance 186
Compliance の更新 192
コミュニティとカスタム Compliance プロファイル 192
以下の資料も参照してください。 192
ノードの削除 193
関連トピック 194
Chef Automate サーバーの削除 194
ステップ 1: 管理されているノードの関連付けを解除する 195
ステップ 2: サーバーを削除する 195
Chef 認証情報のリセット 195
の使用 AWS CloudTrail 197
AWS OpsWorks for Chef Automate CloudTrail の情報 198
AWS OpsWorks for Chef Automate ログファイルエントリについて 199
トラブルシューティング 201
一般的なトラブルシューティングのヒント 201
特定のエラーのトラブルシューティング 202
その他のヘルプとサポート 209
AWS OpsWorks 設定管理 (CM) のセキュリティ 210
データ保護 211
との統合 AWS Secrets Manager 212
データ暗号化 213
保管時の暗号化 213
転送時の暗号化 213

キーの管理 ... 213
Identity and Access Management ... 213
オーディエンス ... 214
アイデンティティを使用した認証 ... 214
ポリシーを使用したアクセスの管理 ... 216
CM OpsWorks と IAM の連携方法 ... 218
アイデンティティベースのポリシーの例 ... 223
トラブルシューティング ... 226
AWS マネージドポリシー ... 228
でのサービス間の混乱した代理の防止 AWS OpsWorks CM ... 237
インターネットトラフィックのプライバシー ... 241
ログ記録とモニタリング ... 241
コンプライアンス検証 ... 241
耐障害性 ... 242
インフラストラクチャセキュリティ ... 243
設定と脆弱性の分析 ... 244
セキュリティのベストプラクティス ... 244
OpsWorks スタック ... 246
スタック ... 249
レイヤー ... 250
レシピおよびライフサイクルイベント ... 250
インスタンス ... 251
アプリケーション ... 252
スタックのカスタマイズ ... 253
リソース管理 ... 254
セキュリティと権限 ... 254
モニタリングとロギング ... 254
CLI、SDK、 CloudFormation テンプレート ... 255
サポート終了のよくある質問 ... 255
このサポート終了により、既存のお客様にはどのような影響がありますか? ... 256
新規顧客 AWS OpsWorks Stacks を受け入れていますか? ... 256
既存のスタックはどこに移行すればよいですか? ... 256
End of Life 後も既存の Amazon EC2 インスタンスを維持するにはどうすればよいですか? ... 257
End of Life はすべての AWS リージョン に同時に影響しますか? ... 257
どのレベルのテクニカルサポートを利用できます AWS OpsWorks Stacksか? ... 257

の新機能リリースはありますか AWS OpsWorks Stacks? 257
Systems Manager Application Manager へのアプリケーションの移行 258
スクリプトの仕組み 259
前提条件 259
制限事項 260
開始方法 260
よくある質問 277
トラブルシューティング 288
AWS OpsWorks Stacks Detach in Place ツールの使用 289
プロセスの仕組み 290
制限事項 292
開始方法 293
開始方法 302
リージョンのサポート 302
使用開始: サンプル 303
入門ガイド: Linux 324
入門ガイド: Windows 356
使用開始: クックブック 391
ベストプラクティス 426
ルートデバイスストレージ 427
サーバー数の最適化 429
許可の管理 432
アプリケーションとクックブックの管理とデプロイ 435
ローカルでのクックブックの依存関係のパッケージ化 445
スタック 450
EC2-Classic からスタックへの移行 451
新しいスタックを作成する 454
VPC でのスタックの実行 463
スタックの更新 475
スタックのクローン化 476
スタックコマンドの実行 478
カスタム JSON の使用 481
スタックの削除 484
レイヤー 488
OpsWorks レイヤーの基本 489
Elastic ロードバランシングレイヤー 506

Amazon RDS サービスレイヤー ... 511
ECS クラスターレイヤー ... 517
カスタムレイヤー ... 524
レイヤーごとのパッケージのインストール ... 525
インスタンス ... 527
OpsWorks スタックインスタンスの使用 ... 528
OpsWorks Stacks の外部で作成されたコンピューティングリソースの使用 ... 590
インスタンス設定の編集 ... 639
OpsWorks スタックインスタンスの削除 ... 641
SSH でのログイン ... 643
RDP でのログイン ... 646
アプリケーション ... 651
アプリケーションの追加 ... 652
アプリケーションのデプロイ ... 659
アプリケーションの編集 ... 664
データベースへの接続 ... 665
環境変数の使用 ... 667
アプリケーションへのデータの引き渡し ... 669
Git リポジトリの SSH キーの使用 ... 672
カスタムドメインの使用 ... 674
SSL の使用 ... 676
クックブックとレシピ ... 684
クックブックリポジトリ ... 685
Chef のバージョン ... 689
Ruby のバージョン ... 708
カスタムクックブックのインストール ... 710
カスタムクックブックの更新 ... 714
レシピの実行 ... 716
リソース管理 ... 724
スタックにリソースを登録する ... 726
リソースのアタッチと移動を行う ... 732
リソースをデタッチする ... 738
リソースの登録を解除する ... 741
タグ ... 743
スタックレベルでタグを設定 ... 744
レイヤーレベルでのタグの設定 ... 746

を使用したタグの管理 AWS CLI 748
タグの制限 749
モニタリング 750
Amazon CloudWatch を使用する 750
の使用 AWS CloudTrail 762
Amazon CloudWatch Logs の使用 765
Amazon CloudWatch Events の使用 770
セキュリティと権限 771
ユーザー許可の管理 773
OpsWorks スタックがユーザーに代わって動作することを許可する 796
混乱した代理の防止 801
EC2 インスタンスで実行するアプリケーションに対するアクセス許可の指定 804
SSH アクセスの管理 808
セキュリティ更新の管理 815
セキュリティグループの使用 817
Chef 12 Linux 820
概要: 820
Chef 12 への移行 822
サポートされるオペレーティングシステム 823
サポートされるインスタンスタイプ 823
詳細情報 823
データバッグへの移行 824
以前の Chef のバージョン 826
Linux 用 Chef 11.10 以前のバージョン 826
他の AWS サービスでの OpsWorks スタックの使用 1265
バックエンドデータストアの使用 1266
ElastiCache Redis 1275
Amazon S3 バケットの使用する 1289
スタック AWS CodePipeline での OpsWorks の使用 1304
スタック OpsWorks CLI の使用 1368
インスタンスの作成 1370
アプリケーションのデプロイ 1373
アプリケーションのリストを取得する 1375
リストコマンド 1376
デプロイメントのリストを取得する 1377
Elastic IP アドレスのリストの取得 1379

インスタンスのリストを取得する 1380
スタックのリストを取得する 1381
レイヤーのリストを取得する 1383
レシピの実行 1387
Install Dependencies 1388
スタック設定の更新 1389
デバッグとトラブルシューティングのガイド 1390
レシピのデバッグ 1391
一般的なデバッグとトラブルシューティングの問題 1409
OpsWorks スタックエージェント CLI 1419
agent_report 1421
get_json 1422
instance_report 1426
list_commands 1427
run_command 1428
show_log 1429
stack_state 1430
OpsWorks スタックデータバッグリファレンス 1433
アプリケーションデータバッグ (aws_opsworks_app) 1437
コマンドデータバッグ (aws_opsworks_command) 1441
Amazon ECS クラスターデータバッグ (aws_opsworks_ecs_cluster) 1443
Elastic Load Balancing データバッグ (aws_opsworks_elastic_load_balancer) 1444
インスタンスデータバッグ (aws_opsworks_instance) 1445
レイヤーデータバッグ (aws_opsworks_layer) 1451
Amazon RDS データバッグ (aws_opsworks_rds_db_instance) 1453
スタックデータバッグ (aws_opsworks_stack) 1454
ユーザーデータバッグ (aws_opsworks_user) 1456
OpsWorks エージェントの変更 1458
Chef 12 エージェントリリース 1458
Chef 11.10 エージェントリリース 1462
リソース 1468
リファレンスガイド、ツール、およびサポートリソース 1468
AWS ソフトウェア開発キット 1469
ソースソフトウェアを開く 1470
OpsWorks ドキュメント履歴 1471
以前の更新 1479

..... mcdlxxxiv

とは OpsWorks

> **Important**
>
> OpsWorks サービスはサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks は、Puppet または Chef を使用してクラウドエンタープライズでアプリケーションを設定および運用するのに役立つ設定管理サービスです。 スタックと OpsWorks スタックを使用すると、設定管理に Chef クックブックとソリューションを使用 AWS OpsWorks for Chef Automate でき、OpsWorks for Puppet Enterprise を使用すると、 で Puppet Enterprise マスターサーバーを設定できます AWS。Puppet は、インフラストラクチャの目的の状態の強化、およびオンデマンドタスクの自動化のための、一連のツールを提供します。

OpsWorks サービス

AWS OpsWorks for Puppet Enterprise

OpsWorks for Puppet Enterprise では、管理 AWSされた Puppet マスターサーバーを作成できます。Puppet マスターは、インフラストラクチャ内のノードを管理し、それらのノードに関する情報を保存し、Puppet モジュールの中央リポジトリとして機能します。モジュールは、インフラストラクチャの設定方法に関する手順が保存された Puppet コードの再利用および共有が可能なユニットです。Puppet Forge からコミュニティモジュールをダウンロードすることも、Puppet 開発キットを使用して独自のカスタムモジュールを作成することもできます。その後、Puppet Code Manager を使用してデプロイを管理できます。

OpsWorks for Puppet Enterprise は、フルマネージド型 Puppet マスターを提供します。これは自動化ツールスイートであり、アプリケーションの検査、配信、運用、および今後の対応を行ったり、ユーザーインターフェイスにアクセスしてノードや Puppet のアクティビティを確認したりできます。OpsWorks for Puppet Enterprise を使用すると、Puppet を使用して、Amazon EC2 インスタンスやオンプレミスデバイスにあるノードの設定、デプロイ、管理方法を自動化できます。OpsWorks for Puppet Enterprise マスターは、ソフトウェアおよびオペレーティングシステ

ムの構成、パッケージのインストール、データベースのセットアップ、変更管理、ポリシーの適用、モニタリング、および品質保証などのタスクを処理する全スタック自動化を提供します。

OpsWorks for Puppet Enterprise では Puppet Enterprise ソフトウェアが管理されるため、ユーザーが選択した時間に自動的にサーバーをバックアップでき、サーバーでは常に最新の AWS 対応バージョンの Puppet が実行され、常に最新のセキュリティ更新プログラムが適用されます。新しい Amazon EC2 Auto Scaling グループを使用して、新しい Amazon EC2 ノードを自動的にサーバーに関連付けることができます。

AWS OpsWorks for Chef Automate

AWS OpsWorks for Chef Automate では、Chef Automate のプレミアム機能を含む AWSマネージド Chef サーバーを作成し、Chef DK やその他の Chef ツールを使用してそれらを管理できます。 https://www.chef.io/automate/Chef サーバーは、環境内のノードを管理し、それらのノードに関する情報を保存し、Chef クックブックの中央リポジトリとして機能します。クックブックには、Chef を使用して管理する各ノードに対して Chef Infra クライアント (`chef-client`) エージェントによって実行されるレシピが含まれています。`knife` や Test Kitchen などの Chef ツールを使用して、 AWS OpsWorks for Chef Automate サービスの Chef サーバーのノードとクックブックを管理できます。

Chef Automate は、継続的デプロイおよびコンプライアンスチェックのための自動化ワークフローを提供する、付属のサーバーソフトウェアパッケージです。 AWS OpsWorks for Chef Automate では、 1 つの Amazon Elastic Compute Cloudインスタンスを使用して、Chef Automate、Chef Infra、Chef InSpec がインストールされて管理されます。を使用すると AWS OpsWorks for Chef Automate、 OpsWorks特定の変更を加えることなく、コミュニティが作成した Chef クックブックまたはカスタム Chef クックブックを使用できます。

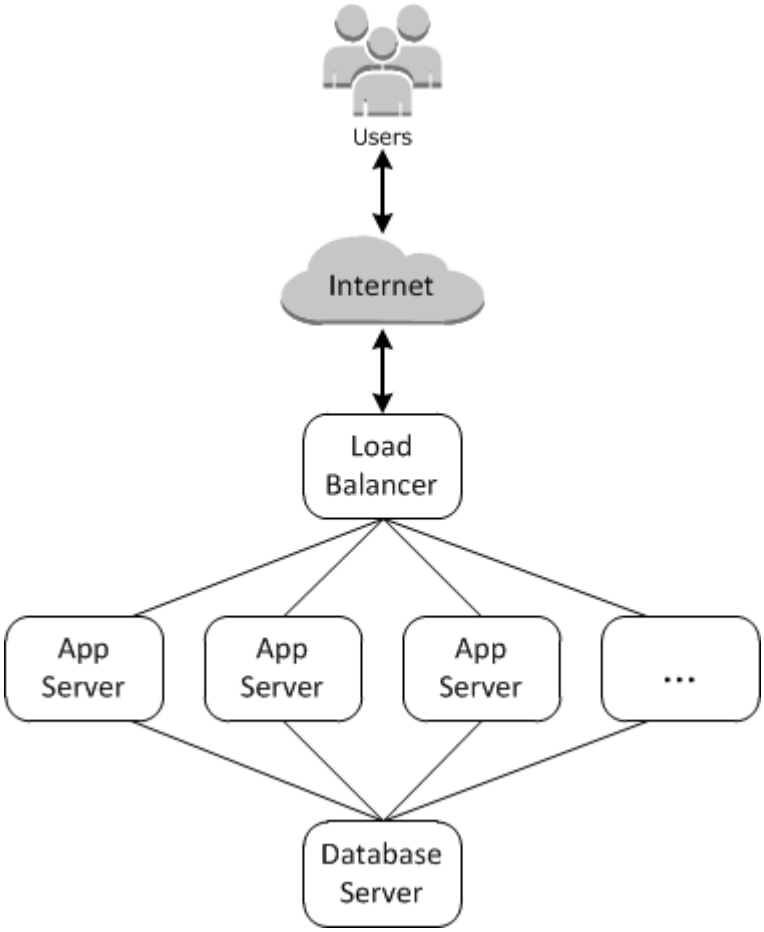
は 1 つのインスタンスで Chef Automate コンポーネント AWS OpsWorks for Chef Automate を管理するため、サーバーは選択した時点で自動的にバックアップでき、 は常に最新のマイナーバージョンの Chef を実行し、常に最新のセキュリティ更新プログラムが適用されます。新しい Amazon EC2 Auto Scaling グループを使用して、新しい Amazon EC2 ノードを自動的にサーバーに関連付けることができます。

OpsWorks スタック

クラウドベースのコンピューティングには通常、EC2 インスタンスや Amazon Relational Database Service (RDS) インスタンスなどの AWS リソースのグループが関与します。たとえば、ウェブアプリケーションでは通常、アプリケーションサーバー、データベースサーバー、ロードバランサー、その他のリソースが必要です。このインスタンスのグループは通常、スタックと呼ばれます。

OpsWorks 元のサービスである スタックは、スタックとアプリケーションを作成および管理するためのシンプルで柔軟な方法を提供します。 OpsWorks スタックを使用すると、スタックにアプリケーションをデプロイしてモニタリングできます。レイヤーと呼ばれる、特別なグループ内のクラウドリソースの管理に役立つスタックを作成できます。レイヤーは、アプリケーションへのサービス提供やデータベースサーバーのホスティングなどの特定の目的を果たす一連の EC2 インスタンスを表します。レイヤーでは、Chef レシピに基づいて、インスタンスへのパッケージのインストール、アプリケーションのデプロイ、スクリプトの実行などのタスクが処理されます。

とは異なり AWS OpsWorks for Chef Automate、 OpsWorks スタックは Chef サーバーを要求または作成しません。 OpsWorks スタックは Chef サーバーの作業の一部を実行します。 OpsWorks スタックは、インスタンスのヘルスチェックをモニタリングし、自動ヒーリングおよび Auto Scaling を使用して、必要な場合に新しいインスタンスのプロビジョニングを実行します。シンプルなアプリケーションサーバースタックの例を次の図に示します。



AWS OpsWorks for Puppet Enterprise

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks for Puppet Enterprise サービスは 2024 年 3 月 31 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks for Puppet Enterprise を使用すると、Puppet Enterprise マスターを数分で起動し、 がそのオペレーション、バックアップ、復元、ソフトウェアアップグレード OpsWorks を処理できます。OpsWorks for Puppet Enterprise を利用すれば Puppet マスターを管理せずに重要な設定管理タスクに専念できます。OpsWorks for Puppet Enterprise を使用することで、同じ設定を使用してオンプレミスとクラウドインフラストラクチャの両方を管理できます。これはハイブリッド環境でオペレーションを効率的にスケールする役に立ちます。Puppet マスターサーバーの管理は、Puppet Enterprise コンソール、 AWS マネジメントコンソール、および AWS CLIツールを使用して簡素化されます。

Puppet マスターは、特定のノードの設定カタログを `puppet-agent` ソフトウェアに提供することで、ご使用の環境のノードの設定を管理します。また、Puppet モジュールの中央リポジトリとして機能します。OpsWorks for Puppet Enterprise 内の Puppet マスターは `puppet-agent` を管理対象ノードにデプロイし、Puppet Enterprise のプレミアム機能を提供します。

OpsWorks for Puppet Enterprise マスターは、Amazon Elastic Compute Cloud インスタンスで実行されます。OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーは、Amazon Linux (Amazon Linux 2)、および Puppet Enterprise エンタープライズマスターの最新バージョンであるバージョン 2019.8.5 を実行するように設定されています。Puppet Enterprise 2019.8.5 の変更の詳細については、「Puppet Enterprise リリースノート」を参照してください。

Puppet ソフトウェアの新しいバージョンが利用可能になると、システムメンテナンスは AWS テストが完了次第、サーバーにある Puppet Enterprise サーバーのバージョンを自動更新するように設計されています。AWS は Puppet のアップグレードが本番稼働で利用できるものか確認するため広範囲に渡るテストを行い、ユーザーの既存環境を中断しません。

サポートされているオペレーティングシステムを実行し、OpsWorks for Puppet Enterprise マスターにネットワークアクセス可能なオンプレミスコンピュータまたは EC2 インスタンスに接続できま

す。puppet エージェントソフトウェアは、Puppet マスターによって管理するノードにインストールされます。

トピック

- OpsWorks for Puppet Enterprise のリージョンサポート
- AWS OpsWorks for Puppet Enterprise サポート終了FAQs
- OpsWorks for Puppet Enterprise の使用を開始する
- を使用して AWS OpsWorks for Puppet Enterprise マスターを作成する CloudFormation
- OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーの更新して、カスタムドメインを使用する
- AWS OpsWorks for Puppet Enterprise リソースでのタグの使用
- OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーのバックアップと復元
- OpsWorks for Puppet Enterprise のシステムメンテナンス
- OpsWorks for Puppet Enterprise でのノードを自動的に追加します
- OpsWorks for Puppet サーバーからノードの関連付けを切り離します
- OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーを削除します
- OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーを Amazon Elastic Compute Cloud (Amazon EC2) に移行する方法
- を使用した OpsWorks for Puppet Enterprise API コールのログ記録 AWS CloudTrail
- OpsWorks for Puppet Enterprise のトラブルシューティング

OpsWorks for Puppet Enterprise のリージョンサポート

以下のリージョンのエンドポイントは OpsWorks for Puppet Enterprise マスターをサポートします。OpsWorks for Puppet Enterprise は、お客様の Puppet マスターと同じリージョナルエンドポイントで、インスタンスプロファイル、ユーザー、サービスロールなど、Puppet マスターに関連付けられているリソースを作成します。Puppet マスターは VPC 内にある必要があります。作成するかすでに作成してある VPC を使用することも、デフォルトの VPC を使用することもできます。

- 米国東部 (オハイオ) リージョン
- 米国東部(バージニア州北部) リージョン
- US West (N. California) Region
- 米国西部 (オレゴン) リージョン
- Asia Pacific (Tokyo) Region

- アジアパシフィック (シンガポール) リージョン
- アジアパシフィック (シドニー) リージョン
- 欧州 (フランクフルト) リージョン
- 欧州 (アイルランド) リージョン

AWS OpsWorks for Puppet Enterprise サポート終了FAQs

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks for Puppet Enterprise サービスは 2024 年 3 月 31 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

トピック

- このサポート終了により、既存のお客様にはどのような影響がありますか?
- 何もアクションを実行しない場合サーバーはどうなりますか?
- 新規顧客 AWS OpsWorks for Puppet Enterprise を受け入れていますか?
- End of Life はすべての AWS リージョン に同時に影響しますか?
- どのレベルのテクニカルサポートを利用できます AWS OpsWorks for Puppet Enterpriseか?
- 私は現在 OpsWorks for Puppet Enterprise の顧客であり、以前はサービスを使用していなかったアカウントでサーバーを起動する必要があります。これはできますか?
- の新機能リリースはありますか AWS OpsWorks for Puppet Enterprise?

このサポート終了により、既存のお客様にはどのような影響がありますか?

既存のお客様は、 OpsWorks for Puppet Enterprise のサポート終了日である 2024 年 3 月 31 日まで影響を受けません。サポート終了日を過ぎると、お客様は OpsWorks コンソールまたは API を使用してサーバーを管理できなくなります。

何もアクションを実行しない場合サーバーはどうなりますか?

2024 年 3 月 31 日以降、OpsWorks コンソールまたは API を使用してサーバーを管理できなくなります。その時点で、バックアップやメンテナンスなど、サーバーの継続的な管理機能の実行は停止されます。お客様への影響を抑えるため、Puppet Enterprise サーバーをバックアップする EC2 インスタンスを実行したままにしておきますが、その使用は OpsWorks for Puppet Enterprise サービス契約の対象外 (または請求) ではなくなったため、そのライセンスは無効になります。Puppet Enterprise で引き続きインフラストラクチャを管理したい場合は、「OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーを Amazon Elastic Compute Cloud (Amazon EC2) に移行する方法」を参照してください。

新規顧客 AWS OpsWorks for Puppet Enterprise を受け入れていますか?

いいえ。 AWS OpsWorks for Puppet Enterprise は新規顧客を受け入れなくなりました。

End of Life はすべての AWS リージョン に同時に影響しますか?

はい。 API とコンソールは 2024 年 3 月 31 日をもってサポート終了となり、すべてのリージョンで使用できなくなります。 AWS OpsWorks for Puppet Enterprise が利用可能な AWS リージョン のリストについては、AWS 「リージョンサービスリスト」を参照してください。

どのレベルのテクニカルサポートを利用できます AWS OpsWorks for Puppet Enterpriseか?

AWS は、サポート終了日まで、お客様が現在持ってい AWS OpsWorks for Puppet Enterprise るのと同じレベルのサポートを引き続き提供します。ご質問やご不明点がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

私は現在 OpsWorks for Puppet Enterprise の顧客であり、以前はサービスを使用していなかったアカウントでサーバーを起動する必要があります。これはできますか?

例外的な事情がない限り、一般的にはできません。特別な状況が発生した場合は、AWS re:Post または AWS Premium Support を通じて AWS サポート チームに連絡し、その詳細と根拠を説明して、リクエストを確認します。

の新機能リリースはありますか AWS OpsWorks for Puppet Enterprise?

いいえ。サービスのサポート終了が近づいているため、新特徴量のリリースは行いません。しかし、サポート終了日までは、引き続きセキュリティの改善とサーバーの管理を予定どおりに行います。

OpsWorks for Puppet Enterprise の使用を開始する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks for Puppet Enterprise サービスは 2024 年 3 月 31 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks for Puppet Enterprise を使用すると、 AWSで Puppet Enterpriseサーバーを実行できます。約 15 分で Puppet Enterprise マスターサーバーをプロビジョニングできます。

2021 年 5 月 3 日から、OpsWorks for Puppet Enterprise は Puppet Enterprise サーバー属性をいくつか AWS Secrets Managerに保存します。詳細については、「との統合 AWS Secrets Manager」を参照してください。

以下のウォークスルーは、OpsWorks for Puppet Enterprise で最初の Puppet マスターを作成する際に役立ちます。

前提条件

開始する前に、以下の前提条件を満たしている必要があります

トピック

- Puppet 開発キットをインストールします。
- Puppet Enterprise クライアントツールをインストールします。
- Git コントロールリポジトリのセットアップ
- VPC のセットアップ
- EC2 のキーペアをセットアップする (オプション)
- カスタムドメインを使用するための前提条件 (オプション)

Puppet 開発キットをインストールします。

1. Puppet ウェブサイトから、ローカルコンピュータのオペレーティングシステムに一致する Puppet 開発キットをダウンロードします。

2. Puppet 開発キットをインストールします。
3. Puppet 開発キットをローカルコンピュータの PATH 変数に追加します。

   - Linux または macOS オペレーティングシステムでは、Bash シェルで次のコマンドを実行して、Puppet 開発キットを PATH 変数に追加できます。

     ```
     echo 'export PATH=/opt/puppetlabs/pdk/bin/pdk:$PATH' >> ~/.bash_profile && source
      ~/.bash_profile
     ```

   - Windows ベースのオペレーティングシステムでは、PowerShell セッション、または [PATHSystem Properties] からアクセスできる 環境変数 ダイアログボックスで次の .NET フレームワークコマンドを使用して、Puppet 開発者キットを 変数に追加できます。次のコマンドを実行するには、PowerShell セッションを管理者として実行する必要がある場合があります。

     ```
     [Environment]::SetEnvironmentVariable("Path","new path value","Machine")
     ```

Puppet Enterprise クライアントツールをインストールします。

Puppet Enterprise (PE) クライアントツールは、ワークステーションから Puppet Enterprise サービスにアクセスできるようにする一連のコマンドラインツールです。ツールはさまざまなオペレーティングシステムにインストールできます。また、Puppet を使用して管理しているノードにもインストールできます。このツールをサポートするオペレーティングシステムに関する情報およびインストール方法については、Puppet Enterprise ドキュメントの「Installing PE client tools」を参照してください。

Git コントロールリポジトリのセットアップ

Puppet マスターを起動する前に、Git 内に Puppet モジュールおよびクラスを保存および変更管理するコントロールリポジトリを設定する必要があります。Puppet Enterprise マスターサーバーを起動するステップでは、Git リポジトリの URL とリポジトリにアクセスするための HTTPS または SSH アカウント情報を求められます。Puppet Enterprise マスターで使用するコントロールリポジトリをセットアップする方法の詳細については、「Setting up a control repository」を参照してください。また、Puppet の `control-repo`GitHub のサンプルリポジトリの readme にも、コントロールリポジトリのセットアップ手順が記載されています。コントロールリポジトリの構造は次のような内容です。

```
### LICENSE
```

```
### Puppetfile
### README.md
### environment.conf
### hieradata
#   ### common.yaml
#   ### nodes
#       ### example-node.yaml
### manifests
#   ### site.pp
### scripts
#   ### code_manager_config_version.rb
#   ### config_version.rb
#   ### config_version.sh
### site
    ### profile
    #   ### manifests
    #       ### base.pp
    #       ### example.pp
    ### role
        ### manifests
            ### database_server.pp
            ### example.pp
            ### webserver.pp
```

CodeCommit を使用してリポジトリをセットアップする

CodeCommit を使用して、新しいリポジトリを作成することができます。CodeCommit を使用してコントロールリポジトリを作成する方法の詳細については、このガイドの「the section called “オプション: CodeCommit を使用”」を参照してください。CodeCommit で Git の使用を開始する方法の詳細については、[Getting started with AWS CodeCommit] (AWS CodeCommit を開始する) を参照してください。リポジトリで OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーを許可するには、IAM インスタンスプロファイルロールに `AWSCodeCommitReadOnly` ポリシーをアタッチします。

VPC のセットアップ

OpsWorks for Puppet Enterprise マスターは Amazon Virtual Private Cloud で動作する必要があります。既存の VPC にそのサーバーを追加するか、デフォルトの VPC を使用するか、またはそのサーバーを含めて新しい VPC を作成します。Amazon VPC の情報および新しい VPC の作成方法については、「Amazon VPC 入門ガイド」を参照してください。

独自の VPC を作成するか、既存の VPC を使用する場合、VPC には次の設定またはプロパティが必要です。

- VPC には少なくとも 1 つのサブネットが必要です。

  OpsWorks for Puppet Enterprise マスターがパブリックアクセス可能な場合は、サブネットを公開し、[Auto-assign public IP] (パブリック IPの自動割り当て) を有効にします。
- [DNS resolution] は有効である必要があります。
- サブネットで、[Auto-assign public IP] を有効にします。

EC2 のキーペアをセットアップする (オプション)

SSH 接続は、Puppet サーバーの一般的な管理に必要または推奨されません。 AWS マネジメントコンソール および AWS CLI コマンドを使用して、Puppet サーバーで多くの管理タスクを実行できます。

Puppet Enterprise ウェブベースコンソールのサインインパスワードがわからなくなった場合や変更する場合には、SSH を使用してサーバーに接続する際に EC2 のキーペアが必要です。その場合は、既存のキーペアを使用するか、または新しいキーペアを作成できます。新しい EC2 キーペア作成方法の詳細については、「Amazon EC2 Key Pairs」(Amazon EC2 のキーペア) を参照してください。

EC2 のキーペアが必要なければ、Puppet Enterprise マスターを作成する準備ができています。

カスタムドメインを使用するための前提条件 (オプション)

独自のドメインで Puppet Enterprise マスターをセットアップし、サーバーのエンドポイントとして使用するカスタムドメインのパブリックエンドポイントを指定できます。カスタムドメインを使用する場合は、このセクションで詳しく説明するように、次のすべてが必要です。

トピック

- カスタムドメインをセットアップする
- 証明書を取得する
- プライベートキーを取得する

カスタムドメインをセットアップする

独自のカスタムドメインで Puppet Enterprise マスターを実行するには、`https://aws.my-company.com` などサーバーのパブリックエンドポイントが必要です。カスタムドメインを指定する場合は、前のセクションで説明したように、証明書とプライベートキーも指定する必要があります。

作成後にサーバーにアクセスするには、優先 DNS サービスに CNAME DNS レコードを追加します。このレコードは、Puppet マスターの作成プロセスで生成されるエンドポイント (サーバーの `Endpoint` 属性の値) にカスタムドメインをポイントしている必要があります。サーバーがカスタムドメインを使用している場合は、生成された `Endpoint` 値を使用してサーバーにアクセスできません。

証明書を取得する

独自のカスタムドメインで Puppet マスターをセットアップするには、PEM 形式の HTTPS 証明書が必要です。これは、単一の自己署名証明書、または証明書チェーンです。[Create Puppet Enterprise Master (Puppet Enterprise マスター の作成)] ワークフローを完了するときに、この証明書を指定する場合は、カスタムドメインとプライベートキーも指定する必要があります。

証明書の値の要件は次のとおりです。

- 自己署名証明書、カスタム証明書、または完全な証明書チェーンを指定できます。
- 証明書は、有効な X509 証明書、または PEM 形式の証明書チェーンである必要があります。
- 証明書はアップロード時に有効である必要があります。有効期間の開始 (証明書の `NotBefore` 日付) 前、または有効期間の終了 (証明書の `NotAfter` 日) 後に証明書を使用することはできません。
- 証明書の共通名またはサブジェクトの代替名 (SAN) が存在する場合は、カスタムドメインの値と一致する必要があります。
- 証明書は、[Custom private key (カスタムプライベートキー)] フィールドの値と一致する必要があります。

プライベートキーを取得する

独自のカスタムドメインで Puppet マスターをセットアップするには、HTTPS を使用してサーバーに接続するための PEM 形式のプライベートキーが必要です。プライベートキーは暗号化しないでください。パスワードやパスフレーズで保護することはできません。カスタムプライベートキーを指定する場合は、カスタムドメインと証明書も指定する必要があります。

Puppet Enterprise マスターの作成

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks for Puppet Enterprise サービスは 2024 年 3 月 31 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロード

を他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

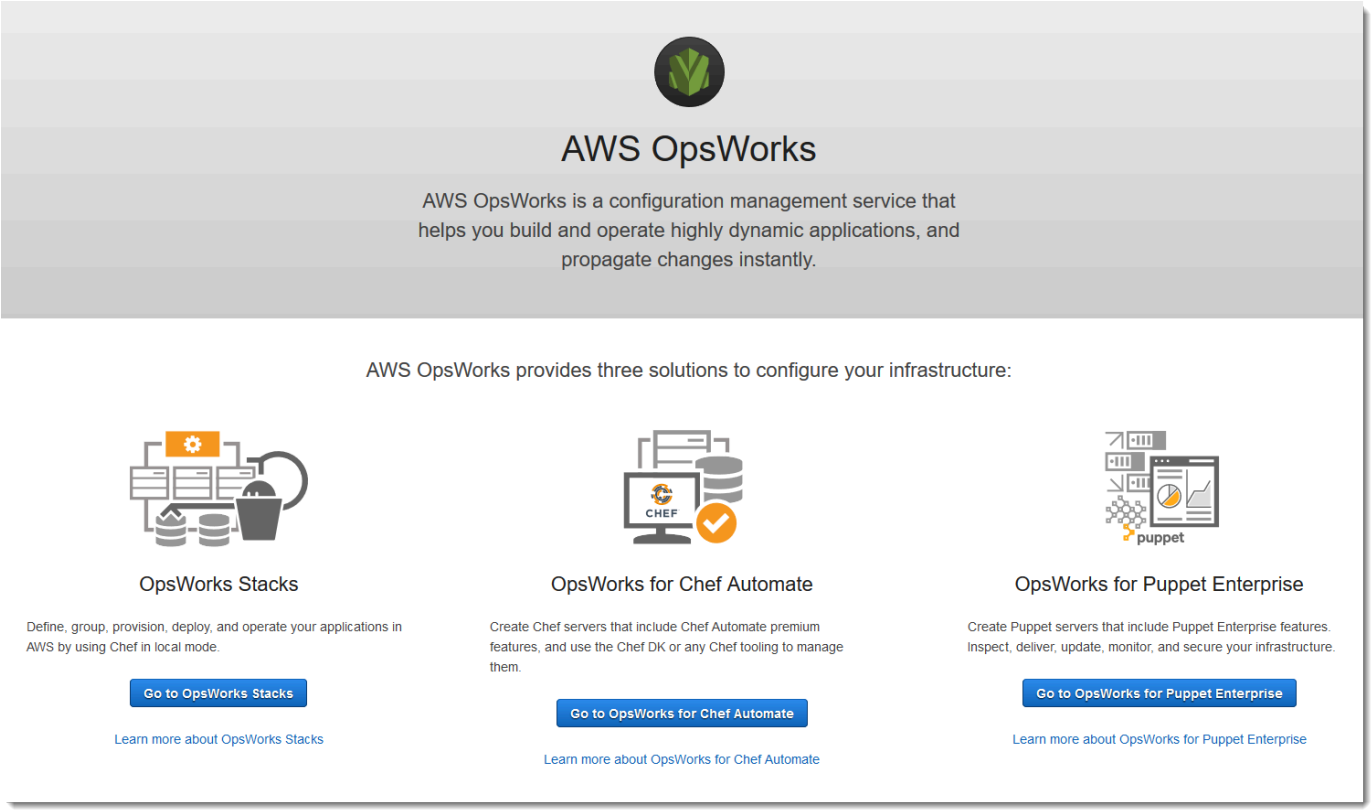
OpsWorks for Puppet Enterprise のコンソールまたは AWS CLIを使用して、Puppet マスターを作成することができます。

トピック

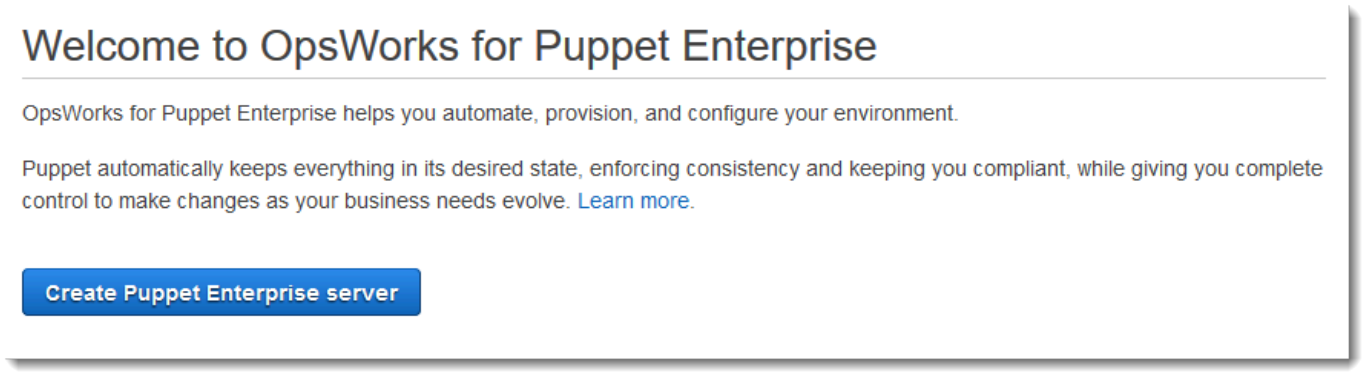
- を使用して Puppet Enterprise Master を作成する AWS マネジメントコンソール
- を使用して Puppet Enterprise Master を作成する AWS CLI

を使用して Puppet Enterprise Master を作成する AWS マネジメントコンソール

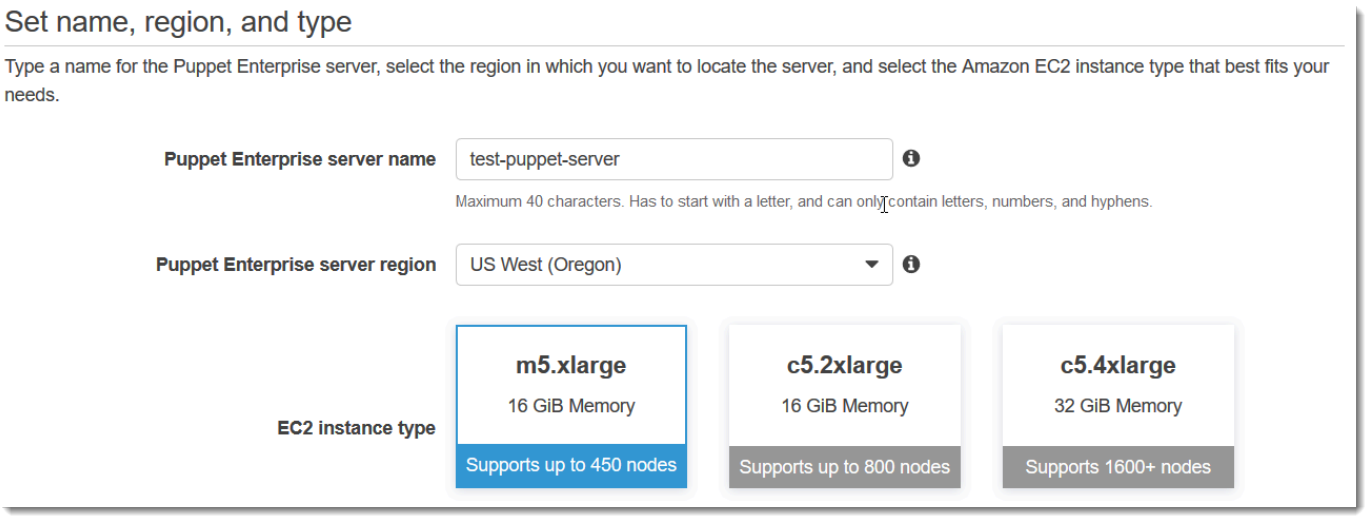
1. にサインイン AWS マネジメントコンソール し、https://console.aws.amazon.com/opsworks/ で OpsWorks コンソールを開きます。
2. OpsWorks ホームページで、OpsWorks for Puppet Enterprise に移動します。



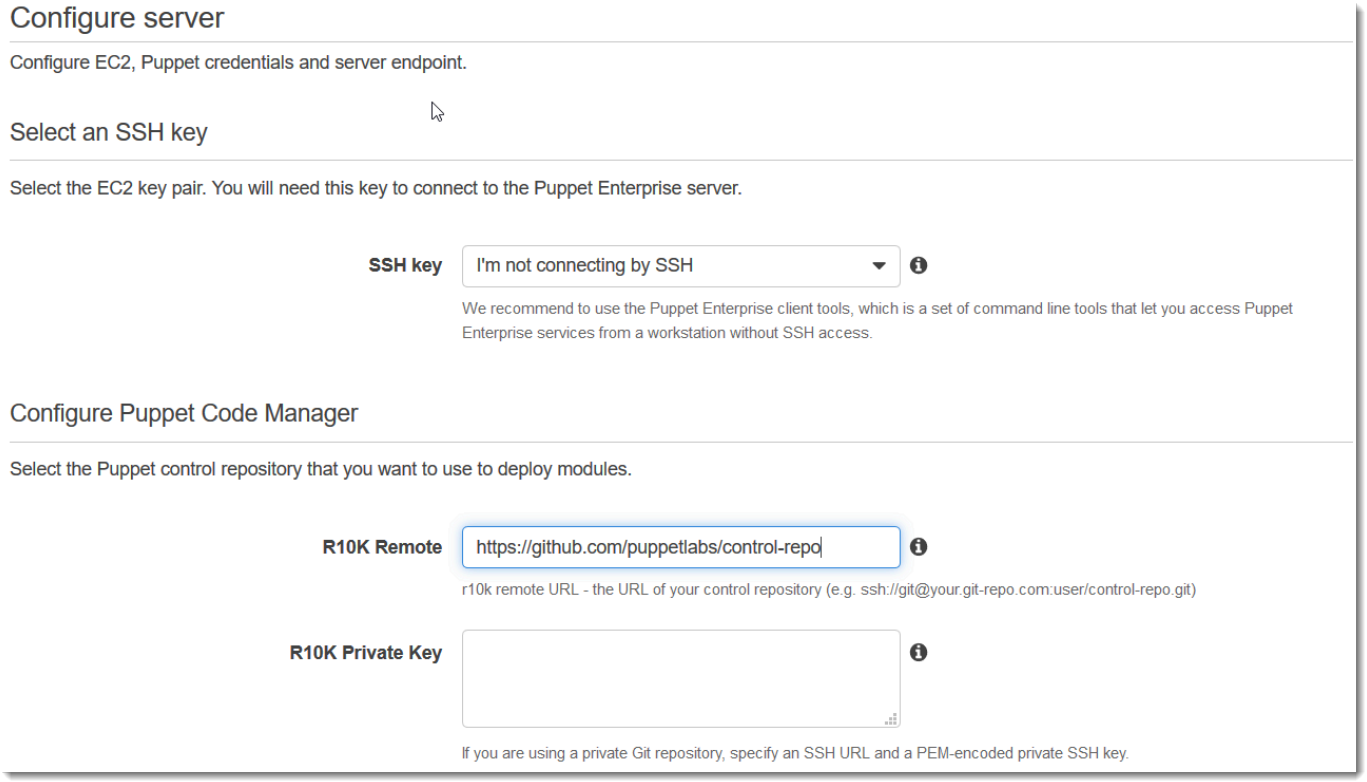
3. OpsWorks for Puppet Enterprise のホームページで [Create Puppet Enterprise server (Puppet Enterprise サーバーを作成)] を選択します。



4. [Set name, region, and type] ページで、サーバーの名前を指定します。Puppet マスター名は 40 文字以内で、文字で始まる必要があります。英数字とハイフンのみを使用できます。サポートされているリージョンを選択し、管理するノード数をサポートしているインスタンスタイプを選択します。サーバーを作成した後でも、必要に応じてインスタンスタイプを変更できます。このチュートリアルでは、米国西部 (オレゴン) リージョンに [m5.xlarge] のインスタンスタイプを作成します。[次へ] を選択します。



5. [Configure server (サーバーの構成)] ページで、キーペア名を指定しない場合は、[SSH key (SSH キー)] ドロップダウンリストでデフォルトの選択のままにします。[Configure Puppet Code Manager] 領域の [r10k remote] フィールドで、Git リモートの有効な SSH URL 値 を指定します。r10k プライベートキーフィールドで、r10k リモートリポジトリへのアクセス OpsWorks に使用できる SSH プライベートキーを貼り付けます。これはプライベートリポジトリを作成するときに Git によって提供されますが、HTTPS 認証を使用してコントロールリポジトリアクセスしている場合は必要ありません。[次へ] を選択します。



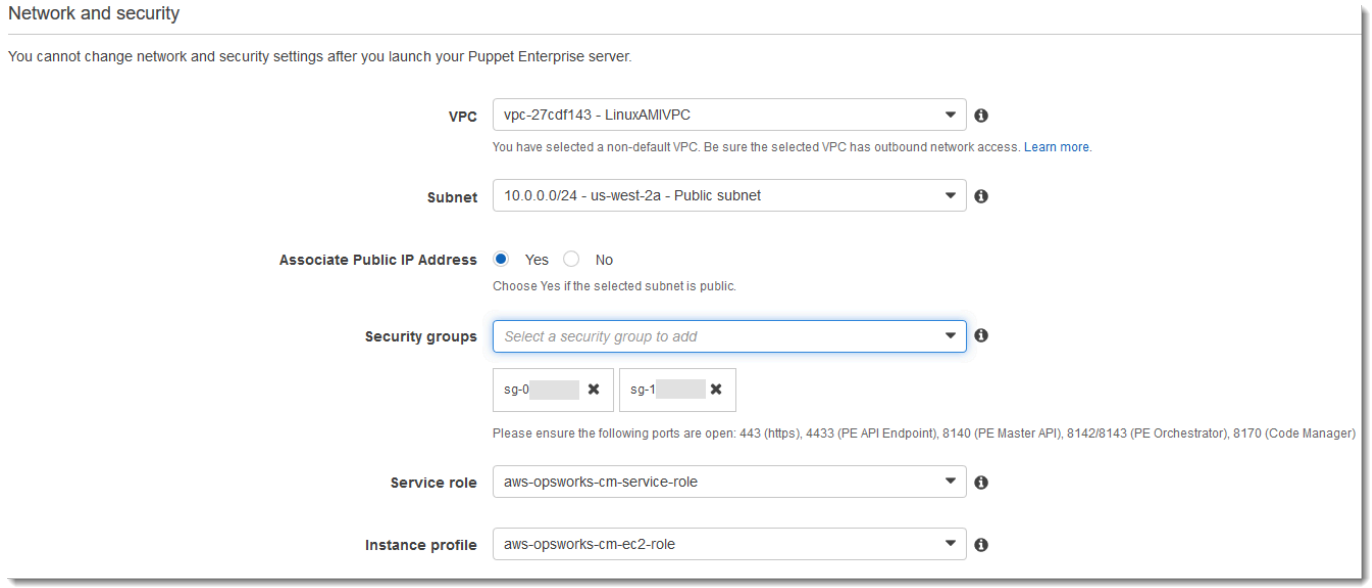
6. サーバーを独自のカスタムドメインで使用しない場合は、[Specify server endpoint (サーバーエンドポイントを指定)] をデフォルトの [Use an automatically-generated endpoint (自動的に生成されたエンドポイントを指定する)] のままにして、[Next (次へ)] を選択します。カスタムドメインを設定するには、次のステップに進みます。
7. カスタムドメインを使用するには、[Specify server endpoint (サーバーエンドポイントを指定)] で、ドロップダウンリストから [Use a custom domain (カスタムドメインを使用)] を選択します。

   a. [Fully qualified domain name (FQDN) (完全修飾ドメイン名 (FQDN))] で、FQDN を指定します。使用するドメイン名を所有している必要があります。

   b. [SSL certificate] (SSL 証明書) に、PEM 形式の証明書全体を貼り付けます。この証明書は `-----BEGIN CERTIFICATE-----` で始まり、`-----END CERTIFICATE-----` で終わります。SSL 証明書のサブジェクトは、前のステップで入力した FQDN と一致する必要があります。証明書の前後の余分な行を削除します。

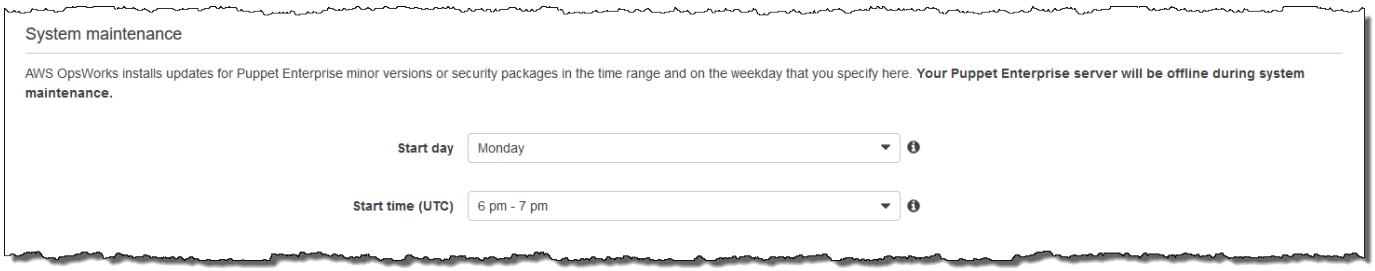
   c. [SSL private key] (SSL プライベートキー) には、RSA プライベートキー全体を貼り付けます。このプライベートキーは `-----BEGIN RSA PRIVATE KEY-----` で始まり、`-----END RSA PRIVATE KEY-----` で終わります。SSL プライベートキーは、前のステップで入力した SSL 証明書のパブリックキーと一致する必要があります。プライベートキーの前後の余分な行を削除します。[次へ] を選択します。

8. 詳細設定の設定ページのネットワークとセキュリティエリアで、VPC、サブネット、および 1 つ以上のセキュリティグループを選択します。使用するセキュリティグループ、サービスロール、インスタンスプロファイルがまだない場合は、 で生成 OpsWorks できます。サーバーは複数のセキュリティグループのメンバーにできます。このページから次に進んだ後に、Puppet マスターのネットワーク設定およびセキュリティ設定を変更することはできません。

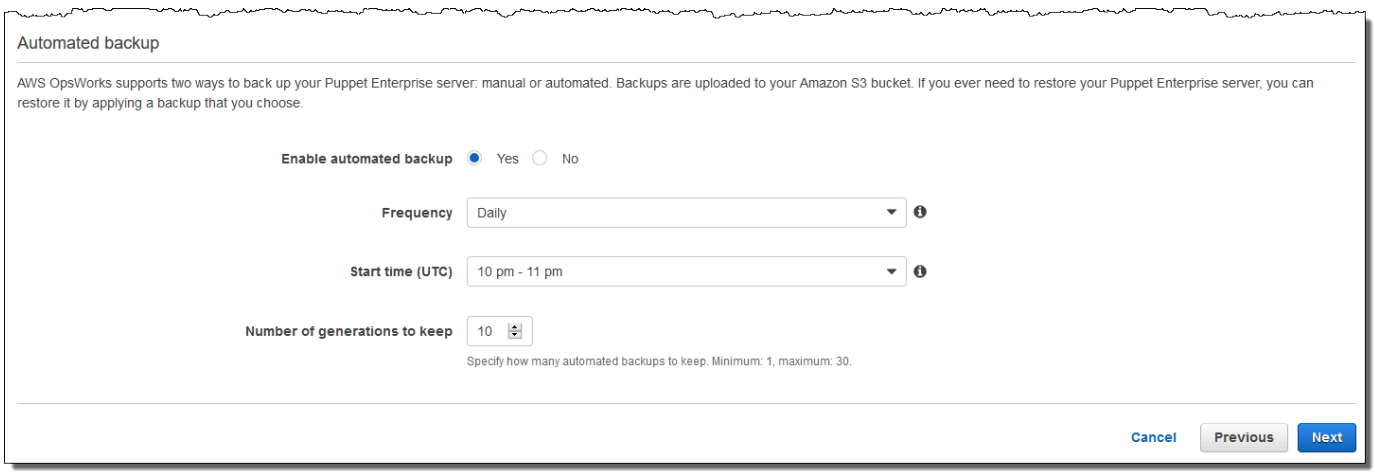


9. [System maintenance] セクションで、システムメンテナンスを開始する日付と時刻を設定します。システムメンテナンス中はサーバーがオフラインになることを想定する必要があるため、通常の営業時間内でサーバー需要が低い時刻を選択します。

   メンテナンス時間は必須です。開始日時を後で変更するには AWS マネジメントコンソール、、AWS CLI、または APIsを使用します。



10. バックアップを設定します。デフォルトでは、自動バックアップが有効になっています。自動バックアップを開始する頻度と時刻を設定し、Amazon Simple Storage Service に保存するバックアップの世代数を設定します。最大で 30 個のバックアップを保持でき、最大数に達すると、OpsWorks for Puppet Enterprise は最も古いバックアップ削除して、新規バックアップ用のスペースを確保します。



11. (オプション) [Tags] (タグ) で、サーバーおよび関連リソース (EC2 インスタンス、Elastic IP アドレス、セキュリティグループ、S3 バケット、バックアップなど) にタグを追加します。OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーのタグ付けの詳細については、「AWS OpsWorks for Puppet Enterprise リソースでのタグの使用」を参照してください。
12. 詳細設定が完了したら、[Next] を選択します。
13. [確認] ページで選択内容を確認します。サーバーを作成する準備ができたら、[Launch] を選択します。

    Puppet マスターの作成 OpsWorks を待っている間に、「」に進み、スターターキットと Puppet Enterprise コンソールの認証情報スターターキットを使用して Puppet マスターを設定するをダウンロードします。これらをダウンロードするために、サーバーがオンラインになるまで待つ必要はありません。

    サーバーの作成が完了すると、OpsWorks for Puppet Enterprise のホームページで、Puppet マスターが [online] (オンライン) のステータスになり、利用可能になります。サーバーがオンラインになると、Puppet Enterprise コンソールがサーバーのドメインで `https://your_server_name-randomID.region.opsworks-cm.io` の形式の URL で利用できます。

を使用して Puppet Enterprise Master を作成する AWS CLI

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks for Puppet Enterprise サービスは 2024 年 3 月 31 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合

は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

AWS CLI コマンドを実行して OpsWorks for Puppet Enterprise マスターサーバーを作成することは、コンソールでのサーバーの作成とは異なります。コンソールで、使用する既存のロールを指定しない場合、 はサービスロールとセキュリティグループ OpsWorks を作成します。でセキュリティグループを指定しない場合 AWS CLI、 OpsWorks はセキュリティグループを作成できますが、サービスロールは自動的に作成されません。`create-server`コマンドの一部としてサービスロール ARN を指定する必要があります。コンソールで、 OpsWorks が Puppet マスターを作成している間、Puppet Enterprise コンソールのスターターキットとサインイン認証情報をダウンロードします。を使用して OpsWorks for Puppet Enterprise マスターを作成するときにこれを行うことはできないため AWS CLI、JSON 処理ユーティリティを使用して、新しい OpsWorks for Puppet Enterprise マスターがオンラインになった後、 `create-server` コマンドの結果からサインイン認証情報とスターターキットを取得します。

ローカルコンピュータで がまだ実行されていない場合は AWS CLI、AWS コマンドラインインターフェイスユーザーガイド AWS CLI のインストール手順に従って、 をダウンロードしてインストールします。このセクションでは、`create-server` コマンドで使用できるパラメータのすべては説明しません。`create-server` パラメータの詳細については、「`create-server`リファレンス」の「AWS CLI 」を参照してください。

1. 「前提条件」を必ず完了してください。Puppet マスターを作成するには、サブネット ID が必要になるため、VPC が必要です。
2. サービスロールとインスタンスプロファイルを作成します。
3. アカウントでサービスロールの ARNs を検索してコピーします。

   ```
   aws iam list-roles --path-prefix "/service-role/" --no-paginate
   ```

   `list-roles` コマンドの結果内で、次のようなサービスロール ARN のエントリを探します。サービスロール ARN を書き留めます。Puppet Enterprise マスターを作成するにはこれらの値が必要です。
4. アカウントでインスタンスプロファイルの ARN を検索してコピーします。

   ```
   aws iam list-instance-profiles --no-paginate
   ```

`list-instance-profiles` コマンドの結果内で、次のようなインスタンスプロファイル ARN のエントリを探します。インスタンスプロファイルの ARN を書き留めます。Puppet Enterprise マスターを作成するにはこれらの値が必要です。

5. `create-server` コマンドを実行して、OpsWorks for Puppet Enterprise マスターを作成します。

   - `--engine` 値は `Puppet` で、`--engine-model` は `Monolithic` です。また、`--engine-version` は `2019` または `2017` になり得ます。
   - サーバー名は、 AWS アカウント内で各リージョン内で一意である必要があります。サーバー名は文字で始める必要があります。その後は文字、数字、またはハイフン (-) を最大 40 文字まで使用できます。
   - ステップ 3 と 4 でコピーしたインスタンスプロファイル ARN とサービスロール ARN を使用します。
   - 有効なインスタンスタイプは `m5.xlarge`、`c5.2xlarge`、または `c5.4xlarge` です。これらのインスタンスタイプの仕様についての詳細は、「Amazon EC2 User Guide」(Amazon EC2 ユーザーガイド) の「Instance Types」(インスタンスタイプ) を参照してください。
   - `--engine-attributes` パラメータはオプションです。Puppet 管理者パスワードを指定しない場合、サーバー作成プロセスで生成されます。`--engine-attributes` を追加する場合は、`PUPPET_ADMIN_PASSWORD` を指定します。これは、Puppet Enterprise コンソールウェブページにサインインする管理者パスワードです。パスワードに使用できる文字数は 8 ~ 32 文字 (ASCII) です。
   - SSH キーペアはオプションですが、コンソール管理者パスワードをリセットする必要がある場合に Puppet マスターに接続することができます。SSH キーペアの作成の詳細については、「Amazon EC2 User Guide」(Amazon EC2 ユーザーガイド) の「Amazon EC2 Key Pairs」(Amazon EC2 キーペア) を参照してください。
   - カスタムドメインを使用するには、コマンドに以下のパラメータを追加します。それ以外の場合は、Puppet マスター作成プロセスによって自動的にエンドポイントが生成されます。カスタムドメインを構成するには、3 つのパラメータすべてが必要です。これらのパラメータを使用するための追加の要件については、CM API リファレンスのCreateServer OpsWorks 」を参照してください。
     - `--custom-domain` - サーバーのオプションのパブリックエンドポイント (`https://aws.my-company.com` など)。
     - `--custom-certificate` - PEM 形式の HTTPS 証明書。値には、単一の自己署名証明書、または証明書チェーンを指定できます。

  - `--custom-private-key` - HTTPS を使用してサーバーに接続するための PEM 形式のプライベートキー。プライベートキーは暗号化しないでください。パスワードやパスフレーズで保護することはできません。
- 週 1 回のシステムメンテナンスが必要です。次の形式で有効な値を指定する必要があります: `DDD:HH:MM`。指定時刻は協定世界時 (UTC) です。`--preferred-maintenance-window` の値を指定しない場合、火曜日、水曜日、または金曜日の 1 時間がランダムでデフォルト値になります。
- `--preferred-backup-window` の有効な値は次の形式のいずれかで指定する必要があります: 日次バックアップの場合は `HH:MM`、週次バックアップの場合は `DDD:HH:MM`。指定時刻は UTC です。デフォルト値は日次で開始時間はランダムです。自動バックアップを無効にするには、代わりにパラメータ `--disable-automated-backup` を追加します。
- `--security-group-ids` に、1 つ以上のセキュリティグループ ID をスペースで区切って入力します。
- `--subnet-ids` には、サブネット ID を入力します。

```
aws opsworks-cm create-server --engine "Puppet" --engine-model "Monolithic"
 --engine-version "2019" --server-name "server_name" --instance-profile-arn
 "instance_profile_ARN" --instance-type "instance_type" --engine-attributes
 '{"PUPPET_ADMIN_PASSWORD":"ASCII_password"}' --key-pair "key_pair_name" --
preferred-maintenance-window "ddd:hh:mm" --preferred-backup-window "ddd:hh:mm"
 --security-group-ids security_group_id1 security_group_id2 --service-role-arn
 "service_role_ARN" --subnet-ids subnet_ID
```

以下に例を示します。

```
aws opsworks-cm create-server --engine "Puppet" --engine-model
 "Monolithic" --engine-version "2019" --server-name "puppet-02" --
instance-profile-arn "arn:aws:iam::111122223333:instance-profile/aws-
opsworks-cm-ec2-role" --instance-type "m5.xlarge" --engine-attributes
 '{"PUPPET_ADMIN_PASSWORD":"zZZzDj2DLYXSZFRv1d"}' --key-pair "amazon-test"
 --preferred-maintenance-window "Mon:08:00" --preferred-backup-window
 "Sun:02:00" --security-group-ids sg-b00000001 sg-b0000008 --service-role-arn
 "arn:aws:iam::111122223333:role/service-role/aws-opsworks-cm-service-role" --
subnet-ids subnet-383daa71
```

次の例では、カスタムドメインを使用する Puppet マスターを作成します。

```
aws opsworks-cm create-server \
    --engine "Puppet" \
    --engine-model "Monolithic" \
    --engine-version "2019" \
    --server-name "puppet-02" \
    --instance-profile-arn "arn:aws:iam::111122223333:instance-profile/aws-
opsworks-cm-ec2-role" \
    --instance-type "m5.xlarge" \
    --engine-attributes '{"PUPPET_ADMIN_PASSWORD":"zZZzDj2DLYXSZFRv1d"}' \
    --custom-domain "my-puppet-master.my-corp.com" \
    --custom-certificate "-----BEGIN CERTIFICATE----- EXAMPLEqEXAMPLE== -----END
 CERTIFICATE-----" \
    --custom-private-key "-----BEGIN RSA PRIVATE KEY----- EXAMPLEqEXAMPLE= -----END
 RSA PRIVATE KEY-----" \
    --key-pair "amazon-test"
    --preferred-maintenance-window "Mon:08:00" \
    --preferred-backup-window "Sun:02:00" \
    --security-group-ids sg-b00000001 sg-b0000008 \
    --service-role-arn "arn:aws:iam::111122223333:role/service-role/aws-opsworks-
cm-service-role" \
    --subnet-ids subnet-383daa71
```

以下の例では、2 つのタグ `Stage: Production` および `Department: Marketing` を追加する Puppet マスターを作成します。OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーでのタグの追加と管理の詳細については、このガイドの「AWS OpsWorks for Puppet Enterprise リソースでのタグの使用」を参照してください。

```
aws opsworks-cm create-server \
    --engine "Puppet" \
    --engine-model "Monolithic" \
    --engine-version "2019" \
    --server-name "puppet-02" \
    --instance-profile-arn "arn:aws:iam::111122223333:instance-profile/aws-
opsworks-cm-ec2-role" \
    --instance-type "m5.xlarge" \
    --engine-attributes '{"PUPPET_ADMIN_PASSWORD":"zZZzDj2DLYXSZFRv1d"}' \
    --key-pair "amazon-test"
    --preferred-maintenance-window "Mon:08:00" \
    --preferred-backup-window "Sun:02:00" \
    --security-group-ids sg-b00000001 sg-b0000008 \
```

```
    --service-role-arn "arn:aws:iam::111122223333:role/service-role/aws-opsworks-
cm-service-role" \
    --subnet-ids subnet-383daa71 \
    --tags [{\"Key\":\"Stage\",\"Value\":\"Production\"},{\"Key\":\"Department\",
\"Value\":\"Marketing\"}]
```

6. OpsWorks for Puppet Enterprise が新しいサーバーを作成するには約 15 分かかります。`create-server` コマンドの出力を閉じたり、シェルセッションを閉じたりしないでください。今後表示されない重要な情報が出力に含まれている場合があります。`create-server` の結果からパスワードとスターターキットを取得するには、次のステップに進みます。

   サーバーでカスタムドメインを使用している場合は、`create-server` コマンドの出力で `Endpoint` 属性の値をコピーします。以下に例を示します。

   ```
   "Endpoint": "puppet-07-exampleexample.opsworks-cm.us-east-1.amazonaws.com"
   ```

7. OpsWorks for Puppet Enterprise でパスワードを生成するように選択した場合、jq などの JSON プロセッサーを使用して `create-server` の結果から使用可能な形式で抽出できます。jq をインストールした後、以下のコマンドを実行して Puppet 管理者パスワードとスターターキットを抽出できます。ステップ 3 で独自のパスワードを指定しなかった場合は、抽出した管理者パスワードを使いやすく安全な場所に保存してください。

   ```
   #Get the Puppet password:
   cat resp.json | jq -r '.Server.EngineAttributes[] | select(.Name ==
    "PUPPET_ADMIN_PASSWORD") | .Value'

   #Get the Puppet Starter Kit:
   cat resp.json | jq -r '.Server.EngineAttributes[] | select(.Name ==
    "PUPPET_STARTER_KIT") | .Value' | base64 -D > starterkit.zip
   ```

   > **Note**
   >
   > AWS マネジメントコンソールで新しい Puppet マススタースターターキットを再生成することはできません。を使用して Puppet マスターを作成する場合は AWS CLI、前述の`jq`コマンドを実行して base64 でエンコードされたスターターキットを ZIP ファイルとして`create-server`結果に保存します。

8. カスタムドメインを使用していない場合は、次のステップに進みます。サーバーでカスタムドメインを使用している場合は、エンタープライズの DNS 管理ツールで CNAME エントリを作成し、ステップ 6 でコピーした OpsWorks for Puppet Enterprise エンドポイントにカスタムドメ

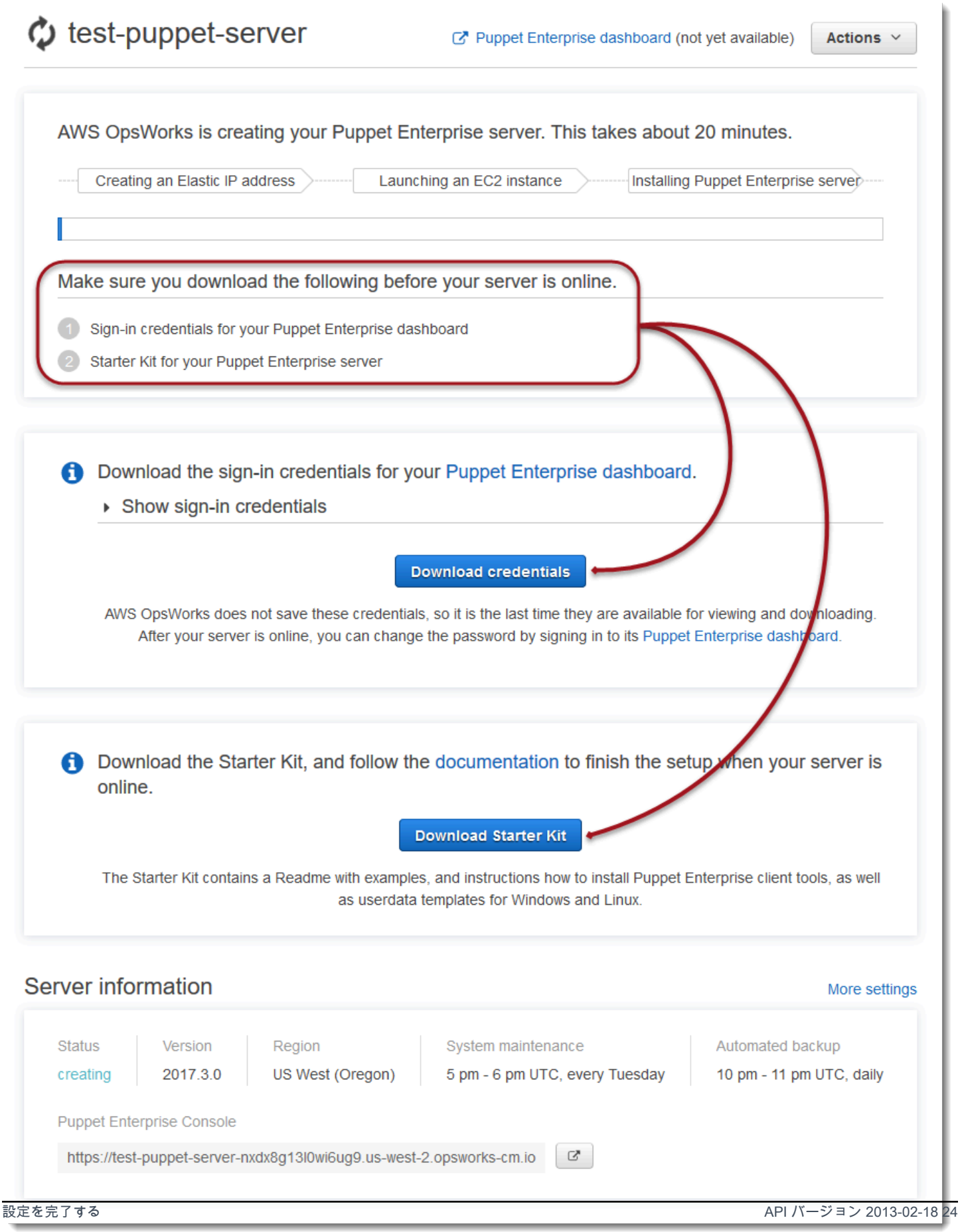
インをポイントします。このステップを完了するまで、カスタムドメインを使用するサーバーにアクセスしたりサインインしたりすることはできません。

9. 次のセクション「the section called “設定を完了する”」に進みます。

スターターキットを使用して Puppet マスターを設定する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks for Puppet Enterprise サービスは 2024 年 3 月 31 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Puppet マスター作成の進行中に、OpsWorks for Puppet Enterprise コンソールでサーバーのプロパティページが開きます。新しい Puppet マスターの初回操作時に、[Properties] ページで 2 つの必須項目をダウンロードするように求められます。Puppet サーバーがオンラインになる前に、これらの項目をダウンロードします。新しいサーバーがオンラインになった後は、ダウンロードボタンは使用できません。


test-puppet-server
Puppet Enterprise dashboard (not yet available)
Actions
AWS OpsWorks is creating your Puppet Enterprise server. This takes about 20 minutes.
Creating an Elastic IP address
Launching an EC2 instance
Installing Puppet Enterprise server
Make sure you download the following before your server is online.
1 Sign-in credentials for your Puppet Enterprise dashboard
2 Starter Kit for your Puppet Enterprise server
Download the sign-in credentials for your Puppet Enterprise dashboard.
Show sign-in credentials
Download credentials
AWS OpsWorks does not save these credentials, so it is the last time they are available for viewing and downloading.
After your server is online, you can change the password by signing in to its Puppet Enterprise dashboard.
Download the Starter Kit, and follow the documentation to finish the setup when your server is online.
Download Starter Kit
The Starter Kit contains a Readme with examples, and instructions how to install Puppet Enterprise client tools, as well as userdata templates for Windows and Linux.
Server information
More settings
Status
creating
Version
2017.3.0
Region
US West (Oregon)
System maintenance
5 pm - 6 pm UTC, every Tuesday
Automated backup
10 pm - 11 pm UTC, daily
Puppet Enterprise Console
https://test-puppet-server-nxdx8g13l0wi6ug9.us-west-2.opsworks-cm.io

- Puppet マスター用のサインイン認証情報。これらの認証情報を使用して、ほとんどのノード管理を実行する Puppet Enterprise コンソールにサインインします。 OpsWorks はこれらの認証情報を保存しません。これは、これらの認証情報を表示およびダウンロードできる最後の時間です。必要であれば、これらの認証情報で提供されたパスワードをサインイン後に変更できます。
- Starter Kit (スターターキット)。スターターキットには、セットアップを完了する方法を説明する情報と例、および Puppet Enterprise コンソールの管理認証情報が記載された README ファイルが含まれています。スターターキットをダウンロードするごとに、新しい認証情報が生成され、以前の認証情報は無効化されます。

前提条件

1. サーバー作成の進行中に、Puppet マスターのサインイン認証情報をダウンロードし、それを安全かつ便利な場所に保存します。
2. スターターキットをダウンロードし、スターターキットの .zip ファイルをワークスペースディレクトリに解凍します。サインイン認証情報を他者と共有しないでください。他のユーザーが Puppet マスターを管理する場合は、後で Puppet Enterprise コンソールでそのユーザーを管理者として追加します。Puppet マスターにユーザーを追加する詳細情報については、Puppet Enterprise ドキュメントの「Creating and managing users and user roles」を参照してください。

Puppet マスターの証明書をインストールする

Puppet マスターを使用し、ノードの管理を追加するには、その証明書をインストールする必要があります。次の AWS CLI コマンドを実行してインストールします。でこのタスクを実行することはできません AWS マネジメントコンソール。

```
aws --region region opsworks-cm describe-servers --server-name server_name --query
 "Servers[0].EngineAttributes[?Name=='PUPPET_API_CA_CERT'].Value" --output text
 > .config/ssl/cert/ca.pem
```

短期トークンを生成する

Puppet API を使用するには、自分の短期トークンを作成する必要があります。このステップは、Puppet Enterprise コンソールを使用するためには必須ではありません。以下のコマンドを実行して、トークンを生成します。

デフォルトのトークンの有効期間は 5 分ですが、このデフォルトは変更できます。

```
puppet-access login --config-file .config/puppetlabs/client-tools/puppet-access.conf --
lifetime 8h
```

> **Note**
>
> デフォルトのトークンの有効期間は 5 分であるため、前述のコマンド例では、`--lifetime` パラメータを追加し、トークンの有効期間を延長しています。トークンの有効期間は最長 10 年間 (10y) まで設定できます。デフォルトのトークンの有効期間を変更する方法の詳細については、Puppet Enterprise ドキュメントの「Change the token's default lifetime」を参照してください。

スターターキットの Apache の例をセットアップする

スターターキットをダウンロードして解凍した後、含まれているサンプル `control-repo-example` フォルダのブランチの例を使用して管理対象ノードで Apache ウェブサーバーを設定できます。

スターターキットには `control-repo` と `control-repo-example` という 2 つの `control-repo` フォルダがあります。`control-repo` フォルダには、`production` ブランチがあります。これは Puppet GitHub repository にあるものから変更されていません。`control-repo-example` フォルダにもテストウェブサイトで Apache サーバーをセットアップするサンプルコードが含まれている `production` ブランチがあります。

1. `control-repo-example` `production` ブランチを Git リモート (Puppet マスターの `r10k_remote` URL) にプッシュします。スターターキットのルートディレクトリで、次のコマンドを実行して、*`r10kRemoteUrl`* を自分の `r10k_remote` URL で置き換えます。

   ```
   cd  control-repo-example
   git remote add origin r10kRemoteUrl
   git push origin production
   ```

   Puppet の Code Manager では、環境として Git ブランチが使用されます。デフォルトでは、すべてのノードが本稼働環境にあります。

> **Important**
>
> `master` ブランチにプッシュしないでください。`master` ブランチは Puppet マスター用に予約されています。

2. `control-repo-example` ブランチのコードを Puppet マスターにデプロイします。これにより、Puppet マスターによって Git リポジトリから Puppet コード (`r10k_remote`) がダウンロードされます。スターターキットのルートディレクトリで、次のコマンドを実行します。

```
puppet-code deploy --all --wait --config-file .config/puppet-code.conf
```

Amazon EC2 に作成したマネージドノードにサンプルの Apache 設定を適用する方法の詳細については、本ガイドの「ステップ 2: 自動関連付けスクリプトを使用してインスタンスを作成する」を参照してください。

Puppet マスターで管理するノードを追加する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks for Puppet Enterprise サービスは 2024 年 3 月 31 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

トピック

- associateNode() API コールの実行
- オンプレミスでのノード追加の考慮事項
- 詳細情報

ノードを追加する推奨方法は、 OpsWorks `associateNode( )` API を使用することです。Puppet Enterprise マスターサーバーは、管理するノードに Puppet エージェントソフトウェアをインストールするために使用するリポジトリをホストします。ノードがオンプレミスの物理コンピュータか仮想マシンかは問いません。一部のオペレーティングシステム用の Puppet エージェントソフトウェア

は、OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーに起動プロセスの一部としてインストールされます。次の表に示しているのは、OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーの起動時に使用できるオペレーティングシステムエージェントです。

プレインストールされたオペレーティングシステムエージェント

サポートされるオペレーティングシステム	バージョン
Ubuntu	16.04, 18.04, 20.04
Red Hat Enterprise Linux (RHEL)	6, 7, 8
Server	Puppet をサポートするすべての Windows リリースの 64 ビットエディション

他のオペレーティングシステムではサーバーに `puppet-agent` を追加できます。システムメンテナンスによって、起動後にサーバーに追加されたエージェントは削除されることに注意してください。削除されたエージェントをすでに実行している既存のアタッチ済みノードは引き続き稼働しますが、Debian オペレーティングシステムを実行するノードはレポートを停止する場合があります。OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーにエージェントソフトウェアがプリインストールされていないオペレーティングシステムを実行するノードに、`puppet-agent` を手動でインストールすることをお勧めします。他のオペレーティングシステムを使用するノードで、`puppet-agent`をサーバーで使用できるようにする方法の詳細については、Puppet Enterprise ドキュメントの「Installing agents」を参照してください。

EC2 インスタンスユーザーデータを設定してノードを Puppet マスターに自動的に関連付ける方法の詳細については、「OpsWorks for Puppet Enterprise でのノードを自動的に追加します」を参照してください。

`associateNode()` API コールの実行

`puppet-agent` をインストールしてノードを追加すると、ノードは証明書署名リクエスト (CSR) を OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーに送信します。Puppet コンソールで CSR を表示することができます。ノードの CSR の詳細については、Puppet Enterprise ドキュメントの「Managing certificate signing requests」を参照してください。OpsWorks for Puppet Enterprise `associateNode()` API コールを実行するとノードの CSR が処理され、ノードがサーバーに関連付けられます。以下は、 でこの API コールを使用して 1 つのノード AWS CLI を関連付ける方法の例です。ノードが送信する PEM 形式の CSR が必要です。これは Puppet コンソールから入手できます。

```
aws opsworks-cm associate-node --server-name "test-puppet-
server" --node-name "node or instance ID" --engine-attributes
 "Name=PUPPET_NODE_CSR,Value='PEM_formatted_CSR_from_the_node'
```

associateNode() を使用してノードを自動的に追加する方法の詳細については、「OpsWorks for Puppet Enterprise でのノードを自動的に追加します」を参照してください。

オンプレミスでのノード追加の考慮事項

オンプレミスのコンピューターまたは仮想マシンに puppet-agent をインストールした後、次の 2 つの方法のいずれかを使用してオンプレミスのノードを OpsWorks for Puppet Enterprise マスターに関連付けることができます。

- ノードが AWS SDK、AWS CLI、または AWS Tools for PowerShell のインストールをサポートしている場合は、ノードの関連付けの推奨方法である associateNode() API コールの実行を使用できます。最初に OpsWorks for Puppet Enterprise マスターを作成する際にダウンロードするスターターキットに、タグを使用してロールをノードに割り当てる方法が説明されています。CSR の信頼されたファクトを指定することで、ノードを Puppet マスターに関連付ける複数のタグを同時に適用できます。たとえば、スターターキットに含まれるデモ管理リポジトリは、タグ pp_role を使用して Amazon EC2 インスタンスにロールを割り当てるように設定されています。タグを信頼されたファクトとして CSR に追加する方法の詳細については、Puppet プラットフォームドキュメントの「Extension requests (permanent certificate data)」を参照してください。
- ノードが AWS 管理ツールまたは開発ツールを実行できない場合でも、管理されていない Puppet Enterprise マスターに登録するのと同じ方法で、OpsWorks for Puppet Enterprise マスターに登録できます。このトピックで説明されているように、puppet-agent をインストールすると OpsWorks for Puppet Enterprise マスター に CSR が送信されます。承認された Puppet ユーザーが手動で CSR に署名するか、Puppet マスターに保存されている autosign.conf ファイルを編集して CSR の自動署名を設定できます。自動署名の設定と autosign.conf の編集の詳細については、Puppet プラットフォームのドキュメントの「SSL configuration: autosigning certificate requests」を参照してください。

オンプレミスノードを Puppet マスターに関連付けて Puppet マスターがすべての CSR を受け入れるようにするには、Puppet Enterprise コンソールで次を実行します。この動作を制御するパラメータは puppet_enterprise::profile::master::allow_unauthenticated_ca です。

> **Important**
>
> 自己署名の CSR を受け入れる Puppet マスターを有効にしない限り、すべてのの CSR はセキュリティ上の理由から推奨されません。デフォルトでは、認証されていない CSR を許可すると、Puppet マスターが誰からでもアクセスできることになります。証明書リクエストのアップロード設定をデフォルトで有効にすることは、Puppet マスターをサービス妨害 (DoS) 攻撃に対して脆弱にします。

1. Puppet Enterprise コンソールへのサインイン
2. [Configure] (設定)、[Classification] (分類)、[PE Master] (PE マスター)の順に選択して、[Configuration] (設定) タブを選択します。
3. [分類] タブで [puppet_enterprise::profile::master] クラスを見つけます。
4. [allow_unauthenticated_ca] パラメータの値を [true] に設定します。
5. 変更内容を保存します。この変更は次の Puppet 実行時に適用されます。変更が効果を発揮するまで (そして、オンプレミスノードが追加されるまで) に 30 分待つか、あるいは PE コンソールの [Run] (実行) セクションから手動で Puppet を開始します。

詳細情報

OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーおよび Puppet Enterprise コンソールの機能の使用の詳細については、[Learn Puppet tutorial site] (Puppet チュートリアルサイトの説明) を参照してください。

Puppet Enterprise コンソールへのサインイン

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks for Puppet Enterprise サービスは 2024 年 3 月 31 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Puppet マスターの [Properties] ページでサインイン認証情報をダウンロードし、サーバーがオンラインになったら、Puppet Enterprise コンソールにサインインします。このウォークスルーでは、モ

ジュールを含むコントロールリポジトリを指定し、管理するノードを 1 つ以上追加します。そうすることによって、エージェントおよびノードに関する情報をコンソールで表示できるようになります。

Puppet Enterprise コンソールのウェブページに接続しようとすると、Puppet サーバーの管理に使用しているクライアントコンピュータに OpsWorks特定の CA 署名付き SSL 証明書をインストールするまで、証明書の警告がブラウザに表示されます。ダッシュボードのウェブページに進む前に警告が表示されないようにするには、サインインする前に SSL 証明書をインストールします。

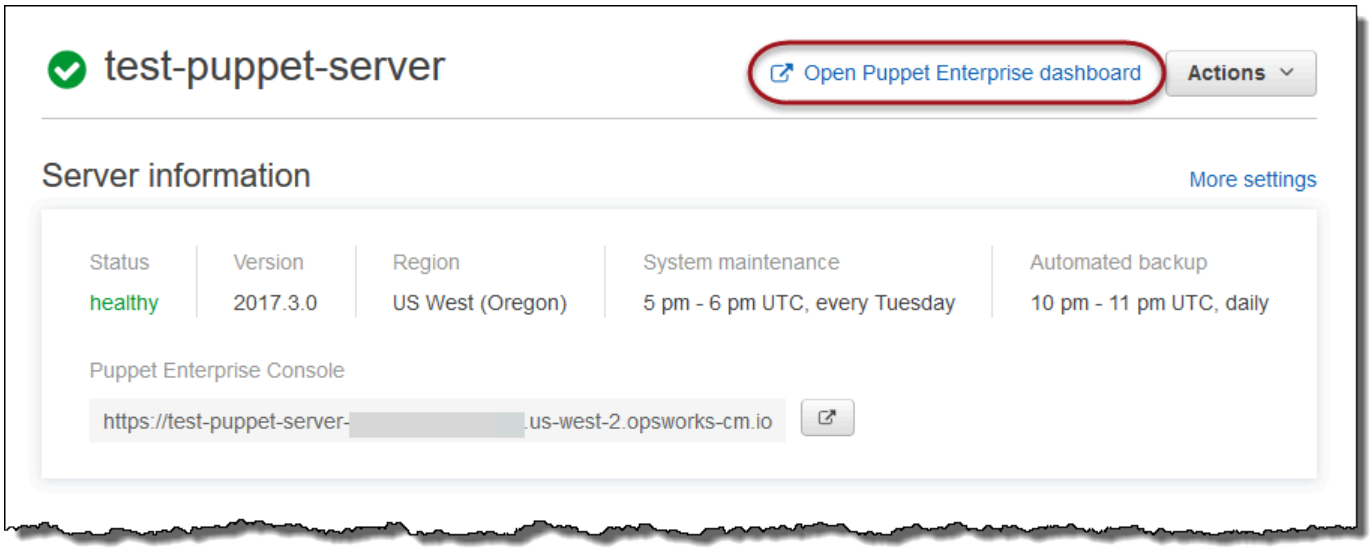
SSL OpsWorks 証明書をインストールするには

- システムに適合する証明書を選択します。

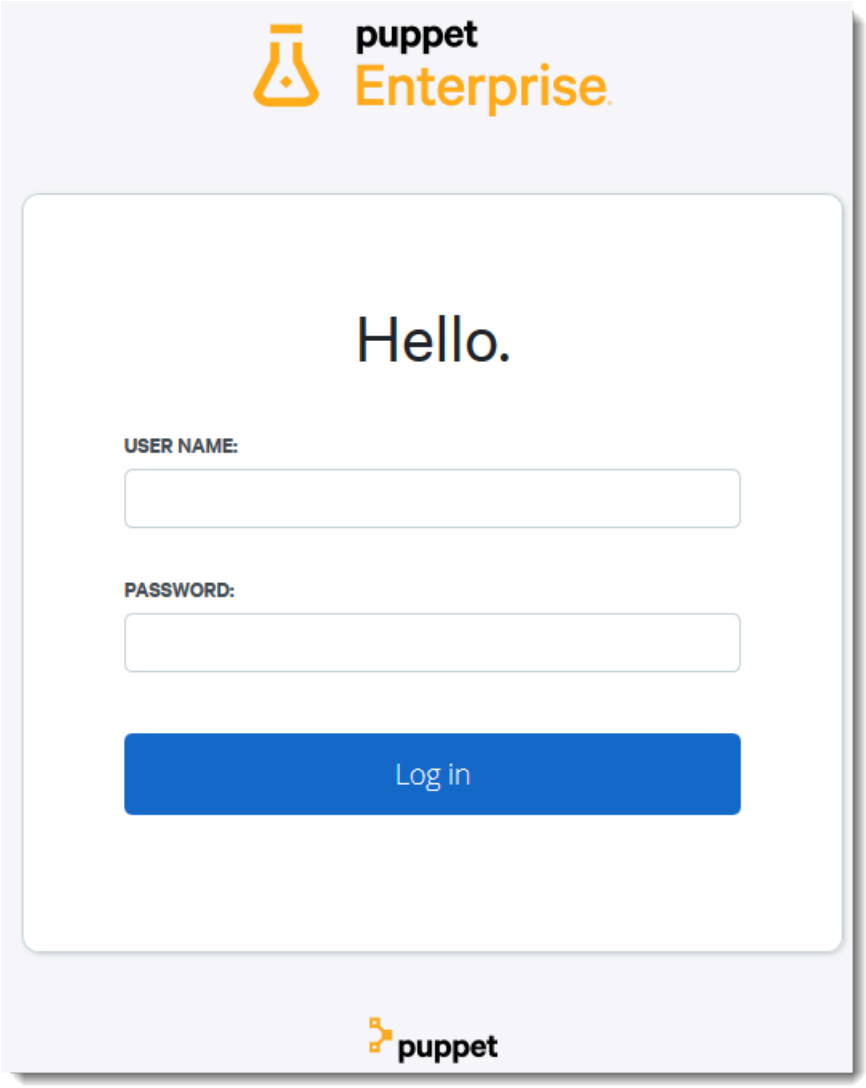
クライアント側の SSL 証明書をインストールした後は、警告メッセージを表示せずに Puppet Enterprise コンソールへのサインインすることができます。

Puppet Enterprise コンソールにサインインするには

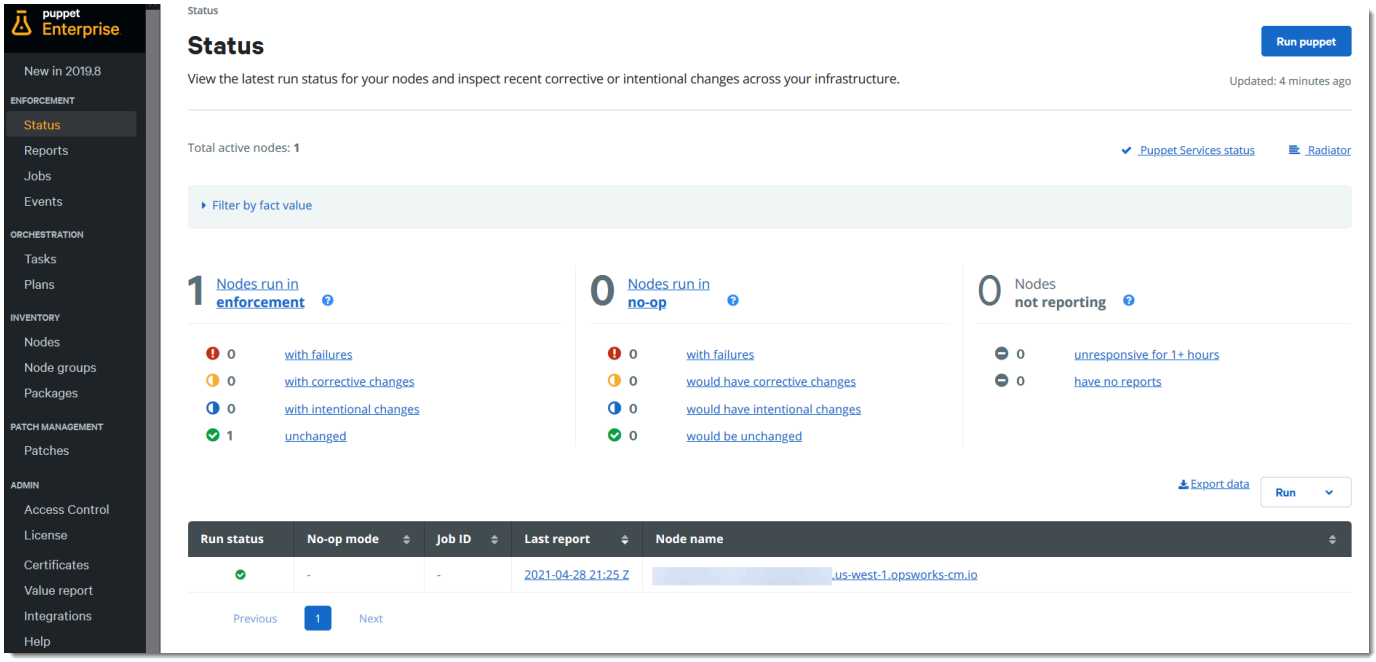
1. 「前提条件」でダウンロードした Puppet Enterprise 認証情報を解凍して開きます。サインインするには、これらの認証情報が必要です。
2. で AWS マネジメントコンソール、Puppet サーバーのプロパティページを開きます。
3. [プロパティ] ページの右上にある [Open Puppet Enterprise console] (Puppet Enterprise コンソールを開く) を選択します。



4. ステップ 1 で認証情報を使用してサインインします。



5. Puppet Enterprise コンソールでは、管理しているノード、モジュールの実行の進行状況とイベント、ノードのコンプライアンスレベルなどに関する詳細情報を表示できます。Puppet Enterprise コンソールの機能および使用方法の詳細については、Puppet Enterprise ドキュメントの「Managing nodes」(管理ノード) を参照してください。



ノードのグループ化と分類

クラスをノードに適用して希望する設定を指定する前に、ノードを企業内のロールまたは一般的な特長に応じてグループ化します。ノードのグループ化および分類には以下の高レベルのタスクが含まれます。PE コンソールを使用してこれらのタスクを完了することができます。ノードのグループかおよび分類方法の詳細については、Puppet Enterprise ドキュメントの「Grouping and classifying nodes」を参照してください。

1. ノードグループを作成します。
2. 手動、または作成したルールを適用して自動で、ノードをグループに追加します。
3. クラスをノードグループに割り当てます。

管理者パスワードとユーザーパスワードをリセットする

Puppet Enterprise コンソールにサインインするために使用するパスワードの変更方法については、Puppet Enterprise ドキュメントの「Reset the console administrator password」(コンソールの管理パスワードをリセット) を参照してください。

デフォルトでは、10 回サインインが試行されると、ユーザーは Puppet コンソールからロックアウトされます。ロックアウトが発生した場合にユーザーパスワードをリセットする方法の詳細については、Puppet Enterprise ドキュメントの「Password endpoints」を参照してください。

オプション: Puppet r10k リモートコントロールリポジトリ AWS CodeCommit として を使用する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks for Puppet Enterprise サービスは 2024 年 3 月 31 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

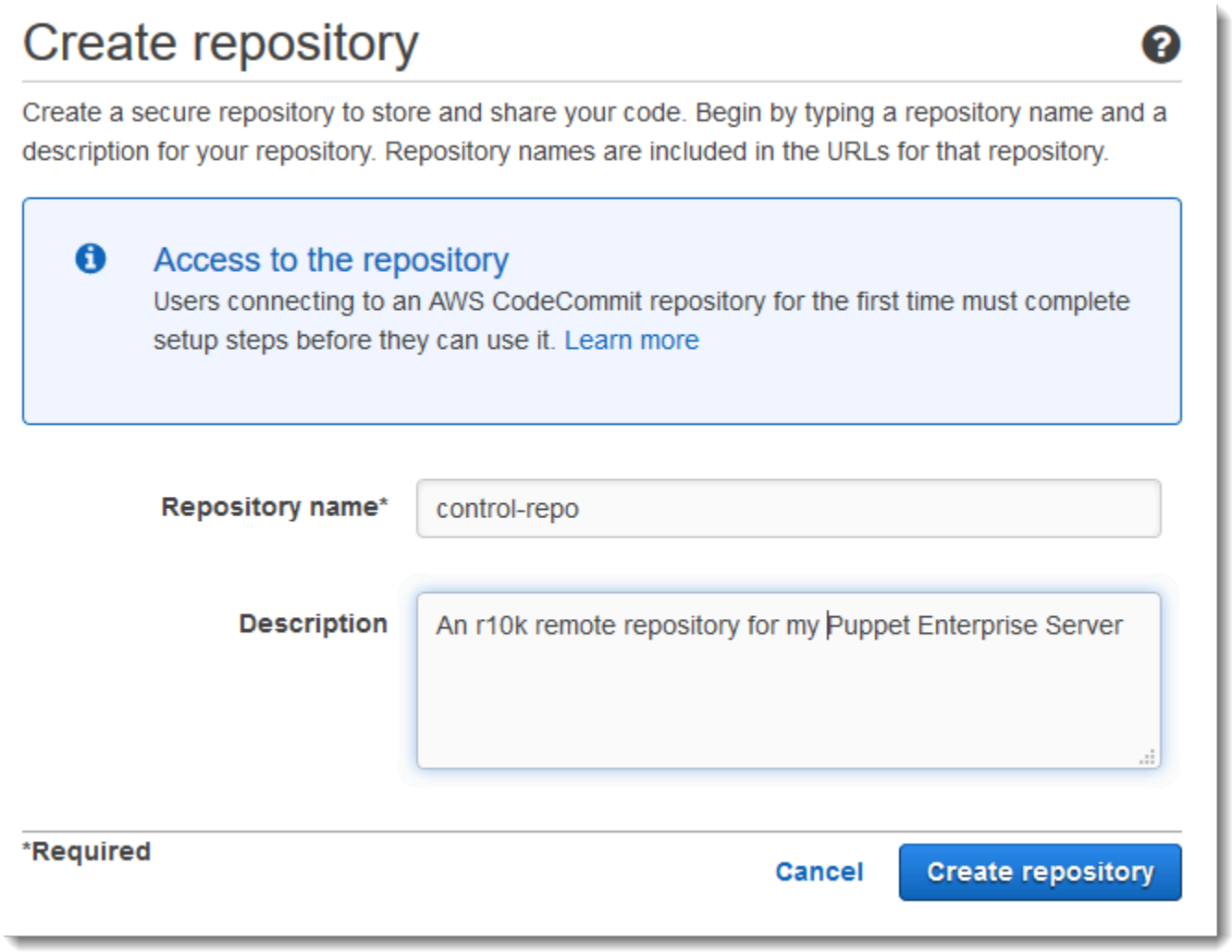
を使用して新しいリポジトリを作成し AWS CodeCommit、r10k リモートコントロールリポジトリとして使用できます。このセクションの手順を完了し、CodeCommit リポジトリを操作するには、[AWSCodeCommitReadOnly] 管理ポリシーで提供される権限を持つユーザーが必要です。

トピック

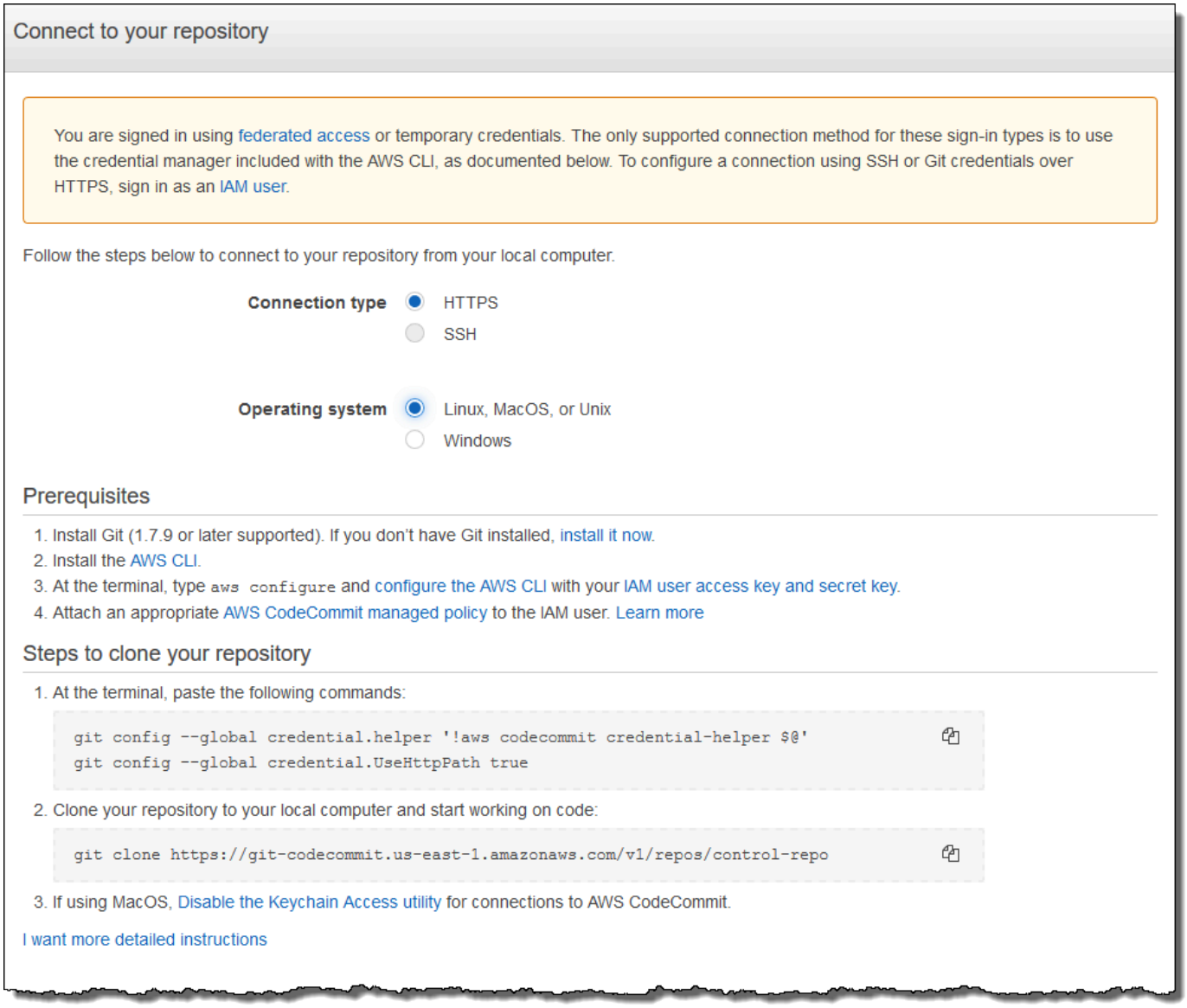
- ステップ 1: CodeCommit を HTTPS 接続タイプのリポジトリとして使用する
- ステップ 2: (オプション) SSH 接続タイプのリポジトリとして CodeCommit を使用する

ステップ 1: CodeCommit を HTTPS 接続タイプのリポジトリとして使用する

1. CodeCommit コンソールに新しいリポジトリを作成します。



2. [Skip] (スキップ) を選択して Amazon SNS トピックの設定をスキップします。
3. [Code] (コード) ページで、[Connect to your repository] を選択します。
4. [Connect to your repository] ページで、[HTTPS] を [Connection type] として選択し、オペレーティングシステムを選択します。



[Steps to clone your repository] 領域で、`git clone` URL は次のようになります: `https://git-codecommit.`*`region`*`.amazonaws.com/v1/repos/control-repo` この URL を、Puppet サーバーのセットアップに使用しやすい場所にコピーします。

5. [Connect to your repository] ページを閉じて、OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーの設定に戻ります。
6. ステップ 4 でコピーした URL を、Puppet マスターセットアップウィザードの [Configure credentials] (認証情報を設定) ページにある [r10k remote] 文字列ボックスに貼り付けます。[r10k private key] ボックスは空のままにしておきます。Puppet マスターの作成と起動を完了します。
7. IAM コンソールで、[AWSCodeCommitReadOnly] ポリシーを Puppet マスターのインスタンスプロファイルロールにアタッチします。ポリシーを IAM ロールにアタッチする方法の詳細につ

いては、IAM ユーザーガイドの「IAM ID アクセス許可の追加 (コンソール)」を参照してください。

8. AWS CodeCommit ユーザーガイドの「Git 認証情報を使用する HTTPS ユーザー用のセットアップ」のステップに従って、既存の `control-repo` コンテンツを新しい CodeCommit リポジトリにプッシュします。
9. これで、引き続き「the section called “設定を完了する”」の手順に従い、スターターキットを使用してコードを Puppet マスターにデプロイできます。コマンドの例を次に示します。

```
puppet-code deploy --all --wait --config-file .config/puppet-code.conf
```

ステップ 2: (オプション) SSH 接続タイプのリポジトリとして CodeCommit を使用する

SSH キーペア認証を使用するように AWS CodeCommit r10k リモートコントロールリポジトリを設定できます。この手順を開始する前に、次の前提条件を満たす必要があります。

- 前のセクション the section called “ステップ 1: CodeCommit を HTTPS 接続タイプのリポジトリとして使用する” で説明したように、HTTPS コントロールリポジトリを使用して OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーを起動している必要があります。必要な設定を Puppet マスターにアップロードできるように、この手順は最初に行う必要があります。
- [AWSCodeCommitReadOnly] 管理ポリシーがアタッチされたユーザーがあることを確認します。ユーザーの作成方法の詳細については、「IAM ユーザーガイド」の AWS 「アカウントでの IAM ユーザーの作成」を参照してください。
- SSH キーを作成して、 ユーザーを関連付けます。AWS CodeCommit 「ユーザーガイド」の「ステップ 3: Linux、macOS、または Unix で認証情報を設定する」の「`ssh-keygen`」に記載されている公開鍵/秘密鍵ペアの作成方法に従ってください。

1. AWS CLI セッションで、次のコマンドを実行して、プライベートキーファイルの内容を Parameter Store AWS Systems Manager にアップロードします。OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーは、このパラメーターに問い合わせて、必要な証明書ファイルを取得します。*`private_key_file`* を SSH プライベートキーファイルへのパスに置き換えます。

```
aws ssm put-parameter --name puppet_user_pk --type String --value
 "`cat private_key_file`"
```

2. Systems Manager パラメータストアのアクセス権を Puppet マスターに追加します。

a. IAM コンソール (https://console.aws.amazon.com/iam/) を開きます。

b. 左のナビゲーションペインで、[ロール] を選択してください。

c. [aws-opsworks-cm-ec2-role] を選択します。

d. [Permissions (アクセス許可)] タブで、[Attach policy (ポリシーの添付)] を選択します。

e. [Search] バーに「**AmazonSSMManagedInstanceCore**」と入力します。

f. 検索結果の中から [AmazonSSMManagedInstanceCore] を選択します。

g. [Attach policy] (ポリシーのアタッチ) を選択します。

3. 設定ファイルマニフェストを作成します。スターターキットの `control-repo-example` を使用する場合は、サンプルリポジトリに示されている場所に次のファイルを作成します。それ以外の場合は、独自のコントロールリポジトリ構造に従って作成します。*IAM_USER_SSH_KEY* を、この手順の前提条件で作成した SSH キー ID と置き換えます。

```
control-repo-example/site/profile/manifests/codecommit.pp
```

```
class profile::codecommit {
  $configfile = @(CONFIGFILE)
      Host git-codecommit.*.amazonaws.com
      User IAM_USER_SSH_KEY
      IdentityFile /etc/puppetlabs/puppetserver/ssh/codecommit.rsa
      StrictHostKeyChecking=no
      | CONFIGFILE

  # Replace REGION with the correct region for your server.
  $command = @(COMMAND)
      aws ssm get-parameters \
      --region REGION \
      --names puppet_user_pk \
      --query "Parameters[0].Value" \
      --output text >| /etc/puppetlabs/puppetserver/ssh/codecommit.rsa
      | COMMAND

  $dirs = [
            '/opt/puppetlabs/server/data/puppetserver/.ssh',
            '/etc/puppetlabs/puppetserver/ssh',
          ]

  file { $dirs:
    ensure => 'directory',
```

```
    group  => 'pe-puppet',
    owner  => 'pe-puppet',
    mode   => '0750',
  }

  file { 'ssh-config':
    path    => '/opt/puppetlabs/server/data/puppetserver/.ssh/config',
    require => File[$dirs],
    content => $configfile,
    group   => 'pe-puppet',
    owner   => 'pe-puppet',
    mode    => '0600',
  }

  exec { 'download-codecommit-certificate':
    command => $command,
    require => File[$dirs],
    creates => '/etc/puppetlabs/puppetserver/ssh/codecommit.rsa',
    path    => '/bin',
    cwd     => '/etc/puppetlabs',
  }

  file { 'private-key-permissions':
    subscribe => Exec['download-codecommit-certificate'],
    path      => '/etc/puppetlabs/puppetserver/ssh/codecommit.rsa',
    group     => 'pe-puppet',
    owner     => 'pe-puppet',
    mode      => '0600',
  }
}
```

4. コントロールリポジトリを CodeCommit にプッシュします。以下のコマンドを実行して、新しいマニフェストファイルをリポジトリにプッシュします。

```
git add ./site/profile/manifests/codecommit.pp
git commit -m 'Configuring for SSH connection to CodeCommit'
git push origin production
```

5. マニフェストファイルを展開します。次のコマンドを実行して、更新された設定を OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーにデプロイします。*STARTER_KIT_DIRECTORY* を Puppet 設定ファイルへのパスに置き換えます。

```
cd STARTER_KIT_DIRECTORY
```

```
puppet-access login --config-file .config/puppetlabs/client-tools/puppet-
access.conf

puppet-code deploy --all --wait \
--config-file .config/puppet-code.conf \
--token-file .config/puppetlabs/token
```

6. OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーの分類を更新します。デフォルトでは、Puppet エージェントはノード (マスターを含む) 上で 30 分ごとに実行されます。すぐに実行するには、Puppet マスター上で手動でエージェントを実行します。エージェントを実行すると、新しいマニフェストファイルが取得されます。

   a. Puppet Enterprise コンソールへのサインイン

   b. [分類] を選択します。

   c. [PE インフラストラクチャ] を展開します。

   d. [PE マスター] を選択します。

   e. 設定 タブで、[Add new class] (新しいクラスを追加する) に **`profile::codecommit`** と入力します。

      `puppet-code deploy` を実行してから、新しいクラス `profile::codecommit` が表示されるまでに少し時間がかかる場合があります。表示されない場合は、このページの [Refresh] (更新) を選択します。

   f. [Add class (クラスの追加)]、[Commit 1 change] の順に選択します。

   g. OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーで Puppet エージェントを手動で実行します。[ノード] を選択後、リスト内の該当するサーバーを選択し、[Run Puppet]、[実行] の順に選択します。

7. Puppet Enterprise コンソールで、HTTPS ではなく SSH を使用するようにリポジトリ URL を変更します。このステップで実行する設定は、OpsWorks for Puppet Enterprise の バックアップおよび復元プロセス中に保存されるため、メンテナンス作業後にリポジトリ設定を手動で変更する必要はありません。

   a. [分類] を選択します。

   b. [PE インフラストラクチャ] を展開します。

   c. [PE マスター] を選択します。

   d. [設定] タブで、`puppet_enterprise::profile::master` クラスを見つけます。

   e. `r10k_remote` パラメータの横にある [Edit] (編集) を選択します。

f. リポジトリの HTTPS URL を SSH URL に置き換え、[Commit 1 change] を選択します。

g. OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーで Puppet エージェントを手動で実行します。[ノード] を選択後、リスト内の該当するサーバーを選択し、[Run Puppet]、[実行] の順に選択します。

を使用して AWS OpsWorks for Puppet Enterprise マスターを作成する CloudFormation

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks for Puppet Enterprise サービスは 2024 年 3 月 31 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

AWS OpsWorks for Puppet Enterprise では、Puppet Enterprise サーバーを で実行できます AWS。約 15 分で Puppet Enterprise マスターサーバーをプロビジョニングできます。

2021 年 5 月 3 日から、OpsWorks for Puppet Enterprise は Puppet Enterprise サーバー属性をいくつか AWS Secrets Managerに保存します。詳細については、「との統合 AWS Secrets Manager」を参照してください。

以下のウォークスルーは、 CloudFormationでスタックを作成することにより、OpsWorks for Puppet Enterprise の Puppet マスターの作成に役立ちます。

トピック

- 前提条件
- CloudFormationで Puppet Enterprise マスターを作成する

前提条件

新しい Puppet マスターを作成する前に、Puppet マスターにアクセスして管理するために必要なリソースを OpsWorks for Puppet Enterprise の外部で作成してください。詳細については、このガイドの「はじめに」セクションにある「前提条件」を参照してください。

カスタムドメインを使用するサーバーを作成する場合は、カスタムドメイン、証明書、およびプライベートキーが必要です。 CloudFormation テンプレートで、これら 3 つのパラメータすべてに値を指定する必要があります。CustomDomain、CustomCertificate、および CustomPrivateKey パラメータの要件の詳細については、OpsWorks CM API リファレンス のサーバーの作成 を参照してください

CloudFormation ユーザーガイドテンプレートリファレンスの OpsWorks-CM セクションで、サーバーの作成に使用する CloudFormation テンプレートでサポートされている値と必要な値について説明します。

CloudFormationで Puppet Enterprise マスターを作成する

このセクションでは、 CloudFormation テンプレートを使用して OpsWorks for Puppet Enterprise マスターサーバーを作成するスタックを構築する方法について説明します。これを行うには、CloudFormation コンソールまたは を使用します AWS CLI。サンプル CloudFormation テンプレートを使用して、OpsWorks for Puppet Enterprise サーバースタックを構築できます。サンプルテンプレートを更新するには、必ず、独自のサーバー名、IAM ロール、インスタンスプロファイル、サーバーの説明、バックアップ保持数、メンテナンスオプション、およびオプションのタグを使用してください。サーバーでカスタムドメインを使用する場合は、CustomDomain テンプレートで、CustomCertificate、CustomPrivateKey および CloudFormation パラメータの値を指定する必要があります。これらのオプションの詳細については、このガイドの「はじめに」セクションの「the section called “を使用して Puppet Enterprise Master を作成する AWS マネジメントコンソール”」を参照してください。

トピック

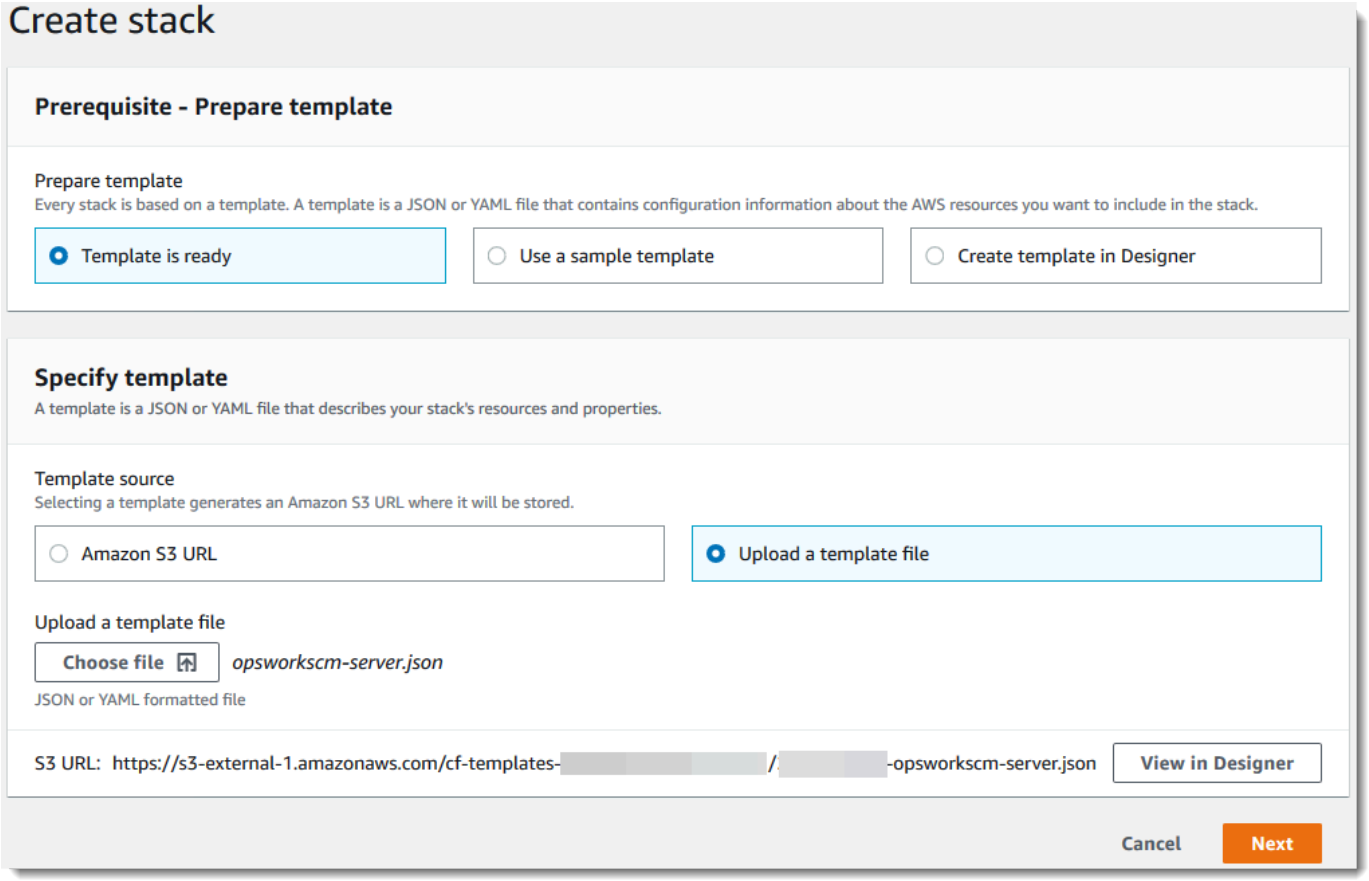
- (コンソール) を使用して Puppet Enterprise Master CloudFormation を作成する
- (CloudFormation CLI) を使用して Puppet Enterprise Master を作成する

(コンソール) を使用して Puppet Enterprise Master CloudFormation を作成する

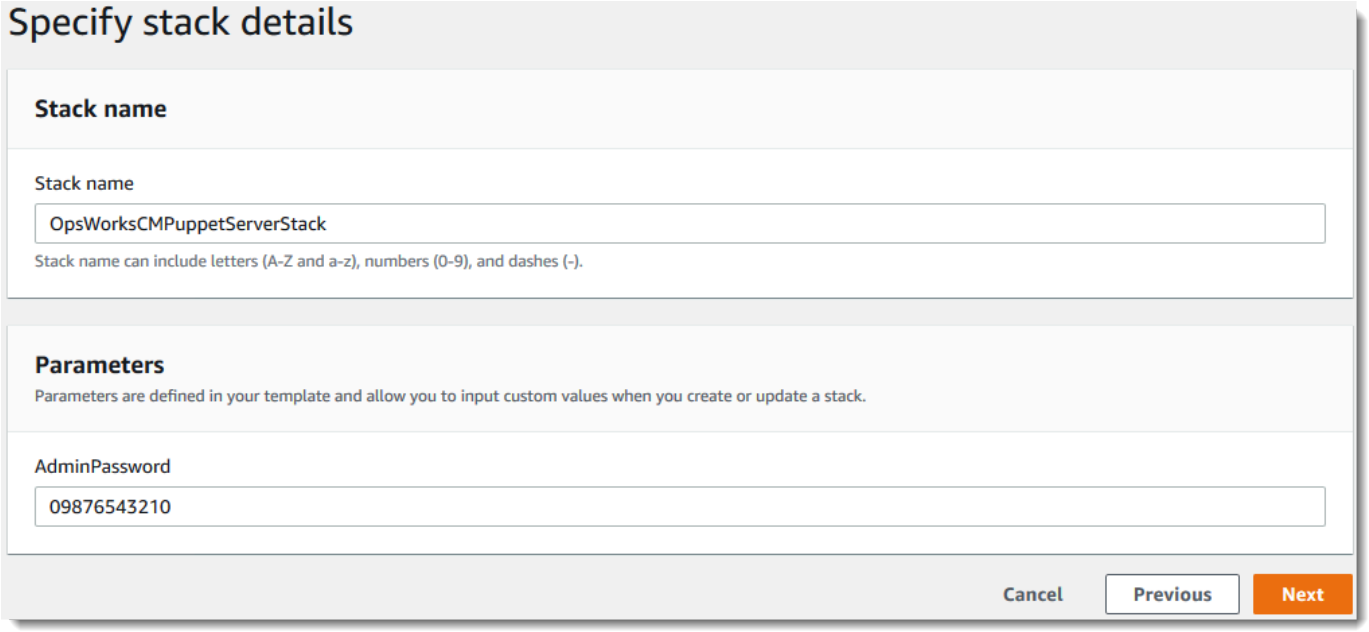
1. にサインイン AWS マネジメントコンソール し、https://console.aws.amazon.com/cloudformation で CloudFormation コンソールを開きます。
2. CloudFormation ホームページで、スタックの作成を選択します。
3. 前提条件 - テンプレートの準備では、example CloudFormation template (テンプレートのサンプル) を使用している場合、テンプレートの準備完了 を選択します。
4. [Specify template] 内で、テンプレートのソースを選択します。このチュートリアルでは、テンプレートファイルをアップロードを選択し、Puppet Enterprise サーバーを作成する

CloudFormation テンプレートをアップロードします。テンプレートファイルを参照し、[Next] を選択します。

CloudFormation テンプレートは YAML 形式または JSON 形式のいずれかです。サンプル CloudFormation テンプレートを使用できます。サンプル値は必ず独自の値に置き換えてください。 CloudFormation テンプレートデザイナーを使用して、新しいテンプレートを構築したり、既存のテンプレートを検証したりできます。これを行う方法については、CloudFormation ユーザーガイド のCloudFormation 「Designer Interface Overview (Designer インターフェイスの概要) を参照してください。



5. [Specify stack details] ページでスタックの名前を入力します。これは、サーバーの名前と同じ名前にしないでください。スタック名にすぎません。[Parameters (パラメータ)] 領域で、Puppet Enterprise コンソールウェブページにサインインする管理者パスワードを入力します。パスワードに使用できる文字数は 8 ~ 32 文字 (ASCII) です。[次へ] を選択します。



6. [Options] (オプション) ページで、スタックを使用して作成するサーバーにタグを追加し、テンプレートで使用する IAM ロールをまだ指定していない場合は、リソースを作成するための IAM ロールを選択できます。オプションの指定を終了したら、[Next (次へ)] を選択します。ロールバックトリガーなどの高度なオプションの詳細については、「 CloudFormation ユーザーガイド」のCloudFormation 「スタックオプションの設定」を参照してください。
7. [確認] ページで選択内容を確認します。サーバースタックを作成する準備ができたら、[Create (作成)] を選択します。

   がスタックを作成する CloudFormation のを待っている間に、スタックの作成ステータスを表示します。スタックの作成に失敗した場合、コンソールに表示されるエラーメッセージを確認し、問題を解決します。 CloudFormation スタックのエラーのトラブルシューティングについての詳細は、CloudFormation ユーザーガイドの「Troubleshooting Errors」 (エラーのトラブルシューティング) を参照してください。

   サーバーの作成が完了すると、OpsWorks for Puppet Enterprise のホームページで、Puppet マスターが [online] (オンライン) のステータスになり、利用可能になります。サーバーがオンラインになると、Puppet Enterprise コンソールがサーバーのドメインで `https://your_server_name-randomID.region.opsworks-cm.io` の形式の URL で利用できます。

> **Note**
>
> サーバーのカスタムドメイン、証明書、プライベートキーを指定した場合は、エンタープライズの DNS 管理ツールで OpsWorks for Puppet Enterprise によってサーバー用に自動的に生成されたエンドポイントに、カスタムドメインをマッピングする CNAME エントリを作成します。生成されたエンドポイントをカスタムドメイン値にマッピングするまで、サーバーを管理したり、サーバーの Puppet Enterprise 管理 Web サイトに接続したりすることはできません。
> 生成されたエンドポイント値を取得するには、サーバーがオンラインになった後に次の AWS CLI コマンドを実行します。
>
> ```
> aws opsworks describe-servers --server-name server_name
> ```

(CloudFormation CLI) を使用して Puppet Enterprise Master を作成する

ローカルコンピュータで がまだ実行されていない場合は AWS CLI、AWS コマンドラインインターフェイスユーザーガイド AWS CLI のインストール手順に従って、 をダウンロードしてインストールします。このセクションでは、create-stack コマンドで使用できるパラメータのすべては説明しません。create-stack パラメータの詳細については、create-stack リファレンスの「AWS CLI 」を参照してください。

1. OpsWorks for Puppet Enterprise マスターを作成するために「前提条件」を必ず完了してください。
2. サービスロールとインスタンスプロファイルを作成します。

   アカウントでサービスロールの ARNs を検索してコピーします。

   ```
   aws iam list-roles --path-prefix "/service-role/" --no-paginate
   ```

   `list-roles` コマンドの結果内で、次のようなサービスロールとインスタンスプロファイルのエントリを探します。サービスロールとインスタンスプロファイルの ARNs を書き留め、Puppet マスターサーバースタックの作成に使用する CloudFormation テンプレートに追加します。
3. create-stack コマンドを再度実行して、OpsWorks for Puppet Enterprise マスターを作成します。

- *stack_name* をスタックの名前に置き換えます。これは Puppet マスターではなく、CloudFormation スタックの名前です。Puppet マスター名は、ServerName テンプレートにおける CloudFormation の値です。
- *template* をテンプレートファイルへのパスに置き換え、*yaml ### json* を必要に応じて .yaml または .json に置き換えます。
- --parameters の値は、[CreateServer] (サーバーの作成) API からの [EngineAttributes] (エンジンの属性) に対応しています。Puppet の場合、サーバーを作成するためにユーザーが指定するエンジン属性は以下のとおりです。r10k エンジン属性は、Puppet マスターをコードリポジトリに接続してサーバーの環境設定を管理します。r10k エンジン属性の詳細については、Puppet Enterprise ドキュメントの「r10k でのコードの管理」を参照してください。
  - PUPPET_ADMIN_PASSWORD: Puppet Enterprise コンソールウェブページにサインインするための管理者パスワードです。パスワードには、8 ~ 32 文字の ASCII 文字を使用し、少なくとも 1 つの大文字、1 つの小文字、1 つの数字、1 つの特殊文字を含める必要があります。
  - PUPPET_R10K_REMOTE: コントロールリポジトリの URL です (例: ssh://git@your.git-repo.com:user/control-repo.git)。r10k リモートを指定すると、TCP ポート 8170 が開きます。
  - PUPPET_R10K_PRIVATE_KEY。プライベート Git リポジトリを使用している場合、PUPPET_R10K_PRIVATE_KEY を追加して SSH URL と PEM でエンコードされたプライベート SSH キーを指定します。

```
aws cloudformation create-stack --stack-name stack_name
 --template-body file://template.yaml or json --parameters
 ParameterKey=AdminPassword,ParameterValue="password"
```

以下に例を示します。

```
aws cloudformation create-stack --stack-name "OpsWorksCMPuppetServerStack"
 --template-body file://opsworkscm-puppet-server.json --parameters
 ParameterKey=AdminPassword,ParameterValue="09876543210Ab#"
```

次の例では、r10k エンジン属性が CloudFormation テンプレートで指定されていない場合に、パラメータとして r10k エンジン属性を指定します。r10k エンジン属性 puppet-server-param-attributes.yaml が含まれるサンプルテンプレートは、サンプル CloudFormation テンプレートに含まれています。

```
aws cloudformation create-stack --stack-name MyPuppetStack --
template-body file://puppet-server-param-attributes.yaml --parameters
 ParameterKey=AdminPassword,ParameterValue="superSecret1%3"
 ParameterKey=R10KRemote,ParameterValue="https://www.yourRemote.com"
 ParameterKey=R10KKey,ParameterValue="$(cat puppet-r10k.pem)"
```

次の例では、 CloudFormation テンプレートで r10k エンジン属性とその値を指定します。コマンドは、テンプレートファイルのみポイントする必要があります。`--template-body` の値として指定されるテンプレート `puppet-server-in-file-attributes.yaml` は、サンプル CloudFormation テンプレートに含まれています。

```
aws cloudformation create-stack --stack-name MyPuppetStack --template-body file://
puppet-server-in-file-attributes.yaml
```

4. (オプション) スタックの作成状況を取得するには、次のコマンドを実行します。

```
aws cloudformation describe-stacks --stack-name stack_name
```

5. スタックの作成が終了したら、次のセクション「the section called “設定を完了する”」に移動します。スタックの作成に失敗した場合、コンソールに表示されるエラーメッセージを確認し、問題を解決します。 CloudFormation スタックのエラーのトラブルシューティングの詳細については、CloudFormation 「 ユーザーガイド」の「エラーのトラブルシューティング」を参照してください。

OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーの更新して、カスタムドメインを使用する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks for Puppet Enterprise サービスは 2024 年 3 月 31 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このセクションでは、サーバーのバックアップを使用して新しいサーバーを作成することで、既存の OpsWorks for Puppet Enterprise server サーバーを更新してカスタムドメインと証明書を使用する方法について説明します。基本的に、バックアップから新しいサーバーを作成することで既存の OpsWorks for Puppet Enterprise 2.0 サーバーをコピーしてから、カスタムドメイン、証明書、プライベートキーを使用するための新しいサーバーを構成します。

トピック

- 前提条件
- 制限事項
- カスタムドメインを使用するようにサーバーを更新する
- 以下の資料も参照してください。

前提条件

既存の OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーを更新して、カスタムドメインと証明書を使用するための要件を次に示します。

- 更新 (またはコピー) するサーバーは、Puppet Enterprise 2019.8.5 を実行している必要があります。
- 新しいサーバーの作成に使用するバックアップを決定します。更新するサーバーのバックアップが少なくとも 1 つ必要です。OpsWorks for Puppet Enterprise でのバックアップの詳細については、「OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーをバックアップします」を参照してください。
- バックアップのソースである既存のサーバーを作成するために使用したサービスロールとインスタンスプロファイルの ARN を準備します。
- 最新リリースの AWS CLIを実行していることを確認してください。 AWS CLI ツールの更新の詳細については、AWS コマンドラインインターフェイスユーザーガイドの「 のインストール AWS CLI」を参照してください。

制限事項

バックアップから新しいサーバーを作成して既存のサーバーを更新する場合、新しいサーバーは既存の OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーとまったく同じようにはできません。

- この手順は、 AWS CLI またはいずれかの AWS SDKs。 AWS マネジメントコンソールを使用してバックアップから新しいサーバーを作成することはできません。

- 新しいサーバーに、アカウント内および AWS リージョン内の既存のサーバーと同じ名前は使用できません。名前は、バックアップのソースとして使用した既存のサーバーとは異なる必要があります。
- 既存のサーバーに接続されたノードは、新しいサーバーによって管理されません。次のいずれかを行う必要があります。
  - 複数の Puppet マスターでノードを管理することはできないため、異なるノードをアタッチします。
  - 既存のサーバー (バックアップのソース) から新しいサーバーと新しいカスタムドメインエンドポイントにノードを移行します。ノードを移行する方法の詳細については、Puppet Enterprise のドキュメントを参照してください。

カスタムドメインを使用するようにサーバーを更新する

既存の Puppet マスターを更新するには、バックアップ、カスタムドメイン、カスタム証明書、カスタムプライベートキーを指定するパラメータを追加して `create-server` コマンドを実行し、コピーを作成します。

1. `create-server` コマンドで指定できるサービスロールまたはインスタンスプロファイルの ARN がない場合は、「を使用して Chef Automate サーバーを作成する AWS CLI」のステップ 1 ~ 5 に従って、使用できるサービスロールとインスタンスプロファイルを作成します。
2. まだ作成していない場合は、カスタムドメインで新しいサーバーのベースにする既存の Puppet マスターのバックアップを探します。次のコマンドを実行して、アカウントおよびリージョン内のすべての OpsWorks for Puppet Enterprise バックアップに関する情報を表示します。使用するバックアップの ID を書き留めておきます。

   ```
   aws opsworks-cm --region region name describe-backups
   ```

3. 次の `create-server` コマンドを実行して OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーを作成します。

   - `--engine` 値は `Puppet`、`--engine-model` は `Monolithic` および `--engine-version` は `2019` または `2017` です。
   - サーバー名は、 AWS アカウント内で各リージョン内で一意である必要があります。サーバー名は文字で始める必要があります。その後は文字、数字、またはハイフン (-) を最大 40 文字まで使用できます。

- ステップ 3 と 4 でコピーしたインスタンスプロファイル ARN とサービスロール ARN を使用します。
- 有効なインスタンスタイプは `c4.large`、`c4.xlarge`、または `c4.2xlarge` です。これらのインスタンスタイプの仕様についての詳細は、「Amazon EC2 User Guide」(Amazon EC2 ユーザーガイド) の「Instance Types」(インスタンスタイプ) を参照してください。
- `--engine-attributes` パラメータはオプションです。Puppet 管理者パスワードを指定しない場合、サーバー作成プロセスで生成されます。`--engine-attributes` を追加する場合は、`PUPPET_ADMIN_PASSWORD` を指定します。これは、Puppet Enterprise コンソールウェブページにサインインする管理者パスワードです。パスワードに使用できる文字数は 8 ~ 32 文字 (ASCII) です。
- SSH キーペアはオプションですが、コンソール管理者パスワードをリセットする必要がある場合に Puppet マスターに接続することができます。SSH キーペアの作成の詳細については、「Amazon EC2 User Guide」(Amazon EC2 ユーザーガイド) の「Amazon EC2 Key Pairs」(Amazon EC2 キーペア) を参照してください。
- カスタムドメインを使用するには、コマンドに以下のパラメータを追加します。それ以外の場合は、Puppet マスター作成プロセスによって自動的にエンドポイントが生成されます。カスタムドメインを構成するには、3 つのパラメータすべてが必要です。これらのパラメータを使用するための追加の要件については、CM API リファレンスのCreateServer OpsWorks 」を参照してください。
  - `--custom-domain` - サーバーのオプションのパブリックエンドポイント (`https://aws.my-company.com` など)。
  - `--custom-certificate` - PEM 形式の HTTPS 証明書。値には、単一の自己署名証明書、または証明書チェーンを指定できます。
  - `--custom-private-key` - HTTPS を使用してサーバーに接続するための PEM 形式のプライベートキー。プライベートキーは暗号化しないでください。パスワードやパスフレーズで保護することはできません。
- 週 1 回のシステムメンテナンスが必要です。次の形式で有効な値を指定する必要があります: `DDD:HH:MM`。指定時刻は協定世界時 (UTC) です。`--preferred-maintenance-window` の値を指定しない場合、火曜日、水曜日、または金曜日の 1 時間がランダムでデフォルト値になります。
- `--preferred-backup-window` の有効な値は次の形式のいずれかで指定する必要があります: 日次バックアップの場合は `HH:MM`、週次バックアップの場合は `DDD:HH:MM`。指定時刻は UTC です。デフォルト値は日次で開始時間はランダムです。自動バックアップを無効にするには、代わりにパラメータ `--disable-automated-backup` を追加します。

- `--security-group-ids` に、1 つ以上のセキュリティグループ ID をスペースで区切って入力します。
- `--subnet-ids` には、サブネット ID を入力します。

```
aws opsworks-cm create-server --engine "Puppet" --engine-model "Monolithic"
 --engine-version "2019" --server-name "server_name" --instance-profile-arn
 "instance_profile_ARN" --instance-type "instance_type" --engine-attributes
 '{"PUPPET_ADMIN_PASSWORD":"ASCII_password"}' --key-pair "key_pair_name" --
preferred-maintenance-window "ddd:hh:mm" --preferred-backup-window "ddd:hh:mm"
 --security-group-ids security_group_id1 security_group_id2 --service-role-arn
 "service_role_ARN" --subnet-ids subnet_ID
```

次の例では、カスタムドメインを使用する Puppet マスターを作成します。

```
aws opsworks-cm create-server \
    --engine "Puppet" \
    --engine-model "Monolithic" \
    --engine-version "2019" \
    --server-name "puppet-02" \
    --instance-profile-arn "arn:aws:iam::1019881987024:instance-profile/aws-
opsworks-cm-ec2-role" \
    --instance-type "c4.large" \
    --engine-attributes '{"PUPPET_ADMIN_PASSWORD":"zZZzDj2DLYXSZFRv1d"}' \
    --custom-domain "my-puppet-master.my-corp.com" \
    --custom-certificate "-----BEGIN CERTIFICATE----- EXAMPLEqEXAMPLE== -----END
 CERTIFICATE-----" \
    --custom-private-key "-----BEGIN RSA PRIVATE KEY----- EXAMPLEqEXAMPLE= -----END
 RSA PRIVATE KEY-----" \
    --key-pair "amazon-test"
    --preferred-maintenance-window "Mon:08:00" \
    --preferred-backup-window "Sun:02:00" \
    --security-group-ids sg-b00000001 sg-b0000008 \
    --service-role-arn "arn:aws:iam::044726508045:role/service-role/aws-opsworks-
cm-service-role" \
    --subnet-ids subnet-383daa71
```

4. OpsWorks for Puppet Enterprise は、新しいサーバーを作成するのに約 15 分かかります。`create-server` コマンドの出力で、`Endpoint` 属性の値をコピーします。以下に例を示します。

```
"Endpoint": "puppet-2019-exampleexample.opsworks-cm.us-east-1.amazonaws.com"
```

create-server コマンドの出力を閉じたり、シェルセッションを閉じたりしないでください。今後表示されない重要な情報が出力に含まれている場合があります。create-server の結果からパスワードとスターターキットを取得するには、次のステップに進みます。

5. OpsWorks for Puppet Enterprise でパスワードを生成するように選択した場合、[jq] などの JSON プロセッサーを使用して create-server の結果から使用可能な形式でパスワードを抽出できます。jq をインストールした後、以下のコマンドを実行して Puppet 管理者パスワードとスターターキットを抽出できます。ステップ 3 で独自のパスワードを指定しなかった場合は、抽出した管理者パスワードを使いやすく安全な場所に保存してください。

```
#Get the Puppet password:
cat resp.json | jq -r '.Server.EngineAttributes[] | select(.Name ==
 "PUPPET_ADMIN_PASSWORD") | .Value'

#Get the Puppet Starter Kit:
cat resp.json | jq -r '.Server.EngineAttributes[] | select(.Name ==
 "PUPPET_STARTER_KIT") | .Value' | base64 -D > starterkit.zip
```

> **Note**
>
> AWS マネジメントコンソールで新しい Puppet マススタースターターキットを再生成することはできません。を使用して Puppet マスターを作成する場合は AWS CLI、前述のjqコマンドを実行して base64 でエンコードされたスターターキットを ZIP ファイルとしてcreate-server結果に保存します。

6. create-server コマンドの結果からスターターキットを抽出していない場合、必要に応じて、新しいスターターキットを OpsWorks for Puppet Enterprise コンソールのサーバーのプロパティページからダウンロードできます。
7. カスタムドメインを使用していない場合は、次のステップに進みます。サーバーでカスタムドメインを使用している場合は、エンタープライズの DNS 管理ツールで CNAME エントリを作成し、ステップ 4 でコピーした OpsWorks for Puppet Enterprise エンドポイントにカスタムドメインをポイントします。このステップを完了するまで、カスタムドメインを使用するサーバーにアクセスしたりサインインしたりすることはできません。
8. サーバーの作成プロセスが完了したら、「スターターキットを使用して Puppet マスターを設定する」に進みます。

以下の資料も参照してください。

- を使用して Puppet Enterprise Master を作成する AWS CLI
- OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーのバックアップと復元
- CM API リファレンス OpsWorks の CreateServer
- create-server「 コマンドリファレンス」の「AWS CLI 」を参照してください。

AWS OpsWorks for Puppet Enterprise リソースでのタグの使用

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks for Puppet Enterprise サービスは 2024 年 3 月 31 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

タグとは、AWS リソースを識別および整理するためのメタデータとして使用される単語やフレーズのことです。OpsWorks for Puppet Enterprise では、リソースに最大 50 個のユーザー適用タグを保持することができます。各タグはキーと 1 つのオプションの値で構成されます。OpsWorks for Puppet Enterprise では以下のリソースにタグを適用できます。

- OpsWorks for Puppet Enterprise サーバー
- OpsWorks for Puppet Enterprise サーバー用のバックアップ

AWS リソースのタグは、コストの追跡、リソースへのアクセスの制御、タスクを自動化するためのリソースのグループ化、目的またはライフサイクルステージ別のリソースの整理に役立ちます。タグのメリットの詳細については、AWS Billing and Cost Management ユーザーガイドのAWS タグ付け戦略 AWS Answers とコスト配分タグの使用 を参照してください。

タグを使用して OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーまたはバックアップへのアクセスを制御するには、 AWS Identity and Access Management (IAM) でポリシーステートメントを作成または編集します。詳細については、AWS Identity and Access Management ユーザーガイド の「Controlling Access to AWS Resources Using Resource Tags」(リソースタグを使用した リソースへのアクセスの制御) を参照してください。

OpsWorks for Puppet Enterprise マスターにタグを適用すると、タグはマスターのバックアップ、バックアップを保存する Amazon S3 バケット、マスターの Amazon EC2 インスタンス、保存先のマスターのシークレット AWS Secrets Manager、およびマスターで使用される Elastic IP アドレスにも適用されます。タグは、 が Puppet マスターの作成 OpsWorks に使用する CloudFormation スタックには伝達されません。

トピック

- でのタグの仕組み AWS OpsWorks for Puppet Enterprise
- OpsWorks for Puppet Enterprise (コンソール)でのタグの追加と管理
- OpsWorks for Puppet Enterprise (CLI) でのタグの追加および管理
- 以下の資料も参照してください。

でのタグの仕組み AWS OpsWorks for Puppet Enterprise

このリリースでは、OpsWorks CM API または AWS マネジメントコンソールを使用してタグを追加および管理できます。 OpsWorks また、CM は、EC2 インスタンス、Secrets Manager のシークレット、Elastic IP アドレス、セキュリティグループ、S3 バケット、バックアップなど、サーバーに関連付けられた AWS リソースにサーバーに追加するタグを追加しようとします。

以下の表では、OpsWorks for Puppet Enterprise でタグを追加および管理する方法の概要を示しています。

Action	使用するもの
新しい OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーまたは手動で作成しているバックアップにタグを追加します。	• [Create Puppet Enterprise server (Puppet Enterprise サーバーを作成)] を選択し、[Configure advanced settings (詳細設定の設定)] ページでタグを追加します。 • 既存のサーバーの [Create backup (バックアップの作成)] ページで [Backups (バックアップ)] を選択し、[Create a backup of your Puppet Enterprise server (Puppet Enterprise サーバーのバックアップの作成)] ページでタグを追加します。 • `CreateServer` または `CreateBackup` コマンドに `Tags` パラメータを追加します。

Action	使用するもの
リソースのタグを表示します。	• サーバーの詳細ページで、ナビゲーションペインで [Tags (タグ)] を選択します。 • サーバーの [Backups (バックアップ)] ページで、バックアップを選択し、[Edit backup (バックアップの編集)] を選択します。 • ListTagsForResource コマンドを実行します。
バックアップが手動で作成されたか自動的に作成されたかにかかわらず、既存の OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーまたはバックアップにタグを追加します。	• サーバーの詳細ページで、ナビゲーションペインで [Tags (タグ)] を選択し、[Edit (編集)] を選択します。 • サーバーの [Backups (バックアップ)] ページで、バックアップを選択し、[Edit backup (バックアップの編集)] を選択します。 • TagResource コマンドを実行します。
リソースからタグを削除する	• サーバーの詳細ページで、ナビゲーションペインで [Tags (タグ)] を選択し、[Edit (編集)] を選択します。削除するタグの横にある [X] を選択します。 • サーバーの [Backups (バックアップ)] ページで、バックアップを選択し、[Edit backup (バックアップの編集)] を選択します。削除するタグの横にある [X] を選択します。 • UntagResource コマンドを実行します。

`DescribeServers` および `DescribeBackups` のレスポンスにタグ情報は含まれません。タグを表示するには、`ListTagsForResource` API を使用します。

OpsWorks for Puppet Enterprise (コンソール)でのタグの追加と管理

このセクションの手順は AWS マネジメントコンソールで実行されます。

タグを追加する場合、タグのキーを空にすることはできません。キーは最大 127 文字で、Unicode 文字、数字、区切り文字、または特殊文字 (+ - = . _ : / @) のみを含めることができます。タグの値はオプションです。キーはあるが値はないタグであれば、追加できます。値は最大 255 文字とし、Unicode 文字、数字、区切り文字、または特殊文字 (+ - = . _ : / @) のみを含めることができます。

トピック

- 新しい OpsWorks for Puppet Enterprise サーバー (コンソール) へのタグの追加
- 新しいバックアップにタグを追加する (コンソール)
- 既存のサーバーにタグを追加または表示する (コンソール)
- 既存のバックアップにタグを追加または表示する (コンソール)
- サーバからタグを削除する (コンソール)
- バックアップからタグを削除する (コンソール)

新しい OpsWorks for Puppet Enterprise サーバー (コンソール) へのタグの追加

1. OpsWorks for Puppet Enterprise マスターを作成するための [prerequisites] (前提条件) がすべて完了していることを確認してください。
2. を使用して Puppet Enterprise Master を作成する AWS マネジメントコンソール の手順 1 ~ 8 に従います
3. 自動バックアップ設定を指定した後、[Configure advanced settings] (詳細設定の設定) ページの [Tags] (タグ) の領域にタグを追加します。最大 50 個のタグを追加できます。タグを追加したら、[次へ] を選択します。
4. を使用して Puppet Enterprise Master を作成する AWS マネジメントコンソール のステップ 11 に進み、新しいサーバーに対して選択した設定を確認します。

新しいバックアップにタグを追加する (コンソール)

1. OpsWorks for Puppet Enterprise のホームページで、既存の Puppet マスターを選択します。
2. サーバーの詳細ページで、ナビゲーションペインで [Backups (バックアップ)] を選択します。
3. [Backups (バックアップ)] ページで、[Create backup (バックアップの作成)] を選択します。
4. タグを追加。タグの追加が完了したら、[Create (作成)] を選択します。

既存のサーバーにタグを追加または表示する (コンソール)

1. OpsWorks for Puppet Enterprise ホームページで、既存の Puppet マスターを選択し、詳細ページを開きます。
2. ナビゲーションペインで [Tags (タグ)] を選択するか、詳細ページの下部にある [View all tags (すべてのタグを表示)] を選択します。
3. [Tags (タグ)] ページで、[Edit (編集)] を選択します。
4. サーバー上のタグを追加または編集します。完了したら、[保存] を選択します。

> **Note**
>
> Puppet マスターのタグを変更すると、EC2 インスタンス、Elastic IP アドレス、セキュリティグループ、S3 バケット、バックアップなど、サーバーに関連付けられたリソースのタグも変更されることに注意してください。

既存のバックアップにタグを追加または表示する (コンソール)

1. OpsWorks for Puppet Enterprise ホームページで、既存の Puppet マスターを選択し、詳細ページを開きます。
2. ナビゲーションペインで [Backups (バックアップ)] を選択するか、詳細ページの [Recent backups (最近のバックアップ)] 領域で [View all backups (すべてのバックアップを表示)] を選択します。
3. [Backups (バックアップ)] ページで、管理するバックアップを選択し、[Edit backup (バックアップの編集)] を選択します。
4. バックアップにタグを追加または編集します。完了したら、[Update (更新)] を選択します。

サーバからタグを削除する (コンソール)

1. OpsWorks for Puppet Enterprise ホームページで、既存の Puppet マスターを選択し、詳細ページを開きます。
2. ナビゲーションペインで [Tags (タグ)] を選択するか、詳細ページの下部にある [View all tags (すべてのタグを表示)] を選択します。
3. [Tags (タグ)] ページで、[Edit (編集)] を選択します。
4. タグを削除するには、タグの横にある [X] を選択します。完了したら、[保存] を選択します。

> **Note**
>
> Puppet マスターのタグを変更すると、EC2 インスタンス、Elastic IP アドレス、セキュリティグループ、S3 バケット、バックアップなど、サーバーに関連付けられたリソースのタグも変更されることに注意してください。

バックアップからタグを削除する (コンソール)

1. OpsWorks for Puppet Enterprise ホームページで、既存の Puppet マスターを選択し、詳細ページを開きます。
2. ナビゲーションペインで [Backups (バックアップ)] を選択するか、詳細ページの [Recent backups (最近のバックアップ)] 領域で [View all backups (すべてのバックアップを表示)] を選択します。
3. [Backups (バックアップ)] ページで、管理するバックアップを選択し、[Edit backup (バックアップの編集)] を選択します。
4. タグを削除するには、タグの横にある [X] を選択します。完了したら、[Update (更新)] を選択します。

OpsWorks for Puppet Enterprise (CLI) でのタグの追加および管理

このセクションの手順は AWS CLIで実行されます。タグの使用 AWS CLI を開始する前に、 の最新リリースを実行していることを確認してください。のインストールまたは更新の詳細については AWS CLI、 AWS Command Line Interface ユーザーガイドの「 AWS CLIのインストール」を参照してください。

タグを追加する場合、タグのキーを空にすることはできません。キーは最大 127 文字で、Unicode 文字、数字、区切り文字、または特殊文字 (+ - = . _ : / @) のみを含めることができます。タグの値はオプションです。キーはあるが値はないタグであれば、追加できます。値は最大 255 文字とし、Unicode 文字、数字、区切り文字、または特殊文字 (+ - = . _ : / @) のみを含めることができます。

トピック

- 新しい OpsWorks for Puppet Enterprise サーバー (CLI) へのタグを追加します
- 新しいバックアップにタグを追加する (CLI)

- 既存のサーバーまたはバックアップにタグを追加する (CLI)
- リソースタグを一覧表示する (CLI)
- リソースからタグを削除する (CLI)

新しい OpsWorks for Puppet Enterprise サーバー (CLI) へのタグを追加します

OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーを作成するときに、 を使用してタグ AWS CLI を追加できます。この手順では、サーバーの作成方法について詳しく説明していません。を使用して OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーを作成する方法の詳細については AWS CLI、このガイドを使用して Puppet Enterprise Master を作成する AWS CLIの「」を参照してください。サーバーには最大 50 個のタグを追加できます。

1. OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーを作成するためのすべての「prerequisites」(前提条件) を必ず完了してください。
2. 「を使用して Puppet Enterprise Master を作成する AWS CLI」のステップ 1 ～ 4 を完了します。
3. ステップ 5 では、`create-server` コマンドを実行するときに、以下の例に示すように、コマンドに `--tags` パラメータを追加します。

   ```
   aws opsworks-cm create-server ... --tags Key=Key1,Value=Value1
    Key=Key2,Value=Value2
   ```

   以下の例では、`create-server` コマンドのタグ部分のみを示しています。

   ```
   aws opsworks-cm create-server ... --tags Key=Stage,Value=Production
    Key=Department,Value=Marketing
   ```

4. 「を使用して Puppet Enterprise Master を作成する AWS CLI」の残りのステップを行います。タグが新しいサーバーに追加されたことを確認するには、このトピックの「リソースタグを一覧表示する (CLI) 」の手順に従います。

新しいバックアップにタグを追加する (CLI)

OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーの新しい手動バックアップを作成するときに、 を使用してタグ AWS CLI を追加できます。この手順では、手動バックアップの作成方法について詳しく説明していません。手動バックアップの作成方法の詳細については、の「 で手動バックアップを実行するには AWS CLI」を参照してくださいOpsWorks for Puppet Enterprise サーバーをバックアップし

ます。バックアップには最大 50 個のタグを追加できます。サーバにタグがある場合、新しいバックアップにはサーバのタグが自動的にタグ付けされます。

デフォルトでは、新しい OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーを作成する場合、自動バックアップが有効になります。このトピックの「既存のサーバーまたはバックアップにタグを追加する (CLI)」で説明されている `tag-resource` コマンドを実行して、自動バックアップにタグを追加できます。

- 手動バックアップの作成中にタグをバックアップに追加するには、以下のコマンドを実行します。コマンドのタグ部分のみを示しています。フル `create-backup` コマンドの例に関しては、OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーをバックアップします の「 AWS CLIで手動バックアップを実行するには」を参照してください。

  ```
  aws opsworks-cm create-backup ... --tags Key=Key1,Value=Value1
   Key=Key2,Value=Value2
  ```

  以下の例では、`create-backup` コマンドのタグ部分のみを示しています。

  ```
  aws opsworks-cm create-backup ... --tags Key=Stage,Value=Production
   Key=Department,Value=Marketing
  ```

既存のサーバーまたはバックアップにタグを追加する (CLI)

`tag-resource` コマンドを実行して、タグを既存の OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーまたはバックアップに追加できます (バックアップが手動で作成されたか自動的に作成されたかに関係なく)。ターゲットリソースの Amazon リソースナンバー (ARN) を指定して、タグを追加します。

1. タグを適用するリソースの ARN を取得するには:

   - サーバーの場合は、`describe-servers --server-name` *`server_name`* を実行します。コマンドの結果には、サーバーの ARN が表示されます。
   - バックアップの場合は、`describe-backups --backup-id` *`backup_ID`* を実行します。コマンドの結果には、バックアップの ARN が表示されます。 `describe-backups --server-name` *`server_name`* を実行して、特定の OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーのすべてのバックアップに関する情報を表示することもできます。

以下の例では、ServerArn コマンドの結果の describe-servers --server-name opsworks-cm-test のみを示しています。tag-resource コマンドに ServerArn 値を指定して、サーバーにタグを追加します。

```
{
    "Servers": [
        {
            ...
            "ServerArn": "arn:aws:opsworks-cm:us-west-2:123456789012:server/
opsworks-cm-test/EXAMPLEd-66b0-4196-8274-d1a2bEXAMPLE"
        }
    ]
}
```

2. ステップ 1 で返された ARN を使用して、tag-resourceコマンドを実行します。

```
aws opsworks-cm tag-resource --resource-arn "server_or_backup_ARN" --tags
 Key=Key1,Value=Value1 Key=Key2,Value=Value2
```

以下に例を示します。

```
aws opsworks-cm tag-resource --resource-arn "arn:aws:opsworks-cm:us-
west-2:123456789012:server/opsworks-cm-test/EXAMPLEd-66b0-4196-8274-d1a2bEXAMPLE"
 --tags Key=Stage,Value=Production Key=Department,Value=Marketing
```

3. タグが正常に追加されたことを確認するには、次の手順「リソースタグを一覧表示する (CLI)」に進みます。

リソースタグを一覧表示する (CLI)

list-tags-for-resource コマンドを実行して、OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーまたはバックアップにアタッチされているタグを表示できます。ターゲットリソースの ARN を指定して、そのタグを表示します。

1. タグを一覧表示するリソースの ARN を取得するには:

   - サーバーの場合は、describe-servers --server-name *server_name* を実行します。コマンドの結果には、サーバーの ARN が表示されます。

- バックアップの場合は、`describe-backups --backup-id` *`backup_ID`* を実行します。コマンドの結果には、バックアップの ARN が表示されます。`describe-backups --server-name` *`server_name`* を実行して、特定の OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーのすべてのバックアップに関する情報を表示することもできます。

2. ステップ 1 で返された ARN を使用して、`list-tags-for-resource` コマンドを実行します。

```
aws opsworks-cm list-tags-for-resource --resource-arn "server_or_backup_ARN"
```

以下に例を示します。

```
aws opsworks-cm tag-resource --resource-arn "arn:aws:opsworks-cm:us-
west-2:123456789012:server/opsworks-cm-test/EXAMPLEd-66b0-4196-8274-d1a2bEXAMPLE"
```

リソースにタグがある場合、コマンドは以下のような結果を返します。

```
{
    "Tags": [
        {
            "Key": "Stage",
            "Value": "Production"
        },
        {
            "Key": "Department",
            "Value": "Marketing"
        }
    ]
}
```

リソースからタグを削除する (CLI)

`untag-resource` コマンドを実行して、OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーまたはバックアップからタグを削除できます。リソースが削除されると、リソースのタグも削除されます。ターゲットリソースの Amazon リソースナンバー (ARN) を指定して、タグを削除します。

1. タグを削除するリソースの ARN を取得するには:

- サーバーの場合は、`describe-servers --server-name server_name` を実行します。コマンドの結果には、サーバーの ARN が表示されます。
- バックアップの場合は、`describe-backups --backup-id backup_ID` を実行します。コマンドの結果には、バックアップの ARN が表示されます。 `describe-backups --server-name server_name` を実行して、特定の OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーのすべてのバックアップに関する情報を表示することもできます。

2. ステップ 1 で返された ARN を使用して、`untag-resource` コマンドを実行します。削除するタグのみを指定します。

```
aws opsworks-cm untag-resource --resource-arn "server_or_backup_ARN" --tags
 Key=Key1,Value=Value1 Key=Key2,Value=Value2
```

この例では、`untag-resource` コマンドは、キーが `Stage` で値が `Production` のタグのみを削除します。

```
aws opsworks-cm untag-resource --resource-arn "arn:aws:opsworks-cm:us-
west-2:123456789012:server/opsworks-cm-test/EXAMPLEd-66b0-4196-8274-d1a2bEXAMPLE"
 --tags Key=Stage,Value=Production
```

3. タグが正常に削除されたことを確認するには、このトピックの「リソースタグを一覧表示する (CLI) 」の手順に従います。

以下の資料も参照してください。

- を使用して Puppet Enterprise Master を作成する AWS CLI
- OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーをバックアップします
- AWS タグ付け戦略
- AWS Identity and Access Management ユーザーガイドの AWS リソースタグを使用したリソースへのアクセスの制御
- 「AWS Billing and Cost Management ユーザーガイド」の「コスト配分タグの使用」
- OpsWorks CM API リファレンス の CreateBackup
- OpsWorks CM API リファレンス の CreateServer
- OpsWorks CM API リファレンス の TagResource
- OpsWorks CM API リファレンス の ListTagsForResource

- OpsWorks 「CM API Reference」 (CM API リファレンス) の UntagResource (リソースのタグを外す)

OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーのバックアップと復元

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks for Puppet Enterprise サービスは 2024 年 3 月 31 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このセクションでは、OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーをバックアップおよび復元する方法を説明します。

トピック

- OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーをバックアップします
- OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーをバックアップから復元します

OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーをバックアップします

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks for Puppet Enterprise サービスは 2024 年 3 月 31 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーの毎日または毎週繰り返されるバックアップを定義し、ユーザーに代わってバックアップを Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) にサービスで保存できます。または、必要に応じて手動でバックアップを実行することもできます。

バックアップが Amazon S3 に保存されるため、追加料金を負担します。30 世代を上限としてバックアップ保持期間を定義できます。 AWS サポートチャネルを使用して、サービスリクエストを送信して、その制限を変更することができます。Amazon S3 バケットに配信されるコンテンツには、カスタマーコンテンツが含まれている場合があります。機密データの削除の詳細については、「S3 バケットを空にする方法」または「S3 バケットを削除する方法」を参照してください。

OpsWorks for Puppet Enterprise マスターのバックアップにタグを追加することができます。OpsWorks for Puppet Enterprise マスターにタグを追加した場合、Puppet マスターの自動バックアップはそれらのタグを継承します。バックアップでタグを追加および管理する方法の詳細については、このガイドの「AWS OpsWorks for Puppet Enterprise リソースでのタグの使用」を参照してください。

トピック

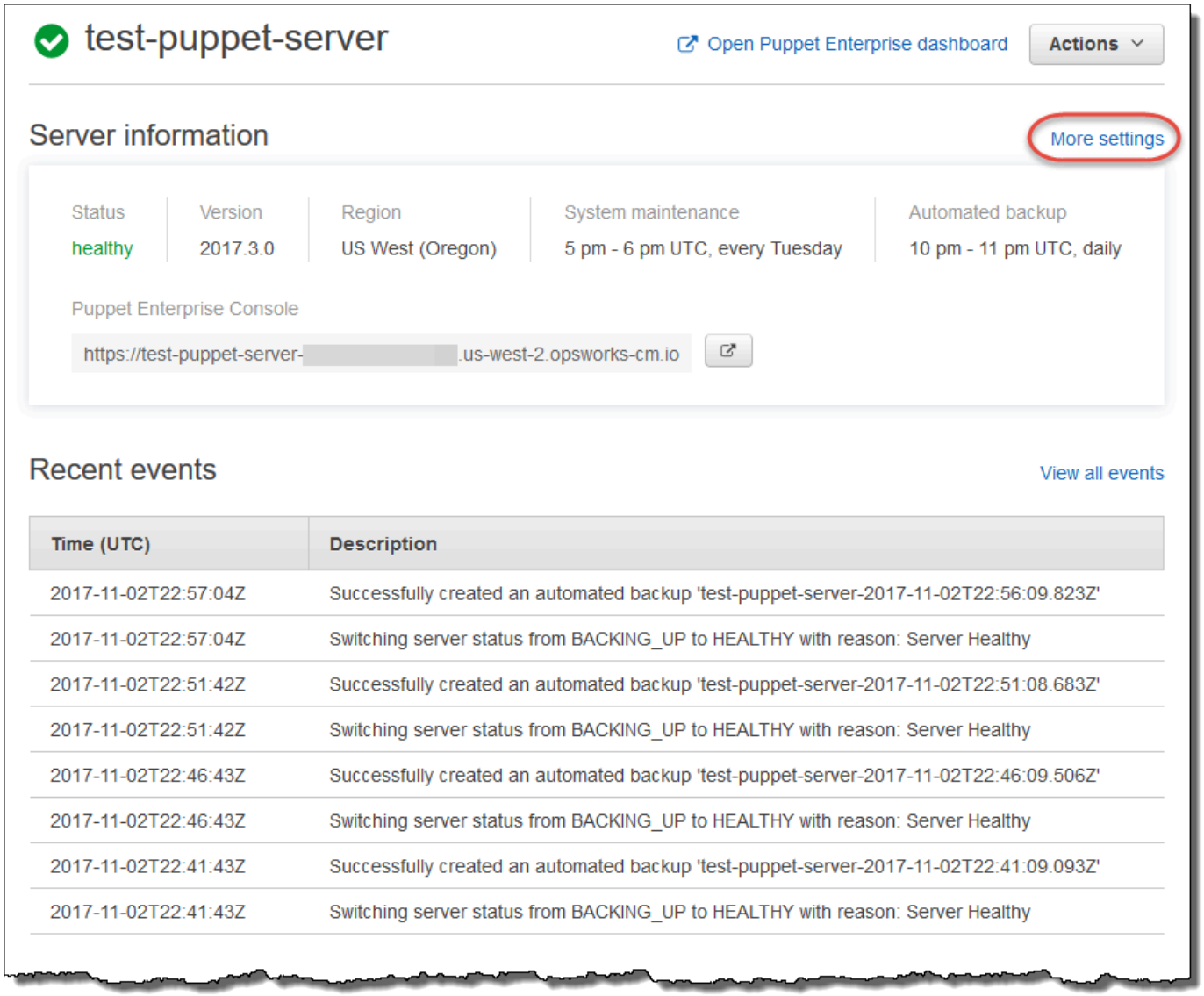
- 自動バックアップ
- 手動バックアップ
- バックアップの削除

自動バックアップ

OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーを設定する際には、自動または手動バックアップを選択します。OpsWorks for Puppet Enterprise による自動バックアップは、セットアップウィザードの [Configure advanced settings] (詳細設定の構成) ページの [Automated backup] (自動バックアップ) セクションで選択した日のその時間中に開始されます。サーバーがオンラインになったら、サーバーのプロパティページで次のステップを実行してバックアップ設定を変更できます。

自動バックアップ設定を変更するには

1. サーバーのプロパティページで、[More settings] を選択します。



2. 自動バックアップを無効にするには、[Enable automated backups] (自動バックアップの有効化) オプションの [No] (いいえ) を選択します。変更を保存します。次のステップに進む必要はありません。
3. [Automated Backup] セクションで、頻度、開始時刻、または保持する世代数を変更します。変更内容を保存します。

手動バックアップ

手動バックアップは、 でいつでも開始することも AWS マネジメントコンソール、create-backup コマンドを実行して AWS CLI 開始することもできます。手動バックアップは、保存される自動バックアップの最大 30 世代には含まれません。最大 10 件の手動バックアップが保存され、Amazon S3 から手動で削除する必要があります。

で手動バックアップを実行するには AWS マネジメントコンソール

1. [Puppet Enterprise servers] ページで、バックアップするサーバーを選択します。
2. サーバーのプロパティページの左のナビゲーションペインで、[Backups] を選択します。
3. [Create backup] (バックアップの作成) を選択します。
4. ページでバックアップの [Status] 欄に緑色のチェックマークが表示されると、手動バックアップは完了です。

で手動バックアップを実行するには AWS CLI

OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーの新しい手動バックアップを作成する場合、タグを追加できます。手動バックアップを作成するときにタグを追加する方法の詳細については、「新しいバックアップにタグを追加する (CLI)」を参照してください

- 手動バックアップを開始するには、次の AWS CLI コマンドを実行します。

```
aws opsworks-cm --region region name create-backup --server-name "Puppet server
 name" --description "optional descriptive string"
```

バックアップの削除

バックアップを削除すると、バックアップが保存されている S3 バケットから完全に削除されます。

でバックアップを削除するには AWS マネジメントコンソール

1. [Puppet Enterprise servers] ページで、バックアップするサーバーを選択します。
2. サーバーのプロパティページの左のナビゲーションペインで、[Backups] を選択します。
3. 削除するバックアップを選択してから、[Delete backup] を選択します。一度に 1 つのバックアップのみを選択できます。
4. 削除の確認を指示されたら、[Delete the backup, which is stored in an S3 bucket] チェックボックスにチェックを入れ、[Yes, Delete] を選択します。

でバックアップを削除するには AWS CLI

- バックアップを削除するには、次の AWS CLI コマンドを実行し、 の値を、削除するバックアップの `--backup-id` ID に置き換えます。バックアップ ID

は、*ServerName-yyyyMMddHHmmssSSS* という形式になっています。例えば、**puppet-server-20171218132604388**。

```
aws opsworks-cm --region region name delete-backup --backup-id ServerName-yyyyMMddHHmmssSSS
```

OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーをバックアップから復元します

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks for Puppet Enterprise サービスは 2024 年 3 月 31 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーをどの時点に復元するかは、利用可能なバックアップをブラウジングした後で、簡単に選択できます。サーバーのバックアップには、設定管理ソフトウェアの永続的なデータが含まれています。たとえば、モジュール、クラス、ノード関連付け、データベース情報 (レポートやファクトなど) などです。サーバーのインプレース復元を実行する (つまり、既存の OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーを新しい EC2 インスタンスに復元する) と、バックアップ発生時に登録されたノードが再登録されて、サーバーの復元に使用され、復元が成功し、復元された OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーの状態が `Healthy` になると、トラフィックが新しいインスタンスに切り替わります。新しく作成された OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーに復元することで、ノード接続は維持されません。サーバーを復元すると、Puppet ソフトウェアのバージョンが更新されません。選択したバックアップにあるものと同じ Puppet バージョンと設定管理データが適用されます。

通常、サーバの復元には新しいサーバを作成するよりも時間がかかり、この時間は選択するバックアップのサイズによります。復元が完了すると、古い EC2 インスタンスは `Running` または `Stopped` 状態のままになりますが、一時的にのみです。最終的には終了します。

このリリースでは、 AWS CLI を使用して OpsWorks for Puppet Enterprise で Puppet マスターを復元できます。

> **Note**
>
> restore-server コマンドは、現在のインスタンスタイプを変更する場合や、紛失または漏洩が発生した SSH キーの復元または設定を行う場合にも実行できます。

サーバーをバックアップから復元するには

1. で AWS CLI、次のコマンドを実行して、使用可能なバックアップとその IDs のリストを返します。使用するバックアップの ID を書き留めておきます。バックアップ ID は、*myServerName-yyyyMMddHHmmssSSS* という形式になっています。

   ```
   aws opsworks-cm --region region name describe-backups
   ```

2. 以下のコマンドを実行してください。

   ```
   aws opsworks-cm --region region name restore-server --backup-id "myServerName-
   yyyyMMddHHmmssSSS" --instance-type "Type of instance" --key-pair "name of your EC2
    key pair" --server-name "name of Puppet master"
   ```

   以下に例を示します。

   ```
   aws opsworks-cm --region us-west-2 restore-server --backup-id
    "MyPuppetServer-20161120122143125" --server-name "MyPuppetServer"
   ```

3. 復元が完了するまで待ちます。

OpsWorks for Puppet Enterprise のシステムメンテナンス

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks for Puppet Enterprise サービスは 2024 年 3 月 31 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

必須のシステムメンテナンスにより、セキュリティ更新プログラムを含む Puppet Server AWSの最新バージョンが、OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーで常に実行されていることが保証されます。システムメンテナンスは週に 1 回以上実行する必要があります。を使用すると AWS CLI、必要に応じて毎日の自動メンテナンスを設定できます。を使用して AWS CLI 、スケジュールされたシステムメンテナンスに加えて、オンデマンドでシステムメンテナンスを実行することもできます。

Puppet ソフトウェアの新しいバージョンが利用可能になると、システムメンテナンスは AWS テストが完了次第、サーバーにある Puppet サーバーのバージョンを自動更新するように設計されています。AWS では、Puppet のアップグレードが本番環境で問題なく使用でき、既存のお客様の環境を中断させないかを検証するために、広範なテストを実行します。そのため、Puppet ソフトウェアがリリースと、既存の OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーへのアプリケーションの可用性との間に時間差が生じる場合があります。Puppet ソフトウェアの使用可能なバージョンをオンデマンドで更新するには、このトピックの「オンデマンドでのシステムメンテナンスの開始」を参照してください。

システムメンテナンスでは、メンテナンスプロセスの一環として実行されるバックアップから新しいインスタンスを起動します。これにより、定期的なメンテナンスを受ける Amazon EC2 インスタンスの劣化や障害によるリスクを軽減することができます。

> **Important**
>
> システムメンテナンスでは、OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーに追加したすべてのファイルやカスタム構成が削除されます。失われた設定やファイルを回復する詳しい方法については、このトピックの「メンテナンス後のカスタム設定およびカスタムファイルの復旧」を参照してください。

トピック

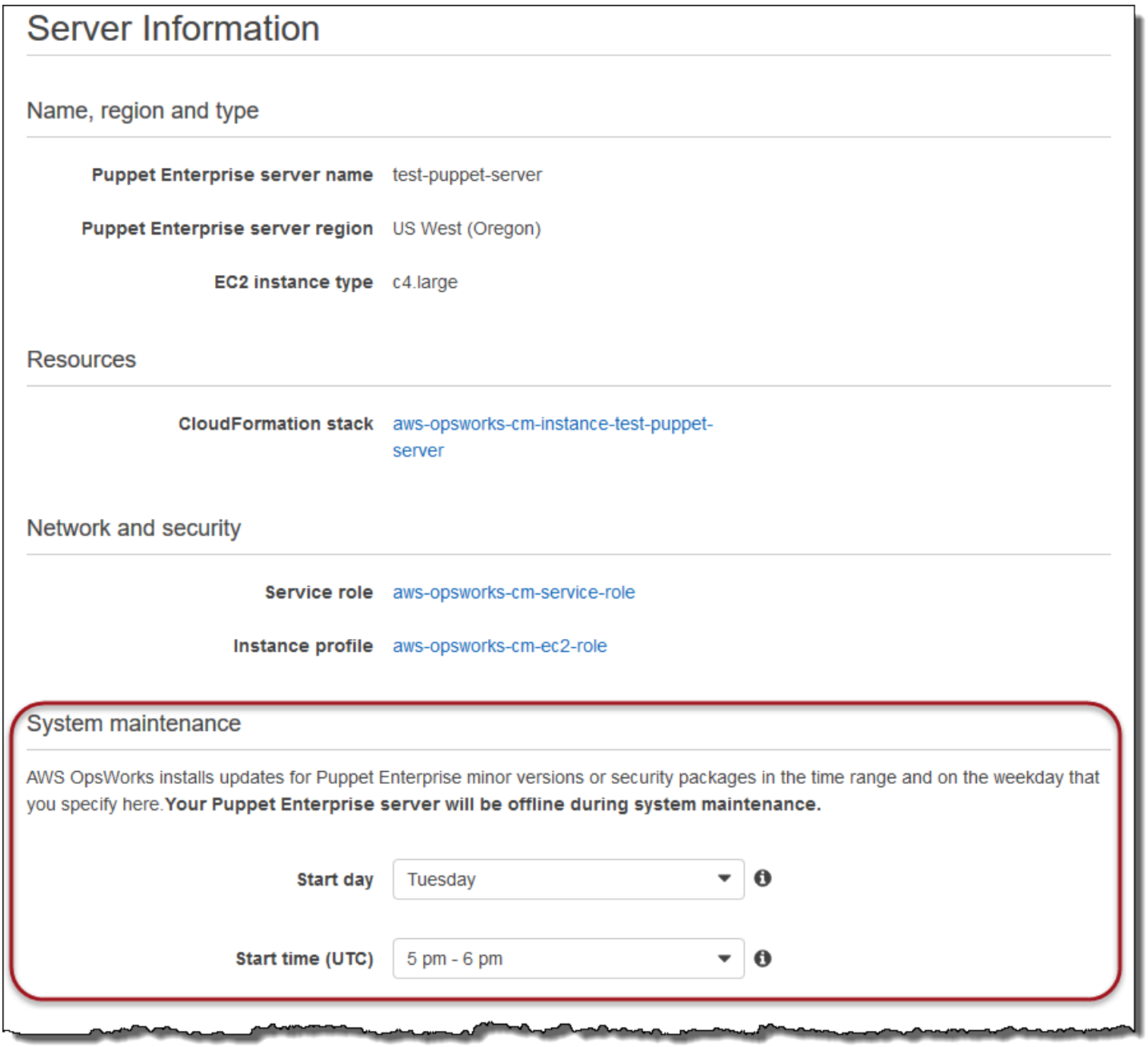
- システムメンテナンスの設定
- オンデマンドでのシステムメンテナンスの開始
- メンテナンス後のカスタム設定およびカスタムファイルの復旧

システムメンテナンスの設定

新しい OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーの作成時に、システムメンテナンスを開始する曜日と時刻を [Coordinated Universal Time] (協定世界時) (UTC) で設定できます。メンテナンスは、指定した時間中に開始します。システムメンテナンス中はサーバーがオフラインになることを想定する

必要があるため、通常の営業時間内でサーバー需要が低い時刻を選択します。メンテナンスの進行中は、サーバーのステータスが UNDER_MAINTENANCE になります。

既存の OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーのシステムメンテナンス設定を変更することもできます。その場合は、次のスクリーンショットに示すように、サーバーの [Settings] (設定) ページで [System maintenance] (システムメンテナンス) セクションの設定を変更します。



[System maintenance] セクションで、システムメンテナンスを開始する日付と時刻を設定します。

を使用したシステムメンテナンスの設定 AWS CLI

システムメンテナンスの自動開始時刻を AWS CLIで設定することもできます。 AWS CLI では、3 文字の平日プレフィックスを省略して、必要に応じて毎日の自動メンテナンスを設定できます。

create-server コマンドで、サーバーインスタンスを作成する要件 (インスタンスタイプ、インスタンスプロファイル ARN、サービスロール ARN など) を指定した後で、--preferred-maintenance-window パラメータをコマンドに追加します。次の create-server の例では、--preferred-maintenance-window を Mon:08:00 に設定しています。これで、毎月曜の午前 8 時 0 分 (UTC) にメンテナンスが開始されます 。

```
aws opsworks-cm create-server --engine "Puppet" --engine-model "Monolithic"
 --engine-version "2017" --server-name "puppet-06" --instance-profile-arn
 "arn:aws:iam::1119001987000:instance-profile/aws-opsworks-cm-ec2-role"
 --instance-type "c4.large" --key-pair "amazon-test" --service-role-arn
 "arn:aws:iam::044726508045:role/aws-opsworks-cm-service-role" --preferred-maintenance-
window "Mon:08:00"
```

update-server コマンドでは、必要に応じて、--preferred-maintenance-window の値のみを更新できます。次の例では、メンテナンス時刻を金曜の午後 6 時 15 分 (UTC) に設定しています 。

```
aws opsworks-cm update-server --server-name "puppet-06" --preferred-maintenance-window
 "Fri:18:15"
```

メンテナンス時間の開始時刻を毎日午後 6 時 15 分 (UTC) に変更するには、次の例に示すように、曜日を表す 3 文字のプレフィックスを省略します。

```
aws opsworks-cm update-server --server-name "puppet-06" --preferred-maintenance-window
 "18:15"
```

を使用してシステムメンテナンスウィンドウを設定する方法の詳細については AWS CLI、「create-server」と「update-server」を参照してください。

オンデマンドでのシステムメンテナンスの開始

システムメンテナンスをオンデマンドで開始するには、毎週または毎日の自動メンテナンスの設定外で、次の AWS CLI コマンドを実行します。 AWS マネジメントコンソールでオンデマンドメンテナンスを開始することはできません。

```
aws opsworks-cm start-maintenance --server-name server_name
```

このコマンドの詳細については、「start-maintenance」を参照してください。

メンテナンス後のカスタム設定およびカスタムファイルの復旧

システムメンテナンスでは、OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーに追加したカスタムファイルや構成を削除または変更することができます。

メンテナンスの実行後、RunCommand または SSH を使用して追加したファイルや設定が Puppet マスターに見つからない場合は、Amazon Machine Image (AMI) を使用して、新しい Amazon EC2 インスタンスを起動できます。サーバーのメンテナンス前の設定に基づいて構築された AMI を利用できます。

新しいインスタンスは、メンテナンス前の Puppet マスターと同じ状態であり、見つからないファイルや設定が含まれています。

> **Important**
>
> 新しいインスタンスを使用してサーバーを復元することはできません。インスタンスを Puppet マスターとして実行することはできません。インスタンスは、ファイルや設定の復旧にのみ使用できます。

AMI から EC2 インスタンスを起動するには、Amazon EC2 コンソールで [Launch] (起動) ウィザードを開き、[My AMIs] (マイAMI) を選択して、サーバー名と同じ名前の AMI を選択します。他の任意のインスタンスを起動する手順と同様に、Amazon EC2 ウィザードの手順に従います。

OpsWorks for Puppet Enterprise でのノードを自動的に追加します

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks for Puppet Enterprise サービスは 2024 年 3 月 31 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このトピックでは、Amazon Elastic Compute Cloud (Amazon EC2) ノードを OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーに自動的に追加する方法について説明します。「Puppet マスターで管理するノードを追加する」では、`associate-node` コマンドを使用して一度に 1 つのノードを Puppet Enterprise サーバーに追加する方法について学びました。このトピックのコードは、ユーザーが介入しない方法を使用して複数のノードを自動的に追加する方法を示しています。ユーザーが介入しない (または自動での) 新しいノードの関連付けの推奨手段は、Amazon EC2 ユーザーデータを設定することです。デフォルトでは、OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーではすでに `puppet-agent` を Ubuntu、Amazon Linux、および RHEL ノードオペレーティングシステムで使用できます。

ノードの関連付けを解除する方法については、このガイドの「OpsWorks for Puppet サーバーからノードの関連付けを切り離します」および OpsWorks for Puppet Enterprise API ドキュメントの「`disassociate-node`」を参照してください。

ステップ 1: インスタンスプロファイルとして使用する IAM ロールを作成する

EC2 インスタンスプロファイルとして使用する AWS Identity and Access Management (IAM) ロールを作成し、次のポリシーを IAM ロールにアタッチします。このポリシーでは、ノード登録時に、`opsworks-cm` API を使用した EC2 インスタンスとの通信が許可されています。インスタンスプロファイルの詳細については、Amazon EC2 のドキュメントの「Using Instance Profiles」(インスタンスプロファイルの使用) を参照してください。IAM ロールを作成する方法については、Amazon EC2 のドキュメントの「Creating an IAM Role in the Console」(コンソールでの IAM ロールの作成) を参照してください。。

JSON

```
{
    "Version":"2012-10-17",
    "Statement": [
        {
            "Action": [
                "opsworks-cm:AssociateNode",
                "opsworks-cm:DescribeNodeAssociationStatus",
                "opsworks-cm:DescribeServers",
                "ec2:DescribeTags"
            ],
            "Resource": "*",
            "Effect": "Allow"
        }
```

```
    ]
}
```

ステップ 2: 自動関連付けスクリプトを使用してインスタンスを作成する

EC2 インスタンスを作成するには、スターターキットに含まれているユーザーデータスクリプトを EC2 インスタンスの手順の userdataセクション、Amazon EC2 Auto Scaling グループの起動設定、または CloudFormation テンプレートにコピーします。このスクリプトは、Ubuntu および Amazon Linux オペレーティングシステムを実行している EC2 インスタンスでのみサポートされています。ユーザーデータへのスクリプトの追加の詳細については、Amazon EC2 documentation ドキュメントの「Running Commands on Your Linux Instance at Launch」(Linux インスタンスでの起動時のコマンドの実行) を参照してください。新規ノードを作成する最も簡単な方法は、Amazon EC2 instance launch wizard (Amazon EC2 インスタンス起動ウィザード) を使用することです。このチュートリアルでは、「OpsWorks for Puppet Enterprise の使用を開始する」で説明された Apache ウェブサーバーのサンプルモジュールのセットアップを使用します。

1. スターターキットのユーザーデータスクリプトは、opsworks-cm API の associate-node コマンドを実行して、新しいノードを Puppet マスターに関連付けます。このリリースでは、最新バージョンの がまだ実行されていない場合に備えて、ノード AWS CLI にup-to-dateの もインストールされます。このスクリプトを便利な場所に userdata.sh として保存します。

   デフォルトでは、新しく登録されたノードの名前はインスタンス ID です。
2. EC2 ドキュメントのインスタンスの作成の手順に従い、ここで説明する変更を加えます。EC2 インスタンス起動ウィザードで、Amazon Linux AMI を選択します。
3. [Configure Instance Details] ページで、[myPuppetinstanceprofile] を選択します。これは、「ステップ 1: インスタンスプロファイルとして使用する IAM ロールを作成する」で IAM ロールとして作成したロールです。
4. [Advanced Details] 領域で、ステップ 1 で作成した userdata.sh スクリプトをアップロードします。
5. [Add Storage] ページで必要な変更はありません。[Add Tags] に進みます。

   EC2 インスタンスにタグを適用することで、userdata.sh の動作をカスタマイズできます。この例では、apache_webserver ロールをノードに適用します。これを行うには、値が **pp_role** である **apache_webserver** タグを追加します。

   ノードで pp_role の値をノードのエージェント証明書に永続的に保存されているデータ値に設定することで、ノードを信頼されたものとして分類できます。詳細については、Puppet プラッ

トフォームドキュメントの「Extension requests (permanent certificate data)」を参照してください。

6. [Configure Security Group] (セキュリティグループの設定) ページで、[Add Rule] (ルールの追加) を選択し、[HTTP] タイプを選択してこの例では Apache ウェブサーバーでポート番号 8080 を開きます。
7. Review and Launch (確認と作成) を選択してから、Launch (起動) を選択します。新しいノードが開始されると、「スターターキットの Apache の例をセットアップする」でセットアップしたサンプルモジュールの Apache 設定が適用されます。
8. 新しいノードのパブリック DNS にリンクされたウェブページを開くと、Puppet に管理された Apache ウェブサーバーがホストするウェブサイトが表示されるはずです。

OpsWorks for Puppet サーバーからノードの関連付けを切り離します

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks for Puppet Enterprise サービスは 2024 年 3 月 31 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このセクションでは、OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーによる管理から、マネージドノードのみ切り離す、または削除する方法について説明します。このオペレーションはコマンドラインまたは Puppet Enterprise コンソールで実行されます。OpsWorks for Puppet Enterpriseマネジメントコンソールでノードの関連付けを切り離すことはできません。現在、OpsWorks for Puppet Enterprise API では複数のノードのバッチ削除を実行することはできません。このセクションのコマンドでは、一度に 1 つのノードの関連付けを切り離します。

Puppet マスターを削除する場合は、ノードがサーバーへの再接続を試行することなく動作を続行できるように、サーバーとノードとの関連付けを切り離すことをお勧めします。これを行うには、 `disassociate-node` AWS CLI コマンドを実行します。PE からノードを完全に削除するには、ノードの関連付けを切り離し、その証明書を取り消す必要があります。これにより、ノードが Puppet マスターに対して継続的にチェックインを試行しなくなります。また、Puppet マスターを使用して管理が不要になった `puppet-agent` をノードからアンインストールする必要があります。

ノードの関連付けを切り離すには

1. で AWS CLI、次のコマンドを実行してノードの関連付けを解除します。*[Node_name]* (ノードネーム) は関連付けを切り離すノードの名前です。Amazon EC2 インスタンスでは、これはインスタンス ID です。*[Server_name]* (サーバーネーム) は、ノードの関連付けを切り離す Puppet マスターの名前です。両方のパラメーターとも必須です。デフォルトのリージョンにない Puppet マスターからノードの関連付けを切り離さない限り、`--region` パラメータは必須ではありません。

   ```
   aws opsworks-cm --region Region_name disassociate-node --node-name Node_name --
   server-name Server_name
   ```

   コマンドの例を次に示します。

   ```
   aws opsworks-cm --region us-west-2 disassociate-node --node-name
    i-0010zzz00d66zzz90 --server-name opsworkstest
   ```

2. 関連付けの解除が完了したことを示す応答メッセージが表示されるまで待ちます。

OpsWorks for Puppet サーバーを削除する方法については、「OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーを削除します」を参照してください。

以下の資料も参照してください。

- Puppet Enterprise ドキュメントの Remove nodes

OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーを削除します

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks for Puppet Enterprise サービスは 2024 年 3 月 31 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このセクションでは、OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーを削除する方法について説明します。サーバーを削除すると、サーバーに保存されていたイベント、ログ、およびモジュールも削除されます。サポートリソース (Amazon Elastic Compute Cloud インスタンス、Amazon Elastic Block Store ボリュームなど) やすべての自動バックアップも削除されます。

サーバーを削除してもノードは削除されませんが、これらは削除されたサーバーによって管理されなくなり、継続的に再接続が試行されます。このため、Puppet マスターを削除する場合は、管理されているノードの関連付けを事前に解除することをお勧めします。このリリースでは、 AWS CLI コマンドを実行してノードの関連付けを解除できます。

ステップ 1: 管理されているノードの関連付けを解除する

Puppet マスターを削除する場合は、ノードがサーバーへの再接続を試行することなく動作を続行できるように、サーバーとノードとの関連付けを解除します。これを行うには、 disassociate-node AWS CLI コマンドを実行します。

ノードの関連付けを解除するには

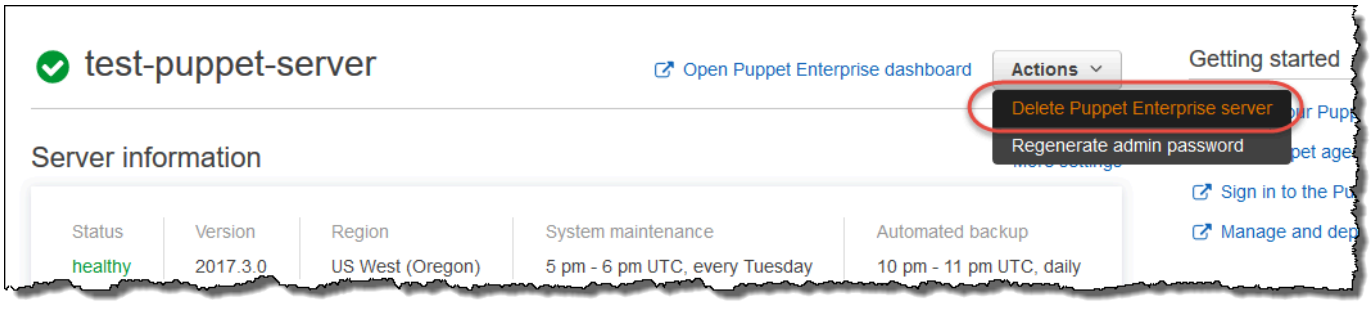
1. で AWS CLI、次のコマンドを実行してノードの関連付けを解除します。*Server_name* は、ノードが関連付けられている Puppet マスターの名前です。--node-name の値はインスタンス ID を指定できます。

```
aws opsworks-cm --region Region_name disassociate-node --node-name Node_name --
server-name Server_name
```

2. 関連付けの解除が完了したことを示す応答メッセージが表示されるまで待ちます。

ステップ 2: サーバーを削除する

1. ダッシュボードのサーバータイルで、[Actions] メニューを展開します。



2. [Delete Puppet Enterprise server] を選択します。

3. 削除の確認を指示されたら、関連ロールおよびリソースを削除する場合はチェックボックスにチェックを入れ、[Yes, Delete] を選択します。

以下の資料も参照してください。

- OpsWorks for Puppet サーバーからノードの関連付けを切り離します

OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーを Amazon Elastic Compute Cloud (Amazon EC2) に移行する方法

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks for Puppet Enterprise サービスは 2024 年 3 月 31 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

以下の手順では、既存の Puppet Enterprise サーバーを Amazon EC2 に移行する方法を説明します。これは、OpsWorks 以外の設定管理ニーズに対応するために Puppet Enterprise を引き続き使用したい場合です。

トピック

- ステップ 1: Puppet に連絡してライセンスを購入してください
- ステップ 2: OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーの詳細を取得してください
- ステップ 3: OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーのバックアップを作成してください
- ステップ 4: 新規のEC2 インスタンスを起動する
- ステップ 5: 新規 EC2 インスタンスに Puppet Enterprise をインストールしてください
- ステップ 6: 新しい EC2 インスタンスにバックアップを復元してください
- ステップ 7: Puppet ライセンスを設定してください
- ステップ 8: ノードを移行してください
- ステップ 9:OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーを削除します

ステップ 1: Puppet に連絡してライセンスを購入してください

サーバーを EC2 に移行しても、新しいインスタンスには Puppet ライセンスは付属していません。ライセンスキーを購入するには、Puppet ウェブサイトの指示に従ってください。

ステップ 2: OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーの詳細を取得してください

OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーの値を見つけて保存します。

1. にサインイン AWS マネジメントコンソール し、https://console.aws.amazon.com/s3/ で Amazon S3 コンソールを開きます。

   OpsWorks for Puppet Enterprise サーバー用の既存の Amazon S3 バケットの名前をコピーします。バケット名は `aws-opsworks-cm-server-name-random-string` という形式です。

2. aws opsworks-cm describe-serversコマンドを実行して、更新された設定を OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーにデプロイします。

   ```
   aws opsworks-cm describe-servers \
      --server-name server-name \
      --region region
   ```

   レスポンスから `InstanceType`、`KeyPair`、`SubnetIds`、`SecurityGroupIds`、`InstanceProfileArn`、`Endpoi` の値を保存します。

3. SSH を使用して、既存の OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーに接続します。EC2 コンソールでは SSH の代わりにセッションマネージャーを使用できます。

   以下のコマンドを実行してください。

   ```
   rpm -qa | grep opsworks-cm-puppet-enterprise | cut -d '-' -f 5
   ```

   レスポンスには Puppet エンタープライズバージョニング (例えば 2019.8.10) が表示されます。この値を保存してください。

次のステップでは、SSH または Systems Manager を使用します。

ステップ 3: OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーのバックアップを作成してください

1. 以下のコマンドを実行してローカルバックアップを作成します。

```
mkdir /tmp/puppet-backup/
sudo /opt/puppetlabs/bin/puppet-backup create --dir=/tmp/puppet-backup/
```

2. 次のコマンドを実行して、バックアップの名前を保存します。

```
ls /tmp/puppet-backup/
PUPPET_BACKUP=$(ls /tmp/puppet-backup/)
```

3. 次のコマンドを実行して、S3 バケットにパッケージをアップロードします。*S3- ####* を ステップ 2: OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーの詳細を取得してください のステップ 1 の値に置き換えます。

```
aws s3 cp /tmp/puppet-backup/PUPPET_BACKUP s3://S3_Bucket/tmp/puppet-backup/
```

   PUPPET_BACKUP と S3_BUCKET の値に保存してください。これらの値を新しい EC2 インスタンスにインポートします。

SSH または Systems Manager セッションを終了できます。

ステップ 4: 新規のEC2 インスタンスを起動する

OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーと同じ設定を使用しているhttps://console.aws.amazon.com/ec2/ の EC2 コンソールから新しい EC2 インスタンスを起動します。

パラメータ名	値
OS	Amazon Linux 2
インスタンスタイプ	ステップ 2: OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーの詳細を取得してください のステップ 2 からの InstanceType の値です。

パラメータ名	値
キーペア名	ステップ 2: OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーの詳細を取得してください のステップ 2 からの KeyPair の値です。
VPC	ステップ 2: OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーの詳細を取得してください のステップ 2 からの SubnetIds での VPC です。
サブネット	ステップ 2: OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーの詳細を取得してください のステップ 2 からの SubnetIds です。
既存のセキュリティグループを選択します -> 共通のセキュリティグループ	ステップ 2: OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーの詳細を取得してください のステップ 2 からの SecurityGroupIds です。
[Storage (ストレージ)]	少なくとも 120 GB。
IAM インスタンスプロファイル	ステップ 2: OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーの詳細を取得してください のステップ 2 からの InstanceProfileArn です。

Elastic IP を作成して新しいインスタンスにアタッチする場合は、新しいインスタンスのインスタンス ID をコピーして、(オプション) ステップ 4.1: Elastic IP を作成してアタッチしてください のステップを完了します。

(オプション) ステップ 4.1: Elastic IP を作成してアタッチしてください

Elastic IP アドレスを使用すると、アドレスをアカウント内の別のインスタンスに迅速に再マッピングすることで、インスタンスやソフトウェアの障害をマスクできます。

Elastic IP アドレスを作成して関連付けるには

1. にサインイン AWS マネジメントコンソール し、https://console.aws.amazon.com/ec2/ で Amazon EC2 コンソールを開きます。
2. 伸縮性 IPs を選択してください。
3. [Elastic IP アドレスの割り当て] を選択してください。

4. [Elastic IP アドレスの割り当て] ページから、割り当てる を選択します。パブリック IPv4 アドレスが作成されます。
5. 割り当てられた IPv4 アドレス をコピーします。
6. アクション で、Elastic IP アドレスの関連付け を選択します。
7. たとえば、新規インスタンスのインスタンス ID を入力します。
8. 関連付ける を選択してください。

ステップ 5: 新規 EC2 インスタンスに Puppet Enterprise をインストールしてください

SSH を使用して 新規 EC2 インスタンスに接続します。EC2 コンソールでは SSH の代わりにセッションマネージャーを使用できます。

```
# switch to sudo user
sudo -i

# Setup environment variables
PUPPET_ENTERPRISE_VERSION=Puppet Enterprise version from step 2.3
hostname Public IPv4 DNS or Custom Domain if available

# Install Puppet Enterprise
curl -JLO https://pm.puppetlabs.com/puppet-enterprise/$PUPPET_ENTERPRISE_VERSION/
puppet-enterprise-$PUPPET_ENTERPRISE_VERSION-el-7-x86_64.tar.gz
tar -xf puppet-enterprise-$PUPPET_ENTERPRISE_VERSION-el-7-x86_64.tar.gz

./puppet-enterprise-$PUPPET_ENTERPRISE_VERSION-el-7-x86_64/puppet-enterprise-installer
```

SSH または Systems Manager セッションは、次のステップのために開いたままにしておくことができます。

ステップ 6: 新しい EC2 インスタンスにバックアップを復元してください

```
# Setup environment variables
S3_BUCKET=S3 bucket name from step 2.1
PUPPET_BACKUP=Puppet backup file name from step 3.2

# download backup
aws s3 cp s3://$S3_BUCKET/tmp/puppet-backup/$PUPPET_BACKUP
```

```
# Prepare Puppet Enterprise backup to remove OpsWorks metadata
mkdir output
tar -xf $PUPPET_BACKUP -C output/
cd output/
rm -f opt/puppetlabs/facter/facts.d/opsworks.json
tar -cf ../$PUPPET_BACKUP *
cd ..
rm -rf output/

# Restore from backup
PATH=$PATH:/opt/puppetlabs/puppet/bin/
puppet-backup restore $PUPPET_BACKUP
puppet agent -t
```

復元された EC2 インスタンスの Puppet コンソールには、インスタンスの https://##### *IPv4* でアクセスできます。パブリック IPv4 DNS は、 EC2 コンソールのインスタンスの詳細ページで確認できます。ログイン認証情報は、OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーにアクセスするために使用する認証情報と同じです。

SSH または Systems Manager セッションは、次のステップのために開いたままにしておくことができます。

ステップ 7: Puppet ライセンスを設定してください

Puppet ウェブサイト の手順に従ってライセンスを設定します。

SSH または Systems Manager セッションは、次のステップのために開いたままにしておくことができます。

ステップ 8: ノードを移行してください

OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーでは、次の 2 種類のドメインがサポートされています。

- BYODC (Bring Your Own Domain and Certificate)
- OpsWorks のエンドポイント

ステップ 8.1: BYODC 用 (独自のドメインと証明書の使用)

これらのノードでは、DNS プロバイダーのカスタムドメインを新しい EC2 インスタンスのパブリック IPv4 DNS またはパブリック IPv4 アドレスにポイントするだけで済みます。

ステップ 8.2: OpsWorks エンドポイントの場合

OpsWorks エンドポイントの場合に、Puppet のドキュメントでは、ノードで Puppet エージェントをアンインストールしてから、新しく復元された Puppet Enterprise サーバーを使用して Puppet エージェントをインストールすることを推奨しています。

> **Note**
>
> Puppet にはエージェントノードを移動する自動手順はありませんが、自動ノード移行を実現するために Puppet コミュニティメンバーが Puppet Forge ウェブサイトに公開しているモジュールがいくつかあります。これらのモジュールには、`pe_migrate` モジュールと、別の作者による二つ目の 移行モジュール が含まれます。Puppet Forge ウェブサイト上のモジュールは、Forge モジュール内に明示的に記載されていない限り、Puppet または OpsWorks ではサポートされていません。これらのモジュールは注意して使用し、広く使用する前にテストすることをおすすめします。

以下のセクションでは、 Linux インスタンスで Puppet エージェントをアンインストールして再インストールする手順を説明します。

トピック

- ステップ 8.2.1 : Puppet サーバーからアンインストーラーをコピーしてください
- ステップ 8.2.2: アンインストーラーをダウンロードしてノードで実行してください
- ステップ 8.2.3 : Puppet エージェントをノードに再インストールしてください

ステップ 8.2.1 : Puppet サーバーからアンインストーラーをコピーしてください

エージェントをアンインストールする前に、ノードの IAM インスタンスプロファイルに S3 ReadOnly 権限が付与されていることを確認してください。

次のコマンドを実行して、アンインストーラーを Puppet サーバーから S3 バケットにコピーします。

```
aws s3 cp \
   /opt/puppetlabs/bin/puppet-enterprise-uninstaller \
   s3://$S3_BUCKET/tmp/puppet-enterprise-uninstaller
```

コマンドを実行したら、Puppet サーバーの SSH または Session Manager セッションからログアウトできます。

ステップ 8.2.2: アンインストーラーをダウンロードしてノードで実行してください

SSH を使用してノードに接続します。ノードが EC2 インスタンスの場合は、 SSH の代わりに EC2 コンソールの Session Manager を使用できます。

```
sudo -i

S3_BUCKET=aws-opsworks-cm-abcdefg-uuhtyn6messn
aws s3 cp s3://$S3_BUCKET/tmp/puppet-enterprise-uninstaller /opt/puppetlabs/bin/
chmod 700 /opt/puppetlabs/bin/puppet-enterprise-uninstaller
/opt/puppetlabs/bin/puppet-enterprise-uninstaller
```

SSH または Systems Manager セッションは、次のステップのために開いたままにしておくことができます。

ステップ 8.2.3 : Puppet エージェントをノードに再インストールしてください

以下の手順を実行して、Puppet エージェントをノードに再インストールします。

トピック

- ステップ 8.2.3.1 : Puppet エージェントを正しい設定でインストールしてください
- ステップ 8.2.3.2 : Puppet コンソールで証明書を承認してください
- ステップ 8.2.3.3: ノードを Puppet Enterprise サーバーにチェックインしてください

ステップ 8.2.3.1 : Puppet エージェントを正しい設定でインストールしてください

以下のコマンドを実行して、 Puppet エージェントをインストールします。

```
curl -k https://Public_IPv4_DNS:8140/packages/current/install.bash | bash
```

ステップ 8.2.2.3 までは SSH または Session Manager セッションを開いたままにしておくことができます。

ステップ 8.2.3.2 : Puppet コンソールで証明書を承認してください

1. `https://Public_IPv4_DNS` の Puppet サーバーのコンソールに移動します。
2. 「証明書」を選択し、「署名されていない証明書」を選択します。

3. 「承認」を選択して Puppet エージェントの証明書に署名します。

ステップ 8.2.3.3: ノードを Puppet Enterprise サーバーにチェックインしてください

ノード上で以下のコマンドを実行して、サーバーにチェックインします。

```
puppet agent -t
```

これで、ノードが Puppet サーバーのコンソールに表示されるはずです。

ステップ 9:OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーを削除します

OpsWorks コンソールまたは を使用して AWS CLI 、OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーを削除できます。

OpsWorks コンソールを使用してサーバーを削除するために

1. にサインイン AWS マネジメントコンソール し、https://console.aws.amazon.com/opsworks/ で OpsWorks コンソールを開きます。
2. ナビゲーションペインで、[Puppet Enterprise サーバー] を選択します。
3. [Puppet Enterprise サーバー] ページで、削除するサーバーを選択します。
4. [アクション]から[Puppet Enterprise サーバーの削除] を選択します。

を使用してサーバーを削除するには AWS CLI

以下のコマンドを実行してください。

```
aws opsworks-cm delete-server \
   --server-name server-name \
   --region region
```

を使用した OpsWorks for Puppet Enterprise API コールのログ記録 AWS CloudTrail

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks for Puppet Enterprise サービスは 2024 年 3 月 31 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロード

を他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks for Puppet Enterprise は AWS CloudTrail、OpsWorks for Puppet Enterprise のユーザー、ロール、または のサービスによって実行されたアクションを記録する AWS サービスである と統合されています。CloudTrail は、OpsWorks for Puppet Enterprise コンソールからの呼び出し、および OpsWorks for Puppet Enterprise API へのコード呼び出しなど、すべての API コールをイベントとしてキャプチャします。証跡を作成する場合は、OpsWorks for Puppet Enterprise のイベントなど、Amazon S3 バケットへの CloudTrail イベントの継続的な配信を有効にすることができます。証跡を設定しない場合でも、CloudTrail コンソールの [イベント履歴] で最新のイベントを表示できます。CloudTrail で収集された情報を使用して、OpsWorks for Puppet Enterprise に対するリクエスト、リクエスト元の IP アドレス、リクエスト者、リクエスト日時などの詳細を確認できます。

CloudTrail に関する詳細は、「AWS CloudTrail ユーザーガイド」を参照してください。

CloudTrailのOpsWorks for Puppet Enterprise の情報

CloudTrail は、 AWS アカウントの作成時にアカウントで有効になります。OpsWorks for Puppet Enterprise でアクティビティが発生すると、そのアクティビティはイベント履歴の他の AWS サービスイベントとともに CloudTrail イベントに記録されます。 AWS アカウントで最近のイベントを表示、検索、ダウンロードできます。詳細については、CloudTrail イベント履歴でのイベントの表示を参照してください。

OpsWorks for Puppet Enterprise のイベントなど、 AWS アカウントのイベントの継続的な記録については、証跡を作成します。証跡により、ログファイルを CloudTrail で Amazon S3 バケットに配信できます。デフォルトでは、コンソールで追跡を作成するときに、追跡がすべてのリージョンに適用されます。証跡は、 AWS パーティション内のすべてのリージョンからのイベントを ログに記録し、指定した Amazon S3 バケットにログファイルを配信します。さらに、CloudTrail ログで収集されたイベントデータをさらに分析して処理するように他の AWS サービスを設定できます。詳細については、以下を参照してください。

- 証跡を作成するための概要
- CloudTrail がサポートするサービスと統合
- CloudTrail 用 Amazon SNS 通知の構成
- 複数のリージョンから CloudTrail ログファイルを受け取るおよび複数のアカウントから CloudTrail ログファイルを受け取る

すべての OpsWorks for Puppet Enterprise アクションは CloudTrail によって口グに記録され、[OpsWorks for Puppet Enterprise API Reference] (OpsWorks for Puppet Enterprise API リファレンスリファレンス) で文書化されています。例えば、[CreateServer (サーバーの作成)]、[CreateBackup] (バックアップの作成)、および [DescribeServers] (サーバーの説明) アクションの呼び出しにより、CloudTrail ログファイルにエントリが生成されます。

各イベントまたはログエントリには、誰がリクエストを生成したかという情報が含まれます。同一性情報は次の判断に役立ちます。

- リクエストが、ルートと IAM ユーザー認証情報のどちらを使用して送信されたか。
- リクエストがロールまたはフェデレーションユーザーの一時的なセキュリティ認証情報を使用して行われたかどうか。
- リクエストが別の AWS サービスによって行われたかどうか。

詳細については、「CloudTrail userIdentity 要素」を参照してください。

OpsWorks for Puppet Enterprise ログファイルのエントリを理解する

「トレイル」は、指定した Amazon S3 バケットにイベントをログファイルとして配信するように設定できます。CloudTrail のログファイルは、単一か複数のログエントリを含みます。イベントはあらゆるソースからの単一のリクエストを表し、リクエストされたアクション、アクションの日時、リクエストのパラメータなどの情報が含まれます。CloudTrail ログファイルは、公開 API コールの順序付けられたスタックトレースではないため、特定の順序では表示されません。

以下の例は、OpsWorks for Puppet Enterprise `CreateServer` アクションの CloudTrail ログエントリを示しています。

```
{"eventVersion":"1.05",
"userIdentity":{
    "type":"AssumedRole",
    "principalId":"ID number:OpsWorksCMUser",
    "arn":"arn:aws:sts::831000000000:assumed-role/Admin/OpsWorksCMUser",
    "accountId":"831000000000","accessKeyId":"ID number",
    "sessionContext":{
        "attributes":{
            "mfaAuthenticated":"false",
            "creationDate":"2017-01-05T22:03:47Z"
            },
        "sessionIssuer":{
            "type":"Role",
```

```
            "principalId":"ID number",
            "arn":"arn:aws:iam::831000000000:role/Admin",
            "accountId":"831000000000",
            "userName":"Admin"
            }
        }
    },
"eventTime":"2017-01-05T22:18:23Z",
"eventSource":"opsworks-cm.amazonaws.com",
"eventName":"CreateServer",
"awsRegion":"us-west-2",
"sourceIPAddress":"101.25.190.51",
"userAgent":"console.amazonaws.com",
"requestParameters":{
    "serverName":"test-puppet-server",
    "engineModel":"Single",
    "engine":"Puppet",
    "instanceProfileArn":"arn:aws:iam::831000000000:instance-profile/aws-opsworks-cm-
ec2-role",
    "backupRetentionCount":3,"serviceRoleArn":"arn:aws:iam::831000000000:role/service-
role/aws-opsworks-cm-service-role",
    "engineVersion":"12",
    "preferredMaintenanceWindow":"Fri:21:00",
    "instanceType":"t2.medium",
    "subnetIds":["subnet-1e111f11"],
    "preferredBackupWindow":"Wed:08:00"
    },
"responseElements":{
    "server":{
        "endpoint":"test-puppet-server-xxxx8u4390xo6pd9.us-west-2.opsworks-cm.io",
        "createdAt":"Jan 5, 2017 10:18:22 PM",
        "serviceRoleArn":"arn:aws:iam::831000000000:role/service-role/aws-opsworks-cm-
service-role",
        "preferredBackupWindow":"Wed:08:00",
        "status":"CREATING",
        "subnetIds":["subnet-1e111f11"],
        "engine":"Puppet",
        "instanceType":"t2.medium",
        "serverName":"test-puppet-server",
        "serverArn":"arn:aws:opsworks-cm:us-west-2:831000000000:server/test-puppet-
server/8ezz7f6z-e91f-4z10-89z5-8c6219zzz09f",
        "engineModel":"Single",
        "backupRetentionCount":3,
        "engineAttributes":[
```

```
            {"name":"PUPPET_ADMIN_PASSWORD","value":"*** Redacted ***"},
            {"name":"PUPPET_API_CA_CERT","value":"*** Redacted ***"},
            ],
        "engineVersion":"12.11.1",
        "instanceProfileArn":"arn:aws:iam::831000000000:instance-profile/aws-opsworks-
cm-ec2-role",
        "preferredMaintenanceWindow":"Fri:21:00"
        }
    },
"requestID":"de7z64z9-d394-12ug-8081-7zz0386fbcb6",
"eventID":"8z7z18dz-6z90-47bz-87cf-e8346428zzz3",
"eventType":"AwsApiCall",
"recipientAccountId":"831000000000"
}
```


OpsWorks for Puppet Enterprise のトラブルシューティング

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks for Puppet Enterprise サービスは 2024 年 3 月 31 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このトピックでは、OpsWorks for Puppet Enterprise に関する一般的な問題と、それらの問題について推奨される解決方法を示します。

トピック

- 一般的なトラブルシューティングのヒント
- 特定のエラーのトラブルシューティング
- その他のヘルプとサポート

一般的なトラブルシューティングのヒント

Puppet マスターを作成または操作できない場合は、エラーメッセージやログを表示すると、問題のトラブルシューティングに役立ちます。以下のタスクでは、Puppet マスターに関する問題のトラブ

ルシューティングを行うときの一般的な開始点を示します。特定のエラーと解決方法については、このトピックの「特定のエラーのトラブルシューティング」セクションを参照してください。

- Puppet マスターを起動できない場合は、OpsWorks for Puppet Enterprise コンソールを使用してエラーメッセージを表示します。Puppet マスターのプロパティページで、サーバーの起動と実行に関連するエラーメッセージが、ページの一番上に表示されます。エラーは CloudFormation、Puppet マスターの作成に使用される OpsWorks for Puppet Enterprise、または Amazon EC2 のサービスから発生する可能性があります。プロパティページでは、実行中のサーバーで発生するイベントを表示することもできます。これには、障害イベントメッセージが含まれる場合があります。
- EC2 に関する問題を解決するため、SSH を使用してサーバーのインスタンスに接続してログを表示します。EC2 インスタンスのログは `/var/log/aws/opsworks-cm` ディレクトリに保存されています。これらのログでは、OpsWorks for Puppet Enterprise が Puppet マスターを起動中にコマンド出力が収集されます。

特定のエラーのトラブルシューティング

トピック

- サーバーの状態は [接続が失われました]
- サーバーの作成が「リクエストされた設定は現在サポートされていません」というメッセージで失敗する
- サーバーの Amazon EC2 インスタンスが作成できない
- サービスロールのエラーによりサーバーを作成できない
- Elastic IP アドレスの制限を超えた
- ノードの自動関連付けに失敗する
- システムメンテナンスの失敗

サーバーの状態は [接続が失われました]

問題: サーバーのステータスに[接続が失われました]と表示される。

原因: これは、 の外部のエンティティが OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーまたはそのサポートリソースに変更 OpsWorks を加えた場合に最もよく発生します。 は、Connection lost 状態の Puppet Enterprise サーバーに接続して、バックアップの作成、オペレーティングシステムパッチの適用、Puppet の更新などのメンテナンスタスクを処理 OpsWorks できません。その結果、サーバー

が重要なアップデートを見逃したり、セキュリティ上の問題の影響を受けやすくなったり、またはその他の理由で期待どおりに動作しない可能性があります。

解決策: 次の手順を試して、サーバーの接続を復元してください。

1. サービスロールに必要な権限がすべてあることを確認してください。

   a. サーバーの「設定」ページの「ネットワークとセキュリティ」で、サーバーが使用しているサービスロールへのリンクを選択します。これにより、 IAM コンソールに表示されるサービスロールが開きます。

   b. 「アクセス許可」のタブで、AWSOpsWorksCMServiceRole が「アクセス許可ポリシー」リストに含まれていることを確認します。リストにない場合は、AWSOpsWorksCMServiceRole 管理ポリシーをロールに手動で追加してください。

   c. 「信頼関係」のタブで、ユーザーに代わって役割を引き受ける opsworks-cm.amazonaws.com サービスを信頼する信頼ポリシーがサービスロールに含まれていることを確認します。ロールで信頼ポリシーを使用する方法の詳細については、「ロールの変更 (コンソール)」または AWS 「セキュリティブログ記事」の「IAM ロールで信頼ポリシーを使用する方法」を参照してください。

2. インスタンスプロファイルに必要な権限がすべてあることを確認してください。

   a. サーバーの「設定」ページの「ネットワークとセキュリティ」で、サーバーが使用しているインスタンスプロファイルへのリンクを選択します。これにより、 IAM コンソールに表示されるインスタンスプロファイルが開きます。

   b. 「権限」のタブで、AmazonEC2RoleforSSM と AWSOpsWorksCMInstanceProfileRole が両方とも「アクセス権限ポリシー」リストに含まれていることを確認します。一方または両方がリストにない場合は、これらの管理ポリシーを手動でロールに追加してください。

   c. 「信頼関係」のタブで、ユーザーに代わって役割を引き受ける ec2.amazonaws.com サービスを信頼する信頼ポリシーがサービスロールに含まれていることを確認します。ロールで信頼ポリシーを使用する方法の詳細については、「ロールの変更 (コンソール)」または AWS 「セキュリティブログ記事」の「IAM ロールで信頼ポリシーを使用する方法」を参照してください。

3. Amazon EC2 コンソールで、OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーのリージョンと同じリージョンにいることを確認し、サーバーが使用している EC2 インスタンスを再起動します。

   a. aws-opsworks-cm-instance-*server-name* という名前の EC2 インスタンスを選択します。

b. [インスタンスの状態]メニューで、[インスタンスの再起動] を選択します。

c. サーバーが再起動して完全にオンラインになるまで最大 15 分かかります。

4. OpsWorks for Puppet Enterprise コンソールのサーバー詳細ページで、サーバーのステータスが [正常] であることを確認します。

上記の手順を実行してもサーバーステータスが [接続が失われました] のままの場合は、次のいずれかを試してください。

- 新しいサーバーを作成し、元のサーバーを削除して、サーバーを交換してください。現在のサーバー上のデータが重要な場合は、最新のバックアップからサーバーを復元し、元の応答しないサーバーを削除する前に データが最新であることを確認してください。
- AWS Supportにお問い合わせください。

サーバーの作成が「リクエストされた設定は現在サポートされていません」というメッセージで失敗する

問題: Puppet Enterprise サーバーの作成を試みているが、「リクエストされた設定は現在サポートされていません。サポートされている設定についてドキュメントをご確認ください」のようなエラーメッセージでサーバーの作成が失敗する。

原因: Puppet マスターに対してサポートされていないインスタンスタイプが指定された可能性があります。ハードウェア専有インスタンス用など、デフォルトでないテナンシーを持つ VPC で Puppet サーバーの作成を選択した場合、指定された VPC 内のすべてのインスタンスも、専有テナンシーまたはホストテナンシーのインスタンスである必要があります。t2 など一部のインスタンスタイプはデフォルトテナンシーでしか使用できないため、Puppet マスターインスタンスタイプは指定された VPC でサポート可能でない場合があり、そのためにサーバーの作成が失敗します。

解決策: デフォルト以外のテナンシーを持つ VPC を選択した場合は、専用テナンシーをサポートできる m4 インスタンスタイプを使用します。

サーバーの Amazon EC2 インスタンスが作成できない

問題: サーバーの作成が、次のようなエラーメッセージにより失敗する。「The following resource(s) failed to create: [EC2Instance]。Failed to receive 1 resource signal(s) within the specified duration」

原因: この問題のほとんどが、EC2 インスタンスでネットワークアクセスが可能でないことが原因です。

解決策: インスタンスにアウトバウンドインターネットアクセスがあり、 AWS サービスエージェントがコマンドを発行できることを確認します。VPC (単一のパブリックサブネットを持つ VPC) で DNS 解決 が有効になっていて、サブネットで [パブリック IP の自動割り当て] 設定が有効になっていることを確認します。

サービスロールのエラーによりサーバーを作成できない

問題:「Not authorized to perform sts:AssumeRole.」という状態を示すエラーメッセージが表示され、サーバーを作成できない。

原因: お使いのサービスロールに新しいサーバーを作成するための適切なアクセス権限がない場合に、この問題が発生する可能性があります。

解決策: OpsWorks for Puppet Enterprise コンソールを開きます。コンソールを使用して新しいサービスロールとインスタンスプロファイルロールを生成します。独自のサービスロールの使用を希望する場合は、AWSOpsWorksCMServiceRole ポリシーをロールにアタッチします。opsworks-cm.amazonaws.com がロールの 信頼関係 のサービス間でリストされていることを確認します。Puppet マスターに関連付けられているサービスロールに、AWSOpsWorksCMServerRole 管理ポリシーがアタッチされていることを確認します。

Elastic IP アドレスの制限を超えた

問題:「The following resource(s) failed to create: [EIP, EC2Instance]。Resource creation cancelled, the maximum number of addresses has been reached.」という状態を示すエラーメッセージにより、サーバーを作成できない。

原因: アカウントで Elastic IP (EIP) アドレスの最大数を使用した場合に、この問題が発生します。EIP アドレスのデフォルトの制限は 5 です。

解決策: 既存の EIP アドレスを解放するか、アカウントがアクティブに使用していない EIP アドレスを削除するか、 AWS カスタマーサポートに連絡して、アカウントに関連付けられている EIP アドレスの制限を増やすことができます。

ノードの自動関連付けに失敗する

問題: 新しい Amazon EC2 ノードの自動 (無人) 関連付けに失敗する。Puppet マスターに追加されたノードが Puppet Enterprise ダッシュボードに表示されない。

原因: `opsworks-cm` API コールで新しい EC2 インスタンスとの通信を許可するインスタンスプロファイルとして IAM ロールをセットアップしていない場合に、この問題が発生する可能性があります。

解決策: OpsWorks for Puppet Enterprise でのノードを自動的に追加します で説明したように、EC2 インスタンスのプロファイルにポリシーをアタッチして、AssociateNode と DescribeNodeAssociationStatus の API コールを EC2 と連携できるようにします。

システムメンテナンスの失敗

AWS OpsWorks CM は毎週システムメンテナンスを実行し、セキュリティ更新プログラムを含む Puppet Server AWSの最新バージョンが常に OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーで実行されていることを確認します。何らかの理由でシステムメンテナンスが失敗した場合、 は失敗 AWS OpsWorks CM を通知します。システムメンテナンスの詳細については、「OpsWorks for Puppet Enterprise のシステムメンテナンス」を参照してください。

このセクションでは、考えられる障害の原因を説明し、解決策を提案します。

トピック

- サービスロールまたはインスタンスプロファイルのエラーによって、システムのメンテナンスが妨げられる

サービスロールまたはインスタンスプロファイルのエラーによって、システムのメンテナンスが妨げられる

問題: システムメンテナンスが失敗し、「STS: AssumeRole を実行する権限がありません」というエラーメッセージ、または権限に関する同様のエラーメッセージが表示されます。

原因: これは、使用しているサービスロールまたはインスタンスプロファイルのいずれかに、サーバー上でシステムメンテナンスを実行するための適切な権限がない場合に発生する可能性があります。

解決策: サービスロールとインスタンスプロファイルに必要なすべての権限があることを確認してください。

1. サービスロールに必要な権限がすべてあることを確認してください。

    a. サーバーの「設定」ページの「ネットワークとセキュリティ」で、サーバーが使用しているサービスロールへのリンクを選択します。これにより、 IAM コンソールに表示されるサービスロールが開きます。

    b. 「アクセス許可」のタブで、AWSOpsWorksCMServiceRole がサービスロールにアタッチされていることを確認します。AWSOpsWorksCMServiceRole がリストにない場合は、このポリシーをロールに追加します。

c. opsworks-cm.amazonaws.com がロールの 信頼関係 のサービス間でリストされていることを確認します。ロールで信頼ポリシーを使用する方法の詳細については、「ロールの変更 (コンソール)」または AWS 「セキュリティブログ記事」の「IAM ロールで信頼ポリシーを使用する方法」を参照してください。

2. インスタンスプロファイルに必要な権限がすべてあることを確認してください。

a. サーバーの「設定」ページの「ネットワークとセキュリティ」で、サーバーが使用しているインスタンスプロファイルへのリンクを選択します。これにより、 IAM コンソールに表示されるインスタンスプロファイルが開きます。

b. 「権限」のタブで、`AmazonEC2RoleforSSM` と `AWSOpsWorksCMInstanceProfileRole` が両方とも「アクセス権限ポリシー」リストに含まれていることを確認します。一方または両方がリストにない場合は、これらの管理ポリシーを手動でロールに追加してください。

c. 「信頼関係」のタブで、ユーザーに代わって役割を引き受ける `ec2.amazonaws.com` サービスを信頼する信頼ポリシーがサービスロールに含まれていることを確認します。ロールで信頼ポリシーを使用する方法の詳細については、「ロールの変更 (コンソール)」または AWS 「セキュリティブログ記事」の「IAM ロールで信頼ポリシーを使用する方法」を参照してください。

その他のヘルプとサポート

発生している特定の問題がこのトピックで説明されていないか、このトピックの提案を試しても問題が解決しない場合は、OpsWorks フォーラムを参照してください。

また、AWS Support Center を参照することもできます。 AWS サポートセンターは、 AWS サポートケースを作成および管理するためのハブです。 AWS サポートセンターには、フォーラム、技術的なFAQs、サービスのヘルスステータスなど、その他の役立つリソースへのリンクも含まれています AWS Trusted Advisor。

AWS OpsWorks for Chef Automate

> **Important**
>
> AWS OpsWorks for Chef Automate は 2024 年 5 月 5 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。既存のお客様は、 Chef SaaS または代替ソリューションに移行することをお勧めします。ご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

AWS OpsWorks for Chef Automate では、AWS で Chef Automate サーバーを実行できます。Chef サーバーを数分でプロビジョニングし、 がそのオペレーション、バックアップ、復元、ソフトウェアアップグレード AWS OpsWorks for Chef Automate を処理できます。 を使用すると、Chef サーバーを管理する代わりに、コア設定管理タスクに集中 AWS OpsWorks for Chef Automate できます。

Chef Automate サーバーは、ノードに対して実行する Chef レシピを `chef-client` に指示します。また、ノードに関する情報を保存し、Chef クックブックの中央リポジトリとして機能します。 AWS OpsWorks for Chef Automate は、Chef Automate の優れた機能 (Chef Infra と Chef InSpec) を含む Chef サーバーを提供します。

AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーは Amazon Elastic Compute Cloud インスタンスで実行されます。 AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーは、最新バージョンの Amazon Linux (Amazon Linux 2) を実行するように設定されています。Chef Automate のこのバージョンの変更については、「Chef Automate リリースノート」を参照してください。次の表は、 AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーにインストールされている Chef コンポーネントを示しています。

コンポーネント名	説明	AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーにインストールされているバージョン
Chef Automate	Chef Automate は、継続的デプロイのための自動化されたワークフローを提供し、管理対象ノードに関する洞察をウェブベースのマネジメントコンソールに表示する、エン	2.0

コンポーネント名	説明	AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーにインストールされているバージョン
	タープライズサーバーソフトウェアパッケージです。Chef Automate は、Chef Infra を含むことによりインフラストラクチャを自動化します。また、Chef InSpec を含むことによりセキュリティおよびコンプライアンスに関する情報を提供します。さらに、Chef Habitat を含むことによりデプロイを自動化します。 Chef Automate の詳細については、Chef のウェブサイトの「Chef Automate」を参照してください。	
Chef Infra	Chef Infra Server (旧称 Chef Server) は、Chef Infra クライアント (`chef-client`) エージェントを使用して、管理対象ノードに設定を継続的に適用することで、目的の状態を維持します。 Infra の詳細については、Chef のウェブサイトの「Chef Infra」を参照してください。	12.x

コンポーネント名	説明	AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーにインストールされているバージョン
Chef InSpec	Chef InSpec は、ソフトウェアエンジニア、運用部門、セキュリティエンジニアの間で共有できるセキュリティとコンプライアンスのルールを定義します。コンプライアンス、セキュリティ、その他のポリシー要件により、chef-client エージェントが管理対象ノードに対して実行できる自動テストのフレームワークが形成され、標準の一貫した実施が確実になります。 InSpec の詳細については、Chef のウェブサイトの「Chef InSpec」を参照してください。	3.9.0

AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーに関連付けられているノードでサポートされている chef-client の最小バージョンは 13.x です。少なくとも 14.10.9、または最新の安定chef-clientバージョンを実行することをお勧めします。

Chef ソフトウェアの新しいマイナーバージョンが使用可能になった場合、システムメンテナンスでは、それらが AWS のテストをパスし次第、サーバー上の Chef Automate および Chef Server のマイナーバージョンを自動的に更新するように設計されています。AWS では、Chef のアップグレードが本稼働で問題なく使用でき、お客様の既存の環境を害さないかどうかを検証するために、広範なテストを実行します。そのため、Chef ソフトウェアがリリースされてから、Chef Automate サーバーの既存の OpsWorks に適用できるようになるまで、時間差が生じる場合があります。また、システムメンテナンスでは、ご使用のサーバーを Amazon Linux の最新バージョンにアップグレードします。

サポートされているオペレーティングシステムを実行し、 AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーへのネットワークアクセスを持つオンプレミスのコンピュータまたは EC2 インスタンスに接続できます。お客様が管理するノードに対応するオペレーティングシステムの一覧は、Chef のウェブサイトを参照してください。`chef-client` エージェントソフトウェアは Chef サーバーで管理したいノードにインストールされます。

トピック

- のリージョンサポート AWS OpsWorks for Chef Automate
- AWS OpsWorks Chef Automate のサポート終了に関するFAQs
- AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを Chef Automate 2 にアップグレードする
- の開始方法 AWS OpsWorks for Chef Automate
- を使用して AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを作成する CloudFormation
- カスタムドメインを使用するように AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを更新する
- AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーのスターターキットを再生成する
- AWS OpsWorks for Chef Automate リソースでのタグの使用
- AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーのバックアップと復元
- でのシステムメンテナンス AWS OpsWorks for Chef Automate
- でのコンプライアンススキャン AWS OpsWorks for Chef Automate
- AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーからノードの関連付けを解除する
- AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを削除する
- Chef Automate ダッシュボードの認証情報のリセット
- を使用した AWS OpsWorks for Chef Automate API コールのログ記録 AWS CloudTrail
- トラブルシューティング AWS OpsWorks for Chef Automate

のリージョンサポート AWS OpsWorks for Chef Automate

次のリージョンエンドポイントは AWS OpsWorks for Chef Automate servers をサポートしています。 は、インスタンスプロファイル、ユーザー、サービスロールなど、Chef サーバーに関連付けられているリソースを、Chef サーバーと同じリージョンエンドポイントに AWS OpsWorks for Chef Automate 作成します。Chef サーバーは VPC 内にある必要があります。作成するかすでに作成してある VPC を使用することも、デフォルトの VPC を使用することもできます。

- 米国東部 (オハイオ) リージョン

- 米国東部(バージニア州北部) リージョン
- US West (N. California) Region
- 米国西部 (オレゴン) リージョン
- Asia Pacific (Tokyo) Region
- アジアパシフィック (シンガポール) リージョン
- アジアパシフィック (シドニー) リージョン
- 欧州 (フランクフルト) リージョン
- 欧州 (アイルランド) リージョン

AWS OpsWorks Chef Automate のサポート終了に関するFAQs

> **Important**
>
> AWS OpsWorks for Chef Automate は 2024 年 5 月 5 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。既存のお客様は、 Chef SaaS または代替ソリューションに移行することをお勧めします。

トピック

- このサポート終了により、既存のユーザーはどのような影響を受けますか?
- 何もアクションを実行しない場合サーバーはどうなりますか?
- どのような代替案に移行できますか?
- このサービスはまだ新規顧客を受け入れていますか ?
- End of Life はすべての AWS リージョン に同時に影響しますか?
- どのレベルのテクニカルサポートが受けられますか?
- 私は現在 OpsWorks for Chef Automate の顧客で、以前はサービスを使用していなかったアカウントでサーバーを起動する必要があります。これはできますか?
- 来年に主要な特徴量のリリースは行われますか ?

このサポート終了により、既存のユーザーはどのような影響を受けますか?

既存のお客様は、 OpsWorks for Chef Automate のサポート終了日である 2024 年 5 月 5 日まで影響を受けません。サポート終了日を過ぎると、お客様は OpsWorks コンソールまたは API を使用してサーバーを管理できなくなります。

何もアクションを実行しない場合サーバーはどうなりますか?

2024 年 5 月 5 日以降、 OpsWorks コンソールまたは API を使用しているサーバーを管理できなくなります。その時点で、バックアップやメンテナンスなど、サーバーの継続的な管理機能の実行は停止されます。お客様への影響を抑えるため、 Chef Automate サーバーをバックアップしている EC2 インスタンスを実行したままにします。しかし、その使用は Chef との間の OpsWorks for Chef Automate サービス契約の対象 (または請求) ではなくなったため、そのライセンスは無効になります。Chef に連絡して新しいライセンスを取得する必要があります。シェフに連絡するときは、必ず OpsWorks for Chef Automate の既存顧客であり、 OpsWorks から移行する予定であることを伝えてください。

どのような代替案に移行できますか?

AWS と Progress Chef では、フルマネージド型の Chef Automate サービスのメリットを引き続き享受できるように、新しい Chef SaaS サービスに移行することをお勧めします。Chef SaaS を使い始めるには、Chef に連絡して Chef SaaS アカウントの設定方法やデータとノードの移行方法に関するドキュメントを入手してください。

管理する AWS アカウントの EC2 インスタンスで Chef Automate を実行するために Chef SaaS がニーズを満たさない場合、Chef には、AWS Marketplace Bring Your Own License (BYOL) モデルや EC2 でのセルフホスティングなど、複数のオプションが用意されています。このような移行を実行する方法の詳細については、Progress Chef にお問い合わせください。

このサービスはまだ新規顧客を受け入れていますか ?

いいえ。 AWS OpsWorks for Chef Automate は新規顧客を受け入れなくなりました。

End of Life はすべての AWS リージョン に同時に影響しますか?

はい。API とコンソールは 2024 年 5 月 5 日をもってサポート終了となり、すべての AWS リージョンを使用できなくなります。for Chef Automate が利用可能な の詳細については、AWS 「リージョンサービスリスト AWS リージョン AWS OpsWorks 」を参照してください。

どのレベルのテクニカルサポートが受けられますか?

AWS は、お客様がサポート終了日まで現在持っているのと同じレベルのサポートを OpsWorks for Chef Automate に引き続き提供します。ご質問やご不明点がございましたら、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。移行サポートについては、お客様が Progress Chef に連絡することをお勧めします。

私は現在 OpsWorks for Chef Automate の顧客で、以前はサービスを使用していなかったアカウントでサーバーを起動する必要があります。これはできますか?

例外的な事情がない限り、一般的にはできません。特別な状況が発生した場合は、AWS re:Post または AWS Premium Support を通じて AWS サポート チームに連絡し、その詳細と根拠を説明して、リクエストを確認します。

来年に主要な特徴量のリリースは行われますか ?

いいえ。サービスのサポート終了が近づいているため、新特徴量のリリースは行いません。しかし、サポート終了日までは、引き続きセキュリティの改善とサーバーの管理を予定どおりに行います。

AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを Chef Automate 2 にアップグレードする

> **Important**
>
> AWS OpsWorks for Chef Automate は 2024 年 5 月 5 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。既存のお客様は、 Chef SaaS または代替ソリューションに移行することをお勧めします。ご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Chef Automate 2 にアップグレードするための前提条件

開始する前に、Chef Automate 2 で新しく追加される機能と、Chef Automate 2 でサポートされない機能を確認してください。Chef Automate 2 の新しい機能およびサポートされない機能については、Chef ウェブサイトにある Chef Automate 2 のドキュメントを参照してください。

Chef Automate 1 を実行しているサーバーがアップグレード対象となるには、2019 年 11 月 1 日以降に少なくとも 1 つのメンテナンスが正常に実行されている必要があります。

AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーのメンテナンスオペレーションと同様に、サーバーはアップグレード中にオフラインになります。アップグレードプロセス中に最大 3 時間のダウンタイムを予定する必要があります。

Chef Automate ダッシュボードウェブサイト用として、このサーバーのサインイン認証情報が必要です。アップグレードが完了したら、Chef Automate ダッシュボードにサインインし、ノードおよび設定情報が変更されていないことを確認します。

> **Important**
>
> AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを Chef Automate 2 にアップグレードする準備ができたら、ここでの手順のみを使用してアップグレードします。はバックアップの作成など、多くのアップグレードプロセス AWS OpsWorks for Chef Automate を自動化するため、Chef ウェブサイトのアップグレード指示に従わないでください。

アップグレードプロセスについて

アップグレードプロセスでは、アップグレードの開始前と終了後にサーバーがバックアップされます。次のバックアップが作成されます。

- Chef Automate 1 (バージョン 12.17.33) を実行しているサーバーのバックアップ。
- アップグレードの終了後に Chef Automate 2 (バージョン 2019-08) を実行しているサーバーのバックアップ。

アップグレードプロセスでは、サーバーで Chef Automate 1 を実行したときに使用していた Amazon EC2 インスタンスが終了します。Chef Automate 2 サーバーを実行するための新しいインスタンスが作成されます。

Chef Automate 2 にアップグレードする (コンソール)

1. にサインイン AWS マネジメントコンソール し、https://console.aws.amazon.com/opsworks/ で OpsWorks コンソールを開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[AWS OpsWorks for Chef Automate] を選択します。

3. サーバーを選択して、そのプロパティページを表示します。ページの上部にある青いバナーは、サーバーが Chef Automate 2 へのアップグレード対象であるかどうかを示します。

   > **Note**
   >
   > Chef Automate 1 を実行しているサーバーがアップグレード対象となるには、2019 年 11 月 1 日以降に少なくとも 1 つのメンテナンスが正常に実行されている必要があります。

4. サーバーがアップグレード対象である場合は、[Start upgrade] を選択します。
5. アップグレードには最大 3 時間かかります。アップグレードプロセス中は、プロパティページにサーバーのステータスとして [Under maintenance] と表示されます。
6. アップグレードが完了すると、プロパティページにメッセージとして、[Successfully upgraded to Automate 2] と [Maintenance completed successfully] の 2 つが表示されます。サーバーのステータスは [HEALTHY] となります。
7. 既存の認証情報を使用して Chef Automate ダッシュボードにサインインし、ノードが正しくレポートすることを確認します。

Chef Automate 2 にアップグレードする (CLI)

1. (オプション) アップグレードの対象となる AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーがわからない場合は、次のコマンドを実行します。デフォルトの AWS リージョンとは異なる AWS リージョンの AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを一覧表示する場合は、必ず `--region`パラメータを追加してください。

   ```
   aws opsworks-cm describe-servers
   ```

   表示された結果で、`true` 属性の値が `CHEF_MAJOR_UPGRADE_AVAILABLE` であるものを探します。これは、サーバーが Chef Automate 2 へのアップグレード対象であることを示します。アップグレードの対象となる AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーの名前を書き留めます。

2. server*_name* を AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーの名前に置き換えて、次のコマンドを実行します。定期的なシステムメンテナンスを実行せずに Chef Automate 2 にアップグレードする場合は、コマンドに示すように `CHEF_MAJOR_UPGRADE` エンジン属性を追加します。ターゲットサーバーがデフォルトの AWS リージョンにない場合は、`--region` パラメータを追加します。1 つのコマンドでアップグレードできるサーバーは 1 つだけです。

```
aws opsworks-cm start-maintenance --server-name server_name --engine-attributes
 Name=CHEF_MAJOR_UPGRADE,Value=true --region region
```

が何らかの理由でサーバーをアップグレード AWS OpsWorks for Chef Automate できない場合、このコマンドは検証例外になります。

3. アップグレードには最大 3 時間かかります。次のコマンドを実行すると、定期的にアップグレードのステータスを確認できます。

```
aws opsworks-cm describe-servers --server-name server_name
```

表示された結果で、Status 値を探します。Status が UNDER_MAINTENANCE である場合は、アップグレードがまだ進行中であることを示します。アップグレードに成功すると、次のようなメッセージが返されます。

```
2019/10/24 00:27:56 UTC          Successfully upgraded to Automate 2.
2019/10/23 23:50:38 UTC          Upgrading Chef server from Automate 1 to Automate
 2
```

アップグレードが失敗した場合、 は自動的にサーバーを Chef Automate 1 に AWS OpsWorks for Chef Automate ロールバックします。

アップグレードには成功したが、サーバーがアップグレード前と同じように動作しない場合 (たとえば、マネージドノードがレポートしない場合) は、サーバーを手動でロールバックできます。手動のロールバックについては、「AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを Chef Automate 1 にロールバックする (CLI)」を参照してください。

AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを Chef Automate 1 にロールバックする (CLI)

アップグレードプロセスが失敗した場合、 は自動的にサーバーを Chef Automate 1 に AWS OpsWorks for Chef Automate ロールバックします。アップグレードは成功したが、サーバーがアップグレード前と同じように機能していない場合は、 を使用して AWS OpsWorks for Chef Automate 手動で Chef Automate 1 にサーバーをロールバックできます AWS CLI。

1. 次のコマンドを実行して、アップグレードの試行前にサーバーで実行された最後のバックアップの BackupId を表示します。サーバーがデフォルトの AWS リージョンとは異なる AWS リージョンにある場合は、--region パラメータを追加します。

   ```
   aws opsworks-cm describe-backups server_name
   ```

   バックアップ ID は、*ServerName-yyyyMMddHHmmssSSS* という形式になっています。表示された結果で、次の Chef Automate 1 のプロパティを探します。

   ```
   "Engine": "Chef"
   "EngineVersion": "12.17.33"
   ```

2. ステップ 1 で返されたバックアップ ID を --backup-id の値として使用し、次のコマンドを実行します。

   ```
   aws opsworks-cm restore-server --server-name server_name --backup-id ServerName-yyyyMMddHHmmssSSS
   ```

   サーバーに保存したデータの量に応じて、サーバーの復元には 20 分～3 時間ほどかかります。復元中のサーバーのステータスは RESTORING になります。このステータスは、 のサーバーのプロパティページに表示され AWS マネジメントコンソール、 describe-servers コマンドの結果に返されます。

3. 復元が完了すると、コンソールに [Restore completed successfully] というメッセージが表示されます。 AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーはオンラインであり、アップグレードプロセスを開始する前と同じです。

以下の資料も参照してください。

- でのシステムメンテナンス AWS OpsWorks for Chef Automate
- バックアップから AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを復元する
- 「DescribeServers API リファレンス」の「OpsWorks 」
- 「StartMaintenance API リファレンス」の「OpsWorks 」

の開始方法 AWS OpsWorks for Chef Automate

> **Important**
>
> AWS OpsWorks for Chef Automate は 2024 年 5 月 5 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。既存のお客様は、 Chef SaaS または代替ソリューションに移行することをお勧めします。ご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

AWS OpsWorks for Chef Automate では、Chef Automate サーバーを で実行できます AWS。約 15 分で Chef サーバーをプロビジョニングできます。

2021 年 5 月 3 日以降、 は一部の Chef Automate サーバー属性を に AWS OpsWorks for Chef Automate 保存します AWS Secrets Manager。詳細については、「との統合 AWS Secrets Manager」を参照してください。

次のチュートリアルは、 で最初の Chef サーバーを作成するのに役立ちます AWS OpsWorks for Chef Automate。

前提条件

開始する前に、以下の前提条件を満たしている必要があります

トピック

- VPC のセットアップ
- カスタムドメインを使用するための前提条件 (オプション)
- EC2 のキーペアをセットアップする (オプション)

VPC のセットアップ

AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーは Amazon Virtual Private Cloud で動作する必要があります。既存の VPC にそのサーバーを追加するか、デフォルトの VPC を使用するか、またはそのサーバーを含めて新しい VPC を作成します。Amazon VPC の情報および新しい VPC の作成方法については、「Amazon VPC 入門ガイド」を参照してください。

独自の VPC を作成するか、既存の VPC を使用する場合、VPC には次の設定またはプロパティが必要です。

- VPC には少なくとも 1 つのサブネットが必要です。

  AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーがパブリックにアクセスできる場合は、サブネットをパブリックにし、パブリック IP の自動割り当てを有効にします。
- [DNS resolution] は有効である必要があります。
- サブネットで、[Auto-assign public IP] を有効にします。

カスタムドメインを使用するための前提条件 (オプション)

独自のドメインで Chef Automate サーバーをセットアップし、サーバーのエンドポイントとして使用するカスタムドメインのパブリックエンドポイントを指定できます。カスタムドメインを使用する場合は、このセクションで詳しく説明するように、次のすべてが必要です。

トピック

- カスタムドメインをセットアップする
- 証明書を取得する
- プライベートキーを取得する

カスタムドメインをセットアップする

独自のカスタムドメインで Chef Automate サーバーを実行するには、`https://aws.my-company.com` などサーバーのパブリックエンドポイントが必要です。カスタムドメインを指定する場合は、前のセクションで説明したように、証明書とプライベートキーも指定する必要があります。

作成後にサーバーにアクセスするには、優先 DNS サービスに CNAME DNS レコードを追加します。このレコードは、Chef Automate サーバーの作成プロセスで生成されるエンドポイント (サーバーの `Endpoint` 属性の値) にカスタムドメインをポイントしている必要があります。サーバーがカスタムドメインを使用している場合は、生成された `Endpoint` 値を使用してサーバーにアクセスできません。

証明書を取得する

独自のカスタムドメインで Chef Automate サーバーをセットアップするには、PEM 形式の HTTPS 証明書が必要です。これは、単一の自己署名証明書、または証明書チェーンです。[Create Chef Automate server (Chef Automate サーバーの作成)] ワークフローを完了するときに、この証明書を指定する場合は、カスタムドメインとプライベートキーも指定する必要があります。

証明書の値の要件は次のとおりです。

- 自己署名証明書、カスタム証明書、または完全な証明書チェーンを指定できます。
- 証明書は、有効な X509 証明書、または PEM 形式の証明書チェーンである必要があります。
- 証明書はアップロード時に有効である必要があります。有効期間の開始 (証明書の `NotBefore` 日付) 前、または有効期間の終了 (証明書の `NotAfter` 日) 後に証明書を使用することはできません。
- 証明書の共通名またはサブジェクトの代替名 (SAN) が存在する場合は、カスタムドメインの値と一致する必要があります。
- 証明書は、[Custom private key (カスタムプライベートキー)] フィールドの値と一致する必要があります。

プライベートキーを取得する

独自のカスタムドメインで Chef Automate サーバーをセットアップするには、HTTPS を使用してサーバーに接続するための PEM 形式のプライベートキーが必要です。プライベートキーは暗号化しないでください。パスワードやパスフレーズで保護することはできません。カスタムプライベートキーを指定する場合は、カスタムドメインと証明書も指定する必要があります。

EC2 のキーペアをセットアップする (オプション)

Chef サーバーの通常の管理では、SSH 接続は不要であり、推奨されていません。`knife` コマンドを使用して、Chef サーバーに対するほとんどの管理タスクを実行できます。

Chef Automate ダッシュボードのサインインパスワードがわからなくなった場合や変更する場合には、SSH を使用してサーバーに接続する際に EC2 のキーペアが必要です。その場合は、既存のキーペアを使用するか、または新しいキーペアを作成できます。EC2 の新しい EC2 のキーペアの作成方法の詳細については、「Amazon EC2 Key Pairs」(Amazon EC2 のキーペア) を参照してください。

EC2 のキーペアが必要なければ、Chef サーバーを作成する準備ができています。

Chef Automate サーバーの作成

> **Important**
>
> AWS OpsWorks for Chef Automate は 2024 年 5 月 5 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。既存のお客様は、 Chef SaaS または代替ソリューションに移行することをお勧めします。ご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

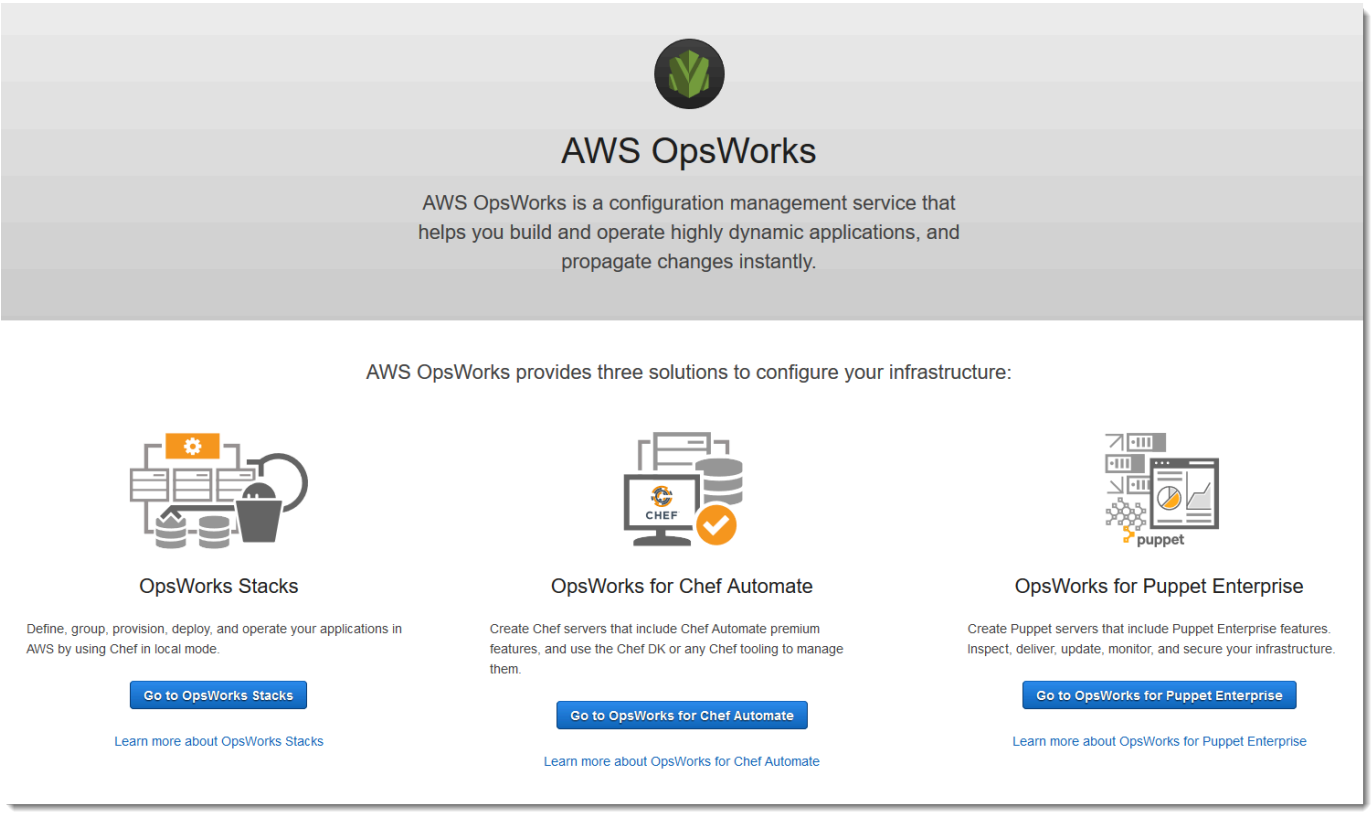
Chef サーバーは、 AWS OpsWorks for Chef Automate コンソールまたは を使用して作成できます AWS CLI。

トピック

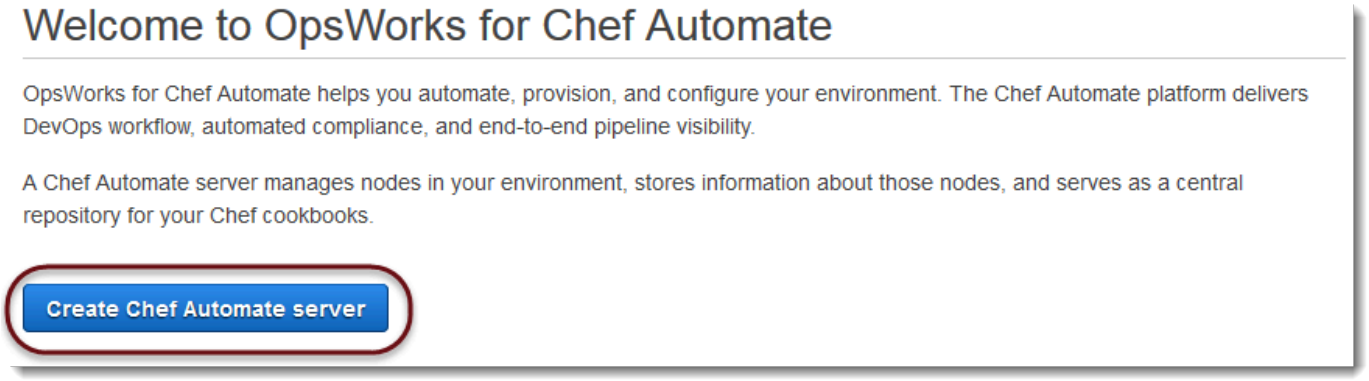
- で Chef Automate サーバーを作成する AWS マネジメントコンソール
- を使用して Chef Automate サーバーを作成する AWS CLI

で Chef Automate サーバーを作成する AWS マネジメントコンソール

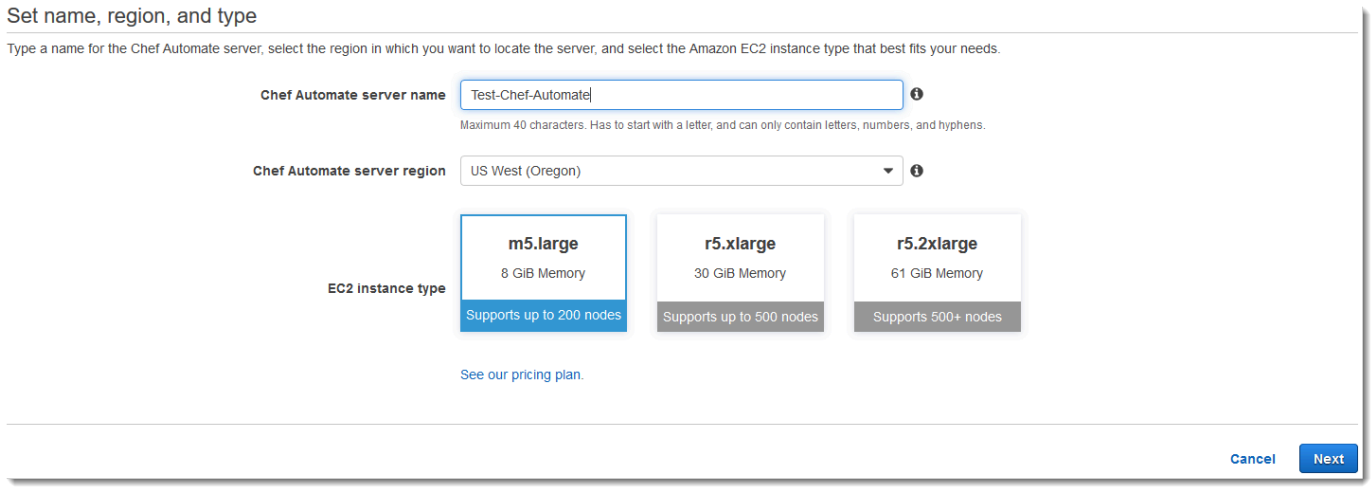
1. にサインイン AWS マネジメントコンソール し、https://console.aws.amazon.com/opsworks/ で OpsWorks コンソールを開きます。
2. OpsWorks ホームページで、OpsWorks for Chef Automate に移動します。



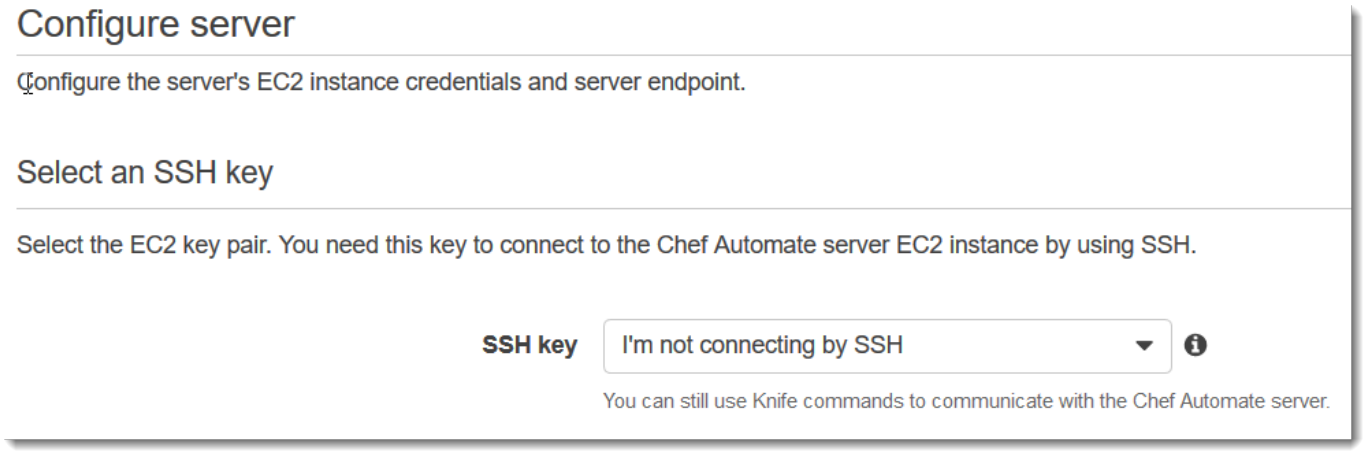
3. AWS OpsWorks for Chef Automate ホームページで、Chef Automate サーバーの作成を選択します。



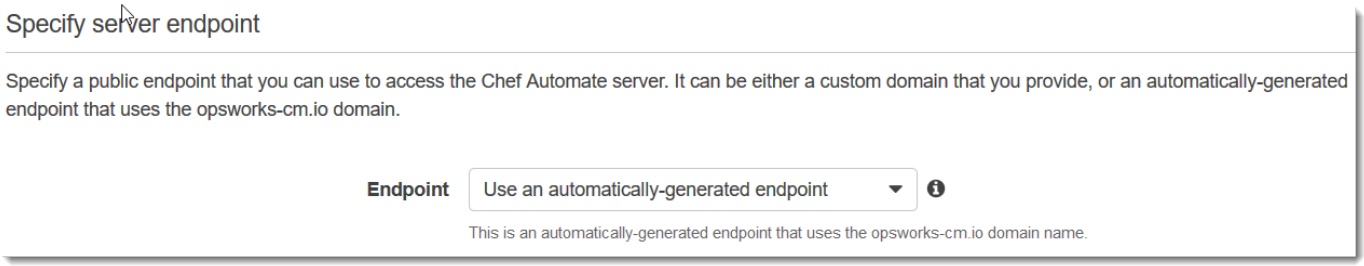
4. [Set name, region, and type] ページで、サーバーの名前を指定します。Chef サーバー名は 40 文字以内で、英数字とハイフンのみを使用できます。サポートされているリージョンを選択し、管理するノード数をサポートしているインスタンスタイプを選択します。サーバーを作成した後でも、必要に応じてインスタンスタイプを変更できます。このウォークスルーでは、米国西部 (オレゴン) で [m5.large] インスタンスタイプを作成します。[次へ] を選択します。



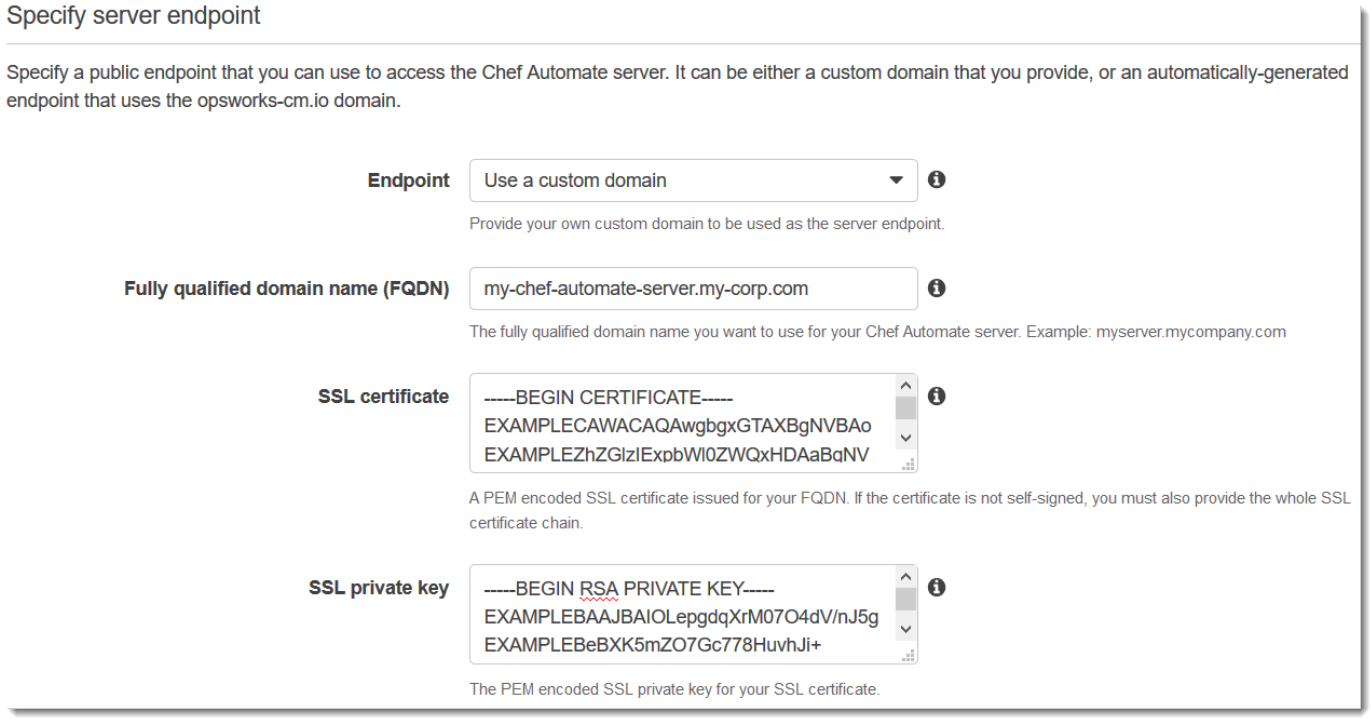
5. [Configure server (サーバーの構成)] ページで、キーペア名を指定しない場合は、[SSH key (SSH キー)] ドロップダウンリストでデフォルトの選択のままにします。



6. サーバーを独自のカスタムドメインで使用しない場合は、[Specify server endpoint (サーバーエンドポイントを指定)] をデフォルトの [Use an automatically-generated endpoint (自動的に生成されたエンドポイントを指定する)] のままにして、[Next (次へ)] を選択します。カスタムドメインを設定するには、次のステップに進みます。



7. カスタムドメインを使用するには、[Specify server endpoint (サーバーエンドポイントを指定)] で、ドロップダウンリストから [Use a custom domain (カスタムドメインを使用)] を選択します。



a. [Fully qualified domain name (FQDN) (完全修飾ドメイン名 (FQDN))] で、FQDN を指定します。使用するドメイン名を所有している必要があります。

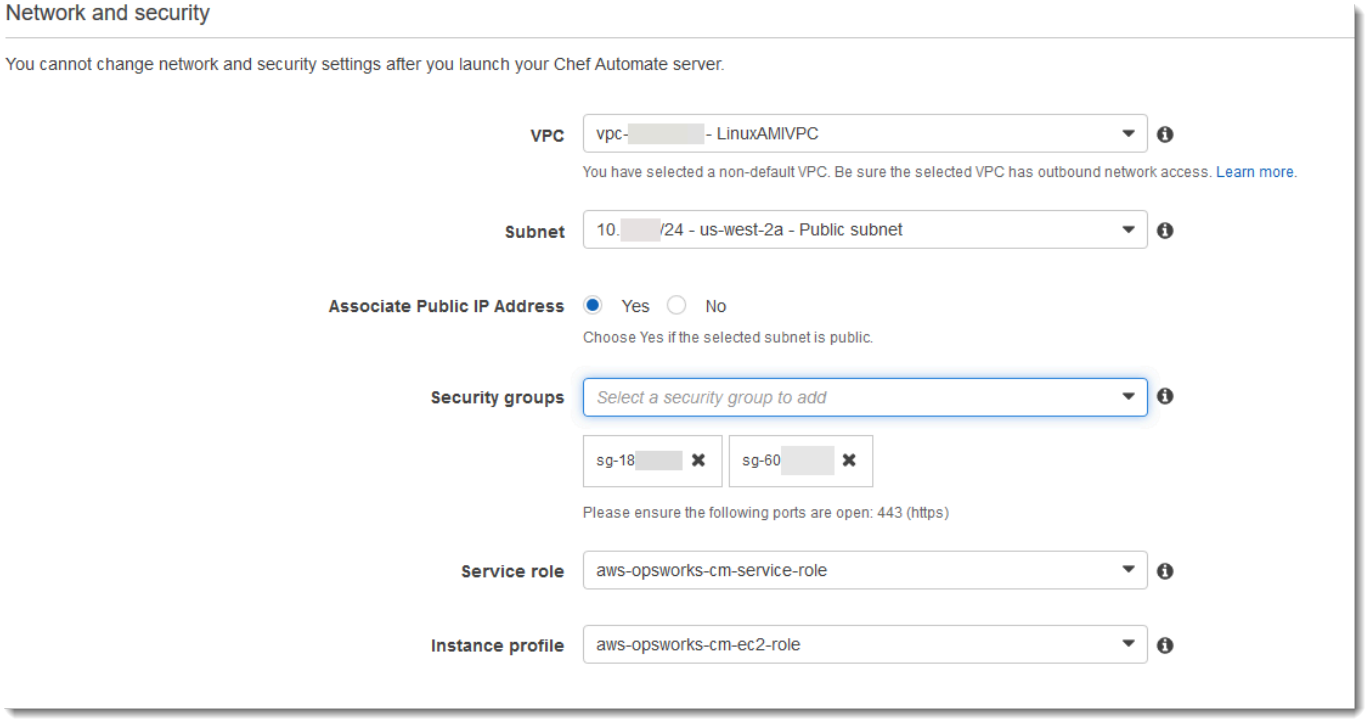
b. [SSL certificate] (SSL 証明書) に、PEM 形式の証明書全体を貼り付けます。この証明書は `-----BEGIN CERTIFICATE-----` で始まり、`-----END CERTIFICATE-----` で終わります。SSL 証明書のサブジェクトは、前のステップで入力した FQDN と一致する必要があります。

c. [SSL private key] (SSL プライベートキー) には、RSA プライベートキー全体を貼り付けます。このプライベートキーは `-----BEGIN RSA PRIVATE KEY-----` で始まり、`-----END RSA PRIVATE KEY-----` で終わります。SSL プライベートキーは、前のステップで入力した SSL 証明書のパブリックキーと一致する必要があります。[次へ] を選択します。

8. [Configure Advanced Settings] (詳細設定の設定) ページの [Network and Security] (ネットワークとセキュリティ) 領域で、VPC、サブネット、および 1 つ以上のセキュリティグループを選択します。VPC の要件を以下に示します。

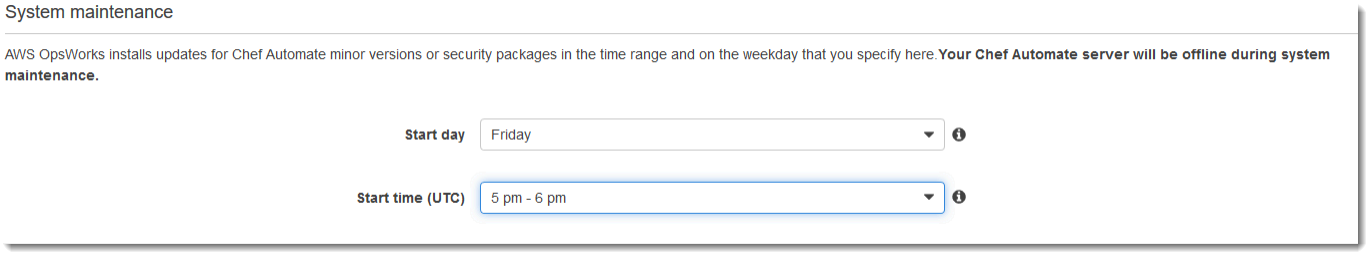
   - VPC には、少なくとも 1 つのパブリックサブネットが必要です。
   - DNS 解決を有効にする必要があります。
   - [Auto-assign public IP (パブリック IP の自動割り当て)] を、パブリックサブネット上で有効にする必要があります。

OpsWorks は、使用するセキュリティグループ、サービスロール、インスタンスプロファイルがまだない場合は、生成できます。サーバーは複数のセキュリティグループのメンバーにできます。このページから次に進んだ後に、Chef サーバーのネットワーク設定およびセキュリティ設定を変更することはできません。



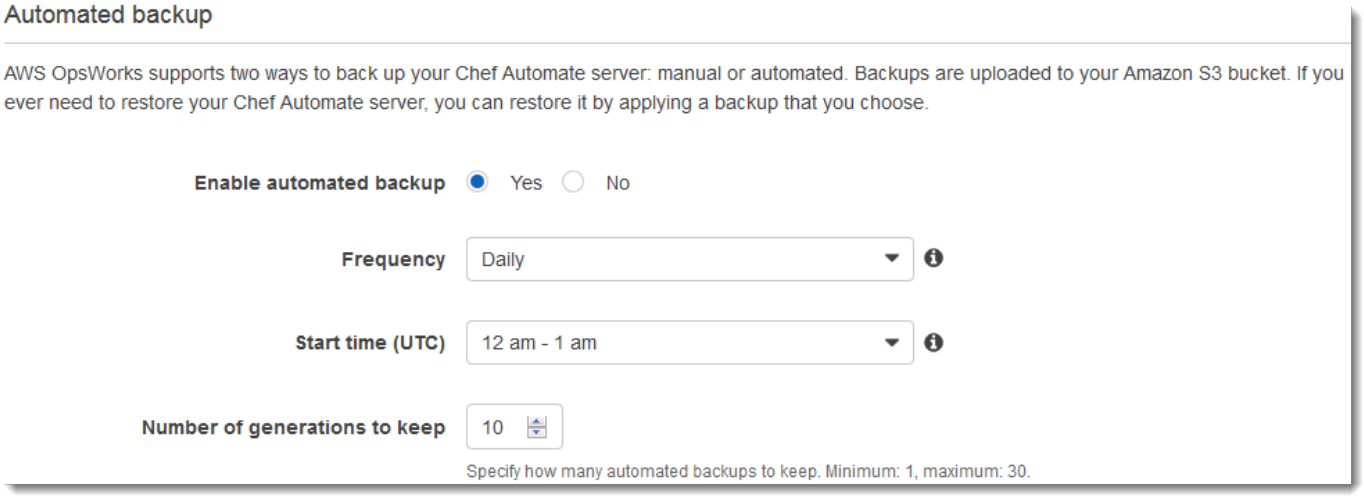
9. [System maintenance] セクションで、システムメンテナンスを開始する日付と時刻を設定します。システムメンテナンス中はサーバーがオフラインになることを想定する必要があるため、通常の営業時間内でサーバー需要が低い時刻を選択します。接続されたノードは、メンテナンスが完了するまで `pending-server` 状態になっています。

   メンテナンス時間は必須です。または APIs を使用して AWS マネジメントコンソール AWS CLI、開始日時を後で変更できます。



10. バックアップを設定します。デフォルトでは、自動バックアップが有効になっています。自動バックアップを開始する頻度と時刻を設定し、Amazon Simple Storage Service に保存するバッ

クアップの世代数を設定します。最大 30 個のバックアップが保持されます。最大値に達すると、 は最も古いバックアップ AWS OpsWorks for Chef Automate を削除して、新しいバックアップ用のスペースを確保します。



11. (オプション) [Tags] (タグ) で、サーバーおよび関連リソース (EC2 インスタンス、Elastic IP アドレス、セキュリティグループ、S3 バケット、バックアップなど) にタグを追加します。 AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーのタグ付けの詳細については、「」を参照してくださいAWS OpsWorks for Chef Automate リソースでのタグの使用。
12. 詳細設定が完了したら、[Next] を選択します。
13. [確認] ページで選択内容を確認します。サーバーを作成する準備ができたら、[Launch] を選択します。

    Chef サーバーの作成 OpsWorks を待っている間に、 に移動スターターキットを使用して Chef サーバーを設定するし、スターターキットと Chef Automate ダッシュボード認証情報をダウンロードします。これらをダウンロードするために、サーバーがオンラインになるまで待つ必要はありません。

    サーバーの作成が完了すると、 AWS OpsWorks for Chef Automate のホームページで、Chef サーバーが [online] のステータスになり、利用可能になります。サーバーがオンラインになると、Chef Automate ダッシュボードがサーバーのドメインで `https://your_server_name-random.region.opsworks-cm.io` の形式の URL で利用できます。

を使用して Chef Automate サーバーを作成する AWS CLI

AWS CLI コマンドを実行して AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを作成することは、 コンソールでのサーバーの作成とは異なります。コンソールで、使用する既存のロールを指定しない場

合、 はサービスロールとセキュリティグループ OpsWorks を作成します。では AWS CLI、セキュリティグループを指定しない場合は作成 OpsWorks できますが、サービスロールは自動的に作成されません。`create-server`コマンドの一部としてサービスロール ARN を指定する必要があります。コンソールで、 OpsWorks が Chef Automate サーバーを作成している間、Chef Automate スターターキットと Chef Automate ダッシュボードのサインイン認証情報をダウンロードします。を使用してサーバー AWS OpsWorks for Chef Automate を作成するときにこれを行うことはできないため AWS CLI、JSON 処理ユーティリティを使用して、新しい AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーがオンラインになった後の`create-server`コマンドの結果からサインイン認証情報とスターターキットを取得します。または、新しい AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーがオンラインになった後、コンソールでサインイン認証情報の新しいセットと新しいスターターキットを生成できます。

ローカルコンピュータで がまだ実行されていない場合は AWS CLI、AWS コマンドラインインターフェイスユーザーガイド AWS CLI のインストール手順に従って、 をダウンロードしてインストールします。このセクションでは、`create-server` コマンドで使用できるパラメータのすべては説明しません。`create-server` パラメータの詳細については、「`create-server` リファレンス」の「AWS CLI 」を参照してください。

1. 必ず前提条件、特に「VPC のセットアップ」を満たしてください。または、使用する既存の VPC があることを確認してください。Chef Automate サーバーを作成するには、サブネット ID が必要です。
2. 必要に応じて、Chef の中枢キーを OpenSSL を使用して作成し、そのキーをローカルコンピュータ上の安全で便利なファイルに保存してください。中枢キーは、`create-server` コマンドで指定しない場合は、サーバー作成プロセスの一部として自動的に生成されます。このステップをスキップする場合は、代わりに、`create-server` コマンドにより生成される Chef Automate 主要キーを取得できます。Chef Automate 主要キーの値は、RSA キーペアの公開鍵に相当するため、下記のコマンドを使用して主要キーを生成する場合は、必ず `-pubout` パラメータを含めてください。詳細については、ステップ 6 を参照してください。

   ```
   umask 077
   openssl genrsa -out "pivotal" 2048
   openssl rsa -in "pivotal" -pubout
   ```

3. サービスロールとインスタンスプロファイルを作成します。
4. アカウント内のサービスロールARNs を検索してコピーします。

   ```
   aws iam list-roles --path-prefix "/service-role/" --no-paginate
   ```

`list-roles` コマンドの結果内で、次のようなサービスロール ARN のエントリを探します。サービスロール ARN を書き留めます。Chef Automate サーバーを作成するにはこれらの値が必要です。

5. アカウントでインスタンスプロファイルの ARN を検索してコピーします。

```
aws iam list-instance-profiles --no-paginate
```

`list-instance-profiles` コマンドの結果内で、次のようなインスタンスプロファイル ARN のエントリを探します。インスタンスプロファイルの ARN を書き留めます。Chef Automate サーバーを作成するにはこれらの値が必要です。

6. `create-server` コマンドを実行して AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを作成します。

   - `--engine` の値は、`ChefAutomate`、`--engine-model` は、`Single`、`--engine-version` は `12` です。
   - サーバー名は、 AWS アカウント内で各リージョン内で一意である必要があります。サーバー名は文字で始める必要があります。その後は文字、数字、またはハイフン (-) を最大 40 文字まで使用できます。
   - ステップ 4 と 5 でコピーしたインスタンスプロファイル ARN とサービスロール ARN を使用します。
   - 有効なインスタンスタイプは `m5.large`、`r5.xlarge`、または `r5.2xlarge` です。これらのインスタンスタイプの仕様の詳細については、「Amazon EC2 ユーザーガイド」の「インスタンスタイプ」を参照してください。
   - `--engine-attributes` パラメータはオプションです。いずれかまたは両方の値を指定しない場合、サーバー作成プロセスで値が生成されます。`--engine-attributes` を追加する場合は、ステップ 2 で生成した `CHEF_AUTOMATE_PIVOTAL_KEY` 値、`CHEF_AUTOMATE_ADMIN_PASSWORD`、またはその両方を指定します。

     `CHEF_AUTOMATE_ADMIN_PASSWORD` の値を設定しない場合、`create-server` レスポンスの一部としてパスワードが生成され返されます。コンソールでスターターキットをもう一度ダウンロードして、このパスワードを再生成することもできます。パスワードの最小の長さは 8 文字、最大は 32 文字です。パスワードには、文字、数字、および特殊文字 (!/@#$%^+=_) を使用できます。パスワードは、少なくとも 1 つの小文字、1 つの大文字、1 つの数字、および 1 つの特殊文字を含む必要があります。

- SSH キーペアはオプションですが、Chef Automate ダッシュボードの管理者パスワードをリセットする必要がある場合に Chef Automate サーバーに接続することができます。SSH キーペアの作成の詳細については、「Amazon EC2 User Guide」(Amazon EC2 ユーザーガイド) の「Amazon EC2 Key Pairs」(Amazon EC2のキーペア) を参照してください。
- カスタムドメインを使用するには、コマンドに以下のパラメータを追加します。それ以外の場合は、Chef Automate サーバー作成プロセスによって自動的にエンドポイントが生成されます。カスタムドメインを構成するには、3 つのパラメータすべてが必要です。これらのパラメータを使用するための追加の要件については、CM API リファレンスのCreateServer OpsWorks 」を参照してください。
  - `--custom-domain` - サーバーのオプションのパブリックエンドポイント (`https://aws.my-company.com` など)。
  - `--custom-certificate` - PEM 形式の HTTPS 証明書。値には、単一の自己署名証明書、または証明書チェーンを指定できます。
  - `--custom-private-key` - HTTPS を使用してサーバーに接続するための PEM 形式のプライベートキー。プライベートキーは暗号化しないでください。パスワードやパスフレーズで保護することはできません。
- 週 1 回のシステムメンテナンスが必要です。次の形式で有効な値を指定する必要があります: `DDD:HH:MM`。指定時刻は協定世界時 (UTC) です。`--preferred-maintenance-window` の値を指定しない場合、火曜日、水曜日、または金曜日の 1 時間がランダムでデフォルト値になります。
- `--preferred-backup-window` の有効な値は次の形式のいずれかで指定する必要があります: 日次バックアップの場合は `HH:MM`、週次バックアップの場合は `DDD:HH:MM`。指定時刻は UTC です。デフォルト値は日次で開始時間はランダムです。自動バックアップを無効にするには、代わりにパラメータ `--disable-automated-backup` を追加します。
- `--security-group-ids` に、1 つ以上のセキュリティグループ ID をスペースで区切って入力します。
- `--subnet-ids` には、サブネット ID を入力します。

```
aws opsworks-cm create-server --engine "ChefAutomate" --engine-model "Single"
 --engine-version "12" --server-name "server_name" --instance-profile-arn
 "instance_profile_ARN" --instance-type "instance_type" --engine-attributes
 '{"CHEF_AUTOMATE_PIVOTAL_KEY":"pivotal_key","CHEF_AUTOMATE_ADMIN_PASSWORD":"password"}'
 --key-pair "key_pair_name" --preferred-maintenance-window
 "ddd:hh:mm" --preferred-backup-window "ddd:hh:mm" --security-group-
```

```
ids security_group_id1 security_group_id2 --service-role-arn "service_role_ARN" --
subnet-ids subnet_ID
```

以下に例を示します。

```
aws opsworks-cm create-server --engine "ChefAutomate" --engine-
model "Single" --engine-version "12" --server-name "automate-06" --
instance-profile-arn "arn:aws:iam::12345678912:instance-profile/aws-
opsworks-cm-ec2-role" --instance-type "m5.large" --engine-attributes
 '{"CHEF_AUTOMATE_PIVOTAL_KEY":"MZZE...Wobg","CHEF_AUTOMATE_ADMIN_PASSWORD":"zZZzDj2DLYXSZF
 --key-pair "amazon-test" --preferred-maintenance-window "Mon:08:00" --preferred-
backup-window "Sun:02:00" --security-group-ids sg-b00000001 sg-b0000008 --service-
role-arn "arn:aws:iam::12345678912:role/service-role/aws-opsworks-cm-service-role"
 --subnet-ids subnet-300aaa00
```

次の例では、カスタムドメインを使用する Chef Automate サーバーを作成します。

```
aws opsworks-cm create-server --engine "ChefAutomate" --engine-model "Single" --
engine-version "12" \
    --server-name "my-custom-domain-server" \
    --instance-profile-arn "arn:aws:iam::12345678912:instance-profile/aws-opsworks-
cm-ec2-role" \
    --instance-type "m5.large" \
    --engine-attributes
 '{"CHEF_AUTOMATE_PIVOTAL_KEY":"MZZE...Wobg","CHEF_AUTOMATE_ADMIN_PASSWORD":"zZZzDj2DLYXSZF
 \
    --custom-domain "my-chef-automate-server.my-corp.com" \
    --custom-certificate "-----BEGIN CERTIFICATE----- EXAMPLEqEXAMPLE== -----END
 CERTIFICATE-----" \
    --custom-private-key "-----BEGIN RSA PRIVATE KEY----- EXAMPLEqEXAMPLE= -----END
 RSA PRIVATE KEY-----" \
    --key-pair "amazon-test" \
    --preferred-maintenance-window "Mon:08:00" \
    --preferred-backup-window "Sun:02:00" \
    --security-group-ids sg-b00000001 sg-b0000008 \
    --service-role-arn "arn:aws:iam::12345678912:role/service-role/aws-opsworks-cm-
service-role" \
    --subnet-ids subnet-300aaa00
```

以下の例では、2 つのタグ `Stage: Production` および `Department: Marketing` を追加する Chef Automate サーバーを作成します。 AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーでのタ

グの追加と管理の詳細については、このガイドAWS OpsWorks for Chef Automate リソースでのタグの使用の「」を参照してください。

```
aws opsworks-cm create-server --engine "ChefAutomate" --engine-model "Single" --
engine-version "12" \
    --server-name "my-test-chef-server" \
    --instance-profile-arn "arn:aws:iam::12345678912:instance-profile/aws-opsworks-
cm-ec2-role" \
    --instance-type "m5.large" \
    --engine-attributes
 '{"CHEF_AUTOMATE_PIVOTAL_KEY":"MZZE...Wobg","CHEF_AUTOMATE_ADMIN_PASSWORD":"zZZzDj2DLYXSZF
 \
    --key-pair "amazon-test" \
    --preferred-maintenance-window "Mon:08:00" \
    --preferred-backup-window "Sun:02:00" \
    --security-group-ids sg-b00000001 sg-b0000008 \
    --service-role-arn "arn:aws:iam::12345678912:role/service-role/aws-opsworks-cm-
service-role" \
    --subnet-ids subnet-300aaa00 \
    --tags [{\"Key\":\"Stage\",\"Value\":\"Production\"},{\"Key\":\"Department\",
\"Value\":\"Marketing\"}]
```

7. AWS OpsWorks for Chef Automate 新しいサーバーの作成には約 15 分かかります。create-server コマンドの出力を閉じたり、シェルセッションを閉じたりしないでください。今後表示されない重要な情報が出力に含まれている場合があります。create-server の結果からパスワードとスターターキットを取得するには、次のステップに進みます。

   サーバーでカスタムドメインを使用している場合は、create-server コマンドの出力で Endpoint 属性の値をコピーします。以下に例を示します。

   ```
   "Endpoint": "automate-07-exampleexample.opsworks-cm.us-east-1.amazonaws.com"
   ```

8. がキーとパスワード AWS OpsWorks for Chef Automate を生成することを選択した場合は、jq などの JSON プロセッサを使用してcreate-server、結果から使用可能な形式で抽出できます。jq をインストールした後、以下のコマンドを実行して中枢キー、Chef Automate ダッシュボード管理者パスワード、およびスターターキットを抽出できます。ステップ 4 で独自の中枢キーとパスワードを指定しなかった場合は、抽出した中枢キーと管理者パスワードを使いやすく安全な場所に保存してください。

   ```
   #Get the Chef password:
   ```

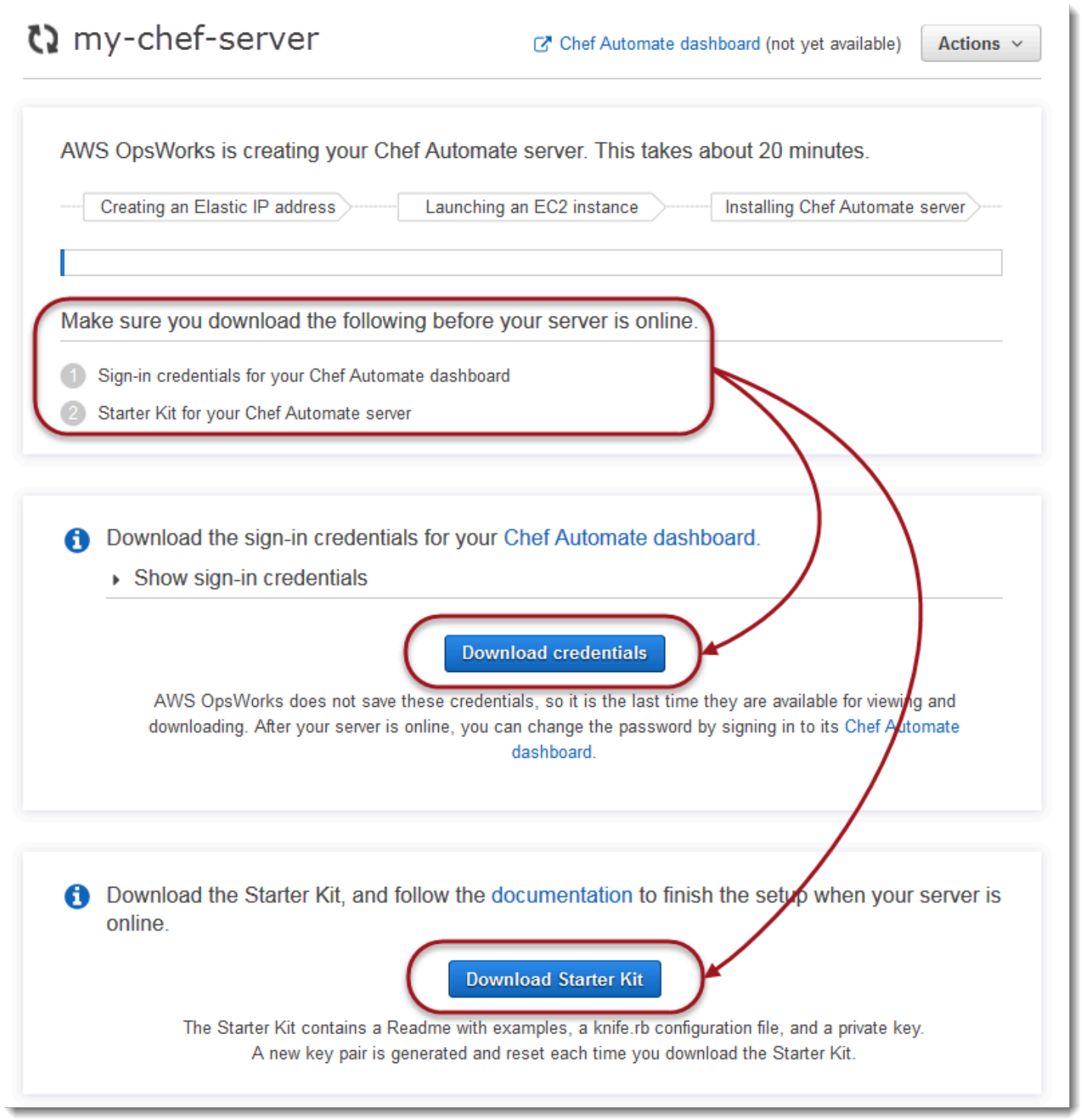
```
cat resp.json | jq -r '.Server.EngineAttributes[] | select(.Name ==
 "CHEF_AUTOMATE_ADMIN_PASSWORD") | .Value'

#Get the Chef Pivotal Key:
cat resp.json | jq -r '.Server.EngineAttributes[] | select(.Name ==
 "CHEF_AUTOMATE_PIVOTAL_KEY") | .Value'

#Get the Chef Starter Kit:
cat resp.json | jq -r '.Server.EngineAttributes[] | select(.Name ==
 "CHEF_STARTER_KIT") | .Value' | base64 -D > starterkit.zip
```

9. オプションで、`create-server`コマンド結果からスターターキットを抽出しなかった場合は、AWS OpsWorks for Chef Automate コンソールのサーバーのプロパティページから新しいスターターキットをダウンロードできます。新しいスターターキットをダウンロードすると、Chef Automate ダッシュボードの管理者パスワードがリセットされます。
10. カスタムドメインを使用していない場合は、次のステップに進みます。サーバーでカスタムドメインを使用している場合は、エンタープライズの DNS 管理ツールで CNAME エントリを作成して、ステップ 7 でコピーした AWS OpsWorks for Chef Automate エンドポイントにカスタムドメインをポイントします。このステップを完了するまで、カスタムドメインを使用するサーバーにアクセスしたりサインインしたりすることはできません。
11. サーバーの作成プロセスが完了したら、「the section called “設定を完了してクックブックをアップロードする”」に進みます。

スターターキットを使用して Chef サーバーを設定する

> **Important**
>
> AWS OpsWorks for Chef Automate は 2024 年 5 月 5 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。既存のお客様は、 Chef SaaS または代替ソリューションに移行することをお勧めします。ご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Chef サーバー作成の進行中に、 AWS OpsWorks for Chef Automate コンソールでプロパティページを開きます。新しい Chef サーバーの初回操作時に、[Properties] ページで 2 つの必須項目をダウンロードするように求められます。Chef サーバーがオンラインになる前に、これらの項目をダウンロードします。新しいサーバーがオンラインになった後は、ダウンロードボタンは使用できません。



- [Sign-in credentials for the Chef server (Chef サーバー用のサインイン認証情報)]。これらの認証情報を使用して Chef Automate ダッシュボードにサインインします。ここでは、ワークフローやコンプライアンススキャンなどの Chef Automate のプレミアム機能を使用します。 OpsWorks は、

これらの認証情報を保存しません。これは、表示およびダウンロードできる最後の時間です。必要であれば、これらの認証情報で提供されたパスワードをサインイン後に変更できます。

- Starter Kit (スターターキット)。スターターキットには、サンプル付きの README ファイル、`knife.rb` の設定ファイル、およびプライマリユーザーまたは主要ユーザー用のプライベートキーが含まれています。スターターキットをダウンロードするごとに、新しいキーペアが生成され、以前のキーはリセットされます。

Starter Kit .zip ファイルには、新しいサーバーでのみ機能する認証情報に加えて、任意の AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーで動作する Chef リポジトリの簡単な例が含まれています。Chef リポジトリには、Chef で管理するノード用のクックブック、ロール、設定ファイル、および他のアーティファクトが保存されます。このリポジトリは、バージョン管理システム (Git など) に保存し、ソースコードとして扱うことをお勧めします。Git で追跡されるように Chef リポジトリをセットアップする方法に関する情報およびサンプルについては、Chef ドキュメントの「About the chef-repo」(chef-repo について) を参照してください。

前提条件

1. サーバー作成の進行中に、Chef サーバーのサインイン認証情報をダウンロードし、セキュアだが便利な場所に保存します。
2. スターターキットをダウンロードし、スターターキットの .zip ファイルをワークスペースディレクトリに解凍します。スターターキットのプライベートキーは共有しないでください。他のユーザーが Chef サーバーを管理する場合は、後で Chef Automate ダッシュボードでそのユーザーを管理者として追加します。
3. [Chef Workstation] (以前はChef Development Kit または Chef DK として知られていた)をダウンロードして、Chef サーバおよびノードの管理に使用するコンピュータにインストールします。`knife` ユーティリティは Chef Workstation の一部です。その手順については、Chef のウェブサイトにある「Install Chef Workstation」(Chef Workstationのインストール) を参照してください。

スターターキットの内容を見る

スターターキットの内容は以下のとおりです。

- `cookbooks/` - 作成するクックブックのディレクトリ。`cookbooks/` フォルダには、Chef スーパーマーケットウェブサイトの `nginx` クックブックに依存する `opsworks-webserver` クックブック、ラッパークックブックが含まれています。クックブックの依存関係が `cookbooks/` の

ディレクトリ内で利用できない場合、Policyfile.rb のデフォルトでは Chef supermarket を二次ソースとして使用します。

- Policyfile.rb - ノードのポリシーになるクックブック、依存関係、属性を定義する Ruby ベースのポ リシーファイル。
- userdata.sh および userdata.ps1 - Chef Automate サーバーの起動後に、ユーザーデータファイルを使用してノードを自動的に関連付けることができます。userdata.sh は Linux ベースのノードのブートストラップ用、userdata.ps1 は Windows ベースのノード用です。
- Berksfile - Berkshelf と berks のコマンドを使用してクックブックとその依存関係をアップロードする場合は、このファイルを使用できます。このチュートリアルでは、Policyfile.rb と Chef コマンドを使用して、クックブック、依存関係、属性をアップロードします。
- README.md - スターターキットを使用して Chef Automate サーバーを初めて設定する方法について説明する Markdown ベースのファイル。
- .chef - knife 設定ファイル (knife.rb) とシークレット認証キーファイル (.pem) を含む隠しディレクトリ。
  - .chef/knife.rb - knife 設定ファイル (knife.rb)。このknife.rbファイルは、Chef のknifeツールオペレーションが AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーに対して実行されるように設定されています。
  - .chef/ca_certs/opsworks-cm-ca-2020-root.pem - OpsWorksに付属している、認証機関 (CA) による署名付きの SSL プライベートキー。このキーによって、サーバーで管理されるノード上の Chef Infra クライアントエージェントに対して、サーバーが自身を識別できるようになります。

Chef リポジトリを設定する

Chef リポジトリには複数のディレクトリが置かれています。スターターキットの各ディレクトリには、そのディレクトリの目的、および Chef でシステムを管理するための使用方法が記述されている README ファイルがあります。Chef サーバーにクックブックをインストールするには、2 つの方法があります。knife コマンドを実行する方法と、Chef コマンドを実行する方法です。後者のコマンドは、ポリシーファイル (Policyfile.rb) をサーバーにアップロードし、指定されたクックブックをダウンロードしてインストールします。このチュートリアルでは、Chef コマンドと Policyfile.rb を使用してクックブックをサーバーにインストールします。

1. クックブックを保存するためのディレクトリ (chef-repo など) をローカルコンピュータ上に作成します。このリポジトリにクックブック、ロール、および他のファイルを追加した後に、バー

ジョニングされているセキュアなシステム (CodeCommit、Git、Amazon S3 など) にリポジトリをアップロードまたは保存することをお勧めします。

2. chef-repo ディレクトリに、以下のディレクトリを作成します。

   - cookbooks/ - クックブックを保存する。
   - roles/ - ロールを .rb 形式または .json 形式で保存します。
   - environments/ - 環境を .rb 形式または .json 形式で保存します。

Policyfile.rb を使用してリモートソースからクックブックを取得する

このセクションでは、クックブックを指定するように Policyfile.rb を編集してから、そのファイルをサーバーにアップロードしてクックブックをインストールする Chef コマンドを実行します。

1. スターターキットの Policyfile.rb を表示します。デフォルトでは Policyfile.rb には、opsworks-webserver ラッパークックブックが含まれています。これは、Chef Supermarket のウェブサイトで入手可能な nginx クックブックの依存関係となります。nginx は、管理対象ノードにウェブサーバーをインストールして設定するクックブックです。また、管理対象ノードに Chef Infra クライアントエージェントをインストールする、必須の chef-client クックブックも指定されています。

   Policyfile.rb は、ノードのコンプライアンススキャンの設定に使用できるオプションの Chef Audit クックブックも参照しています。コンプライアンススキャンの設定と管理対象ノードのコンプライアンス結果の取得の詳細については、「でのコンプライアンススキャン AWS OpsWorks for Chef Automate」を参照してください 今すぐコンプライアンススキャンと監査を設定しない場合は、'audit' セクションから run_list を削除します。ファイルの末尾に audit クックブックの属性を指定しないでください。

```
# Policyfile.rb - Describe how you want Chef to build your system.
#
# For more information about the Policyfile feature, visit

# https://docs.chef.io/policyfile.html


# A name that describes what the system you're building with Chef does.

name 'opsworks-demo-webserver'
```

```
# The cookbooks directory is the preferred source for external cookbooks

default_source :chef_repo, "cookbooks/" do |s|

  s.preferred_for "nginx", "windows", "chef-client", "yum-epel", "seven_zip",
                  "build-essential", "mingw", "ohai", "audit", "logrotate", "cron"

end
# Alternative source
default_source :supermarket


# run_list: chef-client runs these recipes in the order specified.

run_list  'chef-client',
          'opsworks-webserver',
          'audit'
# add 'ssh-hardening' to your runlist to fix compliance issues detected by the ssh-
baseline profile

# Specify a custom source for a single cookbook:

cookbook 'opsworks-webserver', path: 'cookbooks/opsworks-webserver'


# Policyfile defined attributes

# Define audit cookbook attributes
default["opsworks-demo"]["audit"]["reporter"] = "chef-server-automate"
default["opsworks-demo"]["audit"]["profiles"] = [
  {
    "name": "DevSec SSH Baseline",
    "compliance": "admin/ssh-baseline"
  }
]
```

以下に示しているのは、現時点で Policyfile.rb ウェブサーバーのみを設定する場合に、audit クックブックとその属性を削除した nginx の例です。

```
# Policyfile.rb - Describe how you want Chef to build your system.
#
# For more information on the Policyfile feature, visit
# https://docs.chef.io/policyfile.html
```

```
# A name that describes what the system you're building with Chef does.
name 'opsworks-demo-webserver'

# Where to find external cookbooks:
default_source :supermarket

# run_list: chef-client will run these recipes in the order specified.
run_list  'chef-client',
          'opsworks-webserver'

# Specify a custom source for a single cookbook:
cookbook 'opsworks-webserver', path: 'cookbooks/opsworks-webserver'
```

Policyfile.rb に変更を加えた場合は、必ずこのファイルを保存してください。

2. Policyfile.rb に定義されているクックブックをダウンロードしてインストールします。

```
chef install
```

すべてのクックブックはクックブックの metadata.rb ファイルでバージョニングされています。クックブックを変更するたびに metadata.rb にあるクックブックのバージョンを上げる必要があります。

3. コンプライアンススキャンを設定し、audit クックブックの情報をポリシーファイルに保存した場合は、ポリシー opsworks-demo をサーバーにプッシュします。

```
chef push opsworks-demo
```

4. ステップ 3 が完了したら、ポリシーのインストールを確認します。以下のコマンドを実行してください。

```
chef show-policy
```

結果は以下のようになります。

```
opsworks-demo-webserver
=======================
* opsworks-demo:  ec0fe46314
```

5. これで、Chef Automate サーバーにノードを追加 (ブートストラップ) する準備ができました。ノードの関連付けを自動化するには、でノードを自動的に追加する AWS OpsWorks for Chef Automate のステップに従うか、または ノードを個別に追加します のステップに従ってノードを 1 つずつ追加します。

(代替) Berkshelf を使用してリモートソースからクックブックを取得する

Berkshelf は、クックブックとその依存関係を管理するためのツールです。ローカルストレージにクックブックをインストールするために `Policyfile.rb` の代わりに Berkshelf を使用する場合は、前のセクションの代わりにこのセクションの手順を使用します。Chef サーバーで使用するクックブックとそのバージョンを指定し、クックブックをアップロードできます。スターターキットには、クックブックの一覧表示に使用できる `Berksfile` というファイルが含まれています。

1. 使用を開始するには、含まれている Berksfile に `chef-client` クックブックを追加します。`chef-client` クックブックは、Chef Automate サーバーに接続する各ノードで Chef Infra クライアントエージェントソフトウェアを設定します。このクックブックの詳細については、Chef Supermarket にある「Chef Client Cookbook」(Chef クライアントクックブック) を参照してください。
2. テキストエディタを使用して、ウェブサーバーアプリケーションをインストールする Berksfile に別のクックブックを追加します。たとえば、Apache ウェブサーバーをインストールする `apache2` クックブックです。Berksfile は以下のようになります。

   ```
   source 'https://supermarket.chef.io'
   cookbook 'chef-client'
   cookbook 'apache2'
   ```

3. そのクックブックをローカルコンピュータにダウンロードしてインストールします。

   ```
   berks install
   ```

4. そのクックブックを Chef サーバーにアップロードします。

   Linux では、次のコマンドを実行します。

   ```
   SSL_CERT_FILE='.chef/ca_certs/opsworks-cm-ca-2020-root.pem' berks upload
   ```

   Windows では、PowerShell セッションで次の Chef Workstation コマンドを実行します。コマンドを実行する前に、PowerShell の実行ポリシーを `RemoteSigned` に設定しておきま

す。PowerShell で Chef Workstation のユーティリティコマンドを利用できるように、chef shell-init を追加します。

```
$env:SSL_CERT_FILE="ca_certs\opsworks-cm-ca-2020-root.pem"
chef shell-init berks upload
Remove-Item Env:\SSL_CERT_FILE
```

5. Chef Automate サーバーで現在使用可能なクックブックのリストを表示して、クックブックがインストールされていることを確認します。そのためには、以下の knife コマンドを実行します。

   AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーで管理するノードを追加する準備ができました。

```
knife cookbook list
```

(オプション) カスタムドメインを使用するように **knife** を設定します。

Chef Automate サーバーがカスタムドメインを使用している場合は、サーバーの証明書チェーンに署名したルート CA の PEM 証明書を追加するか、証明書が自己署名の場合はサーバー PEM 証明書を追加する必要があります。ca_certs は、Chef knife ユーティリティによって信頼される認証機関 (CA) を含む chef/ のサブディレクトリです。

カスタムドメインを使用していない場合、またはカスタム証明書がオペレーティングシステムで信頼されているルート CA によって署名されている場合は、このセクションを省略できます。それ以外の場合は、次のステップで説明するように、Chef Automate サーバーの SSL 証明書を信頼するように knife を設定します。

1. 以下のコマンドを実行してください。

```
knife ssl check
```

   結果が次のような場合は、この手順の残りの部分をスキップして、「Chef サーバーで管理するノードを追加する」に進みます。

```
Connecting to host my-chef-automate-server.my-corp.com:443
          Successfully verified certificates from 'my-chef-automate-server.my-
corp.com'
```

次のようなエラーメッセージが表示された場合は、次のステップに進みます。

```
Connecting to host my-chef-automate-server.my-corp.com:443
          ERROR: The SSL certificate of my-chef-automate-server.my-corp.com could
 not be verified.
          ...
```

2. knife ssl fetch を実行して、 AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーの証明書を信頼します。または、サーバーのルート CA 証明書 (PEM 形式) を、trusted_certs_dir の出力の knife ssl check の値であるディレクトリに手動でコピーすることもできます。デフォルトでは、このディレクトリはスターターキットの .chef/ca_certs/ にあります。出力は次のようになります。

```
WARNING: Certificates from my-chef-automate-server.my-corp.com will be fetched and
 placed in your trusted_cert
          directory (/Users/username/starterkit/.chef/../.chef/ca_certs).

          Knife has no means to verify these are the correct certificates. You
 should
          verify the authenticity of these certificates after downloading.

          Adding certificate for my-chef-automate-server in /Users/users/
starterkit/.chef/../.chef/ca_certs/servv-aqtswxu20swzkjgz.crt
          Adding certificate for MyCorp_Root_CA in /Users/users/
starterkit/.chef/../.chef/ca_certs/MyCorp_Root_CA.crt
```

3. knife ssl check をもう一度実行します。出力は次のようになります。

```
Connecting to host my-chef-automate-server.my-corp.com:443
          Successfully verified certificates from 'my-chef-automate-server.my-
corp.com'
```

これで、Chef Automate サーバーで knife を使用する準備ができました。

Chef サーバーで管理するノードを追加する

> **Important**
>
> AWS OpsWorks for Chef Automate は 2024 年 5 月 5 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。既存のお客様は、 Chef SaaS または代替ソリューションに移行することをお勧めします。ご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

`chef-client` エージェントは、サーバーに関連付けられている物理コンピュータまたは仮想コンピュータ ([nodes] (ノード) と呼ばれる) で Chef レシピを実行します。オンプレミスのコンピュータまたはインスタンスを Chef サーバーに接続して管理できます (サポートされているオペレーティングシステムがそのノードで実行されている場合)。Chef サーバーにノードを登録すると、そのノードに `chef-client` エージェントソフトウェアがインストールされます。

次の方法を使用してノードを追加できます。

- このチュートリアルでは、Chef サーバが管理できるように、EC2 インスタンスを追加またはブートストラップする `knife` コマンドを個別に実行する方法を説明します。詳細については、「ノードを個別に追加します」を参照してください。
- スクリプトを使って自動的にノードを追加し、Chefサーバとノードの自動関連付けを行います。スターターキットのコードでは、ユーザーの介入なしに複数のノードを自動的に追加する方法を示しています。詳細については、「でノードを自動的に追加する AWS OpsWorks for Chef Automate」を参照してください。

トピック

- ノードを個別に追加します
- でノードを自動的に追加する AWS OpsWorks for Chef Automate

ノードを個別に追加します

> **Important**
>
> AWS OpsWorks for Chef Automate は 2024 年 5 月 5 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。既存のお客様は、 Chef SaaS または代替

ソリューションに移行することをお勧めします。ご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

この節では、ChefサーバがEC2インスタンスを管理できるようにEC2インスタンスを追加、またはブートストラップするknife コマンドの実行方法を説明します。

AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーに関連付けられているノードでサポートされている chef-client の最小バージョンは 13.x です。最新の安定したchef-clientバージョンを実行することをお勧めします。

トピック

- (オプション) Chef Automate サーバールート CA の URL を指定します。
- サポートされるオペレーティングシステム
- knife を使用してノードを追加する

(オプション) Chef Automate サーバールート CA の URL を指定します。

サーバーがカスタムドメインと証明書を使用している場合は、ユーザーデータスクリプトの ROOT_CA_URL 変数を編集して、サーバーのルート CA 証明書 (PEM 形式) を取得するために使用できるパブリック URL にする必要があります。次の AWS CLI コマンドは、ルート CA を Amazon S3 バケットにアップロードし、1 時間使用できる署名付き URL を生成します。

1. ルート CA 証明書 (PEM 形式) を S3 にアップロードします。

```
aws s3 cp ROOT_CA_PEM_FILE_PATH s3://bucket_name/
```

2. ルート CA をダウンロードするために 1 時間 (この例では 3600 秒) 使用できる署名付き URL を生成します。

```
aws s3 presign s3://bucket_name/ROOT_CA_PEM_FILE_NAME --expires-in 3600
```

3. 署名付き URL の値を使用してユーザーデータスクリプトの ROOT_CA_URL 変数を編集します。

サポートされるオペレーティングシステム

ノードでサポートされているオペレーティングシステムの最新の一覧については、[Chef website] (Chef のウェブサイト) を参照してください。

knife を使用してノードを追加する

knife-ec2 プラグインは Chef Workstation に含まれています。knife-ec2 に慣れている場合は、knife bootstrap ではなくそれを使用して、新しい EC2 インスタンスをプロビジョニングおよびブートストラップできます。慣れていない場合は、新しい EC2 インスタンスを起動した後に、このセクションの手順に従います。

管理するノードを追加するには

1. 次の knife bootstrap コマンドを実行します。このコマンドは、Chef サーバーで管理されるノードに EC2 インスタンスをブートストラップします。「the section called “Policyfile.rb を使用してリモートソースからクックブックを取得する”」でインストールした nginx クックブックからレシピを実行するように、Chef サーバーに指示していることに注意してください。knife bootstrap コマンドを使用したノードの追加に関する詳細については、Chef ドキュメントの「Bootstrap a Node」(ノードのブートストラップ) を参照してください。

   このステップの knife コマンドでノードのオペレーティングシステムに対して有効なユーザー名を次の表に示します。root と ec2-user のどちらでも動作しない場合は、AMI プロバイダーに確認してください。Linux ベースのインスタンスへの接続の詳細については、AWS ドキュメントの「Connecting to Your Linux Instance Using SSH」(SSH を使用した Linux インスタンスへの接続) を参照してください。

   ノードのオペレーティングシステムで有効なユーザー名の値

オペレーティングシステム	有効なユーザー名
Amazon Linux	ec2-user
Red Hat Enterprise Linux 5	root、または ec2-user
Ubuntu	ubuntu
Fedora	fedora、または ec2-user
SUSE Linux	root、または ec2-user

```
knife bootstrap INSTANCE_IP_ADDRESS -N INSTANCE_NAME -x USER_NAME --sudo --run-list
 "recipe[nginx]"
```

2. 次のコマンド ([*INSTANCE_NAME*] (インスタンス名) は追加したインスタンスの名前に置き換えます) を実行して、新しいノードが追加されていることを確認します。

```
knife client show INSTANCE_NAME
knife node show INSTANCE_NAME
```

でノードを自動的に追加する AWS OpsWorks for Chef Automate

> **Important**
>
> AWS OpsWorks for Chef Automate は 2024 年 5 月 5 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。既存のお客様は、 Chef SaaS または代替ソリューションに移行することをお勧めします。ご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このトピックでは、Amazon Elastic Compute Cloud (Amazon EC2) ノードを Chef サーバーに自動的に追加する方法を説明します。スターターキットのコードでは、ユーザーの介入なしに複数のノードを自動的に追加する方法を示しています。ユーザーの介入なしに (自動で) で新しいノードを関連付ける方法としては、Chef クライアントクックブックを設定することをお勧めします。スターターキットの `userdata` スクリプトを使用し、`run_list` スクリプトの `userdata` セクションを変更することも、または、ノードに適用するクックブックの `Policyfile.rb` を変更することもできます。`chef-client` エージェントを実行する前に、Chef Client クックブックを Chef サーバーにアップロードし、以下のサンプルコマンドで示しているように (例えば HTTPD ロールを使用して)、`chef-client` エージェントをサービスモードでインストールします。

```
chef-client -r "chef-client,role[httpd]"
```

Chef サーバーと通信するには、`chef-client` エージェントソフトウェアは、クライアントノードのパブリックキーへのアクセスを許可されている必要があります。Amazon EC2 でパブリックキーとプライベートキーのペアを生成し、そのパブリックキーを OpsWorks `associate-node`ノード名で API コールに渡すことができます。スターターキットに含まれているスクリプトは、お客様の組織名、サーバー名、サーバーエンドポイントを収集します。これにより、そのノードが Chef サーバーに関連付けられ、プライベートキーを照合した後に、そのノードで実行される `chef-client` エージェントソフトウェアがサーバーと通信できるようになります。

AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーに関連付けられているノードでサポートされている `chef-client` の最小バージョンは 13.x です。最新の安定した`chef-client`バージョンを実行することをお勧めします。

ノードの関連付けを解除する方法については、このガイドAWS OpsWorks for Chef Automate サーバーからノードの関連付けを解除するの「」と AWS OpsWorks for Chef Automate API ドキュメントの`disassociate-node`「」を参照してください。

トピック

- サポートされるオペレーティングシステム
- ステップ 1: インスタンスプロファイルとして使用する IAM ロールを作成します
- ステップ 2: Chef クライアントクックブックをインストールする
- ステップ 3: 自動関連付けスクリプトを使用してインスタンスを作成する
- chef-client の繰り返し実行を自動化する他の方法
- 関連トピック

サポートされるオペレーティングシステム

ノードでサポートされているオペレーティングシステムの最新の一覧については、[Chef website] (Chef のウェブサイト) を参照してください。

ステップ 1: インスタンスプロファイルとして使用する IAM ロールを作成します

EC2 インスタンスプロファイルとして使用する AWS Identity and Access Management (IAM) ロールを作成し、次のポリシーを IAM ロールにアタッチします。このポリシーでは、ノード登録時に AWS OpsWorks for Chef Automate (`opsworks-cm`) API が EC2 インスタンスと通信することが許可されています。インスタンスプロファイルの詳細については、Amazon EC2 のドキュメントの「Using Instance Profiles (インスタンスプロファイルの使用)」を参照してください。IAM ロールを作成する方法については、Amazon EC2 のドキュメントの「Creating an IAM Role in the Console」(コンソールでの IAM ロールの作成) を参照してください。。

JSON

```
{
    "Version":"2012-10-17",
    "Statement": [
        {
```

```
            "Action": [
                "opsworks-cm:AssociateNode",
                "opsworks-cm:DescribeNodeAssociationStatus"
            ],
            "Resource": "*",
            "Effect": "Allow"
        }
    ]
}
```

ステップ 2: Chef クライアントクックブックをインストールする

まだ実行していない場合は、「(代替) Berkshelf を使用してリモートソースからクックブックを取得する」の手順に従って、Berksfile または `Policyfile.rb` ファイルレファレンス によって Chef クライアントクックブックが参照され、クックブックがインストールされることを確認します。

ステップ 3: 自動関連付けスクリプトを使用してインスタンスを作成する

1. EC2 インスタンスを作成するには、スターターキットから EC2 インスタンス手順の `userdata`セクション、Amazon EC2 Auto Scaling グループの起動設定、または CloudFormation テンプレートに`userdata`スクリプトをコピーします。ユーザーデータへのスクリプトの追加の詳細については、Amazon EC2 ドキュメントの「Running Commands on Your Linux Instance at Launch」(Linux インスタンスでの起動時のコマンドの実行) を参照してください。

   このスクリプトは、`opsworks-cm` API の `associate-node` コマンドを実行して、新しいノードを Chef サーバーに関連付けます。

   デフォルトでは、登録された新しいノードの名前はインスタンス ID ですが、`NODE_NAME` スクリプトの `userdata` 変数の値を変更することで、その名前を変更できます。現在、Chef コンソール UI の組織名を変更することはできないため、`CHEF_AUTOMATE_ORGANIZATION`の設定は `default` のままにします。
2. EC2 ドキュメントのインスタンスの作成の手順に従い、ここで説明する変更を加えます。EC2 インスタンス起動ウィザードで、Amazon Linux AMI を選択します。
3. [Configure Instance Details] ページで IAM ロールとして作成した「ステップ 1: インスタンスプロファイルとして使用する IAM ロールを作成します」を選択します。
4. [Advanced Details] で、先の手順で作成した `userdata.sh` スクリプトをアップロードします。
5. [Add Storage] ページで必要な変更はありません。[Add Tags] に進みます。

6. [セキュリティグループの設定] ページで、[ルールの追加] を選択し、タイプに [HTTP] を選択してこの例の Apache ウェブサーバーでポート番号 443 と 80 を開きます。
7. Review and Launch (確認と作成) を選択してから、Launch (起動) を選択します。新しいノードを開始すると、そのノードは RUN_LIST パラメータで渡されたレシピによって指定された設定を適用します。
8. オプション: 実行リストに nginx クックブックを追加した場合、新しいノードのパブリック DNS にリンクしたウェブページを開くと、nginx ウェブサーバーがホストするウェブサイトが表示されます。

chef-client の繰り返し実行を自動化する他の方法

達成はより難しく、推奨されませんが、このトピックのスクリプトはスタンドアロンインスタンスのユーザーデータの一部としてのみ実行できます。 CloudFormation テンプレートを使用して新しいインスタンスのユーザーデータに追加したり、スクリプトを定期的に実行するようにcronジョブを設定したり、サービスchef-client内で実行したりできます。ただし、他の自動化の方法にはいくつかの欠点があるため、Chef クライアントクックブックの方法をお勧めします。

chef-client に指定できるパラメータの詳細なリストについては、Chef のドキュメントを参照してください。

関連トピック

次の AWS ブログ記事では、Auto Scaling グループを使用するか、複数のアカウント内で、Chef Automate サーバーにノードを自動的に関連付ける方法について詳しく説明します。

- Using AWS OpsWorks for Chef Automate to Manage EC2 Instances with Auto Scaling
- OpsWorks for Chef Automate – Automatically Bootstrapping Nodes in Different Accounts

Chef Automate ダッシュボードにサインインする

> **Important**
>
> AWS OpsWorks for Chef Automate は 2024 年 5 月 5 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。既存のお客様は、 Chef SaaS または代替ソリューションに移行することをお勧めします。ご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Chef サーバーの [Properties] ページでサインイン認証情報をダウンロードし、サーバーがオンラインになったら、Chef Automate ダッシュボードにサインインします。このウォークスルーでは、最初にクックブックをアップロードし、管理するノードを 1 つ以上追加します。そうすることによって、クックブックおよびノードに関する情報をダッシュボードで表示できるようになります。

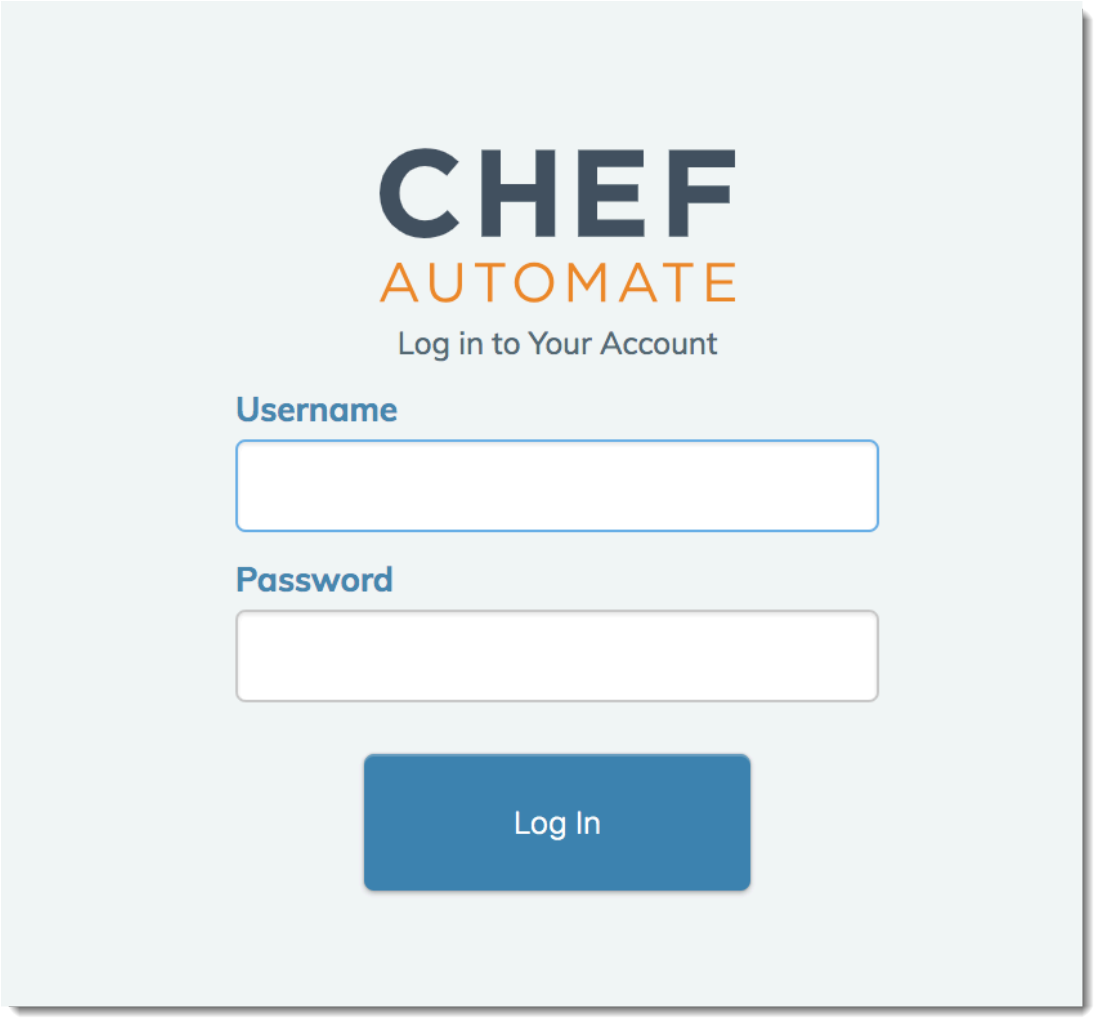
ダッシュボードウェブページに接続しようとすると、Chef サーバーの管理に使用しているクライアントコンピュータに OpsWorks特定の CA 署名付き SSL 証明書をインストールするまで、証明書の警告がブラウザに表示されます。ダッシュボードのウェブページに進む前に警告が表示されないようにするには、サインインする前に SSL 証明書をインストールします。

クライアント側 SSL 証明書をインストールした後は、Chef Automate ダッシュボードへのサインイン時に警告メッセージが表示されなくなります。

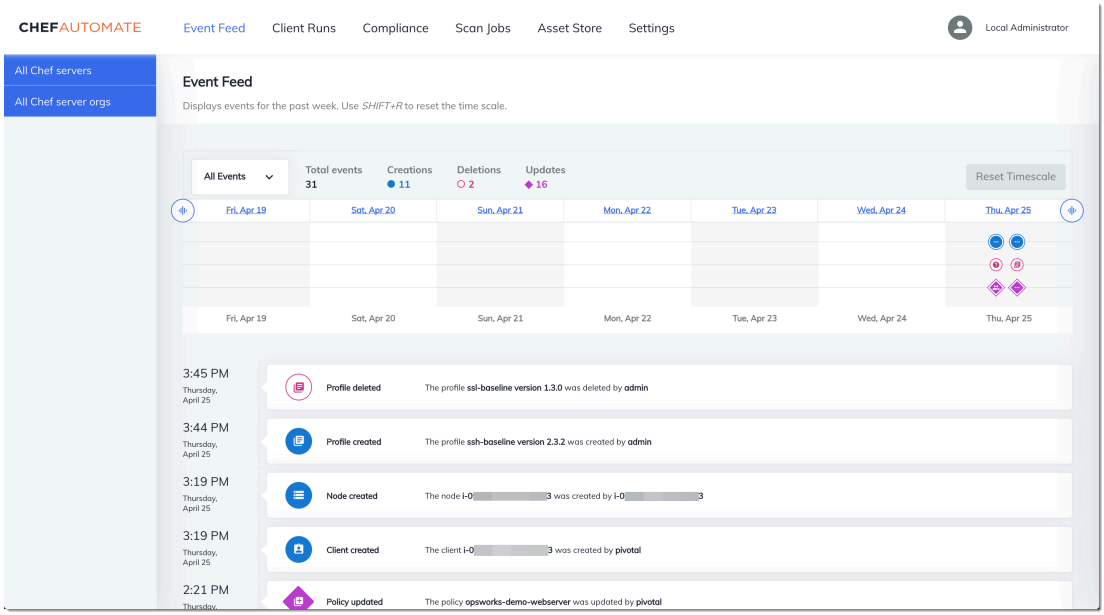
> **Note**
>
> Ubuntu および Linux オペレーティングシステムで Google Chrome を使用しているユーザーは、サインインで問題が発生する場合があります。Mozilla Firefox または他のブラウザを使用してサインインし、これらのオペレーティングシステムで Chef Automate ダッシュボードを使用することをお勧めします。Windows または MacOS では Google Chrome の使用で問題は出ていません。

Chef Automate ダッシュボードにサインインするには

1. 「前提条件」でダウンロードした Chef Automate 認証情報を解凍して開きます。サインインするには、これらの認証情報が必要です。
2. Chef サーバーの [Properties] (プロパティ) ページを開きます。
3. [Properties] (プロパティ) ページの右上にある [Open Chef Automate dashboard] を選択します。
4. ステップ 1 で認証情報を使用してサインインします。



5. Chef Automate ダッシュボードでは、ブートストラップしたノード、クックブックの実行の進行状況とイベント、ノードのコンプライアンスレベル、などに関する詳細情報を表示できます。Chef Automate ダッシュボードの機能およびその使用方法の詳細については、[Chef Automate Documentation] (Chef Automate ドキュメント) を参照してください。



Note

Chef Automate ダッシュボードへのサインインに使用するパスワードを変更する方法については、「Chef Automate ダッシュボードの認証情報のリセット」を参照してください。

を使用して AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを作成する CloudFormation

Important

AWS OpsWorks for Chef Automate は 2024 年 5 月 5 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。既存のお客様は、 Chef SaaS または代替ソリューションに移行することをお勧めします。ご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

AWS OpsWorks for Chef Automate では、Chef Automate サーバーを で実行できます AWS。約 15 分で Chef Automate サーバーをプロビジョニングできます。

2021 年 5 月 3 日以降、 は一部の Chef Automate サーバー属性を に AWS OpsWorks for Chef Automate 保存します AWS Secrets Manager。詳細については、「との統合 AWS Secrets Manager」を参照してください。

次のチュートリアルは、 でスタックを作成 AWS OpsWorks for Chef Automate することで、 でサーバーを作成するのに役立ちます CloudFormation。

トピック

- 前提条件
- CloudFormationで Chef Automate サーバーを作成する

前提条件

新しい Chef Automate サーバーを作成する前に、Chef サーバーにアクセスして管理するために必要なリソースを AWS OpsWorks for Chef Automate の外部で作成してください。詳細については、このガイドの「はじめる」セクションにある「前提条件」を参照してください。

CloudFormation ユーザーガイドテンプレートリファレンスの OpsWorks-CM セクションで、サーバーの作成に使用する CloudFormation テンプレートでサポートされている値と必要な値を確認してください。

カスタムドメインを使用するサーバーを作成する場合は、カスタムドメイン、証明書、およびプライベートキーが必要です。 CloudFormation テンプレートで、これら 3 つのパラメータすべてに値を指定する必要があります。`CustomDomain`、`CustomCertificate`、および `CustomPrivateKey` パラメータの要件の詳細については、OpsWorks CM API リファレンス のサーバーの作成 を参照してください

`CHEF_AUTOMATE_ADMIN_PASSWORD` エンジン属性のパスワード値を作成します。パスワードの最小の長さは 8 文字、最大は 32 文字です。パスワードには、文字、数字、および特殊文字 (`(!/@#$%^+=_)`) を使用できます。パスワードは、少なくとも 1 つの小文字、1 つの大文字、1 つの数字、および 1 つの特殊文字を含む必要があります。テンプレートでこのパスワードを指定するか CloudFormation 、スタックの作成時に `CHEF_AUTOMATE_ADMIN_PASSWORD`パラメータの値として指定します。

Chef Automate サーバーの作成を開始する前に、base64 でエンコードされた RSA キーペアを生成します CloudFormation。ペアの公開キーは `CHEF_AUTOMATE_PIVOTAL_KEY` の値で、[CreateServer] (サーバーの作成) API からのシェフ固有の [EngineAttributes] (エンジンの属性) で

す。このキーは、 CloudFormation コンソールの Parameters の値、または の create-stack コマンドの値として提供されます AWS CLI。このキーを生成するには、次の方法をお勧めします。

- Linux ベースのコンピュータで、次の OpenSSL コマンドを実行してこのキーを生成できます。

```
openssl genrsa -out pivotal_key_file_name.pem 2048
```

生成したら、鍵ペアの RSA 公開鍵部分をファイルにエクスポートします。公開鍵は、CHEF_AUTOMATE_PIVOTAL_KEY の値となります。

```
openssl rsa -in pivotal_key_file_name.pem -pubout -out public.pem -outform PEM
```

- Windows ベースのコンピュータでは、PuTTYgen ユーティリティを使用して base64 でエンコードされた RSA キーペアを生成できます。詳細については、SSH.com で「PuTTYgen - Key Generator for PuTTY on Windows」を参照してください。

CloudFormationで Chef Automate サーバーを作成する

このセクションでは、 CloudFormation テンプレートを使用して AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを作成するスタックを構築する方法について説明します。これを行うには、CloudFormation コンソールまたは を使用します AWS CLI。サンプル CloudFormation テンプレートを使用して、 AWS OpsWorks for Chef Automate サーバースタックを構築できます。サンプルテンプレートを更新するには、必ず、独自のサーバー名、IAM ロール、インスタンスプロファイル、サーバーの説明、バックアップ保持数、メンテナンスオプション、およびオプションのタグを使用してください。サーバーがカスタムドメインを使用する場合は、 CloudFormation テンプレートで CustomDomain、CustomCertificate、および CustomPrivateKeyパラメータの値を指定する必要があります。 CloudFormation テンプレートで CHEF_AUTOMATE_ADMIN_PASSWORDおよび CHEF_AUTOMATE_PIVOTAL_KEY エンジン属性とその値を指定するか、属性のみを指定し、CloudFormation スタックの作成ウィザードまたはcreate-stackコマンドで属性の値を指定できます。これらの属性の詳細については、このガイドの「はじめに」セクションの「the section called “で Chef Automate サーバーを作成する AWS マネジメントコンソール”」を参照してください。

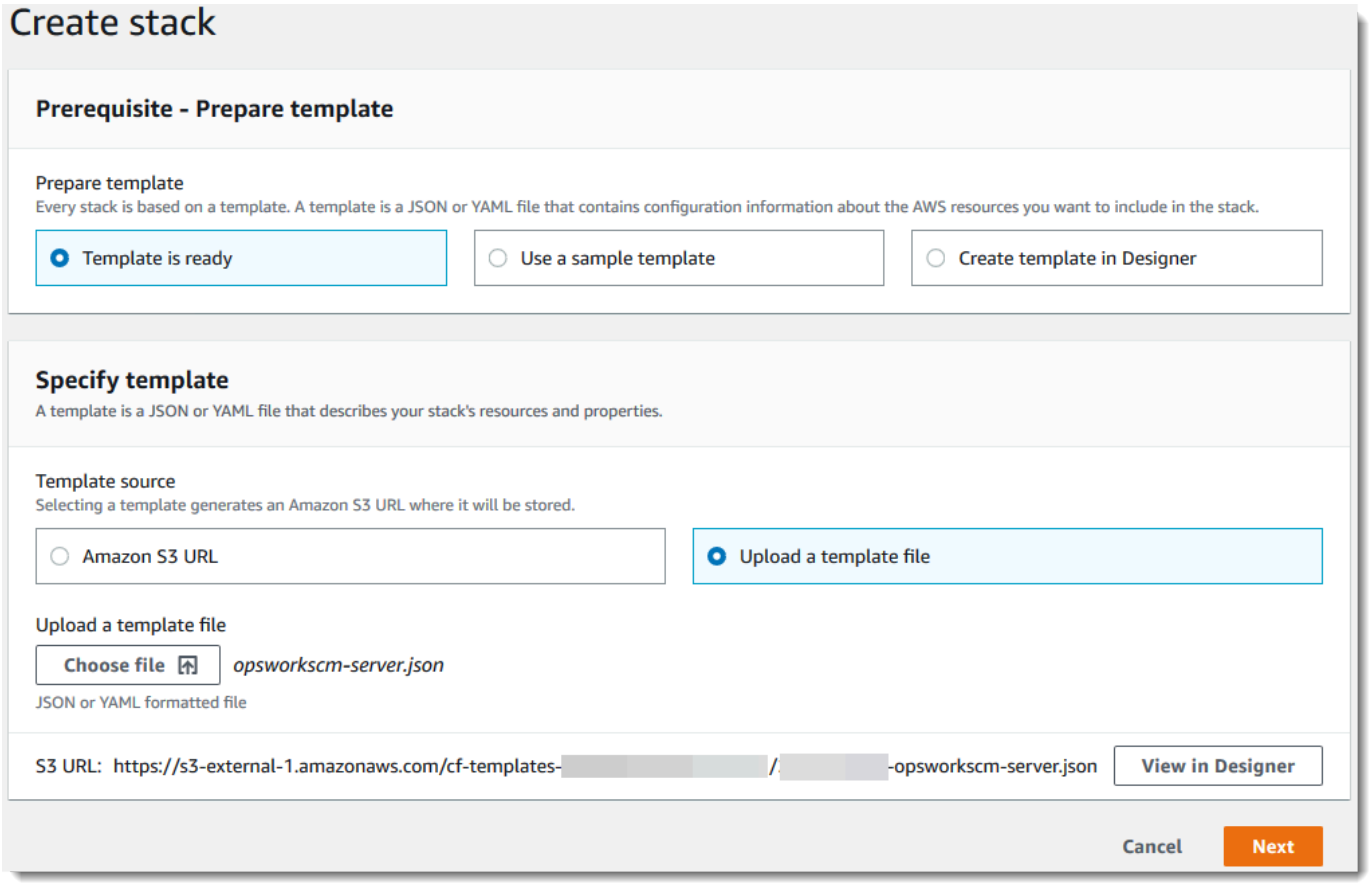
トピック

- CloudFormation (コンソール) を使用して Chef Automate サーバーを作成する
- CloudFormation (CLI) を使用して Chef Automate サーバーを作成する

CloudFormation (コンソール) を使用して Chef Automate サーバーを作成する

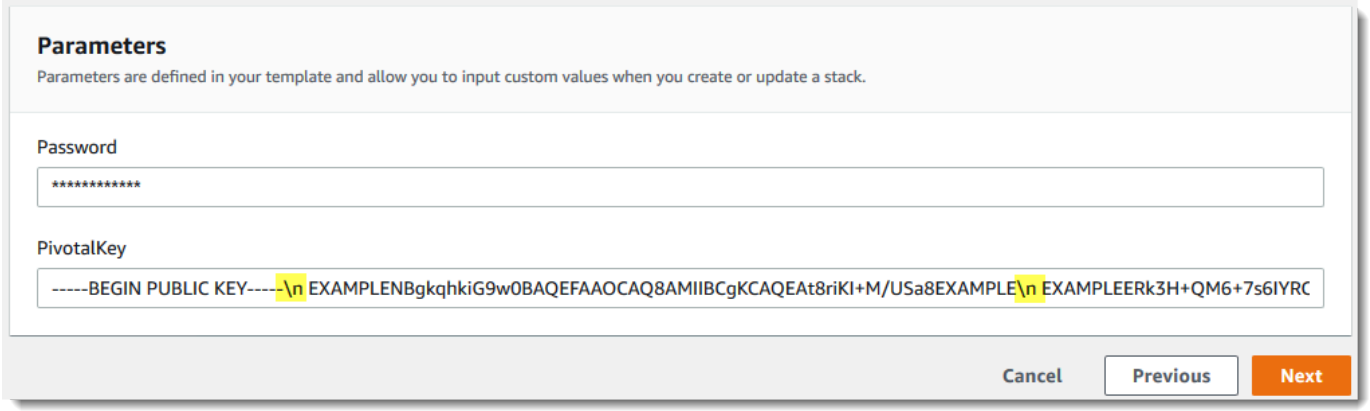
1. にサインイン AWS マネジメントコンソール し、https://console.aws.amazon.com/cloudformation で CloudFormation コンソールを開きます。
2. CloudFormation ホームページで、スタックの作成を選択します。
3. 前提条件 - テンプレートを準備するで、サンプル CloudFormation テンプレートを使用している場合は、テンプレートの準備ができましたを選択します。
4. [Specify template] 内で、テンプレートのソースを選択します。このチュートリアルでは、テンプレートファイルをアップロードを選択し、Chef Automate サーバーを作成する CloudFormation テンプレートをアップロードします。テンプレートファイルを参照し、[Next] を選択します。

   CloudFormation テンプレートは YAML 形式または JSON 形式のいずれかです。サンプル CloudFormation テンプレートを使用できます。サンプル値は必ず独自の値に置き換えてください。 CloudFormation テンプレートデザイナーを使用して、新しいテンプレートを構築したり、既存のテンプレートを検証したりできます。これを行う方法については、CloudFormation ユーザーガイド のCloudFormation 「Designer Interface Overview (Designer インターフェイスの概要) を参照してください。



5. [Specify stack details] ページでスタックの名前を入力します。これは、サーバーの名前と同じ名前にしないでください。スタック名にすぎません。[Parameters (パラメータ)] 領域に、「the section called “前提条件”」で作成した値を貼り付けます。[Password] にパスワードを入力します。

   RSA キーファイルのコンテンツを [PivotalKey] 内に貼り付けます。 CloudFormation コンソールでは、次のスクリーンショットに示すように、ピボットキー値の各行の末尾に改行 (**\n**) 文字を追加する必要があります。[次へ] を選択します。



6. [Configure stack options] (スタックオプションの設定) ページでは、スタックを使用して作成するサーバーにタグを追加することができ、テンプレートで使用する IAM ロールをまだ指定していない場合には、リソースを作成するための IAM ロールを選択できます。オプションの指定を終了したら、[Next (次へ)] を選択します。ロールバックトリガーなどの高度なオプションの詳細については、CloudFormation 「 ユーザーガイド」のCloudFormation 「スタックオプションの設定」を参照してください。
7. [確認] ページで選択内容を確認します。サーバースタックを作成する準備ができたら、[Create stack] を選択します。

   がスタックを作成する CloudFormation のを待っている間に、スタックの作成ステータスを表示します。スタックの作成に失敗した場合、コンソールに表示されるエラーメッセージを確認し、問題を解決します。 CloudFormation スタックのエラーのトラブルシューティングについての詳細は、CloudFormation ユーザーガイドの「Troubleshooting Errors」 (エラーのトラブルシューティング) を参照してください。

   サーバーの作成が完了すると、 AWS OpsWorks for Chef Automate のホームページで、Chef Automate サーバーが [online] のステータスになり、利用可能になります。サーバーの [Properties (プロパティ)] ページで、新しいスターターキットと Chef Automate ダッシュボードの認証情報を生成します。サーバーがオンラインになると、Chef Automate ダッシュボードがサーバーのドメインで `https://`*`your_server_name`*`-`*`randomID`*`.`*`region`*`.opsworks-cm.io` の形式の URL で利用できます。

   > **Note**
   >
   > サーバーのカスタムドメイン、証明書、プライベートキーを指定した場合は、エンタープライズの DNS 管理ツールで CNAME エントリを作成し、カスタムドメインをサーバー用に AWS OpsWorks for Chef Automate 自動生成されたエンドポイントにマッピングします。生成されたエンドポイントをカスタムドメイン値にマッピングするまで、サーバーを管理したり、サーバーの Chef Automate ダッシュボードに接続したりできません。
   > 生成されたエンドポイント値を取得するには、サーバーがオンラインになった後に次の AWS CLI コマンドを実行します。
   >
   > ```
   > aws opsworks describe-servers --server-name server_name
   > ```

CloudFormation (CLI) を使用して Chef Automate サーバーを作成する

ローカルコンピュータで がまだ実行されていない場合は AWS CLI、AWS コマンドラインインターフェイスユーザーガイド AWS CLI のインストール手順に従って、 をダウンロードしてインストールします。このセクションでは、create-stack コマンドで使用できるパラメータのすべては説明しません。create-stack パラメータの詳細については、「create-stackリファレンス」の「AWS CLI 」を参照してください。

1. 必ず [前提条件] を実行して AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを作成してください。
2. サービスロールとインスタンスプロファイルを作成します。

   アカウントでサービスロールの ARNs を検索してコピーします。

   ```
   aws iam list-roles --path-prefix "/service-role/" --no-paginate
   ```

   `list-roles` コマンドの結果内で、次のようなサービスロールとインスタンスプロファイルのエントリを探します。サービスロールとインスタンスプロファイルの ARNs を書き留め、サーバースタックの作成に使用する CloudFormation テンプレートに追加します。
3. create-stack コマンドを再度実行して AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを作成します。

   - *`stack_name`* をスタックの名前に置き換えます。これは、Chef Automate サーバーではなく、 CloudFormation スタックの名前です。Chef Automate サーバー名は、 CloudFormation テンプレート`ServerName`内の の値です。
   - *`template`* をテンプレートファイルへのパスに置き換え、*`yaml ### json`* を必要に応じて `.yaml` または `.json` に置き換えます。
   - `--parameters` の値は [CreateServer] (サーバーの作成) API からの [EngineAttributes] (エンジンの属性) に対応しています。Chef の場合、サーバーを作成するためにユーザーが指定するエンジン属性は、`CHEF_AUTOMATE_PIVOTAL_KEY` (「the section called “前提条件”」で説明されているユーティリティを使用して生成する base64 でエンコードされた RSA パブリックキー) と `CHEF_AUTOMATE_ADMIN_PASSWORD` (ユーザーが作成する 8～32 文字のパスワード) です。`CHEF_AUTOMATE_ADMIN_PASSWORD` の詳細については、「を使用して Chef Automate サーバーを作成する AWS CLI」を参照してください。例に示すように、`PivotalKey` パラメータの値として重要なキーが含まれている PEM ファイルへのポインターを指定できます。`CHEF_AUTOMATE_ADMIN_PASSWORD` と の値がテンプレートで指定されていない場合`CHEF_AUTOMATE_PIVOTAL_KEY`は、 AWS CLI コマンドで値を指定する必要があります。

```
aws cloudformation create-stack --stack-name stack_name
 --template-body file://template.yaml or json --parameters
 ParameterKey=PivotalKey,ParameterValue="base64_encoded_RSA_public_key_value"
```

CHEF_AUTOMATE_ADMIN_PASSWORD 属性と CHEF_AUTOMATE_PIVOTAL_KEY 属性のサンプル値が含まれている例を以下に示します。 CloudFormation テンプレートでこれらの属性の値を指定しなかった場合は、同様のコマンドを実行します。

```
aws cloudformation create-stack --stack-name "OpsWorksCMChefServerStack"
 --template-body file://opsworkscm-server.yaml --parameters
 ParameterKey=PivotalKey,ParameterValue="$(openssl rsa -in "pivotalKey.pem" -
pubout)" ParameterKey=Password,ParameterValue="SuPer\$ecret890"
```

4. スタックの作成が完了したら、 AWS OpsWorks for Chef Automate コンソールで新しいサーバーのプロパティページを開き、スターターキットをダウンロードします。新しいスターターキットをダウンロードすると、Chef Automate ダッシュボードの管理者パスワードがリセットされます。
5. サーバーでカスタムドメイン、証明書、およびプライベートキーを使用する場合は、(オプション) カスタムドメインを使用するように knife を設定します。 に knife.rb を設定のステップに従い、ステップ 7 に進みます。
6. 新しいサーバーで knife コマンドを使用するには、Chef knife.rb 設定ファイルの設定を更新します。サンプル knife.rb ファイルは、スターターキットに含まれています。次の例は、カスタムドメインを使用しないサーバーで knife.rb を設定する方法を示しています。カスタムドメインを使用している場合は、knife 設定手順の (オプション) カスタムドメインを使用するように knife を設定します。 を参照してください。

   - *ENDPOINT* をサーバーのエンドポイント値で置き換えます。これは、スタック作成オペレーションの出力の一部です。エンドポイントを取得するには、次のコマンドを実行します。

     ```
     aws cloudformation describe-stacks --stack-name stack_name
     ```

   - client_key の設定の *key_pair_file.pem* を、サーバーの作成に使用した CHEF_AUTOMATE_PIVOTAL_KEY を含む PEM ファイルの名前に置き換えます。

     ```
     base_dir = File.join(File.dirname(File.expand_path(__FILE__)), '..')

     log_level                :info
     ```

```
log_location            STDOUT
node_name               'pivotal'
client_key              File.join(base_dir, '.chef', 'key_pair_file.pem')
syntax_check_cache_path File.join(base_dir, '.chef', 'syntax_check_cache')
cookbook_path           [File.join(base_dir, 'cookbooks')]

chef_server_url         'ENDPOINT/organizations/default'
ssl_ca_file             File.join(base_dir, '.chef', 'ca_certs', 'opsworks-cm-
ca-2020-root.pem')
trusted_certs_dir       File.join(base_dir, '.chef', 'ca_certs')
```

7. サーバーの作成プロセスが完了したら、「the section called “設定を完了してクックブックをアップロードする”」に進みます。スタックの作成に失敗した場合、コンソールに表示されるエラーメッセージを確認し、問題を解決します。 CloudFormation スタックのエラーのトラブルシューティングの詳細については、CloudFormation 「 ユーザーガイド」の「エラーのトラブルシューティング」を参照してください。

カスタムドメインを使用するように AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを更新する

> **Important**
>
> AWS OpsWorks for Chef Automate は 2024 年 5 月 5 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。既存のお客様は、 Chef SaaS または代替ソリューションに移行することをお勧めします。ご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このセクションでは、サーバーのバックアップを使用して新しい AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを作成することで、カスタムドメインと証明書を使用するように既存のサーバーを更新する方法について説明します。基本的に、バックアップから新しいサーバーを作成し、カスタムドメイン、証明書、プライベートキーを使用するように新しいサーバーを設定することで、既存の AWS OpsWorks for Chef Automate 2.0 サーバーをコピーします。

トピック

- 前提条件
- 制限事項

- カスタムドメインを使用するようにサーバーを更新する
- 以下の資料も参照してください。

前提条件

以下は、カスタムドメインと証明書を使用するように既存の AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを更新するための要件です。

- 更新 (またはコピー) するサーバーは、Chef Automate 2.0 を実行している必要があります。
- 新しいサーバーの作成に使用するバックアップを決定します。更新するサーバーのバックアップが少なくとも 1 つ必要です。でのバックアップの詳細については AWS OpsWorks for Chef Automate、「」を参照してくださいAWS OpsWorks for Chef Automate サーバーのバックアップ。
- バックアップのソースである既存のサーバーを作成するために使用したサービスロールとインスタンスプロファイルの ARN を準備します。
- 最新リリースの AWS CLIを実行していることを確認してください。 AWS CLI ツールの更新の詳細については、AWS コマンドラインインターフェイスユーザーガイドの「 のインストール AWS CLI」を参照してください。

制限事項

バックアップから新しいサーバーを作成して既存のサーバーを更新する場合、新しいサーバーを既存の AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーとまったく同じにすることはできません。

- この手順は、 AWS CLI またはいずれかの AWS SDKs。 AWS マネジメントコンソールを使用してバックアップから新しいサーバーを作成することはできません。
- 新しいサーバーに、アカウント内および AWS リージョン内の既存のサーバーと同じ名前は使用できません。名前は、バックアップのソースとして使用した既存のサーバーとは異なる必要があります。
- 既存のサーバーに接続されたノードは、新しいサーバーによって管理されません。次のいずれかを行う必要があります。
  - 複数の Chef Automate サーバーでノードを管理することはできないため、異なるノードをアタッチします。

- 既存のサーバー (バックアップのソース) から新しいサーバーと新しいカスタムドメインエンドポイントにノードを移行します。ノードの移行方法の詳細については、Chef のドキュメントの「」を参照してください。

カスタムドメインを使用するようにサーバーを更新する

既存の Chef Automate 2.0 サーバーを更新するには、バックアップ、カスタムドメイン、カスタム証明書、カスタムプライベートキーを指定するパラメータを追加して `create-server` コマンドを実行し、コピーを作成します。

1. `create-server` コマンドで指定できるサービスロールまたはインスタンスプロファイルの ARN がない場合は、「を使用して Chef Automate サーバーを作成する AWS CLI」のステップ 1 ~ 5 に従って、使用できるサービスロールとインスタンスプロファイルを作成します。
2. まだ作成していない場合は、カスタムドメインで新しいサーバーのベースにする既存の Chef Automate 2.0 サーバーのバックアップを探します。次のコマンドを実行して、アカウントとリージョン内のすべての AWS OpsWorks for Chef Automate バックアップに関する情報を表示します。使用するバックアップの ID を書き留めておきます。

   ```
   aws opsworks-cm --region region name describe-backups
   ```

3. `create-server` コマンドを実行して AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを作成します。

   - `--engine` の値は、`ChefAutomate`、`--engine-model` は、`Single`、`--engine-version` は `12` です。
   - サーバー名は、 AWS アカウント内で各リージョン内で一意である必要があります。サーバー名は文字で始める必要があります。その後は文字、数字、またはハイフン (-) を最大 40 文字まで使用できます。
   - ステップ 1 のインスタンスプロファイル ARN とサービスロール ARN を使用します。
   - 有効なインスタンスタイプは `m5.large`、`r5.xlarge`、または `r5.2xlarge` です。これらのインスタンスタイプの仕様の詳細については、「Amazon EC2 ユーザーガイド」の「インスタンスタイプ」を参照してください。
   - `--engine-attributes` パラメータはオプションです。いずれかまたは両方の値を指定しない場合、サーバー作成プロセスで値が生成されます。`--engine-attributes` を追加する場合は、ステップ 2 で生成した `CHEF_AUTOMATE_PIVOTAL_KEY` 値、`CHEF_AUTOMATE_ADMIN_PASSWORD`、またはその両方を指定します。

CHEF_AUTOMATE_ADMIN_PASSWORD の値を設定しない場合、create-server レスポンスの一部としてパスワードが生成され返されます。コンソールでスターターキットをもう一度ダウンロードして、このパスワードを再生成することもできます。パスワードの最小の長さは 8 文字、最大は 32 文字です。パスワードには、文字、数字、および特殊文字 (!/@#$%^+=_) を使用できます。パスワードは、少なくとも 1 つの小文字、1 つの大文字、1 つの数字、および 1 つの特殊文字を含む必要があります。

- SSH キーペアはオプションですが、Chef Automate ダッシュボードの管理者パスワードをリセットする必要がある場合に Chef Automate サーバーに接続することができます。SSH キーペアの作成の詳細については、「Amazon EC2 User Guide」(Amazon EC2 ユーザーガイド) の「Amazon EC2 Key Pairs」(Amazon EC2のキーペア) を参照してください。
- カスタムドメインを使用するには、コマンドに以下のパラメータを追加します。それ以外の場合は、Chef Automate サーバー作成プロセスによって自動的にエンドポイントが生成されます。カスタムドメインを構成するには、3 つのパラメータすべてが必要です。これらのパラメータを使用するための追加の要件については、CM API リファレンスのCreateServer OpsWorks 」を参照してください。
  - --custom-domain - サーバーのオプションのパブリックエンドポイント (https://aws.my-company.com など)。
  - --custom-certificate - PEM 形式の HTTPS 証明書。値には、単一の自己署名証明書、または証明書チェーンを指定できます。
  - --custom-private-key - HTTPS を使用してサーバーに接続するための PEM 形式のプライベートキー。プライベートキーは暗号化しないでください。パスワードやパスフレーズで保護することはできません。
- 週 1 回のシステムメンテナンスが必要です。次の形式で有効な値を指定する必要があります: DDD:HH:MM。指定時刻は協定世界時 (UTC) です。--preferred-maintenance-window の値を指定しない場合、火曜日、水曜日、または金曜日の 1 時間がランダムでデフォルト値になります。
- --preferred-backup-window の有効な値は次の形式のいずれかで指定する必要があります: 日次バックアップの場合は HH:MM、週次バックアップの場合は DDD:HH:MM。指定時刻は UTC です。デフォルト値は日次で開始時間はランダムです。自動バックアップを無効にするには、代わりにパラメータ --disable-automated-backup を追加します。
- --security-group-ids に、1 つ以上のセキュリティグループ ID をスペースで区切って入力します。
- --subnet-ids には、サブネット ID を入力します。
- --backup-id には、ステップ 2 でコピーしたバックアップの ID を入力します。

```
aws opsworks-cm create-server --engine "ChefAutomate" --engine-model "Single"
 --engine-version "12" --server-name "server_name" --instance-profile-arn
 "instance_profile_ARN" --instance-type "instance_type" --engine-attributes
 '{"CHEF_AUTOMATE_PIVOTAL_KEY":"pivotal_key","CHEF_AUTOMATE_ADMIN_PASSWORD":"password"}'
 --key-pair "key_pair_name" --preferred-maintenance-window
 "ddd:hh:mm" --preferred-backup-window "ddd:hh:mm" --security-group-
ids security_group_id1 security_group_id2 --service-role-arn "service_role_ARN" --
subnet-ids subnet_ID --backup-id backup_ID
```

次の例では、カスタムドメインを使用する Chef Automate サーバーを作成します。

```
aws opsworks-cm create-server --engine "ChefAutomate" --engine-model "Single" --
engine-version "12" \
    --server-name "my-custom-domain-server" \
    --instance-profile-arn "arn:aws:iam::12345678912:instance-profile/aws-opsworks-
cm-ec2-role" \
    --instance-type "m5.large" \
    --engine-attributes
 '{"CHEF_AUTOMATE_PIVOTAL_KEY":"MZZE...Wobg","CHEF_AUTOMATE_ADMIN_PASSWORD":"zZZzDj2DLYXSZF
 \
    --custom-domain "my-chef-automate-server.my-corp.com" \
    --custom-certificate "-----BEGIN CERTIFICATE----- EXAMPLEqEXAMPLE== -----END
 CERTIFICATE-----" \
    --custom-private-key "-----BEGIN RSA PRIVATE KEY----- EXAMPLEqEXAMPLE= -----END
 RSA PRIVATE KEY-----" \
    --key-pair "amazon-test" \
    --preferred-maintenance-window "Mon:08:00" \
    --preferred-backup-window "Sun:02:00" \
    --security-group-ids sg-b00000001 sg-b0000008 \
    --service-role-arn "arn:aws:iam::12345678912:role/service-role/aws-opsworks-cm-
service-role" \
    --subnet-ids subnet-300aaa00 \
    --backup-id MyChefServer-20191004122143125
```

4. AWS OpsWorks for Chef Automate 新しいサーバーの作成には約 15 分かかります。`create-server` コマンドの出力で、`Endpoint` 属性の値をコピーします。以下に例を示します。

```
"Endpoint": "automate-07-exampleexample.opsworks-cm.us-east-1.amazonaws.com"
```

create-server コマンドの出力を閉じたり、シェルセッションを閉じたりしないでください。今後表示されない重要な情報が出力に含まれている場合があります。create-server の結果からパスワードとスターターキットを取得するには、次のステップに進みます。

5. でキーとパスワード AWS OpsWorks for Chef Automate を生成することを選択した場合は、jq などの JSON プロセッサを使用してcreate-server、結果から使用可能な形式で抽出できます。jq をインストールした後、以下のコマンドを実行して中枢キー、Chef Automate ダッシュボード管理者パスワード、およびスターターキットを抽出できます。ステップ 3 で独自の中枢キーとパスワードを指定しなかった場合は、抽出した中枢キーと管理者パスワードを使いやすく安全な場所に保存してください。

```
#Get the Chef password:
cat resp.json | jq -r '.Server.EngineAttributes[] | select(.Name ==
 "CHEF_AUTOMATE_ADMIN_PASSWORD") | .Value'

#Get the Chef Pivotal Key:
cat resp.json | jq -r '.Server.EngineAttributes[] | select(.Name ==
 "CHEF_AUTOMATE_PIVOTAL_KEY") | .Value'

#Get the Chef Starter Kit:
cat resp.json | jq -r '.Server.EngineAttributes[] | select(.Name ==
 "CHEF_STARTER_KIT") | .Value' | base64 -D > starterkit.zip
```

6. オプションで、create-serverコマンド結果からスターターキットを抽出しなかった場合は、AWS OpsWorks for Chef Automate コンソールのサーバーのプロパティページから新しいスターターキットをダウンロードできます。新しいスターターキットをダウンロードすると、Chef Automate ダッシュボードの管理者パスワードがリセットされます。
7. エンタープライズの DNS 管理ツールで CNAME エントリを作成して、ステップ 4 でコピーした AWS OpsWorks for Chef Automate エンドポイントにカスタムドメインをポイントします。このステップを完了するまで、サーバーにアクセスしたりサインインしたりすることはできません。
8. サーバーの作成プロセスが完了したら、「the section called “設定を完了してクックブックをアップロードする”」に進みます。

以下の資料も参照してください。

- を使用して Chef Automate サーバーを作成する AWS CLI
- バックアップから AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを復元する
- CM API リファレンス OpsWorks の CreateServer

- create-server「 コマンドリファレンス」の「AWS CLI 」を参照してください。

AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーのスターターキットを再生成する

> **Important**
>
> AWS OpsWorks for Chef Automate は 2024 年 5 月 5 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。既存のお客様は、 Chef SaaS または代替ソリューションに移行することをお勧めします。ご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

のスターターキット AWS OpsWorks for Chef Automate には、例を含む README ファイル、`knife.rb`設定ファイル、プライマリまたはピボットユーザーのプライベートキーが含まれています。スターターキットをダウンロードするごとに、新しいキーペアが生成され、古いキーはリセットされます。 AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーのスターターキットは、次の 2 つの方法のいずれかで再生成できます。

- OpsWorks コンソールで、 AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーの詳細ページのアクションメニュー。古いピボットキーを再生成してリセットするかどうかを確認するよう求められます。
- でコマンドを実行する。 AWS CLI

スターターキットの使用方法の詳細については、「スターターキットを使用して Chef サーバーを設定する」を参照してください。

を使用して AWS OpsWorks for Chef Automate スターターキットを再生成する AWS CLI

> **Note**
>
> スターターキットを再生成するときに、Chef Automate サーバーの認証キーペアも再生成してリセットし、現在のキーペアを削除します。

update-server-engine-attributes コマンドを実行して、スターターキットを再生成します。 AWS CLI セッションで、次のコマンドを実行します。サーバ名を --server-name の値として指定します。CHEF_AUTOMATE_PIVOTAL_KEY の値として自分の公開鍵を設定するにはで、--attribute-value でパブリックキーの値を指定します。それ以外の場合は、null に --attribute-value が設定されます。

```
aws opsworks-cm update-server-engine-attributes \
   --server-name server_name \
   --attribute-name "CHEF_AUTOMATE_PIVOTAL_KEY" \
   --attribute-value your_public_key
```

次のコマンドは、サーバーの管理者が使用する公開キーの値を指定する例です。

```
aws opsworks-cm update-server-engine-attributes \
   --server-name your-test-server \
   --attribute-name "CHEF_AUTOMATE_PIVOTAL_KEY" \
   --attribute-value "-----BEGIN PUBLIC KEY-----ExamplePublicKey-----END PUBLIC
 KEY-----"
```

次のコマンドは、 がパブリックキー AWS OpsWorks for Chef Automate を再生成できるようにする例です。

```
aws opsworks-cm update-server-engine-attributes \
   --server-name your-test-server \
   --attribute-name "CHEF_AUTOMATE_PIVOTAL_KEY" \
   --attribute-value null
```

このコマンドの出力は、サーバに関する情報と base64 でエンコードされた ZIP ファイルです。ZIP ファイルには、README、設定ファイル、および必要な RSA プライベートキーを含む Chef スターターキットが含まれています。このファイルを保存して解凍し、ファイルの内容を解凍したディレクトリに移動します。このディレクトリから、knife コマンドを実行することができます。

AWS OpsWorks for Chef Automate リソースでのタグの使用

> **Important**
>
> AWS OpsWorks for Chef Automate は 2024 年 5 月 5 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。既存のお客様は、 Chef SaaS または代替

ソリューションに移行することをお勧めします。ご質問がある場合は、AWS re:Post または AWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

タグとは、AWS リソースを識別および整理するためのメタデータとして使用される単語やフレーズのことです。では AWS OpsWorks for Chef Automate、リソースに最大 50 個のユーザー適用タグを含めることができます。各タグはキーと 1 つのオプションの値で構成されます。 AWS OpsWorks for Chef Automateで以下のリソースにタグを適用できます。

- AWS OpsWorks for Chef Automate サーバー
- AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーのバックアップ

AWS リソースのタグは、コストの追跡、リソースへのアクセスの制御、タスクを自動化するためのリソースのグループ化、目的またはライフサイクルステージ別のリソースの整理に役立ちます。タグのメリットの詳細については、AWS Billing and Cost Management ユーザーガイドのAWS タグ付け戦略 AWS Answers とコスト配分タグの使用 を参照してください。

タグを使用して AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーまたはバックアップへのアクセスを制御するには、 AWS Identity and Access Management (IAM) でポリシーステートメントを作成または編集します。詳細については、AWS Identity and Access Management ユーザーガイドの「Controlling Access to AWS Resources Using Resource Tags」(リソースタグを使用した リソースへのアクセスの制御) を参照してください。

AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーにタグを適用すると、タグはサーバーのバックアップ、バックアップを保存する Amazon S3 バケット、サーバーの Amazon EC2 インスタンス、保存先のサーバーのシークレット AWS Secrets Manager、サーバーで使用される Elastic IP アドレスにも適用されます。タグは、 がサーバーの作成 OpsWorks に使用する CloudFormation スタックには伝達されません。

トピック

- でのタグの仕組み AWS OpsWorks for Chef Automate
- でのタグの追加と管理 AWS OpsWorks for Chef Automate (コンソール)
- (AWS OpsWorks for Chef Automate CLI) でのタグの追加と管理
- 以下の資料も参照してください。

でのタグの仕組み AWS OpsWorks for Chef Automate

このリリースでは、OpsWorks CM API または AWS マネジメントコンソールを使用してタグを追加および管理できます。 OpsWorks CM は、EC2 インスタンス、Secrets Manager のシークレット、Elastic IP アドレス、セキュリティグループ、S3 バケット、バックアップなど、サーバーに関連付けられた AWS リソースにサーバーに追加するタグも追加しようとします。以下の表では、 AWS OpsWorks for Chef Automateでタグを追加および管理する方法の概要を示しています。

Action	使用するもの
手動で作成する新しい AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーまたはバックアップにタグを追加します。	• [Create Chef Automate server (Chef Automate サーバーの作成)] を選択し、[Configure advanced settings (詳細設定の設定)] ページでタグを追加します。 • 既存のサーバーの [Create backup] (バックアップの作成) ページで [Backups] (バックアップ) を選択し、[Create a backup of your Chef Automate 2 server] (Chef Automate 2 サーバーのバックアップの作成) ページでタグを追加します。 • `CreateServer` または `CreateBackup` コマンドに `Tags` パラメータを追加します。
リソースのタグを表示します。	• サーバーの詳細ページで、ナビゲーションペインで [Tags (タグ)] を選択します。 • サーバーの [Backups (バックアップ)] ページで、バックアップを選択し、[Edit backup (バックアップの編集)] を選択します。 • `ListTagsForResource` コマンドを実行します。
バックアップが手動で作成されたか自動的に作成されたかにかかわらず、既存の AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーまたはバックアップにタグを追加します。	• サーバーの詳細ページで、ナビゲーションペインで [Tags (タグ)] を選択し、[Edit (編集)] を選択します。

Action	使用するもの
	• サーバーの [Backups (バックアップ)] ページで、バックアップを選択し、[Edit backup (バックアップの編集)] を選択します。 • TagResource コマンドを実行します。
リソースからタグを削除する	• サーバーの詳細ページで、ナビゲーションペインで [Tags (タグ)] を選択し、[Edit (編集)] を選択します。削除するタグの横にある [X] を選択します。 • サーバーの [Backups (バックアップ)] ページで、バックアップを選択し、[Edit backup (バックアップの編集)] を選択します。削除するタグの横にある [X] を選択します。 • UntagResource コマンドを実行します。

DescribeServers および DescribeBackups のレスポンスにタグ情報は含まれません。タグを表示するには、ListTagsForResource API を使用します。

でのタグの追加と管理 AWS OpsWorks for Chef Automate (コンソール)

このセクションの手順は AWS マネジメントコンソールで実行されます。

タグを追加する場合、タグのキーを空にすることはできません。キーは最大 127 文字で、Unicode 文字、数字、区切り文字、または特殊文字 (+ - = . _ : / @) のみを含めることができます。タグの値はオプションです。キーはあるが値はないタグであれば、追加できます。値は最大 255 文字とし、Unicode 文字、数字、区切り文字、または特殊文字 (+ - = . _ : / @) のみを含めることができます。

トピック

- 新しい AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーにタグを追加する (コンソール)
- 新しいバックアップにタグを追加する (コンソール)
- 既存のサーバーにタグを追加または表示する (コンソール)
- 既存のバックアップにタグを追加または表示する (コンソール)
- サーバからタグを削除する (コンソール)

- バックアップからタグを削除する (コンソール)

新しい AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーにタグを追加する (コンソール)

1. AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを作成するための前提条件を必ず満たしてください。
2. Chef Automate サーバーの作成 の手順 1 ~ 10 に従います。
3. 自動バックアップ設定を指定した後、[Configure advanced settings] (詳細設定の設定) ページの [Tags] (タグ) の領域でタグを追加します。最大 50 個のタグを追加できます。タグを追加したら、[次へ] を選択します。
4. Chef Automate サーバーの作成 のステップ 13 に進み、新しいサーバーに対して選択した設定を確認します。

新しいバックアップにタグを追加する (コンソール)

1. AWS OpsWorks for Chef Automate ホームページで、既存の Chef Automate サーバーを選択します。
2. サーバーの詳細ページで、ナビゲーションペインで [Backups (バックアップ)] を選択します。
3. [Backups (バックアップ)] ページで、[Create backup (バックアップの作成)] を選択します。
4. タグを追加。タグの追加が完了したら、[Create (作成)] を選択します。

既存のサーバーにタグを追加または表示する (コンソール)

1. AWS OpsWorks for Chef Automate ホームページで、既存の Chef Automate サーバーを選択して詳細ページを開きます。
2. ナビゲーションペインで [Tags (タグ)] を選択するか、詳細ページの下部にある [View all tags (すべてのタグを表示)] を選択します。
3. [Tags (タグ)] ページで、[Edit (編集)] を選択します。
4. サーバー上のタグを追加または編集します。完了したら、[保存] を選択します。

> **Note**
>
> Chef Automate サーバーでタグを変更すると、EC2 インスタンス、Elastic IP アドレス、セキュリティグループ、S3 バケット、バックアップなど、サーバーに関連付けられているリソースのタグも変更されることに注意してください。

既存のバックアップにタグを追加または表示する (コンソール)

1. AWS OpsWorks for Chef Automate ホームページで、既存の Chef Automate サーバーを選択して詳細ページを開きます。
2. ナビゲーションペインで [Backups (バックアップ)] を選択するか、詳細ページの [Recent backups (最近のバックアップ)] 領域で [View all backups (すべてのバックアップを表示)] を選択します。
3. [Backups (バックアップ)] ページで、管理するバックアップを選択し、[Edit backup (バックアップの編集)] を選択します。
4. バックアップにタグを追加または編集します。完了したら、[Update (更新)] を選択します。

サーバからタグを削除する (コンソール)

1. AWS OpsWorks for Chef Automate ホームページで、既存の Chef Automate サーバーを選択して詳細ページを開きます。
2. ナビゲーションペインで [Tags (タグ)] を選択するか、詳細ページの下部にある [View all tags (すべてのタグを表示)] を選択します。
3. [Tags (タグ)] ページで、[Edit (編集)] を選択します。
4. タグを削除するには、タグの横にある [X] を選択します。完了したら、[保存] を選択します。

> **Note**
>
> Chef Automate サーバーでタグを変更すると、EC2 インスタンス、Elastic IP アドレス、セキュリティグループ、S3 バケット、バックアップなど、サーバーに関連付けられているリソースのタグも変更されることに注意してください。

バックアップからタグを削除する (コンソール)

1. AWS OpsWorks for Chef Automate ホームページで、既存の Chef Automate サーバーを選択して詳細ページを開きます。
2. ナビゲーションペインで [Backups (バックアップ)] を選択するか、詳細ページの [Recent backups (最近のバックアップ)] 領域で [View all backups (すべてのバックアップを表示)] を選択します。
3. [Backups (バックアップ)] ページで、管理するバックアップを選択し、[Edit backup (バックアップの編集)] を選択します。
4. タグを削除するには、タグの横にある [X] を選択します。完了したら、[Update (更新)] を選択します。

(AWS OpsWorks for Chef Automate CLI) でのタグの追加と管理

このセクションの手順は AWS CLIで実行されます。タグの使用 AWS CLI を開始する前に、 の最新リリースを実行していることを確認してください。のインストールまたは更新の詳細については AWS CLI、 AWS Command Line Interface ユーザーガイドの「 AWS CLIのインストール」を参照してください。

タグを追加する場合、タグのキーを空にすることはできません。キーは最大 127 文字で、Unicode 文字、数字、区切り文字、または特殊文字 (+ - = . _ : / @) のみを含めることができます。タグの値はオプションです。キーはあるが値はないタグであれば、追加できます。値は最大 255 文字とし、Unicode 文字、数字、区切り文字、または特殊文字 (+ - = . _ : / @) のみを含めることができます。

トピック

- 新しい AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーにタグを追加する (CLI)
- 新しいバックアップにタグを追加する (CLI)
- 既存のサーバーまたはバックアップにタグを追加する (CLI)
- リソースタグのリストを取得する
- リソースからタグを削除する

新しい AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーにタグを追加する (CLI)

AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを作成するときに AWS CLI 、 を使用してタグを追加できます。この手順では、サーバーの作成方法について詳しく説明していません。このガイドの を使

用して AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを作成する方法の詳細については、を使用して Chef Automate サーバーを作成する AWS CLI AWS CLI 「」を参照してください。サーバーには最大 50 個のタグを追加できます。

1. AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを作成するための前提条件を必ず満たしてください。
2. 「を使用して Chef Automate サーバーを作成する AWS CLI」のステップ 1 ～ 5 を完了します。
3. ステップ 6 では、`create-server` コマンドを実行するときに、以下の例に示すように、コマンドに `--tags` パラメータを追加します。

   ```
   aws opsworks-cm create-server ... --tags Key=Key1,Value=Value1
    Key=Key2,Value=Value2
   ```

   以下の例では、`create-server` コマンドのタグ部分のみを示しています。

   ```
   aws opsworks-cm create-server ... --tags Key=Stage,Value=Production
    Key=Department,Value=Marketing
   ```

4. 「を使用して Chef Automate サーバーを作成する AWS CLI」の残りのステップを行います。タグが新しいサーバーに追加されたことを確認するには、このトピックの「リソースタグのリストを取得する 」の手順に従います。

新しいバックアップにタグを追加する (CLI)

を使用して、 サーバーの新しい手動バックアップ AWS OpsWorks for Chef Automate を作成するときにタグ AWS CLI を追加できます。この手順では、手動バックアップの作成方法について詳しく説明していません。手動バックアップの作成方法の詳細については、の「 で手動バックアップを実行するには AWS CLI」を参照してくださいAWS OpsWorks for Chef Automate サーバーのバックアップ。バックアップには最大 50 個のタグを追加できます。サーバにタグがある場合、新しいバックアップにはサーバのタグが自動的にタグ付けされます。

デフォルトでは、新しい AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを作成すると、自動バックアップが有効になります。このトピックの「既存のサーバーまたはバックアップにタグを追加する (CLI) 」で説明されている `tag-resource` コマンドを実行して、自動バックアップにタグを追加できます。

- 手動バックアップの作成中にタグをバックアップに追加するには、以下のコマンドを実行します。コマンドのタグ部分のみを示しています。フル `create-backup` コマンドの例に関して

は、AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーのバックアップ の「 AWS CLIで手動バックアップを実行するには」を参照してください。

```
aws opsworks-cm create-backup ... --tags Key=Key1,Value=Value1
 Key=Key2,Value=Value2
```

以下の例では、create-backup コマンドのタグ部分のみを示しています。

```
aws opsworks-cm create-backup ... --tags Key=Stage,Value=Production
 Key=Department,Value=Marketing
```

既存のサーバーまたはバックアップにタグを追加する (CLI)

tag-resource コマンドを実行して、タグを既存の AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーまたはバックアップに追加できます (バックアップが手動で作成されたか自動的に作成されたかに関係なく)。ターゲットリソースの Amazon リソースナンバー (ARN) を指定して、タグを追加します。

1. タグを適用するリソースの ARN を取得するには:

   - サーバーの場合は、describe-servers --server-name *server_name* を実行します。コマンドの結果には、サーバーの ARN が表示されます。
   - バックアップの場合は、describe-backups --backup-id *backup_ID* を実行します。コマンドの結果には、バックアップの ARN が表示されます。を実行してdescribe-backups --server-name *server_name*、特定の AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーのすべてのバックアップに関する情報を表示することもできます。

   以下の例では、ServerArn コマンドの結果の describe-servers --server-name opsworks-cm-test のみを示しています。tag-resource コマンドに ServerArn 値を指定して、サーバーにタグを追加します。

```
{
    "Servers": [
        {
            ...
            "ServerArn": "arn:aws:opsworks-cm:us-west-2:123456789012:server/
opsworks-cm-test/EXAMPLEd-66b0-4196-8274-d1a2bEXAMPLE"
        }
    ]
```

```
}
```

2. ステップ 1 で返された ARN を使用して、tag-resourceコマンドを実行します。

```
aws opsworks-cm tag-resource --resource-arn "server_or_backup_ARN" --tags
 Key=Key1,Value=Value1 Key=Key2,Value=Value2
```

以下に例を示します。

```
aws opsworks-cm tag-resource --resource-arn "arn:aws:opsworks-cm:us-
west-2:123456789012:server/opsworks-cm-test/EXAMPLEd-66b0-4196-8274-d1a2bEXAMPLE"
 --tags Key=Stage,Value=Production Key=Department,Value=Marketing
```

3. タグが正常に追加されたことを確認するには、次の手順「リソースタグのリストを取得する」に進みます。

リソースタグのリストを取得する

list-tags-for-resource コマンドを実行して、 AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーまたはバックアップにアタッチされているタグを表示できます。ターゲットリソースの ARN を指定して、そのタグを表示します。

1. タグを一覧表示するリソースの ARN を取得するには:

   - サーバーの場合は、describe-servers --server-name *server_name* を実行します。コマンドの結果には、サーバーの ARN が表示されます。
   - バックアップの場合は、describe-backups --backup-id *backup_ID* を実行します。コマンドの結果には、バックアップの ARN が表示されます。を実行してdescribe-backups --server-name *server_name*、特定の AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーのすべてのバックアップに関する情報を表示することもできます。

2. ステップ 1 で返された ARN を使用して、list-tags-for-resourceコマンドを実行します。

```
aws opsworks-cm list-tags-for-resource --resource-arn "server_or_backup_ARN"
```

以下に例を示します。

```
aws opsworks-cm tag-resource --resource-arn "arn:aws:opsworks-cm:us-
west-2:123456789012:server/opsworks-cm-test/EXAMPLEd-66b0-4196-8274-d1a2bEXAMPLE"
```

リソースにタグがある場合、コマンドは以下のような結果を返します。

```
{
    "Tags": [
        {
            "Key": "Stage",
            "Value": "Production"
        },
        {
            "Key": "Department",
            "Value": "Marketing"
        }
    ]
}
```

リソースからタグを削除する

untag-resource コマンドを実行して、 AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーまたはバックアップからタグを削除できます。リソースが削除されると、リソースのタグも削除されます。ターゲットリソースの Amazon リソースナンバー (ARN) を指定して、タグを削除します。

1. タグを削除するリソースの ARN を取得するには:

   - サーバーの場合は、describe-servers --server-name *server_name* を実行します。コマンドの結果には、サーバーの ARN が表示されます。
   - バックアップの場合は、describe-backups --backup-id *backup_ID* を実行します。コマンドの結果には、バックアップの ARN が表示されます。を実行してdescribe-backups --server-name *server_name*、特定の AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーのすべてのバックアップに関する情報を表示することもできます。

2. ステップ 1 で返された ARN を使用して、untag-resource コマンドを実行します。削除するタグのみを指定します。

```
aws opsworks-cm untag-resource --resource-arn "server_or_backup_ARN" --tags
 Key=Key1,Value=Value1 Key=Key2,Value=Value2
```

この例では、untag-resource コマンドは、キーが Stage で値が Production のタグのみを削除します。

```
aws opsworks-cm untag-resource --resource-arn "arn:aws:opsworks-cm:us-
west-2:123456789012:server/opsworks-cm-test/EXAMPLEd-66b0-4196-8274-d1a2bEXAMPLE"
 --tags Key=Stage,Value=Production
```

3. タグが正常に削除されたことを確認するには、このトピックの「リソースタグのリストを取得する」の手順に従います。

以下の資料も参照してください。

- を使用して Chef Automate サーバーを作成する AWS CLI
- AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーのバックアップ
- AWS タグ付け戦略
- AWS Identity and Access Management ユーザーガイドの AWS リソースタグを使用したリソースへのアクセスの制御
- 「AWS Billing and Cost Management ユーザーガイド」の「コスト配分タグの使用」
- OpsWorks CM API リファレンス の CreateBackup
- OpsWorks CM API リファレンス の CreateServer
- OpsWorks CM API リファレンス の TagResource
- OpsWorks CM API リファレンス の ListTagsForResource
- OpsWorks 「CM API Reference」 (CM API リファレンス) の UntagResource (リソースのタグを外す)

AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーのバックアップと復元

> **Important**
>
> AWS OpsWorks for Chef Automate は 2024 年 5 月 5 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。既存のお客様は、 Chef SaaS または代替ソリューションに移行することをお勧めします。ご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このセクションでは、 AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーをバックアップおよび復元する方法と、バックアップを削除する方法について説明します。

トピック

- AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーのバックアップ
- バックアップから AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを復元する

AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーのバックアップ

> **Important**
>
> AWS OpsWorks for Chef Automate は 2024 年 5 月 5 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。既存のお客様は、 Chef SaaS または代替ソリューションに移行することをお勧めします。ご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

毎日または毎週の定期的な AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーバックアップを定義し、ユーザーに代わって Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) にバックアップを保存させることができます。または、必要に応じて手動でバックアップを実行することもできます。

バックアップが Amazon S3 に保存されるため、追加料金を負担します。30 世代を上限としてバックアップ保持期間を定義できます。 AWS サポートチャネルを使用して、サービスリクエストを送信して、その制限を変更することができます。Amazon S3 バケットに配信されるコンテンツには、カスタマーコンテンツが含まれている場合があります。機密データの削除の詳細については、「S3 バケットを空にする方法」または「S3 バケットを削除する方法」を参照してください。

AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーのバックアップにタグを追加できます。 AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーにタグを追加した場合、サーバーの自動バックアップはこれらのタグを継承します。バックアップでタグを追加および管理する方法についての詳細は、このガイドの「AWS OpsWorks for Chef Automate リソースでのタグの使用」を参照してください。

トピック

- 自動バックアップ
- 手動バックアップ
- バックアップの削除

自動バックアップ

AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを設定するときは、自動バックアップまたは手動バックアップのいずれかを選択します。 は、Setup の「高度な設定を構成する」ページの「自動バックアップ」セクションで選択した時間と日に自動バックアップ AWS OpsWorks for Chef Automate を開始します。サーバーがオンライン状態になった後で、バックアップ設定を変更することもできます。そのためには、Chef Automate サーバーのホームページのサーバータイルまたはサーバーの [Properties] ページで、以下のステップを実行します。

自動バックアップ設定を変更するには

1. [Chef servers] (Chef サーバー) ホームページのサーバのタイルの [Actions] (アクション) メニューで、[Change settings] (設定を変更する) を選択します。
2. 自動バックアップを無効にするには、[Enable automated backups] (自動バックアップの有効化) オプションの [No] (いいえ) を選択します。変更を保存します。次のステップに進む必要はありません。
3. [Automated Backup] セクションで、頻度、開始時刻、または保持する世代数を変更します。変更内容を保存します。

手動バックアップ

手動バックアップは、 でいつでも開始することも AWS マネジメントコンソール、create-backup コマンドを実行して AWS CLI 開始することもできます。手動バックアップは、保存される最大 30 世代の自動バックアップには含まれず、最大 10 個の手動バックアップが保存され、Amazon S3 から手動で削除する必要があります。

AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーの新しい手動バックアップを作成するときにタグを追加できます。手動バックアップを作成するときにタグを追加する方法の詳細については、「新しいバックアップにタグを追加する (CLI)」を参照してください

で手動バックアップを実行するには AWS マネジメントコンソール

1. [Chef Automate servers] ページで、バックアップするサーバーを選択します。
2. サーバーのプロパティページの左のナビゲーションペインで、[Backups] を選択します。
3. [Create backup] (バックアップの作成) を選択します。
4. ページでバックアップの [Status] 欄に緑色のチェックマークが表示されると、手動バックアップは完了です。

で手動バックアップを実行するには AWS CLI

- 手動バックアップを開始するには、次の AWS CLI コマンドを実行します。

```
aws opsworks-cm --region region name create-backup --server-name "Chef server name"
 --description "optional descriptive string"
```

バックアップの削除

バックアップを削除すると、バックアップが保存されている S3 バケットから完全に削除されます。

でバックアップを削除するには AWS マネジメントコンソール

1. [Chef Automate servers] ページで、バックアップするサーバーを選択します。
2. サーバーのプロパティページの左のナビゲーションペインで、[Backups] を選択します。
3. 削除するバックアップを選択してから、[Delete backup] を選択します。一度に 1 つのバックアップのみを選択できます。
4. 削除の確認を指示されたら、[Delete the backup, which is stored in an S3 bucket] チェックボックスにチェックを入れ、[Yes, Delete] を選択します。

でバックアップを削除するには AWS CLI

- バックアップを削除するには、次の AWS CLI コマンドを実行し、 を削除したいバックアップの ID `--backup-id`に置き換えます。バックアップ ID は、*ServerName-yyyyMMddHHmmssSSS* という形式になっています。例えば、**test-chef-server-20171218132604388**。

```
aws opsworks-cm --region region name delete-backup --backup-id ServerName-
yyyyMMddHHmmssSSS
```

バックアップから AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを復元する

> **Important**
>
> AWS OpsWorks for Chef Automate は 2024 年 5 月 5 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。既存のお客様は、 Chef SaaS または代替

ソリューションに移行することをお勧めします。ご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

使用可能なバックアップを参照した後、 AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを復元する時点を選択できます。サーバーのバックアップには、設定管理ソフトウェアの永続データ (クックブック、登録されたノードなど) のみが含まれています。サーバーのインプレース復元を実行する (つまり、既存の AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを新しい EC2 インスタンスに復元する) と、サーバーの復元に使用するバックアップ時に登録されたノードが再登録されます。復元が成功し、復元された AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーの状態が の場合、トラフィックは新しいインスタンスに切り替わりますHealthy。新しく作成された AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーに復元すると、ノード接続は維持されません。サーバーを復元すると、Chef ソフトウェアのマイナーバージョンが更新されません。選択したバックアップにあるものと同じ Chef バージョンと設定管理データが適用されます。

通常、サーバの復元には新しいサーバを作成するよりも時間がかかります。時間は選択するバックアップのサイズによります。復元が完了すると、古い EC2 インスタンスは Running または Stopped 状態のままになりますが、一時的にのみです。最終的には終了します。

このリリースでは、 を使用して Chef サーバーを AWS CLI 復元できます AWS OpsWorks for Chef Automate。

> **Note**
>
> restore-server コマンドは、現在のインスタンスタイプを変更する場合や、紛失または漏洩が発生した SSH キーの復元または設定を行う場合にも実行できます。

サーバーをバックアップから復元するには

1. で AWS CLI、次のコマンドを実行して、使用可能なバックアップとその IDs のリストを返します。使用するバックアップの ID を書き留めておきます。バックアップ ID は、*myServerName-yyyyMMddHHmmssSSS* という形式になっています。

   ```
   aws opsworks-cm --region region name describe-backups
   ```

2. 以下のコマンドを実行してください。

```
aws opsworks-cm --region region name restore-server --backup-id "myServerName-
yyyyMMddHHmmssSSS" --instance-type "Type of instance" --key-pair "name of your EC2
 key pair" --server-name "name of Chef server"
```

以下に例を示します。

```
aws opsworks-cm --region us-west-2 restore-server --backup-id
 "MyChefServer-20161120122143125" --server-name "MyChefServer"
```

3. 復元が完了するまで待ちます。

でのシステムメンテナンス AWS OpsWorks for Chef Automate

> **Important**
>
> AWS OpsWorks for Chef Automate は 2024 年 5 月 5 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。既存のお客様は、 Chef SaaS または代替ソリューションに移行することをお勧めします。ご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

必須のシステムメンテナンスにより、セキュリティ更新プログラムを含む最新のマイナーバージョンの Chef Server と Chef Automate Server が常に AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーで実行されます。システムメンテナンスは週に 1 回以上実行する必要があります。を使用すると AWS CLI、必要に応じて毎日の自動メンテナンスを設定できます。を使用して AWS CLI 、スケジュールされたシステムメンテナンスに加えて、オンデマンドでシステムメンテナンスを実行することもできます。

Chef ソフトウェアの新しいマイナーバージョンが使用可能になった場合、システムメンテナンスでは、それらが AWS のテストをパスし次第、サーバー上の Chef Automate および Chef Server のマイナーバージョンを自動的に更新するように設計されています。AWS では、Chef のアップグレードが本稼働で問題なく使用でき、お客様の既存の環境を害さないかどうかを検証するために、広範なテストを実行します。そのため、Chef ソフトウェアがリリースされてから、Chef Automate サーバーの既存の OpsWorks に適用できるようになるまで、時間差が生じる場合があります。Chef ソフトウェアの使用可能なマイナーバージョンをオンデマンドで更新するには、このトピックの「オンデマンドでのシステムメンテナンスの開始」を参照してください。

システムメンテナンスでは、メンテナンスプロセスの一環として実行されるバックアップから新しいインスタンスを起動します。これにより、定期的なメンテナンスを受ける Amazon EC2 インスタンスの低下や障害によるリスクを軽減することができます。

> **Important**
>
> システムメンテナンスでは、 AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーに追加したすべてのファイルやカスタム設定が削除されます。失われた設定やファイルを回復する詳しい方法については、このトピックの「メンテナンス後のカスタム設定およびカスタムファイルの復旧」を参照してください。

トピック

- ノードが OpsWorks 認証機関を信頼していることを確認する
- システムメンテナンスの設定
- オンデマンドでのシステムメンテナンスの開始
- メンテナンス後のカスタム設定およびカスタムファイルの復旧

ノードが OpsWorks 認証機関を信頼していることを確認する

> **Note**
>
> AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーでカスタムドメインと証明書を使用している場合、このセクションのステップは必要ありません。

AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーで管理しているノードは、証明書を使用してサーバーで認証する必要があります。システムメンテナンス中、 はサーバーインスタンスを OpsWorks 置き換え、認証局 (CA) を通じて新しい OpsWorks 証明書を再生成します。メンテナンスの完了後にマネージドノードとの通信を自動的に復元するには、ノードはスターターキットに付属し、 でサポートされているリージョンでホストされている OpsWorks CA を信頼する必要があります AWS OpsWorks for Chef Automate。 OpsWorks CA を使用してノードとサーバー間の信頼を確立すると、ノードはメンテナンス後に新しいサーバーインスタンスに再接続されます。で説明されている EC2 `userdata`スクリプトを使用して EC2 ノードを追加する場合でノードを自動的に追加する AWS OpsWorks for Chef Automate、ノードはすでに OpsWorks CA を信頼するように設定されています。

- Linux ベースのノードの場合、CA の S3 バケットの場所は `https://opsworks-cm-${REGION}-prod-default-assets.s3.amazonaws.com/misc/opsworks-cm-ca-2020-root.pem` です。 OpsWorks 信頼された CA はパス に保存する必要があります`/etc/chef/opsworks-cm-ca-2020-root.pem`。
- Windows ベースのノードの場合、CA の S3 バケットの場所は `https://opsworks-cm-$env:AWS_REGION-prod-default-assets.s3.amazonaws.com/misc/opsworks-cm-ca-2020-root.pem` です。 OpsWorks CA はルート Chef フォルダに保存する必要があります。例: `C:\chef\opsworks-cm-ca-2020-root.pem`

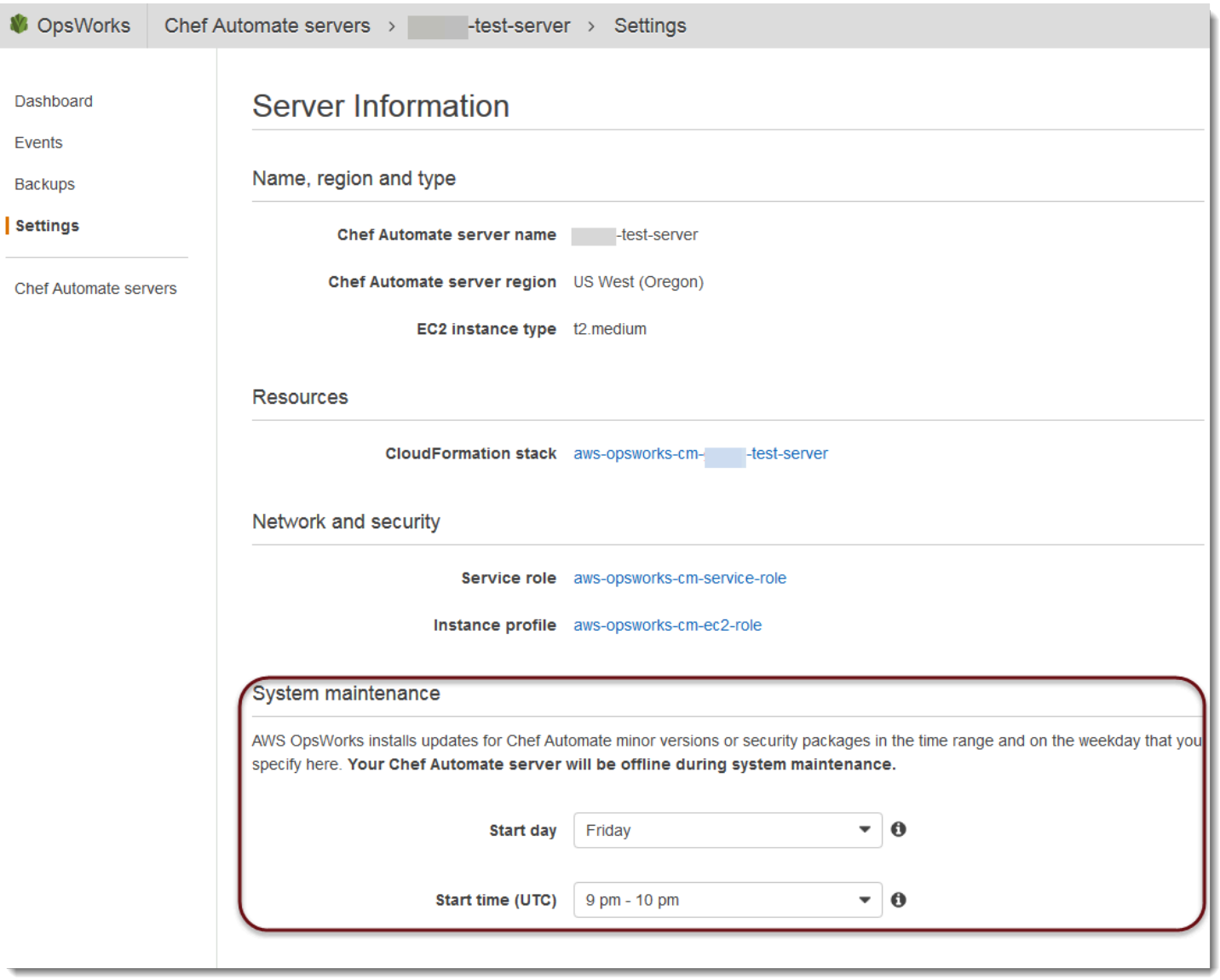
この 2 つのパスで region 変数は次のいずれかに解決されます。

- `us-east-2`
- `us-east-1`
- `us-west-1`
- `us-west-2`
- `ap-northeast-1`
- `ap-southeast-1`
- `ap-southeast-2`
- `eu-central-1`
- `eu-west-1`

システムメンテナンスの設定

新しい AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを作成するときは、システムメンテナンスを開始するために、協定世界時 (UTC) で曜日と時刻を設定できます。メンテナンスは、指定した時間中に開始します。システムメンテナンス中はサーバーがオフラインになることを想定する必要があるため、通常の営業時間内でサーバー需要が低い時刻を選択します。メンテナンスの進行中は、サーバーのステータスが `UNDER_MAINTENANCE` になります。

次のスクリーンショットに示すように、 AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーの設定ページのシステムメンテナンスエリアで設定を変更することで、既存のサーバーのシステムメンテナンス設定を変更することもできます。



[System maintenance] セクションで、システムメンテナンスを開始する日付と時刻を設定します。

を使用したシステムメンテナンスの設定 AWS CLI

システムメンテナンスの自動開始時刻を AWS CLIで設定することもできます。 AWS CLI では、3 文字の平日プレフィックスを省略して、必要に応じて毎日の自動メンテナンスを設定できます。

`create-server` コマンドで、サーバーインスタンスを作成する要件 (インスタンスタイプ、インスタンスプロファイル ARN、サービスロール ARN など) を指定した後で、`--preferred-maintenance-window` パラメータをコマンドに追加します。次の `create-server` の例では、`--preferred-maintenance-window` を `Mon:08:00` に設定しています。これで、毎月曜の午前 8 時 0 分 (UTC) にメンテナンスが開始されます 。

```
aws opsworks-cm create-server --engine "Chef" --engine-model "Single" --
engine-version "12" --server-name "automate-06" --instance-profile-arn
 "arn:aws:iam::1019881987024:instance-profile/aws-opsworks-cm-ec2-role"
 --instance-type "t2.medium" --key-pair "amazon-test" --service-role-arn
 "arn:aws:iam::044726508045:role/aws-opsworks-cm-service-role" --preferred-maintenance-
window "Mon:08:00"
```

update-server コマンドでは、必要に応じて、--preferred-maintenance-window の値のみを更新できます。次の例では、メンテナンス時刻を金曜の午後 6 時 15 分 (UTC) に設定しています 。

```
aws opsworks-cm update-server --server-name "shiny-kitchen" --preferred-maintenance-
window "Fri:18:15"
```

メンテナンス時間の開始時刻を毎日午後 6 時 15 分 (UTC) に変更するには、次の例に示すように、曜日を表す 3 文字のプレフィックスを省略します。

```
aws opsworks-cm update-server --server-name "shiny-kitchen" --preferred-maintenance-
window "18:15"
```

を使用して優先システムメンテナンスウィンドウを設定する方法の詳細については AWS CLI、「create-server」と「update-server」を参照してください。

オンデマンドでのシステムメンテナンスの開始

システムメンテナンスをオンデマンドで開始するには、設定した週次または日次自動メンテナンスの外部で、次の AWS CLI コマンドを実行します。 AWS マネジメントコンソールでオンデマンドメンテナンスを開始することはできません。

```
aws opsworks-cm start-maintenance --server-name server_name
```

このコマンドの詳細については、「start-maintenance」を参照してください。

メンテナンス後のカスタム設定およびカスタムファイルの復旧

システムメンテナンスでは、 AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーに追加したカスタムファイルまたは設定を削除または変更できます。

RunCommand または SSH を使用して追加したファイルや設定がメンテナンスの実行後に Chef サーバーに見つからない場合は、Amazon マシンイメージ (AMI) を使用して、新しい Amazon EC2 イン

スタンスを起動できます。サーバーのメンテナンス前の設定に基づいて構築された AMI を利用できます。

新しいインスタンスは、メンテナンス前の Chef サーバーと同じ状態であり、見つからないファイルや設定が含まれています。

> **Important**
>
> 新しいインスタンスを使用してサーバーを復元することはできません。インスタンスを Chef サーバーとして実行することはできません。インスタンスは、ファイルや設定の復旧にのみ使用できます。

AMI から EC2 インスタンスを起動するには、Amazon EC2 コンソールで [Launch] (起動) ウィザードを開き、[My AMIs] (マイAMI) を選択して、サーバー名と同じ名前の AMI を選択します。他の任意のインスタンスを起動する手順と同様に、Amazon EC2 ウィザードの手順に従います。

でのコンプライアンススキャン AWS OpsWorks for Chef Automate

> **Important**
>
> AWS OpsWorks for Chef Automate は 2024 年 5 月 5 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。既存のお客様は、 Chef SaaS または代替ソリューションに移行することをお勧めします。ご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

コンプライアンススキャンを使用すると、事前定義されたポリシー (ルールとも呼ばれる) に基づいてインフラストラクチャ内の管理対象ノードのコンプライアンスを追跡できます。Compliance のビューを使用すると、アプリケーションの脆弱性と非準拠設定を定期的に監査できます。Chef には、コンプライアンススキャンに使用できる事前定義された 100 個を超える Compliance プロファイル (特定のノード設定に適用するルールの集合) が用意されています。また、Chef InSpec の言語を使用して独自のカスタムプロファイルを作成することもできます。

サーバーでまだ Chef Automate 2.0 が実行されていない場合は、Audit クックブックをインストールすることで手動で Chef Compliance を設定できます。

> **Note**
>
> AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーに関連付けられたノードでサポートされている Chef Infra クライアントエージェントソフトウェア (`chef-client`) の最小バージョンは 13.x です。最新の安定`chef-client`バージョン、または少なくとも 14.10.9 を実行することをお勧めします。

トピック

- Chef Automate 2.0 の Compliance
- Chef Automate 1.x の Compliance
- Compliance の更新
- コミュニティとカスタム Compliance プロファイル
- 以下の資料も参照してください。

Chef Automate 2.0 の Compliance

AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーが Chef Automate 2.0 を実行している場合は、このセクションの手順を使用して Chef Compliance を設定します。

Chef Automate 2.0 を使用したコンプライアンススキャンジョブの実行

Chef Automate 2.0 には、以前は手動の設定とクックブックの設定が必要だった Chef InSpec コンプライアンススキャン機能が含まれています。Chef Automate 2.0 を実行している AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーでスキャンジョブを実行できます。ジョブは、すぐに (1 回) 実行するか、後で実行するようにスケジュールするか、指定した間隔 (毎日または 2 時間ごとなど) で実行するようにスケジュールすることができます。スキャンジョブの結果はコンプライアンスレポートに送信されます。Chef Automate ダッシュボードで、コンプライアンススキャンの結果を表示して対処できます。[Compliance] タブを開いてレポートを表示するには、Chef Automate ダッシュボードの [Scan Jobs] タブで、管理対象ノード行の右側にある [Report] を選択します。

管理対象ノードでスキャンジョブを実行するには、以下のものが必要です。

- 名前空間にインストールされた 1 つ以上の Compliance プロファイル。
- 手動で追加された 1 つの以上のターゲットノード、または自動的に追加された EC2 インスタンス。

では AWS OpsWorks for Chef Automate、スキャンジョブは次のターゲットでサポートされています。

- 手動で追加されたノード
- `aws-ec2` インスタンス
- AWS リージョン

スキャンジョブの実行方法の詳細については、Chef のドキュメントの「Chef Automate Scan Jobs」を参照してください。

(オプション、Chef Automate 2.0) Audit クックブックによるコンプライアンスの設定

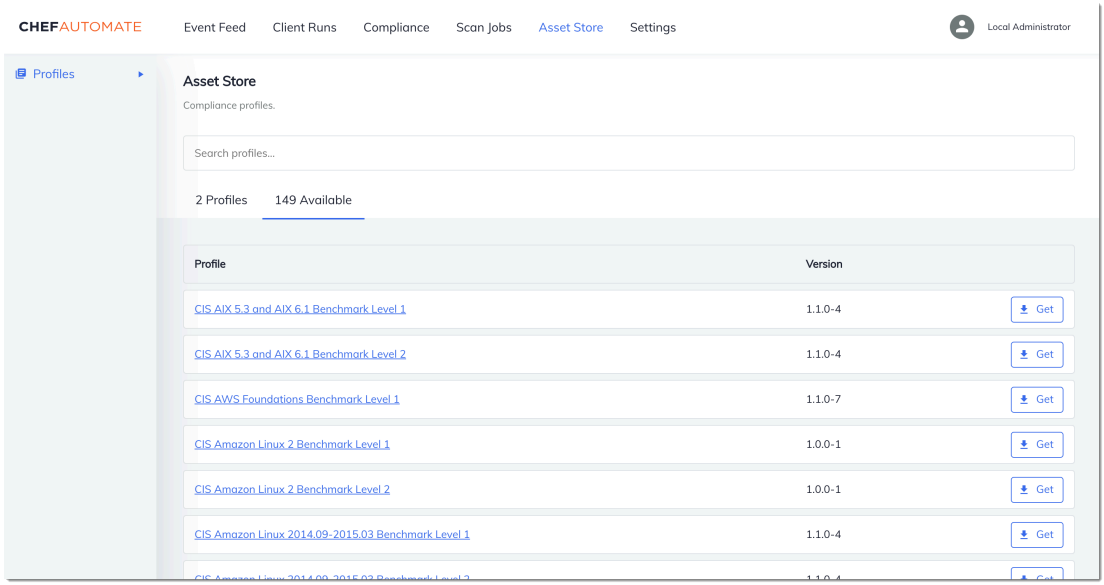
どの AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーでもコンプライアンスを設定できます。 AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを起動した後、Chef Automate ダッシュボードからプロファイルをインストールしたり、`Policyfile.rb` ポリシーファイルで Audit クックブックの属性に目的のプロファイルを追加したりできます。スターターキットには、事前入力済みの `Policyfile.rb` ファイルが含まれています。

監査クックブックの属性として `Policyfile.rb` プロファイルを編集した後、`chef push` コマンドを実行して [Audit cookbook] (監査クックブック) と `Policyfile.rb` で指定された他のクックブックを Chef Automate サーバーにアップロードします。Audit クックブックをインストールすると、Chef によって作成されたオープンソースのテストおよび監査フレームワークである Chef InSpec の gem もインストールされます。Chef Automate 2.0 の場合は、Audit クックブックのバージョン 7.1.0 以降を選択します。InSpec gem はバージョン 2.2.102 以降であることが必要です。

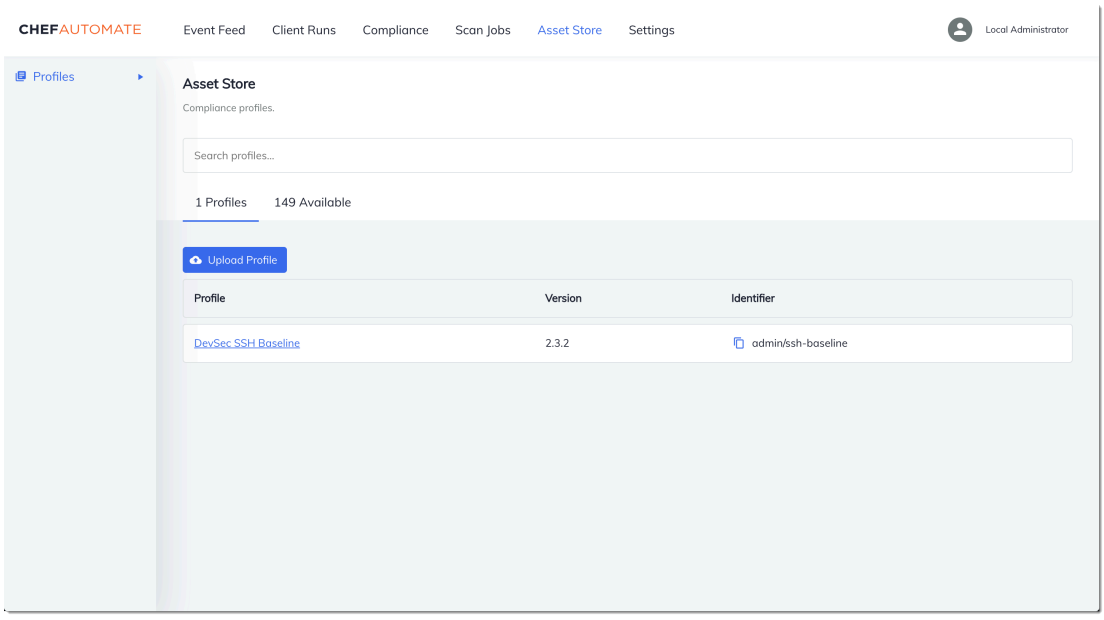
このセクションの手順は `opsworks-audit` クックブックを実装する方法を示しています。Audit クックブックは指定されたプロファイルを Chef Automate サーバーからダウンロードし、DevSec SSH Baseline プロファイルに対してノードを評価して、`chef-client` の実行ごとにコンプライアンススキャンの結果をレポートします。

Compliance プロファイルをインストールするには

1. まだ行っていない場合は Chef Automate ウェブベースダッシュボードにサインインします。AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーの作成時にスターターキットをダウンロードした際に受信した認証情報を使用します。
2. Chef Automate ダッシュボードで、[Asset Store] タブを選択します。



3. 定義済みのプロファイルを表示するには、[Available] タブを選択します。
4. プロファイルのリストを参照します。オペレーティングシステムおよび少なくとも 1 つの管理対象ノードの設定に一致するプロファイルを選択します。プロファイルの対象となる違反の説明および基盤となるルールコードを含むプロファイルの詳細を表示するには、プロファイル項目の右にある [>] を選択します。複数のプロファイルを選択できます。スターターキットのサンプルを設定する場合は、[DevSec SSH Baseline] を選択します。



5. 選択されたプロファイルを Chef Automate サーバーにインストールするには、[Get] を選択します。
6. プロファイルをインストールすると、それらは Chef Automate ダッシュボードの [Profiles] タブに表示されます。

Policyfile.rb を使用してクックブックをインストールするには

1. スターターキットの Policyfile.rb を表示して、Audit クックブックの属性で ['profiles'] の ssh-baseline プロファイルが指定されていることを確認します。

```
# Define audit cookbook attributes
default["opsworks-demo"]["audit"]["reporter"] = "chef-server-automate"
default["opsworks-demo"]["audit"]["profiles"] = [
  {
    "name": "DevSec SSH Baseline",
    "compliance": "admin/ssh-baseline"
  }
]
```

2. Policyfile.rb に定義されているクックブックをダウンロードしてインストールします。

```
chef install
```

すべてのクックブックはクックブックの metadata.rb ファイルでバージョニングされています。クックブックを変更するたびに metadata.rb にあるクックブックのバージョンを上げる必要があります。

3. Policyfile.rb に定義されているポリシー opsworks-demo をサーバーにプッシュします。

```
chef push opsworks-demo
```

4. ポリシーのインストールを確認します。以下のコマンドを実行してください。

```
chef show-policy
```

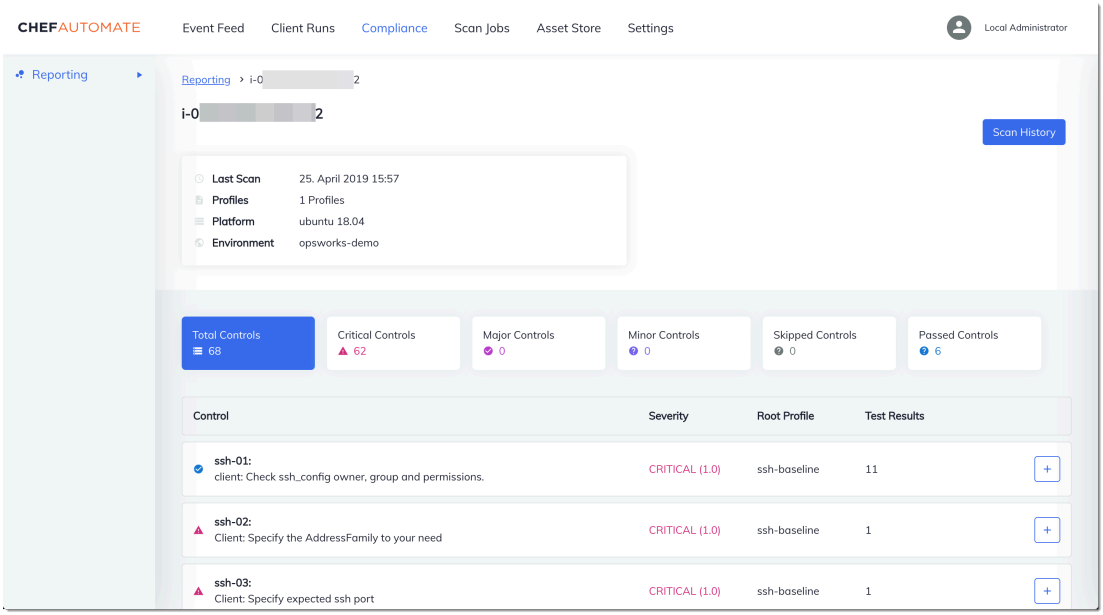
結果は以下のようになります。

```
opsworks-demo-webserver
=======================
* opsworks-demo:  ec0fe46314
```

5. まだ行っていない場合は、サーバーにノードを追加して管理できるようにします。最初のノードを AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーに接続するには、このスターターキットに含まれているuserdata.shスクリプトを使用します。AssociateNode API を使用して、ノードを OpsWorks サーバーに接続します。

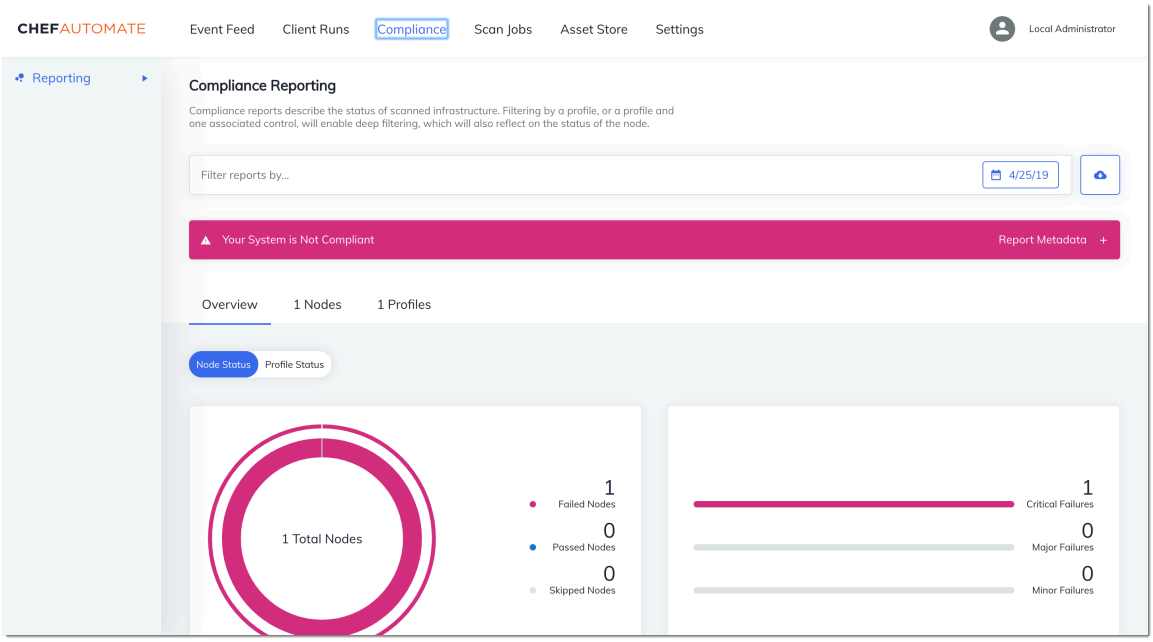
「でノードを自動的に追加する AWS OpsWorks for Chef Automate」のステップに従ってノードの関連付けを自動化できます。または「ノードを個別に追加します」のステップに従ってノードを 1 度に 1 つずつ追加できます。

6. ノードの実行リストを更新すると、chef-client エージェントが次回の実行時に、指定したレシピを実行します。この処理はデフォルトで 1,800 秒 (30 分) ごとに行われます。その実行後、Chef Automate ダッシュボードの [Compliance] タブからコンプライアンス結果を表示し、アクションを実行できます。

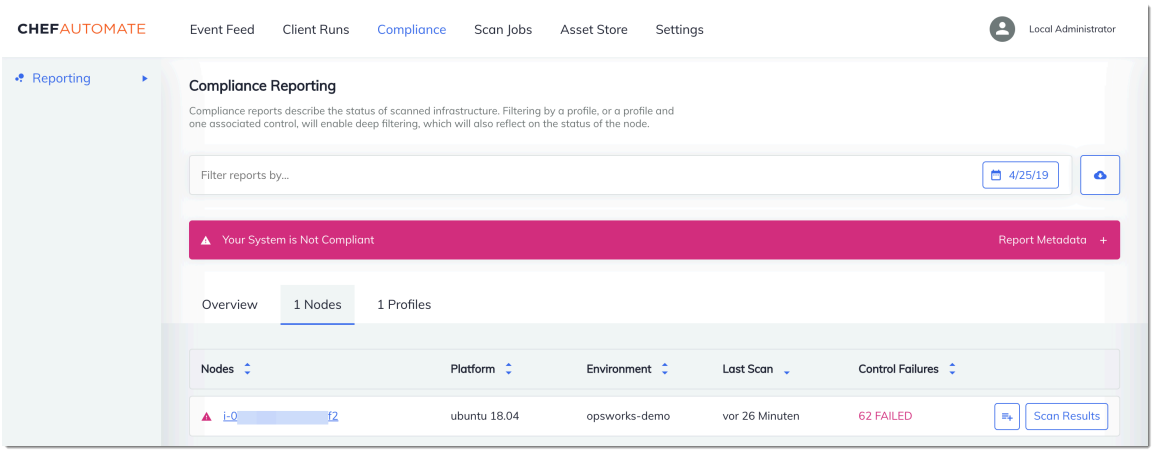


コンプライアンススキャンの実行

ノードの実行リストを設定した後、エージェントが初めて実行されるとすぐに、Chef Automate ダッシュボードにコンプライアンススキャンの結果が表示されます。



Chef Automate ダッシュボードで、[Compliance] タブを選択します。左のナビゲーションペインの [Reporting] を選択します。[Profiles] タブを選択して [Scan Results] を選択した後、スキャンによって非準拠と見なされたノードを選択して、そのノードがどのルールに対して非準拠になったかを調べます。



新しいノードは DevSec SSH Baseline プロファイルのルールすべてを満たさないため、通常はスキャンの非準拠結果が表示されます。DevSec Hardening Framework はコミュニティベースのプロジェクトで、DevSec SSH Baseline プロファイルのルールに違反する問題を修正するクックブックを提供します。

(オプション) 非準拠結果の解決

スターターキットにはオープンソースのクックブック ssh-hardening が含まれています。このクックブックは、DevSec SSH Baseline プロファイルに対して実行したスキャンの非準拠結果を修正するために実行できます。

> **Note**
>
> ssh-hardening クックブックは DevSec SSH Baseline ルールに準拠するようにノードを変更します。本稼働ノードでこのクックブックを実行する前にクックブックがターゲットにするルール違反を理解するため、Chef Automate の DevSec SSH Baseline プロファイルの詳細を確認してください。本稼働ノードでこれを実行する前に、オープンソースの ssh-hardening クックブックに関する情報を確認します。

ssh-hardening クックブックを実行するには

1. テキストエディタで、ssh-hardening の実行リストに Policyfile.rb クックブックを追加します。実行リスト Policyfile.rb は以下のようになります。

   ```
   run_list  'chef-client', 'opsworks-webserver', 'audit', 'ssh-hardening'
   ```

2. Policyfile.rb を更新し、 AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーにプッシュします。

   ```
   chef update Policyfile.rb
      chef push opsworks-demo
   ```

3. opsworks-demo ポリシーに関連付けられているノードは実行リストを自動的に更新し、次の chef-client の実行時に ssh-hardening クックブックを適用します。

   chef-client クックブックを使用しているため、ノードが定期的にチェックインします (デフォルトでは 30 分ごと)。次のチェックインで ssh-hardening クックブックが実行され、DevSec SSH Baseline プロファイルのルールを満たすようにノードセキュリティの改善をサポートします。

4. ssh-hardening クックブックの初回実行が完了したら 30 分待機し再びコンプライアンススキャンを実行します。Chef Automate ダッシュボードで結果を表示します。DevSec SSH Baseline スキャンの初回実行時に発生した非準拠の結果が解決されます。

Chef Automate 1.x の Compliance

AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーが Chef Automate 1.x を実行している場合は、このセクションの手順を使用して Chef Compliance を設定します。

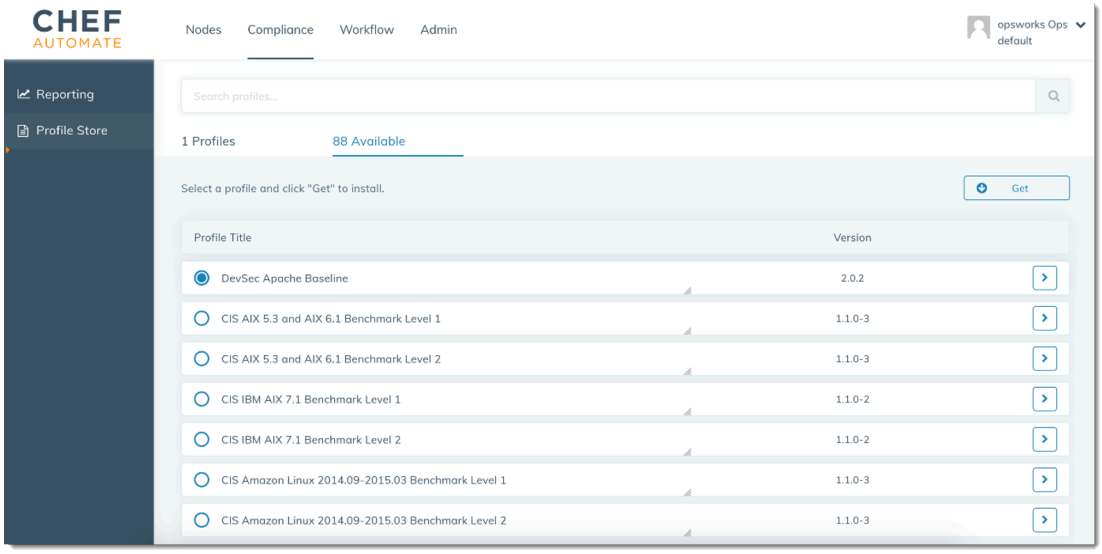
(オプション、Chef Automate 1.x) Chef Compliance の設定

Chef Compliance は任意の AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーで設定できます。 AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを起動した後、Chef Automate ダッシュボードのプロファイルから実行するプロファイルを選択します。プロファイルをインストールした後、`berks` コマンドを実行して Audit クックブックを Chef Automate サーバーにアップロードします。Audit クックブックをインストールすると、InSpec のジェムもインストールされます。これは、Chef によって実行されるオープンソースのテストフレームワークであり、デプロイメントパイプラインの任意のステージに自動化されたテストを統合できます。Chef Automate 1.x の場合は、監査クックブックのバージョン 5.0.1 以降を選択します。InSpec gem はバージョン 1.24.0 以降であることが必要です。

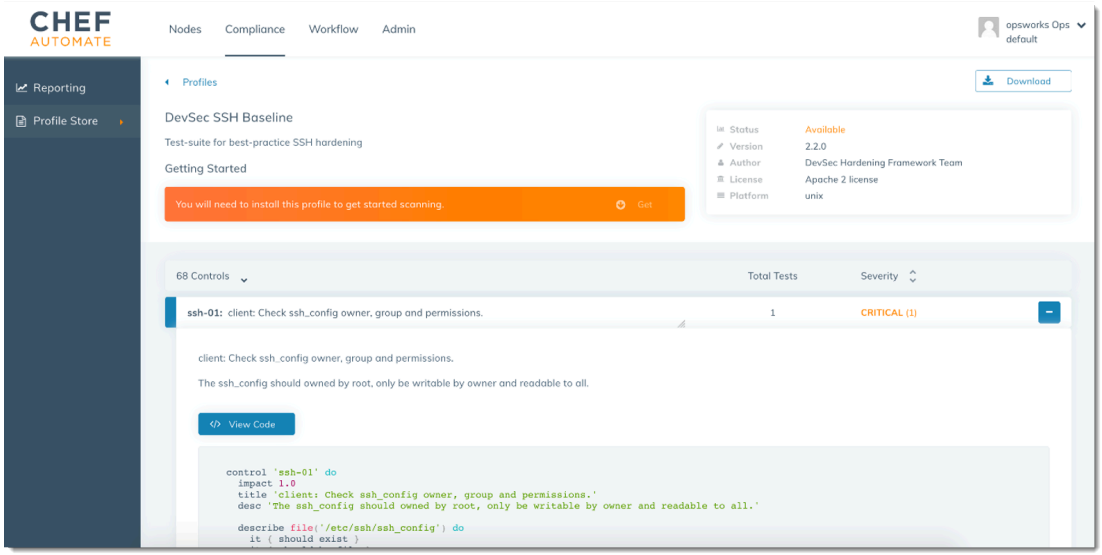
AWS OpsWorks for Chef Automate スターターキットには、Chef の Audit クックブックの適切なバージョンをダウンロードしてインストール`opsworks-audit`するラッパークックブック が含まれています。`opsworks-audit` クックブックは `chef-client` エージェントが、この後のトピックで行う Chef Compliance コンソールからインストールする DevSec SSH Baseline プロファイルに対しノード評価を行うように指示します。独自の設定に適したように、いずれかのクックブックを使用してコンプライアンスをセットアップできます。このセクションの手順は `opsworks-audit` クックブックを実装する方法を示しています。

Compliance プロファイルをインストールするには

1. まだ行っていない場合は Chef Automate ウェブベースダッシュボードにサインインします。AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーの作成時に Starter Kit をダウンロードしたときに受け取った認証情報を使用します。
2. Chef Automate ダッシュボードで、[Compliance] タブを選択します。



3. 左ナビゲーションバーで、[Profile Store] を選択してから [Available] タブを選択して、事前定義されたプロファイルを表示します。
4. プロファイルのリストを参照します。オペレーティングシステムおよび少なくとも 1 つの管理対象ノードの設定に一致するプロファイルを選択します。プロファイルの対象となる違反の説明および基盤となるルールコードを含むプロファイルの詳細を表示するには、プロファイル項目の右にある [>] を選択します。複数のプロファイルを選択できます。



5. 選択されたプロファイルを Chef Automate サーバーにインストールするには、[Get] を選択します。
6. ダウンロードが完了したら、次の手順に進んでください。

opsworks-audit クックブックをインストールしてセットアップする

1. このステップはオプションですが、ノードの実行リストにレシピを追加する場合のステップ 6 で時間の節約になります。 AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーの作成時にダウンロードしたスターターキットに含まれている roles/opsworks-example-role.rb ファイルを編集します。次の行を追加します。コンプライアンススキャンを実行してから非準拠ノードを解決するために ssh-hardening クックブックとレシピを追加することはオプションなので、最後の行はコメントアウトされています。

   ```
   run_list(
        "recipe[chef-client]",
        "recipe[apache2]",
        "recipe[opsworks-audit]"
        # "recipe[ssh-hardening]"
          )
   ```

2. テキストエディタを使用して Berksfile で希望のクックブックを指定します。サンプル Berksfile はスターターキットに含まれています。この例では、Chef Infra クライアント ([chef-client) クックブック、apache2クックブック、opsworks-audit クックブックをインストールします。Berksfile は以下のようになります。

   ```
   source 'https://supermarket.chef.io
        cookbook 'chef-client'
        cookbook 'apache2', '~> 5.0.1'
        cookbook 'opsworks-audit', path: 'cookbooks/opsworks-audit', '~> 1.0.0'
   ```

   すべてのクックブックはクックブックの metadata.rb ファイルでバージョニングされています。クックブックを変更するたびに metadata.rb にあるクックブックのバージョンを上げる必要があります。

3. 次のコマンドを実行してローカルまたは使用中のコンピュータにある cookbooks フォルダにクックブックをダウンロードしインストールします。

   ```
   berks vendor cookbooks
   ```

4. 次のコマンドを実行して、 AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーにベンダーのクックブックをアップロードします。

   ```
   knife upload .
   ```

5. opsworks-audit クックブックがインストールされていることを確認するには、次のコマンドを実行してサーバーで現在使用可能なクックブックのリストを表示します。

```
knife cookbook list
```

6. まだ行っていない場合は、サーバーにノードを追加して管理できるようにします。「でノードを自動的に追加する AWS OpsWorks for Chef Automate」のステップに従ってノードの関連付けを自動化できます。または「ノードを個別に追加します」のステップに従ってノードを 1 度に 1 つずつ追加できます。ノードの実行リストを編集して、ステップ 1 の opsworks-example-role で指定したロールを追加します。この例では RUN_LIST の属性を userdata スクリプトで編集します。これはノードの関連性を自動化するために使用します。

```
RUN_LIST="role[opsworks-example-role]"
```

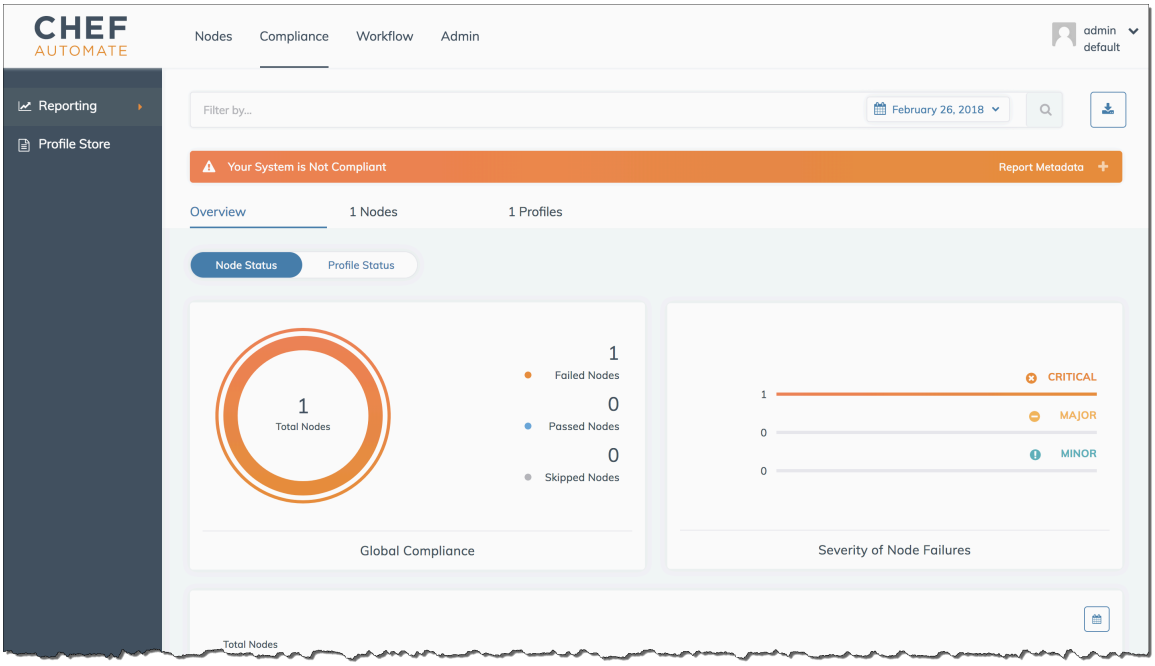
ステップ 1 をスキップしロールを設定しなかった場合は、実行リストに各レシピの名前を追加します。変更を保存して ステップ 3: 自動関連付けスクリプトを使用してインスタンスを作成する のステップに従がって、ユーザーデータスクリプトをAmazon EC2 インスタンスに適用します。

```
RUN_LIST="recipe[chef-client],recipe[apache2],recipe[opworks-audit]"
```

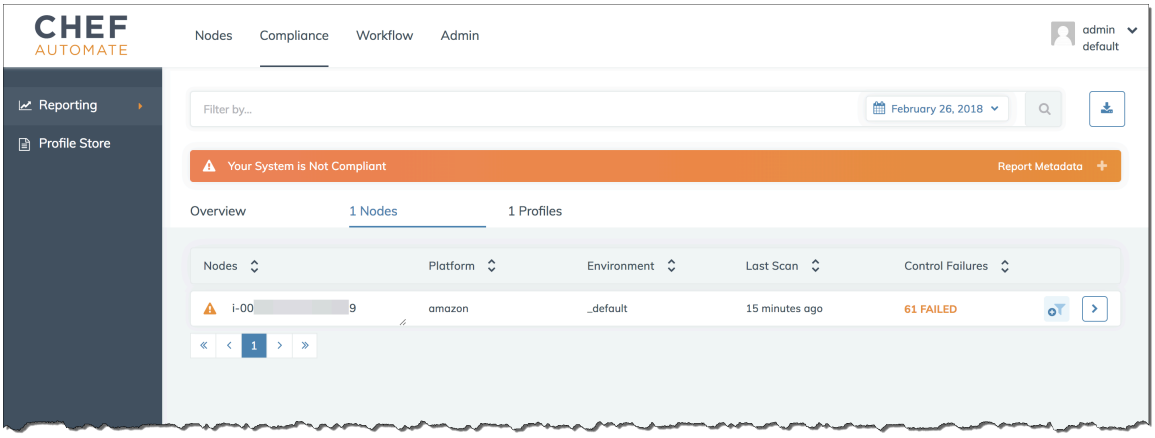
7. ノードの実行リストを更新すると、chef-client エージェントが次回の実行時に、指定したレシピを実行します。この処理はデフォルトで 1,800 秒 (30 分) ごとに行われます。実行後、Chef Automate ダッシュボードでコンプライアンス結果を見ることができます。

コンプライアンススキャンの実行

ノードの実行リストを設定した後初めてエージェントデーモンが実行された後短時間で、Chef Automate ダッシュボードにコンプライアンススキャンの結果が表示されます。



Chef Automate ダッシュボードで、[Compliance] タブを選択します。左のナビゲーションペインの [Reporting] を選択します。[Profiles] タブを選択して [Scan Results] を選択した後、スキャンによって非準拠と見なされたノードを選択して、そのノードがどのルールに対して非準拠になったかを調べます。



新しいノードは DevSec SSH Baseline プロファイルのルールすべてを満たさないため、通常はスキャンの非準拠結果が表示されます。DevSec Hardening Framework はコミュニティベースのプロジェクトで、DevSec SSH Baseline プロファイルのルールに違反する問題を修正するクックブックを提供します。

(オプション) 非準拠結果の解決

スターターキットにはオープンソースのクックブック ssh-hardening が含まれています。このクックブックは、DevSec SSH Baseline プロファイルに対して実行したスキャンの非準拠結果を修正するために実行できます。

> **Note**
>
> ssh-hardening クックブックは DevSec SSH Baseline ルールに準拠するようにノードを変更します。本稼働ノードでこのクックブックを実行する前にクックブックがターゲットにするルール違反を理解するため、Chef Automate の DevSec SSH Baseline プロファイルの詳細を確認してください。本稼働ノードでこれを実行する前に、オープンソースの ssh-hardening クックブックに関する情報を確認します。

ssh-hardening クックブックを実行するには

1. テキストエディタで、ssh-hardening クックブックを Berksfile に追加します。Berksfile は以下のようになります。

```
source 'https://supermarket.chef.io'
     cookbook 'chef-client'
     cookbook 'apache2', '~> 5.0.1'
     cookbook 'opsworks-audit', path: 'cookbooks/opsworks-audit', '~> 1.0.0' #
 optional
     cookbook 'ssh-hardening'
```

2. 次のコマンドを実行して ssh-hardening クックブックをローカルのクックブックフォルダにダウンロードし、 AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーにアップロードします。

```
berks vendor cookbooks
knife upload .
```

3. ノードの実行リストに ssh-hardening レシピを追加します。この操作はステップ 1 とステップ 6 (opsworks-audit クックブックをインストールしてセットアップする) で説明されています。

   opsworks-example-role.rb ファイルを更新するには、次のコマンドを実行してサーバーに変更をアップロードします。

```
knife upload .
```

実行リストを直接更新するには、次のコマンドを実行して変更をアップロードします。通常、ノード名はインスタンス ID になります。

```
knife node run_list add <node name> 'recipe[ssh-hardening]'
```

4. chef-client クックブックを使用しているため、ノードが定期的にチェックインします (デフォルトでは 30 分ごと)。次のチェックインで ssh-hardening クックブックが実行され、DevSec SSH Baseline プロファイルのルールを満たすようにノードセキュリティの改善をサポートします。
5. ssh-hardening クックブックの初回実行が完了したら 30 分待機し再びコンプライアンススキャンを実行します。Chef Automate ダッシュボードで結果を表示します。DevSec SSH Baseline スキャンの初回実行時に発生した非準拠の結果が解決されます。

Compliance の更新

AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーでは、スケジュールされたシステムメンテナンスによってコンプライアンス機能が自動的に更新されます。Chef Automate、Chef Infra Server、Chef InSpec の最新リリースが AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーで使用可能になると、サーバーで実行されている Audit クックブックおよび Chef InSpec gem のサポートされているバージョンを確認および更新する必要があります。 AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーにインストール済みのプロファイルは、メンテナンスの一環として更新されません。

コミュニティとカスタム Compliance プロファイル

Chef には現在 100 種類を超えるコンプライアンススキャンプロファイルが含まれています。コミュニティとカスタムプロファイルをリストに追加して、含まれているプロファイルと同様にそれらのプロファイルに基づいてコンプライアンススキャンをダウンロードして実行できます。コミュニティベースの Compliance プロファイルは Chef Supermarket から入手できます。カスタムプロファイルは Ruby ベースのプログラムであり、スキャンルールを指定するコントロールのフォルダが含まれています。

以下の資料も参照してください。

- Chef Compliance 発表ブログ投稿

- Chef Automate Compliance オンライントレーニング
- Chef InSpec のウェブサイト
- Chef InSpec チュートリアル

AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーからノードの関連付けを解除する

> **Important**
>
> AWS OpsWorks for Chef Automate は 2024 年 5 月 5 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。既存のお客様は、 Chef SaaS または代替ソリューションに移行することをお勧めします。ご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このセクションでは、 AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーによる管理からマネージドノードの関連付けを解除または削除する方法について説明します。このオペレーションはコマンドラインで実行されます。 AWS OpsWorks for Chef Automate マネジメントコンソールでノードの関連付けを解除することはできません。現在、 AWS OpsWorks for Chef Automate API では複数のノードをバッチ削除することはできません。このセクションのコマンドでは、一度に 1 つのノードの関連付けを切り離します。

Chef サーバーを削除する場合は、ノードがサーバーへの再接続を試行することなく動作を続行できるように、サーバーとノードとの関連付けを解除することをお勧めします。これを行うには、`disassociate-node` AWS CLI コマンドを実行します。

ノードの関連付けを解除するには

1. で AWS CLI、次のコマンドを実行してノードの関連付けを解除します。*`[Node_name]`* (ノードネーム) は関連付けを解除するノードの名前です。Amazon EC2インスタンスの場合、これはインスタンス ID になります。*`Server_name`* は、ノードとの関連付けを解除する Chef サーバーの名前です。`--engine-attributes` にはデフォルトの `CHEF_AUTOMATE_ORGANIZATION` 名を指定します。これら 3 つのパラメータはすべて必須です。

   デフォルトのリージョンにない Chef サーバーからノードの関連付けを解除しない限り、`--region` パラメータは必須ではありません。

```
aws opsworks-cm --region Region_name disassociate-node --node-
name Node_name --server-name Server_name --engine-attributes
 "Name=CHEF_AUTOMATE_ORGANIZATION,Value='default'"
```

コマンドの例を次に示します。

```
aws opsworks-cm --region us-west-2 disassociate-node --node-name
 i-0010zzz00d66zzz90 --server-name opsworkstest --engine-attributes
 "Name=CHEF_AUTOMATE_ORGANIZATION,Value='default'"
```

2. 関連付けの解除が完了したことを示す応答メッセージが表示されるまで待ちます。

   AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーからノードの関連付けを正常に解除しても、Chef Automate ダッシュボードに表示されることがあります。Chef はデフォルトでノード状態情報の保持期間を適用し、数日後にはノードを自動消去します。

AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを削除する方法の詳細については、「」を参照してくださいAWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを削除する。

関連トピック

次の AWS ブログ記事では、Auto Scaling グループを使用するか、複数のアカウント内で、Chef Automate サーバーにノードを自動的に関連付ける方法について詳しく説明します。

- Using AWS OpsWorks for Chef Automate to Manage EC2 Instances with Auto Scaling
- OpsWorks for Chef Automate – Automatically Bootstrapping Nodes in Different Accounts

AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを削除する

> **Important**
>
> AWS OpsWorks for Chef Automate は 2024 年 5 月 5 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。既存のお客様は、 Chef SaaS または代替ソリューションに移行することをお勧めします。ご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このセクションでは、 AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを削除する方法について説明します。サーバーを削除すると、サーバーに保存されていたイベント、ログ、およびクックブックも削除されます。サポートするリソース (Amazon Elastic Compute Cloud インスタンス、Amazon Elastic Block Store ボリュームなど) やすべての自動バックアップも削除されます。

サーバーを削除してもノードは削除されませんが、これらは削除されたサーバーによって管理されなくなり、継続的に再接続が試行されます。このため、Chef サーバーを削除する場合は、管理されているノードの関連付けを事前に解除することをお勧めします。このリリースでは、 AWS CLI コマンドを実行してノードの関連付けを解除できます。

ステップ 1: 管理されているノードの関連付けを解除する

Chef サーバーを削除する場合は、ノードがサーバーへの再接続を試行することなく動作を続行できるように、サーバーとノードとの関連付けを解除します。これを行うには、 disassociate-node AWS CLI コマンドを実行します。

ノードの関連付けを解除するには

1. で AWS CLI、次のコマンドを実行してノードの関連付けを解除します。*Server_name* は、ノードが関連付けられている Chef サーバーの名前です。

   ```
   aws opsworks-cm --region Region_name disassociate-node --node-name Node_name --
   server-name Server_name
   ```

2. 関連付けの解除が完了したことを示す応答メッセージが表示されるまで待ちます。

ステップ 2: サーバーを削除する

1. ダッシュボードのサーバータイルで、[Actions] メニューを展開します。
2. [Delete server] を選択します。
3. 削除の確認を求められたら、[Yes] を選択します。

Chef Automate ダッシュボードの認証情報のリセット

> **Important**
>
> AWS OpsWorks for Chef Automate は 2024 年 5 月 5 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。既存のお客様は、 Chef SaaS または代替

ソリューションに移行することをお勧めします。ご質問がある場合は、AWS re:Post または AWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Chef Automate ダッシュボードへのサインインに使用するパスワードを定期的に変更したい場合があります。このセクションに示す Amazon EC2 Systems Manager AWS CLI コマンドを使用して、Chef Automate ダッシュボードのパスワードを紛失した場合に変更することもできます。使用するコマンドは、Chef Automate サーバーが Chef Automate のバージョン 1 とバージョン 2 のどちらを実行しているかによって異なります。

1. Chef サーバーのインスタンス ID を返すには、 を開いて次のページ AWS マネジメントコンソール に移動します。

   https://console.aws.amazon.com/ec2/v2/home?region=##########Instances:search=aws-opsworks-cm-*#####*

   例えば、米国西部 (オレゴン) リージョン にある [MyChefServer] (マイ Chef サーバー) という名前の Chef サーバーの場合、コンソール URL は次のようになります。

   https://console.aws.amazon.com/ec2/v2/home?region=us-west-2#Instances:search=aws-opsworks-cm-MyChefServer

   コンソールに表示されるインスタンス ID を書き留めておきます。パスワードを変更する際にこの値が必要になります。
2. Chef Automate ダッシュボードのサインインパスワードをリセットするには、サーバーが Chef Automate 1 を実行しているか、Chef Automate 2 を実行しているかに応じて、次の AWS CLI コマンドのいずれかを実行します。*[enterprise_name]* を自分のエンタープライズ名または組織名に、*[user_name]* をサーバーの管理者の IAM ユーザー名に、*[new_password]* を使用するパスワードに、*[region_name]* をサーバーが配置されているリージョンに、それぞれ置き換えます。エンタープライズの名前を指定していない場合、エンタープライズ名は `default` になります。デフォルトでは、*enterprise_name* は、`default` (常にプロビジョニングされる組織の名前) です。*user_name* の場合、 は という名前のユーザー AWS OpsWorks for Chef Automate のみを作成しますadmin。新しいパスワードを書き留めて、安全かつ便利な場所に保存します。

   Chef Automate 1 の場合:

   ```
   aws ssm send-command --document-name "AWS-RunShellScript" --comment "reset admin
    password" --instance-ids "instance_id"
   ```

```
--parameters commands="sudo delivery-ctl reset-
password enterprise_name user_name new_password" --region region_name --output text
```

Chef Automate 2 の場合:

```
aws ssm send-command --document-name "AWS-RunShellScript" --comment "reset admin
 password" --instance-ids "instance_id"
--parameters commands="sudo chef-automate iam admin-access restore new_password" --
region region_name --output text
```

3. パスワード変更が完了したことを示す出力テキスト (この場合はコマンド ID) が表示されるのを待ちます。

を使用した AWS OpsWorks for Chef Automate API コールのログ記録 AWS CloudTrail

> **Important**
>
> AWS OpsWorks for Chef Automate は 2024 年 5 月 5 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。既存のお客様は、 Chef SaaS または代替ソリューションに移行することをお勧めします。ご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

AWS OpsWorks for Chef Automate は AWS CloudTrail、IAM ID または のサービスによって実行されたアクションを記録する AWS サービスである と統合されています AWS OpsWorks for Chef Automate。CloudTrail は、 AWS OpsWorks for Chef Automate コンソールからの呼び出しや API へのコード呼び出しを含む、 のすべての API コールをイベント AWS OpsWorks for Chef Automate としてキャプチャします。 AWS OpsWorks for Chef Automate APIs 証跡を作成する場合は、イベントを含む Amazon S3 バケットへの CloudTrail イベントの継続的な配信を有効にすることができます AWS OpsWorks for Chef Automate。証跡を設定しない場合でも、CloudTrail コンソールの [イベント履歴] で最新のイベントを表示できます。CloudTrail によって収集された情報を使用して、リクエストの実行元の IP アドレス AWS OpsWorks for Chef Automate、リクエストの実行者、リクエストの実行日時などの詳細を確認できます。

CloudTrail の詳細については、「AWS CloudTrail ユーザーガイド」を参照してください。

AWS OpsWorks for Chef Automate CloudTrail の情報

CloudTrail は、 AWS アカウントの作成時にアカウントで有効になります。でアクティビティが発生すると AWS OpsWorks for Chef Automate、そのアクティビティはイベント履歴の他の AWS サービスイベントとともに CloudTrail イベントに記録されます。 AWS アカウントで最近のイベントを表示、検索、ダウンロードできます。詳細については、CloudTrail イベント履歴でのイベントの表示を参照してください。

のイベントなど、 AWS アカウントのイベントの継続的な記録については AWS OpsWorks for Chef Automate、証跡を作成します。証跡により、ログファイルを CloudTrail で Amazon S3 バケットに配信できます。デフォルトでは、コンソールで追跡を作成するときに、追跡がすべてのリージョンに適用されます。証跡は、 AWS パーティション内のすべてのリージョンからのイベントをログに記録し、指定した Amazon S3 バケットにログファイルを配信します。さらに、CloudTrail ログで収集されたイベントデータをさらに分析して処理するように他の AWS サービスを設定できます。詳細については、以下を参照してください。

- 証跡を作成するための概要
- CloudTrail がサポートするサービスと統合
- CloudTrail 用 Amazon SNS 通知の構成
- 複数のリージョンから CloudTrail ログファイルを受け取るおよび複数のアカウントから CloudTrail ログファイルを受け取る

すべての AWS OpsWorks for Chef Automate アクションは CloudTrail によってログに記録され、AWS OpsWorks for Chef Automate API リファレンスに記載されています。例えば、[CreateServer (サーバーの作成)]、[CreateBackup] (バックアップの作成)、および [DescribeServers] (サーバーの説明) アクションの呼び出しにより、CloudTrail ログファイルにエントリが生成されます。

各イベントまたはログエントリには、誰がリクエストを生成したかという情報が含まれます。同一性情報は次の判断に役立ちます。

- リクエストが、ルートと IAM ユーザー認証情報のどちらを使用して送信されたか。
- リクエストがロールまたはフェデレーションユーザーの一時的なセキュリティ認証情報を使用して行われたかどうか。
- リクエストが別の AWS サービスによって行われたかどうか。

詳細については、「CloudTrail userIdentity 要素」を参照してください。

AWS OpsWorks for Chef Automate ログファイルエントリについて

「トレイル」は、指定した Amazon S3 バケットにイベントをログファイルとして配信するように設定できます。CloudTrail のログファイルは、単一か複数のログエントリを含みます。イベントはあらゆるソースからの単一のリクエストを表し、リクエストされたアクション、アクションの日時、リクエストのパラメータなどの情報が含まれます。CloudTrail ログファイルは、公開 API コールの順序付けられたスタックトレースではないため、特定の順序では表示されません。

次の例は、 AWS OpsWorks for Chef Automate `CreateServer` アクションの CloudTrail ログエントリを示しています。

```
{"eventVersion":"1.05",
"userIdentity":{
    "type":"AssumedRole",
    "principalId":"ID number:OpsWorksCMUser",
    "arn":"arn:aws:sts::831000000000:assumed-role/Admin/OpsWorksCMUser",
    "accountId":"831000000000","accessKeyId":"ID number",
    "sessionContext":{
        "attributes":{
            "mfaAuthenticated":"false",
            "creationDate":"2017-01-05T22:03:47Z"
            },
        "sessionIssuer":{
            "type":"Role",
            "principalId":"ID number",
            "arn":"arn:aws:iam::831000000000:role/Admin",
            "accountId":"831000000000",
            "userName":"Admin"
            }
        }
    },
"eventTime":"2017-01-05T22:18:23Z",
"eventSource":"opsworks-cm.amazonaws.com",
"eventName":"CreateServer",
"awsRegion":"us-west-2",
"sourceIPAddress":"101.25.190.51",
"userAgent":"console.amazonaws.com",
"requestParameters":{
    "serverName":"OpsChef-test-server",
    "engineModel":"Single",
    "engine":"Chef",
```

```
    "instanceProfileArn":"arn:aws:iam::831000000000:instance-profile/aws-opsworks-cm-
ec2-role",
    "backupRetentionCount":3,"serviceRoleArn":"arn:aws:iam::831000000000:role/service-
role/aws-opsworks-cm-service-role",
    "engineVersion":"12",
    "preferredMaintenanceWindow":"Fri:21:00",
    "instanceType":"t2.medium",
    "subnetIds":["subnet-1e111f11"],
    "preferredBackupWindow":"Wed:08:00"
    },
"responseElements":{
    "server":{
        "endpoint":"OpsChef-test-server-thohsgreckcnwgz3.us-west-2.opsworks-cm.io",
        "createdAt":"Jan 5, 2017 10:18:22 PM",
        "serviceRoleArn":"arn:aws:iam::831000000000:role/service-role/aws-opsworks-cm-
service-role",
        "preferredBackupWindow":"Wed:08:00",
        "status":"CREATING",
        "subnetIds":["subnet-1e111f11"],
        "engine":"Chef",
        "instanceType":"t2.medium",
        "serverName":"OpsChef-test-server",
        "serverArn":"arn:aws:opsworks-cm:us-west-2:831000000000:server/OpsChef-test-
server/8epp7f6z-e91f-4z10-89z5-8c6219cdb09f",
        "engineModel":"Single",
        "backupRetentionCount":3,
        "engineAttributes":[
            {"name":"CHEF_STARTER_KIT","value":"*** Redacted ***"},
            {"name":"CHEF_PIVOTAL_KEY","value":"*** Redacted ***"},
            {"name":"CHEF_DELIVERY_ADMIN_PASSWORD","value":"*** Redacted ***"}],
        "engineVersion":"12.11.1",
        "instanceProfileArn":"arn:aws:iam::831000000000:instance-profile/aws-opsworks-
cm-ec2-role",
        "preferredMaintenanceWindow":"Fri:21:00"
        }
    },
"requestID":"de7f64f9-d394-12ug-8081-7bb0386fbcb6",
"eventID":"8r7b18df-6c90-47be-87cf-e8346428cfc3",
"eventType":"AwsApiCall",
"recipientAccountId":"831000000000"
}
```

トラブルシューティング AWS OpsWorks for Chef Automate

> **Important**
>
> AWS OpsWorks for Chef Automate は 2024 年 5 月 5 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。既存のお客様は、 Chef SaaS または代替ソリューションに移行することをお勧めします。ご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このトピックには、いくつかの一般的な AWS OpsWorks for Chef Automate 問題と、それらの問題に対する推奨される解決策が含まれています。

トピック

- 一般的なトラブルシューティングのヒント
- 特定のエラーのトラブルシューティング
- その他のヘルプとサポート

一般的なトラブルシューティングのヒント

Chef サーバーを作成または操作できない場合は、エラーメッセージやログを表示すると、問題のトラブルシューティングに役立ちます。以下のタスクでは、Chef サーバーに関する問題のトラブルシューティングを行うときの一般的な開始点を示します。特定のエラーと解決方法については、このトピックの「特定のエラーのトラブルシューティング」セクションを参照してください。

- Chef サーバーの起動に失敗した場合のエラーメッセージを表示するには、 AWS OpsWorks for Chef Automate コンソールを使用します。Chef サーバーの詳細ページで、サーバーの起動と実行に関連するエラーメッセージが、ページの一番上に表示されます。エラーは AWS OpsWorks for Chef Automate、Chef サーバーの作成に使用されるサービス CloudFormation、または Amazon EC2 から発生する可能性があります。詳細ページでは、実行中のサーバーで発生するイベントを表示することもできます。これには、障害イベントメッセージが含まれる場合があります。
- EC2 に関する問題を解決するため、SSH を使用してサーバーのインスタンスに接続してログを表示します。EC2 インスタンスのログは `/var/log/aws/opsworks-cm` ディレクトリに保存されています。これらのログは、 が Chef サーバー AWS OpsWorks for Chef Automate を起動している間のコマンド出力をキャプチャします。

特定のエラーのトラブルシューティング

トピック

- サーバーの状態は [接続が失われました]
- フルマネージドログ管理ノードが、欠落している列の Chef Automate ダッシュボードに表示される
- Chef ボールトを作成できず、knife vault コマンドがエラーで失敗する
- サーバーの作成が「リクエストされた設定は現在サポートされていません」というメッセージで失敗する
- Chef サーバーが、Chef Automate ダッシュボードで追加された組織名を認識できない
- サーバーの Amazon EC2 インスタンスを作成できない
- サービスロールのエラーによりサーバーを作成できない
- Elastic IP アドレスの制限を超えた
- Chef Automate ダッシュボードにサインインできない
- ノードの自動関連付けに失敗する
- システムメンテナンスの失敗

サーバーの状態は [接続が失われました]

問題: サーバーのステータスに[接続が失われました]と表示される。

原因: これは、 の外部のエンティティが AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーまたはそのサポートリソースに変更 OpsWorks を加えた場合に最もよく発生します。 OpsWorks は、バックアップの作成、オペレーティングシステムパッチの適用、Chef Automate の更新などのメンテナンスタスクを処理するために、接続が失われた状態で Chef Automate サーバーに接続できません。その結果、サーバーが重要なアップデートを見逃したり、セキュリティ上の問題の影響を受けやすくなったり、またはその他の理由で期待どおりに動作しない可能性があります。

解決策: 次の手順を試して、サーバーの接続を復元してください。

1. サービスロールに必要な権限がすべてあることを確認してください。

    a. サーバーの「設定」ページの「ネットワークとセキュリティ」で、サーバーが使用しているサービスロールへのリンクを選択します。これにより、 IAM コンソールに表示されるサービスロールが開きます。

b. 「アクセス許可」のタブで、AWSOpsWorksCMServiceRole が「アクセス許可ポリシー」リストに含まれていることを確認します。リストにない場合は、AWSOpsWorksCMServiceRole 管理ポリシーをロールに手動で追加してください。

c. 「信頼関係」のタブで、ユーザーに代わって役割を引き受ける opsworks-cm.amazonaws.com サービスを信頼する信頼ポリシーがサービスロールに含まれていることを確認します。ロールで信頼ポリシーを使用する方法の詳細については、「ロールの変更 (コンソール)」または AWS 「セキュリティブログ記事」の「IAM ロールで信頼ポリシーを使用する方法」を参照してください。

2. インスタンスプロファイルに必要な権限がすべてあることを確認してください。

a. サーバーの「設定」ページの「ネットワークとセキュリティ」で、サーバーが使用しているインスタンスプロファイルへのリンクを選択します。これにより、 IAM コンソールに表示されるインスタンスプロファイルが開きます。

b. 「権限」のタブで、AmazonEC2RoleforSSM と AWSOpsWorksCMInstanceProfileRole が両方とも「アクセス権限ポリシー」リストに含まれていることを確認します。一方または両方がリストにない場合は、これらの管理ポリシーを手動でロールに追加してください。

c. 「信頼関係」のタブで、ユーザーに代わって役割を引き受ける ec2.amazonaws.com サービスを信頼する信頼ポリシーがサービスロールに含まれていることを確認します。ロールで信頼ポリシーを使用する方法の詳細については、「ロールの変更 (コンソール)」または AWS 「セキュリティブログ記事」の「IAM ロールで信頼ポリシーを使用する方法」を参照してください。

3. Amazon EC2 コンソールで、 AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーのリージョンと同じリージョンにいることを確認し、サーバーが使用している EC2 インスタンスを再起動します。

a. aws-opsworks-cm-instance-*server-name* という名前の EC2 インスタンスを選択します。

b. [インスタンスの状態]メニューで、[インスタンスの再起動] を選択します。

c. サーバーが再起動して完全にオンラインになるまで最大 15 分かかります。

4. AWS OpsWorks for Chef Automate コンソールのサーバーの詳細ページで、サーバーのステータスが正常であることを確認します。

上記の手順を実行してもサーバーステータスが [接続が失われました] のままの場合は、次のいずれかを試してください。

- 新しいサーバーを作成し、元のサーバーを削除して、サーバーを交換してください。現在のサーバー上のデータが重要な場合は、最新のバックアップからサーバーを復元し、元の応答しないサーバーを削除する前に データが最新であることを確認してください。
- AWS Supportにお問い合わせください。

フルマネージドログ管理ノードが、欠落している列の Chef Automate ダッシュボードに表示される

問題: フルマネージドログ管理ノードが、Chef Automate ダッシュボードの欠落している列に表示される。

原因: ノードが、12 時間以上 Chef Automate サーバーに接続されず、`chef-client`かつノードで実行できない場合、ノードは、12 時間前の状態から変わり、Chef Automate ダッシュボードの欠落している列に移動します。

解決策: ノードがオンラインになっていることを確認してください。`knife node show` *`node_name`* `--run-list` を実行してノードで `chef-client` を実行できるか、または `knife node show -l` *`node_name`* がノードに関するすべての情報を表示するかを確認します。ノードがオフライン、あるいはネットワーク接続が切断している可能性があります。

Chef ボールトを作成できず、**`knife vault`** コマンドがエラーで失敗する

問題: `knife vault` コマンドを実行して、Chef Automate サーバーでボールトを作成しようとしている (ドメイン結合 Windows ベースのノードの認証情報を保存するボールトなど)。このコマンドは、次のようなエラーメッセージを返す。

```
WARN: Auto inflation of JSON data is deprecated. Please pass in the class to inflate or
 use #edit_hash (CHEF-1)
at /opt/chefdk/embedded/lib/ruby/2.3.0/forwardable.rb:189:in `edit_data'.Please see
 https://docs.chef.io/deprecations_json_auto_inflate.html
for further details and information on how to correct this problem.
WARNING: pivotal not found in users, trying clients.
ERROR: ChefVault::Exceptions::AdminNotFound: FATAL: Could not find pivotal in users or
 clients!
```

`knife user list` をリモートに実行すると主要ユーザーは返されないが、Chef Automate サーバーで `chef-server-ctl user-show` コマンドをローカルに実行すると、結果で主要ユーザーが表示される。つまり、`knife vault` コマンドでは主要ユーザーを見つけることはできないが、ユーザーが存在していることは確認できる。

原因: 主要ユーザーは、Chef ではスーパーユーザーと見なされており、完全な権限を持っていますが、 AWS OpsWorks for Chef Automateで使用されている `default` 組織を含めて、いずれの組織のメンバーでもありません。コマンド `knife user list` は、Chef 設定の現在の組織に属するすべてのユーザーを返します。コマンド `chef-server-ctl user-show` は、主要ユーザーを含めて、組織にかかわらずすべてのユーザーを返します。

解決策: この問題を解決するには、`knife opc` を実行して、デフォルトの組織に主要ユーザーを追加します。

最初に、knife-opc プラグインをインストールする必要があります。

```
chef gem install knife-opc
```

このプラグインをインストールしたら、次のコマンドを実行して主要ユーザーをデフォルトの組織に追加します。

```
knife opc org user add default pivotal
```

もう一度 `knife user list` を実行して、主要ユーザーがデフォルトの組織に属していることを確認できます。結果には `pivotal` が表示されている必要があります。次に、もう一度 `knife vault` を実行してみます。

サーバーの作成が「リクエストされた設定は現在サポートされていません」というメッセージで失敗する

問題: Chef Automate サーバーの作成を試みているが、「リクエストされた設定は現在サポートされていません。サポートされている設定についてドキュメントをご確認ください」のようなエラーメッセージでサーバーの作成が失敗する。

原因: Chef Automate サーバーに対してサポートされていないインスタンスタイプが指定された可能性があります。ハードウェア専有インスタンス用など、デフォルトでないテナンシーを持つ VPC で Chef Automate サーバーの作成を選択した場合、指定された VPC 内のすべてのインスタンスも、専有テナンシーまたはホストテナンシーのインスタンスである必要があります。t2 など一部のインスタンスタイプはデフォルトテナンシーでしか使用できないため、Chef Automate サーバーインスタンスタイプは指定された VPC でサポート可能でない場合があり、そのためにサーバーの作成が失敗します。

解決策: デフォルト以外のテナンシーを持つ VPC を選択した場合は、専用テナンシーをサポートできる m4 インスタンスタイプを使用します。

Chef サーバーが、Chef Automate ダッシュボードで追加された組織名を認識できない

問題: Chef Automate ダッシュボードで新しいワークフロー組織名を追加したり、無人ノード関連付けスクリプトで "default" 以外の CHEF_AUTOMATE_ORGANIZATION 値を指定したりしましたが、ノード関連付けに失敗します。 AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーが新しい組織名を認識しない。

原因: Workflow 組織名および Chef サーバー組織名が同じではありません。ウェブベースの Chef Automate ダッシュボードで新しい Workflow 組織を作成できますが、Chef サーバー組織名は作成できません。Chef Automate ダッシュボードのみを使用して、既存の Chef サーバー組織を表示できます。Chef Automate ダッシュボードで作成する新しい組織は Workflow 組織であり、Chef サーバーによって認識されません。ノードの関連付けスクリプトでそれらを指定して、新しい組織名を作成することはできません。組織が最初に Chef サーバーに追加されていないときにノードの関連付けスクリプトで組織名を参照すると、ノードの関連付けに失敗します。

解決策: Chef Server で認識される新しい組織を作成するには、`knife opc org create` コマンドを使用するか、`chef-server-ctl org-create` を実行します。

サーバーの Amazon EC2 インスタンスを作成できない

問題: サーバーの作成が、次のようなエラーメッセージにより失敗する。「The following resource(s) failed to create: [EC2Instance]。Failed to receive 1 resource signal(s) within the specified duration」

原因: この問題のほとんどが、EC2 インスタンスでネットワークアクセスが可能でないことが原因です。

解決策: インスタンスにアウトバウンドインターネットアクセスがあり、 AWS サービスエージェントがコマンドを発行できることを確認します。VPC (単一のパブリックサブネットを持つ VPC) で DNS 解決 が有効になっていて、サブネットで [パブリック IP の自動割り当て] 設定が有効になっていることを確認します。

サービスロールのエラーによりサーバーを作成できない

問題:「Not authorized to perform sts:AssumeRole.」という状態を示すエラーメッセージが表示され、サーバーを作成できない。

原因: お使いのサービスロールに新しいサーバーを作成するための適切なアクセス権限がない場合に、この問題が発生する可能性があります。

解決策: AWS OpsWorks for Chef Automate コンソールを開きます。コンソールを使用して、新しいサービスロールとインスタンスプロファイルロールを生成します。独自のサービスロー

ルの使用を希望する場合は、AWSOpsWorksCMServiceRole ポリシーをロールにアタッチします。opsworks-cm.amazonaws.com がロールの 信頼関係 のサービス間でリストされていることを確認します。Chef サーバーに関連付けられているサービスロールに、AWSOpsWorksCMServerRole 管理ポリシーがアタッチされていることを確認します。

Elastic IP アドレスの制限を超えた

問題:「The following resource(s) failed to create: [EIP, EC2Instance]。Resource creation cancelled, the maximum number of addresses has been reached.」という状態を示すエラーメッセージにより、サーバーを作成できない。

原因: アカウントで Elastic IP (EIP) アドレスの最大数を使用した場合に、この問題が発生します。EIP アドレスのデフォルトの制限は 5 です。

解決策: 既存の EIP アドレスを解放するか、アカウントがアクティブに使用していない EIP アドレスを削除するか、 AWS カスタマーサポートに連絡して、アカウントに関連付けられている EIP アドレスの制限を引き上げることができます。

Chef Automate ダッシュボードにサインインできない

問題: Chef Automate ダッシュボードに、「Cross-Origin Request Blocked: The Same Origin Policy disallows reading the remote resource at https://myserver-name.region.opsworks-cm.io/api/v0/e/default/verify-token。(Reason: CORS header 'Access-Control-Allow-Origin' missing)」のようなエラーが表示される。「The User Id / Password combination entered is incorrect.」のようなエラーの場合もある。

原因: Chef Automate ダッシュボードが明示的に FQDN を設定していて、相対 URL を受け付けていません。現時点では、Chef サーバーの IP アドレスを使用してサインインすることはできません。サーバーの DNS 名を使用してサインインできるのみです。

解決策: Chef サーバーの IP アドレスではなく、DNS 名エントリのみを使用して Chef Automate ダッシュボードにサインインします。また、Chef Automate ダッシュボードの認証情報のリセット で説明したように、 AWS CLI コマンドを実行して Chef Automate ダッシュボードの認証情報をリセットしてみることもできます。

ノードの自動関連付けに失敗する

問題: 新しい Amazon EC2 ノードの自動 (無人) 関連付けに失敗する。Chef サーバーに追加されたはずのノードが Chef Automate ダッシュボードに表示されず、`knife client show` または `knife node show` コマンドの結果に含まれない。

原因: opsworks-cm API コールで新しい EC2 インスタンスとの通信を許可するインスタンスプロファイルとして IAM ロールをセットアップしていない場合に、この問題が発生する可能性があります。

解決策: でノードを自動的に追加する AWS OpsWorks for Chef Automate で説明したように、EC2 インスタンスのプロファイルにポリシーをアタッチして、AssociateNode と DescribeNodeAssociationStatus の API コールを EC2 と連携できるようにします。

システムメンテナンスの失敗

AWS OpsWorks CM は毎週システムメンテナンスを実行し、セキュリティ更新プログラムを含む最新のマイナーバージョンの Chef Server と Chef Automate Server が常に AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーで実行されていることを確認します。何らかの理由でシステムメンテナンスが失敗した場合、 は失敗 AWS OpsWorks CM を通知します。システムメンテナンスの詳細については、「でのシステムメンテナンス AWS OpsWorks for Chef Automate」を参照してください。

このセクションでは、考えられる障害の原因を説明し、解決策を提案します。

トピック

- サービスロールまたはインスタンスプロファイルのエラーによって、システムのメンテナンスが妨げられる

サービスロールまたはインスタンスプロファイルのエラーによって、システムのメンテナンスが妨げられる

問題: システムメンテナンスが失敗し、「STS: AssumeRole を実行する権限がありません」というエラーメッセージ、または権限に関する同様のエラーメッセージが表示されます。

原因: これは、使用しているサービスロールまたはインスタンスプロファイルのいずれかに、サーバー上でシステムメンテナンスを実行するための適切な権限がない場合に発生する可能性があります。

解決策: サービスロールとインスタンスプロファイルに必要なすべての権限があることを確認してください。

1. サービスロールに必要な権限がすべてあることを確認してください。

    a. サーバーの「設定」ページの「ネットワークとセキュリティ」で、サーバーが使用しているサービスロールへのリンクを選択します。これにより、 IAM コンソールに表示されるサービスロールが開きます。

b. 「アクセス許可」のタブで、AWSOpsWorksCMServiceRole がサービスロールにアタッチされていることを確認します。AWSOpsWorksCMServiceRole がリストにない場合は、このポリシーをロールに追加します。

c. opsworks-cm.amazonaws.com がロールの 信頼関係 のサービス間でリストされていることを確認します。ロールで信頼ポリシーを使用する方法の詳細については、「ロールの変更 (コンソール)」または AWS 「セキュリティブログ記事」の「IAM ロールで信頼ポリシーを使用する方法」を参照してください。

2. インスタンスプロファイルに必要な権限がすべてあることを確認してください。

a. サーバーの「設定」ページの「ネットワークとセキュリティ」で、サーバーが使用しているインスタンスプロファイルへのリンクを選択します。これにより、 IAM コンソールに表示されるインスタンスプロファイルが開きます。

b. 「権限」のタブで、AmazonEC2RoleforSSM と AWSOpsWorksCMInstanceProfileRole が両方とも「アクセス権限ポリシー」リストに含まれていることを確認します。一方または両方がリストにない場合は、これらの管理ポリシーを手動でロールに追加してください。

c. 「信頼関係」のタブで、ユーザーに代わって役割を引き受ける ec2.amazonaws.com サービスを信頼する信頼ポリシーがサービスロールに含まれていることを確認します。ロールで信頼ポリシーを使用する方法の詳細については、「ロールの変更 (コンソール)」または AWS 「セキュリティブログ記事」の「IAM ロールで信頼ポリシーを使用する方法」を参照してください。

その他のヘルプとサポート

発生している特定の問題がこのトピックで説明されていないか、このトピックの提案を試しても問題が解決しない場合は、OpsWorks フォーラムを参照してください。

また、AWS Support Center を参照することもできます。 AWS サポートセンターは、サポートケースを作成および管理 AWS するためのハブです。 AWS サポートセンターには、フォーラム、技術的なFAQs、サービスのヘルスステータスなど、その他の役立つリソースへのリンクも含まれています AWS Trusted Advisor。

AWS OpsWorks 設定管理 (CM) のセキュリティ

のクラウドセキュリティが最優先事項 AWS です。お客様は AWS 、セキュリティを最も重視する組織の要件を満たすように構築されたデータセンターとネットワークアーキテクチャを活用できます。

セキュリティは、 AWS お客様とお客様の間の責任共有です。責任共有モデルでは、これをクラウドのセキュリティおよびクラウド内のセキュリティとして説明しています。

- クラウドのセキュリティ – クラウドで AWS AWS サービスを実行するインフラストラクチャを保護する AWS 責任があります。 AWS また、 では、安全に使用できるサービスも提供しています。「AWS 」 コンプライアンスプログラムの一環として、サードパーティーの監査が定期的にセキュリティの有効性をテストおよび検証しています。 OpsWorks CM に適用されるコンプライアンスプログラムの詳細については、「コンプライアンスプログラムによるAWS 対象範囲内のサービス」を参照してください。
- クラウド内のセキュリティ – お客様の責任は、使用する AWS サービスによって決まります。また、ユーザーは、データの機密性、会社の要件、適用される法律や規制など、その他の要因についても責任を負います。

このドキュメントは、CM OpsWorks を使用する際の責任共有モデルの適用方法を理解するのに役立ちます。以下のトピックでは、セキュリティとコンプライアンスの目的を達成するように OpsWorks CM を設定する方法について説明します。また、CM リソースのモニタリングや保護に役立つ他の AWS OpsWorks のサービスの使用方法についても説明します。

トピック

- CM OpsWorks でのデータ保護
- データ暗号化
- CM OpsWorks の Identity and Access Management
- インターネットトラフィックのプライバシー
- CM OpsWorks でのログ記録とモニタリング
- OpsWorks CM のコンプライアンス検証
- CM OpsWorks の耐障害性
- AWS OpsWorks CM のインフラストラクチャセキュリティ
- CM OpsWorks の設定と脆弱性の分析
- CM OpsWorks のセキュリティのベストプラクティス

CM OpsWorks でのデータ保護

責任 AWS 共有モデル、AWS OpsWorks Configuration Management のデータ保護に適用されます。このモデルで説明されているように、 AWS はすべての を実行するグローバルインフラストラクチャを保護する責任があります AWS クラウド。ユーザーは、このインフラストラクチャでホストされるコンテンツに対する管理を維持する責任があります。また、使用する「 AWS のサービス 」のセキュリティ設定と管理タスクもユーザーの責任となります。データプライバシーの詳細については、データプライバシーに関するよくある質問を参照してください。欧州でのデータ保護の詳細については、AWS セキュリティブログに投稿された「AWS 責任共有モデルおよび GDPR」のブログ記事を参照してください。

データ保護の目的で、認証情報を保護し AWS アカウント 、 AWS IAM アイデンティティセンターまたは AWS Identity and Access Management (IAM) を使用して個々のユーザーを設定することをお勧めします。この方法により、それぞれのジョブを遂行するために必要な権限のみが各ユーザーに付与されます。また、次の方法でデータを保護することもお勧めします:

- 各アカウントで多要素認証 (MFA) を使用します。
- SSL/TLS を使用して AWS リソースと通信します。TLS 1.2 は必須ですが、TLS 1.3 を推奨します。
- で API とユーザーアクティビティのログ記録を設定します AWS CloudTrail。CloudTrail 証跡を使用して AWS アクティビティをキャプチャする方法については、「 AWS CloudTrail ユーザーガイド」のCloudTrail 証跡の使用」を参照してください。
- AWS 暗号化ソリューションと、その中のすべてのデフォルトのセキュリティコントロールを使用します AWS のサービス。
- Amazon Macie などの高度な管理されたセキュリティサービスを使用します。これらは、Amazon S3 に保存されている機密データの検出と保護を支援します。
- コマンドラインインターフェイスまたは API AWS を介して にアクセスするときに FIPS 140-3 検証済み暗号化モジュールが必要な場合は、FIPS エンドポイントを使用します。利用可能な FIPS エンドポイントの詳細については、「連邦情報処理規格 (FIPS) 140-3」を参照してください。

お客様の E メールアドレスなどの極秘または機密情報を、タグ、または [名前] フィールドなどの自由形式のテキストフィールドに含めないことを強くお勧めします。これは、コンソール、API、または SDK を使用して OpsWorks CM AWS CLIまたは他の AWS のサービス を使用する場合も同様です。 AWS SDKs タグ、または名前に使用される自由記述のテキストフィールドに入力したデータは、請求または診断ログに使用される場合があります。外部サーバーに URL を提供する場合、そ

のサーバーへのリクエストを検証できるように、認証情報を URL に含めないことを強くお勧めします。

OpsWorks CM サーバー名は暗号化されません。

OpsWorks CM は、 AWS OpsWorks for Chef Automate および AWS OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーの作成と保守の過程で、次の顧客データを収集します。

- OpsWorks では、Puppet マスターと管理ノード間の通信を可能にするために Puppet Enterprise が使用するプライベートキーを収集します。
- カスタムドメインを使用している場合 AWS OpsWorks for Chef Automate、サービスにアタッチした証明書のプライベートキーが収集されます。カスタムドメインを持つ Chef Automate サーバーを作成するときに指定したプライベートキーは、サーバーに渡されます。

OpsWorks CM サーバーは、Chef クックブックや Puppet Enterprise モジュールなどの設定コードを保存します。このコードはサーバーのバックアップに保存されますが、 AWS にはアクセスできません。このコンテンツは暗号化され、 AWS アカウントの管理者のみがアクセスできます。ソースリポジトリ用の推奨プロトコルを使用して Chef または Puppet 設定コードを保護することをお勧めします。たとえば、 のリポジトリへのアクセス許可を制限 AWS CodeCommitしたり、GitHub ウェブサイトのガイドラインに従って GitHub リポジトリを保護したりできます。

OpsWorks CM は、サービスを維持したり、顧客のログを保持したりするために、顧客が提供したコンテンツを使用することはありません。OpsWorks CM サーバーに関するログは、アカウントの Amazon S3 バケットに保存されます。OpsWorks CM サーバーに接続するユーザーの IP アドレスは、 AWSによってログに記録されます。

との統合 AWS Secrets Manager

2021 年 5 月 3 日から、OpsWorks CM で新しいサーバーを作成すると、OpsWorks CM はサーバーのシークレットを AWS Secrets Managerに保存します。新しいサーバーの場合、次の属性が Secrets Manager にシークレットとして保存されます。

- Chef Automate server (Chef Automateサーバー)
  - HTTPS プライベートキー (カスタムドメインを使用しないサーバーのみ)
  - シェフ管理パスワードの自動化 (CHEF_AUTOMATE_ADMIN_PASSWORD)
- Puppet Enterprise master (Puppet Enterprise マスター)
  - HTTPS プライベートキー (カスタムドメインを使用しないサーバーのみ)

- パペット管理者パスワード (PUPPET_ADMIN_PASSWORD)
- パペット r10k リモート (PUPPET_R10K_REMOTE)

カスタムドメインを使用しない既存のサーバーの場合、Chef Automate サーバーと Puppet Enterprise サーバーの両方の Secrets Manager に保存されている唯一のシークレットは HTTPS プライベートキーです。これは、毎週の自動システムメンテナンス中に生成されるためです。

OpsWorks CM は Secrets Manager にシークレットを自動的に保存しますが、この動作はユーザーは設定できません。

データ暗号化

OpsWorks CM は、承認された AWS ユーザーとその CM OpsWorks サーバー間のサーバーのバックアップと通信を暗号化します。ただし、CM サーバーのルート Amazon EBS OpsWorks ボリュームは暗号化されません。

保管時の暗号化

OpsWorks CM サーバーのバックアップは暗号化されます。ただし、CM サーバーのルート Amazon EBS OpsWorks ボリュームは暗号化されません。これはユーザーが設定できません。

転送時の暗号化

OpsWorks ユーザーが署名付き証明書を提供していない場合、CM は HTTP を TLS 暗号化で使用します。 OpsWorks CM はデフォルトで自己署名証明書を使用してサーバーをプロビジョニングおよび管理します。証明機関 (CA) によって署名された証明書を使用することをお勧めします。

キーの管理

AWS Key Management Service カスタマーマネージドキーと AWS マネージドキーは、現在 CM OpsWorks ではサポートされていません。

CM OpsWorks の Identity and Access Management

AWS Identity and Access Management (IAM) は、管理者が AWS リソースへのアクセスを安全に制御するのに役立つ AWS サービスです。IAM管理者は、OpsWorks CM リソースを使用するために 認証される (サインイン) および 許可される (権限を持つ) 人をコントロールします。IAM は、追加料金なしで使用できる AWS サービスです。

トピック

- オーディエンス
- アイデンティティを使用した認証
- ポリシーを使用したアクセスの管理
- CM OpsWorks と IAM の連携方法
- AWS OpsWorks CM アイデンティティベースのポリシーの例
- CM Identity and Access AWS OpsWorks のトラブルシューティング
- AWS AWS OpsWorks Configuration Management の マネージドポリシー
- でのサービス間の混乱した代理の防止 AWS OpsWorks CM

オーディエンス

AWS Identity and Access Management (IAM) の使用方法は、ロールによって異なります。

- サービスユーザー - 機能にアクセスできない場合は、管理者にアクセス許可をリクエストします (「CM Identity and Access AWS OpsWorks のトラブルシューティング」を参照)。
- サービス管理者 - ユーザーアクセスを決定し、アクセス許可リクエストを送信します (「CM OpsWorks と IAM の連携方法」を参照)
- IAM 管理者 - アクセスを管理するためのポリシーを作成します (「AWS OpsWorks CM アイデンティティベースのポリシーの例」を参照)

アイデンティティを使用した認証

認証とは、ID 認証情報 AWS を使用して にサインインする方法です。、IAM ユーザー AWS アカウントのルートユーザー、または IAM ロールを引き受けることで認証される必要があります。

AWS IAM アイデンティティセンター (IAM Identity Center)、シングルサインオン認証、Google/Facebook 認証情報などの ID ソースからの認証情報を使用して、フェデレーティッド ID としてサインインできます。サインインの詳細については、「AWS サインイン ユーザーガイド」の「AWS アカウントにサインインする方法」を参照してください。

プログラムによるアクセスの場合、 は SDK と CLI AWS を提供してリクエストを暗号化して署名します。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「API リクエストに対するAWS 署名バージョン 4」を参照してください。

AWS アカウント ルートユーザー

を作成するときは AWS アカウント、すべての AWS のサービス および リソースへの完全なアクセス権を持つ AWS アカウント root ユーザーと呼ばれる 1 つのサインインアイデンティティから始めます。日常的なタスクには、ルートユーザーを使用しないことを強くお勧めします。ルートユーザー認証情報を必要とするタスクについては、「IAM ユーザーガイド」の「ルートユーザー認証情報が必要なタスク」を参照してください。

IAM ユーザーとグループ

IAM ユーザーは、特定の個人やアプリケーションに対する特定のアクセス許可を持つアイデンティティです。長期認証情報を持つ IAM ユーザーの代わりに一時的な認証情報を使用することをお勧めします。詳細については、IAM ユーザーガイドの「ID プロバイダーとのフェデレーションを使用して にアクセスすることを人間 AWS のユーザーに要求する」を参照してください。

IAM グループは、IAM ユーザーの集合を指定し、大量のユーザーに対するアクセス許可の管理を容易にします。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「IAM ユーザーに関するユースケース」を参照してください。

> **Warning**
>
> IAM ユーザーは長期認証情報を保有するため、セキュリティ上のリスクが生じます。このリスクを軽減するために、これらのユーザーにはタスクの実行に必要な権限のみを付与し、不要になったユーザーは削除することをお勧めします。

IAM ロール

IAM ロールは、特定のアクセス許可を持つアイデンティであり、一時的な認証情報を提供します。ユーザーから IAM ロール (コンソール) に切り替えるか、 または API オペレーションを呼び出すことで、ロールを引き受けることができます。 AWS CLI AWS 詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「ロールを引き受けるための各種方法」を参照してください。

IAM ロールは、フェデレーションユーザーアクセス、一時的な IAM ユーザーのアクセス許可、クロスアカウントアクセス、クロスサービスアクセス、および Amazon EC2 で実行するアプリケーションに役立ちます。詳細については、IAM ユーザーガイド の IAM でのクロスアカウントリソースアクセス を参照してください。

ポリシーを使用したアクセスの管理

でアクセスを制御する AWS には、ポリシーを作成し、ID AWS またはリソースにアタッチします。ポリシーは、アイデンティティまたはリソースに関連付けられたときにアクセス許可を定義します。は、プリンシパルがリクエストを行うときにこれらのポリシー AWS を評価します。ほとんどのポリシーは JSON ドキュメント AWS として に保存されます。JSON ポリシードキュメントの詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「JSON ポリシー概要」を参照してください。

管理者は、ポリシーを使用して、どのプリンシパルがどのリソースに対して、どのような条件でアクションを実行できるかを定義することで、誰が何にアクセスできるかを指定します。

デフォルトでは、ユーザーやロールにアクセス許可はありません。IAM 管理者は IAM ポリシーを作成してロールに追加し、このロールをユーザーが引き受けられるようにします。IAM ポリシーは、オペレーションの実行方法を問わず、アクセス許可を定義します。

アイデンティティベースのポリシー

アイデンティティベースのポリシーは、アイデンティティ (ユーザー、グループ、またはロール) にアタッチできる JSON アクセス許可ポリシードキュメントです。これらのポリシーは、アイデンティティがどのリソースに対してどのような条件下でどのようなアクションを実行できるかを制御します。アイデンティティベースポリシーの作成方法については、IAM ユーザーガイド の カスタマー管理ポリシーでカスタム IAM アクセス許可を定義する を参照してください。

アイデンティティベースのポリシーは、インラインポリシー (単一の ID に直接埋め込む) または管理ポリシー (複数の ID にアタッチされたスタンドアロンポリシー) にすることができます。管理ポリシーとインラインポリシーのいずれかを選択する方法については、「IAM ユーザーガイド」の「管理ポリシーとインラインポリシーのいずれかを選択する」を参照してください。

OpsWorks CM では、カスタムポリシーを IAM で作成して IAMユーザー、ロール、またはグループにアタッチすることがサポートされています。

リソースベースのポリシー

リソースベースのポリシーは、リソースに添付する JSON ポリシードキュメントです。例としては、IAM ロール信頼ポリシーや Amazon S3 バケットポリシーなどがあります。リソースベースのポリシーをサポートするサービスでは、サービス管理者はポリシーを使用して特定のリソースへのアクセスを制御できます。リソースベースのポリシーでは、プリンシパルを指定する必要があります。

リソースベースのポリシーは、そのサービス内にあるインラインポリシーです。リソースベースのポリシーでは、IAM の AWS マネージドポリシーを使用できません。

OpsWorks CM は、リソースベースのポリシーをサポートしません。

アクセスコントロールリスト (ACL)

アクセスコントロールリスト (ACL) は、どのプリンシパル (アカウントメンバー、ユーザー、またはロール) がリソースにアクセスするためのアクセス許可を持つかを制御します。ACL はリソースベースのポリシーに似ていますが、JSON ポリシードキュメント形式は使用しません。

Amazon S3、および Amazon VPC は AWS WAF、ACLs。ACL の詳細については、Amazon Simple Storage Service デベロッパーガイド の アクセスコントロールリスト (ACL) の概要 を参照してください。

OpsWorks CM は ACL を使用しません。

その他のポリシータイプ

OpsWorks CM は、以下の他のポリシータイプをサポートしません。

AWS は、一般的でない追加のポリシータイプをサポートしています。これらのポリシータイプでは、より一般的なポリシータイプで付与された最大の権限を設定できます。

- アクセス許可の境界 - アクセス許可の境界は、アイデンティティベースのポリシーによって IAM エンティティ (ユーザーまたはロール) に付与できる許可の上限を設定する高度な機能です。エンティティに許可の境界を設定できます。結果として許可される範囲は、エンティティのアイデンティティベースポリシーとその許可の境界の共通部分になります。`Principal` フィールドでユーザーまたはロールを指定するリソースベースのポリシーでは、許可の境界は制限されません。これらのポリシーのいずれかを明示的に拒否した場合、権限は無効になります。アクセス許可の境界の詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「IAM エンティティのアクセス許可の境界」を参照してください。
- サービスコントロールポリシー (SCPs) – SCPsは、 の組織または組織単位 (OU) の最大アクセス許可を指定する JSON ポリシーです AWS Organizations。 AWS Organizations は、ビジネスが所有する複数の AWS アカウントをグループ化して一元管理するためのサービスです。組織内のすべての機能を有効にすると、サービスコントロールポリシー (SCP) を一部またはすべてのアカウントに適用できます。SCP は、各 を含むメンバーアカウントのエンティティのアクセス許可を制限します AWS アカウントのルートユーザー。Organizations と SCP の詳細については、「AWS Organizations ユーザーガイド」の「SCP の仕組み」を参照してください。
- セッションポリシー - セッションポリシーは、ロールまたはフェデレーションユーザーの一時的なセッションをプログラムで作成する際にパラメータとして渡す高度なポリシーです。結果として

セッションの権限は、ユーザーまたはロールのアイデンティティベースポリシーとセッションポリシーの共通部分になります。また、リソースベースのポリシーから権限が派生する場合もあります。これらのポリシーのいずれかを明示的に拒否した場合、権限は無効になります。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「セッションポリシー」を参照してください。

複数のポリシータイプ

1 つのリクエストに複数のタイプのポリシーが適用されると、結果として作成されるアクセス許可を理解するのがさらに難しくなります。が複数のポリシータイプが関与する場合にリクエストを許可するかどうか AWS を決定する方法については、IAM ユーザーガイドの「ポリシー評価ロジック」を参照してください。

CM OpsWorks と IAM の連携方法

IAM を使用して CM OpsWorks へのアクセスを管理する前に、CM で使用できる IAM OpsWorks 機能を理解しておく必要があります。 OpsWorks CM およびその他の AWS のサービスが IAM と連携する方法の概要を把握するには、「IAM ユーザーガイド」のAWS 「IAM と連携する のサービス」を参照してください。

トピック

- OpsWorks CM アイデンティティベースのポリシー
- OpsWorks CM およびリソースベースのポリシー
- OpsWorks CM タグに基づく認可
- OpsWorks CM IAM ロール

OpsWorks CM アイデンティティベースのポリシー

IAM アイデンティティベースのポリシーでは、許可または拒否されたアクションとリソース、およびアクションが許可または拒否される条件を指定できます。 OpsWorks CM は、特定のアクション、リソース、および条件キーをサポートします。JSON ポリシーで使用するすべての要素については「IAM ユーザーガイド」の「IAM JSON ポリシーエレメントのリファレンス」を参照してください。

OpsWorks CM では、カスタムポリシーステートメントをユーザー、ロール、またはグループにアタッチできます。

アクション

IAM アイデンティティベースのポリシーの Action 工レメントは、そのポリシーにより許可または拒否される特定のアクションについて説明します。ポリシーアクションの名前は通常、関連付けられた AWS API オペレーションと同じです。このアクションは、関連付けられたオペレーションを実行するためのアクセス許可を付与するポリシーで使用されます。

CM OpsWorks のポリシーアクションは、アクションの前にプレフィックス を使用しますopsworks-cm:。たとえば、API オペレーションを使用して OpsWorks CM サーバーを作成するためのアクセス許可を付与するには、ポリシーに opsworks-cm:CreateServer アクションを含めます。ポリシーステートメントには、 Actionまたは NotAction要素を含める必要があります。OpsWorks CM は、このサービスで実行できるタスクを説明する独自の一連のアクションを定義します。

単一のステートメントに複数のアクションを指定するには次のようにコンマで区切ります。

```
"Action": [
      "opsworks-cm:action1",
      "opsworks-cm:action2"
```

ワイルドカード (*) を使用して複数アクションを指定できます。例えば、Describe という単語で始まるすべてのアクションを指定するには、次のアクションを含めます。

```
"Action": "opsworks-cm:Describe*"
```

ワイルドカードを使用して複数のアクションをポリシーステートメントで許可する場合は、これらのアクションを許可する先が承認済みのサービスまたは承認済みのユーザーであることを確認してください。

OpsWorks CM アクションのリストを確認するには、IAM ユーザーガイドのAWS OpsWorksのアクション、リソース、および条件キー」を参照してください。

リソース

Resource 工レメントは、アクションが適用されるオブジェクトを指定します。ステートメントには、Resource または NotResource 工レメントを含める必要があります。ARN を使用して、またはステートメントがすべてのリソースに適用されることを示すワイルドカード *を使用して、リソースを指定します。

CM サーバーまたはバックアップの Amazon リソースナンバー (ARN) OpsWorks を取得するには、DescribeServers または DescribeBackups API オペレーションを実行し、それらのリソースのベースリソースレベルのポリシーを使用します。

CM OpsWorks サーバーリソースには、次の形式の ARN があります。

```
arn:aws:opsworks-cm:{Region}:${Account}:server/${ServerName}/${UniqueId}
```

OpsWorks CM バックアップリソースには、次の形式の ARN があります。

```
arn:aws:opsworks-cm:{Region}:${Account}:backup/${ServerName}-{Date-and-Time-Stamp-of-Backup}
```

ARN の形式の詳細については、「Amazon リソースネーム (ARNs AWS 「サービス名前空間」を参照してください。

たとえば、ステートメントで `test-chef-automate` Chef Automate サーバーを指定するには、次の ARN を使用します。

```
"Resource": "arn:aws:opsworks-cm:us-west-2:123456789012:server/test-chef-automate/EXAMPLE-d1a2bEXAMPLE"
```

特定のアカウントに属するすべての CM OpsWorks サーバーを指定するには、ワイルドカード (*) を使用します。

```
"Resource": "arn:aws:opsworks-cm:us-west-2:123456789012:server/*"
```

次の例では、CM OpsWorks サーバーのバックアップをリソースとして指定します。

```
"Resource": "arn:aws:opsworks-cm:us-west-2:123456789012:backup/test-chef-automate-server-2018-05-20T19:06:12.399Z"
```

リソースを作成するためのアクションなど、一部の OpsWorks CM アクションは、特定のリソースで実行できません。このような場合はワイルドカード *を使用する必要があります。

```
"Resource": "*"
```

API アクションの多くが複数のリソースと関連します。複数リソースを単一ステートメントで指定するには、ARN をカンマで区切ります。

```
"Resource": [
      "resource1",
      "resource2"
```

OpsWorks CM リソースタイプとその ARNsAWS OpsWorks CM のアクション、リソース、および条件キー」を参照してください。 各リソースの ARN を指定できるアクションについては、「IAM ユーザーガイド」の「AWS OpsWorks CM のアクション、リソース、および条件キー」を参照してください。

条件キー

OpsWorks CM には、ポリシーステートメントの Condition要素で使用できるサービス固有のコンテキストキーはありません。すべてのサービスで使用できるグローバルな条件コンテキストキーのリストについては、IAM ポリシーのリファレンスの「AWS グローバル条件コンテキスト キー」を参照してください。すべての AWS グローバル条件キーを確認するには、「IAM ユーザーガイド」のAWS 「グローバル条件コンテキストキー」を参照してください。

Condition 要素 (または Condition ブロック) を使用すると、ステートメントが有効な条件を指定できます。Condition エレメントはオプションです。イコールや以下などの条件演算子を使用する条件表現を構築して、リクエスト内に値のあるポリシーの条件に一致させることができます。

1 つのステートメントに複数の Condition エレメントを指定する場合、または 1 つの Condition エレメントに複数のキーを指定する場合、 AWS が論理 AND 演算を使用してそれらを評価します。1 つの条件キーに複数の値を指定すると、 は論理ORオペレーションを使用して条件 AWS を評価します。ステートメントの権限が付与される前にすべての条件が満たされる必要があります。

条件を指定する際にプレースホルダー変数も使用できます。たとえば、 ユーザー名でタグ付けされている場合のみ、リソースにアクセスする ユーザーアクセス許可を付与できます。詳細についてはIAM ユーザーガイドのIAM ポリシーエレメント: 変数およびタグを参照してください。

例

OpsWorks CM アイデンティティベースのポリシーの例を表示するには、「」を参照してくださいAWS OpsWorks CM アイデンティティベースのポリシーの例。

OpsWorks CM およびリソースベースのポリシー

OpsWorks CM はリソースベースのポリシーをサポートしていません。

リソースベースのポリシーとは、リソース上で指定するプリンシパルとしてのどのアクションをどの条件で実行できるかを指定する JSON ポリシードキュメントです。

OpsWorks CM タグに基づく認可

CM リソースにタグをアタッチすることも、 OpsWorks CM OpsWorks へのリクエストでタグを渡すこともできます。タグに基づいてアクセスを制御するには、`aws:RequestTag/key-name`、または `aws:TagKeys` の条件キーを使用して、ポリシーの条件要素でタグ情報を指定します。CM リソース OpsWorks のタグ付けの詳細については、このガイドAWS OpsWorks for Puppet Enterprise リソースでのタグの使用のAWS OpsWorks for Chef Automate リソースでのタグの使用「」または「」を参照してください。

OpsWorks CM IAM ロール

IAM ロールは、特定のアクセス許可を持つ AWS アカウント内のエンティティです。

OpsWorks CM は 2 つのロールを使用します。

- ユーザーの AWS アカウント内で機能するアクセス許可を OpsWorks CM サービスに付与するサービスロール。OpsWorks CM が提供するデフォルトのサービスロールを使用する場合、このロールの名前は `aws-opsworks-cm-service-role` です。
- CM OpsWorks サービスが OpsWorks CM API を呼び出すことを許可するインスタンスプロファイルロール。このロールはAmazon S3 バケットを作成 CloudFormation するための Amazon S3 とへのアクセスを許可します。OpsWorks CM によって提供されるデフォルトのインスタンスプロファイルを使用する場合、このインスタンスプロファイルロールの名前は `aws-opsworks-cm-ec2-role` です。

OpsWorks CM はサービスにリンクされたロールを使用しません。

OpsWorks CM による一時的な認証情報の使用

OpsWorks CM は一時的な認証情報の使用をサポートし、その機能を から継承します AWS Security Token Service。

一時的な認証情報を使用して、フェデレーションでサインインする、IAM 役割を引き受ける、またはクロスアカウント役割を引き受けることができます。一時的なセキュリティ認証情報を取得するには、AssumeRole や GetFederationToken などの AWS STS API オペレーションを呼び出します。

サービスリンクロール

OpsWorks CM はサービスにリンクされたロールを使用しません。

サービスにリンクされたロールを使用すると、 AWS サービスは他の サービスのリソースにアクセスして、ユーザーに代わってアクションを実行できます。サービスリンクロールは IAM アカウント内に表示され、サービスによって所有されます。IAM 管理者は、サービスリンクロールの許可を表示できますが、編集することはできません。

サービスロール

この機能により、ユーザーに代わってサービスがサービスロールを引き受けることが許可されます。この役割により、サービスがお客様に代わって他のサービスのリソースにアクセスし、アクションを完了することが許可されます。サービスロールはIAM アカウントに表示され、アカウントによって所有されます。つまり、IAM 管理者はこの役割の権限を変更できます。ただし、それにより、サービスの機能が損なわれる場合があります。

OpsWorks CM は 2 つのロールを使用します。

- ユーザーの AWS アカウント内で機能するアクセス許可を OpsWorks CM サービスに付与するサービスロール。OpsWorks CM が提供するデフォルトのサービスロールを使用する場合、このロールの名前は `aws-opsworks-cm-service-role` です。
- CM OpsWorks サービスが OpsWorks CM API を呼び出すことを許可するインスタンスプロファイルロール。このロールはAmazon S3 バケットを作成 CloudFormation するための Amazon S3 とへのアクセスを許可します。OpsWorks CM によって提供されるデフォルトのインスタンスプロファイルを使用する場合、このインスタンスプロファイルロールの名前は `aws-opsworks-cm-ec2-role` です。

OpsWorks CM で IAM ロールを選択

CM でサーバーを作成するときは、CM OpsWorks がユーザーに代わって Amazon EC2 OpsWorks にアクセスすることを許可するロールを選択する必要があります。以前に作成したサービスロールがある場合、 OpsWorks CM により、選択できるロールのリストが提供されます。ロールを指定していない場合は、OpsWorks CM がロールを作成します。Amazon EC2 インスタンスの起動と停止のためのアクセスを、許可するロールを選択することが重要です。詳細については、Chef Automate サーバーの作成またはPuppet Enterprise マスターの作成を参照してください。

AWS OpsWorks CM アイデンティティベースのポリシーの例

デフォルトでは、ユーザーまたはロールには CM OpsWorks リソースを作成または変更するアクセス許可はありません。また、 AWS マネジメントコンソール、 AWS CLI、または AWS API を使用してタスクを実行することはできません。IAM 管理者は、IAM エンティティに必要な、指定されたリソースに対して特定の API オペレーションを実行するアクセス許可を付与する IAM ポリシーを作成

する必要があります。続いて、管理者はそれらのアクセス許可が必要なユーザーまたはグループにそのポリシーをアタッチします。

これらサンプルの、JSON ポリシードキュメントを使用して、IAM アイデンティティベースのポリシーを作成する方法については、「IAM ユーザーガイド」の「IAM ポリシーの作成 (コンソール)」を参照してください。

OpsWorks CM では、`AWSOpsWorksCMServiceRole`ポリシーをユーザーに割り当てて、ユーザーが AWS マネジメントコンソール または を使用して Chef Automate または Puppet Enterprise サーバーを作成および管理できるようにします AWS CLI。

トピック

- ポリシーのベストプラクティス
- ユーザーが自分のアクセス許可を表示できるようにする
- タグに基づく OpsWorks CM サーバーの表示

ポリシーのベストプラクティス

アイデンティティベースのポリシーは、ユーザーのアカウントで誰かが OpsWorks CM リソースを作成、アクセス、または削除できるどうかを決定します。これらのアクションでは、 AWS アカウントに費用が発生する場合があります。アイデンティティベースポリシーを作成したり編集したりする際には、以下のガイドラインと推奨事項に従ってください:

- AWS 管理ポリシーを開始し、最小特権のアクセス許可に移行する – ユーザーとワークロードにアクセス許可の付与を開始するには、多くの一般的なユースケースにアクセス許可を付与するAWS 管理ポリシーを使用します。これらは で使用できます AWS アカウント。ユースケースに固有の AWS カスタマー管理ポリシーを定義することで、アクセス許可をさらに減らすことをお勧めします。詳細については、IAM ユーザーガイド の AWS マネージドポリシー または ジョブ機能のAWS マネージドポリシー を参照してください。
- 最小特権を適用する – IAM ポリシーでアクセス許可を設定する場合は、タスクの実行に必要な許可のみを付与します。これを行うには、特定の条件下で特定のリソースに対して実行できるアクションを定義します。これは、最小特権アクセス許可とも呼ばれています。IAM を使用して許可を適用する方法の詳細については、IAM ユーザーガイド の IAM でのポリシーとアクセス許可 を参照してください。
- IAM ポリシーで条件を使用してアクセスをさらに制限する - ポリシーに条件を追加して、アクションやリソースへのアクセスを制限できます。たとえば、ポリシー条件を記述して、すべてのリクエストを SSL を使用して送信するように指定できます。条件を使用して、サービスアクションが な

どの特定の を通じて使用されている場合に AWS のサービス、サービスアクションへのアクセスを許可することもできます CloudFormation。詳細については、IAM ユーザーガイド の IAM JSON ポリシー要素:条件 を参照してください。

- IAM アクセスアナライザー を使用して IAM ポリシーを検証し、安全で機能的な権限を確保する - IAM アクセスアナライザー は、新規および既存のポリシーを検証して、ポリシーが IAM ポリシー言語 (JSON) および IAM のベストプラクティスに準拠するようにします。IAM アクセスアナライザーは 100 を超えるポリシーチェックと実用的な推奨事項を提供し、安全で機能的なポリシーの作成をサポートします。詳細については、IAM ユーザーガイド の IAM Access Analyzer でポリシーを検証する を参照してください。
- 多要素認証 (MFA) を要求する – で IAM ユーザーまたはルートユーザーを必要とするシナリオがある場合は AWS アカウント、MFA をオンにしてセキュリティを強化します。API オペレーションが呼び出されるときに MFA を必須にするには、ポリシーに MFA 条件を追加します。詳細については、IAM ユーザーガイド の MFA を使用した安全な API アクセス を参照してください。

IAM でのベストプラクティスの詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「IAM でのセキュリティベストプラクティス」を参照してください。

ユーザーが自分のアクセス許可を表示できるようにする

この例では、ユーザー ID にアタッチされたインラインおよび管理ポリシーの表示を ユーザーに許可するポリシーを作成する方法を示します。このポリシーには、コンソールで、または AWS CLI または AWS API を使用してプログラムでこのアクションを実行するアクセス許可が含まれています。

JSON

```
{
       "Version":"2012-10-17",
       "Statement": [
           {
               "Sid": "ViewOwnUserInfo",
               "Effect": "Allow",
               "Action": [
                   "iam:GetUserPolicy",
                   "iam:ListGroupsForUser",
                   "iam:ListAttachedUserPolicies",
                   "iam:ListUserPolicies",
                   "iam:GetUser"
               ],
               "Resource": [
```

```
                "arn:aws:iam::*:user/${aws:username}"
            ]
        },
        {
            "Sid": "NavigateInConsole",
            "Effect": "Allow",
            "Action": [
                "iam:GetGroupPolicy",
                "iam:GetPolicyVersion",
                "iam:GetPolicy",
                "iam:ListAttachedGroupPolicies",
                "iam:ListGroupPolicies",
                "iam:ListPolicyVersions",
                "iam:ListPolicies",
                "iam:ListUsers"
            ],
            "Resource": "*"
        }
    ]
}
```

タグに基づく OpsWorks CM サーバーの表示

アイデンティティベースのポリシーの条件を使用して、タグに基づいて CM OpsWorks サーバーとバックアップへのアクセスを制御できます。この例では、CM OpsWorks サーバーの表示を許可するポリシーを作成する方法を示します。ただし、アクセス許可は、CM OpsWorks サーバータグにそのユーザーのユーザー名の値Ownerがある場合にのみ付与されます。このポリシーでは、このアクションをコンソールで実行するために必要なアクセス許可も付与します。

このポリシーをアカウントの ユーザーにアタッチできます。という名前のユーザーが CM OpsWorks サーバーを表示richard-roeしようとする場合、サーバーには Owner=richard-roeまたは のタグを付ける必要がありますowner=richard-roe。それ以外の場合、アクセスは拒否されます。条件キー名では大文字と小文字が区別されないため、条件タグキー Owner は Owner と owner の両方に一致します。詳細については、IAM ユーザーガイドのIAM JSON ポリシー要素: 条件を参照してください。

CM Identity and Access AWS OpsWorks のトラブルシューティング

以下の情報は、IAM の使用に伴って発生する可能性がある一般的な問題の診断や修復に役立ちます。CM 固有のトラブルシューティング情報については、 OpsWorks トラブルシューティング AWS

OpsWorks for Chef Automate「」および「」を参照してくださいOpsWorks for Puppet Enterprise のトラブルシューティング。

トピック

- OpsWorks CM でアクションを実行する権限がない
- iam:PassRole を実行する権限がない
- AWS アカウント以外のユーザーに CM OpsWorks リソースへのアクセスを許可したい

OpsWorks CM でアクションを実行する権限がない

にアクションを実行する権限がないと AWS マネジメントコンソール 通知された場合は、管理者に連絡してサポートを依頼する必要があります。管理者とは、サインイン認証情報を提供した担当者です。

次の例のエラーは、ユーザーがコンソールを使用して OpsWorks CM `mateojackson` サーバーの詳細を表示しようとしているが、 アクセス`opsworks-cm:DescribeServers`許可がない場合に発生します。

```
User: arn:aws:iam::123456789012:user/mateojackson is not authorized to perform:
 opsworks-cm:DescribeServers on resource: test-chef-automate-server
```

この場合、Mateo は、`test-chef-automate-server` アクションを使用して `opsworks-cm:DescribeServers` リソースにアクセスすることを許可するように、ポリシーの更新を管理者に依頼します。

iam:PassRole を実行する権限がない

`iam:PassRole` アクションを実行することが認可されていないというエラーが表示された場合、管理者に問い合わせ、サポートを依頼する必要があります。管理者とは、サインイン認証情報を提供した担当者です。OpsWorks CM にロールを渡すことができるようにポリシーを更新するよう、その人に依頼します。

一部の AWS サービスでは、新しいサービスロールまたはサービスにリンクされたロールを作成する代わりに、既存のロールをそのサービスに渡すことができます。そのためには、サービスにロールを渡すアクセス許可が必要です。

以下のエラーの例は、`marymajor` という名前のユーザーがコンソールを使用して OpsWorks CM でアクションを実行しようする場合に発生します。ただし、アクションには、サービスロールによって

サービスに許可が付与されている必要があります。Mary には、ロールをサービスに渡す許可がありません。

```
User: arn:aws:iam::123456789012:user/marymajor is not authorized to perform:
 iam:PassRole
```

この場合、Mary は `iam:PassRole` アクションの実行が許可されるように、担当の管理者にポリシーの更新を依頼します。

AWS アカウント以外のユーザーに CM OpsWorks リソースへのアクセスを許可したい

他のアカウントのユーザーや組織外の人が、リソースにアクセスするために使用できるロールを作成できます。ロールの引き受けを委託するユーザーを指定できます。リソースベースのポリシーまたはアクセスコントロールリスト (ACL) をサポートするサービスの場合、それらのポリシーを使用して、リソースへのアクセスを付与できます。

詳細については、以下を参照してください:

- OpsWorks CM は、CM OpsWorks サーバーを管理するためのアクセス許可を複数のアカウントからユーザーに付与することをサポートしています。
- 所有している AWS アカウント間でリソースへのアクセスを提供する方法については、「IAM ユーザーガイド」の「所有している別の AWS アカウントの IAM ユーザーへのアクセスを提供する」を参照してください。
- サードパーティー AWS アカウントにリソースへのアクセスを提供する方法については、IAM ユーザーガイドの「サードパーティーが所有する AWS アカウントへのアクセスを提供する」を参照してください。
- ID フェデレーションを介してアクセスを提供する方法については、IAM ユーザーガイドの外部で認証されたユーザー (ID フェデレーション) へのアクセスの許可を参照してください。
- クロスアカウントアクセスでのロールとリソースベースのポリシーの使用の違いの詳細については、IAM ユーザーガイドのIAM ロールとリソースベースのポリシーとの相違点を参照してください。

AWS AWS OpsWorks Configuration Management の マネージドポリシー

ユーザー、グループ、ロールにアクセス許可を追加するには、自分でポリシーを記述するよりも AWS 管理ポリシーを使用する方が簡単です。チームに必要な権限のみを提供する IAM カスタマーマ

ネージドポリシーを作成するには時間と専門知識が必要です。すぐに開始するには、 AWS マネージドポリシーを使用できます。これらのポリシーは一般的なユースケースを対象としており、 AWS アカウントで利用できます。 AWS 管理ポリシーの詳細については、IAM ユーザーガイドの「 AWS 管理ポリシー」を参照してください。

AWS サービスは、 AWS 管理ポリシーを維持および更新します。 AWS 管理ポリシーのアクセス許可は変更できません。サービスは、新機能をサポートするために、 AWS 管理ポリシーに追加のアクセス許可を追加することがあります。この種類の更新はポリシーがアタッチされている、すべてのアイデンティティ (ユーザー、グループおよびロール) に影響を与えます。サービスは、新機能が起動されたとき、または新しいオペレーションが利用可能になったときに、 AWS マネージドポリシーを更新する可能性が最も高いです。サービスは AWS 管理ポリシーからアクセス許可を削除しないため、ポリシーの更新によって既存のアクセス許可が中断されることはありません。

さらに、 は、複数のサービスにまたがるジョブ関数の マネージドポリシー AWS をサポートしています。例えば、ReadOnlyAccess AWS 管理ポリシーは、すべての AWS サービスとリソースへの読み取り専用アクセスを提供します。サービスが新機能を起動すると、 は新しいオペレーションとリソースの読み取り専用アクセス許可 AWS を追加します。ジョブ機能のポリシーの一覧および詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「AWS のジョブ機能のマネージドポリシー」を参照してください。

AWS 管理ポリシー: **AWSOpsWorksCMServiceRole** - 廃止

IAM エンティティに `AWSOpsWorksCMServiceRole` をアタッチできます。また、OpsWorks CM はこのポリシーをサービスのロールにアタッチし、OpsWorks CM がユーザーに代わってアクションを実行することを許可します。

このポリシーは、OpsWorks CM 管理者が OpsWorks CM サーバーおよびバックアップを作成、管理、および削除できるようにする##上の権限を付与します。

詳細については、「 AWS マネージドポリシーリファレンスガイド」の「非推奨 AWS の マネージドポリシー」を参照してください。

アクセス許可の詳細

このポリシーには、以下のアクセス許可が含まれています。

- `opsworks-cm` — プリンシパルが既存のサーバを削除して、メンテナンス実行を開始できるようにします。
- `acm` – ユーザーが OpsWorks CM サーバーに接続 AWS Certificate Manager できるようにする証明書をプリンシパルが から削除またはインポートできるようにします。

- `cloudformation` — プリンシパルが OpsWorks CM サーバーを作成、更新、または削除する際に、OpsWorks CM が AWS CloudFormation スタックを作成および管理できるようにします。
- `ec2` — プリンシパルが OpsWorks CM サーバーを作成、更新、または削除するときに、OpsWorks CM が Amazon Elastic Compute Cloud インスタンスを起動、プロビジョニング、更新、終了できるようにします。
- `iam` — OpsWorks CM が、OpsWorks CM サーバーの作成および管理に必要なサービスロールを作成できるようにします。
- `tag` - プリンシパルは、サーバーやバックアップなどの OpsWorks CM リソースでタグを適用および削除できるようにします。
- `s3` — OpsWorks CM は、サーバーバックアップを保存するための Amazon S3 バケットの作成、プリンシパルリクエスト (バックアップの削除など) で S3 バケット内のオブジェクトを管理し、バケットを削除できるようにします。
- `secretsmanager` — OpsWorks CM が Secrets Manager のシークレットを作成および管理し、シークレットからタグを適用または削除できるようにします。
- `ssm` — OpsWorks CM が OpsWorks CM サーバーであるインスタンスで Systems Manager の実行コマンドを使用できるようにします。

JSON

```
{
    "Version":"2012-10-17",
    "Statement": [
        {
            "Effect": "Allow",
            "Resource": [
                "arn:aws:s3:::amzn-s3-demo-bucket*"
            ],
            "Action": [
                "s3:CreateBucket",
                "s3:DeleteObject",
                "s3:DeleteBucket",
                "s3:GetObject",
                "s3:ListBucket",
                "s3:PutBucketPolicy",
                "s3:PutObject",
                "s3:GetBucketTagging",
                "s3:PutBucketTagging"
```

```
            ]
        },
        {
            "Effect": "Allow",
            "Resource": [
                "*"
            ],
            "Action": [
                "tag:UntagResources",
                "tag:TagResources"
            ]
        },
        {
            "Effect": "Allow",
            "Resource": [
                "*"
            ],
            "Action": [
                "ssm:DescribeInstanceInformation",
                "ssm:GetCommandInvocation",
                "ssm:ListCommandInvocations",
                "ssm:ListCommands"
            ]
        },
        {
            "Effect": "Allow",
            "Resource": [
                "*"
            ],
            "Condition": {
                "StringLike": {
                    "ssm:resourceTag/aws:cloudformation:stack-name": "aws-
opsworks-cm-*"
                }
            },
            "Action": [
                "ssm:SendCommand"
            ]
        },
        {
            "Effect": "Allow",
            "Resource": [
                "arn:aws:ssm:*::document/*",
                "arn:aws:s3:::amzn-s3-demo-bucket*"
```

```
            ],
            "Action": [
                "ssm:SendCommand"
            ]
        },
        {
            "Effect": "Allow",
            "Resource": [
                "*"
            ],
            "Action": [
                "ec2:AllocateAddress",
                "ec2:AssociateAddress",
                "ec2:AuthorizeSecurityGroupIngress",
                "ec2:CreateImage",
                "ec2:CreateSecurityGroup",
                "ec2:CreateSnapshot",
                "ec2:CreateTags",
                "ec2:DeleteSecurityGroup",
                "ec2:DeleteSnapshot",
                "ec2:DeregisterImage",
                "ec2:DescribeAccountAttributes",
                "ec2:DescribeAddresses",
                "ec2:DescribeImages",
                "ec2:DescribeInstanceStatus",
                "ec2:DescribeInstances",
                "ec2:DescribeSecurityGroups",
                "ec2:DescribeSnapshots",
                "ec2:DescribeSubnets",
                "ec2:DisassociateAddress",
                "ec2:ReleaseAddress",
                "ec2:RunInstances",
                "ec2:StopInstances"
            ]
        },
        {
            "Effect": "Allow",
            "Resource": [
                "*"
            ],
            "Condition": {
                "StringLike": {
                    "ec2:ResourceTag/aws:cloudformation:stack-name": "aws-
opsworks-cm-*"
```

```
                }
            },
            "Action": [
                "ec2:TerminateInstances",
                "ec2:RebootInstances"
            ]
        },
        {
            "Effect": "Allow",
            "Resource": [
                "arn:aws:opsworks-cm:*:*:server/*"
            ],
            "Action": [
                "opsworks-cm:DeleteServer",
                "opsworks-cm:StartMaintenance"
            ]
        },
        {
            "Effect": "Allow",
            "Resource": [
                "arn:aws:cloudformation:*:*:stack/aws-opsworks-cm-*"
            ],
            "Action": [
                "cloudformation:CreateStack",
                "cloudformation:DeleteStack",
                "cloudformation:DescribeStackEvents",
                "cloudformation:DescribeStackResources",
                "cloudformation:DescribeStacks",
                "cloudformation:UpdateStack"
            ]
        },
        {
            "Effect": "Allow",
            "Resource": [
                "arn:aws:iam::*:role/aws-opsworks-cm-*",
                "arn:aws:iam::*:role/service-role/aws-opsworks-cm-*"
            ],
            "Action": [
                "iam:PassRole"
            ]
        },
        {
            "Effect": "Allow",
            "Resource": "*",
```

```
            "Action": [
                "acm:DeleteCertificate",
                "acm:ImportCertificate"
            ]
        },
        {
            "Effect": "Allow",
            "Resource": "arn:aws:secretsmanager:*:*:opsworks-cm!aws-opsworks-cm-
secrets-*",
            "Action": [
                "secretsmanager:CreateSecret",
                "secretsmanager:GetSecretValue",
                "secretsmanager:UpdateSecret",
                "secretsmanager:DeleteSecret",
                "secretsmanager:TagResource",
                "secretsmanager:UntagResource"
            ]
        },
        {
            "Effect": "Allow",
            "Action": "ec2:DeleteTags",
            "Resource": [
                "arn:aws:ec2:*:*:instance/*",
                "arn:aws:ec2:*:*:elastic-ip/*",
                "arn:aws:ec2:*:*:security-group/*"
            ]
        }
    ]
}
```

AWS 管理ポリシー: **AWSOpsWorksCMInstanceProfileRole** - 廃止

IAM エンティティに AWSOpsWorksCMInstanceProfileRole をアタッチできます。また、OpsWorks CM はこのポリシーをサービスのロールにアタッチし、OpsWorks CM がユーザーに代わってアクションを実行することを許可します。

このポリシーは、OpsWorks CM サーバーとして使用される Amazon EC2 インスタンスが およびから AWS CloudFormation 情報を取得し AWS Secrets Manager、Amazon S3 バケットにサーバーバックアップを保存できるようにする##アクセス許可を付与します。

詳細については、「 AWS マネージドポリシーリファレンスガイド」の「非推奨 AWS の マネージドポリシー」を参照してください。

アクセス許可の詳細

このポリシーには、以下のアクセス許可が含まれています。

- acm – OpsWorks CM サーバー EC2 インスタンス AWS Certificate Manager が から証明書を取得して、ユーザーが OpsWorks CM サーバーに接続できるようにします。
- cloudformation – OpsWorks CM サーバー EC2 インスタンスがインスタンスの作成または更新プロセス中に CloudFormation スタックに関する情報を取得し、そのステータス CloudFormation に関するシグナルを に送信できるようにします。
- s3 — OpsWorks CM サーバー EC2 インスタンスがサーバーのバックアップをアップロードして S3 バケットに保存し、必要に応じてアップロードを停止またはロールバックし、S3 バケットからバックアップを削除できるようにします。
- secretsmanager — OpsWorks CM サーバーの EC2 インスタンスが OpsWorks CM 関連の Secrets Manager のシークレットの値を取得できるようにします。

JSON

```
{
    "Version":"2012-10-17",
    "Statement": [
        {
            "Action": [
                "cloudformation:DescribeStackResource",
                "cloudformation:SignalResource"
            ],
            "Effect": "Allow",
            "Resource": [
                "*"
            ]
        },
        {
            "Action": [
                "s3:AbortMultipartUpload",
                "s3:DeleteObject",
                "s3:GetObject",
                "s3:ListAllMyBuckets",
                "s3:ListBucket",
                "s3:ListMultipartUploadParts",
                "s3:PutObject"
            ],
```

```
            "Resource": "arn:aws:s3:::amzn-s3-demo-bucket*",
            "Effect": "Allow"
        },
        {
            "Action": "acm:GetCertificate",
            "Resource": "*",
            "Effect": "Allow"
        },
        {
            "Action": "secretsmanager:GetSecretValue",
            "Resource": "arn:aws:secretsmanager:*:*:opsworks-cm!aws-opsworks-cm-
secrets-*",
            "Effect": "Allow"
        }
    ]
}
```

AWS 管理ポリシーに対する OpsWorks CM の更新

このサービスがこれらの変更の追跡を開始してからの OpsWorks CM の AWS 管理ポリシーの更新に関する詳細を表示します。このページの変更に関する自動通知については、[OpsWorks CM ドキュメントの履歴] ページの RSS フィードをサブスクライブしてください。

変更	説明	日付
AWSOpsWorksCMInstanceProfileRole - 非推奨	サービスが廃止されたため、このポリシーは廃止されました。	2025 年 5 月 26 日
AWSOpsWorksCMServiceRole - 非推奨	サービスが廃止されたため、このポリシーは廃止されました。	2025 年 5 月 26 日
AWSOpsWorksCMServiceRole - 更新されたマネージドポリシー	OpsWorks CM は、OpsWorks CM 管理者が OpsWorks CM サーバーとバックアップを作成、管理、削除できるようにするマネージドポリシーを更新しました。この変更	2021 年 4 月 23 日

変更	説明	日付
	により、Secrets Manager のシークレットのリソース名に opsworks-cm! が追加され、OpsWorks CM がシークレットを所有できるようになります。	
OpsWorks CM は変更の追跡を開始しました	OpsWorks CM は AWS 、管理ポリシーの変更の追跡を開始しました。	2021 年 4 月 23 日

でのサービス間の混乱した代理の防止 AWS OpsWorks CM

混乱した代理問題は、アクションを実行する許可を持たないエンティティが、より特権のあるエンティティにアクションを実行するように強制できるセキュリティの問題です。では AWS、サービス間のなりすましにより、混乱した代理問題が発生する可能性があります。サービス間でのなりすましは、1 つのサービス (呼び出し元サービス) が、別のサービス (呼び出し対象サービス) を呼び出すときに発生する可能性があります。呼び出し元サービスは、本来ならアクセスすることが許可されるべきではない方法でその許可を使用して、別のお客様のリソースに対する処理を実行するように操作される場合があります。これを防ぐため、 AWS では、アカウントのリソースへのアクセス権が付与されたサービスプリンシパルで、すべてのサービスのデータを保護するために役立つツールを提供しています。

リソースポリシーで aws:SourceArnおよび aws:SourceAccount グローバル条件コンテキストキーを使用して、 がリソースに別のサービス AWS OpsWorks CM に付与するアクセス許可を制限することをお勧めします。aws:SourceArn の値に Amazon S3 バケット ARN などのアカウント ID が含まれていない場合は、両方のグローバル条件コンテキストキーを使用して、アクセス許可を制限する必要があります。同じポリシーステートメントでこれらのグローバル条件コンテキストキーの両方を使用し、アカウント ID にaws:SourceArn の値が含まれていない場合、aws:SourceAccount 値と aws:SourceArn 値の中のアカウントには、同じアカウント ID を使用する必要があります。クロスサービスのアクセスにリソースを 1 つだけ関連付けたい場合は、aws:SourceArn を使用します。そのアカウント内のリソースをクロスサービスの使用に関連付けることを許可する場合は、aws:SourceAccount を使用します。

aws:SourceArn の値は、 OpsWorks CM シェフサーバーまたはパペットサーバーの ARN である必要があります。

混乱した代理問題から保護するための最も効果的な方法は、 AWS OpsWorks CM サーバーの完全な ARN を指定しながら、 aws:SourceArnグローバル条件コンテキストキーを使用することです。完全な ARN が不明な場合や、複数のサーバーARNを指定する場合には、ARN の不明な部分にワイルドカード (*) を含む aws:SourceArn グローバルコンテキスト条件キーを使用します。例えば、arn:aws:*servicename*:*:*123456789012*:*。

次のセクションでは、 で aws:SourceArnおよび aws:SourceAccount グローバル条件コンテキストキーを使用して、混乱した代理問題 AWS OpsWorks CM を防ぐ方法を示します。

で混乱した代理の悪用を防ぐ AWS OpsWorks CM

このセクションでは、 で混乱した代理悪用を防ぐ方法と AWS OpsWorks CM、アクセスに使用する IAM ロールにアタッチできるアクセス許可ポリシーの例について説明します AWS OpsWorks CM。セキュリティのベストプラクティスとして、aws:SourceArn と aws:SourceAccount の条件キーを IAM ロールとほかのサービスとの信頼関係に追加することをお勧めします。信頼関係により AWS OpsWorks CM 、 は AWS OpsWorks CM サーバーを作成または管理するために必要な他の サービスでアクションを実行するロールを引き受けることができます。

信頼関係を編集するために、**aws:SourceArn** と **aws:SourceAccount** 条件キーを追加するには

1. IAM コンソール (https://console.aws.amazon.com/iam/) を開きます。
2. 左のナビゲーションペインで、[ロール] を選択してください。
3. 検索ボックスで、アクセスに使用するロールを検索します AWS OpsWorks CM。 AWS マネージドロールは ですaws-opsworks-cm-service-role。
4. そのロールの 概要 ページで、信頼関係 タブを選択します。
5. [信頼関係] タブで、[信頼関係の編集] を選択します。
6. ポリシードキュメント で、aws:SourceArn または aws:SourceAccount 条件キーのうち少なくとも一つをポリシーに追加します。aws:SourceArn を使用して、クロスサービス (AWS Certificate Manager や Amazon EC2 など) と特定の AWS OpsWorks CM サーバー間の信頼関係を制限 AWS OpsWorks CM します。これはより制限が厳しいサーバーです。aws:SourceAccount を追加して、クロスサービスと 間の信頼関係 AWS OpsWorks CM を、制限の少ない特定のアカウントのサーバーに制限します。以下に例を示します。両方の条件キーを使用する場合、アカウント ID は同じでなければならないことに注意してください。

JSON

```
{
  "Version":"2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "opsworks-cm.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "aws:SourceAccount": "123456789012"
        },
        "ArnEquals": {
          "aws:SourceArn": "arn:aws:opsworks-cm:us-
east-2:123456789012:server/my-opsworks-server/EXAMPLEabcd-1234-efghEXAMPLE-
ID"
        }
      }
    }
  ]
}
```

7. 条件キーを追加し終えたら、[信頼ポリシーの更新] を選択します。

以下は、 aws:SourceArnおよび を使用して AWS OpsWorks CM サーバーへのアクセスを制限するロールの追加の例ですaws:SourceAccount。

トピック

- 例: 特定のリージョンの AWS OpsWorks CM サーバーへのアクセス
- 例: aws:SourceArn に複数のサーバー ARN の追加

例: 特定のリージョンの AWS OpsWorks CM サーバーへのアクセス

次のロール信頼関係ステートメントは、米国東部 (オハイオ) リージョン () のすべての AWS OpsWorks CM サーバーにアクセスしますus-east-2。リージョンは aws:SourceArn の ARN 値で指定されていますが、サーバー ID の値はワイルドカード (*) であることに注意してください。

JSON

```
{
  "Version":"2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "opsworks-cm.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "aws:SourceAccount": "123456789012"
        },
        "ArnEquals": {
          "aws:SourceArn": "arn:aws:opsworks-cm:us-east-2:123456789012:server/*"
        }
      }
    }
  ]
}
```

例: **aws:SourceArn** に複数のサーバー ARN の追加

次の例では、アカウント ID 123456789012 の 2 つの AWS OpsWorks CM サーバーの配列へのアクセスを制限します。

JSON

```
{
  "Version":"2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "opsworks-cm.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole",
      "Condition": {
```

```
        "StringEquals": {
          "aws:SourceAccount": "123456789012"
        },
        "ArnEquals": {
          "aws:SourceArn": [
             "arn:aws:opsworks-cm:us-east-2:123456789012:server/my-chef-
server/unique_ID",
             "arn:aws:opsworks-cm:us-east-2:123456789012:server/my-puppet-
server/unique_ID"
           ]
       }
      }
    }
  ]
}
```

インターネットトラフィックのプライバシー

OpsWorks CM は、HTTPS または TLS 暗号化を使用した HTTP AWSで一般的に使用されるのと同じ送信セキュリティプロトコルを使用します。

CM OpsWorks でのログ記録とモニタリング

OpsWorks CM はすべての API アクションを CloudTrail に記録します。詳細については、以下の各トピックを参照してください。

- を使用した OpsWorks for Puppet Enterprise API コールのログ記録 AWS CloudTrail
- を使用した AWS OpsWorks for Chef Automate API コールのログ記録 AWS CloudTrail

OpsWorks CM のコンプライアンス検証

OpsWorks CM は、以下のコンプライアンスプログラムと規制をサポートしています。

- Payment Card Industry (PCI)
- 1996 年の医療保険の相互運用性と説明責任に関する法令 (HIPAA)
- AWS System and Organization Controls (SOC) 1、2、3
- 一般データ保護規則 (GDPR)

サードパーティーの監査者は、複数のコンプライアンスプログラムの一環として OpsWorks CM のセキュリティと AWS コンプライアンスを評価します。これらのプログラムには、SOC、PCI、FedRAMP、HIPAA などがあります。

特定のコンプライアンスプログラムの対象となる AWS サービスのリストについては、「コンプライアンスプログラムによる AWS 対象範囲内のサービス」を参照してください。一般的な情報については、「AWS コンプライアンスプログラム」を参照してください。

を使用して、サードパーティーの監査レポートをダウンロードできます AWS Artifact。詳細については、「Downloading Reports in AWS Artifact」(AWS Artifact のレポートのダウンロード) を参照してください。

OpsWorks CM を使用する際のお客様のコンプライアンス責任は、お客様のデータの機密性、貴社のコンプライアンス目的、適用される法律および規制によって決まります。 AWS では、コンプライアンスに役立つ以下のリソースを提供しています。

- セキュリティとコンプライアンスのクイックスタートガイド — これらのデプロイガイドでは、アーキテクチャ上の考慮事項について説明し、機密性とコンプライアンスに焦点を当てたベースライン環境を AWSにデプロイするためのステップを提供します。
- Architecting for HIPAA Security and Compliance ホワイトペーパー – このホワイトペーパーでは、企業が AWS を使用して HIPAA 準拠のアプリケーションを作成する方法について説明します。
- AWS コンプライアンスリソース – このワークブックとガイドのコレクションは、お客様の業界や地域に適用される場合があります。
- AWS Config – この AWS サービスは、リソース設定が内部プラクティス、業界ガイドライン、および規制にどの程度準拠しているかを評価します。
- AWS Security Hub CSPM – この AWS サービスは、 内のセキュリティ状態を包括的に把握 AWS し、セキュリティ業界標準とベストプラクティスへの準拠を確認するのに役立ちます。

CM OpsWorks の耐障害性

OpsWorks CM は、サーバーの作成時にデフォルトでサーバーの日次バックアップを有効にします。バックアップは暗号化され、Amazon S3 バケットに保存されます。デフォルトでは、このバケットにはサーバーの作成元のアカウントからのみアクセスできます。他のユーザーに対してバケットへのアクセスを追加したり、必要に応じて Amazon S3 のクロスリージョンバックアップを設定したりすることができます。Chef と Puppet は、どちらも OpsWorks CM サーバーおよび管理ノード間のトラフィックを暗号化するため、クロスリージョン暗号化をサポートしています。

OpsWorks CM は、高可用性 (HA) 設定をサポートしていません。

AWS グローバルインフラストラクチャは、 AWS リージョンとアベイラビリティーゾーンを中心に構築されています。 AWS リージョンは、低レイテンシー、高スループット、および高度に冗長なネットワークで接続された、物理的に分離および分離された複数のアベイラビリティーゾーンを提供します。アベイラビリティーゾーンでは、アベイラビリティーゾーン間で中断せずに、自動的にフェイルオーバーするアプリケーションとデータベースを設計および運用することができます。アベイラビリティーゾーンは、従来の単一または複数のデータセンターインフラストラクチャよりも可用性、耐障害性、およびスケーラビリティが優れています。

OpsWorks CM でサーバーをバックアップおよび復元する方法の詳細については、以下を参照してください。

- OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーのバックアップと復元
- AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーのバックアップと復元

AWS リージョンとアベイラビリティーゾーンの詳細については、AWS 「 グローバルインフラストラクチャ」を参照してください。

AWS OpsWorks CM のインフラストラクチャセキュリティ

マネージドサービスである AWS OpsWorks Configuration Management は、 AWS グローバルネットワークセキュリティで保護されています。 AWS セキュリティサービスと がインフラストラクチャ AWS を保護する方法については、AWS 「 クラウドセキュリティ」を参照してください。インフラストラクチャセキュリティのベストプラクティスを使用して環境を AWS 設計するには、「Security Pillar AWS Well-Architected Framework」の「Infrastructure Protection」を参照してください。

AWS 公開された API コールを使用して、ネットワーク経由で OpsWorks CM にアクセスします。クライアントは以下をサポートする必要があります。

- Transport Layer Security (TLS)。TLS 1.2 が必須で、TLS 1.3 をお勧めします。
- DHE (楕円ディフィー・ヘルマン鍵共有) や ECDHE (楕円曲線ディフィー・ヘルマン鍵共有) などの完全前方秘匿性 (PFS) による暗号スイート。これらのモードは Java 7 以降など、ほとんどの最新システムでサポートされています。

OpsWorks CM は、プライベートリンクまたは VPC プライベートエンドポイントをサポートしていません。

OpsWorks CM はリソースベースのポリシーをサポートしていません。詳細については、AWS Identity and Access Management ユーザーガイドの 「AWS IAM と連携する のサービス」を参照してください。

CM OpsWorks の設定と脆弱性の分析

OpsWorks CM は、 OpsWorks CM サーバーで実行されているオペレーティングシステムに対してカーネルとセキュリティの定期的な更新を実行します。ユーザーは、現在の日付から最大 2 週間自動更新が行われるように時間枠を設定できます。 OpsWorks CM は Chef および Puppet Enterprise のマイナーバージョンの自動更新をプッシュします。の更新の設定の詳細については AWS OpsWorks for Chef Automate、このガイドの「システムメンテナンス (Chef)」を参照してください。OpsWorks for Puppet Enterprise の更新の設定の詳細については、このガイドの「System Maintenance (Puppet)」(システムメンテナンス (Puppet)) を参照してください。

CM OpsWorks のセキュリティのベストプラクティス

OpsWorks CM は、すべての AWS サービスと同様に、独自のセキュリティポリシーを開発および実装する際に考慮すべきセキュリティ機能を提供します。以下のベストプラクティスは一般的なガイドラインであり、完全なセキュリティソリューションを説明するものではありません。これらのベストプラクティスはお客様の環境に適切ではないか、十分ではない場合があるため、これらは指示ではなく、有用な考慮事項と見なしてください。

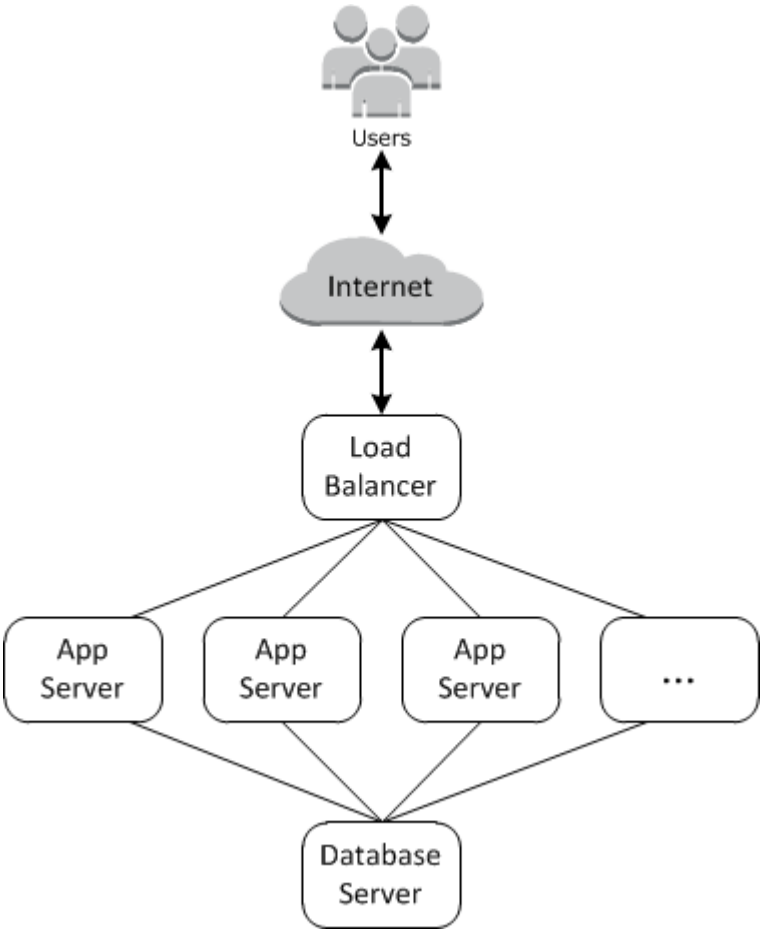
- スターターキットとダウンロードしたログイン認証情報を保護します。新しい OpsWorks CM サーバーを作成するか、CM コンソールから新しいスターターキットと認証情報をダウンロードするときは、少なくとも 1 OpsWorks つの認証要素を必要とする安全な場所にこれらの項目を保存します。認証情報は、サーバーへの管理者レベルのアクセスを提供します。
- 設定コードを保護します。ソースリポジトリ用の推奨プロトコルを使用して Chef または Puppet 設定コード (クックブックとモジュール) を保護します。例えば、AWS CodeCommitでリポジトリへのアクセス許可を制限したり、GitHub リポジトリを保護するための GitHub ウェブサイトのガイドラインを適用したりすることができます。
- CA 署名付き証明書を使用してノードに接続します。 OpsWorks CM サーバーでノードを登録またはブートストラップするときに自己署名証明書を使用できますが、ベストプラクティスとして、CA 署名証明書を使用します。証明機関 (CA) によって署名された証明書を使用することをお勧めします。
- Chef または Puppet 管理コンソールのサインイン認証情報は他のユーザーと共有しません。管理者は、ChefまたはPuppetコンソールウェブサイトのユーザごとに別々のユーザを作成する必要があります。

  - Chef Automate でのユーザーの管理
  - Puppet Enterprise でのユーザーの管理
- バックアップとシステムメンテナンスの自動更新を設定します。 OpsWorks CM サーバーでメンテナンスの自動更新を設定すると、サーバーで最新のセキュリティ関連のオペレーティングシステム更新が実行されていることを確認できます。自動バックアップを設定すると、災害対策が容易になり、インシデントや障害発生時の復元時間が短縮されます。CM サーバーのバックアップを保存する Amazon S3 OpsWorks バケットへのアクセスを制限します。すべてのユーザーにアクセス権を付与しないでください。必要に応じて他のユーザーに個別に読み取りまたは書き込みアクセス権を付与するか、これらのユーザーのセキュリティグループを IAM に作成して、このセキュリティグループにアクセス権を割り当てます。
  - システムメンテナンス (Chef)
  - システムメンテナンス (Puppet)
  - AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーのバックアップと復元
  - OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーのバックアップと復元
  - 「AWS Identity and Access Management ユーザーガイド」の「IAM が委任した最初のユーザーおよびグループの作成」
  - 「Amazon Simple Storage Service Developer Guide (Amazon Simple Storage Service 開発者ガイド)」の「Security Best Practices for Amazon S3」(Amazon S3 のセキュリティベストプラクティス)]

OpsWorks スタック

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

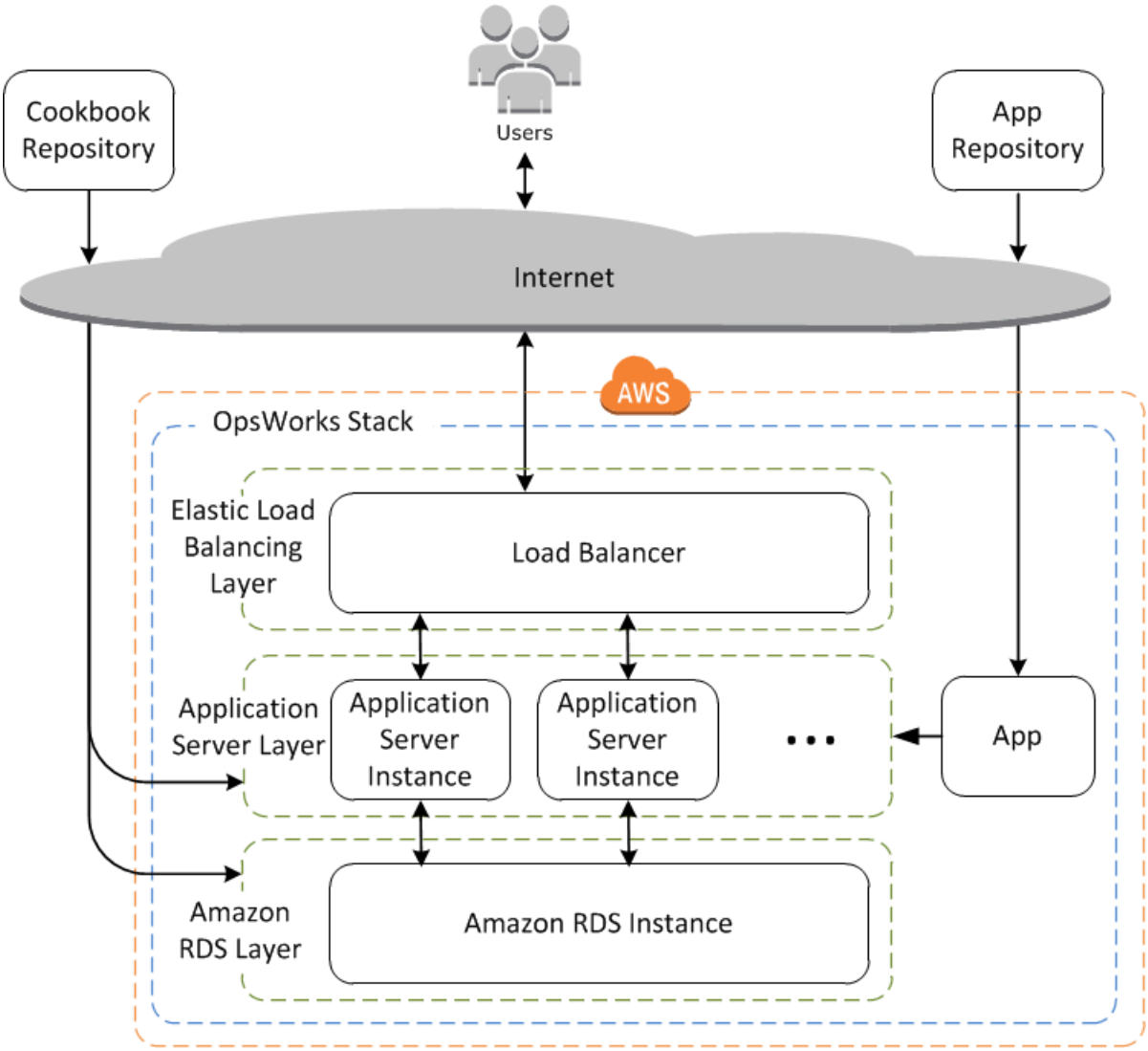
クラウドベースのコンピューティングには通常、まとめて作成および管理する必要のある AWS リソース Amazon EC2 インスタンス、Amazon Relational Database Service (RDS) などのグループが含まれます。たとえば、ウェブアプリケーションには、通常、アプリケーションサーバー、データベースサーバー、ロードバランサーなどが必要です。このインスタンスのグループは、一般にスタックと呼ばれています。例として、シンプルなアプリケーションサーバースタックを図に表すと以下のようになります。



インスタンスを作成したり、必要なパッケージをインストールしたりする他に、通常、アプリケーションをアプリケーションサーバーに分散したり、スタックのパフォーマンスを監視したり、セキュリティおよびアクセス許可を管理したりするなどの操作を行う方法が必要です。

OpsWorks スタックは、スタックとアプリケーションを作成および管理するためのシンプルで柔軟な方法を提供します。

基本的なアプリケーションサーバースタックが OpsWorks スタックでどのように表示されるかは次のとおりです。Elastic Load Balancing ロードバランサーの背後で実行されるアプリケーションサーバーのグループとバックエンド Amazon RDS データベースサーバーで構成されています。



比較的シンプルですが、このスタックにはすべての主要な OpsWorks スタック機能が表示されます。構成を以下に示します。

トピック

- スタック
- レイヤー
- レシピおよびライフサイクルイベント
- インスタンス
- アプリケーション
- スタックのカスタマイズ
- リソース管理

- セキュリティと権限
- モニタリングとロギング
- CLI、SDK、 CloudFormation テンプレート
- AWS OpsWorks Stacks サポート終了FAQs
- AWS OpsWorks Stacks アプリケーションを AWS Systems Manager Application Manager に移行する
- AWS OpsWorks Stacks Detach in Place ツールの使用
- OpsWorks スタックの開始方法
- OpsWorks スタックのベストプラクティス
- スタック
- レイヤー
- インスタンス
- アプリケーション
- クックブックとレシピ
- リソース管理
- タグ
- モニタリング
- セキュリティと権限
- OpsWorks Chef 12 Linux の スタックのサポート
- スタックでの以前の Chef OpsWorks バージョンのサポート
- 他の AWS サービスでの OpsWorks スタックの使用
- スタック OpsWorks CLI の使用
- デバッグとトラブルシューティングのガイド
- OpsWorks スタックエージェント CLI
- OpsWorks スタックデータバッグリファレンス
- OpsWorks エージェントの変更

スタック

スタックはコア OpsWorks スタックコンポーネントです。基本的には、共通の目的を持ち、論理的に一緒に管理する必要がある AWS リソース (Amazon EC2 インスタンス、Amazon RDS データベー

スインスタンスなど) のコンテナです。スタックにより、ユーザーはこれらのリソースをグループで管理することができます。また、インスタンスのオペレーティングシステムや AWS リージョンなどの一部のデフォルトの構成設定もスタックにより定義されます。ユーザーの直接操作から分離する必要のあるスタックコンポーネントがある場合、そのスタックを VPC 内で実行することもできます。

レイヤー

1 つ以上の レイヤー を追加することにより、スタックのコンポーネントを定義します。レイヤーは、アプリケーションへのサービス提供やデータベースサーバーのホスティングなどの特定の目的を果たす一連の Amazon EC2 インスタンスを表します。

パッケージのデフォルト設定を変更してレイヤーをカスタマイズまたは展開したり、Chef レシピを追加して追加のパッケージのインストールなどのタスクを実行したりできます。

すべてのスタックについて、 OpsWorks スタックには以下の AWS のサービスを表すサービスレイヤーが含まれています。

- Amazon Relational Database Service
- エラスティックロードバランシング
- Amazon Elastic Container Service

レイヤーにより、インストールするパッケージ、インストールするパッケージの設定内容、アプリケーションをデプロイする方法などを完全に制御することができます。

レシピおよびライフサイクルイベント

レイヤーによって、Chef レシピに基づいてインスタンスへのパッケージのインストール、アプリケーションのデプロイ、スクリプトの実行などのタスクが処理されます。 OpsWorks スタックの主な機能の 1 つは、セットアップ、設定、デプロイ、デプロイ解除、シャットダウンの一連のライフサイクルイベントです。これにより、各インスタンスで指定された一連のレシピが適切なタイミングで自動的に実行されます。

各レイヤーでは、これらの各ライフサイクルイベントに一連のレシピが割り当てられており、そのイベントとレイヤーのさまざまなタスクの処理に使用されます。たとえば、ウェブサーバーレイヤーに属するインスタンスの起動が終了した後、 OpsWorks Stacks は以下を実行します。

1. レイヤーの Setup レシピを実行します。これにより、ウェブサーバーのインストールや設定などのタスクが実行できます。

2. レイヤーの Deploy レシピを実行します。これにより、リポジトリからインスタンスにレイヤーのアプリケーションがデプロイされ、サービスの再開などの関連タスクが実行されます。
3. スタックのすべてのインスタンスで Configure レシピを実行すると、各インスタンスは新しいインスタンスに適合するように必要に応じて設定を調整できます。

   たとえば、インスタンスでロードバランサーを実行しながら、Configure レシピで新しいインスタンスに含めるロードバランサーの設定を変更できます。

インスタンスが複数のレイヤーに属している場合、 OpsWorks Stacks は各レイヤーのレシピを実行するため、PHP アプリケーションサーバーと MySQL データベースサーバーをサポートするインスタンスを持つことができます。

レシピを実装している場合は、各レシピを適切なレイヤーとイベントに割り当てると、 OpsWorks スタックによって適切なタイミングで自動的に実行されます。また、レシピはいつでも手動で実行することができます。

インスタンス

instance (インスタンス) とは、Amazon EC2 インスタンスなどの 1 つのコンピューティングリソースを意味します。インスタンスは、オペレーティングシステムやサイズなど基本的な設定を定義します。Elastic IP アドレスや Amazon EBS ボリュームなどのその他の設定は、インスタンスのレイヤーによって定義されます。レイヤーのレシピは、パッケージをインストールして設定したりアプリケーションをデプロイしたりするタスクを実行することで設定を完了します。

OpsWorks スタックを使用してインスタンスを作成し、レイヤーに追加できます。インスタンスを起動すると、 OpsWorks スタックはインスタンスとそのレイヤーで指定された設定を使用して Amazon EC2 インスタンスを起動します。Amazon EC2 インスタンスの起動後、 OpsWorks スタックはインスタンスとサービス間の通信を処理するエージェントをインストールし、ライフサイクルイベントに応じて適切なレシピを実行します。

OpsWorks スタックでは、次のインスタンスタイプがサポートされています。インスタンスタイプは、起動と停止の方法によって特徴付けられます。

- 24/7 インスタンスは、ユーザーが手動で起動し、ユーザーが停止するまで実行されます。
- 時間ベースのインスタンスは、指定された日次および週次のスケジュールで OpsWorks スタックによって実行されます。

このインスタンスにより、予想される使用パターンに対応するようにスタックのインスタンス数を自動的に調整することが可能となります。

- 負荷ベースのインスタンスは、CPU OpsWorks 使用率などの指定された負荷メトリクスに基づいて、 スタックによって自動的に起動および停止します。

  このインスタンスにより、スタックのインスタンス数を着信トラフィックの変動に対応するように自動的に調整することが可能となります。負荷ベースのインスタンスは Linux ベースのスタックにのみ使用できます。

OpsWorks スタックはインスタンスの自動ヒーリングをサポートします。エージェントがサービスとの通信を停止すると、 OpsWorks Stacks は自動的にインスタンスを停止して再起動します。

Linux ベースのコンピューティングリソースを スタックの外部で作成された OpsWorks スタックに組み込むこともできます。

- コンソール、CLI、または API を使用して直接作成した Amazon EC2 インスタンス。
- 仮想マシンで実行しているインスタンスを含め、独自のハードウェアで実行している On-premises (オンプレミス) インスタンス。

これらのインスタンスのいずれかを登録すると、そのインスタンスは OpsWorks スタックインスタンスになり、 スタックで OpsWorks 作成するインスタンスとほぼ同じ方法で管理できます。

アプリケーション

Amazon S3 バケットなどのリポジトリに、アプリケーションおよび関連ファイルを保存します。各アプリケーションは、アプリケーションタイプを指定した App として表されます。App には、リポジトリからインスタンスにアプリケーションをデプロイするために必要な情報 (リポジトリ URL、パスワードなど) も指定します。アプリケーションをデプロイすると、 OpsWorks スタックはデプロイイベントをトリガーし、スタックのインスタンスでデプロイレシピを実行します。

以下の方法でアプリケーションをデプロイすることができます。

- 自動 — インスタンスを起動すると、 OpsWorks スタックはインスタンスの Deploy レシピを自動的に実行します。
- 手動 - 新しいアプリケーションを準備する場合または既存のアプリケーションを更新する必要がある場合、ユーザーは手動でオンラインインスタンスの Deploy レシピを実行できます。

通常 OpsWorks 、スタックはスタック全体で Deploy レシピを実行するため、他のレイヤーのインスタンスは設定を適切に変更できます。ただし、すべてのアプリケーションサーバーのインスタンスに新しいアプリケーションをデプロイする前に、それをテストする必要がある場合などには、デプロイをインスタンスのサブセットに制限することができます。

スタックのカスタマイズ

OpsWorks スタックでは、特定の要件に合わせてレイヤーをカスタマイズするためのさまざまな方法が提供されています。

- OpsWorks スタックがパッケージを設定する方法を変更するには、さまざまな設定を表す属性を上書きするか、設定ファイルの作成に使用されるテンプレートを上書きします。
- スクリプトの実行や標準外のパッケージのインストールおよび設定などのタスクを実行する独自のレシピを指定することによって、既存のレイヤーを拡張することができます。

すべてのスタックには、レシピの最小限のセットで始める 1 つ以上のレイヤーを含めることができます。パッケージのインストール、アプリケーションのデプロイなどのタスクを処理するレシピを実装することで、レイヤーに機能を追加します。カスタムレシピおよび関連するファイルを 1 つ以上の cookbooks (クックブック) にまとめ、そのクックブックを Amazon S3 や Git などのリポジトリに保管します。

レシピは手動で実行できますが、 スタックでは、5 OpsWorks つのライフサイクルイベントのセットをサポートすることでプロセスを自動化することもできます。

- Setup イベントは、新しいインスタンスが正常にブートした後に発生します。
- Configure イベントは、インスタンスがオンライン状態に移行したときとオンライン状態から移行したときに、スタックのすべてのインスタンスで発生します。
- Deploy イベントは、ユーザーがアプリケーションをデプロイするときに発生します。
- Undeploy イベントは、ユーザーがアプリケーションを削除するときに発生します。
- Shutdown イベントは、ユーザーがインスタンスを停止するときに発生します。

各レイヤーで、各イベントに任意の数のレシピを割り当てることができます。レイヤーのインスタンスでライフサイクルイベントが発生すると、 OpsWorks Stacks は関連するレシピを実行します。たとえば、アプリサーバーインスタンスで Deploy イベントが発生すると、 OpsWorks Stacks は Layer の Deploy レシピを実行してアプリをダウンロードしたり、関連するタスクを実行したりできます。

リソース管理

Elastic IP アドレスなどの他の AWS リソースをスタックに組み込むことができます。 OpsWorks スタックコンソールまたは API を使用して、リソースをスタックに登録し、登録されたリソースをインスタンスにアタッチまたはデタッチし、リソースをあるインスタンスから別のインスタンスに移動できます。

セキュリティと権限

AWS OpsWorks スタックは AWS Identity and Access Management (IAM) OpsWorks と統合され、ユーザーが スタックにアクセスする方法を堅牢な方法で制御できます。これには以下が含まれます。

- 個々のユーザーがレイヤーやインスタンスなどのスタックリソースを作成できるかどうか、SSH または RDP を使用してスタックの Amazon EC2 インスタンスに接続できるかどうかなど、個々のユーザーが各スタックを操作する方法。
- OpsWorks スタックがユーザーに代わって Amazon EC2 インスタンスなどの AWS リソースとやり取りする方法。
- スタックインスタンスで実行されるアプリケーションが Amazon OpsWorks S3 バケットなどの AWS リソースにアクセスする方法。 Amazon S3
- ユーザーの SSH パブリックキーと RDP パスワードを管理する方法、およびインスタンスに接続する方法。

モニタリングとロギング

OpsWorks スタックには、スタックのモニタリングや、スタックやレシピに関する問題のトラブルシューティングに役立ついくつかの機能があります。すべてのスタック用:

- OpsWorks スタックは、Linux スタックのカスタム CloudWatch メトリクスのセットを提供します。これらは、モニタリングページで便宜上要約されています。

  OpsWorks スタックは、Windows スタックの標準の CloudWatch メトリクスをサポートします。CloudWatch コンソールでそれらをモニタリングできます。
- CloudTrail ログ。AWS アカウントの OpsWorks スタックによって、または スタックに代わって行われた API コールを記録します。
- イベントログ。スタックのすべてのイベントをリスト表示します。

- Chef ログ。実行されたレシピや発生したエラーなど、各インスタンスで各ライフサイクルイベントに対して起こったことの詳細を表示します。

Linux ベースのスタックには、スタックのインスタンスに関する詳細モニタリングデータの収集と表示に使用できる Ganglia マスターレイヤーもあります。

CLI、SDK、 CloudFormation テンプレート

コンソールに加えて、 OpsWorks スタックは、任意のオペレーションの実行に使用できる複数の言語のコマンドラインインターフェイス (CLI) と SDKs もサポートしています。以下の機能を考慮してください。

- OpsWorks スタック CLI は AWS CLI の一部であり、コマンドラインから任意のオペレーションを実行するために使用できます。

  AWS CLI は、複数の AWS サービスをサポートし、Windows、Linux、または OS X システムにインストールできます。
- OpsWorks スタックは AWS Tools for Windows PowerShell に含まれており、Windows PowerShell コマンドラインから任意のオペレーションを実行するために使用できます。
- OpsWorks スタック SDK は AWS SDKs に含まれており、Java、JavaScript (ブラウザベースおよび Node.js)、.NET、PHP、Python (boto)、または Ruby で実装されたアプリケーションで使用できます。

CloudFormation テンプレートを使用してスタックをプロビジョニングすることもできます。「AWS OpsWorks のスニペット」に記載されたいくつかの例を参照してください。

AWS OpsWorks Stacks サポート終了FAQs

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。

トピック

- このサポート終了により、既存のお客様にはどのような影響がありますか?
- 新規顧客 AWS OpsWorks Stacks を受け入れていますか?
- 既存のスタックはどこに移行すればよいですか?
- End of Life 後も既存の Amazon EC2 インスタンスを維持するにはどうすればよいですか?
- End of Life はすべての AWS リージョン に同時に影響しますか?
- どのレベルのテクニカルサポートを利用できます AWS OpsWorks Stacksか?
- の新機能リリースはありますか AWS OpsWorks Stacks?

このサポート終了により、既存のお客様にはどのような影響がありますか?

既存のお客様は、 AWS OpsWorks Stacksのサポート終了日である 2024 年 5 月 26 日まで影響を受けません。2024 年 5 月 26 日以降は、OpsWorks コンソール、API、CLI、 および CloudFormation のリソースを使用できなくなります。

新規顧客 AWS OpsWorks Stacks を受け入れていますか?

いいえ。 AWS OpsWorks Stacks は新規顧客を受け入れなくなり、現時点では既存の顧客のみが新しいスタックを作成できるようになりました。

既存のスタックはどこに移行すればよいですか?

AWS OpsWorks Stacks 以下の機能を活用できる AWS Systems Manager にワークロードを移行することをお勧めします。

- Modern Chef のバージョン
- SSM Agent
- アプリケーション ロード バランサー
- Auto Scaling グループによるスケーリング機能の強化
- EC2 起動テンプレートを使用して希望するホスト特性を定義可能
- より新しいインスタンスタイプ
- 新しい EBS ボリュームタイプ

Systems Manager の詳細情報については、AWS Systems Manager ユーザーガイドを参照してください。への移行の詳細については AWS Systems Manager、「」を参照してください。 AWS OpsWorks Stacks アプリケーションを AWS Systems Manager Application Manager に移行する

End of Life 後も既存の Amazon EC2 インスタンスを維持するにはどうすればよいですか?

有効期限に達すると、Amazon EC2 インスタンスはアカウントに残りますが、OpsWorks スタックサービスを使用してインスタンスを制御および管理できなくなります。

AWS OpsWorks Stacks Detach in Place ツールを使用して、OpsWorks スタックサービスから OpsWorks インスタンスをデタッチできます。デタッチ後、Amazon EC2 AWS Systems Manager、または任意の EC2 互換アプローチを使用してインスタンスを設定および管理できます。詳細については、「AWS OpsWorks Stacks Detach in Place ツールの使用」を参照してください。

End of Life はすべての AWS リージョン に同時に影響しますか?

はい。OpsWorks コンソール、API、CLI、および CloudFormation リソースは、2024 年 5 月 26 日にすべての で AWS リージョン 同時に廃止されます。 AWS OpsWorks Stacks が利用可能な AWS リージョン のリストについては、AWS 「リージョンサービスリスト」を参照してください。

どのレベルのテクニカルサポートを利用できます AWS OpsWorks Stacks か?

AWS は、サポート終了日まで、お客様が現在持ってい AWS OpsWorks Stacks るのと同じレベルのサポートを引き続き提供します。ご質問やご不明点がございましたら、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

の新機能リリースはありますか AWS OpsWorks Stacks?

いいえ。サービスのサポート終了が近づいているため、新特徴量のリリースは行いません。しかし、サポート終了日までは引き続きセキュリティの改善を行い、Amazon EC2 インスタンスを予定どおりに管理します。

AWS OpsWorks Stacks アプリケーションを AWS Systems Manager Application Manager に移行する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。

移行スクリプトを使用して、 AWS OpsWorks Stacks アプリケーションを の一機能である Application Manager AWS Systems Managerに移行できるようになりました。スタックアプリケーションを Systems Manager Application Manager に移行すると AWS OpsWorks Stacks、Graviton などの新しい Amazon EC2 インスタンスタイプ、gp3 などの新しい Amazon Elastic Block Store (EBS) ボリューム、新しいオペレーティングシステム、Auto Scaling グループとの統合、アプリケーションロードバランサーなど、 で利用できない AWS 機能を使用できます。

このリリースでは、 Systems Manager Application Manager から利用できる新しいインスタンスタブを使用して、移行したインスタンスの操作を監視および実行できるようになりました。インスタンスタブを使用して、複数の AWS インスタンスを 1 か所で表示できます。このタブでは、インスタンスの状態に関する情報を表示したり、問題をトラブルシューティングしたりできます。「インスタンス」タブの操作について詳しくは、「AWS Systems Manager ユーザーガイド」の「アプリケーションインスタンスの操作」を参照してください。

トピック

- スクリプトの仕組み
- 前提条件
- 制限事項
- 開始方法
- よくある質問
- トラブルシューティング

スクリプトの仕組み

OpsWorks には、CloudFormation テンプレートを使用して AWS OpsWorks Stacks アプリケーションを Systems Manager Application Manager に移行するために実行できるスクリプトが用意されています。スクリプトは既存の OpsWorks Layer に関する情報を取得し、スクリプトの `--provision-application` パラメーターの値に応じて、アプリケーションのクローンをプロビジョニングするか、 CloudFormationを使用して変更できるスターター CloudFormation テンプレートを提供します。

前提条件

- AWS CLI がインストールされ、設定されていることを確認します。のインストールの詳細については AWS CLI、「 AWS Command Line Interface ユーザーガイド」の「 の最新バージョンのインストールまたは更新 AWS CLI」を参照してください。

  > **Note**
  >
  > を設定しない場合は AWS CLI、 を使用してコマンドを実行することもできます AWS CloudShell。CloudShell の操作について詳しくは、「AWS CloudShell ユーザーガイド」での AWS CloudShellとの「操作」 を参照してください。

- Python バージョニング 3.6 以降がインストールされている、または Amazon マシンイメージ (AMI) が付属していることを確認してください。
- ご使用のオペレーティングシステムがサポートされていることを確認してください。移行スクリプトは、次のオペレーティングシステムでダウンロードして実行できます。
  - Amazon Linux および Amazon Linux 2
  - Ubuntu 18.04 LTS, 20.04 LTS, 22.04 LTS
  - Red Hat Enterprise Linux 8
  - Windows Server 2019、Windows 10 Enterprise

  > **Note**
  >
  > Windows Server 2022 はサポートされていません。

制限事項

新しい OpsWorks アーキテクチャは、 のアーキテクチャとは異なります AWS OpsWorks Stacks。このセクションでは、このアーキテクチャの既知の制限について説明します。

以下は新しい OpsWorks アーキテクチャではサポートされていません。

- Windows と CentOS インスタンスでの Chef レシピの実行
- 組み込み Chef 11 レイヤーと Berkshelf
- Chef の属性とデータバッグ
- オンプレミスインスタンス
- EC2 からインポートされたインスタンス
- ユーザー指定のオペレーティングシステムパッケージリストのインストールはサポートされていません。
- アプリはサポートも移行もされていない

以下は制限付きでサポートされています。

- 移行スクリプトは EBS ボリューム情報を複製しますが、ボリュームに含まれるマウントポイントと実際のデータは除外します。
- 時間ベースおよび負荷ベースのスケールされたインスタンスは移行されますが、これらのインスタンスに関連するスケーリングルールは移行されません。Auto Scaling グループを変更して同様の結果を得ることができます。
- OpsWorks コンソールのスタックの 権限 ページで定義されている IAM エンティティは作成も生成もされません。
- 移行スクリプトは、 Systems Manager でシングルレイヤーアプリケーションをプロビジョニングすることしかできません。たとえば、同じスタック内の二つのレイヤーに対してスクリプトを 2 回実行すると、 Systems Manager に二つの異なるアプリケーションが表示されます。

開始方法

移行スクリプト `stack_exporter.py` は、ローカルまたは EC2 インスタンスで実行できる Python スクリプトです。スクリプトを実行する前に、すべての前提条件が満たされていることを確認してください。前提条件の詳細については、「前提条件」を参照してください。

以下のセクションの手順では、 OpsWorks スタックを Systems Manager Application Manager に移行する方法を示しています。

トピック

- ステップ 1: スクリプトを実行する環境の準備
- ステップ 2: 移行スクリプトのダウンロード
- ステップ 3: スクリプトを実行する環境セットアップ
- ステップ 4: スクリプトを実行する
- ステップ 5: CloudFormation のスタックのプロビジョン
- ステップ 6: プロビジョニングされたリソースの確認
- ステップ 7: インスタンスを起動する
- ステップ 8: インスタンスを確認する
- ステップ 9: Systems Manager アプリケーションマネージャーを使用してインスタンスのオペレーションを監視および実行する

ステップ 1: スクリプトを実行する環境の準備

オペレーティングシステムに適したコマンドを実行して、環境を準備します。

トピック

- Amazon Linux 2
- Amazon Linux
- Ubuntu 18.04, 20.04, 22.04
- Red Hat Enterprise Linux 8
- Windows Server 2019、Windows 10 Enterprise

Amazon Linux 2

```
sudo su
python3 -m pip install pipenv
PATH="$PATH:/usr/local/bin"
yum update
yum install git
```

Amazon Linux

```
sudo su
PATH="$PATH:/usr/local/bin"
export LC_ALL=en_US.utf-8
export LANG=en_US.utf-8
yum update
yum list | grep python3
yum install python36 // Any python version
yum install git
```

Python バージョン 3.6 の場合も実行：

```
python3 -m pip install pipenv==2022.4.8
```

Python バージョン 3.7 以降の場合も実行：

```
python3 -m pip install pipenv
```

Ubuntu 18.04, 20.04, 22.04

```
sudo su
export PATH="${HOME}/.local/bin:$PATH"
apt-get update
apt install python3-pip
apt-get install git // if git is not installed
python3 -m pip install --user pipenv==2022.4.8
```

Red Hat Enterprise Linux 8

```
sudo su
sudo dnf install python3
PATH="$PATH:/usr/local/bin"
yum update
yum install git
python3 -m pip install pipenv==2022.4.8
```

Windows Server 2019、Windows 10 Enterprise

> **Note**
>
> Windows Server 2019 の場合は、Python バージョン 3.6.1 以降をインストールします。

```
pip install pipenv
```

Git がまだインストールされていない場合は、Gitをダウンロードしてインストールします。

Git をクックブックソースとして使用する場合は、 Windows でスクリプトを実行する前に Git サーバーを known_hosts ファイルに追加してください。PowerShell を使用して次の関数を作成できます。

```
function add_to_known_hosts($server){
    $new_host=$(ssh-keyscan $server 2> $null)
    $existing_hosts=''
    if (!(test-path "$env:userprofile\.ssh")) {
        md "$env:userprofile\.ssh"
    }
    if ((test-path "$env:userprofile\.ssh\known_hosts")) {
        $existing_hosts=Get-Content "$env:userprofile\.ssh\known_hosts"
    }
    $host_added=0
    foreach ($line in $new_host) {
        if (!($existing_hosts -contains $line)) {
            Add-Content -Path "$env:userprofile\.ssh\known_hosts" -Value $line
            $host_added=1
    }
   }
   if ($host_added) {
       echo "$server has been added to known_hosts."
   } else {
       echo "$server already exists in known_hosts."
   }
}
```

その後、この関数を実行するときに、 Git サーバー (github.com、 git-codecommit など *repository_region*.amazonaws.com) を指定できます。

```
add_to_known_hosts "myGitServer"
```

ステップ 2: 移行スクリプトのダウンロード

次のコマンドを実行して、移行スクリプトとすべての関連ファイルを含む ZIP ファイルをダウンロードします。

```
aws s3api get-object \
    --bucket export-opsworks-stacks-bucket-prod-us-east-1 \
    --key export_opsworks_stacks_script.zip export_opsworks_stacks_script.zip
```

Linux を使用している場合は、以下のコマンドを使用して unzip ユーティリティをインストールします。

```
sudo apt-get install unzip
sudo yum install unzip
```

オペレーティング システムに適したコマンドを使用してファイルを解凍します。

Linux の場合は、次のコマンドを使用します。

```
unzip export_opsworks_stacks_script.zip
```

Windows の場合は、 PowerShell `Expand-Archive` のコマンドを使用してください。

```
Expand-Archive -LiteralPath PathToZipFile -DestinationPath PathToDestination
```

ファイルを解凍すると、次のディレクトリとファイルが使用可能になります。

- README.md
- LICENSE
- NOTICE
- requirements.txt
- テンプレート/
  - OpsWorksCFNTemplate.yaml
  - MountEBSVolumes.yaml
- opsworks/

- cloudformation/
- インスタンス _tab/
- cfn_stack_deployer.py
- s3.py
- stack_exporter_context.py
- stack_exporter.py

ステップ 3: スクリプトを実行する環境セットアップ

以下のコマンドを使用して、スクリプトを実行する環境を設定します。

```
pipenv install -r requirements.txt
pipenv shell
```

> **Note**
>
> 現在、このスクリプトは Application Manager で単一レイヤーのアプリケーションのみをプロビジョニングできます。たとえば、同じスタック内の二つのレイヤーに対してスクリプトを 2 回実行すると、そのスクリプトによって Application Manager に二つの異なるアプリケーションが作成されます。

環境を設定したら、スクリプトパラメータを確認します。`python3 stack_exporter.py --help` コマンドを実行すると、移行スクリプトで使用可能なオプションを確認できます。

パラメータ	説明	必須	タイプ	デフォルトの 値
`--layer-id`	この OpsWorks レイヤー ID の CloudFormation テンプレートをエクスポートします。	はい	string	
`--region`	OpsWorks スタックの AWS リージョン。OpsWorks スタック Region と API エンドポイント Region が異なる場合は、スタック Region を使用してください。	不可	string	us–east–1

パラメータ	説明	必須	タイプ	デフォルトの 値
	これは、OpsWorks スタックの他のリソース部分 (EC2 インスタンスやサブネットなど) と同じ Region です。			
`--provision-application`	デフォルトでは、スクリプトは CloudFormation テンプレートによってエクスポートされたアプリケーションをプロビジョニングします。CloudFormation テンプレートのプロビジョニングをスキップするには、このパラメータを FALSE の値でスクリプトに渡します。	不可	ブール値	TRUE

パラメータ	説明	必須	タイプ	デフォルトの 値
`--launch-template`	このパラメータは、既存の起動テンプレートを使用するか、新しい起動テンプレートを作成するかを定義します。推奨インスタンスプロパティを使用するか、オンラインインスタンスと一致するインスタンスプロパティを使用する新しい起動テンプレートを作成できます。 有効な値を次に示します。 • `RECOMMENDED` - OpsWorks スタックの OS 用の最新の AMI のインスタンス特性と c5.large インスタンスサイズを使用します。 • `MATCH_LAST_INSTANCE` - 利用可能な最新のオンラインインスタンス特性を使用します。 • *`LaunchTemplateID`* / [*`LaunchTemplateVersion]`* - 既存の起動テンプレートを使用するには 必要に応じて、テンプレートバージョンを指定できます。テンプレートバージョンを指定しない場合、スクリプトはデフォルトバージョンを使用します。	不可	string	`RECOMMENDED`

パラメータ	説明	必須	タイプ	デフォルトの 値
--system-updates	カーネルとパッケージの更新をインスタンスの起動時に実行するかどうかを定義します。 有効な値を次に示します。 • ALL_UPDATES - インスタンスの起動時にカーネルとパッケージのシステム更新を実行します。 • NO_UPDATES - インスタンス起動時にシステム更新を実行しません。 • MATCH_LAYER_SETTINGS - OpsWorks Layer またはインスタンスの InstallUpdatesOnBoot プロパティを使用して、システムアップデートをインストールするかどうかを決定します。	不可	string	ALL_UPDATES
--http-username	カスタムクックブックを含む HTTP アーカイブへの認証に使用されるユーザー名を格納する Systems Manager SecureString パラメーターの名前です。	不可	string	
--http-password	カスタムクックブックを含む HTTP アーカイブへの認証に使用されるパスワードを格納する Systems Manager SecureString パラメータの名前です。	不可	string	

パラメータ	説明	必須	タイプ	デフォルトの 値
`--repo-private-key`	カスタムクックブックを含むリポジトリへの認証に使用される SSH キーを格納する Systems Manager `SecureString` パラメータの名前です。リポジトリが GitHub 上にある場合は、新しい `Ed25519` SSH キーを生成する必要があります。新しい `Ed25519` SSH キーを生成しないと、 GitHub リポジトリへの接続は失敗します。	不可	string	
`--lb-type`	既存のロードバランサーを移行する際に作成するロードバランサーのタイプです。 有効な値を次に示します。 • `ALB` (Application load balancer) • `Classis` (Classic load balancer) • `None` (ロードバランサーを作成したくない場合)	不可	string	`ALB`

パラメータ	説明	必須	タイプ	デフォルトの 値
`--lb-access-logs-path`	既存の S3 バケットへのパスと、ロードバランサーのアクセスログを保存するためのプレフィックスです。S3 バケットとロードバランサーは同じリージョンに存在する必要があります。値を指定せず、`--lb-type` パラメータ値が None に設定されている場合、スクリプトは新しい S3 バケットとプレフィックスを作成します。このプレフィックスには適切なバケットポリシーがあることを確認してください。	不可	string	
`--enable-instance-protection`	TRUE に設定すると、スクリプトは Auto Scaling グループのカスタム終了ポリシー (Lambda 関数) を作成します。`protected_instance` タグ付きの EC2 インスタンスはスケールインイベントから保護されます。スケールインイベントから保護したい各 EC2 インスタンスに `protected_instance` タグを追加します。	不可	ブール値	FALSE
`--command-logs-bucket`	AWS ApplyChefRecipe と MountEBSVolumes ログを保存する既存の S3 バケットの名前です。値を指定しない場合、スクリプトによって新しい S3 バケットが作成されます。	不可	string	`aws-opsworks-application-manager-logs-`*account-id*

パラメータ	説明	必須	タイプ	デフォルトの 値
`--custom-json-bucket`	カスタム JSON を保存する既存の S3 バケットの名前です。値を指定しない場合、スクリプトによって新しい S3 バケットが作成されます。	不可	string	`aws-apply-chef-application-manager-transition-data-`*`account-id`

注意:

- プライベート GitHub リポジトリを使用する場合は、SSH 用の新しい Ed25519 ホストキーを作成する必要があります。これは、GitHub が SSH でサポートされるキーを変更し、暗号化されていない Git プロトコルを削除したためです。Ed25519 ホストキーの詳細については、GitHub のブログ投稿「GitHub の Git プロトコルセキュリティの改善」を参照してください。新しい Ed25519 ホストキーを生成したら、SSH キー用の Systems Manager SecureString パラメータを作成し、その SecureString パラメータ名を `--repo-private-key` パラメータの値として使用します。Systems Manager SecureStringパラメータの作成方法の詳細については、AWS Systems Manager 「ユーザーガイド」の「SecureString パラメータ (AWS CLI) の作成)」または「Systems Manager パラメータ(コンソール)を作成する」を参照してください。
- `--http-username`、`--http-password`および`--repo-private-key`パラメータは、Systems Manager SecureStringパラメータの名前を指します。移行スクリプトは、`AWS-ApplyChefRecipes` ドキュメントを実行するときにこれらのパラメータを使用します。
- `--http-username` パラメータでは、`--http-password` パラメータの値も指定する必要があります。
- `--http-password` パラメータでは、`--http-username` パラメータの値も指定する必要があります。
- `--http-password` と `--repo-private-key` の両方に値を設定しないでください。Systems Manager SecureString パラメータ名または SSH キー (`--repo-private-key`)、またはリポジトリユーザー名 (`--http-username`) とパスワード (`--http-password`) のいずれかを指定します。

ステップ 4: スクリプトを実行する

`python3 stack_exporter.py` を実行するときは、アプリケーションをプロビジョニングするか、`--provision-application` パラメータの値を `FALSE` に設定してスターターテンプレートを作成できます。

例 1: Systems Manager アプリケーションマネージャアプリケーションのプロビジョニング

次のコマンドは、既存の OpsWorks Layer に関する情報を取得し、新しい OpsWorks アーキテクチャを使用してアプリケーションをプロビジョニングします。これにより、スタックに設定された Chef バージョンと同様の結果が得られます。このスクリプトは、CloudFormation を使用して Auto Scaling グループなどの必要なすべてのリソースをプロビジョニングし、アプリケーションを Systems Manager Application Manager に登録します。

######### と *#### ID* を OpsWorks スタックとレイヤーの値に置き換えます。

```
python3 stack_exporter.py \
     --layer-id layer-id \
     --region stack-region
```

例 2: テンプレートの生成

次のコマンドは、既存の OpsWorks レイヤーに関する情報を取得し、CloudFormation テンプレートを生成します。テンプレートをプロビジョニングすると、 Chef 14 を使用した場合と同様の結果が得られます。この例では、 `--provision-application` パラメータが `FALSE` に設定されているため、リソースはプロビジョニングされません。

######### と *#### ID* を OpsWorks スタックとレイヤーの値に置き換えます。

```
python3 stack_exporter.py \
    --layer-id layer-id \
    --region stack-region \
    --provision-application FALSE
```

コマンドを実行したら、Systems Manager の Application Manager テンプレートライブラリ内のテンプレートを確認したり、テンプレートをプロビジョニングしたりできます。テンプレートライブラリの表示について詳しくは、「AWS Systems Manager ユーザーガイド」の「テンプレートライブラリの操作」を参照してください。

ステップ 5: CloudFormation のスタックのプロビジョン

> **Note**
>
> このステップを完了する必要があるのは、スクリプトの `--provision-application` パラメータを `FALSE` に設定する場合だけです。

`--provision-application` パラメータを `FALSE` の値で指定すると、スクリプト出力に CloudFormation テンプレートの名前と URL が表示されます。このテンプレートは、既存の OpsWorks スタックとレイヤーの代替案です。

テンプレートは、アプリケーション・マネージャーのテンプレート・ライブラリー (推奨) を使用するか、CloudFormation を使用してプロビジョニングできます。テンプレートライブラリの操作について詳しくは、「AWS Systems Manager ユーザーガイド」の「テンプレートライブラリの操作」を参照してください。

ステップ 6: プロビジョニングされたリソースの確認

これで、プロビジョニングされたリソースを確認する準備ができました。

1. CloudFormation コンソールを使用して、プロビジョニングされたスタックのリソースを確認します。

   a. https://console.aws.amazon.com/cloudformation で CloudFormation コンソールを開き、 スタックを選択します。

   b. 「Stacks」ページでスタックを選択し、次に「Resources」タブを選択します。

   c. 「Resources」 タブで、スタックにリストされているリソースを確認します。リソースのリストには EC2 Auto Scaling グループが含まれており、Auto Scaling コンソールで確認できます AWS CLI。

2. Systems Manager Application Manager を使用して、アプリケーションのリソースを確認します。

   a. Systems Manager コンソール (https://console.aws.amazon.com/systems-manager/) を開きます。

   b. ナビゲーションペインで、[Application Manager] を選択します。

   c. [アプリケーション] セクションで、[カスタムアプリケーション] を選択します。Application Manager の [概要] タブが開きます。

d. [Resources] タブを選択します。「Resources」タブには、 OpsWorks スタックとレイヤーに移行されたすべてのリソースが表示されます。アプリケーション名には OpsWorks スタックの名前が含まれており、*app-stack-name-suffix* という形式になっています。*######* はスタック ID の最初の 6 文字を表します。Application Manager でのリソースの表示について詳しくは、「AWS Systems Manager ユーザーガイド」の「アプリケーションリソースの表示」を参照してください。

ステップ 7: インスタンスを起動する

インスタンスをプロビジョニングしたら、インスタンスをテストする準備が整います。この時点では、実行中のインスタンスはありません。

インスタンスをオンラインにするには、Auto Scaling グループの`Min`、`Max`、`Desired capacity`の値を、アプリケーションに適した数値に調整します。最初は、これらの値を 1 に設定して 1 つのインスタンスをオンラインにし、そのインスタンスがカスタム Chef レシピの実行を含め、期待されるすべてのアクションを実行することを確認するとよいでしょう。

ステップ 8: インスタンスを確認する

インスタンスを起動したら、期待どおりに動作することを確認します。

1. `--command-logs-bucket`スクリプトのパラメータで指定された S3 バケットにある Chef `startup`と`terminate` ログを確認します。デフォルトでは、ログはという名前のバケットに保存されます`aws-opsworks-application-manager-logs-`*`account-id`*。

   a. にサインイン AWS マネジメントコンソール し、https://console.aws.amazon.com/s3/ で Amazon S3 コンソールを開きます。

   b. ログを含むバケットを選択します。

   c. `ApplyChefRecipes`プレフィックスに移動してログを表示します。

2. Application Load Balancer の接続と状態を確認します。

   ロードバランサーのアクセスログを表示するには、次のステップに従います。ロードバランサーのアクセスログを保存する S3 バケットは、`--lb-access-logs-path`スクリプトのパラメータを使用して指定できます。

   a. にサインイン AWS マネジメントコンソール し、https://console.aws.amazon.com/s3/ で Amazon S3 コンソールを開きます。

   b. S3 バケットを選択し、ログを含むプレフィックスに移動します。

3. インスタンスが Auto Scaling とApplication Load Balancer のすべてのヘルスチェック (設定している場合) に合格することを確認します。

   Auto Scaling のヘルスに関する情報は、新しい [インスタンス] タブで確認できます。

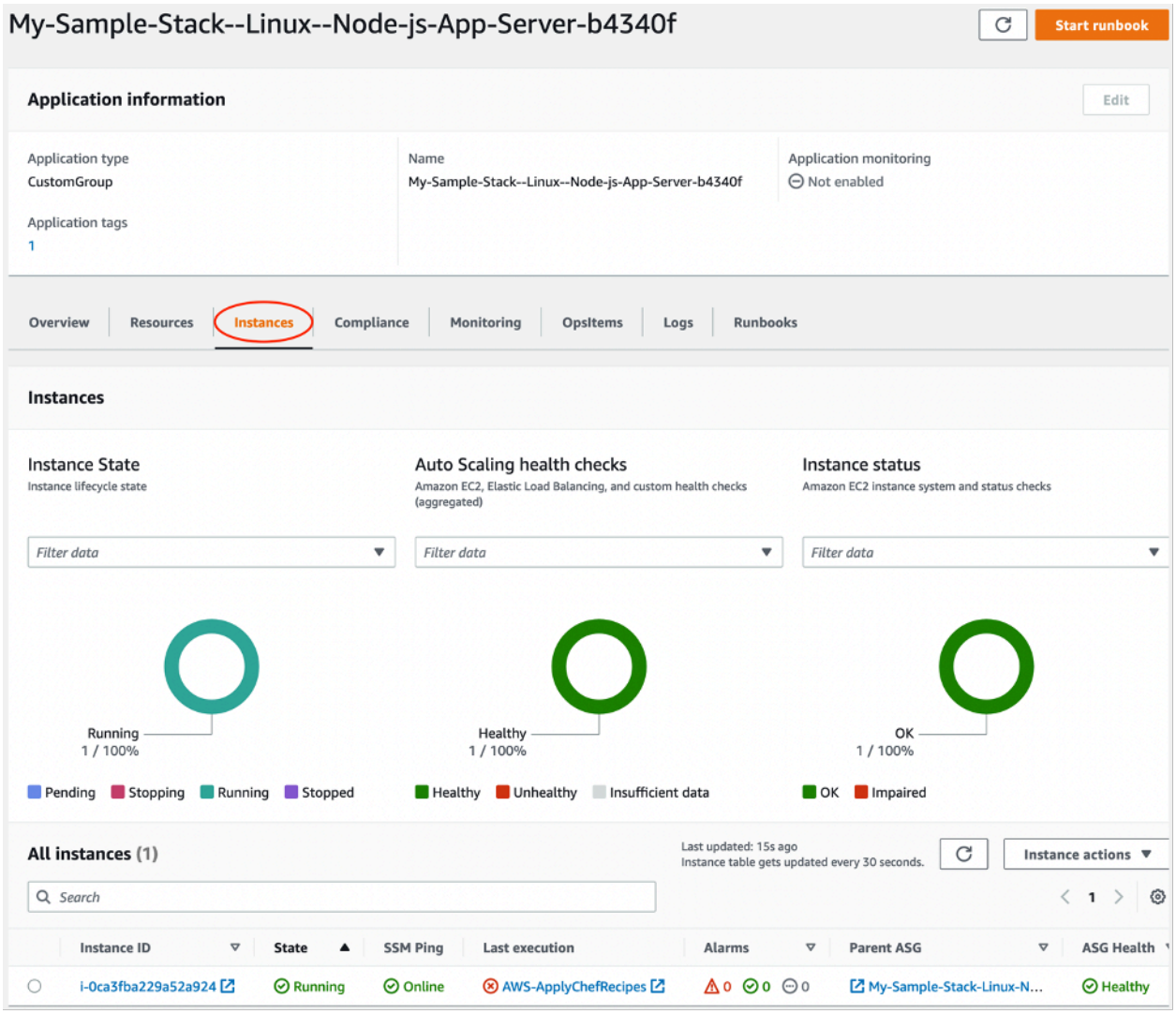
   a. Systems Manager コンソール (https://console.aws.amazon.com/systems-manager/) を開きます。
   b. ナビゲーションペインで、[Application Manager] を選択します。
   c. [アプリケーション] セクションで、[カスタムアプリケーション] を選択します。
   d. リストからアプリケーションを選択します。Application Manager の [概要] タブが開きます。
   e. [インスタンス] タブを選択すると、Auto Scaling のヘルスに関する情報が表示されます。

Chef レシピが正常に実行されたことを確認したら、Auto Scaling グループの容量を減らしてインスタンスを終了できます。カスタム終了レシピがある場合は、そのレシピが期待どおりに動作することを確認してください。

ステップ 9: Systems Manager アプリケーションマネージャーを使用してインスタンスのオペレーションを監視および実行する

Application Manager ページの新しい [インスタンス] タブを使用して、インスタンスのオペレーションを監視および実行できるようになりました。「インスタンス」タブの操作について詳しくは、「AWS Systems Manager ユーザーガイド」の「アプリケーションインスタンスの操作」を参照してください。

「インスタンス」タブを使用すると、複数の AWS インスタンスを 1 か所に表示できます。このタブでは、インスタンスの状態に関する情報を表示したり、問題をトラブルシューティングしたりできます。



Instances タブを表示するには、次の手順を実行します。

1. Systems Manager コンソール (https://console.aws.amazon.com/systems-manager/) を開きます。
2. ナビゲーションペインで、[Application Manager] を選択します。
3. [アプリケーション] セクションで、[カスタムアプリケーション] を選択します。
4. リストからアプリケーションを選択します。Application Manager の [概要] タブが開きます。
5. 「Instances」タブを選択すると、インスタンスのステータスと EC2 の状態に関する情報が表示されます。

よくある質問

以下の FAQ では、よく寄せられる質問に対する回答を示します。

トピック

- どの AWS OpsWorks Stacks バージョンを移行できますか?
- 移行したインスタンスではどの Chef バージョンを使用できますか?
- どのリポジトリタイプを移行できますか?
- プライベート Git リポジトリを引き続き使用できますか?
- インスタンスへのアクセスにはどの SSH キーを使用できますか?
- インスタンスが自動的にスケールイン/スケールアウトされるのはなぜですか?
- 自動スケーリングをオフにすることはできますか?
- 起動した EC2 インスタンスでカーネルとパッケージの更新を実行できますか?
- インスタンスの EBS ボリュームにデータが含まれていないのはなぜですか?
- 起動テンプレートに記載されている EBS ボリュームがマウントされないのはなぜですか?
- Chef レシピとマウント EBS ボリュームのログはどこにありますか?
- 移行スクリプトのデバッグログはどこから入手できますか?
- 移行スクリプトは CloudFormation テンプレートのバージョニングをサポートしていますか?
- 複数の Layer を移行できますか?
- SecureString パラメータを作成するにはどうしたらよいですか?
- 新しい Auto Scaling グループのインスタンスを終了イベントから保護する方法を教えてください。
- 移行スクリプトではどのようなロードバランサーを利用できますか?
- カスタムクックブック設定レシピは移行されますか?
- 新しく作成したインスタンスで、デプロイ、アンデプロイのレシピを実行できますか?
- Auto Scaling グループが対象とするサブネットを変更できますか?

どの AWS OpsWorks Stacks バージョンを移行できますか?

Chef 11.10 と Chef 12、Amazon Linux、 Amazon Linux 2、Ubuntu、および Red Hat Enterprise Linux 7 のスタックのみを移行できます。

移行したインスタンスではどの Chef バージョンを使用できますか?

移行したインスタンスは Chef バージョン 11 ~ 14 を使用できます。

> **Note**
>
> Windows のスタックの移行はサポートされていません。

どのリポジトリタイプを移行できますか?

S3、 Git、および HTTP のリポジトリタイプを移行できます。

プライベート Git リポジトリを引き続き使用できますか?

はい、プライベート Git リポジトリを引き続き使用できます。

プライベート GitHub リポジトリを使用する場合は、SSH 用の新しい `Ed25519` ホストキーを作成する必要があります。これは、GitHub が SSH でサポートされるキーを変更し、暗号化されていない Git プロトコルを削除したためです。`Ed25519` ホストキーの詳細については、GitHub のブログ投稿「GitHub の Git プロトコルセキュリティの改善」を参照してください。新しい `Ed25519` ホストキーを生成したら、この SSH キー用の Systems Manager `SecureString` パラメータを作成し、パラメータ名を `--repo-private-key` パラメータの値として使用します。Systems Manager `SecureString` パラメータの作成方法の詳細については、「AWS Systems Manager ユーザーガイド」の「SecureString パラメータの作成 (AWS CLI)」を参照してください。

その他の Git リポジトリタイプでは、この SSH キー用の Systems Manager `SecureString` パラメータを作成し、そのパラメータ名をスクリプトの `--repo-private-key` パラメータの値として使用します。

インスタンスへのアクセスにはどの SSH キーを使用できますか?

スクリプトを実行すると、スクリプトはスタックに設定されている SSH キーとインスタンスを移行します。SSH キーを使用してインスタンスにアクセスできます。スタックとインスタンスに SSH キーが提供されている場合、スクリプトはスタックのキーを使用します。どの SSH キーを使用するべきかわからない場合は、EC2 コンソール (https://console.aws.amazon.com/ec2/) でインスタンスを確認してください。EC2 コンソールの 詳細 ページには、インスタンスの SSH キーが表示されます。

インスタンスが自動的にスケールイン/スケールアウトされるのはなぜですか?

自動スケーリングは、Auto Scaling グループのスケールしているルールに基づいてインスタンスをスケールします。グループの [最小]、[最大]、[必要な容量] の値を設定できます。Auto Scaling グループは、これらの値を更新すると、それに応じて容量を自動的にスケールします。

自動スケーリングをオフにすることはできますか?

Auto Scaling グループの [最小]、[最大]、[必要な容量] の値を同じ数値に設定することで、自動スケーリングを無効にできます。たとえば、常に 10 個のインスタンスを用意したい場合は、[最小]、[最大]、[必要な容量] の値を 10 に設定します。

起動した EC2 インスタンスでカーネルとパッケージの更新を実行できますか?

デフォルトでは、EC2 インスタンスの起動時にカーネルとパッケージの更新が行われます。次の手順を使用して、起動した EC2 インスタンスでカーネルまたはパッケージの更新を実行します。例えば、デプロイまたは設定のレシピを実行した後に、更新を適用できます。

1. EC2 インスタンスに接続します。
2. 次の `perform_upgrade` 関数を作成し、インスタンスで実行します。

```
perform_upgrade() {
    #!/bin/bash
    if [ -e '/etc/system-release' ] || [ -e '/etc/redhat-release' ]; then
     sudo yum -y update
    elif [ -e '/etc/debian_version' ]; then
     sudo apt-get update
     sudo apt-get dist-upgrade -y
    fi
}
perform_upgrade
```

3. カーネルとパッケージの更新後、EC2 インスタンスの再起動が必要な場合があります。再起動が必要かどうかを確認するには、次の `reboot_if_required` 関数を作成して EC2 インスタンスで実行します。

```
reboot_if_required () {
 #!/bin/bash
 if [ -e '/etc/debian_version' ]; then
   if [ -f /var/run/reboot-required ]; then
```

```
      echo "reboot is required"
    else
      echo "reboot is not required"
    fi
 elif [ -e '/etc/system-release' ] || [ -e '/etc/redhat-release' ]; then
  export LC_CTYPE=en_US.UTF-8
  export LC_ALL=en_US.UTF-8
  LATEST_INSTALLED_KERNEL=`rpm -q --last kernel | perl -X -pe 's/^kernel-(\S+).*/
$1/' | head -1`
  CURRENTLY_USED_KERNEL=`uname -r`
  if [ "${LATEST_INSTALLED_KERNEL}" != "${CURRENTLY_USED_KERNEL}" ];then
     echo "reboot is required"
  else
     echo "reboot is not required"
  fi
 fi
}
reboot_if_required
```

4. reboot_if_required 実行結果が reboot is required メッセージに表示された場合は、EC2 インスタンスを再起動します。reboot is not required メッセージを受け取った場合、EC2 インスタンスを再起動する必要はありません。

インスタンスの EBS ボリュームにデータが含まれていないのはなぜですか?

スクリプトを実行すると、スクリプトは EBS ボリュームの設定を移行し、 OpsWorks スタックと Layer の代替アーキテクチャを作成します。このスクリプトでは、実際のインスタンスやインスタンスに含まれるデータは移行されません。このスクリプトは、 EBS ボリュームの設定を Layer レベルで移行し、空の EBS ボリュームを起動した EC2 インスタンスにアタッチするだけです。

次の手順を実行して、以前のインスタンスの EBS ボリュームからデータを引き出します。

1. 以前のインスタンスの EBS ボリュームのスナップショットを取得します。スナップショットの作成の詳細については、Amazon EC2 ユーザーガイドの「Amazon EBS スナップショットの作成」を参照してください。
2. スナップショットからボリュームを作成する スナップショットからボリュームを作成する方法の詳細については、Amazon EC2 ユーザーガイドの「スナップショットからボリュームを作成する」を参照してください。
3. 作成したボリュームをインスタンスにアタッチします。詳細については、Amazon EC2 ユーザーガイドの「インスタンスへの Amazon EBS ボリュームのアタッチ」を参照してください。

起動テンプレートに記載されている EBS ボリュームがマウントされないのはなぜですか?

EBS ボリュームの `--launch-template` パラメータに起動テンプレート ID を指定すると、スクリプトは EBS ボリュームをアタッチしますが、ボリュームはマウントしません。起動した EC2 インスタンス用にスクリプトが作成した `MountEBSVolumes` RunCommand ドキュメントを実行することで、アタッチされた EBS ボリュームをマウントできます。

`--launch-template` パラメータを設定しない場合、スクリプトはテンプレートを作成し、Auto Scaling グループが新しい EC2 インスタンスを起動すると、Auto Scaling グループは自動的に EBS ボリュームをアタッチし、アタッチされたボリュームを Layer 設定で設定されたマウントポイントにマウントする `SetupAutomation` コマンドを実行します。

Chef レシピとマウント EBS ボリュームのログはどこにありますか?

OpsWorks は、`--command-logs-bucket` パラメータに値を指定することで指定できる S3 バケットにログを配信します。デフォルトの S3 バケット名の形式は、`aws-opsworks-stacks-application-manager-logs-`*`account-id`* です。Chef レシピログは `ApplyChefRecipes` プレフィックスに保存されます。マウント EBS ボリュームログは `MountEBSVolumes` プレフィックスに保存されます。スタックから移行されるすべてのレイヤーは、同じ S3 バケットにログを配信します。

> **Note**
>
> - S3 バケットのライフサイクル設定には、30 日後にログを削除するルールが含まれています。30 日以上ログを保持する場合は、 S3 バケットのライフサイクル設定のルールを更新する必要があります。
> - 現在、OpsWorks はシェフ `setup` と `terminate` レシピのみをログに記録します。

移行スクリプトのデバッグログはどこから入手できますか?

このスクリプトは、`aws-opsworks-stacks-transition-logs-`*`account-id`* という名前のバケットにデバッグログを格納します。デバッグログは、S3 バケットの `migration_script` フォルダーで、移行した Layer の名前と一致するフォルダーにあります。

移行スクリプトは CloudFormation テンプレートのバージョニングをサポートしていますか?

このスクリプトは、移行したいレイヤーまたはスタックの代替を作成する CloudFormation タイプの Systems Manager ドキュメントを生成します。同じパラメーターを使用してスクリプトを再実行すると、以前にエクスポートされたレイヤーテンプレートの新しいバージョンがエクスポートされます。テンプレートバージョンは、スクリプトログと同じ S3 バケットに保存されます。

複数の Layer を移行できますか?

スクリプトの `--layer-id` パラメーターは一つのレイヤーに渡されます。複数のレイヤーを移行するには、異なる `--layer-id` でスクリプトを再実行して渡します。

同じ OpsWorks スタックの一部であるレイヤーは、アプリケーションマネージャーの同じアプリケーションの下に一覧表示されます。

1. Systems Manager コンソール (https://console.aws.amazon.com/systems-manager/) を開きます。
2. ナビゲーションペインで、[Application Manager] を選択します。
3. [アプリケーション] セクションで、[カスタムアプリケーション] を選択します。
4. アプリケーションを選択します。アプリケーション名は app-*stack-name*-*first-six-characters-stack-id* で始まります。
5. アプリで始まる最上位の要素には、OpsWorks スタックに対応するすべてのコンポーネントが表示されます。これには、OpsWorks レイヤーに対応するコンポーネントが含まれます。
6. レイヤーに対応するコンポーネントを選択すると、そのレイヤーのリソースが表示されます。OpsWorks レイヤーを表すコンポーネントは、「カスタムアプリケーション」セクションからも個別のアプリケーションとして表示されます。

`SecureString` パラメータを作成するにはどうしたらよいですか?

Systems Manager を使用して `SecureString` パラメータを作成できます。Systems Manager `SecureString`パラメータの作成方法の詳細については、AWS Systems Manager 「ユーザーガイド」の「SecureString パラメータ (AWS CLI) の作成)」または「Systems Manager パラメータ(コンソール)を作成する」を参照してください。

`SecureString`、`--http-username`、`--http-password`または `--repo-private-key` パラメータの値としてパラメータを指定する必要があります。

新しい Auto Scaling グループのインスタンスを終了イベントから保護する方法を教えてください。

TRUE に --enable-instance-protection パラメータを設定し、protected_instance タグキーを終了イベントから保護したい各 EC2 インスタンスに追加することでインスタンスを保護できます。--enable-instance-protection パラメータを TRUE に設定して protected_instance タグキーを追加すると、スクリプトは新しい Auto Scaling グループにカスタム終了ポリシーを追加し、ReplaceUnhealthy プロセスを中断します。protected_instance タグキーが付いたインスタンスは、以下の終了イベントから保護されます。

- スケールインイベント
- インスタンスの更新
- リバランシング
- インスタンスの最大存続期間
- インスタンスの終了の一覧表示
- 異常のあるインスタンスの終了と交換

> **Note**
>
> 保護するインスタンスには protected_instance タグキーを設定する必要があります。タグキーでは大文字と小文字が区別されます。そのタグキーを持つインスタンスは、タグ値に関係なく保護されます。
> カスタム終了ポリシーの実行時間を短縮するには、default_sample_size 関数コード変数の値を更新することで、Lambda 関数が保護対象インスタンスのフィルタリングに使用するデフォルトのインスタンス数を増やすことができます。デフォルト値は 15 です。default_sample_size を増やすと、Lambda 関数に割り当てられるメモリを増やす必要が生じる場合があります。これにより、Lambda 関数のコストが増加します。 AWS Lambda の料金については、「AWS Lambda の料金」を参照してください。

移行スクリプトではどのようなロードバランサーを利用できますか?

このスクリプトには三つのロードバランサーオプションがあります。

- (推奨) 新しいApplication Load Balancer を作成します。デフォルトでは、スクリプトは新しいApplication Load Balancer を作成します。--lb-typeパラメータをALBにも設定できま

す。Application Load Balancers 詳細については、「Elastic Load Balancing ユーザーガイド」の「Application Load Balancer とは？」を参照してください。

- Application Load Balancer がオプションでない場合は、`--lb-type` パラメータを `Classic` に設定してClassic Load Balancer を作成します。このオプションを選択した場合、OpsWorks Layer にアタッチされた既存の Classic Load Balancer はアプリケーションとは別に保持されます。Application Load Balancer の詳細については、Elastic Load Balancing：Classic Load Balancer ユーザーガイドの「Classic Load Balancerとは？」を参照してください 。
- `--lb-type` パラメーターを `None` に設定することで、既存のロードバランサーをアタッチできます。

> **Important**
>
> AWS OpsWorks スタックのレイヤーに対して新しい Elastic Load Balancing ロードバランサーを作成することをお勧めします。既存の Elastic Load Balancing ロードバランサーを使用する場合は、まず、他の目的で使用されておらず、インスタンスがアタッチされていないことを確認する必要があります。ロードバランサーがレイヤーにアタッチされた後、OpsWorks は既存のインスタンスをすべて削除して、レイヤーのインスタンスのみを処理するようにロードバランサーを設定します。レイヤーにアタッチした後でロードバランサーの設定を Elastic Load Balancing コンソールまたは API を使用して変更することは技術的には可能ですが、そうしないでください。この変更は永続的ではないためです。

既存の OpsWorks レイヤーロードバランサーを Auto Scaling グループに接続するには

1. `--lb-type` パラメーターを `None` に設定して移行スクリプトを実行します。値を `None` に設定すると、スクリプトはロードバランサーを複製したり作成したりしません。
2. スクリプトが CloudFormation スタックをデプロイしたら、Auto Scaling グループ `Min` `Max` と `Desired capacity` 値を更新し、アプリケーションをテストします。
3. スクリプトの出力に表示されている `Link to the template` を選択します。ターミナルを閉じた場合は、次の手順を実行してテンプレートにアクセスしてください。

    a. Systems Manager コンソール (https://console.aws.amazon.com/systems-manager/) を開きます。

    b. ナビゲーションペインで、[Application Manager] を選択します。

    c. 「CloudFormation スタック」を選択し、「テンプレートライブラリ」を選択します。

    d. 「Owned by me」を選択し、テンプレートを探します。

4. CloudFormation テンプレートから、アクションメニューから「編集」を選択します。
5. CloudFormation テンプレートの ApplicationAsg リソースセクション内の LabelBalancerNames プロパティを更新します。

```
ApplicationAsg:
   DependsOn: CustomTerminationLambdaPermission
   Properties:
   #(other properties in ApplicationAsg to remain unchanged)
      LoadBalancerNames:
        - load-balancer-name
      HealthCheckType: ELB
```

6. Auto Scaling グループインスタンスのヘルスチェックにロードバランサーのヘルスチェックも使用させたい場合は、HealthCheckType 以下のセクションを削除してELBを入力してください。EC2 ヘルスチェックのみが必要な場合は、テンプレートを変更する必要はありません。
7. 変更内容を保存します。保存すると、新しいデフォルトバージョンのテンプレートが作成されます。レイヤーのスクリプトを初めて実行し、コンソールに変更を初めて保存した場合、新しいバージョンは 2 です。
8. [アクション] から [プロビジョニングスタック] を選択します。
9. テンプレートのデフォルトバージョンを使用することを確認します。必ず「既存のスタックを選択」を選択し、更新する CloudFormation スタックを選択してください。
10. 「レビューとプロビジョニング」ページが表示されるまで、以降の各ページで [次へ] を選択します。レビューとプロビジョニングページで、 がカスタム名で IAM リソースを作成する AWS CloudFormation 可能性があることと、選択したテンプレートの変更によって既存の AWS リソースが AWS CloudFormation 更新または削除される可能性があることの両方を選択します。
11. [Provision stack] (スタックのプロビジョニング) を選択します。

更新をロールバックする必要がある場合は、次の手順を実行します。

1. [アクション] を選択してから、スタックのプロビジョニング を選択します。
2. [既存のバージョンの一つを選択] を選択し、次に以前のテンプレートバージョンを選択します。
3. 既存スタックの選択を選択し、更新するCloudFormation スタックを選択します。

カスタムクックブック設定レシピは移行されますか?

Configure カスタムクックブックをセットアップイベント中に実行することはサポートされていません。このスクリプトは、カスタムクックブックの設定レシピを移行し、お客様に代わって Systems Manager 自動化ランブックを作成します。しかし、レシピを手動で実行する必要があります。

設定レシピを実行するには、次のステップに従います。

1. Systems Manager コンソール (https://console.aws.amazon.com/systems-manager/) を開きます。
2. ナビゲーションペインで、[Application Manager] を選択します。
3. [アプリケーション] セクションで、[カスタムアプリケーション] を選択します。
4. アプリケーションを選択します。アプリケーション名は `app-stack-name` で始まります。
5. 「リソース」を選択し、次に「設定ランブック 」を選択します。
6. [オートメーションを実行] を選択します。
7. 設定レシピを実行するインスタンス ID を選択し、実行 を選択します。

新しく作成したインスタンスで、デプロイ、アンデプロイのレシピを実行できますか?

このスクリプトでは、Layer の設定に応じて 3 つの自動化ランブックを作成できます。

- セットアップ
- 構成する
- 終了

このスクリプトでは、`AWS-ApplyChefRecipes Run Command` ドキュメントの入力値を含む次の Systems Manager パラメータを作成することもできます。

- セットアップ
- デプロイ
- 構成する
- Undeploy
- 終了

スケールアウトイベントが発生すると、セットアップオートメーションランブックが自動的に実行されます。これには、元の OpsWorks Layer からのカスタムクックブックレシピの設定とデプロイが含まれます。スケールインイベントが発生すると、ターミナルのオートメーションランブックが自動的に実行されます。ターミナルオートメーションランブックには、元の OpsWorks Layer のシャットダウンレシピが含まれています。

レシピを手動で実行、アンデプロイ、または設定する場合は、次の手順を実行します。

1. Systems Manager コンソール (https://console.aws.amazon.com/systems-manager/) を開きます。
2. ナビゲーションペインで、[Application Manager] を選択します。
3. [アプリケーション] セクションで、[カスタムアプリケーション] を選択します。
4. アプリケーションを選択します。アプリケーション名は app-*stack-name*-*first-six-characters-stack-id* で始まります。Application Manager の [概要] タブが開きます。
5. [リソース] を選択し、次に自動化ランブックの設定を選択します。
6. [オートメーションを実行] を選択します。
7. `applyChefRecipesPropertiesParameter` オートメーションランブックの入力パラメータについては、正しい Systems Manager パラメータを参照してください。Systems Manager パラメータ名は*event* の値が`Configure` という `/ApplyChefRecipes-Preset/`*OpsWorks-stack-name*-*OpsWorks-layer-name*-*first-six-characters-stack-id*/*event*、または、`Deploy`、実行したいレシピに応じている `Undeploy` という形式に従います。
8. レシピを実行するインスタンス ID を選択し、実行 を選択します。

Auto Scaling グループが対象とするサブネットを変更できますか?

デフォルトでは、Auto Scaling グループは OpsWorks スタック VPC 内のすべてのサブネットに適用されます。スパンのサブネットを更新するには、次の手順に従います。

1. スクリプトの出力に表示されている `Link to the template` を選択します。ターミナルを閉じた場合は、次の手順を実行してテンプレートにアクセスしてください。

   a. Systems Manager コンソール (https://console.aws.amazon.com/systems-manager/) を開きます。
   b. ナビゲーションペインで、[Application Manager] を選択します。
   c. 「CloudFormation スタック」を選択し、「テンプレートライブラリ」を選択します。
   d. 「Owned by me」を選択し、テンプレートを探します。

2. 「アクション」から「プロビジョニングスタック」を選択します。
3. デフォルトのテンプレートを使用することを確認します。既存スタックの選択を選択し、更新するCloudFormation スタックを選択します。

> **Note**
>
> `--provision-application` パラメータを `FALSE` に設定してスクリプトを実行した場合は、新しい CloudFormation スタックを作成する必要があります。

4. `SubnetIDs` パラメータには、Auto Scaling グループが対象とするサブネット ID をカンマで区切ったリストを指定します。
5. 「レビューとプロビジョニング」ページが表示されるまで 「次へ」を選択します。
6. レビューとプロビジョニングページで、 がカスタム名で IAM リソースを作成する CloudFormation 可能性があることを承認し、選択したテンプレートの変更により CloudFormation が既存の AWS リソースを更新または削除する可能性があることを理解します。
7. [Provision stack] (スタックのプロビジョニング) を選択します。

トラブルシューティング

このセクションでは、一般的な問題と、それらの問題について推奨される解決方法を示します。

トピック

- 入力されたプリンシパルは無効ではない
- Auto Scaling グループ保護インスタンスが有効になっていると CloudFormation スタックを削除できない
- 既存の S3 バケットとプレフィックスを指定するとアクセス拒否エラーが発生する

入力されたプリンシパルは無効ではない

問題: 指定したプリンシパルが有効ではないというエラーメッセージが表示されます。

原因: これは、Auto Scaling グループにサービスロールがないために発生します。

解決策: エラーが発生したリージョンに Auto Scaling グループを作成します。Auto Scaling グループを作成すると、カスタム終了ポリシーに必要なサービスリンクロールが作成されます。

Auto Scaling グループ保護インスタンスが有効になっていると CloudFormation スタックを削除できない

問題: `--enable-instance-protection` パラメータが `TRUE` に設定されており、Auto Scaling グループの EC2 インスタンスの一部が `protected_instance` タグキーで保護されているため、CloudFormation スタックが完全に削除されません。

原因: EC2 インスタンスには、終了イベントから保護する `protected_instance` タグキーがあります。

解決策: EC2 インスタンスから `protected_instance` タグキーを削除します。これにより、Auto Scaling グループはスケールダウンできます。Auto Scaling グループがスケールダウンしたら、CloudFormation スタックを削除できます。

既存の S3 バケットとプレフィックスを指定するとアクセス拒否エラーが発生する

問題: 既存の S3 バケットとプレフィックスを指定すると `AccessDenied` エラーになる。

原因: S3 バケットポリシーには、ロードバランサーのログをバケットに配信するのに必要な権限が付与されていません。

解決策: S3 バケットポリシーを更新して、スクリプトがロードバランサーのアクセスログをバケットに配信できるようにします。バケットポリシーを更新する方法の詳細については、「伸縮性ロードバランサー： Application Load Balancer ユーザーガイド」の「Application Load Balancerのアクセスログを有効にする」を参照してください。

AWS OpsWorks Stacks Detach in Place ツールの使用

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。

このセクションでは、 AWS OpsWorks Stacks Detach in Place ツールを使用して OpsWorks スタックサービスから OpsWorks インスタンスをデタッチする方法について説明します。

デタッチしたインスタンスは に残りますが AWS アカウント、OpsWorks を使用して管理することはできなくなります。代わりに、Amazon EC2 AWS Systems Manager、または EC2 互換のアプローチを使用してインスタンスを設定および管理します。

大まかに言うと、デタッチプロセスには次のステップが含まれます。

1. このツールは、検証チェックを実行して、リソースをデタッチする準備ができていることを確認します。
2. このツールは、OpsWorks スタックからカスタム JSON をエクスポートし、Amazon S3 のオブジェクトとして保存します。
3. このツールは、各 OpsWorks スタックのライフサイクルイベントを表す Systems Manager Automation ドキュメントを作成します。
4. このツールは、デタッチされているすべてのインスタンスの AWS Service Catalog AppRegistry カタログを作成し、OpsWorks レイヤーから Elastic Load Balancing (ELB) ロードバランサーをデタッチします。
5. 最後に、このツールは Amazon Relational Database Service (Amazon RDS) インスタンスなどの他のリソースをデタッチおよび登録解除します。

プロセスの仕組み

Detach In Place ツールは、次の 3 つのコマンドと、レイヤーのデタッチに進む前にインスタンスをチェックして設定するための一連のステップをガイドするウィザードのようなエクスペリエンスを提供します。

コマンド	説明
`handle-prerequisites`	このコマンドは、レイヤー内のすべてのインスタンスがデタッチの対象であるかどうかを分析し、前提条件を解決します。インスタンスは OpsWorks で正常な状態である必要があり、時間または負荷ベースの自動スケーラーを持つことはできません。また、最新の OpsWorks エージェントバージョンがインストールされている必要があります。 さらに、 コマンドは、すべてのインスタンスに SSM エージェントをサポートするために必

コマンド	説明
	要なアクセス許可があるかどうか、および最新の SSM エージェントバージョンがインストールされているかどうかを確認します。コマンドは、存在しない場合は SSM エージェントをインストールし、最新バージョンを使用していない場合は SSM エージェントを更新します。コマンドは、必要なアクセス許可も追加します。
`detach`	このコマンドは、指定されたレイヤーのすべての OpsWorks インスタンスをデタッチします。 まず、 コマンドは前提条件チェックを実行して、レイヤーがデタッチの対象となることを確認します。前提条件を解決しない場合は、強制デタッチするオプションが与えられます。 次に、 コマンドは、OpsWorks タグ付け APIs を介して、またはレイヤーとスタックからのタグの伝播を介してインスタンスに追加されたすべてのタグが保持されることを示します。デタッチが完了したら、関連する EC2 APIs を使用してこれらのタグのいずれかを削除できます。 次に、 コマンドは Chef 関連の設定を SSM パラメータにエクスポートするかどうかをチェックします。 Classic Load Balancer がレイヤーにアタッチされている場合、コマンドはダウンタイムを防ぐためにロードバランサーをデタッチできるかどうかを尋ねます。

コマンド	説明
`cleanup`	このコマンドは、OpsWorks のすべてのエンティティをアカウントから削除します。これにより、インスタンスが終了し、すべてのスタックが削除されます。これは、アカウントをクリーンアップする最後のステップとして不要になったリソースに使用する必要があります。 **Note** `cleanup` コマンドを実行する前に、新しいセットアップを数日間実行することをお勧めします。これにより、必要に応じてスタックから必要な設定を簡単に利用できます。

制限事項

Detach In Place ツールの主な目的は、OpsWorks スタックインスタンスを安全にデタッチすることです。このセクションでは、 ツールの制限事項を要約します。

- Windows SSM Agent – SSM Agent がインスタンスにインストールされていない場合は、手動でインストールする必要があります。エージェントを最新バージョンに更新しない場合も同様です。
- Time/Load Auto Scaling インスタンス – デタッチツールは、Auto Scaling が有効になっているインスタンスをサポートしていません。デタッチするインスタンスで Auto Scaling を無効にする必要があります。
- アクセス許可 – デタッチツールは、OpsWorks コンソールのアクセス許可ページで指定された IAM エンティティを作成または生成しません。
- アプリ – デタッチツールは、OpsWorks の外部でアプリを作成または生成しません。

開始方法

ステップ 1: 前提条件が満たされていることを確認する

Detach In Place ツールの 3 つのコマンドはすべて Python スクリプトであり、ローカル、EC2 インスタンス、または を使用して実行できますAWS CloudShell。

AWS CloudShell はブラウザベースのシェルで、一般的なツール (AWS CLI や Python など) がプリインストールされている selected AWS リージョン. AWS CloudShell comes のリソースへの AWS コマンドラインアクセスを提供します。を使用する場合は AWS CloudShell、コンソールへのサインインに使用するのと同じ認証情報を使用します。

このチュートリアルでは、 を使用していることを前提としています AWS CloudShell。

ステップ 2: スクリプトをダウンロードする

1. 次のコマンドを実行して、移行スクリプトを含む zip ファイルとすべての関連ファイルをダウンロードします。

```
aws s3api get-object \
--bucket detach-in-place-bucket-prod-us-east-1 \
--key detach_in_place_script.zip detach_in_place_script.zip
```

2. 次のコマンドを実行して、ファイルを解凍します。

```
unzip detach_in_place_script.zip
```

   ファイルを解凍すると、次のファイルを使用できます。

   - README.md
   - LICENSE
   - NOTICE
   - requirements.txt
   - TODO.py

3. 必要に応じて、次のコマンドpipenvを実行して をインストールします。

```
pip install pipenv
```

ステップ 3: スクリプトを実行する

まず、次のコマンドを実行してスクリプトを実行できるように環境を設定します。

```
pipenv install -r requirements.txt
pipenv shell
```

次に、スクリプトパラメータを確認します。

コマンド	パラメータ	説明	タイプ	[Required] (必須)	[Default] (デフォルト)
handle-prerequisites	--layer-id	デタッチするレイヤーの ID。	String	はい	-
	--region	OpsWorks スタックのリージョン。OpsWorks スタック Region と API エンドポイント Region が異なる場合は、スタック Region を使用してください。これは、OpsWorks スタックの他のリソース部分 (EC2 インスタンスやサブネットなど) と同じ Region です。	String	不可	us–east–1
detach	--layer-id	デタッチするレイヤーの ID。	String	はい	-
	--batch-size	レイヤーからデタッチするインスタンスの数 (例: 5)。	String	不可	-
	--region	OpsWorks スタックのリージョン。OpsWorks スタック Region と API エンドポイント Region が異なる場合は、スタック Region を使用してください。これ	String	不可	us–east–1

コマンド	パラメータ	説明	タイプ	[Required] (必須)	[Default] (デフォルト)
		は、OpsWorks スタックの他のリソース部分 (EC2 インスタンスやサブネットなど) と同じ Region です。			
cleanup	--stack-id	削除するスタックの ID。	String	不可	相互に排他的に、レイヤー ID またはスタック ID のいずれかを指定する必要があります
	--layer-id	削除するレイヤーの ID	String	不可	
	--region	OpsWorks スタックのリージョン。OpsWorks スタック Region と API エンドポイント Region が異なる場合は、スタック Region を使用してください。これは、OpsWorks スタックの他のリソース部分 (EC2 インスタンスやサブネットなど) と同じ Region です。	String	不可	us–east–1

、、 handle-prerequisites cleanup コマンドで使用可能なオプションを確認するにはdetach、次のように --helpオプションを指定してコマンドを実行します。

```
python3 layer_detacher.py detach --help
python3 layer_detacher.py handle-prerequisites --help
python3 layer_detacher.py cleanup --help
```

これで、開始する準備が整いました。次の例は、さまざまなユースケースでコマンドを実行する方法を示しています。

例:

- 例 1: レイヤーがすべての前提条件を満たし、デタッチの対象かどうかを確認します。
- 例 2: レイヤーのすべてのインスタンスをデタッチする
- 例 3: レイヤーのすべてのインスタンスをバッチでデタッチする
- 例 4: レイヤーのすべてのリソースをクリーンアップし、レイヤーを削除する
- 例 5: スタックのすべてのリソースをクリーンアップし、スタックを削除する

例 1: レイヤーがすべての前提条件を満たし、デタッチの対象かどうかを確認します。

次のコマンドは、OpsWorks レイヤー (およびそのレイヤーに含まれるインスタンス) に関する情報を読み取り、以下の前提条件が満たされているかどうかを確認します。

- すべてのインスタンスはオンラインです。
- Load/Time Auto Scaling インスタンスはありません。
- すべてのインスタンスには最新の OpsWorks エージェントがあります。
- すべてのインスタンスには、最新の SSM エージェントがインストールされ、設定されています。
- すべてのインスタンスには SSH キーペアがあります。
- すべてのインスタンスは 1 つのレイヤーに属します。

```
python3 layer_detacher.py handle-prerequisites \
--layer-id opsworks-layer-id \
--region opsworks-stack-region
```

例 2: レイヤーのすべてのインスタンスをデタッチする

次のコマンドは、レイヤーのすべてのインスタンスを反復処理し、インスタンスが前提条件を満たしているかどうかを確認し、前提条件を満たすすべてのインスタンスを並行してデタッチしようとします。1 つ以上の前提条件が満たされていない場合、コマンドは残りの非準拠インスタンスに強制デタッチオプションを提供します。

インスタンスをデタッチする前に、 コマンドは次の操作を行います。

1. カスタム JSON を保存し、S3 にアップロードします。

2. レイヤーの OpsWorks ライフサイクルイベントごとに SSM Automation ドキュメントを作成し、オートメーションドキュメントの実行ログを S3 にアップロードします。
3. デタッチされるすべてのインスタンスに対して AppRegistry アプリケーションを作成します。アプリケーションには、デタッチされたすべてのインスタンスとリソースを保持するリソースグループが関連付けられています。リソースには、ライフサイクルイベントとカスタム Chef レシピに関する情報を保持する SSM Automation ドキュメントと SSM パラメータが含まれます。
4. Classic Load Balancer が存在する場合は、レイヤーからデタッチします。

このコマンドは OpsWorks リソースのみを変更します。EC2 インスタンスのステータスは変わりません。

```
python3 layer_detacher.py detach \
--layer-id opsworks-layer-id \
--region opsworks-stack-region
```

例 3: レイヤーのすべてのインスタンスをバッチでデタッチする

次のコマンドは、前の例と同じ操作を行います。唯一の違いは、インスタンスをバッチでデタッチすることです。

このコマンドは OpsWorks リソースのみを変更します。EC2 インスタンスのステータスは変わりません。

```
python3 layer_detacher.py detach \
--layer-id opsworks-layer-id \
--region opsworks-stack-region \
--batch-size 5
```

例 4: レイヤーのすべてのリソースをクリーンアップし、レイヤーを削除する

次のコマンドは、レイヤーのすべてのリソースを反復処理して削除します。より詳細には、OpsWorks と EC2 のすべてのインスタンスを停止および削除し、ロードバランサーをデタッチして Amazon RDS インスタンス、Elastic IPsボリュームを登録解除します。リソースをクリーンアップすると、レイヤーが削除されます。

このコマンドは、OpsWorks リソースと EC2 インスタンスを削除します。EC2 インスタンスをそのまま使用する場合は、 `detach` コマンドを使用する前に `cleanup` コマンドを使用します。これにより、`cleanup`コマンドは残りのリソースをすべて削除します。

```
python3 layer_detacher.py cleanup \
--layer-id opsworks-layer-id \
--region opsworks-stack-region
```

例 5: スタックのすべてのリソースをクリーンアップし、スタックを削除する

次のコマンドは、すべてのレイヤーを反復処理し、各レイヤーのリソースを反復処理します。レイヤーごとに、 コマンドは OpsWorks と EC2 のすべてのインスタンスを停止および削除し、ロードバランサーをデタッチして、Amazon RDS インスタンス、Elastic IPsボリュームを登録解除します。次に、 コマンドはレイヤーを削除します。このスタックに属するすべてのレイヤーで同じプロセスが実行されます。最後に、すべてのレイヤーが削除されると、スタックは削除されます。

このコマンドは、OpsWorks リソースと EC2 インスタンスを削除します。EC2 インスタンスをそのまま使用する場合は、 detach コマンドを使用する前に cleanup コマンドを使用します。これにより、cleanupコマンドは残りのリソースをすべて削除します。

```
python3 layer_detacher.py cleanup \
--stack-id opsworks-stack-id \
--region opsworks-stack-region
```

ステップ 4: OpsWorks からデタッチした後もリソースを運用し続ける

detach コマンドを実行すると、ツールはデタッチされたレイヤーに対応する新しい AWS Service Catalog AppRegistry アプリケーションを作成します。アプリケーション名は の形式に従いますlayer-name---layer-id。また、OpsWorksLayerIdタグを追加して、デタッチされたレイヤーに一致するアプリケーションを一意に識別します。

このアプリケーションに新しい AWS リソース (新しい EC2 インスタンスなど) を追加するには、次のいずれかを実行します。

1. リソースに AppRegistry アプリケーションの一意のアプリケーションタグをタグ付けします。

   タグキー: awsApplication

   値: arn:aws:resource-groups:region:account-id:group/application-name/application-id>
2. associate-resource コマンドを実行します。

さらに、AppRegistry アプリケーションごとにリソースグループが作成されます。リソースグループには、次のタグが含まれています。

タグキー	値
EnableAWSServiceCatalogAppRegistry	TRUE
aws:servicecatalog:applicationName	*application-name*
aws:servicecatalog:applicationId	*application-id*
aws:servicecatalog:applicationArn	arn:aws:servicecatalog: *region*:*account-id* :/applications/ *application-id*

デタッチ後のタスクの実行

次の表は、デタッチ後にタスクを実行する方法に関する情報を示しています。

タスク	説明
ライフサイクルイベントの実行	detach コマンドを実行し、 オプションを選択した場合、スクリプトは 5 つの OpsWorks ライフサイクルイベントに一致する 5 つのオートメーションドキュメントを作成します。 各オートメーションドキュメントの名前は、の形式に従います*layer-id*_*lifecycle-event*_automation_document 。 Systems Manager で OpsWorks の動作をシミュレートするには、プロビジョニング、EC2 インスタンスの終了、レシピのデプロイ/削除時に自動化の実行を手動でトリガーする必要があります。

タスク	説明
カスタム JSON の更新	スタックとレイヤーのカスタム JSON は、デタッチ時に指定された S3 バケット、または作成される新しい S3 バケットに保存されます。 JSON ファイルに保存されているファイル名は次のとおりです。 • `layercustomjson.json` • `stackcustomjson.json`
ライフサイクルイベントの実行リストの変更	各ライフサイクルイベントの実行リストは、対応するオートメーションドキュメントで定義されています。実行リストを変更するには、AppRegistry アプリケーションで Automation ドキュメントを検索し、 `RunList`パラメータを変更します。 自動化ドキュメントがトリガーする は OpsWorks と同じソースをサポートしているため`AWS-ApplyChefRecipes` 、レシピとクックブックを更新するプロセスは変更されません。
自動ヒーリング/自動スケーリングの管理	インスタンスをデタッチすると、OpsWorks エージェントはアンインストールします。エージェントがない場合、OpsWorks は異常なインスタンスを自動的に修復または置き換えることも、フリートを自動スケーリングすることもできません。自動スケーリングを続行し、失敗したインスタンスを置き換えるには、Amazon EC2 Auto Scaling グループを作成します。グループは、Amazon EC2 が置き換えが必要な異常なインスタンスを検出すると、新しいインスタンスを起動して希望する容量を維持します。

タスク	説明
Load Balancerの管理	レイヤーが Classic Load Balancer を使用している場合、 `detach` コマンドはインスタンスの登録を解除する前にそれをデタッチします。これは、デタッチの過程ですべての ELB インスタンスの関連付けが Amazon EC2 に保持されるため、ダウンタイムは発生しません。プロセスが完了すると、EC2 で ELB を管理できるようになります。
インスタンスへの接続	`handle-prerequisites` または `detach` コマンドを実行すると、次の 2 つのチェックが発生します。 • SSM エージェントのバージョンとアクセス許可 • SSH キー コマンドでは、SSM エージェントを更新し、必要なアクセス許可を追加して、Session Manager を使用してインスタンスに接続することもできます。SSH キーが存在する場合は、インスタンスに SSH することもできます。

Systems Manager Application Manager インスタンスタブの使用

デタッチ後、Application Manager インスタンスタブでインスタンスを表示および管理できます。

インスタンスタブには、ステータス、ヘルスステータス、最後のコマンドステータスなど、アプリケーションの EC2 インスタンスに関する集計情報が表示されます。このタブを使用すると、コマンド履歴、アラーム状態、Systems Manager エージェントの状態など、個々のインスタンスに関する詳細情報を表示できます。インスタンスタブには、Chef レシピの適用、インスタンスの開始や停止、Auto Scaling グループへのインスタンスの追加や削除など、さまざまなアクションも用意されています。

OpsWorks スタックの開始方法

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックには、組み合わせて特定の目的を満たすスタックを作成できるカスタマイズ可能なコンポーネントの豊富なセットが用意されています。新規ユーザーにとっての課題は、これらのコンポーネントをどのように実際のスタックに組み込み、効果的に管理するかを理解することです。ここで最初からご説明します。

目的が	このウォークスルーの完了:
サンプルスタックをできるだけ迅速に作成する	使用開始: サンプル
Linux ベースのスタックを試す	入門ガイド: Linux
Windows ベースのスタックを試す	入門ガイド: Windows
独自の Chef クックブックを作成する方法を学習する	使用開始: クックブック

Amazon EC2 インスタンスや、独自のハードウェアで実行されているオンプレミスインスタンスなど、既存のコンピューティングリソースがある場合は、スタックで作成したインスタンスとともにスタックに組み込むことができます OpsWorks 。その後、 OpsWorks スタックを使用して、作成方法に関係なく、関連するすべてのインスタンスをグループとして管理できます。

リージョンのサポート

OpsWorks スタックにはグローバルにアクセスできます。また、インスタンスをグローバルに作成および管理することもできます。ユーザーは、 AWS GovCloud (米国西部) および中国 (北京) AWS リージョンを除く任意のリージョンで起動するように OpsWorks スタックインスタンスを設定でき

ます。 OpsWorks スタックを使用するには、インスタンスが次のいずれかの Stacks OpsWorks インスタンスサービス API エンドポイントに接続できる必要があります。

リソースは、そのリソースを作成したリージョンでのみ管理できます。あるリージョンのエンドポイントで作成されたリソースは、他のリージョンのエンドポイントからは使用できず、他のリージョンのエンドポイントにクローニングすることもできません。インスタンスを起動できるリージョンは以下の通りです。

- 米国東部 (オハイオ) リージョン
- 米国東部(バージニア州北部) リージョン
- 米国西部 (オレゴン) リージョン
- 米国西部 (北カリフォルニア) リージョン
- カナダ (中部) リージョン (API のみ、 AWS マネジメントコンソールで作成されたスタックは使用できません。)
- アジアパシフィック (ムンバイ) リージョン
- アジアパシフィック (シンガポール) リージョン
- アジアパシフィック (シドニー) リージョン
- アジアパシフィック (東京) リージョン
- Asia Pacific (Seoul) Region
- 欧州 (フランクフルト) リージョン
- 欧州 (アイルランド) リージョン
- 欧州 (ロンドン) リージョン
- 欧州 (パリ) リージョン
- 南米 (サンパウロ) リージョン

サンプルスタックの使用開始

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このチュートリアルでは、 OpsWorks スタックを使用して、マウスを数回クリックするだけで、コードを記述せずにサンプル Node.js アプリケーション環境をすばやく作成する方法を示します。終了すると、Chef 12 を実行する Amazon Elastic Compute Cloud (Amazon EC2) インスタンス、Node.js HTTP サーバー、および Twitter とやり取りし、ウェブページにコメントを残すために使用できるウェブアプリケーションが作成されます。

> **Note**
>
> このウォークスルーを完了すると c3.large タイプのインスタンスが自動的に作成されるため、このウォークスルー、または スタックの サンプルスタック OpsWorks 作成ツールを AWS Free Tier で使用することはできません。VPC 内で [Sample Stack] 作成ツールを使用すると、t2.medium インスタンスが作成されますが、VPC は現在 AWS 無料利用枠では使用できません。

ステップ 1: 前提条件を完了する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

ウォークスルーを開始する前に、次のセットアップ手順を完了する必要があります。これらのセットアップ手順には、 AWS アカウントへのサインアップ、管理ユーザーの作成、 OpsWorks スタックへのアクセス許可の割り当てが含まれます。

トピック

- にサインアップする AWS アカウント
- 管理アクセスを持つユーザーを作成する
- サービスアクセス権限を割り当てます。

にサインアップする AWS アカウント

がない場合は AWS アカウント、次の手順を実行して作成します。

にサインアップするには AWS アカウント

1. https://portal.aws.amazon.com/billing/signup を開きます。
2. オンラインの手順に従います。

   サインアップ手順の一環として、電話またはテキストメッセージを受け取り、電話キーパッドで検証コードを入力します。

   にサインアップすると AWS アカウント、 AWS アカウントのルートユーザー が作成されます。ルートユーザーには、アカウントのすべての AWS のサービス とリソースへのアクセス権があります。セキュリティベストプラクティスとして、ユーザーに管理アクセス権を割り当て、ルートユーザーアクセスが必要なタスクの実行にはルートユーザーのみを使用するようにしてください。

AWS サインアッププロセスが完了すると、 から確認メールが送信されます。https://aws.amazon.com/ の [マイアカウント] をクリックして、いつでもアカウントの現在のアクティビティを表示し、アカウントを管理することができます。

管理アクセスを持つユーザーを作成する

にサインアップしたら AWS アカウント、日常的なタスクにルートユーザーを使用しないように AWS アカウントのルートユーザー、 を保護し AWS IAM アイデンティティセンター、 を有効にして管理ユーザーを作成します。

を保護する AWS アカウントのルートユーザー

1. ルートユーザーを選択し、 AWS アカウント E メールアドレスを入力して、アカウント所有者AWS マネジメントコンソールとして にサインインします。次のページでパスワードを入力します。

   ルートユーザーを使用してサインインする方法については、「AWS サインイン ユーザーガイド」の「ルートユーザーとしてサインインする」を参照してください。
2. ルートユーザーの多要素認証 (MFA) を有効にします。

   手順については、IAM ユーザーガイドの AWS アカウント 「ルートユーザー (コンソール) の仮想 MFA デバイスを有効にする」を参照してください。

管理アクセスを持つユーザーを作成する

1. IAM アイデンティティセンターを有効にします。

   手順については、「AWS IAM アイデンティティセンター ユーザーガイド」の「AWS IAM アイデンティティセンターの有効化」を参照してください。

2. IAM アイデンティティセンターで、ユーザーに管理アクセスを付与します。

   を ID ソース IAM アイデンティティセンターディレクトリ として使用する方法のチュートリアルについては、「 AWS IAM アイデンティティセンター ユーザーガイド」の「デフォルトを使用してユーザーアクセスを設定する IAM アイデンティティセンターディレクトリ」を参照してください。

管理アクセス権を持つユーザーとしてサインインする

- IAM アイデンティティセンターのユーザーとしてサインインするには、IAM アイデンティティセンターのユーザーの作成時に E メールアドレスに送信されたサインイン URL を使用します。

  IAM Identity Center ユーザーを使用してサインインする方法については、AWS サインイン「 ユーザーガイド」の AWS 「 アクセスポータルにサインインする」を参照してください。

追加のユーザーにアクセス権を割り当てる

1. IAM アイデンティティセンターで、最小特権のアクセス許可を適用するというベストプラクティスに従ったアクセス許可セットを作成します。

   手順については、「AWS IAM アイデンティティセンター ユーザーガイド」の「アクセス許可セットを作成する」を参照してください。

2. グループにユーザーを割り当て、そのグループにシングルサインオンアクセス権を割り当てます。

   手順については、「AWS IAM アイデンティティセンター ユーザーガイド」の「グループを追加する」を参照してください。

サービスアクセス権限を割り当てます。

ロールまたはユーザーに OpsWorks `AWSOpsWorks_FullAccess`および アクセス`AmazonS3FullAccess`許可を追加して、 スタックサービス (および OpsWorks スタックが依存する関連サービス) へのアクセスを有効にします。

アクセス許可の追加に関する詳細については、IAM ID アクセス許可の追加 (コンソール) を参照してください。

これですべてのセットアップステップが完了したので、このウォークスルーを開始できます。

ステップ 2: スタックを作成する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このステップでは、 OpsWorks スタックコンソールを使用してスタックを作成します。スタックは、共通の目的を持ち、一緒に管理するインスタンス (Amazon EC2 インスタンスなど) および関連 AWS リソースのコレクションです。(詳細については「スタック」 を参照してください)。このウォークスルーのインスタンスは 1 つのみです。

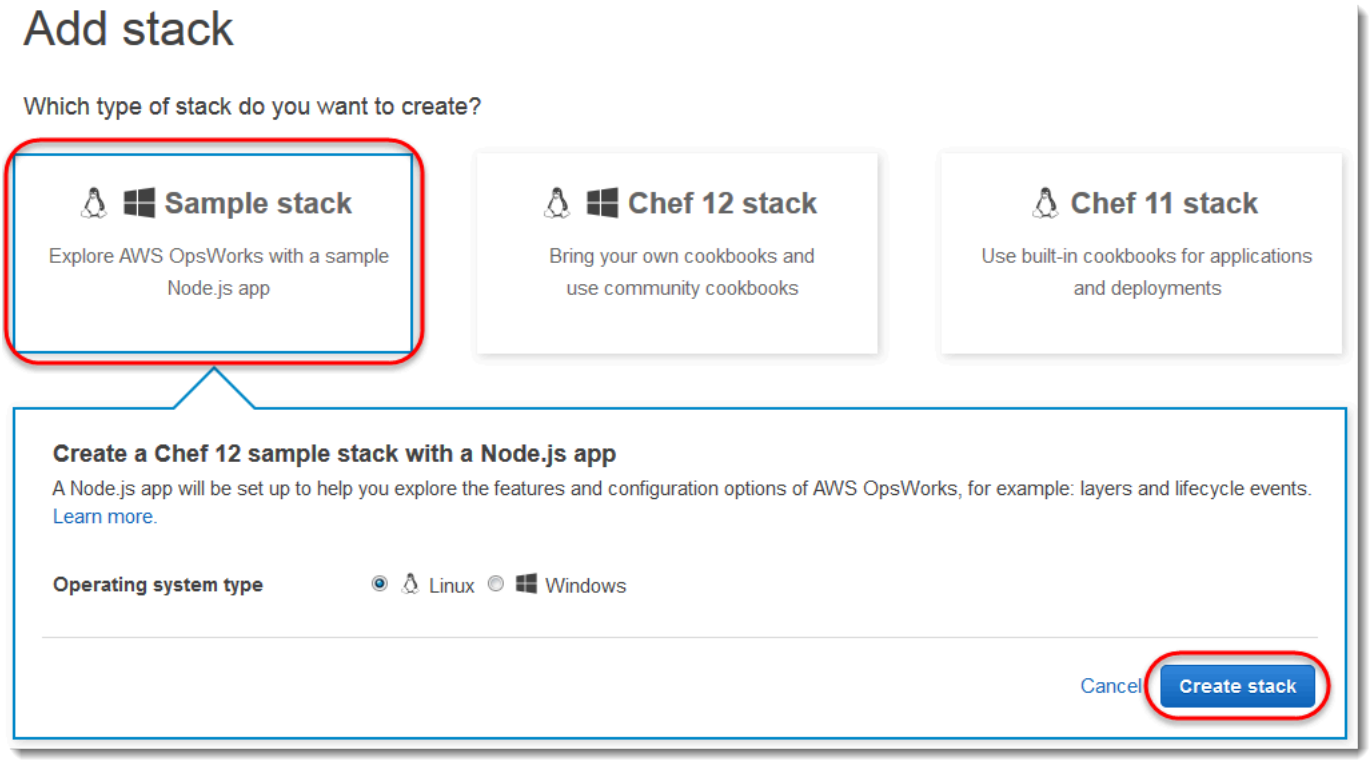
このステップを開始する前に、前提条件を完了してください。

スタックを作成するには

1. にサインイン AWS マネジメントコンソール し、https://console.aws.amazon.com/opsworks/ で OpsWorks コンソールを開きます。
2. 該当する場合、次のいずれかを実行します。

   - OpsWorks 「スタックへようこそ」ページが表示されている場合は、「最初のスタックを追加する」または「最初の OpsWorks スタックを追加する」を選択します (どちらの選択も同じことを行います)。[Add stack] ページが表示されます。
   - [OpsWorks Dashboard] ページが表示された場合は、[Add stack] を選択します。[Add stack] ページが表示されます。

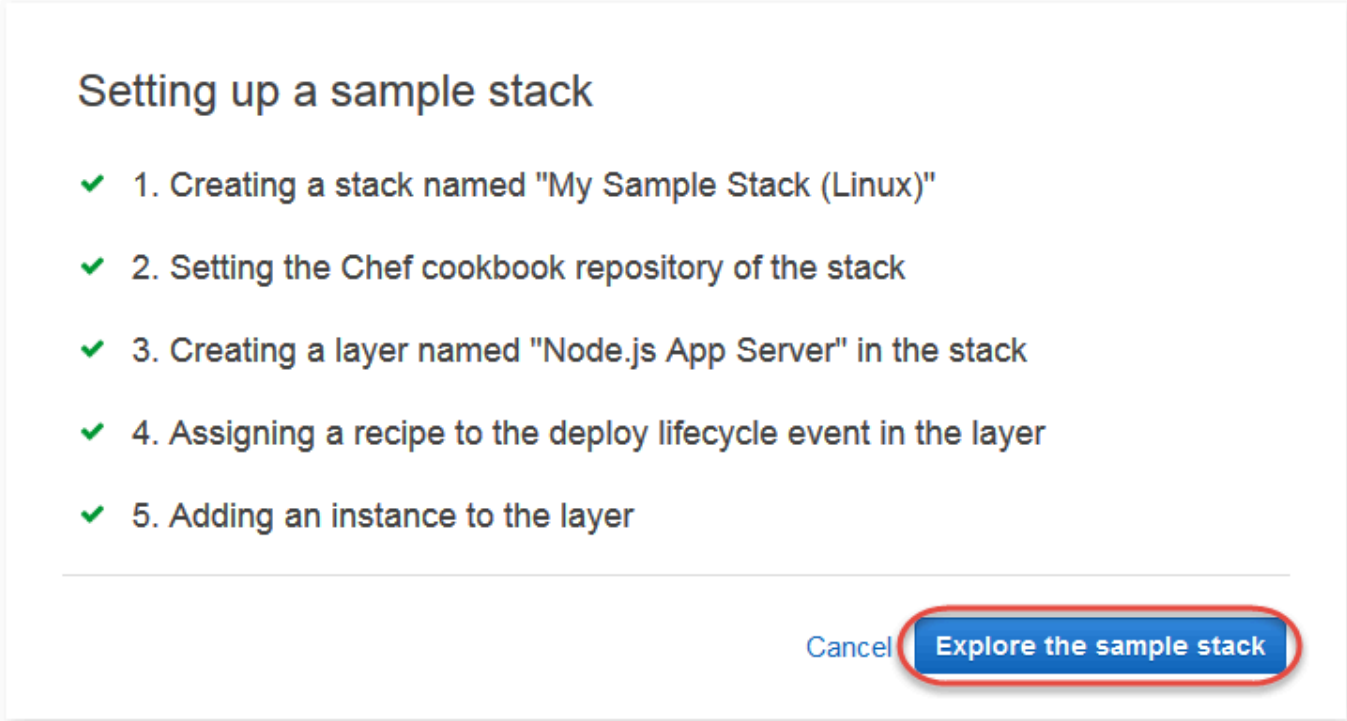
3. [Add stack] ページが表示されたら、すでに選択されていない場合は [Sample stack] を選択します。
4. [Operating system type] (オペレーションシステムタイプ) で [Linux] が既に選択されている状態で、[Create stack] (スタックの作成) を選択します：



5. OpsWorks スタックは、My Sample Stack (Linux) という名前のスタックを作成します。OpsWorks スタックは、アプリケーションをスタックにデプロイするために必要なすべてのコンポーネントも追加します。

   - レイヤー。これはインスタンスの設計図です。インスタンス設定、リソース、インストールされているパッケージ、セキュリティグループなどを指定します。(詳しくは、レイヤー を参照してください)。レイヤーの名前は Node.js App Server となります。
   - この場合のインスタンスは、Amazon Linux 2 EC2 インスタンスです。(インスタンスの詳細については、「インスタンス」を参照してください)。インスタンスのホスト名は nodejs-server1 です。
   - アプリケーション。これはインスタンスで実行するコードです (アプリケーションの詳細については、「アプリケーション」を参照してください)。アプリケーションの名前は Node.js Sample App です。

6. OpsWorks スタックがスタックを作成したら、サンプルスタックを探索を選択して My Sample Stack (Linux) ページを表示します (このウォークスルーを複数回完了すると、My Sample Stack (Linux) の後に 2 や 3 などの連番が表示される場合があります)。



次のステップでは、インスタンスを開始し、インスタンスにアプリケーションをデプロイします。

ステップ 3: インスタンスを起動し、アプリケーションをデプロイする

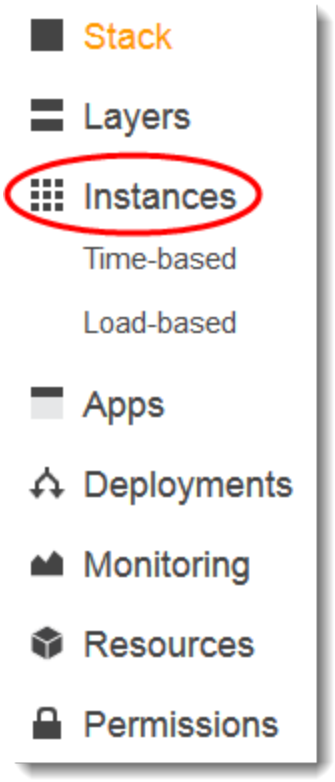
> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

これでインスタンスとアプリケーションが用意されたので、インスタンスを開始し、アプリケーションをインスタンスにデプロイします。

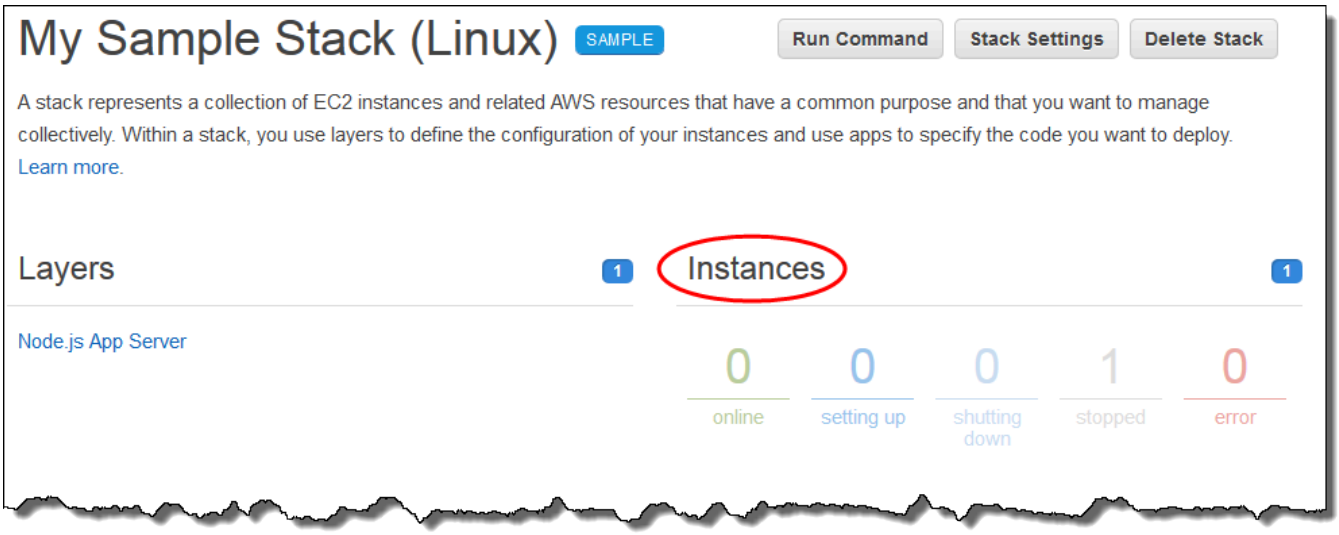
インスタンスを起動し、アプリケーションをデプロイするには

1. 次のいずれかを行います。

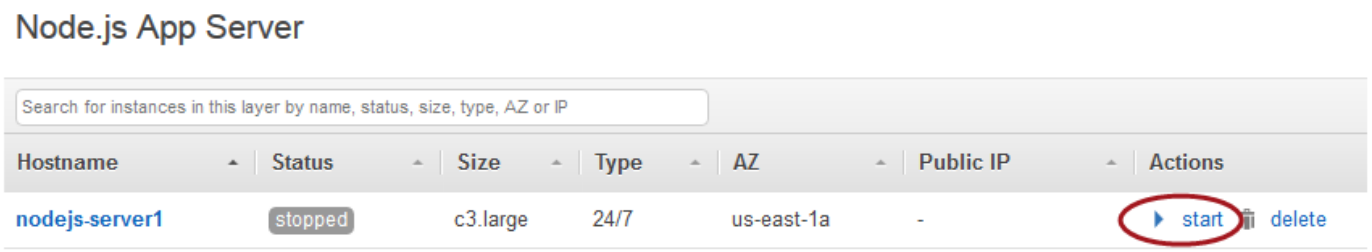
   - サービスのナビゲーションペインで、[Instances] を選択します。



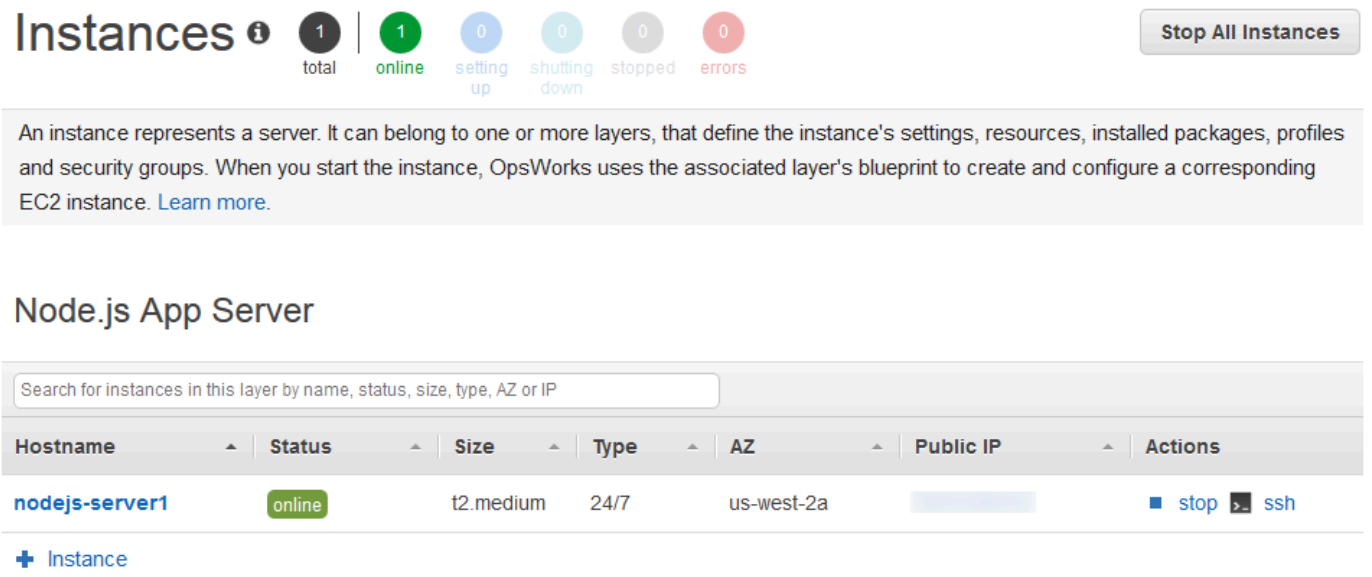
   - [My Sample Stack (Linux)] ページで、[Instances] を選択します。



2. [Instances] ページで、[Node.js App Server]、[nodejs-server1] に [start] を選択します。



3. [online] の円が明るい緑色に成るまで先の手順に進まないでください。(エラーメッセージが表示される場合は、デバッグとトラブルシューティングのガイド を参照してください)。
4. インスタンスがセットアップされると、 OpsWorks スタックはアプリケーションをインスタンスにデプロイします。
5. 結果は、続行する前に次のスクリーンショットに類似する必要があります (エラーメッセージが表示される場合は、「デバッグとトラブルシューティングのガイド」を参照してください)。



これで、インスタンスと、インスタンスにデプロイされたアプリケーションが用意されました。

次のステップでは、インスタンスでアプリケーションをテストします。

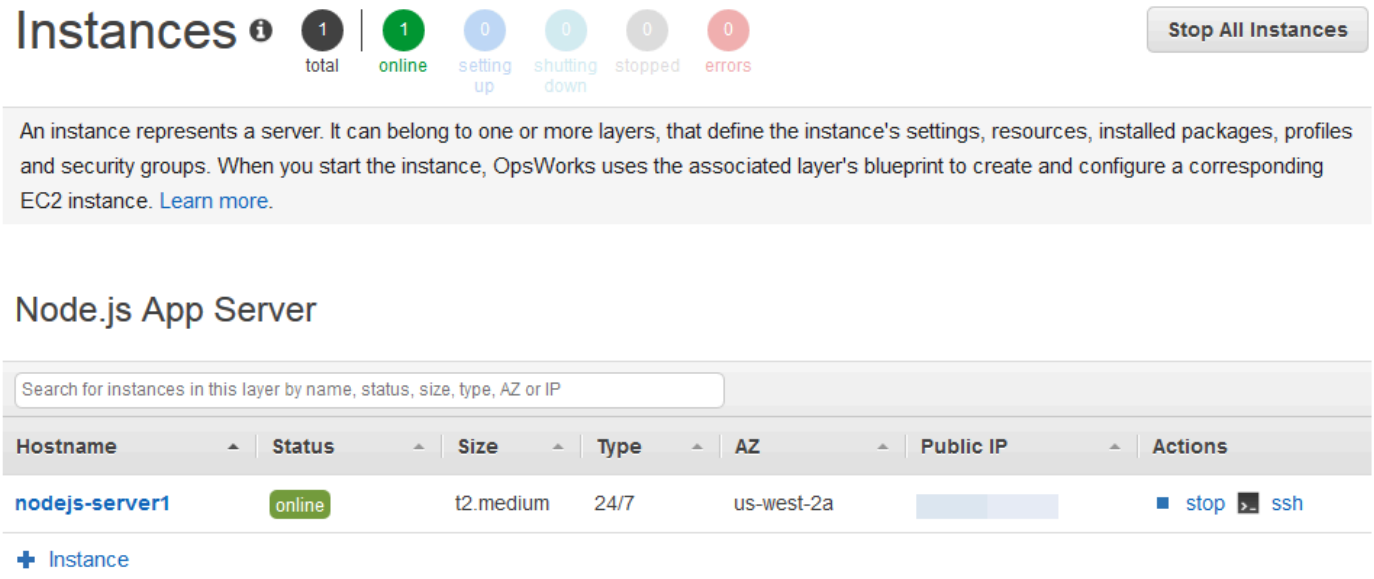
ステップ 4: インスタンスにデプロイされたアプリケーションをテストする

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

インスタンスでのアプリケーションのデプロイ結果をテストします。

インスタンス上のデプロイをテストするには

1. 前のステップで [Instances] (インスタンス) ページを表示した状態で、[Node.js App Server] (Node.js アプリケーションサーバー)、[nodejs-server1] (nodejs サーバー)、[Public IP] (パブリック ID) で IP アドレスを選択します。



2. おめでとうウェブページの [Leave a comment] テキストボックスにコメントを入力し、[Send] を選択してアプリケーションをテストします。コメントがウェブページに追加されます。コメントの追加を継続し、何度でも [Send] を選択します。

3. Twitter アカウントを持っている場合は、[Tweet] または [@AWSOpsWorks] を選択し、アプリケーションについてツイートまたは @AWSOpsWorks をフォローする画面の指示に従います。

これで、インスタンス上で正常にアプリケーションをテストおよびデプロイしました。

残りのステップでは、 OpsWorks スタックコンソールを使用して、スタックとそのコンポーネントの設定を確認できます。次のステップでは、スタックの設定を調べることで確認を開始できます。

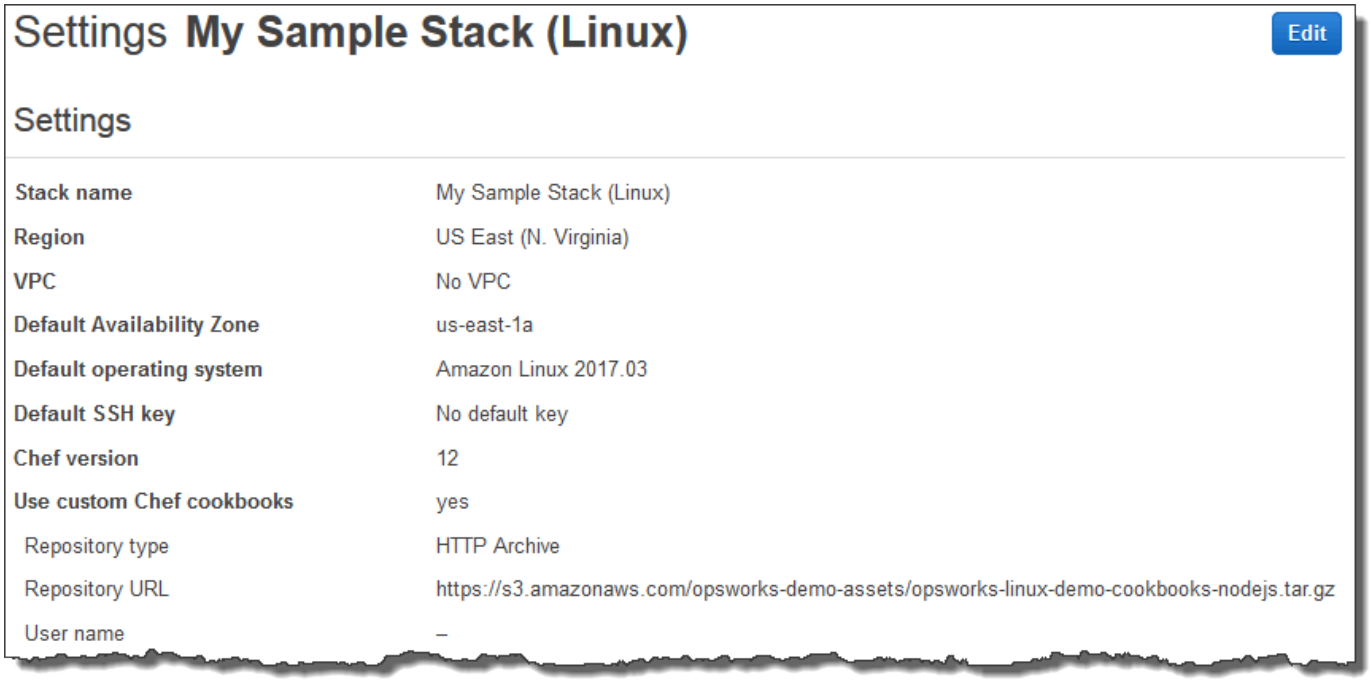
ステップ 5: スタックの設定を確認する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックがスタックをセットアップする方法を確認します。

スタックの設定を表示するには

1. サービスのナビゲーションバーで [Stack] を選択します。[My Sample Stack (Linux)] ページが表示されます。
2. [Stack Settings] を選択します。[Settings My Sample Stack (Linux)] ページに次のように表示されます。



設定の多くの詳細については、[Edit] を選択し、各設定の上にマウスを動かします (すべての設定に画面上の説明があるわけではありません)。これらの設定の詳細については、「新しいスタックを作成する」をご参照ください。

このウォークスルーで使用されている Chef クックブックを確認するには、GitHub の opsworks-linux-demo-cookbooks-nodejs リポジトリを開いてください。

次のステップでは、レイヤーの設定を確認できます。

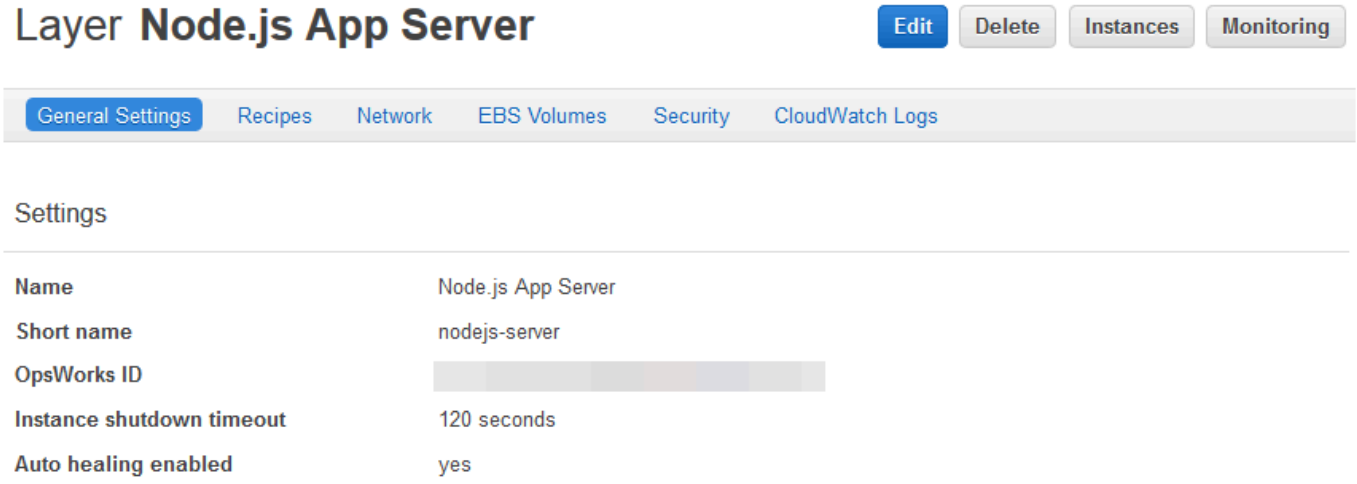
ステップ 6:レイヤーの設定を確認する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックがレイヤーを設定する方法を確認します。

レイヤーの設定を表示するには

1. サービスナビゲーションペインで、[Layers] (レイヤー) を選択します。[Layers] (レイヤー) ページが表示されます。
2. [Node.js App Server] を選択します。[Layer Node.js App Server] ページが表示されます。レイヤーの設定を表示するには、[General Settings]、[Recipes]、[Network]、[EBS Volumes]、および [Security] を選択します。



設定の多くの詳細については、[Edit] を選択し、各設定の上にマウスを動かします (すべての設定に画面上の説明があるわけではありません)。これらの設定の詳細については、「OpsWorks レイヤーの構成を編集する」をご参照ください。

次のステップでは、インスタンスの設定とログを確認できます。

ステップ 7: インスタンスの設定とログを確認する

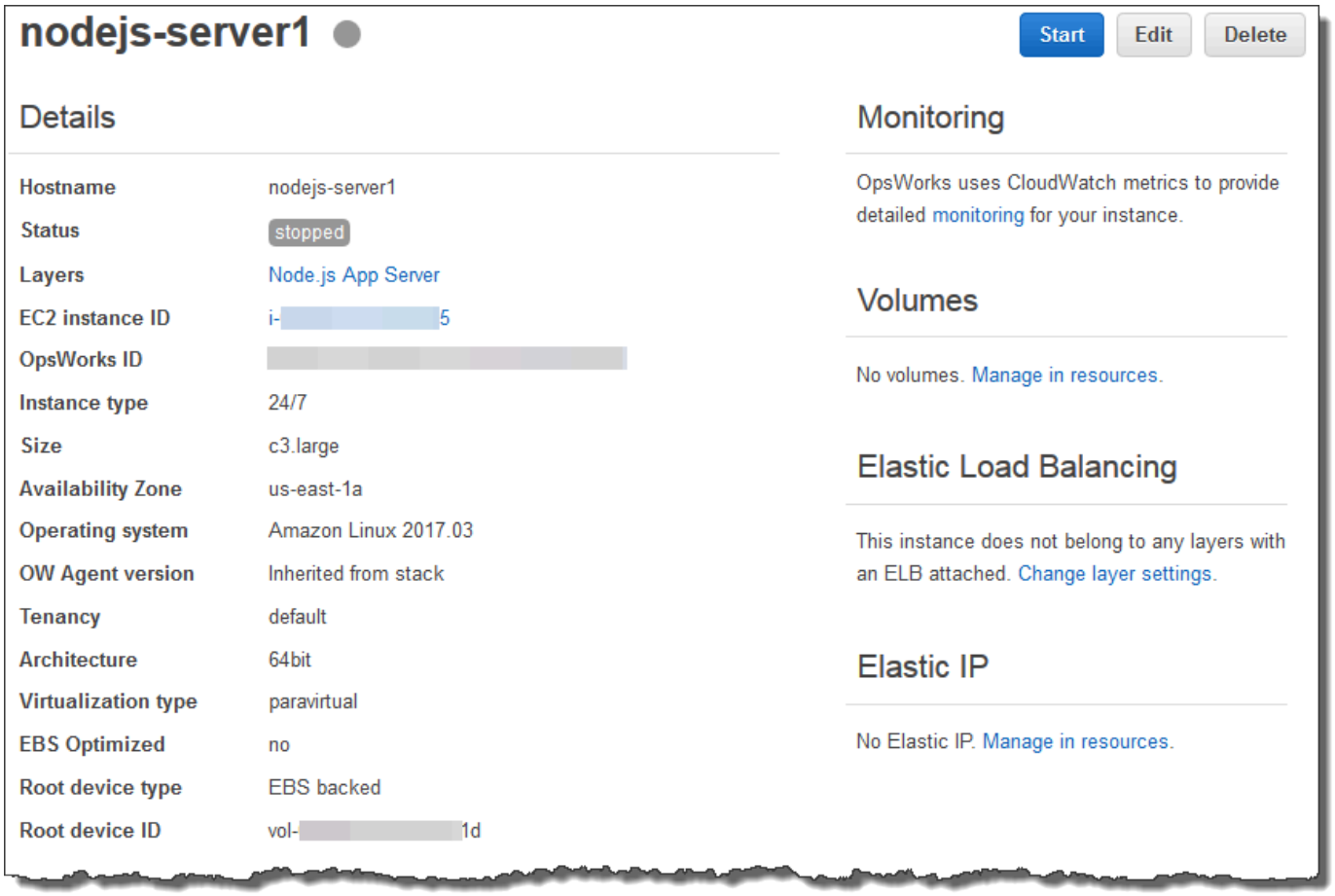
> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックがインスタンスの起動に使用した設定を確認します。 OpsWorks スタックが作成したインスタンスログを調べることもできます。

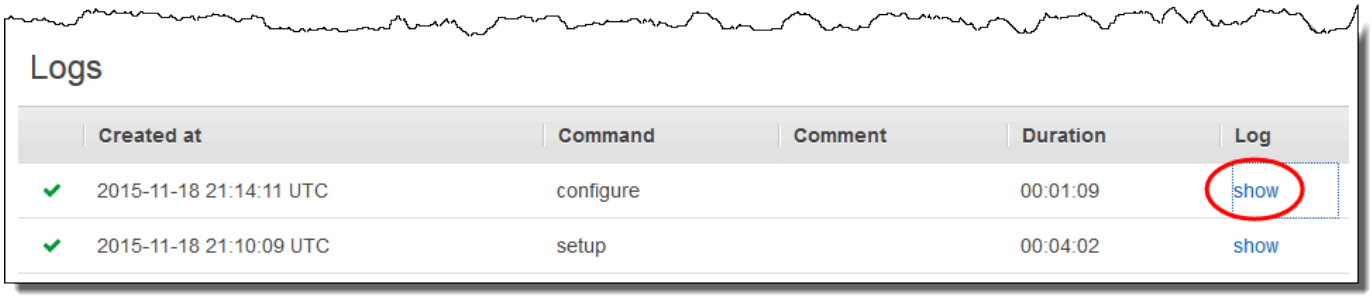
インスタンスの設定とログを表示するには

1. サービスのナビゲーションペインで、[Instances] を選択します。[Instances] ページが表示されます。

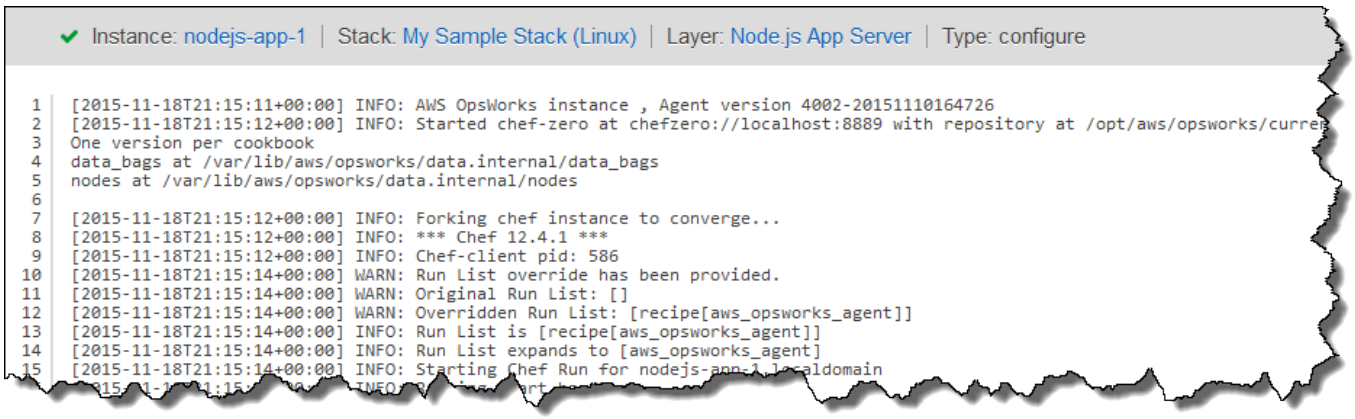
2. [Node.js App Server] で、[nodejs-server1] を選択します。インスタンスのプロパティページが表示されます。



3. インスタンスログを確認するには、[Logs] セクションの [Log] で [show] を選択します。



4. OpsWorks スタックは、別のウェブブラウザタブにログを表示します。



一部のインスタンス設定が表す内容を確認するには、[nodejs-server1] ページに戻り、[Stop] を選択して、確認のメッセージが表示されたら、[Stop] を選択します。[Status] (ステータス) が [stopping] (停止中) から [stopped] (停止) に変わった後に [Edit] (編集) を選択し、続いて各設定の上にカーソルを合わせます。(すべての設定に画面上の説明があるわけではありません)。これらの設定の詳細については、「レイヤーへのインスタンスの追加」をご参照ください。

設定の確認を終了したら、[Start] を選択してインスタンスを再起動し、[Status] が [online] に変わるまで待ちます。それ以外の場合、インスタンスは停止されたままであるため、後でアプリケーションをテストすることはできません。

> **Note**
>
> インスタンスにログインしてさらに詳しく調べる場合は、まずパブリック SSH キー (ssh-keygen や PuTTYgen などのツールを使用して作成できます) に関する情報を OpsWorks スタックに提供し、次に My Sample Stack (Linux) スタックでアクセス許可を設定して、ユーザーがインスタンスにログインできるようにする必要があります。手順については、「ユーザーのパブリック SSH キーの登録」および「SSH でのログイン」を参照してください。

次のステップでは、アプリケーションの設定を確認します。

ステップ 8: アプリケーションの設定を確認する

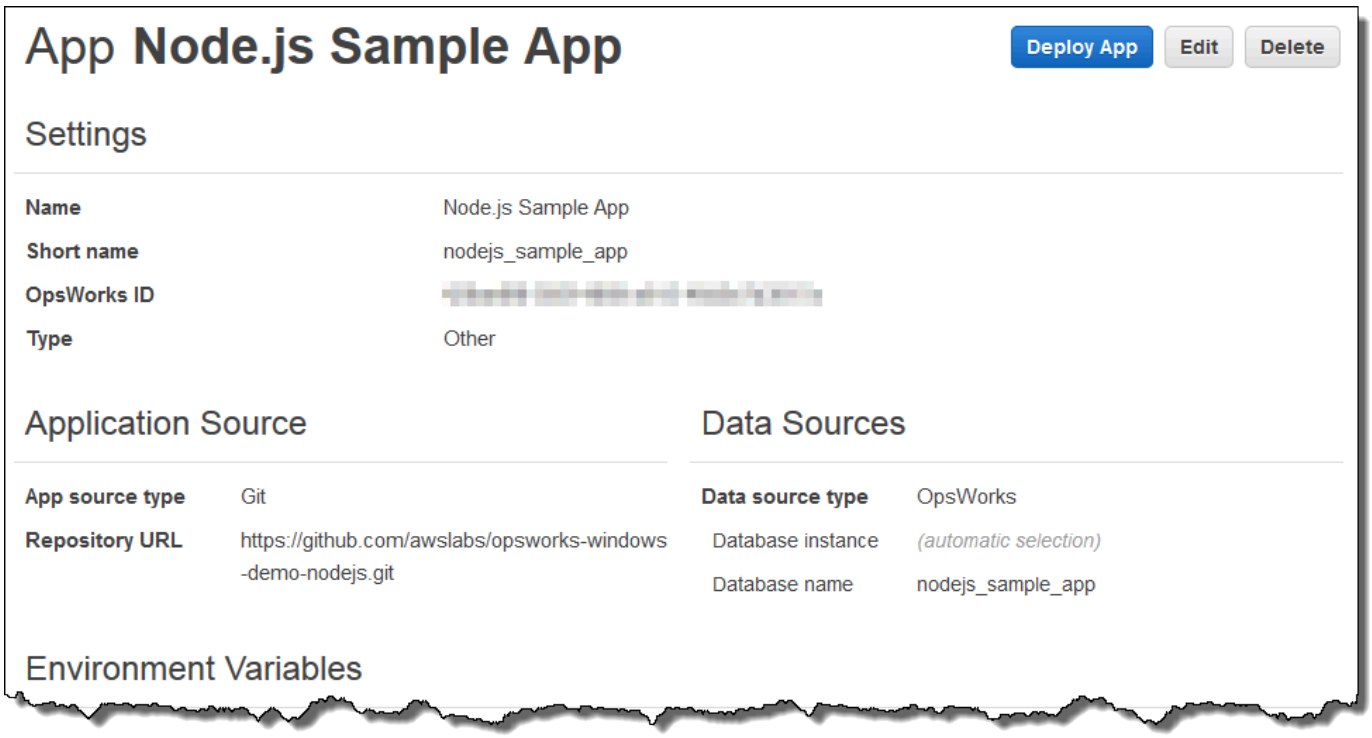
> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソ

リューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

アプリケーションに OpsWorks スタックが使用した設定を確認します。

アプリケーションの設定を表示するには

1. サービスナビゲーションペインで、[Apps] を選択します。[Apps] ページが表示されます。
2. [Node.js Sample App] を選択します。[App Node.js Sample App] ページが表示されます。



一部の設定が表す内容の詳細については、[Edit] を選択し、各設定の上にマウスを動かします。(すべての設定に画面上の説明があるわけではありません)。これらの設定の詳細については、「アプリケーションの追加」を参照してください。

次のステップでは、レイヤーのモニタリングレポートを確認します。

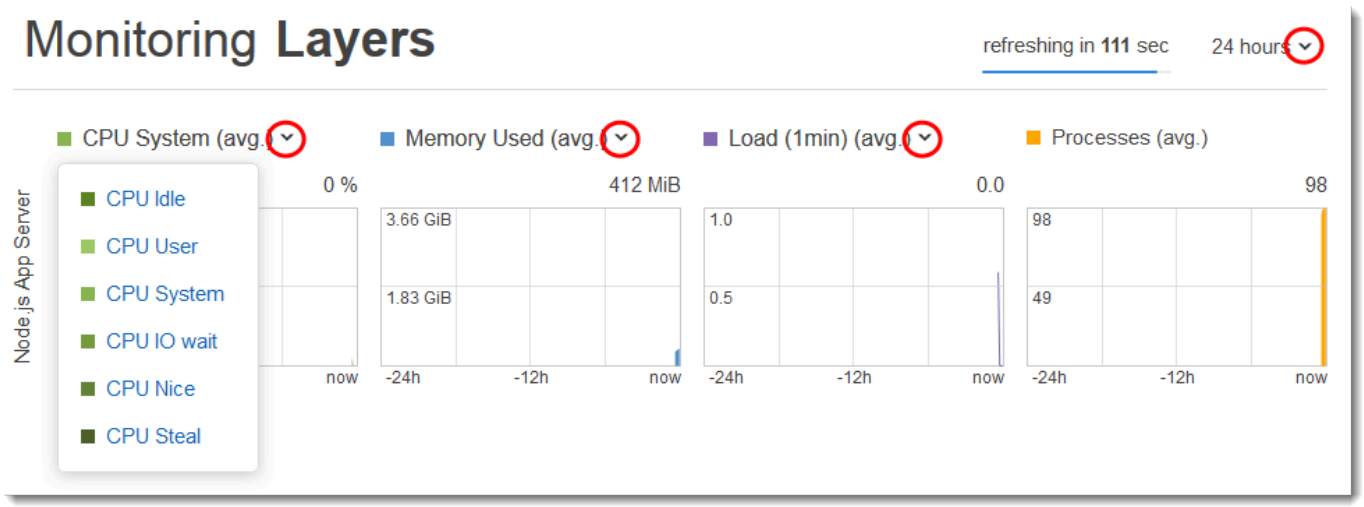
ステップ 9:レイヤーのモニタリングレポートを確認する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

スタックがレイヤーのコンピューティングパフォーマンスについて OpsWorks 生成するレポートを調べます。

レイヤーのモニタリングのレポートを表示するには

1. サービスのナビゲーションペインで、[Monitoring] を選択します。[Monitoring Layers] (レイヤーのモニタリング) ページが表示されます。
2. その他のビューを確認するには、[CPU]、[Memory]、[Load]、および時間の横にある矢印を選択します。



これらのレポートやその他のレポートの詳細については、「Amazon CloudWatch を使用する」および「モニタリング」を参照してください。

次のステップでは、追加のスタック設定を確認できます。

ステップ 10: 追加のスタック設定を確認する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このステップでは、追加のスタック設定を確認できます。

OpsWorks スタックは個別のデプロイを実行せず、追加のリソースをプロビジョニングせず、このスタックの一部として追加のアクセス許可を調整しなかったため、デプロイとコマンド、リソース、アクセス許可ページにはあまり関心がありません。これらの設定を表示する場合は、サービスナビゲーションペインで、それぞれ [Deployments]、[Resources]、および [Permissions] を選択します。これらのページが表す内容の詳細については、「アプリケーションのデプロイ」、「リソース管理」、および「ユーザー許可の管理」を参照してください。

次のステップでは、このウォークスルーに使用した AWS リソースをクリーンアップできます。このステップは任意です。 OpsWorks スタックの詳細については、これらの AWS リソースを引き続き使用することをお勧めします。ただし、これらの AWS リソースを周囲に保持すると、 AWS アカウントに継続的な料金が発生する可能性があります。これらの AWS リソースを後で使用するために保持する場合は、このウォークスルーを完了し、「」に進むことができます次のステップ。

ステップ 11 (オプション): クリーンアップする

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

AWS アカウントに追加料金が発生しないように、アプリケーションと、インスタンスや OpsWorks スタックスタックなど、このウォークスルーに使用された AWS リソースを削除できます。(詳細に

ついては、OpsWorks「料金表」を参照してください）。ただし、 OpsWorks スタックの詳細については、これらの AWS リソースを引き続き使用することをお勧めします。これらの AWS リソースを引き続き利用できるようにする場合は、このウォークスルーを完了し、「」に進むことができます次のステップ。

このチュートリアルのために作成したリソースに保存されているコンテンツには、個人識別情報が含まれている可能性があります。この情報を AWSが保存しないようにするには、このトピックの手順に従ってください。

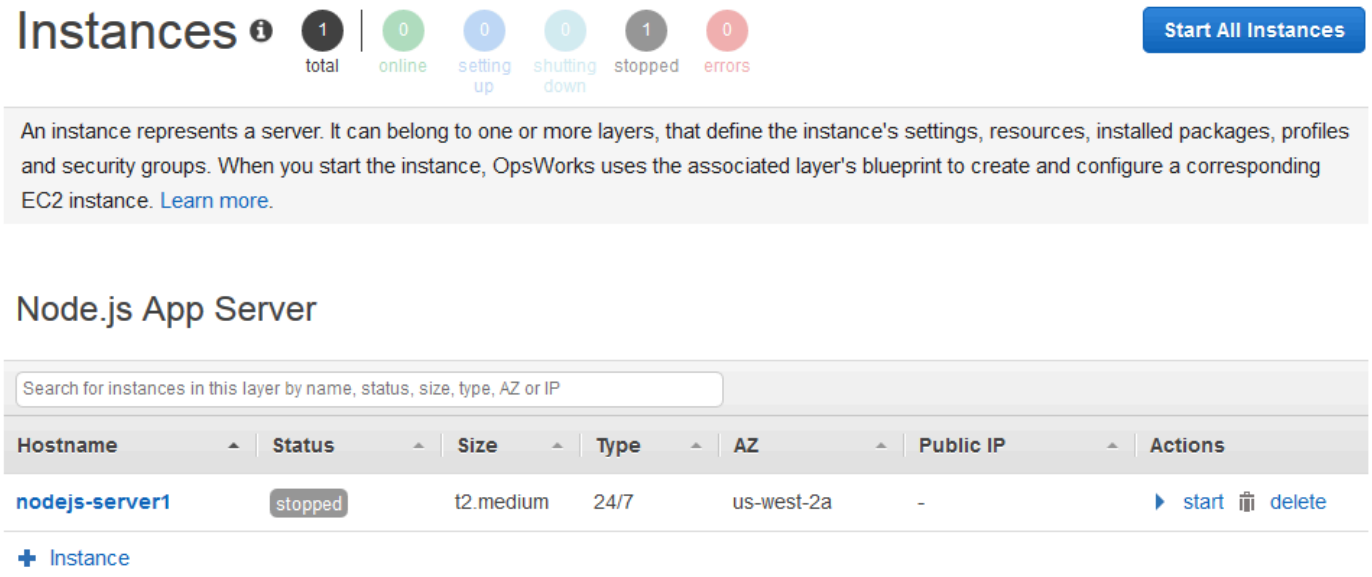
アプリケーションをスタックから削除するには

1. サービスナビゲーションペインで、[Apps] を選択します。[Apps] ページが表示されます。
2. [Node.js Sample App] で、[Actions] の [delete] を選択します。確認メッセージが表示されたら、[Delete] を選択します。アプリケーションを削除すると、[No apps] メッセージが表示されます。

スタックのインスタンスを削除するには

1. サービスのナビゲーションペインで、[Instances] を選択します。[Instances] ページが表示されます。
2. [Node.js App Server] で、[nodejs-server1]、[Actions] の [stop] を選択します。確認メッセージが表示されたら、[Stop] を選択します。

   このプロセスには数分かかることがあります。 OpsWorks スタックが終了すると、次の結果が表示されます。



3. [Actions] (アクション) で、[delete] (削除) を選択します。確認メッセージが表示されたら、[Delete] を選択します。インスタンスは削除され、[No instances] メッセージが表示されます。

スタックを削除するには

1. サービスナビゲーションペインで、[Stack] を選択します。[My Sample Stack (Linux)] ページが表示されます。
2. [Delete Stack] を選択します。確認メッセージが表示されたら、[Delete] を選択します。スタックが削除され、[OpsWorks Dashboard] ページが表示されます。

必要に応じて、他の AWS サービスや Amazon EC2 インスタンスへのアクセスに再利用しない場合は、このウォークスルーに使用したユーザーと Amazon EC2 キーペアを削除できます。手順については、「IAM ユーザーの削除 と Amazon EC2 キーペアと Linux インスタンスの削除」を参照してください。

これで、このウォークスルーが完了しました。詳細については、「次のステップ」を参照してください。

次のステップ

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソ

リューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このチュートリアルを完了したので、 OpsWorks スタックの使用について詳しく学習できます。

- スタックを使用して、この OpsWorks スタックを手動で再作成する練習をします。「入門ガイド: Linux」を参照してください。
- このウォークスルーで OpsWorks スタックが使用したクックブックとアプリケーションについて説明します。付属の 詳細: このウォークスルーで使用されているクックブックの学習 ウォークスルーの「詳細: このウォークスルーで使用されているアプリケーションの学習」および「入門ガイド: Linux」を参照してください。
- Windows OpsWorks インスタンスでの スタックの使用を練習します。「入門ガイド: Windows」を参照してください。
- 新しいスタックを作成する の使用方法を参照してスタックの詳細について学びます。
- 「OpsWorks レイヤーの構成を編集する」でレイヤーの詳細について学びます。
- 「レイヤーへのインスタンスの追加」でインスタンスの詳細について学びます。
- 「アプリケーションのデプロイ」でアプリケーションの詳細について学びます。
- クックブックとレシピ の詳細を確認してください。
- 独自のクックブックを作成します。「使用開始: クックブック」を参照してください。
- 「セキュリティと権限」でスタックへのアクセスをコントロールする方法について説明します。

Linux スタックの使用開始

Important

この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このチュートリアルでは、 OpsWorks スタックを使用して Node.js アプリケーション環境を作成する方法について説明します。終了すると、Chef 12 を実行する Amazon Elastic Compute Cloud (Amazon EC2) インスタンス、Node.js HTTP サーバー、および Twitter とやり取し、ウェブページにコメントを残すために使用できるウェブアプリケーションが作成されます。

Chef は、EC2 インスタンスなどのサーバーを設定および維持し、それらのサーバーでアプリケーションをデプロイおよび維持するためのサードパーティ製フレームワークです。Chef に慣れていない場合は、このウォークスルーを完了した後、 スタックが提供するすべての機能を最大限に活用できるように、Chef OpsWorks の詳細を学ぶことをお勧めします。(詳細については、Learn Chef のウェブサイトを参照してください。)

OpsWorks スタックは、Amazon Linux、Ubuntu Server、CentOS、Red Hat Enterprise Linux の 4 つの Linux ディストリビューションをサポートしています。このチュートリアルでは、Ubuntu Server を使用します。 OpsWorks スタックは Windows Server でも動作します。Windows Server スタックには同等のウォークスルーがありますが、このウォークスルーを最初に完了して、スタックと Chef OpsWorks に関する基本的な概念を学習することをお勧めします。このウォークスルーを完了した後で、入門ガイド: Windows のウォークスルーを参照してください。

トピック

- ステップ 1: 前提条件を完了する
- ステップ 2: スタックを作成する
- ステップ 3: スタックにレイヤーを追加する
- ステップ 4: インスタンスにデプロイするアプリケーションを指定する
- ステップ 5: インスタンスを起動する
- ステップ 6: インスタンスにアプリケーションをデプロイする
- ステップ 7: インスタンスにデプロイされたアプリケーションをテストする
- ステップ 8 (オプション): クリーンアップする
- 次のステップ
- 詳細: このウォークスルーで使用されているクックブックの学習
- 詳細: このウォークスルーで使用されているアプリケーションの学習

ステップ 1: 前提条件を完了する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

ウォークスルーを開始する前に、次のセットアップ手順を完了します。これらのセットアップ手順には、 AWS アカウントへのサインアップ、管理ユーザーの作成、 OpsWorks スタックへのアクセス許可の割り当てが含まれます。

すでに「使用開始: サンプル」ウォークスルーを完了している場合はこのウォークスルーの前提条件を満たしているため、省略して「ステップ 2: スタックを作成する」にお進みください。

トピック

- にサインアップする AWS アカウント
- 管理アクセスを持つユーザーを作成する
- サービスアクセス権限を割り当てます。

にサインアップする AWS アカウント

がない場合は AWS アカウント、次の手順を実行して作成します。

にサインアップするには AWS アカウント

1. https://portal.aws.amazon.com/billing/signup を開きます。
2. オンラインの手順に従います。

   サインアップ手順の一環として、電話またはテキストメッセージを受け取り、電話キーパッドで検証コードを入力します。

   にサインアップすると AWS アカウント、 AWS アカウントのルートユーザー が作成されます。ルートユーザーには、アカウントのすべての AWS のサービス とリソースへのアクセス権があります。セキュリティベストプラクティスとして、ユーザーに管理アクセス権を割り当て、ルー

トユーザーアクセスが必要なタスクの実行にはルートユーザーのみを使用するようにしてください。

AWS サインアッププロセスが完了すると、 から確認メールが送信されます。https://aws.amazon.com/ の [マイアカウント] をクリックして、いつでもアカウントの現在のアクティビティを表示し、アカウントを管理することができます。

管理アクセスを持つユーザーを作成する

にサインアップしたら AWS アカウント、日常的なタスクにルートユーザーを使用しないように AWS アカウントのルートユーザー、 を保護し AWS IAM アイデンティティセンター、 を有効にして管理ユーザーを作成します。

を保護する AWS アカウントのルートユーザー

1. ルートユーザーを選択し、 AWS アカウント E メールアドレスを入力して、アカウント所有者AWS マネジメントコンソールとして にサインインします。次のページでパスワードを入力します。

   ルートユーザーを使用してサインインする方法については、「AWS サインイン ユーザーガイド」の「ルートユーザーとしてサインインする」を参照してください。
2. ルートユーザーの多要素認証 (MFA) を有効にします。

   手順については、IAM ユーザーガイドの AWS アカウント 「ルートユーザー (コンソール) の仮想 MFA デバイスを有効にする」を参照してください。

管理アクセスを持つユーザーを作成する

1. IAM アイデンティティセンターを有効にします。

   手順については、「AWS IAM アイデンティティセンター ユーザーガイド」の「AWS IAM アイデンティティセンターの有効化」を参照してください。
2. IAM アイデンティティセンターで、ユーザーに管理アクセスを付与します。

   を ID ソース IAM アイデンティティセンターディレクトリ として使用する方法のチュートリアルについては、AWS IAM アイデンティティセンター 「 ユーザーガイド」の「デフォルトを使用してユーザーアクセスを設定する IAM アイデンティティセンターディレクトリ」を参照してください。

管理アクセス権を持つユーザーとしてサインインする

- IAM アイデンティティセンターのユーザーとしてサインインするには、IAM アイデンティティセンターのユーザーの作成時に E メールアドレスに送信されたサインイン URL を使用します。

  IAM Identity Center ユーザーを使用してサインインする方法については、AWS サインイン「 ユーザーガイド」の AWS 「 アクセスポータルにサインインする」を参照してください。

追加のユーザーにアクセス権を割り当てる

1. IAM アイデンティティセンターで、最小特権のアクセス許可を適用するというベストプラクティスに従ったアクセス許可セットを作成します。

   手順については、「AWS IAM アイデンティティセンター ユーザーガイド」の「アクセス許可セットを作成する」を参照してください。
2. グループにユーザーを割り当て、そのグループにシングルサインオンアクセス権を割り当てます。

   手順については、「AWS IAM アイデンティティセンター ユーザーガイド」の「グループを追加する」を参照してください。

サービスアクセス権限を割り当てます。

ロールまたはユーザーに OpsWorks `AWSOpsWorks_FullAccess`および アクセス`AmazonS3FullAccess`許可を追加して、 スタックサービス (および OpsWorks スタックが依存する関連サービス) へのアクセスを有効にします。

アクセス許可の追加に関する詳細については、IAM ID アクセス許可の追加 (コンソール) を参照してください。

これですべてのセットアップステップが完了したので、このウォークスルーを開始できます。

ステップ 2: スタックを作成する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS

re:Post または AWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックコンソールを使用してスタックを作成します。スタックは、共通の目的を持ち、一緒に管理するインスタンスおよび関連 AWS リソースのコレクションです。(詳細については「スタック」 を参照してください)。このウォークスルーでは、インスタンスは 1 つのみです。

開始する前に、まだ行っていない場合は前提条件を満たします。

スタックを作成するには

1. にサインイン AWS マネジメントコンソール し、https://console.aws.amazon.com/opsworks/ で OpsWorks コンソールを開きます。
2. 該当する場合、次のいずれかを実行します。
   - OpsWorks 「スタックへようこそ」ページが表示された場合は、「最初のスタックを追加する」または「最初の OpsWorks スタックを追加する」を選択します (どちらの選択も同じことを行います) 。[Add stack] ページが表示されます。
   - [OpsWorks Dashboard] ページが表示された場合は、[Add stack] を選択します。[Add stack] ページが表示されます。
3. [Add stack] ページが表示されたら、すでに選択されていない場合は [Chef 12 stack] を選択します。
4. [Stack name] ボックスに、**`MyLinuxDemoStack`** のようなスタックの名前を入力します (別の名前を入力することはできますが、必ずこのウォークスルー全体でこれを `MyLinuxDemoStack` に置き換えてください)。
5. [リージョン] で [米国西部(オレゴン)] を選択します。
6. [VPC] で、次のいずれかを実行します。
   - VPC が利用できる場合は、これを選択します。(詳しくは、VPC でのスタックの実行 を参照してください)。
   - それ以外の場合、[No VPC] を選択します。
7. [Default operating system] で、[Linux] および [Ubuntu 18.04 LTS] を選択します。
8. [Use custom Chef cookbooks] で、[Yes] を選択します。
9. [Repository type] で、[Http Archive] を選択します。

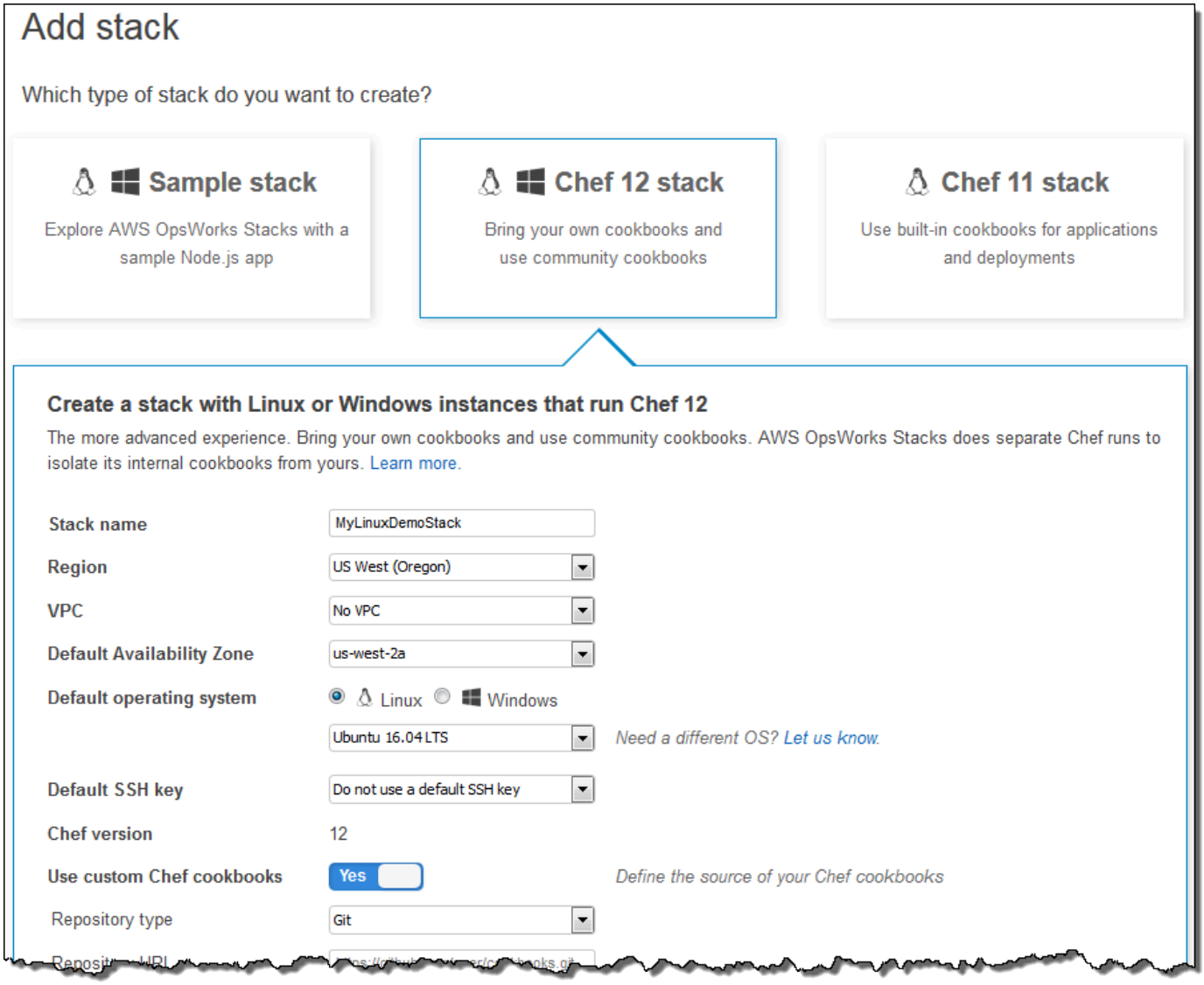
10. [Repository URL] に、「**`https://s3.amazonaws.com/opsworks-demo-assets/opsworks-linux-demo-cookbooks-nodejs.tar.gz`**」と入力します。
11. 以下はデフォルト値のままにします。
    - [Default Availability Zone] (us-west-2a)
    - [Default SSH key] (Do not use a default SSH key)
    - [User name] (空白)
    - [Password] (空白)
    - [Stack color] (dark blue)
12. [Advanced] (アドバンスト) を選択します。
13. [IAM ロール] で、次のいずれかを行います (詳細については、「OpsWorks スタックがユーザーに代わって動作することを許可する」を参照してください)。
    - [aws-opsworks-service-role] が利用できる場合は、これを選択します。
    - [aws-opsworks-service-role] が利用できない場合は、[New IAM role] を選択します。
14. [Default IAM instance profile] (デフォルトのIAM インスタンスプロファイル) で、次のいずれかを行います (詳細については、「EC2 インスタンスで実行するアプリケーションに対するアクセス許可の指定」を参照してください)。
    - [aws-opsworks-ec2-role] が利用できる場合は、これを選択します。
    - [aws-opsworks-ec2-role] を利用できない場合は、[New IAM instance profile] (新しい IAM インスタンスプロファイル) を選択します。
15. [API endpoint region] の場合、スタックを関連付けるリージョンの API エンドポイントを選択します。スタックを米国東部 (バージニア北部) リージョンのエンドポイント内の米国西部 (オレゴン) リージョンに配置する場合は、[us-east-1] を選択します。スタックを米国西部 (オレゴン) リージョンに配置するとともに米国西部 (オレゴン) リージョンのエンドポイントに関連付ける場合は、[us-west-2] を選択します。

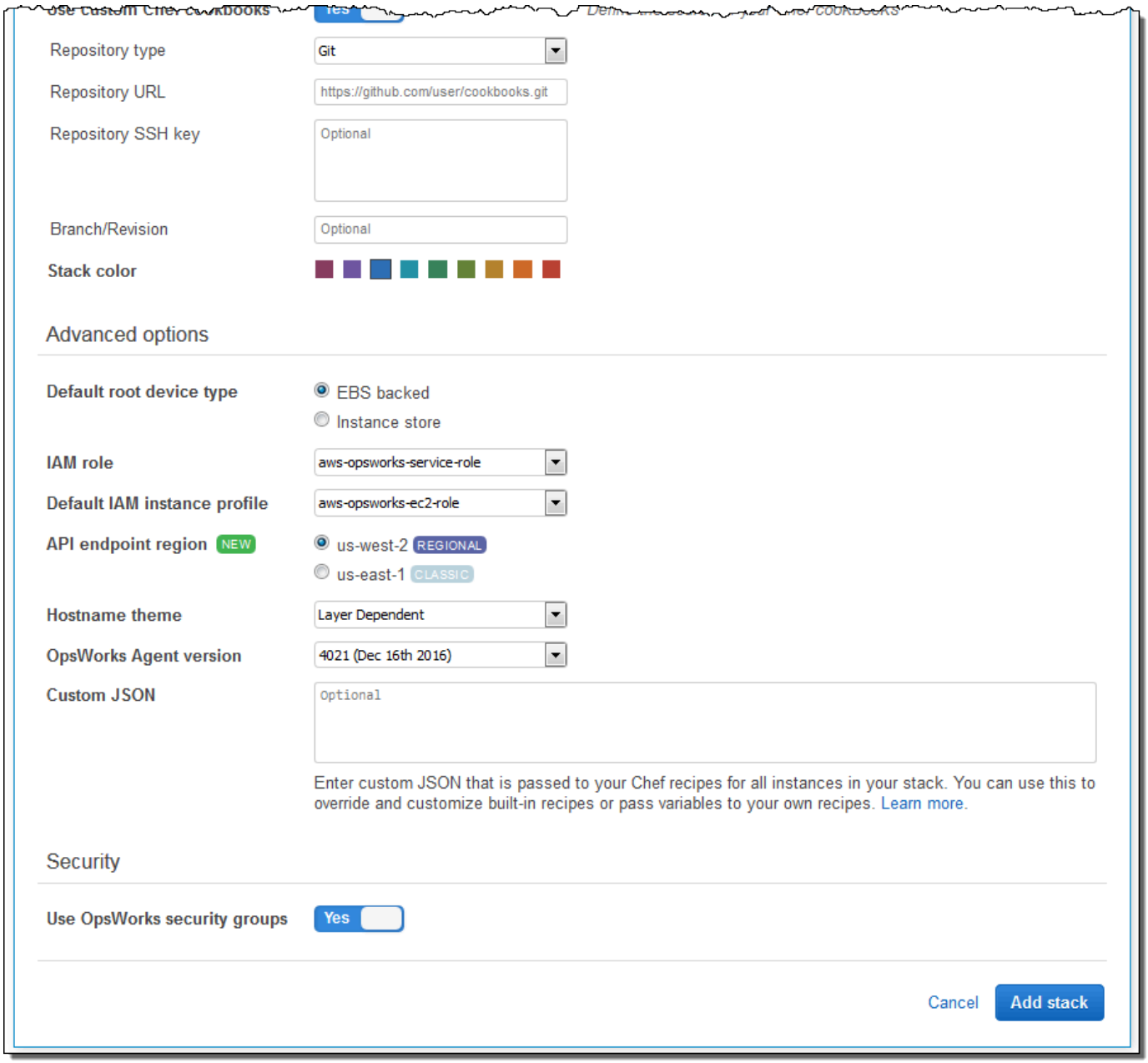
    > **Note**
    >
    > 米国東部 (バージニア北部) リージョンエンドポイントには下位互換性 AWS リージョンのために古い が含まれていますが、管理する場所に最も近いリージョンエンドポイントを選択するのがベストプラクティスです AWS。詳細については、「リージョンのサポート」を参照してください。

16. 以下はデフォルト値のままにします。

- [Default root device type] (EBS backed)
- [Hostname theme] (Layer Dependent)
- [OpsWorks Agent version] (最新バージョン)
- [Custom JSON] (空白)
- [Use OpsWorks security groups] (Yes)

17. 結果は、おそらく [VPC]、[IAM role] (IAM ロール)、および [Default IAM instance profile] (デフォルト IAM インスタンスプロファイル) を除き、次のスクリーンショットに一致します。





18. スタックの追加 を選択します。 OpsWorks スタックはスタックを作成し、MyLinuxDemoStack ページを表示します。

このウォークスルー用の正しい設定のスタックが作成されました。

次のステップでは、スタックにレイヤーを追加します。

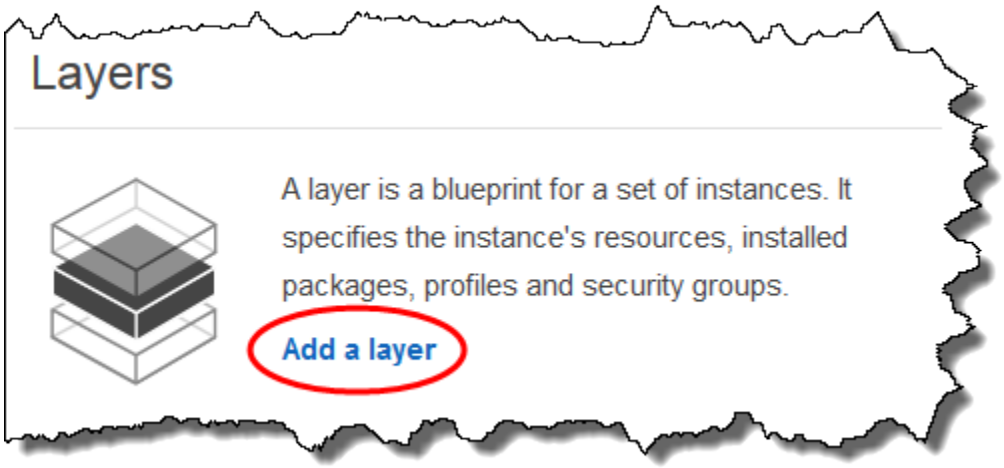
ステップ 3: スタックにレイヤーを追加する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

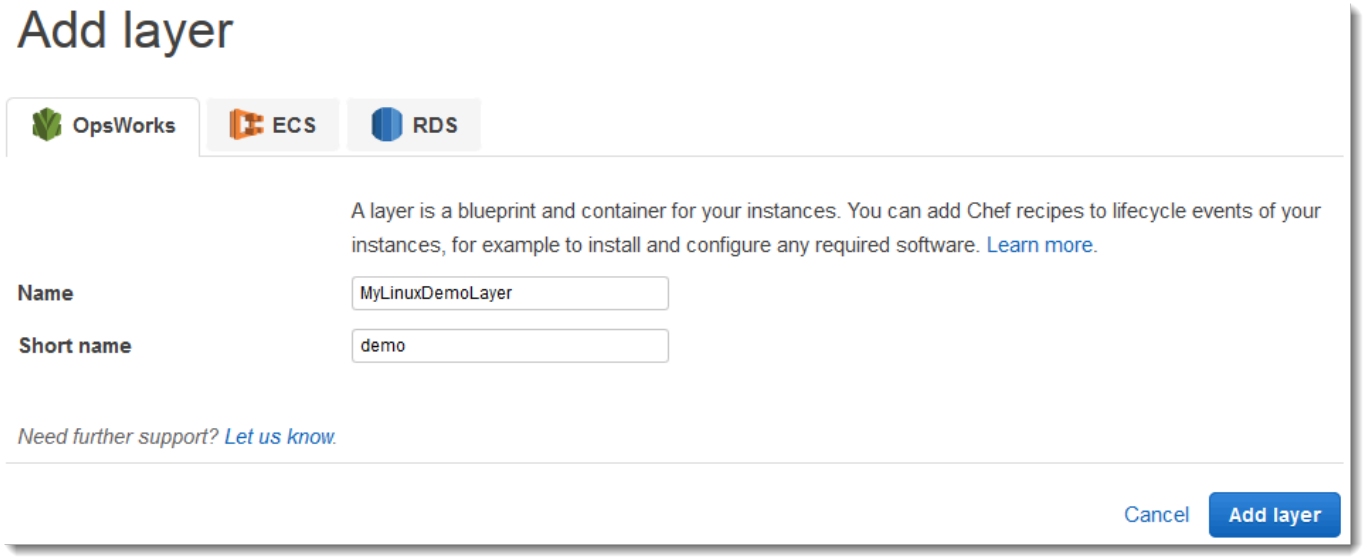
[レイヤー] は、Amazon EC2 インスタンスなど、一連のインスタンス用の設計図です。インスタンス設定、リソース、インストールされているパッケージ、セキュリティグループなどの情報を指定します。次に、スタックにレイヤーを追加します (レイヤーの詳細については、「レイヤー」を参照してください)。

レイヤーをスタックに追加するには

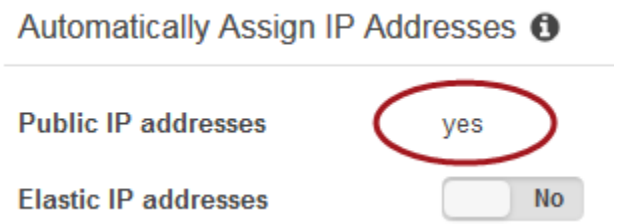
1. 前のステップで表示される [MyLinuxDemoStack] ページで、[Layers] (レイヤー) の [Add a layer] (レイヤーの追加) を選択します。



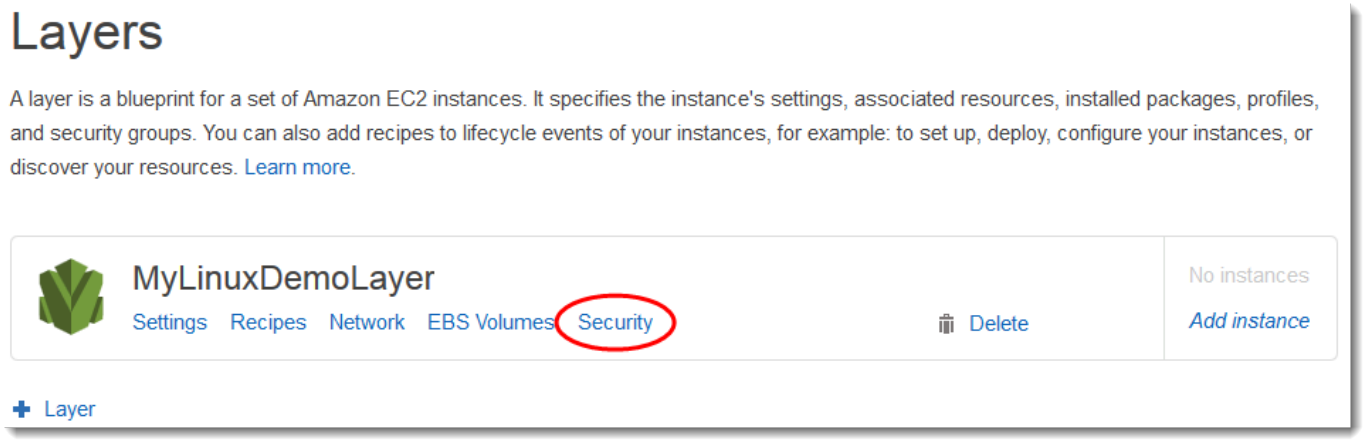
2. [Add Layer] (レイヤーを追加) ページが表示されます。[OpsWorks] タブで、[Name] に「**MyLinuxDemoLayer**」と入力します。(別の名前を入力することはできますが、必ずこのウォークスルー全体でこれを `MyLinuxDemoLayer` に置き換えてください)。
3. [Short name] に「**demo**」と入力します (別の名前を入力することはできますが、必ずこのウォークスルー全体でこれを `demo` に置き換えてください)。



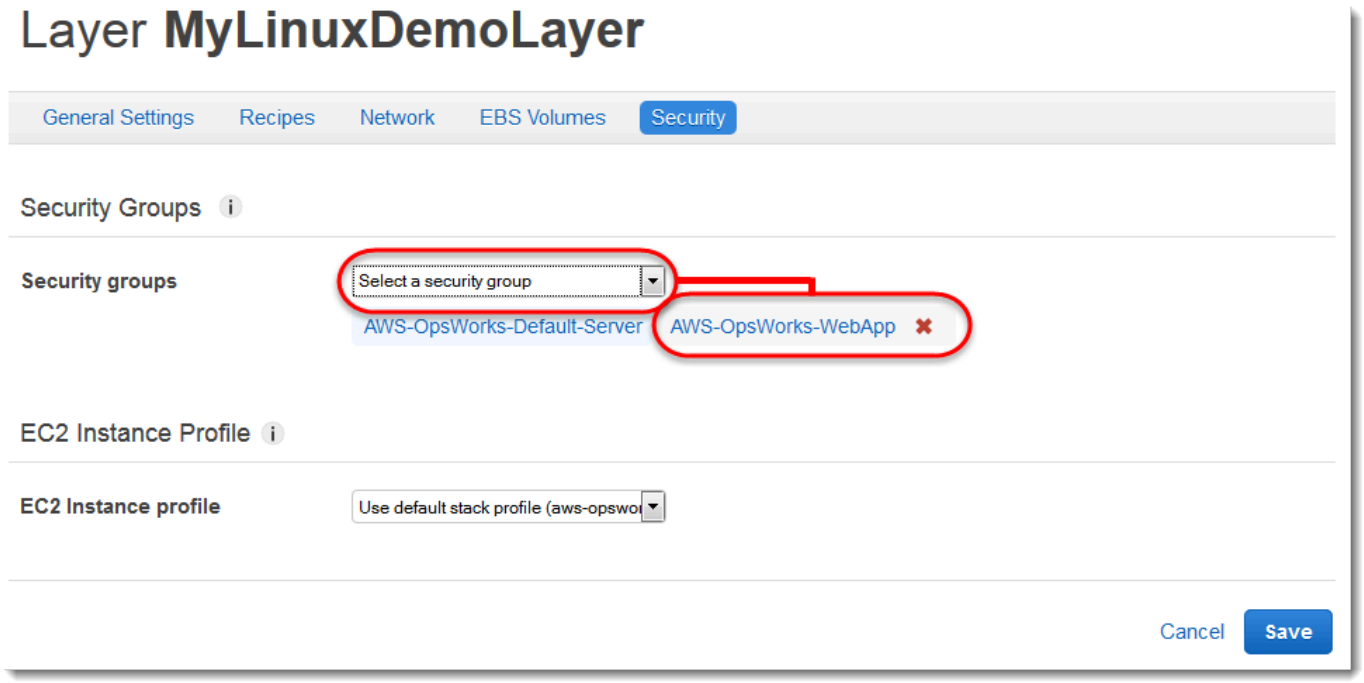
4. レイヤーの追加を選択します。 OpsWorks スタックはレイヤーを作成し、レイヤーページを表示します。
5. [Layers] (レイヤー) ページの [MyLinuxDemoLayer] で、[Network] (ネットワーク) を選択します。
6. [Network] タブの、[Automatically Assign IP Addresses] で、[Public IP addresses] が [yes] に設定されていることを確認します。変更した場合、[Save] を選択します。



7. [Layers] (レイヤー) ページで、[Security] (セキュリティ) を選択します。



8. [Layer MyLinuxDemoLayer] ページが、[Security] タブが開かれた状態で表示されます。[Security groups] で、[AWS-OpsWorks-WebApp] を選択し、[Save] を選択します。



9. AWS-OpsWorks-WebApp セキュリティグループがレイヤーに追加されます (このセキュリティグループがあると、このウォークスルーで後述するインスタンス上のアプリにユーザーが接続できるようになります。このセキュリティグループがないと、ユーザーはウェブブラウザーでインスタンスに接続できないというメッセージを受け取ります)。

このウォークスルー用の正しい設定のレイヤーが作成されました。

次のステップでは、インスタンスにデプロイするアプリケーションを指定します。

ステップ 4: インスタンスにデプロイするアプリケーションを指定する

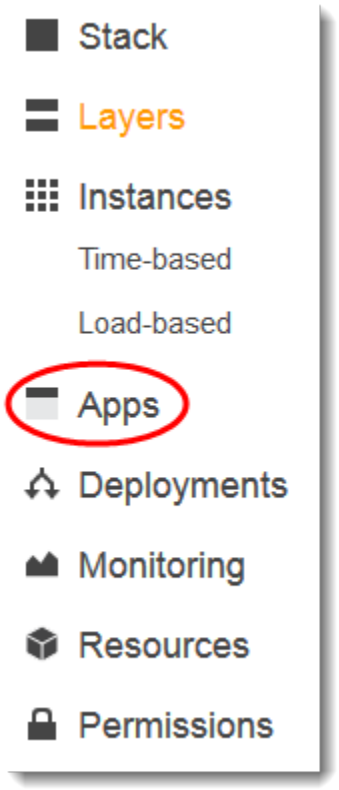
> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このウォークスルーの後半でインスタンスにデプロイするアプリについて OpsWorks スタックに伝えます。このコンテキストでは、 OpsWorks Stacks はインスタンスで実行するコードとしてアプリケーションを定義します。(詳細については「アプリケーション」 を参照してください)。

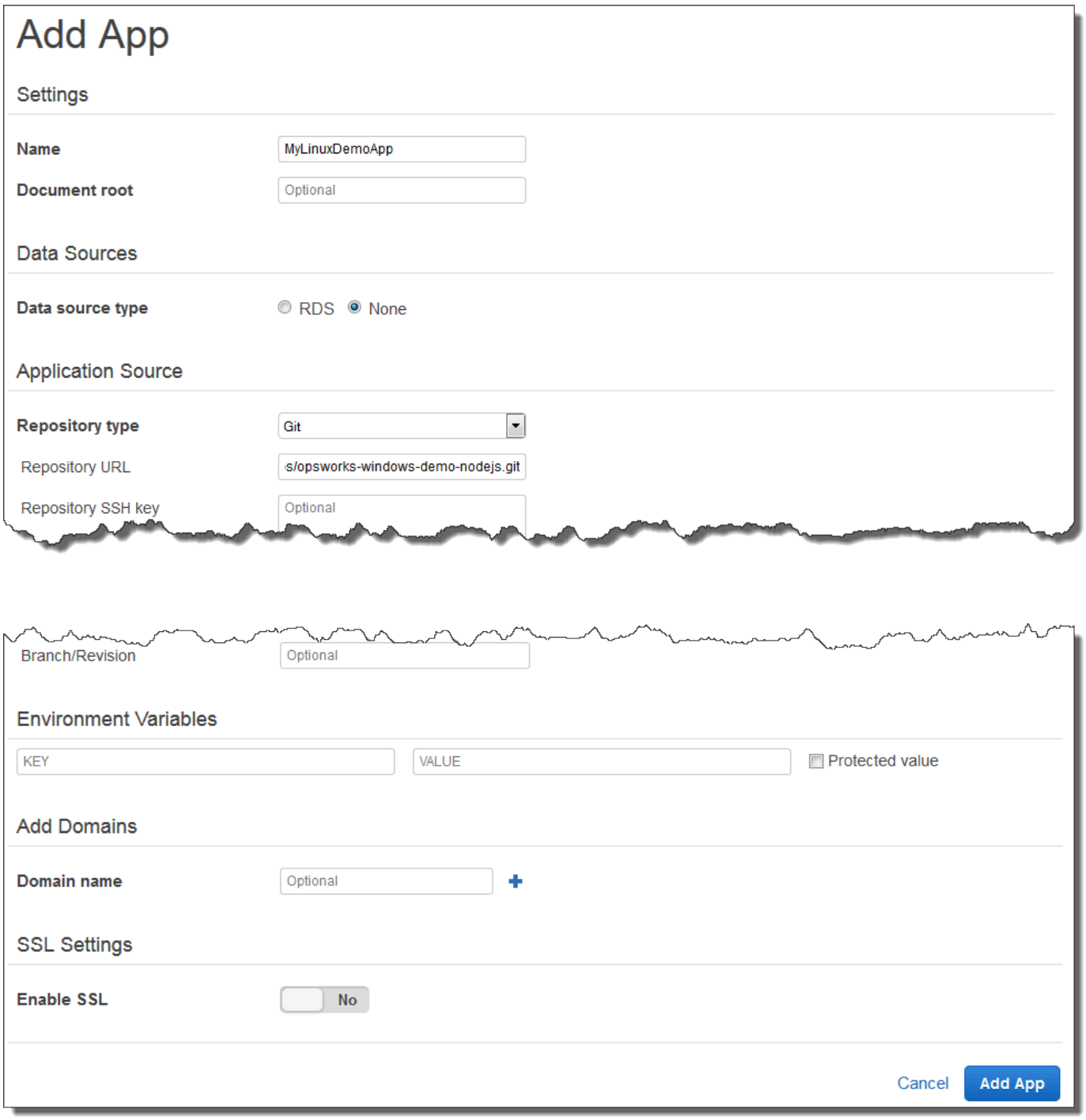
このセクションの手順は、Chef 12 以降のスタックに適用されます。Chef 11 スタックのレイヤーにアプリを追加する方法については、「ステップ 2.4: アプリケーション - Chef 11 を作成してデプロイする」を参照してください。

デプロイするアプリケーションを指定するには

1. サービスナビゲーションペインで、[Apps] を選択します。



2. [Apps] ページが表示されます。[Add an app] を選択します。[Add App] ページが表示されます。
3. [Settings] で、[Name] に「**MyLinuxDemoApp**」と入力します (別の名前を入力することはできますが、必ずこのウォークスルー全体でこれを `MyLinuxDemoApp` に置き換えてください)。
4. [Application Source]、[Repository URL] に、「**https://github.com/awslabs/opsworks-windows-demo-nodejs.git**」と入力します。
5. 以下はデフォルト値のままにします。
   - [Settings]、[Document root] (空白)
   - [Data Sources]、[Data source type] (None)
   - [Repository type] (Git)
   - [Repository SSH key] (空白)
   - [Branch/Revision] (空白)
   - [Environment Variables] (空白の [KEY]、空白の [VALUE]、[Protected Value] はオフ)
   - [Add Domains]、[Domain Name] (空白)
   - [SSL Settings]、[Enable SSL] (No)



6. 「アプリの追加」を選択します。 OpsWorks スタックはアプリを追加し、アプリページを表示します。

このウォークスルー用の正しい設定のアプリケーションが作成されました。

次のステップでは、インスタンスを起動します。

ステップ 5: インスタンスを起動する

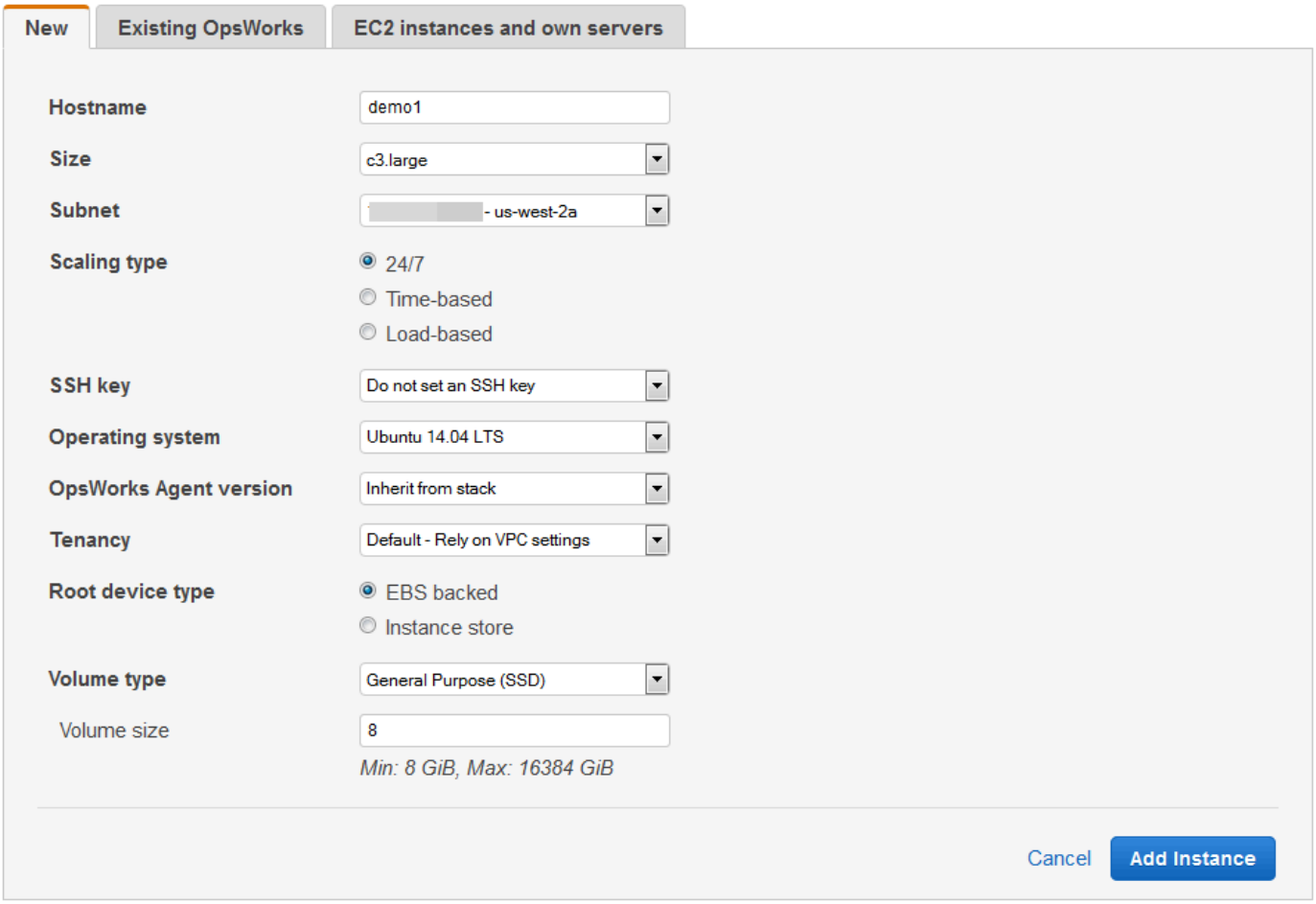
> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックを使用して Ubuntu Server Amazon EC2 インスタンスを起動します。このインスタンスでは、このウォークスルーで前に作成したレイヤーで定義した設定が使用されます (詳しくは、インスタンス を参照してください)。

インスタンスを起動するには

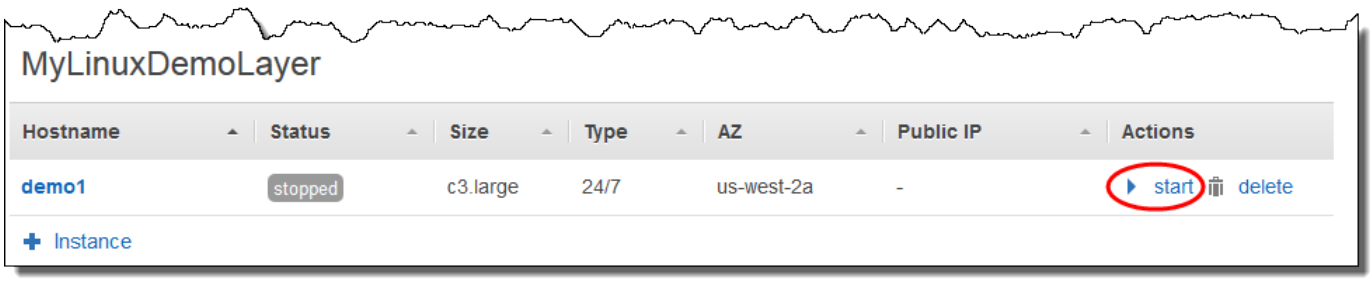
1. サービスのナビゲーションペインで、[Instances] を選択します。[Instances] ページが表示されます。
2. [MyLinuxDemoLayer] で、[Add an instance] を選択します。
3. [New] タブで、次のデフォルト値をそのままにします。
   - [Hostname] (demo1)
   - [Size] (c3.large)
   - [Subnet] (*IP ####* us-west-2a)
4. [Advanced] (アドバンスト) を選択します。
5. 以下はデフォルト値のままにします。
   - Scaling type (24/7)
   - [SSH key] (Do not use a default SSH key)
   - [オペレーティングシステム] (Ubuntu 18.04 LTS)
   - [OpsWorks Agent version] (Inherit from stack)
   - [Tenancy] (Default - Rely on VPC settings)
   - [Root device type] (EBS backed)
   - [Volume type] (General Purpose (SSD))
   - [Volume size] (8)

6. 結果は以下のスクリーンショットのようになります。



7. 「インスタンスの追加」を選択します。 OpsWorks スタックはインスタンスをレイヤーに追加し、インスタンスページを表示します。

8. [MyLinuxDemoLayer]、[demo1]、[アクション] で、[開始] を選択します。

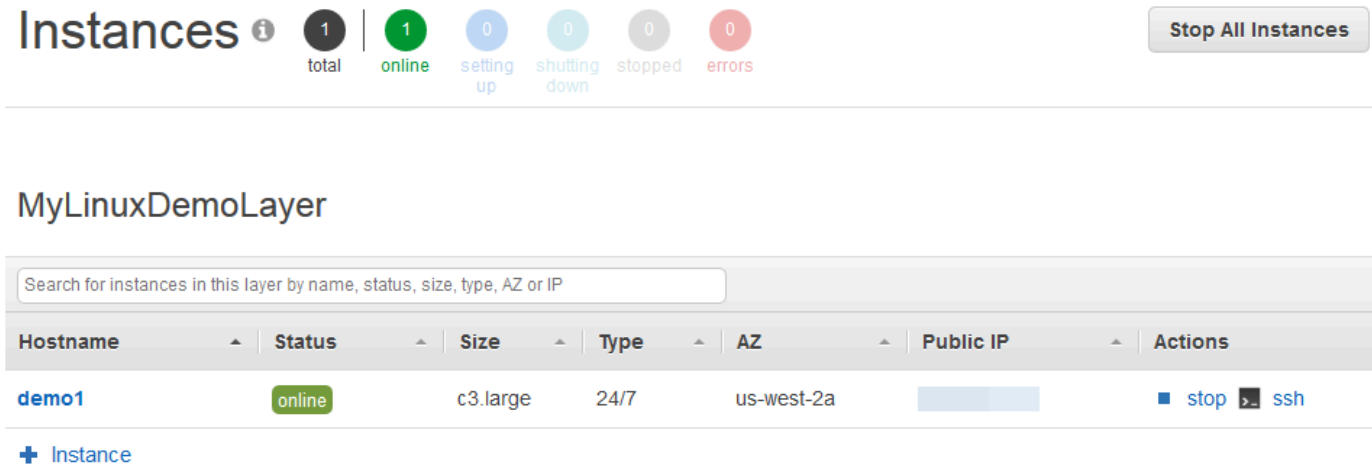


9. 数分の間に、以下が発生します。

   - [setting up] の円が [0] から [1] に変わります。

- [Status] が [stopped] から [requested]、[pending]、[booting]、[running_setup] に変わり、最終的に [online] になります。この処理には数分かかることもありますのでご注意ください。
- [(ステータス] が [オンライン] に変わった後、[設定] 円形インジケーターが [1] から [0] に変わり、[オンライン (オンライン)] の円が [0] から [1] に変わって明るい緑色になります。[online] の円が明るい緑色になり、[1] つのインスタンスがオンラインであることが表示されるまで、先の手順に進まないでください。

10. 結果は、続行する前に次のスクリーンショットに一致する必要があります (エラーメッセージが表示される場合は、「デバッグとトラブルシューティングのガイド」を参照してください)。



これで、アプリケーションをデプロイできるインスタンスが作成されました。

> **Note**
>
> インスタンスにログインしてさらに詳しく見る場合は、最初にパブリック SSH キーに関する情報 (ssh-keygen や PuTTYgen などのツールで作成可能) を OpsWorks スタックに提供し、`MyLinuxDemoStack`スタックでアクセス権限を設定して ユーザーがインスタンスにログインできるようにする必要があります。手順については、「ユーザーのパブリック SSH キーの登録」および「SSH でのログイン」を参照してください。SSH を使用して PuTTY 経由でインスタンスに接続する場合は、 AWS ドキュメントのPuTTY を使用して Windows から Linux インスタンスに接続する」を参照してください。

次のステップでは、アプリケーションをインスタンスにデプロイします。

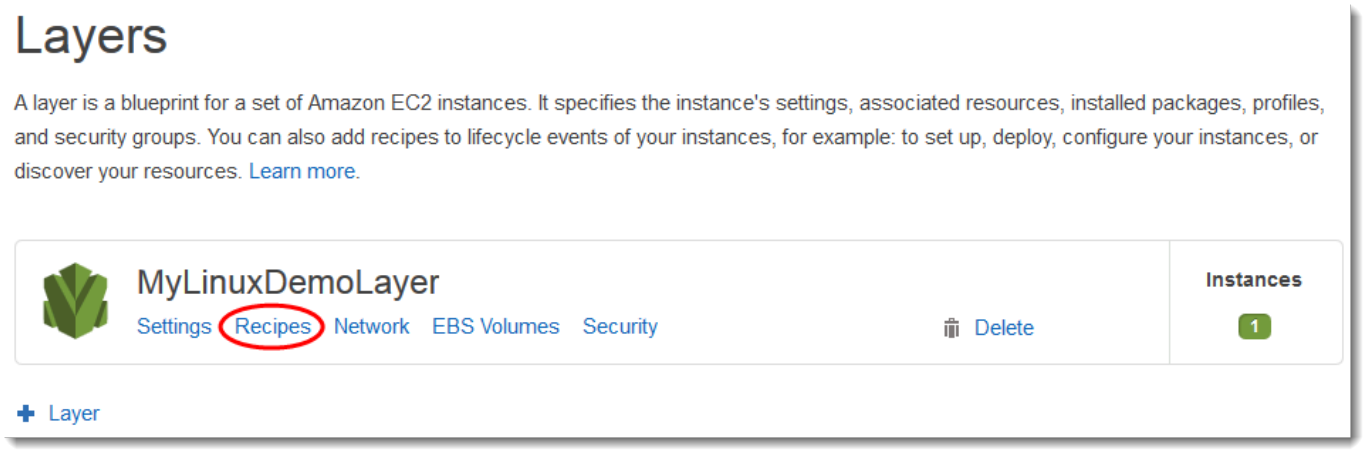
ステップ 6: インスタンスにアプリケーションをデプロイする

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このステップでは、GitHub から実行中のインスタンスにアプリケーションをデプロイします (詳しくは、アプリケーションのデプロイ を参照してください)。アプリケーションをデプロイする前に、デプロイを調整するために使用するレシピを指定する必要があります。レシピは Chef の概念です。レシピは、Ruby 言語の構文で書かれた手順であり、使用するリソースと、それらのリソースを適用する順序を指定します (詳細については、「Learn Chef」(Chef の説明) ウェブサイトで「About Recipes」(レシピについて) をご覧ください。)

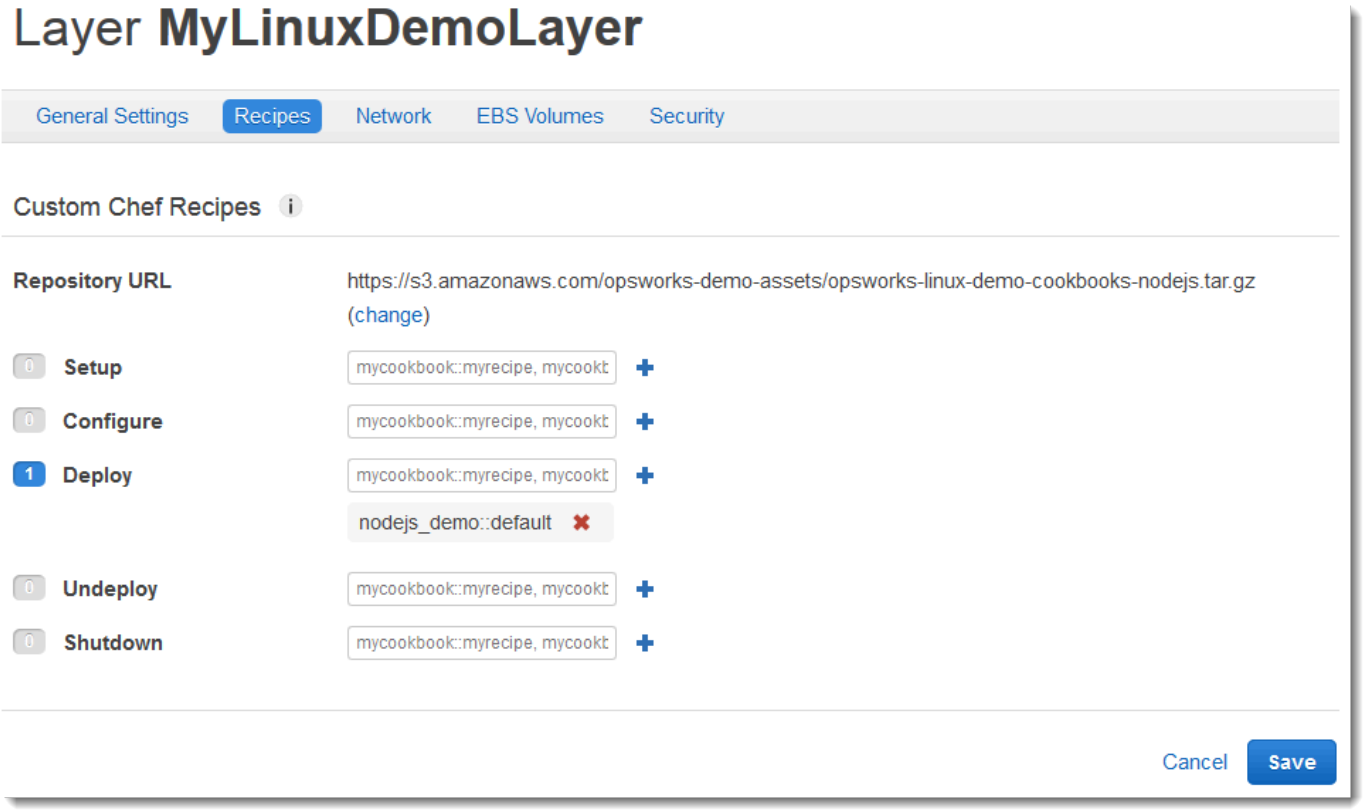
アプリケーションをインスタンスにデプロイするために使用するレシピを指定するには

1. サービスナビゲーションペインで、[Layers] (レイヤー) を選択します。[Layers] (レイヤー) ページが表示されます。
2. [MyLinuxDemoLayer] で、[Recipes] を選択します。



[Layer MyLinuxDemoLayer] ページが、[Recipes] タブが開かれた状態で表示されます。

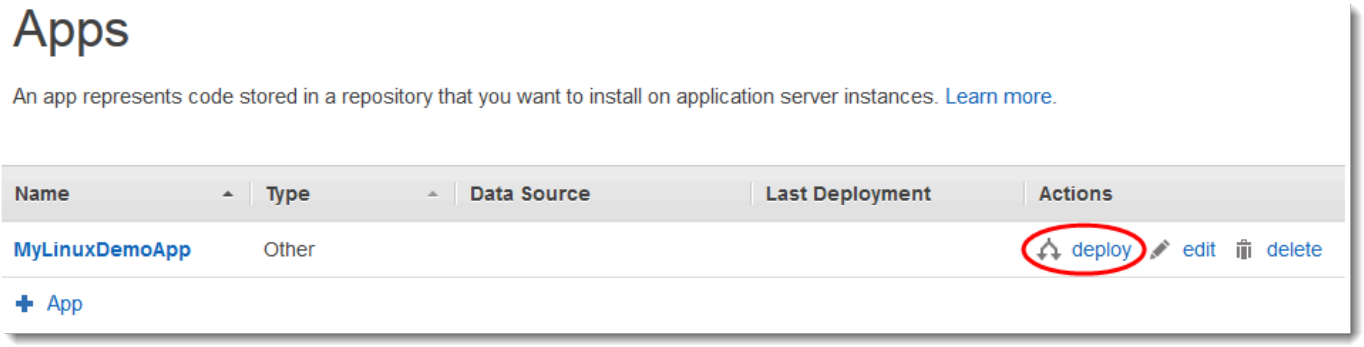
3. [Custom Chef Recipes]、[Deploy] で、タイプ「**`nodejs_demo::default`**」と入力し、Enter キーを押します。`nodejs_demo` はクックブックの名前で、`default` はクックブック内の対象レシピの名前です (レシピのコードについて調べるには、「詳細: このウォークスルーで使用されているクックブックの学習」を参照してください)。結果は、次のスクリーンショットに一致する必要があります。



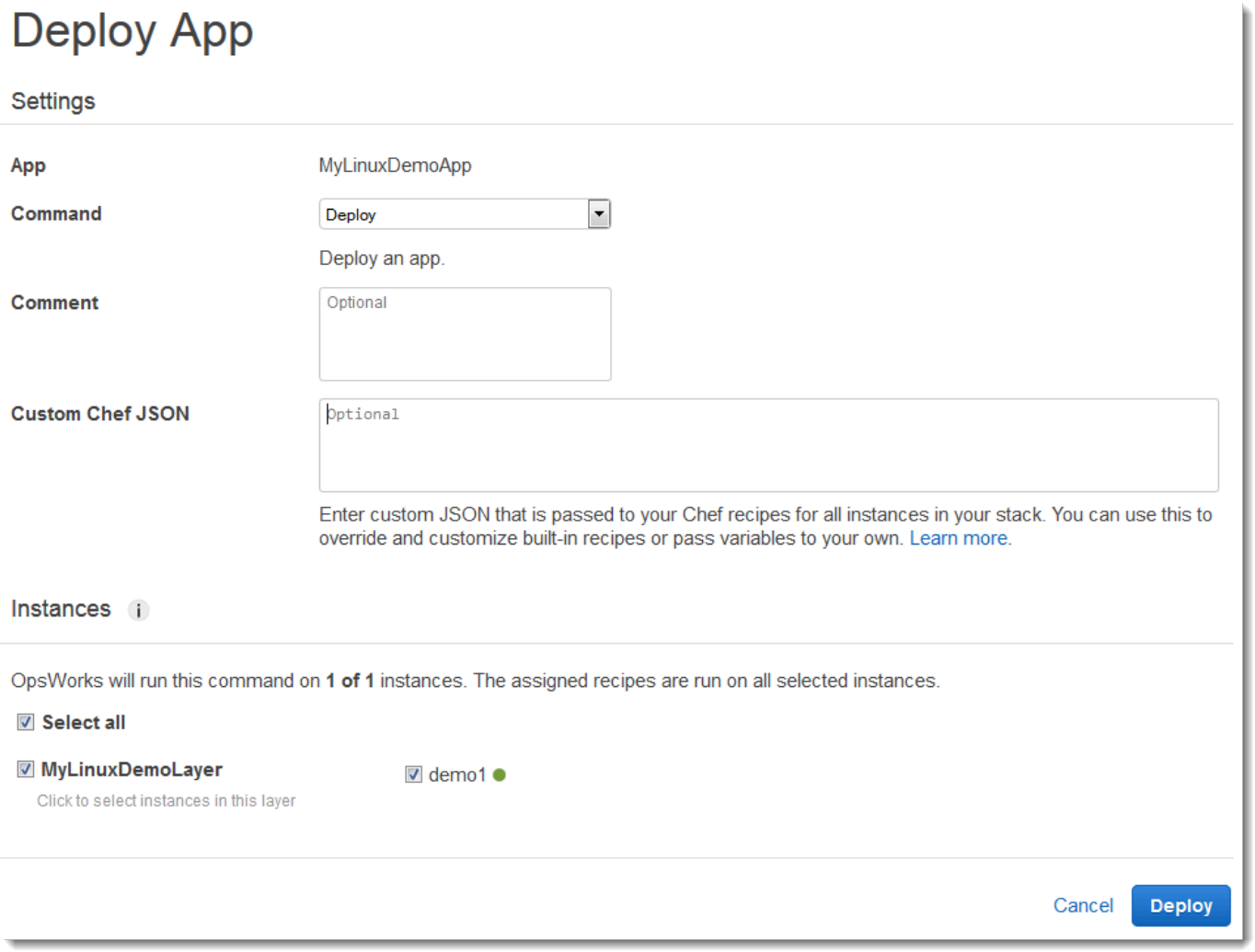
4. Save. OpsWorks Stacks を選択すると、Layer の Deploy ライフサイクルイベントにレシピが追加されます。

アプリケーションをインスタンスにデプロイするには

1. サービスナビゲーションペインで、[Apps] を選択します。[Apps] ページが表示されます。
2. [MyLinuxDemoApp]、[Actions] で、次の画面に表示されているように [deploy] を選択します。



3. [Deploy App] ページで、次のデフォルト値をそのままにします。
   - [Command] (Deploy)
   - [Comment] (空白)
   - [Settings]、[Advanced]、[Custom Chef JSON] (空白)
   - [Instances]、[Advanced] ([Select all] をオン、[MyLinuxDemoLayer] をオン、[demo1] をオン)
4. 結果は、次のスクリーンショットに一致する必要があります。



5. [デプロイ] をクリックします。[Deployment MyLinuxDemoApp – deploy] ページが表示されます。[Status] が [running] から [successful] に変わります。[demo1] の横に回転する円が表示され、その後緑のチェックマークに変わります。この処理には数分かかることもありますのでご注意ください。[Status] が [successful] となるとともに、緑のチェックマークアイコンが表示されるまで続行しないでください。
6. 結果は、当然ながら [Created at]、[Completed at]、[Duration]、および [User] を除いて次のスクリーンショットと一致する必要があります。[ステータス] が [失敗] の場合、トラブルシューティングするには、[ログ] で [表示] を選択してエラーの詳細を確認します。

これで、インスタンスに正常にアプリケーションをデプロイしました。

次のステップでは、インスタンスでデプロイ済みのアプリケーションをテストします。

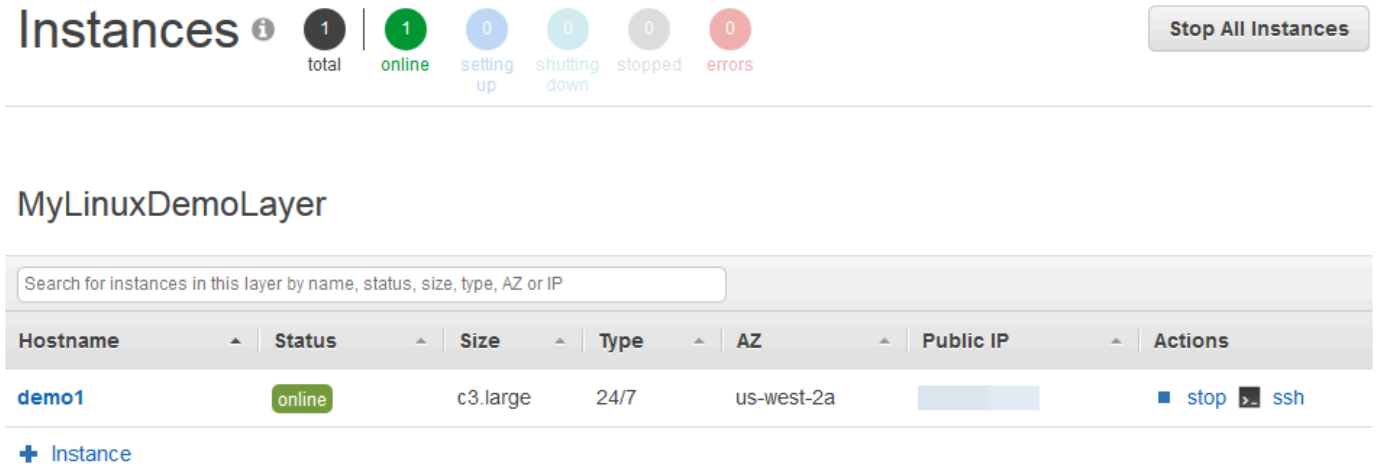
ステップ 7: インスタンスにデプロイされたアプリケーションをテストする

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

ここで、インスタンス上のアプリケーションのデプロイをテストします。

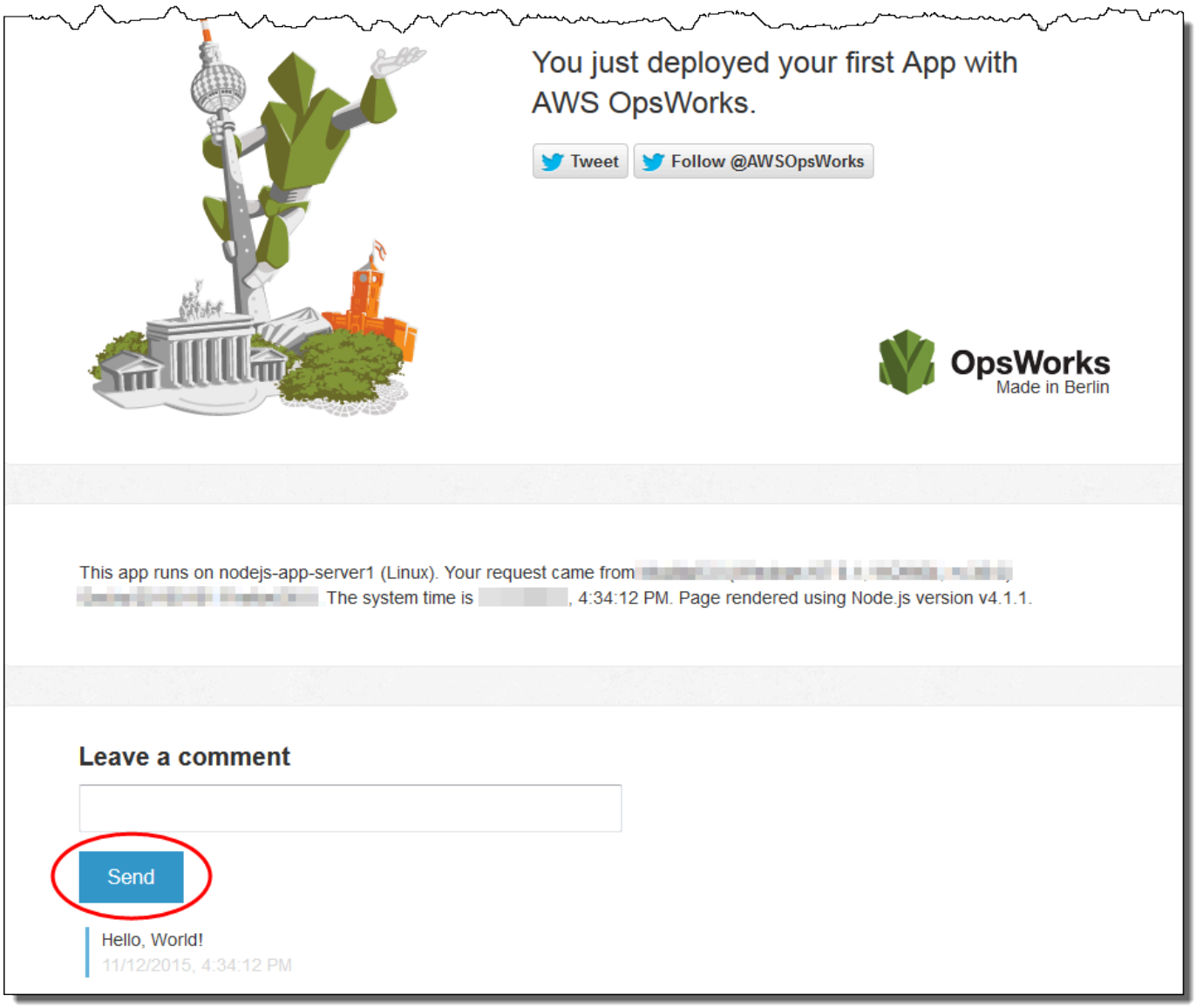
インスタンス上のデプロイをテストするには

1. サービスのナビゲーションペインで、[Instances] を選択します。[Instances] ページが表示されます。
2. [MyLinuxDemoLayer] で、[demo1]、[Public IP] の IP アドレスを選択します。



新しいウェブブラウザタブがアプリケーションに表示されます。

3. おめでとうウェブページの [Leave a comment] テキストボックスにコメントを入力し、[Send] を選択してアプリケーションをテストします。コメントがウェブページに追加されます。コメントの追加を継続し、何度でも [Send] を選択します。



4. Twitter アカウントを持っている場合は、[Tweet] または [@AWSOpsWorks] を選択し、アプリケーションについてツイートまたは @AWSOpsWorks をフォローする画面の指示に従います。

これで、インスタンス上で正常にアプリケーションをテストおよびデプロイしました。

次のステップでは、このウォークスルーに使用した AWS リソースをクリーンアップできます。このステップは任意です。 OpsWorks スタックの詳細については、これらの AWS リソースを引き続き使用することをお勧めします。ただし、これらの AWS リソースを周囲に保持すると、 AWS アカウントに継続的な料金が発生する可能性があります。これらの AWS リソースを後で使用するために保持する場合は、このウォークスルーを完了し、「」に進むことができます次のステップ。

ステップ 8 (オプション): クリーンアップする

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

AWS アカウントに追加料金が発生しないように、このチュートリアルで使用したリソースを削除 AWS できます。これらの AWS リソースには、 OpsWorks スタックスタックとスタックのコンポーネントが含まれます。(詳細については、OpsWorks 「料金表」を参照してください)。ただし、OpsWorks スタックの詳細については、これらの AWS リソースを引き続き使用することをお勧めします。これらの AWS リソースを引き続き利用できるようにする場合は、このウォークスルーを完了し、「」に進むことができます次のステップ。

このチュートリアルのために作成したリソースに保存されているコンテンツには、個人識別情報が含まれている可能性があります。この情報を AWSが保存しないようにするには、このトピックの手順に従ってください。

アプリケーションをスタックから削除するには

1. OpsWorks スタックコンソールのサービスナビゲーションペインで、アプリを選択します。[Apps] ページが表示されます。
2. [MyLinuxDemoAppに] で、[Actions] の [delete] を選択します。確認メッセージが表示されたら、Delete. OpsWorks Stacks を選択するとアプリが削除されます。

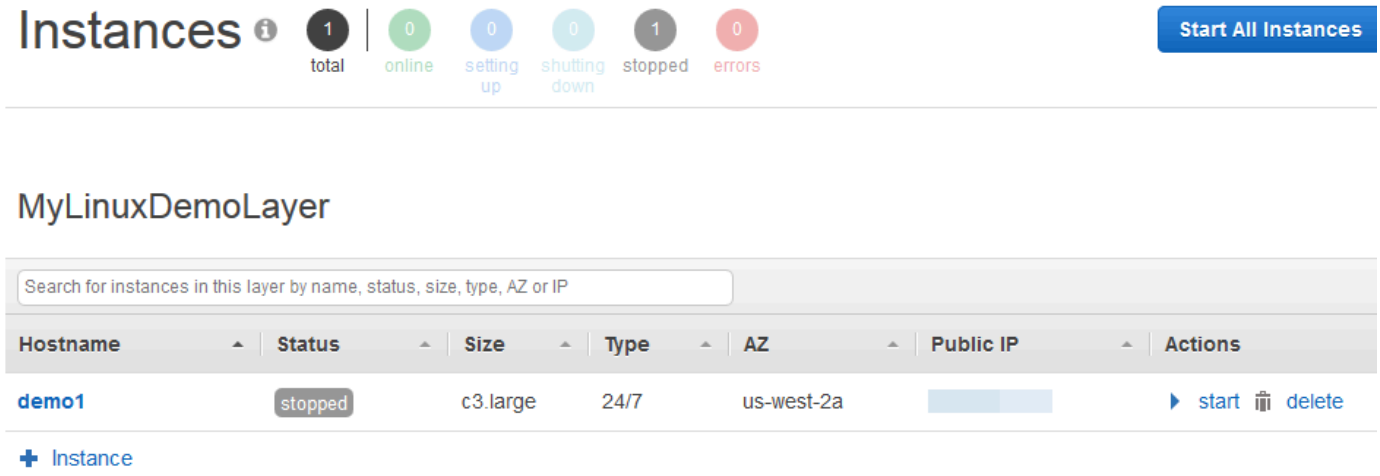
スタックのインスタンスを削除するには

1. サービスのナビゲーションペインで、[Instances] を選択します。[Instances] ページが表示されます。
2. [MyLinuxDemoLayer] で、[demo1]、[Actions] の [stop] を選択します。確認メッセージが表示されたら、[Stop] を選択します。以下のことが起こります。

   - [Status] が [online] から [stopping] に変わり、最終的に [stopped] になります。
   - [online] は [1] から [0] に変わります。

- [shutting down] は [0] から [1] に変わり、最終的に [0] になります。
- [stopped] は最終的に [0] から [1] に変わります。

このプロセスには数分かかることがあります。 OpsWorks スタックが終了すると、次の結果が表示されます。



3. [Actions] (アクション) で、[delete] (削除) を選択します。確認メッセージが表示されたら、Delete. OpsWorks Stacks を選択するとインスタンスが削除され、インスタンスなしメッセージが表示されます。

スタックを削除するには

1. サービスナビゲーションペインで、[Stack] を選択します。[MyLinuxDemoStack] ページが表示されます。
2. [Delete Stack] を選択します。確認メッセージが表示されたら、Delete. OpsWorks Stacks を選択するとスタックが削除され、OpsWorks Dashboard ページが表示されます。

必要に応じて、他の AWS サービスや Amazon EC2 インスタンスへのアクセスに再利用しない場合は、このウォークスルーに使用したユーザーと Amazon EC2 キーペアを削除できます。手順については、「IAM ユーザーの削除 と Amazon EC2 キーペアと Linux インスタンスの削除」を参照してください。

これで、このウォークスルーが完了しました。詳細については、「次のステップ」を参照してください。

次のステップ

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このチュートリアルを完了したので、 OpsWorks スタックの使用について詳しく学習できます。

- このウォークスルーに使用したクックブックとアプリケーションについて調べます。「詳細: このウォークスルーで使用されているクックブックの学習」および「詳細: このウォークスルーで使用されているアプリケーションの学習」を参照してください。
- Windows OpsWorks インスタンスでの スタックの使用を練習します。「入門ガイド: Windows」を参照してください。
- 新しいスタックを作成する の使用方法を参照してスタックの詳細について学びます。
- 「OpsWorks レイヤーの構成を編集する」でレイヤーの詳細について学びます。
- 「レイヤーへのインスタンスの追加」でインスタンスの詳細について学びます。
- 「アプリケーションのデプロイ」でアプリケーションの詳細について学びます。
- クックブックとレシピ の詳細を確認してください。
- 独自のクックブックを作成します。「使用開始: クックブック」を参照してください。
- 「セキュリティと権限」でスタックへのアクセスをコントロールする方法について説明します。

詳細: このウォークスルーで使用されているクックブックの学習

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このトピックでは、 OpsWorks スタックがウォークスルーに使用したクックブックについて説明します。

クックブックは Chef の概念です。クックブックは、レシピ、属性値、ファイル、テンプレート、ライブラリ、定義、カスタムリソースなどの設定情報を含むアーカイブファイルです。レシピは、Chef の概念でもあります。レシピは、Ruby 言語の構文で書かれた手順であり、使用するリソースと、それらのリソースを適用する順序を指定します 詳細については、「Learn Chef」(Chef の説明) ウェブサイトで 「About Cookbooks」(クックブックについて) および「About Recipes」(レシピについて)] をご覧ください。

このウォークスルーで使用されているクックブックの内容を表示するには、のopsworks-linux-demo-cookbooks-nodejs.tar.gz ファイルの内容をローカルワークステーションの空のディレクトリに展開します (クックブックをデプロイしたインスタンスにログインし、/var/chef/cookbooks ディレクトリの内容を確認することもできます。)

cookbooks/nodejs_demo/recipes ディレクトリの default.rb ファイルは、クックブックがそのコードを実行する場所です。

```
app = search(:aws_opsworks_app).first
app_path = "/srv/#{app['shortname']}"

package "git" do
  options "--force-yes" if node["platform"] == "ubuntu" && node["platform_version"] ==
 "18.04"
end

application app_path do
  javascript "4"
  environment.update("PORT" => "80")

  git app_path do
    repository app["app_source"]["url"]
    revision app["app_source"]["revision"]
  end

  link "#{app_path}/server.js" do
    to "#{app_path}/index.js"
  end

  npm_install
  npm_start
```

```
end
```

ファイルで実行される操作は次のとおりです。

- `search(:aws_opsworks_app).first` は Chef 検索を使用して、最終的にインスタンスにデプロイされるアプリケーションについての情報を検索します。この情報には、アプリケーションの短縮名、ソースリポジトリの詳細などの設定が含まれます。このウォークスルーでデプロイされたのは 1 つのアプリケーションのみであるため、Chef 検索ではインスタンスの `aws_opsworks_app` 検索インデックス内の情報の最初の項目から、これらの設定を取得します。インスタンスが起動されるたびに、 OpsWorks Stacks はこの情報およびその他の関連情報をインスタンス自体のデータバッグのセットとして保存し、Chef 検索を通じてデータバッグの内容を取得します。このレシピにこれらの設定をハードコードすることができますが、データバッグと Chef 検索を使用するのが、より堅牢な方法です。データバッグの詳細については、Chef の詳細ウェブサイトで「OpsWorks スタックデータバッグリファレンス」を参照してください。[Learn Chef] (Chef の説明) ウェブサイトで [About Data Bags] (データバッグについて) も参照してください。Chef の検索の詳細については、[Learn Chef] (Chef の説明) ウェブサイトで [About Search] (検索について) を参照してください。
- `package` リソースはインスタンスに Git をインストールします。
- `application` リソースはウェブアプリケーションを記述し、デプロイします。
  - `javascript` は、インストールする JavaScript ランタイムのバージョンです。
  - `environment` は環境変数を設定します。
  - `git` は指定されたリポジトリとブランチからソースコードを取得します。
  - `app_path` はリポジトリをクローン化するパスです。パスがインスタンスに存在しない場合、OpsWorks スタックによって作成されます。
  - `link` はシンボリックリンクを作成します。
  - `npm_install` は、Node.js 用のデフォルトのパッケージマネージャーであるノードパッケージマネージャをインストールします。
  - `npm_start` は Node.js を実行します。

OpsWorks スタックはこのウォークスルーに使用されるクックブックを作成しましたが、独自のクックブックを作成できます。この方法の詳細は、「使用開始: クックブック」を参照してください。また、「Learn Chef (Chef の説明) ウェブサイトで「About Cookbooks」(クックブックについて)、「About Recipes」(レシピについて)、および「Learn the Chef Basics on Ubuntu」(Ubuntu でシェフの基礎を学ぶ) を、「Getting started with Chef」(Chef の使用開始)ウェブサイトでは「First

steps with Chef」(Chef の最初のステップ) にある「最初のシェフクックブック」セクションもご覧ください。

詳細: このウォークスルーで使用されているアプリケーションの学習

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このトピックでは、このウォークスルーのために OpsWorks スタックがインスタンスにデプロイするアプリケーションについて説明します。

アプリケーションのソースコードを表示するには、opsworks-windows-demo-nodejs GitHub リポジトリの内容を、ローカルワークステーション上の空のディレクトリに展開します。クックブックをデプロイしたインスタンスにログインし、`/srv/mylinuxdemoapp` ディレクトリの内容を確認することもできます。

`index.js` ファイルには、アプリケーションで最も重要なコードが含まれています。

```
var express = require('express');
var app = express();
var path = require('path');
var os = require('os');
var bodyParser = require('body-parser');
var fs = require('fs');

var add_comment = function(comment) {
  var comments = get_comments();
  comments.push({"date": new Date(), "text": comment});
  fs.writeFileSync('./comments.json', JSON.stringify(comments));
};

var get_comments = function() {
  var comments;
  if (fs.existsSync('./comments.json')) {
```

```
    comments = fs.readFileSync('./comments.json');
    comments = JSON.parse(comments);
  } else {
    comments = [];
  }
  return comments;
};

app.use(function log (req, res, next) {
  console.log([req.method, req.url].join(' '));
  next();
});
app.use(express.static('public'));
app.use(bodyParser.urlencoded({ extended: false }))

app.set('view engine', 'jade');
app.get('/', function(req, res) {
  var comments = get_comments();
  res.render("index",
    { agent: req.headers['user-agent'],
      hostname: os.hostname(),
      nodeversion: process.version,
      time: new Date(),
      admin: (process.env.APP_ADMIN_EMAIL || "admin@unconfigured-value.com" ),
      comments: get_comments()
    });
});

app.post('/', function(req, res) {
  var comment = req.body.comment;
  if (comment) {
    add_comment(comment);
    console.log("Got comment: " + comment);
  }
  res.redirect("/#form-section");
});

var server = app.listen(process.env.PORT || 3000, function() {
  console.log('Listening on %s', process.env.PORT);
});
```

ファイルで実行される操作は次のとおりです。

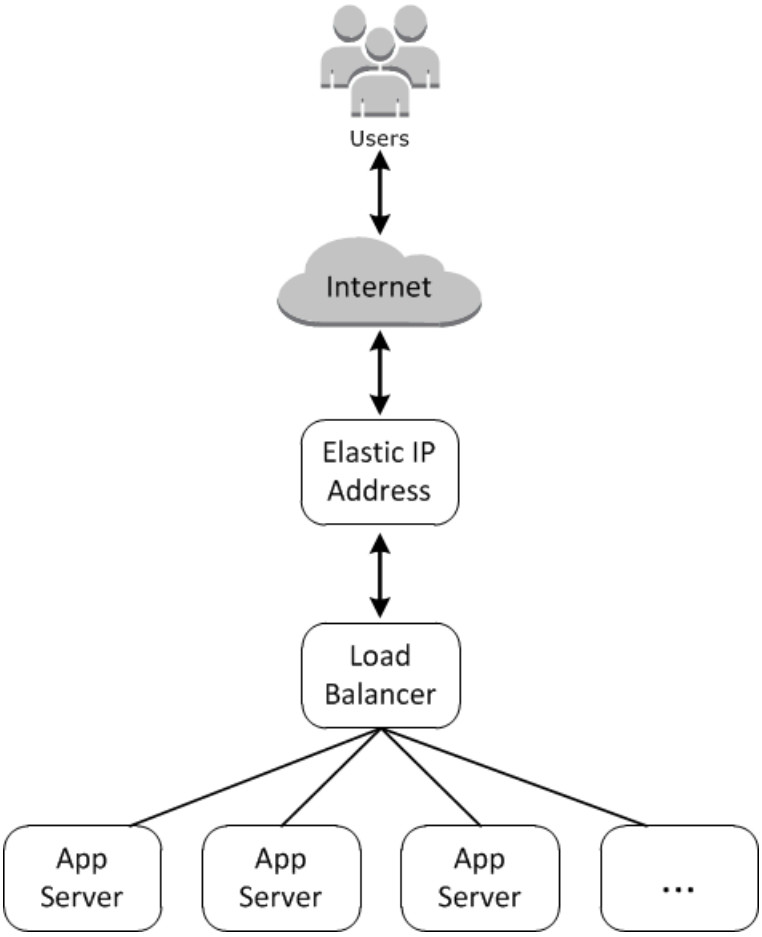
- `require` は、このウェブアプリケーションを予期どおりに実行するために必要な一部の依存コードを含むモジュールをロードします。
- `add_comment` 関数と `get_comments` 関数は、`comments.json` ファイルに対して情報の書き込みと読み取りを行います。
- `app.get`、`app.listen`、`app.post`、`app.set`、および `app.use` の詳細については、「Express API Reference」を参照してください。

デプロイ用のアプリケーションの作成とパッケージ化の方法については、「Application Source」を参照してください。

Windows スタックの使用開始

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

通常、クラウドベースのアプリケーションでは、アプリケーションサーバー、データベースサーバーなどの関連リソースのグループが必要で、一括して作成および管理する必要があります。この一連のインスタンスは スタックと呼ばれます。シンプルなアプリケーションスタックの例を以下に示します。



基本的なアーキテクチャは以下の要素で構成されます。

- ユーザーリクエストを受信する Elastic IP アドレス。
- リクエストをアプリケーションサーバーに均等に分散させるロードバランサー。
- トラフィックを処理するために必要な数の一連のアプリケーションサーバーインスタンス。

また、通常、アプリケーションサーバーにアプリケーションを配布する方法や、ユーザー アクセス権限を管理する方法も必要です。

OpsWorks スタックは、スタックおよび関連するアプリケーションとリソースを作成および管理するためのシンプルで簡単な方法を提供します。この章では、 OpsWorks スタックの基本とさらに高度な機能を紹介し、図表でアプリケーションサーバースタックを作成するプロセスを順を追って説明します。 OpsWorks スタックが簡単に従える増分開発モデルを使用します。基本的なスタックを設定し、正しく動作したら、フル機能の実装に到達するまでコンポーネントを追加します。

- 「ステップ 1: 前提条件を完了する」に、ウォークスルーを開始するためのセットアップ方法を示します。

- 「ステップ 2: 基本的なアプリケーションサーバースタックを作成する」では、基本スタックを作成して Internet Information Services (IIS) をサポートし、アプリケーションをサーバーにデプロイする方法を示します。
- 「ステップ 3: IISExample の拡張」では、さらに多くのアプリケーションサーバー、着信トラフィックを分散させるためのロードバランサー、着信リクエストを受信する Elastic IP アドレスを追加することによって、増大した負荷を処理するためにスタックをスケールアウトする方法を示します。

トピック

- ステップ 1: 前提条件を完了する
- ステップ 2: 基本的なアプリケーションサーバースタックを作成する
- ステップ 3: IISExample の拡張
- 次のステップ

ステップ 1: 前提条件を完了する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

ウォークスルーを開始する前に、次のセットアップ手順を完了します。これらのセットアップ手順には、 AWS アカウントへのサインアップ、管理ユーザーの作成、 OpsWorks スタックへのアクセス許可の割り当てが含まれます。

すでに「使用開始: サンプル」または「入門ガイド: Linux」ウォークスルーを完了している場合、このウォークスルーの前提条件を満たしており、省略して「ステップ 2: 基本的なアプリケーションサーバースタックを作成する」に進むことができます。

トピック

- にサインアップする AWS アカウント
- 管理アクセスを持つユーザーを作成する

- サービスアクセス権限を割り当てます。
- OpsWorks スタックユーザーがドメインに追加されていることを確認する

にサインアップする AWS アカウント

がない場合は AWS アカウント、次の手順を実行して作成します。

にサインアップするには AWS アカウント

1. https://portal.aws.amazon.com/billing/signup を開きます。
2. オンラインの手順に従います。

   サインアップ手順の一環として、電話またはテキストメッセージを受け取り、電話キーパッドで検証コードを入力します。

   にサインアップすると AWS アカウント、 AWS アカウントのルートユーザー が作成されます。ルートユーザーには、アカウントのすべての AWS のサービス とリソースへのアクセス権があります。セキュリティベストプラクティスとして、ユーザーに管理アクセス権を割り当て、ルートユーザーアクセスが必要なタスクの実行にはルートユーザーのみを使用するようにしてください。

AWS サインアッププロセスが完了すると、 から確認メールが送信されます。https://aws.amazon.com/ の [マイアカウント] をクリックして、いつでもアカウントの現在のアクティビティを表示し、アカウントを管理することができます。

管理アクセスを持つユーザーを作成する

にサインアップしたら AWS アカウント、日常的なタスクにルートユーザーを使用しないように AWS アカウントのルートユーザー、 を保護し AWS IAM アイデンティティセンター、 を有効にして管理ユーザーを作成します。

を保護する AWS アカウントのルートユーザー

1. ルートユーザーを選択し、 AWS アカウント E メールアドレスを入力して、アカウント所有者AWS マネジメントコンソールとして にサインインします。次のページでパスワードを入力します。

   ルートユーザーを使用してサインインする方法については、「AWS サインイン ユーザーガイド」の「ルートユーザーとしてサインインする」を参照してください。

2. ルートユーザーの多要素認証 (MFA) を有効にします。

   手順については、IAM ユーザーガイドの AWS アカウント「ルートユーザー (コンソール) の仮想 MFA デバイスを有効にする」を参照してください。

管理アクセスを持つユーザーを作成する

1. IAM アイデンティティセンターを有効にします。

   手順については、「AWS IAM アイデンティティセンター ユーザーガイド」の「AWS IAM アイデンティティセンターの有効化」を参照してください。

2. IAM アイデンティティセンターで、ユーザーに管理アクセスを付与します。

   を ID ソース IAM アイデンティティセンターディレクトリ として使用する方法のチュートリアルについては、「 AWS IAM アイデンティティセンター ユーザーガイド」の「デフォルトを使用してユーザーアクセスを設定する IAM アイデンティティセンターディレクトリ」を参照してください。

管理アクセス権を持つユーザーとしてサインインする

- IAM アイデンティティセンターのユーザーとしてサインインするには、IAM アイデンティティセンターのユーザーの作成時に E メールアドレスに送信されたサインイン URL を使用します。

  IAM Identity Center ユーザーを使用してサインインする方法については、AWS サインイン「 ユーザーガイド」の AWS 「 アクセスポータルにサインインする」を参照してください。

追加のユーザーにアクセス権を割り当てる

1. IAM アイデンティティセンターで、最小特権のアクセス許可を適用するというベストプラクティスに従ったアクセス許可セットを作成します。

   手順については、「AWS IAM アイデンティティセンター ユーザーガイド」の「アクセス許可セットを作成する」を参照してください。

2. グループにユーザーを割り当て、そのグループにシングルサインオンアクセス権を割り当てます。

   手順については、「AWS IAM アイデンティティセンター ユーザーガイド」の「グループを追加する」を参照してください。

サービスアクセス権限を割り当てます。

ロールまたはユーザーに OpsWorks `AWSOpsWorks_FullAccess`および アクセス`AmazonS3FullAccess`許可を追加して、 スタックサービス (および OpsWorks スタックが依存する関連サービス) へのアクセスを有効にします。

アクセス許可の追加に関する詳細については、IAM ID アクセス許可の追加 (コンソール) を参照してください。

OpsWorks スタックユーザーがドメインに追加されていることを確認する

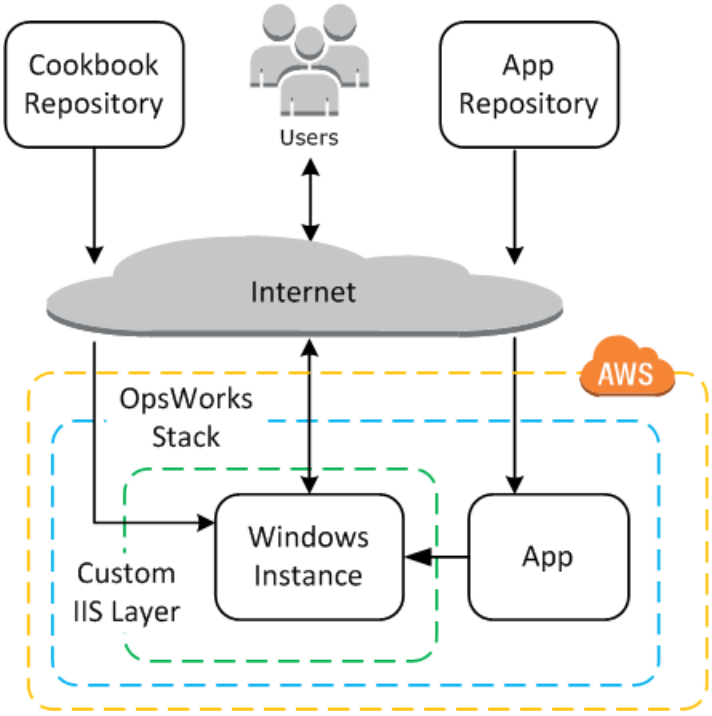
Chef 12.2 スタックに含まれている `aws_opsworks_users` クックブックは Windows ベースのインスタンスに対して SSH と RDP (リモートデスクトッププロトコル) アクセスを持つユーザーを作成します。スタック内の Windows インスタンスを Active Directory ドメインに結合すると、スタックユーザーが Active Directory OpsWorks に存在しない場合、このクックブックの実行が失敗する可能性があります。ドメインとの結合後に再起動すると、Active Directory でユーザーが認識されない場合はインスタンスの状態が `setup failed` になります。ドメイン結合された Windows インスタンスは [user permission] ページで OpsWorks スタックユーザーに SSH/RDP アクセス権限を付与することはできません。

Chef 12.2 スタックの Windows インスタンスを Active Directory ドメインに結合する前に、Windows OpsWorks ベースのスタックのすべての スタックユーザーがドメインのメンバーであることを確認します。これを行う最善の方法は、Windows ベースのスタックを作成する前に IAM でフェデレーティッド ID を設定し、 OpsWorks スタック内のインスタンスをドメインに結合する前にフェデレーティッドユーザーを スタックにインポートすることです。詳細については AWS セキュリティブログの「Enabling Federation to AWS Using Windows Active Directory, ADFS, and SAML 2.0」(Windows Active Directory、ADFS、SAML 2.0 を使用した AWS へのフェデレーションの有効化) と「Federating Existing Users (既存のユーザーのフェデレーション)」を「IAM User Guide (IAM ユーザーガイド)」でご覧ください。

ステップ 2: 基本的なアプリケーションサーバースタックを作成する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

基本的なアプリケーションサーバースタックは、ユーザーのリクエストを受信するためのパブリック IP アドレスを持つ、単一のアプリケーションサーバーインスタンスで構成されます。アプリケーションコードと関連ファイルは別々のリポジトリに保存されており、そこからサーバーにデプロイされます。そのようなスタックを次の図に示します。



スタックには次のようなコンポーネントがあります。

- レイヤー。インスタンスのグループを表し、それらの設定方法を指定します。

  この例のレイヤーは、IIS インスタンスのグループを表します。
- Amazon EC2 インスタンスを表す[instance] (インスタンス) です。

  この場合、レイヤーは IIS を実行する単一のインスタンスを設定しますが、レイヤーが持てるインスタンスの数に制限はありません。
- アプリケーション: インスタンスにアプリケーションをインストールするために必要な情報が含まれます。
- クックブック: IISレイヤーをサポートするカスタム Chef レシピが含まれます。クックブックとアプリケーションコードは、Amazon S3 バケットまたは Git リポジトリ内のアーカイブファイルなど、リモートリポジトリに保管されます。

以下のセクションでは、 OpsWorks スタックコンソールを使用してスタックを作成し、アプリケーションをデプロイする方法について説明します。

トピック

- ステップ 2.1: スタックの作成
- ステップ 2.2: RDP アクセスを許可する
- ステップ 2.3: カスタムクックブックの実装
- ステップ 2.4: IISレイヤーを追加する
- ステップ 2.5: アプリケーションをデプロイする

ステップ 2.1: スタックの作成

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックプロジェクトを開始するには、インスタンスやその他のリソースのコンテナとして機能するスタックを作成します。スタック設定では、AWS リージョンやデフォルトのオペレーティングシステムなど、スタックのすべてのインスタンスで共有されるいくつかの基本的な設定を指定します。

新しいスタックを作成するには

1. スタックの追加

   まだサインインしていない場合は、OpsWorks スタックコンソールにサインインします。

   - アカウントに既存のスタックがない場合は、[Welcome to AWS OpsWorks] ページが表示されます。[Add your first stack] を選択します。
   - それ以外の場合は、 OpsWorks スタックダッシュボードが表示され、アカウントのスタックが一覧表示されます。スタックの追加を選択します。

2. スタックの設定

   [Add Stack] ページで、[Chef 12 stack] を選択し、次の設定を指定します。

スタック名

スタックの名前を入力します。英数字 (a ~ z、A ~ Z および 0 ~ 9) とハイフン (-) を含めることができます。このウォークスルーで使用する例のスタック名は、**`IISWalkthrough`** です。

リージョン

スタックのリージョンとして米国西部 (オレゴン) を選択します。

スタックはどのリージョンでもスタックを作成できますが、チュートリアルでは 米国西部 (オレゴン) をお勧めします。

Default operating system

[Windows] を選択し、デフォルト設定である [Microsoft Windows Server 2022 Base] を指定します。

Use custom Chef cookbooks

このウォークスルーでは、このオプションに [No] を指定します。

3. [Advanced] を選択して、IAM ロールがあり、デフォルトの IAM インスタンスプロファイルが選択されていることを確認します。

IAM ロール

スタックの IAM (AWS Identity and Access Management) ロールを指定します。 OpsWorks スタックは、Amazon EC2 インスタンスの作成や管理などのタスクを実行するために、他の AWS のサービスにアクセスする必要があります。IAM ロールは、ユーザーに代わって OpsWorks スタックが他の AWS のサービスを操作するために引き受けるロールを指定します。詳細については、「OpsWorks スタックがユーザーに代わって動作することを許可する」を参照してください。

- アカウントに既存の OpsWorks スタック IAM ロールがある場合は、リストから選択できます。

  ロールが OpsWorks スタックによって作成された場合は、 という名前になります`aws-opsworks-service-role`。
- それ以外の場合は、新しい IAM ロールを選択して、適切なアクセス許可を持つ新しいロールを作成するように OpsWorks スタックに指示します。

注意: OpsWorks スタックの Full Access 権限を持っている場合、新しいロールを作成するためには、いくつかの追加の IAM アクセス許可が必要になります。詳細については、「ポリシーの例」を参照してください。

4. その他の設定についてはデフォルト値を受け入れて、[Add Stack] を選択します。さまざまなスタック設定の詳細については、「新しいスタックを作成する」を参照してください。

ステップ 2.2: RDP アクセスを許可する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

これでスタックを作成したので、レイヤーを作成し、Windows インスタンスをレイヤーに追加します。ただし、それを行う前に、RDP を使用してカスタムレイヤーのインスタンスに接続できるようにスタックを設定する必要があります。そのためには、以下を実行する必要があります。

- セキュリティグループに RDP アクセスを制御するインバウンドルールを追加します。
- このスタックの OpsWorks スタックアクセス許可を設定して、RDP アクセスを許可します。

リージョンで最初のスタックを作成すると、 OpsWorks スタックは一連のセキュリティグループを作成します。これには`AWS-OpsWorks-RDP-Server`、 スタックがすべての Windows OpsWorks インスタンスにアタッチして RDP アクセスを許可する のような名前のものが含まれます。ただし、デフォルトでは、このセキュリティグループにはルールが存在しないため、インスタンスへの RDP アクセスを許可するインバウンドルールを追加する必要があります。

RDP アクセスを許可するには

1. Amazon EC2 console (Amazon EC2 コンソール) を開き、スタックのリージョンに設定して、ナビゲーションペインから [Security Groups] (セキュリティーグループ) を選択します。
2. [AWS-OpsWorks-RDP-Server]、[Inbound]、[Edit] の順に選択します。
3. [Add Rule] を選択し、次の設定を指定します。

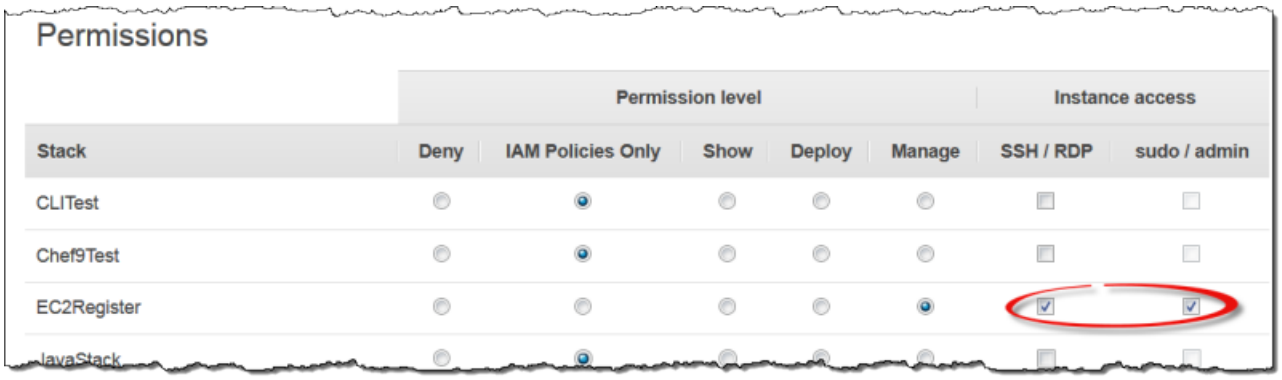
- [Type] (タイプ) – [RDP]。
- [Source] (送信元) - 許可される送信元 IP アドレス。

  通常は、自身の IP アドレスまたは指定した IP アドレス範囲 (社内の IP アドレス範囲が一般的) へのインバウンド RDP リクエストを許可します。学習のためには、多くの場合 0.0.0.0/0 を指定するだけで十分です。任意の IP アドレスからの RDP アクセスが許可されます。

セキュリティグループを使用すると、インスタンスが RDP 接続リクエストを受信できるようになりますが、これだけではありません。通常のユーザーは、 OpsWorks スタックが提供するパスワードを使用してインスタンスにログインします。 OpsWorks スタックでそのパスワードを生成するには、ユーザーの RDP アクセスを明示的に許可する必要があります。

ユーザーに RDP を許可する

1. スタックダッシュボードで、IISWalkthrough OpsWorks スタックを選択します。
2. スタックのナビゲーションペインで、[Permissions] を選択します。
3. [Permissions] ページの [Edit] を選択します。
4. ユーザーのリストで、必要なアクセス権限を付与するユーザー用 [SSH/RDP] のチェックボックスを選択します。ユーザーに管理者アクセス権限を設定する場合、[sudo/admin] も選択します。



5. [保存] を選択します。

その後、ユーザーはパスワードを取得し、後で説明するようにインスタンスへのログインに使用します。

> **Note**
>
> 管理者としてログインすることもできます。詳細については、「管理者としてログイン」を参照してください。

ステップ 2.3: カスタムクックブックの実装

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

スタックは、基本的にはインスタンスのコンテナですが、インスタンスを直接スタックに追加することはありません。それぞれ関連するインスタンスのグループを表すレイヤーを 1 つ以上追加し、そのレイヤーにインスタンスを追加します。

レイヤーは基本的に、同じ設定の Amazon EC2 インスタンスのセットを作成するために OpsWorks スタックが使用する設計図です。インスタンスは、オペレーティングシステムの基本バージョンから開始し、インスタンスのレイヤーはさまざまなタスクをインスタンスで実行して、次のような設計図を実装します。

- ディレクトリとファイルの作成
- ユーザーの管理
- ソフトウェアのインストールと設定
- サーバーの起動または停止
- アプリケーションコードおよび関連ファイルのデプロイ

レイヤーは、[Chef recipes] (シェフのレシピ) (略してレシピ)を実行してインスタンスに対してタスクを実行します。レシピは、インスタンスの最終的な状態を記述する Chef のドメイン固有言語 (DSL) を使用する Ruby アプリケーションです。 OpsWorks スタックでは、各レシピは通常、レイヤーのライフサイクルイベント、セットアップ、設定、デプロイ、デプロイ解除、シャットダウンのいずれかに割り当てられます。インスタンスでライフサイクルイベントが発生すると、 OpsWorks

Stacks はイベントのレシピを実行して適切なタスクを実行します。例えば、Setup イベントは、インスタンスの起動が完了した後に発生します。 OpsWorks スタックは Setup レシピを実行します。このレシピは通常、サーバーソフトウェアのインストールと設定、関連サービスの開始などのタスクを実行します。

OpsWorks スタックは、標準タスクを実行する一連の組み込みレシピを各レイヤーに提供します。カスタムレシピを実装して追加タスクを実行し、レイヤーのライフサイクルイベントに割り当てることで、レイヤーの機能を拡張できます。Windows スタックは、いくつかの基本タスクのみ実行する最小限のレシピセットを持つカスタムレイヤーをサポートします。Windows インスタンスに機能を追加するには、ソフトウェアのインストール、アプリケーションのデプロイなどを行うカスタムレシピを実装する必要があります。このトピックでは、IIS インスタンスをサポートするシンプルなカスタムレイヤーを作成する方法を説明します。

トピック

- クックブックとレシピの簡単な説明
- IIS のインストールと起動を行うレシピの実装
- カスタムクックブックの有効化

クックブックとレシピの簡単な説明

レシピは、インスタンスの予想される状態の 1 つ以上の側面を定義します (存在するディレクトリ、インストールが必要なソフトウェアパッケージ、デプロイが必要なアプリケーションなど)。レシピは、クックブックにパッケージ化されており、通常は 1 つ以上の関連レシピと、設定ファイルを作成するためのテンプレートなどの関連するファイルが含まれています。

このトピックは、レシピのかなり基本的な説明であり、クックブックを実装してシンプルなカスタム IISレイヤーをサポートする方法のみ示しているにすぎません。クックブックのより全般的な説明については、「クックブックとレシピ」を参照してください。Windows 固有のトピックを含む、クックブックの実装方法の詳細なチュートリアルについては、「クックブック 101」を参照してください。

Chef レシピは、技術的には Ruby アプリケーションですが、コードの大部分 (すべてではありません) は Chef DSL で記述されています。DSL の大部分は、インスタンスの状態の側面を宣言により指定するために使用できる一連のリソースで構成されています。例えば、`directory` リソースは、システムに追加するディレクトリを定義します。次の例は、指定されたユーザーに属する、フルコントロール権限を持つ `C:\data` ディレクトリを定義しており、親ディレクトリの権限を継承しません。

```
directory 'C:\data' do
```

```
  rights :full_control, 'WORKGROUP\username'
  inherits false
  action :create
end
```

Chef は、レシピを実行するとき、関連付けられたプロバイダ (インスタンスの状態の変更の詳細を処理する Ruby オブジェクト) にデータを渡すことにより各リソースを実行します。この場合、プロバイダは指定された設定を使用して新しいディレクトリを作成します。

カスタム IISレイヤー用のカスタムクックブックは、次のタスクを実行する必要があります。

- IIS 機能をインストールし、サービスを起動します。

  通常は、インスタンスの起動が終了した直後のセットアップ中にこのタスクを実行します。
- アプリケーションをインスタンスにデプロイします (この例ではシンプルな HTML ページ)。

  通常は、セットアップ時にこのタスクを実行します。ただし、アプリケーションは通常定期的に更新する必要があるため、インスタンスがオンラインのときに更新をデプロイする必要もあります。

1 つのレシピでこれらのすべてのタスクを実行する必要があります。ただし、セットアップタスクとデプロイタスクに別個のレシピを使用することをお勧めします。このようにして、セットアップコードを実行しなくても、いつでもアプリケーションの更新をデプロイすることができます。以下では、クックブックをセットアップしてカスタム IISレイヤーをサポートする方法について説明します。以降のトピックでは、レシピを実装する方法を示します。

開始するには、以下の手順を実行します。

1. ワークステーション上の適切な場所に、iis-cookbook というディレクトリを作成します。
2. iis-cookbook に、次のコンテンツを含む metadata.rb ファイルを追加します。

   ```
   name "iis-cookbook"
   version "0.1.0"
   ```

   この例では、最小限の metadata.rb を使用します。このファイルを使用する方法の詳細については、「metadata.rb」を参照してください。
3. iis-cookbook に recipes ディレクトリを追加します。

   このディレクトリ (名前を recipes にする必要があります) には、クックブックのレシピが含まれています。

通常、クックブックには他のさまざまディレクトリを含めることができます。たとえば、レシピがテンプレートを使用して設定ファイルを作成する場合、テンプレートは通常 `templates\default` ディレクトリに配置されます。この例のクックブックは完全にレシピで構成されているため、他のディレクトリは必要ありません。また、この例では、1 つのクックブックを使用しますが、必要な数のクックブックを使用できます。複雑なプロジェクトでは、多くの場合、複数のクックブックを使用することが推奨されます。たとえば、セットアップタスクとデプロイタスクに別個のクックブックを使用することができます。クックブックのその他の例については、「クックブックとレシピ」を参照してください。

IIS のインストールと起動を行うレシピの実装

IIS は Windows の機能の 1 つであり、Windows Server に必要に応じてインストールできる一連のシステムコンポーネントに含まれます。レシピには、次のいずれかの方法で IIS をインストールさせることができます。

- `powershell_script` リソースお使用して `Install-WindowsFeature` コマンドレットを実行する。
- Chef Windows クックブックの `windows_feature` リソースを使用する。

  `windows` クックブックには一連のリソースが含まれており、これらのリソースのプロバイダは、Deployment Image Servicing and Management (DISM) を使用して Windows インスタンスでさまざまなタスク (機能のインストールなど) を実行します。

> **Note**
>
> `powershell_script` は、特に Windows レシピに役立ちます。これを使うと、PowerShell スクリプトまたはコマンドレットを実行する方法によりインスタンスでさまざまなタスクを実行することができます。特に、Chef リソースによってサポートされていないタスクに役立ちます。

この例は、PowerShell スクリプトを実行して Web Server (IIS) をインストールおよび起動する例です。`windows` クックブックについては後で説明します。`windows_feature` を使用して IIS をインストールする方法の例については、「Windows の機能のインストール: IIS」を参照してください。

以下の内容で `install.rb` という名前のレシピをクックブックの `recipes` ディレクトリに追加します。

```
powershell_script 'Install IIS' do
  code 'Install-WindowsFeature Web-Server'
  not_if "(Get-WindowsFeature -Name Web-Server).Installed"
end

service 'w3svc' do
  action [:start, :enable]
end
```

レシピには、2 つのリソースが含まれています。

powershell_script

powershell_script は、指定された PowerShell スクリプトまたはコマンドレットを実行します。例では、以下の属性設定を使用します。

- code - 実行するための PowerShell コマンドレット。

  この例は、Web Server (IIS) をインストールする Install-WindowsFeature コマンドレットを実行する例です。通常、code 属性の行数に制限はないため、必要な数のコマンドレットを実行できます。

- not-if - IIS がまだインストールされていない場合にのみレシピが IIS をインストールするようにする [guard attribute (ガード属性)]。

  通常は、レシピを [idempotent] (べき等) にするため、同じタスクを複数回実行して時間を無駄にすることがありません。

各リソースには、プロバイダが実行するアクションを指定するアクションがあります。この例には明示的なアクションがないため、プロバイダはデフォルトの :run アクションを実行します、これにより指定された PowerShell スクリプトが実行されます。詳細については、「Windows PowerShell スクリプトを実行する」を参照してください。

service

service はサービス (この場合、Web Server IIS サービス (W3SVC)) を管理します。この例では、デフォルト属性を使用し、IIS を起動および有効化する 2 つのアクション (:start と :enable) を指定します。

> **Note**
>
> パッケージインストーラを使用するソフトウェアをインストールする場合 (MSI など)、windows_package リソースを使用できます。詳細については、「パッケージのインストール」を参照してください。

カスタムクックブックの有効化

OpsWorks スタックは、各インスタンスのローカルキャッシュからレシピを実行します。カスタムレシピを実行するには、以下を実行する必要があります。

- リモートリポジトリにクックブックを保存します。

  OpsWorks スタックは、このリポジトリから各インスタンスのローカルキャッシュにクックブックをダウンロードします。
- カスタムクックブックが有効になるようにスタックを編集します。

  カスタムクックブックはデフォルトで無効なため、スタックのカスタムクックブックを有効にし、リポジトリ URL および関連情報を指定する必要があります。

OpsWorks スタックはカスタムクックブックの S3 アーカイブと Git リポジトリをサポートします。この例では S3 アーカイブを使用します。詳細については、「クックブックリポジトリ」を参照してください。

S3 アーカイブを使用するには

1. .zip ディレクトリの iis-cookbook アーカイブを作成します。

   OpsWorks スタックは、Windows スタックの .tgz (gzip 圧縮 tar) アーカイブもサポートしています。
2. アーカイブを米国西部 (カルフォルニア北部) リージョンの S3 バケットにアップロードし、ファイルを公開します。プライベート S3 アーカイブを使用することもできますが、この例ではパブリックアーカイブで十分であり、作業がいくらかシンプルになります。

   a. にサインイン AWS マネジメントコンソール し、https://console.aws.amazon.com/s3/ で Amazon S3 コンソールを開きます。

b. `us-west-1` 内にバケットがまだ存在しない場合は、[Create Bucket] (バケットを作成する) を選択して、バケットを米国西部 (カリフォルニア北部)リージョン内に作成します。

c. バケットリストの中からファイルをアップロードしたいバケットの名前を選択し、[Upload] を選択します。

d. [Add Files] を選択します。

e. アップロードするアーカイブを選択し、[Open] を選択します。

f. [Upload - Select Files and Folders] ダイアログの下部で、[Set Details] を選択します。

g. [Set Details] ダイアログの下部で、[Set Permissions] を選択します。

h. [Set Permissions] ダイアログで、[Make everything public] を選択します。

i. [Set Permissions] ダイアログの下部で、[Start Upload] を選択します。アップロードが終了すると、`iis-cookbook.zip` ファイルがバケット内に表示されます。

j. バケットを選択し、選択したバケットの [Properties] タブを選択します。[Link] の横で、後で使用できるように、アーカイブファイルの URL を記録します。

Amazon S3 バケットへのファイルのアップロードの詳細については、「Amazon S3 Console User Guide」(Amazon S3 コンソールユーザーガイド) で「How Do I Upload Files and Folders to an S3 Bucket? (S3 バケットにファイルとフォルダをアップロードする方法) を参照してください。

> **Important**
>
> この時点までで、ウォークスルーにかかるコストはほんのわずかです。 OpsWorks スタックサービス自体は無料です。ただし、Amazon S3 ストレージなど、使用する AWS リソースには料金がかかります。アーカイブをアップロードするとすぐに料金が発生し始めます。詳細については、「AWS の料金」を参照してください。

スタックのカスタムクックブックを有効にするには

1. OpsWorks スタックコンソールで、ナビゲーションペインでスタックを選択し、右上のスタック設定を選択します。
2. [Settings] ページの右上にある [Edit] を選択します。
3. [Settings] ページで、[Use custom Chef cookbooks] を [Yes] に設定し、次の情報を入力します。

- [リポジトリタイプ] - [S3 Archive] (S3 アーカイブ)
- [リポジトリ URL] - 以前に記録したクックブックアーカイブファイルの S3 URL。

4. [Save] を選択してスタック設定を更新します。

OpsWorks スタックは、すべての新しいインスタンスにカスタムクックブックをインストールします。 OpsWorks スタックは、オンラインインスタンスにはカスタムクックブックを自動的にインストールまたは更新しない点に注意してください。これは、後で説明するように、手動で行うことができます。

ステップ 2.4: IISレイヤーを追加する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

クックブックには、IIS のインストールと起動のみ行うレシピが 1 つあります。これは、レイヤーを作成し、動作している IIS インスタンスがあることを確認するのに十分です。後で、レイヤーにアプリケーションデプロイ機能を追加します。

レイヤーの作成

まず、スタックにレイヤーを追加します。次に、適切なライフサイクルイベントにカスタムレシピを割り当てることによって、そのレイヤーに機能を追加します。

IISレイヤーをスタックに追加するには

1. ナビゲーションペインで [Layers] (レイヤー) を選択し、[Add a layer] (レイヤーの追加) を選択します。
2. レイヤーを次のように設定します。

   - [Name] (名前) - **`IISExample`**
   - [Short name] (短縮名) - **`iisexample`**

OpsWorks スタックは短縮名を使用して内部的にレイヤーを識別します。短縮名を使用してレシピ内のレイヤーを識別することもできますが、この例はそうしていません。短縮名を指定できますが、小文字の英数字と少数の句読点のみ使用できます。詳細については、「カスタムレイヤー」を参照してください。

3. [Add Layer] を選択します。

この時点でインスタンスを IISWalkthrough に追加して起動した場合、 OpsWorks スタックによりクックブックが自動的にインストールされますが、`install.rb` は実行されません。インスタンスがオンラインになった後、Execute Recipes スタックコマンドを使用してレシピを手動で実行できます。ただし、より良い方法は、レイヤーのライフサイクルイベントのいずれかにレシピを割り当てることです。 OpsWorks スタックは、インスタンスのライフサイクルの適切な時点でレシピを自動的に実行します。

インスタンスの起動が完了したら、すぐに IIS をインストールして起動します。これを行うには、`install.rb` をレイヤーの `Setup` イベントに割り当てます。

ライフサイクルイベントにレシピを割り当てるには

1. ナビゲーションペインで [Layers] (レイヤー) を選択します。
2. [IISExample]レイヤーのボックスで、[Recipes] を選択します。
3. 右上の [Edit] を選択します。
4. [Custom Chef Recipes] の [Setup] レシピボックスに「**`iis-cookbook::install`**」と入力します。

> **Note**
>
> *`cookbook-name`*`::`*`recipe-name`* を使用してレシピを識別します。このとき、レシピ名の `.rb` サフィックスは省略します。

5. [+] を選択してレシピをレイヤーに追加します。後で簡単に削除できるように、赤色の x がレシピの横に表示されます。
6. [Save] を選択して新しい設定を保存します。カスタム Setup レシピに `iis-cookbook::install` が含まれるようになります。

インスタンスをレイヤーに追加して起動

レイヤーにインスタンスを追加してインスタンスを起動することで、レシピを試すことができます。OpsWorks スタックは、インスタンスの起動が完了するとすぐに、クックブックを自動的にインストールし、セットアップ`install.rb`中に実行します。

インスタンスをレイヤーに追加して起動するには

1. OpsWorks スタックナビゲーションペインで、インスタンスを選択します。
2. [IISExample Layer]レイヤーで、[Add an instance] を選択します。
3. 適切なサイズを選択します。この例では、t2.micro (または利用可能な最小サイズ) で十分です。
4. [Add Instance] を選択します。デフォルトでは、 OpsWorks スタックはレイヤーの短縮名に整数を追加してインスタンス名を生成するため、インスタンスには iisexample1 という名前を付ける必要があります。
5. インスタンスのアクション列で開始を選択してインスタンスを起動します。 OpsWorks スタックは EC2 インスタンスを起動し、Setup レシピを実行して設定します。この時点で Layer に Deploy レシピがある場合、 OpsWorks Stacks は Setup レシピの完了後にそれらを実行します。

   プロセスには数分かかる場合があり、その間 [Status] 列には一連のステータスが表示されます。ステータスが [online] になると、設定プロセスが完了し、インスタンスが使用可能になります。

IIS がインストールおよび実行されたことの確認

RDP を使用してインスタンスに接続し、Setup レシピが正常に機能していることを確認できます。

IIS がインストールおよび実行されたことを確認するには

1. ナビゲーションペインでインスタンスを選択し、iisexample1 インスタンスの Actions 列で rdp を選択します。 OpsWorks スタックは、指定した期間後に期限切れになる RDP パスワードを自動的に生成します。
2. [Session valid for] を 2 時間に設定し、[Generate Password] を選択します。
3. OpsWorks スタックにはパスワードと、インスタンスのパブリック DNS 名とユーザー名が表示されます。3 つすべてをコピーして、[Acknowledge and close] をクリックします。
4. RDP クライアントを開き、ステップ 3 のデータを使用してインスタンスに接続します。
5. インスタンスで、Windows エクスプローラを開いて `C:` ドライブを調べます。IIS のインストールにより作成された `C:\inetpub` ディレクトリがあります。

6. [コントロール パネル] の [管理ツール] アプリケーションを開き、[サービス] を開きます。リストの一番下近くに IIS サービスが表示されています。「World Wide Web Publishing サービス」という名前で、ステータスは [実行中] になっています。
7. OpsWorks スタックコンソールに戻り、iisexample1 インスタンスのパブリック IP アドレスを選択します。これは、Amazon EC2 OpsWorks コンソールではなく スタックで実行してください。これにより、自動的に HTTP リクエストがそのアドレスに送信され、デフォルトの IIS ようこそページが開きます。

次のトピックでは、アプリケーションをインスタンス (この例では、シンプルな静的 HTML ページ) にデプロイする方法について説明します。ただし、休憩したい場合は、の [iisexample1] インスタンスの [Actions] (アクション) 列で [stop] (停止) を選択すると、インスタンスが停止し、不要な料金が発生するのを防ぐことができます。続行する準備が整ったら、インスタンスを再起動します。

ステップ 2.5: アプリケーションをデプロイする

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

IIS のインストールにより、アプリケーションのコードと関連ファイルに使用される `C:\inetpub\wwwroot` ディレクトリが作成されます。次のステップとして、そのディレクトリにアプリケーションをインストールします。この例では、静的 HTML ホーム ページ `default.html` を `C:\inetpub\wwwroot` にインストールします。一般的なアプローチを簡単に拡張して、ASP.NET アプリケーションなど、より複雑なシナリオを扱うことができます。

アプリケーションのファイルをクックブックに含めて、`install.rb` がそれらのファイルを `C:\inetpub\wwwroot` にコピーするようにすることができます。これを行う方法の例については、「例 6: ファイルの作成」を参照してください。ただし、このアプローチは柔軟性や効率性があまり高くないため、通常はクックブック開発をアプリケーション開発と分割することをお勧めします。

推奨される解決策は、リポジトリ (クックブックのリポジトリだけでなく、任意のリポジトリ) からアプリケーションのコードと関連ファイルを取得し、各 IIS サーバーインスタンスにインストールす

る個別のデプロイレシピを実装することです。このアプローチにより、アプリケーション開発からクックブック開発が分割されるため、アプリケーションを更新する必要があるときは、クックブックを更新しなくてもデプロイレシピだけを再度実行することができます。

このトピックでは、IIS Server に `default.htm` をデプロイするシンプルなデプロイレシピを実装する方法を説明します。この例は、より複雑なアプリケーションに簡単に拡張できます。

トピック

- アプリケーションの作成とリポジトリへの保存
- レシピの実装によるアプリケーションのデプロイ
- インスタンスのクックブックの更新
- カスタム IISレイヤーへのレシピの追加
- アプリケーションの追加
- アプリケーションのデプロイとアプリケーションの実行

アプリケーションの作成とリポジトリへの保存

アプリケーションにはどのリポジトリでも使用できます。わかりやすいように、この例では `default.htm` をパブリック S3 バケットに保存します。

アプリケーションを作成するには

1. ワークステーション上の適切な場所に、`iis-application` というディレクトリを作成します。
2. `iis-application` に、次のコンテンツを含む `default.htm` ファイルを追加します。

```
<!DOCTYPE html>
<html>
  <head>
    <title>IIS Example</title>
  </head>
  <body>
    <h1>Hello World!</h1>
  </body>
</html>
```

3. S3 バケットを作成し、`default.htm`をバケットにアップロードして、後で使用できるよう URL を記録しておきます。わかりやすいよう、ファイルを公開します。

> **Note**
>
> これは、とてもシンプルなアプリケーションですが、基本的な原則を拡張して本稼働レベルのアプリケーションを扱うことができます。
>
> - 複数のファイルを含むより複雑なアプリケーションの場合、通常は `iis-application` の .zip アーカイブを作成し、S3 バケットにアップロードした方がシンプルです。
>
> アップロード後には .zip ファイルをダウンロードし、内容を適切なディレクトリに展開できます。複数のファイルをダウンロードしたり、ディレクトリ構造を作成したりする必要はありません。
> - 本稼働アプリケーションの場合、ファイルを秘密にすることができます。レシピがプライベート S3 バケットからファイルをダウンロードできるようにする方法の例は、「スタック Windows インスタンスでの SDK for Ruby OpsWorks の使用」を参照してください。
> - アプリケーションは、任意の適切なリポジトリに保存できます。
>
> 通常は、リポジトリのパブリック API を使用してアプリケーションをダウンロードします。この例では、Amazon S3 API を使用します。たとえば、アプリケーションを GitHub に保存した場合、GitHub API を使用できます。

レシピの実装によるアプリケーションのデプロイ

以下のコンテンツを含む `deploy.rb` という名前のレシピを `iis-cookbook recipes` ディレクトリに追加します。

```
chef_gem "aws-sdk-s3" do
  compile_time false
  action :install
end

ruby_block "download-object" do
  block do
    require 'aws-sdk-s3'

    #1
    # Aws.config[:ssl_ca_bundle] = 'C:\ProgramData\Git\bin\curl-ca-bundle.crt'
```

```
    Aws.use_bundled_cert!

    #2
    query = Chef::Search::Query.new
    app = query.search(:aws_opsworks_app, "type:other").first
    s3region = app[0][:environment][:S3REGION]
    s3bucket = app[0][:environment][:BUCKET]
    s3filename = app[0][:environment][:FILENAME]

    #3
    s3_client = Aws::S3::Client.new(region: s3region)
    s3_client.get_object(bucket: s3bucket,
                         key: s3filename,
                         response_target: 'C:\inetpub\wwwroot\default.htm')
  end
  action :run
end
```

この例では [SDK for Ruby v2] を使用してファイルをダウンロードします。ただし、 OpsWorks スタックはこの SDK を Windows インスタンスにインストールしないため、レシピはそのタスクを処理する `chef_gem`リソースで始まります。

> **Note**
>
> `chef_gem` リソースは、gem を Chef の専用 Ruby バージョン (そのレシピが使用するバージョン) にインストールします。システム全体の Ruby バージョンに gem をインストールする場合、gem_package リソースを使用します。

レシピの大部分は `ruby_block` リソースで、SDK for Ruby を使用して `default.htm` をダウンロードする Ruby コードのブロックを実行します。`ruby_block` 内のコードは以下のセクションに分割できます。それぞれ、コード例の番号付きコメントに対応します。

1: 証明書バンドルの指定

Amazon S3 は SSL を使用するため、S3 バケットからオブジェクトをダウンロードするために適切な証明書が必要です。SDK for Ruby v2 には証明書バンドルが含まれていないため、証明書バンドルを指定して SDK for Ruby で使用するように設定する必要があります。 OpsWorks スタックは証明書バンドルを直接インストールしませんが、証明書バンドル () を含む Git をインストールしますcurl-ca-bundle.crt。便宜上、この例では Git の証明書バンドルを SSL に使用する

ように SDK for Ruby を設定します。独自のバンドルをインストールして、それに応じて SDK を設定することもできます。

2: リポジトリデータの取得

Amazon S3 からオブジェクトをダウンロードするには、AWS のリージョン、バケット名、キー名が必要です。後で説明するように、この例では、一連の環境変数をアプリと関連付けることでこの情報を提供します。アプリケーションをデプロイすると、 OpsWorks スタックはインスタンスのノードオブジェクトに一連の属性を追加します。これらの属性は本質的に、アプリケーションの設定 (環境変数など) を含むハッシュテーブルです。このアプリケーションのアプリケーション属性は、次のようになります (JSON 形式)。

```
{
  "app_id": "8f71a9b5-de7f-451c-8505-3f35086e5bb3",
  "app_source": {
      "password": null,
      "revision": null,
      "ssh_key": null,
      "type": "other",
      "url": null,
      "user": null
  },
  "attributes": {
      "auto_bundle_on_deploy": true,
      "aws_flow_ruby_settings": {},
      "document_root": null,
      "rails_env": null
  },
  "data_sources": [{"type": "None"}],
  "domains": ["iis_example_app"],
  "enable_ssl": false,
  "environment": {
      "S3REGION": "us-west-2",
      "BUCKET": "windows-example-app",
      "FILENAME": "default.htm"
  },
  "name": "IIS-Example-App",
  "shortname": "iis_example_app",
  "ssl_configuration": {
      "certificate": null,
      "private_key": null,
      "chain": null
  },
```

```
  "type": "other",
  "deploy": true
}
```

アプリケーションの環境変数は、[:environment] 属性に保存されます。環境変数を取得するには、Chef 検索クエリを使用してアプリケーションのハッシュテーブルを取得します。このテーブルは、aws_opsworks_app ノード配下にあります。このアプリは、other タイプとして定義されるため、クエリはそのタイプのアプリケーションを検索します。レシピは、このインスタンスにはアプリケーションが 1 つしかないという事実を利用しているため、対象となるハッシュテーブルは app[0] だけです。便宜上の理由で、レシピはその後リージョン、バケット、ファイル名を変数に割り当てます。

Chef 検索の使用方法の詳細については、「Chef の検索での属性値の取得」を参照してください。

3: ファイルのダウンロード

レシピの 3 番目の部分では、S3 クライアントオブジェクトが作成され、その get_object メソッドを使用して default.htm がインスタンスの C:\inetpub\wwwroot ディレクトリにダウンロードされます。

> **Note**
>
> レシピは Ruby アプリケーションであるため、Ruby コードは必ずしも ruby_block に存在する必要はありません。ただし、レシピの本文のコードが最初に実行され、その後リソースが順番に実行されます。この例では、レシピ本文にダウンロードコードを配置しようとすると、chef_gem リソースによりまだ SDK for Ruby がインストールされていないため失敗します。chef_gem リソースが SDK for Ruby をインストールした後、そのリソースが実行される際に ruby_block リソース内のそのコードが実行されます。

インスタンスのクックブックの更新

OpsWorks スタックは、新しいインスタンスにカスタムクックブックを自動的にインストールします。ただし、既存のインスタンスを使用しているため、クックブックを手動で更新する必要があります。

インスタンスのクックブックを更新するには

1. iis-cookbook の .zip アーカイブを作成し、S3 バケットにアップロードします。

これにより既存のクックブックが上書きされますが、URL は変更されないため、スタック設定の更新は不要です。

2. インスタンスがオンラインでない場合は再起動してください。
3. インスタンスがオンラインになったら、ナビゲーションペインで [Stack] を選択し、[Run Command] を選択します。
4. [Command] で、[Update Custom Cookbooks] を選択します。このコマンドを実行すると、更新されたクックブックがインスタンスにインストールされます。
5. [Update Custom Cookbooks] を選択します。コマンドの実行完了までには数分かかることがあります。

カスタム IISレイヤーへのレシピの追加

`install.rb` と同様、デプロイを処理するには、`deploy.rb` を適切なライフサイクルイベントに割り当てることをお勧めします。通常は、Deploy イベントにデプロイレシピを割り当てます。それらは、まとめて Deploy レシピと呼ばれます。レシピを Deploy イベントに割り当ててもイベントはトリガーされません。代わりに、次のようになります。

- 新しいインスタンスの場合、 OpsWorks スタックは Setup レシピの完了後に Deploy レシピを自動的に実行するため、新しいインスタンスは自動的に現在のアプリケーションバージョンになります。
- オンラインインスタンスでは、デプロイコマンドを使用して新しいアプリケーションまたは更新されたアプリケーションを手動でインストールします。

  このコマンドはスタックのインスタンスで Deploy イベントをトリガーし、これによって Deploy レシピが実行されます。

レイヤーの Deploy イベントに deploy.rb を割り当てるには

1. ナビゲーションペインで [レイヤー] を選択し、続いて [レイヤーのIISExample] の [レシピ] を選択します。
2. [Custom Chef Recipes] で、[**`iis-cookbook::deploy`**] を [デプロイ] レシピボックスに追加し、[+] を選択してレシピをレイヤーに追加します。
3. [Save] を選択して新しい設定を保存します。カスタム Deploy レシピに `iis-cookbook::deploy` が含まれるようになります。

アプリケーションの追加

最後のタスクでは、スタックにアプリケーションを追加して、 OpsWorks スタック環境でアプリケーションを表します。アプリケーションには、アプリケーションの表示名などのメタデータと、リポジトリからアプリケーションをダウンロードするのに必要なデータが含まれます。

アプリケーションをスタックに追加するには

1. ナビゲーションペインで [Apps] を選択し、[Add an app] を選択します。
2. 以下の設定を使用してアプリケーションを設定します。
   - [Name] (名前) - l **`IIS-Example-App`**
   - [Repository Type] (リポジトリタイプ) - [Other] (その他)
   - [Environment Variables] (環境変数) 以下の 3 つの環境変数を追加します。
     - **`S3REGION`** - バケットのリージョン (この場合は `us-west-1`)。
     - **`BUCKET`** - バケット名 (`windows-example-app` など)。
     - **`FILENAME`** - ファイル名 (**`default.htm`**)。
3. 残りの設定はデフォルト値をそのまま使い、[Add App] を選択してアプリケーションをスタックに追加します。

> **Note**
>
> この例では、ダウンロードデータを提供するために環境変数を使用します。別の方法は、S3 Archive リポジトリタイプを使用してファイルの URL を提供することです。 OpsWorks スタックは、AWS 認証情報などのオプションデータとともに情報をアプリケーションの `app_source` 属性に追加します。デプロイしたレシピは、URL をアプリケーション属性から取得して解析し、リージョン、バケット名およびファイル名を抽出できなければなりません。

アプリケーションのデプロイとアプリケーションの実行

OpsWorks スタックは、アプリケーションを自動的に新しいインスタンスにデプロイしますが、オンラインインスタンスにはデプロイしません。インスタンスは既に実行されているため、アプリケーションを手動でデプロイする必要があります。

アプリケーションをデプロイするには

1. ナビゲーションペインで「アプリケーション」を選択し、続いてアプリの「アクション」列で「デプロイ」を選択します。
2. [Command] は [Deploy] に設されていなければなりません。[Deploy App] (デプロイアプリケーション) ページの右下で [Deploy] (デプロイ) を選択します。コマンドの実行完了までには数分かかることがあります。

   デプロイメントが完了したら、[Apps] ページに戻ります。[Status] インジケータには緑で [successful] と表示され、アプリケーション名の横には、デプロイメントの正常終了を示す緑のチェックマークが表示されます。

> **Note**
>
> Windows アプリケーションは常に [Other] アプリケーションタイプのため、アプリケーションをデプロイすると次の処理が実行されます。
>
> - 前述のとおり、アプリケーションのデータが、スタック設定とデプロイ属性に追加されます。
> - カスタム Deploy レシピを実行する Deploy イベントがスタックのインスタンスでトリガーされます。

> **Note**
>
> 失敗したデプロイまたはアプリケーションをトラブルシューティングする方法についての詳細は、レシピのデバッグ を参照してください。

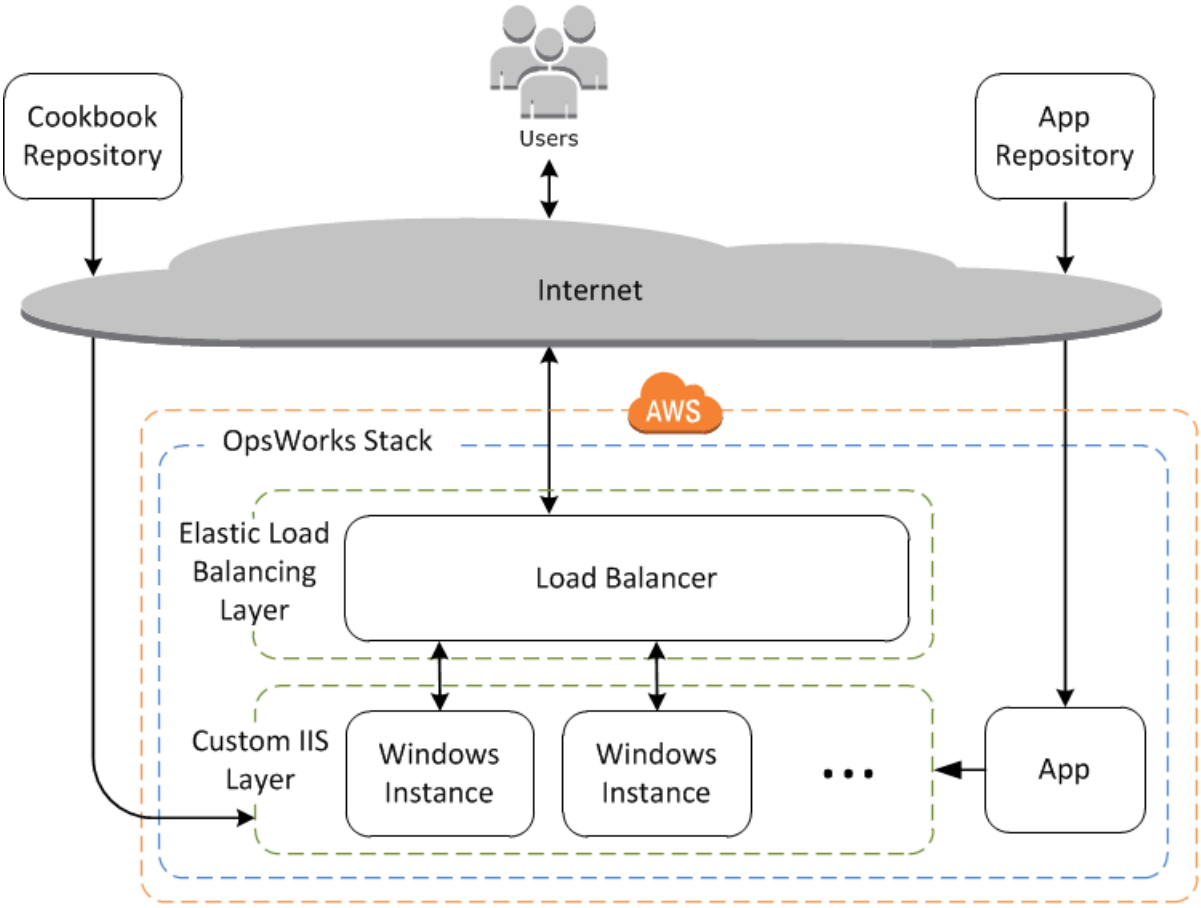
アプリケーションがインストールされます。[Navigation] (ナビゲーション) ペインで [Instances] (インスタンス) を選択し、続いてインスタンスのパブリック IP アドレスを選択することで開くことができます。これにより、HTTP リクエストがインスタンスに送信され、ブラウザに次のように表示されます。

Hello World!

ステップ 3: IISExample の拡張

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

受信ユーザーリクエストが単一の t2.micro インスタンスで処理可能な制限に近づいている場合、サーバー容量を増やす必要があります。大きいインスタンスに移行できますが、制限があります。インスタンスをスタックに追加し、ロードバランサーの背後に配置すると、柔軟性が向上します。基本的なアーキテクチャは次のようになります。



とりわけ、このアプローチには、単一の大きいインスタンスより堅牢性がかなり高いというメリットがあります。

- いずれかのインスタンスが失敗した場合、ロードバランサーは受信リクエストを残りのインスタンスに分散し、アプリケーションは動作し続けます。
- インスタンスを異なるアベイラビリティーゾーンに置いた場合 (推奨される方法)、アベイラビリティーゾーンで問題が発生してもアプリケーションが動作し続けます。

OpsWorks スタックを使用すると、スタックを簡単にスケールアウトできます。このセクションでは、2 番目の 24/7 PHP App Server インスタンスを IISExample に追加し、両方のインスタンスを Elastic Load Balancing ロードバランサーの後ろに配置することにより、スタックをスケールアウトする方法の基本について説明します。プロシージャを簡単に拡張して任意の数の 24/7 インスタンスを追加したり、時間ベースのインスタンスを使用して OpsWorks スタックでスタックを自動的にスケーリングしたりできます。詳細については、「時間ベースおよび負荷ベースのインスタンスによる負荷の管理」を参照してください。

ロードバランサーの追加

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Elastic Load Balancing は、受信したアプリケーショントラフィックを複数の Amazon EC2 インスタンスに自動的に分散する AWS のサービスです。ロードバランサーで 2 つの目的を達成できます。明らかな目的は、アプリケーションサーバーで負荷を均等化することです。多くのサイトでは、ユーザーがアプリケーションサーバーおよびデータベースに直接アクセスできないようにすることが求められます。Elastic Load Balancing は、トラフィックの分散の他に、以下も行実行します。

- 健全でない Amazon EC2 インスタンスを検出します。

  問題のあるインスタンスが復旧するまで、トラフィックのルートを残りの正常なインスタンスに変更します。
- 受信トラフィックに応じて、自動的にそのリクエスト処理能力を拡張します。

> **Note**
>
> OpsWorks スタックは Application Load Balancer をサポートしていません。Classic Load Balancer は、 OpsWorks スタックでのみ使用できます

Elastic Load Balancing はよくレイヤーと呼ばれますが、他のビルトインレイヤーとは動作が多少異なります。レイヤーを作成してインスタンスを追加する代わりに、Amazon EC2 コンソールを使用して Elastic Load Balancing ロードバランサーを作成し、それを既存のレイヤーの 1 つ、通常はアプリケーションサーバーレイヤーにアタッチします。 OpsWorks スタックはレイヤーの既存のインスタンスをサービスに登録し、新しいインスタンスを自動的に追加します。次の手順では、ロードバランサーを追加する方法について説明します。

ロードバランサーをカスタム IISレイヤーにアタッチするには

1. Amazon EC2 コンソールを使用して、IISExample の新しいロードバランサーを作成します。詳細については、「Elastic Load Balancing の開始方法」を参照してください。[Create Load Balancer] ウィザードを実行するときに、ロードバランサーを次のように設定します。

   1: ロードバランサーの定義

   ロードバランサーに IIS-LB OpsWorks などのわかりやすい名前を割り当てて、 スタックコンソールで見つけやすくします。残りの設定のデフォルト値を受け入れ、[Next: Assign Security Groups] を選択します。

   2: セキュリティグループの割り当て

   アカウントでデフォルト VPC がサポートされている場合は、このページがウィザードに表示され、ロードバランサーのセキュリティグループを決定できます。EC2 Classic の場合、このページは表示されません。

   このウォークスルーでは、[default VPC security group] を指定し、[Next: Configure Security Settings] を選択します。

   3: セキュリティ設定の構成

   このウォークスルーでは、ロードバランサーでセキュアリスナー (フロントエンド接続の HTTPS または SSL) を使用する必要があるため、続行するには [Next: Configure Health Check] を選択します。

4: ヘルスチェックの設定

ping のパスを **/** に設定します。残りの設定のデフォルト値を受け入れ、[Next: Add EC2 Instances] を選択します。

5: EC2 インスタンスの追加

OpsWorks スタックは、ロードバランサーへのインスタンスの登録を自動的に処理します。[Next Add Tags] を選択して続行します。

6: タグの追加

この例ではタグを使用しません。[Review and Create] を選択します。

7: 確認

選択を確認して [Create] を選択し、[Close] を選択すると、ロードバランサーが起動します。

2. アカウントでデフォルト VPC がサポートされている場合は、ロードバランサーを起動した後で、セキュリティグループに適切なインバウンドルールがあることを確認する必要があります。デフォルトルールでは、着信トラフィックは受け入れられません。

   1. Amazon EC2 のナビゲーションペインで、[Security Groups] (セキュリティグループ)を選択します。
   2. [default VPC security group] を選択します。
   3. [インバウンド] タブで、[編集] を選択します。
   4. このウォークスルーでは、[Source] を [Anywhere] に設定します。これにより、ロードバランサーでは任意の IP アドレスからの着信トラフィックを受け入れます。
   5. [保存] をクリックします。

3. OpsWorks スタックコンソールに戻ります。[Layers] (レイヤー) ページで、[Network] (ネットワーク) を選択します。

4. [Elastic Load Balancing] で、ステップ 1 で作成した IIS-LB ロードバランサーを選択し、[Save] をクリックします。

   ロードバランサーをレイヤーにアタッチすると、 OpsWorks スタックはレイヤーの現在のインスタンスを自動的に登録し、オンラインになると新しいインスタンスを追加します。

5. [Layers] (レイヤー) ページで、ロードバランサーの名前をクリックして詳細ページを開きます。ロードバランサーページのインスタンスの横のチェックマークは、インスタンスがヘルスチェックに合格したことを示します。

これで、ロードバランサーにリクエストを送信することによって IIS-Example-App を実行できます。

ロードバランサーを通じて IIS-Example-App を実行するには

1. [Layers] (レイヤー) を選択します。IIS-ELB ロードバランサーがレイヤーとして一覧表示され、[Health] 列には正常なインスタンスを示す緑色のインスタンスが 1 つ表示されます。
2. ロードバランサーの DNS 名を選択して IIS-Example-App を実行します。これは、ロードバランサーの名前の下に一覧表示され、`IIS-LB-1802910859.us-west-2.elb.amazonaws.com` のように表示されます。ロードバランサーがインスタンスにリクエストを転送すると、レスポンスが返されます。これは、インスタンスのパブリック IP アドレスをクリックした場合と同じレスポンスになります。

この時点ではインスタンスが 1 個しかないため、ロードバランサーがあっても実際にはそれほど変わりません。ただし、レイヤーにインスタンスを追加できます。

インスタンスをレイヤーに追加するには

1. [Instances] を選択し、[+ instance] を選択して別のインスタンスをレイヤーに追加します。
2. インスタンスを起動します。

新しいインスタンスであるため、 OpsWorks スタックは現在のカスタムクックブックを自動的にインストールし、セットアップ中に現在のアプリケーションバージョンをデプロイします。インスタンスがオンラインになると、 OpsWorks スタックによってロードバランサーに自動的に追加されるため、インスタンスはすぐにリクエストの処理を開始します。アプリケーションがまだ動作していることを確認するには、ロードバランサーの DNS 名を再度選択できます。

次のステップ

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このウォークスルーでは、シンプルな Windows アプリケーションサーバースタックのセットアップの基本について説明しました。ここでは、次のステップに関する推奨事項をいくつか示します。

- 詳細については、 使用開始: クックブックでクックブックの実装に関するチュートリアルを紹介し、 OpsWorks スタック固有の例をいくつか紹介します。
- [Amazon Relational Database Service (Amazon RDS) layer] をスタックに追加して、バックエンドデータベースサーバーとして使用することができます。アプリケーションをデータベースに接続する方法については、「カスタムレシピの使用」を参照してください。

OpsWorks スタックでのクックブックの開始方法

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

通常、本番稼働レベルの OpsWorks スタックスタックにはカスタマイズが必要です。これは多くの場合、カスタム Chef クックブックを実装することを意味します。クックブックは、レシピと呼ばれる手順を含む設定情報が含まれているパッケージファイルです。レシピは、Ruby 言語構文で書かれ、使用するリソースとそれらのリソースを適用する順序を指定する、1 つ以上の指示のセットです。Chef で使用されるリソースは、設定ポリシーのステートメントです。このチュートリアルでは、 スタック用の Chef OpsWorks クックブックを実装するための基本的な概要を説明します。Chef、クックブック、レシピ、およびリソースの詳細については、「次のステップ」のリンクを参照してください。

このウォークスルーでは、主にユーザー独自のクックブックを作成する方法について説明します。Chef Supermarket のようなウェブサイトで入手できるコミュニティ提供のクックブックを使用することもできます。コミュニティクックブックの使用を開始できるようにするため、このウォークスルーでは Chef Supermarket からのコミュニティクックブックを使用する手順が後述されています。

このウォークスルーを開始する前にいくつかの設定ステップを完了します。すでにこの章の他のウォークスルー (「使用開始: サンプル」など)を完了している場合、このウォークスルーの前提条件

を満たしており、省略して「このウォークスルーの開始」に進むことができます。それ以外の場合、必ず前提条件を満たしてからこのウォークスルーに戻ってください。

トピック

- ステップ 1: クックブックを作成する
- ステップ 2: スタックとそのコンポーネントを作成する
- ステップ 3: レシピを実行し、テストする
- ステップ 4: クックブックを更新してパッケージをインストールする
- ステップ 5: インスタンスのクックブックを更新し、レシピを実行する
- ステップ 6: クックブックを更新してユーザーを追加する
- ステップ 7: クックブックを更新してディレクトリを作成する
- ステップ 8: クックブックを更新してファイルを作成し、コピーする
- ステップ 9: クックブックを更新してコマンドを実行する
- ステップ 10: クックブックを更新してスクリプトを実行する
- ステップ 11: クックブックを更新してサービスを管理する
- ステップ 12: カスタム JSON を使用するようにクックブックを更新する
- ステップ 13: クックブックを更新してデータバッグを使用する
- ステップ 14: クックブックを更新して繰り返しを使用する
- ステップ 15: クックブックを更新して条件付きロジックを使用する
- ステップ 16: クックブックを更新してコミュニティクックブックを使用する
- ステップ 17: (オプション) クリーンアップする
- 次のステップ

ステップ 1: クックブックを作成する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

クックブックの作成から開始します。ここで作成するクックブックは、実務で使い始めるのに十分なものではなく、このウォークスルーにおける残りの作業の基礎となるものです。

> **Note**
>
> このステップでは、クックブックを手動で作成する方法を示します。ローカルのワークステーションでコマンド chef generate cookbook を実行することにより、Chef開発キット (Chef DK) を使用して、より短時間でクックブックを作成することができます。ただし、このコマンドでは、このウォークスルーで必要ではないフォルダとファイルがいくつか作成されます。

クックブックを作成するには

1. ローカルワークステーションで、opsworks_cookbook_demo という名前のディレクトリを作成します (別の名前を使用することはできますが、必ずこのウォークスルー全体でこれを opsworks_cookbook_demo に置き換えてください)。
2. opsworks_cookbook_demo ディレクトリで、テキストエディタを使い metadata.rb という名前のファイルを作成します。クックブックの名前を指定するには下記のコードを追加します。metadata.rb の詳細については、Chef ウェブサイトの metadata.rb を参照してください。

   ```
   name "opsworks_cookbook_demo"
   ```

3. opsworks_cookbook_demo ディレクトリに recipes という名前のファイルを作成します。このサブディレクトリには、このウォークスルーのクックブック用に作成するすべてのレシピが含まれます。
4. recipes ディレクトリに default.rb という名前のファイルを作成します。このファイルにはファイルと同じ名前のレシピが含まれますが、ファイル拡張子がなく、default となります。次の 1 行のコードを、default.rb ファイルに追加します。このコードは、レシピの実行時にログにシンプルなメッセージを表示する 1 行のレシピです。

   ```
   Chef::Log.info("********** Hello, World! **********")
   ```

5. ターミナルまたはコマンドプロンプトで、tar コマンドを使用して opsworks_cookbook_demo.tar.gz というファイルを作成します。これには、opsworks_cookbook_demo ディレクトリとそのコンテンツが含まれます。例えば:

```
tar -czvf opsworks_cookbook_demo.tar.gz opsworks_cookbook_demo/
```

別のファイル名を使用することはできますが、必ずこのウォークスルー全体でこれを opsworks_cookbook_demo.tar.gz に置き換えてください。

> **Note**
>
> Windows で tar ファイルを作成する場合、最上位ディレクトリはクックブックの親ディレクトリでなければなりません。このウォークスルーは、tar パッケージによって提供される tar コマンドを使用して Linux で、[Git Bash] で提供される tar コマンドを使って Windows でそれぞれテスト済みです。他のコマンドやプログラムを使用した、圧縮された TAR (.gz .tar) ファイルの作成は、予期どおりにならない可能性があります。

6. S3 バケットを作成するか、既存のバケットを使用します。詳細については、「バケットの作成」を参照してください。
7. opsworks_cookbook_demo.tar.gz ファイルを S3 バケットにアップロードします。詳細については、「バケットへのオブジェクトの追加」を参照してください。

これで、このウォークスルー全体で使用するクックブックが作成されました。

次のステップでは、後でクックブックをアップロードし、クックブックのレシピを実行するために使用する OpsWorks スタックスタックを作成します。

ステップ 2: スタックとそのコンポーネントを作成する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックスタックとそのコンポーネントを作成します。これにはレイヤーとインスタンスが含まれます。後のステップでは、インスタンスにクックブックをアップロードし、そのインスタンスでクックブックのレシピを実行します。

スタックを作成するには

1. https://console.aws.amazon.com/opsworks OpsWorks の スタックコンソールにサインインします。
2. 該当する場合、次のいずれかを実行します。
   - OpsWorks 「スタックへようこそ」ページが表示されている場合は、「最初のスタックを追加する」または「最初の OpsWorks スタックを追加する」を選択します (どちらの選択も同じことを行います)。[Add stack] ページが表示されます。
   - [OpsWorks Dashboard] ページが表示された場合は、[Add stack] を選択します。[Add Stack] ページが表示されます。
3. [Chef 12 stack] を選択します。
4. [Stack name] ボックスに、スタック名 (たとえば **MyCookbooksDemoStack**) を入力します。別の名前を入力することはできますが、必ずこのウォークスルー全体でこれを `MyCookbooksDemoStack` に置き換えてください。
5. [リージョン] で [米国西部 (オレゴン)] を選択します。
6. [VPC] で、次のいずれかを実行します。
   - VPC が利用できる場合は、これを選択します。詳細については、「VPC でのスタックの実行」を参照してください。
   - それ以外の場合、[No VPC] を選択します。
7. [Use custom Chef cookbooks] で、[Yes] を選択します。
8. [Repository type] で、[S3 Archive] を選択します。

   > **Note**
   >
   > 入門ガイド: Linux のウォークスルーでは、[Http Archive] を選択しました。ここでは、必ず代わりに [S3 Archive] を選択します。

9. [リポジトリの URL] で、S3 の `opsworks_cookbook_demo.tar.gz` ファイルへのパスを入力します。パスを取得するには、S3 コンソールで、`opsworks_cookbook_demo.tar.gz` ファイルを選択します。[Properties] ペインで、[Link] フィールドの値をコピーします (これ

に似たものになるはずです。`https://s3.amazonaws.com/amzn-s3-demo-bucket/opsworks_cookbook_demo.tar.gz`)

10. S3 バケットがデフォルトであるプライベートである場合、[Access key ID] (アクセスキー ID) とおよび [Secret access key](シークレットアクセスキー) で、このウォークスルーに使用している IAM ユーザーのアクセスキー ID およびシークレットアクセスキーを入力します。詳細については、「オブジェクトに対するアクセス許可を編集する」および「他ユーザーとのオブジェクトの共有」を参照してください。
11. 以下はデフォルト値のままにします。
    - [Default Availability Zone] (us-west-2a)
    - Default operating system (デフォルトオペレーティングシステム) (Linux および Amazon Linux 2016.09)
    - [Default SSH key] (Do not use a default SSH key)
    - [Stack color] (dark blue)
12. [Advanced] (アドバンスト) を選択します。
13. [IAM role] (IAM ロール) で、次のいずれかを実行します。
    - [aws-opsworks-service-role] が利用できる場合は、これを選択します。
    - [aws-opsworks-service-role] が利用できない場合は、[New IAM role] を選択します。
14. Default IAM instance profile (デフォルト IAM インスタンスプロファイル) で、次のいずれかを実行します。
    - [aws-opsworks-ec2-role] が利用できる場合は、これを選択します。
    - [aws-opsworks-ec2-role] を利用できない場合は、[New IAM instance profile] (新しい IAM インスタンスプロファイル) を選択します。
15. 以下はデフォルト値のままにします。
    - [Default root device type] (EBS backed)
    - [Hostname theme] (Layer Dependent)
    - [OpsWorks Agent version] (最新バージョン)
    - [Custom Chef JSON] (空白)
    - [Security]、[Use OpsWorks security groups] (Yes)
16. スタックの追加を選択します。 OpsWorks スタックはスタックを作成し、MyCookbooksDemoStack ページを表示します。

レイヤーを作成するには

1. サービスナビゲーションペインで、[Layers] (レイヤー) を選択します。[Layers] (レイヤー) ページが表示されます。
2. [Add a layer] (レイヤーを追加) を選択します。
3. [OpsWorks] タブで、[Name] に「**MyCookbooksDemoLayer**」と入力します。別の名前を入力することはできますが、必ずこのウォークスルー全体でこれを `MyCookbooksDemoLayer` に置き換えてください。
4. [Short name] に、「**cookbooks-demo**」と入力します。別の名前を入力することはできますが、必ずこのウォークスルー全体でこれを `cookbooks-demo` に置き換えてください。
5. レイヤーの追加を選択します。 OpsWorks スタックはレイヤーを追加し、レイヤーページを表示します。

インスタンスを作成して起動するには

1. サービスのナビゲーションペインで、[Instances] を選択します。[Instances] ページが表示されます。
2. [インスタンスを追加する] を選択します。
3. [New] タブの [Advanced] を選択します。
4. 以下はデフォルト値のままにします。
   - [Hostname] (cookbooks-demo1)
   - [Size] (c3.large)
   - [Subnet] (*IP ####* us-west-2a)
   - Scaling type (24/7)
   - [SSH key] (Do not use a default SSH key)
   - オペレーティングシステム: (Amazon Linux 2016.09)
   - [OpsWorks Agent version] (Inherit from stack)
   - [Tenancy] (Default - Rely on VPC settings)
   - [Root device type] (EBS backed)
   - [Volume type] (General Purpose (SSD))
   - [Volume size] (8)
5. [Add instance] を選択します。

6. [MyCookbooksDemoLayer] で、[cookbooks-demo1] および [Actions] の [start] を選択します。[Status] が [online] に変わるまで進まないでください。このプロセスは完了までに数分かかることがあるため、しばらくお待ちください。

これで、スタック、レイヤー、およびクックブックが S3 バケットから自動的にコピーされたインスタンスが用意できました。次のステップでは、インスタンスのクックブック内からデフォルトのレシピを実行し、テストします。

ステップ 3: レシピを実行し、テストする

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックがインスタンスにコピーしたクックブック内から`default`レシピを実行してテストします。すでに説明したように、これはレシピの実行時にログにシンプルなメッセージを表示する 1 行のレシピです。

レシピを実行するには

1. サービスナビゲーションペインで、[Stack] を選択します。[MyCookbooksDemoStack] ページが表示されます。
2. [Run Command] を選択します。[Run Command] ページが表示されます。
3. [Command] の [Execute Recipes] を選択します。
4. [Recipes to execute] に「**`opsworks_cookbook_demo::default`**」と入力します。

   `opsworks_cookbook_demo` は、`metadata.rb` ファイルで宣言されているクックブックの名前です。**`default`** は実行するレシピの名前です。つまり、クックブックの `default.rb` サブディレクトリの `recipes` ファイルの、ファイル拡張子がない名前です。
5. 次のデフォルト設定はそのままにしておきます。

   - [Comment] (空白)

- [Advanced]、[Custom Chef JSON] (空白)
- [Instances] ([Select all] をオン、[MyCookbooksDemoLayer] をオン、[cookbooks-demo1] をオン)

6. [Execute Recipes] を選択します。[Running command execute_recipes] ページが表示されます。[Status] が [successful] に変わるまで進まないでください。このプロセスは数分かかることがあるため、しばらくお待ちください。

レシピの結果を確認するには

1. [Running command execute_recipes] ページを表示し、[cookbooks-demo1] と [Log] の [show] を選択します。[execute_recipes] ログページが表示されます。
2. ログを下へスクロールして、次のようなエントリを見つけます。

```
[2015-11-13T19:14:39+00:00] INFO: ********** Hello, World! **********
```

最初のレシピを正常に実行しました。次のステップでは、インスタンスにパッケージをインストールするレシピを追加してクックブックを更新します。

ステップ 4: クックブックを更新してパッケージをインストールする

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

人気の高いテキストエディター GNU Emacs を含むパッケージをインスタンスにインストールするレシピを追加してクックブックを更新します。

インスタンスに簡単にログインしてパッケージを 1 回インストールできますが、レシピを作成すると、 スタックからレシピを 1 OpsWorks 回実行して、スタック内の複数のインスタンスに複数のパッケージを同時にインストールできます。

クックブックを更新してパッケージをインストールするには

1. ローカルワークステーションの opsworks_cookbook_demo ディレクトリにある recipes サブディレクトリで、以下のコードを含む install_package.rb という名前のファイルを作成します。

   ```
   package "Install Emacs" do
     package_name "emacs"
   end
   ```

   このレシピは emacs パッケージをインスタンスにインストールします (詳細については、「package」を参照してください)。

   > **Note**
   >
   > レシピには任意のファイル名を付けることができます。 OpsWorks スタックでレシピを実行するときは、必ず正しいレシピ名を指定してください。

2. ターミナルまたはコマンドプロンプトで、tar コマンドを使用して opsworks_cookbook_demo.tar.gz というファイルの新しいバージョンを作成します。これには、opsworks_cookbook_demo ディレクトリとその更新されたコンテンツが含まれます。
3. 更新済みの opsworks_cookbook_demo.tar.gz ファイルを S3 バケットにアップロードします。

この新しいレシピは、インスタンスのクックブックを更新し、更新されたクックブック内から新しいレシピを実行するときに実行されます。次の手順は、これを行う方法を示しています。

次の手順が完了すると、インスタンスにログインし、コマンドプロンプトから「emacs」と入力して GNU Emacs を起動できます (詳細については、「Linux インスタンスへの接続」を参照してください)。GNU Emacs を終了するには、Ctrl+X キーを押してから Ctrl+C キーを押します。

> **Important**
>
> インスタンスにログインするには、まずパブリック SSH キー (ssh-keygen や PuTTYgen などのツールを使用して作成できます) に関する情報を OpsWorks スタックに提供し、次にユーザーがインスタンスにログインできるようにMyCookbooksDemoStackスタックに対す

るアクセス許可を設定する必要があります。手順については、「ユーザーのパブリック SSH キーの登録」および「SSH でのログイン」を参照してください。

ステップ 5: インスタンスのクックブックを更新し、レシピを実行する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

インスタンスのクックブックを変更し、インスタンスの更新されたクックブック内からレシピを実行します。このウォークスルーの残りの部分では、新しいレシピを追加してクックブックを更新するたびに、この手順を繰り返します。

インスタンスのクックブックを更新するには

1. サービスナビゲーションペインで、[Stack] を選択します。[MyCookbooksDemoStack] ページが表示されます。
2. [Run Command] を選択します。[Run Command] ページが表示されます。
3. [Command] で、[Update Custom Cookbooks] を選択します。
4. 次のデフォルト設定はそのままにしておきます。
   - [Comment] (空白)
   - [Advanced]、[Custom Chef JSON] (空白)
   - [Advanced]、[Instances] ([Select all] をオン、[MyCookbooksDemoLayer] をオン、[cookbooks-demo1] をオン)
5. [Update Custom Cookbooks] を選択します。[Running command update_custom_cookbooks] ページが表示されます。[Status] が [successful] に変わるまで進まないでください。このプロセスは完了までに数分かかることがあるため、しばらくお待ちください。

レシピを実行するには

1. サービスナビゲーションペインで、[Stack] を選択します。[MyCookbooksDemoStack] ページが表示されます。
2. [Run Command] を選択します。[Run Command] ページが表示されます。
3. [Command] の [Execute Recipes] を選択します。
4. [Recipes to execute] で、実行するレシピの名前を入力します。これを最初に行うときに、レシピは **`opsworks_cookbook_demo::install_package`** という名前になります。

   > **Note**
   >
   > 後でこの手順を繰り返すときに、クックブックの名前 (**`opsworks_cookbook_demo`**) を入力し、その後に 2 つのコロン (**`::`**)、レシピの名前 (`.rb` ファイル拡張子を除くレシピのファイル名) を付けます。

5. 次のデフォルト設定はそのままにしておきます。

   - [Comment] (空白)
   - [Advanced]、[Custom Chef JSON] (空白)
   - [Instances] ([Select all] をオン、[MyCookbooksDemoLayer] をオン、[cookbooks-demo1] をオン)

6. [Execute Recipes] を選択します。[Running command execute_recipes] ページが表示されます。[Status] が [successful] に変わるまで進まないでください。このプロセスは数分かかることがあるため、しばらくお待ちください。

> **Note**
>
> レシピを手動で実行する必要はありません。セットアップイベントや設定イベントなど、レイヤーのライフサイクルイベントにレシピを割り当てることができます。イベントが発生すると、 OpsWorks スタックはそれらのレシピを自動的に実行します。詳細については、「OpsWorks スタックライフサイクルイベント」を参照してください。

次のステップでは、クックブックを更新してユーザーをインスタンスに追加します。

ステップ 6: クックブックを更新してユーザーを追加する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

インスタンスにローカルユーザーを追加するレシピを追加してクックブックを更新し、ユーザーのホームディレクトリとシェルを設定します。これは、Linux の adduser または useradd コマンドまたは Windows の net user コマンドの実行に似ています。インスタンスのファイルとディレクトリへのアクセスを制御する場合などに、インスタンスにローカルユーザーを追加します。

クックブックを使用せずにユーザーを管理することもできます。詳細については、「ユーザーの管理」を参照してください。

インスタンスのクックブックを更新し、新しいレシピを実行するには

1. ローカルワークステーションの opsworks_cookbook_demo ディレクトリにある recipes サブディレクトリで、以下のコードを含む add_user.rb という名前のファイルを作成します (詳細については、user を参照してください)。

   ```
   user "Add a user" do
     home "/home/jdoe"
     shell "/bin/bash"
     username "jdoe"
   end
   ```

2. ターミナルまたはコマンドプロンプトで、tar コマンドを使用して opsworks_cookbook_demo.tar.gz というファイルの新しいバージョンを作成します。これには、opsworks_cookbook_demo ディレクトリとその更新されたコンテンツが含まれます。
3. 更新済みの opsworks_cookbook_demo.tar.gz ファイルを S3 バケットにアップロードします。
4. 「ステップ 5: インスタンスのクックブックを更新し、レシピを実行する」の手順に従って、インスタンスのクックブックを更新し、レシピを実行します。「レシピを実行するには」の手順の [Recipes to execute] に、「**opsworks_cookbook_demo::add_user**」と入力します。

レシピをテストするには

1. すでに行っていない場合は、インスタンスにログインします。
2. コマンドプロンプトで次のコマンドを実行して、新しいユーザーが追加されたことを確認します。

```
grep jdoe /etc/passwd
```

ユーザー名、ID 番号、グループ ID 番号、ホームディレクトリ、シェルなど詳細を含めて、ユーザーに関する次のような情報が表示されます。

```
jdoe:x:501:502::/home/jdoe:/bin/bash
```

次のステップでは、クックブックを更新してインスタンスにディレクトリを作成します。

ステップ 7: クックブックを更新してディレクトリを作成する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

インスタンスにディレクトリを追加するレシピを追加してクックブックを更新します。これは、Linux の mkdir コマンドまたは Windows の md または mkdir コマンドの実行に似ています。

インスタンスのクックブックを更新し、新しいレシピを実行するには

1. ローカルワークステーションの `opsworks_cookbook_demo` ディレクトリにある `recipes` サブディレクトリで、以下のコードを含む `create_directory.rb` という名前のファイルを作成します。詳細については、「directory」を参照してください。

```
directory "Create a directory" do
  group "root"
  mode "0755"
```

```
  owner "ec2-user"
  path "/tmp/create-directory-demo"
end
```

2. ターミナルまたはコマンドプロンプトで、tar コマンドを使用して opsworks_cookbook_demo.tar.gz というファイルの新しいバージョンを作成します。これには、opsworks_cookbook_demo ディレクトリとその更新されたコンテンツが含まれます。
3. 更新済みの opsworks_cookbook_demo.tar.gz ファイルを S3 バケットにアップロードします。
4. 「ステップ 5: インスタンスのクックブックを更新し、レシピを実行する」の手順に従って、インスタンスのクックブックを更新し、レシピを実行します。「レシピを実行するには」の手順の [Recipes to execute] に、「**opsworks_cookbook_demo::create_directory**」と入力します。

レシピをテストするには

1. すでに行っていない場合は、インスタンスにログインします。
2. コマンドプロンプトで次のコマンドを実行して、新しいディレクトリが追加されたことを確認します。

```
ls -la /tmp/create-directory-demo
```

新しく追加されたディレクトリに関する情報が、アクセス権限、所有者名、グループ名などの情報を含めて表示されます。

```
drwxr-xr-x 2 ec2-user root 4096 Nov 18 00:35 .
drwxrwxrwt 6 root     root 4096 Nov 24 18:17 ..
```

次のステップでは、クックブックを更新してインスタンスにファイルを作成します。

ステップ 8: クックブックを更新してファイルを作成し、コピーする

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS

re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

インスタンスに 2 つのファイルを追加するレシピを追加してクックブックを更新します。レシピの最初のリソースは、レシピコードを使用して完全にファイルを作成します。これは、Linux の cat、echo、または touch コマンド、または Windows の echo または fsutil コマンドに似ています。この手法は、少数のファイル、小さいファイル、またはシンプルなファイルに対して有効です。レシピの 2 番目のリソースはクックブックのファイルをインスタンスの別のディレクトリにコピーします。これは、Linux の cp コマンドまたは Windows の copy コマンドの実行と似ています。この手法は、多数のファイル、大きいファイル、または複雑なファイルに対して有効です。

このステップを開始する前に、「ステップ 7: クックブックを更新してディレクトリを作成する」を完了して、ファイルの親ディレクトリがすでに存在すること確認します。

インスタンスのクックブックを更新し、新しいレシピを実行するには

1. ローカルワークステーションの opsworks_cookbook_demo ディレクトリで、files という名前のサブディレクトリを作成します
2. files サブディレクトリで、hello.txtというテキストを含む **Hello, World!** という名前のファイルを作成します。
3. opsworks_cookbook_demo ディレクトリにある recipes サブディレクトリで、以下のコードを含む create_files.rb という名前のファイルを作成します。詳細については、file と cookbook_file を参照してください。

```
file "Create a file" do
  content "<html>This is a placeholder for the home page.</html>"
  group "root"
  mode "0755"
  owner "ec2-user"
  path "/tmp/create-directory-demo/index.html"
end

cookbook_file "Copy a file" do
  group "root"
  mode "0755"
  owner "ec2-user"
  path "/tmp/create-directory-demo/hello.txt"
  source "hello.txt"
```

```
end
```

`file` リソースは、指定されたパスでファイルを作成します。`cookbook_file` リソースは、クックブックで作成した `files` ディレクトリから、インスタンスの別のディレクトリにファイルをコピーします (Chef では、ファイルのコピー元として `files` という名前のサブディレクトリがあることが想定されます)。

4. ターミナルまたはコマンドプロンプトで、tar コマンドを使用して `opsworks_cookbook_demo.tar.gz` というファイルの新しいバージョンを作成します。これには、`opsworks_cookbook_demo` ディレクトリとその更新されたコンテンツが含まれます。
5. 更新済みの `opsworks_cookbook_demo.tar.gz` ファイルを S3 バケットにアップロードします。
6. 「ステップ 5: インスタンスのクックブックを更新し、レシピを実行する」の手順に従って、インスタンスのクックブックを更新し、レシピを実行します。「レシピを実行するには」の手順の [Recipes to execute] に、「**`opsworks_cookbook_demo::create_files`**」と入力します。

レシピをテストするには

1. すでに行っていない場合は、インスタンスにログインします。
2. コマンドプロンプトで、新しいファイルが追加されたことを確認するため、次のコマンドを 1 つずつ実行します。

```
sudo cat /tmp/create-directory-demo/index.html

sudo cat /tmp/create-directory-demo/hello.txt
```

ファイルの内容が表示されます。

```
<html>This is a placeholder for the home page.</html>

Hello, World!
```

次のステップでは、クックブックを更新してインスタンスでコマンドを実行します。

ステップ 9: クックブックを更新してコマンドを実行する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

インスタンスで SSH キーを作成するコマンドを実行するレシピを追加してクックブックを更新します。

インスタンスのクックブックを更新し、新しいレシピを実行するには

1. ローカルワークステーションの opsworks_cookbook_demo ディレクトリにある recipes サブディレクトリで、以下のコードを含む run_command.rb という名前のファイルを作成します。詳細については、「execute」を参照してください。

   ```
   execute "Create an SSH key" do
     command "ssh-keygen -f /tmp/my-key -N fLyC3jbY"
   end
   ```

2. ターミナルまたはコマンドプロンプトで、tar コマンドを使用して opsworks_cookbook_demo.tar.gz というファイルの新しいバージョンを作成します。これには、opsworks_cookbook_demo ディレクトリとその更新されたコンテンツが含まれます。
3. 更新済みの opsworks_cookbook_demo.tar.gz ファイルを S3 バケットにアップロードします。
4. 「ステップ 5: インスタンスのクックブックを更新し、レシピを実行する」の手順に従って、インスタンスのクックブックを更新し、レシピを実行します。「レシピを実行するには」の手順の [Recipes to execute] に、「**opsworks_cookbook_demo::run_command**」と入力します。

レシピをテストするには

1. すでに行っていない場合は、インスタンスにログインします。
2. コマンドプロンプトで、SSH キーが作成されたことを確認するため、次のコマンドを 1 つずつ実行します。

```
sudo cat /tmp/my-key

sudo cat /tmp/my-key.pub
```

SSH プライベートキーおよびパブリックキーのコンテンツが表示されます。

```
-----BEGIN RSA PRIVATE KEY-----
Proc-Type: 4,ENCRYPTED
DEK-Info: AES-128-CBC,DEF7A09C...541583FA
A5p9dCuo...wp0YYH1c
-----END RSA PRIVATE KEY-----

ssh-rsa AAAAB3N...KaNogZkT root@cookbooks-demo1
```

次のステップでは、クックブックを更新してインスタンスでスクリプトを実行します。

ステップ 10: クックブックを更新してスクリプトを実行する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

インスタンスでスクリプトを実行するレシピを追加してクックブックを更新します。このレシピではディレクトリを作成し、そのディレクトリでファイルを作成します。複数のコマンドを含むスクリプトを実行するレシピの作成は、それらのコマンドを 1 つずつ実行するよりも簡単です。

インスタンスのクックブックを更新し、新しいレシピを実行するには

1. ローカルワークステーションの opsworks_cookbook_demo ディレクトリにある recipes サブディレクトリで、以下のコードを含む run_script.rb という名前のファイルを作成します。詳細については、「script」を参照してください。

```
script "Run a script" do
```

```
  interpreter "bash"
  code <<-EOH
    mkdir -m 777 /tmp/run-script-demo
    touch /tmp/run-script-demo/helloworld.txt
    echo "Hello, World!" > /tmp/run-script-demo/helloworld.txt
  EOH
end
```

2. ターミナルまたはコマンドプロンプトで、tar コマンドを使用して opsworks_cookbook_demo.tar.gz というファイルの新しいバージョンを作成します。これには、opsworks_cookbook_demo ディレクトリとその更新されたコンテンツが含まれます。
3. 更新済みの opsworks_cookbook_demo.tar.gz ファイルを S3 バケットにアップロードします。
4. 「ステップ 5: インスタンスのクックブックを更新し、レシピを実行する」の手順に従って、インスタンスのクックブックを更新し、レシピを実行します。「レシピを実行するには」の手順の [Recipes to execute] に、「**opsworks_cookbook_demo::run_script**」と入力します。

レシピをテストするには

1. すでに行っていない場合は、インスタンスにログインします。
2. コマンドプロンプトで次のコマンドを実行して、新しいファイルが追加されたことを確認します。

   ```
   sudo cat /tmp/run-script-demo/helloworld.txt
   ```

   ファイルの内容が表示されます。

   ```
   Hello, World!
   ```

次のステップでは、クックブックを更新してインスタンスでサービスを管理します。

ステップ 11: クックブックを更新してサービスを管理する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソ

リューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

インスタンスのサービスを管理するレシピを追加してクックブックを更新します。これは、Linux の service コマンドまたは Windows の、net stop、net start などのコマンドの実行に似ています。このレシピはインスタンスの crond サービスを停止します。

インスタンスのクックブックを更新し、新しいレシピを実行するには

1. ローカルワークステーションの opsworks_cookbook_demo ディレクトリにある recipes サブディレクトリで、以下のコードを含む manage_service.rb という名前のファイルを作成します。詳細については、「service」を参照してください。

```
service "Manage a service" do
  action :stop
  service_name "crond"
end
```

2. ターミナルまたはコマンドプロンプトで、tar コマンドを使用して opsworks_cookbook_demo.tar.gz というファイルの新しいバージョンを作成します。これには、opsworks_cookbook_demo ディレクトリとその更新されたコンテンツが含まれます。
3. 更新済みの opsworks_cookbook_demo.tar.gz ファイルを S3 バケットにアップロードします。
4. 「ステップ 5: インスタンスのクックブックを更新し、レシピを実行する」の手順に従って、インスタンスのクックブックを更新し、レシピを実行します。「レシピを実行するには」の手順の [Recipes to execute] に、「**opsworks_cookbook_demo::manage_service**」と入力します。

レシピをテストするには

1. すでに行っていない場合は、インスタンスにログインします。
2. コマンドプロンプトで次のコマンドを実行し、crond サービスが停止したことを確認します。

```
service crond status
```

以下が表示されます。

```
crond is stopped
```

3. crond サービスを再起動するには、次のコマンドを実行します。

```
sudo service crond start
```

以下が表示されます。

```
Starting crond:  [  OK  ]
```

4. crond サービスが開始されたことを確認するには、次のコマンドを再度実行します。

```
service crond status
```

以下のような情報が表示されます。

```
crond (pid  3917) is running...
```

次のステップでは、クックブックを更新して、インスタンスのカスタム JSON として保存された情報を参照します。

ステップ 12: カスタム JSON を使用するようにクックブックを更新する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

インスタンスに保存されているカスタム JSON を参照するレシピを追加してクックブックを更新します。

スタックを作成、更新、またはクローン化するたび、あるいはデプロイまたはスタックコマンドを実行するたびに、カスタム JSON 形式で情報を指定できます。これは、データベースからこのデータ

を取得する代わりに、インスタンスのレシピでデータのごく一部を固定するときに役立ちます。詳細については、「カスタム JSON の使用」を参照してください。

このウォークスルーでは、カスタム JSON を使用して顧客の請求書に関する架空の情報を提供します。カスタム JSON については、このステップの後半で説明します。

インスタンスのクックブックを更新し、新しいレシピを実行するには

1. ローカルワークステーションの recipes ディレクトリにある opsworks_cookbook_demo サブディレクトリで、以下のレシピコードを含む custom_json.rb という名前のファイルを作成します。

```
Chef::Log.info("********** For customer '#{node['customer-id']}' invoice
 '#{node['invoice-number']}' **********")
Chef::Log.info("********** Invoice line number 1 is a '#{node['line-items']
['line-1']}' **********")
Chef::Log.info("********** Invoice line number 2 is a '#{node['line-items']
['line-2']}' **********")
Chef::Log.info("********** Invoice line number 3 is a '#{node['line-items']
['line-3']}' **********")
```

   このレシピは、カスタム JSON の値についてログにメッセージを表示します。

2. ターミナルまたはコマンドプロンプトで、tar コマンドを使用して opsworks_cookbook_demo.tar.gz というファイルの新しいバージョンを作成します。これには、opsworks_cookbook_demo ディレクトリとその更新されたコンテンツが含まれます。
3. 更新済みの opsworks_cookbook_demo.tar.gz ファイルを S3 バケットにアップロードします。
4. 「ステップ 5: インスタンスのクックブックを更新し、レシピを実行する」の手順に従って、インスタンスのクックブックを更新し、レシピを実行します。「レシピを実行するには」の手順の [Recipes to execute] に、「**opsworks_cookbook_demo::custom_json**」と入力します。[Advanced]、[Custom Chef JSON] に、次のカスタム JSON を入力します。

```
{
  "customer-id": "0123",
  "invoice-number": "9876",
  "line-items": {
    "line-1": "tractor",
    "line-2": "passenger car",
    "line-3": "trailer"
```

```
  }
}
```

レシピをテストするには

1. 前の手順の [Running command execute_recipes] ページを表示した状態で、[cookbooks-demo1]、[Log] の [show] を選択します。[execute_recipes] ログページが表示されます。
2. ログを下にスクロールして、次のようなエントリを見つけます。

```
[2015-11-14T14:18:30+00:00] INFO: ********** For customer '0123' invoice '9876'
 **********
[2015-11-14T14:18:30+00:00] INFO: ********** Invoice line number 1 is a 'tractor'
 **********
[2015-11-14T14:18:30+00:00] INFO: ********** Invoice line number 2 is a 'passenger
 car' **********
[2015-11-14T14:18:30+00:00] INFO: ********** Invoice line number 3 is a 'trailer'
 **********
```

これらのエントリには、[Advanced]、[Custom Chef JSON] ボックスに入力したカスタム JSON からの情報が表示されます。

次のステップでは、クックブックを更新してデータバッグから情報を取得します。データバッグは、OpsWorks スタックが各インスタンスに保存するスタック設定のコレクションです。

ステップ 13: クックブックを更新してデータバッグを使用する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

一連のデータバッグ内のインスタンスに OpsWorks スタックが保存するスタック設定を参照するレシピを追加して、クックブックを更新します。このレシピは、インスタンスに保存された特定のス

タック設定についてログにメッセージを表示します。詳細については、「OpsWorks スタックデータバッグリファレンス」を参照してください。

インスタンスのクックブックを更新し、新しいレシピを実行するには

1. ローカルワークステーションの recipes ディレクトリにある opsworks_cookbook_demo サブディレクトリで、以下のコードを含む data_bags.rb という名前のファイルを作成します。

```
instance = search("aws_opsworks_instance").first
layer = search("aws_opsworks_layer").first
stack = search("aws_opsworks_stack").first

Chef::Log.info("********** This instance's instance ID is
 '#{instance['instance_id']}' **********")
Chef::Log.info("********** This instance's public IP address is
 '#{instance['public_ip']}' **********")
Chef::Log.info("********** This instance belongs to the layer '#{layer['name']}'
 **********")
Chef::Log.info("********** This instance belongs to the stack '#{stack['name']}'
 **********")
Chef::Log.info("********** This stack gets its cookbooks from
 '#{stack['custom_cookbooks_source']['url']}' **********")
```

   このレシピは、インスタンスに保存された特定のスタック設定についてログにメッセージを表示します。

2. ターミナルまたはコマンドプロンプトで、tar コマンドを使用して opsworks_cookbook_demo.tar.gz というファイルの新しいバージョンを作成します。これには、opsworks_cookbook_demo ディレクトリとその更新されたコンテンツが含まれます。
3. 更新済みの opsworks_cookbook_demo.tar.gz ファイルを S3 バケットにアップロードします。
4. 「ステップ 5: インスタンスのクックブックを更新し、レシピを実行する」の手順に従って、インスタンスのクックブックを更新し、レシピを実行します。「レシピを実行するには」の手順の [Recipes to execute] に、「**opsworks_cookbook_demo::data_bags**」と入力します。

レシピをテストするには

1. 前の手順の [Running command execute_recipes] ページを表示した状態で、[cookbooks-demo1]、[Log] の [show] を選択します。[execute_recipes] ログページが表示されます。

2. ログを下にスクロールして、次のようなエントリを見つけます。

```
[2015-11-14T14:39:06+00:00] INFO: ********** This instance's instance ID is
 'f80fa119-81ab-4c3c-883d-6028e52c89EX' **********
[2015-11-14T14:39:06+00:00] INFO: ********** This instance's public IP address is
 '192.0.2.0' **********
[2015-11-14T14:39:06+00:00] INFO: ********** This instance belongs to the layer
 'MyCookbooksDemoLayer' **********
[2015-11-14T14:39:06+00:00] INFO: ********** This instance belongs to the stack
 'MyCookbooksDemoStack' **********
[2015-11-14T14:39:06+00:00] INFO: ********** This stack gets its cookbooks from
 'https://s3.amazonaws.com/amzn-s3-demo-bucket/opsworks_cookbook_demo.tar.gz'
 **********
```

このレシピは、インスタンスに保存された特定のスタック設定についてメッセージを表示します。

次のステップでは、クックブックを更新してレシピコードを複数回実行します。

ステップ 14: クックブックを更新して繰り返しを使用する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

レシピコードを複数回繰り返す、繰り返しの手法を使用するレシピを追加してクックブックを更新します。このレシピは、複数のコンテンツを含むデータバッグ項目についてログにメッセージを表示します。

インスタンスのクックブックを更新し、新しいレシピを実行するには

1. ローカルワークステーションの `recipes` ディレクトリにある `opsworks_cookbook_demo` サブディレクトリで、以下のコードを含む `iteration_demo.rb` という名前のファイルを作成します。

```
stack = search("aws_opsworks_stack").first
Chef::Log.info("********** Content of 'custom_cookbooks_source' **********")

stack["custom_cookbooks_source"].each do |content|
  Chef::Log.info("********** '#{content}' **********")
end
```

> **Note**
>
> 前述のレシピコードの作成は、繰り返しを使わない次のレシピコードを記述するよりも短く、より柔軟になり、エラーが起きにくくなります。
>
> ```
> stack = search("aws_opsworks_stack").first
> Chef::Log.info("********** Content of 'custom_cookbooks_source' **********")
>
> Chef::Log::info("********** '[\"type\", \"#{stack['custom_cookbooks_source']
> ['type']}\"]' **********")
> Chef::Log::info("********** '[\"url\", \"#{stack['custom_cookbooks_source']
> ['url']}\"]' **********")
> Chef::Log::info("********** '[\"username\",
>  \"#{stack['custom_cookbooks_source']['username']}\"]' **********")
> Chef::Log::info("********** '[\"password\",
>  \"#{stack['custom_cookbooks_source']['password']}\"]' **********")
> Chef::Log::info("********** '[\"ssh_key\",
>  \"#{stack['custom_cookbooks_source']['ssh_key']}\"]' **********")
> Chef::Log::info("********** '[\"revision\",
>  \"#{stack['custom_cookbooks_source']['revision']}\"]' **********")
> ```

2. ターミナルまたはコマンドプロンプトで、tar コマンドを使用して opsworks_cookbook_demo.tar.gz というファイルの新しいバージョンを作成します。これには、opsworks_cookbook_demo ディレクトリとその更新されたコンテンツが含まれます。
3. 更新済みの opsworks_cookbook_demo.tar.gz ファイルを S3 バケットにアップロードします。
4. 「ステップ 5: インスタンスのクックブックを更新し、レシピを実行する」の手順に従って、インスタンスのクックブックを更新し、レシピを実行します。「レシピを実行するには」の手順の [Recipes to execute] に、「**opsworks_cookbook_demo::iteration_demo**」と入力します。

レシピをテストするには

1. 前の手順の [Running command execute_recipes] ページを表示した状態で、[cookbooks-demo1]、[Log] の [show] を選択します。[execute_recipes] ログページが表示されます。
2. ログを下にスクロールして、次のようなエントリを見つけます。

```
[2015-11-16T19:56:56+00:00] INFO: ********** Content of 'custom_cookbooks_source'
 **********
[2015-11-16T19:56:56+00:00] INFO: ********** '["type", "s3"]' **********
[2015-11-16T19:56:56+00:00] INFO: ********** '["url", "https://s3.amazonaws.com/
amzn-s3-demo-bucket/opsworks_cookbook_demo.tar.gz"]' **********
[2015-11-16T19:56:56+00:00] INFO: ********** '["username", "secret-key-value"]'
 **********
[2015-11-16T19:56:56+00:00] INFO: ********** '["password", "secret-access-key-
value"]' **********
[2015-11-16T19:56:56+00:00] INFO: ********** '["ssh_key", nil]' **********
[2015-11-16T19:56:56+00:00] INFO: ********** '["revision", nil]' **********
```

このレシピは、複数のコンテンツを含むデータバッグ項目についてログにメッセージを表示します。データバッグ項目は aws_opsworks_stack データバッグにあります。データバッグ項目には、custom_cookbooks_source という名前のコンテンツがあります。このコンテンツの内部には、type、url、username、password、ssh_key、および revision という名前の 6 つのコンテンツがあり、それらの値も表示されます。

次のステップでは、クックブックを更新して、特定の条件が満たされた場合のみレシピコードを実行します。

ステップ 15: クックブックを更新して条件付きロジックを使用する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post または AWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

ここで、条件付きロジックを使用するレシピを追加してクックブックを作成します。これは、特定の条件が満たされた場合のみコードを実行する手法です。詳細については、「if Statements」および「case Statements」を参照してください。

このレシピでは、データバッグのコンテンツに基づいて 2 つの処理を実行します。インスタンスが実行されているオペレーティングシステムを識別するメッセージをログに表示し、オペレーティングシステムが Linux である場合のみ、特定の Linux ディストリビューションに対して適切なパッケージマネージャーを使用してパッケージをインストールします。このパッケージは tree という名前であり、ディレクトリリストを視覚化するためのシンプルなアプリケーションです。

インスタンスのクックブックを更新し、新しいレシピを実行するには

1. ローカルワークステーションの opsworks_cookbook_demo directory にある recipes サブディレクトリで、以下のコードを含む conditional_logic.rb という名前のファイルを作成します。

```
instance = search("aws_opsworks_instance").first
os = instance["os"]

if os == "Red Hat Enterprise Linux 7"
  Chef::Log.info("********** Operating system is Red Hat Enterprise Linux.
 **********")
elsif os == "Ubuntu 14.04 LTS" || os == "Ubuntu 16.04 LTS" || os == "Ubuntu 18.04
 LTS"
  Chef::Log.info("********** Operating system is Ubuntu. **********")
elsif os == "Microsoft Windows Server 2012 R2 Base"
  Chef::Log.info("********** Operating system is Windows. **********")
elsif os == "Amazon Linux 2015.03" || os == "Amazon Linux 2015.09" || os == "Amazon
 Linux 2016.03" || os == "Amazon Linux 2016.09" || os == "Amazon Linux 2017.03"
 || os == "Amazon Linux 2017.09" || os == "Amazon Linux 2018.03" || os == "Amazon
 Linux 2"
  Chef::Log.info("********** Operating system is Amazon Linux. **********")
elsif os == "CentOS Linux 7"
  Chef::Log.info("********** Operating system is CentOS 7. **********")
else
  Chef::Log.info("********** Cannot determine operating system. **********")
end

case os
when "Ubuntu 14.04 LTS", "Ubuntu 16.04 LTS", "Ubuntu 18.04 LTS"
  apt_package "Install a package with apt-get" do
    package_name "tree"
```

```
  end
when "Amazon Linux 2015.03", "Amazon Linux 2015.09", "Amazon Linux 2016.03",
 "Amazon Linux 2016.09", "Amazon Linux 2017.03", "Amazon Linux 2017.09", "Amazon
 Linux 2018.03", "Amazon Linux 2", "Red Hat Enterprise Linux 7", "CentOS Linux 7"
  yum_package "Install a package with yum" do
    package_name "tree"
  end
else
  Chef::Log.info("********** Cannot determine operating system type, or operating
 system is not Linux. Package not installed. **********")
end
```

2. ターミナルまたはコマンドプロンプトで、tar コマンドを使用して opsworks_cookbook_demo.tar.gz というファイルの新しいバージョンを作成します。これには、opsworks_cookbook_demo ディレクトリとその更新されたコンテンツが含まれます。
3. 更新済みの opsworks_cookbook_demo.tar.gz ファイルを S3 バケットにアップロードします。
4. 「ステップ 5: インスタンスのクックブックを更新し、レシピを実行する」の手順に従って、インスタンスのクックブックを更新し、レシピを実行します。「レシピを実行するには」の手順の [Recipes to execute] に、「**opsworks_cookbook_demo::conditional_logic**」と入力します。

レシピをテストするには

1. 前の手順の [Running command execute_recipes] ページを表示した状態で、[cookbooks-demo1]、[Log] の [show] を選択します。[execute_recipes] ログページが表示されます。
2. ログを下へスクロールして、次のようなエントリを見つけます。

```
[2015-11-16T19:59:05+00:00] INFO: ********** Operating system is Amazon Linux.
 **********
```

インスタンスのオペレーティングシステムは Amazon Linux 2016.09 であるため、(レシピのコードの 5 つの可能なエントリのうち)先行するエントリのみがログに表示されます。

3. オペレーティングシステムが Linux の場合、レシピは tree パッケージをインストールします。ディレクトリのコンテンツを視覚的に表示するには、希望するディレクトリまたはそのディレクトリのパス (tree /var/chef/runs など) からコマンドプロンプトで「**tree**」と入力します。

次のステップでは、クックブックを更新して、Chef コミュニティで提供される外部クックブックの機能を使用します。

ステップ 16: クックブックを更新してコミュニティクックブックを使用する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post または AWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

最後に、クックブックを更新して、Chef コミュニティで提供された外部のクックブックの機能を使用します。このウォークスルーに使用する外部のクックブックは、外部の Chef クックブックにアクセスするための一般的な場所である Chef Supermarket を通じて利用できます。この外部クックブックでは、「ステップ 4: クックブックを更新してパッケージをインストールする」で行ったようにアプリケーションをダウンロードしてインストールできるカスタムリソースが提供されます。ただし、このリソースはパッケージに加えてウェブアプリケーションや他の種類のアプリケーションをインストールできます。

クックブックが別のクックブックに依存している場合、他のクックブックへの依存関係を指定する必要があります。クックブックの依存関係を宣言し、管理するには、Berkshelf と呼ばれるツールを使用することをお勧めします。Berkshelf をお客様のローカルワークステーションにインストールする方法の詳細については、Chef ウェブサイトの About Berkshelf を参照してください。

Berkshelf をインストールしたら、以下の手順に従ってクックブックの依存関係を宣言し、外部のクックブックでリソースを呼び出すレシピを作成します。

クックブックの依存関係を宣言するには

1. ローカルワークステーションの opsworks_cookbook_demo ディレクトリで、次の行を metadata.rb ファイルの末尾に追加します。

   ```
   depends "application", "5.0.0"
   ```

   これにより、application version 5.0.0 という名前のクックブックで依存関係が宣言されます。

2. opsworks_cookbook_demo ディレクトリのルートから次のコマンドを実行します。コマンドの最後のピリオドは意図的なものです。

```
berks init .
```

Berkshelf により、より高度なシナリオで後から使用できる多くのフォルダとファイルが作成されます。このウォークスルーで必要なファイルは、Berksfile という名前のファイルのみです。

3. Berksfile ファイルの末尾に次の行を追加します。

```
cookbook "application", "5.0.0"
```

これにより、ユーザーが application cookbook version 5.0.0 の使用を希望している事実が Berkshelf に伝えられ、Berkshelf は、Chef Supermarket から該当バージョンをダウンロードします。

4. 端末またはコマンドプロンプトで、opsworks_cookbook_demo ディレクトリのルートから次のコマンドを実行します。

```
berks install
```

Berkshelf が、クックブックとアプリケーションクックブック両方について、依存関係のリストを作成します。Berkshelf は、次の手順でこの依存関係リストを使用します。

インスタンスのクックブックを更新し、新しいレシピを実行するには

1. recipes ディレクトリにある opsworks_cookbook_demo サブディレクトリで、以下のコードを含む dependencies_demo.rb という名前のファイルを作成します。

```
application "Install NetHack" do
  package "nethack.x86_64"
end
```

このレシピは、アプリケーションクックブックのアプリケーションリソースに基づいて、人気のあるテキストベースの冒険ゲーム NetHack をインスタンスにインストールします (もちろん、パッケージがインスタンスでパッケージマネージャーに対して容易に利用できる限り、他のパッケージ名に置き換えることができます)。

2. opsworks_cookbook_demo ディレクトリのルートから次のコマンドを実行します。

```
berks package
```

   Berkshelf は前の手順の依存関係のリストを使用して、cookbooks-*timestamp*.tar.gz という名前のファイルを作成します。これには、クックブックの依存関係クックブックを含めて、opsworks_cookbook_demo ディレクトリとその更新されたコンテンツが含まれます。このファイル opsworks_cookbook_demo.tar.gz の名前を変更します。

3. 更新済みで名前を変更した opsworks_cookbook_demo.tar.gz ファイルを S3 バケットにアップロードします。

4. 「ステップ 5: インスタンスのクックブックを更新し、レシピを実行する」の手順に従って、インスタンスのクックブックを更新し、レシピを実行します。「レシピを実行するには」の手順の [Recipes to execute] に、「**opsworks_cookbook_demo::dependencies_demo**」と入力します。

5. レシピを実行した後は、インスタンスにログインし、コマンドプロンプトで「**nethack**」と入力してプレイを開始できます (ゲームに関する詳細については、「NetHack」および NetHack Guidebook を参照してください)。

次のステップでは、このウォークスルーに使用した AWS リソースをクリーンアップできます。このステップは任意です。 OpsWorks スタックの詳細については、これらの AWS リソースを引き続き使用することをお勧めします。ただし、これらの AWS リソースを周囲に保持すると、 AWS アカウントに継続的な料金が発生する可能性があります。これらの AWS リソースを後で使用するために保持する場合は、このウォークスルーを完了し、「」に進むことができます次のステップ。

ステップ 17: (オプション) クリーンアップする

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

AWS アカウントに追加料金が発生しないように、このチュートリアルで使用したリソースを削除 AWS できます。これらの AWS リソースには、S3 OpsWorks バケット、スタックスタック、スタックのコンポーネントが含まれます。(詳細については、「AWS OpsWorks の料金」を参照してください)。ただし、 スタックの詳細については OpsWorks 、これらの AWS リソースを引き続き使用することをお勧めします。これらの AWS リソースを引き続き利用できるようにする場合は、このチュートリアルを完了し、「」に進むことができます次のステップ。

このチュートリアルのために作成したリソースに保存されているコンテンツには、個人識別情報が含まれている可能性があります。この情報を AWSが保存しないようにするには、このトピックの手順に従ってください。

S3 バケットを削除するには

- 「Amazon S3 バケットの削除」を参照してください。

スタックのインスタンスを削除するには

1. OpsWorks スタックコンソールのサービスナビゲーションペインで、インスタンスを選択します。[Instances] ページが表示されます。
2. [MyCookbooksDemoLayer] で、[cookbooks-demo1]、[Actions] の [stop] を選択します。確認メッセージが表示されたら、[Stop] を選択します。
3. 以下の変更が行われるには数分間かかるため、しばらくお待ちください。すべてが終了するまで先に進まないでください。

   - [Status] が [online] から [stopping] に変わり、最終的に [stopped] になります。
   - [online] は [1] から [0] に変わります。
   - [shutting down] は [0] から [1] に変わり、最終的に [0] になります。
   - [stopped] は最終的に [0] から [1] に変わります。
4. [Actions] (アクション) で、[delete] (削除) を選択します。確認メッセージが表示されたら、Delete. OpsWorks Stacks を選択するとインスタンスが削除され、インスタンスなしが表示されます。

スタックを削除するには

1. サービスナビゲーションペインで、[Stack] を選択します。[MyCookbooksDemoStack] ページが表示されます。

2. [Delete Stack] を選択します。確認メッセージが表示されたら、Delete. OpsWorks Stacks を選択するとスタックが削除され、ダッシュボードページが表示されます。

必要に応じて、このウォークスルーに使用した IAM ユーザーと Amazon EC2 キーペアを、他の AWS サービスや EC2 インスタンスへのアクセスに再利用しない場合は削除できます。手順については、「IAM ユーザーの削除 と Amazon EC2 キーペアと Linux インスタンスの削除」を参照してください。

これで、このウォークスルーが完了しました。詳細については、「次のステップ」を参照してください。

次のステップ

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このウォークスルーを完了したので、次のリソースを確認することで、Chef OpsWorks クックブックの スタックサポートの詳細を確認できます。

- クックブックとレシピ – スタックが現在サポートしている Chef および Ruby OpsWorks のバージョンについて説明します。また、インスタンスで、カスタムクックブックをインストールおよび更新する方法と、インスタンスでレシピを実行する方法を示しています。
- Learn Chef – Chef のチュートリアル、Chef のスキルライブラリ、Chef の完全なドキュメント、および Chef のトレーニングクラスへのリンクを提供しています。
- [All about Chef] (Chefのすべて) - Chef に関する完全なドキュメントを提供しています。特に興味深いトピックは次のとおりです。
  - [About Cookbooks](クックブックについて) - 属性、レシピ、ファイル、メタデータ、テンプレートなど、クックブックの主要コンポーネントについて説明しています。
  - [About Recipes] (レシピについて) - データバッグの使用方法、他のレシピの追加方法、レシピで Ruby コードの使用方法など、レシピの基本事項について説明しています。

  - [Resources] (リソース) - `apt_package`、`cookbook_file`、`directory`、`execute`、`file` および `package` など、全組み込みの Chef リソースの使用方法について説明しています。
  - [About the Recipe DSL] (レシピDSLについて) - `if`、`case`、`data_bag`、`data_bag_item`、および `search` などのステートメントで Chef レシピ用のコードを書く方法について説明しています。
- [About Templates] (テンプレートについて) - Embedded Ruby (ERB) テンプレートを使用して、設定ファイルなどの静的なテキストファイルを動的に生成する方法について説明しています。
- [Learning Tracks] (ラーニングトラック) - インスタンスや基本的なウェブアプリケーションの管理、インフラストラクチャコードの開発およびテスト、Chef 分析の使用など、Chef を使用方法を説明しています。
- [Learning Chef] (ラーニングシェフ) – Chef の概要です。発行元は O'Reilly Media です。
- [Learning Chef code examples] (Chefコードの例を学ぶ) - O'Reilly Media によって出版された書籍 [Learning Chef] (ラーニングシェフ) に付随するコードの例を提供しています。

OpsWorks スタックのベストプラクティス

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このセクションの戦略、手法、提案は、 OpsWorks スタックから最大限のメリットと最適な成果を得るのに役立ちます。

トピック

- ベストプラクティス: インスタンスのルートデバイスストレージ
- ベストプラクティス: アプリケーションサーバー数の最適化
- ベストプラクティス: アクセス権限の管理
- ベストプラクティス: アプリケーションとクックブックの管理とデプロイ
- ローカルでのクックブックの依存関係のパッケージ化

ベストプラクティス: インスタンスのルートデバイスストレージ

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> このトピックは、 Amazon Elastic Block Store-backed である必要がある Windows インスタンスには適用されません。

Amazon Elastic Compute Cloud (Amazon EC2) Linux インスタンスには、次のルートデバイスストレージオプションがあります。

- [インスタンスストアでバックアップされたインスタンス] – ルートデバイスは 一時的 なものです。

  インスタンスを停止すると、ルートデバイス上のデータは消失し、復元できなくなります。詳細については、「Amazon EC2 インスタンスストア」を参照してください。
- [Amazon EBS-backed instances (Amazon EBS-backed インスタンス)] — ルートデバイスは、Amazon EBS ボリュームです。

  インスタンスを停止しても、 Amazon EBS ボリュームは保持されます。インスタンスを起動すると、ボリュームは自動的に再マウントされ、インスタンスの状態と保存されたすべてのデータが復元されます。別のインスタンスにボリュームをマウントすることもできます。詳細については、Amazon Elastic Block Store (Amazon EBS) を参照してください。

使用するルートデバイスストレージオプションを決める際は、以下を考慮します。

起動時間

最初の起動後、 Amazon EBS インスタンスは通常より速く再起動します。

最初の起動にかかる時間は、どちらのストレージタイプでもほぼ同じです。いずれのタイプでも完全な設定を行う必要があり、これには、比較的時間のかかるタスク (リモートリポジトリからのパッケージのインストールなど) も含まれます。ただし、その後にインスタンスを再起動するときに、次の違いに注意してください。

- Instance store-Backed インスタンスでは、パッケージのインストールを含む初回の起動時に実行されたのと同じ設定タスクが実行されます。

  再起動には、最初の起動と同じくらいの時間がかかります。

- Amazon EBS でバックアップされたインスタンスではルートボリュームが再マウントされ、Setup レシピ が実行されます。

  通常、再起動は最初の起動より大幅に速くなります。これは、ルートボリュームにすでにインストールされているパッケージの再インストールなどのタスクを Setup recipes で実行する必要がないためです。

Cost

Amazon EBS-backed インスタンスは、さらにコストがかかります。

- Instance-store Backed インスタンスでは、インスタンスを実行している間だけ課金されます。
- Amazon EBS-backed インスタンスでは、インスタンスが実行しているかどうかに関わらず、Amazon EBS ボリュームの料金を支払います。

  詳細については、「Amazon EBS 料金表」を参照してください。

ログ記録

Amazon EBS-backed インスタンスでは、ログが自動的に保持されます。

- Instance store-Backed インスタンスでは、インスタンスが停止するとログは非表示になります。

  インスタンスを停止する前にログを取得するか、[CloudWatch Logs (CloudWatch ログ)] などのサービスを使用して選択したログをリモートに保存する必要があります。

- Amazon EBS-backed インスタンスでは、ログは Amazon EBS ボリュームに保存されます。

  ログを表示するには、インスタンスを再起動するか、別のインスタンスにボリュームをマウントします。

依存関係

2 種類のストレージタイプでは、依存関係が異なります。

- Instance-store backed インスタンスは、 Amazon S3 に依存しています。

  インスタンスを起動するときは、 Amazon S3 から AMI をダウンロードする必要があります。
- Amazon EBS-backed インスタンスは、 Amazon EBS に依存しています。

  インスタンスを起動すると、 Amazon EBS ルートボリュームをマウントする必要があります。

[Recommendation: (推奨事項:)] お客様の要件に最適なストレージタイプがわからない場合は、Amazon EBS インスタンスから開始することをお勧めします。Amazon EBS ボリュームには少額の費用がかかりますが、意図しないデータ損失のリスクは軽減されます。

ベストプラクティス: アプリケーションサーバー数の最適化

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

一般的に、本稼働用スタックには、複数のアベイラビリティーゾーン全体に分散されるアプリケーションサーバーが複数含まれます。ただし、入って来るリクエストの数は、時間または曜日によって大幅に異なる場合があります。予測される最大負荷を処理するのに最小限必要なサーバーを実行しようとしても、結局、必要とする容量より多くのサーバー容量に料金を支払うはめになることが少なくありません。サイトを効率的に実行するために推奨される方法は、サーバー数を現在求められているボリュームと一致させることです。

OpsWorks スタックには、サーバーインスタンスの数を管理する 3 つの方法があります。

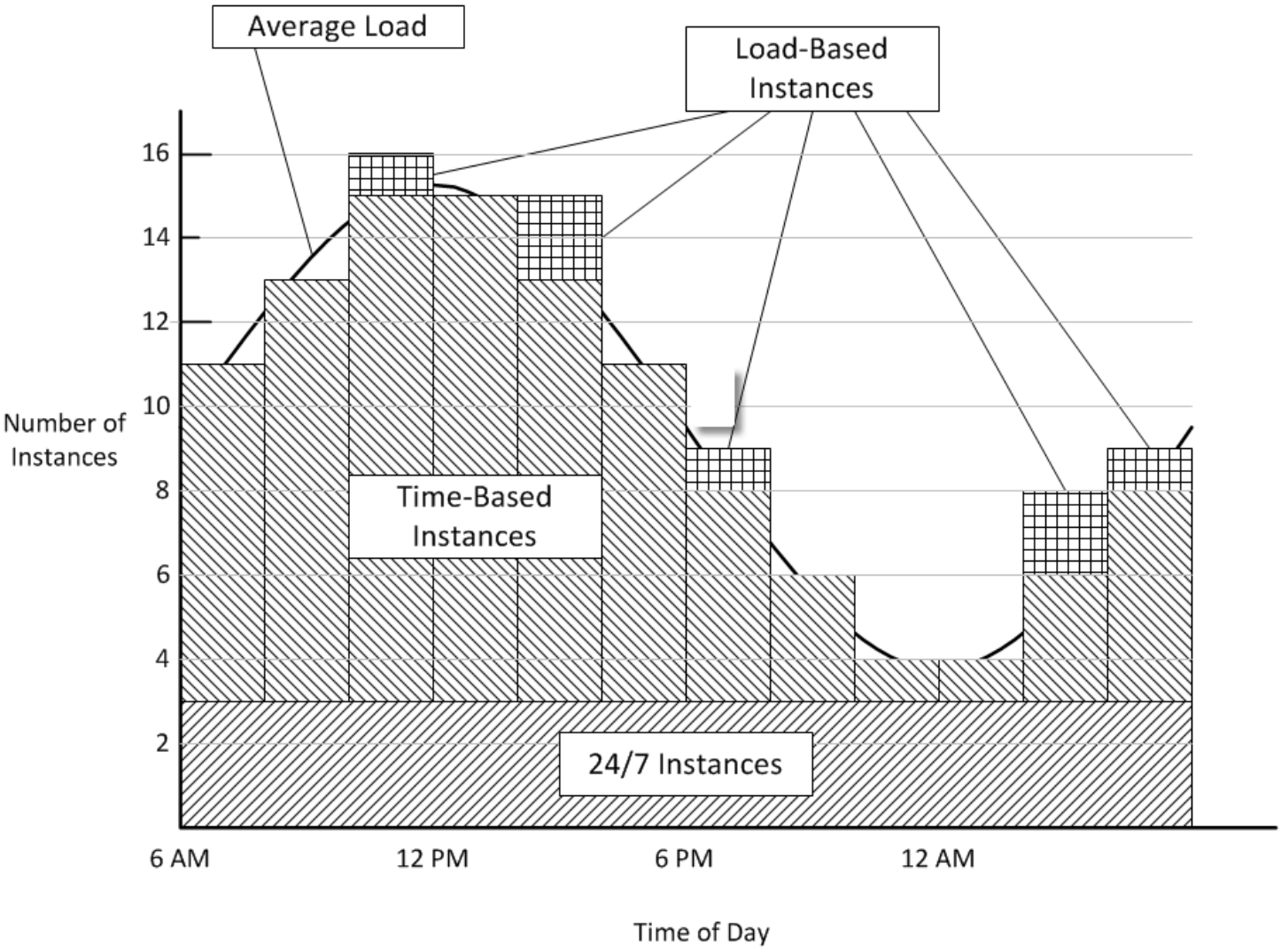
- 24/7 インスタンス はユーザーが手動で起動し、ユーザーが手動で停止するまで実行されます。
- 時間ベースのインスタンスは、ユーザーが指定したスケジュールで OpsWorks スタックによって自動的に起動および停止します。
- 負荷ベースのインスタンスは、CPU OpsWorks やメモリ使用率などのユーザーが指定した負荷メトリクスのしきい値を超えると、 スタックによって自動的に開始および停止します。

> **Note**
>
> スタックの時間ベースおよび負荷ベースのインスタンスを作成して設定すると、指定した設定に基づいて OpsWorks スタックによって自動的に起動および停止されます。インスタンスの設定または数を変更することを決定しない限り、特別な操作をする必要はありません。

推奨事項: アプリケーションサーバーインスタンスが数個以上あるスタックを管理する場合は、これらの 3 つのインスタンスタイプを組み合わせて使用することをお勧めします。次の例では、スタックのサーバー容量を管理して、さまざまな特徴を持つ変動する日単位のリクエスト量を処理する方法を示します。

- リクエストの平均量は、1 日を通じて正弦的に変化します。
- リクエストの平均最小量では、5 個のアプリケーションサーバーインスタンスが必要です。
- リクエストの平均最大量では、16 個のアプリケーションサーバーインスタンスが必要です。
- リクエストボリュームの急激な増大には、通常 1 ~ 2 個のアプリケーションサーバーインスタンスで対処できます。

これは、説明の目的で便宜上用意されていますが、リクエストのボリュームあらゆる変化に簡単に応用でき、また週単位の変化に対応するように拡張することもできます。次の図に、3 つのインスタンスタイプを使用して、このリクエストの量を管理する方法を示します。



この例には次の特徴があります。

- スタックに、常に稼働し、基本負荷を処理する 3 つの 24/7 インスタンスがあります。
- スタックに 12 個の時間ベースのインスタンスがあります。これらは、平均の日単位変動を処理するよう設定されています。

  1 つは午後 10 時から午前 2 時まで、別の 2 つは午後 8 時から午後 10 時までと午前 2 時から午前 4 時までのように実行されます。わかりやすいように、この図では 2 時間ごとの時間ベースのインスタンスの数に変更していますが、より詳細に管理するために 1 時間当たりの数に変更することもできます。
- スタックには、24/7 および時間ベースのインスタンスで処理できる量を超えたトラフィックの急増を処理するのに十分な負荷ベースのインスタンスがあります。

OpsWorks スタックは、現在実行中のすべてのサーバーの負荷が指定されたメトリクスを超えた場合にのみ、負荷ベースのインスタンスを起動します。実行されていないインスタンスにかかるコストは最小限 (Amazon EBS でバックアップされたインスタンス) またはゼロ (instance store-backed インスタンス) であるため、推奨される方法としては、予測される最大リクエストボリュームを無理なく処理できるだけのインスタンスを作成します。この例では、スタックに少なくとも 3 個の負荷ベースのインスタンスが必要です。

> **Note**
>
> サービス中断の影響を軽減するために、3 つすべてのインスタンスタイプを複数のアベイラビリティーゾーン全体に分散してください。

ベストプラクティス: アクセス権限の管理

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

アカウントのリソースにアクセスするには、AWS 認証情報のフォームが必要です。従業員へのアクセスを提供するための一般的なガイドラインいくつか次に示します。

- 第一に、AWS リソースへのアクセスにアカウントのルート認証情報を使用しないことをお勧めします。

  代わりに、従業員に IAMユーザー を作成し、適切なアクセス権限を付与するポリシーをアタッチします。各従業員は、自分の ユーザー認証情報を使用してリソースにアクセスできるようになります。
- 従業員には、ジョブを実行するのに必要なリソースのみにアクセスするためのアクセス権限が必要です。

たとえば、アプリケーション開発者は、アプリケーションを実行するスタックにのみアクセスする必要があります。

- 従業員には、ジョブを実行するのに必要なアクションのみを使用するためのアクセス権限が必要です。

  アプリケーション開発者は、開発スタックに対する完全なアクセス権限が必要な場合もあれば、アプリを対応する本稼働用スタックにデプロイするためのアクセス権限が必要な場合もあります。または、本稼働用スタックでインスタンスを起動または停止したり、レイヤーを作成または削除したりするためのアクセス権限は必要ではない場合もあります。

アクセス許可の管理の概要については、「AWS セキュリティの認証情報」を参照してください。

スタックまたは OpsWorks IAM を使用して、ユーザーのアクセス許可を管理できます。この 2 つのオプションは相互排他的ではありません。両方を使用することが望ましい場合もあります。

OpsWorks スタックのアクセス許可の管理

各スタックには [Permissions] ページがあり、これを使用してスタックにアクセスする権限をユーザーに付与したり、ユーザーが実行できるアクションを指定したりできます。ユーザーのアクセス権限を指定するには、次のいずれかのアクセス権限レベルを設定します。各レベルは、標準のアクションセットにアクセス許可を付与する IAM ポリシーを表します。

- [Deny] は、どのような方法であってもスタックを操作するためのアクセス権限を拒否します。
- [Show] では、任意の方法で、スタック設定を表示するためのアクセス権限が付与されますが、スタック状態を変更するアクセス権限は付与されません。
- [Deploy] では [Show] アクセス権限に加えて、アプリケーションをデプロイすることがユーザーに許可されます。
- [Manage] には [Deploy] アクセス権限が含まれ、また、さまざまなスタック管理アクション (インスタンスやレイヤーの作成または削除など) を実行することがユーザーに許可されます。

> **Note**
>
> アクセス許可の管理レベルは、スタックの作成やクローン作成など、少数の高レベルの OpsWorks スタックアクションに対するアクセス許可を付与しません。これらのアクセス許可を付与するには、IAM ポリシーを使用する必要があります。

アクセス権限レベルの設定に加え、スタックの [Permissions] ページを使用して、ユーザーに SSH/RDP および sudo/admin 権限を付与できます。 OpsWorks スタックのアクセス権限の管理の詳細については、「スタックごとの権限の付与」を参照してください。SSH アクセスを管理する方法の詳細については、「SSH アクセスの管理」を参照してください。

IAM アクセス許可の管理

IAM アクセス許可の管理では、 IAM コンソール、 API、または CLI を使用して、明示的にアクセス許可を指定する JSON 形式のポリシーをユーザーにアタッチします。IAM アクセス許可を管理する方法の詳細については、「IAM とは何ですか?」 を参照してください。

推奨事項: OpsWorks スタックのアクセス許可管理から開始します。ユーザーのアクセス権限の微調整、または Manage アクセス権限レベルに含まれていないアクセス権限をユーザーに付与する場合は、これらの 2 つの方法を組み合わて使用できます。 OpsWorks 次に、 スタックは両方のポリシーを評価して、ユーザーのアクセス許可を決定します。

> **Important**
>
> ユーザーに競合するアクセス権限を持つ複数のポリシーがある場合、拒否の権限が常に優先されます。例えば、 IAM ポリシーをユーザーに添付して特定のスタックへのアクセスを許可する一方で、 [Permissions (アクセス権限)] ページを使用して [Deny (拒否)] アクセス権限レベルをユーザーに割り当てるとします。この場合、Deny アクセス権限レベルが優先され、ユーザーはスタックにアクセスすることができません。詳細については、「IAM ポリシーの評価論理」を参照してください。

たとえば、レイヤーの追加または削除以外のスタックでのほぼすべての操作をユーザーが実行できるようにする必要があるとします。

- Manage アクセス権限レベルを指定します。これにより、ユーザーはレイヤーの作成や削除を含むほとんどのスタック管理アクションを実行できるようになります。
- 次のカスタマー管理ポリシーをユーザーにアタッチします。これにより、スタックで CreateLayer および DeleteLayer アクションを使用するアクセス許可が拒否されます。スタックは、スタックの [Settings (設定)] ページにある [Amazon Resource Name (ARN)] (Amazonリソースネーム (ARN)] を使用して識別します。

  JSON

```
{
  "Version":"2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Deny",
      "Action": [
        "opsworks:CreateLayer",
        "opsworks:DeleteLayer"
      ],
      "Resource": "arn:aws:opsworks:*:*:stack/2f18b4cb-4de5-4429-a149-
ff7da9f0d8ee/"
    }
  ]
}
```

詳細とポリシーの例については、「IAM ポリシーをアタッチして OpsWorks スタックのアクセス許可を管理する」を参照してください。

> **Note**
>
> IAM ポリシーを使用する別の方法としては、指定された IP アドレスまたはアドレス範囲を持つ従業への、スタックアクセスを制限する条件を設定することです。たとえば、従業員が会社のファイアウォールの内側からのみスタックにアクセスできるようにするには、社内用 IP アドレス範囲へのアクセスを制限する条件を設定します。詳細については、「条件」を参照してください。

ベストプラクティス: アプリケーションとクックブックの管理とデプロイ

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックは、リモートリポジトリから新しい各インスタンスにアプリケーションとクックブックをデプロイします。インスタンスのライフタイム中、機能の追加やバグの修正などのために、スタックのオンラインインスタンスでアプリケーションとクックブックを頻繁に更新する必要があります。スタックのアプリケーションとクックブックの管理にはさまざまな方法がありますが、使用するアプローチは以下の一般的な要件を満たす必要があります。

- すべての本稼働スタックインスタンスには、A/B テストに使用する場合など限られた例外を除いて、同じアプリケーションとカスタムクックブックのコードが必要です。
- 更新のデプロイによって、何か問題が発生しても、サイトのサービスが中断されないことが必要です。

このセクションでは、アプリケーションとカスタムクックブックを管理およびデプロイするためのベストプラクティスについて説明します。

トピック

- 整合性の維持
- オンラインインスタンスへのコードのデプロイ

整合性の維持

一般的に、本稼働スタックで実行されるアプリケーションとクックブックのコードは厳密に管理する必要があります。また、すべてのインスタンスでは、コードの現在承認されているバージョンを実行する必要があります。ただし例外があり、アプリケーションやクックブックを更新するときや、後述するように、A/B テストの実施など特殊な場合に対応するときは除きます。

アプリケーションとクックブックのコードは、以下の 2 つの方法で、指定したソースリポジトリからスタックのインスタンスにデプロイされます。

- インスタンスを起動すると、 OpsWorks スタックは現在のアプリケーションとクックブックコードをインスタンスに自動的にデプロイします。
- オンラインインスタンスの場合は、Deploy コマンド (アプリケーション用) または Update Custom Cookbooks コマンド (クックブック用) を実行して、現在のアプリケーションまたはクックブックのコードを手動でデプロイする必要があります。

2 つのデプロイメカニズムがあるため、重要なのは、違ったコードを別のインスタンスで意図せず実行しないように、ソースコードを慎重に管理することです。たとえば、Git マスターブランチからア

プリケーションまたはクックブックをデプロイする場合、 OpsWorks Stacks はそのブランチにあるものをその時点でデプロイします。マスターブランチにあるコードを更新し、新しいインスタンスを起動した場合、そのインスタンスには、以前のインスタンスにあるコードよりも新しいバージョンのコードがでデプロイされます。より新しいバージョンであっても本稼働用として承認されない場合があります。

レコメンデーション: Amazon S3 アーカイブ

すべてのインスタンスに承認済みのコードバージョンがあることを確認するには、 Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) アーカイブからアプリケーションとクックブックをデプロイすることをお勧めします。これにより、コードが静的なアーティファクト (.zip またはその他のアーカイブファイル) であり、明示的に更新する必要があることが保証されます。さらに、 Amazon S3 は信頼性が高いため、アーカイブにアクセスできなくなることはほとんどありません。一貫性をさらに確実に維持するには、命名規則を使用するか、 [Amazon S3 versioning (Amazon S3 バージョニング)] を使用して、各アーカイブファイルのバージョンを明示的に管理します。これにより監査証跡が提供され、以前のバージョンに簡単に戻せるようになります。

例えば、[Jenkins] などのツールを使用してデプロイパイプラインを作成できます。デプロイするコードがコミットされてテストされた後、アーカイブファイルを作成し、 Amazon S3 にアップロードします。すべてのアプリケーションのデプロイやクックブックの更新では、そのアーカイブファイル内のコードがインストールされるため、すべてのインスタンスのコードは同じになります。

推奨事項: Git または Subversion リポジトリ

Git または Subversion リポジトリを使用する場合は、マスターブランチからデプロイしないでください。その代わりに、承認されたバージョンにタグを付け、アプリケーションまたはクックブックソースとしてそのバージョンを指定します。

オンラインインスタンスへのコードのデプロイ

OpsWorks スタックは、更新されたコードをオンラインインスタンスに自動的にデプロイしません。手動でデプロイする必要がありますが、以下の課題があります。

- デプロイプロセス中、サイトでのお客様のリクエストの処理を中断することなく、更新を効率的にデプロイする。
- デプロイされるアプリケーションまたはクックブックに関する問題やデプロイプロセス自体に関する問題のため失敗したデプロイを処理する。

最も簡単なアプローチは、デフォルトの Deploy コマンド (アプリケーション用) または Update Custom Cookbooks コマンド (クックブック用) を実行して、更新をすべてのインスタンスに同時にデプロイすることです。このアプローチは、シンプルで高速ですが、エラーに対する許容範囲がありません。デプロイが失敗した場合や、更新されたコードに問題がある場合、本稼働スタックのすべてのインスタンスが影響を受けることがあります。問題が解決されるか、以前のバージョンにロールバックされるまで、サイトのサービスが中断されるか無効になる可能性があります。

推奨事項: 堅牢なデプロイ戦略を使用することをお勧めします。デプロイが成功して、新しいバージョンのコードを実行しているインスタンスにすべての受信トラフィックが転送できるようになるまで、以前のバージョンのコードを実行しているインスタンスでリクエストの処理が継続されるようにします。

以下のセクションでは、堅牢なデプロイ戦略の 2 例を示してから、デプロイ中にバックエンドデータベースを管理する方法について説明します。わかりやすいように、更新されたアプリケーションについて説明していますが、クックブックについても方法は同じです。

トピック

- ローリングデプロイの使用
- 個別のスタックの使用
- バックエンドデータベースの管理

ローリングデプロイの使用

ローリングデプロイでは、スタックのオンラインアプリケーションサーバーインスタンスでアプリケーションが複数のフェーズで更新されます。各フェーズでオンラインインスタンスのサブセットを更新し、次のフェーズの開始前に更新が成功していることを確認します。問題が発生した場合、その問題を解決するまで、以前のバージョンのアプリケーションを実行しているインスタンスで受信トラフィックの処理が継続されます。

以下の例では、複数のアベイラビリティーゾーンにまたがってスタックのアプリケーションサーバーインスタンスを配布するというベストプラクティスの使用を前提としています。

ローリングデプロイを実行するには

1. [Deploy App] ページで、[Advanced] を選択し、1 つのアプリケーションサーバーインスタンスを選択して、そのインスタンスにアプリケーションをデプロイします。

   慎重を期す場合は、アプリケーションのデプロイ前に、ロードバランサーからインスタンスを削除できます。これにより、更新されたアプリケーションは正常に動作していることが確認され

るまで、ユーザーからアクセスされなくなります。Elastic Load Balancing を使用する場合は、[remove the instance (インスタンスを削除する)] Elastic Load Balancing コンソール、 CLI、または SDK を使用してロードバランサーから取得します。

2. 更新されたアプリケーションが正常に動作していること、インスタンスのパフォーマンスメトリックスが許容可能であることを確認します。

   Elastic ロードバランサーからインスタンスを削除した場合は、 Elastic Load Balancing コンソール、 CLI、または API を使用してそのインスタンスを復元します。これで、更新されたアプリケーションのバージョンで、ユーザーのリクエストが処理されるようになりました。

3. アベイラビリティーゾーン内の残りのインスタンスに更新をデプロイし、それらのインスタンスが正常に動作していること、メトリクスが許容可能であることを確認します。

4. スタックの他のアベイラビリティーゾーンに対して、一度に 1 ゾーンずつ、手順 3 を繰り返します。特に注意が必要な場合は、手順 1 から 3 を繰り返します。

> **Note**
>
> Elastic Load Balancing ロードバランサーを使用している場合は、そのヘルスチェックを使用して、デプロイメントが成功したことを確認できます。ただし、ping パス を設定するときは、依存関係をチェックしてすべてが正常に動作していることを確認するアプリケーションを指定してください。アプリケーションサーバーが動作していることを確認するだけの静的ファイルを指定しないでください。

個別のスタックの使用

アプリケーションを管理するための別のアプローチは、アプリケーションのライフサイクルの各フェーズに別個のスタックを使用することです。この個別のスタックは環境と呼ばれることがあります。このアプローチでは、パブリックアクセス可能でないスタックで開発とテストを行うことができます。更新をデプロイする準備ができたら、現在のバージョンのアプリケーションのホストするスタックから、更新されたバージョンをホストするスタックに、ユーザートラフィックを切り替えます。

トピック

- 開発、ステージング、本稼働スタックの使用
- Blue-Green Deployment 戦略の使用

開発、ステージング、本稼働スタックの使用

最も一般的なアプローチでは、以下のスタックを使用します。

開発スタック

開発スタックは、新しい機能の実装やバグの修正などのタスクに使用します。開発スタックは基本的に、本稼働スタックに含まれる同じレイヤー、アプリケーション、リソースなどが属するプロトタイプスタックです。開発スタックでは通常、本稼働スタックと同じ負荷を処理する必要がないため、インスタンスの数やサイズはより小さくなります。

開発スタックは公開されません。以下のようにアクセスを制御します。

- 指定した IP アドレスまたはアドレス範囲からのみ受信リクエストを許可するように、アプリケーションサーバーまたはロードバランサーのセキュリティグループのインバウンドルールを設定することで、ネットワークアクセスを制限します。

  たとえば、HTTP、HTTPS、および SSH アクセスを自社のアドレス範囲内のアドレスに制限します。

- スタック OpsWorks のアクセス許可ページを使用して、スタックスタック管理機能へのアクセスを制御します。

  たとえば、Manage アクセス権限レベルを開発チームに、Show アクセス権限を他のすべての従業員に付与します。

ステージングスタック

ステージングスタックは、更新された本稼働スタックの候補のテストと最終処理に使用します。開発が完了したら、開発スタックを複製することで、ステージングスタックを作成します。その後、ステージングスタックでテストスイートを実行し、そのスタックに更新をデプロイして、発生する問題を修正します。

ステージングスタックも公開されません。開発スタックに対する同じ方法でスタックおよびネットワークアクセスを制御します。開発スタックのクローンを作成してステージングスタックを作成する場合、 OpsWorks スタックのアクセス許可管理によって付与されたアクセス許可のクローンを作成できます。ただし複製は、ユーザーの IAM ポリシーによって付与されるアクセス権限には影響を与えません。これらのアクセス権限を変更するには、IAM コンソール、CLI、または SDK を使用する必要があります。詳細については、「ユーザー許可の管理」を参照してください。

本稼働スタック

本稼働スタックは、現在のアプリケーションをサポートする公開スタックです。ステージングスタックがテストに合格したら、本稼働スタックに昇格させ、古い本稼働スタックを削除します。これを行う方法の例については、「Blue-Green Deployment 戦略の使用」を参照してください。

> **Note**
>
> OpsWorks スタックコンソールを使用してスタックを手動で作成する代わりに、スタックごとに AWS CloudFormation テンプレートを作成します。このアプローチには以下の利点があります。
>
> - スピードと利便性 – テンプレートを起動すると、 CloudFormation によって必要なすべてのインスタンスを含むスタックが自動的に作成されます。
> - 一貫性 – 各スタックのテンプレートをソースリポジトリに保存することで、デベロッパーが同じ目的に同じスタックを使用するようになります。

Blue-Green Deployment 戦略の使用

Blue-Green Deployment 戦略は、個別のスタックを効率的に使用して、更新されたアプリケーションを本稼働にデプロイする一般的な方法の 1 つです。

- Blue 環境は、現在のアプリケーションをホストする本稼働スタックです。
- Green 環境は、更新されたアプリケーションをホストするステージングスタックです。

更新されたアプリケーションを本稼働にデプロイする準備ができたら、Blue スタックから新しい本稼働スタックとなる Green スタックにユーザートラフィックを切り替えます。その後、古い Blue スタックを削除します。

次の例では、 OpsWorks Stacks スタックを使用して、 [Route 53 (ルート 53)] および [Elastic Load Balancing load balancers (Elastic Load Balancing ロードバランサー)] のプールを併用して、ブルーグリーンのデプロイを実行する方法を説明します。切り替え前に以下の点を確認してください。

- Green スタックにある更新されたアプリケーションはテストに合格し、本稼働用に準備ができている。
- Green スタックは、更新されたアプリケーションが含まれていること、公開されないことを除いて、Blue スタックと同一である。

両方のスタックでは、アクセス権限、各レイヤーのインスタンスの数とタイプ、時間ベースと負荷ベースの設定などは同一です。

- Green スタックの 24/7 インスタンスおよびスケジュール済みの時間ベースのインスタンスのすべてがオンラインになっている。
- いずれかのスタックのレイヤーに動的にアタッチでき、[pre-warmed (事前にウォーミングアップ)] することができるElastic Load Balancing ロードバランサーのプールがあり、予想されるトラフィックボリュームを処理します。
- Route 53の [weighted routing feature (加重ルーティング機能)] を使用して、プールされたロードバランサーを含むホストゾーンにレコードセットを作成しま。
- Blue スタックのアプリケーションサーバーレイヤーにアタッチされているロードバランサーにゼロ以外の重みを割り当て、未使用のロードバランサーにゼロの重みに割り当てている。これにより、Blue スタックのロードバランサーによってすべての受信トラフィックが処理されるようになります。

Green スタックにユーザーを切り替えるには

1. Green スタックのアプリケーションサーバーレイヤーにプールの未使用のロードバランサーのいずれかをアタッチします。フラッシュトラフィックを想定できる場合や、トラフィックを徐々に増加させるための負荷テストを設定できない場合など、シナリオによっては、想定したトラフィックを処理できるようにロードバランサーの事前ウォーミングを行います。
2. Green スタックのすべてのインスタンスが Elastic Load Balancing ヘルスチェックに合格した後、 Route 53 レコードセットの重みを変更し、 Green スタックのロードバランサーの重みがゼロ以外になり、それに応じて Blue スタックのロードバランサーの重みを減らすようにします。まずは、Green スタックで受信リクエストのごく一部 (多くの場合 5%) が処理され、Blue スタックで残りが処理されるようにすることをお勧めします。これで、2 つの本稼働スタックが用意できました。Green スタックで受信リクエストの一部が処理され、Blue スタックで残りが処理されます。
3. Green スタックのパフォーマンスメトリクスを監視します。それらのメトリクスが許容可能であれば、多くの場合、Green スタックの重みを増やして、受信トラフィックの 10% が処理されるようにします。
4. Green スタックで受信トラフィックの約半分が処理されるようになるまで、手順 3 を繰り返します。すべての問題はこの時点までに確認できるため、Green スタックのパフォーマンスメトリクスが許容可能であれば、Blue スタックの重みをゼロまで減らすことで、プロセスを完了で

きます。これで、Green スタックは新しい Blue スタックになり、このスタックですべての受信トラフィックが処理されるようになります。

5. 古い Blue スタックのアプリケーションサーバーレイヤーからロードバランサーをデタッチし、プールに戻します。
6. 古い Blue スタックは、ユーザーのリクエストの処理に使用されなくなりますが、新しい Blue スタックに問題が発生した場合に備えて、しばらく保持することをお勧めします。その場合は、古い Blue スタックに受信トラフィックを割り振り直すことで、更新をロールバックできます。新しい Blue スタックのパフォーマンスメトリクスが許容可能になったことを確認できたら、古い Blue スタックをシャットダウンします。

バックエンドデータベースの管理

アプリケーションがバックエンドデータベースに依存している場合は、古いアプリケーションから新しいアプリケーションに移行する必要があります。 OpsWorks スタックは次のデータベースオプションをサポートしています。

Amazon RDS Layer

[Amazon Relational Database Service (Amazon RDS) layer] Amazon Relational Database Service (Amazon RDS) レイヤー] では、 RDS DB インスタンスを個別に作成し、スタックに登録します。RDS DB インスタンスを登録できるのは一度に 1 つのスタックのみですが、スタック間で RDS DB インスタンスを切り替えることができます。

OpsWorks スタックは、アプリケーションサーバーに接続データを含むファイルを、アプリケーションで簡単に使用できる形式でインストールします。 OpsWorks スタックは、データベース接続情報をスタック設定およびデプロイ属性に追加し、レシピからアクセスできます。さらに、JSON を使用して、アプリケーションに接続データを渡すこともできます。詳細については、「データベースへの接続」を参照してください。

データベースに依存するアプリケーションを更新するには、2 つの基本的な課題があります。

- 移行中にすべてのトランザクションを適切に記録すると同時に、アプリケーションの新旧バージョン間の競合状態を回避する。
- サイトのパフォーマンスへの影響を制限し、かつダウンタイムを最小限に抑えるかなくす方法で、移行を行う。

このトピックで説明するデプロイの戦略を使用するときは、データベースを古いアプリケーションからデタッチし、新しいアプリケーションに再アタッチするだけでは済みません。アプリケーションの両方のバージョンが移行中に並行して実行され、同じデータにアクセスできる必要があります。以下に説明しているのは、移行を管理するための 2 つのアプローチです。いずれのアプローチにも利点と課題があります。

アプローチ 1: 両方のアプリケーションが同じデータベースに接続するようにする

利点

- 移行中のダウンタイムはありません。

  データベースへのアクセスを一方のアプリケーションが徐々に停止しながら、他方のアプリケーションが徐々に引き継ぎます。

- 2 つのデータベース間でデータを同期する必要はありません。

チャレンジ

- 両方のアプリケーションが同じデータベースにアクセスするため、アクセスを管理してデータの損失や破損を防ぐ必要があります。
- 新しいデータベーススキーマに移行する必要がある場合、古いバージョンのアプリケーションで新しいスキーマを使用できる必要があります。

個別のスタックを使用している場合、インスタンスが特定のスタックに永続的に関連付けられず、異なるスタックで動作するアプリケーションからアクセスできるため、このアプローチはおそらく Amazon RDS に最適です。ただし、一度に複数のスタックに RDS DB インスタンスを登録できないため、JSON などを使用して両方のアプリケーションに接続データを渡す必要があります。詳細については、「カスタムレシピの使用」を参照してください。

ローリングアップグレードを使用する場合、新旧のアプリケーションバージョンは同じスタックでホストされるため、 Amazon RDS または MySQL のいずれかのレイヤーを使用できます。

アプローチ 2: アプリケーションの各バージョンに専用のデータベースを提供する

利点

- 各バージョンに専用のデータベースがあるため、スキーマ間の互換性は不要です。

チャレンジ

- 移行中に 2 つのデータベース間でデータを同期して、データの損失や破損がないようにする必要があります。
- 同期手順によりサイトで重大なダウンタイムやパフォーマンスの大幅な低下が生じないようにする必要があります。

個別のスタックを使用する場合、各スタックに専用のデータベースを用意できます。ローリングデプロイを使用する場合、2 つのデータベースをスタックにアタッチし、各アプリケーションに 1 つのデータベースを用意できます。古いアプリケーションと更新されたアプリケーションとの間でデータベーススキーマの互換性がない場合、このアプローチの方が適しています。

[Recommendation: (レコメンデーション:) 一般的に、アプリケーションのバックエンドデータベースとしては、移行シナリオを問わず、柔軟に適用できる Amazon RDS レイヤーを使用することをお勧めします。移行の処理方法の詳細については、「Amazon RDS User Guide (Amazon RDS ユーザーガイド)」 を参照してください。

ローカルでのクックブックの依存関係のパッケージ化

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Berkshelf を使用してローカルでクックブックの依存関係をパッケージ化し、Amazon S3 にパッケージをアップロードし、スタックを変更して、Amazon S3 パッケージをクックブックのソースとして使用できます。Amazon S3 バケットに配信されるコンテンツには、カスタマーコンテンツが含まれている場合があります。機密データの削除の詳細については、「S3 バケットを空にする方法」または「S3 バケットを削除する方法」を参照してください。

以下のチュートリアルでは、クックブックとその依存関係を .zip ファイルにプリパッケージし、 スタックの Linux OpsWorks インスタンスのクックブックソースとして .zip ファイルを使用する方法について説明します。最初のチュートリアルでは、1 つのクックブックをパッケージ化する方法を説明します。2 番目のチュートリアルでは、複数のクックブックをパッケージ化する方法について説明します。

始める前に、Chef Development Kit (Chef DK とも呼ばれる) をインストールします。これは Chef コミュニティによって開発されたツールのセットです。ChefDK は `chef` コマンドラインツールを使用するために必要です。

Chef 12 での依存関係のローカルパッケージ化

Chef 12 Linux では、Berkshelf がスタックインスタンスにデフォルトでインストールされなくなりました。ローカルの開発用コンピュータに Berkshelf をインストールし、これを使用してクックブックの依存関係をローカルにパッケージ化することをお勧めします。依存関係を含めたパッケージを Amazon S3 にアップロードします。最後に、クックブックソースとしてアップロードされたパッケージを使用するように Chef Linux 12 のスタックを変更します。Chef 12 でクックブックをパッケージ化する場合は、以下の相違点に注意してください。

1. ローカルコンピュータで、chef コマンドラインツールを使用してクックブックを作成します。

   ```
   chef generate cookbook "server-app"
   ```

   このコマンドによってクックブック、Berksfile、metadata.rb ファイル、およびレシピディレクトリが作成され、クックブックと同じ名前のフォルダに配置されます。次の例は、作成される項目の構造を示しています。

   ```
   server-app <-- the cookbook you've just created
       ### Berksfile
       ### metadata.rb
       ### recipes
   ```

2. テキストエディタで Berksfile を編集し、server-app クックブックの依存先のクックブックを指定します。この例では server-app が Chef Supermarket の java クックブックに依存するように指定します。ここでは、バージョン 1.50.0 または以降の新しい マイナー バージョンを指定しますが、任意の発行済みバージョンを単一引用符で囲んで入力できます。変更内容を保存し、ファイルを閉じます。

   ```
   source 'https://supermarket.chef.io'
   cookbook 'java', '~> 1.50.0'
   ```

3. metadata.rb ファイルを編集して、依存関係を追加します。変更内容を保存し、ファイルを閉じます。

   ```
   depends 'java' , '~> 1.50.0'
   ```

4. Chef で作成された server-app クックブックのディレクトリに変更し、package コマンドを実行して、クックブックの tar ファイルを作成します。複数のクックブックをパッケージ化する場合は、このコマンドを、すべてのクックブックが保存されているルートディレクトリで実

行します。1 つのクックブックをパッケージ化するには、このコマンドをクックブックディレクトリレベルで実行します。次の例では、このコマンドを server-app ディレクトリで実行します。

```
berks package cookbooks.tar.gz
```

出力は以下のようになります。tar.gz ファイルがローカルディレクトリに作成されます。

```
Cookbook(s) packaged to /Users/username/tmp/berks/cookbooks.tar.gz
```

5. で AWS CLI、先ほど作成したパッケージを Amazon S3 にアップロードします。S3; にアップロードした後でクックブックパッケージの新しい URL を書き留めます。この URL は、スタックの設定で必要になります。

```
aws s3 cp cookbooks.tar.gz s3://bucket-name/
```

出力は以下のようになります。

```
upload: ./cookbooks.tar.gz to s3://bucket-name/cookbooks.tar.gz
```

6. OpsWorks スタックで、クックブックソースとしてアップロードしたパッケージを使用するようにスタックを変更します。

   a. [Use custom Chef cookbooks] を [Yes] に設定します。

   b. [Repository type] を [S3 Archive] に設定します。

   c. [Repository URL] に、ステップ 5 でアップロードしたクックブックパッケージの URL を貼り付けます。

   スタックの変更を保存します。

ローカルで 1 つのクックブックの依存関係をパッケージ化する

1. ローカルコンピュータで、以下の chef コマンドラインツールを使用してクックブックを作成します。

```
chef generate cookbook "server-app"
```

このコマンドによってクックブックと Berksfile が作成され、クックブックと同じ名前のフォルダに配置されます。

2. Chef によって作成されたクックブックのディレクトリに変更し、以下のコマンドを実行して、その内容をすべてパッケージ化します。

```
berks package cookbooks.tar.gz
```

出力は次のようになります。

```
Cookbook(s) packaged to /Users/username/tmp/berks/cookbooks.tar.gz
```

3. で AWS CLI、先ほど作成したパッケージを Amazon S3 にアップロードします。

```
aws s3 cp cookbooks.tar.gz s3://bucket-name/
```

出力は次のようになります。

```
upload: ./cookbooks.tar.gz to s3://bucket-name/cookbooks.tar.gz
```

4. OpsWorks スタックで、クックブックソースとしてアップロードしたパッケージを使用するようにスタックを変更します。

ローカルで複数のクックブックの依存関係をパッケージ化する

この例では、2 つのクックブックを作成し、それらの依存関係をパッケージ化します。

1. ローカルコンピュータで、以下の chef コマンドを実行して、2 つのクックブックを生成します。

```
chef generate cookbook "server-app"
chef generate cookbook "server-utils"
```

この例では、server-app クックブックによって Java が設定されるため、Java への依存関係を追加する必要があります。

2. コミュニティ Java クックブックへの依存関係を追加するように、`server-app/metadata.rb` を以下のように編集します。

```
maintainer "The Authors"
maintainer_email "you@example.com"
license "all_rights"
description "Installs/Configures server-app"
long_description "Installs/Configures server-app"
version "0.1.0"
depends "java"
```

3. Berkshelf にパッケージ化対象を指定するように、クックブックのルートディレクトリ内の Berksfile ファイルを以下のように編集します。

```
source "https://supermarket.chef.io"
cookbook "server-app", path: "./server-app"
cookbook "server-utils", path: "./server-utils"
```

ファイル構造は以下のようになります。

```
..
   ### Berksfile
   ### server-app
   ### server-utils
```

4. 最後に、zip パッケージを作成して Amazon S3 にアップロードし、新しいクックブックソースを使用するように OpsWorks スタックスタックを変更します。そのためには、「ローカルで 1 つのクックブックの依存関係をパッケージ化する」の手順 2 ~ 4 に従います。

その他のリソース

クックブックの依存関係のパッケージ化の詳細については、以下を参照してください。

- AWS DevOps Blog の「How to Package Cookbook Dependencies Locally with Berkshelf」
- OpsWorks フォーラムでの Linux Chef 12 と Berkshelf
- OpsWorks フォーラムの Chef 12 の Berkshelf
- このガイドの「カスタムクックブックのインストール」
- このガイドの「クックブックリポジトリ」

スタック

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

スタックは最上位 OpsWorks の スタックエンティティです。まとめて管理するインスタンスのセットを表します。通常は、PHP アプリケーションの提供のように共通の用途があります。スタックは、コンテナとして機能すること以外に、アプリケーションとクックブックの管理など、インスタンスのグループ全体に適用されるタスクを処理します。

たとえば、ウェブアプリケーションを提供するスタックは、次のように表示される場合があります。

- 一連の アプリケーションサーバーのインスタンス。各インスタンスが、着信トラフィックのそれぞれの部分を処理します。
- ロードバランサーインスタンス。着信トラフィックを処理し、アプリケーションサーバーに配信します。
- データベースインスタンス。 アプリケーションサーバーのバックエンド データストアとなります。

一般的な方法は、異なる環境の複数のスタックを持つことです。一連のスタックは一般的に次のように構成されます。

- 開発スタック。開発者が、機能の追加、バグの修正、他の開発の実行、タスクの管理に使用します。
- ステージングスタック。更新または修正を公開する前に検証します。
- プロダクションスタック。ユーザーからのリクエストを処理するように一般公開されています。

このセクションでは、スタックの取り扱いの基本情報について説明します。

トピック

- Amazon EC2-Classic から VPC へスタックを移行する
- 新しいスタックを作成する
- VPC でのスタックの実行
- スタックの更新
- スタックのクローン化
- OpsWorks スタックスタックコマンドの実行
- カスタム JSON の使用
- スタックの削除

Amazon EC2-Classic から VPC へスタックを移行する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このトピックでは、スタックを Amazon EC2 Classic ネットワークプラットフォーム AWS OpsWorks Stacks から Amazon Virtual Private Cloud (Amazon VPC) ネットワークに移行する方法について説明します。

2013-12-04 より前に AWS アカウントを作成した場合は、一部の AWS リージョンで EC2-Classic がサポートされている場合があります。ネットワークの強化や新しいインスタンスの種類など、一部の Amazon EC2 リソースと機能には、仮想プライベートクラウド (VPC) が必要です。いくつかのリソースは EC2-Classic と VPC の間で共有できますが、ほかのリソースは共有できません。サービスの中断を避けるため、 AWS OpsWorks Stacks スタックを VPC に移行することをお勧めします。

トピック

- 前提条件
- AWS OpsWorks Stacks スタックを VPC に移行する
- 関連情報

前提条件

開始する前に、 AWS OpsWorks Stacks 設定要件を満たす VPC が必要です。VPC でプライベートサブネットを設定するには AWS OpsWorks Stacks、このガイドVPC でのスタックの実行の「」を参照してください。Amazon VPC マネジメントコンソールを使用して、カスタム VPC を作成できます。詳細については、「Amazon Virtual Private Cloud ユーザーガイド」の「Amazon VPC console wizard configurations」(Amazon VPC コンソールウィザードの設定) および「VPCs and subnets」(VPC とサブネット) を参照してください。

移行を続行するには、使用する VPC ID とサブネット ID が必要です。

AWS OpsWorks Stacks スタックを VPC に移行する

まず、 AWS OpsWorks Stacks コンソールまたは API を使用して既存の EC2-Classic スタックのクローンを作成します。続いて、既存のスタックのリソースを新しいスタックに移動します。クローン化されたスタックで新しいインスタンスを起動し、アプリケーションをデプロイします。新しいインスタンスが機能していることを確認します。最後に、EC2-Classic スタックから EC2-Classic リソースを削除し、古いスタックを削除します。

1. 既存の EC2-Classic スタックを VPC にクローン化します。スタックをクローン化することで、スタック設定、レイヤー、アプリケーション、ユーザー、およびユーザー権限が新しいスタックにコピーされます。スタックをクローン化する方法の詳細については、「スタックのクローン化」を参照してください。

   AWS OpsWorks Stacks API を使用してスタックのクローンを作成することもできます。 AWS CLI または AWS SDKs を使用してスタックのクローンを作成する場合は、 `VpcId`パラメータの値を で作成した VPC の ID に設定します前提条件。詳細については、「AWS OpsWorks Stacks API リファレンス」の「CloneStack」を参照してください。
2. クローン化されたスタックのレイヤーに新しいインスタンスを作成します。前提条件 で作成したサブネットの ID を必ず指定してください。スタック内にインスタンスを作成する方法の詳細については、このガイドの「レイヤーへのインスタンスの追加」を参照してください。
3. EC2 セキュリティグループ、Elastic Load Balancing ロードバランサー、Elastic IP アドレスなどのクラシックリソースを VPC に移行し、クローン化されたスタックに関連付けます。詳細については、「Amazon EC2 ユーザーガイド」の「Migrate your resources to a VPC」を参照してください。
4. Amazon EBS ボリュームと Amazon RDS インスタンスをクローン化されたスタックに登録します。スタックにリソースを登録することについての詳細は、このガイドの「スタックにリソースを登録する」を参照してください。

Amazon EBS ボリュームは VPC に関連付けられていません。EC2-Classic スタックと VPC 内のスタックの両方で、インスタンス間で使用できます。EC2 Classic の Amazon RDS インスタンスは、EC2-Classic スタックと VPC 内のスタックの両方に登録できます。

5. クローン化されたスタックでインスタンスを起動し、ワークロードのごく一部をクローンされたスタックに移動します。例えば、トラフィックのごく一部をクローン化されたスタック内の Elastic Load Balancing ロードバランサーに移動します。Amazon Route 53 を使用している場合は、「Amazon Route 53 デベロッパーガイド」の「ELB ロードバランサーへのトラフィックのルーティング」を参照してください。

   新しいスタックが機能し、アプリケーションをサポートしていることを確認するまで、ごく一部のトラフィックだけをルーティングします。一週間の試用期間などに、新しいスタックをごく一部のトラフィックで動作させます。新しいスタックが動作していることを確認後、残りのトラフィックをスタックにルーティングします。

6. クローン化されたスタックが動作していることを確認後、残りの本番トラックまたはワークロードをクローンされたスタックに移動します。EC2-Classic スタック内のインスタンスを停止できるようになっています。移行後数週間に新しいスタックで問題が発生した場合、ワークロードを古いスタックに戻すことができるように、古いスタックを数週間利用可能な状態にしておくことをお勧めします。

7. 新しいスタックが数週間動作している場合は、EC2-Classic スタックのインスタンスを削除します。インスタンスの削除方法の詳細については、このガイドの「OpsWorks スタックインスタンスの削除」を参照してください。

   > **Important**
   >
   > Amazon EC2 コンソールまたは API を使用して OpsWorks インスタンスを停止または削除しないでください。

8. EC2-Classic スタックのアプリケーションを削除します。アプリケーションの削除方法の詳細については、このガイドの「アプリケーションをスタックから削除するには」を参照してください。

9. EC2-Classic スタックを削除します。スタックを削除する方法の詳細については、このガイドの「スタックの削除」を参照してください。

関連情報

- EC2-Classic から VPC への移行

- デバッグとトラブルシューティングのガイド
- VPC でのスタックの実行

新しいスタックを作成する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

新しいスタックを作成するには、 OpsWorks スタックダッシュボードでスタックの追加をクリックします。[Add Stack] ページで、スタックを設定します。完了したら、[Add Stack] をクリックします。

トピック

- 作成するスタックのタイプを選択します。
- 基本オプション
- 詳細オプション

作成するスタックのタイプを選択します。

スタックを作成する前に、作成するスタックのタイプを決定する必要があります。ヘルプについては次の表を参照してください。

作成するもの	次の場合に作成するスタックのタイプ	方法については、以下の手順に従います
サンプルスタック	Linux ベースの Chef 12 スタックおよび Node.js サンプルアプリケーションで AWS OpsWorks の基本について学習します。	使用開始: サンプル

作成するもの	次の場合に作成するスタックのタイプ	方法については、以下の手順に従います
Linux ベースの Chef 12 スタック	AWS OpsWorks がサポートする最新バージョンの Chef を使用して、Linux ベースのスタックを作成します。豊富なコミュニティクックブックを活用するか、独自のカスタムクックブックを作成することを希望する高度な Chef ユーザーは、このオプションを選択します。詳細については、「Chef 12 Linux」を参照してください。	入門ガイド: Linux
Windows ベースの Chef 12.2 スタック	Windows ベースのスタックを作成します。	入門ガイド: Windows
Linux ベースの Chef 11.10 スタック	組織で後方互換性のため Chef 11.10 と Linux の使用が必要な場合は、このスタックを作成します。	Chef 11 Linux スタックの使用開始

基本オプション

[Add Stack] ページには、以下の基本オプションがあります。

スタック名

(必須) OpsWorks スタックコンソールでスタックを識別するために使用される名前。名前は一意である必要はありません。 OpsWorks スタックは、スタックを一意に識別する GUID であるスタック ID も生成します。たとえば、AWS CLI コマンド (update-stack など) でスタック ID を使用して、特定のスタックを識別します。スタックの作成後、ナビゲーションペインで [Stack] を選択してから、[Stack Settings] を選択することで、その ID を見つけることができます。この ID には OpsWorks ID というラベルが付いています。

リージョン

(必須) インスタンスが起動される AWS のリージョン。

VPC

(オプション) スタックが起動される VPC の ID。すべてのインスタンスはこの VPC 内で起動され、後でこの ID を変更することはできません。

- アカウントが EC2 Classic をサポートしている場合、VPC を使用しないときには No VPC (デフォルト値) を指定できます。

  EC2 Classic の詳細については、「サポートされているプラットフォーム」を参照してください。
- アカウントで EC2 Classic がサポートされていない場合は、VPC を指定する必要があります。

  デフォルト設定は、EC2 Classic の使いやすさと VPC のネットワーキング機能のメリットを組み合わせた、Default VPC です。通常の VPC でスタックを実行する場合は、VPC コンソール、API、または CLI を使用して、その VPC を作成する必要があります。 OpsWorks スタックのスタックに対する VPC を作成する方法の詳細については、「VPC でのスタックの実行」を参照してください。一般的な情報については、「Amazon Virtual Private Cloud」を参照してください。

Default Availability Zone/Default subnet

(オプション) この設定は、スタックを VPC で作成しているかどうかによって異なります。

- アカウントが EC2 Classic をサポートし、[VPC] を [No VPC] に設定している場合、この設定のラベルは [Default Availability Zone] になり、インスタンスが起動されるデフォルトの AWS アベイラビリティーゾーンを指定します。
- アカウントが EC2 Classic をサポートしていない場合や、VPC を指定することを選択した場合、このフィールドのラベルは [Default subnet] になり、インスタンスが起動されるデフォルトのサブネットを指定します。インスタンスの作成時にこの値を上書きすることによって、他のサブネットのインスタンスを起動できます。各サブネットは 1 つのアベイラビリティーゾーンに関連付けられます。

インスタンスの作成時にこの設定を上書きすることで、 OpsWorks スタックで別のアベイラビリティーゾーンまたはサブネットでインスタンスを起動させることができます。 レイヤーへのインスタンスの追加

VPC でスタックを実行する方法の詳細については、「VPC でのスタックの実行」を参照してください。

Default operating system

(オプション) デフォルトで 各インスタンスにインストールされるオペレーティングシステム。次のオプションがあります。

- 組み込みの Linux オペレーティングシステムのいずれか。
- Microsoft Windows Server 2012 R2.
- サポートされているいずれかのオペレーティングシステムに基づくカスタム AMI。

  [Use Custom AMI] を選択した場合、オペレーティングシステムは、インスタンスの作成時に指定したカスタム AMI によって決まります。詳細については、「カスタム AMI の使用」を参照してください。

使用可能なオペレーティングシステムの詳細については、「OpsWorks スタックオペレーティングシステム」を参照してください。

> **Note**
>
> インスタンスの作成時、デフォルトのオペレーティングシステムを上書きできます。ただし、Linux オペレーティングシステムを上書きして Windows を指定したり、Windows オペレーティングシステムを上書きして Linux を指定したりはできません。

Default SSH key

(オプション) スタックのリージョンの Amazon EC2 キーペア。デフォルト値は none です。キーペアを指定すると、 OpsWorks スタックはインスタンスにパブリックキーをインストールします。

- Linux インスタンスでは、SSH クライアントとプライベートキーを使用して、スタックのインスタンスにログインできます。

  詳細については、「SSH でのログイン」を参照してください。
- Windows インスタンスでは、Amazon EC2 コンソールまたは CLI でプライベートキーを使用して、インスタンスの管理者パスワードを取得できます。

  その後、RDP クライアントでそのパスワードを使用して、管理者としてインスタンスにログインできます。詳細については、「RDP でのログイン」を参照してください。

SSH キーを管理する方法の詳細については、「SSH アクセスの管理」を参照してください。

> **Note**
>
> この設定を上書きするには、インスタンスの作成するときに別のキーペアを指定するか、キーペアを指定しません。

Chef version

これは、選択した Chef バージョンを示します。

Chef のバージョンの詳細については、「Chef のバージョン」を参照してください。

Use custom Chef cookbooks

スタックのインスタンスにカスタム Chef クックブックをインストールするかどうか。

Chef 12 の場合、デフォルト設定は [Yes] です。Chef 11 の場合、デフォルト設定は No です。Yes オプションには、リポジトリ URL OpsWorks など、カスタムクックブックをリポジトリからスタックのインスタンスにデプロイするために必要な情報をスタックに提供するいくつかの追加設定が表示されます。詳細は、クックブックに使用しているリポジトリによって異なります。詳細については、「カスタムクックブックのインストール」を参照してください。

Stack color

(オプション) OpsWorks スタックコンソールでスタックを表すために使用される色合い。異なるスタックに異なる色を使用することによって、開発、ステージング、本稼動用の各スタックなど、スタックを区別しやすくすることができます。

スタックタグ

スタックおよびレイヤーレベルでタグを適用することができます。タグを作成する場合、タグ付けされた構造内すべてのリソースにタグを適用することになります。例えば、1 つのスタックに 1 つのタグを適用すると、すべてのレイヤーおよび各レイヤー内、またそのレイヤーのすべてのインスタンス、Amazon EBS ボリューム、または Elastic Load Balancing ロードバランサーにそのタグを適用することになります。タグをアクティブ化し、それらを使用して OpsWorks スタックリソースのコストを追跡および管理する方法の詳細については、請求情報とコスト管理ユーザーガイドの「コスト配分タグの使用」と「ユーザー定義のコスト配分タグのアクティブ化」を参照してください。 OpsWorks スタックでのタグ付けの詳細については、「」を参照してくださいタグ。

詳細オプション

詳細設定の場合、[Advanced >>] をクリックして、[Advanced options] および [Security] セクションを表示します。

[Advanced options] セクションには、以下のオプションがあります。

デフォルトのルートデバイスのタイプ。

インスタンスのルートボリュームに使用されるストレージのタイプ。詳細については、「ストレージ」を参照してください。

- Linux スタックでは、デフォルトで Amazon EBS-Backed ルートボリュームが使用されますが、Instance store-Backed ルートボリュームを指定することもできます。
- Windows スタックでは、Amazon EBS-Backed ルートボリュームを使用する必要があります。

IAM ロール

(オプション) スタックがユーザーに代わって AWS とやり取りするために使用する、スタックの AWS Identity and Access Management (IAM) ロール。 OpsWorks

デフォルトの IAM インスタンスプロフィール

(オプション) スタックの Amazon EC2 インスタンスに関連付けられるデフォルトの IAM ロールです。このロールは、スタックのインスタンスで実行中のアプリケーションに、S3 バケットなどの AWS リソースにアクセスする権限を付与します。

- アプリケーションに特定のアクセス権限を付与するには、該当するポリシーが割り当てられた既存のインスタンスプロファイル (ロール) を選択します。
- 初期状態では、プロファイルのロールはいずれの権限も付与しませんが、IAMコンソール、API、または CLI を使用して、該当するポリシーをロールにアタッチできます。詳細については、「EC2 インスタンスで実行するアプリケーションに対するアクセス許可の指定」を参照してください。

API エンドポイントリージョン

この設定は、スタックの基本設定で選択されたリージョンの値を使用します。次のリージョンのエンドポイントから選択できます。

- 米国東部 (バージニア北部) リージョン
- 米国東部 (オハイオ) リージョン
- 米国西部 (オレゴン) リージョン
- 米国西部 (北カリフォルニア) リージョン

- カナダ (中部) リージョン (API のみ。 で作成されたスタックでは使用できません AWS マネジメントコンソール
- アジアパシフィック (ムンバイ) リージョン
- アジアパシフィック (シンガポール) リージョン
- アジアパシフィック (シドニー) リージョン
- アジアパシフィック (東京) リージョン
- Asia Pacific (Seoul) Region
- 欧州 (フランクフルト) リージョン
- 欧州 (アイルランド) リージョン
- 欧州 (ロンドン) リージョン
- 欧州 (パリ) リージョン
- 南米 (サンパウロ) リージョン

1 つの API エンドポイントで作成したスタックを他の API エンドポイントで使用することはできません。 OpsWorks スタックユーザーもリージョン固有であるため、これらのエンドポイントリージョンのいずれかの OpsWorks スタックユーザーに別のエンドポイントリージョンのスタックを管理させる場合は、スタックが関連付けられているエンドポイントにユーザーをインポートする必要があります。ユーザーのインポートの詳細については、「OpsWorks スタックへのユーザーのインポート」を参照してください。

Hostname theme

(オプション) 各インスタンスのデフォルトのホスト名を生成するために使用される文字列。デフォルト値は [Layer Dependent] で、インスタンスのレイヤーの短い名前を使用し、各インスタンスに一意の数値を追加します。たとえば、ロールに依存する Load Balancer のテーマのルートが「lb」であるとします。レイヤーに追加する最初のインスタンスには「lb1」、2 番目のインスタンスには「lb2」のように名前が付けられます。

OpsWorks Agent version

(オプション) 新しいバージョンが利用可能になったときに OpsWorks スタックエージェントを自動的に更新するか、指定されたエージェントバージョンを使用して手動で更新するか。この機能は Chef 11.10 スタックおよび Chef 12 スタックでのみ使用できます。デフォルト設定は [Manual update] であり、最新のエージェントバージョンに設定されます。

OpsWorks スタックは、 サービスと通信する各インスタンスにエージェントをインストールし、ライフサイクルイベントに応じて Chef 実行を開始するなどのタスクを処理します。この

エージェントは定期的に更新されます。スタックのエージェントバージョンを指定するときは、次の 2 つのオプションがあります。

- 自動更新 – OpsWorks スタックは、更新が利用可能になるとすぐに、新しい各エージェントバージョンをスタックのインスタンスに自動的にインストールします。
- 手動更新 – OpsWorks スタックは、指定されたエージェントバージョンをスタックのインスタンスにインストールします。

  OpsWorks 新しいエージェントバージョンが利用可能になると、スタックはスタックページにメッセージを投稿しますが、スタックのインスタンスは更新されません。エージェントを更新するには、スタック設定を手動で更新して新しいエージェントバージョンを指定する必要があります。その後 OpsWorks 、スタックはスタックのインスタンスを更新します。

特定のインスタンスの [OpsWorks Agent Version] のデフォルト設定を上書きすることができます。そのためには、そのインスタンスの設定を更新します。この場合、そのインスタンスの設定が優先されます。たとえば、デフォルト設定は [Auto-update] ですが、特定のインスタンスに対して [Manual update] を指定しているとします。 OpsWorks スタックが新しいエージェントバージョンをリリースすると、手動更新に設定されているものを除き、スタックのすべてのインスタンスが自動的に更新されます。特定のインスタンスに新しいエージェントバージョンをインストールするには、手動でそのインスタンスの設定を更新し、新しいバージョンを指定する必要があります。

> **Note**
>
> コンソールに、短縮されたエージェントバージョン番号が表示されます。完全なバージョン番号を確認するには、AWS CLI の describe-agent-versions コマンドを呼び出すか、API または SDK の同等のメソッドを呼び出します。それにより、使用可能なエージェントバージョンの完全なバージョン番号が返されます。

Custom JSON

(オプション) JSON 構造として書式設定された 1 つ以上のカスタム属性。これらの属性は、すべてのインスタンスにインストールされるスタック設定とデプロイ属性にマージされ、レシピで使用できます。カスタム JSON を使用すると、たとえば、デフォルト設定を指定する組み込み属性を上書きして、設定をカスタマイズできます。詳細については、「カスタム JSON の使用」を参照してください。

セキュリティには、OpsWorks セキュリティグループを使用するという 1 つのオプションがあります。これにより、 OpsWorks スタックの組み込みセキュリティグループをスタックのレイヤーに関連付けるかどうかを指定できます。

OpsWorks スタックには、デフォルトでレイヤーに関連付けられている、レイヤーごとに 1 つの組み込みセキュリティグループの標準セットが用意されています。[Use OpsWorks security groups] では、代わりに独自のカスタムセキュリティグループを提供できます。詳細については、「セキュリティグループの使用」を参照してください。

[Use OpsWorks security groups] には、次の設定が含まれます。

- はい - OpsWorks スタックは、適切な組み込みセキュリティグループを各レイヤーに自動的に関連付けます (デフォルト設定) 。

  追加のセキュリティグループを作成した後、レイヤーに関連付けることができますが、組み込みセキュリティグループを削除することはできません。
- いいえ - OpsWorks スタックは、組み込みのセキュリティグループをレイヤーに関連付けません。

  適切な EC2 セキュリティグループを作成し、作成した各レイヤーとセキュリティグループを関連付ける必要があります。ただし、作成時に組み込みセキュリティグループと層を手動で関連付けることもできます。カスタムセキュリティグループは、カスタム設定を必要とする層にのみ必要です。

次の点に注意してください。

- [Use OpsWorks security groups] を [Yes] に設定した場合、より制限の厳しいセキュリティグループをレイヤーに追加することによって、デフォルトのセキュリティグループのポートアクセスの設定を制限することはできません。複数のセキュリティグループがある場合、Amazon EC2 ではより制限の緩い設定が使用されます。さらに、組み込みのセキュリティグループの設定を変更して、より制限の厳しい設定を作成することはできません。スタックを作成すると、 OpsWorks スタックは組み込みのセキュリティグループの設定を標準設定で上書きするため、次回スタックを作成するときに行った変更は失われます。レイヤーで組み込みのセキュリティグループよりも制限の厳しいセキュリティグループの設定が必要な場合は、[Use OpsWorks security groups] を [No] に設定して、目的の設定でカスタムセキュリティグループを作成し、作成時にレイヤーに割り当てます。
- OpsWorks スタックセキュリティグループを誤って削除して再作成する場合は、グループ名の大文字と小文字を含め、元のセキュリティグループと完全に重複している必要があります。グループを手動で再作成する代わりに、 OpsWorks スタックによってこのタスクが実行されるようにすることをお勧めします。同じ AWS リージョンに新しいスタックを作成するだけで、 OpsWorks VPC

が存在する場合は、削除したセキュリティグループを含むすべての組み込みセキュリティグループが自動的に再作成されます。その後、今後使用しないスタックを削除します。セキュリティグループは残ります。

VPC でのスタックの実行

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

仮想プライベートクラウド (VPC) でスタックを作成することにより、スタックのインスタンスへのユーザーアクセスを制御できます。たとえば、スタックのアプリケーションサーバーまたはデータベースにユーザーが直接アクセスできるようにしたくない場合、代わりに、すべてのパブリックトラフィックが Elastic Load Balancing を経由するようにします。

VPC でスタックを実行するための基本的な手順は次のとおりです。

1. Amazon VPC コンソールか API、または CloudFormation テンプレートを使用することにより、適切に設定された VPC を作成します。
2. スタックを作成する際に VPC ID を指定します。
3. 適切なサブネットでスタックのインスタンスを起動します。

OpsWorks スタックでの VPC の動作について、以下に簡単に説明します。

> **Important**
>
> VPC エンドポイント機能を使用する場合、スタックの各インスタンスは、Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) から次のアクションを実行できる必要があることに注意してください。
>
> - インスタンスエージェントをインストールする。
> - Ruby などの資産をインストールする。

- Chef の実行ログをアップロードする。
- スタックコマンドを取得する。

これらのアクションを有効にするには、スタックのインスタンスが、スタックのリージョンと一致する、以下のバケットにアクセスできる必要があります。それ以外の場合、前述のオペレーションは失敗します。
Chef 12 Linux および Chef 12.2 Windows の場合、バケットは以下のとおりです。

エージェントバケット	資産バケット	ログバケット	DNA バケット
• opsworks-instance-agent-sa-east-1 • opsworks-instance-agent-ap-south-1 • opsworks-instance-agent-ap-northeast-1 • opsworks-instance-agent-ap-northeast-2 • opsworks-instance-agent-ap-southeast-1 • opsworks-instance-agent-ap-southeast-2 • opsworks-instance-agent-ca-central-1 • opsworks-instance-agent-eu-central-1 • opsworks-instance-agent-eu-west-1 • opsworks-instance-agent-eu-west-2	• opsworks-instance-assets-us-east-2 • opsworks-instance-assets-us-east-1 • opsworks-instance-assets-ap-south-1 • opsworks-instance-assets-ap-northeast-1 • opsworks-instance-assets-ap-northeast-2 • opsworks-instance-assets-ap-southeast-1 • opsworks-instance-assets-ap-southeast-2 • opsworks-instance-assets-ca-central-1 • opsworks-instance-assets-eu-central-1 • opsworks-instance-assets-eu-west-1	• opsworks-us-east-2-log • opsworks-us-east-1-log • opsworks-ap-south-1-log • opsworks-ap-northeast-1-log • opsworks-ap-northeast-2-log • opsworks-ap-southeast-1-log • opsworks-ap-southeast-2-log • opsworks-ca-central-1-log • opsworks-eu-central-1-log • opsworks-eu-west-1-log • opsworks-eu-west-2-log • opsworks-eu-west-3-log • opsworks-sa-east-1-log • opsworks-us-west-1-log • opsworks-us-west-2-log	• opsworks-us-east-2-dna • opsworks-us-east-1-dna • opsworks-ap-south-1-dna • opsworks-ap-northeast-1-dna • opsworks-ap-northeast-2-dna • opsworks-ap-southeast-1-dna • opsworks-ap-southeast-2-dna • opsworks-ca-central-1-dna • opsworks-eu-central-1-dna • opsworks-eu-west-1-dna • opsworks-eu-west-2-dna • opsworks-eu-west-3-dna • opsworks-sa-east-1-dna • opsworks-us-west-1-dna • opsworks-us-west-2-dna

エージェントバケット	資産バケット	ログバケット	DNA バケット
• opsworks-instance-agent-eu-west-3 • opsworks-instance-agent-us-east-1 • opsworks-instance-agent-us-east-2 • opsworks-instance-agent-us-west-1 • opsworks-instance-agent-us-west-2	• opsworks-instance-assets-eu-west-2 • opsworks-instance-assets-eu-west-3 • opsworks-instance-assets-sa-east-1 • opsworks-instance-assets-us-west-1 • opsworks-instance-assets-us-west-2		

Linux 用 Chef 11.10 以前のバージョンの場合、バケットは次のとおりです。Chef 11.4 スタックは、米国東部 (バージニア北部) リージョン 以外のリージョンエンドポイントではサポートされていません。

エージェントバケット	資産バケット	ログバケット	DNA バケット
• opsworks-instance-agent-us-east-2 • opsworks-instance-agent-us-east-1 • opsworks-instance-agent-ap-south-1 • opsworks-instance-agent-ap-northeast-1 • opsworks-instance-agent-ap-northeast-2 • opsworks-instance-agent-ap-southeast-1 • opsworks-instance-agent-ap-southeast-2 • opsworks-instance-agent-ca-central-1 • opsworks-instance-agent-eu-central-1 • opsworks-instance-agent-eu-west-1	• opsworks-instance-assets-us-east-2 • opsworks-instance-assets-us-east-1 • opsworks-instance-assets-ap-south-1 • opsworks-instance-assets-ap-northeast-1 • opsworks-instance-assets-ap-northeast-2 • opsworks-instance-assets-ap-southeast-1 • opsworks-instance-assets-ap-southeast-2 • opsworks-instance-assets-ca-central-1 • opsworks-instance-assets-eu-central-1 • opsworks-instance-assets-eu-west-1	• prod_stage-log	• prod_stage-dna

エージェントバケット	資産バケット	ログバケット	DNA バケット
• opsworks-instance-agent-eu-west-2 • opsworks-instance-agent-eu-west-3 • opsworks-instance-agent-us-east-1 • opsworks-instance-agent-us-west-1 • opsworks-instance-agent-us-west-2	• opsworks-instance-assets-eu-west-2 • opsworks-instance-assets-eu-west-3 • opsworks-instance-assets-sa-east-1 • opsworks-instance-assets-us-west-1 • opsworks-instance-assets-us-west-2		

詳細については、「VPC エンドポイント」を参照してください。

> **Note**
>
> OpsWorks スタックを有効にした VPC エンドポイントに接続するには、 スタックエージェントがパブリックエンドポイントにアクセスする必要があるため、NAT またはパブリック IP OpsWorks のルーティングも設定する必要があります。

トピック

- VPC の基本
- OpsWorks スタックスタックの VPC を作成する

VPC の基本

VPC の詳細については、「Amazon Virtual Private Cloud ユーザーガイド」を参照してください。端的に言えば、VPC は 1 つ以上のサブネットで構成され、各サブネットには 1 つ以上のインスタンスが含まれています。また、各サブネットには、送信先 IP アドレスに基づいてアウトバウンドトラフィックを送信する、関連付けられたルーティングテーブルがあります。

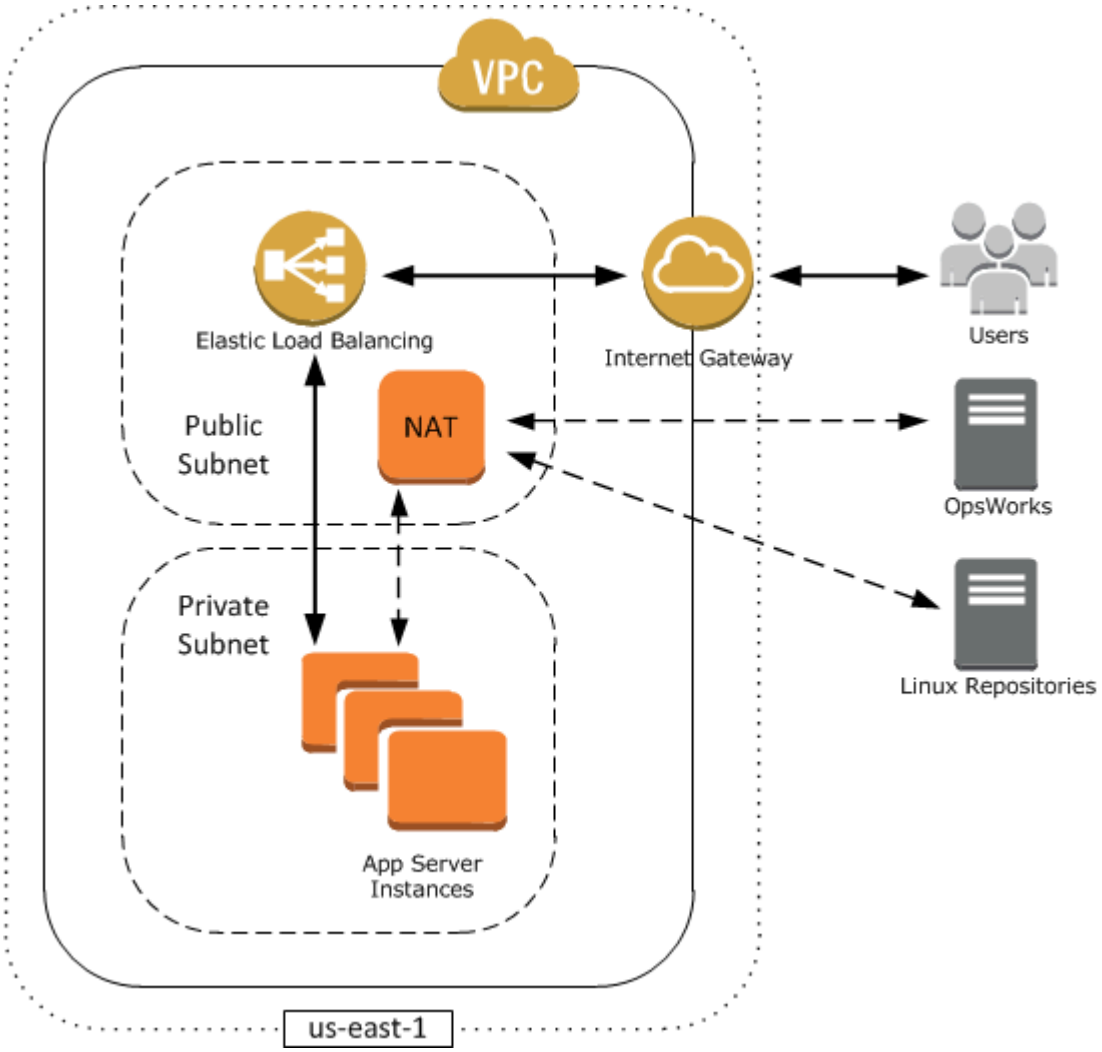
- VPC にあるインスタンスはサブネットに関係なくデフォルトで相互に通信できます。ただし、ネットワークアクセスコントロールリスト (ACL) やセキュリティグループポリシーを変更したり静的 IP アドレスを使用すると、この通信を遮断してしまう可能性があります。
- サブネットのインスタンスがインターネットと通信できる場合、このサブネットはパブリックサブネットと呼ばれます。
- サブネットのインスタンスが VPC 内の他のインスタンスとのみ通信でき、インターネットとは直接通信できない場合、このサブネットはプライベートサブネットと呼ばれます。

OpsWorks スタックでは、プライベートサブネットのインスタンスを含むスタック内のすべてのインスタンスが次のエンドポイントにアクセスできるように VPC を設定する必要があります。

- の「リージョンサポート」セクションに記載されている OpsWorks スタックサービスエンドポイントの 1 つOpsWorks スタックの開始方法。
- OpsWorks スタックエージェントで使用される、次のいずれかのインスタンスサービスエンドポイント。エージェントは、マネージドカスタマーインスタンスで実行され、サービスとデータを交換します。
  - opsworks-instance-service.us-east-2.amazonaws.com
  - opsworks-instance-service.us-east-1.amazonaws.com
  - opsworks-instance-service.us-west-1.amazonaws.com
  - opsworks-instance-service.us-west-2.amazonaws.com
  - opsworks-instance-service.ap-south-1.amazonaws.com
  - opsworks-instance-service.ap-northeast-1.amazonaws.com
  - opsworks-instance-service.ap-northeast-2.amazonaws.com
  - opsworks-instance-service.ap-southeast-1.amazonaws.com
  - opsworks-instance-service.ap-southeast-2.amazonaws.com
  - opsworks-instance-service.ca-central-1.amazonaws.com
  - opsworks-instance-service.eu-central-1.amazonaws.com

  - opsworks-instance-service.eu-west-1.amazonaws.com
  - opsworks-instance-service.eu-west-2.amazonaws.com
  - opsworks-instance-service.eu-west-3.amazonaws.com
- Amazon S3
- オペレーティングシステムに応じたパッケージリポジトリ (Amazon Linux や Ubuntu Linux のリポジトリなど)。
- 使用するアプリケーションとカスタムクックブックのリポジトリ

この接続が可能になるように VPC を設定する方法はさまざまです。以下は、 スタックアプリケーションサーバースタックの VPC OpsWorks を設定する方法の簡単な例です。



この VPC には複数のコンポーネントがあります。

サブネット

この VPC には 2 つのサブネットがあります。1 つはパブリック、もう 1 つはプライベートです。

- パブリックサブネットには、ロードバランサーとネットワークアドレス変換 (NAT) デバイスがあり、外部アドレスおよびプライベートサブネットのインスタンスと通信できます。
- プライベートサブネットにはアプリケーションサーバーがあり、パブリックサブネットの NAT およびロードバランサーと通信できますが、外部アドレスとは直接通信できません。

インターネットゲートウェイ

インターネットゲートウェイがある場合は、パブリック IP アドレスを使用するインスタンス (ロードバランサーなど) が VPC 外のアドレスと通信できます。

ロードバランサー

Elastic Load Balancing ロードバランサーは、ユーザーからの着信トラフィックを処理し、プライベートサブネットのアプリケーションサーバーに配信して、ユーザーにレスポンスを返します。

NAT

NAT デバイスは、アプリケーションサーバーが制限付きでインターネットにアクセスできるようにします。通常は、外部リポジトリからソフトウェア更新をダウンロードするなどの目的で使用されます。すべての OpsWorks スタックインスタンスは、 スタックおよび適切な Linux OpsWorks リポジトリと通信できる必要があります。この問題に対処する方法の 1 つは、関連付けられた Elastic IP アドレスを使用する NAT デバイスをパブリックサブネット内に配置することです。そうすれば、プライベートサブネット内のインスタンスからのアウトバウンドトラフィックを NAT を介してルーティングすることができます。

> **Note**
>
> NAT インスタンスが 1 つあれば、プライベートサブネットのアウトバウンドトラフィックに単一障害点が生まれます。一方に障害が発生した場合に互いにその機能を引き継ぐ NAT インスタンスのペアを使用して VPC を設定することで、信頼性を向上させることができます。詳細については、「Amazon VPC NAT インスタンスの高可用性」を参照してください。NAT ゲートウェイを使用することもできます。詳細については、「Amazon VPC User Guide」(Amazon VPC ユーザーガイド) の「NAT」を参照してください。

最適な VPC 設定は OpsWorks 、スタックスタックによって異なります。特定の VPC 設定を使用する場合のいくつかの例を次に示します。その他の VPC のシナリオの例については、「Amazon VPC のシナリオ」を参照してください。

パブリックサブネットで 1 つのインスタンスを使用する

パブリックアクセスすべきでない Amazon RDS インスタンスのように、関連するプライベートリソースのないシングルインスタンスのスタックがある場合、1 つのパブリックサブネットを持つ VPC を作成し、そのサブネットにインスタンスを配置できます。デフォルトの VPC を使用しない場合、このインスタンスのレイヤーでは Elastic IP アドレスをこのインスタンスに割り当てる必要があります。詳細については、「OpsWorks レイヤーの基本」を参照してください。

プライベートリソースを使用する

パブリックにアクセス可能にしてはならないリソースがある場合は、パブリックサブネット 1 つとプライベートサブネット 1 つを持つ VPC を作成できます。例えば、自動スケーリングを使用する負荷分散環境では、プライベートサブネットにすべての Amazon EC2 インスタンスを配置し、パブリックサブネットにロードバランサーを配置することができます。こうすると、インターネットから Amazon EC2 インスタンスに直接アクセスすることはできませんが、すべての受信トラフィックはロードバランサー経由でルーティングされます。

プライベートサブネットでは、インスタンスを Amazon EC2 の直接ユーザーアクセスから隔離しますが、AWS および Linux パッケージリポジトリへのアウトバウンドリクエストは送信する必要があります。このようなリクエストを許可するために、たとえば、固有の Elastic IP アドレスを持つネットワークアドレス変換 (NAT) デバイスを使用し、NAT 経由でインスタンスのアウトバウンドトラフィックをルーティングすることができます。前の例に示すように、NAT はロードバランサーと同じパブリックサブネットに配置できます。

- Amazon RDS インスタンスなどのバックエンドデータベースを使用している場合は、それらのインスタンスをプライベートサブネットに配置することができます。Amazon RDS インスタンスの場合、異なるアベイラビリティーゾーンに異なるサブネットを、少なくとも 2 つ指定する必要があります。
- プライベートサブネットのインスタンスに直接アクセスする必要がある場合 (例えば、SSH を使用してインスタンスにログインする場合)、インターネットからリクエストをプロキシする bastion ホストをパブリックサブネットに配置できます。

独自のネットワークを AWS に拡張する

独自のネットワークをクラウドに拡張し、VPC からインターネットへの直接アクセスを可能にする必要がある場合は、VPN ゲートウェイを作成できます。詳細については、「シナリオ 3: パブ

リックサブネットとプライベートサブネット、およびハードウェア VPN アクセスを持つ VPC」を参照してください。

OpsWorks スタックスタックの VPC を作成する

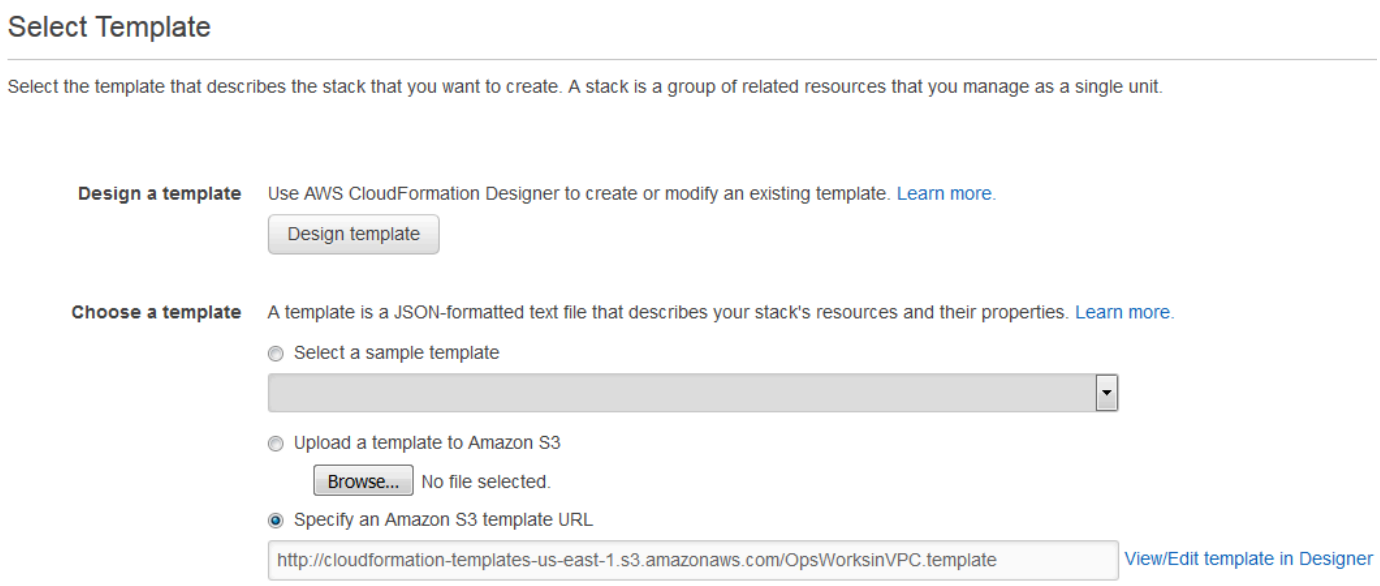
このセクションでは、サンプル AWS CloudFormation テンプレートを使用して OpsWorks スタックの VPC を作成する方法を示します。このテンプレートは、OpsWorksVPCtemplates.zip ファイルでダウンロードできます。このトピックで説明するような VPC を手動で作成する方法の詳細については、「シナリオ 2: パブリックサブネットとプライベートサブネットを持つ VPC」を参照してください。ルーティングテーブル、セキュリティグループなどを設定する方法の詳細については、サンプルテンプレートを参照してください。

> **Note**
>
> デフォルトでは、 OpsWorks スタックは CIDR 範囲と などのアベイラビリティーゾーンを連結してサブネット名を表示します`10.0.0.1/24 - us-east-1b`。名前を読みやすくするには、キーを に設定**`Name`**し、値をサブネット名に設定して、サブネットごとにタグを作成します。 OpsWorks スタックは、サブネット名をデフォルト名に追加します。たとえば、次のプライベートサブネットには [Name] が **`Private`** に設定されたタグがあり、OpsWorks では `10.0.0.1/24 us-east - 1b - Private` のように表示されます。

CloudFormation コンソールを使用して、わずか数ステップで VPC テンプレートを起動できます。以下の手順では、サンプルテンプレートを使用して、米国東部 (バージニア北部) リージョンに VPC を作成します。テンプレートを使用してその他のリージョンに VPC を作成する方法については、手順の後の注意を参照してください。

VPC を作成するには

1. CloudFormation コンソールを開き、[米国東部 (バージニア北部)] リージョンを選択し、[スタックの作成] を選びます。
2. [Select Template] ページで、[Upload a template] を選択します。OpsWorksVPCtemplates.zip ファイル でダウンロードした`OpsWorksinVPC.template`ファイルを閲覧し、続行を選択します。



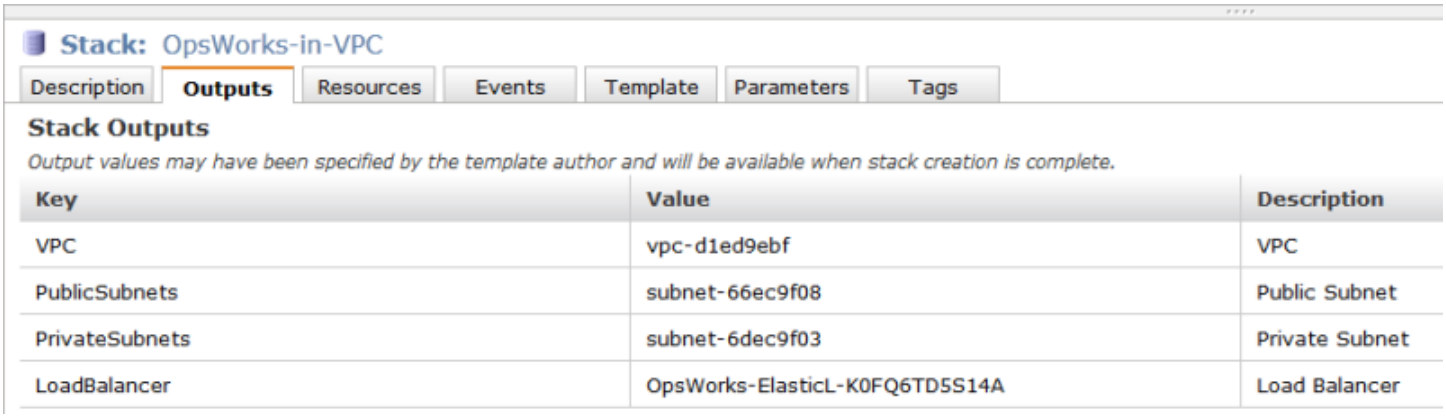
このスタックを起動するには、AWS CloudFormation サンプルテンプレートを開き、 OpsWorks スタック VPC テンプレートを見つけ、起動スタックを選択します。

3. [Specify Parameters (パラメータを指定)] ページで、デフォルトの値をそのまま使用して、[Continue (続行)] を選択します。
4. [Add Tags] (タグの追加) ページで、[Key] (キー) を **Name** に、[Value] (値) を VPC 名に設定してタグを作成します。このタグを使用すると、スタックスタックの作成時に VPC OpsWorks を識別しやすくなります。
5. [Continue (続行)] を選択し、[Close (閉じる)] を選択して、スタックを起動します。

注意: 次のいずれかの方法で、その他のリージョンに VPC を作成できます。

- 「異なるリージョンでテンプレートを使用する」に移動し、適切なリージョンを選択し、OpsWorks スタック VPC テンプレートを見つけ、「スタックを起動する」を選択します。
- テンプレートファイルをシステムにコピーし、CloudFormation コンソールで適切なリージョンを選択し、[スタックの作成] ウィザードの [テンプレートを Amazon S3 へのアップロード] オプションを使用して、システムからテンプレートをアップロードします。

サンプルテンプレートには、スタックスタックの作成に必要な VPC、サブネット、ロードバランサー IDs OpsWorks を提供する出力が含まれています。 CloudFormation コンソールウィンドウの下部にある出力タブを選択すると、それらを表示できます。



スタックの更新

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

スタックの作成後、設定をいつでも更新できます。[Stack] (スタック) ページで、[Stack Settings] (スタックの設定) をクリックしてから [Edit] (編集) をクリックすると、[Settings] (設定) ページが表示されます。必要な変更を加えて [Save] をクリックします。

各設定は、「新しいスタックを作成する」に記載されているものと同じです。詳細については、このトピックを参照してください。ただし、以下の点に注意してください。

- リージョンまたは VPC ID を変更することはできません。
- スタックを VPC で実行している場合、各設定には VPC のサブネットが表示される [Default subnet] 設定が含まれます。スタックを VPC で実行していない場合、この設定には [Default Availability Zones] というラベルが付いており、リージョンのアベイラビリティーゾーンが表示されます。
- デフォルトのオペレーティングシステムを変更することはできますが、Windows スタックに Linux オペレーティングシステムを指定したり、Linux スタックに Windows オペレーティングシステムを指定したりすることはできません。

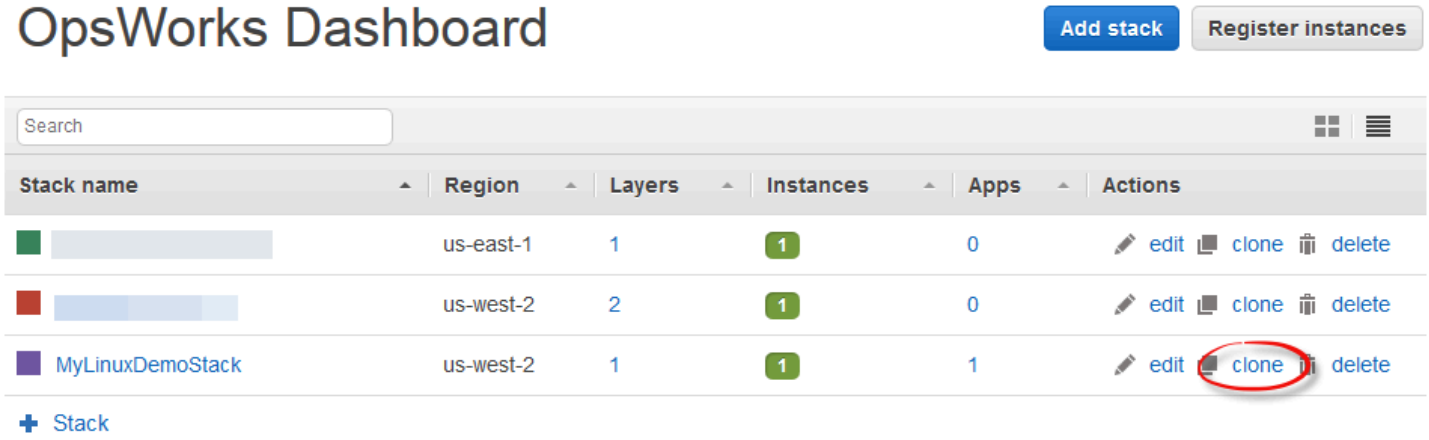
- [Hostname theme] や [Default SSH key] など、インスタンスのデフォルト設定を変更した場合、新しい値は作成した新しいインスタンスにのみ適用され、既存のインスタンスには適用されません。
- 名前を変更することで、コンソールに表示される名前が変更されます。 OpsWorks スタックがスタックを識別するために使用する基盤となる短縮名は変更されません。
- [Use OpsWorks security groups] を [Yes] から [No] に変更する場合は、レイヤーの組み込みセキュリティグループ以外に、1 つ以上のセキュリティグループを各レイヤーにあらかじめ追加しておく必要があります。詳細については、「OpsWorks レイヤーの構成を編集する」を参照してください。

  OpsWorks その後、スタックはすべてのレイヤーから組み込みのセキュリティグループを削除します。
- OpsWorks セキュリティグループの使用を「いいえ」から「はい」に変更した場合、 OpsWorks スタックは各レイヤーに適切な組み込みセキュリティグループを追加しますが、既存のセキュリティグループは削除しません。

スタックのクローン化

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

スタックの複数のコピーを作成すると便利な場合があります。たとえば、災害対策または予防措置として冗長性を追加したり、または新しいスタックの開始点として既存のスタックを使用したりした方がよいでしょう。最も簡単な方法は、ソーススタックのクローン化することです。 OpsWorks スタックダッシュボードで、クローンを作成するスタックの行のアクション列でクローンを選択し、スタックのクローンページを開きます。



初期状態では、クローンスタックの設定は、スタック名に「copy」という語が付加される点を除き、ソーススタックの設定とまったく同じです。これらの設定については、「新しいスタックを作成する」を参照してください。次の 2 つの追加オプション設定もあります。

アクセス許可

[all permissions] がオンの場合 (デフォルト)、ソーススタックのアクセス権限がクローンスタックに適用されます。

アプリケーション

ソーススタックにデプロイされるアプリケーションが表示されます。表示されている各アプリケーションの対応するチェックボックスがオンの場合 (デフォルト)、そのアプリケーションがクローンスタックにデプロイされます。

> **Note**
>
> 一つのリージョンのエンドポイントから別のリージョンのエンドポイントにスタックのクローンを作成できません。例えば、米国西部 (オレゴン) リージョン (us-west-2) から アジアパシフィックアジアパシフィック (ムンバイ) (ap-south-1) にスタックをクローン化できません。

設定を確定したら、スタックのクローンを選択します。 OpsWorks スタックは、ソーススタックのレイヤーと、オプションでそのアプリケーションとアクセス許可で構成される新しいスタックを作成します。レイヤーの設定は、ユーザーが行った変更が適用された元の設定と同じです。ただし、クローン化ではインスタンスは作成されません。クローンスタックの各レイヤーにインスタンスの適切なセットを追加し、インスタンスを起動する必要があります。スタックと同様に、クローンスタック

で通常の管理タスク (レイヤーの追加、削除、または変更、アプリケーションの追加およびデプロイなど) を実行できます。

クローンされたスタックを動作させるには、インスタンスを起動します。 OpsWorks スタックは、レイヤーメンバーシップに従って各インスタンスをセットアップおよび設定します。また、新しいスタックの場合と同様にアプリケーションをデプロイします。

OpsWorks スタックスタックコマンドの実行

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックには、スタックのインスタンスでさまざまなオペレーションを実行するために使用できる一連のスタックコマンドが用意されています。スタックコマンドを実行するには、[Stack] (スタック) ページで [Run Command] (コマンドの実行) をクリックします。該当するコマンドを選択し、任意のオプションを指定して、右下にあるコマンド名のラベルの付いたボタンをクリックします。

> **Note**
>
> OpsWorks スタックは、アプリケーションのデプロイを管理するために使用する一連のデプロイコマンドもサポートしています。詳細については、「アプリケーションのデプロイ」を参照してください。

任意のスタックに対して以下のスタックコマンドを実行できます。

カスタムクックブックの更新

インスタンスのカスタムクックブックを、リポジトリに保存されている最新バージョンに更新します。このコマンドではレシピを実行しません。更新されたレシピを実行するには、`Execute Recipes`、`Setup`、`Configure` のいずれかのスタックコマンドを使用するか、アプリケーショ

ンを再デプロイして、Deploy レシピを実行します。カスタムクックブックの詳細については、「クックブックとレシピ」を参照してください。

Execute Recipes

インスタンスに対して指定された一連のレシピを実行します。詳細については、「レシピを手動で実行する」を参照してください。

セットアップ

インスタンスの Setup レシピを実行します。

構成する

インスタンスの Configure レシピを実行します。

> **Note**
>
> [Setup] または [Configure] を使用してインスタンスでレシピを実行するには、インスタンスのレイヤーに対応するライフサイクルイベントに割り当てられている必要があります。詳細については、「レシピの実行」を参照してください。

Linux ベースのスタックでのみ、任意のスタックに対して以下のスタックコマンドを実行できます。

Install Dependencies

インスタンスのパッケージをインストールします。Chef 12 以降、このコマンドは使用できなくなります。

Update Dependencies

(Linux のみ。 Chef 12 以降、このコマンドは使用できません。) 定期的なオペレーティングシステム更新とパッケージ更新をインストールします。詳細はインスタンスのオペレーティングシステムによって異なります。詳細については、「セキュリティ更新の管理」を参照してください。

[Upgrade Operating System] コマンドを使用して、インスタンスを新しい Amazon Linux バージョンにアップグレードします。

オペレーティングシステムのアップグレード

(Linux のみ) インスタンスの Amazon Linux オペレーティングシステムを最新バージョンにアップグレードします。詳細については、「OpsWorks スタックオペレーティングシステム」を参照してください。

> **Important**
>
> [Upgrade Operating System] を実行した後で、Setup も実行することをお勧めします。これにより、サービスが正しく再開されます。

スタックコマンドには次のオプションがあります (一部は特定のコマンドにのみ表示されます)。

Comment

(オプション) 説明を付け加えたい場合のコメントを入力します。

Recipes to execute

(必須) この設定は、[Execute Recipes] コマンドを選択した場合にのみ表示されます。標準の *cookbook_name*::*recipe_name* 形式を使用して、実行するレシピを、カンマで区切って入力します。複数のレシピを指定すると、 OpsWorks スタックはリストされた順序でレシピを実行します。

Allow reboot

(オプション) この設定は Upgrade Operating System コマンドを選択した場合にのみ表示されます。デフォルト値は Yes で、アップグレードのインストール後にインスタンスを再起動するように OpsWorks スタックに指示します。

Custom Chef JSON

(オプション) [Advanced] を選択してこのオプションを表示すると、スタック設定およびデプロイ属性に組み込まれるカスタム JSON 属性を指定できます。

インスタンス

(オプション) コマンドを実行するインスタンスを指定します。オンラインインスタンスはすべてデフォルトで選択されています。インスタンスのサブセットに対してコマンドを実行するには、適切な レイヤーまたはインスタンスを選択します。

> **Note**
>
> [Deployment and Commands] ページに、実行しなかった execute_recipes 実行のリストが表示される場合があります。一般に、ユーザーに対して SSH アクセス許可を付与または削除するなど、アクセス許可を変更した場合に、このような状態が生じます。このような変更を

行うと、 OpsWorks Stacks は execute_recipes を使用してインスタンスのアクセス許可を更新します。

カスタム JSON の使用

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

いくつかの OpsWorks スタックアクションでは、カスタム JSON を指定できます。カスタム JSON OpsWorks は スタックがインスタンスにインストールし、レシピで使用できます。

次の状況で、カスタム JSON を指定できます。

- スタックを作成、更新、またはクローン化する

  AWS OpsWorks Stacks は、後続のすべての lifecycle events (ライフサイクルイベント) に対するすべてのインスタンスに、カスタム JSON をインストールします。
- デプロイメントコマンドまたはスタックコマンドを実行する

  AWS OpsWorks Stacks は、そのイベントのためにだけ、インスタンスにカスタム JSON を渡します。

カスタム JSON は、有効な JSON オブジェクトで表され、フォーマットされている必要があります。例えば、次のようになります。

```
{
  "att1": "value1",
  "att2": "value2"
  ...
}
```

OpsWorks スタックは次の場所にカスタム JSON を保存します。

Linux インスタンスの場合:

- `/var/chef/runs/run-ID/attribs.json`
- `/var/chef/runs/run-ID/nodes/hostname.json`

Windows インスタンスの場合:

- `drive:\chef\runs\run-ID\attribs.json`
- `drive:\chef\runs\run-ID\nodes\hostname.json`

> **Note**
>
> Linux 用 Chef 11.10 以前のバージョンでは、Linux インスタンスの以下のパスにカスタム JSON があります。Windows インスタンスは使用できず、`attribs.json` ファイルはありません。ログは JSON と同じフォルダまたはディレクトリに保存されます。Linux 用 Chef 11.10 以前のバージョンにおけるカスタム JSON の詳細については、「カスタム JSON を使用した属性の上書き」と「Chef ログ」を参照してください。
> `/var/lib/aws/opsworks/chef/hostname.json`

前述のパスで、*run-ID* はインスタンスでの Chef の実行ごとに OpsWorks スタックが割り当てる一意の ID で、*hostname* はインスタンスのホスト名です。

Chef レシピからカスタム JSON にアクセスするには、標準の Chef node 構文を使用します。

たとえば、デプロイするアプリケーション用のシンプルな設定 (アプリケーションが最初に表示されるかどうか、アプリケーションの初期の前景色と背景色など) を定義するとします。JSON オブジェクトを使用して、次のようにこれらのアプリケーション設定を定義するとします。

```
{
  "state": "visible",
  "colors": {
    "foreground": "light-blue",
    "background": "dark-gray"
  }
}
```

スタック用のカスタム JSON を宣言するには:

1. スタックのページで、[Stack Settings]、[Edit] の順番に選択します。
2. [Custom Chef JSON] に JSON オブジェクトを入力し、[Save] を選択します。

> **Note**
>
> カスタム JSON は、デプロイ、レイヤー、およびスタックの各レベルで宣言できます。いくつかのカスタム JSON を個別のデプロイまたはレイヤーのみに対して表示する場合は、この操作を行うことをお勧めします。たとえば、レイヤーレベルで宣言されたカスタム JSON で、スタックレベルで宣言されたカスタム JSON を一時的に上書きしたいとします。複数のレベルでカスタム JSON を宣言する場合、デプロイレベルで宣言されたカスタム JSON は、レイヤーレベルおよびスタックレベルの両方で宣言されたカスタム JSON より優先されます。レイヤーレベルで宣言されたカスタム JSON は、スタックレベルでのみ宣言されたカスタム JSON より優先されます。
> OpsWorks スタックコンソールを使用してデプロイのカスタム JSON を指定するには、アプリケーションのデプロイページでアドバンスト を選択します。[Custom Chef JSON] ボックスにカスタム JSON を入力し、[Save] を選択します。
> OpsWorks スタックコンソールを使用してレイヤーのカスタム JSON を指定するには、レイヤーページで、目的のレイヤーの設定を選択します。[Custom JSON] ボックスにカスタム JSON を入力し、[Save] を選択します。
> 詳細については、「OpsWorks レイヤーの構成を編集する」および「アプリケーションのデプロイ」を参照してください。

デプロイまたはスタックコマンドを実行すると、レシピは標準の Chef node 構文を使用してこれらのカスタムの値を取得できます。これにより、カスタム JSON オブジェクトの階層に直接マッピングされます。たとえば、次のレシピコードは、前述のカスタム JSON 値に関するメッセージを Chef ログに書き込みます。

```
Chef::Log.info("********** The app's initial state is '#{node['state']}' **********")
Chef::Log.info("********** The app's initial foreground color is '#{node['colors']
['foreground']}' **********")
Chef::Log.info("********** The app's initial background color is '#{node['colors']
['background']}' **********")
```

このアプローチは、レシピにデータを渡すのに役立ちます。 OpsWorks スタックはそのデータをインスタンスに追加し、 レシピは標準の Chef node構文を使用してデータを取得できます。

> **Note**
>
> カスタム JSON は 120 KB に制限されています。さらに容量が必要な場合は、Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) でデータの一部を保存することをお勧めします。カスタムレシピは、AWS CLI または AWS SDK for Ruby を使用して、Amazon S3 バケットからインスタンスにデータをダウンロードできます。

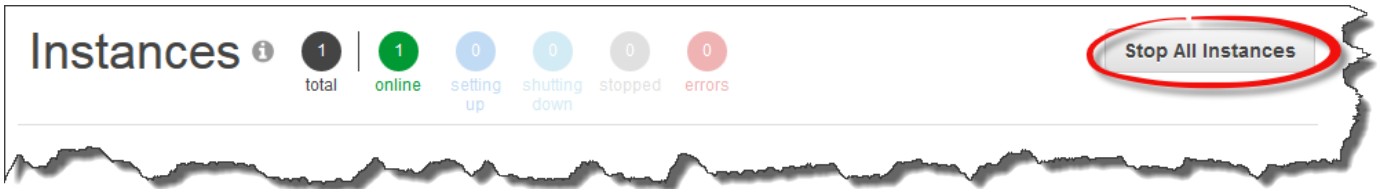
スタックの削除

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

スタックが不要になった場合には、それを削除することができます。空のスタックのみ削除できます。最初にスタック内のすべてのインスタンス、アプリ、レイヤーを削除する必要があります。

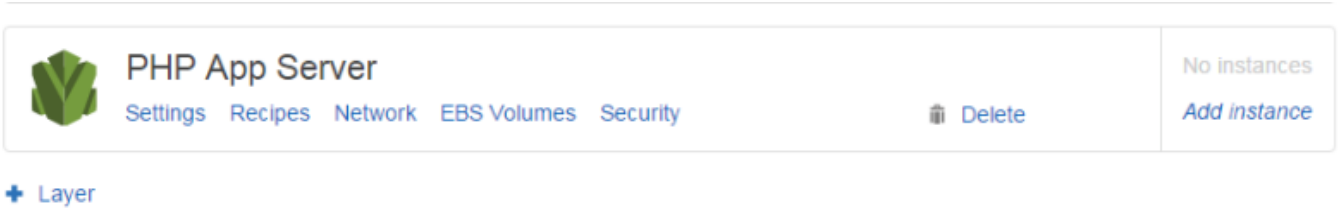
スタックを削除するには

1. OpsWorks スタックダッシュボードで、シャットダウンして削除するスタックを選択します。
2. ナビゲーションペインで、[インスタンス] を選択してください。
3. [Instances] ページで [Stop all Instances] を選択します。

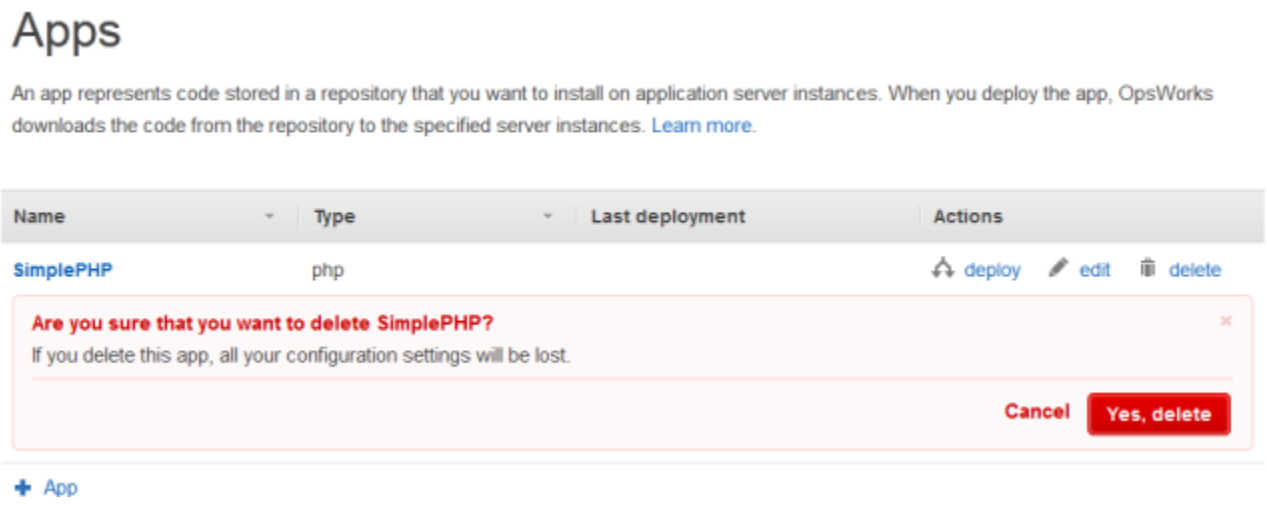


4. インスタンスが停止したら、レイヤーの各インスタンスで [Actions (アクション) 列の[delete] (削除) を選択します。確認を求められたら、[Yes, Delete] を選択します。

5. すべてのインスタンスが削除されたら、ナビゲーションペインで [Layers] (レイヤー) を選択します。
6. [Layers] (レイヤー) ページでスタックの各レイヤーに対して [delete] (削除) を選択します。確認プロンプトで、[Yes, Delete] を選択します。

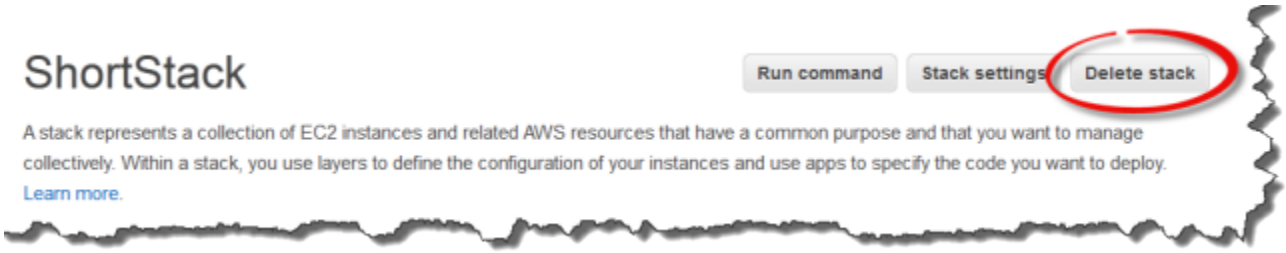


7. すべてのレイヤーが削除されたら、ナビゲーションペインで [Apps] を選択します。
8. [Apps] (アプリケーション) ページでスタックの各アプリに対して [Actions] (アクション) 列の [delete] (削除) を選択します。確認プロンプトで、[Yes, Delete] を選択します。



9. すべてのアプリが削除されたら、ナビゲーションペインで [Stack] を選択します。

10. スタックページで、[Delete stack] を選択します。確認プロンプトで、[Yes, Delete] を選択します。



スタックで使用される他の AWS リソースの削除

OpsWorks スタックで他の AWS リソースを使用して、スタックを作成および管理します。スタックを削除するときは、別のスタックで使用されておらず、スタック外のリソース OpsWorks で使用されていない場合は、スタックで と連携したリソースも削除することを検討してください。以下は、スタックで使用した外部 AWS リソースをクリーンアップする推奨理由です。

- 外部 AWS リソースでは、引き続きアカウントに AWS 料金が発生する可能性があります。
- Amazon S3 バケットなどのリソースには、個人識別情報、機密情報あるいは秘密情報が含まれる場合があります。

> **Important**
>
> これらのリソースが他のスタックで使用されている場合は削除しないでください。IAM ロールとセキュリティグループはグローバルなものなので、他のリージョンのスタックはこれらの同じリソースを使用している可能性があります。

以下は、スタックが使用する他の AWS リソースと、それらを削除する方法に関する情報へのリンクです。

サービスロールとインスタンスプロファイル

スタックを作成するときは、スタックがユーザーに代わって許可されたリソースを作成するために使用する IAM OpsWorks ロールとインスタンスプロファイルを指定します。 OpsWorks 既存のリソースを選択しない場合は、 によってロールとインスタンスプロファイルが作成されます。がユーザーに代わって OpsWorks 作成するロールとインスタンスプロファイルには`aws-opsworks-ec2-role`、それぞれ `aws-opsworks-service-role`と という名前が付けられま

す。アカウントの他のスタックが IAM ロールとインスタンスプロファイルを使用していない場合、これらのリソースを安全に削除することができます。IAM ロールとインスタンスプロファイルを削除する方法については、IAM ユーザーガイドの「Deleting Roles or Instance Profiles」を参照してください。

セキュリティグループ

OpsWorks スタックでは、ユーザー定義のセキュリティグループをレイヤーレベルで指定できます。Amazon EC2 コンソールまたは API を使用してセキュリティグループを作成します。セキュリティグループがグローバルであるため、他のリージョンのスタックとレイヤーで同じセキュリティグループを使用できます。セキュリティグループは、他の AWS リソースで使用されていない場合は削除できます。セキュリティグループを削除する方法の詳細については、Amazon EC2 ユーザーガイド」の「セキュリティグループを削除する」を参照してください。

Amazon EBS ボリューム

OpsWorks スタックでは、EBS ボリュームをレイヤーレベルで追加し、レイヤー内のインスタンスにアタッチします。Amazon EC2 サービスコンソールまたは API を使用して EBS ボリュームを作成し、レイヤーレベルで OpsWorks スタックインスタンスにアタッチします。EBS ボリュームは、アベイラビリティーゾーンに固有です。特定のリージョンと可用性ゾーンのスタックで EBS ボリュームを使用していない場合は、ボリュームを削除できます。Amazon EC2 ボリュームを削除する方法の詳細については、「Amazon EC2 User Guide」(Amazon EC2 ユーザーガイド) の「Deleting an Amazon EBS Volume」(Amazon EC2 ボリュームの削除) を参照してください。

Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) の バケット

OpsWorks スタックでは、以下に対して Amazon S3 バケットを使用できます。Amazon S3 バケットに配信されるコンテンツには、カスタマーコンテンツが含まれている場合があります。機密データの削除の詳細については、「S3 バケットを空にする方法」または「S3 バケットを削除する方法」を参照してください。

- アプリケーションコードの保管
- クックブックとレシピの保管
- スタックで CloudTrail ログ記録を有効にしている場合の CloudTrail OpsWorks ログ
- スタックで有効にした場合の Amazon CloudWatch Logs OpsWorks ストリーム

Elastic IP アドレス

OpsWorks スタックに Elastic IP アドレスを登録し、Elastic IP アドレスが不要になった場合は、Elastic IP アドレスを解放できます。

Elastic Load Balancing ロードバランサー

スタック内のレイヤーで使用していた Elastic Load Balancing クラシックロードバランサーが不要になった場合は、削除することができます。詳細については、『Classic Load Balancer のユーザーガイド』の「ロードバランサーの削除」を参照してください。

Amazon Relational Database Service (Amazon RDS) インスタンス

Amazon RDS データベース (DB) インスタンスを OpsWorks スタックに登録し、不要になった場合は、DB インスタンスを削除できます。DB インスタンスを削除する方法の詳細については、「Amazon RDS User Guide」(Amazon RDS ユーザーガイド) の「Deleting a DB Instance(DB インスタンスの削除) を参照してください。

Amazon Elastic Container Service (Amazon ECS) クラスター

スタックに ECS クラスターレイヤーが含まれていて、レイヤーに登録されている ECS クラスターを使用していない場合は、ECS クラスターを削除できます。ECS クラスターを削除する方法の詳細については、「Amazon ECS Developer Guide」(Amazon ECS 開発者ガイド) の「Deleting a Cluster」(クラスターの削除) を参照してください。

レイヤー

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

各スタックには、ロードバランサーや一連のアプリケーションサーバーなどのスタックコンポーネントを表すレイヤーが少なくとも 1 つ含まれます。

OpsWorks スタックレイヤーを使用する場合は、次の点に注意してください。

- スタックの各レイヤーにはインスタンスが少なくとも 1 つ必要です。オプションで複数のインスタンスを指定することもできます。
- スタックの各インスタンスは、登録されたインスタンスを除いて、少なくとも 1 つのレイヤーのメンバーとなっている必要があります。

SSH キーやホスト名などの基本的な設定を除き、インスタンスを直接設定することはできません。適切なレイヤーを作成および設定し、そのレイヤーにインスタンスを追加する必要があります。

Amazon EC2 インスタンスは、オプションで複数レイヤーのメンバーになることができます。この場合、 OpsWorks Stacks はレシピを実行して、インスタンスの各レイヤーに対してパッケージのインストールと設定、アプリケーションのデプロイなどを行います。

複数のレイヤーにインスタンスを割り当てることには次のような利点があります。

- 単一のインスタンスでデータベースサーバーやロードバランサーをホストして費用を削減できる。
- 管理用アプリケーションサーバーの 1 つを使用できる。

  カスタム管理用レイヤーを作成し、アプリケーションサーバーインスタンスの 1 つを追加します。管理用レイヤーのレシピにより、追加したアプリケーションサーバーインスタンスが管理タスクを実行するように設定され、必要に応じて追加のソフトウェアがインストールされます。その他のアプリケーションサーバーインスタンスは単なるアプリケーションサーバーです。

このセクションでは、レイヤーを操作する方法について説明します。

トピック

- OpsWorks レイヤーの基本
- Elastic ロードバランシングレイヤー
- Amazon RDS サービスレイヤー
- ECS クラスターレイヤー
- カスタム OpsWorks スタックレイヤー
- レイヤーごとのオペレーティングシステムパッケージのインストール

OpsWorks レイヤーの基本

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS

re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このセクションでは、すべての OpsWorks スタックレイヤーに共通のオペレーションを実行する方法について説明します。

トピック

- OpsWorks レイヤーの作成
- OpsWorks レイヤーの構成を編集する
- 自動ヒーリングを使用した、失敗したインスタンスの置き換え
- OpsWorks レイヤーの削除

OpsWorks レイヤーの作成

Important

この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

新しいスタックを作成すると、次のページが表示されます。

最初の OpsWorks レイヤーを追加するには

1. [Add a Layer] (レイヤーの追加) をクリックします。
2. [Add Layer] (レイヤーの追加) ページで Layer の設定オプションを確認し、適切なレイヤー選択します。
3. レイヤーを適切に設定し、[Add Layer] (レイヤーの追加) をクリックしてスタックに追加します。次のセクションでは、さまざまなレイヤーの設定方法について説明します。

> **Note**
>
> [Add Layer] (レイヤーの追加) ページには、レイヤーごとによく使用される設定のみが表示されます。レイヤーを編集することで、その他の設定を指定できます。

4. インスタンスをレイヤーに追加して起動します。

> **Note**
>
> インスタンスが複数のレイヤーのメンバーである場合は、インスタンスを起動する前にすべてのレイヤーに追加する必要があります。オンラインインスタンスをレイヤーに追加することはできません。

レイヤーを追加するには、[Layers] (レイヤー) ページを開いて [+ Layer] をクリックし、[Add Layer] (レイヤーの追加) ページを開きます。

インスタンスを起動すると、 OpsWorks Stacks はインスタンスの各レイヤーの Setup レシピと Deploy レシピを自動的に実行して、適切なパッケージをインストールして設定し、適切なアプリケーションをデプロイします。Layer のセットアップと設定プロセスは、カスタムレシピを適切なライフサイクルイベントに割り当てるなど、さまざまな方法でカスタマイズできます。 OpsWorks スタックは、各イベントの標準レシピの後にカスタムレシピを実行します。詳細については、「クックブックとレシピ」を参照してください。

以下のレイヤー固有のセクションでは、 がさまざまな OpsWorks スタックレイヤーのステップ 2 と 3 を処理する方法について説明します。インスタンスの追加方法の詳細については、「レイヤーへのインスタンスの追加」を参照してください。

OpsWorks レイヤーの構成を編集する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

レイヤーの作成後、レイヤーの設定のほとんどはいつでも変更することができます (AWS のリージョンなどプロパティによっては変更できないものもあります)。レイヤーを編集すると、[Add Layer] (レイヤーの追加) ページにない設定にもアクセスできます。この設定は、新しい設定を保存するとすぐに有効になります。

OpsWorks レイヤーを編集するには

1. ナビゲーションペインで、[Layers] (レイヤー) をクリックします。
2. [Layers] (レイヤー) ページで、レイヤー名を選択して詳細ページを開きます。詳細ページには現在の設定が表示されます。

   > **Note**
   >
   > レイヤーの名前の下にあるいずれかの名前を選択すると、詳細ページの関連タブに直接移動します。

3. [Edit] をクリックし、[General Settings]、[Recipes]、[Network]、[EBS Volumes]、[Security] の中から適切なタブを選択します。

次のセクションでは、すべてのレイヤーで使用できるさまざまなタブの設定について説明します。一部のレイヤーには、レイヤー固有の追加設定があり、ページの上部に表示されます。さらに、注記のとおり、一部の設定は Linux ベースのスタックでのみ使用できます。

トピック

- 全般設定
- recipe

- Network
- EBS ボリューム
- セキュリティ
- CloudWatch Logs
- タグ

全般設定

すべてのレイヤーは次のように設定されます。

Auto healing enabled

レイヤーのインスタンスに対して自動ヒールが有効かどうかを示します。デフォルトの設定は、[Yes] です。

Custom JSON

このレイヤーのすべてのインスタンスで Chef レシピに渡される JSON 形式のデータ。たとえば、これを使用してデータを独自のレシピに渡すことができます。詳細については、「カスタム JSON の使用」を参照してください。

> **Note**
>
> カスタム JSON は、デプロイ、レイヤー、およびスタックの各レベルで宣言できます。一部のカスタム JSON を、スタック全体または個別のデプロイでのみ表示する場合に、この操作を実行することをお勧めします。または、たとえば、デプロイレベルで宣言されたカスタム JSON で、レイヤーレベルで宣言されたカスタム JSON を一時的に上書きしたいとします。複数のレベルでカスタム JSON を宣言する場合、デプロイレベルで宣言されたカスタム JSON は、レイヤーレベルおよびスタックレベルの両方で宣言されたカスタム JSON より優先されます。レイヤーレベルで宣言されたカスタム JSON は、スタックレベルでのみ宣言されたカスタム JSON より優先されます。
> OpsWorks スタックコンソールを使用してデプロイのカスタム JSON を指定するには、アプリのデプロイページでアドバンスト を選択します。[Custom Chef JSON] ボックスにカスタム JSON を入力し、[Save] を選択します。
> OpsWorks スタックコンソールを使用してスタックのカスタム JSON を指定するには、スタック設定ページでカスタム JSON をカスタム JSON ボックスに入力し、保存を選択します。

詳細については、「カスタム JSON の使用」および「アプリケーションのデプロイ」を参照してください。

Instance shutdown timeout

Shutdown ライフサイクルイベントをトリガーしてから Amazon EC2 インスタンスを停止または終了するまでの OpsWorks スタックの待機時間 (秒単位) を指定します。デフォルトの設定は 120 秒です。設定の目的は、インスタンスを終了する前に、インスタンスの Shutdown レシピに対して、タスクを完了するための十分な時間を与えることです。カスタム Shutdown レシピでさらに時間が必要な場合は、それに応じて設定を変更します。インスタンスのシャットダウンの詳細については、「インスタンスの停止」を参照してください。

このタブのその他の設定は、レイヤーの種類によって異なり、レイヤーの [Add Layer] (レイヤーの追加) ページの設定と同じです。

recipe

[Recipes] タブには次の設定が含まれます。

[Custom Chef recipes]

レイヤーのライフサイクルイベントにカスタム Chef レシピを割り当てることができます。詳細については、「レシピの実行」を参照してください。

Network

[Network] タブには次の設定が含まれます。

エラスティックロードバランシング

あらゆる Layer に Elastic Load Balancing のロードバランサーをアタッチできます。 OpsWorks その後、スタックはレイヤーのオンラインインスタンスをロードバランサーに自動的に登録し、オフラインになると登録を解除します。ロードバランサーの接続ドレイニング機能を有効にしている場合は、 OpsWorks スタックがサポートするかどうかを指定できます。詳細については、「Elastic ロードバランシングレイヤー」を参照してください。

[Automatically Assign IP Addresses]

OpsWorks スタックがレイヤーのインスタンスにパブリック IP アドレスと Elastic IP アドレスのどちらを自動的に割り当てるかを制御できます。このオプションを有効にすると、次のようになります。

- instance store-backed インスタンスの場合、 OpsWorks スタックはインスタンスが起動されるたびにアドレスを自動的に割り当てます。
- Amazon EBS-backed インスタンスの場合、インスタンスが初めて起動されると、 OpsWorks スタックは自動的にアドレスを割り当てます。
- インスタンスが複数のレイヤーに属している場合、少なくとも 1 つのレイヤーの自動割り当てを有効にしている場合、 OpsWorks Stacks はアドレスを自動的に割り当てます。

> **Note**
>
> パブリック IP アドレスの自動割り当てを有効にすると、新しいインスタンスにのみ適用されます。 OpsWorks スタックは既存のインスタンスのパブリック IP アドレスを更新できません。

スタックを VPC で実行している場合、パブリック IP アドレスと Elastic IP アドレスを別個に設定できます。次の表はパブリック IP アドレスと Elastic IP アドレスが対話する方法を説明しています。

		Public IP addresses: Yes	Public IP addresses: No
Elastic IP addresses	Yes	Instances receive an Elastic IP address when they are started for the first time, or a public IP address if an Elastic IP cannot be assigned.	Instances receive an Elastic IP address when they are started for the first time.
	No	Instances receive a public IP address each time they are started.	Instances receive only a private IP address, which is not accessible from outside the VPC.

> **Note**
>
> インスタンスには、 スタックサービス、Linux OpsWorks パッケージリポジトリ、クックブックリポジトリと通信する方法が必要です。パブリック IP アドレスや Elastic IP アドレスを指定しない場合は、NAT など、レイヤーのインスタンスが外部サイトと通信する

ためのコンポーネントを VPC に含める必要があります。詳細については、「VPC でのスタックの実行」を参照してください。

スタックが VPC で実行されていない場合は、[Elastic IP addresses] のみを設定できます。

- Yes: インスタンスの初回起動時に、インスタンスに Elastic IP アドレスが割り当てられます。Elastic IP アドレスを割り当てることができない場合は、パブリック IP アドレスが割り当てられます。
- No: インスタンスを起動するたびに、パブリック IP アドレスが割り当てられます。

EBS ボリューム

[EBS Volumes] タブには、次の設定が含まれます。

EBS 最適化インスタンス

レイヤーのインスタンスを Amazon Elastic Block Store (Amazon EBS) 用に最適化する必要があるかどうか。詳細については、「Amazon EBS 最適化インスタンス」を参照してください。

Additional EBS Volumes

(Linux のみ) Amazon EBS volumes (Amazon EBS ボリューム) をレイヤーのインスタンスに追加、またはレイヤーのインスタンスから削除することができます。インスタンスを起動すると、OpsWorks スタックによってボリュームが自動的に作成され、インスタンスにアタッチされます。スタックの EBS ボリュームを管理するには、[Resources] ページを使用できます。詳細については、「リソース管理」を参照してください。

- [Mount point] (マウントポイント) - (必須) EBS ボリュームをマウントするマウントポイントまたはディレクトリを指定します。
- [# Disks (# Disks)] - (オプション) RAID 配列を指定した場合は、配列のディスク数を指定します。

  各 RAID レベルのディスク数はデフォルトの値に設定されていますが、リストから数を選択してディスク数を増やすことも可能です。
- [Size total (GiB)] (合計サイズ (GiB)) - (必須) ボリュームのサイズ (GiB 単位) を指定します。

  RAID 配列の場合、この設定は各ディスクのサイズではなく配列の合計サイズを指定します。

  次の表は、各ボリュームタイプで許容される最小および最大ボリュームサイズをまとめたものです。

ボリュームタイプ	最小サイズ (GiB)	最大サイズ (GiB)
マグネティック	1	1024
プロビジョンド IOPS (SSD)	4	16384
汎用 (SSD)	1	16384
スループット最適化 (HDD)	500	16384
Cold HDD	500	16384

- [Volume Type] (ボリュームタイプ) - (オプション) マグネティック、汎用 SSD、スループット最適化 HDD、Cold HDD、PIOPS ボリュームのいずれを作成するかどうかを指定します。

  デフォルト値は Magnetic です。
- [Encrypted] (暗号化) - (オプション) EBS ボリュームのコンテンツを暗号化するかどうかを指定します。
- [IOPS per disk] - (プロビジョンド IOPS SSD および汎用 SSD ボリュームに必須) プロビジョンド IOPS SSD) および汎用 SSD ボリュームを指定する場合、[IOPS per disk] も指定する必要があります。

  プロビジョンド IOPS ボリュームの場合、ボリュームの作成時に IOPS を指定できます。要求されたボリュームサイズに対してプロビジョニングされる IOPS の比率は最大 30 です (言い換えると、3000 IOPS のボリュームには少なくとも 100 GiB のサイズが必要です)。汎用 (SSD) ボリュームタイプの基準 IOPS はボリュームサイズの 3 倍で、最大 10000 IOPS を持つことができ、30 分間で 3000 IOPS までバースト可能です。

ボリュームをレイヤーに追加するか、レイヤーから削除する場合は、次の点に注意してください。

- ボリュームを追加すると、すべての新しいインスタンスに新しいボリュームが追加されますが、OpsWorks スタックは既存のインスタンスを更新しません。
- ボリュームを削除する場合、新しいインスタンスにのみ適用されます。既存のインスタンスのボリュームは削除されません。

マウントポイントの指定

任意のマウントポイントを指定することができます。ただし、一部のマウントポイントは OpsWorks スタックまたは Amazon EC2 用に予約されており、Amazon EBS ボリュームには使用しないでください。/home や /etc などの一般的な Linux システムフォルダは使用しないでください。

以下のマウントポイントは OpsWorks 、 スタックで使用するために予約されています。

- /srv/www
- /var/log/apache2 (Ubuntu)
- /var/log/httpd (Amazon Linux)
- /var/log/mysql
- /var/www

autofs (自動マウントデーモン) は、インスタンスの起動または再起動時に /media/ephemeral0 のようなエフェメラルデバイスマウントポイントを使用してマウントをバインドします。このオペレーションは、Amazon EBS ボリュームがマウントされる前に実行されます。Amazon EBS ボリュームのマウントポイントが autofs と競合しないようにするため、エフェメラルデバイスマウントポイントは指定しないでください。使用されるエフェメラルデバイスマウントポイントは、特定のインスタンスのタイプおよびインスタンスが、インスタンスストアまたは Amazon EBS のどちらかにバックアップされたかによって決まります。autofs との競合を避けるため、次を実行します。

- 特定のインスタンスタイプのエフェメラルデバイスマウントポイントと、使用するバッキングストアを確認します。
- Amazon EBS でバックアップされたインスタンスに切り替えると、インスタンスストアでバックアップされるインスタンスで動作するマウントポイントが autofs と競合する可能性があり、またその逆の場合もあるので注意してください。

> **Note**
>
> インスタンスストアのブロックデバイスマッピングを変更する場合は、カスタム AMI を作成することができます。詳細については、「Amazon EC2 インスタンスストア」を参照してください。 OpsWorks スタックのカスタム AMI を作成する方法の詳細については、「」を参照してくださいカスタム AMI の使用。

次の例は、ボリュームのマウントポイントが autofs と競合しないよう、どのようにカスタムレシピを使用できるかを示しています。特定のユースケースに応じて適応してください。

マウントポイントの競合を回避するには

1. Amazon EBS ボリュームを任意のレイヤーに割り当てます。ただし、/mnt/workspace など、autofs と競合しないマウントポイントを使用します。
2. Amazon EBS ボリュームにアプリケーションディレクトリと、/srv/www/ からそのディレクトリへのリンクを作成する、以下のカスタムレシピを実装します。カスタムレシピの実装方法の詳細については、「クックブックとレシピ」と「OpsWorks スタックのカスタマイズ」を参照してください。

```
mount_point = node['ebs']['raids']['/dev/md0']['mount_point'] rescue nil

if mount_point
  node[:deploy].each do |application, deploy|
    directory "#{mount_point}/#{application}" do
      owner deploy[:user]
      group deploy[:group]
      mode 0770
      recursive true
    end

    link "/srv/www/#{application}" do
      to "#{mount_point}/#{application}"
    end
  end
end
```

3. 「depends 'deploy'」行をカスタムクックブックの metadata.rb ファイルに追加します。
4. このレシピをレイヤーの Setup イベントに割り当てます。

セキュリティ

[Security] タブには次の設定が含まれます。

セキュリティグループ

レイヤーには、セキュリティグループを少なくとも 1 つ関連付ける必要があります。スタックを作成または更新するときにセキュリティグループを関連付ける方法を指定します。 OpsWorks スタックには、標準の組み込みセキュリティグループのセットが用意されています。

- デフォルトのオプションは、 OpsWorks スタックが適切な組み込みセキュリティグループを各レイヤーに自動的に関連付けることです。
- 組み込みセキュリティグループが自動的に関連付けされないように設定し、レイヤーの作成時にカスタムセキュリティグループを各レイヤーに関連付けることも可能です。

セキュリティグループの詳細については、「セキュリティグループの使用」を参照してください。

レイヤーの作成後、Security Groups を使い、[Custom security groups] リストからセキュリティグループを選択してレイヤーに追加することができます。セキュリティグループをレイヤーに追加すると、 OpsWorks Stacks はそれをすべての新しいインスタンスに追加します。(再起動されたインスタンスストアインスタンスは新しいインスタンスとして起動されるため、新しいセキュリティグループもあります)。 OpsWorks スタックは、オンラインインスタンスにセキュリティグループを追加しません。

次のように、[x] をクリックして既存のセキュリティグループを削除することができます。

- OpsWorks スタックに組み込みセキュリティグループを自動的に関連付けることを選択した場合は、x をクリックして以前に追加したカスタムセキュリティグループを削除できますが、組み込みグループを削除することはできません。
- 自動的に組み込みセキュリティグループが関連付けられないように設定した場合は、元のセキュリティグループも含め、任意の既存のセキュリティグループを削除することができます。ただし、レイヤーにはセキュリティグループを少なくとも 1 つ関連付けておく必要があります。

レイヤーからセキュリティグループを削除した後、 OpsWorks スタックは新しいインスタンスまたは再起動されたインスタンスに追加しません。 OpsWorks スタックはオンラインインスタンスからセキュリティグループを削除しません。

> **Note**
>
> スタックが VPC で実行されている場合は、Amazon EC2 コンソール、API、または CLI を使用して、オンラインインスタンスのセキュリティグループを追加または削除できま

す。ただし、このセキュリティグループは OpsWorks スタックコンソールに表示されません。セキュリティグループを削除する場合、Amazon EC2 も使用する必要があります。詳細については、「セキュリティグループ」を参照してください。

次の点に注意してください。

- より制限の厳しいセキュリティグループを追加しても、組み込みセキュリティグループのポートアクセスの設定は制限されません。複数のセキュリティグループがある場合、Amazon EC2 は最も制限の緩い設定を使用します。
- 組み込みセキュリティグループの設定は変更しないでください。スタックを作成すると、OpsWorks スタックは組み込みのセキュリティグループの設定を上書きするため、次回スタックを作成するときに行った変更は失われます。

より制限が厳しい設定のセキュリティグループをレイヤーに使用する必要がある場合は、次のステップに従います。

1. 適切な設定のカスタムセキュリティグループを作成し、適切なレイヤーに追加します。

   カスタム設定が必要なレイヤーが 1 つだけの場合も、スタックの各レイヤーに組み込みセキュリティグループの他にセキュリティグループを少なくとも 1 つ追加する必要があります。
2. スタックの設定を編集し、[Use OpsWorks security groups] の設定を [No] に切り替えます。

   OpsWorks スタックは、すべてのレイヤーから組み込みのセキュリティグループを自動的に削除します。

セキュリティグループの詳細については、「Amazon EC2 セキュリティグループ」を参照してください。

EC2 インスタンスプロファイル

レイヤーのインスタンスの EC2 プロファイルを変更することができます。詳細については、「EC2 インスタンスで実行するアプリケーションに対するアクセス許可の指定」を参照してください。

CloudWatch Logs

[CloudWatch Logs] (CloudWatch ログ) タブでは、Amazon CloudWatch Logs を有効または無効にできます。CloudWatch Logs の統合は、Chef 11.10、Chef 12 Linux ベースのスタックで動作します。CloudWatch Logs の統合の有効化、および CloudWatch Logs コンソールで管理するログの指定

の詳細については、「スタックでの Amazon CloudWatch Logs OpsWorks の使用」を参照してください。

タグ

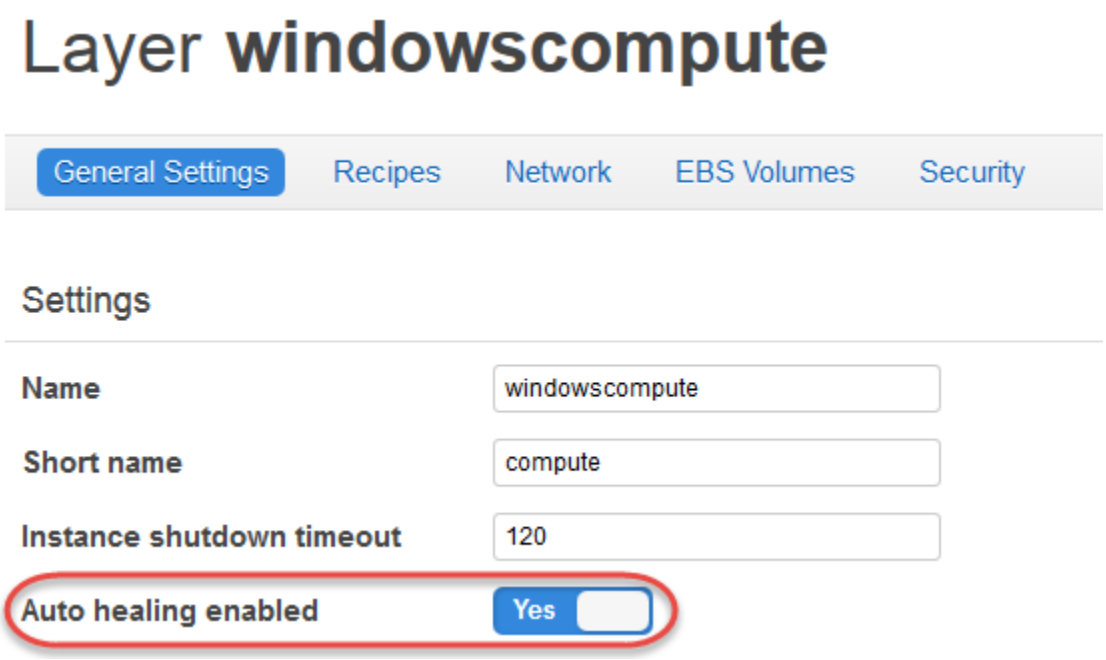
[Tags] タブでは、レイヤーにコスト配分タグを適用することができます。タグを追加したら、 AWS Billing and Cost Management コンソールでアクティブ化できます。タグを作成する場合、タグ付けされた構造内すべてのリソースにタグを適用することになります。例えば、あるレイヤーにタグを適用すると、そのレイヤーのすべてのインスタンス、Amazon EBS ボリューム、および Elastic Load Balancing ロードバランサーにそのタグを適用することになります。タグをアクティブ化し、それらを使用して OpsWorks スタックリソースのコストを追跡および管理する方法の詳細については、請求情報とコスト管理ユーザーガイドの「コスト配分タグの使用」と「ユーザー定義のコスト配分タグのアクティブ化」を参照してください。 OpsWorks スタックへのタグ付けの詳細については、タグを参照してください。

自動ヒーリングを使用した、失敗したインスタンスの置き換え

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

すべてのインスタンスには、 サービスと定期的に通信する OpsWorks スタックエージェントがあります。 OpsWorks スタックは、その通信を使用してインスタンスの状態をモニタリングします。エージェントが約 5 分以上サービスと通信しない場合、 OpsWorks スタックはインスタンスが失敗したと見なします。

自動ヒーリングはレイヤーレベルで設定されます。次のスクリーンショットにあるように、レイヤー設定を編集することで自動ヒーリングの設定を変更できます。



> **Note**
>
> インスタンスは複数のレイヤーのメンバーである場合があります。これらのレイヤーのいずれかで自動ヒーリングが無効になっている場合、 OpsWorks スタックは失敗したインスタンスをヒーリングしません。

デフォルト設定であるレイヤーの自動ヒーリングが有効になっている場合、OpsWorks スタックはレイヤーの障害が発生したインスタンスを次のように自動的に置き換えます。

Instance store-backed インスタンス

1. Amazon EC2 インスタンスを停止し、シャットダウンしていることを確認します。
2. ルートボリューム上のデータは削除されます。
3. 同じホスト名、構成、レイヤーメンバーシップの新しい Amazon EC2 インスタンスを作成します。
4. 古いインスタンスの最初の起動後にアタッチしたボリュームも含め、Amazon EBS ボリュームが再アタッチされます。
5. 新しいパブリックアドレスおよびプライベート IP アドレスが割り当てられます。
6. 古いインスタンスが Elastic IP アドレスに関連付けられている場合は、同じ IP アドレスが新しいインスタンスに関連付けられます。

Amazon EBS-backed インスタンス

1. Amazon EC2 インスタンスを停止して、停止したことを確認します。
2. EC2 インスタンスを起動します。

自動修復されたインスタンスがオンラインに戻ると、 OpsWorks スタックはスタックのすべてのインスタンスで Configure ライフサイクルイベントをトリガーします。関連するスタック設定およびデプロイ属性には、インスタンスのパブリック IP アドレスおよびプライベート IP アドレスが含まれます。カスタム Configure レシピは、ノードオブジェクトから新しい IP アドレスを取得できます。

レイヤーのインスタンスに Amazon EBS ボリュームを指定すると、 OpsWorks スタックは新しいボリュームを作成し、インスタンスの起動時に各インスタンスにアタッチします。後でインスタンスからボリュームをデタッチする場合は、[Resources] ページを使用します。

OpsWorks スタックがレイヤーのインスタンスの 1 つを自動ヒーリングすると、次の方法でボリュームを処理します。

- インスタンスが失敗したときにボリュームがインスタンスにアタッチされた場合、ボリュームとそのデータは保存され、 OpsWorks スタックはそれを新しいインスタンスにアタッチします。
- ボリュームが添付されていないインスタンスが失敗した場合は、レイヤーで指定されている設定を使用して OpsWorks スタックが新しい空のボリュームを作成し、新しいインスタンスにそのボリュームを添付します。

自動ヒーリングはすべてのレイヤーで自動的に有効になっていますが、レイヤーの全般設定を編集して無効にすることができます。

> **Important**
>
> 自動ヒーリングを可能にしている場合は、必ず次の手順に従います。
>
> - インスタンスを停止するには、 OpsWorks スタックコンソール、CLI、または API のみを使用します。
>
> その他の方法 (コンソールを使用するなど) でインスタンスを停止すると、 OpsWorks スタックはインスタンスが失敗したと見なして、自動ヒーリングを実行します。
> - インスタンスが自動ヒーリングされている場合、失われないようにデータを保存するには、Amazon EBS ボリュームを使用してデータを保存します。

自動ヒーリングが古い Amazon EC2 インスタンスを停止させると、Amazon EBS ボリュームに保存されていないデータはすべて損なわれます。Amazon EBS ボリュームは新しいインスタンスに再アタッチされるため、保存したあらゆるデータが失われることはありません。

OpsWorks レイヤーの削除

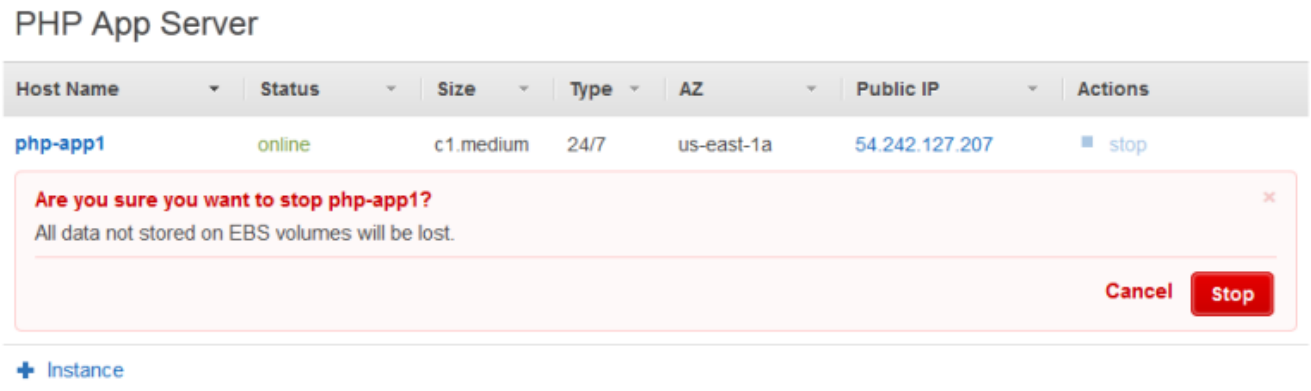
Important

この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post または AWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

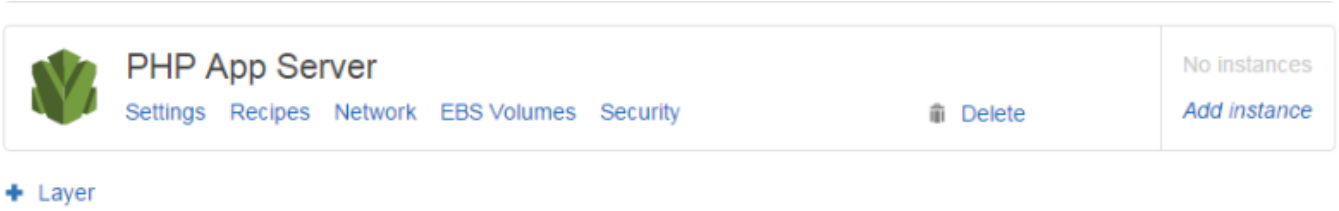
OpsWorks スタックレイヤーが不要になった場合は、スタックから削除できます。

OpsWorks レイヤーを削除するには

1. ナビゲーションペインの [Instances] をクリックします。
2. [Instances] (インスタンス) ページの削除したいレイヤーの名前にある、各インスタンスの [Actions] (アクション) 列内の [stop] (停止) をクリックします。



3. 各インスタンスの停止後、[delete] (削除) をクリックしてレイヤーから削除します。
4. ナビゲーションペインで、[Layers] (レイヤー) をクリックします。
5. [Layers] (レイヤー) ページで、[Delete] (削除) を選択します。



Elastic ロードバランシングレイヤー

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Elastic Load Balancing OpsWorks の動作は、 スタックレイヤーとは多少異なります。レイヤーを作成してインスタンスを追加する代わりに、Elastic Load Balancing コンソールまたは API を使用してロードバランサーを作成し、既存のレイヤーにアタッチすることもできます。レイヤーのインスタンスにトラフィックを分散することに加えて、Elastic Load Balancing は以下を行います。

- 異常な Amazon EC2 インスタンスを検出し、異常なインスタンスが復旧するまで、トラフィックを残りの正常なインスタンスに再ルーティングします。
- 受信トラフィックに応じて、自動的にそのリクエスト処理能力を拡張します。
- Connection Draining を有効にすると、異常があるまたは登録解除されるインスタンスへの新しいリクエストの送信がロードバランサーで停止されるものの、指定された最大タイムアウト値まで接続が維持されるため、インスタンスはすべての処理中のリクエストを完了できます。

ロードバランサーをレイヤーにアタッチすると、 OpsWorks Stacks は以下を実行します。

- 現在登録されているインスタンスの登録を解除します。
- レイヤーのインスタンスがオンラインになるとこれを自動的に登録し、オフラインになるとインスタンスの登録を解除します。これには、負荷ベースのインスタンスも、時間ベースのインスタンスも含まれます。

- アベイラビリティーゾーンの登録されたインスタンスへのリクエストのルーティングを自動的に開始します。

ロードバランサーの接続ドレイニング機能を有効にしている場合は、 OpsWorks スタックがサポートするかどうかを指定できます。Connection Draining サポートを有効にすると (デフォルト設定)、インスタンスがシャットダウンされた後、 OpsWorks Stacks は以下を実行します。

- ロードバランサーからインスタンスを登録解除します。

  ロードバランサーは新しいリクエストの送信を停止し、Connection Drainingを開始します。
- ロードバランサーが Connection Draining を完了するまで、Shutdown ライフサイクルイベントのトリガーを遅らせます。

Connection Draining サポートを有効にしない場合、インスタンスがまだロードバランサーに接続されている場合でも、 OpsWorks スタックはインスタンスがシャットダウンされるとすぐに Shutdown イベントをトリガーします。

Elastic Load Balancing をスタックとともに使用する場合は、まず Elastic Load Balancing コンソール、CLI、または API を使用して、同じリージョン内に 1 つ以上のロードバランサーを作成する必要があります。以下に注意する必要があります。

- レイヤーにアタッチできるロードバランサーの数は 1 つのみです。
- 各ロードバランサーで処理できるレイヤーは 1 つのみです。
- OpsWorks スタックは Application Load Balancer をサポートしていません。 OpsWorks スタックは Classic Load Balancer でのみ使用できます。

つまり、負荷分散する各スタックのレイヤーごとに個別の Elastic Load Balancing ロードバランサーを作成し、その目的のためだけに使用する必要があります。 OpsWorks スタックで使用する予定の各 Elastic Load Balancing ロードバランサーにわかりやすい名前 (MyStack1-RailsLayer-ELB など) を割り当てて、1 つのロードバランサーを複数の目的で使用しないようにすることをお勧めします。

> **Important**
>
> スタックレイヤー用に新しい Elastic Load Balancing OpsWorks ロードバランサーを作成することをお勧めします。既存の Elastic Load Balancing ロードバランサーを使用する場合は、まず、他の目的で使用されておらず、インスタンスがアタッチされていないことを確認する必要があります。ロードバランサーがレイヤーにアタッチされた後、OpsWorks は既

存のインスタンスをすべて削除して、レイヤーのインスタンスのみを処理するようにロードバランサーを設定します。レイヤーにアタッチした後でロードバランサーの設定を Elastic Load Balancing コンソールまたは API を使用して変更することは技術的には可能ですが、そうしないでください。この変更は永続的ではないためです。

Elastic Load Balancing ロードバランサーをレイヤーにアタッチするには

1. まだ作成していない場合は、Elastic Load Balancing コンソール、API、または CLI を使用して、スタックのリージョンでロードバランサーを作成します。ロードバランサーを作成する場合、以下の作業を行います。

   - アプリケーションに適したヘルスチェック ping パスを指定してください。

     デフォルトの ping パスは `/index.html` であるため、アプリケーションのルートに `index.html` が含まれていない場合、適切な ping パスを指定する必要があります。そうしないと、ヘルスチェックは失敗します。

   - Connection Draining を使用する場合は、この機能が有効になっていて、適切なタイムアウト値が設定されていることを確認します。

   詳細については、「Elastic Load Balancing」を参照してください。
2. バランスを取りたいレイヤーを作成するか、既存のレイヤーのネットワーク設定を編集します。

   > **Note**
   >
   > カスタムレイヤーの作成時にロードバランサーをアタッチすることはできません。レイヤーの設定を編集する必要があります。

3. Elastic Load Balancing で、レイヤーにアタッチするロードバランサーを選択し、 OpsWorks スタックで接続ドレイニングをサポートするかどうかを指定します。

ロードバランサーをレイヤーにアタッチすると、 OpsWorks スタックはスタックのインスタンスで Configure ライフサイクルイベントをトリガーして変更を通知します。また、ロードバランサーをデタッチすると OpsWorks 、スタックは Configure イベントもトリガーします。

> **Note**
>
> インスタンスが起動すると、 OpsWorks スタックは Setup レシピと Deploy レシピを実行し、パッケージをインストールしてアプリケーションをデプロイします。これらのレシピが完了すると、インスタンスはオンライン状態になり、 OpsWorks スタックはインスタンスを Elastic Load Balancing に登録します。 OpsWorks スタックは、インスタンスがオンラインになった後に Configure イベントもトリガーします。これは、Elastic Load Balancing 登録と Configure レシピが同時に実行される可能性があり、Configure レシピの終了前にインスタンスが登録される可能性があることを意味します。インスタンスが Elastic Load Balancing に登録される前にレシピを終了させるには、レイヤーの Setup または Deploy ライフサイクルイベントにレシピを追加する必要があります。詳細については、「レシピの実行」を参照してください。

ロードバランサーからインスタンスを削除した方がよい場合があります。たとえば、アプリケーションを更新するときは、アプリケーションを 1 つのインスタンスにデプロイし、各インスタンスにデプロイする前にアプリケーションが正しく動作していることを確認することをお勧めします。通常、ロードバランサーからそのインスタンスを削除するため、更新を確認するまでユーザーリクエストを受信しません。

ロードバランサーからオンラインインスタンスを一時的に削除するには、Elastic Load Balancing コンソールまたは API を使用する必要があります。コンソールを使用する方法を次に説明します。

ロードバランサーから一時的にインスタンスを削除するには

1. [Amazon EC2 console] (Amazon EC2 コンソール) を開き、[Load Balancers] (ロードバランサー) を選択します。
2. 適切なロードバランサーを選択し、[Instances] タブを開きます。
3. インスタンスの [Actions] (アクション) 列で [Remove from Load Balancer] (ロードバランサーから移動) を選択します。
4. 完了したら、[Edit Instances] を選択し、インスタンスをロードバランサーに戻します。

> **Important**
>
> Elastic Load Balancing コンソールまたは API を使用してロードバランサーからインスタンスを削除する場合は、Elastic Load Balancing を使用してインスタンスを戻す必要もあります。 OpsWorks スタックは、他のサービスコンソールまたは APIs で実行するオペレーショ

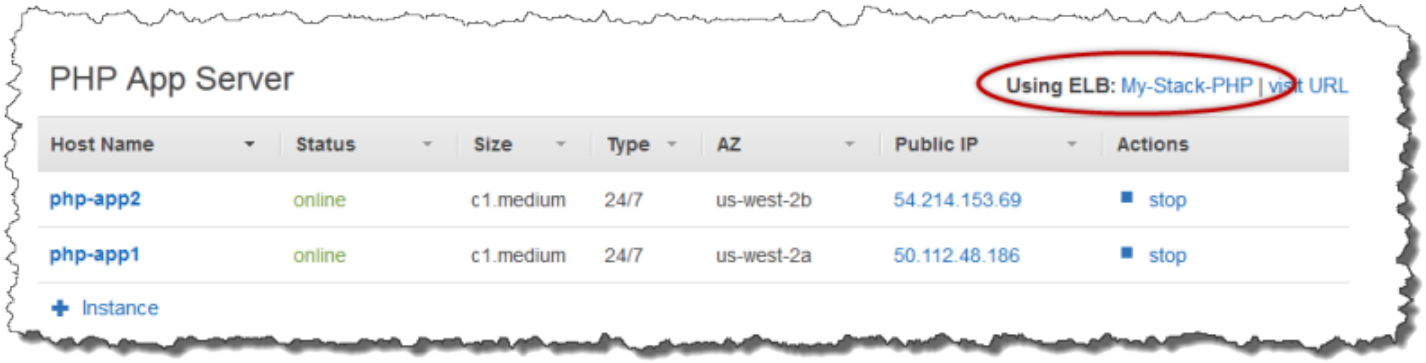
ンを認識しないため、インスタンスがロードバランサーに返されることはありません。場合によっては、 OpsWorks スタックはインスタンスを ELB に戻すことができますが、これは保証された動作ではなく、すべてのケースで発生するわけではありません。

次のように、インスタンスの特定のセットに複数のロードバランサーをアタッチできます。

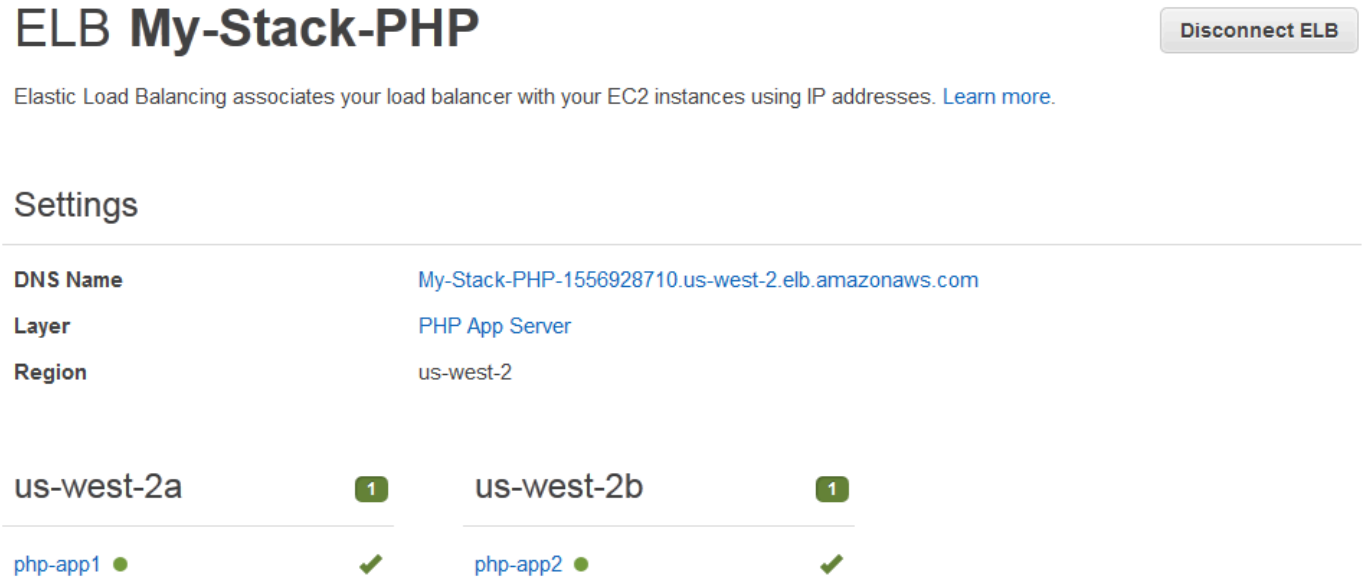
複数のロードバランサーをアタッチするには

1. Elastic Load Balancing console (Elastic Load Balancing コンソール)、API、または CLI を使用して、ロードバランサーのセットを作成します。
2. ロードバランサーごとにカスタムレイヤーを作成し、該当するロードバランサーをアタッチします。これらのレイヤーにカスタムレシピを実装する必要はありません。デフォルトのカスタムレイヤーで十分です。
3. 各カスタムレイヤーにインスタンスのセットを追加します。

[Instances] ページに移動して、適切なロードバランサーの名前をクリックすると、ロードバランサーのプロパティを確認できます。



[ELB] ページには、関連するインスタンスの DNS 名やヘルスステータスなど、ロードバランサーの基本プロパティが表示されます。スタックが VPC 内で実行されている場合、ページにはアベイラビリティーゾーンではなくサブネットが表示されます。緑のチェックマークは、正常なインスタンスを示します。名前をクリックすると、ロードバランサーを通じてサーバーに接続できます。



Amazon RDS サービスレイヤー

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Amazon RDS サービスレイヤーとは、Amazon RDS インスタンスを意味します。このレイヤーで表すことができるのは既存の Amazon RDS インスタンスのみであるため、Amazon RDS console (Amazon RDS コンソール) または API を使用して事前にインスタンスを作成しておく必要があります。

Amazon RDS サービスレイヤーをスタックに組み込む基本的な手順は次のとおりです。

1. Amazon RDS コンソール、API、CLI のいずれかを使用してインスタンスを作成します。

   インスタンスの ID、マスターユーザー名、マスターパスワード、データベース名は必ず記録しておいてください。

2. Amazon RDS レイヤーをスタックに追加するために、Amazon RDS インスタンスをスタックに登録します。
3. レイヤーをアプリケーションにアタッチします。これによって、Amazon RDS インスタンスの接続情報がアプリケーションの `deploy`属性 に追加されます。
4. `deploy` 属性で言語固有のファイルまたは情報を使用し、アプリケーションを Amazon RDSインスタンスに接続します。

   アプリケーションをデータベースサーバーに接続する方法の詳細については、「the section called “データベースへの接続”」を参照してください。

> **Warning**
>
> インスタンスのマスターパスワードおよびユーザー名に使用した文字に、アプリケーションサーバーが対応していることを確認します。例えば、Java App Server レイヤーでは、いずれかの文字列に & が含まれていると、XML 解析エラーが発生し、Tomcat サーバーを起動できません。

トピック

- セキュリティグループの指定
- Amazon RDS インスタンスをスタックに登録する
- Amazon RDS サービスレイヤーとアプリケーションの関連付け
- スタックからの Amazon RDS サービスレイヤーの削除

セキュリティグループの指定

スタックで Amazon RDS OpsWorks インスタンスを使用するには、データベースまたは VPC セキュリティグループが適切な IP アドレスからのアクセスを許可する必要があります。本稼働環境用のセキュリティグループでは、データベースにアクセスする必要のある IP アドレスにそのアクセス権を限定するのが一般的です。通常、データベースの管理に使用するシステムのアドレスと、データベースにアクセスする必要がある OpsWorks スタックインスタンスが含まれます。 OpsWorks スタックは、リージョンで最初のスタックを作成するときに、レイヤーのタイプごとに Amazon EC2 セキュリティグループを自動的に作成します。 OpsWorks スタックインスタンスへのアクセスを提供する簡単な方法は、適切な スタックセキュリティグループを Amazon RDS OpsWorks インスタンスまたは VPC に割り当てることです。

既存の Amazon RDS インスタンスのセキュリティグループを指定するためには

1. Amazon RDS コンソール (https://console.aws.amazon.com/rds/) を開きます。
2. ナビゲーションペインで [Instances] (インスタンス) をクリックし、適切な Amazon RDS インスタンスを選択します。[Instance Actions]、[Modify] の順にクリックします。
3. [Security Group] の一覧から次のセキュリティグループを選択し、[Continue]、[Modify DB Instance] の順にクリックしてインスタンスを更新します。
   - AWS-OpsWorks-DB-Master-Server (***security_group_id***) セキュリティグループ
   - インスタンスがデータベースに接続する、アプリケーションサーバーレイヤーのセキュリティグループ。グループ名には、レイヤー名を含めます。例えば、PHP App Server インスタンスへのデータベースアクセスを提供するには、[AWS-OpsWorks-PHP-App-Server] (AWS-OpsWorks-PHP-App-Server) グループを指定します。

新しい Amazon RDS インスタンスを作成する場合は、DB インスタンス起動ウィザードの「詳細設定の構成」ページで適切な OpsWorks スタックセキュリティグループを指定できます。このウィザードを使用する方法については、「MySQL DB インスタンスを作成して MySQL DB インスタンス上のデータベースに接続する」を参照してください。

VPC セキュリティグループの指定方法については、「VPC のセキュリティグループ」を参照してください。

Amazon RDS インスタンスをスタックに登録する

スタックに Amazon RDS サービスレイヤーを追加するには、そのスタックにインスタンスを登録する必要があります。

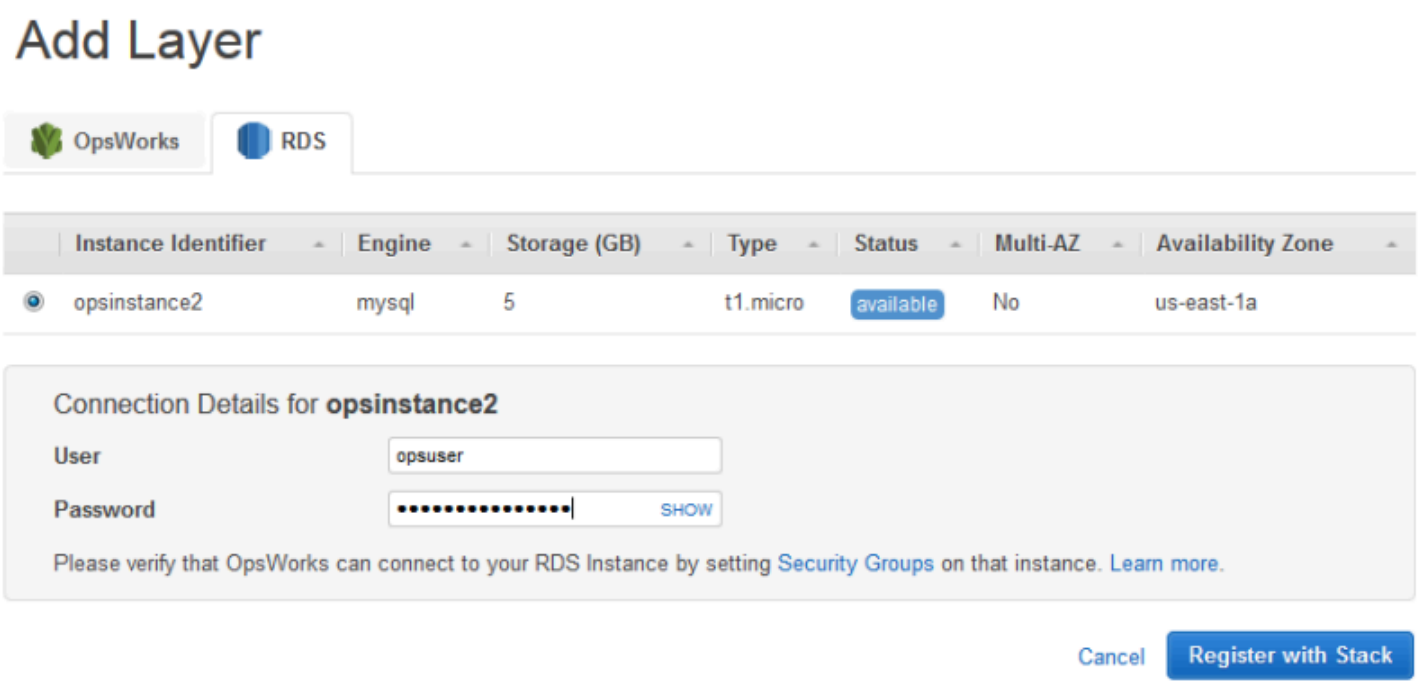
Amazon RDS インスタンスをスタックに登録するためには

1. OpsWorks スタックコンソールで、ナビゲーションペインの Layer をクリックし、 + Layer または Add a Layer をクリックして Add Layer ページを開き、RDS タブをクリックします。
2. 必要に応じて、スタックのサービスロールを更新します (「スタックのサービスロールの更新」を参照) 。
3. [RDS] タブをクリックして、利用可能な Amazon RDS インスタンスを一覧表示します。

> **Note**
>
> ご使用のアカウントに Amazon RDS インスタンスが存在しない場合、[RDS] タブの [Add an RDS instance] (RDS インスタンスを追加) をクリックして作成できます。Amazon RDS コンソールが表示され、[Launch a DB Instance] ウィザードが開始されます。Amazon RDS コンソールに直接移動して [Launch a DB Instance] (DB インスタンスを開始) をクリックするか、Amazon RDS API または CLI を使用することもできます。Amazon RDS インスタンスを作成する方法の詳細については、「Getting Started with Amazon RDS」(Amazon RDS のご利用開始にあたって) を参照してください。

4. 目的のインスタンスを選択し、[User] と [Password] に、それぞれ適切なユーザーとパスワードの値を設定して、[Register to Stack] をクリックします。

> **Important**
>
> Amazon RDS インスタンスを登録に使用するユーザーとパスワードが、有効なユーザーとパスワードに確実に対応していることを確認する必要があります。対応していない場合、アプリケーションからインスタンスに接続できません。ただし、レイヤーを編集して、ユーザーとパスワードに有効な値を指定したうえで、再度アプリケーションをデプロイすることはできます。



Amazon RDS サービスレイヤーをスタックに追加すると、 OpsWorks スタックは ID を割り当て、関連する Amazon RDS 設定をスタック設定およびデプロイ属性の `[:opsworks][:stack]` 属性に追加します。

> **Note**
>
> 登録済みの Amazon RDS インスタンスのパスワードを変更する場合は、 OpsWorks スタックのパスワードを手動で更新してから、アプリケーションを再デプロイして、スタックのインスタンスのスタック設定とデプロイ属性を更新する必要があります。

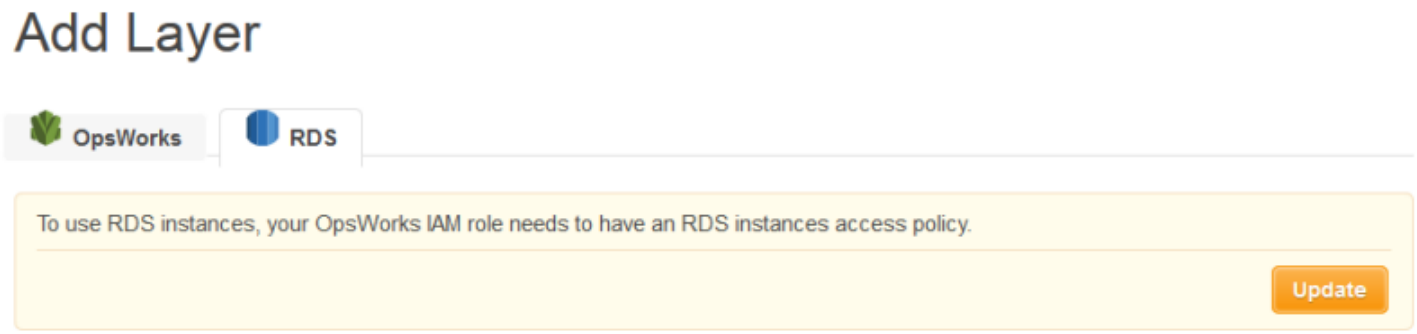
トピック

- スタックのサービスロールの更新

スタックのサービスロールの更新

すべてのスタックには、スタックがユーザーに代わって他の AWS OpsWorks のサービスで実行できるアクションを指定する IAM サービスロールがあります。Amazon RDS インスタンスをスタックに登録するには、そのサービスロールが Amazon RDS OpsWorks にアクセスするためのアクセス許可をスタックに付与する必要があります。

ご使用のいずれかのスタックに対し、Amazon RDS サービスレイヤーを初めて追加するときは、必要なアクセス許可がサービスロールに存在しない可能性があります。その場合、[Add Layer] (レイヤーの追加) ページの [RDS] タブをクリックしたときに、次のメッセージが表示されます。



更新をクリックして、 OpsWorks スタックがサービスロールのポリシーを次のように更新します。

```
{"Statement": [{"Action": ["ec2:*", "iam:PassRole",
                      "cloudwatch:GetMetricStatistics",
                      "elasticloadbalancing:*",
                      "rds:*"],
            "Effect": "Allow",
            "Resource": ["*"] }]
}
```

> **Note**
>
> 更新を実行する必要があるのは 1 回だけです。更新済みのロールがその後すべてのスタックで自動的に使用されます。

Amazon RDS サービスレイヤーとアプリケーションの関連付け

Amazon RDS サービスレイヤーは、追加後、アプリケーションに関連付けることができます。

- Amazon RDSサービスレイヤーとアプリケーションの関連付けは、アプリケーションの作成時に行うか、後からアプリケーションの設定を編集することによって行います。
- Amazon RDS レイヤーとアプリケーションの関連付けを解除するには、アプリケーションの設定を編集して、異なるデータベースサーバーを指定するか、サーバーの指定を削除します。

Amazon RDS レイヤーはスタックに属したままであり、別のアプリケーションに関連付けることができます。

Amazon RDS インスタンスをアプリケーションに関連付けると、 OpsWorks Stacks はデータベース接続情報をアプリケーションのサーバーに配置します。各サーバーインスタンスのアプリケーションは、この情報を使用して、データベースに接続できます。Amazon RDS インスタンスへの接続方法の詳細については、「the section called “データベースへの接続”」を参照してください。

スタックからの Amazon RDS サービスレイヤーの削除

登録している Amazon RDS サービスレイヤーをスタックから削除するには

Amazon RDS サービスレイヤーの登録を解除するには

1. ナビゲーションペインの [Layers] (レイヤー) をクリックし、Amazon RDS サービスレイヤーの名前をクリックします。
2. [Deregister] をクリックし、レイヤーの登録を解除することを確認します。

この手順によってスタックからはレイヤーが削除されますが、基になる Amazon RDS インスタンスは削除されません。インスタンスとデータベースはアカウント内に維持され、他のスタックに登録することができます。Amazon RDS コンソール、API、CLI のいずれかを使用してインスタンスを削除する必要があります。詳細については、「DB インスタンスの削除」を参照してください。

ECS クラスターレイヤー

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Amazon Elastic Container Service (Amazon ECS) は、コンテナインスタンスと呼ばれる Amazon Elastic Compute Cloud (Amazon EC2) インスタンスのクラスターで Docker コンテナを管理しま

す。ECS クラスターレイヤーとは Amazon ECS クラスターを意味し、以下のような機能を提供することでクラスター管理を簡素化します。

- 効率化されたインスタンスコンテナのプロビジョニングと管理
- コンテナのインスタンスオペレーティングシステムおよびパッケージの更新
- ユーザー許可の管理
- コンテナインスタンスのパフォーマンスのモニタリング
- Amazon Elastic Block Store (Amazon EBS) のボリューム管理
- パブリック IP アドレスと Elastic IP アドレスの管理
- セキュリティグループの管理

ECS クラスターレイヤーには、以下の制限と要件があります。

- レイヤーは、デフォルト VPC を含む、VPC で実行する Chef 11.10 または Chef 12 Linux スタックまたはそれ以降でのみ使用できます。
- レイヤーのインスタンスは、次のオペレーティングシステムのいずれかを実行している必要があります。
  - Amazon Linux 2
  - Amazon Linux 2018.03
  - Amazon Linux 2017.09
  - Amazon Linux 2017.03
  - Amazon Linux 2016.09
  - Amazon Linux 2016.03
  - Amazon Linux 2015.09
  - Amazon Linux 2015.03
  - Ubuntu 18.04 LTS
  - Ubuntu 16.04 LTS
  - Ubuntu 14.04 LTS
  - カスタム
- このレイヤーのインスタンスの OpsWorks スタックエージェントバージョンは `3425-20150727112318` 以降のバージョンである必要があります。

トピック

- ECS クラスターレイヤーをスタックに追加する
- ECS クラスターの管理
- ECS クラスターレイヤーをスタックから削除

ECS クラスターレイヤーをスタックに追加する

OpsWorks スタックは、既存の Amazon ECS クラスターのコンテナインスタンスを起動および維持するプロセスを簡素化します。クラスターやタスクのような他の Amazon ECS エンティティを作成または起動するには、Amazon ECS コンソール、コマンドラインインターフェイス (CLI)、または API を使用します。(詳細については、「Amazon Elastic Container Service Developer Guide」(Amazon Elastic Container Service デベロッパーガイド) を参照してください。) その後、ECS クラスターレイヤーを作成してクラスターをスタックに関連付けることができます。このレイヤーを使用して、 OpsWorks スタックでクラスターを管理できます。

以下のとおり、スタックとクラスターを関連付けることができます。

- 各スタックは、単独のクラスターを表す ECS クラスターレイヤーを 1 つ持つことができます。
- クラスターは 1 つのスタックのみに関連付けることができます。

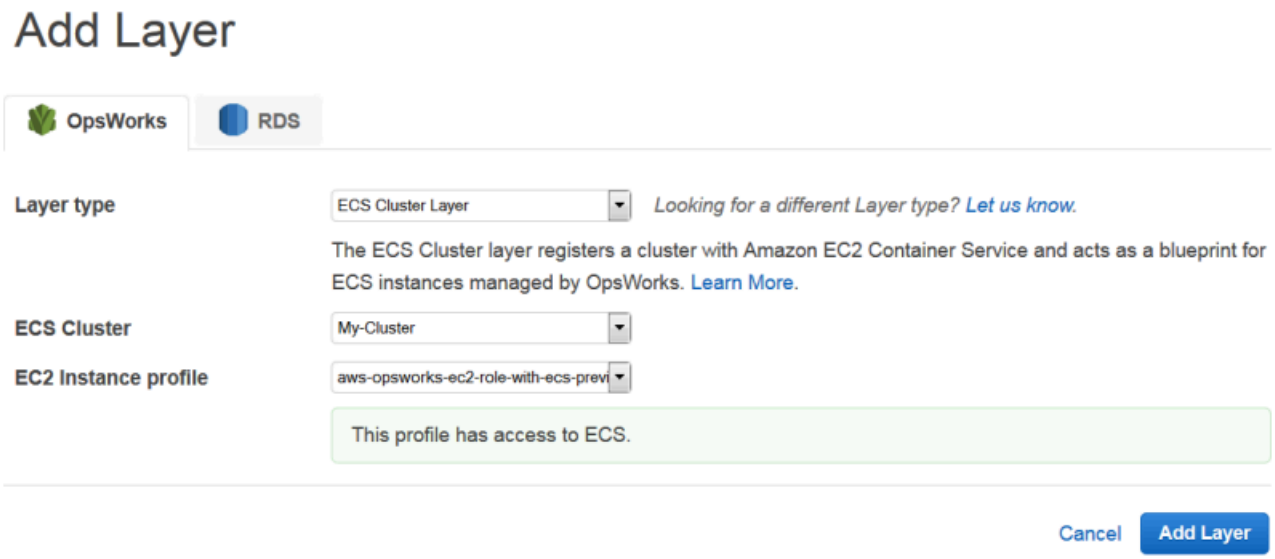
ECS クラスターレイヤーをスタックに追加する前に、通常は という名前の OpsWorks AWS Identity and Access Management スタック (IAM) サービスロールを更新して`aws-opsworks-service-role`、 OpsWorks スタックがユーザーに代わって Amazon ECS とやり取りできるようにする必要があります。サービスロールの詳細については、「OpsWorks スタックがユーザーに代わって動作することを許可する」を参照してください。

ECS クラスターレイヤーを初めて作成すると、コンソールに更新ボタンが表示されます。このボタンを使用して、ロールを更新するように OpsWorks スタックに指示できます。次に、 OpsWorks スタックにレイヤーの追加ページが表示され、スタックにレイヤーを追加できます。サービスロールの更新は 1 回だけでかまいません。その後で更新されたロールを使用して、スタックに ECS クラスターレイヤーを追加できます。

> **Note**
>
> 必要に応じて、以下のように `ecs:*` 許可を既存のポリシーに許可を追加することで、サービスロールのポリシーを手動で更新できます。

```
{
  "Statement": [
    {
      "Action": [
        "ec2:*",
        "iam:PassRole",
        "cloudwatch:GetMetricStatistics",
        "elasticloadbalancing:*",
        "rds:*",
        "ecs:*"
      ],
      "Effect": "Allow",
      "Resource": ["*"]
    }
  ]
}
```

スタックとクラスターを関連付けるには、スタックへのクラスターの登録と関連付けられたレイヤーの作成という 2 つのアクションが必要になります。 OpsWorks スタックコンソールは、これらのステップを組み合わせます。レイヤーの作成は、指定されたクラスターを自動的に登録します。OpsWorks スタック API、CLI、または SDK を使用する場合は、別のオペレーションを使用してクラスターを登録し、関連するレイヤーを作成する必要があります。コンソールを使用してスタックに ECS クラスターレイヤーを追加するには、[Layers] (レイヤー) を選択し、[+Layer] (+ レイヤー) または [Add a Layer] (レイヤーの追加) を選択してから、ECS クラスターレイヤータイプを選択します。



[Add Layer] (追加のレイヤー) ページには、以下の設定オプションがあります。

ECS クラスター

スタックに登録するための Amazon ECS クラスター。

EC2 インスタンスプロファイル

クラスターの Amazon Elastic Compute Cloud (Amazon EC2) インスタンスプロファイル。このプロファイルによって、クラスターのコンテナインスタンスで実行中のアプリケーションに、Amazon ECS などの他の AWS サービスにアクセスするための許可が付与されます。最初の ECS クラスターレイヤーを作成するときは、ECS アクセスを持つ新しいプロファイルを選択して、 OpsWorks スタックに という名前の必要なプロファイルを作成するように指示しますaws-opsworks-ec2-role-with-ecs。そのプロファイルは、後続のすべての ECS クラスターレイヤーで使用することができます。インスタンスプロファイルの詳細については、「EC2 インスタンスで実行するアプリケーションに対するアクセス許可の指定」を参照してください。

レイヤー設定を編集して、以下のその他の設定を指定できます。

- レイヤーに Elastic Load Balancing のロードバランサーをアタッチします。

  このアプローチは、いくつかのユースケースに適合する場合もありますが、Amazon ECS にはより高度なオプションがあります。詳細については、「サービスロードバランシング」を参照してください。
- パブリック IP アドレスまたは Elastic IP アドレスのコンテナインスタンスへの自動割り当てを許可するかどうかを指定します。

  両方のアドレスタイプへの自動割り当てを無効にすると、サブネットに正しく設定された NAT がないかぎり、インスタンスはオンラインになりません。詳細については、「VPC でのスタックの実行」を参照してください。

ECS クラスターの管理

ECS クラスターレイヤーを作成したら、 OpsWorks 次のように スタックを使用してクラスターを管理できます。

コンテナインスタンスのをプロビジョニングと管理

最初は、元のクラスターにコンテナインスタンスが含まれている場合であっても、ECS クラスターレイヤーにはコンテナインスタンスは含まれません。1 つのオプションは、以下のような適切な組み合わせを使用して、レイヤーのインスタンスを管理することです。

- 手動で 24/7 インスタンスをレイヤーに追加して、不要となったらそれらを削除します。
- 時間ベースのインスタンスを追加することで、スケジュールにあるインスタンスの追加または削除を行います。
- スタックホストメトリクスまたは CloudWatch OpsWorks アラームに基づいてインスタンスを追加または削除するには、負荷ベースのインスタンスをレイヤーに追加します。

> **Note**
>
> スタックのデフォルトのオペレーティングシステムで Amazon ECS がサポートされていない場合は、コンテナインスタンスを作成する場合、サポートされているオペレーティングシステム (Amazon Linux 2、Amazon Linux 2018.03、Amazon Linux 2017.09、Amazon Linux 2017.03、Amazon Linux 2016.09、Amazon Linux 2016.03、Amazon Linux 2015.09、Amazon Linux 2015.03、Ubuntu 18.04 LTS、Ubuntu 16.04 LTS、Ubuntu 14.04 LTS、または Custom) を明示的に指定する必要があります。ECS Optimized AMI を使用して ECS レイヤーにインスタンスを作成しないでください。この AMI には既に ECS エージェントが含まれています。 OpsWorks スタックはインスタンスのセットアッププロセス中に ECS エージェントのインストールも試行するため、競合によりセットアップが失敗する可能性があります。

詳細については、「」を参照してくださいサーバー数の最適化 。 OpsWorks スタックは各インスタンスに AWS-OpsWorks-ECS-Cluster セキュリティグループを割り当てます。新しいインスタンスの起動が完了すると、 OpsWorks スタックは Docker と Amazon ECS エージェントをインストールし、インスタンスをクラスターに登録することで、そのインスタンスをコンテナインスタンスに変換します。

既存のコンテナインスタンスを使用する場合は、スタックにそれらを登録して、ECS クラスターレイヤーに割当てます。インスタンスは、サポートされているオペレーティングシステムである Amazon Linux 2015.03 以降または Ubuntu 14.04 LTS 以降で実行する必要があります。

> **Note**
>
> コンテナインスタンスは、ECS クラスターレイヤーや別の組み込みレイヤーに属することはできません。ただし、コンテナインスタンスは、ECS クラスターレイヤーと 1 つ以上のカスタムレイヤーに属することができます。

オペレーティングシステムとパッケージの更新を実行する

新しいインスタンスの起動が完了すると、 OpsWorks スタックは最新の更新をインストールします。その後、 OpsWorks スタックを使用してコンテナインスタンスを最新の状態に保つことができます。詳細については、「セキュリティ更新の管理」を参照してください。

ユーザーアクセス許可の管理

OpsWorks スタックを使用すると、ユーザーの SSH キーの管理など、コンテナインスタンスに対するアクセス許可を簡単に管理できます。詳細については、「ユーザー許可の管理」および「SSH アクセスの管理」を参照してください。

パフォーマンスメトリクスのモニタリング

OpsWorks スタックは、スタック、レイヤー、または個々のインスタンスのパフォーマンスメトリクスをモニタリングするさまざまな方法を提供します。詳細については、「モニタリング」を参照してください。

Amazon ECS を介して、タスクまたはサービスの作成などの管理タスクを処理します。詳細については、Amazon Elastic Container Service デベロッパーガイドを参照してください。

> **Note**
>
> Amazon ECS コンソールのクラスターのページに直接移動するには、[Instances] (インスタンス) を選択してから、ECS クラスターレイヤーセクションの右上隅付近にある [ECS Cluster] (ECS クラスター) を選択します。

ECS クラスターレイヤーをスタックから削除

クラスターが不要になったら、ECS クラスターレイヤーを削除して、関連付けられたクラスターの登録を解除します。スタックからクラスターを削除するには、クラスターの登録解除と関連付けられたレイヤーの削除という、2 つのアクションが必要になります。 OpsWorks スタックコンソールは

これらのステップを組み合わせます。レイヤーを削除すると、指定されたクラスターが自動的に登録解除されます。 OpsWorks スタック API、CLI、または SDK を使用する場合は、別のオペレーションを使用してクラスターの登録を解除し、関連するレイヤーを削除する必要があります。

コンソールを使用して ECS クラスターレイヤーを削除するには

1. タスクのシャットダウン方法を制御するには、Amazon ECS コンソール、API、または CLI を使用して、クラスターのサービスをスケールダウンして削除します。詳細については、「Cleaning Up Your Amazon ECS Resources」(Amazon ECS リソースのクリーンアップ) を参照してください。
2. レイヤーのインスタンスを停止してから、それらを削除します。コンテナインスタンスを停止すると、 OpsWorks スタックは実行中のタスクを自動的に停止し、クラスターからインスタンスを登録解除して、インスタンスを終了します。

   > **Note**
   >
   > 既存のコンテナインスタンスをスタックに登録している場合は、レイヤーからそのインスタンスの割り当てを解除し、登録を解除すると、そのインスタンスを ECS コントロールに戻すことができます。

3. Layer を削除します。 OpsWorks スタックは関連付けられたクラスターを登録解除しますが、削除はしません。クラスターは Amazon ECS に残ります。

カスタム OpsWorks スタックレイヤー

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

カスタムレイヤーには、最小限のレシピのみ含まれています。その後、カスタムレシピを実装してレイヤーのライフサイクルイベントに割り当てることにより、適切な機能を Layer に追加します。

カスタムレイヤーには次のような設定があります。

> **Note**
>
> OpsWorks スタックは、レイヤーのインスタンスに Ruby を自動的にインストールします。インスタンスで Ruby コードを実行したいが、Ruby のデフォルトバージョンを使用したくない場合は、カスタム JSON またはカスタム属性ファイルを使用して、目的のバージョンを指定することができます。詳細については、「Ruby のバージョン」を参照してください。

カスタムレイヤーを作成するための基本的な手順は次のとおりです。

1. パッケージのインストールと設定、設定変更の処理、アプリケーションのデプロイなどに必要な、レシピと関連ファイルが含まれたクックブックを実装します。

   要件によっては、デプロイ解除タスクやシャットダウンタスクを処理するためのレシピが必要になることもあります。詳細については、「クックブックとレシピ」を参照してください。
2. カスタムレイヤーを作成します。
3. 適切なライフサイクルイベントにレシピを割り当てます。

次に、レイヤーにインスタンスを追加して起動し、アプリケーションをそれらのインスタンスにデプロイします。

> **Important**
>
> カスタムレイヤーのインスタンスにアプリケーションをデプロイするには、デプロイ操作を処理して、アプリケーションをレイヤーの Deploy イベントに割り当てるためのレシピを実装する必要があります。

レイヤーごとのオペレーティングシステムパッケージのインストール

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post または AWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Chef 12 からは、カスタムレシピを使用して、さまざまなオペレーティングシステムを実行しているレイヤーでパッケージをインストールする必要があります。この方法により、パッケージのインストールについての最大の柔軟性とコントロールが得られます。

たとえば、Linux オペレーティングシステムの RedHat、Ubuntu、および Amazon バージョンを実行しているレイヤーに Apache をインストールするとします。RedHat および Amazon Linux 用の Apache パッケージは `httpd` と呼ばれますが、Ubuntu では `apache2` と呼ばれます。

パッケージの命名の違いに対応するために、次の例のレシピで、次のような構文を使用できます。レシピは各オペレーティングシステムに対して適切な Apache パッケージをインストールします。この例は、Chef のドキュメントに基づいています。

```
package "Install Apache" do
   case node[:platform]
      when "redhat", "amazon"
         package_name "httpd"
      when "ubuntu"
         package_name "apache2"
   end
end
```

`package` リソースを使用してパッケージを管理する方法の詳細については、Chef のドキュメントのパッケージのページを参照してください。

または、同じ作業をより簡単に達成する Chef レシピ DSL (ドメイン固有言語) の `value_for_platform` ヘルパーメソッドを使用できます。

```
package "Install Apache" do
   package_name value_for_platform(
      ["redhat", "amazon"] => { "default" => "httpd" },
      ["ubuntu"] => { "default" => "apache2" }
   )
end
```

`value_for_platform` ヘルパーメソッドの使用の詳細については、「レシピ DSL について」を参照してください。

インスタンス

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

インスタンスは、Amazon EC2 インスタンスなどのコンピューティングリソースを表し、アプリケーションの提供やトラフィックのバランシングなどを処理します。インスタンスのオペレーティングシステムには、複数の Linux ディストリビューション、または Windows Server 2012 R2 のうち任意のものを使用できます。

次のいずれかの方法で、インスタンスをスタックに追加できます。

- OpsWorks スタックを使用して、スタックにインスタンスを追加します。追加するインスタンスは、Amazon EC2 インスタンスを表します。
- Linux ベースのスタックの場合、Amazon EC2 で作成したインスタンスや、自社のハードウェアで動作するオンプレミスのインスタンスなど、別の場所で作成したインスタンスを登録することができます。

  その後 OpsWorks 、 スタックを使用して、 OpsWorks スタックで作成されたインスタンスとほぼ同じ方法でこれらのインスタンスを管理できます。

このセクションでは、 OpsWorks スタックを使用してインスタンスを作成および管理する方法を説明します。

トピック

- OpsWorks スタックインスタンスの使用
- OpsWorks Stacks の外部で作成されたコンピューティングリソースの使用
- インスタンス設定の編集
- OpsWorks スタックインスタンスの削除
- SSH を使用した Linux インスタンスへのログイン

- RDP を使用した Windows インスタンスへのログイン

OpsWorks スタックインスタンスの使用

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックを使用してインスタンスを作成し、スタックに追加できます。

トピック

- OpsWorks スタックオペレーティングシステム
- レイヤーへのインスタンスの追加
- カスタム AMI の使用
- 24/7 インスタンスの手動による起動、停止、再起動
- 時間ベースおよび負荷ベースのインスタンスによる負荷の管理

OpsWorks スタックオペレーティングシステム

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックは、Amazon および Ubuntu Linux ディストリビューション、Microsoft Windows Server など、いくつかの組み込みオペレーティングシステムの 64 ビットバージョンをサポートしています。一般的な注意事項をいくつか示します。

- スタックのインスタンスは、Linux または Windows を実行できます。

  スタックは、インスタンスごとに異なる Linux バージョンまたはディストリビューションを実行できますが、Linux インスタンスと Windows インスタンスを混在させることはできません。

- カスタム AMIs (Amazon マシンイメージ) を使用できますが、このセクションのトピックで説明されている OpsWorks スタックがサポートする AMIs のいずれかに基づいている必要があります。カスタム AMI またはコミュニティで作成された AMI から作成された他のオペレーティングシステム (CentOS 6.x など) を使用してインスタンスを作成または登録できる場合もありますが、そのような方法は公式にはサポートされていません。
  - Linux オペレーティングシステム:
  - Microsoft Windows Server
- インスタンスを手動で開始および停止することも、 OpsWorks スタックでインスタンス数を自動的にスケールすることもできます。

  どのスタックでも、時間ベースの自動スケーリングを使用できます。Linux スタックでは、負荷ベースのスケーリングも使用できます。

- OpsWorks スタックを使用して Amazon EC2 インスタンスを作成するだけでなく、スタックの外部で作成された Linux スタックにインスタンスを登録することもできます。 OpsWorks

  これには、Amazon EC2 インスタンスと、独自のハードウェアを実行するインスタンスが含まれます。ただし、そのインスタンスがサポートされている Linux ディストリビューションの 1 つを実行している必要があります。Amazon EC2 インスタンスまたはオンプレミスの Windows インスタンスを登録することはできません。

OpsWorks Stacks `DescribeOperatingSystems` API を実行して、サポートされているオペレーティングシステムとそのサポートされているバージョンの Chef のリストを返すことができます。以下は AWS CLIを使用したコマンドの例です。

```
aws opsworks describe-operating-systems
```

以下に、応答の例を示します。

```
{
    "OperatingSystems": [
        {
            "Name": "Amazon Linux",
            "Id": "Amazon Linux",
```

```
            "Type": "Linux",
            "ConfigurationManagers": [
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "11.10"
                },
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "11.4"
                },
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "0.9"
                }
            ],
            "ReportedName": "amazon",
            "ReportedVersion": "2014.03",
            "Supported": false
        },
        {
            "Name": "Amazon Linux 2",
            "Id": "Amazon Linux 2",
            "Type": "Linux",
            "ConfigurationManagers": [
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "12"
                }
            ],
            "ReportedName": "amazon",
            "ReportedVersion": "2"
        },
        {
            "Name": "Amazon Linux 2014.09",
            "Id": "Amazon Linux 2014.09",
            "Type": "Linux",
            "ConfigurationManagers": [
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "11.10"
                },
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "11.4"
```

```
                },
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "0.9"
                }
            ],
            "ReportedName": "amazon",
            "ReportedVersion": "2014.09",
            "Supported": false
        },
        {
            "Name": "Amazon Linux 2015.03",
            "Id": "Amazon Linux 2015.03",
            "Type": "Linux",
            "ConfigurationManagers": [
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "12"
                },
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "11.10"
                },
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "11.4"
                },
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "0.9"
                }
            ],
            "ReportedName": "amazon",
            "ReportedVersion": "2015.03",
            "Supported": false
        },
        {
            "Name": "Amazon Linux 2015.09",
            "Id": "Amazon Linux 2015.09",
            "Type": "Linux",
            "ConfigurationManagers": [
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "12"
```

```
                },
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "11.10"
                },
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "11.4"
                },
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "0.9"
                }
            ],
            "ReportedName": "amazon",
            "ReportedVersion": "2015.09",
            "Supported": false
        },
        {
            "Name": "Amazon Linux 2016.03",
            "Id": "Amazon Linux 2016.03",
            "Type": "Linux",
            "ConfigurationManagers": [
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "12"
                },
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "11.10"
                },
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "11.4"
                },
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "0.9"
                }
            ],
            "ReportedName": "amazon",
            "ReportedVersion": "2016.03"
        },
        {
```

```
            "Name": "Amazon Linux 2016.09",
            "Id": "Amazon Linux 2016.09",
            "Type": "Linux",
            "ConfigurationManagers": [
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "12"
                },
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "11.10"
                },
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "11.4"
                },
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "0.9"
                }
            ],
            "ReportedName": "amazon",
            "ReportedVersion": "2016.09"
        },
        {
            "Name": "Amazon Linux 2017.03",
            "Id": "Amazon Linux 2017.03",
            "Type": "Linux",
            "ConfigurationManagers": [
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "12"
                },
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "11.10"
                },
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "11.4"
                },
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "0.9"
```

```
                }
            ],
            "ReportedName": "amazon",
            "ReportedVersion": "2017.03"
        },
        {
            "Name": "Amazon Linux 2017.09",
            "Id": "Amazon Linux 2017.09",
            "Type": "Linux",
            "ConfigurationManagers": [
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "12"
                },
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "11.10"
                },
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "11.4"
                },
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "0.9"
                }
            ],
            "ReportedName": "amazon",
            "ReportedVersion": "2017.09"
        },
        {
            "Name": "Amazon Linux 2018.03",
            "Id": "Amazon Linux 2018.03",
            "Type": "Linux",
            "ConfigurationManagers": [
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "12"
                },
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "11.10"
                }
            ],
```

```
            "ReportedName": "amazon",
            "ReportedVersion": "2018.03"
        },
        {
            "Name": "CentOS Linux 7",
            "Id": "CentOS Linux 7",
            "Type": "Linux",
            "ConfigurationManagers": [
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "12"
                }
            ],
            "ReportedName": "CentOS Linux",
            "ReportedVersion": "7"
        },
        {
            "Name": "Microsoft Windows Server 2012 R2 Base",
            "Id": "Microsoft Windows Server 2012 R2 Base",
            "Type": "Windows",
            "ConfigurationManagers": [
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "12.2"
                }
            ],
            "ReportedName": "microsoft windows server",
            "ReportedVersion": "2012 r2 standard",
            "Supported": false
        },
        {
            "Name": "Microsoft Windows Server 2012 R2 with SQL Server Express",
            "Id": "Microsoft Windows Server 2012 R2 with SQL Server Express",
            "Type": "Windows",
            "ConfigurationManagers": [
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "12.2"
                }
            ],
            "ReportedName": "microsoft windows server",
            "ReportedVersion": "2012 r2 standard",
            "Supported": false
        },
```

```
        {
            "Name": "Microsoft Windows Server 2012 R2 with SQL Server Standard",
            "Id": "Microsoft Windows Server 2012 R2 with SQL Server Standard",
            "Type": "Windows",
            "ConfigurationManagers": [
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "12.2"
                }
            ],
            "ReportedName": "microsoft windows server",
            "ReportedVersion": "2012 r2 standard",
            "Supported": false
        },
        {
            "Name": "Microsoft Windows Server 2012 R2 with SQL Server Web",
            "Id": "Microsoft Windows Server 2012 R2 with SQL Server Web",
            "Type": "Windows",
            "ConfigurationManagers": [
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "12.2"
                }
            ],
            "ReportedName": "microsoft windows server",
            "ReportedVersion": "2012 r2 standard",
            "Supported": false
        },
        {
            "Name": "Microsoft Windows Server 2019 Base",
            "Id": "Microsoft Windows Server 2019 Base",
            "Type": "Windows",
            "ConfigurationManagers": [
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "12.2"
                }
            ],
            "ReportedName": "microsoft windows server",
            "ReportedVersion": "2019 datacenter"
        },
        {
            "Name": "Microsoft Windows Server 2019 with SQL Server Express",
            "Id": "Microsoft Windows Server 2019 with SQL Server Express",
```

```
            "Type": "Windows",
            "ConfigurationManagers": [
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "12.2"
                }
            ],
            "ReportedName": "microsoft windows server",
            "ReportedVersion": "2019 datacenter"
        },
        {
            "Name": "Microsoft Windows Server 2019 with SQL Server Standard",
            "Id": "Microsoft Windows Server 2019 with SQL Server Standard",
            "Type": "Windows",
            "ConfigurationManagers": [
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "12.2"
                }
            ],
            "ReportedName": "microsoft windows server",
            "ReportedVersion": "2019 datacenter"
        },
        {
            "Name": "Microsoft Windows Server 2019 with SQL Server Web",
            "Id": "Microsoft Windows Server 2019 with SQL Server Web",
            "Type": "Windows",
            "ConfigurationManagers": [
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "12.2"
                }
            ],
            "ReportedName": "microsoft windows server",
            "ReportedVersion": "2019 datacenter"
        },
        {
            "Name": "Microsoft Windows Server 2022 Base",
            "Id": "Microsoft Windows Server 2022 Base",
            "Type": "Windows",
            "ConfigurationManagers": [
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "12.2"
```

```
                }
            ],
            "ReportedName": "microsoft windows server",
            "ReportedVersion": "2022 datacenter"
        },
        {
            "Name": "Microsoft Windows Server 2022 with SQL Server Express",
            "Id": "Microsoft Windows Server 2022 with SQL Server Express",
            "Type": "Windows",
            "ConfigurationManagers": [
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "12.2"
                }
            ],
            "ReportedName": "microsoft windows server",
            "ReportedVersion": "2022 datacenter"
        },
        {
            "Name": "Microsoft Windows Server 2022 with SQL Server Standard",
            "Id": "Microsoft Windows Server 2022 with SQL Server Standard",
            "Type": "Windows",
            "ConfigurationManagers": [
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "12.2"
                }
            ],
            "ReportedName": "microsoft windows server",
            "ReportedVersion": "2022 datacenter"
        },
        {
            "Name": "Microsoft Windows Server 2022 with SQL Server Web",
            "Id": "Microsoft Windows Server 2022 with SQL Server Web",
            "Type": "Windows",
            "ConfigurationManagers": [
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "12.2"
                }
            ],
            "ReportedName": "microsoft windows server",
            "ReportedVersion": "2022 datacenter"
        },
```

```
        {
            "Name": "Red Hat Enterprise Linux 7",
            "Id": "Red Hat Enterprise Linux 7",
            "Type": "Linux",
            "ConfigurationManagers": [
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "12"
                },
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "11.10"
                }
            ],
            "ReportedName": "Red Hat Enterprise Linux",
            "ReportedVersion": "7"
        },
        {
            "Name": "Ubuntu 12.04 LTS",
            "Id": "Ubuntu 12.04 LTS",
            "Type": "Linux",
            "ConfigurationManagers": [
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "12"
                },
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "11.10"
                },
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "11.4"
                },
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "0.9"
                }
            ],
            "ReportedName": "ubuntu",
            "ReportedVersion": "12.04",
            "Supported": false
        },
        {
```

```
            "Name": "Ubuntu 14.04 LTS",
            "Id": "Ubuntu 14.04 LTS",
            "Type": "Linux",
            "ConfigurationManagers": [
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "12"
                },
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "11.10"
                }
            ],
            "ReportedName": "ubuntu",
            "ReportedVersion": "14.04"
        },
        {
            "Name": "Ubuntu 16.04 LTS",
            "Id": "Ubuntu 16.04 LTS",
            "Type": "Linux",
            "ConfigurationManagers": [
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "12"
                }
            ],
            "ReportedName": "ubuntu",
            "ReportedVersion": "16.04"
        },
        {
            "Name": "Ubuntu 18.04 LTS",
            "Id": "Ubuntu 18.04 LTS",
            "Type": "Linux",
            "ConfigurationManagers": [
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "12"
                }
            ],
            "ReportedName": "ubuntu",
            "ReportedVersion": "18.04"
        },
        {
            "Name": "Ubuntu 20.04 LTS",
```

```
            "Id": "Ubuntu 20.04 LTS",
            "Type": "Linux",
            "ConfigurationManagers": [
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "12"
                }
            ],
            "ReportedName": "ubuntu",
            "ReportedVersion": "20.04"
        },
        {
            "Name": "Custom",
            "Id": "Custom",
            "Type": "Linux",
            "ConfigurationManagers": [
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "12"
                },
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "11.10"
                },
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "11.4"
                },
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "0.9"
                }
            ]
        },
        {
            "Name": "CustomWindows",
            "Id": "CustomWindows",
            "Type": "Windows",
            "ConfigurationManagers": [
                {
                    "Name": "Chef",
                    "Version": "12.2"
                }
            ]
```

```
        }
    ]
}
```

トピック

- Linux オペレーティングシステム:
- Microsoft Windows Server

Linux オペレーティングシステム:

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックは、次の Linux オペレーティングシステムの 64 ビットバージョンをサポートしています。

- Amazon Linux と Amazon Linux 2 (現在サポートされているバージョンについては、「OpsWorks スタックコンソール」を参照)
- Ubuntu 20.04 LTS
- CentOS 7
- Red Hat Enterprise Linux 7

これらのオペレーティングシステムに基づくカスタム AMI を使用することもできます。

Linux インスタンスの一般的な注意事項をいくつか示します。

サポートされているパッケージのバージョン

Ruby などのパッケージでサポートされているバージョンとパッチレベルは、以下のセクションで説明するようにオペレーティングシステムとバージョンによって異なります。

更新

デフォルトでは、 OpsWorks スタックは、インスタンスの起動`apt-get update`後に `yum update` または を自動的に呼び出すことで、Linux インスタンスに最新のセキュリティパッチがあることを保証します。自動更新を無効にするには、CreateInstance、UpdateInstance、CreateLayer、または UpdateLayer のいずれかのアクションを使用するか、同等の AWS SDK メソッドまたは AWS CLI コマンドを使用して、`InstallUpdatesOnBoot` パラメータを `false` に設定します。

サービスの中断を避けるため、インスタンスがオンラインになった後、 OpsWorks スタックは自動的に更新をインストールしません。オンラインインスタンスのオペレーティングシステムは、Upgrade Operating System スタックコマンドを実行することでいつでも手動で更新できます。セキュリティの更新を管理する方法の詳細については、「セキュリティ更新の管理」を参照してください。

OpsWorks スタックがインスタンスを更新する方法をより詳細に制御するには、サポートされているオペレーティングシステムのいずれかに基づいてカスタム AMI を作成します。たとえば、カスタム AMI を使用して、インスタンスにインストールするパッケージのバージョンを指定できます。Linux ディストリビューションによってサポートタイムラインとパッケージマージポリシーが異なるため、要件に最適な方法を検討する必要があります。詳細については、「カスタム AMI の使用」を参照してください。

ホストファイル

各オンラインインスタンスには、IP アドレスをホスト名にマッピングする`/etc/hosts`ファイルがあります。 OpsWorks スタックには、各インスタンスの `hosts` ファイル内のすべてのスタックのオンラインインスタンスのパブリックアドレスとプライベートアドレスが含まれます。例えば、2 つの Node.js アプリケーションサーバーインスタンス (nodejs-app1 と nodejs-app2) と、1 つの MySQL インスタンス (db-master1) があるとします。nodejs-app1 インスタンスの `hosts` ファイルは以下の例のようなものであり、他のインスタンスにも同様の `hosts` ファイルがあります。

```
...
# OpsWorks Layer State
192.0.2.0 nodejs-app1.localdomain nodejs-app1
10.145.160.232 db-master1
198.51.100.0 db-master1-ext
10.243.77.78 nodejs-app2
203.0.113.0 nodejs-app2-ext
```

```
10.84.66.6 nodejs-app1
192.0.2.0 nodejs-app1-ext
```

OpsWorks スタックエージェントプロキシのサポート

Chef 11.10 以降のスタック用の OpsWorks スタックエージェントには、プロキシサーバーの基本サポートが含まれています。プロキシサーバーは通常、分離された VPCsで使用されます。プロキシサーバーのサポートを有効にするには、HTTP と HTTPS のトラフィックに適した設定を定義した `/etc/environment` ファイルがインスタンスに必要です。このファイルは以下のようになります (強調表示されたテキストはプロキシサーバーの URL とポートに置き換えます)。

```
http_proxy="http://myproxy.example.com:8080/"
https_proxy="http://myproxy.example.com:8080/"
no_proxy="169.254.169.254"
```

プロキシのサポートを有効にするには、該当する ファイルを含むカスタム AMI を作成`/etc/environment`し、その AMI を使用してインスタンスを作成することをお勧めします。

> **Note**
>
> カスタムレシピを使用してインスタンスに `/etc/environment` ファイルを作成することはお勧めしません。 OpsWorks スタックでは、カスタムレシピが実行される前に、セットアッププロセスの早い段階でプロキシサーバーデータが必要です。

トピック

- Amazon Linux
- Ubuntu LTS
- CentOS
- Red Hat Enterprise Linux

Amazon Linux

OpsWorks スタックは、Amazon Linux および Amazon Linux 2 の 64 ビットバージョンをサポートしています。Amazon Linux では定期的な更新やパッチに加えて、新しいバージョンを約 6 か月ごとにリリースしており、大きな変更が実施される場合もあります。スタックまたは新しいインスタンスを

作成する際に、使用する Amazon Linux のバージョンを指定する必要があります。AWS から新しいバージョンがリリースされたとき、ユーザーが明示的にバージョンを変更するまで、インスタンスでは指定されたバージョンが引き続き実行されます。新しい Amazon Linux バージョンのリリース後 4 週間は移行期間となっており、その間は古いバージョン向けの定期的な更新が引き続き AWS で提供されます。移行期間の終了後も、インスタンスで古いバージョンを引き続き実行できますが、AWS では更新が提供されなくなります。詳細については、「Amazon Linux AMI に関するよくある質問」を参照してください。

Amazon Linux の新しいバージョンがリリースされたら、インスタンスがセキュリティの更新を引き続き受け取ることができるように、移行期間の間に新しいバージョンに更新することをお勧めします。本稼働用スタックのインスタンスを更新する前に、新しいインスタンスを起動し、新しいバージョンでアプリケーションが正常に実行されるかどうかを確認することをお勧めします。その後で、本稼働用スタックインスタンスを更新できます。

> **Note**
>
> デフォルトで、Amazon Linux に基づくカスタム AMI は、新しいバージョンがリリースされると自動的に更新されます。カスタム AMI は特定の Amazon Linux バージョンにロックしておき、新しいバージョンをテストするまで更新を延期できるようにすることをお勧めします。詳細については、「AMI を特定のバージョンに固定するにはどうすればよいですか?」を参照してください。
>
> CloudFormation テンプレートを使用して Amazon Linux を実行しているインスタンスでスタックを作成する場合、テンプレートは Amazon Linux バージョンを明示的に指定する必要があります。特に、テンプレートで `Amazon Linux` を指定している場合、インスタンスでは引き続きバージョン 2016.09 が実行されます。詳細については、「AWS::OpsWorks::Stack」および「AWS::OpsWorks::Instance」を参照してください。

インスタンスの Amazon Linux のバージョンを更新するには、次のいずれかを実行します。

- オンラインインスタンスの場合、Upgrade Operating System スタックコマンドを実行します。

  新しいバージョンの Amazon Linux が利用可能になると、[Instances] ページと [Stack] ページに通知が表示されます。この通知内のリンクをクリックすると、[Run Command] ページが表示されます。ここで [Upgrade Operating System] を実行して、インスタンスをアップグレードできます。
- オフラインの Amazon Elastic Block Store-backed (EBS-backed) インスタンスの場合、インスタンスを起動して、前の項目で説明した方法でオペレーティングシステムのアップグレードを実行します。

- 時間ベースのインスタンスと負荷ベースのインスタンスを含め、オフラインの Instance Store-Backed インスタンスの場合は、インスタンスの [Operating system] 設定を編集して新しいバージョンを指定してください。

  OpsWorks スタックは、インスタンスを再起動すると、インスタンスを新しいバージョンに自動的に更新します。

Amazon Linux: サポートされている Node.js バージョン

Amazon Linux バージョン	Node.js バージョン
2	(Not applicable to operating systems that are available for Chef 12 and higher stacks only)
2018.03	0.12.18
2017.09	0.12.18
2017.03	0.12.18
2016.09	0.12.18 0.12.17 0.12.16 0.12.15
2016.03	0.12.18 0.12.17 0.12.16 0.12.15 0.12.14 0.12.13 0.12.12 0.12.10

Amazon Linux: サポートされている Chef のバージョン

Chef のバージョン	サポートされている Amazon Linux のバージョン
12	Amazon Linux 2 Amazon Linux 2018.03 Amazon Linux 2017.09 Amazon Linux 2017.03 Amazon Linux 2016.09 Amazon Linux 2016.03
11.10	Amazon Linux 2018.03 Amazon Linux 2017.09 Amazon Linux 2017.03 Amazon Linux 2016.09 Amazon Linux 2016.03
11.4 (deprecated)	Amazon Linux 2016.09 Amazon Linux 2016.03

Important

t1.micro インスタンスを更新する前に、各インスタンスに一時スワップファイル `/var/swapfile` があることを確認してください。Chef 0.9 スタックの t1.micro インスタンスにはスワップファイルがありません。Chef 11.4 および Chef 11.10 スタックでは、最近のバージョンのインスタンスエージェントによって、t1.micro インスタンスのスワップファイルが自動的に作成されます。ただし、この変更が導入されたのは数週間の期間であったため、2014 年 3 月 24 日頃より前に作成されたインスタンスに `/var/swapfile` が存在するかどうかを確認する必要があります。
スワップファイルがない t1.micro インスタンスでは、次の方法でスワップファイルを作成できます。

- Chef 11.10 以降のスタックの場合、新しい t1.micro インスタンスを作成すると、スワップファイルが自動的に作成されます。
- Chef 0.9 スタックの場合、各インスタンスで root ユーザーとして次のコマンドを実行します。

```
dd if=/dev/zero of=/var/swapfile bs=1M count=256
 mkswap /var/swapfile
 chown root:root /var/swapfile
 chmod 0600 /var/swapfile
 swapon /var/swapfile
```

新しいインスタンスを作成しない場合、これらのコマンドは Chef 11.10 以降のスタックでも使用できます。

Ubuntu LTS

Ubuntu では、約 2 年ごとに新しい Ubuntu LTS バージョンがリリースされ、各リリースは約 5 年間サポートされます。オペレーティングシステムのサポート期間中は、セキュリティパッチと更新が提供されます。詳細については、Ubuntu Wiki の LTS に関するページを参照してください。

- 既存の Ubuntu インスタンスを以降の Ubuntu に更新することはできません。

  新しい Ubuntu インスタンスを作成し、古いインスタンスを削除する必要があります。
- Ubuntu 20.04 LTS は、Chef 12 以降のスタックでのみサポートされます。

CentOS

OpsWorks スタックは CentOS 7 の 64 ビットバージョンをサポートしています。最初にサポートされているバージョンは CentOS 7 で、CentOS は約 2 年ごとに新しいバージョンをリリースします。

CentOS スタックで新しいインスタンスを起動すると、 OpsWorks スタックは最新の CentOS バージョンを自動的にインストールします。新しい OpsWorks CentOS マイナーバージョンがリリースされたとき、 スタックは既存のインスタンスのオペレーティングシステムを自動的に更新しないため、新しく作成されたインスタンスは、スタックの既存のインスタンスよりも新しいバージョンを受け取る可能性があります。以下の方法で既存のインスタンスを現在の CentOS バージョンに更新することで、スタック間のバージョンの整合性を維持することができます。

- オンラインインスタンスの場合は、[Upgrade Operating System] スタックコマンドを`yum update`指定したインスタンスで実行して、オペレーティングシステムを現在のバージョンに更新します。

新しい CentOS 7 のマイナーバージョンが利用可能になると、[Instances] ページと [Stack] ページに通知が表示されます。この通知内のリンクをクリックすると、[Run Command] ページが表示されます。ここで [Upgrade Operating System] を実行して、インスタンスをアップグレードできます。

- オフラインの更新された Amazon EBS インスタンスの場合は、インスタンスを起動し、前のリスト項目で説明したようにオペレーティングシステムのアップグレードを実行します。
- オフラインの instance store-backed インスタンスの場合、インスタンスの再起動時に OpsWorks スタックは自動的に新しいバージョンをインストールします。

CentOS: サポートされている Chef のバージョン

Chef のバージョン	サポートされている CentOS のバージョン
12	CentOS 7
11.10	(None supported)
11.4 (deprecated)	(None supported)

> **Note**
>
> OpsWorks スタックは CentOS インスタンスの Apache 2.4 をサポートしています。

Red Hat Enterprise Linux

OpsWorks スタックは、Red Hat Enterprise Linux 7 (RHEL 7) の 64 ビットバージョンをサポートしています。最初にサポートされているバージョンは RHEL 7.1 で、Red Hat は約 9 か月ごとにマイナーバージョンをリリースします。マイナーバージョンは RHEL 7.0 と互換性があります。詳細については、「ライフサイクルと更新ポリシー」を参照してください。

新しいインスタンスを起動すると、 OpsWorks Stacks は現在の RHEL 7 バージョンを自動的にインストールします。新しい RHEL 7 マイナーバージョンがリリースされたとき、 OpsWorks スタックは既存のインスタンスのオペレーティングシステムを自動的に更新しないため、新しく作成されたイ

ンスタンスは、スタックの既存のインスタンスよりも新しいバージョンを受け取る可能性があります。以下の方法で既存のインスタンスを現在の RHEL 7 バージョンに更新することで、スタック間のバージョンの整合性を維持することができます。

- オンラインインスタンスの場合は、[Upgrade Operating System] スタックコマンドをyum update指定したインスタンスで実行して、オペレーティングシステムを現在のバージョンに更新します。

  新しいバージョンの RHEL 7 が利用可能になると、[Instances] ページと [Stack] ページに通知が表示されます。この通知内のリンクをクリックすると、[Run Command] ページが表示されます。ここで [Upgrade Operating System] を実行して、インスタンスをアップグレードできます。
- オフラインの更新された Amazon EBS インスタンスの場合は、インスタンスを起動し、前のリスト項目で説明したようにオペレーティングシステムのアップグレードを実行します。
- オフラインの instance store-backed インスタンスの場合、インスタンスの再起動時に OpsWorks スタックは自動的に新しいバージョンをインストールします。

Red Hat Enterprise Linux: サポートされている Node.js のバージョン

RHEL バージョン	Node.js バージョン
7	(Node.js versions only apply to Chef 11.10 stacks) 0.8.19 0.8.26 0.10.11 0.10.21 0.10.24 0.10.25 0.10.27 0.10.29 0.10.40 0.12.10 0.12.12 0.12.13 0.12.15

Red Hat Enterprise Linux: サポートされている Chef のバージョン

Chef のバージョン	サポートされている RHEL バージョン
12	Red Hat Enterprise Linux 7
11.10	Red Hat Enterprise Linux 7
11.4 (deprecated)	(None supported)

0.10.40 よりも古いバージョンの Node.js はすべて非推奨です。また、0.12.7 と 0.12.9 も非推奨となっています。

> **Note**
>
> OpsWorks スタックは、RHEL 7 インスタンスの Apache 2.4 をサポートしています。

Microsoft Windows Server

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

以下の注意事項では、Windows インスタンスの OpsWorks スタックサポートについて説明します。Windows インスタンスは、Chef 12.2 スタックでのみ使用できます。Windows スタックの正確な Chef バージョン番号は 12.22 です。

現在、 OpsWorks スタックエージェントは、英語 - 米国 (en-US) 以外のシステム UI 言語を使用する Windows ベースのインスタンスにインストールすることはできません。 OpsWorks また、 スタックは管理できません。

バージョン

OpsWorks スタックは、次の Windows 64 ビットバージョンをサポートしています。

- Microsoft Windows Server 2022 Base
- Microsoft Windows Server 2022 および SQL Server Express
- Microsoft Windows Server 2022 および SQL Server Standard
- Microsoft Windows Server 2022 および SQL Server Web
- Microsoft Windows Server 2019 Base
- Microsoft Windows Server 2019 および SQL Server Express
- Microsoft Windows Server 2019 および SQL Server Standard
- Microsoft Windows Server 2019 および SQL Server Web

インスタンスの作成

スタックコンソール、API、または CLI OpsWorks を使用して Windows インスタンスを作成します。Windows インスタンスは Amazon EBS でバックアップされていますが、余分な Amazon EBS ボリュームをマウントすることはできません。

Windows スタックでは、手動での起動と停止が可能な 24/7 インスタンスを使用できます。また、時間ベースの自動スケーリングを使用することもできます。これは、ユーザーが指定したスケジュールでインスタンスを自動的に起動および停止する機能です。Windows ベースのスタックでは、負荷ベースの自動スケーリングを使用することはできません。

スタックの外部で作成された Windows インスタンスをスタックに登録することはできません。OpsWorks

更新

AWS は、パッチセットごとに Windows AMI を更新するため、インスタンスを作成すると最新の更新が適用されます。ただし、 OpsWorks スタックはオンライン Windows インスタンスに更新を適用する方法を提供しません。Windows を最新の状態に保つには、最新の AMI が常に実行されるようにインスタンスを定期的に置き換えるのが最も簡単です。

レイヤー

ソフトウェアのインストールと設定やアプリケーションのデプロイなどのタスクを処理するには、カスタムレシピを使用して 1 つ以上のカスタムレイヤー を実装する必要があります。

Chef

Windows インスタンスは Chef 12.22 を使用して chef-client をローカルモードで実行します。これにより、chef-zero と呼ばれるローカルインメモリの Chef サーバーが起動されます。このサーバーが存在する場合、カスタムレシピで Chef 検索およびデータバッグを使用できます。

リモートログイン

OpsWorks スタックは、承認された IAM ユーザーに Windows インスタンスへのログインに使用できるパスワードを提供します。このパスワードは、指定した時間が経過すると期限切れになります。管理者は、SSH キーペアを使用してインスタンスの管理者パスワードを取得し、RDP に無制限にアクセスすることができます。詳細については、「RDP でのログイン」を参照してください。

AWS SDK

OpsWorks スタックは、各インスタンスAWS SDK for .NETに を自動的にインストールします。このパッケージには、AWS .NET ライブラリと Windows 用 AWS ツール (AWS Tools for PowerShellなど) が含まれています。Ruby SDK を使用する場合、カスタムレシピによって適切な gem をインストールすることができます。

モニタリングおよびメトリクス

Windowsインスタンスは、標準的な Amazon CloudWatch (CloudWatch)メトリクスをサポートしており、CloudWatch コンソールで表示することができます。

Ruby

スタックが Windows インスタンスにインストールする Chef OpsWorks 12.22 クライアントには、Ruby 2.3.6 が付属しています。ただし、 OpsWorks スタックは実行可能ファイルの ディレクトリを PATH 環境変数に追加しません。通常であれば `C:\opscode\chef\embedded\bin\` で検索し、アプリケーションがこの Ruby バージョンを使用できるようにします。

OpsWorks スタックエージェント CLI

Windows インスタンスの OpsWorks スタックエージェントは、コマンドラインインターフェイスを公開しません。

プロキシのサポート

Windows インスタンス用のプロキシサポートをセットアップするには、次の作業を行います。

1. を変更`machine.config`して以下を追加します。これにより、Windows PowerShell (初期ブートストラップ) および .NET (OpsWorks スタックエージェント) アプリケーションにプロキシサポートが追加されます。

```
<system.net>
  <defaultProxy>
    <proxy autoDetect="false" bypassonlocal="true"
 proxyaddress="http://10.100.1.91:3128"  usesystemdefault="false" />
    <bypasslist>
      <add address="localhost" />
      <add address="169.254.169.254" />
    </bypasslist>
  </defaultProxy>
</system.net>
```

2. Chef と Git で後で使用するために、次のコマンドを実行して環境変数を設定します。

```
setx /m no_proxy "localhost,169.254.169.254"
setx /m http_proxy "http://10.100.1.91:3128"
setx /m https_proxy "http://10.100.1.91:3128"
```

> **Note**
>
> OpsWorks スタックがインスタンスを更新する方法をより詳細に制御するには、Microsoft Windows Server 2022 Base に基づいてカスタム AMI を作成します。たとえば、カスタム AMI を使用してインスタンスにインストールするソフトウェア (Web Server (IIS) など) を指定できます。詳細については、「カスタム AMI の使用」を参照してください。

レイヤーへのインスタンスの追加

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

レイヤーを作成した後、通常は最低 1 個のインスタンスを追加します。現在の設定が負荷を処理できない場合、より多くのインスタンスを後で追加できます。自動的にインスタンス数を拡張するために、ロードベースまたは時間ベースのインスタンスを使用することもできます。

レイヤーに新規または既存のインスタンスを追加できます。

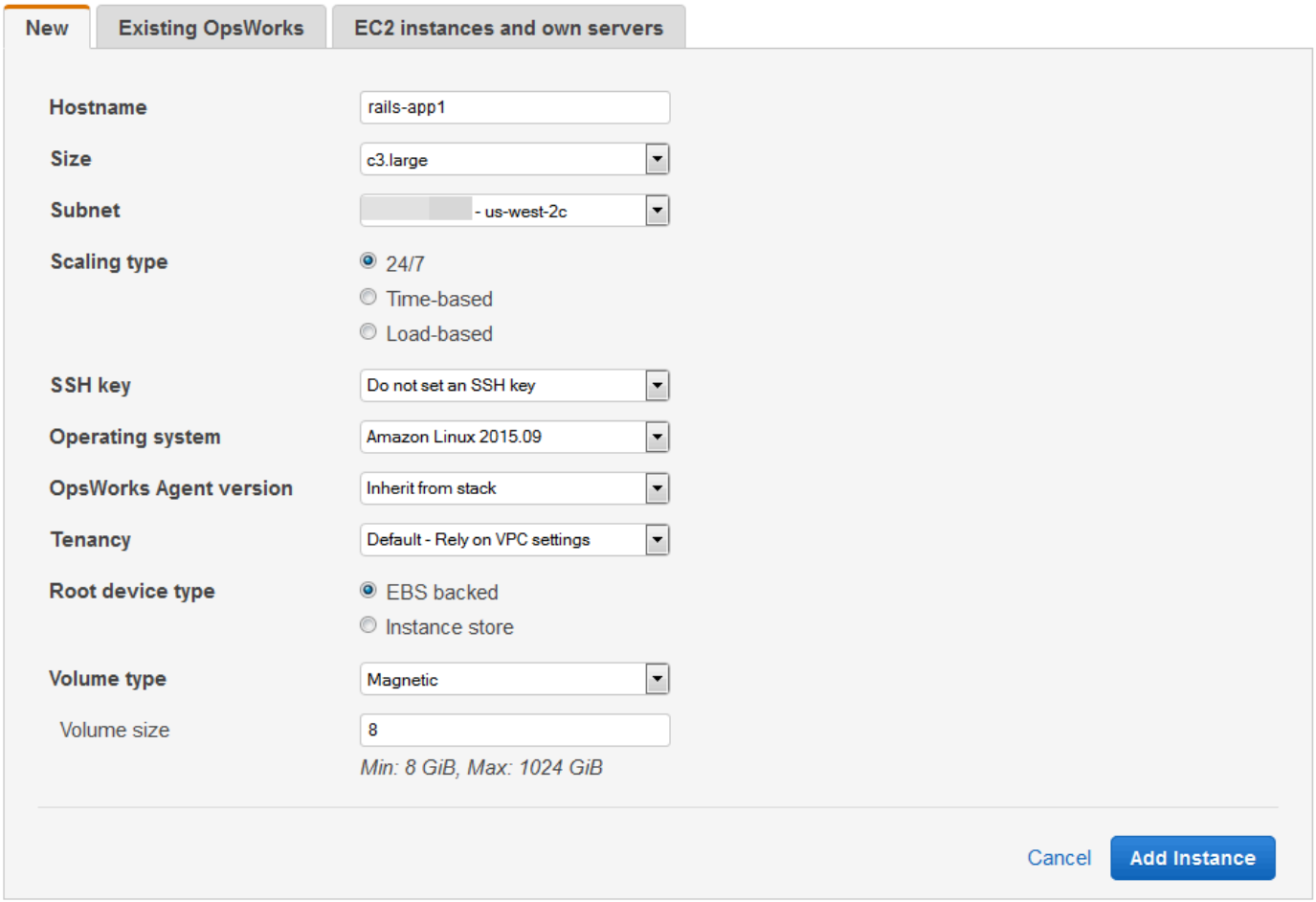
- 新規 - OpsWorks は新しいインスタンスを作成し、仕様に合わせて設定して、レイヤーのメンバーにします。
- 既存 - 互換性のある任意のレイヤーの既存のインスタンスを追加できます。ただし、オフライン(停止)状態である必要があります。

インスタンスが複数のレイヤーに属している場合、ライフサイクルイベントが発生したときや、スタックやデプロイメントコマンドを実行したときに、 OpsWorks Stacks はインスタンスの各レイヤーのレシピを実行します。

また、インスタンスの設定を編集することによって、インスタンスを複数のレイヤーのメンバーにすることができます。詳細については、「インスタンス設定の編集」を参照してください。

レイヤーに新しいインスタンスを追加するには

1. [Instances] ページで適切なレイヤーの [+Instance] を選択し、必要であれば [New] タブを選択します。[ホスト名]、[サイズ]、[サブネット]、[アベイラビリティアベイラビリティゾーン] 以外の設定も行う場合は、[Advanced >>] を選択してさらにオプションを表示します。以下にすべてのオプションを示します。



2. 必要に応じて、多くはスタックの作成時に指定したデフォルト設定をオーバーライドできます。詳細については、「新しいスタックを作成する」を参照してください。

   Hostname

   ネットワークのインスタンスを識別します。デフォルトでは、 OpsWorks スタックは、スタックの作成時に指定したホスト名テーマを使用して各インスタンスのホスト名を生成します。この値をオーバーライドして、任意のホスト名を指定できます。

   サイズ

   メモリの量や仮想コアの数など、インスタンスのリソースを指定する Amazon EC2 インスタンスタイプ。 OpsWorks スタックは各インスタンスのデフォルトサイズを指定し、任意のインスタンスタイプで上書きできます。

   OpsWorks スタックでサポートされているインスタンスタイプは、スタックが VPC にあるかどうかによって異なります。また、AWS 無料利用枠を使用しているアカウントでは、インスタンスタイプは制限されています。[Size (サイズ)] ドロップダウンリストには、使用し

ているスタックでサポートされている Chef バージョンに対してサポートされているインスタンスタイプが表示されます。t1.micro などのマイクロインスタンスには、いくつかのレイヤーをサポートするだけの十分なリソースがない場合があることに注意してください。詳細については、「 のインスタンスタイプ」を参照してください。

> **Note**
>
> 負荷分散されたインスタンスを使用している場合、Configure ライフサイクルイベントによって、1 分以上続くことがある大きな CPU 負荷のスパイクが発生する可能性があることに注意してください。より小規模のインスタンスでは、この負荷のスパイクにより上限がトリガーされる可能性があります (特に、頻繁な Configure イベントがある大規模な負荷分散スタックの場合)。以下に、Configure イベントが不要な上限を発生させる可能性を減らすことができるいくつかの方法を示します。
>
> - より大きなインスタンスを使用し、Configure イベントからの追加の負荷が上限をトリガーしないようにします。
> - CPU リソースを共有する T2 などのインスタンスタイプを使用しないでください。
>
> これにより、Configure イベントが発生した場合は、すべてのインスタンスの CPU リソースすべてが直ちに使用できるようになります。
> - `exceeded threshold` 時間を、Configure イベントの処理に必要な時間よりもかなり長くします (5 分など)。
>
> 詳細については、「自動負荷ベースのスケーリングの使用」を参照してください。

アベイラビリティーゾーン/サブネット

スタックが VPC 内にない場合、この設定は [Availability Zone] と表示され、リージョンのゾーンがリストされます。スタックを作成したときに指定したデフォルトのアベイラビリティーゾーンを上書きするには、この設定を使用できます。

スタックが VPC で実行されている場合、この設定は、[Subnet] と表示され、VPC のサブネットがリストされます。スタックを作成したときに指定したデフォルトのサブネットを上書きするには、この設定を使用できます。

> **Note**
>
> デフォルトでは、 OpsWorks スタックはサブネットの CIDR 範囲を一覧表示します。リストをより読みやすくするには、VPC コンソールまたは API を使用して、キーを に設定**Name**し、値をサブネットの名前に設定します。 OpsWorks スタックはその名前を CIDR 範囲に追加します。前の例では、サブネットの Name タグは **Private** に設定されています。

スケーリングタイプ

インスタンスの起動方法と停止方法を決定します。

- デフォルト値は 24/7 インスタンスで、手動で開始および停止します。
- OpsWorks スタックは、指定されたスケジュールに基づいて時間ベースのインスタンスを起動および停止します。
- (Linux のみ) OpsWorks スタックは、指定されたロードメトリクスに基づいてロードベースのインスタンスを起動および停止します。

> **Note**
>
> 負荷ベースまたは時間ベースのインスタンスを手動で開始または停止することはできません。代わりに、インスタンスを設定すると、 OpsWorks スタックは設定に基づいてインスタンスを起動および停止します。詳細については、「時間ベースおよび負荷ベースのインスタンスによる負荷の管理」を参照してください。

SSH キー

Amazon EC2 キーペア。 OpsWorks スタックはインスタンスにパブリックキーをインストールします。

- Linux インスタンスの場合、SSH クライアントで対応するプライベートキーを使用してインスタンスにログインできます。
- Windows インスタンスの場合、対応するプライベートキーを使用してインスタンスの管理者パスワードを取得できます。その後、RDP でそのパスワードを使用してインスタンスに管理者としてログインできます。

この設定は、スタックの作成時に指定した [Default SSH key] 値に初期設定されます。

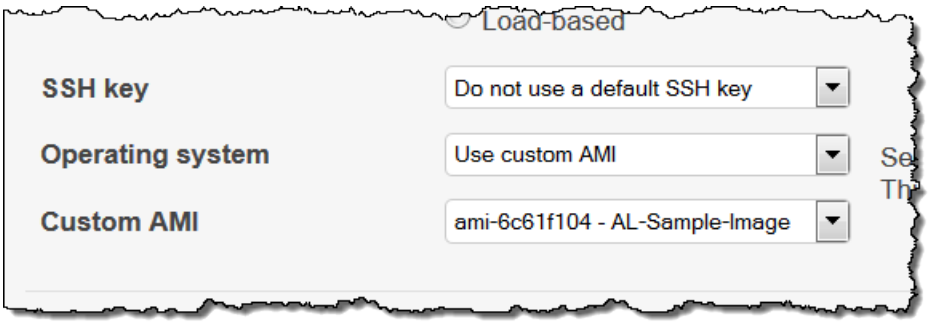
- デフォルト値が [デフォルトのSSHキーを使用しない] に設定されている場合は、自分のアカウントの Amazon EC2 キーのいずれかを指定できます。
- デフォルト値が Amazon EC2 キー に設定されている場合は、別のキーを指定することも、キーを指定しないこともできます。

オペレーティングシステム

オペレーティングシステムは、インスタンスが実行されているオペレーティングシステムを指定します。 OpsWorks スタックは 64 ビットオペレーティングシステムのみをサポートします。

この設定は、スタックの作成時に指定した [デフォルトのオペレーティングシステム] 値に初期設定されます。デフォルト値を上書きして、別の Linux オペレーティングシステムまたはカスタム Amazon マシンイメージ (AMI) を指定できます。ただし、Linux から Windows にまたは Windows から Linux に切り替えることはできません。

[Use custom AMI] を選択すると、ページには [Architecture] および [Root device type] ではなくカスタム AMI のリストが表示されます。



詳細については、「カスタム AMI の使用」を参照してください。

OpsWorks Agent version

OpsWorks エージェントバージョンは、インスタンスで実行する OpsWorks Stacks エージェントのバージョンを指定します。 OpsWorks スタックがエージェントを自動的に更新するようにするには、[Inherit from stack (スタックから継承する)] をオンにします。エージェントの特定のバージョンをインストールし、インスタンスでエージェントを手動更新するには、ドロップダウンリストからバージョンを選択します。

> **Note**
>
> エージェントのバージョンとオペレーティング システムのリリースの組み合わせによってはうまく機能しない場合があります。インスタンスがエージェントを実行している場合、またはインスタンスオペレーティングシステムで完全にサポートされていないエージェントをインスタンスにインストールしている場合、 OpsWorks スタックコンソールには、互換性のあるエージェントをインストールするように指示するエラーメッセージが表示されます。

テナンシー

インスタンスのテナンシーオプションを選択します。お客様専用の物理サーバー上でインスタンスを実行することも可能です。

- Default - Rely on VPC settings: テナンシーなし、または VPC からテナンシー設定を継承します。
- Dedicated - Run a dedicated instance: シングルテナントハードウェアで実行されるインスタンスに対して、時間単位でお支払いいただきます。詳細については、Amazon VPC ユーザーガイドの「ハードウェア専有インスタンス」、および「Amazon EC2 ハードウェア専有インスタンス」を参照してください。
- Dedicated host - Run this instance on a dedicated host: 完全にインスタンスの実行専用の物理ホストに対してお支払いいただき、既存のソケット単位、コア単位、または VM 単位のソフトウェアライセンスを持ち込んでコストを削減できます。詳細については、Amazon EC2 ドキュメントの専有ホストの概要およびAmazon EC2 専有ホストを参照してください。

ルートデバイスタイプ

インスタンスのルートデバイスストレージを指定します。

- Linux インスタンスは、Amazon EBS-backed または Instance store-backed のどちらかです。
- Windows インスタンスは、Amazon EBS-Backed である必要があります。

詳細については、「ストレージ」を参照してください。

> **Note**
>
> スタックはインスタンスのソフトウェアを最初から再インストールする必要 OpsWorks がないため、最初の起動後、Amazon EBS-backed インスタンスは instance store-backed インスタンスよりも速く起動します。詳細については、「ルートデバイスストレージ」を参照してください。

ボリュームタイプ

ルートデバイスボリュームタイプ ([Magnetic]、[Provisioned IOPS (SSD)] または [General Purpose (SSD)]) を指定します。詳細については、「Amazon EBS ボリュームのタイプ」を参照してください。

ボリュームサイズ

指定したボリュームタイプのルートデバイスボリュームのサイズを指定します。詳細については、「Amazon EBS ボリュームのタイプ」を参照してください。

- 汎用 (SSD)。許容される最小サイズは 8 GiB で、最大サイズは 16384 GiB です。
- プロビジョンド IOPS (SSD)。許容される最小サイズは 8 GiB で、最大サイズは 16384 GiB です。設定できる 1 秒あたりの入力/出力操作数は、最小 100 IOPS、最大240 IOPS です。
- マグネティック。許容される最小サイズは 8 GiB で、最大サイズは 1024 GiB です。

3. [Add Instance] を選択して、新しいインスタンスを作成します。

> **Note**
>
> インスタンスを作成するとき、スタックのデフォルトエージェントバージョンの設定を上書きすることはできません。カスタムエージェントバージョンの設定を指定するには、インスタンスを作成し、その設定を編集する必要があります。

既存のインスタンスをレイヤーに追加するには

1. [Instances] ページで適切なレイヤーの [+Instance] を選択し、[Existing] タブを開きます。

> **Note**
>
> 既存のインスタンスを使用しないことにした場合は、前述の手順に従って、[New] を選択して、新しいインスタンスを作成します。

2. [Existing] タブで、リストからインスタンスを選択します。
3. [Add Instance] を選択して、新しいインスタンスを作成します。

インスタンスは Amazon EC2 OpsWorks インスタンスを表しますが、基本的には スタックのデータ構造にすぎません。次のセクションで説明するように、実行中の Amazon EC2 インスタンスを作成するには、インスタンスが開始されている必要があります。

> **Important**
>
> デフォルト VPC 内でインスタンスを起動する場合は、VPC 設定の変更について注意する必要があります。インスタンスは、 OpsWorks スタックサービス、Amazon S3、およびパッケージリポジトリと常に通信できる必要があります。たとえば、デフォルトゲートウェイを削除すると、インスタンスは OpsWorks スタックサービスへの接続を失い、インスタンスは失敗として扱われ、自動的に修復されます。ただし、 OpsWorks スタックは修復されたインスタンスにインスタンスエージェントをインストールできません。エージェントがない場合、インスタンスはサービスと通信できず、起動プロセスは `booting` ステータスの先に進みません。デフォルト VPC の詳細については、「サポートされているプラットフォーム」を参照してください。

スタックの外部で作成されたスタックに Linux OpsWorks コンピューティングリソースを組み込むこともできます。

- コンソール、CLI、または API を使用して直接作成した Amazon EC2 インスタンス。
- 仮想マシンで実行しているインスタンスを含め、独自のハードウェアで実行している On-premises (オンプレミス) インスタンス。

詳細については、「OpsWorks Stacks の外部で作成されたコンピューティングリソースの使用」を参照してください。

カスタム AMI の使用

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックは、カスタム Amazon マシンイメージ (AMIs) と Chef レシピの 2 つの方法でインスタンスをカスタマイズできます。どちらのアプローチでも、インストールするパッケージおよびパッケージバージョンの種類や設定方法などをコントロールできます。ただし、それぞれの利点は異なるため、どちらが最適であるかは要件によって変わります。

カスタム AMI の使用を検討する必要がある主な状況は、次のとおりです。

- インスタンスの起動後に特定のパッケージをインストールするのではなく、特定のパッケージを事前にバンドルする場合。
- レイヤーに一貫したベースイメージを提供するようにパッケージ更新のタイミングを管理する場合。
- インスタンス (特に負荷ベースのインスタンス) を迅速に起動する場合。

Chef レシピの使用を検討すべき主な場合は、次のとおりです。

- カスタム AMI より柔軟性が高い場合。
- 更新が容易な場合。
- 実行中のインスタンスで更新を実行できる場合。

現実的には、両方の手法を組み合わせることが最適なソリューションと考えることもできます。recipe の詳細については、「クックブックとレシピ」を参照してください。

トピック

- カスタム AMIs と OpsWorks スタックの連携方法
- スタック用のカスタム AMI OpsWorks の作成

カスタム AMIs と OpsWorks スタックの連携方法

インスタンスのカスタム AMI を指定するには、新しいインスタンスを作成するときにインスタンスのオペレーティングシステムとしてカスタム AMI を使用するを選択します。 OpsWorks スタックは、スタックのリージョンにあるカスタム AMIs のリストを表示し、リストから適切なものを選択します。詳細については、「レイヤーへのインスタンスの追加」を参照してください。

> **Note**
>
> スタックのデフォルトオペレーティングシステムとして特定のカスタム AMI を指定することはできません。スタックのデフォルトオペレーティングシステムとして `Use custom AMI` を設定できますが、特定の AMI を指定できるのは、新しいインスタンスをレイヤーに追加するときのみです。詳細については、「レイヤーへのインスタンスの追加」および「新しいスタックを作成する」を参照してください。カスタム AMI またはコミュニティで作成された AMI から作成された他のオペレーティングシステム (CentOS 6.x など) を使用してインスタンスを作成できる場合もありますが、そのような方法は公式にはサポートされていません。

このトピックでは、カスタム AMI を作成または使用する前に考慮する必要がある一般的な問題について説明します。

トピック

- 開始時の動作
- レイヤーの選択
- アプリケーションの処理

開始時の動作

インスタンスを起動すると、 OpsWorks Stacks は指定されたカスタム AMI を使用して新しい Amazon EC2 インスタンスを起動します。その後、 OpsWorks Stacks は cloud-init を使用してインスタンスに OpsWorks Stacks エージェントをインストールし、エージェントはインスタンスの Setup レシピと Deploy レシピを実行します。インスタンスがオンラインになると、エージェントは新しく追加されたインスタンスを含め、スタックのすべてのインスタンスに対して Configure レシピを実行します。

レイヤーの選択

OpsWorks スタックエージェントは通常、インストールされているパッケージと競合しません。ただし、インスタンスは少なくとも 1 つの Layer のメンバーである必要があります。 OpsWorks スタックは常にその Layer のレシピを実行するため、問題が発生する可能性があります。カスタム AMI を持つインスタンスをそのレイヤーに追加する前に、レイヤーのレシピによるインスタンスへの操作について正確に理解する必要があります。

インスタンスでレイヤータイプ別に実行されるレシピを確認するには、そのレイヤーを含むスタックを開きます。次に、ナビゲーションペインの [Layers] (レイヤー) をクリックし、目的のレイヤーの [Recipes] (レシピ) をクリックします。実際のコードを表示するには、レシピの名前をクリックします。

> **Note**
>
> Linux AMIs の場合、競合の可能性を減らす方法の 1 つは、 OpsWorks スタックを使用して、カスタム AMI の基礎となるインスタンスをプロビジョニングおよび設定することです。詳細については、「スタックインスタンスからカスタム Linux AMI OpsWorks を作成する」を参照してください。

アプリケーションの処理

パッケージに加えて、AMI にアプリケーションを含めたい場合もあります。大規模で複雑なアプリケーションがある場合、AMI に含めると、インスタンスの起動時間を短縮できます。AMI に小さなアプリケーションを含めることはできますが、通常、 OpsWorks スタックによるアプリケーションのデプロイと比べて、時間上の利点はほとんどまたはまったくありません。

1 つのオプションは、アプリケーションを AMI に含めると共に、リポジトリからインスタンスにアプリケーションをデプロイするアプリケーションを作成することです。このアプローチでは、起動時間が短縮されるだけでなく、インスタンスの実行後にアプリケーションを更新する際に便利な方法を使用できます。Chef レシピはべき等であるため、リポジトリのバージョンがインスタンスのバージョンと同じである限り、デプロイレシピはアプリケーションを変更しません。

スタック用のカスタム AMI OpsWorks の作成

スタックでカスタム AMI OpsWorks を使用するには、まずカスタマイズされたインスタンスから AMI を作成する必要があります。2 つのオプションから選択できます。

- Amazon EC2 コンソールまたは API を使用して、OpsWorks スタック対応 AMI のいずれかの 64 ビット版に基づくインスタンスを作成およびカスタマイズします。
- Linux AMI では、OpsWorks を使用して、関連するレイヤーの設定に基づく Amazon EC2 インスタンスを作成します。

カスタム Linux AMI を作成する前に、/tmpパーティションnoexecで を無効にして、スタックがカスタム Linux OpsWorks インスタンスにエージェントをインストールできるようにします。

> **Note**
>
> AMI はすべてのインスタンスタイプに対応している訳ではないことにご注意ください。開始する AMI が、使用するインスタンスタイプと互換性があることを確認してください。特に、R3 インスタンスタイプには、ハードウェアアシストによる仮想化 (HVM) AMI が必要です。

次に Amazon EC2 コンソールまたは API を使用して、カスタマイズしたインスタンスからカスタム AMI を作成します。インスタンスをレイヤーに追加し、カスタム AMI を指定することで、同じリージョンのすべてのスタックでカスタム AMI を使用できます。カスタム AMI を使用するインスタンスの作成方法の詳細については、「レイヤーへのインスタンスの追加」を参照してください。

> **Note**
>
> デフォルトでは、 OpsWorks スタックは起動時にすべての Amazon Linux 更新プログラムをインストールします。これにより、最新のリリースが提供されます。また Amazon Linux は新しいバージョンを約 6 か月ごとにリリースしており、大きな変更が実施される場合もあります。デフォルトで、Amazon Linux に基づくカスタム AMI は、新しいバージョンがリリースされると自動的に更新されます。カスタム AMI は特定の Amazon Linux バージョンに口ックしておき、新しいバージョンをテストするまで更新を延期できるようにすることをお勧めします。詳細については、「AMI を特定のバージョンに固定するにはどうすればよいですか?」を参照してください。

トピック

- Amazon EC2 を使用したカスタム AMI の作成
- スタックインスタンスからカスタム Linux AMI OpsWorks を作成する
- カスタム Windows AMI の作成

Amazon EC2 を使用したカスタム AMI の作成

カスタム AMI を作成する最も簡単な方法 (Windows AMI の唯一のオプション) は、Amazon EC2 コンソールまたは API を使用してタスク全体を実行することです。次のステップの詳細については、[独自の AMI の作成] を参照してください。

Amazon EC2 コンソールまたは API を使用してカスタム AMI を作成するには

1. いずれかのOpsWorks スタック対応 AMI の 64 ビット版を使用してインスタンスを作成します。
2. インスタンスを設定し、パッケージをインストールするなどして、ステップ 1 からインスタンスをカスタマイズします。インストールしたものすべてが、AMI に基づいてすべてのインスタンス上で再現されるため、特定のインスタンスに固有の項目は含めないでください。
3. インスタンスを停止し、カスタム AMI を作成します。

スタックインスタンスからカスタム Linux AMI OpsWorks を作成する

カスタマイズされた Stacks Linux OpsWorks インスタンスを使用して AMI を作成するには、OpsWorks によって作成されたすべての Amazon EC2 インスタンスに一意の ID が含まれていることに注意してください。このようなインスタンスからカスタム AMI を作成した場合、その ID が含まれ、AMI に基づくすべてのインスタンスが同じ ID を持つことになります。カスタム AMI に基づくインスタンスが確実に固有の ID を得るには、AMI を作成する前に、カスタマイズしたインスタンスから ID を削除する必要があります。

スタックインスタンスからカスタム AMI OpsWorks を作成するには

1. Linux スタックを作成し、1 つ以上のレイヤーを追加して、カスタマイズしたインスタンスの設定を定義します。組み込みレイヤー、完全なカスタムレイヤーに加え、必要に応じてカスタマイズしたレイヤーを使用できます。詳細については、「OpsWorks スタックのカスタマイズ」を参照してください。
2. レイヤーを編集し、自動ヒーリングを無効にします。
3. 任意の Linux ディストリビューションを使用してインスタンスをレイヤーに追加し、起動します。Amazon EBS-backed インスタンスの使用をお勧めします。インスタンスの詳細ページを開き、後で使用できるよう Amazon EC2 ID を記録します。
4. インスタンスがオンラインである場合は、SSH でログインし、インスタンスのオペレーティングシステムに応じて次の 4 つのステップのいずれかを実行します。
5. Chef 11 または Chef 12 スタックの Amazon Linux インスタンス、または Chef 11 スタックの Red Hat Enterprise Linux 7 インスタンスの場合、次を実行します。

a. `sudo /etc/init.d/monit stop`

b. `sudo /etc/init.d/opsworks-agent stop`

c. `sudo rm -rf /etc/aws/opsworks/ /opt/aws/opsworks/ /var/log/aws/opsworks/ /var/lib/aws/opsworks/ /etc/monit.d/opsworks-agent.monitrc /etc/monit/conf.d/opsworks-agent.monitrc /var/lib/cloud/ /etc/chef`

> **Note**
>
> Chef 12 スタックのインスタンスについて、このコマンドに次の 2 つのフォルダを追加します。
>
> - `/var/chef`
> - `/opt/chef`

d. `sudo rpm -e opsworks-agent-ruby`

e. `sudo rpm -e chef`

6. Chef 12 スタックの Ubuntu 16.04 LTS または 18.04 LTS インスタンスでは、次を実行します。

a. `sudo systemctl stop opsworks-agent`

b. `sudo rm -rf /etc/aws/opsworks/ /opt/aws/opsworks/ /var/log/aws/opsworks/ /var/lib/aws/opsworks/ /etc/monit.d/opsworks-agent.monitrc /etc/monit/conf.d/opsworks-agent.monitrc /var/lib/cloud/ /var/chef /opt/chef /etc/chef`

c. `sudo apt-get -y remove chef`

d. `sudo dpkg -r opsworks-agent-ruby`

e. `systemctl stop apt-daily.timer`

f. `systemctl stop apt-daily-upgrade.timer`

g. `rm /var/lib/systemd/timers/stamp-apt-daily.timer`

h. `rm /var/lib/systemd/timers/stamp-apt-daily-upgrade.timer`

7. Chef 12 スタックの他のサポートされている Ubuntu バージョンでは、次を実行します。

a. `sudo /etc/init.d/monit stop`

b. `sudo /etc/init.d/opsworks-agent stop`

c. `sudo rm -rf /etc/aws/opsworks/ /opt/aws/opsworks/ /var/log/aws/opsworks/ /var/lib/aws/opsworks/ /etc/monit.d/opsworks-agent.monitrc /etc/monit/conf.d/opsworks-agent.monitrc /var/lib/cloud/ /var/chef /opt/chef /etc/chef`

d. `sudo apt-get -y remove chef`

e. `sudo dpkg -r opsworks-agent-ruby`

8. Chef 12 スタックの Red Hat Enterprise Linux 7 インスタンスの場合は、次を実行します。

a. `sudo systemctl stop opsworks-agent`

b. `sudo rm -rf /etc/aws/opsworks/ /opt/aws/opsworks/ /var/log/aws/opsworks/ /var/lib/aws/opsworks/ /etc/monit.d/opsworks-agent.monitrc /etc/monit/conf.d/opsworks-agent.monitrc /var/lib/cloud/ /etc/chef /var/chef`

c. `sudo rpm -e opsworks-agent-ruby`

d. `sudo rpm -e chef`

9. このステップは、インスタンスタイプによって異なります。

- Amazon EBS-backed インスタンスの場合は、「Amazon EBS-Backed Linux AMI の作成」の説明に従って OpsWorks 、 スタックコンソールを使用してインスタンスを停止し、AMI を作成します。 https://docs.aws.amazon.com/AWSEC2/latest/UserGuide/creating-an-ami-ebs.html
- instance store-backed インスタンスの場合は、「Instance Store-Backed Linux AMI の作成」の説明に従って AMI を作成し、 OpsWorks スタックコンソールを使用してインスタンスを停止します。

  AMI を作成する際は、必ず証明書ファイルを含めます。例えば、`-i` 引数を `-i $(find /etc /usr /opt -name '*.pem' -o -name '*.crt' -o -name '*.gpg' | tr '\n' ',')` に設定して `ec2-bundle-vol` コマンドを呼び出すことができます。バンドルするとき、apt パブリックキーを削除しないでください。デフォルトの `ec2-bundle-vol` コマンドがこのタスクを処理します。

10. スタックコンソールに戻り OpsWorks 、スタックからインスタンスを削除して、スタックをクリーンアップします。

カスタム Windows AMI の作成

次の手順では、Windows Server 2022 Base 用のカスタム AMI を作成します。Amazon EC2 管理コンソールで、他の Windows Server オペレーティングシステムを選択できます。

> **Important**
>
> 現在、 OpsWorks スタックエージェントは、英語 - 米国 (en-US) 以外のシステム UI 言語を使用する Windows ベースのインスタンスにインストールすることはできません。 OpsWorks また、 スタックは管理できません。

トピック

- Sysprep を使用したカスタム Windows AMI の作成
- Sysprep を使用しないカスタム Windows AMI の作成
- カスタム Windows AMI を使用した新しいインスタンスの追加

Sysprep を使用したカスタム Windows AMI の作成

通常、Sysprep を使用してカスタム Windows AMI を作成するとインスタンスの起動が遅くなりますが、よりクリーンなプロセスとなります。で作成されたイメージから作成されたインスタンスの初回起動`Sysprep`には、`Sysprep`アクティビティ、再起動、 OpsWorks スタックのプロビジョニング、およびセットアップや設定を含む最初の OpsWorks スタックの実行により、時間がかかります。Amazon EC2 コンソールで、カスタム Windows AMI を作成するためのステップを完了します。

Sysprep でカスタム Windows AMI を作成するには

1. Amazon EC2 コンソールで、[Launch Instance (インスタンスを起動する)] を選択します。
2. [Microsoft Windows Server 2022 Base] を見つけて、[選択] を選択します。
3. 目的のインスタンスタイプを選択し、[Configure Instance Details] を選択します。AMI で、マシン名、ストレージ、セキュリティグループ設定などの設定変更を行います。[Launch] (起動する) を選択します。
4. インスタンスのブートプロセスが終了したら、パスワードを使用して、Windows の [リモートデスクトップ接続] ウィンドウでインスタンスに接続します。
5. Windowsの [Start] (スタート) 画面で [Start] (スタート) を選択し、次に **`ec2configservice`** の入力を開始し、結果に [EC2ConfigServiceSettings] コンソールを表示されるまで続けます。 コンソール を開きます。

6. General タブで、Enable UserData execution チェックボックスがオンになっていることを確認します (このオプションは では必須ではありませんがSysprep、 OpsWorks スタックがエージェントをインストールするために必要です)。[Set the computer name of the instance...] (インスタンスのコンピュータ名の設定...) オプションのチェックボックスをオフにします。このオプションをオンにすると、 OpsWorks スタックで再起動が繰り返されることがあるためです。
7. [Image] (イメージ) タブで、[Administrator Password] (管理者パスワード) を、Amazon EC2 が SSH キーで取得できるパスワードを自動的に生成することを許可する [Random] (ランダム)、または自分のパスワードを指定する [Specify] (指定) のいずれかに設定します。Sysprep はこの設定を保存します。独自のパスワードを指定した場合は、都合の良い場所にパスワードを保存します。[Keep Existing] は選択しないことをお勧めします。
8. [Apply] を選択し、[Shutdown with Sysprep] を選択します。確認を求められたら、[Yes] を選択します。
9. インスタンスが停止したら、Amazon EC2 コンソールで [インスタンス] リストのインスタンスを右クリックし、[イメージ] を選択して、[イメージの作成] を選択します。
10. [Create Image] ページで、イメージの名前と説明を指定し、ボリュームの設定を指定します。終了したら、[Create Image] を選択します。
11. [Images] ページを開き、イメージが [pending] 段階から [available] に変わるのを待ちます。新しい AMI を使用する準備ができました。

Sysprep を使用しないカスタム Windows AMI の作成

Amazon EC2 コンソールで、カスタム Windows AMI を作成するためのステップを完了します。

Sysprep なしでカスタム Windows AMI を作成するには

1. Amazon EC2 コンソールで、[Launch Instance] (インスタンスを起動する) を選択します。
2. [Microsoft Windows Server 2022 Base] を見つけて、[選択] を選択します。
3. 目的のインスタンスタイプを選択し、[Configure Instance Details] を選択します。AMI で、マシン名、ストレージ、セキュリティグループ設定などの設定変更を行います。[Launch] (起動する) を選択します。
4. インスタンスのブートプロセスが終了したら、パスワードを使用して、Windows の [リモートデスクトップ接続] ウィンドウでインスタンスに接続します。
5. インスタンスで、`C:\Program Files\Amazon\Ec2ConfigService\Settings\config.xml` を開き、次の 2 つの設定を変更してから、ファイルを保存して閉じます。

   - `Ec2SetPassword` ~ `Enabled`

- `Ec2HandleUserData~Enabled`

6. リモートデスクトップセッションからの接続を切り、Amazon EC2 コンソールに戻ります。
7. [Instances] リストで、インスタンスを停止します。
8. インスタンスが停止したら、コンソールで [Instances] (インスタンス) リストのインスタンスを右クリックし、[Image] (イメージ) を選択して、[Create Image] (イメージの作成) を選択します。
9. [Create Image] ページで、イメージの名前と説明を指定し、ボリュームの設定を指定します。終了したら、[Create Image] を選択します。
10. [Images] ページを開き、イメージが [pending] 段階から [available] に変わるのを待ちます。新しい AMI を使用する準備ができました。

カスタム Windows AMI を使用した新しいインスタンスの追加

イメージが [available] 状態に変わったら、カスタム Windows AMI に基づいて新しいインスタンスを作成できます。[Operating system] (オペレーティングシステム) のリストから [Use custom Windows AMI] (カスタム Window AMI を使用する) を選択すると、 OpsWorks Stacks はカスタム AMI のリストを表示します。

カスタム Windows AMI に基づいて新しいインスタンスを追加するには

1. 新しい AMI が利用可能になったら、 OpsWorks スタックコンソールに移動し、Windows スタックのインスタンスページを開き、ページの下部にある + インスタンスを選択して新しいインスタンスを追加します。
2. [New] タブの [Advanced] を選択します。
3. [Operating system] ドロップダウンリストで、[Use custom Windows AMI] を選択します。
4. [Custom AMI] ドロップダウンリストで、作成した AMI を選択し、[Add Instance] を選択します。

これで、インスタンスを起動して実行できるようになりました。

24/7 インスタンスの手動による起動、停止、再起動

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソ

リューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> Linux スタックと Windows スタックの両方で 24/7 インスタンスを使用できます。

24/7 インスタンスをレイヤーに追加したら、インスタンスを手動で起動して対応する Amazon Elastic Compute Cloud (Amazon EC2) インスタンスを起動し、手動で停止して Amazon EC2 インスタンスを終了する必要があります。正常に機能していないインスタンスを手動で再起動することもできます。 OpsWorks スタックは、時間ベースおよび負荷ベースのインスタンスを自動的に開始および停止します。詳細については、「時間ベースおよび負荷ベースのインスタンスによる負荷の管理」を参照してください。

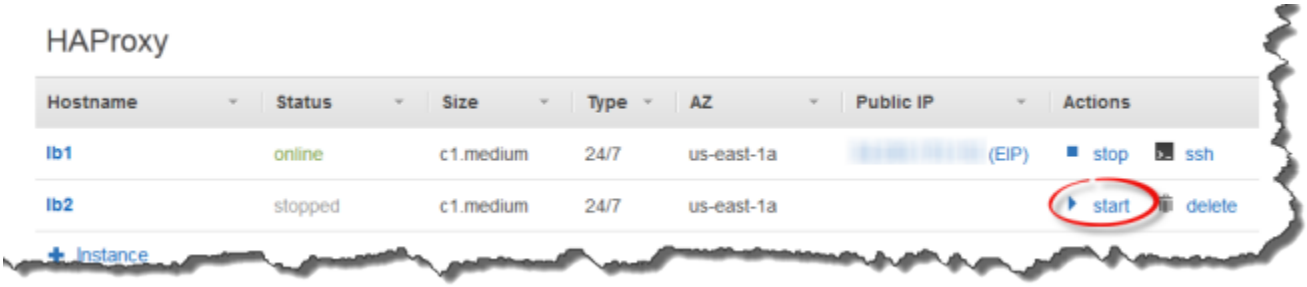
> **Important**
>
> OpsWorks スタックインスタンスは、 OpsWorks コンソールでのみ起動、停止、再起動する必要があります。Amazon EC2 OpsWorks コンソールで実行された起動、停止、再起動オペレーションは認識されません。

トピック

- インスタンスの起動または再起動
- インスタンスの停止
- インスタンスの再起動

インスタンスの起動または再起動

新しいインスタンスを起動するには、[Instances] (インスタンス) ページでインスタンスの [Actions] (アクション) 列の [start] (開始) をクリックします。



複数のインスタンスを作成し、[Start all Instances] をクリックしてこれらのすべてを同時に起動することもできます。

インスタンスを起動すると、 OpsWorks スタックは Amazon EC2 インスタンスを起動し、オペレーティングシステムを起動します。起動プロセスには通常数分かかり、Windows インスタンスの方が Linux インスタンスより少し時間がかまります。起動処理が進行するに従って、インスタンスの [Status] フィールドに次のような一連の値が表示されます。

1. リクエスト - OpsWorks スタックが Amazon EC2 サービスを呼び出して Amazon EC2 インスタンスを作成しました。
2. 保留中 - OpsWorks スタックは Amazon EC2 インスタンスの起動を待っています。
3. [booting] (起動中) - Amazon EC2 インスタンスの起動中です。
4. running_setup - OpsWorks スタックが Setup イベントをトリガーし、レイヤーのSetupレシピとそれに続くDeployレシピを実行しています。詳細については、「レシピの実行」を参照してください。スタックにカスタムクックブックを追加した場合、 および SetupDeployレシピを実行する前に、 OpsWorks スタックはリポジトリから現在のバージョンをインストールします。
5. online - インスタンスは利用可能です。

[Status] が [online] に変わると、インスタンスは完全に操作可能になります。

- レイヤーにロードバランサーがアタッチされている場合、 OpsWorks スタックはインスタンスを追加します。
- OpsWorks スタックはConfigureイベントをトリガーし、各インスタンスのConfigureレシピを実行します。

  必要に応じて、新しいインスタンスに対応するためにこれらのレシピによりインスタンスが更新されます。
- OpsWorks スタックは、インスタンスの開始アクションを停止に置き換えます。これを使用してインスタンスを停止できます。

インスタンスが正常に起動しなかった場合、または Setup レシピが失敗した場合、ステータスはそれぞれ start_failed または setup_failed に設定されます。ログを確認して原因を特定できます。詳細については、「デバッグとトラブルシューティングのガイド」を参照してください。

停止されたインスタンスはスタックの一部として残り、すべてのリソースを保持します。例えば、Amazon EBS ボリュームや Elastic IP アドレスは、停止したインスタンスに関連付けられたままです。停止したインスタンスを再開するには、インスタンスの [Actions] (アクション) 列で [start] (開始) を選択します。停止したインスタンスを再開すると、次の処理が実行されます。

- Instance store-backed インスタンス – OpsWorks スタックは、同じ設定で新しい Amazon EC2 インスタンスを起動します。
- Amazon EBS-backed インスタンス – OpsWorks スタックは Amazon EC2 インスタンスを再起動し、ルートボリュームを再アタッチします。

インスタンスの起動が完了すると、 OpsWorks スタックはオペレーティングシステムの更新をインストールし、最初の起動と同様に Setupおよび Deployレシピを実行します。 OpsWorks スタックは、再起動されたインスタンスに対して必要に応じて以下も実行します。

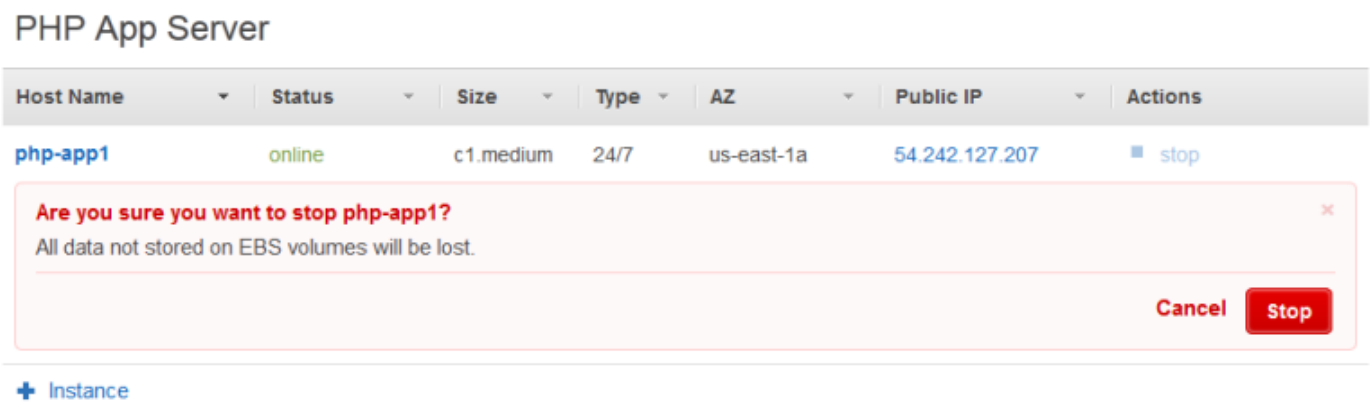
- Elastic IP アドレスを再度関連付けます。
- Amazon Elastic Block Store (Amazon EBS) ボリュームを再接続します。
- Instance store-backed インスタンスの場合、最新のクックブックバージョンをインストールします。

  Amazon EBS-backed インスタンスは、ルートボリュームに保存されたカスタムクックブックを使用し続けます。インスタンスを停止してからカスタムクックブックが変化した場合、インスタンスがオンラインになったら手動で更新する必要があります。詳細については、「カスタムクックブックの更新」を参照してください。

> **Note**
>
> Elastic IP アドレスが再開されたインスタンスに再度関連付けられるには数分かかる場合があります。インスタンスの Elastic IP 設定はメタデータを表しており、アドレスがインスタンスと関連付けられる必要があることを示しているにすぎない点に注意してください。[Public IP] 設定はインスタンスの状態を反映しており、最初は空の可能性があります。Elastic IP アドレスがインスタンスに関連付けられると、そのアドレスは [Public IP] 設定に割り当てられ、その後に「(EIP)」が付きます。

インスタンスの停止

インスタンスページで、インスタンスのアクション列の停止をクリックします。これにより、シャットダウンレシピを実行して EC2 インスタンスを終了するように OpsWorks スタックに通知されます。



また、[Stop All Instances] をクリックして、すべてのインスタンスをシャットダウンすることもできます。

インスタンスを停止すると、 OpsWorks Stacks はいくつかのタスクを実行します。

1. インスタンスのレイヤーに Elastic Load Balancing ロードバランサーがアタッチされている場合、OpsWorks Stacks はインスタンスの登録を解除します。

   レイヤーでロードバランサーの Connection Draining 機能がサポートされている場合、 OpsWorks スタックは Connection Draining が完了するまで Shutdown イベントのトリガーを遅らせます。詳細については、「Elastic ロードバランシングレイヤー」を参照してください。
2. OpsWorks スタックは、インスタンスのShutdownレシピを実行するShutdownイベントをトリガーします。
3. Shutdown イベントをトリガーした後、 OpsWorks スタックは指定された時間待機してShutdownレシピが終了するのを許可し、以下を実行します。
   - Instance store-Backed インスタンスを終了し、これによりすべてのデータが削除されます。
   - Amazon EBS-Backed インスタンスを停止します。これによりルートボリュームのデータが保持されます。

   インスタンスストレージについては、「ストレージ」を参照してください。

> **Note**
>
> デフォルトのシャットダウンタイムアウト設定は 120 秒です。Shutdown レシピでさらに時間が必要な場合は、レイヤー設定を編集して設定を変更できます。

シャットダウンプロセスは、インスタンスの Status 列を見ることでモニタリングできます。シャットダウン処理が進行するに従って、次のような一連の値が表示されます。

1. 終了 - OpsWorks スタックは Amazon EC2 インスタンスを終了しています。
2. shutting_down - OpsWorks スタックはレイヤーのShutdownレシピを実行しています。
3. [terminated終了] (終了) - Amazon EC2 インスタンスを終了しました。
4. stopped - インスタンスは停止しました。

インスタンスの再起動

[Instances] ページで、機能していないインスタンスの名前をクリックし、詳細ページを開いた後、[Reboot] をクリックします。

このコマンドは、関連付けられた Amazon EC2 インスタンスのソフト再起動を実行します。Instance store-backed インスタンスの場合でもインスタンスのデータを削除せず、ライフサイクルイベントをトリガーしません。

> **Note**
>
> OpsWorks スタックで障害が発生したインスタンスを自動的に置き換えるには、自動ヒーリングを有効にします。詳細については、「自動ヒーリングの使用」を参照してください。

時間ベースおよび負荷ベースのインスタンスによる負荷の管理

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

着信トラフィックが一定でない場合、負荷を処理するにはスタックのインスタンスが少なすぎたり、必要以上に多すぎたりします。時間ベースまたは負荷ベースのインスタンスを使用することで、レイヤーのインスタンス数が自動的に調整され、不必要な容量に余分な支払いをすることなく着信トラフィックを処理するのに十分なインスタンスを常に確保できるので、時間と費用の両方で節約できます。サーバーの負荷を監視したり、手動でインスタンスを起動または停止したりする必要はありません。また、時間ベースおよび負荷ベースのインスタンスは自動的に、リージョン内の複数のアベイラビリティゾーンでアプリケーションを分散、スケーリング、および均等にし、地理的冗長性と拡張性を提供します。

自動スケーリングは、2 つのインスタンスタイプに基づいており、異なる条件でレイヤーのオンラインインスタンスを調整します。

- 時間ベースのインスタンス

  これらのインスタンスは、特定の時間または特定の日にのみ実行するインスタンスを含めることで、スタックが予測パターンに従って負荷を処理できるようにします。たとえば、午後 6 時からに一部のインスタンスを起動して夜間のバックアップタスクを実行したり、トラフィックが少ない週末に一部のインスタンスを停止したりできます。

- 負荷ベースのインスタンス

  これらのインスタンスにより、任意の負荷メトリクスに基づいて、トラフィックが多い時には追加のインスタンスを起動し、トラフィックが少ない時にはトラフィック停止することで、スタックが変化する負荷を処理できるようにします。たとえば、平均 CPU 使用率が 80% を超えると OpsWorks スタックでインスタンスを起動し、平均 CPU 負荷が 60% を下回るとインスタンスを停止できます。

Linux スタックでは時間ベースと負荷ベース両方のインスタンスがサポートされますが、Windows スタックでは時間ベースのインスタンスのみがサポートされています。

手動で起動および停止する必要がある 24/7 インスタンスとは異なり、時間ベースまたは負荷ベースのインスタンスは手動で起動または停止する必要がありません。代わりに、インスタンスを設定すると OpsWorks 、 スタックはその設定に基づいてインスタンスを開始または停止します。たとえば、指定したスケジュールで開始および停止するように時間ベースのインスタンスを設定します。OpsWorks スタックはその設定に従ってインスタンスを開始および停止します。

一般的な方法は、次のように 3 つのインスタンスタイプを共に使用することです。

- 基本負荷を処理する一連の 24/7 インスタンス。通常、これらのインスタンスを起動し、常に実行するようにします。
- 予測可能なトラフィックのバリエーションを処理するために OpsWorks スタックが開始および停止する、時間ベースのインスタンスのセット。たとえば、就業時間にトラフィックが最も多い場合、朝に起動して夜にシャットダウンするように時間ベースのインスタンスを設定できます。
- 予期しないトラフィックの変動を処理するために OpsWorks スタックが開始および停止する負荷ベースのインスタンスのセット。 OpsWorks スタックは、負荷がスタックの 24/7 および時間ベースのインスタンスの容量に近づいたときに起動し、トラフィックが通常に戻ったときに停止します。

これらのスケーリング時間を処理する方法の詳細については、「サーバー数の最適化 」を参照してください。

> **Note**
>
> インスタンスのレイヤー用のアプリケーションを作成した場合、またはカスタムクックブックを作成した場合、 OpsWorks スタックは、最初に起動されたときに最新バージョンを時間ベースおよびロードベースのインスタンスに自動的にデプロイします。ただし、 OpsWorks スタックは、再起動されたオフラインインスタンスに最新のクックブックをデプロイするとは限りません。詳細については、「アプリケーションの編集」および「カスタムクックブックの更新」を参照してください。

トピック

- 自動時間ベースのスケーリングの使用
- 自動負荷ベースのスケーリングの使用

- 負荷ベースのスケーリングと自動修復の違い

自動時間ベースのスケーリングの使用

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

時間ベースのスケーリングでは、指定したスケジュールでインスタンスを開始または停止することで、レイヤーが特定の時間帯または曜日にオンラインにするインスタンスの数を制御できます。OpsWorks スタックは数分ごとにチェックし、必要に応じてインスタンスを開始または停止します。次のように、インスタンスごとに個別の予定を指定します。

- 時刻。たとえば、夜間よりも日中により多くのインスタンスを実行することができます。
- 曜日。たとえば、週末より平日により多くのインスタンスを実行することができます。

> **Note**
>
> 特定の日付を指定することはできません。

トピック

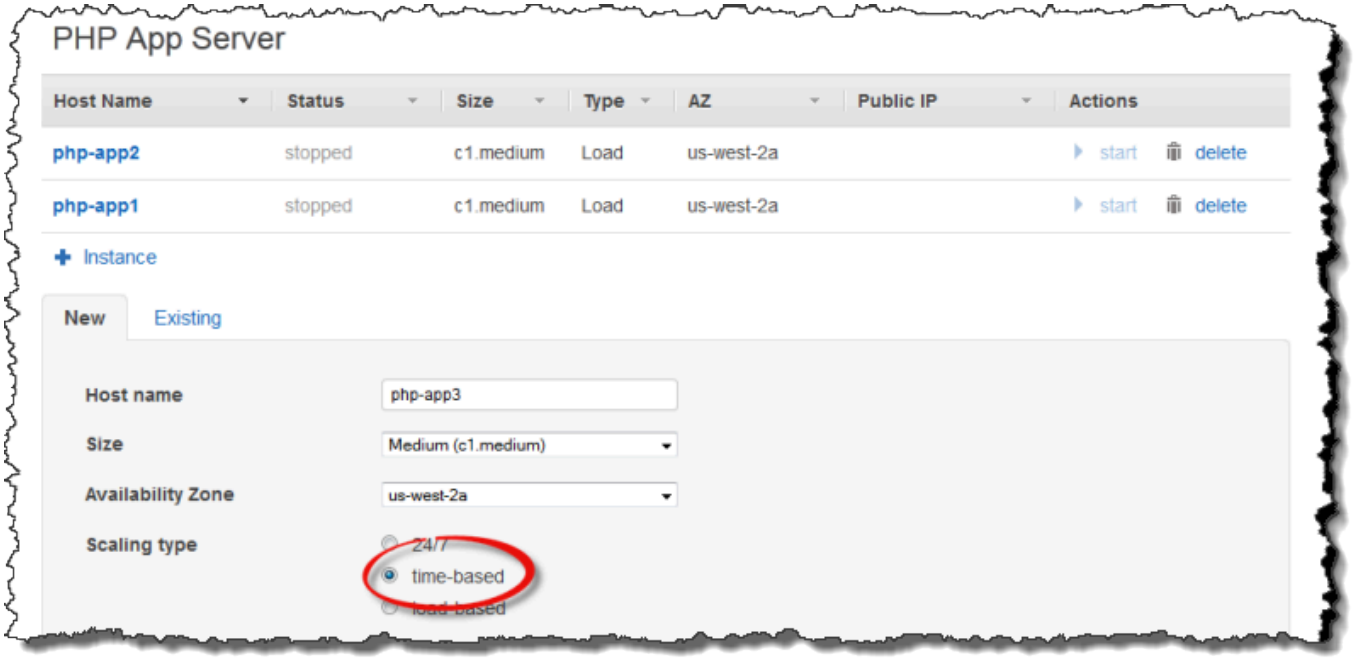
- レイヤーへの時間ベースのインスタンスを追加する
- 時間ベースのインスタンスの構成

レイヤーへの時間ベースのインスタンスを追加する

レイヤーに新しい時間ベースのインスタンスを追加するか、既存のインスタンスを使用します。

新しい時間ベースのインスタンスを追加するには

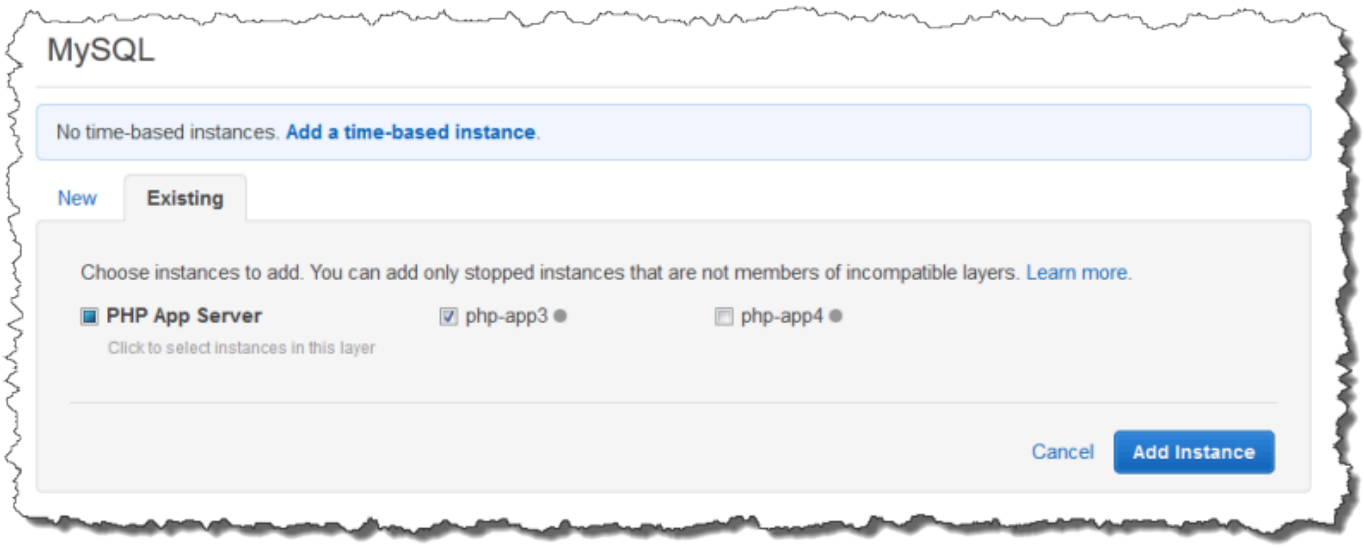
1. [インスタンス] ページで [+ インスタンス] を選択して、インスタンスを追加します。[新規] タブで、[アドバンスト] を選択してから、[時間ベース] を選択します。



2. インスタンスを設定します。次に、[インスタンスの追加] を選択して、インスタンスをレイヤーに追加します。

既存の時間ベースのインスタンスをレイヤーに追加するには

1. [時間ベースのインスタンス] ページで、すでに時間ベースのインスタンスがある場合、[+ インスタンス] を選択します。それ以外の場合は、[時間ベースのインスタンスを追加] をクリックします。次に、[既存] タブを選択します。



2. [既存] タブで、リストからインスタンスを選択します。リストには時間ベースのインスタンスのみが表示されます。

> **Note**
>
> 既存のインスタンスを使用しなくなった場合は、前述の手順に従って、[新規] タブで新しいインスタンスを作成します。

3. [インスタンスの追加] を選択して、インスタンスをレイヤーに追加します。

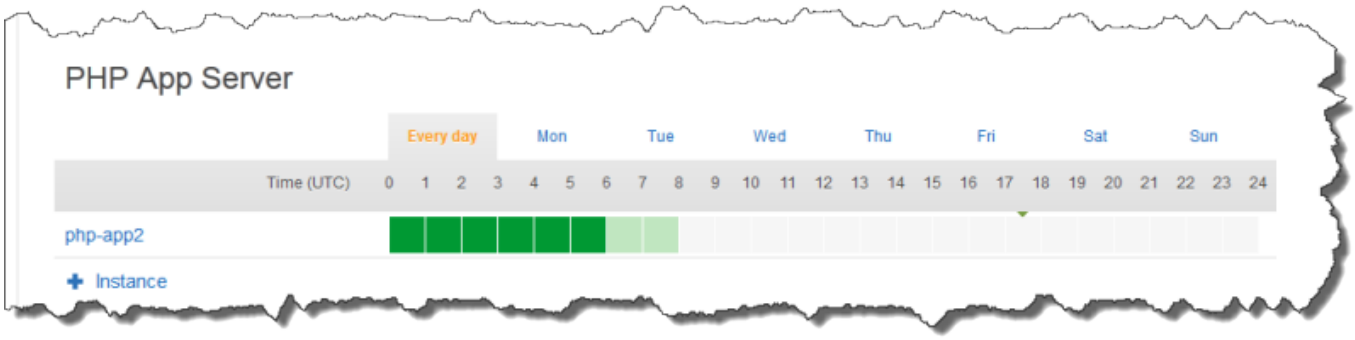
時間ベースのインスタンスの構成

レイヤーに時間ベースのインスタンスを追加したら、次のようにスケジュールを設定します。

時間ベースのインスタンスを設定するには

1. ナビゲーションペインの [インスタンス] で、[時間ベース] を選択します。
2. 希望する時間の下にある適切なボックスを入力して、各時間ベースのインスタンスにオンライン期間を指定します。

   - 毎日同じスケジュールを使用するには、[毎日] タブを選択し、次にオンライン期間を指定します。
   - 異なる日に異なるスケジュールを使用するには、毎日を選択し、次に適切な期間を選択します。



> **Note**
>
> インスタンスを起動するのにかかる時間を確保し、 OpsWorks スタックがインスタンスを起動または停止するかどうかを数分ごとにチェックするようにしてください。たとえば、インスタンスを 1 時 (UTC) までに実行する必要がある場合、0 時 (UTC) にそのインスタンスを起動します。そうしないと、 OpsWorks スタックは 1:00 UTC から数分経過するまでインスタンスを起動せず、インスタンスがオンラインになるまでにさらに数分かかることがあります。

上記の手順を実行することで、インスタンスのオンライン期間をいつでも変更できます。次回 OpsWorks スタックがチェックするとき、新しいスケジュールを使用してインスタンスを起動または停止するかどうかを決定します。

> **Note**
>
> レイヤーに新しい時間ベースのインスタンスを 追加するには、[時間ベース] ページを開き、[時間ベースのインスタンスを追加] (レイヤーに時間ベースのインスタンスをまだ追加していない場合) を選択、または [+インスタンス] (レイヤーにすでに1つ以上の時間ベースのインスタンスがある場合) を選択します。次に、前述の手順で説明したようにインスタンスを構成します。

自動負荷ベースのスケーリングの使用

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

ロードベースのインスタンスを使用すると、受信トラフィックの変化に応じてインスタンスをすばやく開始または停止できます。 OpsWorks スタックは Amazon CloudWatch データを使用して、レイヤーごとに次のメトリクスを計算します。これは、レイヤーのすべてのインスタンスの平均値を表します。

- CPU: CPU の平均使用率 (例、80%)
- メモリ: メモリの平均使用率 (例、60%)
- 負荷: システムが 1 分で実行する平均計算作業。

これらのメトリックスのいずれか、またはすべてに、上限しきい値と下限しきい値を定義します。カスタム CloudWatch アラームをしきい値として使用することもできます。

しきい値を超えると、スケーリングイベントがトリガーされます。以下の内容を指定することで、OpsWorks スタックがスケーリングイベントに対応する方法を決定します。

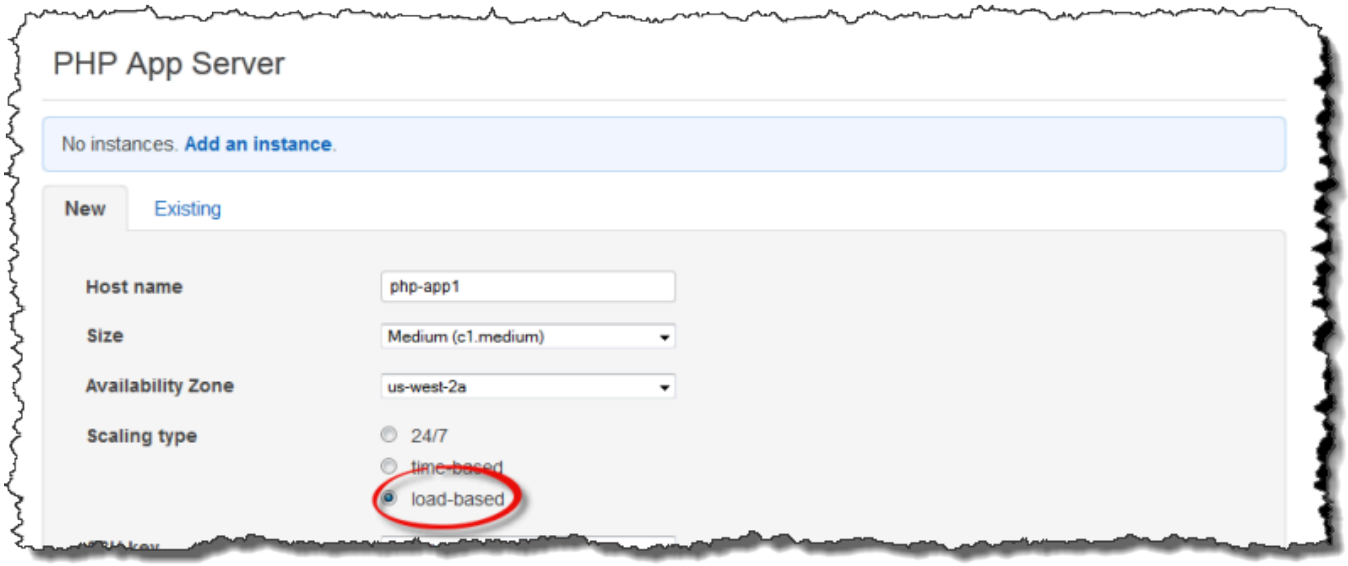
- 起動または停止するインスタンス数。
- インスタンスを起動または削除する前に OpsWorks 、スタックがしきい値を超えた後に待機する時間。たとえば、CPU 使用率は少なくとも 15 分間はしきい値を超過する必要があります。この値により、トラフィックの短い変動を無視することができます。
- メトリクスを再度モニタリングする前に OpsWorks 、インスタンスの起動または停止後に スタックが待機する時間。レイヤーが引き続きしきい値を超えているかどうかを評価する前に、起動されたインスタンスがオンラインになる、または停止されたインスタンスがシャットダウンされるまで十分な時間が経過する必要があります。

スケーリングイベントが発生すると、 OpsWorks スタックは負荷ベースのインスタンスのみを開始または停止します。24/7 インスタンスまたは時間ベースのインスタンスは起動または停止されません。

> **Note**
>
> 負荷ベースの自動スケーリングでは、新しいインスタンスは作成されません。ユーザーが作成したインスタンスのみが起動および停止されます。したがって、予測される最大負荷を処理するのに十分な負荷ベースのインスタンスを事前に備える必要があります。

負荷ベースのインスタンスを作成するには

1. [インスタンス] ページの [+ インスタンス] を選択して、インスタンスを追加します。[アドバンスト] を選択してから、[負荷ベース] を選択します。



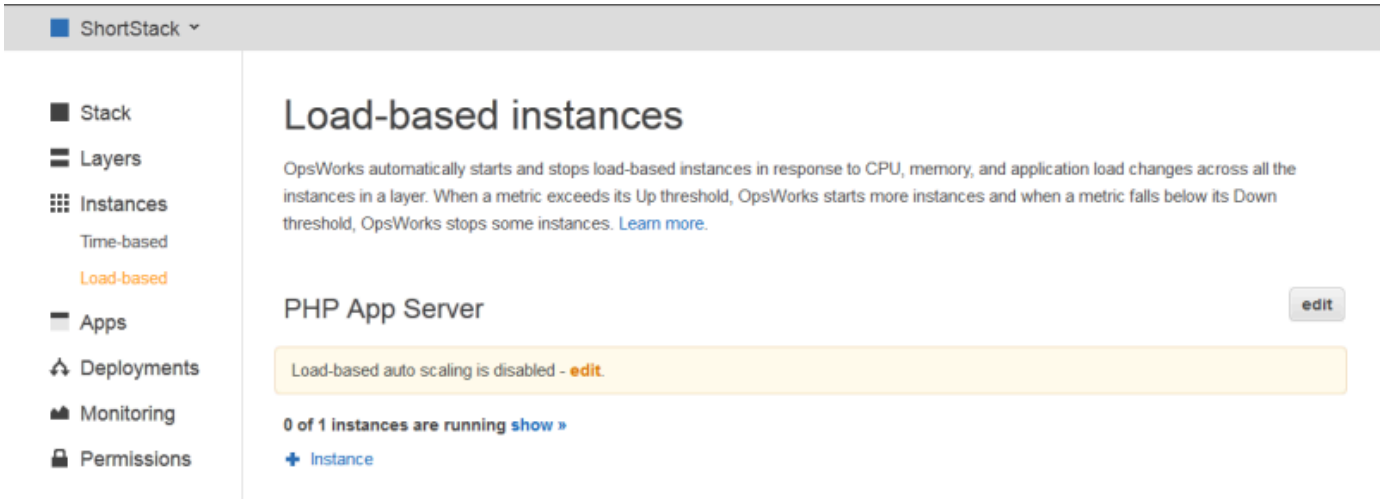
2. インスタンスを設定し、[+ インスタンスを追加] を選択して、インスタンスをレイヤーに追加します。

必要な数のインスタンスが作成されるまで、この手順を繰り返します。必要に応じて、後からインスタンスを追加または削除することができます。

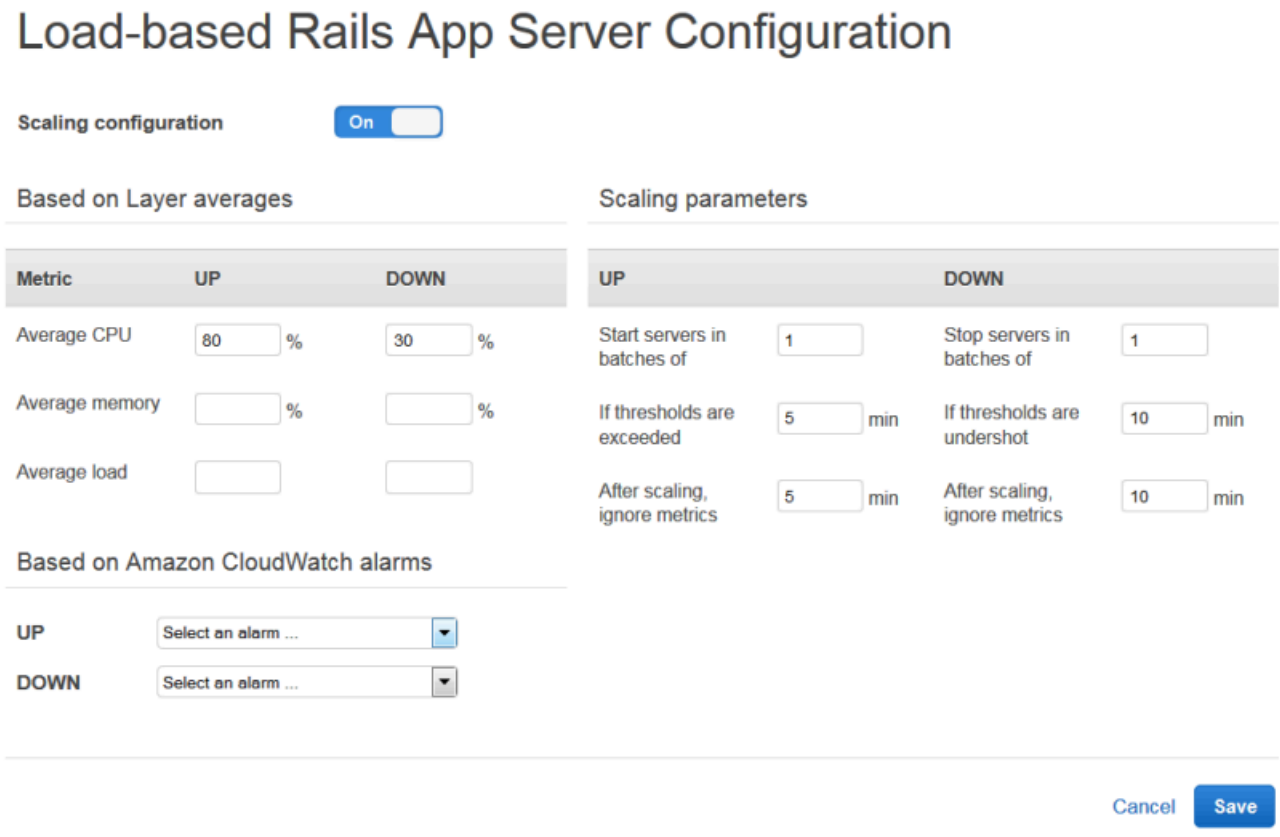
負荷ベースのインスタンスをレイヤーに追加したら、負荷ベースのスケーリングを可能にし、設定を指定する必要があります。負荷ベースのスケーリング設定はインスタンスのプロパティではなく、レイヤーのプロパティであるため、レイヤーが負荷ベースのインスタンスを起動または停止する時を指定します。負荷ベースのインスタンスを使用するレイヤーごとに個別に指定する必要があります。

負荷ベースの自動スケーリングを可能にし設定するには

1. ナビゲーションペインの [インスタンス] で [負荷ベース] を選択し、続いて適切なレイヤーの [編集] を選択します。



2. [Load-based auto scaling enabled] (負荷ベースの自動スケーリングの有効化) を [On] に設定します。次に、しきい値とスケーリングパラメータを設定し、インスタンスを追加する方法とタイミングを定義します。



レイヤー平均しきい値

スケーリングしきい値は、レイヤーのすべてのインスタンス間で平均された以下の値に基づいて設定できます。

- [Average CPU] (平均CPU) – レイヤーの平均 CPU 使用率 (合計に対する割合)。
- [Average memory] (平均メモリ) – レイヤーの平均メモリ使用率 (合計に対する割合)。
- [Average load] (平均負荷) – レイヤーの平均負荷。

  負荷を計算する方法の詳細については、ウィキペディアで [Load (computing)] (負荷(コンピューティング)) を参照してください。

しきい値を超えると、スケーリングイベントが発生し、より多くのインスタンスが必要な場合はスケールアップされ、より少ないインスタンスが必要な場合はスケールダウンされます。 OpsWorks その後、 スタックはスケーリングパラメータに基づいてインスタンスを追加または削除します。

カスタム CloudWatch アラーム

最大 5 つのカスタム CloudWatch アラームを、アップスケーリングまたはダウンスケーリングのしきい値として使用することができます。これらは、スタックと同じリージョンにある必要があります。カスタムアラームの方法の詳細については、「Creating Amazon CloudWatch Alarms」(Amazon CloudWatch アラームの作成) を参照してください。

> **Note**
>
> カスタムアラームを使用するには、サービスロールを更新して `cloudwatch:DescribeAlarms` を許可する必要があります。この機能を初めて使用するときに OpsWorks スタックでロールを更新するか、ロールを手動で編集できます。詳細については、「OpsWorks スタックがユーザーに代わって動作することを許可する」を参照してください。
> 負荷ベース設定に複数のアラームが設定されている場合、あるアラームが `INSUFFICIENT_DATA` メトリックアラーム状態になっていると、他のアラームが `ALARM` 状態になっていてもロードベースのインスタンススケーリングができません。オートスケーリングは、すべてのアラームが `OK` or `ALARM` の状態の場合にのみ実行できます。CloudWatch アラームの使用の詳細については、「Amazon CloudWatch User Guide」(Amazon CloudWatch ユーザーガイド) の「Using Amazon CloudWatch alarms」(Amazon CloudWatch アラームの使用) を参照してください。

スケーリングパラメータ

次のパラメータは OpsWorks 、 スタックがスケーリングイベントを管理する方法を制御します。

- [Start servers in batches of] (サーバをバッチで起動) - スケーリングイベントが発生したときに追加または削除するインスタンスの数。
- しきい値を超えた場合 – OpsWorks スタックがスケーリングイベントをトリガーする前に、負荷がアップスケーリングしきい値またはダウンスケーリングしきい値を下回る必要がある時間 (分単位) 。
- スケーリング後、メトリクスを無視する – スケーリングイベントの発生後 OpsWorks 、スタックがメトリクスを無視し、追加のスケーリングイベントを抑制する時間 (分単位) 。

  たとえば、 OpsWorks スタックはアップスケーリングイベント後に新しいインスタンスを追加しますが、インスタンスは起動して設定されるまで負荷の軽減を開始しません。新しいインスタンスがオンラインになってリクエストを処理するまで (通常、これには数分かかります)、追加のスケーリングイベントが発生するポイントはありません。この設定を使用すると、新しいインスタンスがオンラインになるまでの間 OpsWorks スタックにスケーリングイベントを抑制させることができます。

  この設定を増やすことで、[Average CPU] (平均CPU)、[Average memory] (平均メモリ)、[Average load] (平均負荷) などのレイヤーの平均値が一時的に不一致になった場合に、スケーリングの急激な変動を防ぐことができます。

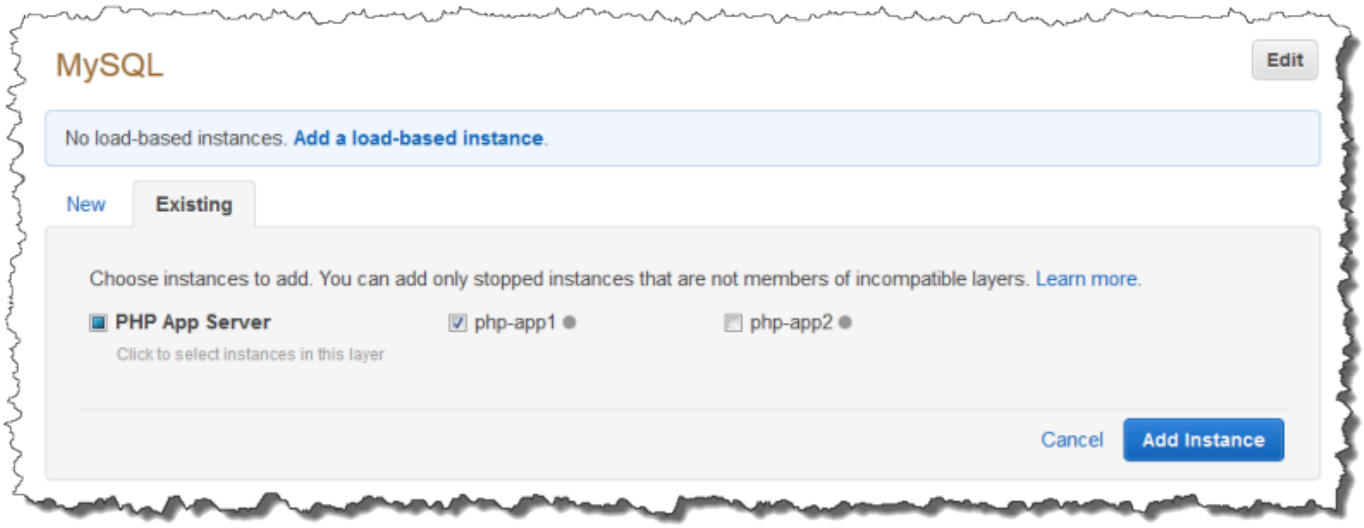
  例えば、CPU 使用率が制限を超え、メモリ使用量がダウンスケールに近い場合、インスタンスのアップスケールイベントの直後に、メモリのダウンスケールイベントが続く可能性があります。これを回避するには、[After scaling, ignore metrics] (スケーリング後、メトリックスを無視する) 設定で分単位で時間を増やすことができます。この例では、CPU のスケーリングが発生しますが、メモリのダウンスケールイベントは発生しません。

3. 負荷ベースのインスタンスを追加するには、[+ Instance] (+ インスタンス) を選択し、設定を行い、[Add Instance] (インスタンスを追加) を選択します。予測される最大負荷を処理するのに十分な負荷ベースのインスタンス数になるまで繰り返します。次に、[Save (保存)] を選択します。

> **Note**
>
> レイヤーに新しい負荷ベースのインスタンスを 追加するには、[Load-based] (負荷ベース) ページを開き、[Add a load-based instance] (ロードベースインスタンスを追加) (負荷ベースのインスタンスをレイヤーにまだ追加していない場合) を選択するか、[+ Instance] (+ インスタンス) (1 つ以上の負荷ベースのインスタンスがすでにレイヤーにある場合) を選択します。次に、このセクションで前述したように、インスタンスを設定します。

既存の負荷ベースのインスタンスをレイヤーに追加するには

1. ナビゲーションペインの [Instances] (インスタンス) で、[Load-based] (負荷ベース) を選択します。
2. レイヤーの負荷ベースの自動スケーリングをすでに有効にしている場合は、[+ Instance] (+ インスタンス) を選択します。それ以外の場合は、[Add a load-based instance] (負荷ベースのインスタンスを追加) を選択します。[EXisting] (既存) タブ。



3. [EXisting] (既存) タブで、インスタンスを選択します。リストには、負荷ベースのインスタンスのみが表示されます。

> **Note**
>
> 既存のインスタンスを使用しなくなった場合は、[New] (新規) タブで、前述の手順に従って新しいインスタンスを作成します。

4. [Add Instance] (インスタンスを追加) を選択して、インスタンスをレイヤーに追加します。

いつでも、負荷ベースの自動スケーリングの設定を変更したり、負荷ベースの自動スケーリングを無効にしたりすることができます。

負荷ベースのスケーリングを無効にするには

1. ナビゲーションペインの [Instances] (インスタンス) で、[負荷ベース] (Load-based) を選択してから、適切なレイヤーの [edit] (編集) を選択します。
2. [Load-based auto scaling enabled] (負荷ベースの自動スケーリングの有効化) を [No] (いいえ) に切り替えます。

負荷ベースのスケーリングと自動修復の違い

負荷ベースの自動スケーリングは、実行中のすべてのインスタンスで平均される負荷メトリクスを使用します。メトリクスが指定されたしきい値の間にとどまる場合、 OpsWorks スタックはインスタンスを開始または停止しません。一方、自動ヒーリングでは、インスタンスの応答が停止すると、OpsWorks スタックは同じ設定で新しいインスタンスを自動的に開始します。ネットワークの問題やインスタンスに障害が発生した場合に、インスタンスが応答できない場合があります。

例えば、CPU のアップスケーリングのしきい値が 80% で、1 つのインスタンスが応答を停止するとします。

- 自動ヒーリングが無効になっており、残りの実行中のインスタンスが平均 CPU 使用率を 80% 未満に維持できる場合、 OpsWorks スタックは新しいインスタンスを起動しません。残りのインスタンス全体で CPU の平均使用率が 80% を超えた場合、代替インスタンスを起動します。
- 自動ヒーリングが有効になっている場合、 OpsWorks スタックは負荷しきい値に関係なく代替インスタンスを開始します。

OpsWorks Stacks の外部で作成されたコンピューティングリソースの使用

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> この機能は Linux スタックでのみサポートされています。

インスタンス の使用方法を説明します。 OpsWorks Amazon Elastic Compute Cloud (Amazon EC2) インスタンスのグループを作成および管理するためのスタック。スタックの外部で作成されたスタックに Linux OpsWorks コンピューティングリソースを組み込むこともできます。

- コンソール、CLI、または API を使用して直接作成した Amazon EC2 インスタンス。
- 仮想マシンで実行しているインスタンスを含め、独自のハードウェアで実行している On-premises (オンプレミス) インスタンス。

これらのコンピューティングリソースは OpsWorks スタックマネージドインスタンスになり、通常の OpsWorks スタックインスタンスと同様に管理できます。

- ユーザーアクセス許可の管理 - OpsWorks [スタックユーザー管理] を使用して、どのユーザーがスタックへのアクセスを許可されるか、それらのユーザーがスタックのインスタンスに対してどのようなアクションの実行を許可されるか、それらのユーザーが SSH アクセス権限および sudo 特権を持つかどうかを指定できます。
- タスクの自動化 – OpsWorks スタックでカスタム Chef レシピを実行して、1 つのコマンドでスタックのインスタンスの一部またはすべてでスクリプトを実行するなどのタスクを実行できます。

  インスタンスをレイヤーに割り当てると、 OpsWorks Stacks は、カスタムレシピを含むライフサイクルのキーポイントで、インスタンスで指定された一連の Chef レシピを自動的に実行します。登録済みの Amazon EC2 インスタンスを割り当てることができるのは、[custom layers] (カスタムレイヤー) のみであることに注意してください。
- リソースの管理 – スタックでは、 のリソースをグループ化および管理できます。OpsWorks ダッシュボードには AWS リージョン、すべてのリージョンのスタックのステータスが表示されます。
- [Install packages] (パッケージのインストール) - Chef レシピを使用して、スタックの任意のインスタンスにパッケージをインストールできます。
- オペレーティングシステムの更新 – OpsWorks スタックは、オペレーティングシステムのセキュリティパッチと更新をスタックのインスタンスに簡単にインストールする方法を提供します。
- アプリケーションのデプロイ – OpsWorks スタックは、スタックのすべてのアプリケーションサーバーインスタンスにアプリケーションを一貫してデプロイします。

- モニタリング – OpsWorks スタックは、スタックのすべてのインスタンスをモニタリングするためのカスタム CloudWatch メトリクスを作成します。

料金については、「AWS OpsWorks 料金表」を参照してください。

以下に、登録されたインスタンスを使用する際の基本的な手順を示します。

1. スタックにインスタンスを登録します。

   インスタンスはスタックの一部になり、 OpsWorks スタックによって管理されます。
2. オプションで、インスタンスをレイヤーに割り当てます。

   このステップでは、 OpsWorks スタック管理機能を最大限に活用できます。登録された オンプレミスインスタンスは任意のレイヤーに割り当てることができ、登録された Amazon EC2 インスタンスはカスタムレイヤーにのみ割り当てることができます。
3. OpsWorks スタックを使用してインスタンスを管理します。
4. スタックでインスタンスが不要になった場合は、登録を解除します。これにより、インスタンスは OpsWorks スタックから削除されます。

以下のセクションではこのプロセスを詳しく説明します。

トピック

- OpsWorks スタックスタックへのインスタンスの登録
- 登録されたインスタンスの管理
- 登録されたインスタンスをレイヤーに割り当てる
- 登録されたインスタンスの割り当てを解除する
- 登録されたインスタンスの登録を解除する
- 登録されたインスタンスのライフサイクル

OpsWorks スタックスタックへのインスタンスの登録

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS

re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> この機能は Linux スタックでのみサポートされています。

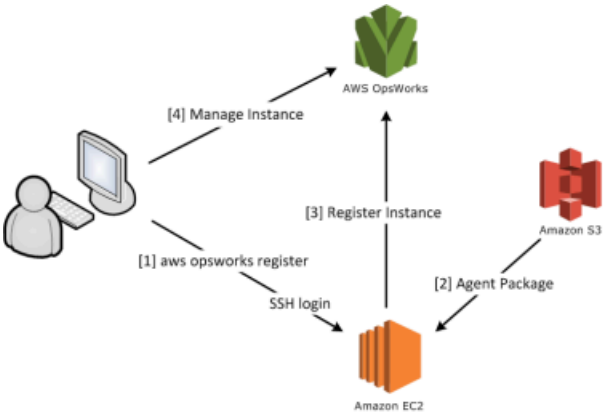
OpsWorks スタックの外部にあるインスタンスを登録するには、 コマンドを実行します AWS CLI aws opsworks register。このコマンドは、登録したいインスタンスから実行することも、別のコンピュータから実行することもできます。AWSOpsWorksRegisterCLI_EC2 または AWSOpsWorksRegisterCLI_OnPremisesポリシーをユーザーまたはグループに適用して、 が EC2 インスタンスまたはオンプレミスインスタンスをそれぞれ登録 AWS CLI するために必要なアクセス許可を付与します。これらのポリシーには、 のバージョン 1.16.180 AWS CLI 以降が必要です。

> **Note**
>
> ユーザーまたはロールがインスタンスを登録できないようにするには、インスタンスプロファイルを更新して register コマンドへのアクセスを拒否します。

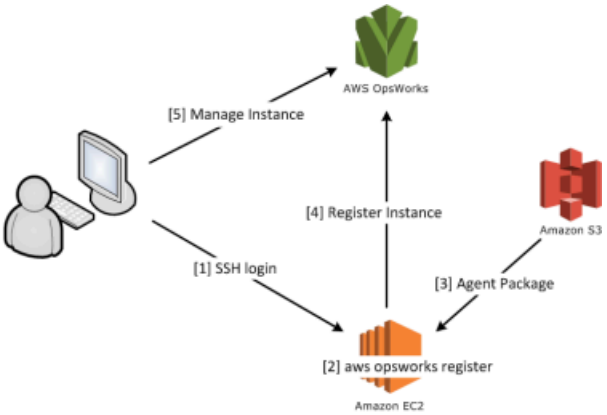
登録プロセスでは、 スタックを使用して管理するインスタンスにエージェントをインストールし、指定した OpsWorks OpsWorks スタックにインスタンスを登録します。インスタンスを登録すると、インスタンスはスタックの一部分となり、 OpsWorks Stacks により管理されます。詳細については、「登録されたインスタンスの管理」を参照してください。

> **Note**
>
> AWS Tools for PowerShell `Register-OpsInstance` には、 `register` API アクションを呼び出す コマンドレットが含まれていますが、代わりに AWS CLI を使用して `register` コマンドを実行することをお勧めします。

次の図は、Amazon EC2 インスタンス登録の両方の方法を示しています。オンプレミスインスタンスを登録する場合も同じ方法を使用できます。



Registering an instance from a workstation



Registering an instance from the instance itself

> **Note**
>
> 登録されたインスタンスは、OpsWorks Stacks コンソールを使用して管理できますが、インスタンスを登録するには、AWS CLI `register` コマンドを実行する必要があります。これは、登録処理はインスタンスから実行しなければならず、コンソールでは実行できないためです。

以下のセクションではこの手続きを詳しく説明します。

トピック

- チュートリアル: ワークステーションからインスタンスを登録する
- Amazon EC2とオンプレミスのインスタンスの登録

チュートリアル: ワークステーションからインスタンスを登録する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> この機能は Linux スタックでのみサポートされています。

登録処理は、いくつかのシナリオをサポートしています。このセクションでは、それらのシナリオの中からエンドツーエンドの例を示し、ワークステーションを使用して Amazon EC2 インスタンスを登録する方法を説明します。他の登録シナリオでも手順は似ています。詳細については、「Amazon EC2とオンプレミスのインスタンスの登録」を参照してください。

> **Note**
>
> 通常は、既存の Amazon EC2 インスタンスを登録します。ただし、チュートリアル専用に新しいインスタンスと新しいスタックを作成し、チュートリアルの完了後に削除できます。

トピック

- ステップ 1: スタックとインスタンスを作成する
- ステップ 2: AWS CLIをインストールおよび設定する
- ステップ 3: EC2Register のスタックにインスタンスを登録する

ステップ 1: スタックとインスタンスを作成する

開始するには、スタックと、そのスタックに登録する Amazon EC2 インスタンスが必要です。

スタックとインスタンスを作成するには

1. **EC2Register** という名前の 新しいスタックの作成 ために OpsWorks スタックコンソール を使用します。その他のスタック設定については、デフォルト値を使用できます。
2. [Amazon EC2 console] (Amazon EC2 コンソール) から新しいインスタンスを起動します。次の点に注意してください。

   - インスタンスは、スタックと同じリージョンおよび同じ VPC に存在します。

     VPC を使用している場合は、このチュートリアル用のパブリックサブネットを選択します。
   - SSH キーを作成する必要がある場合は、プライベートキーファイルをワークステーションに保存し、名前とファイルの場所を記録します。

既存のキーを使用する場合は、名前とプライベートキーファイルの場所を記録します。これらの値は後で必要になります。

- インスタンスは、「サポートされている Linux オペレーティングシステム」のいずれかに基づいている必要があります。例えばスタックが米国西部(オレゴン)にある場合は、`ami-35501205` を使用して、そのリージョンの Ubuntu 14.04 LTS インスタンスを起動できます。

そうしない場合は、デフォルト値をそのまま使用します。

インスタンスの起動中、次のセクションに進むことができます。

ステップ 2: AWS CLIをインストールおよび設定する

登録は、 AWS CLI aws opsworks register コマンドを使用して実行されます。最初のインスタンスを登録する前に、 のバージョン 1.16.180 AWS CLI 以降を実行している必要があります。インストールの詳細は使用しているワークステーションのオペレーティングシステムによって異なります。のインストールの詳細については AWS CLI、「AWS コマンドラインインターフェイスのインストール」を参照してください。起動している AWS CLI のバージョンを確認するには、シェルセッション内に `aws --version` を入力します。

> **Note**
>
> ユーザーまたはロールがインスタンスを登録できないようにするには、インスタンスプロファイルを更新して register コマンドへのアクセスを拒否します。

ワークステーション AWS CLI で既に を実行している場合でも、このステップはスキップしないことを強くお勧めします。 AWS CLI の最新リリースを使用することがセキュリティのベストプラクティスです。

`register` に、適切なアクセス権限がある AWS の認証情報を提供する必要があります。インスタンスに直接認証情報をインストールしないようにするには、インスタンスプロファイルで起動したインスタンスを登録し、`register` コマンドに `--use-instance-profile` スイッチを追加する方法が推奨されます。インスタンスプロファイルから認証情報を取得する場合は、この手順をスキップして、このトピックの「ステップ 3: EC2Register のスタックにインスタンスを登録する」に進んでください。ただし、インスタンスプロファイルを使用して起動されていないインスタンスでは、IAM ユーザーを作成できます。以下の手順では、適切なアクセス権限がある新しいユーザーを作成し、

ユーザーの認証情報をワークステーションにインストールして、その認証情報を `register` に渡しています。

> **Warning**
>
> IAM ユーザーは長期認証情報を保有するため、セキュリティ上のリスクが生じます。このリスクを軽減するために、これらのユーザーにはタスクの実行に必要な権限のみを付与し、不要になったユーザーは削除することをお勧めします。

ユーザーを作成するには

1. IAM コンソールのナビゲーションペインで [Users] を選択してから、[Add user] を選択します。
2. **`EC2Register`** という名前のユーザーを追加します。
3. [次へ] を選択します。
4. 許可を設定 ページで、ポリシーを直接アタッチする を選択します。
5. **`OpsWorks`** アクセス許可ポリシーフィルターボックスに と入力して OpsWorks ポリシーを表示し、次のいずれかのポリシーを選択してから、次へ: レビューを選択します。このポリシーは、`register` の実行に必要なアクセス権限をお客様のユーザーに付与します。

   - インスタンスプロファイルを使用する EC2 インスタンスを登録するためのユーザー権限を付与するには、[`AWSOpsWorksRegisterCLI_EC2`] を選択します。
   - オンプレミスインスタンスを登録するためのユーザー権限を付与するには、[`AWSOpsWorksRegisterCLI_OnPremises`] を選択します。
6. [次へ] を選択します。
7. [確認] ページで、[ユーザーの作成] を選択します。
8. ユーザーのアクセスキーを作成します。ナビゲーションペインから、ユーザー を選択し、アクセス· キーを作成するユーザーを選択します。
9. セキュリティ認証情報 タブを選択してから アクセスキーの作成 を選択します。
10. タスクに最も適した アクセスキーのベストプラクティスと代替案 を選択してください。
11. [次へ] を選択します。
12. (オプション) アクセスキーを識別するタグを入力します。
13. [次へ] を選択します。
14. [Download .csvファイル] を選択し、認証情報ファイルをシステムの都合のよい場所に保存してから、完了 を選択します。

IAM ユーザーの認証情報を `register` に提供する必要があります。このチュートリアルでは、タスクを処理するために、EC2Register 認証情報をワークステーションの `credentials` ファイルにインストールしています。の認証情報を管理するその他の方法については AWS CLI、「設定ファイルと認証情報ファイル」を参照してください。

ユーザーの認証情報をインストールするには

1. ワークステーションの `credentials` ファイルを作成するか開きます。このファイルは、`~/.aws/credentials`(Linux、Unix、OS X) または `C:\Users\`*`User_Name`*`\.aws\credentials` (Windows システム) にあります。
2. 次の形式を使用して、EC2Register ユーザーのプロファイルを `credentials` ファイルに追加します。

   ```
   [ec2register]
   aws_access_key_id = access_key_id
   aws_secret_access_key = secret_access_key
   ```

   `access_key_id` と *`secret_access_key`* は、前にダウンロードした EC2Register のキーに置き換えます。

ステップ 3: EC2Register のスタックにインスタンスを登録する

これでインスタンスを登録する準備が整いました。

インスタンスを登録するには

1. OpsWorks スタックで、EC2Register スタックに戻り、ナビゲーションペインでインスタンスを選択し、インスタンスの登録を選択します。
2. [EC2 Instances (EC2 インスタンス)] を選択し、[Next: Select Instances (次の手順: インスタンスの選択)] を選択して、一覧から目的のインスタンスを選択します。
3. 次へ: AWS CLI のインストール、次へ: インスタンスの登録を選択します。 OpsWorks スタックは、スタック ID やインスタンス ID などの利用可能な情報を自動的に使用して、インスタンスの登録ページに表示される`register`コマンドテンプレートを作成します。この例では、`register` を使用して SSH キーでインスタンスにログインし、キーファイルを明示的に指定します。そのために、[I use SSH keys to connect to my instances] (SSH キーを使用してインスタンスに接続する) を [Yes] (はい) に設定します。このコマンドテンプレートは次のようになっています。

```
aws opsworks register --infrastructure-class ec2 --region region endpoint ID
  --stack-id 247be7ea-3551-4177-9524-1ff804f453e3 --ssh-username [username]
  --ssh-private-key [key-file] i-f1245d10
```

> **Note**
>
> OpsWorks スタックがリージョンエンドポイントに関連付けられたクラシックリージョン内にある場合は、リージョンをスタックのリージョンではなく、スタックサービスのus-east-1エンドポイントリージョンに設定する必要があります。 OpsWorks スタックは、スタック ID からスタックのリージョンを決定します。

4. コマンド テンプレートには複数のユーザー固有の引数値も含まれます。これらの引数値はブラケット付きで示され、適切な値に置き換える必要があります。コマンドテンプレートをテキストエディタにコピーして、次のように編集します。

> **Important**
>
> 登録プロセス中に作成された IAM ユーザーは、登録されたインスタンスの存続中に必要です。ユーザーを削除すると、 OpsWorks スタックエージェントは サービスと通信できなくなります。`--use-instance-profile` ユーザーが誤って削除された場合に登録済みインスタンスの管理に関する問題が発生するのを回避するために、 `register`コマンドに パラメータを追加して、代わりにインスタンスの組み込みインスタンスプロファイルを使用します。また、 `--use-instance-profile`パラメータを追加すると、 AWS アカウントアクセスキーを 90 日ごとにローテーションするときにエラーが発生することも防止されます OpsWorks (推奨されるベストプラクティス) 。これは、エージェントが使用できるアクセスキーと必要な IAM ユーザーとの間の不一致を防ぐためです。

- *[key file]* (キーファイル) は、インスタンス作成時に保存した Amazon EC2 キーペアのプライベートキーファイルの完全修飾パスに置き換えます。

  必要に応じて相対パスを使用できます。

- *[username]* はインスタンスのユーザー名に置き換えます。

  この例での username は、Ubuntu インスタンスの場合は `ubuntu`、Red Hat Enterprise Linux (RHEL) または Amazon Linux のインスタンスの場合は `ec2-user` です。

- インスタンスプロファイルを使用して `register` を実行するように `--use-instance-profile` を追加して、キーローテーション時や、プリンシパル IAM ユーザーが誤って削除された場合のエラーを回避します。

コマンドは次のようになります。

```
aws opsworks register --use-instance-profile --infrastructure-class ec2 \
  --region us-west-2  --stack-id 247be7ea-3551-4177-9524-1ff804f453e3 --ssh-
username ubuntu \
  --ssh-private-key "./keys/mykeys.pem" i-f1245d10
```

5. ワークステーションでターミナルウィンドウを開き、エディタから `register` コマンドを貼り付けてコマンドを実行します。

   通常、登録には約 5 分かかります。完了したら、 OpsWorks スタックコンソールに戻り、完了を選択します。次に、ナビゲーションペインで [Instances (インスタンス)] を選択します。[Unassigned Instances] にインスタンスが表示されます。次に、インスタンスをどのように管理するかに応じて、インスタンスをレイヤーに割り当てるか、そのままにします。

6. 完了したら、インスタンスを停止し、 OpsWorks スタックコンソールまたは コマンドを使用してインスタンスを削除します。Amazon EC2 インスタンスが終了するため、それ以上料金は発生しません。

Amazon EC2とオンプレミスのインスタンスの登録

Important

この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Note

この機能は Linux スタックでのみサポートされています。

このセクションでは、Amazon EC2 またはオンプレミスのインスタンスを OpsWorks スタックのスタックに登録する方法を説明します。

トピック

- インスタンスの準備
- AWS CLIのインストールおよび設定
- インスタンスの登録
- register コマンドの使用
- register コマンドの例
- インスタンス登録ポリシー

インスタンスの準備

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> この機能は Linux スタックでのみサポートされています。

インスタンスを登録する前に、そのインスタンスが OpsWorks スタックと互換性があることを確認する必要があります。オンプレミス または Amazon EC2 インスタンスのどちらを登録するかによって詳細が異なります。

オンプレミスインスタンス

オンプレミスインスタンスは以下の基準を満たしている必要があります。

- インスタンスは、「サポートされている Linux オペレーティングシステム」のいずれかを実行する必要があります。カスタム AMI またはコミュニティで作成された AMI から作成された他のオペ

レーティングシステム (CentOS 6.x など) を使用してインスタンスを作成または登録できる場合もありますが、そのような方法は公式にはサポートされていません。

インスタンスで `libyaml` パッケージをインストールする必要があります。Ubuntu インスタンスの場合、パッケージの名前は `libyaml-0-2` です。CentOS および Red Hat Enterprise Linux インスタンスの場合、パッケージの名前は `libyaml` です。

- インスタンスのインスタンスタイプ (インスタンスサイズと呼ばれることもあります) がサポート対象である必要があります。サポートされるインスタンスタイプは、オペレーティングシステムの種類や、スタックが VPC 内にあるかどうかによって異なります。サポートされているインスタンスタイプのリストについては、ターゲットスタックに新しいインスタンスを作成しようとしたときに OpsWorks スタックコンソールに表示されるサイズドロップダウンリスト値を表示します。インスタンスタイプが灰色で表示されていて、ターゲットスタックに作成できない場合、そのタイプのインスタンスは登録できません。
- インスタンスには、 OpsWorks スタックサービスエンドポイント との通信を許可するインターネットアクセスが必要ですopsworks.us-east-1.amazonaws.com (HTTPS)。インスタンスは、Amazon S3 などの AWS リソースへのアウトバウンド接続をサポートする必要もあります。
- 別のワークステーションからインスタンスを登録する場合、登録するインスタンスはワークステーションからの SSH ログインをサポートしている必要があります。

  SSH ログインは、インスタンスから登録コマンドを実行する場合は必要ありません。
- AWS アクセスキーは、 OpsWorks エージェントから OpsWorks スタックサービスへの認証に使用されます。アクセスキーを 90 日ごとに推奨どおりにローテーションする場合は、新しいキーを使用するように OpsWorks エージェントを手動で更新します。オンプレミスのコンピュータまたはインスタンスで、新しいアクセスキーとシークレットキーを使用して `/etc/aws/opsworks/instance-agent.yml` ファイルを編集します。次のコマンドを実行すると、このファイル内のアクセスキーとシークレットキーが表示されます。以前のキーを使用しているエージェントでは、エラーが発生することがあります。

```
cat /etc/aws/opsworks/instance-agent.yml | egrep "access_key|secret_key"
:access_key_id: AKIAIOSFODNN7EXAMPLE
:secret_access_key: wJalrXUtnFEMI/K7MDENG/bPxRfiCYEXAMPLEKEY
```

Amazon EC2 インスタンス

Amazon EC2 インスタンスは以下の基準を満たしている必要があります。

- AMI は、サポートされているいずれかの Linux オペレーティングシステムに基づいている必要があります。最新のリストについては、「OpsWorks スタックオペレーティングシステム」を参照してください。

  詳細については、「カスタム AMI の使用」を参照してください。

  インスタンスが、標準でサポートされる AMI から派生しているか、インスタンスに必要最小限のセットアップが含まれている場合、インスタンスで `libyaml` パッケージをインストールする必要があります。Ubuntu インスタンスの場合、パッケージの名前は `libyaml-0-2` です。Amazon Linux および Red Hat Enterprise Linux インスタンスの場合、パッケージの名前は `libyaml` です。
- インスタンスのインスタンスタイプ (インスタンスサイズと呼ばれることもあります) がサポート対象である必要があります。サポートされるインスタンスタイプは、オペレーティングシステムの種類や、スタックが VPC 内にあるかどうかによって異なります。サポートされているインスタンスタイプのリストについては、ターゲットスタックに新しいインスタンスを作成しようとしたときに OpsWorks スタックコンソールに表示されるサイズドロップダウンリスト値を表示します。インスタンスタイプが灰色で表示され、ターゲットスタック内に作成できない場合は、そのタイプのインスタンスを登録することもできません。
- インスタンスは `running` の状態である必要があります。
- インスタンスは Auto Scaling グループの一部であってはなりません。

  詳細については、「Auto Scaling グループから EC2 インスタンスをデタッチする」を参照してください。
- インスタンスは VPC の一部にすることができますが、スタックと同じ VPC 内にあり、VPC が OpsWorks スタックと適切に動作するように設定する必要があります。
- スポットインスタンスはサポートされていません。これは、スポットインスタンスが自動ヒーリングで機能しないためです。

Amazon EC2 インスタンスを登録しても、 OpsWorks スタックはインスタンスのセキュリティグループまたはルールを変更しません。インスタンスのセキュリティグループルールが、次の OpsWorks スタックの要件と一致していることを確認してください。

受信ルール

受信ルールでは以下が許可されている必要があります。

- SSH ログイン。
- 適切なレイヤーからのトラフィック。

たとえば、データベースサーバーは通常、スタックのアプリケーションサーバー層からのインバウンドトラフィックを許可します。

- 適切なポートへのトラフィック。

  たとえば、アプリケーションサーバーのインスタンスは通常、ポート 80 (HTTP) と 443 (HTTPS) へのすべてのインバウンドトラフィックを許可します。

送信ルール

送信ルールでは以下が許可されている必要があります。

- インスタンスで実行されているアプリケーションから OpsWorks スタックサービスへのトラフィック。
- AWS API を使用するアプリケーションから Amazon S3 などの AWS リソースにアクセスするためのトラフィック。

一般的なアプローチとして、送信ルールを指定せず、アウトバウンドトラフィックに制限を設定しない方法があります。

AWS CLIのインストールおよび設定

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

最初のインスタンスを登録する前に、 を実行するコンピュータで のバージョン 1.16.180 AWS CLI 以降を実行している必要がありますregister。インストールの詳細は使用しているワークステーションのオペレーティングシステムによって異なります。のインストールの詳細については AWS CLI、「AWS コマンドラインインターフェイスのインストール」および「AWS コマンドラインインターフェイスの設定」を参照してください。起動している AWS CLI のバージョンを確認するには、シェルセッション内に `aws --version` を入力します。

> **Note**
>
> AWS Tools for PowerShell `Register-OpsInstance` には、 `register` API アクションを呼び出す コマンドレットが含まれていますが、代わりに AWS CLI を使用して `register` コマンドを実行することをお勧めします。

適切なアクセス権限で `register` を実行する必要があります。アクセス権限は、IAM ロールを使用することで取得できますが、最善ではないものの、登録するワークステーションまたはインスタンスに、適切なアクセス権限を持つユーザー認証情報をインストール方法でも取得できます。取得後は、追って説明する方法により、取得した認証情報を用いて `register` を実行できます。ユーザーまたはロールに IAM ポリシーをアタッチしてアクセス許可を指定します。`register` については、`AWSOpsWorksRegisterCLI_EC2` または `AWSOpsWorksRegisterCLI_OnPremises` ポリシーのいずれかを使用して、Amazon EC2 または オンプレミスオンプレミス インスタンスをそれぞれ登録するのに必要なアクセス権限を付与します。

> **Note**
>
> Amazon EC2 インスタンスで `register` を実行する場合は、できる限り IAM ロールを使用して認証情報を提供する必要があります。既存のインスタンスへの IAM ロールのアタッチについては、Windows インスタンス用Amazon EC2 ユーザーガイドの「IAM ロールをインスタンスにアタッチする」または「IAM ロールの置換」を参照してください。

例示のために部分的に抜粋した `AWSOpsWorksRegisterCLI_EC2` および `AWSOpsWorksRegisterCLI_OnPremises` ポリシーについては、インスタンス登録ポリシーを参照してください。AWS 認証情報の作成と管理の詳細については、「AWS セキュリティ認証情報」を参照してください。

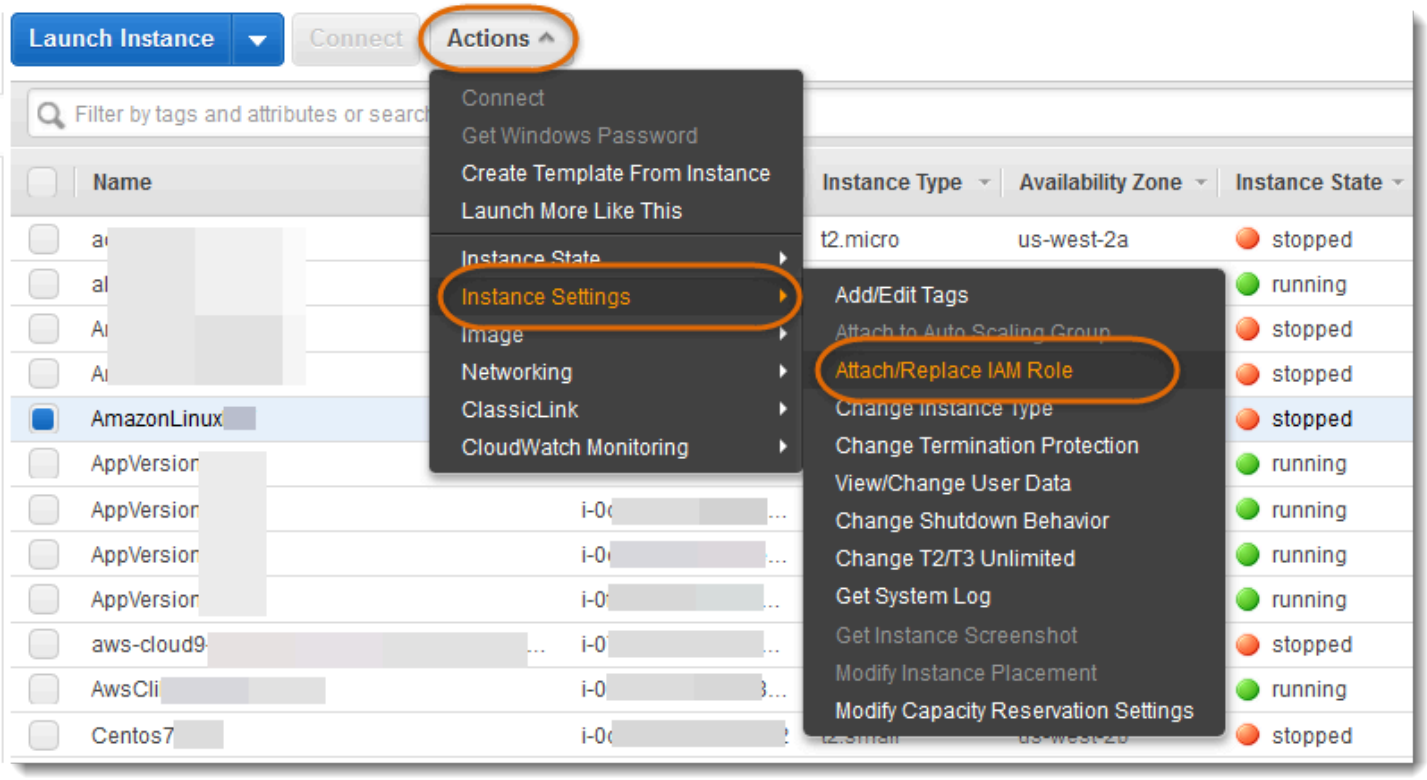
トピック

- IAM ロールの使用
- インストールした認証情報の使用

IAM ロールの使用

登録しようとしている Amazon EC2 インスタンスからコマンドを実行する場合は、`AWSOpsWorksRegisterCLI_EC2` ポリシーまたは同等のアクセス権限がアタッチされている

IAM ロールを使用して `register` に認証情報を提供することをお勧めします。このアプローチでは、インスタンスに認証情報をインストールせずに済みます。これを行う方法の 1 つとして、図に示すように、EC2 コンソール内で [Attach/Replace IAM Role] コマンドを使用する方法があります。



既存のインスタンスへの IAM ロールのアタッチについては、Windows インスタンス用Amazon EC2 ユーザーガイドの「IAM ロールをインスタンスにアタッチする」または「IAM ロールの置換」を参照してください。インスタンスプロファイルを使用して起動されたインスタンス (推奨方法) の場合は、`--use-instance-profile` コマンドに `register` スイッチを追加して認証情報を提供します。`--profile`パラメータは使用しないでください。

インスタンスが実行中でありロールが設定されている場合は、そのロールに `AWSOpsWorksRegisterCLI_EC2` ポリシーをアタッチすることによって、必要なアクセス権限を付与できます。ロールは、インスタンスのデフォルトの認証情報を提供します。インスタンスにどの認証情報もインストールしていない場合に限り、`register` は自動的にロールを引き継ぎ、ロールのアクセス権限を使用して実行されます。

> **Important**
>
> インスタンスに認証情報をインストールしないことをお勧めします。セキュリティリスクの発生に加えて、インスタンスのロールは、 がデフォルトの認証情報を見つけるために AWS CLI 使用するデフォルトのプロバイダーチェーンの末尾にあります。インストールした認証

情報はロールより優先されることがあるため、register に必要なアクセス権限が与えられない場合があります。詳細については、「AWS CLIを使い始める」を参照してください。

実行中のインスタンスにロールが設定されていない場合は、必要なアクセス権限を持つ認証情報をインスタンスにインストールする必要があります。「インストールした認証情報の使用」を参照してください。インスタンスプロファイルを使用して起動されたインスタンスを使用することが推奨方法であり、簡単かつエラーが起きにくい方法です。

インストールした認証情報の使用

システムにユーザー認証情報をインストールし、 AWS CLI コマンドに提供するには、いくつかの方法があります。以下に説明しているのは推奨されなくなった方法ですが、インスタンスプロファイルを使用せずに起動された EC2 インスタンスを登録する場合に使用できます。アタッチしたポリシーによって必要なアクセス権限が付与されるのであれば、既存の ユーザーの認証情報を使用することもできます。認証情報をインストールする他の方法を含む追加情報については、「設定ファイルと認証情報ファイル」を参照してください。

インストールした認証情報を使用するには

1. IAM ユーザーを作成し、アクセスキー ID とシークレットアクセスキーを安全な場所に保存します。

   Warning

   IAM ユーザーは長期認証情報を保有するため、セキュリティ上のリスクが生じます。このリスクを軽減するために、これらのユーザーにはタスクの実行に必要な権限のみを付与し、不要になったユーザーは削除することをお勧めします。

2. AWSOpsWorksRegisterCLI_OnPremises ポリシーをユーザーにアタッチします。必要であれば、より広範なアクセス権限を付与するポリシーをアタッチできますが、そのポリシーには、AWSOpsWorksRegisterCLI_OnPremises アクセス権限が含まれていなければなりません。
3. システムの credentials ファイル内にユーザーのプロファイルを作成します。このファイルは、~/.aws/credentials(Linux、Unix、OS X) または C:\Users*User_Name*\.aws\credentials (Windows システム) にあります。ファイルには 1 つ以上のプロファイルが次の形式で含まれており、各プロファイルにユーザーのアクセスキー ID とシークレットアクセスキーが含まれています。

```
[profile_name]
aws_access_key_id = access_key_id
aws_secret_access_key = secret_access_key
```

前に保存した IAM 認証情報を *[access_key_id]* および *[secret_access_key]* の値に置き換えます。プロファイル名には任意の名前を指定できますが、名前は一意でなければならないという制約と、デフォルトのプロファイルは `default` という名前にする必要があるという制約があります。既存のプロファイルに必要なアクセス権限が設定されていれば、既存のプロファイルを使用できます。

4. `register` コマンドの `--profile` パラメータを使用してプロファイル名を指定します。`register` コマンドは、関連付けられている認証情報に付与されているアクセス権限を使用して実行されます。

   `--profile` を省略することもできます。その場合、`register` はデフォルトの認証情報を使用して実行されます。これらは必ずしもデフォルトプロファイルの認証情報ではないため、デフォルトの認証情報に必要なアクセス権限があることを確認してください。がデフォルトの認証情報 AWS CLI を決定する方法の詳細については、「AWS コマンドラインインターフェイスの設定」を参照してください。

インスタンスの登録

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> この機能は Linux スタックでのみサポートされています。

インスタンスを登録するには、ワークステーションまたはインスタンスから AWS CLI `register` コマンドを実行します。このオペレーションを処理する最も簡単な方法は、OpsWorks スタックコンソールの登録ウィザードを使用することです。このウィザードを使用すると、コマンド文字列を構築する処理が簡略化されます。登録手続きに慣れた後、必要に応じてウィザードを省略し、`register` コマンドを実行することができます。

登録ウィザードを使用して既存のスタックにインスタンスを登録する方法について、次に説明します。

> **Note**
>
> インスタンスを新しいスタックに登録するには、 OpsWorks スタックダッシュボードでインスタンスの登録を選択します。これで、新しいスタックを設定する追加のページ以外は既存スタック用のウィザードと同じウィザードが起動します。

登録ウィザードを使用してインスタンスを登録するには

1. OpsWorks スタックコンソールで、スタックを作成するか、または既存のスタックを開きます。
2. ナビゲーションペインで [Instances] を選択し、[register an instance] を選択します。
3. [Choose an Instance Type] (インスタンスタイプの選択) ページで、Amazon EC2 と オンプレミス インスタンスのどちらを登録するのかを指定します。
   - Amazon EC2 インスタンスを登録する場合は、[Next: Select Instances] (次の手順: インスタンスの選択) を選択します。
   - オンプレミス インスタンスを登録する場合は、[Next: Install AWS CLI] を選択してステップ 5 に進みます。
4. Amazon EC2 インスタンスを登録する場合は、インスタンスの選択ページを開いて、登録するインスタンスを選択します。 OpsWorks スタックは、コマンドの構築に必要な情報を収集します。完了したら、[Next:Install AWS CLI] を選択します。
5. 実行するインスタンスは、 のバージョン 1.16.180 AWS CLI 以降を実行`register`している必要があります。 AWS CLIをインストールまたは更新するには、インストールウィザードページに表示されるインストールおよび設定の手順へのリンクを使用します。 AWS CLI のインストールを検証したら、登録するインスタンスからコマンドを実行するか、別のワークステーションから実行するかを選択してから、[Next: Register Instances] を選択します。

6. [Register Instances] ページに、選択したオプションが組み込まれた `register` コマンド文字列のテンプレートが表示されます。例えば、別のワークステーションから Amazon EC2 インスタンスを登録する場合、デフォルトのテンプレートは次のような内容です。

```
aws opsworks register --infrastructure-class ec2 --region us-west-2
  --stack-id 247be7ea-3551-4177-9524-1ff804f453e3 --ssh-username [username] i-
f1245d10
```

> **Important**
>
> 登録プロセス中に作成された IAM ユーザーは、登録されたインスタンスの存続中に必要です。ユーザーを削除すると、 OpsWorks スタックエージェントは サービスと通信できなくなります。`--use-instance-profile` ユーザーが誤って削除された場合に登録済みインスタンスの管理に関する問題が発生するのを回避するために、 `register`コマンドに パラメータを追加して、代わりにインスタンスの組み込みインスタンスプロファイルを使用します。また、 `--use-instance-profile`パラメータを追加すると、 AWS アカウントアクセスキーを 90 日ごとにローテーションするときにエラーが発生することも防止されます OpsWorks (推奨されるベストプラクティス) 。これは、エージェントが使用できるアクセスキーと必要な IAM ユーザーとの間の不一致を防ぐためです。

SSH キーの使用を Yes に設定すると、 OpsWorks Stacks は 引`--ssh-private-key`数を文字列に追加します。この引数を使用してプライベート SSH キーファイルを指定できます。

> **Note**
>
> `register` パスワードでログオンするには、[I use SSH keys] (SSH キーを使用します) を [No] (いいえ) に設定してください。`register`を実行すると、パスワードの入力を求められます。

この文字列をテキストエディタにコピーし、必要に応じて編集します。次の点に注意してください。

- ブラケットの付いたテキストは、SSH キーファイルの場所など、必ず指定する必要がある情報を表します。

- テンプレートでは、デフォルトの AWS 認証情報を使用して `register` を実行していることが前提となっています。そうでない場合、コマンド文字列に `--profile` 引数を追加し、使用する認証情報プロファイル名を指定します。

その他のシナリオでは、コマンドをさらに変更することが必要な場合があります。使用できる `register` の引数とコマンド文字列を構築する別の方法については、「`register` コマンドの使用」を参照してください。コマンドラインから `aws opsworks help register` を実行してコマンドの説明を表示することもできます。コマンド文字列の例については、「register コマンドの例」を参照してください。

7. コマンド文字列の編集が完了したら、ワークステーションのターミナルウィンドウを開くか、SSH を使用してインスタンスにログオンし、コマンドを実行できます。通常、操作の最初から最後まで 5 分ほどかかります。その間、インスタンスは [Registering] 状態になります。
8. 操作が終了したら、[Done] を選択します。これでインスタンスは [Registered] 状態になり、スタックの [Instances] ページに未割り当てインスタンスとして表示されます。

`register` コマンドは次のことを行います。

1. `register` がワークステーションで実行中の場合、コマンドは最初に SSH を使用して、登録するインスタンスにログインします。

   インスタンスに対して残りの処理が実行されます。コマンドを実行した場所にかかわらず、処理は同じです。
2. Amazon S3 から OpsWorks スタックエージェントパッケージをダウンロードします。
3. エージェントとその依存関係 (AWS SDK for Ruby など) を解凍してインストールします。
4. 以下の項目を作成します。
   - 安全な通信を提供するために スタックサービスでエージェントをブートストラップする OpsWorks IAM ユーザー。

     ユーザーのアクセス権限により、`opsworks:RegisterInstance` アクションのみが許可され、15 分後に有効期限が切れます。
   - スタックの IAM グループで、登録されたインスタンスのユーザーを含みます。
5. RSA キーペアを作成し、パブリックキーを OpsWorks スタックに送信します。

   このキーペアは、エージェントと OpsWorks スタックの間の通信を暗号化するために使用されます。

6. インスタンスを OpsWorks スタックに登録します。スタックは、以下の項目を含む一連の初期 Setup レシピを実行してインスタンスを設定します。

   - インスタンスのホストファイルの上書き。

     インスタンスを登録することで、ユーザー管理を OpsWorks スタックに引き渡しました。スタックには、SSH ログイン許可を制御するための独自のホストファイルが必要です。

   - Amazon EC2 インスタンスの場合、初期設定には、接続されている Amazon EBS ボリュームまたは Elastic IP アドレスをスタックへの登録も含まれます。

     Amazon EBS ボリュームが予約済みマウントポイント (`/var/www`や、インスタンスのレイヤーによって予約されているすべてのマウントポイント) にマウントされていないことを確認する必要があります。スタックリソースの管理の詳細については、「リソース管理」を参照してください。レイヤーのマウントポイントの詳細については、「OpsWorks スタックレイヤーリファレンス」を参照してください。

   初期セットアップ設定の変更についての詳しい説明は、「初期セットアップ設定の変更」を参照してください。

   > **Note**
   >
   > 初期セットアップでは登録されたインスタンスのオペレーティングシステムは更新されません。そのタスクはユーザー自身が処理する必要があります。詳細については、「セキュリティ更新の管理」を参照してください。

`register` コマンドの使用

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> この機能は Linux スタックでのみサポートされています。

インスタンスを登録するには、 AWS CLIのバージョンが少なくとも 1.16.180 でなければなりません。`register` コマンドの一般的な構文を次に示します。

```
aws opsworks register \
  [--profile profile_name] \
  [--region region_name] \
  --infrastructure-class instance_type \
  --stack-id stack ID \
  [--local] | [--ssh-private-key key_file --ssh-username username] | [--override-
ssh command_string] \
  [--override-hostname hostname] \
  [--debug] \
  [--override-public-ip public IP] \
  [--override-private-ip private IP] \
..[--use-instance-profile] \
  [ [IP address] | [hostname] | [instance ID]
```

以下の引数はすべての AWS CLI コマンドに共通です。

`--profile`

(オプション) 認証情報のプロファイル名。この引数を省略すると、コマンドはデフォルトの認証情報を使用して実行されます。がデフォルトの認証情報 AWS CLI を決定する方法の詳細については、「AWS コマンドラインインターフェイスの設定」を参照してください。

`--region`

(オプション) OpsWorks スタックサービスエンドポイントのリージョン。をスタックのリージョン`--region`に設定しないでください。 OpsWorks スタックはスタック ID からスタックのリージョンを自動的に決定します。

> **Note**
>
> デフォルトのリージョンがすでに設定されている場合は、この引数を省略できます。デフォルトのリージョンを指定する方法の詳細については、「AWS コマンドラインインターフェイスの設定」を参照してください。

Amazon EC2 インスタンスとオンプレミス インスタンスのどちらの場合も、以下の引数を使用します。

`--infrastructure-class`

(必須) このパラメータを `ec2` または `on-premises` のいずれかに設定して、Amazon EC2 インスタンスと オンプレミス インスタンスのどちらを登録するのかを指定する必要があります。

`--stack-id`

(必須) インスタンスを登録するスタックの ID。

> **Note**
>
> スタック ID を見つけるには、[Stack (スタック)] ページで [Settings (設定)] を選択します。スタック ID は [OpsWorks ID] というラベルで `ad21bce6-7623-47f1-bf9d-af2affad8907` のように表示されます。

SSH ログイン引数

`register` でインスタンスにログインする方法を指定するには、次の引数を使用します。

`--local`

(オプション) この引数は、コマンドを実行する対象のインスタンスを登録するために使用します。

この場合、`register` でインスタンスにログインする必要はありません。

`--ssh-private-key` および **`--ssh-username`**

(オプション) 別のワークステーションからインスタンスを登録する場合に、ユーザー名またはプライベートキーファイルを明示的に指定するには、これらの引数を使用します。

- `--ssh-username` - この引数は、SSH ユーザー名を指定するために使用します。

--ssh-username を省略すると、ssh はデフォルトのユーザー名を使用します。

- --ssh-private-key - この引数は、プライベートキーファイルを明示的に指定する場合に使用します。

  --ssh-private-key を省略すると、ssh は、デフォルトのプライベートキーの使用などの、パスワード不要の認証方法によるログインを試みます。それらの方法のいずれもサポートされていない場合、ssh はパスワードを問い合わせます。ssh で認証がどのように処理されるかの詳細については、「Secure Shell (SSH) 認証プロトコル」を参照してください。

--override-ssh

(オプション) この引数は、別のワークステーションから登録する場合に、カスタムの ssh コマンド文字列を指定するときに使用します。register コマンドは、このコマンド文字列を使用して、登録されたインスタンスにログインします。

ssh の詳細については、「SSH」を参照してください

--override-hostname

(オプション) インスタンスのホスト名を指定します。これは OpsWorks スタックでのみ使用されます。デフォルト値はインスタンスのホスト名です。

--debug

(オプション) 登録処理が失敗した場合にデバッグ情報を提供します。トラブルシューティング情報については、「インスタンス登録の問題のトラブルシューティング」を参照してください。

--use-instance-profile

(オプション。ただし、Amazon EC2 インスタンスでは強く推奨) register コマンドで、IAM ユーザーを作成するのではなく、アタッチされたインスタンスプロファイルを使用するようにします。このパラメータを追加すると、IAM ユーザーが誤って削除された場合に登録済みインスタンスを管理しようしたときに発生するエラーを回避するうえで役立ちます。

> **Important**
>
> 登録プロセス中に作成された IAM ユーザーは、登録されたインスタンスの存続中に必要です。ユーザーを削除すると、 OpsWorks スタックエージェントは サービスと通信できなくなります。--use-instance-profile ユーザーが誤って削除された場合に登録済みインスタンスの管理に関する問題が発生するのを回避するために、 registerコマンドに パラメータを追加して、代わりにインスタンスの組み込みインスタンスプロファイ

ルを使用します。また、 `--use-instance-profile`パラメータを追加すると、 AWS アカウントアクセスキーを 90 日ごとにローテーションするときにエラーが発生することも防止されます (推奨されるベストプラクティス) 。これは、 OpsWorks エージェントが使用できるアクセスキーと必要なユーザーとの間の不一致を防ぐためです。

ターゲット

(条件付き) ワークステーションからこのコマンドを実行する場合、コマンド文字列の最終値で、次のいずれかの方法で登録ターゲットを指定します。

- インスタンスのパブリック IP アドレス。
- インスタンスのホスト名。
- Amazon EC2 インスタンスの インスタンス ID。

  OpsWorks スタックはインスタンス ID を使用して、インスタンスのパブリック IP アドレスを含むインスタンス設定を取得します。デフォルトでは、 OpsWorks Stacks はこのアドレスを使用して、インスタンスへのログインに使用する`ssh`コマンド文字列を作成します。プライベート IP アドレスに接続する必要がある場合は、`--override-ssh` を使用してカスタムコマンド文字列を提供する必要があります。例については、ワークステーションからのオンプレミスインスタンスの登録を参照してください。

> **Note**
>
> ホスト名を指定すると、`ssh` は DNS サーバーを使用して名前を特定のインスタンスに解決します。ホスト名が一意かどうか不確かな場合は、`ssh` を使用して、ホスト名が正しいインスタンスに解決されることを確認します。

登録するインスタンスからこのコマンドを実行する場合は、インスタンス識別子を省略し、代わりに `--local` 引数を使用します。

以下の引数は オンプレミス インスタンスの場合のみ使用できます。

`--override-public-ip`

(オプション) OpsWorks スタックは、指定されたアドレスをインスタンスのパブリック IP アドレスとして表示します。インスタンスのパブリック IP アドレスは変更されません。ただし、インス

タンスページでアドレスを選択するなど、ユーザーがコンソールを使用してインスタンスに接続する場合、 OpsWorks スタックは指定されたアドレスを使用します。 OpsWorks スタックは引数のデフォルト値を自動的に決定します。

`--override-private-ip`

(オプション) OpsWorks スタックは、指定されたアドレスをインスタンスのプライベート IP アドレスとして表示します。インスタンスのプライベート IP アドレスは変更されません。 OpsWorks スタックは引数のデフォルト値を自動的に決定します。

register コマンドの例

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> この機能は Linux スタックでのみサポートされています。

このセクションでは、`register` コマンド文字列の例を示します。

ワークステーションからの Amazon EC2 インスタンスの登録

次の例では、ワークステーションから Amazon EC2 インスタンスを登録します。このコマンド文字列はデフォルトの認証情報を使用し、Amazon EC2 インスタンス ID によってインスタンスを識別します。この例は、`ec2` を `on-premises` に変更すれば オンプレミス インスタンスに使用できます。

```
aws opsworks register \
  --region us-west-2 \
  --use-instance-profile \
  --infrastructure-class ec2 \
```

```
  --stack-id ad21bce6-7623-47f1-bf9d-af2affad8907 \
  --ssh-user-name my-sshusername \
  --ssh-private-key "./keys/mykeys.pem" \
  i-2422b9c5
```

ワークステーションからのオンプレミスインスタンスの登録

次の例では、別のワークステーションからオンプレミスインスタンスを登録します。このコマンド文字列はデフォルトの認証情報を使用し、指定した ssh コマンド文字列を使用してインスタンスにログインします。インスタンスにパスワードが必要な場合は、register でパスワードの入力を求められます。この例は、on-premises を ec2 に変更すれば Amazon EC2 インスタンスに使用できます。

```
aws opsworks register \
  --region us-west-2 \
  --infrastructure-class on-premises \
  --stack-id ad21bce6-7623-47f1-bf9d-af2affad8907 \
  --override-ssh "ssh your-user@192.0.2.0"
```

> **Note**
>
> --override-ssh を使用して任意のカスタム SSH コマンド文字列を指定できます。OpsWorks スタックは、コマンド文字列を作成する代わりに、指定された文字列を使用してインスタンスにログインします。別の例については、「カスタム SSH コマンド文字列を使用したインスタンスの登録」を参照してください。

カスタム SSH コマンド文字列を使用したインスタンスの登録

次の例では、ワークステーションからオンプレミス インスタンスを登録し、--override-ssh 引数を使用して、register がインスタンスへのログインに使用するカスタム SSH コマンドを指定しています。この例では、sshpass を使用し、ユーザー名とパスワードを指定してログインしていますが、任意の有効な ssh コマンド文字列を指定できます。

```
aws opsworks register \
  --region us-west-2 \
  --infrastructure-class on-premises \
  --stack-id 2f92ff9d-04f2-4728-879b-f4283b40783c \
```

```
  --override-ssh "sshpass -p 'mypassword' ssh your-user@192.0.2.0"
```

インスタンスからの **register** 実行によるインスタンスの登録

次の例では、登録するAmazon EC2 インスタンス自身からregisterを実行して インスタンスを登録する方法を示しています。このコマンド文字列はデフォルトの認証情報からアクセス権限を取得します。この例をオンプレミスインスタンスで使用する場合は、--infrastructure-class に on-premises に変更します。

```
aws opsworks register \
  --region us-west-2 \
  --infrastructure-class ec2 \
  --stack-id ad21bce6-7623-47f1-bf9d-af2affad8907 \
  --local
```

プライベート IP アドレスを使用するインスタンスの登録

デフォルトでは、register はインスタンスのパブリック IP アドレスを使用してインスタンスにログインします。プライベート IP アドレスを使用するインスタンス (VPC のプライベートサブネット内のインスタンスなど) を登録するには、--override-ssh を使用してカスタム ssh コマンド文字列を指定する必要があります。

```
aws opsworks register \
  --region us-west-2 \
  --infrastructure-class ec2 \
  --stack-id 2f92ff9d-04f2-4728-879b-f4283b40783c \
  --override-ssh "ssh -i mykey.pem ec2-user@10.183.201.93" \
  i-2422b9c5
```

インスタンス登録ポリシー

Important

この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

AWSOpsWorksRegisterCLI_EC2 および AWSOpsWorksRegisterCLI_OnPremises ポリシーは、EC2 およびオンプレミスのインスタンスをそれぞれ登録するために必要な正しいアクセス権限を提供します。EC2 インスタンスを登録する場合には、AWSOpsWorksRegisterCLI_EC2 をユーザーに追加しますが、オンプレミス インスタンスを登録する場合には、AWSOpsWorksRegisterCLI_OnPremises を IAM ユーザーに追加します。これらのポリシーを使用するには、 のバージョン 1.16.180 AWS CLI 以降を実行している必要があります。

AWSOpsWorksRegisterCLI_EC2 ポリシー

EC2 インスタンスを登録する場合には、AWSOpsWorksRegisterCLI_EC2をお客様のユーザーに追加します。EC2 インスタンスのみを登録する場合には、このプロファイルを使用する必要があります。このポリシーを使用する場合は、EC2 インスタンスのインスタンスプロファイルからアクセス権限が提供されます。

JSON

```
{
      "Version":"2012-10-17",
      "Statement": [
        {
          "Effect": "Allow",
          "Action": [
            "opsworks:AssignInstance",
            "opsworks:CreateLayer",
            "opsworks:DeregisterInstance",
            "opsworks:DescribeInstances",
            "opsworks:DescribeStackProvisioningParameters",
            "opsworks:DescribeStacks",
            "opsworks:UnassignInstance"
          ],
          "Resource": [
            "*"
          ]
        },
        {
          "Effect": "Allow",
          "Action": [
            "ec2:DescribeInstances"
          ],
          "Resource": [
```

```
        "*"
      ]
    }
  ]
}
```

(廃止済み) AWSOpsWorksRegisterCLI_OnPremises ポリシー

オンプレミス インスタンスを登録する場合には、AWSOpsWorksRegisterCLI_OnPremises をユーザーに追加します。このポリシーには、AttachUserPolicy といった IAM アクセス権限が含まれていますが、この権限でアクセスできるリソースには限りがあります。

JSON

```
{
  "Version":"2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "opsworks:AssignInstance",
        "opsworks:CreateLayer",
        "opsworks:DeregisterInstance",
        "opsworks:DescribeInstances",
        "opsworks:DescribeStackProvisioningParameters",
        "opsworks:DescribeStacks",
        "opsworks:UnassignInstance"
      ],
      "Resource": [
        "*"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "ec2:DescribeInstances"
      ],
      "Resource": [
        "*"
      ]
    },
```

```
        {
          "Effect": "Allow",
          "Action": [
            "iam:CreateGroup",
            "iam:AddUserToGroup"
          ],
          "Resource": [
            "arn:aws:iam::*:group/AWS/OpsWorks/OpsWorks-*"
          ]
        },
        {
          "Effect": "Allow",
          "Action": [
            "iam:CreateUser",
            "iam:CreateAccessKey"
          ],
          "Resource": [
            "arn:aws:iam::*:user/AWS/OpsWorks/OpsWorks-*"
          ]
        },
        {
          "Effect": "Allow",
          "Action": [
            "iam:AttachUserPolicy"
          ],
          "Resource": [
            "arn:aws:iam::*:user/AWS/OpsWorks/OpsWorks-*"
          ],
          "Condition": {
            "ArnEquals":
              {
                "iam:PolicyARN": "arn:aws:iam::aws:policy/
AWSOpsWorksInstanceRegistration"
              }
            }
        }
      ]
    }
```

(廃止済み) **AWSOpsWorksRegisterCLI** ポリシー

> **Important**
>
> AWSOpsWorksRegisterCLI ポリシーは廃止されているため、新しいインスタンスの登録には使用できません。すでに登録されているインスタンスを対象とする下位互換作業にのみ使用できます。AWSOpsWorksRegisterCLI ポリシーには、CreateUser、PutUserPolicy、および AddUserToGroup を含む多くの IAM アクセス権限が含まれています。これらは管理者レベルのアクセス権限であるため、AWSOpsWorksRegisterCLI ポリシーは信頼できる管理ユーザーにのみ割り当てる必要があります。

登録されたインスタンスの管理

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> この機能は Linux スタックでのみサポートされています。

インスタンスを登録すると、インスタンスは OpsWorks スタックインスタンスになり、 OpsWorks スタックで作成されたインスタンスとほぼ同じ方法で管理できます。2 つの主な違いがあります。

- 登録されたインスタンスをレイヤーに関連付ける必要はありません。
- 登録されたインスタンスを登録解除して直接制御に戻すことができます。

インスタンスを登録すると、登録済み状態になります。 OpsWorks スタックは、登録されたすべてのインスタンスに次の管理機能を提供します。

- ヘルスチェック – OpsWorks スタックはエージェントをモニタリングして、インスタンスが引き続き機能するかどうかを評価します。

  インスタンスがヘルスチェックに失敗した場合、 OpsWorks スタックは登録された Amazon EC2 Amazon EC2 インスタンスを自動ヒーリングし、登録されたオンプレミスインスタンスのステータスを に変更しますconnection lost。

- CloudWatch のモニタリング — CloudWatch モニタリングは、登録されたインスタンスに対して有効になります。

  CPU 使用率や使用可能メモリなどのメトリクスをモニタリングして、指定されたしきい値を上回るか下回った場合にオプションで通知を受け取ることができます。

- ユーザー管理 – OpsWorks スタックを使用すると、インスタンスにアクセスできるユーザーと、実行できるオペレーションを簡単に指定できます。詳細については、「ユーザー許可の管理」を参照してください。

- レシピの実行 - Execute Recipes スタックコマンドを使用して、インスタンスに対して Chef レシピを実行できます。

- オペレーティングシステム更新 - Update Dependencies スタックコマンドを使用して、インスタンスのオペレーティングシステムを更新できます。

OpsWorks スタック管理機能を最大限に活用するには、インスタンスをレイヤーに割り当てることができます。詳細については、「登録されたインスタンスをレイヤーに割り当てる」を参照してください。

スタックが Amazon EC2 OpsWorks インスタンスを管理する方法とオンプレミスインスタンスを管理する方法には違いがあります。

Amazon EC2 インスタンス

- 登録された Amazon EC2 インスタンスを停止すると、 OpsWorks Stacks は instance store-backed インスタンスを終了し、Amazon EBS-backed インスタンスを停止します。

  インスタンスはスタックに登録されておりレイヤーに割り当てられているため、必要に応じて再開できます。登録されたインスタンスをスタックから削除するには、明示的に登録解除する、またはインスタンスを削除する（自動的に登録が解除されます）必要があります。

- 登録された Amazon EC2 インスタンスを再開する、またはインスタンスが失敗して自動ヒールされると、その結果は Amazon EC2 を使用してインスタンスを停止、再開する場合と同じになります。次の違いがあります:

- Instance store-backed インスタンス – OpsWorks スタックは同じ AMI を使用して新しいインスタンスを起動します。

  OpsWorks スタックには、ソフトウェアパッケージのインストールなど、登録前にインスタンスで実行したオペレーションの知識がないことに注意してください。起動時に OpsWorks スタックでパッケージをインストールしたり、他の設定タスクを実行したりする場合は、必要なタスクを実行するカスタム Chef レシピを指定し、適切な Layer の Setup イベントに割り当てる必要があります。

- Amazon EBS-backed インスタンス – OpsWorks スタックは同じ AMI で新しいインスタンスを起動し、ルートボリュームを再アタッチして、インスタンスを以前の設定に復元します。

- 登録された Amazon EC2 インスタンスの登録を解除すると、通常の Amazon EC2 インスタンスに戻ります。

オンプレミスインスタンス

- OpsWorks スタックは、登録されたオンプレミスインスタンスを停止または開始することはできません。

  登録された オンプレミス インスタンスの割り当てを解除すると、Shutdown イベントがトリガーされます。ただし、そのイベントは割り当てられたレイヤーの Shutdown レシピのみを実行します。サービスのシャットダウンなどのタスクを実行しますが、インスタンスは停止しません。

- OpsWorks スタックは、登録されたオンプレミスインスタンスが失敗しても自動修復できませんが、インスタンスは接続が失われたとマークされます。

- オンプレミスインスタンスは、Elastic ロードバランシング、Amazon EBS、および Elastic IP アドレスのサービスを使用できません。

登録されたインスタンスをレイヤーに割り当てる

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post または AWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> この機能は Linux スタックでのみサポートされています。

登録したインスタンスは、1 つ以上のレイヤーに割り当てることができます。インスタンスを割り当てずにレイヤーに割り当てる利点は、カスタムレシピをレイヤーのライフサイクルイベントに割り当てることができることです。 OpsWorks スタックは、そのイベントのレイヤーのレシピの後に、適切なタイミングでインスタンスを自動的に実行します。

- 登録された任意のインスタンスをカスタムレイヤーに割り当てることができます。カスタムレイヤーにはいずれのパッケージもインストールしない最小セットのレシピがあるため、インスタンスの既存の設定と競合することはありません。
- オンプレミスインスタンスを OpsWorks スタックの組み込みレイヤーに割り当てることができます。

  すべての組み込みレイヤーには、1 つ以上のパッケージを自動的にインストールするレシピが含まれています。例えば、Java App Server Setup レシピは Apache と Tomcat をインストールします。レイヤーのレシピは、サービスの再起動やアプリケーションのデプロイなど、他の操作を実行する場合もあります。オンプレミス インスタンスを組み込みレイヤーに割り当てる前に、現在インスタンスにあるものとは異なるバージョンのアプリケーションサーバーのインストールを試みるなど、レイヤーのレシピが競合しないことを確認する必要があります。詳細については、「レイヤー」および「OpsWorks スタックレイヤーリファレンス」を参照してください。

登録されたインスタンスをレイヤーに割り当てるには

1. まだ追加していない場合は、使用するレイヤーをスタックに追加します。
2. ナビゲーションペインで [インスタンス] をクリックし、インスタンスの [Actions] 列で [assign] をクリックします。
3. 適切なレイヤーを選択して [Save (保存)] を選択します。

インスタンスを Layer Stacks OpsWorks に割り当てると、次の処理が行われます。

- レイヤーの Setup レシピを実行します。
- アタッチされた Elastic IP アドレスや Amazon EBS ボリュームをスタックのリソースに追加します。

その後、 OpsWorks スタックを使用してこれらのリソースを管理できます。詳細については、「リソース管理」を参照してください。

完了すると、インスタンスはオンラインステータスになり、スタックに完全に組み込まれます。OpsWorks スタックは、ライフサイクルイベントが発生するたびにレイヤーに割り当てられたレシピを実行します。

登録されたインスタンスの割り当てを解除する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> この機能は Linux スタックでのみサポートされています。

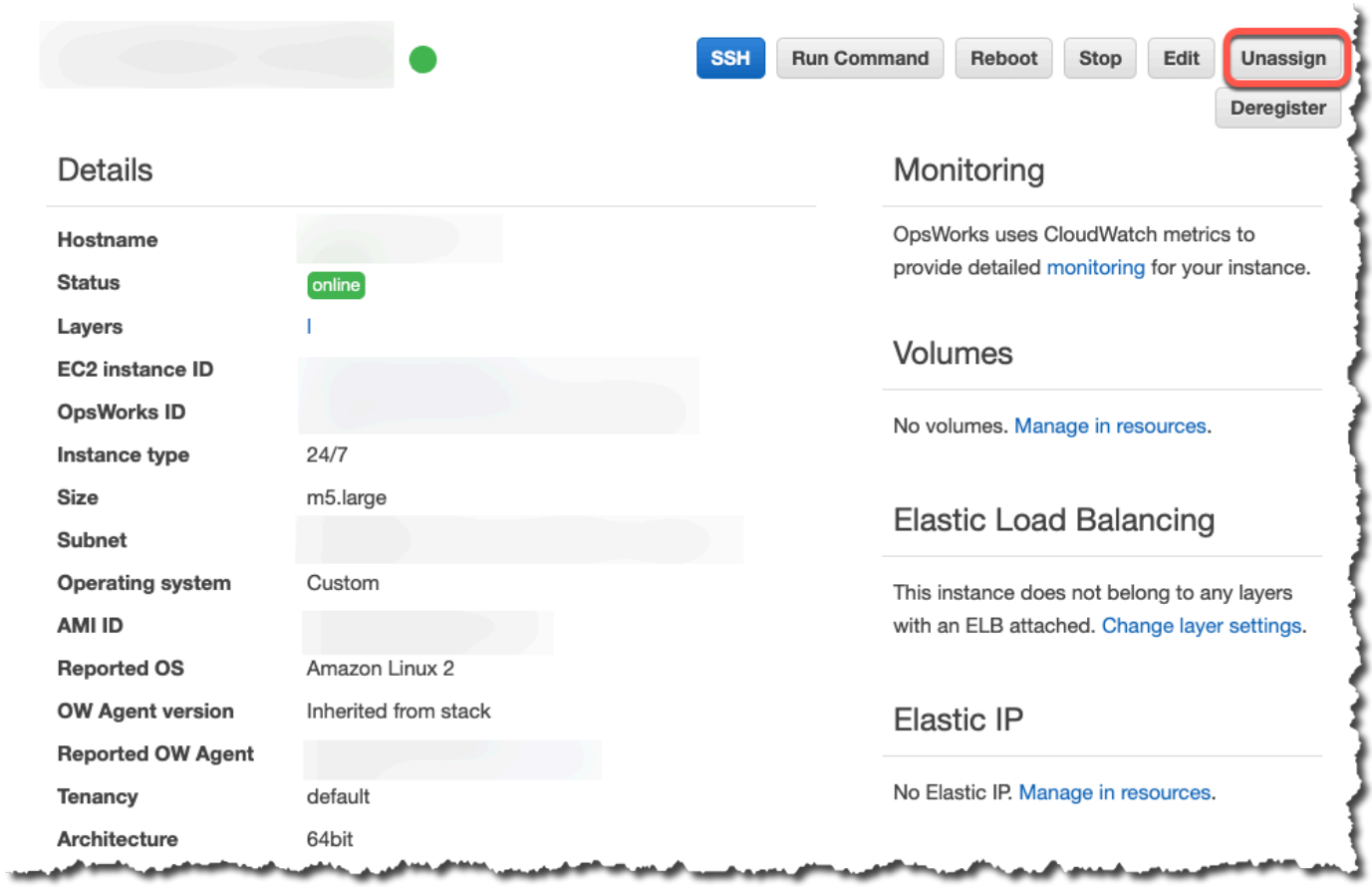
OpsWorks コンソール、または SDK オペレーションを使用して AWS CLI、レイヤーから登録済みインスタンスの割り当てを解除できます。

インスタンスの割り当てを解除すると、 OpsWorks Stacks はインスタンスで Layer の Shutdown レシピを実行します。これらのレシピはサービスのシャットダウンなどのタスクを実行しますが、インスタンスは停止しません。インスタンスが複数のレイヤーに割り当てられている場合、割り当ての解除はすべてのレイヤーに適用されるため、一部のレイヤーからのみインスタンスの割り当てを解除することはできません。ただし、インスタンスの登録はスタックに残るため、必要に応じて他のレイヤーに割り当てることができます。

コンソールを使用して登録済みインスタンスの割り当てを解除するには

1. ナビゲーションペインで、[インスタンス] を選択してください。
2. 割り当てを解除するインスタンスを選択します。

3. インスタンスの 「詳細」 ページで、「割り当て解除」 を選択します。



を使用して登録済みインスタンスの割り当てを解除するには AWS CLI

aws opsworks unassign-instance コマンドを実行して、登録されたインスタンスを、そのインスタンスを使用しているすべての Layer から割り当て解除します。

```
aws opsworks unassign-instance --region region --instance-id instance-id
```

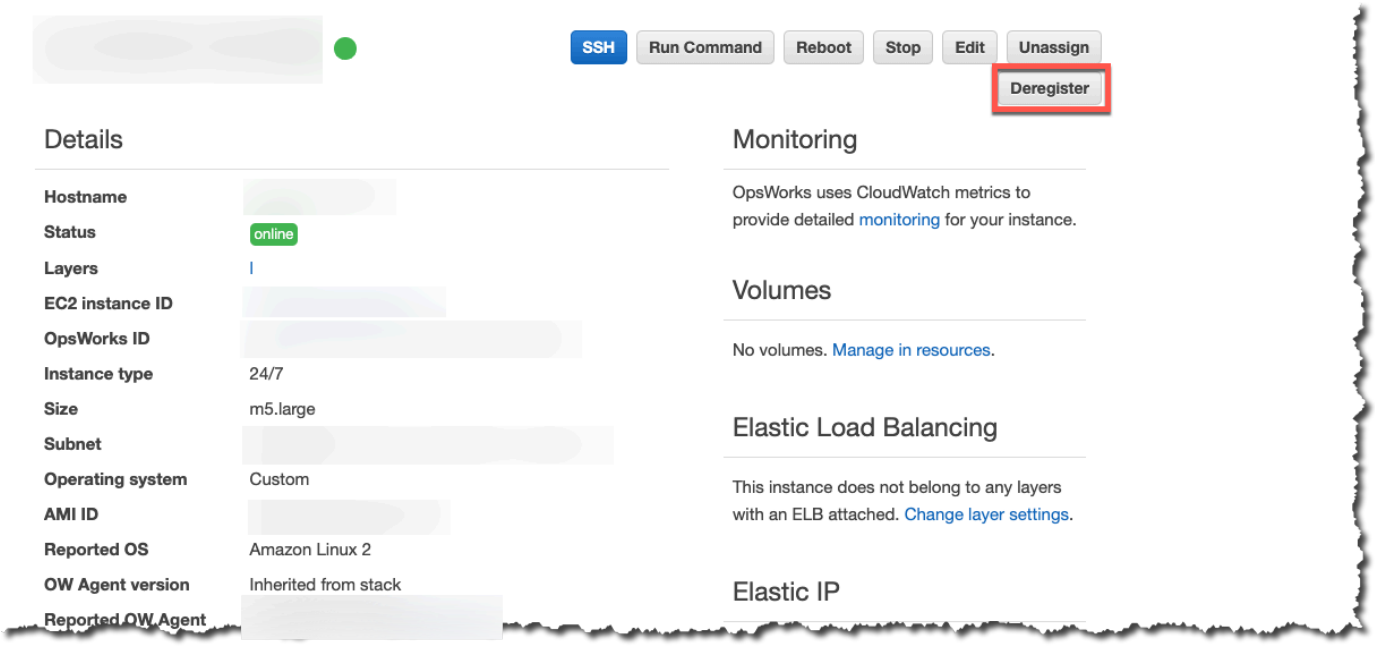
登録されたインスタンスの登録を解除する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks コンソール、、または SDK オペレーションを使用して AWS CLI、インスタンスの登録を解除できます。

コンソールを使用してインスタンスを登録解除するには

1. ナビゲーションペインで、[インスタンス] を選択してください。
2. 登録解除するインスタンスを選択します。
3. インスタンスの 「詳細」 ページで 「登録解除」 を選択します。



を使用してインスタンスの登録を解除するには AWS CLI

aws opsworks deregister-instance コマンドを実行してスタックからインスタンスを登録解除します。

```
aws opsworks deregister-instance --region region --instance-id instance-id
```

インスタンスの登録を解除すると、 OpsWorks Stacks は以下を実行します。

- スタックからインスタンスを削除します。
- 割り当てられたすべてのレイヤーからインスタンスの割り当てを解除します。
- エージェントをシャットダウンし、アンインストールします。

- アタッチされたすべてのリソース (Elastic IP アドレスと Amazon EBS ボリューム) の登録を解除します。

  この手順には、登録前にインスタンスにアタッチされたリソースと、スタックの一部である間に OpsWorks スタックを使用してインスタンスにアタッチしたリソースが含まれます。登録を解除すると、そのリソースはスタックの一部ではなくなりますが、インスタンスにはアタッチされたままになります。
- オンプレミス インスタンスの場合は、料金が発生しなくなります。
- OpsWorks がインスタンスに追加したすべてのタグを削除します。

インスタンスは実行中の状態のままですが、直接制御され、 OpsWorks スタックによって管理されなくなります。

> **Note**
>
> コンピュータまたはインスタンスの登録と登録解除は、Linux スタック内でのみ完全にサポートされます。Windows スタックの場合、インスタンスの登録解除は可能ですが、OpsWorks エージェントをインスタンスからアンインストールすることはしません。登録解除では、変更されたすべてのファイルは削除されず、特定のファイルのバックアップされたコピーに完全に戻るわけではありません。このリストは、Chef 11.10 および Chef 12 スタックの両方に適用されます。2 つのバージョンの違いを以下に示します。
>
> - `/etc/hosts` は `/var/lib/aws/opsworks/local-mode-cache/backup/etc/` にバックアップされますが、復元はされません。
> - aws および`opsworks` について、passwd、group、shadow files などのエントリは残ります。
> - `/etc/sudoers` には、 OpsWorks スタックディレクトリへの参照が含まれています。
> - 以下のファイルはそのままにしても安全です。長期的には、`/var/lib/aws/opsworks` を削除してください。
>   - `/var/log/aws/opsworks` は、Chef 11.10 のスタックでインスタンスに残ります。
>   - `/var/lib/aws/opsworks` は、Chef 11.10 と Chef 12 両方のスタックに残ります。
>   - `/var/chef` は、Chef 12 のスタックでインスタンスに残ります。
> - そのまま残されるその他のファイル:
>   - `/etc/logrotate.d/opsworks-agent`
>   - `/etc/cron.d/opsworks-agent-updater`

- /etc/ld.so.conf.d/opsworks-user-space.conf
- /etc/motd.opsworks-static
- /etc/aws/opsworks
- /etc/sudoers.d/opsworks
- /etc/sudoers.d/opsworks-agent

登録されたインスタンスのライフサイクル

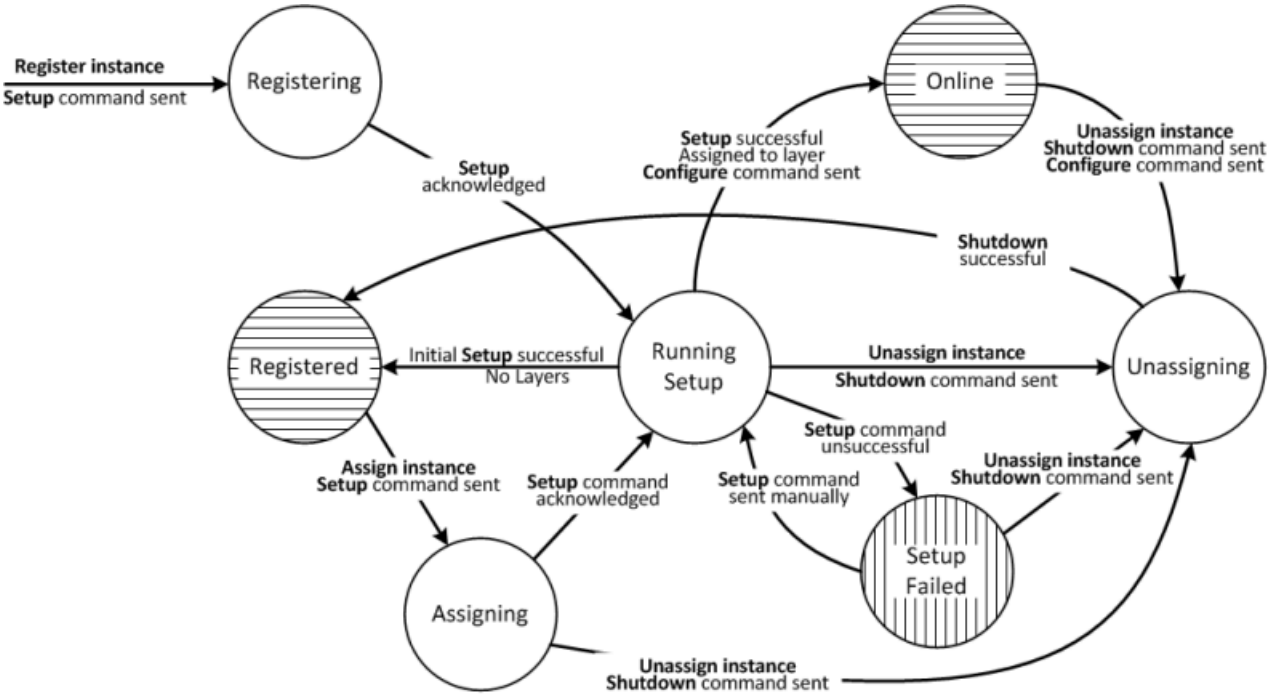
Important

この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Note

この機能は Linux スタックでのみサポートされています。

登録されたインスタンスのライフサイクルは、エージェントがインストールおよび実行されると開始します。その時点で、インスタンスをスタックに登録するように OpsWorks スタックに指示します。次の図は、状態とライフサイクルの主な要素をまとめたものです。



各状態はインスタンスのステータスに対応します。エッジは、次のいずれかの OpsWorks Stacks コマンドを表します。詳細については、以降のセクションで説明します。

- 設定 - このコマンドは Setup ライフサイクルイベントに対応し、インスタンスの Setup レシピを実行します。
- 設定 - このコマンドは Configure ライフサイクルイベントに対応します。

  OpsWorks スタックは、インスタンスがオンライン状態に出入りすると、スタック内のすべてのインスタンスでこのイベントをトリガーします。インスタンスでは Configure レシピが実行され、これにより新しいインスタンスに合わせて必要な変更が加えられます。
- シャットダウン - このコマンドは Shutdown ライフサイクルイベントに対応し、インスタンスの Shutdown レシピを実行します。

  これらのレシピはサービスのシャットダウンなどのタスクを実行しますが、インスタンスは停止しません。
- 登録解除 - このコマンドはインスタンスの登録を解除しますが、ライフサイクルイベントには対応しません。

> **Note**
>
> この図は簡略化されており、登録解除中状態と削除済み状態は示されていません。インスタンスの登録解除は、図に示したすべての状態で実行できます。登録を解除すると、Deregister コマンドがインスタンスに送信され、インスタンスが登録解除中状態に移行します。
>
> - オンラインインスタンスの登録を解除すると、 OpsWorks スタックはスタック内の残りのインスタンスに Configure コマンドを送信して、インスタンスがオフラインになることを通知します。
> - Deregister コマンドが認識されると、インスタンスは実行中のまま削除済み状態に移行し、スタックの一部ではなくなります。インスタンスを再度スタックに組み込むには、再登録する必要があります。

トピック

- を登録する
- セットアップ実行中
- 登録済み
- 割り当て中
- オンライン
- セットアップ失敗
- 割り当て解除中
- 初期セットアップ設定の変更

を登録する

エージェントが登録リクエストを送信すると、 OpsWorks Stacks は Setup コマンドをインスタンスに送信してインスタンスのライフサイクルを開始し、登録状態にします。インスタンスで Setup コマンドが認識されると、インスタンスはセットアップ実行中状態に移行します。

セットアップ実行中

セットアップ実行中状態では、インスタンスの Setup レシピが実行されます。セットアップの挙動は、セットアップ前の状態に応じて変化します。

> **Note**
>
> Running Setup 状態のインスタンスの割り当てを解除すると、 OpsWorks Stacks は Shutdown コマンドを送信します。このコマンドはインスタンスの Shutdown レシピを実行しますが、インスタンスは停止しません。インスタンスは割り当て解除中状態に移行します。

トピック

- を登録する
- 割り当て中
- セットアップ失敗

を登録する

登録プロセス中に、セットアップは OpsWorks スタック内の登録済みインスタンスを表す スタック インスタンスを作成し、インスタンスで一連のコアセットアップレシピを実行します。

初期セットアップによって実施される主な変更の 1 つは、インスタンスのホストファイルの上書きです。インスタンスを登録すると、ユーザー管理が OpsWorks スタックに引き継がれます。&OPS; スタックには、SSH ログインアクセス権限を制御する独自のホストファイルが必要です。また、初期セットアップでは複数のファイルが作成および変更されるほか、Ubuntu システムではパッケージのソースが変更されて一連のパッケージがインストールされます。詳細については、「初期セットアップ設定の変更」を参照してください。

登録中には、前提として作成した IAM ユーザーにアタッチされているアクセス権限の一部分である、IAM `AttachUserPolicy` が呼び出されます。`AttachUserPolicy` が存在しない場合 (大半の場合、旧リリースの AWS CLI が起動されていることが原因)、代わりに `PutUserPolicy` が呼び出されます。

> **Note**
>
> 一貫性を保つために、 OpsWorks スタックはすべてのコア Setup レシピを実行します。ただし、一部のレシピでは、インスタンスが 1 つ以上のレイヤーに割り当てられている場合にのみタスクの一部またはすべてを実行するため、初期セットアップに影響するとは限りません。

- セットアップが成功すると、インスタンスは登録済み状態に移行します。
- セットアップが失敗すると、インスタンスはセットアップ失敗状態に移行します。

割り当て中

インスタンスには、少なくとも 1 つの割り当てられた Layer があります。 OpsWorks スタックは、レイヤーの Setup イベントに割り当てたカスタムレシピを含め、各レイヤーの Setup レシピを実行します。

- セットアップが成功すると、インスタンスがオンライン状態に移行し、 OpsWorks スタックによってスタック内のすべてのインスタンスで Configure ライフサイクルイベントがトリガーされ、新しいインスタンスに通知されます。
- セットアップが失敗すると、インスタンスはセットアップ失敗状態に移行します。

> **Note**
>
> このセットアッププロセスは 2 回目のコア レシピを実行します。ただし、Chef のレシピはべき等であるため、すでに実行されているタスクは繰り返されません。

セットアップ失敗

割り当て中状態にあるインスタンスのセットアッププロセスが失敗した場合は、インスタンスの Setup レシピを Setup スタックコマンドを使用して手動で再実行できます。

- セットアップが成功すると、割り当てられているインスタンスは オンライン 状態に移行し、 OpsWorks スタックはそのスタック内のすべてのインスタンスに対して Configure ライフサイクルイベントをトリガーして、新しいインスタンスについて通知します。
- セットアップの試行が失敗すると、インスタンスはセットアップ失敗状態に戻ります。

登録済み

登録状態のインスタンスはスタックの一部であり、 OpsWorks スタックによって管理されますが、レイヤーには割り当てられません。これらのインスタンスは永続的にこの状態を維持できます。

インスタンスを 1 つ以上のレイヤーに割り当てると、 OpsWorks スタックは Setup コマンドをインスタンスに送信し、 割り当て中状態に移行します。

割り当て中

インスタンスで Setup コマンドが認識されると、インスタンスはセットアップ実行中状態に移行します。

割り当て状態のインスタンスの割り当てを解除すると、 OpsWorks スタックはセットアッププロセスを終了し、Shutdown コマンドを送信します。インスタンスは割り当て解除中状態に移行します。

オンライン

インスタンスは 1 つ以上の レイヤーのメンバーであり、通常の OpsWorks スタックインスタンスと同様に処理されます。このインスタンスは永続的にこの状態を維持できます。

オンライン状態のインスタンスの割り当てを解除すると、 OpsWorks スタックはインスタンスに Shutdown コマンドを送信し、残りのスタックのインスタンスに Configure コマンドを送信します。インスタンスは割り当て解除中状態に移行します。

セットアップ失敗

Setup コマンドが失敗しました。

- Setup スタックコマンドを再度実行して再試行できます。

  インスタンスはセットアップ実行中状態に戻ります。
- インスタンスの割り当てを解除すると、 OpsWorks スタックはインスタンスに Shutdown コマンドを送信します。

  インスタンスは割り当て解除中状態に移行します。

割り当て解除中

Shutdown コマンドを実行すると、インスタンスはすべてのレイヤーから割り当てが解除され、登録済み状態に戻ります。

> **Note**
>
> インスタンスが複数のレイヤーに割り当てられている場合、割り当ての解除はすべてのレイヤーに適用されます。割り当てられたレイヤーの一部のみの割り当てを解除することはできません。レイヤーの割り当てを変更するには、一度インスタンスの割り当てを解除してから希望のレイヤーに再度割り当てる必要があります。

初期セットアップ設定の変更

初期セットアップでは、登録されたすべてのインスタンスで次のファイルとディレクトリが作成または変更されます。

作成されたファイル

```
/etc/apt/apt.conf.d/99-no-pipelining
/etc/aws/
/etc/init.d/opsworks-agent
/etc/motd
/etc/motd.opsworks-static
/etc/sudoers.d/opsworks
/etc/sudoers.d/opsworks-agent
/etc/sysctl.d/70-opsworks-defaults.conf
/opt/aws/opsworks/
/usr/sbin/opsworks-agent-cli
/var/lib/aws/
/var/log/aws/
/vol/
```

変更されたファイル

```
/etc/apt/apt.conf.d/99-no-pipelining
/etc/crontab
/etc/default/monit
/etc/group
/etc/gshadow
/etc/monit/monitrc
/etc/passwd
/etc/security/limits.conf (removing limits only for EC2 micro instances)
/etc/shadow
/etc/sudoers
```

また、初期セットアップでは Amazon EC2 のマイクロインスタンスにスワップファイルが作成されます。

初期セットアップにより、Ubuntu システムに対して次の変更が加えられます。

パッケージソース

初期セットアップでは、パッケージソースが次のように変更されます。

- deb http://archive.ubuntu.com/ubuntu/ ${code_name} main universe

  To: deb-src http://archive.ubuntu.com/ubuntu/ ${code_name} main universe
- deb http://archive.ubuntu.com/ubuntu/ ${code_name}-updates main universe

  To: deb-src http://archive.ubuntu.com/ubuntu/ ${code_name}-updates main universe
- deb http://archive.ubuntu.com/ubuntu ${code_name}-security main universe

  To: deb-src http://archive.ubuntu.com/ubuntu ${code_name}-security main universe
- deb http://archive.ubuntu.com/ubuntu/ ${code_name}-updates multiverse

  To: deb-src http://archive.ubuntu.com/ubuntu/ ${code_name}-updates multiverse
- deb http://archive.ubuntu.com/ubuntu ${code_name}-security multiverse

  To: deb-src http://archive.ubuntu.com/ubuntu ${code_name}-security multiverse
- deb http://archive.ubuntu.com/ubuntu/ ${code_name} multiverse

  To: deb-src http://archive.ubuntu.com/ubuntu/ ${code_name} multiverse
- deb http://security.ubuntu.com/ubuntu ${code_name}-security multiverse

  To: deb-src http://security.ubuntu.com/ubuntu ${code_name}-security multiverse

パッケージ

初期セットアップにより landscape がアンインストールされ、次のパッケージがインストールされます。

autofs	libicu-dev	libopenssl-ruby
libssl-dev	libxml2-dev	libxslt-dev

libyaml-dev	monit	ntpd
procps	ruby	ruby-dev
rubygems	screen	sqlite
vim	xfs	

インスタンス設定の編集

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

登録された Amazon Elastic Compute Cloud (Amazon EC2) インスタンスなどのインスタンス設定を編集できますが、以下の制限があります。

- インスタンスは停止状態である必要があります。

  オンラインインスタンスのプロパティは変更できませんが、インスタンスのレイヤーを編集することで、その設定の一部の側面を変更できます。詳細については、「OpsWorks レイヤーの構成を編集する」を参照してください。
- [Availability Zone] や [Scaling Type] などの一部の設定はインスタンスの作成時に決定され、後で変更することはできません。
- Instance store-Backed インスタンスでは変更できても、Amazon Elastic Block Store-Backed インスタンスでは変更できない設定があります。

  例えば、Instance store-backed インスタンスのオペレーティングシステムは変更できますが、Amazon EBS-backed インスタンスでは、インスタンスの作成時に指定したオペレーティングシステムを使用する必要があります。インスタンスストレージについては、「ストレージ」を参照してください。
- デフォルトでは、インスタンスはスタックのエージェントバージョンの設定を継承します。

[OpsWorks Agent Version] を使用して、スタックのエージェントバージョンの設定を上書きし、インスタンスの特定のエージェントバージョンを指定できます。インスタンスのエージェントバージョンを指定した場合、 OpsWorks スタックのエージェントバージョン設定が自動更新であっても、新しいバージョンが利用可能になると、スタックはエージェントを自動的に更新しません。インスタンス設定を編集して、インスタンスのエージェントバージョンを手動で更新する必要があります。 OpsWorks スタックは、指定されたエージェントバージョンをインスタンスにインストールします。

> **Note**
>
> 登録したオンプレミスインスタンスの設定を編集することはできません。

インスタンスの設定を編集するには

1. インスタンスをまだ停止していない場合は、停止します。
2. [Instances] ページで、インスタンス名をクリックして、[Details] ページを表示します。
3. [Edit] をクリックして、編集ページを表示します。
4. 必要に応じてインスタンスの設定を編集します。

[Host name]、[Size]、[SSH key] および [Operating system] 設定の説明については、「レイヤーへのインスタンスの追加」を参照してください。[Layer] 設定により、レイヤーを追加または削除することができます。インスタンスの現在のレイヤーがレイヤーのリストに続いて表示されます。

- 別のレイヤーを追加するには、リストから選択します。
- レイヤーの 1 つからインスタンスを削除するには、適切なレイヤーの横の [x] をクリックします。

  インスタンスは、少なくとも 1 つのレイヤーのメンバーである必要があるので、最後のレイヤーを削除することはできません。

インスタンスを再起動すると、 OpsWorks スタックは更新された設定で新しい Amazon EC2 インスタンスを起動します。

OpsWorks スタックインスタンスの削除

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

スタックを使用して、登録された Amazon EC2 OpsWorks インスタンスを含むインスタンスを停止できます。 Amazon EC2 これにより、EC2 インスタンスは停止しますが、インスタンス自体はスタックに残ります。インスタンスのアクション列で開始をクリックして、を再起動できます。インスタンスが不要になり、スタックから削除するには、それを削除することで、インスタンスがスタックから削除され、関連付けられた Amazon EC2インスタンスが終了します。インスタンスを削除すると、そのインスタンスに関連するログまたはデータ、Amazon Elastic Block Store(EBS) ボリュームも削除されます。

> **Important**
>
> このトピックは、 スタックによって管理される Amazon EC2 OpsWorks インスタンスにのみ適用されます。Amazon EC2 コンソールまたは API を使用して管理するインスタンスの削除方法の詳細については、「インスタンスの終了」を参照してください。

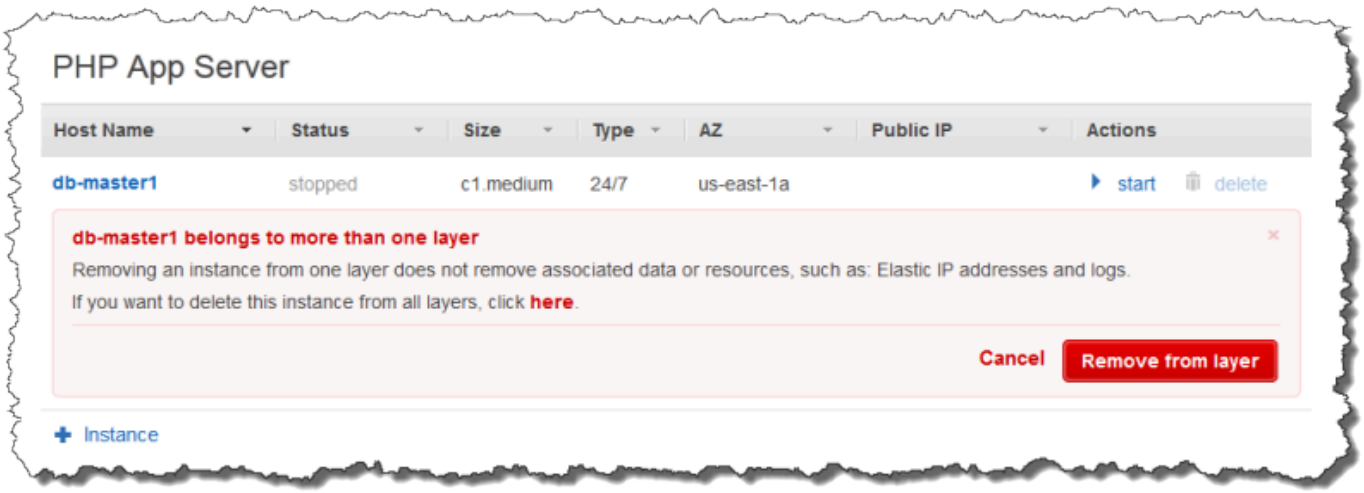
> **Note**
>
> OpsWorks スタックを使用して、登録されたオンプレミスインスタンスを削除することはできません。

インスタンスが複数のレイヤーに属している場合は、スタックからインスタンスを削除するか、単に特定のレイヤーを削除します。また、「インスタンス設定の編集」で説明しているように、インスタンスの設定を編集することで、インスタンスからレイヤーを削除することもできます。

> **Important**
>
> スタックインスタンスは OpsWorks 、 スタックコンソールまたは API OpsWorks を使用してのみ削除する必要があります。特に、Amazon EC2 アクションは OpsWorks スタックと自動的に同期されないため、Amazon EC2 コンソールまたは API を使用して OpsWorks スタックインスタンスを削除しないでください。例えば、自動ヒーリングを有効にしている場合に Amazon EC2 コンソールを使用してインスタンスを終了すると、 OpsWorks スタックはその終了したインスタンスを失敗したインスタンスとして扱い、別の Amazon EC2 インスタンスを起動して置き換えます。詳細については、「自動ヒーリングの使用」を参照してください。

インスタンスを削除するには

1. [Instances] ページで、該当するレイヤーのインスタンスを探します。インスタンスが実行されている場合は、[アクション] 列で [停止] をクリックします。
2. ステータスが [stopped] に変わったら、[delete] をクリックします。インスタンスが複数のレイヤーのメンバーである場合、レイヤー OpsWorks スタックには次のセクションが表示されます。



   - 選択したレイヤーからのみインスタンスを削除するには、[Remove from layer] をクリックします。

     インスタンスは、その他のレイヤーではメンバーとして残り、再起動することができます。
   - インスタンスをすべてのレイヤーから削除し、スタックから削除するには、[here] をクリックします。

3. スタックからインスタンスを完全に削除することを選択した場合、またはインスタンスが 1 つのレイヤーのみのメンバーである場合、 OpsWorks Stacks は削除の確認を求めます。

   [Delete] を選択して確定します。インスタンスをスタックから削除することに加えて、このアクションは、インスタンスに関連付けられているログやデータ、インスタンスにアタッチされているルートボリュームも削除します。すべてのインスタンスボリュームを削除するには、[削除] を選択する前に、インスタンスの EBS ボリュームを削除 (スナップショットは削除されません)します。

SSH を使用した Linux インスタンスへのログイン

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

組み込み MindTerm クライアントまたはサードパーティクライアント (PuTTY など) を使用して SSH でオンライン Linux インスタンスにログインできます。SSH は、通常 RSA キーペアを使用して認証を行います。インスタンスにパブリックキーをインストールし、対応するプライベートキーを SSH クライアントに提供します。 OpsWorks スタックは、次のように、スタックのインスタンスへのパブリックキーのインストールを処理します。

- Amazon Elastic Compute Cloud (Amazon EC2) キーペア – スタックのリージョンに 1 つ以上の Amazon EC2 キーペアがある場合、スタックのデフォルトの SSH キーペアを指定できます。

  オプションで、デフォルトのキーペアを上書きし、インスタンスの作成時に異なるペアを指定できます。いずれの場合も、 OpsWorks Stacks は指定されたキーペアのパブリックキーをインスタンスにインストールします。Amazon EC2 のキーペアの作成方法の詳細については、Amazon EC2 のキーペアを参照してください。。
- 個人キーペア — 各ユーザーは OpsWorks スタックで個人キーペアを登録できます。

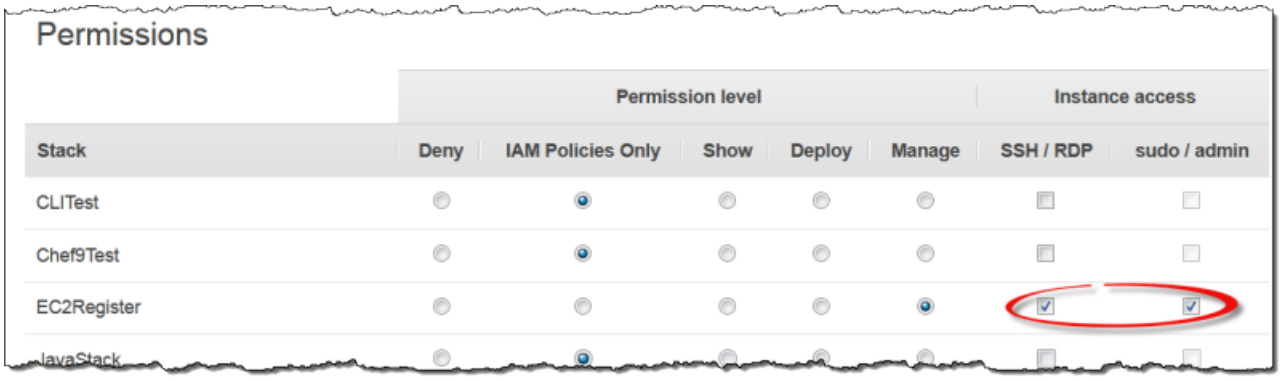
  ユーザーまたは管理者はパブリックキーを OpsWorks スタックに登録し、ユーザーはプライベートキーをローカルに保存します。スタックのアクセス権限を設定するとき、管理者はどのユーザーにスタックのインスタンスに対する SSH アクセスを付与するかを指定します。 OpsWorks スタッ

クは、承認された各ユーザーのスタックのインスタンスにシステムユーザーを自動的に作成し、ユーザーの個人用パブリックキーをインストールします。

ユーザーは、スタックのインスタンスにログインするには、SSH 認可を行って MindTerm SSH クライアントを使用するか、個人キーペアを使用する必要があります。

ユーザーに SSH を許可する

1. OpsWorks スタックナビゲーションペインで、アクセス許可をクリックします。
2. 必要な権限を付与するために、目的のIAM) ユーザーに SSH/RDP を選択します。例えば、エージェントCLI コマンドを実行するなど、ユーザーが sudo を使用して権限を昇格させることを許可する場合は、sudo/admin も選択します。



OpsWorks スタックを使用して SSH アクセスを管理する方法の詳細については、「」を参照してくださいSSH アクセスの管理。

トピック

- 組み込みの MindTerm SSH クライアントの使用
- サードパーティ SSH クライアントの使用

組み込みの MindTerm SSH クライアントの使用

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS

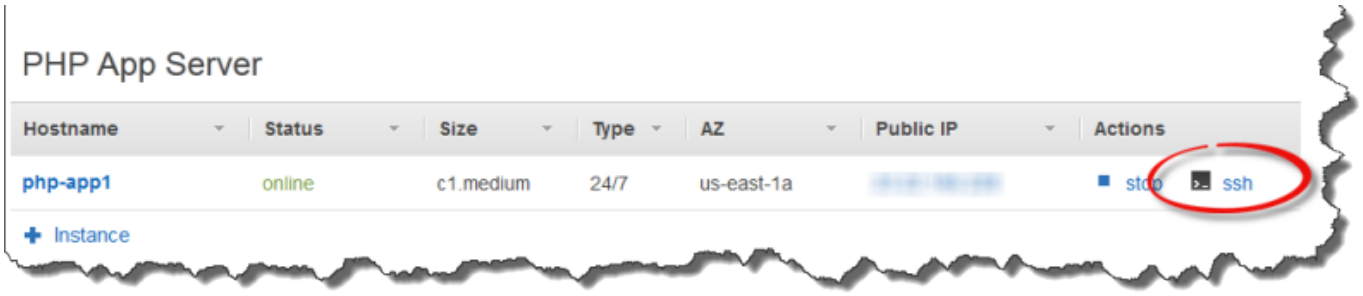
re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

組み込みの MindTerm SSH クライアントを使用すれば、Linux インスタンスに簡単にログインできます。各オンラインインスタンスには、MindTerm クライアントの起動に使用できる ssh アクションが含まれています。

> **Note**
>
> MindTerm クライアントを使用するには、ブラウザで Java を有効にする必要があります。

MindTerm クライアントを使用してログインするには

1. まだ行っていない場合は、前述のセクションで説明したように、インスタンスに接続する IAM ユーザーに SSH アクセスを許可します。
2. IAM ユーザーとしてログインします。
3. インスタンスページで、該当するインスタンスの [Actions] 列で [ssh] を選択します。



4. プライベートキー で、インスタンスにインストールしたパブリックキーに応じて、IAM ユーザーの個人プライベートキーまたは Amazon EC2 プライベートキーへのパスを入力します。
5. [Launch Mindterm] を選択し、ターミナルウィンドウを使用してインスタンスでコマンドを実行します。

サードパーティ SSH クライアントの使用

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソ

リューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

サードパーティーの SSH クライアント (PuTTY など) を使用して Linux インスタンスに接続することもできます。

サードパーティ SSH クライアントを使用するには

1. 前述のように OpsWorks 、 スタックが Amazon EC2 パブリックキーまたは IAM ユーザーの個人パブリックキーをインスタンスにインストールしていることを確認します。
2. 詳細ページからインスタンスのパブリック DNS 名またはパブリック IP アドレスを取得します。
3. クライアントにインスタンスのホスト名を指定します。これは、次のようにオペレーティングシステムによって異なります。

   - Amazon Linux および Red Hat Enterprise Linux (RHEL)- `ec2-user@`*`DNSName/Address`*`.`
   - Ubuntu -。`ubuntu@`*`DNSName/Address`*

   [*`DNSName/Address`*] は、前のステップのパブリック DNS 名または IP アドレスで置き換えます。
4. インストールされたパブリックキーに対応するプライベートキーをクライアントに指定します。インスタンスにインストールされたパブリックキーに応じて、Amazon EC2 プライベートキーまたは IAM ユーザーの個人プライベートキーを使用することができます。

RDP を使用した Windows インスタンスへのログイン

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Windows リモートデスクトッププロトコル (RDP) を使用して、次のようにオンライン Windows インスタンスにログインできます。

- インスタンスには、RDP アクセスを許可するインバウンドルールを持つセキュリティグループが必要です。

  セキュリティグループの使用の詳細については、「セキュリティグループの使用」を参照してください。
- 通常のユーザー – OpsWorks スタックは、許可された通常のユーザーに、30 分から 12 時間の範囲の限られた期間有効な RDP パスワードを提供します。

  承認に加えて、ユーザーは少なくとも Show アクセス許可レベルを持っているか、アタッチされた AWS Identity and Access Management (IAM) ポリシーで `opsworks:GrantAccess`アクションを許可する必要があります。
- 管理者 - 管理者パスワードを使用してログインできます。時間に制限はありません。

  後で説明するように、インスタンスに Amazon Elastic Compute Cloud (Amazon EC2) キーペアを指定している場合、それを使用して管理者パスワードを取得できます。

> **Note**
>
> このトピックでは、Windows リモートデスクトップ接続クライアントを使用して Windows ワークステーションからログインする方法について説明します。さらに、Linux または OS X の使用可能な RDP クライアントのいずれかを使用することもできますが、手順は少し異なる可能性があります。Microsoft Windows Server 2012 R2 と互換性のある RDP クライアントの詳細については、「Microsoft リモートデスクトップクライアント」を参照してください。

トピック

- RDP アクセスを許可するセキュリティグループの提供
- 通常のユーザーとしてログイン
- 管理者としてログイン

RDP アクセスを許可するセキュリティグループの提供

RDP を使用して Windows インスタンスにログインには、インスタンスのセキュリティグループのインバウンドルールが RDP 接続を許可している必要があります。リージョン内で最初のスタックを作成すると、 OpsWorks スタックによって一連のセキュリティグループが作成されます。これには、のような名前のものが含まれます。これは`AWS-OpsWorks-RDP-Server`、RDP アクセスを許可するために OpsWorks スタックがすべての Windows インスタンスにアタッチします。ただし、デフォルトでは、このセキュリティグループにはルールが存在しないため、インスタンスへの RDP アクセスを許可するインバウンドルールを追加する必要があります。

RDP アクセスを許可するには

1. Amazon EC2 コンソールを開き、スタックのリージョンに設定して、ナビゲーションペインから [セキュリティグループ] を選択します。
2. [AWS-OpsWorks-RDP-Server]、[Inbound]、[Edit] の順に選択します。
3. [Add Rule] を選択し、次の設定を指定します。

   - タイプ - RDP
   - Source (ソース) – 許可される送信元 IP アドレス。

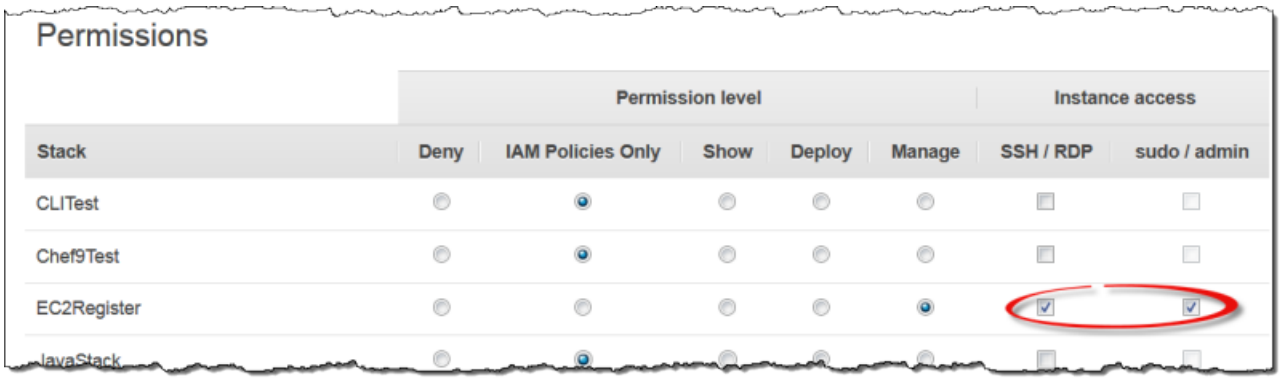
     通常は、自身の IP アドレスまたは指定した IP アドレス範囲 (社内の IP アドレス範囲が一般的) へのインバウンド RDP リクエストを許可します。

通常のユーザーとしてログイン

許可されたユーザーは、 OpsWorks スタックにより提供される一時パスワードを使用してインスタンスにログインできます。

ユーザーに RDP を許可する

1. OpsWorks スタックナビゲーションペインで、アクセス許可をクリックします。
2. 必要なアクセス権限を付与するための目的のユーザーに対する [SSH/RDP] チェックボックスを選択します。ユーザーに管理者アクセス権限を付与する場合、[sudo/admin] も選択してください。



許可されたユーザーは、次のようにスタックのどのオンラインインスタンスにもログインできます。

通常のIAM ユーザーとしてログインするには

1. IAM ユーザーとしてログインします。
2. [インスタンス] ページで、適切なインスタンスの [アクション] 列の [rdp] を選択します。
3. セッションの長さ (30 分から 12 時間) を指定し、[Generate Password] を選択します。パスワードは、指定したセッション期間中のみ有効です。
4. [public DNS name]、[username]、[password] の値を記録し、[Acknowledge and close] を選択します。
5. Windows リモートデスクトップ接続クライアントを開いて、[Show Options] を選択し、ステップ 4 で記録して情報から次の内容を入力します。

   - Computer - インスタンスのパブリック DNS 名。

     必要に応じて、パブリック IP アドレスを使用することもできます。[Instances] を選択し、インスタンスの [Public IP] 列からアドレスをコピーします。

   - User name - ユーザー名。
6. クライアントにより認証情報の入力を求められた場合、ステップ 4 で保存したパスワードを入力します。

> **Note**
>
> OpsWorks スタックは、オンラインインスタンスに対してのみユーザーパスワードを生成します。インスタンスを起動した後、たとえばカスタム Setup レシピの 1 つが失敗した場合、インスタンスは `setup_failed` 状態になります。インスタンスは OpsWorks スタックに関してオンラインではありませんが、EC2 インスタンスが実行されているため、問題のトラブ

ルシューティングのためにログインすると便利です。この場合、 OpsWorks スタックはパスワードを生成しませんが、SSH キーペアをインスタンスに割り当てている場合は、EC2 コンソールまたは CLI を使用してインスタンスの管理者パスワードを取得し、管理者としてログインできます。詳細については、以下のセクションを参照してください。

管理者としてログイン

適切なパスワードを使用して管理者としてインスタンスにログインできます。EC2 キーペアをインスタンスに割り当てた場合、Amazon EC2 はインスタンスの起動時にそのキーペアを使用して管理者パスワードを自動的に作成および暗号化します。その後、EC2 コンソール、API、または CLI でキーペアのプライベートキーを使用して、パスワードを取得および復号できます。

> **Note**
>
> 個人 SSH キーペアを使用して管理者パスワードを取得することはできません。EC2 キーペアを使用する必要があります。

EC2 コンソールを使用すして管理者パスワードを取得し、インスタンスにログインする方法について次に説明します。コマンドラインツールを希望する場合、AWS CLI `get-password-data` コマンドを使用してパスワードを取得することもできます。

管理者としてログインするには

1. インスタンスに EC2 キーペアを指定したことを確認します。スタックを作成するときにスタックのすべてのインスタンスにデフォルトのキーペアを指定するか、インスタンスを作成するときに特定のインスタンスのキーペアを指定することができます。
2. EC2 コンソールを開いてスタックのリージョンに設定し、ナビゲーションペインから [Instances] を選択します。
3. インスタンスを選択し、[Connect] を選択して [Get Password] を選択します。
4. ワークステーションにおける EC2 キーペアのプライベートキーへのパスを指定し、[Decrypt Password] を選択します。後で使用できるように復号されたパスワードをコピーします。
5. Windows リモートデスクトップ接続クライアントを開き、[Show Options] を選択して次の情報を入力します。

   - コンピュータ - インスタンスの詳細ページから取得可能なインスタンスのパブリック DNS 名またはパブリック IP アドレス。

- User name –`Administrator`。

6. クライアントにより認証情報の入力を求められたら、ステップ 4 の復号されたパスワードを入力してください。

アプリケーション

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックアプリケーションは、アプリケーションサーバーで実行するコードを表します。コード自体は Amazon S3 アーカイブなどのリポジトリにあります。アプリケーションには、適切なアプリケーションサーバーのインスタンスにコードをデプロイするために必要な情報が含まれます。

アプリケーションをデプロイすると、 OpsWorks スタックはデプロイイベントをトリガーし、各レイヤーのデプロイレシピを実行します。また、 OpsWorks スタックは、アプリケーションのリポジトリやデータベース接続データなど、アプリケーションのデプロイに必要なすべての情報を含むスタック設定とデプロイ属性をインストールします。

スタック設定およびデプロイ属性からアプリケーションのデプロイデータを取得してデプロイタスクを処理するカスタムレシピを実装する必要があります。

トピック

- アプリケーションの追加
- アプリケーションのデプロイ
- アプリケーションの編集
- アプリケーションのデータベースサーバーへの接続
- 環境変数の使用
- アプリケーションへのデータの引き渡し
- Git リポジトリの SSH キーの使用

- カスタムドメインの使用
- SSL の使用

アプリケーションの追加

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

アプリケーションサーバーにアプリケーションをデプロイする際、最初に行うことは、そのアプリケーションをスタックに追加することです。app はアプリケーションを表し、さまざまなメタデータ (アプリケーションの名前や種類など) と、アプリケーションをサーバーインスタンスにデプロイするために必要な情報 (リポジトリ URL など) を保持します。アプリケーションをスタックに追加するには、Manage 権限が必要です。詳細については、「ユーザー許可の管理」を参照してください。

> **Note**
>
> このセクションの手順は、Chef 12 以降のスタックに適用されます。Chef 11 スタックのレイヤーにアプリを追加する方法については、「ステップ 2.4: アプリケーション - Chef 11 を作成してデプロイする」を参照してください。

スタックにアプリケーションを追加するには

1. コードは、 Amazon S3 アーカイブ、 Gitリポジトリ、 Subversion リポジトリ、 HTTP アーカイブなど、望ましいリポジトリに加えてください。詳細については、「Application Source」を参照してください。
2. ナビゲーションペインで [Apps] をクリックします。最初のアプリケーションの場合、[Apps] ページで [Add an app] をクリックします。それ以降のアプリケーションについては、[+App] をクリックします。
3. 次のセクションの説明に従い、[App New] ページを使用してアプリケーションを設定します。

アプリケーションの設定

[Add App] ページは、[Settings]、[Application source]、[Data Sources]、[Environment Variables]、[Add Domains]、[SSL Settings] の各セクションで構成されています。

トピック

- 設定
- Application Source
- データソース
- 環境可変
- ドメインと SSL の設定

設定

名前

UI でアプリを表すために使用されるアプリ名。 OpsWorks スタックは、この名前を使用して、内部で使用されるアプリの短縮名を生成し、スタック設定およびデプロイ属性でアプリを識別します。アプリケーションをスタックに追加した後、ナビゲーションペインの [Apps] (アプリケーション) をクリックし、アプリケーションの名前をクリックして詳細ページを開くと短縮名を確認できます。

[Document root]

OpsWorks スタックは、アプリケーションの`[:document_root]`属性の `deploy` 属性にドキュメントルート設定を割り当てます。デフォルト値は `null` です。デプロイレシピで標準の Chef ノード構文を使い、その値を `deploy` 属性から取得して、特定のコードをサーバー上の適切な場所にデプロイすることができます。アプリケーションのデプロイ方法の詳細については、「Deploy レシピ」を参照してください。

Application Source

以下の Git、 Amazon S3 bundle、 HTTP bundle などのリポジトリタイプからアプリケーションをデプロイできます。いずれのリポジトリタイプも、リポジトリのタイプとリポジトリの URL を指定する必要があります。リポジトリタイプにはそれぞれ固有の要件があります。以下、それらの要件について説明します。

> **Note**
>
> OpsWorks スタックは、標準リポジトリから組み込みサーバーレイヤーにアプリケーションを自動的にデプロイします。Windows スタックの唯一のオプションであるその他のリポジトリタイプを使用する場合、 OpsWorks スタックはアプリケーションの`deploy`属性にリポジトリ情報を配置しますが、デプロイタスクを処理するカスタムレシピを実装する必要があります。

トピック

- HTTP アーカイブ
- Amazon S3 アーカイブ
- Git リポジトリ
- その他のリポジトリ

HTTP アーカイブ

パブリックにアクセス可能な HTTP サーバーをリポジトリとして使用するには、次の手順を使用します。

1. アプリケーションのコードとあらゆる関連ファイルを含むフォルダの圧縮アーカイブ (zip、gzip、 bzip2、 Java WAR、 tarball など) を作成します。

   > **Note**
   >
   > OpsWorks スタックは非圧縮 tarball をサポートしていません。

2. アーカイブファイルをサーバーにアップロードします。
3. コンソールでリポジトリを指定するには、リポジトリタイプとして [HTTP Archive] を選択し、URL を入力します。

   アーカイブがパスワードで保護されている場合、アプリケーションソース でサインイン認証を指定します。

Amazon S3 アーカイブ

Amazon シンプルストレージサービスバケットをリポジトリとして使用するには:

1. 公開またはプライベートの Amazon S3 バケットを作成します。詳細については、「Amazon S3 Documentation」(Amazon S3のドキュメント) を参照してください。
2. OpsWorks スタックがプライベートバケットにアクセスするには、Amazon S3 バケットに対する少なくとも読み取り専用の権限を持つユーザーであり、アクセスキー ID とシークレットアクセスキーが必要です。詳細については、AWS Identity and Access Management ドキュメント を参照してください。
3. コードとすべての関連ファイルを単一フォルダに配置し、そのフォルダを圧縮アーカイブ (zip、gzip、bzip2、Java WAR、tarball のいずれか) に保存します。

   > **Note**
   >
   > OpsWorks スタックは非圧縮 tarball をサポートしていません。

4. アーカイブファイルを Amazon S3 バケットにアップロードし、 URL を記録します。
5. OpsWorks スタックコンソールでリポジトリを指定するには、リポジトリタイプを S3 Archive に設定し、アーカイブの URL を入力します。プライベートアーカイブの場合、ポリシーがバケットへのアクセス権限を付与する AWS アクセスキー ID とシークレットアクセスキーを提供する必要があります。パブリックアーカイブでは、これらの設定を空白のままにします。

Git リポジトリ

Git リポジトリは、ソース制御とバージョニングを提供します。 OpsWorks スタックはGitHub や Bitbucket などのパブリックにホストされたリポジトリサイトと、プライベートにホストされた Git サーバーをサポートしています。アプリケーションも Git サブモジュールも、[Application Source] (アプリケーションソース) にリポジトリの URL を指定する際の形式は、リポジトリがパブリックであるかプライベートであるかによって異なります。

[Public repository (パブリックリポジトリ)] - HTTPS または Git の読み取り専用プロトコルを使用します。例えば、Chef 11 Linux スタックの使用開始 では、以下のいずれかの URL 形式でアクセスできるパブリック GitHub リポジトリを使用します。

- Git 読み取り専用: **`git://github.com/amazonwebservices/opsworks-demo-php-simple-app.git`**
- HTTPS: **`https://github.com/amazonwebservices/opsworks-demo-php-simple-app.git`**

[Private repository (プライベートリポジトリ)] - 次の例に示す SSH の読み取り/書き込み形式を使用します。

- Github リポジトリ: **git@github.com:*project*/*repository***。
- Git サーバー上のリポジトリ: ***user*@*server*:*project*/*repository***

[Source Control (ソースコントロール)] で [Git (Git)] を選択すると、次の 2 つの追加オプション設定が表示されます。

[Repository SSH key]

プライベート Git リポジトリにアクセスするには、デプロイ SSH キーを指定する必要があります。このフィールドにはプライベートキーが必要となり、パブリックキーは Git リポジトリに割り当てられます。Git サブモジュールの場合、指定するキーには、それらのサブモジュールへのアクセス権が必要です。詳細については、「Git リポジトリの SSH キーの使用」を参照してください。

> **Important**
>
> デプロイ SSH キーはパスワードを要求できません。 OpsWorks スタックにはパスワードを渡す方法がありません。

[Branch/Revision]

リポジトリに複数のブランチがある場合、 OpsWorks スタックはデフォルトでマスターブランチをダウンロードします。特定のブランチを指定するには、ブランチ名、SHA1 ハッシュ、タグ名のいずれかを入力します。特定のコミットを指定するには、40 桁の 16 進数コミット ID を入力します。

その他のリポジトリ

標準のリポジトリでは要件を満たすことができない場合、他のリポジトリ (Bazaar など) を使用することができます。ただし、 OpsWorks スタックはそのようなリポジトリからアプリケーションを自動的にデプロイしません。デプロイプロセスを処理するカスタムレシピを独自に実装し、それらを適切なレイヤーの Deploy イベントに割り当てる必要があります。Deploy レシピの実装方法の例については、「Deploy レシピ」を参照してください。

データソース

このセクションはアプリケーションにデータベースをアタッチします。次のオプションがあります。

- RDS - スタックの Amazon RDS サービスレイヤーの1つをアタッチします。
- [None (なし)] - データベースサーバーをアタッチしません。

[RDS] を選択する場合、以下の情報を指定する必要があります。

Database instance

このリストには、すべての Amazon RDS サービスレイヤーが含まれています。加えて、次のいずれかを選択することができます。

(必須) アプリケーションにアタッチするデータベースサーバーを指定します。リストの内容は、データソースによって異なります。

- [RDS (RDS)] - スタックの Amazon RDS サービスレイヤーのリスト。

[Database name] (データベース名)

(オプション) データベース名を指定します。

- Amazon RDS レイヤー - Amazon RDS インスタンスに対して指定したデータベース名を入力します。

  データベース名は、 [Amazon RDS console (Amazon RDSコンソール)] から取得できます。

データベースがアタッチされたアプリケーションをデプロイすると、 OpsWorks Stacks はデータベースインスタンスの接続をアプリケーションの`deploy`属性に追加します。

カスタムレシピを書き込んで `deploy` 属性から情報を取得し、アプリケーションからアクセスすることができるファイルに配置できます。これは、Other アプリケーションタイプにデータベース接続情報を提供する唯一のオプションです。

データベース接続を処理する方法の詳細については、「データベースへの接続」を参照してください。

データベースサーバーをアプリケーションからデタッチするには、アプリケーションの設定を編集して、異なるデータベースサーバーを指定するか、サーバーの指定を削除します。

環境可変

各アプリケーションに対し、アプリケーションに固有の一連の環境変数を指定できます。たとえば、2 つのアプリケーションがある場合、最初のアプリケーションに定義した環境変数を、もう 1 つのアプリケーションに定義することはできません。その逆も同様です。また、複数のアプリケーションに同じ環境変数を定義し、アプリケーションごとに異なる値を割り当てることもできます。

> **Note**
>
> 環境変数の数に、特定の制限はありません。ただし、変数の名前、値、および保護されたフラグ値を含む、関連するデータ構造のサイズは、 20 KB を超えることはできません。この制限は、すべてではないものの、ほとんどのユースケースに適合します。これを超えると、サービスエラー (コンソール) または例外 (API) が発生し、"Environment: is too large (maximum is 20KB)" というメッセージが表示されます。

OpsWorks スタックは、変数を属性としてアプリケーションのdeploy属性に保存します。標準の Chef ノード構文を使用して、カスタムレシピにこれらの値を取得することができます。アプリケーションの環境変数にアクセスする方法の例については 環境変数の使用 を参照してください。

Key

変数名。最大 64 個の大文字および小文字の文字、数字、下線 (_) を含めることができますが、冒頭には文字または下線を使用する必要があります。

値

変数値。最大 256 文字を含めることができますが、すべて表示可能な文字である必要があります。

Protected value

値を保護するかどうかを指定します。この設定では、パスワードなどの機密情報を非表示にすることができます。変数に [Protected value] を設定した場合、アプリケーションの作成後は次のようになります。

- アプリケーションの詳細ページには値が表示されず、変数名だけが表示されます。
- アプリケーションを編集するアクセス許可がある場合、[Update value] をクリックして新しい値を指定することはできますが、古い値を確認したり、編集したりすることはできません。

> **Note**
>
> Chef のデプロイログ には、環境変数が含まれることがあります。これは、保護された変数がコンソールに表示される場合があることを意味します。保護された変数がコンソールに表示されないようにするには、コンソールに表示したくない保護された変数のストレージとして Amazon S3 バケットを使用すること推奨します。この目的で S3 バケットを使用する例は、このガイドの「Amazon S3 バケットの使用する」を参照してください。

ドメインと SSL の設定

その他のアプリタイプの場合、 OpsWorks スタックはアプリのdeploy属性に設定を追加します。レシピは、それらの属性からデータを取得し、必要に応じてサーバーを設定できます。

Domain Settings

このセクションには、ドメインを指定するためのオプションの [Add Domains] フィールドがあります。詳細については、「カスタムドメインの使用」を参照してください。

SSL Settings

このセクションの [SSL Support] トグルを使用して、SSL の有効と無効を切り替えることができます。[Yes] をクリックした場合は、SSL 証明書の情報を指定する必要があります。詳細については、「SSL の使用」を参照してください。

アプリケーションのデプロイ

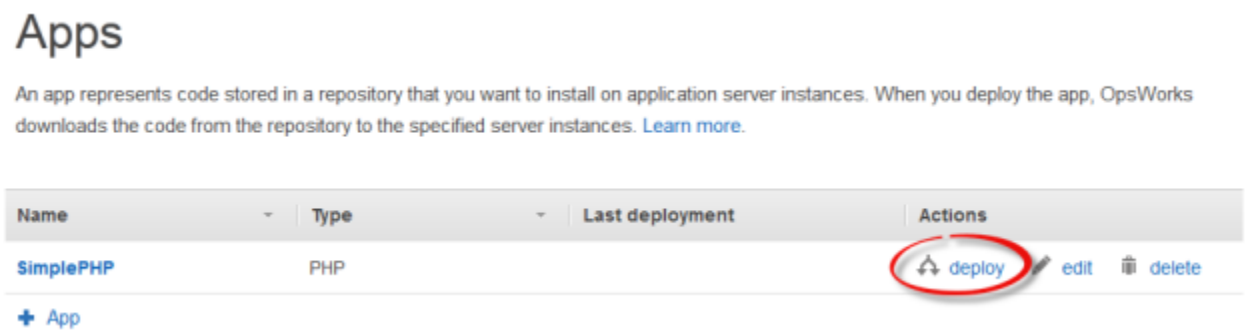
> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

デプロイの主な目的は、アプリケーションサーバーインスタンスにアプリケーションコードと関連ファイルをデプロイすることです。デプロイ操作は、インスタンスのレイヤーによって決まる各インスタンスのデプロイレシピによって処理されます。

インスタンスを起動すると、Setup レシピが完了すると、 OpsWorks Stacks は自動的にインスタンスの Deploy レシピを実行します。ただし、アプリケーションを追加または変更するときには、オンラインインスタンスすべてに手動でデプロイする必要があります。アプリケーションをデプロイするには、Manage 権限または Deploy 権限が必要です。詳細については、「ユーザー許可の管理」を参照してください。

アプリケーションをデプロイするには

1. [Apps] ページで、アプリケーションの [deploy] アクションをクリック します。



> **Note**
>
> ナビゲーションペインの [Deployments] をクリックしてアプリケーションをデプロイすることもできます。[Deployments & Commands] ページで、[Deploy an app] をクリックします。この操作を行う場合、デプロイするアプリケーションを選択することもできます。

2. 次を指定します:

   - (必須) [Command:] を [deploy] に設定します (まだ選択されていない場合)。
   - (オプション) コメントを入力します。

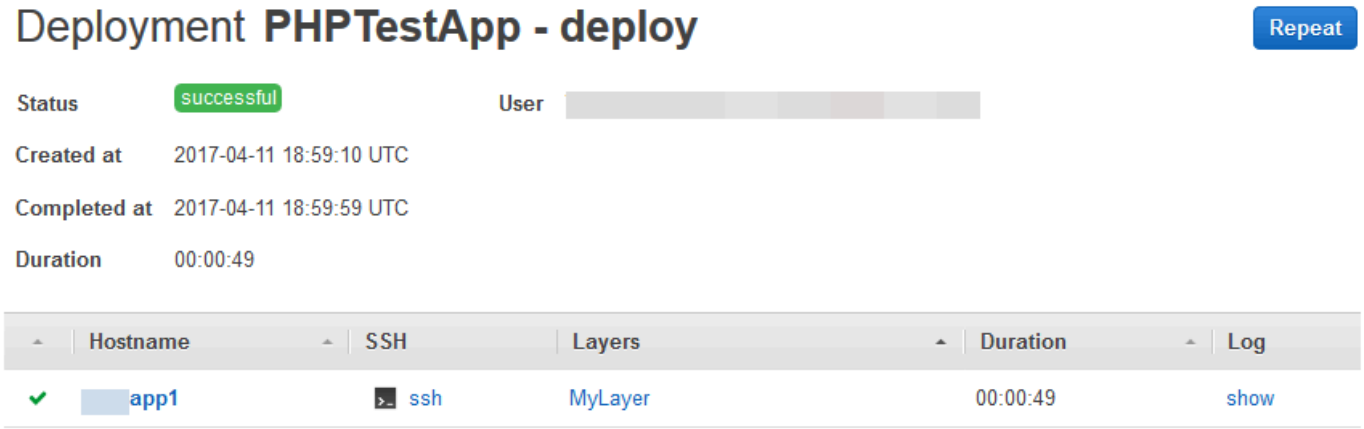
3. Advanced >> をクリックしてカスタム JSON を指定します。 OpsWorks スタックは、一連のスタック設定とデプロイ属性をノードオブジェクトに追加します。deploy 属性にはデプロイの詳細が含まれており、Deploy レシピでこれらの属性を使用して、インストールと設定を処理できます。Linux スタックでは、カスタム JSON フィールドを使用してデフォルトの OpsWorks スタック設定を上書きしたり、カスタム設定をカスタムレシピに渡すことができます。カスタム JSON の使用方法の詳細については、「カスタム JSON の使用」を参照してください。

> **Note**
>
> カスタム JSON をここで指定する場合は、このデプロイのみのスタック設定およびデプロイ属性に追加されます。カスタム JSON を永続的に追加する場合は、スタックに追加する必要があります。カスタム JSON は 120 KB に制限されています。さらに容量が必要な場合は、 Amazon S3 でデータの一部を保存することをお勧めします。カスタムレシピで AWS CLI または AWS SDK for Ruby を使用して、バケットからインスタンスにデータをダウンロードできます。例については、 SDK for Ruby を使用するを参照してください。

4. [Instances] で、[Advanced >>] をクリックし、デプロイコマンドを実行するインスタンスを指定します。

   デプロイコマンドは Deploy イベントをトリガーし、これによって選択したインスタンスでデプロイレシピが実行されます。関連付けられたアプリケーションサーバーのデプロイレシピは、リポジトリからコードと関連ファイルをダウンロードし、インスタンスにインストールします。したがって、ユーザーは通常、関連付けられたアプリケーションサーバーのインスタンスをすべて選択します。ただし、他のインスタンスタイプでは、新しいアプリケーションに対応するように設定の変更を要求する場合があります。そのため、通常、それらのインスタンスでもデプロイレシピを実行することをお勧めします。それらのレシピは、必要に応じて設定を更新しますが、アプリケーションのファイルはインストールしません。recipe の詳細については、「クックブックとレシピ」を参照してください。

5. [Deploy] をクリックして、指定したインスタンスでデプロイレシピを実行します。これにより、[Deployment] ページが表示されます。プロセスが完了すると、 OpsWorks Stacks はデプロイが成功したことを示す緑色のチェックでアプリをマークします。デプロイが失敗した場合、OpsWorks スタックはアプリを赤い X でマークします。その場合、デプロイページに移動し、デプロイログを調べて詳細を確認できます。



> **Note**
>
> JPS アプリケーションの更新プログラムをデプロイする際に、Tomcat は更新プログラムを認識せず、アプリケーションの既存のバージョンを継続して実行する可能性があります。これが発生するのは、JSP ページのみが含まれている .zip ファイルとしてアプリケーションをデプロイする場合などです。Tomcat が、デプロイされた最新バージョンを確実に実行するようにするには、プロジェクトのルートディレクトリに、`web.xml` ファイルを含む WEB-INF ディレクトリを含める必要があります。`web.xml` ファイルはさまざまなコンテンツを含むことができますが、Tomcat が確実に更新プログラムを認識し、現在デプロイされているアプリケーションのバージョンを実行するようにするには、次のコンテンツで十分です。各更新プログラムのバージョンを変更する必要はありません。Tomcat は、バージョンが変更されていない場合でも更新プログラムを認識します。
>
> ```
> <context-param>
>   <param-name>appVersion</param-name>
>   <param-value>0.1</param-value>
> </context-param>
> ```

他のデプロイコマンド

[Deploy app] ページには、アプリケーションと関連サーバーを管理するためのその他のコマンドがいくつか含まれています。次のコマンドのうち、Chef 12 スタックのアプリで利用できるのは Undeploy のみです。

Undeploy

Undeploy ライフサイクルイベントをトリガーし、指定されたインスタンスからアプリケーションのすべてのバージョンを削除するデプロイ解除レシピを実行します。

ロールバック

以前にデプロイされたアプリケーションのバージョンを復元します。たとえば、アプリケーションを 3 回デプロイした後、[Rollback] を実行した場合、サーバーは 2 回目のデプロイからアプリケーションを提供します。再度 [Rollback] を実行すると、サーバーは最初のデプロイからアプリケーションを提供します。デフォルトでは、 OpsWorks スタックには最新の 5 つのデプロイが保存されるため、最大 4 つのバージョンをロールバックできます。保存されているバージョンの数を超えた場合、このコマンドは失敗し、最も古いバージョンのままになります。このコマンドは、Chef 12 スタックでは使用できません。

Start Web Server

指定されたインスタンスでアプリケーションサーバーを起動するレシピを実行します。このコマンドは、Chef 12 スタックでは使用できません。

Stop Web Server

指定されたインスタンスでアプリケーションサーバーを停止するレシピを実行します。このコマンドは、Chef 12 スタックでは使用できません。

Restart Web Server

指定されたインスタンスでアプリケーションサーバーを再起動するレシピを実行します。このコマンドは、Chef 12 スタックでは使用できません。

Important

[Start Web Server]、[Stop Web Server]、[Restart Web Server]、および [Rollback] は、基本的には [Execute Recipes] スタックコマンドのカスタマイズされたバージョンです。これらのコマンドは、指定されたインスタンスでタスクを実行する一連のレシピを実行します。

- これらのコマンドはライフサイクルイベントをトリガーしないため、カスタムコードを実行するためにフックすることはできません。
- これらのコマンドは、組み込みの [application server layers] (アプリケーションサーバーレイヤー) に対してのみ機能します。

特に、これらのコマンドはカスタムレイヤーに影響を及ぼしません。アプリケーションサーバーがサポートされている場合でも同様です。カスタムレイヤーでサーバーを起動、停止、または再起動するには、これらのタスクを実行するカスタムレシピを実装し、[Execute Recipes stack command] (レシピスタックコマンドの実行) を使用してカスタムレシピを実行する必要があります。カスタムレシピを実装およびインストールする方法の詳細については、「クックブックとレシピ」を参照してください。

アプリケーションの編集

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

アプリケーションを編集することで、設定を更新できます。たとえば、新しいバージョンをデプロイする準備ができたら、アプリケーションの OpsWorks スタック設定を編集して新しいリポジトリブランチを使用できます。アプリケーションの設定を編集するには、Manage または Deploy 権限が必要です。詳細については、「ユーザー許可の管理」を参照してください。

アプリケーションを編集するには

1. [Apps] (アプリケーション) ページで、詳細ページを開くアプリケーションの名前をクリックします。
2. [Edit] (編集) をクリックして、アプリケーションの設定を変更します。

   - アプリの名前を変更すると、 OpsWorks スタックは新しい名前を使用してコンソールでアプリを識別します。

     名前を変更しても、関連する短縮名は変更されません。短縮名はアプリケーションがスタックに追加された時に設定され、その後に修正はできません。
   - 保護された環境変数を指定した場合は、値を表示または変更することはできません。ただし、[Update value] (値を更新) をクリックして新しい値を指定できます。

3. [Save] (保存) をクリックして新規設定を保存し、[Deploy App] (デプロイアプリケーション) をクリックしてアプリケーションをデプロイします。

アプリケーションを編集すると、 OpsWorks スタックの設定は変更されますが、スタックのインスタンスには影響しません。初めて [deploy an app] (アプリケーションをデプロイ) すると、デプロイレシピによりアプリケーションサーバーのインスタンスにコードと関連ファイルがダウンロードされます。それにより、ローカルコピーが実行されます。リポジトリでアプリを変更したり、他の設定を変更したりする場合は、次のようにアプリをデプロイして、アプリサーバーインスタンスに更新をインストールする必要があります。 OpsWorks スタックは、起動時に現在のアプリバージョンを新しいインスタンスに自動的にデプロイします。ただし、既存のインスタンスは事情が異なります。

- OpsWorks スタックは、起動時に現在のアプリケーションバージョンを新しいインスタンスに自動的にデプロイします。
- OpsWorks スタックは、再起動時に、ロードベースおよび時間ベースのインスタンスを含むオフラインインスタンスに最新のアプリケーションバージョンを自動的にデプロイします。
- 更新されたアプリケーションをオンラインインスタンスに手動でデプロイする必要があります。

アプリケーションのデプロイ方法の詳細については、「アプリケーションのデプロイ」を参照してください。

アプリケーションのデータベースサーバーへの接続

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

[create the app (アプリケーションを作成する)] とき、または後で [editing the app (アプリケーションを編集する)] ことで、 Amazon RDS データベースサーバーをアプリケーションと関連付けることができます。その後、アプリケーションはデータベース接続情報 (ユーザー名、パスワードなど) を使用してデータベースサーバーに接続することができます。アプリケーションをデプロイすると、OpsWorks Stacks は 2 つの方法でこの情報をアプリケーションに提供します。

- Linux スタックでは、 OpsWorks スタックにより、各組み込みアプリケーションサーバーインスタンスに、アプリケーションがデータベースサーバーへの接続に使用できる接続データを含むファイルが作成されます。
- OpsWorks スタックには、各インスタンスにインストールされているスタック設定とデプロイ属性の接続情報が含まれます。

  カスタムレシピを実装してこれらの属性から接続情報を取得し、任意の形式でファイルに配置することができます。詳細については、「アプリケーションへのデータの引き渡し」を参照してください。

> **Important**
>
> Linux スタックでは、 Amazon RDS サービス レイヤーをアプリケーションと関連付ける場合は、次の手順に従って、関連付けたアプリケーションサーバーレイヤーに適切なドライバパッケージを追加する必要があります。
>
> 1. ナビゲーションペインで [Layers] (レイヤー) をクリックし、アプリケーションサーバーの [Recipes] (レシピ) タブを開きます。
> 2. [Edit] をクリックして適切なドライバパッケージを [OS Packages] に追加します。たとえば、レイヤーに Amazon Linux のインスタンスが含まれている場合は [`mysql`] を、レイヤーに Ubuntu インスタンスが含まれている場合は [`mysql-client`] を指定する必要があります。
> 3. 変更を保存してアプリケーションを再デプロイします。

カスタムレシピの使用

アプリケーションの `deploy` 属性から接続データを取得するカスタムレシピを実装し、YAML ファイルなど、アプリケーションが読み取ることができる形式で保存できます。

アプリケーションを作成する際、または後でアプリケーションを編集する際に、データベースサーバーをアプリケーションにアタッチします。アプリケーションをデプロイすると、 OpsWorks スタックはデータベース接続情報を含むスタック設定とデプロイ属性を各インスタンスにインストールします。その後、アプリケーションは適切な属性を取得できます。詳細は、Linux スタックと Windows スタックのどちらを使用しているかによって異なります。

Linux スタックのデータベースサーバーへの接続

Linux スタックでは、スタック設定およびデプロイ属性の deploy 名前空間に、デプロイされた各アプリケーションの属性が含まれており、アプリケーションの短縮名が付いています。データベースサーバーをアプリケーションにアタッチすると、 OpsWorks Stacks はアプリケーションの [:database] 属性に接続情報を入力し、後続のデプロイごとにスタックのインスタンスにインストールします。属性値はユーザーが指定する値または OpsWorks スタックにより生成される値です。

> **Note**
>
> OpsWorks スタックを使用すると、データベースサーバーを複数のアプリケーションにアタッチできますが、各アプリケーションにアタッチできるデータベースサーバーは 1 つだけです。アプリケーションを複数のデータベースサーバーに接続する場合は、サーバーの 1 つをアプリケーションにアタッチし、アプリケーションの deploy 属性の情報を使用してそのサーバーに接続します。カスタム JSON を使用して、他のデータベースサーバーの接続情報をアプリケーションに渡します。詳細については、「アプリケーションへのデータの引き渡し」を参照してください。

アプリケーションはインスタンスの deploy 属性の接続情報を使用してデータベースに接続します。ただし、アプリケーションはその情報に直接アクセスすることはできません。レシピだけが deploy 属性にアクセスできます。カスタムレシピを実装し、deploy 属性から接続情報を取得してアプリケーションで読み取り可能なファイルに保存すれば、この問題は解決します。

環境変数の使用

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> このトピックの推奨事項は、Chef 11.10 およびそれ以前のバージョンの Chef に適用されます。Chef 12 以降で環境変数を取得するには、アプリケーションデータバッグを使用する必要があります。詳細については、「AWS OpsWorks データバッグのリファレンス」および「アプリケーションデータバッグ (aws_opsworks_app)」を参照してください。

アプリケーションの環境変数を指定すると、 OpsWorks スタックは変数定義をアプリケーションのdeploy属性に追加します。

カスタムレイヤーでは、レシピを使用して標準ノード構文によって変数の値を取得し、その値をレイヤーのアプリがアクセスできる形式で保存することができます。

インスタンスの deploy 属性から環境変数の値を取得するカスタムレシピを実装する必要があります。これにより、レシピではアプリケーションからアクセスできる形式のデータ (YAML ファイルなど) をインスタンスに保存できます。アプリケーションの環境変数の定義は、アプリケーションの deploy 内の environment_variables 属性に保存されます。以下の例は、属性構造を表す JSON を使用して、simplephpapp という名前のアプリケーションのそれらの属性の位置を示しています。

```
{
  ...
  "ssh_users": {
  },
  "deploy": {
    "simplephpapp": {
      "application": "simplephpapp",
      "application_type": "php",
      "environment_variables": {
        "USER_ID": "168424",
        "USER_KEY": "somepassword"
      },
    ...
  }
}
```

レシピでは、標準ノード構文を使用して変数の値を取得できます。以下の例では、前述の JSON から USER_ID 値を取得してそれを Chef ログに記録する方法を示します。

```
Chef::Log.info("USER_ID: #{node[:deploy]['simplephpapp'][:environment_variables]
[:USER_ID]}")
```

スタック設定およびデプロイメント JSON から情報を取得し、それをインスタンスに保存する方法の詳細については、「アプリケーションへのデータの引き渡し」を参照してください。

アプリケーションへのデータの引き渡し

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

多くの場合、サーバーのアプリケーションにキーと値のペアなどのデータを渡すと便利です。そのためには、カスタム JSON を使用してデータをスタックに追加します。 OpsWorks スタックは、ライフサイクルイベントごとに各インスタンスのノードオブジェクトにデータを追加します。

ただし、Chef 属性を使用したノードオブジェクトからのカスタム JSON データの取得は、レシピからはできますが、アプリケーションからはできないことに注意してください。カスタム JSON データを 1 つ以上のアプリケーションに渡すためには、node オブジェクトのデータを抽出して、それをアプリケーションが読み取ることができるファイルに書き込むカスタムレシピを実装する方法があります。このトピックの例では YAML ファイルにデータを書き込む方法を示しますが、同じ基本手順を JSON や XML などの他の形式にも使用できます。

スタックのインスタンスにキーと値のデータを渡すには、スタックに次のようなカスタム JSON を追加します。カスタム JSON をスタックに追加する方法の詳細については、「カスタム JSON の使用」を参照してください。

```
{
  "my_app_data": {
    "app1": {
      "key1": "value1",
      "key2": "value2",
      "key3": "value3"
```

```
    },
    "app2": {
      "key1": "value1",
      "key2": "value2",
      "key3": "value3"
    }
  }
}
```

この例では、app1 と app2 という短縮名の 2 つのアプリケーションそれぞれに 3 つのデータ値があることを前提としています。添付のレシピでは、関連付けられたデータを識別するためにアプリケーションの短縮名を使用しており、他の名前は任意であることを前提としています。アプリケーションの短縮名の詳細については、「設定」を参照してください。

次の例のレシピでは、deploy 属性から各アプリケーション用のデータを抽出し、.yml ファイルに保存する方法を示しています。レシピは、カスタム JSON に各アプリケーション用のデータが含まれていることを前提としています。

```
node[:deploy].each do |app, deploy|
  file File.join(deploy[:deploy_to], 'shared', 'config', 'app_data.yml') do
    content YAML.dump(node[:my_app_data][app].to_hash)
  end
end
```

deploy 属性には、各アプリケーションの属性が含まれています (アプリケーションの短縮前が付いています)。各アプリケーション属性には、アプリケーションに関するさまざまな情報を表す一連の属性が含まれます。この例では、[:deploy][:*app_short_name*][:deploy_to] 属性で表されるアプリケーションのデプロイメントディレクトリを使用しています。[:deploy] の詳細については、「deploy 属性」をご参照ください。

deploy の各アプリケーションに対して、レシピは以下のことを行います。

1. app_data.yml という名前のファイルを、アプリケーションの [:deploy_to] ディレクトリの shared/config サブディレクトリに作成します。

   OpsWorks スタックがアプリケーションをインストールする方法の詳細については、「」を参照してくださいDeploy レシピ。
2. アプリケーションのカスタム JSON 値を YAML に変換し、YAML 形式のデータを app_data.yml に書き込みます。

アプリケーションにデータを渡すには

1. スタックにアプリケーションを追加し、その短縮名を書き留めます。詳細については、「アプリケーションの追加」を参照してください。
2. 前述のように、カスタム JSON とアプリケーションのデータを deploy 属性に追加します。スタックにカスタム JSON を追加する方法の詳細については、「カスタム JSON の使用」を参照してください。
3. クックブックを作成し、レシピを追加します。レシピのコードは、前述の例をベースにして、必要に応じてカスタム JSON に使用した属性名に変更してください。クックブックとレシピの作成方法の詳細については、「クックブックとレシピ」を参照してください。このスタック用のカスタムクックブックがすでにある場合は、既存のクックブックにレシピを追加することも、既存の Deploy レシピにコードを追加することもできます。
4. スタックにクックブックをインストールします。詳細については、「カスタムクックブックのインストール」を参照してください。
5. レシピをアプリケーションサーバーレイヤーのデプロイライフサイクルイベントに割り当てます。 OpsWorks スタックは、起動後に新しいインスタンスごとにレシピを実行します。詳細については、「レシピの実行」を参照してください。
6. アプリケーションをデプロイすると、データが含まれたスタック設定とデプロイメント属性もインストールされます。

> **Note**
>
> アプリケーションのデプロイ前にデータファイルが用意できている場合は、レイヤーの Setup ライフサイクルイベントにレシピを割り当てることもできます。このイベントは、インスタンスの起動直後に 1 回のみ発生します。ただし、 OpsWorks スタックはデプロイディレクトリをまだ作成していないため、レシピはデータファイルを作成する前に必要なディレクトリを明示的に作成する必要があります。次の例では、アプリケーションの /shared/config ディレクトリを明示的に作成し、次にそのディレクトリにデータファイルを作成しています。

```
node[:deploy].each do |app, deploy|

 directory "#{deploy[:deploy_to]}/shared/config" do
      owner "deploy"
      group "www-data"
      mode 0774
```

```
      recursive true
      action :create
    end

  file File.join(deploy[:deploy_to], 'shared', 'config', 'app_data.yml') do
    content YAML.dump(node[:my_app_data][app].to_hash)
  end
end
```

データをロードするには、次に示すような Sinatra コードを使用できます。

```
#!/usr/bin/env ruby
# encoding: UTF-8
require 'sinatra'
require 'yaml'

get '/' do
  YAML.load(File.read(File.join('..', '..', 'shared', 'config', 'app_data.yml')))
End
```

次のようにカスタム JSON を更新することで、いつでもアプリケーションのデータ値を更新することができます。

アプリケーションのデータを更新するには

1. データ値を更新するには、カスタム JSON を編集します。
2. アプリケーションを再度デプロイします。これにより、スタック OpsWorks はスタックのインスタンスで Deploy レシピを実行するように指示されます。レシピでは更新されたスタック設定とデプロイメント属性の属性が使用されるため、カスタムレシピによってデータファイルが現在の値で更新されます。

Git リポジトリの SSH キーの使用

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソ

リューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Git リポジトリの SSH キー (デプロイ SSH キーと呼ばれることもある) は、プライベート Git リポジトリへのアクセスを提供するパスワードのない SSH キーです。この SSH キーは、特定の開発者に固有のものではないことが理想的です。その目的は、スタックが Git OpsWorks リポジトリからアプリケーションやクックブックを非同期的にデプロイできるようにすることです。ユーザーからの入力は必要ありません。

次に、リポジトリ SSH キーを作成するための基本的な手順について説明します。詳細については、使用しているリポジトリのドキュメントを参照してください。例えば、「Managing deploy keys」(デプロイキーの管理) では、GitHub リポジトリのリポジトリ SSH キーを作成する方法が説明されており、「Deployment Keys on Bitbucket」(Bitbucket のデプロイキー) では、Bitbucket リポジトリのリポジトリ SSH キーを作成する方法が説明されています。一部のドキュメントでは、サーバーにキーを作成する方法が記載されていることに注意してください。 OpsWorks スタックの場合は、手順の「サーバー」を「ワークステーション」に置き換えるだけです。

リポジトリ SSH キーを作成するには

1. ssh-keygen などのプログラムを使用して、ワークステーションに Git リポジトリ用のデプロイ SSH キーペアを作成します。

   > **Important**
   >
   > OpsWorks スタックは SSH キーパスフレーズをサポートしていません。

2. リポジトリにパブリックキーを割り当てて、プライベートキーをワークステーションに保存します。
3. アプリケーションを追加する場合や、クックブックリポジトリを指定する場合は、[Repository SSH Key] ボックスにプライベートキーを入力します。詳細については、「アプリケーションの追加」を参照してください。

OpsWorks スタックはリポジトリ SSH キーを各インスタンスに渡し、組み込みレシピはそのキーを使用してリポジトリに接続し、コードをダウンロードします。キーは deploy 属性に `node[:deploy]['appshortname'][:scm][:ssh_key]` として保存され、ルートユーザーに対してのみアクセス可能になります。

カスタムドメインの使用

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

サードパーティでドメイン名をホストしている場合、そのドメイン名をアプリケーションにマッピングできます。基本的な手順は次のとおりです。

1. サブドメインを DNS レジストラで作成し、ロードバランサーの Elastic IP アドレスまたはアプリケーションサーバーのパブリック IP アドレスにマッピングします。
2. アプリケーションの設定を更新して、サブドメインを指定し、アプリケーションを再デプロイします。

> **Note**
>
> 非修飾ドメイン名 (myapp1.example.com など) が、修飾ドメイン名 (www.myapp1.example.com など) に転送されることを確認します。これにより、どちらもアプリケーションにマッピングされます。

アプリケーション用にドメインを設定すると、サーバー設定ファイルのサーバーエイリアスとして一覧表示されます。ロードバランサーを使用する場合、ロードバランサーはリクエストを受け取ったときに URL のドメイン名を確認し、そのドメインに基づいてトラフィックをリダイレクトします。

サブドメインを IP アドレスにマッピングするには

1. ロードバランサーを使用する場合、[Instances] (インスタンス) ページでロードバランサーインスタンスをクリックして詳細ページを開き、インスタンスの [Elastic IP] アドレスを確認します。それ以外の場合、アプリケーションサーバーインスタンスの詳細ページでパブリック IP アドレスを確認します。

2. DNS レジストラが指定している手順に従って、ステップ 1 から、サブドメインを作成して IP アドレスにマッピングします。

> **Note**
>
> ある時点でロードバランサーインスタンスが終了した場合、新しい Elastic IP アドレスが割り当てられています。新しい Elastic IP アドレスにマッピングするために、DNS レジストラ設定を更新する必要があります。

OpsWorks スタックは、単にドメイン設定をアプリケーションのdeploy属性に追加します。カスタムレシピを実装して、ノードオブジェクトから情報を取得し、適切にサーバーを設定する必要があります。詳細については、「クックブックとレシピ」を参照してください。

同じアプリケーションサーバー上での複数のアプリケーションの実行

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> このトピックの情報は、Node.js アプリケーションには適用されません。

同じタイプの複数のアプリケーションがある場合、同じアプリケーションサーバーインスタンスで実行すると、コストパフォーマンスが向上する可能性があります。

複数のアプリケーションを同じサーバーで実行するには

1. 各アプリケーション用スタックにアプリケーションを追加します。
2. アプリケーションごとに別々のサブドメインを取得し、アプリケーションサーバーまたはロードバランサーの IP アドレスにマッピングします。

3. 各アプリケーションの設定を編集し、適切なサブドメインを指定します。

この作業を実行する方法の詳細については、「カスタムドメインの使用」を参照してください。

> **Note**
>
> アプリケーションサーバーで複数の HTTP アプリケーションを実行している場合、 Elastic Load Balancing を使用して負荷を分散できます。複数の HTTPS アプリケーションがある場合、ロードバランサーで SSL 接続を終了するか、アプリケーションごとに別々のスタックを作成する必要があります。HTTPS リクエストが暗号化されていると、SSL 接続をサーバーで終了した場合、ロードバランサーはドメイン名を確認できず、リクエストを処理するアプリケーションを判断できません。

SSL の使用

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

アプリケーションで SSL を使用するには、最初に認証機関 (CA) からデジタルサーバー証明書を取得する必要があります。簡単になるように、このチュートリアルでは、証明書を作成し、その証明書に自己署名します。自己署名した証明書は学習やテストに便利ですが、本稼働用スタックには、CA によって署名された証明書を常に使用する必要があります。

このウォークスルーでは、次の作業を行います。

1. OpenSSL をインストールおよび設定します。
2. プライベートキーを作成します。
3. 証明書署名リクエストを作成します。
4. 自己署名証明書を生成します。
5. 証明書情報を使用してアプリケーションを編集します。

Important

アプリケーションで SSL を使用する場合、CVE-2014-3566 で説明されている脆弱性に対応するため、可能であればアプリケーションサーバーレイヤーで SSLv3 を無効にすることをお勧めします。スタックに Ganglia レイヤーが含まれる場合は、そのレイヤーでも SSL v3 を無効にする必要があります。その詳細は特定のレイヤーによって異なります。詳細については、以下を参照してください。

- Java App Server OpsWorks スタックレイヤー
- Node.js App Server OpsWorks スタックレイヤー
- PHP App Server OpsWorks スタックレイヤー
- Rails App Server OpsWorks スタックレイヤー
- 静的ウェブサーバー OpsWorks スタックレイヤー
- Ganglia レイヤー

トピック

- ステップ 1: OpenSSL をインストールおよび設定する
- ステップ 2: プライベートキーを作成する
- ステップ 3: 証明書署名リクエストを作成する
- ステップ 4: CSR を認証機関に送信する
- ステップ 5: アプリケーションを編集する

ステップ 1: OpenSSL をインストールおよび設定する

サーバー証明書を作成およびアップロードするには、SSL プロトコルと TLS プロトコルをサポートするツールが必要です。OpenSSL はオープンソースのツールで、RSA トークンの作成やそのトークンにプライベートキーを署名するための基本的な暗号関数を提供します。

次の手順の説明は、コンピュータにまだ OpenSSL がインストールされていないことを前提としています。

Linux や Unix で OpenSSL をインストールするには

1. OpenSSL の [Source] の [Tarballs] に移動します。
2. 最新のソースをダウンロードします。

3. パッケージをビルドします。

Windows へ OpenSSL をインストールするには

1. Microsoft Visual C++ 2008 再頒布可能パッケージがシステムにインストールされていない場合は、こちらからダウンロードしてください。
2. インストーラを実行し、Microsoft Visual C++ 2008 Redistributable のセットアップウィザードの指示に従って、再頒布可能コードをインストールします。
3. [OpenSSL: Binary Distributions] に移動し、ご利用の環境に応じたバージョンの OpenSSL バイナリをクリックして、インストーラをローカルに保存します。
4. インストーラを実行し、OpenSSL セットアップウィザードの指示に従ってバイナリをインストールします。

ターミナルウィンドウまたはコマンドウィンドウを開き、次のコマンドラインを使用して、OpenSSL のインストールポイントを指す環境変数を作成します。

- Linux および UNIX の場合

```
export OpenSSL_HOME=path_to_your_OpenSSL_installation
```

- Windows の場合

```
set OpenSSL_HOME=path_to_your_OpenSSL_installation
```

ターミナルウィンドウまたはコマンドウィンドウを開き、次のコマンドラインを使用して、コンピュータのパス変数に OpenSSL バイナリのパスを追加します。

- Linux および UNIX の場合

```
export PATH=$PATH:$OpenSSL_HOME/bin
```

- Windows の場合

```
set Path=OpenSSL_HOME\bin;%Path%
```

> **Note**
>
> これらのコマンドラインを使用して環境変数に加えた変更は、現在のコマンドラインセッションでのみ有効です。

ステップ 2: プライベートキーを作成する

証明書署名リクエスト (CSR) を作成するには一意のプライベートキーが必要です。次のコマンドラインを使用してキーを作成します。

```
openssl genrsa 2048 > privatekey.pem
```

ステップ 3: 証明書署名リクエストを作成する

証明書署名リクエスト (CSR) は、デジタルサーバー証明書を申請するために認証機関 (CA) に送信されるファイルです。次のコマンドラインを使用して CSR を作成します。

```
openssl req -new -key privatekey.pem -out csr.pem
```

コマンドの出力は以下のようになります。

```
You are about to be asked to enter information that will be incorporated
 into your certificate request.
 What you are about to enter is what is called a Distinguished Name or a DN.
 There are quite a few fields but you can leave some blank
 For some fields there will be a default value,
 If you enter '.', the field will be left blank.
```

次の表は、証明書リクエストを作成する際に役立ちます。

証明書リクエストデータ

名前	説明	例
国名	2 文字の ISO 略称 (国名コード)。	例 :US = アメリカ

名前	説明	例
州または県	あなたが所属する組織の所在地の州または県。省略不可です。	ワシントン
市区町村	あなたが所属する組織の所在地の市区町村。	Seattle
組織名	組織の正式名称。組織名は、省略不可です。	CorporationX
部門名	(オプション) 追加の組織情報。	Marketing
共通名	CNAME に対する完全に適合するドメイン名。完全に一致しない場合は、証明書名チェックの警告が通知されます。	www.example.com
E メールアドレス	サーバー管理者の E メールアドレス	someone@example.com

> **Note**
>
> 共通名フィールドは誤解されることが多く、間違って入力されることがよくあります。共有名とは通常の場合、ホスト名にドメイン名を付け加えたものです。"www.example.com" または "example.com" のようになります。正しい共有名を使用して CSR を作成しなければなりません。

ステップ 4: CSR を認証機関に送信する

本稼働環境で使用する場合は、認証機関 (CA) に CSR を送信してサーバー証明書を取得します。この場合、他の認証情報や識別の根拠が必要になることがあります。申請が正常に処理された場合、CA はデジタル署名されたアイデンティティ証明書と、場合によっては証明書チェーンファイル

を返します。AWS が特定の CA を推奨することはありません。利用可能な CA の一覧 (一部のみ) については、Wikipedia の Certificate Authority - Providers を参照してください

また、テスト目的でのみ使用できる自己署名証明書を生成することもできます。この例では、次のコマンドラインを使用して自己署名証明書を生成します。

```
openssl x509 -req -days 365 -in csr.pem -signkey privatekey.pem -out server.crt
```

出力は以下のようになります。

```
Loading 'screen' into random state - done
Signature ok
subject=/C=us/ST=washington/L=seattle/O=corporationx/OU=marketing/CN=example.com/
emailAddress=someone@example.com
Getting Private key
```

ステップ 5: アプリケーションを編集する

証明書を生成して署名したら、SSL を有効化して証明書情報を指定するために、アプリケーションを更新します。[Apps (アプリ)] ページで、アプリを選択して詳細ページを開き、[Edit App (アプリの編集)] をクリックします。SSL サポートを有効化するには、[Enable SSL (SSL の有効化)] を [Yes (はい)] に設定します。次の設定オプションが表示されます。

SSL 証明書

ボックスにパブリックキー証明書 (.crt) ファイルの内容を貼り付けます。証明書の例を次に示します。

```
-----BEGIN CERTIFICATE-----
MIICuTCCAiICCQCtqFKItVQJpzANBgkqhkiG9w0BAQUFADCBoDELMAkGA1UEBhMC
dXMxEzARBgNVBAgMCndhc2hpbmd0b24xEDAOBgNVBAcMB3NlYXR0bGUxDzANBgNV
BAoMBmFtYXpvbjEWMBQGA1UECwwNRGV2IGFuZCBUb29sczEdMBsGA1UEAwwUc3Rl
cGhhbmllYXBpZXJjZS5jb20xIjAgBgkqhkiG9w0BCQEWE3NhcGllcmNlQGFtYXpv
...
-----END CERTIFICATE-----
```

> **Note**
>
> Nginx を使用していて、証明書チェーンファイルがある場合は、その内容をパブリックキー証明書ファイルに追加する必要があります。

既存の証明書を更新する場合は、次のようにします。

- 証明書を更新するには [Update SSL certificate (SSL 証明書の更新)] を選択します。
- 新しい証明書が既存のプライベートキーと一致しない場合は、[Update SSL certificate key (SSL 証明書キーの更新)] を選択します。
- 新しい証明書が既存の証明書チェーンと一致しない場合は、[Update SSL certificates (SSL 証明書の更新)] を選択します。

[SSL Certificate Key]

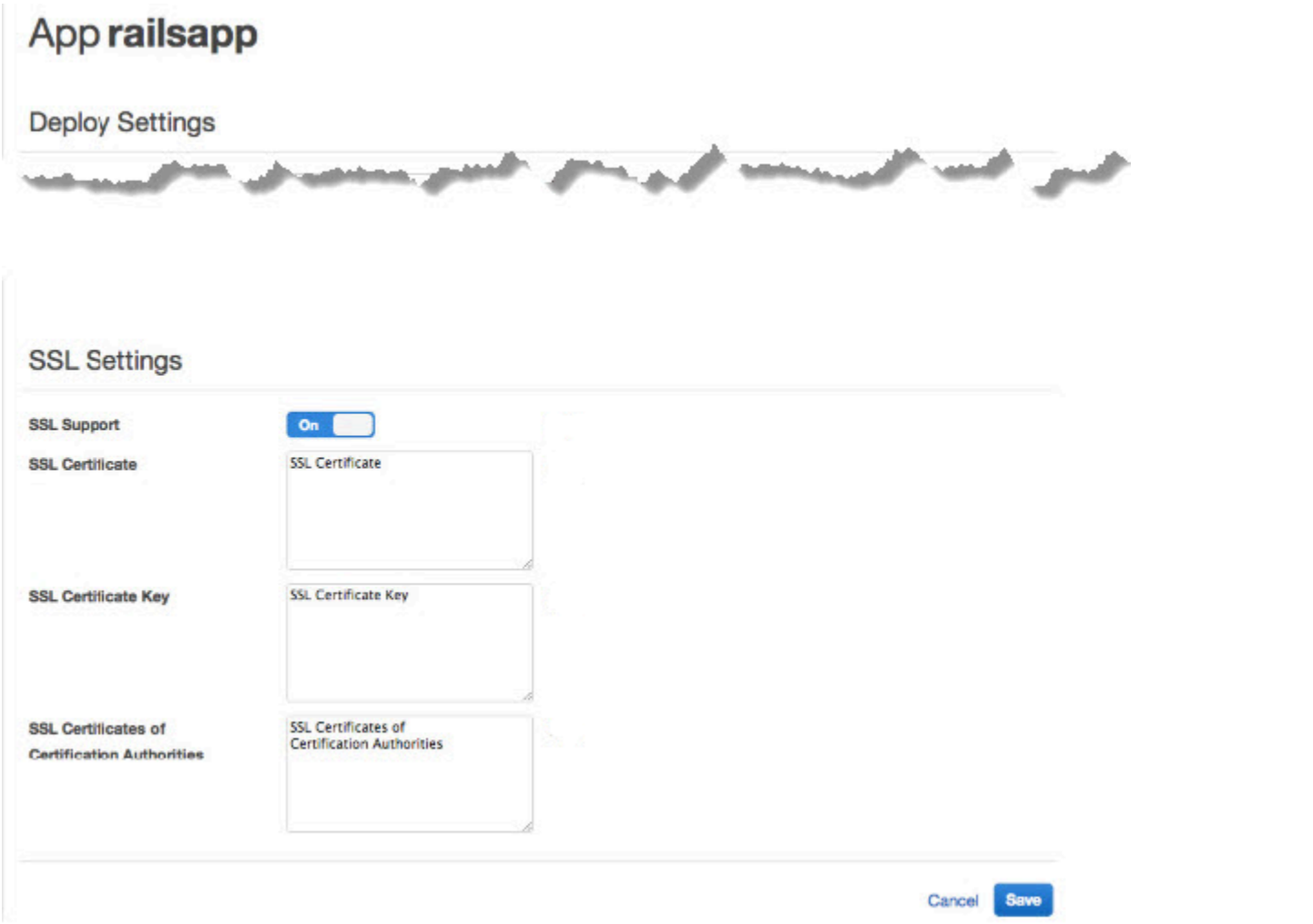
ボックスにプライベートキーファイル (.pem ファイル) の内容を貼り付けます。次のようになります。

```
----BEGIN RSA PRIVATE KEY-----
MIICXQIBAAKBgQC0CYklJY5r4vV2NHQYEpwtsLuMMBhylMrgBShKq+HHVLYQQCL6
+wGIiRq5qXqZlRXje3GM5Jvcm6q0R71MfRIl1FuzKyqDtneZaAIEYniZibHiUnmO
/UNqpFDosw/6hY3ONk0fSBlU4ivD0Gjpf6J80jL3DJ4R23Ed0sdL4pRT3QIDAQAB
AoGBAKmMfWrNRqYVtGKgnWB6Tji9QrKQLMXjmHeGg95mppdJELiXHhpMvrHtpIyK
...
-----END RSA PRIVATE KEY-----
```

[SSL certificates of Certification Authorities]

証明書チェーンファイルがある場合は、ボックスにその内容を貼り付けます。

> **Note**
>
> Nginx を使用している場合は、このボックスを空にしておく必要があります。証明書チェーンファイルがある場合は、これを [SSL Certificate (SSL 証明書)] のパブリックキー証明書ファイル に追加します。



[Save] をクリックしたら、アプリケーションを再デプロイして、オンラインインスタンスを更新します。

組み込みアプリケーションサーバーレイヤーの場合、 OpsWorks Stacks はサーバー設定を自動的に更新します。デプロイが完了したら、以下のようにして OpenSSL のインストールが成功したことを確認できます。

OpenSSL のインストールを検証するには

1. [Instances] ページに移動します。
2. アプリケーションサーバーのインスタンスの IP アドレス (または、ロードバランサーを使用している場合はロードバランサーの IP アドレス) をクリックして、アプリケーションを実行します。
3. IP アドレスのプレフィックスを **`http://`** から **`https://`** に変更し、ブラウザを更新して、SSL でページが正しく読み込まれることを検証します。

アプリが Mozilla Firefox で作動するように設定されていると、「SEC_ERROR_UNKNOWN_ISSUER」という証明書エラーが表示されることがあります。このエラーは、お客様の組織のウイルス対策およびマルウェア対策プログラムに搭載されている証明書交換機能、一部の種類のネットワークトラフィックモニタリングおよびフィルタリングソフトウェア、またはマルウェアのいずれかが原因で発生することがあります。このエラーのトラブルシューティング方法の詳細については、Mozilla Firefox Support ウェブサイトに掲載されている、「安全なウェブサイトでの「安全な接続ではありません」エラーコードをトラブルシュートするには」を参照してください。

カスタムレイヤーも含めてすべてのレイヤーに対して、 OpsWorks スタックによって SSL 設定がアプリケーションの deploy 属性に追加されるだけです。カスタムレシピを実装して、ノードオブジェクトから情報を取得し、適切にサーバーを設定する必要があります。

クックブックとレシピ

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックは Chef クックブックを使用して、パッケージのインストールと設定、アプリケーションのデプロイなどのタスクを処理します。このセクションでは、 OpsWorks スタックでクックブックを使用する方法について説明します。詳細については、「Chef」を参照してください。

> **Note**
>
> OpsWorks スタックは現在、Chef バージョン 12、11.10.4、11.4.4、および 0.9.15.5 をサポートしています。ただし、Chef 0.9.15.5 は廃止されており、新しいスタック用に使用することはお勧めしません。便宜上の理由で、これらは通常、メジャーバージョン番号とマイナーバージョン番号でのみ示されます。Chef 0.9 または 11.4 を実行中のスタックは Chef Solo を使用し、Chef 12 または 11.10 を実行中のスタックは Chef Client をローカルモードで使用します。Linux スタックの場合、使用する Chef のバージョンは、スタックの作成時に設定マネージャを使用して指定できます。Windows スタックは Chef 12.2 を使用する必要が

あります。より新しい Chef のバージョンにスタックを移行するためのガイドラインなど、詳細については、「Chef のバージョン」を参照してください。

トピック

- クックブックリポジトリ
- Chef のバージョン
- Ruby のバージョン
- カスタムクックブックのインストール
- カスタムクックブックの更新
- レシピの実行

クックブックリポジトリ

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

カスタムクックブックはオンラインリポジトリ (.zip ファイルのようなアーカイブまたは Git のような ソース管理マネージャー) に保存する必要があります。スタックに割り当てることのできるカスタムクックブックは 1 つのみですが、リポジトリには任意の数のクックブックを保存できます。クックブックをインストールまたは更新すると、 OpsWorks スタックは各スタックのインスタンスのローカルキャッシュにリポジトリ全体をインストールします。たとえば、インスタンスで 1 つ以上のレシピを実行する必要がある場合、ローカルキャッシュのコードが使用されます。

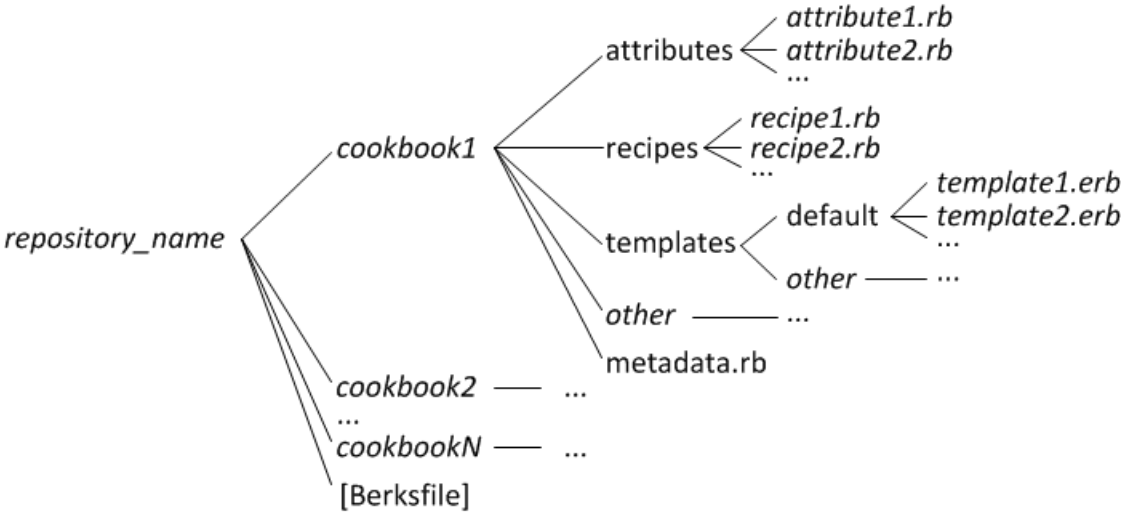
以下では、タイプ別にクックブックリポジトリを構築する方法について説明します。図で斜体で示されているテキストは、リポジトリ名またはアーカイブ名を含むユーザー定義ディレクトリとファイル名を表します。

ソース管理マネージャー

OpsWorks スタックは、次のソースコントロールマネージャーをサポートしています。

- Linux スタック – Git と Subversion
- Windows スタック – Git

以下に示しているのは、必要なディレクトリとファイル構造です。



- クックブックのディレクトリはすべてトップレベルにあることが必要です。

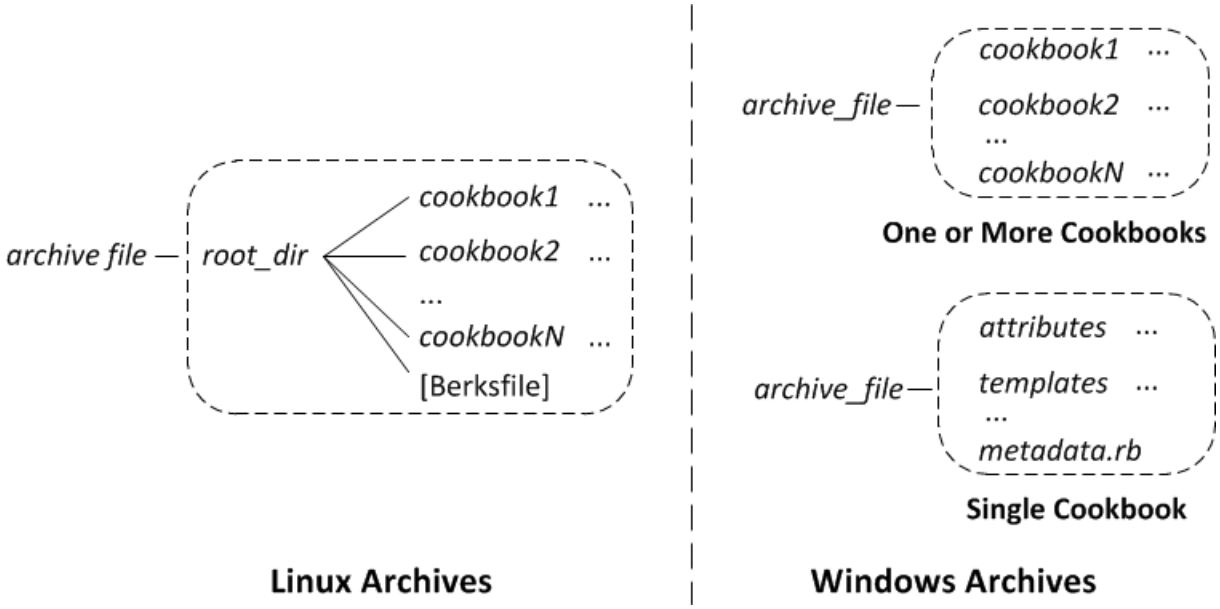
アーカイブ

OpsWorks スタックは、次のアーカイブをサポートしています。

- Linux スタック – Amazon S3 またはウェブサイト (HTTP アーカイブ)に保存されている zip、gzip、bzip2、または tarball ファイル。

  OpsWorks スタックは非圧縮 tarball をサポートしていません。
- Windows スタック – Amazon S3 に保存されている zip と tgz (gzip で圧縮された tar) ファイル。

以下では、実行しているのが Linux スタックであるか Windows スタックであるかに応じて、必要なディレクトリとファイルの構造を示しています。クックブック構造は、SCM リポジトリのものと同じであるため、省略記号 (...) で表されます。



- Linux スタック – クックブックディレクトリはルートディレクトリにあることが必要です。
- Windows スタック – クックブックはアーカイブのトップレベルであることが必要です。

  クックブックが 1 つしかない場合は、必要に応じてクックブックディレクトリを省略し、クックブックファイルをトップレベルに配置できます。その場合、 OpsWorks スタックによって metadata.rb からクックブック名が取得されます。

各クックブックディレクトリには、次に示す標準ディレクトリとファイルが少なくとも 1 つ (通常はすべて)、標準の名前で含まれています。

- `attributes` – クックブックの属性ファイルです。
- `recipes` – クックブックのレシピファイルです。
- `templates` – クックブックのテンプレートファイルです。
- [*other*] (その他) – オプションのユーザー定義ディレクトリです。その他のファイルタイプ (定義や仕様など)が含まれます。
- `metadata.rb` – クックブックのメタデータです。

  Chef 11.10 以降では、レシピが他のクックブックに依存している場合、クックブックの depends ファイルに、対応する `metadata.rb` ステートメントを含める必要があります。たとえば、クックブックに `include_recipe anothercookbook::somerecipe` のようなステートメントを持つレシピが含まれている場合は、クックブックの `metadata.rb` ファイルに `depends "anothercookbook"` という行が含まれている必要があります。詳細については、「クックブックのメタデータについて」を参照してください。

テンプレートは、templates ディレクトリのサブディレクトリに保存されている必要があります。templates ディレクトリには、少なくとも 1 つの、またはオプションで複数のサブディレクトリが含まれています。それらのサブディレクトリにも同様に、サブディレクトリが含まれている場合があります。

- テンプレートには、通常、default というサブディレクトリがあります。ここには、Chef がデフォルトで使用するテンプレートファイルが含まれています。
- other は、オペレーティングシステムに固有のテンプレート用に使用できる、オプションのサブディレクトリを表します。
- Chef は、「File Specificity」で説明する命名規則に従って、適切なサブディレクトリのテンプレートを自動的に使用します。例えば、Linux および オペレーティングシステムの場合、amazon amazon または ubuntu ubuntu という名前のサブディレクトリに、それぞれのオペレーティングシステム固有のテンプレートを保存できます。

カスタムクックブックの処理方法の詳細は、使用するリポジトリのタイプによって異なります。

アーカイブを使用するには

1. 前のセクションで示したフォルダ構造を使用して、クックブックを実装します。
2. 圧縮されたアーカイブを作成し、Amazon S3 バケットやウェブサイトにアップロードします。

   クックブックを更新した場合、新しいアーカイブファイルを作成してアップロードする必要があります。Amazon S3 バケットに配信されるコンテンツには、カスタマーコンテンツが含まれている場合があります。機密データの削除の詳細については、「S3 バケットを空にする方法」または「S3 バケットを削除する方法」を参照してください。

SCM を使用するには

1. 先ほど示した構造を使用して、Git または Subversion リポジトリを設定します。
2. 必要に応じて、リポジトリのバージョン管理機能を使用して複数のブランチまたはバージョンを実装します。

   クックブックを更新する場合に、これを新しいブランチで行えば、新しいバージョンを使用することを OpsWorks に指示するだけで済みます。特定のタグ付きバージョンを指定することもできます。詳細については、「カスタムクックブックリポジトリの指定」を参照してください。

カスタムクックブックのインストール では、 OpsWorks スタックに クックブックリポジトリをスタックのインスタンスにインストールさせる方法について説明します。

> **Important**
>
> リポジトリ内の既存のクックブックを更新したら、 update_cookbooksスタックコマンドを実行して、各オンラインインスタンスのローカルキャッシュを更新するように OpsWorks スタックに指示する必要があります。詳細については、「スタックコマンドの実行」を参照してください。

Chef のバージョン

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックは複数のバージョンの Chef をサポートしています。スタックを作成するときにバージョンを選択します。 OpsWorks スタックは、そのバージョンと互換性のある組み込みレシピのセットとともに、スタックのすべてのインスタンスにそのバージョンの Chef をインストールします。カスタムレシピをインストールする場合、スタックの Chef バージョンと互換性がある必要があります。

OpsWorks スタックは現在、Linux スタックでは Chef バージョン 12、11.10、11.4、0.9、Windows スタックでは Chef 12.2 (現在の Chef 12.22) をサポートしています。便宜上の理由で、これらは通常、メジャーバージョン番号とマイナーバージョン番号でのみ示されます。Linux スタックの場合、使用する Chef のバージョンは、スタックの作成時に設定マネージャを使用して指定できます。Windows スタックは Chef 12.2 を使用する必要があります。より新しい Chef のバージョンにスタックを移行するためのガイドラインなど、詳細については、「Chef のバージョン」を参照してください。バージョンの詳細については、「OpsWorks スタックオペレーティングシステム」を参照してください。

Chef 12.2

Chef 12.2 のサポートは、2015 年 5 月に導入されました。Windows スタックでのみ使用されます。Windows スタックの Chef の現行バージョンは Chef 12.22 です。Ruby 2.3.6 を使用して実行され、chef-client をローカルモードで使用します。これにより、chef-zero と呼ばれるローカルインメモリ Chef サーバーが起動されます。このサーバーが存在する場合、レシピで Chef 検索およびデータバッグを使用できます。このサポートにはいくつか制限事項がありますが (「レシピを実装する: Chef 12.2」を参照)、多くのコミュニティクックブックを変更せずに実行できます。

Chef 12

Chef 12 のサポートは、2015 年 12 月に導入されました。Linux スタックでのみ使用されます。Ruby 2.1.6 または 2.2.3 を使用して実行され、chef-client をローカルモードで使用します。これにより、レシピが Chef 検索とデータバッグを使用できるようになります。詳細については、「OpsWorks スタックオペレーティングシステム」を参照してください。

Chef 11.10

Chef 11.10 のサポートは、2014 年 3 月に導入されました。Linux スタックでのみ使用されます。Ruby 2.0.0 を使用して実行され、chef-client をローカルモードで使用します。これにより、レシピが Chef 検索とデータバッグを使用できるようになります。このサポートにはいくつか制限事項がありますが (「レシピの実装: Chef 11.10」を参照)、多くのコミュニティクックブックを変更せずに実行できます。Berkshelf を使用してクックブックの依存関係を管理することもできます。サポートされている Berkshelf バージョンは、オペレーティングシステムによって異なります。詳細については、「OpsWorks スタックオペレーティングシステム」を参照してください。Chef 11.10 を使用する CentOS スタックを作成することはできません。

Chef 11.4

Chef 11.4 のサポートは、2013 年 7 月に導入されました。Linux スタックでのみ使用されます。Ruby 1.8.7 を使用して実行され、chef-solo を使用します。Chef 検索やデータバッグはサポートされません。 OpsWorks スタックでは、これらの機能に依存するコミュニティクックブックを頻繁に使用できますが、「」の説明に従って変更する必要があります新しい Chef バージョンへの移行 。Chef 11.4 を使用する CentOS スタックを作成することはできません。Chef 11.4 スタックは、米国東部 (バージニア北部)リージョン以外のリージョンエンドポイントでのサポートはされていません。

Chef 0.9

Chef 0.9 は Linux スタックでのみ使用されますが、サポートが中止されました。注意:

- コンソールを使用して新しい Chef 0.9 スタックを作成することはできません。

CLI または API を使用するか、別の Chef バージョンでスタックを作成し、スタック設定を編集する必要があります。

- 新しい OpsWorks スタック機能は、Chef 0.9 スタックでは使用できません。
- オペレーティングシステムの新しいバージョンでは、Chef 0.9 スタックに対して一部のサポートのみが提供される予定です。

  特に、Amazon Linux 2014.09 およびそれ以降のバージョンでは、Ruby 1.8.7 が必要な Rails アプリケーションサーバーレイヤーを使用する Chef 0.9 スタックはサポートしていません。
- ヨーロッパ (フランクフルト) などの新しい AWS リージョンでは、Chef 0.9 スタックはサポートされません。

> **Note**
>
> 新しいスタックへの Chef 0.9 の使用はお勧めしません。既存のスタックを新しいバージョンの Chef にできるだけ早く移行してください。

OpsWorks スタックでコミュニティクックブックを使用する場合は、新しい Linux スタックに Chef 12 を指定し、既存の Linux スタックを Chef 12 に移行することをお勧めします。 OpsWorks スタックコンソール、API、または CLI を使用して、既存のスタックを新しい Chef バージョンに移行できます。詳細については、「新しい Chef バージョンへの移行 」を参照してください。

トピック

- Chef 12.2 スタック用のレシピを実装する
- Chef 12 スタック用のレシピの実装
- Chef 11.10 スタック用のレシピの実装
- Chef 11.4 スタック用のレシピの実装
- 新しいバージョンの Chef への既存の Linux スタックの移行

Chef 12.2 スタック用のレシピを実装する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソ

リューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Chef 12.2 (現バージョン Chef 12.22) は、この Chef バージョンの実行が必須とされている Windows スタックでのみ使用可能となっています。

- 目的によっては、レシピは Windows 固有の属性とリソースを使用する必要があります。

  詳細については、「Microsoft Windows 用の Chef」を参照してください。
- Chef の実行に Ruby 2.3.6 が使用されるため、レシピで新しい Ruby の構文を使用できます。
- レシピで Chef の検索およびデータバッグを使用できます。

  Chef 12.2 スタックでは、多くのコミュニティクックブックを変更しないで使用できます。詳細については、「Chef の検索の使用」および「データバッグの使用」を参照してください。
- 「OpsWorks スタックデータバッグリファレンス」および「組み込みクックブックの属性」で説明されているスタック設定およびデプロイ属性のほとんどは、Windows レシピに使用できます。

  これらの属性値は、Chef 検索を使用して取得できます。例については、Chef の検索での属性値の取得を参照してください。属性のリストについては、「OpsWorks スタックデータバッグリファレンス」を参照してください。

Chef 12 スタック用のレシピの実装

Important

この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Chef 12 スタックは、Chef 11.10 スタックと比べて、次のような利点があります。

- Chef の実行に Ruby 2.1.6 が使用されるため、レシピで新しい Ruby の構文を使用できます。

- Chef 12 スタックでは、さらに多くのコミュニティクックブックを変更せずに使用できます。組み込みのクックブックがなければ、組み込みのクックブックとカスタムクックブック間の名前の競合は発生しなくなります。
- スタックが構築済みのパッケージを提供している Berkshelf OpsWorks バージョンに制限されなくなりました。Berkshelf は Chef 12 の OpsWorks スタックインスタンスにインストールされなくなりました。代わりに、ローカルワークステーション上の任意の Berkshelf バージョンを使用できます。
- スタックが Chef 12 (Elastic Load Balancing、Amazon RDS、Amazon ECS) OpsWorks とカスタムクックブックで提供する組み込みクックブックが明確に分離されるようになりました。これにより、エラーが発生した Chef のトラブルシューティングが容易になります。

Chef 11.10 スタック用のレシピの実装

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Chef 11.10 スタックは、Chef 11.4 スタックと比べて、次のような利点があります。

- Chef の実行に Ruby 2.0.0 が使用されるため、レシピで新しい Ruby の構文を使用できます。
- レシピで Chef の検索およびデータバッグを使用できます。

  Chef 11.10 スタックでは、多くのコミュニティクックブックを変更せずに使用できます。
- クックブックの管理に Berkshelf を使用できます。

  Berkshelf は、カスタムクックブックを管理し、スタックでコミュニティクックブックを使用するための非常に柔軟な方法を提供します。
- クックブックは、`metadata.rb` で依存関係を宣言する必要があります。

  クックブックが別のクックブックに依存する場合、その依存関係をカスタムクックブックの `metadata.rb` ファイルに含める必要があります。たとえば、クックブックに `include_recipe anothercookbook::somerecipe` のようなステートメントを持つレシピが含まれている場合

は、クックブックの metadata.rb ファイルに depends "anothercookbook" という行が含まれている必要があります。

- OpsWorks スタックは、スタックに MySQL レイヤーが含まれている場合にのみ、スタックのインスタンスに MySQL クライアントをインストールします。
- OpsWorks スタックは、スタックに Ganglia レイヤーが含まれている場合にのみ、スタックのインスタンスに Ganglia クライアントをインストールします。
- デプロイで bundle install を実行し、インストールが失敗した場合、デプロイも失敗します。

> **Important**
>
> カスタムクックブックまたはコミュニティクックブックに組み込みクックブックの名前を再使用しないでください。組込クックブックと同じ名前のカスタムクックブックは失敗する可能性があります。Chef 11.10、11.4、0.9 のスタックで使用可能な組み込みクックブックの完全なリストについては、「GitHub の opsworks-cookbooks リポジトリ」を参照してください。
>
> 非 ASCII 文字が含まれているクックブックは、Chef 0.9 および 11.4 のスタックで正常に実行される場合でも、Chef 11.10 スタックでは失敗する可能性があります。これは Chef 11.10 スタックが、Ruby 1.8.7 よりもエンコードが厳密である Ruby 2.0.0 を使用して Chef を実行するためです。このようなクックブックが Chef 11.10 スタックで正常に実行されるためには、非 ASCII 文字を使用する各ファイルの先頭に、エンコードに関するヒントを提供するコメントを追加する必要があります。たとえば、UTF-8 エンコードの場合、コメントは # encoding: UTF-8 のようになります。Ruby 2.0.0 のエンコードの詳細については、「エンコード」を参照してください。

トピック

- クックブックのインストールと優先順位
- Chef の検索の使用
- データバッグの使用
- Berkshelf の使用

クックブックのインストールと優先順位

OpsWorks スタッククックブックをインストールする手順は、Chef 11.10 スタックでは以前の Chef バージョンと若干異なります。Chef 11.10 スタックの場合、 OpsWorks スタックが組み込みクック

ブック、カスタムクックブック、および Berkshelf クックブックをインストールすると、次の順序で共通のディレクトリにマージされます。

1. 組み込みクックブック。
2. Berkshelf クックブック (ある場合)。
3. カスタムクックブック (ある場合)。

OpsWorks スタックはこのマージを実行すると、レシピを含むディレクトリのコンテンツ全体をコピーします。重複がある場合、次のルールが適用されます。

- Berkshelf クックブックの内容は組み込みクックブックより優先されます。
- カスタムクックブックの内容は Berkshelf クックブックより優先されます。

このプロセスがどのように機能するかを示すために、3 つのすべてのクックブックのディレクトリに `mycookbook` という名前のクックブックが含まれている、次のようなシナリオを考えてみます。

- 組み込みクックブック — `mycookbook` は、`someattributes.rb` という名前の属性ファイル、`sometemplate.erb` という名前のテンプレートファイル、`somerecipe.rb` という名前のレシピを含みます。
- Berkshelf クックブック — `mycookbook` は、`sometemplate.erb` および `somerecipe.rb` を含みます。
- カスタムクックブック — `mycookbook` は、`somerecipe.rb` を含みます。

マージされたクックブックには次のものが含まれます。

- 組み込みクックブックの `someattributes.rb`。
- Berkshelf クックブックの `sometemplate.erb`。
- カスタムクックブックの `somerecipe.rb`。

> **Important**
>
> 組み込みクックブック全体をリポジトリにコピーし、クックブックの一部を変更することによって、Chef 11.10 スタックをカスタマイズしないでください。そうすることで、レシピを含む組み込みクックブック全体が上書きされます。 OpsWorks スタックがそのクックブックを更新する場合、プライベートコピーを手動で更新しない限り、スタックはこれら

の更新のメリットを享受できません。スタックをカスタマイズする方法の詳細については、「OpsWorks スタックのカスタマイズ」を参照してください。

Chef の検索の使用

レシピで Chef の search メソッドを使用して、スタックデータのクエリを実行できます。Chef サーバーと同じ構文を使用しますが、 スタックは Chef OpsWorks サーバーをクエリするのではなく、ローカルノードオブジェクトからデータを取得します。これには、以下のデータが含まれます。

- インスタンスのスタック設定およびデプロイ属性。
- インスタンスの組み込みクックブックとカスタムクックブックの属性ファイルにある属性。
- Ohai によって収集されるシステムデータ。

スタック設定属性とデプロイ属性には、スタック内の各オンラインインスタンスのホスト名や IP アドレスなどのデータなど、レシピが検索を通じて通常取得するほとんどの情報が含まれます。OpsWorks スタックはライフサイクルイベントごとにこれらの属性を更新し、現在のスタック状態を正確に反映します。つまり、スタック内で検索に依存するコミュニティレシピを、変更せずに、頻繁に使用できます。search メソッドでは適切なデータが返されますが、データはサーバーではなく、スタック設定およびデプロイ属性から取得されます。

OpsWorks スタック検索の主な制限は、ローカルノードオブジェクトのデータ、特にスタック設定とデプロイ属性のみを処理することです。そのため、次のような種類のデータは検索で使用できない可能性があります。

- 他のインスタンスにあるローカルに定義された属性。

  レシピが属性をローカルで定義している場合、その情報は OpsWorks スタックサービスに報告されないため、検索を使用して他のインスタンスからそのデータにアクセスすることはできません。
- カスタム deploy 属性。

  アプリケーションをデプロイし、対応する属性がそのデプロイのスタックのインスタンスにインストールされるとき、カスタム JSON を指定できます。ただし、選択したインスタンスにのみデプロイする場合、属性はそのインスタンスにのみインストールされます。それらのカスタム JSON の属性に対するクエリは、他のすべてのインスタンスで失敗します。さらに、カスタム属性は、その特定のデプロイについてのみ、スタック設定およびデプロイ JSON に含められます。カスタム属性にアクセスできるのは、次回のライフサイクルイベントで、新しい一連のスタック設定およびデプロイ属性がインストールされるまでの間だけです。スタックのカスタム JSON を指定する場

合、属性は、すべてのライフサイクルイベントについて、すべてのインスタンスにインストールされ、常に検索でアクセスすることができます。

- 他のインスタンスの Ohai データ。

  Chef の Ohai ツールは、インスタンスでさまざまなシステムデータを取得し、ノードオブジェクトに追加します。このデータはローカルに保存され、 OpsWorks スタックサービスに報告されないため、検索で他のインスタンスから Ohai データにアクセスすることはできません。ただし、このデータの一部はスタック設定およびデプロイ属性に含まれる場合があります。

- オフラインインスタンス。

  スタック設定およびデプロイ属性には、オンラインインスタンスのデータのみが含まれます。

次のレシピの例では、検索を使用して、PHP レイヤーのインスタンスのプライベート IP アドレスを取得する方法を示します。

```
appserver = search(:node, "role:php-app").first
Chef::Log.info("The private IP is '#{appserver[:private_ip]}'")
```

> **Note**
>
> OpsWorks スタックがスタック設定属性とデプロイ属性をノードオブジェクトに追加すると、実際には 2 つのレイヤー属性のセットが作成され、それぞれが同じデータを持ちます。1 つのセットは `layers`名前空間にあります。これは、 OpsWorks スタックがデータを保存する方法です。もう 1 つのセットは `role` 名前空間にあります。Chef サーバーでは同等のデータはこのように保存されます。`role` 名前空間の目的は、Chef サーバーが OpsWorks スタックインスタンスで実行するために実装された検索コードを許可することです。 OpsWorks スタック専用のコードを記述する場合は、前の例`role:php-app`で `layers:php-app`または のいずれかを使用すると`search`、同じ結果が返されます。

データバッグの使用

レシピ内で Chef の `data_bag_item` メソッドを使用して、データバッグ内の情報に対するクエリを実行できます。Chef サーバーを対象とする場合と同じ構文を使用しますが、 OpsWorks スタックではインスタンスのスタック設定およびデプロイ属性からデータを取得します。ただし、 OpsWorks スタックは現在 Chef 環境をサポートしていないため、 `node.chef_environment` は常に を返します`_default`。

カスタム JSON を使用して [:opsworks][:data_bags] 属性に 1 つ以上の属性を追加することによって、データバッグを作成します。次の例では、カスタム JSON にデータバッグを作成するための一般的な形式を示します。

> **Note**
>
> クックブックリポジトリに追加することで、データバッグを作成することはできません。カスタム JSON を使用する必要があります。

```
{
  "opsworks": {
    "data_bags": {
      "bag_name1": {
        "item_name1: {
          "key1" : “value1”,
          "key2" : “value2”,
          ...
        }
      },
      "bag_name2": {
        "item_name1": {
          "key1" : “value1”,
          "key2" : “value2”,
          ...
        }
      },
      ...
    }
  }
}
```

通常、スタックにカスタム JSON を指定して、それ以降のすべてのライフサイクルイベントについて、すべてのインスタンスにカスタム属性をインストールします。アプリケーションをデプロイするときにカスタム JSON を指定することもできますが、それらの属性はそのデプロイについてのみインストールされるため、選択した一連のインスタンスにのみインストールされている可能性があります。詳細については、「アプリケーションのデプロイ」を参照してください。

次のカスタム JSON の例は、myapp という名前のデータバッグを作成します。mysql という項目が 1 個と、キーと値のペアが 2 個含まれます。

```
{ "opsworks": {
    "data_bags": {
      "myapp": {
        "mysql": {
          "username": "default-user",
          "password": "default-pass"
        }
      }
    }
  }
}
```

レシピでこのデータを使用するために、次の例に示すように、data_bag_item を呼び出して、データバッグと値の名前を渡すことができます。

```
mything = data_bag_item("myapp", "mysql")
Chef::Log.info("The username is '#{mything['username']}' ")
```

データバッグ内のデータを変更するには、単にカスタム JSON を変更するだけで、次のライフサイクルイベントについて、スタックのインスタンスにインストールされます。

Berkshelf の使用

Chef 0.9 および 11.4 スタックでは、カスタムクックブックリポジトリを 1 つだけインストールできます。Chef 11.10 スタックでは、Berkshelf を使用してクックブックとその依存関係を管理でき、これにより複数のリポジトリからクックブックをインストールできます。(詳細については「ローカルでのクックブックの依存関係のパッケージ化」 を参照してください)。特に、Berkshelf では、カスタムクックブックリポジトリにコピーする代わりに、 OpsWorks スタック互換のコミュニティクックブックをリポジトリから直接インストールできます。サポートされている Berkshelf バージョンは、オペレーティングシステムによって異なります。詳細については、「OpsWorks スタックオペレーティングシステム」を参照してください。

Berkshelf を使用するには、「カスタムクックブックのインストール」に説明されているように、明示的に有効にする必要があります。次に、インストールするクックブックを指定する Berksfile ファイルを、クックブックリポジトリのルートディレクトリに含めます。

Berksfile に外部クックブックソースを指定するには、デフォルトのリポジトリ URL を指定するファイルの先頭部分で source 属性を指定します。明示的にリポジトリが指定されていない限り、Berkshelf はそのソース URL でクックブックを探します。次に、インストールする各クックブックに対応する行を次の形式で追加します。

```
cookbook 'cookbook_name', ['>= cookbook_version'], [cookbook_options]
```

cookbook に続くフィールドが特定のクックブックを指定します。

- [*cookbook_name*] (クックブックの名前) – (必須) クックブックの名前を指定します。

  他のフィールドを指定しなかった場合、指定されたソース URL からクックブックがインストールされます。

- [*cookbook_version*] (クックブックのバージョン) – (オプション) クックブックのバージョンを指定します。

  = や >= などのプレフィックスを使用して、特定のバージョンまたは使用可能なバージョンの範囲を指定します。バージョンを指定しない場合、Berkshelf は最新のバージョンをインストールします。

- [*cookbook_options*] (クックブックのオプション) – (オプション) 最後のフィールドは、リポジトリの位置などのオプションを指定する 1 つ以上のキーと値のペアを含むハッシュです。

  例えば、git キーを含めて特定の Git リポジトリを指定したり、tagキーを含めて特定のリポジトリブランチを指定したりすることができます。リポジトリブランチを指定することは、通常、目的のクックブックを確実にインストールするための最適な方法です。

> **Important**
>
> Berksfile に metadata 行を追加し、metadata.rb でクックブックの依存関係を宣言することによって、クックブックを宣言することは避けてください。この処理が正常に実行されるためには、両方のファイルが同じディレクトリにある必要があります。OpsWorks スタックでは、Berksfile はリポジトリのルートディレクトリにある必要がありますが、metadata.rbファイルはそれぞれのクックブックディレクトリにある必要があります。代わりに、Berksfile 内で外部クックブックを明示的に宣言してください。

次に、クックブックを指定するさまざまな方法を示す Berksfile の例を示します。Berksfile を作成する方法の詳細については、「Berkshelf」を参照してください。

```
source "https://supermarket.chef.io"

cookbook 'apt'
cookbook 'bluepill', '>= 2.3.1'
cookbook 'ark', git: 'git://github.com/opscode-cookbooks/ark.git'
cookbook 'build-essential', '>= 1.4.2', git: 'git://github.com/opscode-cookbooks/build-essential.git', tag: 'v1.4.2'
```

このファイルは、次のクックブックをインストールします。

- コミュニティクックブックリポジトリにある apt の最新バージョン。
- バージョン 2.3.1 以降である場合に限り、コミュニティクックブックにある bluepill の最新バージョン。
- 指定されたリポジトリにある ark の最新バージョン。

  この例の URL は GitHub のパブリックコミュニティクックブックのリポジトリ用ですが、プライベートリポジトリなど、他のリポジトリからクックブックをインストールできます。詳細については「Berkshelf」を参照してください。
- 指定されたリポジトリの v1.4.2 ブランチにある build-essential クックブック。

カスタムクックブックリポジトリには、Berksfile に加えて、カスタムクックブックを含めることができます。この場合、 OpsWorks スタックは両方のクックブックのセットをインストールします。つまり、インスタンスは最大 3 つのクックブックリポジトリを持つことができます。

- 組み込みクックブックは、/opt/aws/opsworks/current/cookbooks にインストールされます。
- カスタムクックブックリポジトリにクックブックが含まれる場合、そのクックブックは /opt/aws/opsworks/current/site-cookbooks にインストールされます。
- Berkshelf を有効にし、カスタムクックブックリポジトリに Berksfile が含まれる場合、指定されたクックブックは /opt/aws/opsworks/current/berkshelf-cookbooks にインストールされます。

組み込みクックブックとカスタムクックブックは、セットアップ中に各インスタンスにインストールされ、カスタムクックブックの更新スタックコマンドを手動で実行しない限り、後で更新されません。 OpsWorks スタックは Chef の実行`berks install`ごとに実行されるため、Berkshelf クックブックはライフサイクルイベントごとに更新されます。

- リポジトリに新しいバージョンのクックブックがある場合、このオペレーションは、リポジトリからのクックブックを更新します。
- それ以外の場合、このオペレーションは、ローカルキャッシュから Berkshelf クックブックを更新します。

> **Note**
>
> このオペレーションは Berkshelf クックブックを上書きするため、クックブックのローカルコピーを変更している場合、その変更内容が上書きされます。詳細については「Berkshelf」を参照してください。

また、Berkshelf クックブックとカスタムクックブックの両方を更新する Update Custom Cookbooks スタックコマンドを実行することによって、Berkshelf クックブックを更新することもできます。

Chef 11.4 スタック用のレシピの実装

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Important**
>
> カスタムクックブックまたはコミュニティクックブックに組み込みクックブックの名前を再使用しないでください。組込クックブックと同じ名前のカスタムクックブックは失敗する可能性があります。Chef 11.10、11.4、0.9 のスタックで使用可能な組み込みクックブックの

完全なリストについては、「GitHub の opsworks-cookbooks リポジトリ」を参照してください。

Chef 11.4 スタックの大きな制限は、レシピで Chef の検索やデータバッグを使用できないことです。ただし、 OpsWorks Stacks は、検索で取得する多くの情報を含むスタック設定属性とデプロイ属性を各インスタンスにインストールします。これには、以下が含まれます。

- ホストまたはアプリケーション名など、コンソールからのユーザー定義のデータ。
- スタックのレイヤー、アプリケーション、インスタンスなどの OpsWorks スタックサービスによって生成されたスタック設定データ、および IP アドレスなどの各インスタンスの詳細。
- ユーザーによって提供されたデータを含み、データバッグとほぼ同じ目的で使用できる、カスタム JSON 属性。

OpsWorks スタックは、イベントの Chef 実行を開始する前に、ライフサイクルイベントごとに各インスタンスにスタック設定とデプロイ属性の最新バージョンをインストールします。データは、標準の `node[:attribute][:child_attribute][...]` 構文を通じてレシピに使用できます。たとえば、スタック設定およびデプロイ属性にはスタック名 `node[:opsworks][:stack][:name]` が含まれています。

組み込みのレシピの 1 つに含まれる次のコードは、スタック名を取得し、その名前を使用して設定ファイルを作成します。

```
template '/etc/ganglia/gmetad.conf' do
  source 'gmetad.conf.erb'
  mode '0644'
  variables :stack_name => node[:opsworks][:stack][:name]
  notifies :restart, "service[gmetad]"
end
```

スタック設定およびデプロイ属性の値の多くには、複数の属性が含まれています。必要な情報を取得するために、これらの属性を反復処理する必要があります。以下の例は、スタック設定およびデプロイ属性からの引用を示しています。便宜上、JSON オブジェクトとしてあらわされています。これには、最上位属性 deploy が含まれています。この最上位属性には、スタックの各アプリケーションの属性が含まれており、アプリケーションの短縮名が付いています。

```
{
  ...
  "deploy": {
    "app1_shortname": {
      "document_root": "app1_root",
      "deploy_to": "deploy_directory",
      "application_type": "php",
      ...
    },
    "app2_shortname": {
      "document_root": "app2_root",
      ...
    }
  },
  ...
}
```

各アプリケーション属性には、アプリケーションの特性を示す一連の属性が含まれています。例えば、deploy_to 属性は、アプリケーションのデプロイディレクトリを表します。次のコードは、アプリケーションの各デプロイディレクトリのユーザー、グループ、およびパスを設定します。

```
node[:deploy].each do |application, deploy|
  opsworks_deploy_dir do
    user deploy[:user]
    group deploy[:group]
    path deploy[:deploy_to]
  end
  ...
end
```

スタック設定およびデプロイ属性の詳細については、「OpsWorks スタックのカスタマイズ」を参照してください。デプロイディレクトリの詳細については、「Deploy レシピ」を参照してください。

Chef 11.4 のスタックはデータバッグをサポートしていませんが、カスタム JSON を指定することによって、スタック設定およびデプロイ属性に任意のデータを追加できます。レシピは、標準的な Chef のノード構文を使用して、データにアクセスできます。詳細については、「カスタム JSON の使用」を参照してください。

暗号化されたデータバッグの機能が必要な場合、選択肢の 1 つとして、プライベート Amazon S3 バケットなどの安全な場所に機密性の高い属性を保存する方法があります。レシピは、すべての

OpsWorks スタックインスタンスにインストールされている AWS Ruby SDK を使用して、バケットからデータをダウンロードすることができます。

> **Note**
>
> 各 OpsWorks スタックインスタンスにはインスタンスプロファイルがあります。関連付けられた IAM ロール によって、インスタンスで実行中のアプリケーションがどの AWS リソースにアクセスできるかが指定されます。レシピで Amazon S3 バケットにアクセスするためには、ロールのポリシーに次のようなステートメントを含めて、指定されたバケットからファイルを取得するアクセス許可を付与する必要があります。
>
> ```
> "Action": ["s3:GetObject"],
> "Effect": "Allow",
> "Resource": "arn:aws:s3:::amzn-s3-demo-bucket/*",
> ```
>
> インスタンスプロファイルの詳細については、「EC2 インスタンスで実行するアプリケーションに対するアクセス許可の指定」を参照してください。

新しいバージョンの Chef への既存の Linux スタックの移行

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

スタックコンソール、API、または CLI を使用して、Linux OpsWorks スタックを新しい Chef バージョンに移行できます。ただし、新しいバージョンに対応するために、レシピに変更を加えることが必要になる場合があります。スタックを移行するための準備をするときに、次の点を考慮します。

- スタックを編集またはクローンすることで OpsWorks、スタックスタックのバージョンを Chef 11 から Chef 12 に変更することはできません。Chef のメジャーバージョンアップグレードは、この

セクションの手順を使用して行うことはできません。Chef 11.10 から Chef 12 への移行の詳細については、「レシピの実装: Chef 12」を参照してください。

- Chef のあるバージョンから別のバージョンへの移行には多くの変更が伴い、その一部は互換性を破る変更です。

  Chef 0.9 から Chef 11.4 への移行の詳細については、「新しい Chef バージョンへの移行 」を参照してください。Chef 11.4 から Chef 11.10 への移行の詳細については、「レシピの実装: Chef 11.10」を参照してください。Chef 11.10 から Chef 12 への移行の詳細については、「レシピの実装: Chef 12」を参照してください。

- Chef の実行で使用される Ruby のバージョンは、Chef 0.9 および Chef 11.4 のスタックの場合 (Ruby 1.8.7)、Chef 11.10 のスタックの場合 (Ruby 2.0.0)、および Chef 12 のスタックの場合 (Ruby 2.1.6) とで異なります。

  詳細については、「Ruby のバージョン」を参照してください。

- Chef 11.10 のスタックでは、クックブックのインストールの処理が、Chef 0.9 または Chef 11.4 のスタックの場合とは異なります。

  この違いによって、カスタムクックブックを使用するスタックを Chef 11.10 に移行するときに問題が発生する可能性があります。詳細については、「クックブックのインストールと優先順位」を参照してください。

Chef のスタックを新しいバージョンの Chef に移行する際の推奨ガイドラインを以下に示します。

スタックを新しいバージョンの Chef に移行するには

1. 本稼働用スタックをクローン化します。[Clone Stack] (クローンスタック) ページで、[Advanced>>] (アドバンスト>>) をクリックして [Configuration Management] (構成管理) セクションを表示し、[Chef version] (Chef のバージョン) を上位のバージョンに変更します。

   > **Note**
   >
   > Chef 0.9 のスタックで作業を始める場合、直接 Chef 11.10 にアップグレードすることはできません。最初に Chef 11.4 にアップグレードする必要があります。レシピをテストする前に、Chef 11.10 にスタックを移行する場合は、更新が実行されるまで 20 分間待機してから、スタックを 11.4 から 11.10 にアップグレードします。

2. インスタンスをレイヤーに追加し、テストまたはステージング用システムにあるクローン化したスタックのアプリケーションとクックブックをテストします。詳細については、「All about Chef ...」を参照してください。
3. テスト結果が適切である場合、次のいずれかを実行します。
   - これが必要な Chef バージョンである場合、クローン化したスタックを本稼働用スタックとして使用するか、本稼働用スタックの Chef バージョンをリセットできます。
   - Chef 0.9 スタックから Chef 11.10 に 2 段階で移行している場合は、Chef 11.4 から Chef 11.10 にスタックを移行する処理を繰り返します。

> **Note**
>
> レシピをテストする場合は、SSH を使用してインスタンスに接続した後、インスタンスエージェント CLI の run_command コマンドを使用してさまざまなライフサイクルイベントに関連付けられたレシピを実行します。エージェント CLI は、特に Setup レシピをテストする場合に便利です。Setup が失敗し、インスタンスがオンライン状態になっていない場合でも使用できるからです。Setup スタックコマンドを使用して Setup レシピを再実行することもできますが、このコマンドは Setup が成功し、インスタンスがオンラインになっている場合にのみ利用できます。

実行中のスタックを新しいバージョンの Chef に更新することができます。

実行中のスタックを新しいバージョンの Chef に更新するには

1. スタックを編集し、スタックの設定の [Chef version] を変更します。
2. 新しい設定を保存し、 OpsWorks スタックがインスタンスを更新するのを待ちます。通常、更新には 15～20 分かかります。

> **Important**
>
> OpsWorks スタックは Chef バージョンの更新をライフサイクルイベントと同期しません。本稼働用スタックで Chef のバージョンを更新する場合は、次のライフサイクルイベントが発生する前に、更新が完了するように注意する必要があります。イベントが発生した場合 (主に Deploy または Configure イベント)、インスタンスエージェントは、バージョンの更新が完了しているかどうかにかかわらず、カスタムクックブックを更新し、イベントに割り当

てられたレシピを実行します。バージョンの更新が完了したことを直接確認する方法はありませんが、デプロイのログに Chef のバージョンが記録されています。

Ruby のバージョン

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Linux スタック内のすべてのインスタンスに Ruby がインストールされています。 OpsWorks スタックは各インスタンスに Ruby パッケージをインストールし、これを使用して Chef レシピとインスタンスエージェントを実行します。 OpsWorks スタックは、スタックが実行されている Chef バージョンに基づいて Ruby バージョンを決定します。このバージョンを変更しないでください。このバージョンを変更すると、インスタンスエージェントが無効になります。

OpsWorks スタックは、Windows スタックにアプリケーション Ruby 実行可能ファイルをインストールしません。Chef 12.2 クライアントには Ruby 2.0.0 p451 が付属していますが、Ruby の実行可能ファイルはインスタンスの PATH 環境変数に追加されていません。この実行可能ファイルを使用して Ruby コードを実行する場合、実行可能ファイルは Windows ドライブの `\opscode\chef\embedded\bin\ruby.exe` にあります。

次の表は、Stacks Ruby OpsWorks のバージョンをまとめたものです。また、使用可能なアプリケーションの Ruby バージョンは、インスタンスのオペレーティングシステムによって異なります。詳細と使用可能なパッチバージョンの詳細については、「OpsWorks スタックオペレーティングシステム」を参照してください。

Chef のバージョン	Chef の Ruby のバージョン	使用できるアプリケーションの Ruby のバージョン
0.9 (c)	1.8.7	1.8.7(a)、1.9.3(e)、2.0.0

Chef のバージョン	Chef の Ruby のバージョン	使用できるアプリケーションの Ruby のバージョン
11.4 (c)	1.8.7	1.8.7(a)、1.9.3(e)、2.0.0、2.1、2.2.0、2.3
11.10	2.0.0-p481	1.9.3(c、e)、2.0.0、2.1、2.2.0、2.3、2.6.1
12 (b)	2.1.6、2.2.3	なし
12.22 (d)	2.3.6	なし

(a) Amazon Linux 2014.09 以降、Red Hat Enterprise Linux (RHEL)、または Ubuntu 14.04 LTSでは使用できません。

(b) Linux スタックにのみ使用できます。

(C) RHEL サービスを使用できません。

(d) Windows スタックにのみ使用できます。メジャーバージョンは 12.2 です。現在のマイナーバージョンは 12.22 です。

(e) 廃止が完了しました。サポートは終了しています。

インストール先の場所は、Chef のバージョンによって決まります。

- アプリケーションは、Chef のすべてのバージョンについて、`/usr/local/bin/ruby` の実行可能ファイルを使用します。
- Chef 0.9 と 11.4 の場合、インスタンスエージェントと Chef のレシピは `/usr/bin/ruby` の実行可能ファイルを使用します。
- Chef 11.10 の場合、インスタンスエージェントと Chef のレシピは `/opt/aws/opsworks/local/bin/ruby` の実行可能ファイルを使用します。

カスタムクックブックのインストール

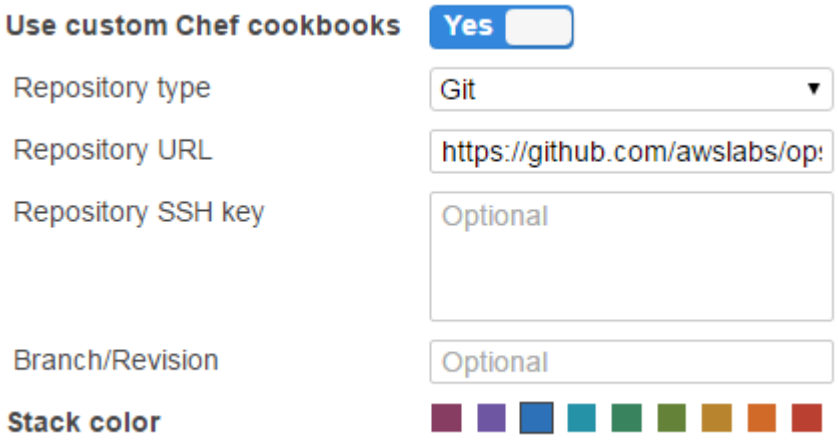
> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

スタックがカスタムクックブックをインストールおよび使用するようにするには、すでに設定されていない場合はカスタムクックブックが有効になるようにスタックを設定する必要があります。リポジトリ URL と、パスワードなどの関連情報を指定する必要があります。

> **Important**
>
> カスタムクックブックをサポートするようにスタックを設定すると、 OpsWorks スタックは起動時にすべての新しいインスタンスにクックブックを自動的にインストールします。ただし、カスタムクックブックの更新 OpsWorks スタックコマンドを実行して、既存のインスタンスに新規または更新されたクックブックをインストールするように スタックに明示的に指示する必要があります。 詳細については、「カスタムクックブックの更新」を参照してください。スタックの [Use custom Chef cookbooks (カスタム Chef クックブックを使用する)] を有効化する前に、実行するカスタムクックブックとコミュニティクックブックが、スタックで使用する Chef のバージョンをサポートしていることを確認してください。

カスタムクックブックのスタックを設定するには

1. スタックのページで、[Stack Settings] をクリックして [Settings] ページを表示し、[Edit] をクリックして設定を編集します。
2. [Use custom Chef cookbooks] を [Yes] に切り替えます。



3. カスタムクックブックを設定します。

設定が完了したら、[Save] をクリックして更新されたスタックを保存します。

カスタムクックブックリポジトリの指定

Linux スタックは、次のリポジトリタイプからカスタムクックブックをインストールできます。

- HTTP や Amazon S3 のアーカイブ。

  これらはパブリックでもプライベートでもかまいませんが、通常プライベートアーカイブに推奨されるオプションは Amazon S3 です。
- Git リポジトリと Subversion リポジトリは、ソース管理と複数のバージョンを設定する機能を提供します。

Windows スタックは、Amazon S3 アーカイブと Git リポジトリからカスタムクックブックをインストールできます。

すべてのリポジトリタイプに、以下の必須フィールドがあります。

- [Repository type] (リポジトリタイプ) – リポジトリのタイプ
- [Repository URL] (リポジトリ URL) – リポジトリの URL

OpsWorks スタックは、GitHub や Bitbucket などのパブリックにホストされている Git リポジトリサイトと、プライベートにホストされている Git サーバーをサポートしています。 https://bitbucket.orgGit リポジトリの場合、リポジトリがパブリックとプライベートのどちらであるかに応

じて、次の URL 形式の 1 つを使用する必要があります。Git サブモジュールと同じ URL のガイドラインに従います。

パブリック Git リポジトリの場合は、HTTPS または Git の読み取り専用プロトコルを使用します。

- Git 読み取り専用 – `git://github.com/amazonwebservices/opsworks-example-cookbooks.git`。
- HTTPS –`https://github.com/amazonwebservices/opsworks-example-cookbooks.git`。

プライベート Git リポジトリの場合は、以下の例に示すように、SSH の読み取り/書き込み形式を使用する必要があります。

- Github リポジトリ –`git@github.com:`*`project`*`/`*`repository`*。
- Git サーバー上のリポジトリ – *`user`*`@`*`server`*`:`*`project`*`/`*`repository`*

残りの設定はリポジトリのタイプによって異なり、これらについて以下のセクションで説明します。

HTTP アーカイブ

[Repository type] (リポジトリタイプ) で [Http Archive] (Http アーカイブ) を選択すると、2 つの追加設定が表示されますが、アーカイブがパスワードで保護されている場合には設定を完了する必要があります。

- User name - ユーザーネーム。
- [Password] — パスワード

Amazon S3 のアーカイブ

リポジトリタイプに S3 Archive を選択すると、次の追加のオプション設定が表示されます。OpsWorks スタックは、スタック API とコンソールのどちらを使用するかにかかわらず、Amazon EC2 OpsWorks ロール (ホストオペレーティングシステムマネージャー認証) を使用してリポジトリにアクセスできます。

- アクセスキー ID – などの AWS アクセスキー IDAKIAIOSFODNN7EXAMPLE。
- シークレットアクセスキー – など、対応する AWS シークレットアクセスキーwJalrXUtnFEMI/K7MDENG/bPxRfiCYEXAMPLEKEY。

Git リポジトリ

[Source Control] (ソースコントロール) で [Git] を選択すると、以下の追加オプション設定が表示されます。

[Repository SSH key]

プライベート Git リポジトリにアクセスするには、デプロイ SSH キーを指定する必要があります。Git サブモジュールの場合、指定するキーには、それらのサブモジュールへのアクセス権が必要です。詳細については、「Git リポジトリの SSH キーの使用」を参照してください。

> **Important**
>
> デプロイ SSH キーはパスワードを要求できません。 OpsWorks スタックにはパスワードを渡す方法がありません。

[Branch/Revision]

リポジトリに複数のブランチがある場合、 OpsWorks スタックはデフォルトでマスターブランチをダウンロードします。特定のブランチを指定するには、ブランチ名、SHA1 ハッシュ、タグ名のいずれかを入力します。特定のコミットを指定するには、40 桁の 16 進数コミット ID を入力します。

Subversion リポジトリ

[Source Control] (ソースコントロール) で [Subversion] を選択すると、以下の追加設定が表示されます。

- [User name] (ユーザー名) - プライベートリポジトリのユーザー名。
- [Password] (パスワード) - プライベートリポジトリのパスワード。
- [Revision] (リビジョン) - (オプション) 複数のリビジョンがある場合のリビジョン名。

ブランチまたはタグを指定するには、リポジトリ URL を変更する必要があります。例えば、**`http://repository_domain/repos/myapp/branches/my-apps-branch`** または **`http://repository_domain_name/repos/calc/myapp/my-apps-tag`** のように変更します。

カスタムクックブックの更新

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックにカスタムクックブックを提供すると、組み込みの Setup レシピは、新しく起動された各インスタンスにローカルキャッシュを作成し、クックブックをキャッシュにダウンロードします。 OpsWorks スタックは、リポジトリではなくキャッシュからレシピを実行します。リポジトリ内のカスタムクックブックを変更する場合は、更新されたクックブックがインスタンスのローカルキャッシュにインストールされていることを確認する必要があります。 OpsWorks スタックは、最新のクックブックを起動時に新しいインスタンスに自動的にデプロイします。ただし、既存のインスタンスは事情が異なります。

- オンラインのインスタンスには、更新したカスタムクックブックを手動でデプロイする必要があります。
- 負荷ベースのインスタンスと時間ベースのインスタンスを含め、オフラインの Instance Store-Backed インスタンスには、更新したカスタムクックブックをデプロイする必要はありません。

  OpsWorks スタックは、インスタンスの再起動時に現在のクックブックを自動的にデプロイします。
- 負荷ベースまたは時間ベースでない、オフラインの EBS-backed 24/7 インスタンスを開始する必要があります。
- オフライン EBS-Backed の負荷ベースのインスタンスと時間ベースのインスタンスを開始することはできません。そこで、オフラインインスタンスを削除し、新しいインスタンスを追加してそれらを置き換えるのが最も簡単な方法となります。

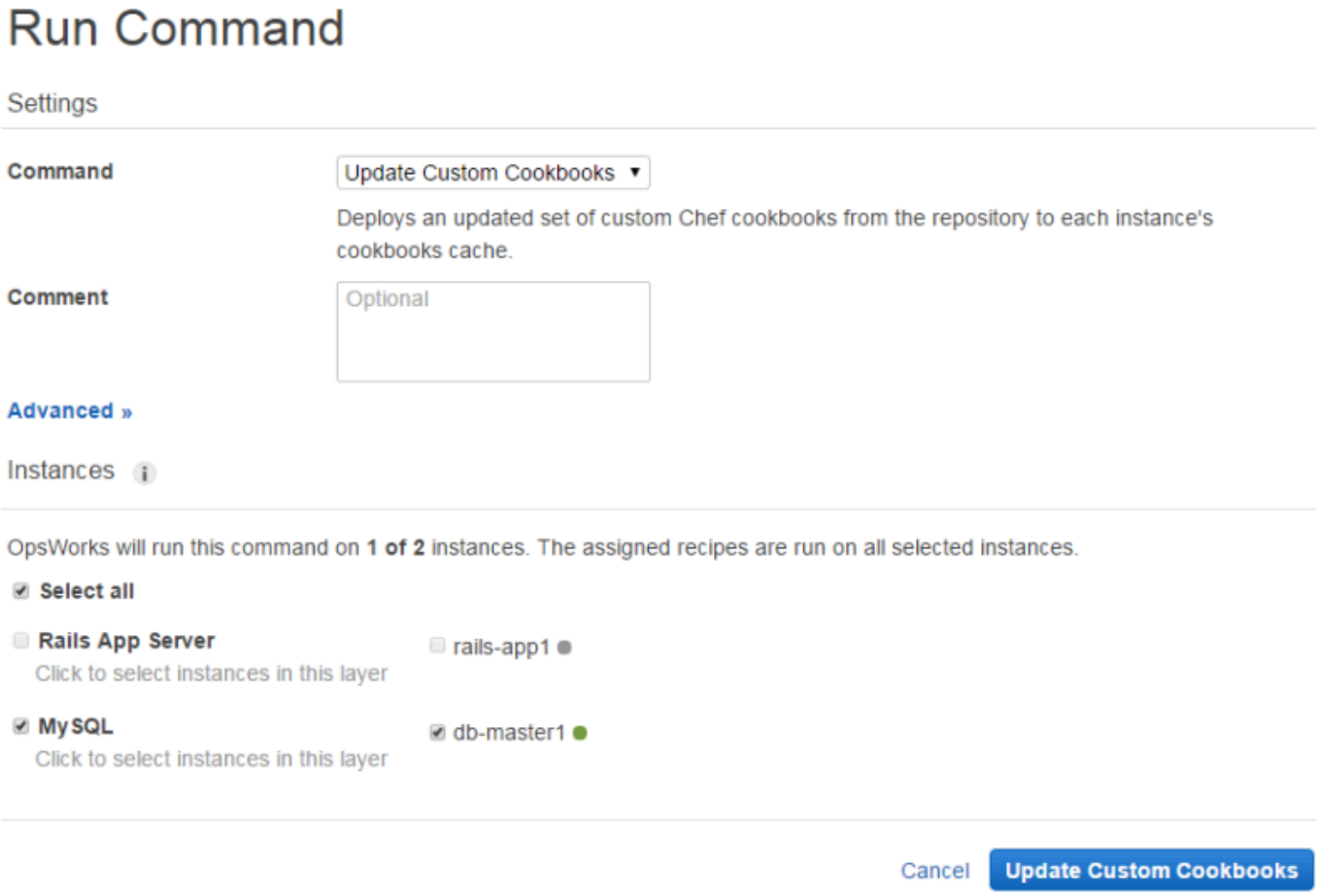
  新しいインスタンスになったため、 OpsWorks スタックはインスタンスの起動時に現在のカスタムクックブックを自動的にデプロイします。

カスタムクックブックを手動で更新するには

1. 変更されたクックブックでリポジトリを更新します。 OpsWorks スタックは、クックブックを最初にインストールしたときに指定したキャッシュ URL を使用するため、クックブックのルートファイル名、リポジトリの場所、およびアクセス権は変更されません。

   - Amazon S3 または HTTP のリポジトリの場合は、元の .zip ファイルを同じ名前の新しい .zip ファイルに置き換えます。
   - Git または Subversion のリポジトリの場合、スタックの設定を編集して、[Branch/Revision] フィールドを新しいバージョンに変更します。

2. スタックのページで、[Run Command] をクリックし、[Update Custom Cookbooks] コマンドを選択します。



3. 必要に応じてコメントを追加します。
4. 必要に応じて、 コマンドのカスタム JSON オブジェクトを指定して、スタックがインスタンスに OpsWorks インストールするスタック設定およびデプロイ属性にカスタム属性を追加し

ます。詳細については、「カスタム JSON の使用」および「属性の上書き」を参照してください。

5. デフォルトでは、 OpsWorks スタックはすべてのインスタンスのクックブックを更新します。更新するインスタンスを指定するには、ページの最後にある一覧から適切なインスタンスを選択します。レイヤー内のすべてのインスタンスを選択するには、左側の列で目的のレイヤーのチェックボックスをオンにします。
6. カスタムクックブックの更新をクリックして、更新されたクックブックをインストールします。OpsWorks スタックは、指定されたインスタンスにキャッシュされたカスタムクックブックを削除し、リポジトリから新しいクックブックをインストールします。

> **Note**
>
> この手順は、既存のインスタンスで、古いバージョンのクックブックがキャッシュに存在する場合のみ必要となります。その後、インスタンスをレイヤーに追加すると、 OpsWorks スタックは現在リポジトリにあるクックブックをデプロイし、最新バージョンを自動的に取得します。

レシピの実行

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

レシピは、次の 2 とおりの方法で実行できます。

- 適切なレイヤーのライフサイクルイベントにレシピを割り当てることによって自動的に実行します。
- 手動で [Execute Recipes] スタックコマンドを実行するか、エージェント CLI を使用して実行します。

トピック

- OpsWorks スタックライフサイクルイベント
- レシピを自動的に実行する
- レシピを手動で実行する

OpsWorks スタックライフサイクルイベント

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

各レイヤーには、5 つの一連のライフサイクルイベントがあり、それぞれのイベントに、そのレイヤーに固有の一連のレシピが関連付けられます。レイヤーのインスタンスでイベントが発生すると、一連の適切なレシピが OpsWorks スタックによって自動的に実行されます。これらのイベントにカスタムレスポンスを提供するには、カスタムレシピを実装し、各レイヤーの適切なイベントに割り当てます。 OpsWorks スタックは、イベントの組み込みレシピの後にこれらのレシピを実行します。

Setup

このイベントは、開始されたインスタンスの起動が終了した後で発生します。Setup stack コマンドを使用して手動でSetupイベントをトリガーすることもできます。 OpsWorks Stacks は、レイヤーに従ってインスタンスを設定するレシピを実行します。例えば、そのインスタンスが Rails アプリケーションサーバーレイヤーに属している場合、Apache、Ruby Enterprise Edition、Passenger、Ruby on Rails が、Setup レシピによってインストールされます。

> **Note**
>
> Setup イベントは、インスタンスを停止中の状態にします。Setup ライフサイクルイベントの実行時はインスタンスが オンライン 状態でないため、Setup イベントを実行するインスタンスはロードバランサーから削除されます。

Configure

このイベントは、以下のいずれかが発生したときに、スタックのすべてのインスタンスで発生します。

- インスタンスがオンライン状態に移行したか、オンライン状態から移行した。
- Elastic IP アドレスをインスタンスに関連付けたか、インスタンスから Elastic IP アドレスの関連付けを解除した。
- Elastic Load Balancing ロードバランサーをレイヤーにアタッチしたり、レイヤーからデタッチしたりします。

たとえば、スタックにインスタンス A、B、および C があり、新しいインスタンス D を起動するとします。D がセットアップレシピの実行を完了すると、 OpsWorks スタックは A、B、C、および D でConfigureイベントをトリガーします。その後 A を停止すると、 OpsWorks スタックは B、C、および D でConfigureイベントをトリガーします。 OpsWorks スタックは、各レイヤーのConfigureレシピを実行してConfigureイベントに応答します。これにより、インスタンスの設定が更新され、オンラインインスタンスの現在のセットが反映されます。Configure イベントは、設定ファイルを再生成する最適なタイミングと言えます。例えば、HAProxy Configure レシピは、ロードバランサーを再構成して、一連のオンラインアプリケーションサーバーインスタンスにおける変更をすべて反映します。

Configure スタックコマンドを使用して、Configure イベントを手動でトリガーすることもできます。

Deploy

このイベントは、Deploy コマンドを実行したときに発生します。通常、一連のアプリケーションサーバーインスタンスにアプリケーションをデプロイする目的でこのコマンドが実行されます。アプリケーションとその関連ファイルをリポジトリからレイヤーのインスタンスにデプロイするレシピがインスタンスによって実行されます。例えば、Rails Application Server インスタンスの場合、Deploy レシピは、指定された Ruby アプリケーションをチェックアウトし、Phusion Passenger に対して、それを再ロードするように伝えます。Deploy を他のインスタンスで実行することもできます。たとえば、新しくデプロイされたアプリケーションに応じてそのインスタンスの設定を更新することができます。

> **Note**
>
> Setup には Deploy が含まれます。セットアップの完了後に Deploy レシピが実行されます。

Undeploy

このイベントは、アプリケーションを削除したとき、つまり、Undeploy コマンドを実行して、一連のアプリケーションサーバーインスタンスからアプリケーションを削除したときに発生します。指定したインスタンスによってレシピが実行され、すべてのアプリケーションバージョンが削除されて、必要なクリーンアップ処理が実行されます。

Shutdown

このイベントは、インスタンスをシャットダウンするように OpsWorks スタックに指示した後、関連付けられた Amazon EC2 インスタンスが実際に終了する前に発生します。 OpsWorks スタックによってサービスのシャットダウンなど、各種クリーンアップタスクを行うレシピが実行されます。

Elastic Load Balancing ロードバランサーをレイヤーにアタッチし、接続ドレイニングのサポートを有効にしている場合、 OpsWorks スタックは接続ドレイニングが完了するまで待ってからShutdownイベントをトリガーします。

Shutdown イベントをトリガーした後、 OpsWorks スタックはタスクを実行するために指定された時間をShutdownレシピに許可し、Amazon EC2 インスタンスを停止または終了します。デフォルトの Shutdown タイムアウト値は 120 秒です。Shutdown レシピでさらに時間が必要な場合は、レイヤー設定を編集してタイムアウト値を変更できます。インスタンス Shutdown の詳細については、「インスタンスの停止」を参照してください。

> **Note**
>
> インスタンスを再起動しても、ライフサイクルイベントはトリガーされません。

アプリケーションコマンド Deploy と Undeploy の詳細については、「アプリケーションのデプロイ」を参照してください。

起動されたインスタンスの起動が終了した後の、残りの起動シーケンスは次のとおりです。

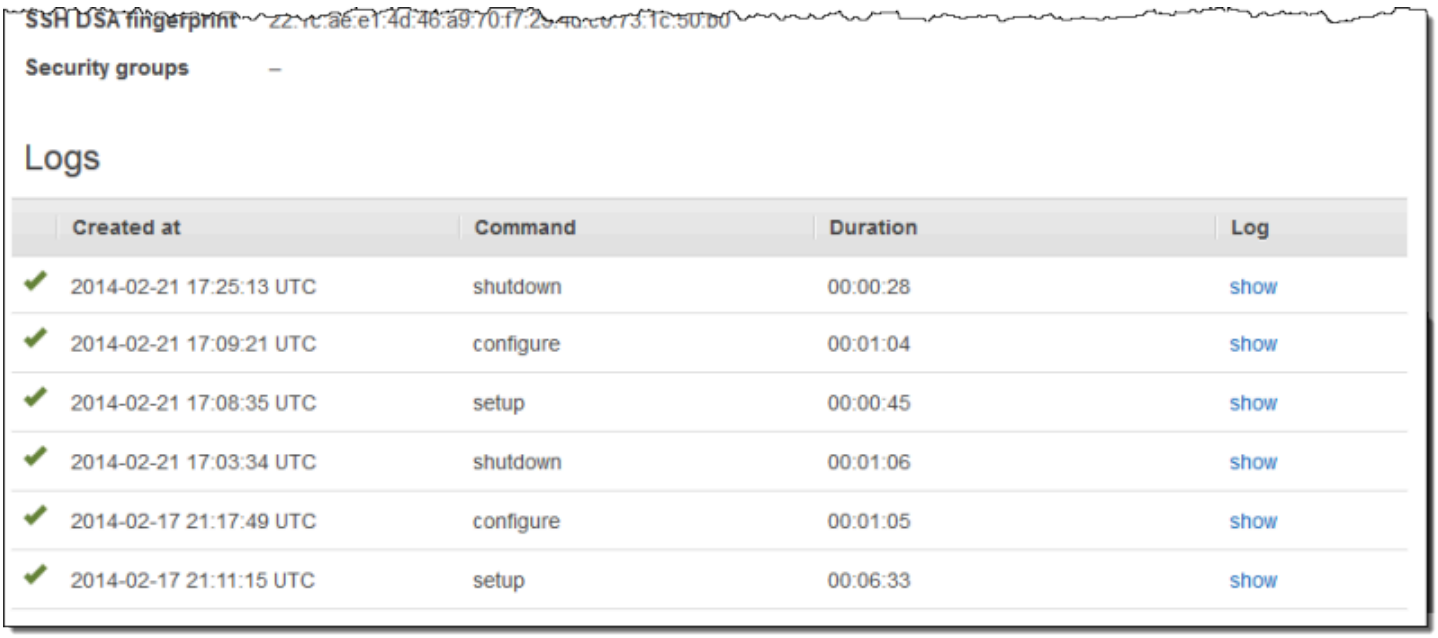
1. OpsWorks スタックはインスタンスの組み込みSetupレシピを実行し、その後にカスタムSetupレシピを実行します。
2. OpsWorks スタックはインスタンスの組み込みDeployレシピを実行し、その後にカスタムDeployレシピを実行します。

   インスタンスがオンライン状態になります。

3. OpsWorks スタックは、新しく起動されたインスタンスを含む、スタック内のすべてのインスタンスでConfigureイベントをトリガーします。

   OpsWorks スタックはインスタンスの組み込みConfigureレシピを実行し、その後にカスタムConfigureレシピを実行します。

> **Note**
>
> 特定のインスタンスで発生したライフサイクルイベントを確認するには、[Instances] ページにアクセスし、そのインスタンスの名前をクリックして対応する詳細ページを開きます。ページ最下部の [Logs] セクションにイベントが一覧表示されます。[Log] (ログ) 列の [show] (表示) をクリックすると、イベントの Chef ログを確認できます。イベントの処理方法についての詳細な情報 (実行されたレシピを含む) が表示されます。Chef ログの解釈の詳細については、「Chef ログ」を参照してください。



OpsWorks スタックは、ライフサイクルイベントごとに、現在のスタック状態と、イベントの場合はデプロイに関する情報を含むスタック設定とデプロイ属性のセットを各インスタンスにインストールします。 Deploy属性には、利用可能なインスタンスとその IP アドレスなどの情報が含まれています。詳細については、「スタック設定およびデプロイメント属性」を参照してください。

> **Note**
>
> 多数のインスタンスを同時に開始または停止すると、短時間のうちに大量の Configure イベントが生成されます。不要な処理を避けるため、 OpsWorks スタックは最後のイベントにのみ応答します。変更範囲全体についてスタックのインスタンスを更新するために必要な情報はすべて、そのイベントのスタック設定とデプロイメント属性に保存されています。これにより、以前のConfigureイベントも処理する必要がなくなります。 OpsWorks スタックは、未処理のConfigureイベントを優先としてラベル付けします。

レシピを自動的に実行する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

それぞれのレイヤーには、ライフサイクルイベントごとに割り当てられた一連の組み込みレシピがあります (ただし、Undeploy レシピがないレイヤーも一部存在します)。インスタンスでライフサイクルイベントが発生すると、 OpsWorks Stacks は関連するレイヤーに適切なレシピのセットを実行します。

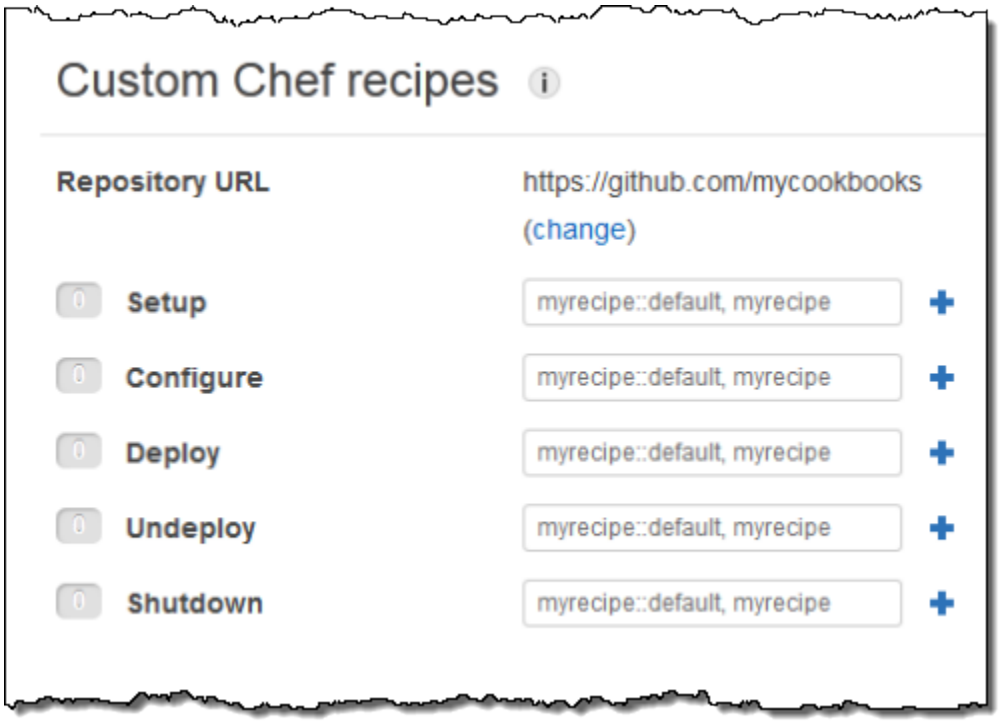
カスタムクックブックをインストールしている場合は、各レシピをレイヤーのライフサイクルイベントに割り当てることで、 OpsWorks スタックでレシピの一部またはすべてを自動的に実行させることができます。イベントが発生すると、 OpsWorks スタックはレイヤーの組み込みレシピの後に指定されたカスタムレシピを実行します。

カスタムレシピをレイヤーのイベントに割り当てるには

1. [Layers] (レイヤー) ページで、目的のレイヤーの [Recipes] (レシピ) をクリックし、[Edit] (編集) をクリックします。まだカスタムクックブックを有効にしていない場合は、[configure cookbooks] をクリックして、スタックの [Settings] ページを開きます。[Use custom Chef Cookbooks] を [Yes] に切り替え、クックブックのリポジトリ情報を指定します。その後、

[Save] をクリックし、[Recipes] タブの編集ページに戻ります。詳細については、「カスタムクックブックのインストール」を参照してください。

2. [Recipes] タブで、目的のイベントフィールドに個々のカスタムレシピを入力し、[+] をクリックしてリストに追加します。レシピは、*cookbook*::*somerecipe* (.rb 拡張子を省略) の形式で指定します。



新しいインスタンスを起動すると、 OpsWorks スタックは標準レシピを実行した後、各イベントのカスタムレシピを自動的に実行します。

> **Note**
>
> カスタムレシピは、コンソールに入力した順序で実行されます。また、適切な順序でレシピを実行するメタレシピを実装することにより実行順序を制御することもできます。

レシピを手動で実行する

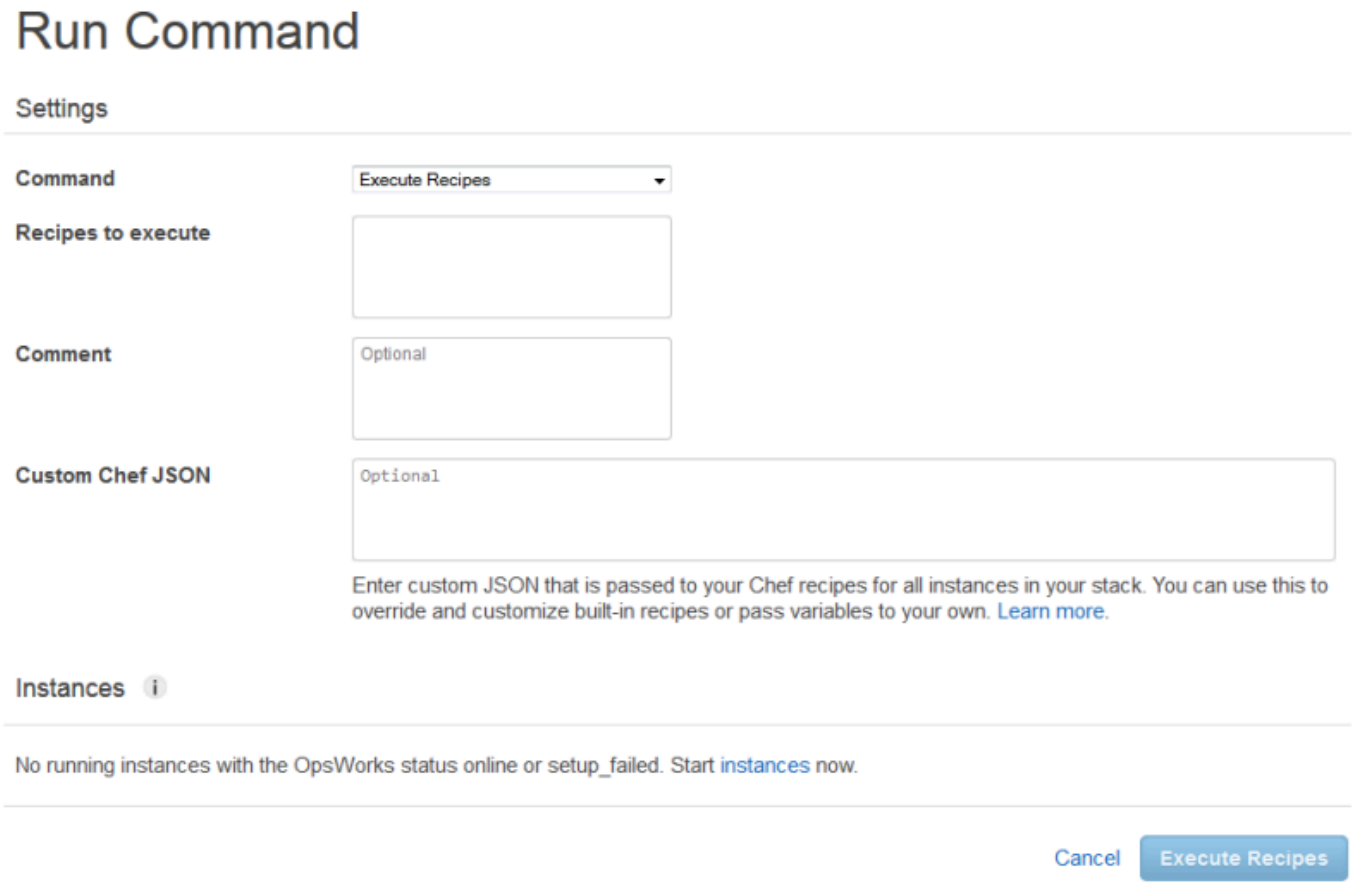
> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソ

リューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

通常レシピは、ライフサイクルイベントの発生時に自動的に実行されますが、スタックの特定のまたはすべてのインスタンスに対し、いつでも手動でレシピを実行することができます。この機能は通常、インスタンスのバックアップなど、ライフサイクルイベントとはあまり関係のないタスクに使用します。カスタムレシピを手動で実行するには、そのカスタムレシピがいずれかのカスタムクックブックに含まれている必要があります。ただし、カスタムレシピがライフサイクルイベントに割り当てられている必要はありません。レシピを手動で実行すると、 OpsWorks Stacks は Deploy イベントと同じdeploy属性をインストールします。

スタックのインスタンスに対してレシピを手動で実行するには

1. [Stack] ページで、[Run command] をクリックします。[Command] の [Execute Recipes] を選択します。



2. [Recipes to execute] ボックスに標準の *cookbookname*::*recipename* 形式で、実行するレシピを入力します。複数のレシピはカンマで区切って指定します。ここに指定した順序でレシピが実行されます。
3. オプションで、[Custom Chef JSON] ボックスを使用して、インスタンスにインストールされるスタック設定およびデプロイ属性にマージされるカスタム属性を定義するカスタム JSON オブジェクトを追加します。カスタム JSON オブジェクトの使用の詳細については「カスタム JSON の使用」と「属性の上書き」を参照してください。
4. インスタンスで、 OpsWorks スタックがレシピを実行するインスタンスを選択します。

ライフサイクルイベントが発生すると、 OpsWorks スタックエージェントは関連するレシピを実行するコマンドを受け取ります。これらのコマンドは、適切なスタックコマンドまたはエージェント CLI の run_command コマンドを使用して、特定のインスタンスで手動で実行できます。エージェント CLI の使用方法の詳細については、「OpsWorks スタックエージェント CLI」を参照してください。

リソース管理

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post または AWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

リソースページでは、アカウントの Elastic IP アドレス、Amazon EBS ボリューム、または Amazon RDS インスタンスリソースを OpsWorks スタックスタックで使用できます。[Resources] を使用して、以下を行うことができます。

- リソースの登録。リソースをスタックに登録することにより、リソースをスタックのインスタンスの 1 つにアタッチできます。
- リソースのアタッチ。リソースをスタックのインスタンスの 1 つにアタッチします。
- リソースの移動。あるインスタンスから別のインスタンスにリソースを移動します。
- リソースのデタッチ。リソースをインスタンスからデタッチします。リソースは登録された状態で残っているため、別のインスタンスにアタッチすることができます。

- リソースの登録解除。未登録のリソースは OpsWorks スタックでは使用できませんが、削除しない限りアカウントに残り、別のスタックに登録できます。

以下の制約があることに注意してください。

- 登録済みの Amazon EBS ボリュームを Windows インスタンスにアタッチすることはできません。
- リソースページでは、スタンダード、PIOPS、スループット最適化 HDD、Cold HDD、または汎用 (SSD) Amazon EBS ボリュームを管理できますが、RAID アレイは管理できません。
- Amazon EBS ボリュームは、XFS フォーマットである必要があります。

  OpsWorks スタックは、ext4 などの他のファイル形式をサポートしていません。Amazon EBS ボリュームの準備に関する詳細については、「Making an Amazon EBS Volume Available for Use」(Amazon EBS ボリュームを使用可能にする) を参照してください。
- 実行中のインスタンスに対して、Amazon EBS ボリュームをアタッチすることもデタッチすることもできません。

  オフラインインスタンスでのみ操作できます。たとえば、使用中のボリュームをスタックに登録してオフラインのインスタンスにアタッチできます。ただし、新しいインスタンスを開始する前に、元のインスタンスを停止して、そのボリュームをデタッチする必要があります。そうしないと、起動プロセスが失敗します。
- 登録されたすべてのリソースは、 でのみ管理されます OpsWorks。これにより、EC2 ボリュームの `DeleteOnTermination` などのリソースライフサイクルプロパティを上書きできます。
- Elastic IP アドレスは、実行中のインスタンスに対してアタッチすることもデタッチすることもできます。

  オンラインのインスタンスでもオフラインのインスタンスでも操作できます。たとえば、使用中のアドレスを登録して実行中のインスタンスに割り当てると、 OpsWorks スタックは自動的にアドレスを再割り当てします。
- リソースの登録または登録の解除を行うには、IAM ポリシーで以下のアクションに対するアクセス権限を付与する必要があります。

Amazon EBS ボリューム	Elastic IP アドレス	Amazon RDS インスタンス
RegisterVolume	RegisterElasticIp	RegisterRdsDbInstance

Amazon EBS ボリューム	Elastic IP アドレス	Amazon RDS インスタンス
UpdateVolume	UpdateElasticIp	UpdateRdsDbInstance
DeregisterVolume	DeregisterElasticIp	DeregisterRdsDbInstance

Manage 権限レベルは、これらのアクションのすべてに対してアクセス許可を付与します。Manage ユーザーが特定リソースの登録や登録解除をできなくするには、該当するアクションへのアクセス許可を拒否するように IAM ポリシーを編集します。詳細については、「セキュリティと権限」を参照してください。

トピック

- スタックにリソースを登録する
- リソースのアタッチと移動を行う
- リソースをデタッチする
- リソースの登録を解除する

スタックにリソースを登録する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Amazon EBS ボリュームまたは Elastic IP アドレスは、インスタンスにアタッチする前に、スタックに登録する必要があります。 OpsWorks スタックがスタックのリソースを作成すると、スタックに自動的に登録されます。外部で作成されたリソースを使用する場合は、明示的にリソースを登録する必要があります。次の点に注意してください。

- リソースは、一度に 1 つのスタックにしか登録できません。
- スタックを削除すると、 OpsWorks Stacks はすべてのリソースの登録を解除します。

トピック

- スタックを使用して Amazon EBS ボリュームを登録する
- スタックに Elastic IP アドレスを登録する
- スタックに Amazon RDS インスタンスを登録する

スタックを使用して Amazon EBS ボリュームを登録する

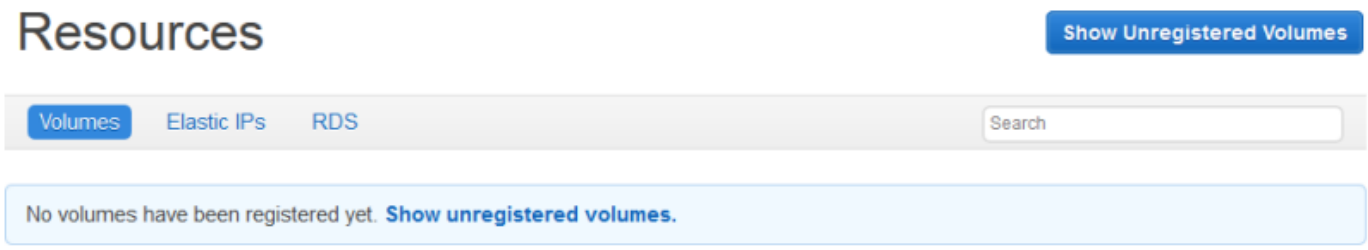
> **Note**
>
> このリソースは Linux スタックにのみ使用できます。Windows スタックを使用して Amazon EBS ボリュームを登録できますが、インスタンスにアタッチすることはできません。

[Resources (リソース)] ページを使用して、Amazon EBS ボリュームをスタックに登録できます。このとき、次のような制限があります。

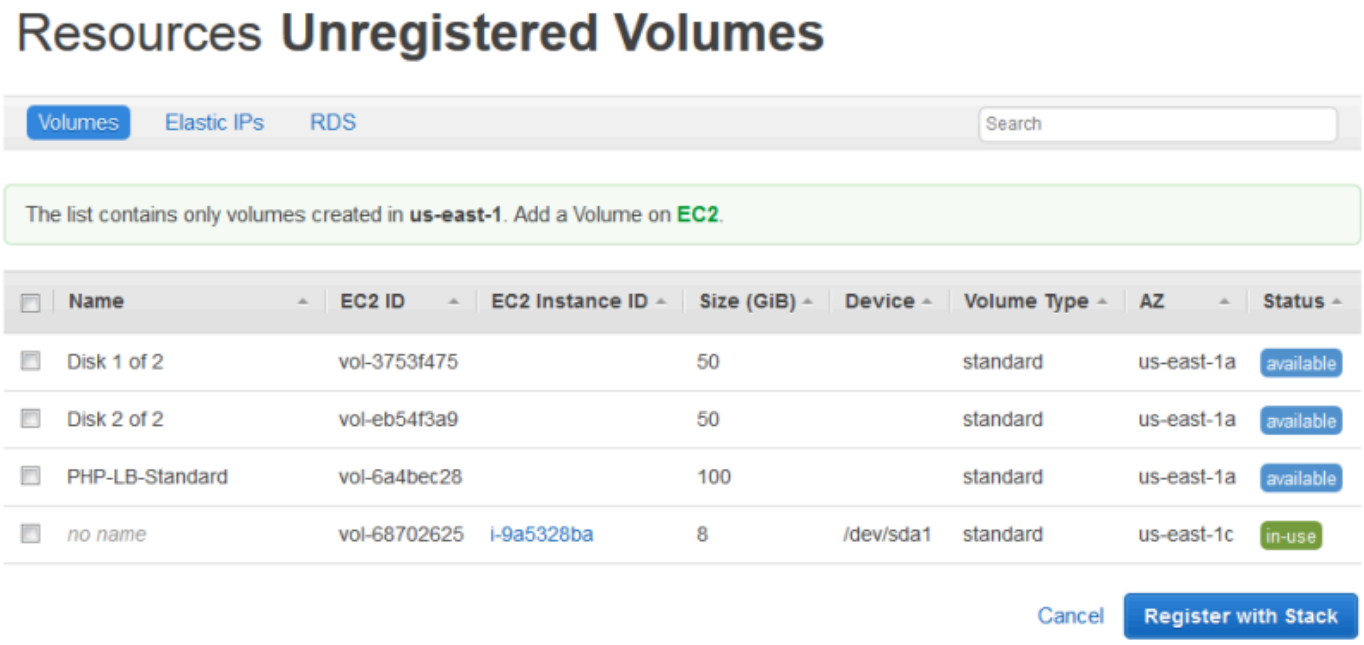
- アタッチされた非ルート Amazon EBS ボリュームは、スタンダード 、スループット最適化 HDD、Cold HDD 、PIOPS、または汎用 (SSD) である必要がありますが、RAID アレイである必要はありません。最大および最小ボリュームサイズの詳細については、このガイドの「EBS ボリューム」を参照してください。
- ボリュームは、XFS フォーマットである必要があります。
- OpsWorks スタックは、非ルート Amazon EBS ボリュームに対して、ext4 (fourth extended file system) などその他のファイル形式をサポートしません。Amazon EBS ボリュームの準備に関する詳細については、「Making an Amazon EBS Volume Available for Use」(Amazon EBS ボリュームを使用可能にする) を参照してください。そのトピックの例では、ext4 ベースのボリュームを作成する方法について説明していますが、XFS ベースのボリュームと同じ手順に従うことができます。

Amazon EBS ボリュームを登録するには

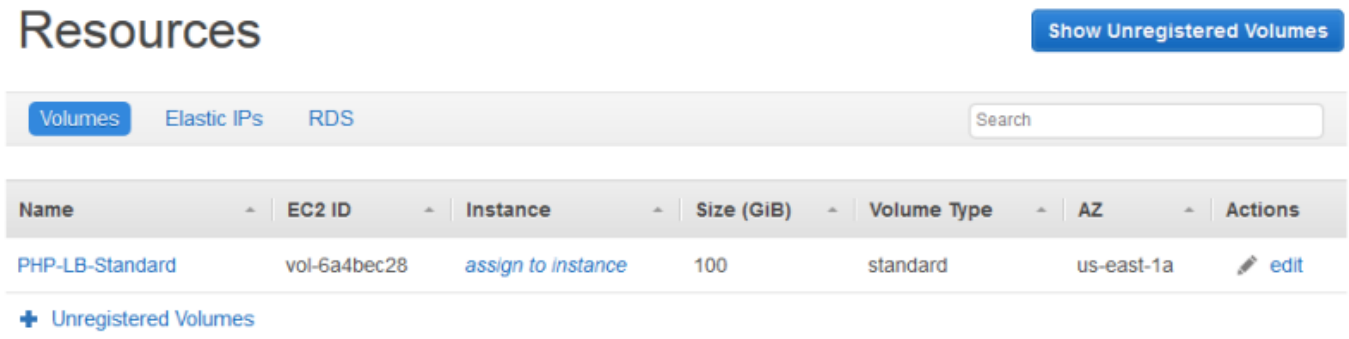
1. 目的のスタックを開き、ナビゲーションペインで、[Resources] をクリックします。
2. [Volumes] (ボリューム) をクリックして、使用可能な Amazon EBS ボリュームを表示します。次の図に示すように、最初は、スタックに登録されているボリュームはありません。



3. [Show Unregistered Volumes] (未登録のボリュームの表示) をクリックして、スタックのリージョンおよびスタックの VPC (該当する場合)にあるアカウントの Amazon EBS ボリュームを表示します。[Status] 列には、ボリュームが使用できるかどうかが示されます。[ボリュームタイプ] には、ボリュームがスタンダード (`standard`)、汎用 SSD (gp2)、PIOPS (io1、後ろの括弧内にディスクごとの IOPS 値を表示)、スループット最適化 HDD (st1)、または Cold HDD (sc1) のいずれであるかを示します。



4. 登録するボリュームを選択して、[Register to Stack] をクリックします。[Resources] ページには、新規に登録したボリュームのリストが表示されます。



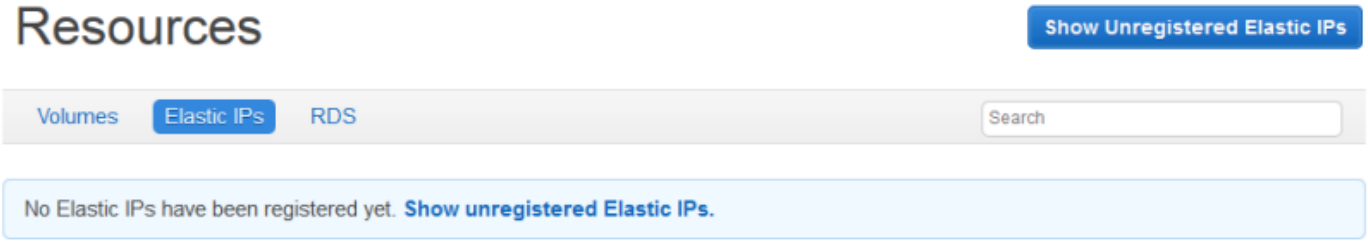
ボリュームを追加登録する場合は、[Show Unregistered Volumes] または [+ Unregistered Volumes] をクリックし、同じ手順を繰り返します。

スタックに Elastic IP アドレスを登録する

Elastic IP アドレスを登録するには、次の手順を使用します。

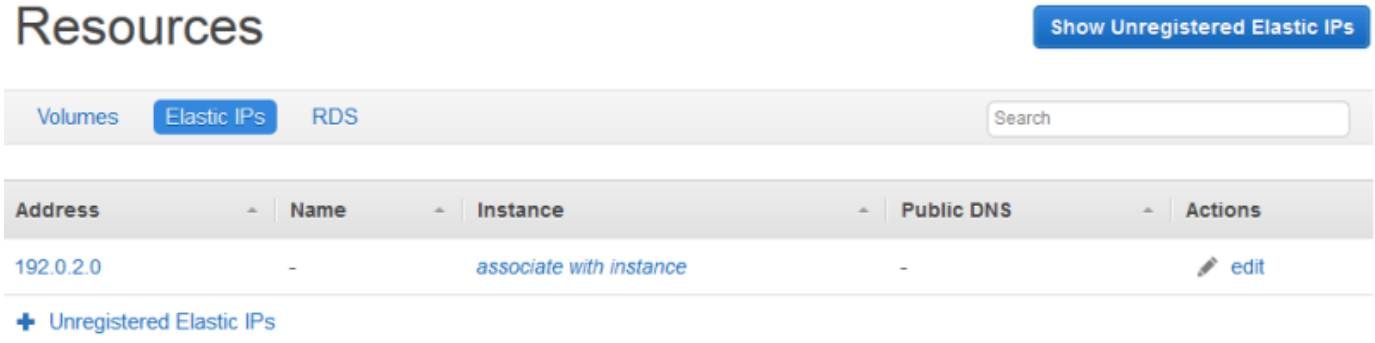
Elastic IP アドレスを登録するには

1. スタックの [Resources] ページを開き、[Elastic IPs] をクリックして、使用可能な Elastic IP アドレスを表示します。次の図に示すように、最初は、スタックに登録されているアドレスはありません。



2. [Show Unregistered Elastic IPs] をクリックして、スタックのリージョンにあるアカウントで使用できる Elastic IP アドレスを表示します。

3. 登録するアドレスを選択して、[Register to Stack] をクリックします。これによって、[Resources] ページに戻り、新規に登録されたアドレスのリストが表示されます。



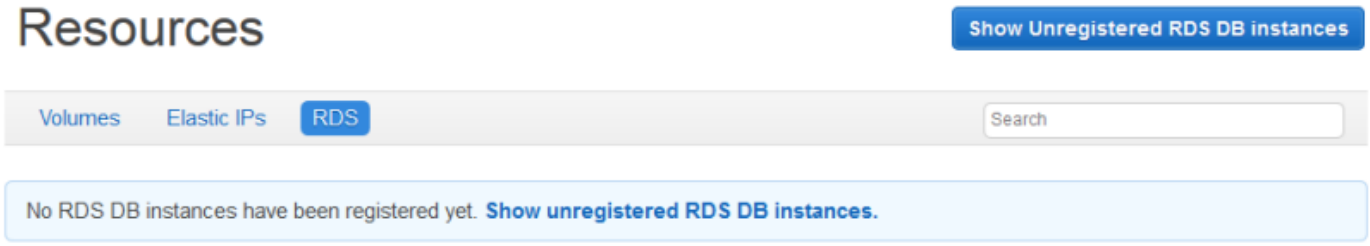
アドレスを追加登録する場合は、[Show Unregistered Elastic IPs] または [+ Unregistered Elastic IPs] をクリックし、同じ手順を繰り返します。

スタックに Amazon RDS インスタンスを登録する

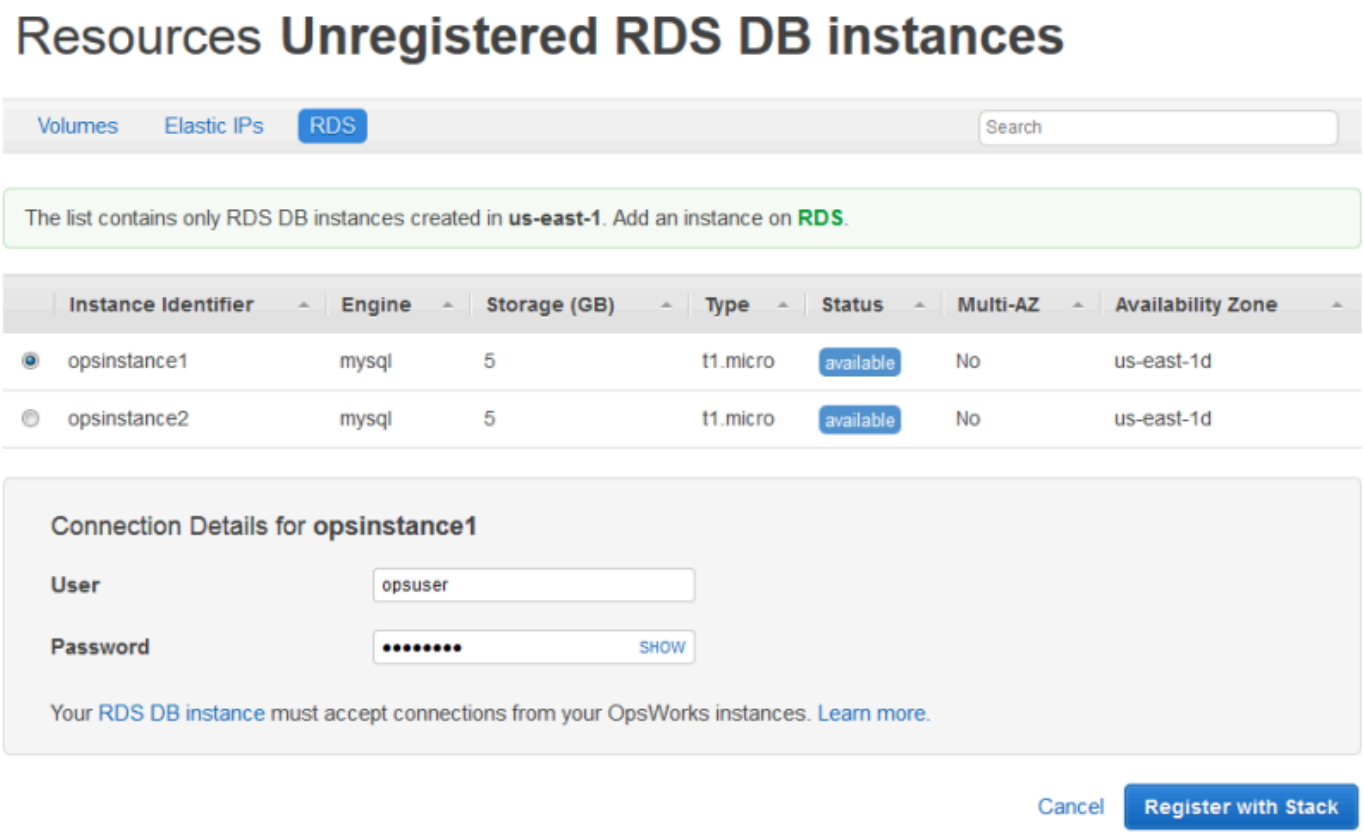
Amazon RDS インスタンスを登録するには、以下の手順を使用します。

Amazon RDS インスタンスを登録するには

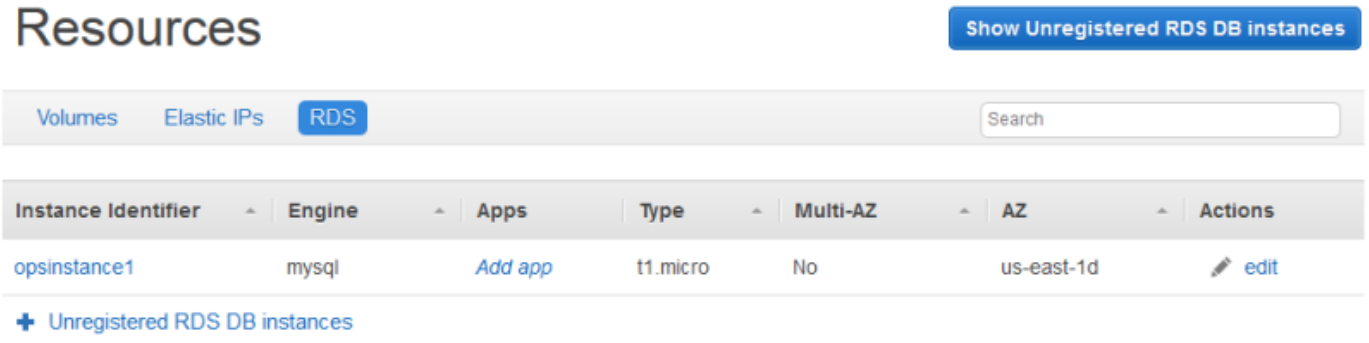
1. スタックの [Resources] (リソース) ページを開き、[RDS] をクリックして、使用できる Amazon RDS インスタンスを表示します。次の図に示すように、最初は、スタックに登録されたインスタンスはありません。



2. [Show Unregistered RDS DB instances] (登録されていないRDS DBインスタンスの表示) をクリックして、スタックのリージョンにあるアカウントで使用できる Amazon RDS インスタンスを表示します。



3. 登録するインスタンスを選択し、[User] および [Password] にそのインスタンスのマスターユーザー値およびマスターパスワード値を入力します。次に、[Register to Stack] をクリックします。これによって、[Resources] ページに戻り、新規に登録されたインスタンスのリストが表示されます。



> **Important**
>
> Amazon RDS インスタンスを登録するときに使用するユーザーとパスワードが、有効なユーザーとパスワードに確実に対応していることを確実にする必要があります。対応していない場合、アプリケーションからインスタンスに接続できません。

インスタンスを追加登録する場合は、[Show Unregistered RDS DB instances] または [+ Unregistered RDS DB instances] をクリックして、同じ手順を繰り返します。スタックで Amazon RDS OpsWorks インスタンスを使用する方法の詳細については、「」を参照してくださいAmazon RDS サービスレイヤー。

> **Note**
>
> Amazon RDS インスタンスは、[Layers] (レイヤー) ページを通じて登録することもできます。詳細については、「Amazon RDS サービスレイヤー」を参照してください。

リソースのアタッチと移動を行う

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

リソースは、スタックに登録されると、スタックのインスタンスの 1 つにアタッチできるようになります。アタッチされたリソースは、あるインスタンスから別のインスタンスに移動することもできます。次の点に注意してください。

- Amazon EBS ボリュームをアタッチまたは移動する場合、オペレーションに関わるインスタンスはオフラインになっている必要があります。該当するインスタンスが [Resources] ページにない場合には [Instances] ページに移動して、インスタンスを停止します。インスタンスを停止すると、[Resources] ページに戻って、リソースのアタッチまたは移動ができます。
- Elastic IP アドレスをアタッチまたは移動すると、インスタンスをオンラインやオフラインにすることができます。
- インスタンスを削除しても、アタッチされているリソースはスタックに登録されたまま残っています。このリソースは別のインスタンスにアタッチすることができます。また、このリソースがもう必要ない場合には、リソースの登録を解除できます。

トピック

- Amazon EBS ボリュームをインスタンスに割り当てる
- Elastic IP アドレスをインスタンスに関連付ける
- Amazon RDS インスタンスをアプリケーションにアタッチする

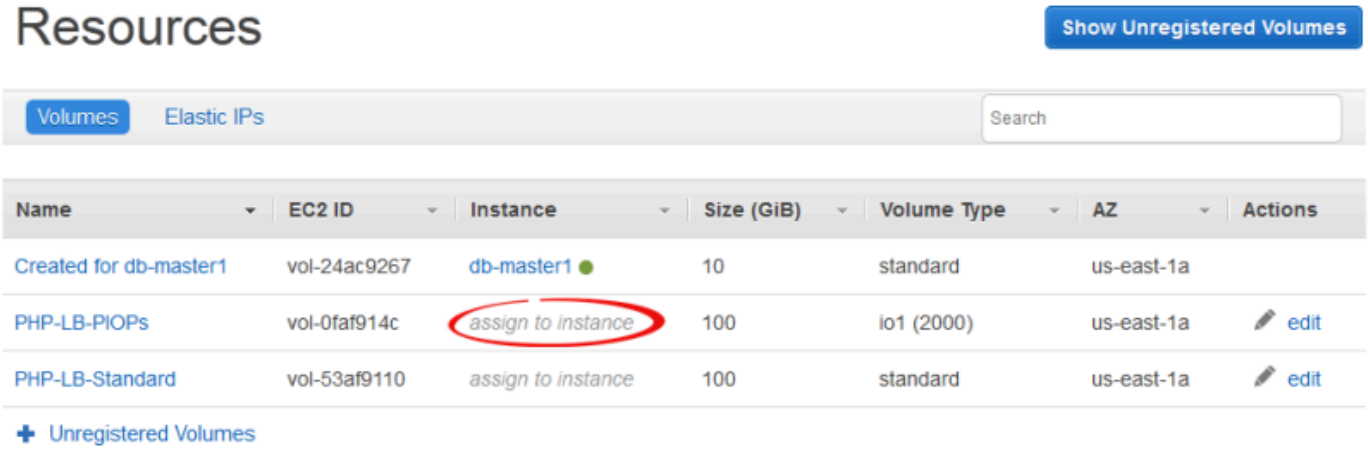
Amazon EBS ボリュームをインスタンスに割り当てる

> **Note**
>
> Windows インスタンスに Amazon EBS ボリュームを割り当てることはできません。

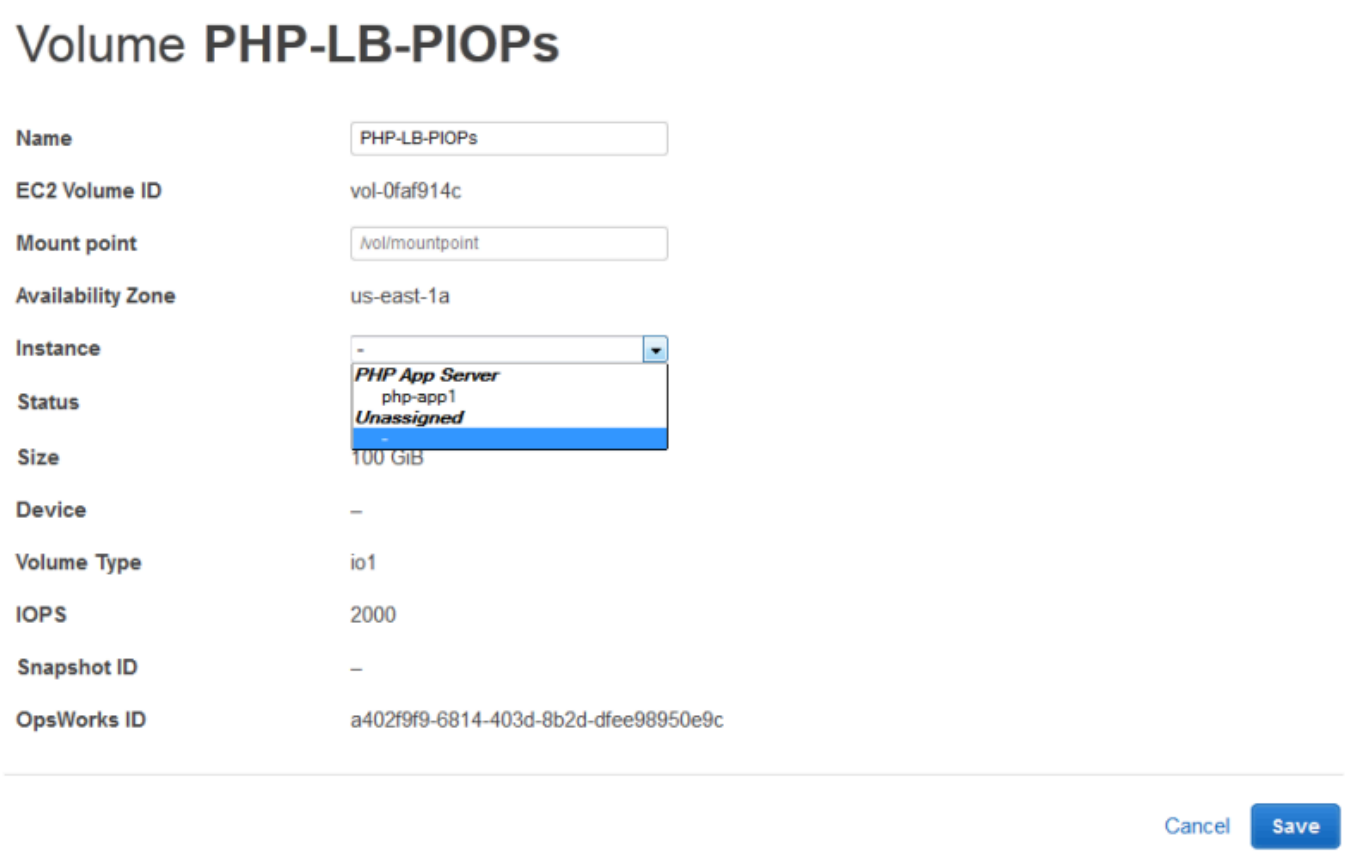
登録されている Amazon EBS ボリュームをインスタンスに割り当てて、あるインスタンスから別のインスタンスに移動することができますが、両方のインスタンスがいずれもオフラインである必要があります。

インスタンスにAmazon EBS ボリュームを割り当てるには

1. [Resources] ページで、該当するボリュームの [Instance] 列で [assign to instance] をクリックします。



2. ボリュームの詳細ページで、適切なインスタンスを選択し、ボリューム名とマウントポイントを指定します。次に、[Save] をクリックしてボリュームをインスタンスにアタッチします。



> **Important**
>
> 使用中の外部ボリュームをユーザーのインスタンスに割り当てた場合には、Amazon EC2 コンソール、API、または CLI を使用して、元のインスタンスに対するボリュームの割り当てを解除する必要があります。そうしないと、起動プロセスが失敗します。

詳細ページを使用して、割り当てられた Amazon EBS ボリュームをスタックの別のインスタンスに移動することもできます。

Amazon EBS ボリュームを別のインスタンスに移動するには

1. 両方のインスタンスがオフライン状態になっていることを確認します。
2. [Resources] (リソース) ページで、[Volumes] (ボリューム) をクリックして、ボリュームの [Actions] (アクション) 列で [edit] (編集) をクリックします。
3. 次のいずれかを行います。

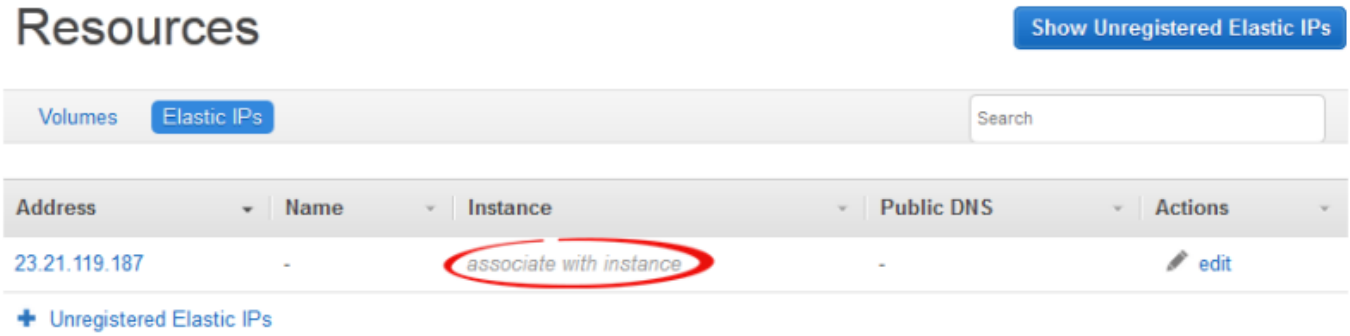
- ボリュームを同じスタックの別のインスタンスに移動するには、[Instance] リストから移動するインスタンスを選択し、[Save] をクリックします。
- ボリュームを別のスタックのインスタンスに移動するには、ボリュームの登録を解除して、新しいスタックにボリュームを登録し、さらに新しいインスタンスにボリュームをアタッチします。

Elastic IP アドレスをインスタンスに関連付ける

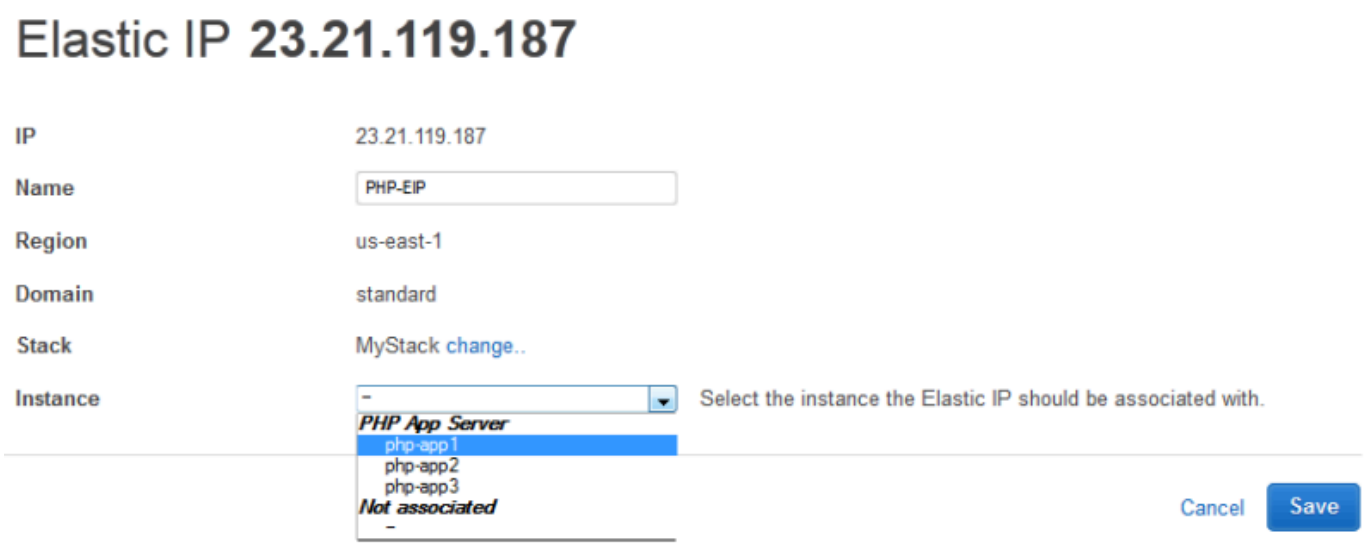
登録されている Elastic IP アドレスをインスタンスに関連付けて、あるインスタンスから別のインスタンス (他のスタックのインスタンスを含む) に移動することができます。この場合のインスタンスは、オンラインでもオフラインでもかまいません。

Elastic IP アドレスをインスタンスに関連付けるには

1. [Resources] ページで、該当するアドレスの [Instance] 列で [associate with instance] をクリックします。



2. アドレスの詳細ページで、目的のインスタンスを選択し、アドレスの名前を指定します。次に、[Save] をクリックして、アドレスをインスタンスに関連付けます。



> **Note**
>
> Elastic IP アドレスが現在別のオンラインインスタンスに関連付けられている場合、OpsWorks Stacks はアドレスを新しいインスタンスに自動的に再割り当てします。

詳細ページを使用して、関連付けられた Elastic IP アドレスを別のインスタンスに移動することもできます。

Elastic IP アドレスを別のインスタンスに移動するには

1. [Resources] ページで、[Elastic IPs] をクリックし、アドレスの [アクション] 列で [編集] をクリックします。
2. 次のいずれかを行います。
   - アドレスを同じスタックの別のインスタンスに移動する場合は、[Instance] リストから目的のインスタンスを選択し、[Save] をクリックします。
   - アドレスを別のスタックのインスタンスに移動するには、スタックの設定の変更をクリックすると、利用可能なスタックのリストが表示されます。[Stack] リストからスタックを選択し、[Instance] リストからインスタンスを選択します。次に、[Save] をクリックします。

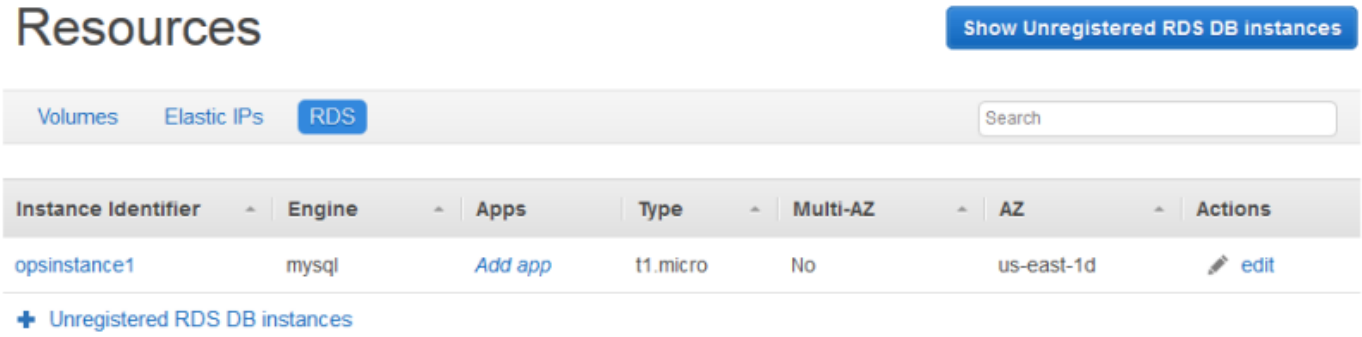
アドレスをアタッチまたは移動すると、 OpsWorks スタックは Configure ライフサイクルイベントをトリガーして、スタックのインスタンスに変更を通知します。

Amazon RDS インスタンスをアプリケーションにアタッチする

Amazon RDS インスタンスを 1 つ以上のアプリケーションにアタッチすることができます。

Amazon RDS インスタンスをアプリケーションにアタッチするには

1. [Resources] ページで、目的のインスタンスの [Apps] 列で [Add app] をクリックします。



2. [Add App] (アプリケーションの追加) ページを使用して、Amazon RDS インスタンスをアタッチします。詳細については、「アプリケーションの追加」を参照してください。

Amazon RDS は、複数のアプリケーションにアタッチできるため、あるアプリケーションから別のアプリケーションにインスタンスを移動するための特別な手順はありません。移動元のアプリケー

ションを編集して RDS インスタンスを削除し、移動先のアプリケーションを編集して RDS インスタンスを追加するだけです。詳細については、「アプリケーションの編集」を参照してください。

リソースをデタッチする

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

アタッチされているリソースがもう必要ない場合には、デタッチすることができます。このリソースはスタックに登録されたまま残るため、どこにでもアタッチすることができます。

トピック

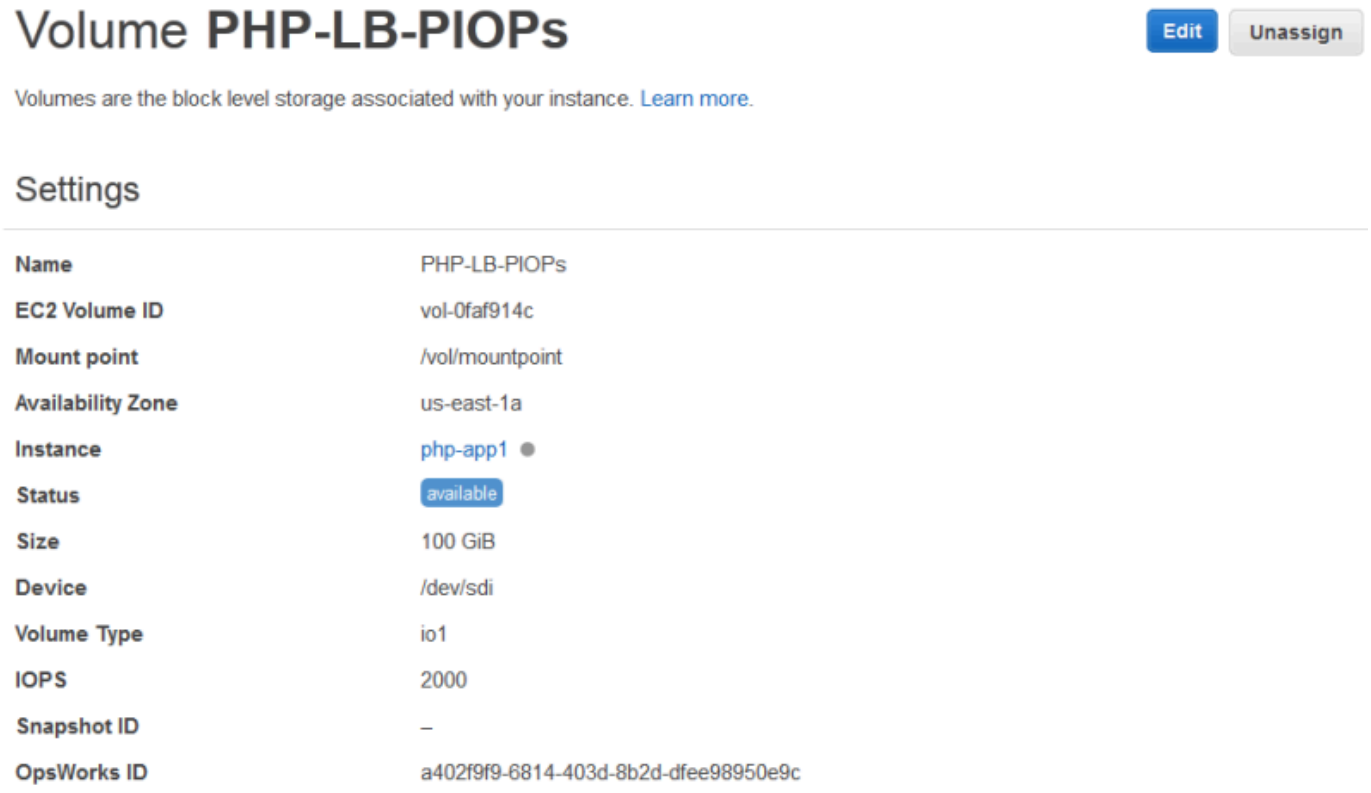
- Amazon EBS ボリュームの割り当て解除
- Elastic IP アドレスの関連付けを解除する
- Amazon RDS インスタンスのデタッチする

Amazon EBS ボリュームの割り当て解除

Amazon EBS ボリュームのインスタンスからの割り当てを解除するには、次の手順を使用します。

Amazon EBS ボリュームの割り当てを解除するには

1. インスタンスがオフライン状態になっていることを確認します。
2. [Resources] ページで、[Volumes] をクリックし、ボリューム名をクリックします。
3. ボリュームの詳細ページで、[Unassign] をクリックします。

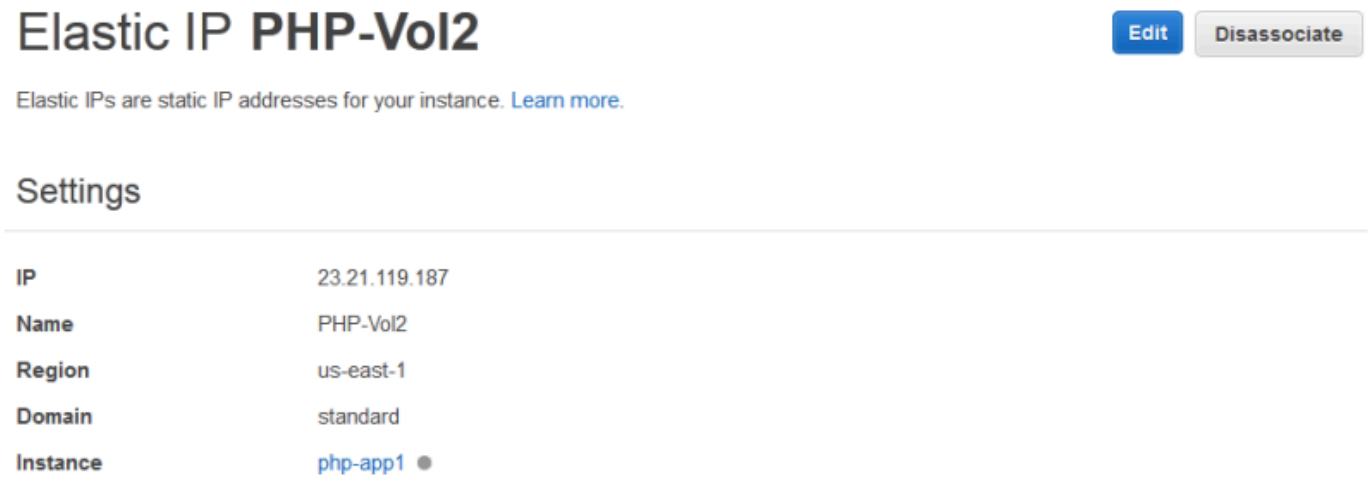


Elastic IP アドレスの関連付けを解除する

インスタンスへの Elastic IP アドレスの関連付けを解除するには、次の手順を使用します。

Elastic IP アドレスの関連付けを解除するには

1. [Resources] ページで、[Elastic IPs] をクリックし、アドレスの[アクション] 列で [編集] をクリックします。
2. アドレスの詳細ページで [Disassociate] をクリックします。



アドレスの関連付けを解除すると、 OpsWorks スタックは Configure ライフサイクルイベントをトリガーして、スタックのインスタンスに変更を通知します。

Amazon RDS インスタンスのデタッチする

アプリケーションから Amazon RDS をデタッチするには、以下の手順を使用します。

Amazon RDS インスタンスをデタッチするには

1. [Resources] ページで、[RDS] をクリックし、[Apps] 列にある目的のアプリケーションをクリックします。
2. [Edit] をクリックし、アプリケーション設定を編集してインスタンスをデタッチします。詳細については、「アプリケーションの編集」を参照してください。

> **Note**
>
> この手順で、1 つのアプリケーションから Amazon RDS をデタッチします。インスタンスが複数のアプリケーションにアタッチされている場合には、各アプリケーションに対してこの手順を繰り返します。

リソースの登録を解除する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

スタックにリソースを登録しておく必要がない場合には、リソースの登録を解除することができます。登録を解除しても、アカウントからリソースは削除されません。そのリソースはそのまま残り、別のスタックに登録することも、 OpsWorks スタックの外部で使用することもできます。リソースを完全に削除するには、2 つの方法があります。

- Elastic IP または Amazon EBS のリソースがインスタンスにアタッチされている場合、インスタンスを削除する際にリソースを削除することができます。

  [Instances] (インスタンス) ページに移動し、インスタンスの [Actions] (アクション) 列で [delete] (削除) をクリックし、その後 [Delete instance's EBS volumes] (インスタンスのEBSボリュームを削除) または [Delete the instance's Elastic IP] (インスタンスのElastic IPを削除) を選択します。
- リソースの登録を解除し、さらに、Amazon EC2 か Amazon RDS のコンソール、API、または CLI を使用してリソースを削除します。

トピック

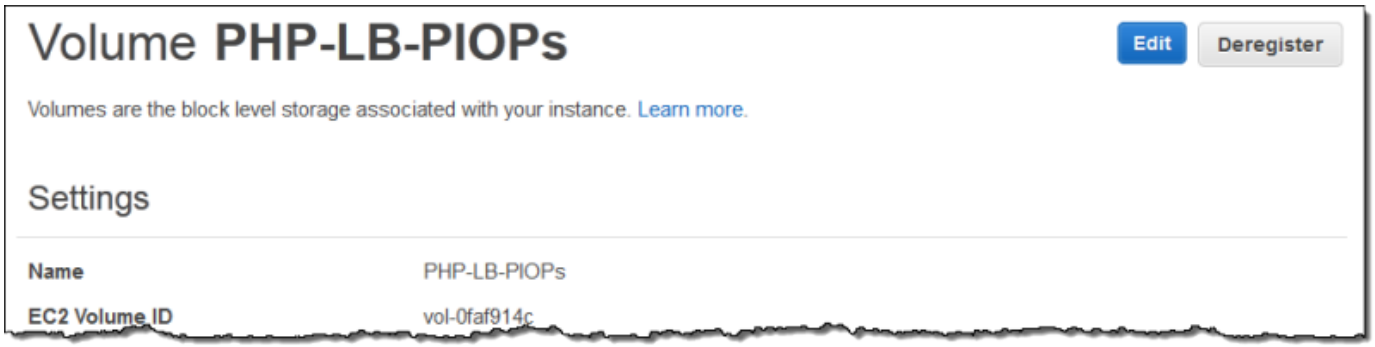
- Amazon EBS ボリュームの登録を解除する
- Elastic IP アドレスの登録を解除する
- Amazon RDS インスタンスの登録を解除する

Amazon EBS ボリュームの登録を解除する

Amazon EBS ボリュームの登録を解除するには、以下の手順を使用します。

Amazon EBS ボリュームの登録を解除するには

1. ボリュームがインスタンスにアタッチされている場合には、「Amazon EBS ボリュームの割り当て解除」の記載に従って割り当てを解除します。
2. [Resources] ページで、[Name] 列のボリューム名をクリックします。
3. ボリュームの詳細ページで、[Deregister] をクリックします。

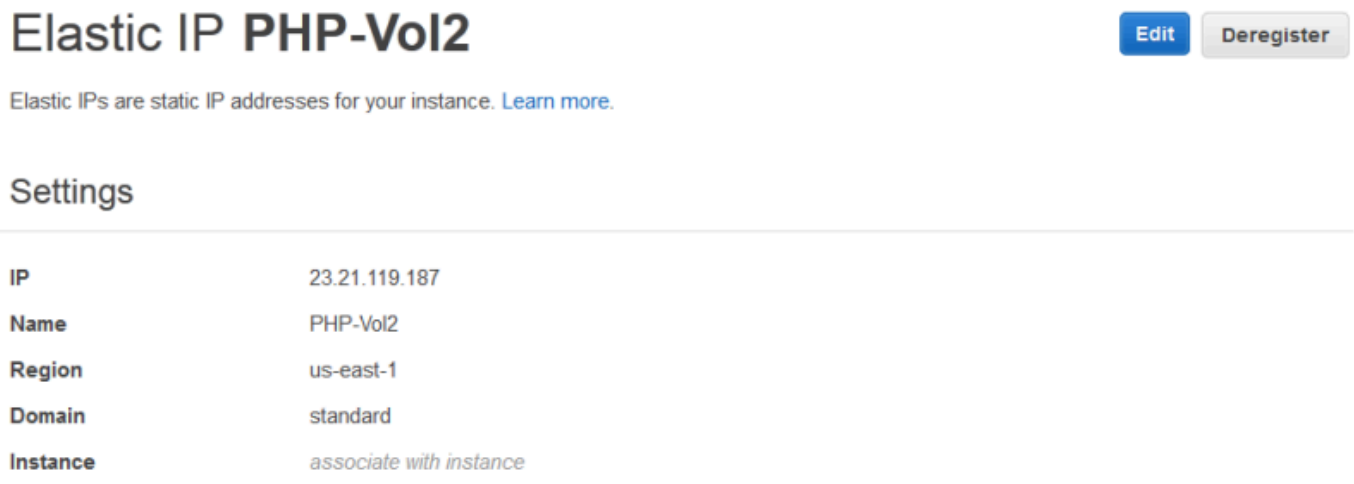


Elastic IP アドレスの登録を解除する

Elastic IP アドレスの登録を解除するには、次の手順を使用します。

Elastic IP アドレスの登録を解除するには

1. アドレスがインスタンスに関連付けられている場合は、「Elastic IP アドレスの関連付けを解除する」の記載に従って、関連付けを解除します。
2. [Resources] ページで、[Elastic IPs] をクリックし、[Address] 列で IP アドレスをクリックします。
3. アドレスの詳細ページで、[Deregister] をクリックします。



> **Note**
>
> 単に、別のスタックに Elastic IP アドレスを登録する場合でも、現在のスタックへの登録を解除してから新しいスタックに登録する必要があります。ただし、アタッチされている Elastic IP アドレスは、別のスタックのインスタンスに直接移動することができます。詳細については、「リソースのアタッチと移動を行う」を参照してください。

Amazon RDS インスタンスの登録を解除する

Amazon RDS インスタンスの登録を解除するには、以下の手順を使用します。

Amazon RDS インスタンスの登録を解除するには

1. インスタンスがアプリケーションに関連付けられている場合は、「リソースをデタッチする」の記載に従って、インスタンスをデタッチします。
2. [Resources] ページで、[RDS] をクリックし、さらにインスタンス名をクリックします。
3. インスタンスの詳細ページで、[Deregister] をクリックします。

タグ

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

タグによって、Chef 11.10、Chef 12、Chef 12.2 のスタックでのリソースのグループ化と、AWS Billing and Cost Managementでこれらのリソースを使用するコストの追跡が容易になります。

スタックおよびレイヤーレベルでタグを適用することができます。タグを作成する場合、タグ付けされた構造内すべてのリソースにタグを適用することになります。例えば、あるレイヤーにタグを適用すると、そのレイヤーのすべてのインスタンス、Amazon EBS ボリューム (ルートを除く)、または Elastic Load Balancing ロードバランサーにタグが適用されます。タグは現在、インスタンスのルートまたはデフォルトの EBS ボリュームには適用できません。

タグは、 スタックのスタックまたはレイヤーに割り当てるキーと値のペア OpsWorks です。タグを作成した後、Management コンソールを開いてユーザー定義のタグを有効化します。タグをアクティブ化し、それらを使用して OpsWorks スタックリソースのコストを追跡および管理する方法の詳細については、請求情報とコスト管理ユーザーガイドの「コスト配分タグの使用」と「ユーザー定義のコスト配分タグのアクティブ化」を参照してください。

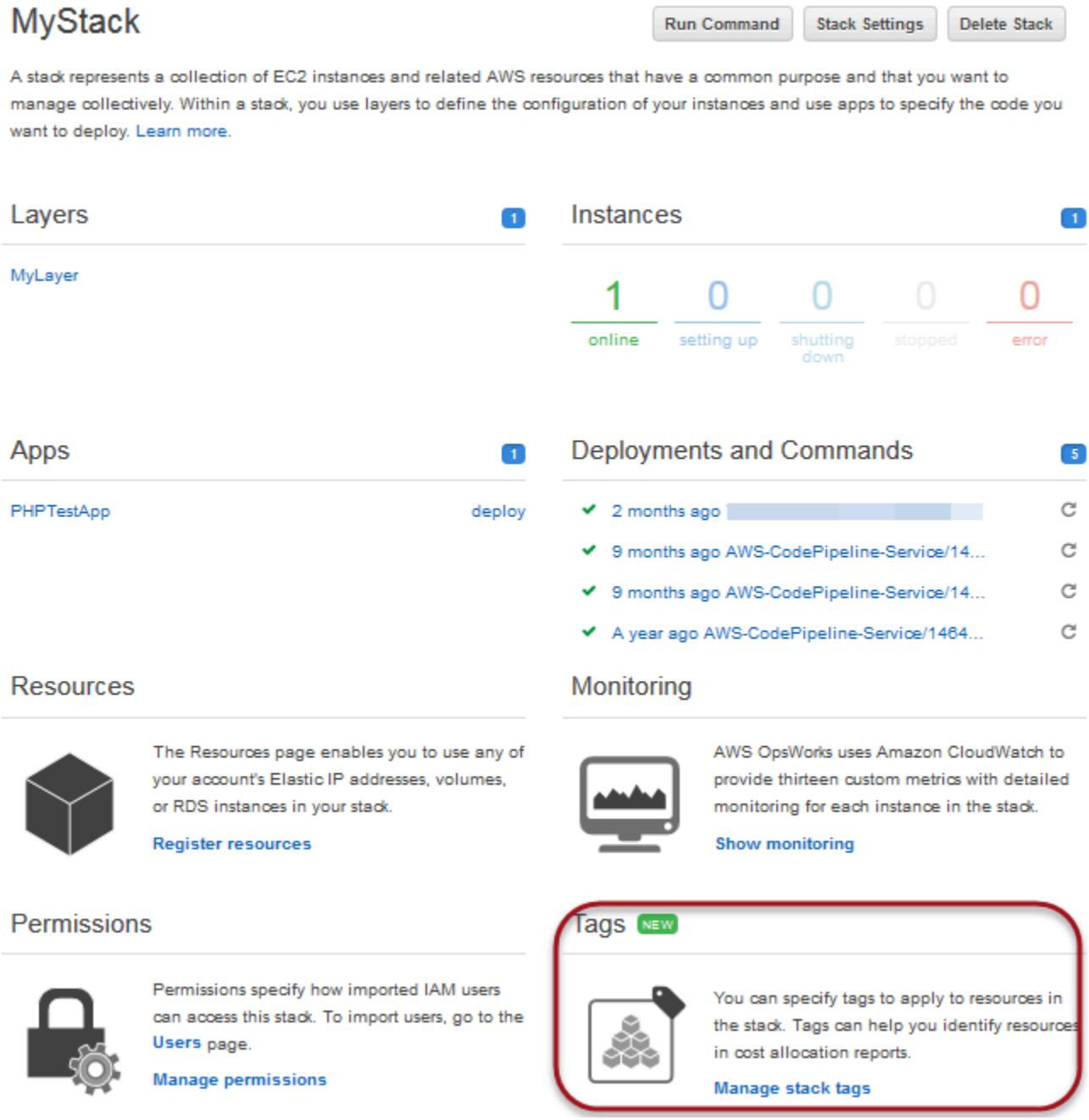
タグは、 OpsWorks スタックのカスタム属性と同様の方法で機能します。スタックに適用するタグは、スタックの各レイヤーによって継承されます。レイヤーレベルでは、継承されたタグの値 (キー名ではなく) を上書きし、新しいレイヤー固有のタグを追加できます。 は、結果のタグセットをレイヤー内のすべてのリソース OpsWorks に適用します。リソースを新規作成または既存のリソースをレイヤーに割り当てるとき、そのレイヤーの新しいリソースは、同じタグでタグ付けされます。

トピック

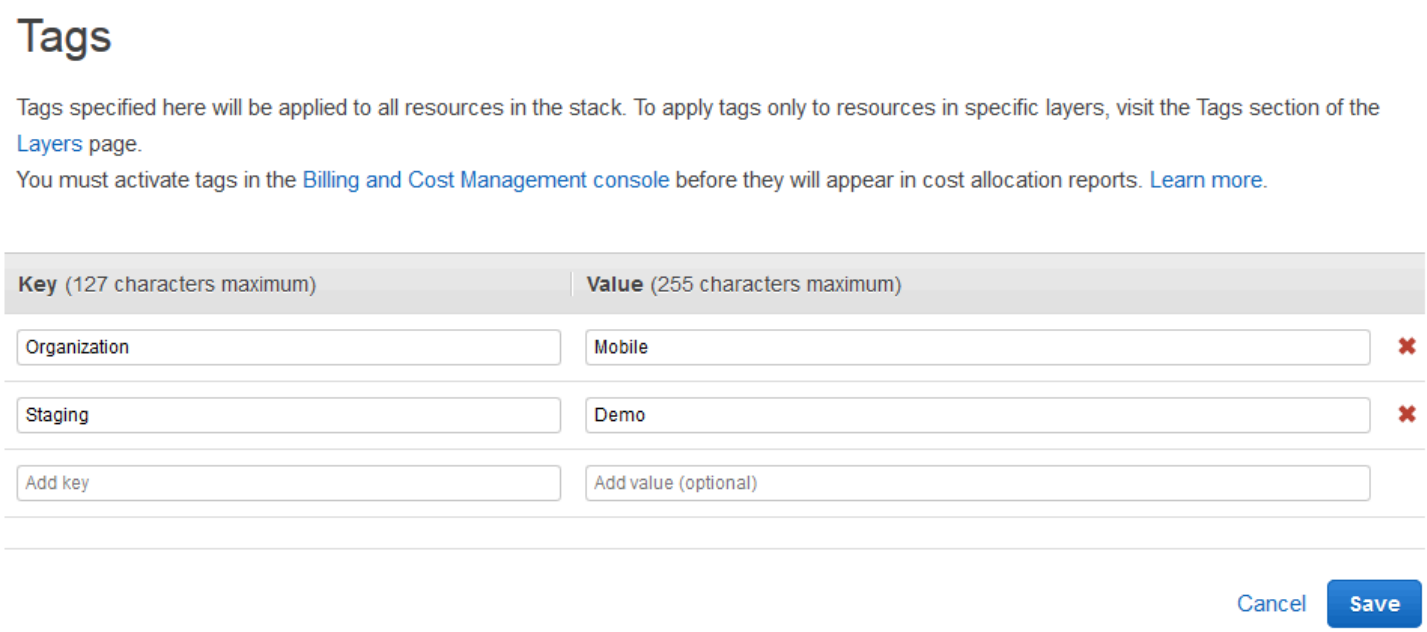
- スタックレベルでタグを設定
- レイヤーレベルでのタグの設定
- を使用したタグの管理 AWS CLI
- タグの制限

スタックレベルでタグを設定

スタックレベルでは、スタックのホームページで Tags を選択してタグを追加および管理できます。

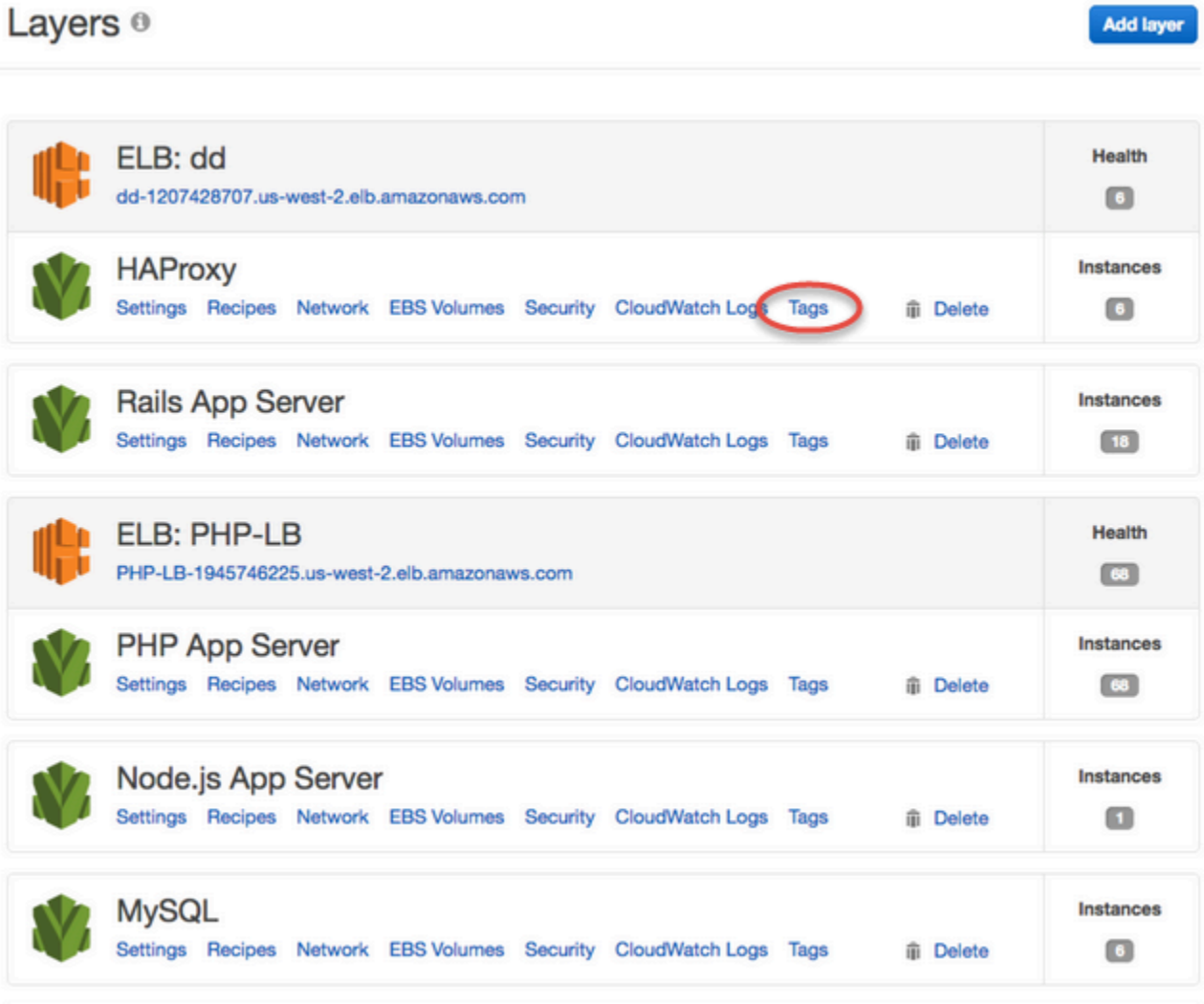


Tags ページで、タグをキーと値のペアとして追加します。次のスクリーンショットでは、タグの例をいくつか示しています。タグを削除するには、キーと値のペアの右側にある赤色の X を選択します。

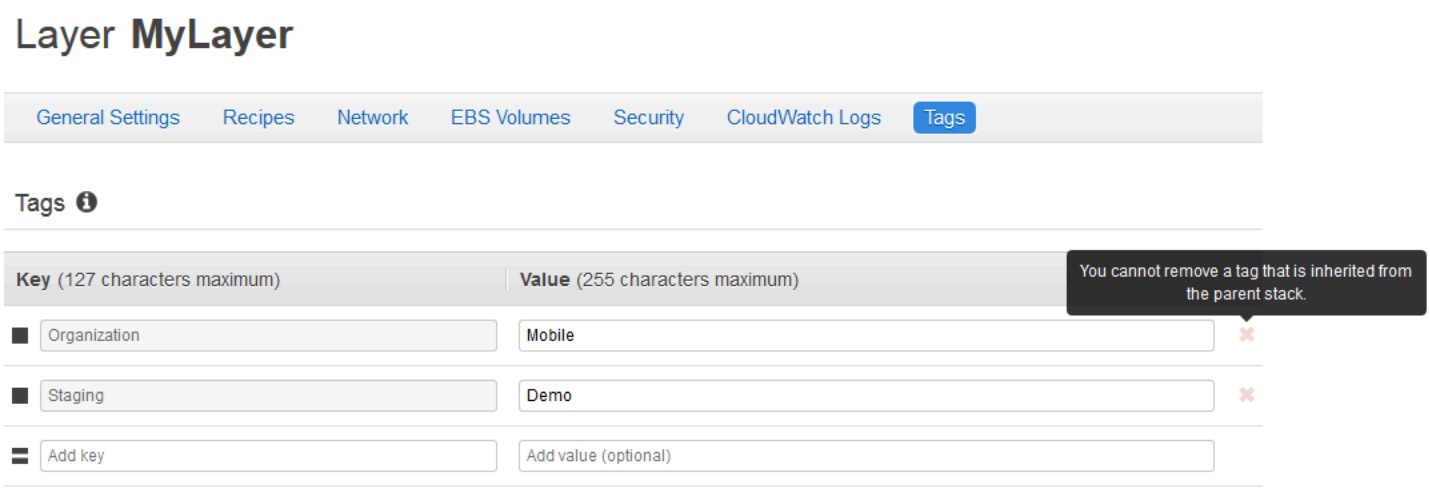


レイヤーレベルでのタグの設定

レイヤーレベルで、[Tags] (タグ) タブを選択してタグを設定します。このタブは、レイヤーのホームページ、および各レイヤーのホームページにあります。



レイヤーレベルでタグを変更または追加するときに、親スタックレベルで追加されたタグはレイヤーとそのリソースによって継承されることに注意してください。継承されたタグの値を変更することはできますが、キー名の変更や継承されたタグを削除することはできません。スタック設定で、キー名を変更または親スタックから継承されたタグを削除します。次のスクリーンショットでは、スタックレベルから継承されたタグの例を示しています。継承されたタグは灰色で表示されます。



スタックへのタグの追加については、「新しいスタックを作成する」を参照してください。レイヤーへのタグの追加については、「OpsWorks レイヤーの構成を編集する」を参照してください。

を使用したタグの管理 AWS CLI

AWS CLI コマンドを使用して、スタックレベルとレイヤーレベルでタグを追加および削除することもできます。のダウンロードとインストールの詳細については AWS CLI、「コマンドラインインターフェイスのインストール AWS」を参照してください。タグ付けしたいスタックがデフォルトのリージョンにない場合は、コマンドに `--region` パラメータを忘れずに追加してください。レイヤー ARNs は現在 に表示されません AWS マネジメントコンソール。レイヤーの ARN を取得するには、describe-layers コマンドを実行します。

を使用してタグを追加するには AWS CLI

- AWS CLI コマンドプロンプトで、次のコマンドを入力して stack*_or_layer_ARN* を置き換え、キーと値のペアタグを指定し、Enter キーを押します。二重引用符はバックスラッシュで エスケープされます。

  ```
  aws opsworks tag-resource --resource-arn stack_or_layer_ARN --tags "{\"key\":
  \"value\",\"key\":\"value\"}"
  ```

  以下に例を示します。

  ```
  aws opsworks tag-resource --resource-arn arn:aws:opsworks:us-
  east-2:800000000003:stack/500b99c0-ec00-4cgg-8a0d-1000000jjd1b --tags "{\"Stage\":
  \"Production\",\"Organization\":\"Mobile\"}"
  ```

を使用してタグを削除するには AWS CLI

- AWS CLI コマンドプロンプトで、次のように入力し、Enter キーを押します。

```
aws opsworks untag-resource --resource-arn stack_or_layer_ARN --tag-keys "[\"key\",
\"key\"]"
```

タグを削除するには、削除したいタグのキーのみを指定します。以下に例を示します。

```
aws opsworks untag-resource --resource-arn arn:aws:opsworks:us-
east-2:800000000003:stack/500b99c0-ec00-4cgg-8a0d-1000000jjd1b --tag-keys "[\"Stage
\",\"Organization\"]"
```

> **Note**
>
> レイヤーから継承されたタグ (親スタックレベルで追加されたタグ) を削除することはできません。代わりに、スタックから継承されたタグを削除します。

タグの制限

タグを作成するときは、次の制限事項に留意してください。

- OpsWorks スタックは、親レベルから継承されたユーザー定義タグを含め、スタックレベルとレイヤーレベルでユーザー定義タグの数を 40 に制限します。これにより、 が付加されたデフォルトタグとopsworks:、他の AWS プロセスによって設定されたタグに 10 個のスロットが残ります。リソースでは、 によって作成されたユーザー定義タグとデフォルトタグの両方を含め、最大 50 個のタグを使用できます AWS。
- タグキーの先頭を、**aws:**、**opsworks:** または **rds:** にすることはできません。**Name** は スタックによって予約されているため、タグキー**Name**として **name**または OpsWorks を使用しないでください。
- キーは最大 127 文字で、Unicode 文字、区切り文字、数字、または + - = . _ : / の特殊文字のみを含めることができます。
- 値は最大 255 文字で、Unicode 文字、数字、区切り文字、または + - = . _ : / の特殊文字のみを含めることができます。

モニタリング

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

スタックは次の方法で監視できます。

- OpsWorks スタックは Amazon CloudWatch を使用して、スタック内の各インスタンスの詳細モニタリングを含む 13 のカスタムメトリクスを提供します。
- OpsWorks スタックは と統合 AWS CloudTrail され、すべての スタック API OpsWorks コールをログに記録し、データを Amazon S3 バケットに保存します。
- Amazon CloudWatch Logs を使用して、スタックのシステム、アプリケーション、およびカスタムログをモニタリングできます。

トピック

- Amazon CloudWatch を使用した Stacks のモニターリング
- を使用した OpsWorks スタック API コールのログ記録 AWS CloudTrail
- スタックでの Amazon CloudWatch Logs OpsWorks の使用
- Amazon CloudWatch Events を使用したスタックのモニタリング

Amazon CloudWatch を使用した Stacks のモニターリング

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックは Amazon CloudWatch (CloudWatch) を使用してスタックをモニタリングします。

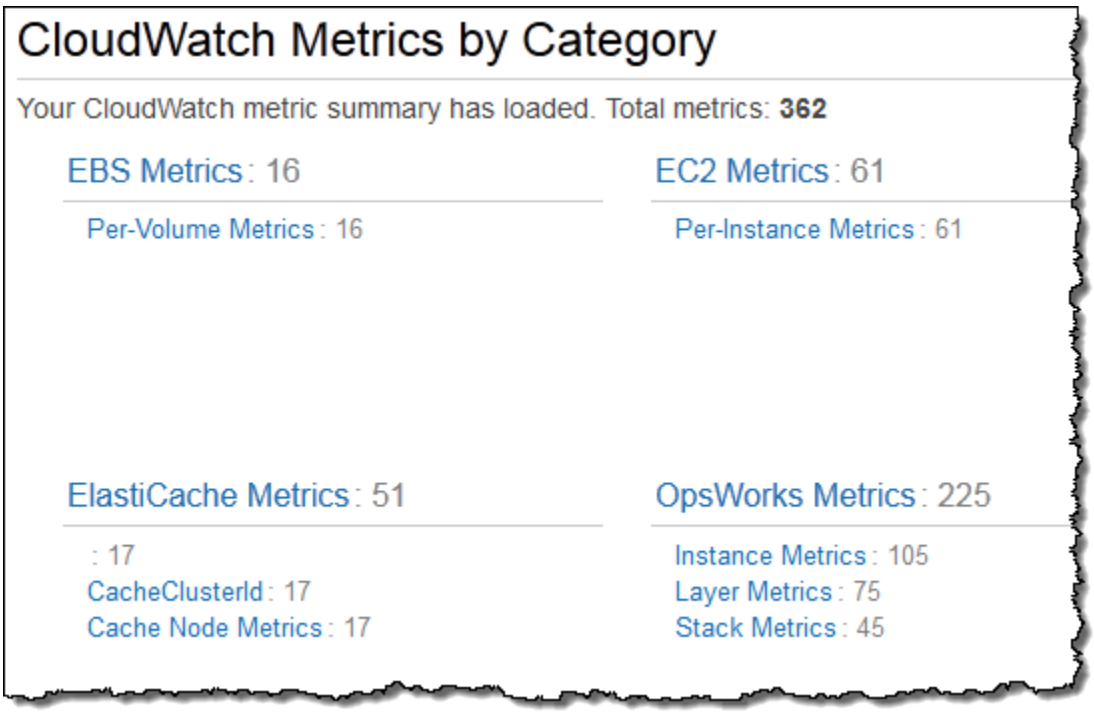
- Linux スタックの場合、 OpsWorks Stacks は 13 個のカスタムメトリクスをサポートし、スタック内の各インスタンスの詳細なモニタリングを提供し、モニタリングページで便宜上データを要約します。
- Windows スタックでは、[CloudWatch console] (CloudWatch コンソール) でインスタンスの標準的な Amazon EC2 メトリクスをモニタリングすることができます。

  [Monitoring] ページには、Windows メトリックスは表示されません。

モニタリングページには、スタック全体、レイヤー、またはインスタンスのメトリクスが表示されます。 OpsWorks スタックメトリクスは Amazon EC2 メトリクスとは異なります。また、CloudWatch コンソールから追加のメトリクスを有効にすることもできますが、通常は追加料金が必要です。以下に従って、基になるデータを CloudWatch コンソールで表示することもできます。

CloudWatch で OpsWorks のカスタムメトリクスを 表示するには

1. CloudWatch コンソールの https://console.aws.amazon.com/cloudwatch/ を開いてください。
2. ナビゲーションバーで、スタックのリージョンを選択します。
3. ナビゲーションペインで [Metrics (メトリクス)] を選択してください。
4. [OpsWorks Metrics (OpsWorks のメトリクス)] で、[Instance Metrics (インスタンスメトリクス)]、[Layer Metrics (レイヤーメトリクス)]、[Stack Metrics (スタックメトリクス)] のいずれかを選択します。



> **Note**
>
> OpsWorks スタックは、各インスタンス (インスタンスエージェント) でプロセスを実行してメトリクスを収集します。CloudWatch は、ハイパーバイザーを使用して別の方法でメトリクスを収集するため、CloudWatch コンソールの値は、 OpsWorks スタックコンソールのモニタリング ページの対応する値とわずかに異なる場合があります。

CloudWatch コンソールを使用してアラームを設定することもできます。アラームの作成方法の詳細については、「Amazon CloudWatch アラームの作成」を参照してください。CloudWatch カスタムメトリクスの一覧については、[AWS OpsWorks のメトリクスおよびディメンション]を参照してください。詳細については、「Amazon CloudWatch」を参照してください。

トピック

- AWS OpsWorks スタックメトリクス
- OpsWorks スタックメトリクスのディメンション
- スタックメトリクス
- レイヤーメトリクス
- インスタンスメトリクス

AWS OpsWorks スタックメトリクス

OpsWorks スタックは、次のメトリクスを 5 分ごとに CloudWatch に送信します。

CPU メトリクス

メトリクス	説明
cpu_idle	CPU がアイドル状態の時間の割合。 有効なディメンション:メトリクスを表示している個々のリソースの IDは次のとおりです。StackId、LayerId または InstanceId。 有効な統計: Average、Minimum、Maximum、Sum または Data Samples。 単位: なし
cpu_nice	CPU が正の値でプロセスを処理している時間の割合 nice 値。スケジューリングの優先順位が低くなります。この測定値の詳細については、[nice (Unix)] (いいな (Unix)) を参照してください。 有効なディメンション: メトリクスを表示している個々のリソースの IDは次のとおりです。StackId、LayerId または InstanceId。 有効な統計: Average、Minimum、Maximum、Sum または Data Samples。 単位: なし
cpu_steal	AWS は、増加するインスタンスにハイパーバイザー CPU リソースを割り当てると、仮想化の負荷が上昇し、ハイパーバイザーがインスタンス上で求められた作業を実行できる頻度に影響を与える可能性があります。cpu_steal ハイパーバイザーが物理 CPU リソースを割り当てるのをインスタンスが待機している時間の割合を測定します。

メトリクス	説明
	有効なディメンション:メトリクスを表示している個々のリソースの IDは次のとおりです。StackId、LayerId または InstanceId。 有効な統計: Average、Minimum、Maximum、Sum または Data Samples。 単位: なし
cpu_system	CPU がシステムオペレーションを処理している時間の割合。 有効なディメンション: メトリクスを表示している個々のリソースの IDは次のとおりです。StackId、LayerId または InstanceId。 有効な統計: Average、Minimum、Maximum、Sum または Data Samples。 単位: なし
cpu_user	CPU がユーザー操作を処理している時間の割合。 有効なディメンション:メトリクスを表示している個々のリソースの ID は次のとおりです。StackId、LayerId または InstanceId。 有効な統計: Average、Minimum、Maximum、Sum または Data Samples。 単位: なし

メトリクス	説明
cpu_waitio	CPU が入力/出力のオペレーションを待機している時間の割合。 有効なディメンション: メトリクスを表示している個々のリソースの IDは次のとおりです。StackId、LayerId または InstanceId。 有効な統計: Average、Minimum、Maximum、Sum または Data Samples。 単位: なし

メモリメトリクス

メトリクス	説明
memory_buffers	バッファリングされたメモリの量。 有効なディメンション:メトリクスを表示している個々のリソースの IDは次のとおりです。StackId、LayerId または InstanceId。 有効な統計: Average、Minimum、Maximum、Sum または Data Samples。 単位: なし
memory_cached	キャッシュされたメモリの量。 有効なディメンション:メトリクスを表示している個々のリソースの IDは次のとおりです。StackId、LayerId または InstanceId。 有効な統計: Average、Minimum、Maximum、Sum または Data Samples。 単位: なし

メトリクス	説明
memory_free	空きメモリの量。 有効なディメンション:メトリクスを表示している個々のリソースの IDは次のとおりです。StackId、LayerId または InstanceId。 有効な統計: Average、Minimum、Maximum、Sum または Data Samples。 単位: なし
memory_swap	スワップ領域の量。 有効なディメンション:メトリクスを表示している個々のリソースの IDは次のとおりです。StackId、LayerId または InstanceId。 有効な統計: Average、Minimum、Maximum、Sum または Data Samples。 単位: なし
memory_total	メモリの合計量。 有効なディメンション:メトリクスを表示している個々のリソースの IDは次のとおりです。StackId、LayerId または InstanceId。 有効な統計: Average、Minimum、Maximum、Sum または Data Samples。 単位: なし

メトリクス	説明
memory_used	使用中のメモリの量。 有効なディメンション:メトリクスを表示している個々のリソースの IDは次のとおりです。StackId、LayerId または InstanceId。 有効な統計: Average、Minimum、Maximum、Sum または Data Samples。 単位: なし

負荷メトリクス

メトリクス	説明
load_1	負荷は 1 分間のウィンドウで平均化されます。 有効なディメンション:メトリクスを表示している個々のリソースの IDは次のとおりです。StackId、LayerId または InstanceId。 有効な統計: Average、Minimum、Maximum、Sum または Data Samples。 単位: なし
load_5	負荷は 5 分間のウィンドウで平均化されます。 有効なディメンション:メトリクスを表示している個々のリソースの IDは次のとおりです。StackId、LayerId または InstanceId。 有効な統計: Average、Minimum、Maximum、Sum または Data Samples。 単位: なし
load_15	負荷は 15 分間のウィンドウで平均化されます。

メトリクス	説明
	有効なディメンション:メトリクスを表示している個々のリソースの IDは次のとおりです。StackId、LayerId または InstanceId。 有効な統計: Average、Minimum、Maximum、Sum または Data Samples。 単位: なし

プロセスメトリクス

メトリクス	説明
procs	アクティブなプロセスの数。 有効なディメンション:メトリクスを表示している個々のリソースの IDは次のとおりです。StackId、LayerId または InstanceId。 有効な統計: Average、Minimum、Maximum、Sum または Data Samples。 単位: なし

OpsWorks スタックメトリクスのディメンション

OpsWorks スタックメトリクスは OpsWorks スタック名前空間を使用し、次のディメンションのメトリクスを提供します。

ディメンション	説明
StackId	スタックの平均値。
LayerId	レイヤーの平均値。
InstanceId	インスタンスの平均値。

スタックメトリクス

スタック全体のメトリクスの概要を表示するには、スタックダッシュボードで OpsWorks スタックを選択し、ナビゲーションペインのモニタリングをクリックします。以下に示したのは、PHP および DB レイヤーを含んだスタックの例です。

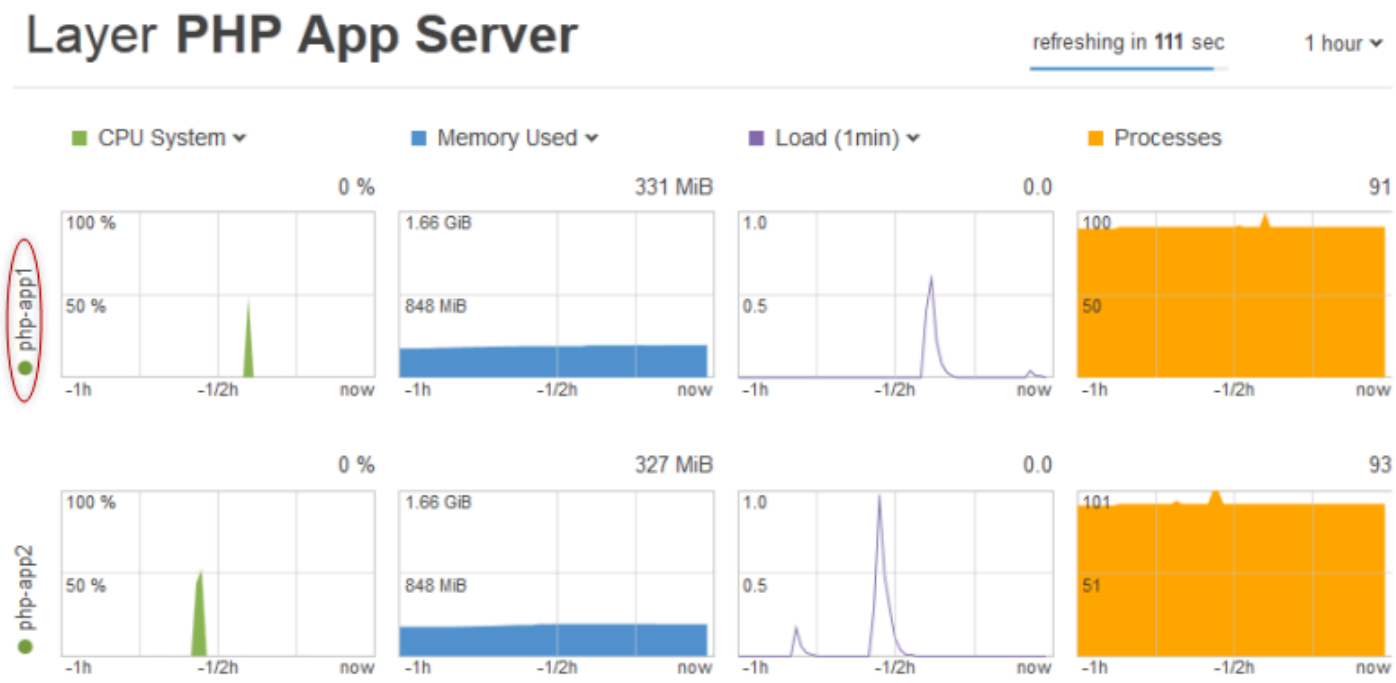
スタックビューには、指定した期間 (1 時間、8 時間、24 時間、1 週間、2 週間) を対象とする 4 種類のメトリクスのグラフがレイヤーごとに表示されます。次の点に注意してください。

- OpsWorks スタックはグラフを定期的に更新します。右上のカウントダウンタイマーは、次の更新までの残り時間を示します。
- レイヤーに複数のインスタンスが存在する場合、グラフには、そのレイヤーの平均値が表示されます。
- 右上のリストをクリックし、目的の値を選択することで期間を指定できます。

表示するメトリクスは、各メトリクスタイプのグラフの上にあるリストで選択できます。

レイヤーメトリクス

特定のレイヤーのメトリクスを表示するには、[Monitoring Layers] (レイヤーのモニタリング) ビューでレイヤー名をクリックします。次に示したのは、2 つのインスタンスが存在する PHP レイヤーのメトリクスの例です。

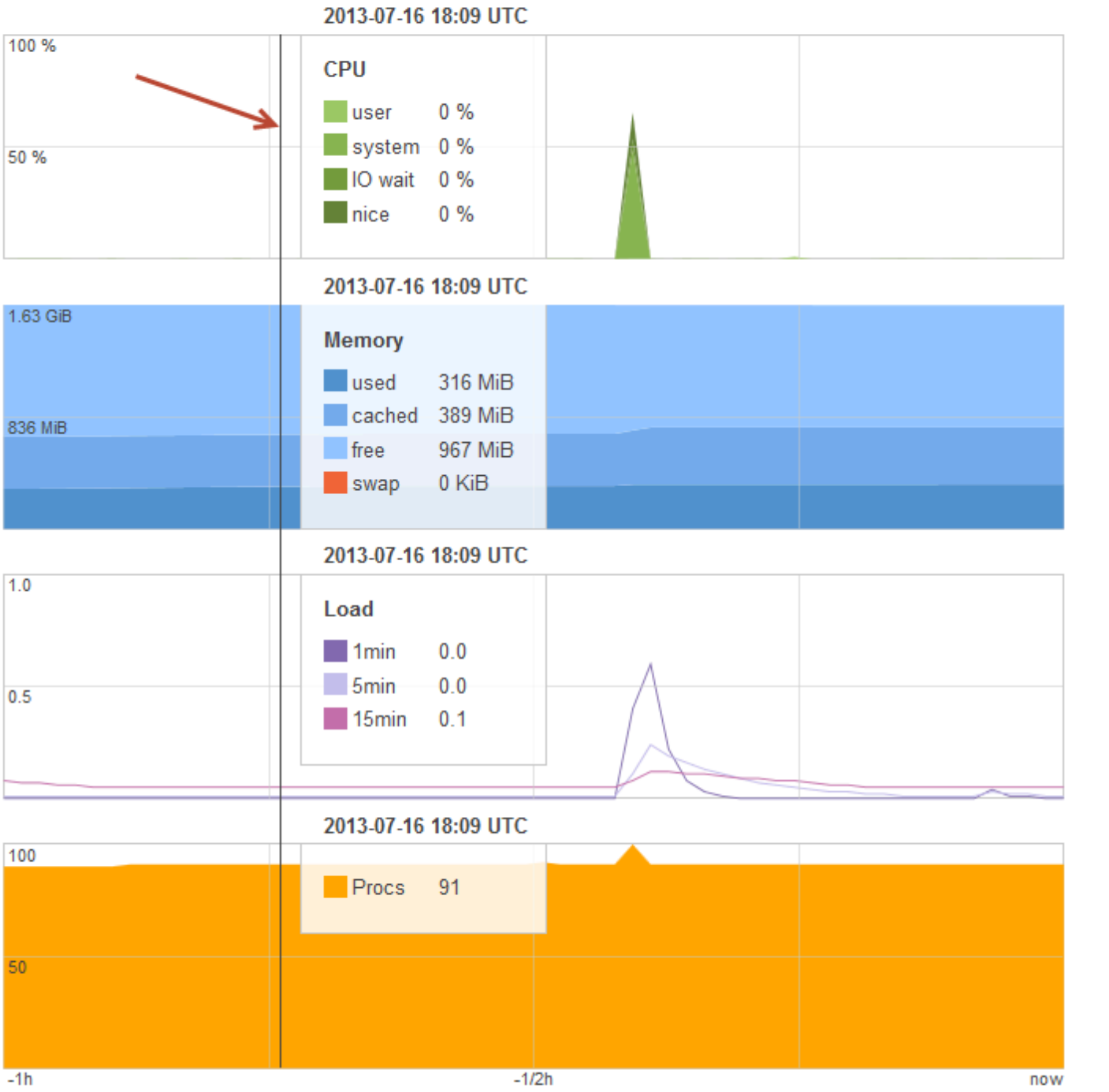


メトリクスのタイプは、スタックのメトリクスと同じです。各メトリクス タイプのグラフの上にあるリストを使用して、表示するメトリクスを選択できます。

> **Note**
>
> レイヤーの詳細ページに移動し、右上の [Monitoring] をクリックして、レイヤーのメトリクスを表示することもできます。

インスタンスメトリクス

特定のインスタンスのメトリクスを表示するには、レイヤーのモニタリングビューでインスタンス名をクリックします。次の例は、PHP レイヤーの php-app1 インスタンスに関するメトリクスを示しています。


Instance php-app1
refreshing in
2013-07-16 18:09 UTC
100 %
50 %
CPU
user 0 %
system 0 %
IO wait 0 %
nice 0 %
2013-07-16 18:09 UTC
1.63 GiB
836 MiB
Memory
used 316 MiB
cached 389 MiB
free 967 MiB
swap 0 KiB
2013-07-16 18:09 UTC
1.0
0.5
Load
1min 0.0
5min 0.0
15min 0.1
2013-07-16 18:09 UTC
100
50
Procs 91
-1h
-1/2h
now

これらのグラフは、利用できるすべてのメトリクスをメトリクスタイプごとにまとめたものです。特定時点の正確な値を表示するには、マウスを使用してスライダ (前の図に赤色の矢印で示した箇所) を適切な位置に移動します。

> **Note**
>
> インスタンスの詳細ページに移動し、右上の [Monitoring] を選択して、インスタンスのメトリクスを表示することもできます。

を使用した OpsWorks スタック API コールのログ記録 AWS CloudTrail

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックは AWS CloudTrail、IAM ID によって実行されたアクションの記録を提供するサービス、または OpsWorks スタック内の AWS サービスと統合されています。CloudTrail OpsWorks は、 スタックコンソールからの呼び出しや スタック API OpsWorks へのコード呼び出しを含む、 スタックのすべての API OpsWorks コールをイベントとしてキャプチャします。 APIs 証跡を作成する場合は、 スタックのイベントなど、Amazon S3 OpsWorks バケットへの CloudTrail イベントの継続的な配信を有効にすることができます。証跡を設定しない場合でも、CloudTrail コンソールの [イベント履歴] で最新のイベントを表示できます。CloudTrail で収集された情報を使用して、 OpsWorks スタックに対するリクエスト、リクエスト元の IP アドレス、リクエスト者、リクエスト日時などの詳細を確認できます。

CloudTrail の詳細については、「AWS CloudTrail ユーザーガイド」を参照してください。

OpsWorks CloudTrail のスタック情報

CloudTrail は、 AWS アカウントの作成時にアカウントで有効になります。 OpsWorks スタックでアクティビティが発生すると、そのアクティビティはイベント履歴の他の AWS サービスイベントとともに CloudTrail イベントに記録されます。 AWS アカウントで最近のイベントを表示、検索、ダウ

ンロードできます。詳細については、CloudTrail イベント履歴でのイベントの表示を参照してください。

OpsWorks スタックのイベントなど、 AWS アカウント内のイベントの継続的な記録については、証跡を作成します。証跡により、ログファイルを CloudTrail で Amazon S3 バケットに配信できます。デフォルトでは、コンソールで追跡を作成するときに、追跡がすべてのリージョンに適用されます。証跡は、 AWS パーティション内のすべてのリージョンからのイベントをログに記録し、指定した Amazon S3 バケットにログファイルを配信します。さらに、CloudTrail ログで収集されたイベントデータをさらに分析して処理するように他の AWS サービスを設定できます。詳細については、以下を参照してください。

- 証跡を作成するための概要
- CloudTrail がサポートするサービスと統合
- CloudTrail 用 Amazon SNS 通知の構成
- 複数のリージョンから CloudTrail ログファイルを受け取るおよび複数のアカウントから CloudTrail ログファイルを受け取る

すべての OpsWorks スタックアクションは CloudTrail によってログに記録され、「AWS OpsWorks スタック API リファレンス」に記載されています。たとえば、`CreateLayer`、`DescribeInstances`、`StartInstance` の各アクションを呼び出すと、CloudTrail ログファイルにエントリが生成されます。

各イベントまたはログエントリには、リクエストの生成者に関する情報が含まれます。同一性情報は次の判断に役立ちます。

- リクエストが、ルートと IAM ユーザー認証情報のどちらを使用して送信されたか。
- リクエストがロールまたはフェデレーションユーザーの一時的なセキュリティ認証情報を使用して行われたかどうか。
- リクエストが別の AWS サービスによって行われたかどうか。

詳細については、「CloudTrail userIdentity 要素」を参照してください。

OpsWorks スタックログファイルエントリについて

「トレイル」は、指定した Amazon S3 バケットにイベントをログファイルとして配信するように設定できます。CloudTrail のログファイルは、単一か複数のログエントリを含みます。イベントはあらゆるソースからの単一のリクエストを表し、リクエストされたアクション、アクションの日時、リク

エストのパラメータなどの情報が含まれます。CloudTrail ログファイルは、パブリック API コールの順序付けられたスタックトレースではないため、特定の順序では表示されません。

以下の例は、CreateLayer アクションを示す CloudTrail ログエントリです。


```
  {
"Records": [
    {
        "awsRegion": "us-west-2",
        "eventID": "342cd1ec-8214-4a0f-a68f-8e6352feb5af",
        "eventName": "CreateLayer",
        "eventSource": "opsworks.amazonaws.com",
        "eventTime": "2014-05-28T16:05:29Z",
        "eventVersion": "1.01"ed,
        "requestID": "e3952a2b-e681-11e3-aa71-81092480ee2e",
        "requestParameters": {
            "attributes": {},
            "customRecipes": {},
            "name": "2014-05-28 16:05:29 +0000 a073",
            "shortname": "customcf4571d5c0d6",
            "stackId": "a263312e-f937-4949-a91f-f32b6b641b2c",
            "type": "custom"
        },
        "responseElements": null,
        "sourceIPAddress": "198.51.100.0",
        "userAgent": "aws-sdk-ruby/2.0.0 ruby/2.1 x86_64-linux",
        "userIdentity": {
            "accessKeyId": "AKIAIOSFODNN7EXAMPLE",
            "accountId": "111122223333",
            "arn": "arn:aws:iam::111122223333:user/A-User-Name",
            "principalId": "AKIAI44QH8DHBEXAMPLE",
            "type": "IAMUser",
            "userName": "A-User-Name"
        }
    },
    {
        "awsRegion": "us-west-2",
        "eventID": "a860d8f8-c1eb-449b-8f55-eafc373b49a4",
        "eventName": "DescribeInstances",
        "eventSource": "opsworks.amazonaws.com",
        "eventTime": "2014-05-28T16:05:31Z",
        "eventVersion": "1.01",
        "requestID": "e4691bfd-e681-11e3-aa71-81092480ee2e",
```

```
            "requestParameters": {
                "instanceIds": [
                    "218289c4-0492-473d-a990-3fbe1efa25f6"
                ]
            },
            "responseElements": null,
            "sourceIPAddress": "198.51.100.0",
            "userAgent": "aws-sdk-ruby/2.0.0 ruby/2.1x86_64-linux",
            "userIdentity": {
                "accessKeyId": "AKIAIOSFODNN7EXAMPLE",
                "accountId": "111122223333",
                "arn": "arn:aws:iam::111122223333:user/A-User-Name",
                "principalId": "AKIAI44QH8DHBEXAMPLE",
                "type": "IAMUser",
                "userName": "A-User-Name"
            }
        }
    ]
}
```


スタックでの Amazon CloudWatch Logs OpsWorks の使用

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

複数のインスタンスのログをモニタリングするプロセスを簡素化するために、 OpsWorks スタックは Amazon CloudWatch Logs をサポートしています。スタックのレイヤーレベルで CloudWatch Logs OpsWorks を有効にします。CloudWatch Logs の統合は、Chef 11.10 および Chef 12 Linux ベースのスタックで機能します。CloudWatch Logs を有効にしている場合は追加の料金が発生するため、開始する前に [Amazon CloudWatch Pricing] (Amazon CloudWatch の料金) を確認してください。

CloudWatch Logs は、ユーザー指定のパターンの発生に対して選択されたログをモニタリングします。例えば、`NullReferenceException` のようなリテラルタームが発生したログをモニタリング

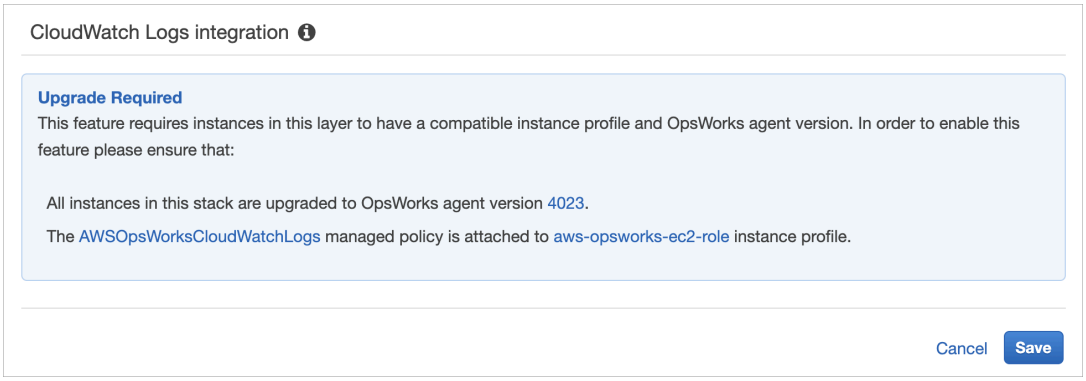
したり、発生数をカウントしたりできます。スタックで CloudWatch Logs OpsWorks を有効にすると、 スタックエージェントは CloudWatch Logs OpsWorks にログを送信します。CloudWatch Logs の詳細については、[Getting Started with CloudWatch Logs] (CloudWatch Logs の開始方法) を参照してください。

前提条件

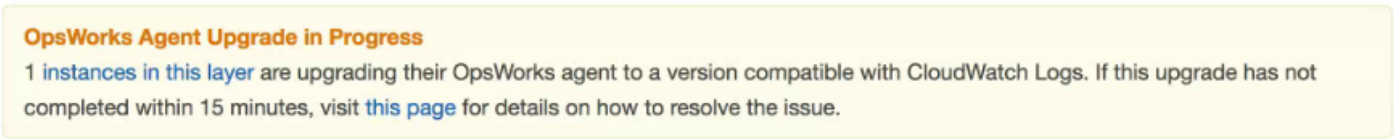
CloudWatch Logs を有効にする前に、インスタンスが Chef 11.10 のスタックでは、 OpsWorks スタックエージェントのバージョン 3444 以降、Chef 12 のスタックでは 4023 以降が実行されている必要があります。また、CloudWatch Logs を使用してモニタリングするすべてのインスタンスで、互換性のあるインスタンスプロファイルを使用している必要があります。

カスタムインスタンスプロファイル (スタックの作成時に OpsWorks スタックが提供しなかったプロファイル) を使用している場合、 OpsWorks スタックはインスタンスプロファイルを自動的にアップグレードできません。IAM を使用して [AWSOpsWorksCloudWatchLogs] ポリシーをプロファイルに手動でアタッチする必要があります。IAM ポリシーの詳細については IAM ユーザーガイドの「IAM ポリシーの管理」を参照してください。

エージェントバージョンまたはインスタンスプロファイルをアップグレードする必要がある場合、レイヤーページの CloudWatch Logs タブを開くと、 OpsWorks スタックに次のスクリーンショットのようなリマインダーが表示されます。



レイヤーのすべてのインスタンスでエージェントを更新するには時間がかかります。エージェントのアップグレードが完了する前に、レイヤーで CloudWatch Logs を有効にしようとすると、以下のようなメッセージが表示されます。



CloudWatch Logs の有効化する

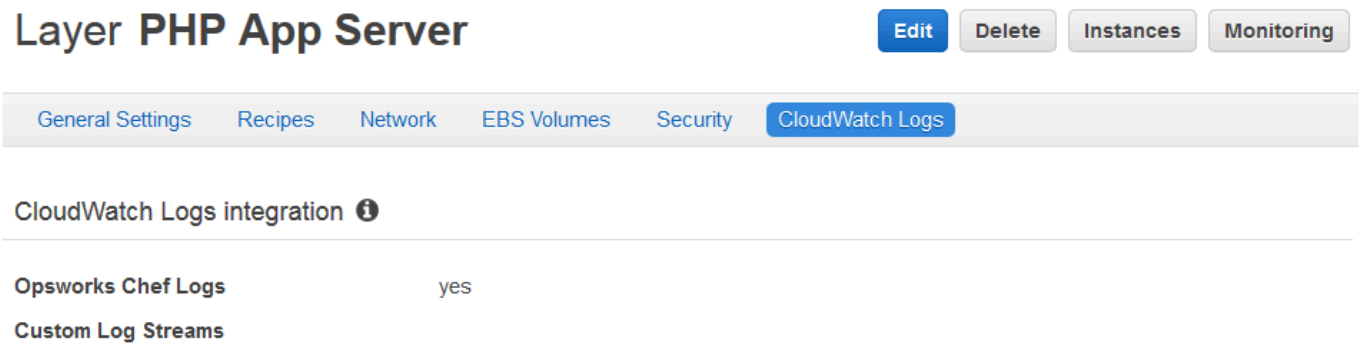
1. 必要なエージェントとインスタンスプロファイルのアップグレードが完了すると、[CloudWatch Logs] タブのスライダーコントロールを [On] (オン) に設定して、CloudWatch Logs を有効にすることができます。

2. コマンドログをストリーミングするには、[Stream command logs] を [On] に設定します。これにより、レイヤーのインスタンスの Chef アクティビティとユーザーが開始したコマンドのログが CloudWatch Logs に送信されます。

   これらのログに含まれるデータは、ログ URL のターゲットを開いたときに表示される DescribeCommands オペレーションの結果とほぼ一致したものとなっています。`setup`、`configure`、`deploy`、`undeploy`、`start`、`stop`、およびレシピの実行コマンドに関するデータが含まれています。

3. レイヤーのインスタンスのカスタムロケーションに保存されているアクティビティのログ (`/var/log/apache/myapp/mylog*` など) をストリーミングするには、[Stream custom logs] 文字列ボックスにカスタムロケーションを入力し、[Add] (+) を選択します。

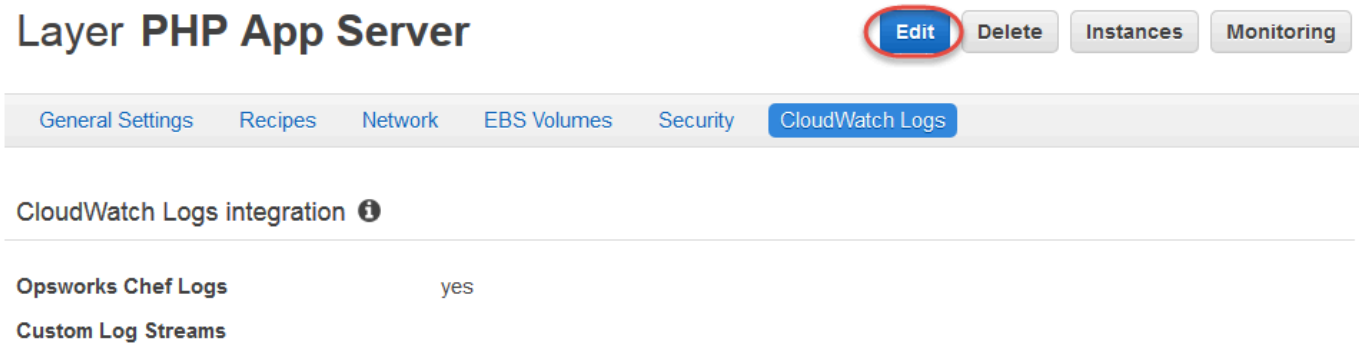
4. [保存] を選択します。数分以内に、 OpsWorks スタックログストリームが CloudWatch Logs コンソールに表示されます。



CloudWatch Logs をオフにする

CloudWatch Logs をオフにするには、レイヤーの設定を編集します。

1. レイヤーのプロパティページで、[編集] を選択します。



2. [編集] ページで、[CloudWatch ログ] タブを選択します。
3. [CloudWatch ログ] エリアで、[Stream command logs] をオフにします。カスタムログで X を選択して、ログストリームから削除します (該当する場合)。
4. [Save] を選択します。

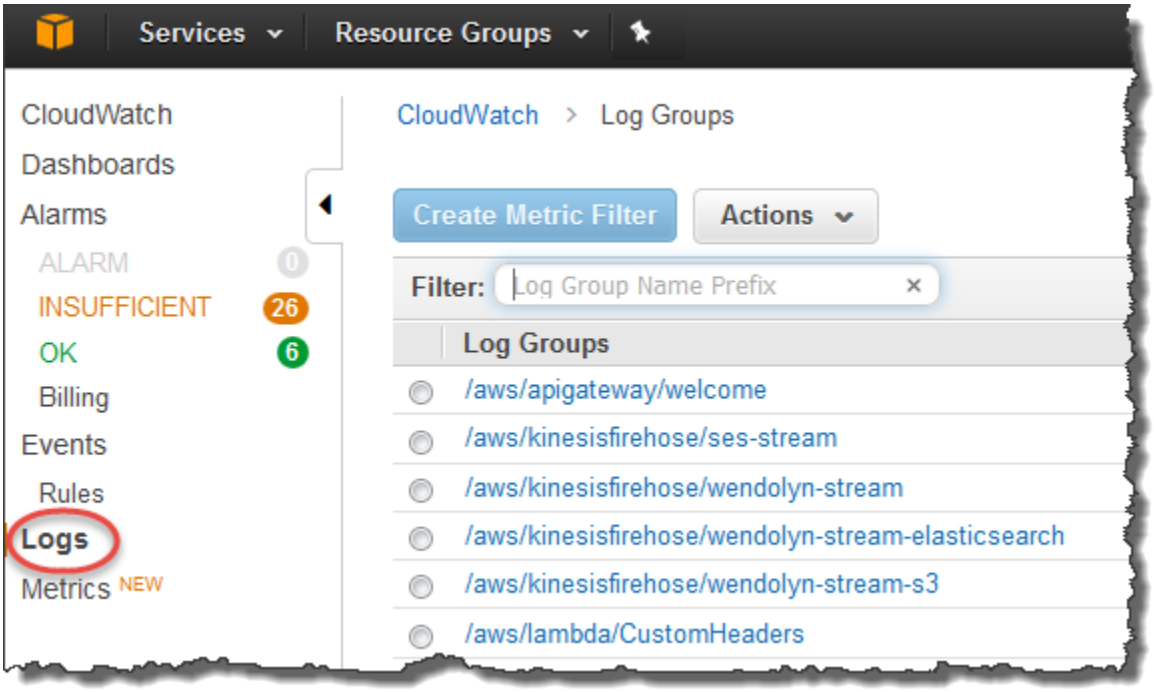
CloudWatch Logs からのストリームログの削除

スタックから CloudWatch Logs OpsWorks ストリーミングをオフにしても、既存のログは CloudWatch Logs マネジメントコンソールで引き続き使用できます。ログを Amazon S3 にエクスポートまたは削除しない限り、保存されたログに対しての料金が引き続き発生します。S3 へのログのエクスポートの詳細については [Exporting Log Data to Amazon S3] (Amazon S3 へのログデータのエクスポート) を参照してください。

CloudWatch Logs マネジメントコンソールで、または および `delete-log-group` AWS CLI コマンドを実行して、ログストリーム`delete-log-stream`とロググループを削除できます。ログの保持期間の変更の詳細については、[Change Log Data Retention in CloudWatch Logs] (CloudWatchでのログデータ保管期間の変更) を参照してください。

CloudWatch Logs でのログの管理

ストリーミングしているログは、CloudWatch Logs コンソールで管理されます。



OpsWorks は、デフォルトのロググループとログストリームを自動的に作成します。 OpsWorks スタックデータのロググループには、以下のパターンに一致する名前があります。

stack_name/*layer_name*/*chef_log_name*

カスタムログには次のパターンに一致する名前があります。

/stack_name/layer_short_name/file_path_name パス名は人が読んで理解しやすいように、アスタリスク (*) などの特殊文字が削除されています。

CloudWatch Logs にログを配置すると、[organize the logs into groups] (ログをグループに整理) したり、[search and filter logs by creating metric filters] (メトリクスフィルタを作成してログを検索およびフィルタリング) したり、[create custom alarms] (カスタムアラームを作成) したりできます。

Chef 12.2 Windows レイヤーを設定して CloudWatch ログを使用する

CloudWatch Logs の自動統合は、Windows ベースのインスタンスはサポートされません。[CloudWatch ログ] タブは、Chef 12.2 スタック内のレイヤーでは使用できません。Windows ベースのインスタンスの CloudWatch Logs へのストリーミングを手動で有効にするには、以下を行います。

- CloudWatch Logs エージェントが適切な権限を持つことができるように、Windows ベースのインスタンスのインスタンスプロファイルを更新します。AWSOpsWorksCloudWatchLogs ポリシーステートメントに必要な権限が示されています。

通常、このタスクを行うのは 1 回のみです。これで、更新したインスタンスプロファイルはレイヤー内のすべての Windows インスタンスで使用することができます。

- 各インスタンスで以下の JSON 設定ファイルを編集します。このファイルには、どのログをモニタリングするかなどログストリームの設定が含まれています。

```
%PROGRAMFILES%\Amazon\Ec2ConfigService\Settings
\AWS.EC2.Windows.CloudWatch.json
```

必要なタスクを処理するカスタムレシピを作成し、Chef 12.2 レイヤーの Setup イベントに割り当てることで、前述の 2 つのタスクを自動化できます。これらのレイヤーで新しいインスタンスを起動するたびに、インスタンスの起動が完了した後に OpsWorks スタックが自動的にレシピを実行し、CloudWatch Logs を有効にします。

Windows ベースのインスタンスで CloudWatch Logs をオフにするには、プロセスを逆順で実行します。[Ec 2 Service Properties] ダイアログボックスで [Enable CloudWatch Logs integration] チェックボックスをクリアし、`AWS.EC2.Windows.CloudWatch.json` ファイルからログストリーム設定を削除します。CloudWatch Logs 権限を自動的に Chef 12.2 レイヤーの新しいインスタンスに割り当てるすべての Chef のレシピの実行を停止します。

Amazon CloudWatch Events を使用したスタックのモニタリング

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post または AWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Amazon CloudWatch Events でルールを設定して、 スタックリソースの変更を警告し、イベントの内容に基づいてアクションを実行するように CloudWatch Events OpsWorks に指示できます。CloudWatch Events の開始方法やルールの設定方法については、「CloudWatch Events User Guide」(CloudWatch Events ユーザーガイド) の「Getting Started with CloudWatch Events」(CloudWatch イベントを開始する) を参照してください。

CloudWatch Events では、次の OpsWorks スタックイベントタイプがサポートされています。

インスタンスの状態変更

OpsWorks スタックインスタンスの状態の変化を示します。

コマンドの状態変更

OpsWorks スタックコマンドの状態に変更が発生したことを示します。

デプロイの状態変更

OpsWorks スタックデプロイの状態に変更が発生したことを示します。

アラート

OpsWorks スタックサービスエラーが発生したことを示します。

CloudWatch Events でサポートされている OpsWorks スタックイベントタイプの詳細については、CloudWatch Events OpsWorks ユーザーガイド」の「 スタックイベント」を参照してください。

セキュリティと権限

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

各ユーザーには、アカウントの AWS リソースにアクセスするための適切な AWS 認証情報が必要です。ユーザーに認証情報を提供する推奨方法は、 AWS Identity and Access Management (IAM) を使用することです。 OpsWorks スタックは IAM と統合され、以下を制御できます。

- 個々のユーザーが OpsWorks スタックとやり取りする方法。

  たとえば、あるユーザーに対してはスタックへのアプリケーションのデプロイはできるが、スタック自体の変更はできないようにし、他のユーザーに対しては特定のスタックに限定してフルアクセスができるようにします。

- スタックがユーザーに代わって Amazon EC2 OpsWorks インスタンスや Amazon S3 バケットなどのスタックリソースにアクセスする方法。 Amazon EC2

  OpsWorks スタックは、これらのタスクのアクセス許可を付与するサービスロールを提供します。
- スタックによって制御される Amazon EC2 OpsWorks インスタンスで実行されるアプリケーションが、Amazon S3 バケットに保存されているデータなど、他の AWS リソースにアクセスする方法。

  インスタンスプロファイルを Layer のインスタンスに割り当てることで、それらのインスタンスで実行されているアプリケーションが他の AWS リソースにアクセスするためのアクセス許可を付与できます。
- ユーザーベースの SSH キーを管理し、SSH または RDP によりインスタンスに接続する方法

  スタックごとに、管理ユーザーは、各 ユーザーに個人 SSH キーを割り当てたり、ユーザーに自身のキーの指定を許可したりできます。また、各ユーザーのスタックのインスタンスに対する SSH または RDP アクセスと、sudo または管理者特権を許可できます。

セキュリティのその他の側面には、次のようなものがあります。

- 最新のセキュリティパッチによるインスタンスのオペレーティングシステムの更新を管理する方法。

  詳細については、「セキュリティ更新の管理」を参照してください。
- インスタンスとの間で送受信されるネットワークトラフィックを Amazon EC2 security groups (Amazon EC2 セキュリティグループ) で制御するように設定する方法。

  OpsWorks スタックのデフォルトのセキュリティグループの代わりにカスタムセキュリティグループを指定する方法。詳細については、「セキュリティグループの使用」を参照してください。

トピック

- OpsWorks スタックのユーザーアクセス許可の管理
- OpsWorks スタックがユーザーに代わって動作することを許可する
- OpsWorks スタックでのサービス間の混乱した代理の防止
- EC2 インスタンスで実行するアプリケーションに対するアクセス許可の指定
- SSH アクセスの管理
- Linux セキュリティ更新の管理

- セキュリティグループの使用

OpsWorks スタックのユーザーアクセス許可の管理

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

ベストプラクティスとして、 OpsWorks スタックユーザーを指定された一連のアクションまたは一連のスタックリソースに制限します。 OpsWorks スタックユーザーアクセス許可は、 スタックアクセス許可ページを使用する方法と、適切な IAM ポリシーを適用する方法の 2 OpsWorks つの方法で制御できます。

OpsWorks[Permissions] (許可) ページまたは同等の CLI または API アクションにより、各ユーザーに複数の [permission levels] (パーミッションレベル) の 1 つを割り当てることで、マルチユーザー環境のユーザー許可をスタックごとに制御できます。それぞれのレベルで付与される権限は、特定のスタックリソースに対する標準的なアクション一式に対応します。[Permissions] ページを使用して制御できる権限は次のとおりです。

- 各スタックにアクセスできるユーザー。
- 個々のユーザーが各スタックに対して実行できるアクション。

  たとえば、一部のユーザーにはスタックの閲覧のみを許可する一方で、他のユーザーにはアプリケーションのデプロイ、インスタンスの追加などを許可することができます。
- 各スタックを管理できるユーザー。

  指定したユーザー (複数可) に各スタックの管理を委任できます。
- 各スタックの Amazon EC2 インスタンスにおけるユーザーレベルの SSH アクセスと sudo 特権 (Linux) または RDP アクセスと管理者特権 (Windows) を持つ人。

  個々のユーザーについて、これらの権限をいつでも許可したり取り消したりすることができます。

> **Important**
>
> SSH/RDP アクセスを拒否しても、必ずしもユーザーがインスタンスにログインできなくなるわけではありません。インスタンスに Amazon EC2 キーペアを指定した場合、対応するプライベートキーを持つユーザーは誰でもログインするかキーを使用して Windows 管理者パスワードを取得できます。詳細については、「SSH アクセスの管理」を参照してください。

IAM コンソール、 CLI または API から、 OpsWorks スタックの各種リソースやアクションに対するアクセス許可を明示的に付与するポリシーをユーザーに追加することもできます。

- 権限は、IAM ポリシーを使用した方が、権限レベルで行うよりも柔軟に指定できます。
- IAM ID (ユーザー、ユーザーグループ、ロール) を設定して、ユーザーやユーザーグループなどの IAM ID にアクセス権限を付与したり、フェデレーションユーザーに関連付けられるロールを定義したりできます。
- IAM ポリシーは、特定のキー OpsWorks スタックアクションのアクセス許可を付与する唯一の方法です。

  例えば、`opsworks:CreateStack` と `opsworks:CloneStack` (それぞれスタックの作成とクローン化に使用) へのアクセス権限を付与するには、IAM を使用する必要があります。

コンソールでフェデレーティッドユーザーをインポートすることは明示的には不可能ですが、フェデレーティッドユーザーは、 OpsWorks スタックコンソールの右上にある「マイ設定」を選択し、右上にある「ユーザー」を選択することで、暗黙的にユーザープロファイルを作成できます。ユーザーページで、API または CLI を使用して作成された、またはコンソールを通じて暗黙的に作成されたアカウントのフェデレーティッドユーザーは、非フェデレーティッド IAM ユーザーと同じ様にアカウントを管理できます。

この 2 つのアプローチは相互排他的なものではなく、両者を組み合わせることで利便性が高まることもあります。両者を組み合わせて使用した場合、両方の権限の集合が OpsWorks スタックによって評価されます。たとえば、インスタンスの追加と削除は許可するが、レイヤーの追加と削除をユーザーに許可するのは望ましくないとします。 OpsWorks スタックのアクセス許可レベルはいずれも、その特定のアクセス許可セットを付与しません。ただし、許可 ページを使用して、管理 権限レベルをユーザーに付与し、ほとんどのスタック操作を許可したうえで、レイヤーの追加と削除の権限を拒否する IAM ポリシーを適用することは可能です。詳細については、[のポリシーを使用して AWS リソースへのアクセスを制御する]を参照してください。

ユーザーの権限を管理するための標準的なモデルを以下に示します。いずれのケースも、ここではお客様が管理ユーザーであるという前提で記述しています。

1. 一人または複数の管理ユーザーには、IAM コンソールを使用して AWSOpsWorks_FullAccess ポリシーを適用します。
2. 非管理ユーザーそれぞれに、 OpsWorks スタックの権限が付与されていないポリシーで ユーザーを作成します。

   ユーザーが OpsWorks スタックにのみアクセスする必要がある場合は、ポリシーをまったく適用する必要はありません。代わりに、 OpsWorks スタックのアクセス許可ページでアクセス許可を管理できます。
3. OpsWorks スタックユーザーページを使用して、管理者以外のユーザーを OpsWorks スタックにインポートします。
4. スタックごとにその [Permissions] ページを使用し、それぞれのユーザーに権限レベルを割り当てます。
5. 必要に応じて、適切に構成した IAM ポリシーを適用し、ユーザーの権限レベルをカスタマイズします。

ユーザー管理に関する推奨事項については、「ベストプラクティス: アクセス権限の管理」を参照してください。

IAM でのベストプラクティスの詳細については、IAM ユーザーガイドの「IAM でのセキュリティのベストプラクティス」を参照してください。

トピック

- OpsWorks スタックユーザーの管理
- OpsWorks スタックごとのアクセス許可をスタックユーザーに付与する
- IAM ポリシーをアタッチして OpsWorks スタックのアクセス許可を管理する
- ポリシーの例
- OpsWorks スタックのアクセス許可レベル

OpsWorks スタックユーザーの管理

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

ユーザーを OpsWorks スタックにインポートしてアクセス許可を付与する前に、まず個人ごとにユーザーを作成しておく必要があります。IAM ユーザーを作成するには、まず IAMFullAccess ポリシーで定義された権限が付与されている IAM ユーザーとして AWS にサインインします。次に、IAM コンソールを使用して、 OpsWorks スタックにアクセスする必要があるすべてのユーザーの IAM ユーザーを作成します。その後、これらのユーザーを OpsWorks スタックにインポートし、次のようにユーザーアクセス許可を付与できます。

通常の OpsWorks スタックユーザー

標準ユーザーには、アタッチされたポリシーは不要です。スタックがある場合は、通常 OpsWorks 、スタックのアクセス許可は含まれません。代わりに、 OpsWorks スタックのアクセス許可 ページを使用して、スタックstack-by-stack通常のユーザーに次のいずれかのアクセス許可レベルを割り当てます。

- Show 権限: ユーザーは、スタックを表示することはできますが、その他のオペレーションは一切実行できません。
- Deploy 権限: Show 権限に加えて、アプリケーションのデプロイと更新が許可されます。
- Manage 権限: Deploy 権限に加え、スタック管理操作を実行できます。たとえば、レイヤーやインスタンスを追加したり、[Permissions] ページを使ってユーザーの権限を設定したり、自分の SSH/RDP と sudo/admin 特権を有効にしたりすることができます。
- Deny 権限: スタックへのアクセスは拒否されます。

これらのパーミッションレベルが特定のユーザーにとって必要なものでない場合、IAMポリシーを適用することでユーザーのパーミッションをカスタマイズすることができます。たとえば、OpsWorks スタックのアクセス許可 ページを使用して、アクセス許可の管理レベルをユーザーに割り当てます。これにより、すべてのスタック管理オペレーションを実行するアクセス許可がユーザーに付与されますが、スタックを作成またはクローンすることはできません。そこで、

レイヤーの追加や削除を許可しないことでそれらの権限を制限したり、スタックの作成やクローンを許可することでそれらの権限を増強するポリシーを適用することができます。詳細については、「IAM ポリシーをアタッチして OpsWorks スタックのアクセス許可を管理する」を参照してください。

OpsWorks スタック管理ユーザー

管理ユーザーは、アカウント所有者または [AWSOpsWorks_FullAccess ポリシー] で定義された権限を持つ IAM ユーザーです。このポリシーには、Manage ユーザーに付与される権限に加え、[Permissions] ページでは付与することのできない以下のようなアクションの権限が含まれます。

- OpsWorks スタックへのユーザーのインポート
- スタックの作成とクローン化

ポリシー全体については、「ポリシーの例」を参照してください。IAMポリシーを適用することによってのみユーザーに付与できる権限の詳細なリストについては、「OpsWorks スタックのアクセス許可レベル」を参照してください。

トピック

- ユーザーとリージョン
- OpsWorks スタック管理ユーザーの作成
- OpsWorks スタックの IAM ユーザーの作成
- OpsWorks スタックへのユーザーのインポート
- OpsWorks スタックのユーザー設定の編集

ユーザーとリージョン

OpsWorks スタックユーザーは、作成されたリージョンエンドポイント内で使用できます。以下のどのリージョンにもユーザーを作成できます。

- 米国東部 (オハイオ) リージョン
- 米国東部(バージニア州北部) リージョン
- 米国西部 (オレゴン) リージョン
- 米国西部 (北カリフォルニア) リージョン
- カナダ (中部) リージョン (API のみ。 では使用できません AWS マネジメントコンソール
- アジアパシフィック (ムンバイ) リージョン

- アジアパシフィック (シンガポール) リージョン
- アジアパシフィック (シドニー) リージョン
- アジアパシフィック (東京) リージョン
- Asia Pacific (Seoul) Region
- 欧州 (フランクフルト) リージョン
- 欧州 (アイルランド) リージョン
- 欧州 (ロンドン) リージョン
- 欧州 (パリ) リージョン
- 南米 (サンパウロ) リージョン

OpsWorks スタックにユーザーをインポートするときは、リージョンエンドポイントの 1 つにインポートします。複数のリージョンでユーザーを使用できるようにするには、そのリージョンにユーザーをインポートする必要があります。 OpsWorks スタックユーザーをあるリージョンから別のリージョンにインポートすることもできます。同じ名前のユーザーが既に存在するリージョンにユーザーをインポートすると、インポートされたユーザーは既存のユーザーを置き換えます。ユーザーのインポートの詳細については、ユーザーのインポートを参照してください。

OpsWorks スタック管理ユーザーの作成

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタック管理ユーザーを作成するには、`AWSOpsWorks_FullAccess`ポリシーをユーザーに追加して、そのユーザーに OpsWorks スタックフルアクセス許可を付与します。管理ユーザーの作成について詳しくは、「管理ユーザーの作成」を参照してください。

> **Note**
>
> AWSOpsWorks_FullAccess ポリシーが適用されたユーザーは、 OpsWorks スタックのスタックを作成したり管理したりすることができますが、ユーザーはスタックの IAM サービ

スロールを作成することができません。既存のロールを使用する必要があります。スタックを最初に作成するユーザーには別途、「管理権限」で説明されている IAM 権限が必要です。このユーザーが最初のスタックを作成すると、 OpsWorks スタックは必要なアクセス許可を持つ IAM サービスロールを作成します。以後、`opsworks:CreateStack` 権限を持つユーザーは、そのロール使って別のスタックを作成することができます。詳細については、「OpsWorks スタックがユーザーに代わって動作することを許可する」を参照してください。

ユーザーを作成すると、必要に応じてカスタマー管理ポリシーを追加してユーザーの権限を微調整できます。たとえば、スタックの作成と削除を管理ユーザーに許可する一方で、新しいユーザーのインポートは禁止することができます。詳細については、「IAM ポリシーをアタッチして OpsWorks スタックのアクセス許可を管理する」を参照してください。

複数の管理ユーザーが存在する場合は、各ユーザーに個別にアクセス許可を設定するのではなく、AWSOpsWorks_FullAccess ポリシーを IAM グループ にアタッチし、そのグループにユーザーを追加するようにします。

グループの作成の詳細については、「IAM ユーザー」を参照してください。グループを作成したら、AWSOPSWorks_FullAccess ポリシーを追加します。また、AWSOpsWorks_FullAccess パーミッションを含むAdministratorAccessポリシーを追加することもできます。

既存のグループにアクセス権限を追加する方法については、「IAM ユーザーグループへのポリシーのアタッチ」を参照してください。

OpsWorks スタックの IAM ユーザーの作成

Important

この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

IAM ユーザーを OpsWorks スタックにインポートする前に、それらを作成する必要があります。これは、IAM console (IAM コンソール)、コマンドライン、または API のいずれかを使用して実行できます。詳細な手順については、AWS 「アカウントでの IAM ユーザーの作成」を参照してください。

管理ユーザーとは異なり、権限を定義するためにポリシーをアタッチする必要はありません。権限は、ユーザーを OpsWorks スタックにインポートした後で設定できます (「ユーザー許可の管理」を参照)。

IAMユーザーとグループの作成の詳細については、「IAM の使用開始」 を参照してください。

OpsWorks スタックへのユーザーのインポート

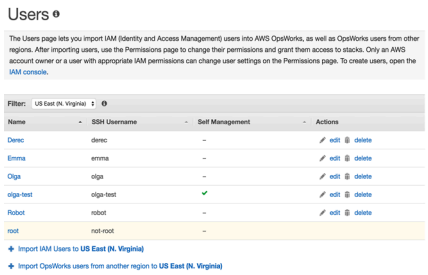
> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

管理ユーザーは、ユーザーを OpsWorks スタックにインポートできます。また、あるリージョンのエンドポイントから別のリージョン OpsWorks のエンドポイントに スタックユーザーをインポートすることもできます。ユーザーを OpsWorks スタックにインポートするときは、いずれかの OpsWorks スタックリージョンエンドポイントにインポートします。ユーザーを複数のリージョンで使用できるようにするには、該当するリージョンにユーザーをインポートする必要があります。

コンソールでフェデレーティッドユーザーをインポートすることは明示的には不可能ですが、フェデレーティッドユーザーは、 OpsWorks スタックコンソールの右上にあるマイ設定を選択し、右上にあるユーザーを選択することで、暗黙的にユーザープロファイルを作成できます。ユーザー ページで、API または CLI を使用して作成された、またはコンソールを通じて暗黙的に作成されたアカウントのフェデレーティッドユーザーは、非フェデレーティッド IAM ユーザーと同じ様にアカウントを管理できます。

ユーザーを OpsWorks スタックにインポートするには

1. 管理ユーザーまたはアカウント所有者として OpsWorks スタックにサインインします。
2. 右上の [Users] を選択して [Users] ページを開きます。



3. [Import IAM Users to <######>] を選択し、使用可能なユーザーアカウントのうちまだインポートされていないものを表示します。

4. [Select all] チェックボックスをオンにするか、個別のユーザーを 1 つ以上選択します。完了後、[Import to OpsWorks] を選択します。

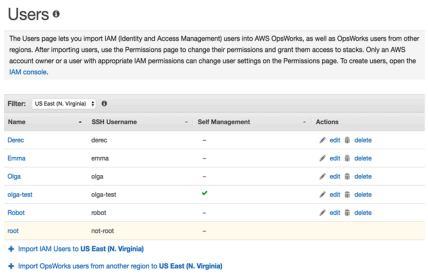
> **Note**
>
> ユーザーを OpsWorks スタックにインポートした後、IAM コンソールまたは API を使用してアカウントからユーザーを削除しても、ユーザーは OpsWorks スタックを通じて付与した SSH アクセスを自動的に失うことはありません。また、ユーザーページを開き、ユーザーのアクション列で削除を選択して、 OpsWorks スタックからユーザーを削除する必要があります。

OpsWorks スタックユーザーをあるリージョンから別のリージョンにインポートするには

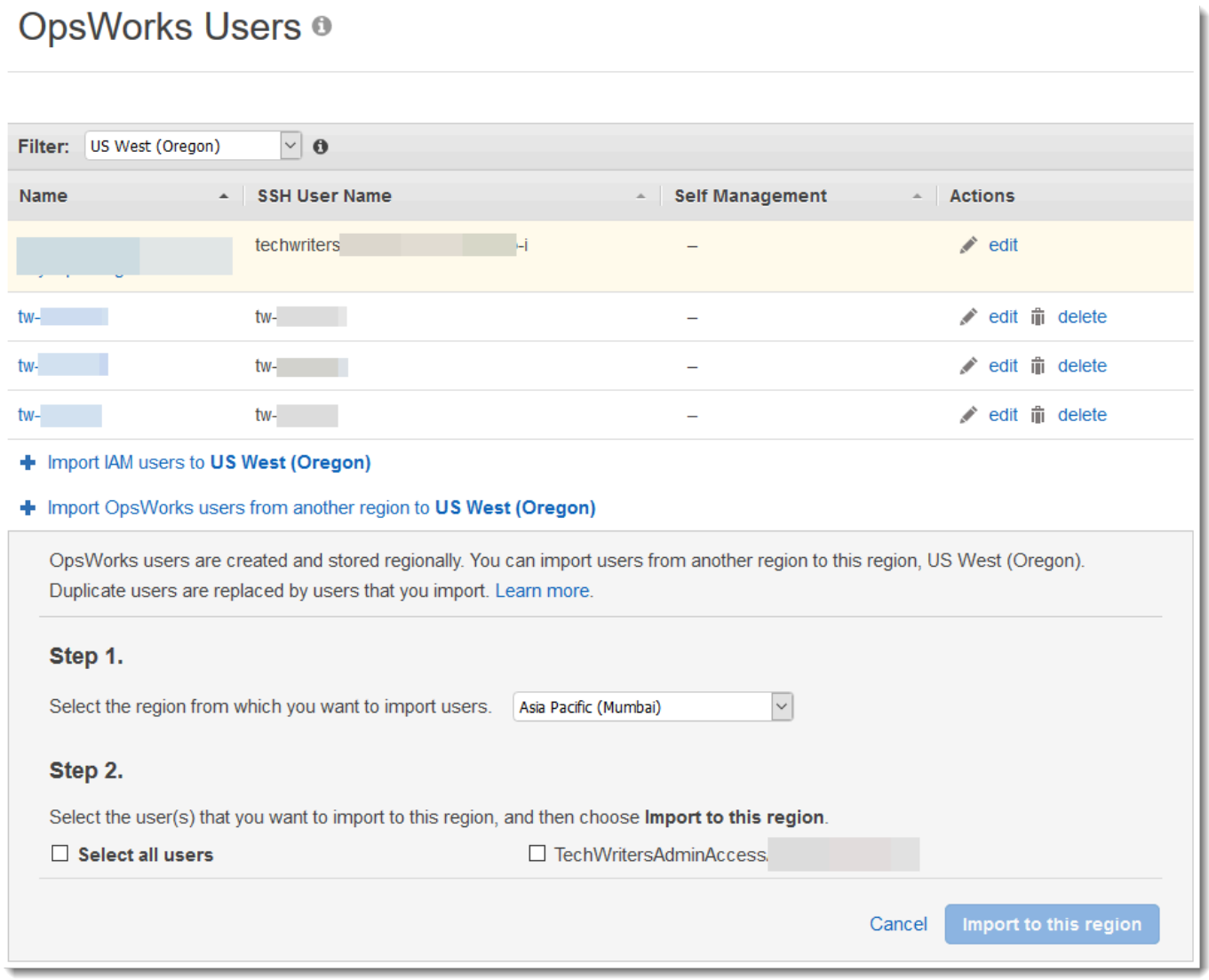
OpsWorks スタックユーザーは、作成されたリージョンエンドポイント内で使用できます。[ユーザーとリージョン] に表示されているリージョンでユーザーを作成できます。

OpsWorks スタックユーザーを 1 つのリージョンから、ユーザーリストが現在フィルタリングされているリージョンにインポートできます。インポート先のリージョンにすでに同じ名前のユーザーが設定されている場合、既存のユーザーはインポートされたユーザーに置き換わります。

1. 管理ユーザーまたはアカウント所有者として OpsWorks スタックにサインインします。
2. 右上の [Users] を選択して [Users] ページを開きます。複数のリージョンに OpsWorks スタックユーザーがいる場合は、フィルターコントロールを使用して、ユーザーをインポートするリージョンをフィルタリングします。



3. 別のリージョンから <***current region***> OpsWorks へのスタックユーザーのインポートを選択します。



4. OpsWorks スタックユーザーをインポートするリージョンを選択します。
5. インポートするユーザーを選択するか (複数可)、すべてのユーザーを選択して、[Import to this region] を選択します。 OpsWorks スタックがインポートされたユーザーをユーザーリストに表示するまで待ちます。

スタックの外部で作成された Unix IDs OpsWorks とユーザー

OpsWorks は OpsWorks 、スタックインスタンスの Unix ID (UID) 値を 2000 から 4000 の間で割り当てます。は 2000-4000 の範囲の UIDs OpsWorks を予約するため、 の外部で作成したユーザー OpsWorks (クックブックレシピを使用するか、IAM OpsWorks から にユーザーをインポートするなど) は、別のユーザーの スタックによって OpsWorks 上書きされる UIDs を持つことができます。これにより、 OpsWorks スタックの外部で作成したユーザーがデータバッグの検索結果に表示されなかったり、 OpsWorks スタックの組み込み`sync_remote_users`オペレーションから除外されたりする可能性があります。

外部プロセスでは、スタックが上書きできる UIDs OpsWorks を持つユーザーを作成することもできます。たとえば一部のオペレーティングシステムパッケージはインストール後のプロセスの一環としてユーザーを作成することができます。ユーザーまたはソフトウェアプロセスが、デフォルトである UID を明示的に指定せずに Linux ベースのオペレーティングシステムにユーザーを作成する場合、スタックによって割り当てられた UID は *<### OpsWorks UID> ####* + OpsWorks 1 です。

ベストプラクティスとして、 OpsWorks スタックユーザーを作成し、 OpsWorks スタックコンソールで AWS CLI、または AWS SDK を使用してアクセスを管理します。の外部にある OpsWorks スタックインスタンスでユーザーを作成する場合は OpsWorks、4000 を超える *UnixID* 値を使用します。

OpsWorks スタックのユーザー設定の編集

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

ユーザーをインポートした後、次の手順に従って、それらのユーザーの設定を編集することができます。

ユーザーの設定を編集するには

1. ユーザーページのユーザーのアクション列で 編集 を選択します。
2. 次の設定を指定できます。

Self Management

ユーザーが [MySettings] ページを使用して個人 SSH キーを指定できるように許可するには、[Yes] を選択します。

> **Note**
>
> また、[DescribeMyUserProfile] アクションと [UpdateMyUserProfile] アクションの権限を付与する IAM ポリシーをユーザーにアタッチすることで、自己管理を可能にすることができます。

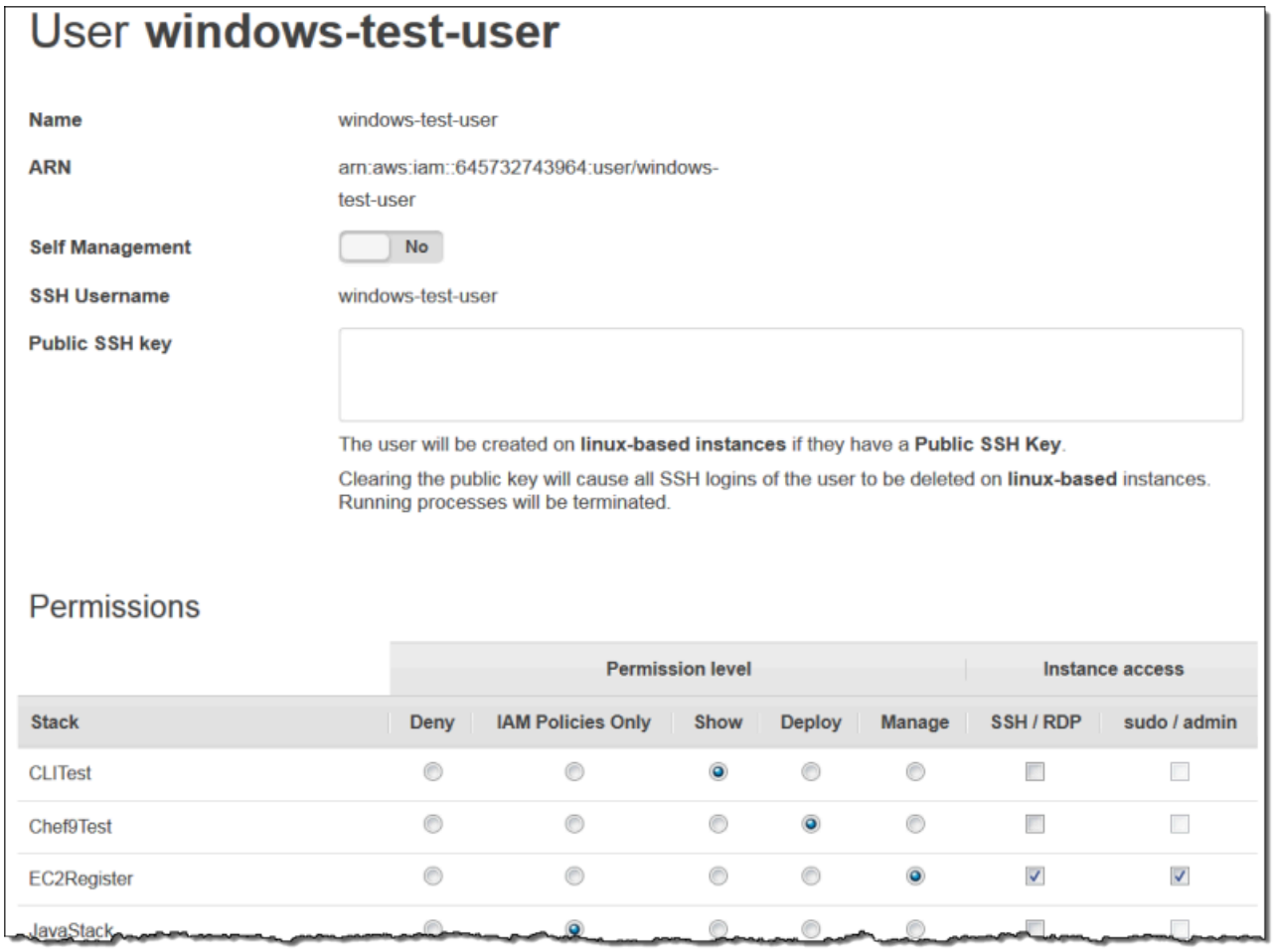
Public SSH key

(オプション) ユーザーのパブリック SSH キーを入力します。このキーは、ユーザーの [My Settings] ページに表示されます。自己管理が有効にされている場合、ユーザーは [My Settings] を編集し、独自のキーを指定できます。詳細については、「ユーザーのパブリック SSH キーの登録」を参照してください。

OpsWorks スタックはすべての Linux インスタンスにこのキーをインストールします。ユーザーは関連するプライベートキーを使用してログインできます。詳細については、「SSH でのログイン」を参照してください。Windows のスタックでこのキーを使用することはできません。

アクセス許可

(オプション) 各スタックに対してユーザーが持つ権限レベルを、各スタックの [Permissions] ページで個別に設定するのではなく、一箇所で設定します。権限レベルの詳細については、「スタックごとの権限の付与」を参照してください。



OpsWorks スタックごとのアクセス許可をスタックユーザーに付与する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックのユーザーアクセス許可を管理する最も簡単な方法は、スタックのアクセス許可ページを使用することです。各スタックには、その権限を付与するページがそれぞれに存在します。

何らかの権限設定に変更を加える場合は、管理ユーザーまたは Manage ユーザーとしてサインインする必要があります。リストには、 OpsWorks スタックにインポートされたユーザーのみが表示されます。ユーザーの作成とインポートの方法については、「ユーザーの管理」を参照してください。

デフォルトの権限レベルはIAMポリシーのみで、IAMポリシーにある権限のみがユーザーに付与されます。

- IAM または別のリージョンからユーザーをインポートする際、ユーザーは既存のすべてのスタックのリストに IAM Policies Only (IAMポリシーのみ) 権限レベルで追加されます。
- デフォルトでは、別のリージョンからインポートされたユーザーは、インポート先のリージョンのスタックにアクセスできません。別のリージョンからインポートしたユーザーがインポート先のリージョンを管理できるようにするには、インポートしたユーザーにこれらのスタックへのアクセス権限を割り当てる必要があります。
- 新しいスタックを作成すると、現在の全ユーザーが、IAM Policies Only の権限レベルでリストに追加されます。

トピック

- ユーザーの権限の設定
- 権限の表示
- IAM 条件キーを使用した一時認証情報の確認

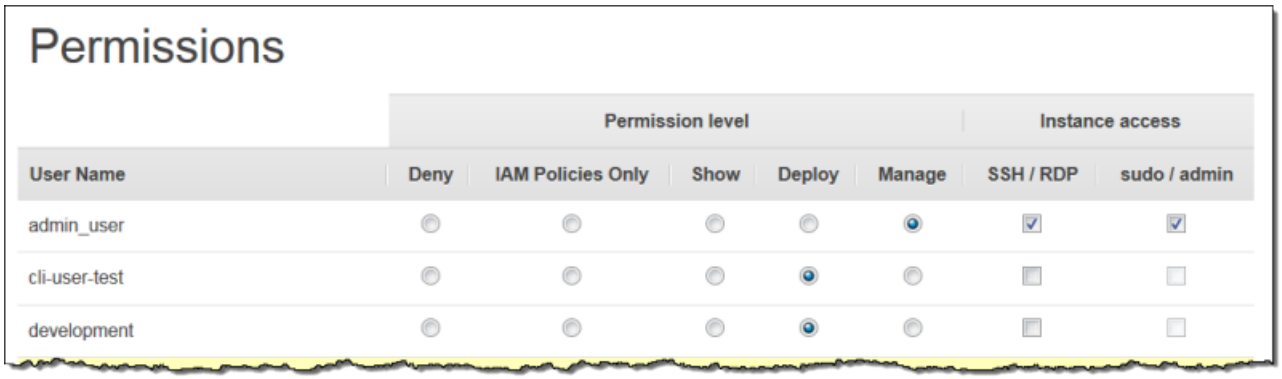
ユーザーの権限の設定

ユーザーの権限を設定するには

1. ナビゲーションペインの [アクセス権限] を選択します。
2. [Permissions] ページの [Edit] を選択します。
3. [Permission level] と [Instance access] の設定を変更します。

    - [Permissions level] の設定を使用して、いずれかの標準権限レベルをユーザーごとに割り当てます。そのスタックにユーザーがアクセスできるかどうかや、どのようなアクションを実行できるかが、この設定によって決まります。ユーザーに IAM ポリシーがある場合、 OpsWorks Stacks は両方のアクセス許可セットを評価します。例については、「ポリシーの例」を参照してください。
    - [Instance access SSH/RDP] 設定は、ユーザーがスタックのインスタンスに SSH (Linux) または RDP (Windows) アクセスできるかどうかを指定します。

SSH/RDP アクセスを許可した場合、オプションで sudo/admin を選択できます。これにより、ユーザーにスタックのインスタンスでの sudo (Linux) または管理者 (Windows) 特権が付与されます。



ユーザーにはそれぞれ、次のいずれかの権限レベルを割り当てることができます。各レベルによって許可される一連のアクションについては、「OpsWorks スタックのアクセス許可レベル」を参照してください。

拒否

スタック OpsWorks にフルアクセス許可を付与する IAM ポリシーがあっても、ユーザーは OpsWorks スタックに対してスタックアクションを実行できません。未リリース製品のスタックに対する一部のユーザーのアクセスを拒否する場合などに使用します。

IAM Policies Only

新しくインポートされたすべてのユーザー、および新しく作成されたスタックのすべてのユーザーに割り当てられるデフォルトのレベルです。アタッチされている IAM ポリシーによって、ユーザーの権限が決まります。ユーザーに IAM ポリシーがない場合、またはポリシーに明示的な OpsWorks スタックアクセス許可がない場合、ユーザーはスタックにアクセスできません。管理ユーザーは、IAMポリシーによってすでにフルアクセス権限が付与されているため、通常このレベルが割り当てられます。

[表示]

ユーザーはスタックを表示できますが、一切オペレーションは実行できません。たとえば、マネージャは通常、アカウントのスタックを必要に応じて監視しますが、アプリケーションをデプロイしたりスタックに変更を加えたりする必要はありません。

デプロイ

Show 権限に加えて、アプリケーションをデプロイすることがユーザーに許可されます。たとえば、アプリケーション開発者は、必要に応じてスタックのインスタンスに対する更新をデプロイしますが、スタックにレイヤーやインスタンスを追加する必要はありません。

管理

Deploy 権限に加え、さまざまなスタック管理オペレーションがユーザーに許可されます。その例を次に示します。

- レイヤーやインスタンスを追加または削除する。
- スタックの [Permissions] ページを使用して権限レベルをユーザーに割り当てる。
- リソースを登録または登録を解除する。

たとえば、スタック内のインスタンスの数とタイプを適切に保ち、パッケージやオペレーティングシステムの更新処理を担うマネージャをスタックごとに指定できます。

> **Note**
>
> Manage レベルのユーザーがスタックを作成したり、スタックをクローン化したりすることはできません。これらの権限は、IAMポリシーによって付与されなければる必要があります。例については、アクセス許可の管理を参照してください。

ユーザーにも IAM ポリシーがある場合、 OpsWorks Stacks は両方のアクセス許可セットを評価します。これにより、ユーザーに権限レベルを割り当て、ポリシーを適用して、そのレベルで許可されるアクションを制限または強化することができます。たとえば、スタックの作成とクローン化を許可したり、リソースの登録と登録解除を拒否したりするポリシーを 管理 ユーザーにアタッチすることができます。そうしたポリシーの例については、「ポリシーの例」を参照してください。

> **Note**
>
> ユーザーのポリシーによって追加のアクションが許可された場合、[Permissions] ページの設定が見かけ上オーバーライドされます。たとえば、ユーザーがレイヤーの作成 アクションを許可するポリシーを持っていても、許可 ページを使用して デプロイ 許可を指定した場合でも、ユーザーは依然としてレイヤーを作成することができます。このルールでは [Deny] (拒否) オプションは例外です。AWSOpsWorks_FullAccess ポリシーがアタッチされていて

も、ユーザーのスタックアクセスが拒否されます。詳細については、「ポリシーを使用した AWS リソースへのアクセスの制御」を参照してください。

権限の表示

自己管理が有効になっている場合、ユーザーは、右上の [My Settings] を選択することで、すべてのスタックに関して自分に割り当てられている権限レベルの概要を表示できます。ユーザーは、アタッチされたポリシーで DescribeMyUserProfile アクションと UpdateMyUserProfile アクションの権限が付与されていれば、自分の設定 にもアクセスできます。

IAM 条件キーを使用した一時認証情報の確認

OpsWorks には、追加の認可ケース (個々のユーザーに対するスタックへの読み取り専用または読み取り/書き込みのアクセスの簡易化された管理など) をサポートする組み込みの認可レイヤーがあります。この認可レイヤーは、一時認証情報の使用に依存しています。このため、IAM ドキュメントの「条件キーの有無をチェックする条件演算子」で説明されているように、ユーザーが長期的な認証情報を使用していることを確認したり、一時認証情報を使用しているユーザーのアクションをブロックしたりするために、`aws:TokenIssueTime` 条件を使用することはできません。

IAM ポリシーをアタッチして OpsWorks スタックのアクセス許可を管理する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

IAM ポリシーをアタッチすることで、ユーザーの OpsWorks スタックアクセス許可を指定できます。次に示す一部の権限については、ポリシーのアタッチが必須となります。

- 管理ユーザー権限 (ユーザーのインポートなど)。
- 特定のアクションの権限 (スタックの作成、スタックのクローン化など)。

アタッチされたポリシーが必要となる全アクションの一覧については、「OpsWorks スタックのアクセス許可レベル」を参照してください。

ポリシーを使用することによって、許可 ページで付与された権限レベルをカスタマイズすることもできます。このセクションでは、IAM ポリシーをユーザーに適用して OpsWorks スタックのアクセス許可を指定する方法の概要を示します。詳細については、「AWS リソースのアクセス管理」を参照してください。

IAM ポリシーは、1 つ以上の statements (ステートメント) を含んだ JSON オブジェクトです。各ステートメント要素には、一連の権限が記述され、それぞれ 3 つの基本要素が存在します。

アクション

権限の対象となるアクション。 OpsWorks スタックアクションを として指定しますopsworks:*action*。Action には、特定のアクションを指定できます。例えば、opsworks:CreateStack は、CreateStack の呼び出しをユーザーに許可するかどうかを指定します。また、ワイルドカードを使用して複数のアクションをまとめて指定することもできます。例えば、すべての作成アクションを指定するには、opsworks:Create* とします。スタックアクションの完全なリストについては、 OpsWorks OpsWorks 「スタック API リファレンス」を参照してください。

[Effect] (効果)

指定したアクションを許可するか拒否するかを示します。

[リソース]

アクセス許可が影響する AWS リソース。 OpsWorks スタックには、スタックという 1 つのリソースタイプがあります。特定のスタックリソースの権限を指定するには、Resource 形式で、スタックの ARN を arn:aws:opsworks:*region*:*account_id*:stack/*stack_id*/ に指定します。

また、ワイルドカードを使用することもできます。例えば、Resource を * に設定すると、すべてのリソースに対する権限が付与されます。

たとえば、次のポリシーでは、ID が 2860-2f18b4cb-4de5-4429-a149-ff7da9f0d8ee であるスタックのインスタンスをユーザーが停止できないようにしています。

JSON

```
{
  "Version":"2012-10-17",
  "Statement": [
```

```
    {
      "Action": "opsworks:StopInstance",
      "Effect": "Deny",
      "Resource": "arn:aws:opsworks:*:*:stack/2f18b4cb-4de5-4429-a149-
ff7da9f0d8ee/"
    }
  ]
}
```

IAM ユーザーに権限を付与する方法の詳細については、「https://docs.aws.amazon.com/IAM/latest/UserGuide/id_users_change-permissions.html#users_change_permissions-add-console」を参照してください。

IAM ポリシーの作成や変更を行う方法の詳細については、許可とポリシー を参照してください。OpsWorks スタックポリシーの例については、「」を参照してくださいポリシーの例。

ポリシーの例

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このセクションでは、 スタックユーザーに適用できる IAM OpsWorks ポリシーの例について説明します。

- 管理権限 では、管理ユーザーに権限を付与するために使用されるポリシーを説明します。
- アクセス許可の管理 と Deploy 権限 では、管理とデプロイの権限レベルを補足したり制限したりする目的でユーザーに適用できるポリシーの例を紹介します。

  OpsWorks スタックは、IAM ポリシーによって付与されたアクセス許可と、 アクセス許可ページによって付与されたアクセス許可を評価することで、ユーザーのアクセス許可を決定します。詳細については、「 ポリシーを使用した AWS リソースへのアクセスの制御」を参照してください。[Permissions] ページの権限の詳細については、「OpsWorks スタックのアクセス許可レベル」を参照してください。

管理権限

IAM コンソール https://console.aws.amazon.com/iam/ を使用して AWSOpsWorks_FullAccess ポリシーにアクセスします。このポリシーをユーザーにアタッチして、すべての OpsWorks スタックアクションを実行するアクセス許可を付与します。ユーザーのインポートを管理ユーザーに許可するなど、特定の操作については、IAM の権限が必須となります。

スタックがユーザーに代わって Amazon EC2 インスタンスなどの他の AWS リソースにアクセスできるようにする IAM ロールを作成する必要があります。 OpsWorks 通常、このタスクを処理するには、管理者ユーザーに最初のスタックを作成し、 OpsWorks スタックにロールを作成します。以後そのロールは、後続のすべてのスタックで使用することができます。詳細については、「OpsWorks スタックがユーザーに代わって動作することを許可する」を参照してください。

最初のスタックを作成する管理ユーザーは、AWSOpsWorks_FullAccess ポリシーに含まれていない特定の IAM アクションに対する権限を持っている必要があります。ポリシーの `Actions` セクションに、次のアクセス許可を追加します。適切な JSON 構文のために、アクション間にカンマを追加し、アクションのリストの末尾にあるコンマを削除してください。

```
"iam:PutRolePolicy",
"iam:AddRoleToInstanceProfile",
"iam:CreateInstanceProfile",
"iam:CreateRole"
```

アクセス許可の管理

Manage 権限レベルのユーザーは、レイヤーの追加と削除を含め、さまざまなスタック管理アクションを実行できます。このトピックでは、管理 ユーザーにアタッチすることで、標準の権限を制限したり補足したりできるいくつかのポリシーについて説明します。

Manage ユーザーによるレイヤーの追加と削除を拒否する

管理 権限レベルを制限し、レイヤーの追加と削除を除くすべての 管理 アクションの実行を許可するには、次の IAM ポリシーをアタッチします。*#####*、*account_id*、および *stack_id* を設定に適した値に置き換えます。

スタックの作成とクローン化を Manage ユーザーに許可する

Manage (管理) 権限レベルでは、スタックの作成もクローン化も許可されません。以下の IAM ポリシーをアタッチすることで、ユーザーがスタックの作成やクローン化を作成できるように 管理 を変更することができます。*#####* および *account_id* を設定に適した値に置き換えます。

Manage ユーザーによるリソースの登録と登録解除を拒否する

管理 権限レベルのユーザーは、スタックへの Amazon EBS と Elastic IP アドレスリソースの登録および登録解除を行うことができます。リソースの登録を除くすべての 管理 アクションを許可するように 管理 権限を制限するには、次のポリシーを適用します。

JSON

```
{
  "Version":"2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Deny",
      "Action": [
        "opsworks:RegisterVolume",
        "opsworks:RegisterElasticIp"
      ],
      "Resource": "*"
    }
  ]
}
```

ユーザーのインポートを Manage ユーザーに許可する

アクセス許可の管理レベルでは、ユーザーは OpsWorks スタックにユーザーをインポートできません。ユーザーをインポートしたり削除したりできるように 管理 権限を補足するには、次の IAM ポリシーを適用します。*#####* および *account_id* を設定に適した値に置き換えます。

Deploy 権限

Deploy 権限レベルのユーザーは、アプリケーションを作成することも削除することもできません。アプリケーションを作成したり削除したりできるように デプロイ 権限を補足するには、次の IAM ポリシーをアタッチします。*#####*、*account_id*、および *stack_id* を設定に適した値に置き換えます。

OpsWorks スタックのアクセス許可レベル

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソ

リューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このセクションでは、 OpsWorks スタックのアクセス許可ページのアクセス許可レベルの表示、デプロイ、管理で許可されるアクションを一覧表示します。また、ユーザーにIAMポリシーを適用することによってのみパーミッションを与えることができるアクションのリストも含まれています。

表示

表示 レベルでは、Describe*XYZ* コマンドが許可されます。ただし次のコマンドは例外です。

```
DescribePermissions
DescribeUserProfiles
DescribeMyUserProfile
DescribeStackProvisioningParameters
```

ユーザーの自己管理を管理ユーザーが有効にした場合、表示 権限レベルのユーザーは、DescribeMyUserProfile と UpdateMyUserProfile も使用できます。自己管理の詳細については、「ユーザー設定の編集」を参照してください。

デプロイ

デプロイ レベルでは、表示 レベルで許可されるアクションに加えて次のアクションが許可されます。

```
CreateDeployment
UpdateApp
```

管理

管理 レベルでは、デプロイ レベルと 表示 レベルで許可されるアクションに加えて次のアクションが許可されます。

```
AssignInstance
AssignVolume
AssociateElasticIp
AttachElasticLoadBalancer
CreateApp
CreateInstance
```

```
CreateLayer
DeleteApp
DeleteInstance
DeleteLayer
DeleteStack
DeregisterElasticIp
DeregisterInstance
DeregisterRdsDbInstance
DeregisterVolume
DescribePermissions
DetachElasticLoadBalancer
DisassociateElasticIp
GrantAccess
GetHostnameSuggestion
RebootInstance
RegisterElasticIp
RegisterInstance
RegisterRdsDbInstance
RegisterVolume
SetLoadBasedAutoScaling
SetPermission
SetTimeBasedAutoScaling
StartInstance
StartStack
StopInstance
StopStack
UnassignVolume
UpdateElasticIp
UpdateInstance
UpdateLayer
UpdateRdsDbInstance
UpdateStack
UpdateVolume
```

Permissions That Require an IAM Policy (IAM ポリシーを必要とする権限)

適切な IAM ポリシーをユーザーに適用して、以下のアクションの権限を付与する必要があります。例については、「ポリシーの例」を参照してください。

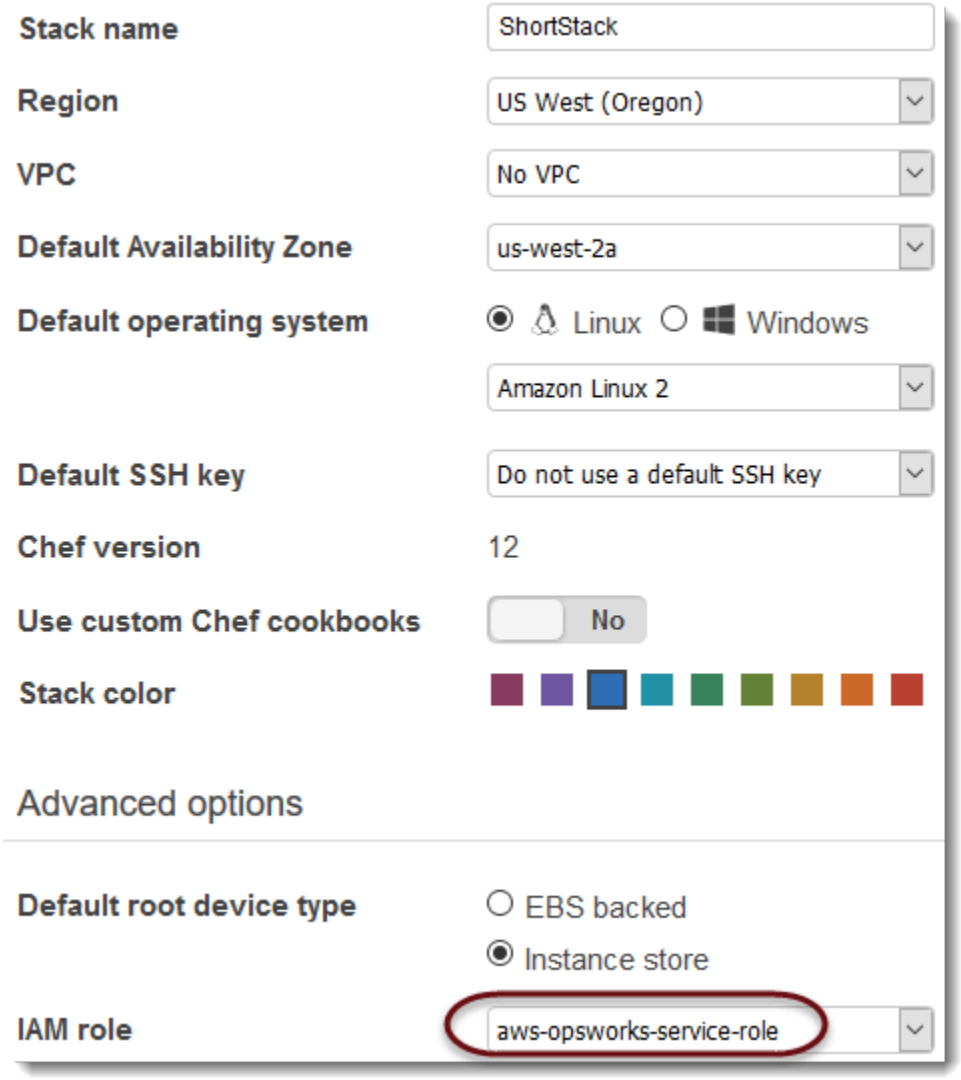
```
CloneStack
CreateStack
CreateUserProfile
DeleteUserProfile
```

```
DescribeUserProfiles
UpdateUserProfile
```

OpsWorks スタックがユーザーに代わって動作することを許可する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックは、ユーザーに代わってさまざまな AWS サービスとやり取りする必要があります。例えば、 OpsWorks Stacks は、Amazon EC2 とやり取りしてインスタンスを作成し、Amazon CloudWatch とやり取りしてモニタリング統計を取得します。スタックを作成するときは、通常はサービスロールと呼ばれる IAM OpsWorks ロールを指定します。これにより、スタックに適切なアクセス許可が付与されます。



新しいスタックのサービスロールを指定するときは、次のいずれかの操作を実行します。

- 以前に作成した標準サービスロールを指定します。

  通常は、最初のスタックの作成時に標準サービスロールを作成し、そのロールを以降のすべてのスタックに使用できます。
- IAM コンソールまたは API を使用して作成したカスタムサービスロールを指定します。

  このアプローチは、標準サービスロールよりも制限されたアクセス許可を OpsWorks スタックに付与する場合に便利です。

> **Note**
>
> 最初のスタックを作成するには、IAM [AdministratorAccess] ポリシーテンプレートでアクセス権限が定義されている必要があります。これらの権限により、 OpsWorks スタックは新しいIAMサービスロールを作成し、前述のようにユーザーをインポートすることができます。以降のすべてのスタックでは、ユーザーは最初のスタック用に作成されたサービスロールを選択できます。スタックを作成するための完全な管理権限は必要ではありません。

標準サービスロールにより、次のアクセス許可が付与されます。

- すべての Amazon EC2 アクションを実行する (`ec2:*`)。
- CloudWatch 統計を取得する (`cloudwatch:GetMetricStatistics`)。
- Elastic Load Balancing を使用してサーバーにトラフィックを分散させる (`elasticloadbalancing:*`)。
- Amazon RDS インスタンスをデータベースサーバーとして使用する (`rds:*`)。
- IAM ロール (`iam:PassRole`) を使用して、 スタックと Amazon EC2 OpsWorks インスタンス間の安全な通信を提供します。

カスタムサービスロールを作成する場合は、スタックの管理に必要なすべてのアクセス許可が OpsWorks スタックに付与されていることを確認する必要があります。次の JSON 例は、標準サービスロールのポリシーステートメントです。カスタムサービスロールのポリシーステートメントには、少なくとも以下のアクセス権限が含まれていなければなりません。

JSON

```
{
    "Version":"2012-10-17",
    "Statement": [
        {
            "Action": [
                "ec2:*",
                "iam:PassRole",
                "cloudwatch:GetMetricStatistics",
                "cloudwatch:DescribeAlarms",
                "ecs:*",
                "elasticloadbalancing:*",
```

```
                "rds:*"
            ],
            "Effect": "Allow",
            "Resource": [
                "*"
            ],
            "Condition": {
                "StringEquals": {
                    "iam:PassedToService": "ec2.amazonaws.com"
                }
            }
        }
    ]
}
```

また、サービスロールには信頼関係があります。 OpsWorks スタックによって作成されたサービスロールには、次の信頼関係があります。

JSON

```
{
  "Version":"2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Sid": "StsAssumeRole",
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "opsworks.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}
```

OpsWorks スタックがユーザーに代わって動作するには、サービスロールにこの信頼関係が必要です。デフォルトのサービスロールを使用する場合は、信頼関係を変更しないでください。カスタムサービスロールを作成する場合は、以下のいずれかを実行することで信頼関係を指定します。

- [AM console] (IAMコンソール) で [Create role] (ロールの作成) ウィザードを使用している場合は、[Choose a use case] (ユースケースの選択) で [Opsworks] を選択します。このロールには適切な信頼関係がありますが、暗黙のうちにアタッチされているポリシーはありません。 OpsWorks スタックにユーザーに代わって行動する権限を付与するために、以下を含むカスタマー管理ポリシーを作成し、新しいロールにアタッチします。

  JSON

```
{
  "Version":"2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "cloudwatch:DescribeAlarms",
        "cloudwatch:GetMetricStatistics",
        "ec2:*",
        "ecs:*",
        "elasticloadbalancing:*",
        "iam:GetRolePolicy",
        "iam:ListInstanceProfiles",
        "iam:ListRoles",
        "iam:ListUsers",
        "rds:*"
      ],
      "Resource": [
        "*"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "iam:PassRole"
      ],
      "Resource": "*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "iam:PassedToService": "ec2.amazonaws.com"
        }
      }
    }
  ]
```

```
}
```

- CloudFormation テンプレートを使用している場合は、テンプレートのリソースセクションに次のようなものを追加できます。

```
"Resources": {
  "OpsWorksServiceRole": {
      "Type": "AWS::IAM::Role",
      "Properties": {
        "AssumeRolePolicyDocument": {
            "Statement": [ {
              "Effect": "Allow",
              "Principal": {
                  "Service": [ "opsworks.amazonaws.com" ]
              },
              "Action": [ "sts:AssumeRole" ]
            } ]
        },
        "Path": "/",
        "Policies": [ {
            "PolicyName": "opsworks-service",
            "PolicyDocument": {
              ...
            } ]
        }
      },
   }
}
```

OpsWorks スタックでのサービス間の混乱した代理の防止

Important

この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

混乱した代理問題は、アクションを実行する許可を持たないエンティティが、より特権のあるエンティティにアクションを実行するように強制できるセキュリティの問題です。では AWS、サービス間のなりすましにより、混乱した代理問題が発生する可能性があります。サービス間でのなりすましは、1 つのサービス (呼び出し元サービス) が、別のサービス (呼び出し対象サービス) を呼び出すときに発生する可能性があります。呼び出し元サービスは、本来ならアクセスすることが許可されるべきではない方法でその許可を使用して、別のお客様のリソースに対する処理を実行するように操作される場合があります。これを防ぐため、 AWS では、アカウントのリソースへのアクセス権が付与されたサービスプリンシパルで、すべてのサービスのデータを保護するために役立つツールを提供しています。

スタックアクセスポリシーで aws:SourceArnおよび aws:SourceAccount グローバル条件コンテキストキーを使用して、 AWS OpsWorks スタックが別のサービスに付与するアクセス許可をスタックに制限することをお勧めします。aws:SourceArn の値に Amazon S3 バケット ARN などのアカウント ID が含まれていない場合は、両方のグローバル条件コンテキストキーを使用して、アクセス許可を制限する必要があります。同じポリシーステートメントでこれらのグローバル条件コンテキストキーの両方を使用し、アカウント ID にaws:SourceArn の値が含まれていない場合、aws:SourceAccount 値と aws:SourceArn 値の中のアカウントには、同じアカウント ID を使用する必要があります。クロスサービスのアクセスにスタックを 1 つだけ関連付けたい場合は、aws:SourceArn を使用します。クロスサービスが使用できるように、アカウント内の任意のスタックを関連づけたい場合は、aws:SourceAccount を使用します。

の値は、 OpsWorks スタックの ARN aws:SourceArnである必要があります。

混乱した代理問題から保護するための最も効果的な方法は、 OpsWorks スタックの完全な ARN を指定しながら、 aws:SourceArnグローバル条件コンテキストキーを使用することです。完全な ARN が不明な場合や、複数のサーバー ARN 場合には、ARN の不明な部分にワイルドカード (*) を含む aws:SourceArn グローバルコンテキスト条件キーを使用します。例えば、arn:aws:*servicename*:*:*123456789012*:*。

次のセクションでは、 スタックで OpsWorks aws:SourceArnおよび aws:SourceAccount グローバル条件コンテキストキーを使用して、混乱した代理問題を防ぐ方法を示します。

OpsWorks スタックで混乱した代理の悪用を防ぐ

このセクションでは、 スタックで OpsWorks 混乱した代理悪用を防ぐ方法と、 スタックへのアクセスに使用している IAM ロールにアタッチできるアクセス許可ポリシーの例について説明します OpsWorks 。セキュリティのベストプラクティスとして、aws:SourceArn と aws:SourceAccount の条件キーを IAM ロールとほかのサービスとの信頼関係に追加することをお

勧めします。信頼関係により OpsWorks 、 スタックは、 OpsWorks スタックスタックを作成または管理するために必要な他の サービスでアクションを実行するロールを引き受けることができます。

信頼関係を編集するために、**aws:SourceArn** と **aws:SourceAccount** 条件キーを追加するには

1. IAM コンソール (https://console.aws.amazon.com/iam/) を開きます。
2. 左のナビゲーションペインで、[ロール] を選択してください。
3. 検索ボックスで、 OpsWorks スタックへのアクセスに使用するロールを検索します。 AWS マネージドロールは ですaws-opsworks-service-role。
4. そのロールの 概要 ページで、信頼関係 タブを選択します。
5. 信頼関係 タブで、信頼ポリシーの編集 を選択します。
6. [信頼ポリシーの編集] ページで、少なくとも aws:SourceArn や aws:SourceAccount 条件キーの一つをポリシーに追加します。aws:SourceArn を使用して、クロスサービス (Amazon EC2 など) と OpsWorks スタック間の信頼関係を、より制限の厳しい特定の OpsWorks スタックスタックに制限します。aws:SourceAccount を追加して、クロスサービスと OpsWorks スタック間の信頼関係を、制限の少ない特定のアカウントのスタックに制限します。以下に例を示します。両方の条件キーを使用する場合、アカウント ID は同じでなければならないことに注意してください。
7. 条件キーの追加が終了したら、 [更新ポリシー] を選択します。

aws:SourceArn と aws:SourceAccount を使用してスタックへのアクセスを制限するロールのその他の例を以下に示します。

トピック

- 例: 特定のリージョンのスタックへのアクセス
- 例: aws:SourceArn に複数のスタック ARN の追加

例: 特定のリージョンのスタックへのアクセス

次のロール信頼関係ステートメントは、米国東部 (オハイオ) リージョン () のすべての OpsWorks スタックスタックにアクセスしますus-east-2。リージョンは aws:SourceArn の ARN 値で指定されていますが、スタック ID の値はワイルドカード (*) であることに注意してください。

JSON

```
{
```

```
  "Version":"2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "opsworks.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "aws:SourceAccount": "123456789012"
        },
        "ArnEquals": {
          "aws:SourceArn": "arn:aws:opsworks:us-east-2:123456789012:stack/*"
        }
      }
    }
  ]
}
```

例: **aws:SourceArn** に複数のスタック ARN の追加

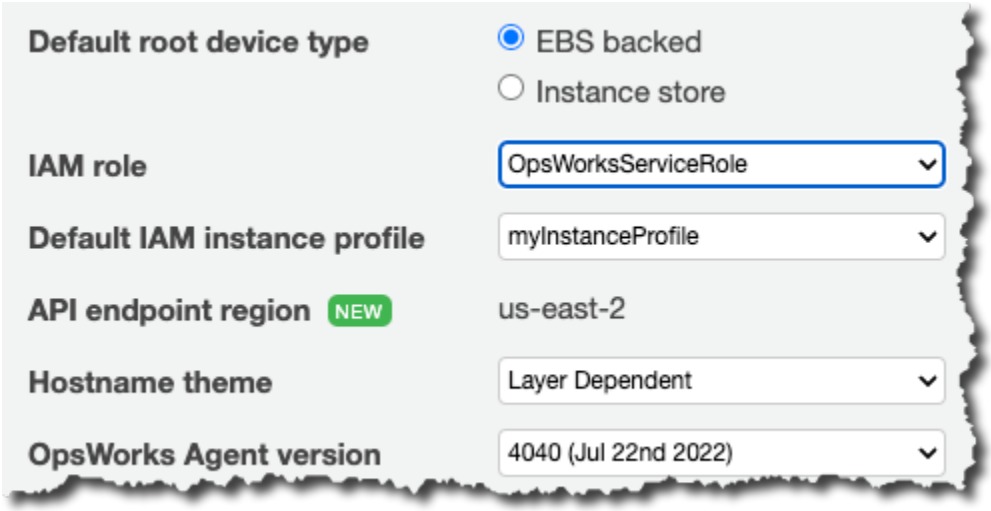
次の例では、アカウント ID 123456789012 の OpsWorks 2 つの スタックスタックの配列へのアクセスを制限します。

EC2 インスタンスで実行するアプリケーションに対するアクセス許可の指定

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

スタックの Amazon EC2 インスタンスで実行するアプリケーションが、Amazon S3 バケットなどの他の AWS リソースにアクセスするには、適切なアクセス許可が必要です。アクセス許可を付与する

には、インスタンスプロファイルを使用します。OpsWorks スタックスタックを作成するときに、インスタンスごとにインスタンスプロファイルを指定できます。



レイヤー設定を編集して、レイヤーのインスタンスのプロファイルを指定することも可能です。

インスタンスプロファイルにより、IAM ロールが指定されます。インスタンスで実行するアプリケーションは、ロールのポリシーによって付与されたアクセス許可に応じて、AWS リソースにアクセスするためにそのロールを引き受けることができます。アプリケーションがロールを引き受ける方法の詳細については、「API コールを使用してロールを引き受ける」を参照してください。

次のいずれかの方法でインスタンスプロファイルを作成することができます。

- IAM コンソールまたは API を使用して、プロファイルを作成します。

  詳細については、「ロール (委任とフェデレーション)」を参照してください。
- CloudFormation テンプレートを使用してプロファイルを作成します。

  IAM リソースをテンプレートに含める方法のいくつかの例については、「Identity and Access Management (IAM) Template Snippets」(Identity and Access Management (IAM) テンプレートスニペット) を参照してください。

インスタンスプロファイルには信頼関係と AWS のリソースへのアクセス許可を付与するアタッチされたポリシーがあります。

JSON

```
{
```

```
  "Version":"2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Sid": "",
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "ec2.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}
```

OpsWorks スタックがユーザーに代わって動作するには、インスタンスプロファイルにこの信頼関係が必要です。デフォルトのサービスロールを使用する場合は、信頼関係を変更しないでください。カスタムサービスロールを作成する場合は、次のように信頼関係を指定します。

- [IAM console] (IAMコンソール) の「Create Role」(ロールロールの作成) ウィザードを使用している場合、ウィザードの2ページ目の [AWS Service Roles] (AWS サービスロール)で [Amazon EC2] (Amazon EC2) のロールタイプを指定します。
- CloudFormation テンプレートを使用している場合は、テンプレートのリソースセクションに次のような内容を追加できます。

```
"Resources": {
      "OpsWorksEC2Role": {
         "Type": "AWS::IAM::Role",
         "Properties": {
            "AssumeRolePolicyDocument": {
               "Statement": [ {
                  "Effect": "Allow",
                  "Principal": {
                     "Service": [ "ec2.amazonaws.com" ]
                  },
                  "Action": [ "sts:AssumeRole" ]
               } ]
            },
            "Path": "/"
         }
      },
      "RootInstanceProfile": {
         "Type": "AWS::IAM::InstanceProfile",
```

```
         "Properties": {
            "Path": "/",
            "Roles": [ {
               "Ref": "OpsWorksEC2Role"
            }
         ]
      }
   }
}
```

インスタンスプロファイルを作成すると、その時点でプロファイルのロールに適切なポリシーをアタッチできます。スタックを作成した後、IAM console (IAM コンソール) または API を使用して、適切なポリシーをプロファイルのロールにアタッチする必要があります。たとえば、次のポリシーでは、amzn-s3-demo-bucket という名前の Amazon S3 バケット内のすべてのオブジェクトへのフルアクセスを許可します。*region* と amzn-s3-demo-bucket を、設定に適した値に置き換えます。

インスタンスプロファイルの作成および使用方法の例については、「Amazon S3 バケットの使用」を参照してください。

アプリケーションがインスタンスプロファイルを使用して EC2 インスタンスから OpsWorks スタック API を呼び出す場合、ポリシーは スタックやその他の AWS サービスに適切な`iam:PassRole`アクションに加えて OpsWorks 、 アクションを許可する必要があります。`iam:PassRole` アクセス許可により、 OpsWorks スタックがユーザーに代わってサービスロールを引き受けることができるようになります。 OpsWorks スタック API の詳細については、AWS OpsWorksリファレンス」を参照してください。

以下は、EC2 インスタンスからスタックアクションを呼び出すこと、および Amazon EC2 OpsWorks または Amazon S3 アクションを呼び出すことを許可する IAM ポリシーの例です。

> **Note**
>
> を許可しない場合`iam:PassRole`、 OpsWorks スタックアクションの呼び出しは失敗し、次のようなエラーが発生します。
>
> ```
> User: arn:aws:sts::123456789012:federated-user/Bob is not authorized
> to perform: iam:PassRole on resource:
> arn:aws:sts::123456789012:role/OpsWorksStackIamRole
> ```

アクセス許可に EC2 インスタンスのロールを使用する詳細については、https://docs.aws.amazon.com/IAM/latest/UserGuide/role-usecase-ec2app.htmlユーザーガイドのAWS Identity and Access Management Amazon EC2 インスタンスで実行されるアプリケーションに、AWS リソースへのアクセスを付与するを参照してください。

SSH アクセスの管理

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックは、Linux スタックと Windows スタックの両方の SSH キーをサポートします。

- Linux インスタンスでは、エージェント CLI コマンドを実行するためなど、インスタンスにログインするときに SSH を使用できます。

  詳細については、「SSH でのログイン」を参照してください。
- Windows インスタンスの場合、SSH キーを使用してインスタンスの管理者パスワードを取得してから、そのパスワードを使用して RDP でログインできます。

  詳細については、「RDP でのログイン」を参照してください。

認証は、パブリックキーとプライベートキーで構成される SSH キーペアに基づきます。

- インスタンスにパブリックキーをインストールします。

  場所は特定のオペレーティングシステムによって異なりますが、 OpsWorks スタックによって詳細が処理されます。
- プライベートキーをローカルに保存し、SSH クライアント (`ssh.exe` など) で指定して、インスタンスにアクセスします。

  SSH クライアントはプライベートキーを使用して、インスタンスに接続します。

スタックのユーザーに SSH アクセス権限を与えるには、SSH キーペアを作成し、パブリックキーをスタックのインスタンスにインストールして、プライベートキーを安全に管理する方法が必要です。

Amazon EC2は、インスタンスにパブリック SSH キーをインストールする簡単な方法を提供します。Amazon EC2 コンソールまたは API を使用して、使用する予定の AWS リージョンごとに 1 つまたは複数のキーペアを作成できます。Amazon EC2 は公開キーを AWS に保存し、ユーザーはプライベートキーをローカルに保存します。インスタンスの起動時に、リージョンのいずれかのキーペアを指定すると、そのペアは Amazon EC2 でインスタンスに自動的にインストールされます。次に、対応するプライベートキーを使用して、インスタンスにログインします。詳細については、「Amazon EC2 のキーペア」を参照してください。

OpsWorks スタックでは、スタックの作成時にリージョンの Amazon EC2 キーペアのいずれかを指定し、オプションで各インスタンスの作成時に別のキーペアで上書きできます。 OpsWorks スタックが対応する Amazon EC2インスタンスを起動するときにキーペアが指定され、Amazon EC2 でインスタンスにパブリックキーがインストールされます。その後、標準の Amazon EC2 インスタンスと同様に、プライベートキーを使用してログインしたり、管理者パスワードを取得したりできます。詳細については、「Amazon EC2 キーをインストールする」を参照してください。

Amazon EC2 のキーペアの使用は便利ですが、2 つの重要な制限があります。

- Amazon EC2 キーペアは、特定の AWS リージョンに関連付けられています。

  複数のリージョンで作業する場合、複数のキーペアを管理しなければなりません。
- 1 つのインスタンスにインストールできる Amazon EC2 キーペアは 1 つだけです。

  複数のユーザーにログインを許可する場合、そのすべてがプライベートキーのコピーを所有する必要がありますが、セキュリティ上、これは推奨されません。

Linux スタックの場合、 OpsWorks スタックは SSH キーペアをよりシンプルで柔軟に管理する方法を提供します。

- ユーザーは各自、個人キーペアを登録します。

  で説明されているように、プライベートキーをローカルに保存し、パブリックキーを OpsWorks スタックに登録しますユーザーのパブリック SSH キーの登録。
- スタックのユーザーアクセス権限を設定した場合、どのユーザーにスタックのインスタンスに対する SSH アクセスを付与するかを指定します。

OpsWorks スタックは、承認された各ユーザーのスタックのインスタンスにシステムユーザーを自動的に作成し、パブリックキーをインストールします。これでユーザーは、「SSH でのログイン」で説明しているように、対応するプライベートキーを使用してログインできます。

個人 SSH キーを使用すると、以下のような利点があります。

- インスタンスでキーを手動で設定する必要はありません。 OpsWorks スタックはすべてのインスタンスに適切なパブリックキーを自動的にインストールします。
- OpsWorks スタックは、承認されたユーザーの個人パブリックキーのみをインストールします。

  承認されていないユーザーは個人プライベートキーを使用してインスタンスにアクセスすることはできません。Amazon EC2 キーペアを使用すると、対応するプライベートキーを持つすべてユーザーは、SSH アクセス権限の有無にかかわらず、ログインできます。
- SSH アクセスが不要になったユーザーは、[Permissions] ページを使用して、ユーザーの SSH/RDP アクセス権限を無効にすることができます。

  OpsWorks スタックは、スタックのインスタンスからパブリックキーをすぐにアンインストールします。
- どの AWS リージョンにも同じキーを使用できます。

  ユーザーは、1 個のプライベートキーを管理するだけで済みます。
- プライベートキーを共有する必要がありません。

  各ユーザーが、独自のプライベートキーを使用できます。
- キーを簡単に更新できます。

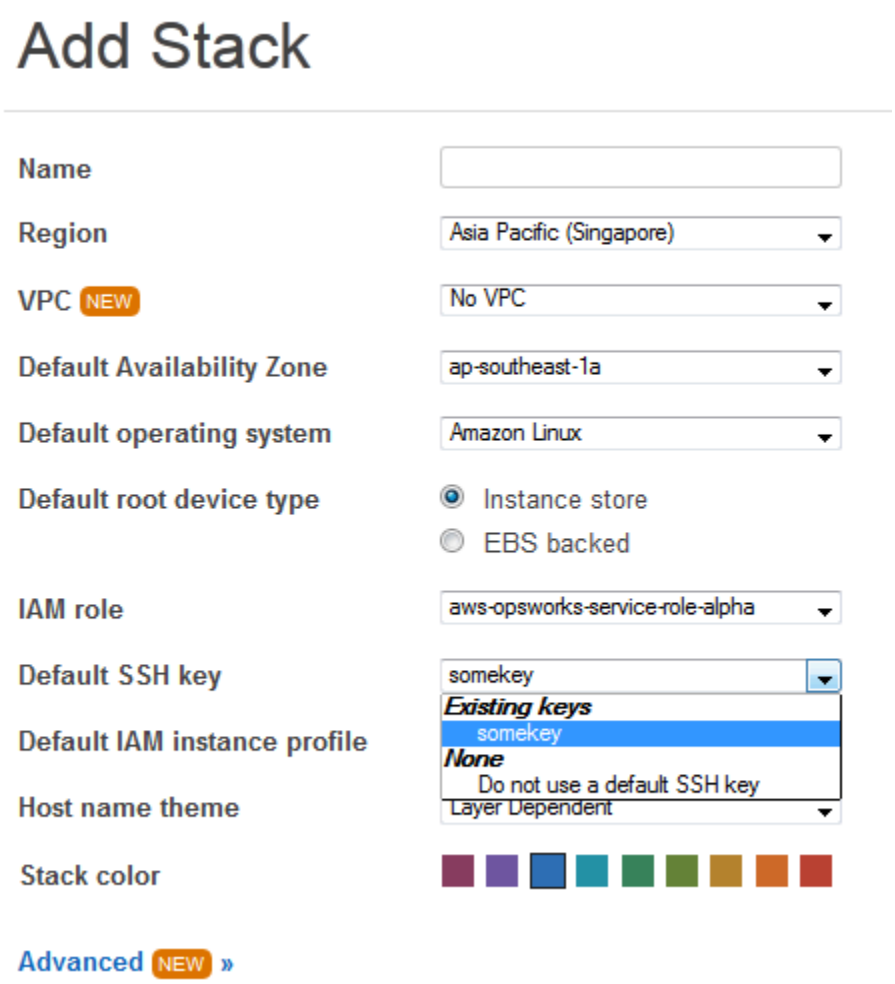
  管理者またはユーザーが [My Settings] でパブリックキーを更新すると、 OpsWorks スタックによってインスタンスが自動的に更新されます。

Amazon EC2 キーをインストールする

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS

re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

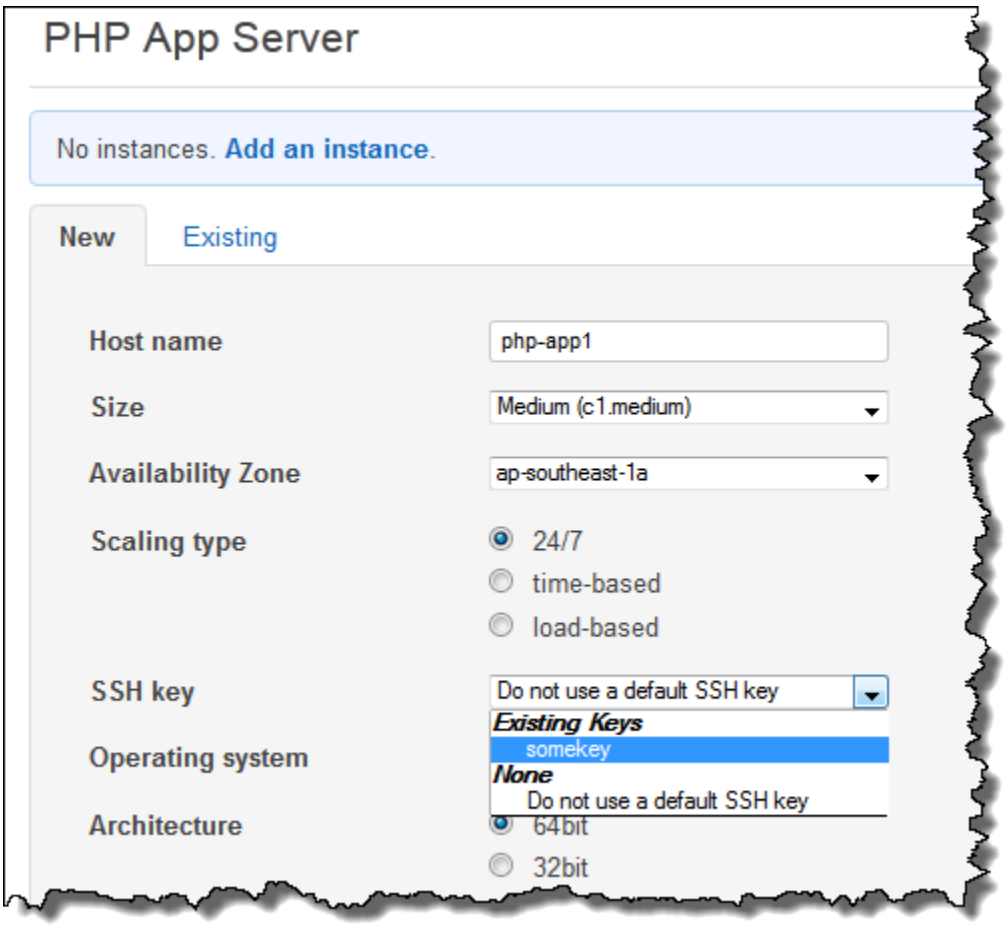
スタックを作成する際に、スタック内のすべてのインスタンスにデフォルトでインストールされる Amazon EC2 の SSH キーを指定することができます。



[Default SSH key (デフォルトのSSHキー)] リストに、AWS アカウントの Amazon EC2 キーが表示されます。次のいずれかを試すことができます。

- リストから適切なキーを選択します。
- キーを指定しない場合は、[Do not use a default SSH key] を選択します。

[Do not use a default SSH key] を選択した場合、またはスタックのデフォルトのキーを上書きする場合は、インスタンスの作成時にキーを指定できます。



インスタンスを起動すると OpsWorks 、 スタックはパブリックキーを `authorized_keys` ファイルにインストールします。

ユーザーのパブリック SSH キーの登録

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

ユーザーのパブリック SSH キーを登録するには、次の 2 つの方法があります。

- 管理ユーザーが、1 人または複数のユーザーにパブリック SSH キーを割り当て、そのユーザーに対応するプライベートキーを提供します。
- 管理ユーザーが、1 人または複数のユーザーの自己管理機能を有効にします。

  その後、これらのユーザーは自身のパブリック SSH キーを指定できるようになります。

自己管理機能を有効にする方法や、管理ユーザーが他のユーザーにパブリックキーを割り当てる方法の詳細については、「ユーザー設定の編集」を参照してください。

PuTTY 端末で SSH を使用して Linux ベースのインスタンスに接続するには、追加ステップが必要です。詳細については、AWS ドキュメントの「PuTTY を使用した Windows から Linux インスタンスへの接続」および「インスタンスへの接続に関するトラブルシューティング」を参照してください。

以下に説明しているのは、自己管理機能が有効化された ユーザーがパブリックキーを指定する方法です。

SSH パブリックキーを指定するには

1. SSH キーペア を作成します。

   最も簡単なアプローチは、キーペアをローカルに生成する方法です。詳細については、「独自のキーを作成して Amazon EC2 にインポートする方法」を参照してください。

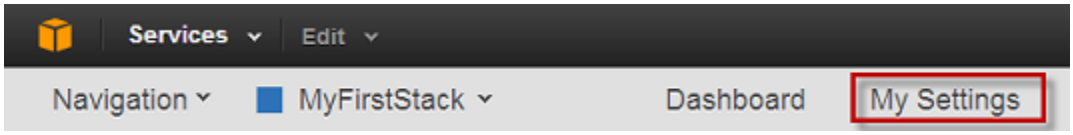
   > **Note**
   >
   > PuTTYgen を使用してキーペアを生成する場合は、パブリックキーからパブリックキーをコピーして OpenSSH authorized_keys ファイルボックスに貼り付けます。[Save Public Key] をクリックすると、パブリックキーは MindTerm でサポートされない形式で保存されます。

2. 自己管理が有効になっている IAM ユーザーとして OpsWorks スタックコンソールにサインインします。

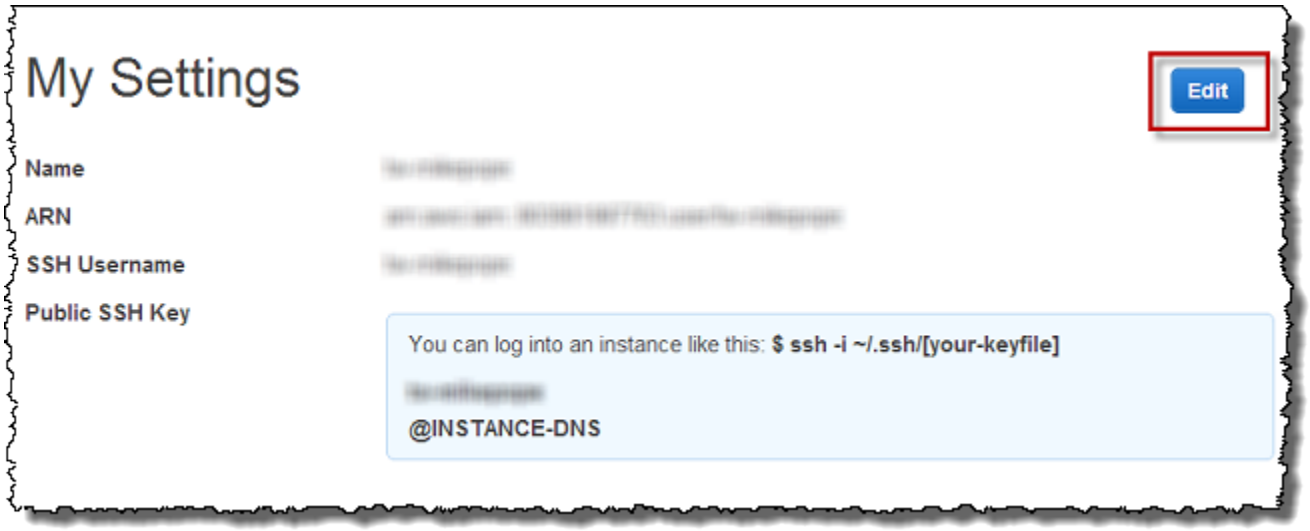
   > **Important**
   >
   > アカウント所有者として、または自己管理が有効になっていない IAM ユーザーとしてサインインした場合、 OpsWorks スタックにはマイ設定が表示されません。管理ユーザー

またはアカウント所有者である場合は、代わりに [Users] ページに移動してユーザー設定を編集することで、SSH キーを指定できます。

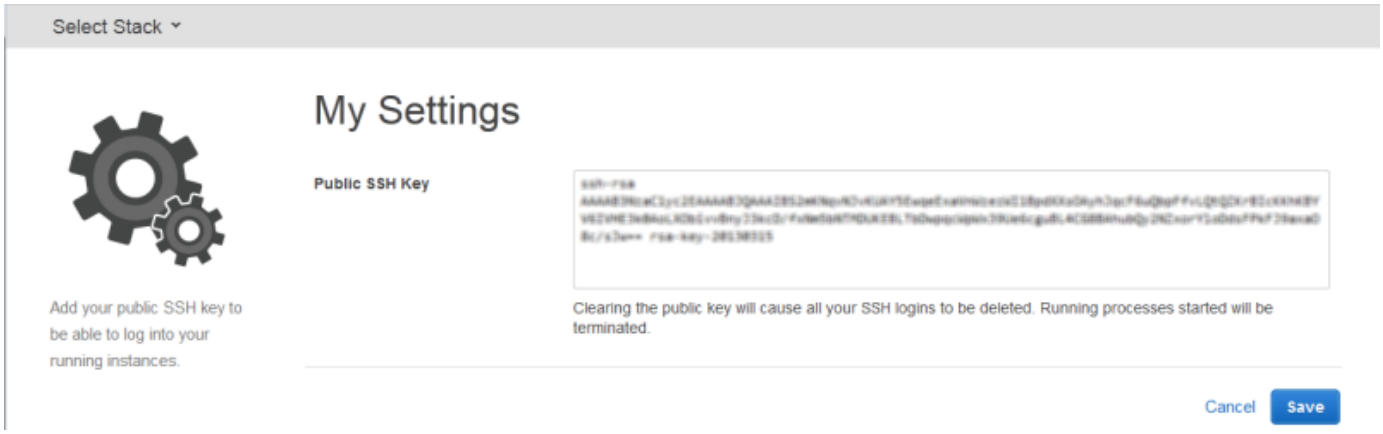
3. 自分の設定 を選択すると、サインインしている ユーザーの設定が表示されます。



4. [My Settings] ページで、[Edit] をクリックします。



5. [Public SSH Key] ボックスで、SSH パブリックキーを入力し、[Save] をクリックします。



Important

組み込みの MindTerm SSH クライアントを使用して Amazon EC2 インスタンスに接続するには、ユーザーは IAM ユーザーとしてサインインし、パブリック SSH キーを OpsWorks ス

タックに登録する必要があります。詳細については、「組み込みの MindTerm SSH クライアントの使用」を参照してください。

Linux セキュリティ更新の管理

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

セキュリティの更新

Linux オペレーティングシステムのプロバイダーは定期的な更新を提供し、その多くがオペレーティングシステムのセキュリティパッチですが、中にはインストールされているパッケージに対する更新も含まれます。インスタンスのオペレーティングシステムは、最新のセキュリティパッチで最新の状態にする必要があります。

デフォルトでは、 OpsWorks スタックはインスタンスの起動が完了した後、セットアップ中に最新の更新を自動的にインストールします。 OpsWorks スタックは、アプリケーションサーバーの再起動などの中断を避けるため、インスタンスのオンライン後に更新を自動的にインストールしません。代わりに、中断の可能性を最小限に抑えるため、オンラインインスタンスへの更新はユーザーが自身で管理します。

次のいずれかの方法を使用して、オンラインインスタンスを更新することをお勧めします。

- 新しいインスタンスを作成して、現在のオンラインインスタンスを置き換えます。次に、現在のインスタンスを削除します。

  新しいインスタンスに、セットアップ時にインストールされたセキュリティパッチの最新のセットが適用されます。
- Chef 11.10 以前のスタックの Linux ベースのインスタンスでは、Update Dependencies スタックコマンドを実行します。このコマンドは指定したインスタンスに、セキュリティパッチの現在のセットと他の更新をインストールします。

これらのアプローチの両方で、 OpsWorks Stacks は `yum update` Amazon Linux および Red Hat Enterprise Linux (RHEL) または Ubuntu `apt-get update`に対して を実行して更新を実行します。それぞれのディストリビューションで更新の処理方法は若干異なるため、更新がインスタンスにどのような影響を及ぼすか正確に把握するため、関連リンクの情報を確認してください。

- [Amazon Linux (Amazon Linux)] – Amazon Linux は、セキュリティパッチ更新のほか、パッケージ更新など、機能の更新をインストールします。

  詳細については、「Amazon Linux AMI に関するよくある質問」を参照してください。
- [Ubuntu (Ubuntu)] – Ubuntu では主にセキュリティパッチのインストールに限定されますが、制限された数の重要な修正でパッケージ更新をインストールします。

  詳細については、Ubuntu Wiki の LTS に関するページを参照してください。
- CentOS – CentOS の更新では、一般的に前のバージョンとのバイナリ互換性が維持されます。
- RHEL – RHEL の更新では、一般的に前のバージョンとのバイナリ互換性が維持されます。

  詳細については、「Red Hat Enterprise Linux ライフサイクル」を参照してください。

特定のパッケージバージョンの指定など、より細かく更新を管理する場合は、[CreateInstance (インスタンスの作成)]、[UpdateInstance (インスタンスの更新)]、[CreateLayer (レイヤーの作成)]、または [UpdateLayer (レイヤーの更新)] アクション (または同等の [AWS SDK (AWS SDK)] メソッド、[AWS CLI (AWS CLI)] コマンド) を使用して自動更新を無効にして、`InstallUpdatesOnBoot` パラメータを `false` に設定します。次の例に、AWS CLI を使用して、既存のレイヤーのデフォルト設定として `InstallUpdatesOnBoot` を無効にする方法を示します。

```
aws opsworks update-layer --layer-id layer ID --no-install-updates-on-boot
```

その後、更新を自身で管理する必要があります。たとえば、次のいずれかの方法を使用できます。

- 適切なシェルコマンドを実行するカスタムレシピを実装して、希望の更新をインストールします。

  システムの更新はライフサイクルイベントとは本質的に無関係であるため、カスタムクックブックにレシピを含めて、それを手動で実行します。パッケージ更新の場合、シェルコマンドの代わりに、yum_package (Amazon Linux) または apt_package (Ubuntu) リソースを使用することもできます。
- SSH で各インスタンスにログインし、適切なコマンドを手動で実行してください。

セキュリティグループの使用

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

セキュリティグループ

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

各 Amazon EC2 インスタンスには、むしろファイアウォールに近い、インスタンスのネットワークトラフィックを管理する 1 つ以上の関連付けられたセキュリティグループがあります。セキュリティグループには 1 つ以上のルールがあり、各ルールでは許可するトラフィックの特定のカテゴリが指定されます。ルールでは、以下を指定します。

- 許可するトラフィックのタイプ (SSH、HTTP など)
- トラフィックのプロトコル (TCP、UDP など)
- トラフィックの発信元の IP アドレスの範囲
- トラフィックの許可するポート範囲

セキュリティグループには、次の 2 種類のルールがあります。

- 着信ネットワークトラフィックを規定するインバウンドルール。

たとえば一般的に、アプリケーションサーバーのインスタンスには、IP アドレスからポート 80 へのインバウンド HTTP トラフィックを許可するインバウンドルールと、特定の一連の IP アドレスからのポート 22 へのインバウンド SSH トラフィックを許可する別のインバウンドルールがあります。

- アウトバウンドルールは、アウトバウンドネットワークトラフィックを規定します。

  一般的な方法としては、アウトバウンドトラフィックを許可するデフォルト設定を使用します。

セキュリティグループの詳細については、「Amazon EC2 Security Groups (Amazon EC2 セキュリティグループ)」を参照してください。

リージョンで初めてスタックを作成すると、 OpsWorks Stacks は適切なルールセットを持つ各レイヤーの組み込みセキュリティグループを作成します。すべてのグループには、すべてのアウトバウンドトラフィックを許可するデフォルトのアウトバウンドルールが設定されます。一般的に、インバウンドルールは以下を許可します。

- 適切な スタックレイヤーからのインバウンド TCP、UDP、ICMP OpsWorks トラフィック
- ポート 22 のインバウンド TCP トラフィック (SSH ログイン)

> **Warning**
>
> デフォルトのセキュリティグループの設定では、任意のネットワークの場所 (0.0.0.0/0) に対して SSH (ポート 22) が開かれます。これにより、すべての IP アドレスからの SSH によるインスタンスへのアクセスが許可されます。実稼働環境では、特定の IP アドレスまたはアドレス範囲からの SSH によるアクセスのみを許可する設定を使用する必要があります。デフォルトのセキュリティグループを作成直後に更新するか、カスタムセキュリティグループを使用します。

- ウェブサーバーレイヤーの場合、ポート 80 (HTTP) および 443 (HTTPS) へのすべてのインバウンド TCP および UDP トラフィック

> **Note**
>
> 組み込みの `AWS-OpsWorks-RDP-Server` セキュリティグループは、RDP アクセスを許可するため、すべての Windows インスタンスに割り当てられます。ただし、デフォルトではルールが何もありません。Windows スタックを実行しており、RDP を使用してインスタン

スにアクセスする場合、RDP アクセスを許可するインバウンドルールを追加する必要があります。詳細については、「RDP でのログイン」を参照してください。

各グループの詳細については、[Amazon EC2 console (Amazon EC2 コンソール)] に移動し、ナビゲーションペインで [Security Groups (セキュリティグループ)] を選択して、適切なレイヤーのセキュリティグループを選択します。たとえば、AWS-OpsWorks-Default-Server はすべてのスタックの組み込みのデフォルトセキュリティグループで、AWS-OpsWorks-WebApp は Chef 12 のサンプルスタックの組み込みのデフォルトセキュリティグループです。

> **Note**
>
> OpsWorks スタックセキュリティグループを誤って削除した場合、再作成するには OpsWorks 、スタックにタスクを実行させることをお勧めします。同じ AWS リージョンに新しいスタックを作成するだけで、VPC が存在する場合は、削除したセキュリティグループを含むすべての組み込みセキュリティグループ OpsWorks が自動的に再作成されます。その後、今後使用しないスタックを削除します。セキュリティグループは残ります。セキュリティグループを手動で再作成する場合は、グループ名の大文字と小文字の設定を含め、元のセキュリティグループとまったく同じである必要があります。
> さらに、以下のいずれかが発生した場合、 OpsWorks スタックはすべての組み込みセキュリティグループの再作成を試みます。
>
> - スタックコンソールで OpsWorks スタックの設定ページに変更を加えます。
> - スタックのインスタンスの 1 つを起動する。
> - 新しいスタックを作成する。

セキュリティグループを指定するには、次のいずれかの方法を使用できます。[Use OpsWorks security groups] 設定を使用して、スタックの作成時に独自の設定を指定します。

- はい (デフォルト設定) – OpsWorks スタックは、適切な組み込みセキュリティグループを各レイヤーに自動的に関連付けます。

  レイヤーの組み込みセキュリティグループを微調整するには、必要な設定を指定してカスタムセキュリティグループを追加します。ただし、Amazon EC2 で複数のセキュリティグループを評価するときに最も制限が緩いルールが使用されるため、この方法を使用して、組み込みのグループより厳しいルールを指定することはできません。
- いいえ – OpsWorks スタックは組み込みのセキュリティグループをレイヤーに関連付けません。

適切なセキュリティグループを作成し、1 つ以上のそのグループを作成した各レイヤーと関連付ける必要があります。この方法は、組み込みのグループより厳しいルールを指定する場合に使用します。必要に応じて、組み込みセキュリティグループとレイヤーを手動で関連付けることもできます。カスタムセキュリティグループは、カスタム設定を必要とするレイヤーにのみ必要です。

> **Important**
>
> 組み込みのセキュリティグループを使用する場合、グループの設定を手動で変更して、より厳しいルールを作成することはできません。スタックを作成するたびに、 OpsWorks スタックは組み込みのセキュリティグループの設定を上書きするため、次回スタックを作成するときに行った変更は失われます。レイヤーで組み込みのセキュリティグループよりも制限の厳しいセキュリティグループの設定が必要な場合は、[Use OpsWorks security groups] を [No] に設定して、目的の設定でカスタムセキュリティグループを作成し、作成時にレイヤーに割り当てます。

OpsWorks Chef 12 Linux の スタックのサポート

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このセクションでは、Chef OpsWorks 12 Linux 用の スタックの概要を説明します。Windows での Chef 12 の詳細については、「入門ガイド: Windows」を参照してください。Linux での以前の Chef バージョンの詳細については、「Linux 用 Chef 11.10 以前のバージョン」を参照してください。

概要:

OpsWorks スタックは、Linux スタック用の Chef の最新バージョンである Chef 12 をサポートしています。詳細については、「Learn Chef」を参照してください。

OpsWorks スタックは Linux スタック用の Chef 11.10 を引き続きサポートします。ただし、さまざまなコミュニティクックブックを活用するか、独自のカスタムクックブックを作成することを希望する高度な Chef ユーザーの場合は、Chef 12 を使用することをお勧めします。Chef 12 スタックには、Linux 用 Chef 11.10 以前のバージョンに対して次のような利点があります。

- 2 つの個別の Chef 実行 - インスタンスでコマンドが実行されると、 スタックエージェントは 2 つの独立した Chef 実行を実行するようになりました。1 つはインスタンスを AWS Identity and Access Management (IAM) などの他の AWS サービスと統合するタスクに対して実行し、もう 1 つはカスタムクックブックに対して実行します。Chef の最初の実行では、インスタンスに OpsWorks スタックエージェントがインストールされ、ユーザーのセットアップと管理、ボリュームのセットアップと設定、CloudWatch メトリクスの設定などのシステムタスクが実行されます。2 回目の実行は、OpsWorks スタックライフサイクルイベント 用のカスタムレシピの実行専用です。この 2 回目の実行により、独自の Chef クックブックまたはコミュニティクックブックを使用することができます。
- 名前空間の競合の解決 - Chef 12 以前では、 OpsWorks スタックがシステムタスクを実行し、共有環境で組み込みのレシピとカスタムレシピを実行していました。これにより、名前空間の競合が発生し、 OpsWorks スタックが実行したレシピが明確ではありません。不要なデフォルト設定は、手動で上書きする必要がありました。これは時間がかかり、エラー発生の原因となるタスクです。Linux 用 Chef 12 では、 OpsWorks スタックは PHP、Node.js、Rails などのアプリケーションサーバー環境用の組み込み Chef クックブックをサポートしなくなりました。組み込みレシピを排除することで、 OpsWorks スタックは組み込みレシピとカスタムレシピ間の命名衝突の問題を排除します。
- Chef コミュニティクックブックの強力なサポート – OpsWorks スタック Chef 12 Linux は、Chef スーパーマーケットのコミュニティクックブックの互換性とサポートを強化します。 OpsWorks スタックが以前に提供した組み込みクックブック、つまり最新のアプリケーションサーバー環境とフレームワークで使用するように設計されたクックブックよりも優れたコミュニティクックブックを使用できるようになりました。これらのクックブックのほとんどは、Linux 用 Chef 12 を変更することなく実行できます。詳細については、[Learn Chef] ウェブサイト、[Chef Supermarket] (Chef スーパーマーケット) ウェブサイトで [Chef Supermarket] (Chef スーパーマーケット) を、および [GitHub] 上のリポジトリで [Chef Cookbooks] (シェフクックブック) を参照してください。
- タイムリーな Chef 12 の更新 - OpsWorks スタックは、各 Chef リリースの直後に Chef 環境を最新の Chef 12 バージョンに更新します。Chef 12 では、Chef のマイナーな更新と新しい OpsWorks Stacks エージェントリリースが同時に行われます。これにより、新しい Chef リリースを直接テストすることができ、Chef レシピおよびアプリケーションで Chef の最新機能を利用できます。

Chef 12 以前にサポートされていた Chef のバージョンの詳細については、「Linux 用 Chef 11.10 以前のバージョン」を参照してください。

Chef 12 への移行

Chef OpsWorks 12 Linux の主なスタックの変更点と、以前の Chef バージョン 11.10、11.4、および 0.9 のサポートは次のとおりです。

- Linux スタック用 Chef 12 に対して組み込みレイヤーは提供されず、サポートもされません。カスタムレシピのみが実行されるため、このサポートの削除により、インスタンスのセットアップ方法に透明性が与えられ、カスタムクックブックの作成と維持がかなり容易になります。たとえば、組み込みの Stacks OpsWorks レシピの属性を上書きする必要がなくなりました。組み込みレイヤーを削除すると、 スタックは Chef OpsWorks コミュニティによって開発および保守されているクックブックをより適切にサポートできるため、それらを最大限に活用できます。Linux 用 Chef 12 で使用できなくなった組み込みのレイヤータイプは、AWS Flow (Ruby)、Ganglia、HAProxy、Java App Server、Memcached、MySQL、Node.js App Server、PHP App Server、Rails App Server、および Static Web Server です。
  - OpsWorks スタックは指定したレシピを実行しているため、カスタムクックブックを実行して組み込み OpsWorks の スタック属性を上書きする必要がなくなりました。独自のレシピまたはコミュニティレシピで属性を無効にするには、Chef 12 ドキュメントの「属性について」の手順と例に従ってください。
- OpsWorks スタックは、Chef 12 Linux スタックの次のレイヤーのサポートを引き続き提供します。
  - カスタムレイヤー
  - Amazon RDS サービスレイヤー
  - ECS クラスターレイヤー
- Chef 12 Linux 用のスタック設定とデータバッグは変更され、Chef 12.2 Windows 用と非常によく類似したものになりました。これにより、これらのデータバッグのクエリ、分析、およびトラブルシューティングが簡単になりました (特に、さまざまなオペレーティングシステムタイプでスタックを操作する場合)。 OpsWorks スタックは暗号化されたデータバッグをサポートしていないことに注意してください。パスワードや証明書などの機密データを暗号化された形式で保存するには、プライベート S3 バケットに保存することをお勧めします。これで、Amazon SDK for Ruby を使用するカスタムレシピを作成できます。例については、 SDK for Ruby を使用する を参照してください。詳細については、OpsWorks スタックデータバッグリファレンス を参照してください。
- Chef 12 Linux で、Berkshelf はスタックインスタンスでインストールされなくなりました。代わりに、ローカルの開発用マシンで Berkshelf を使用して、クックブックの依存関係をローカルに

パッケージ化することをお勧めします。次に、依存関係を含めて、パッケージを Amazon Simple Storage サービスにアップロードします。最後に、クックブックソースとしてアップロードされたパッケージを使用するように Chef Linux 12 のスタックを変更します。詳細については、「ローカルでのクックブックの依存関係のパッケージ化」を参照してください。

- EBS ボリュームに対する RAID 設定のサポートは終了しました。パフォーマンスを向上させるには、[provisioned IOPS for Amazon Elastic Block Store (Amazon EBS)] (Amazon Elastic Block Store (Amazon EBS) 用にプロビジョニングされたIOPS) を使用することができます。
- autofs のサポートは終了しました。
- サブバージョンリポジトリのサポートは終了しました。
- レイヤーごとの OS パッケージのインストールは、カスタムレシピで完了する必要があります。詳細については、「レイヤーごとのパッケージのインストール」を参照してください。

サポートされるオペレーティングシステム

Chef 12 は、以前のバージョンの Chef と同じ Linux オペレーティングシステムをサポートします。Chef 12 Linux スタックで使用できる Linux オペレーティングシステムタイプとバージョンのリストについては、「Linux オペレーティングシステム:」を参照してください。

サポートされるインスタンスタイプ

OpsWorks スタックは、ハイパフォーマンスコンピューティング (HPC) クラスターコンピューティング、クラスター GPU、ハイメモリクラスターインスタンスタイプなどの特殊なインスタンスタイプを除き、Chef 12 Linux スタックのすべてのインスタンスタイプをサポートします。

詳細情報

Linux スタック用 Chef 12 の操作方法の詳細については、以下を参照してください。

- 使用開始: サンプル

  スタックコンソールを使用して Node OpsWorks .js アプリケーション環境を作成するための簡単な実践的な演習をガイドすることで、 OpsWorks スタックについて説明します。

- 入門ガイド: Linux

  OpsWorks スタックと Chef 12 Linux を紹介し、 OpsWorks スタックコンソールを使用した実践的な演習を通じて、トラフィックを処理する Node.js アプリを備えたシンプルなレイヤーを含む基本的な Chef 12 Linux スタックを作成します。

- カスタムレイヤー

  Chef 12 Linux スタックのクックブックとレシピを含むレイヤーの追加に関するガイダンスを提供します。Chef コミュニティが提供している、すぐに使用できるクックブックとレシピを使用するか、または独自のクックブックとレシピを作成できます。
- データバッグへの移行

  Chef 11 以前のバージョンを実行している Linux スタックによって使用されているインスタンス JSON を Chef 12 と比較します。Chef 12 のインスタンスの JSON 形式に関する参照資料へのリンクも示します。

属性からデータバッグへのスタック設定の移行

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックは、さまざまなスタック設定を Chef レシピに公開します。これらのスタック設定には、次のような値が含まれます。

- スタッククックブックのソース URL
- レイヤーボリューム設定
- インスタンスのホスト名
- Elastic Load Balancing DNS名
- アプリケーションソースの URL
- ユーザー名

レシピからスタックの設定を参照すると、スタック設定を直接レシピでハードコードするよりも堅牢になり、エラーが起きにくくなります。このトピックでは、これらのスタック設定にアクセスする方法、および Linux 用の Chef 11.10 以前のバージョンの属性から Chef 12 Linux のデータバッグに移行する方法について説明します。

Linux 用の Chef 11.10 以前のバージョンでは、スタック設定は Chef 属性として利用でき、Chef node オブジェクトまたは Chef 検索によってアクセスします。これらの属性は、 `/var/lib/aws/opsworks/chef` ディレクトリ内の一連の JSON ファイルの OpsWorks スタックインスタンスに保存されます。詳細については、「スタック設定およびデプロイ属性: Linux」を参照してください。

Chef 12 Linux で、スタック設定は、Chef データバッグとして使用でき、Chef 検索を通じてのみアクセスされます。データバッグは、 `/var/chef/runs/run-ID/data_bags` ディレクトリ内の一連の JSON ファイルの OpsWorks スタックインスタンスに保存されます。*run-ID* は、インスタンスで実行される各 Chef OpsWorks に スタックが割り当てる一意の ID です。スタック設定は、現在では Chef 属性として利用できないので、Chef node オブジェクトを通じてスタック設定にアクセスすることはできません。詳細については、を参照してくださいOpsWorks スタックデータバッグリファレンス

たとえば、Linux 用の Chef 11.10 以前のバージョンでは、次のレシピコードで Chef node オブジェクトを使用して、アプリケーションの短縮名およびソース URL を表す属性を取得します。次に、Chef ログを使用してこれら 2 つの属性値を書き込みます。

```
Chef::Log.info ("********** The app's short name is '#{node['opsworks']
['applications'].first['slug_name']}' **********")
Chef::Log.info("********** The app's URL is '#{node['deploy']['simplephpapp']['scm']
['repository']}' **********")
```

Chef 12 Linux では、次のレシピコードで `aws_opsworks_app` 検索インデックスを使用して、`aws_opsworks_app` データバッグの最初のデータバッグ項目のコンテンツを取得します。次に、コードは、Chef ログに 2 つのメッセージを書き込みます。1 つはアプリケーションの短縮名のデータバッグコンテンツで、もう 1 つはアプリケーションのソース URL データバッグのコンテンツです。

```
app = search("aws_opsworks_app").first

Chef::Log.info("********** The app's short name is '#{app['shortname']}' **********")
Chef::Log.info("********** The app's URL is '#{app['app_source']['url']}' **********")
```

Linux 用 Chef 11.10 以前のバージョンからスタック設定にアクセスするレシピコードを Chef 12 Linux に移行するには、次のようにコードを変更する必要があります。

- Chef 属性の代わりに Chef データバッグにアクセスします。
- Chef node オブジェクトの代わりに Chef 検索を使用します。

- opsworks や などの OpsWorks スタック属性名を使用する代わりにaws_opsworks_app、 などの OpsWorks スタックデータバッグ名を使用しますdeploy。

詳細については、「OpsWorks スタックデータバッグリファレンス」を参照してください。

スタックでの以前の Chef OpsWorks バージョンのサポート

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このセクションでは、以前の Chef OpsWorks バージョンの スタックドキュメントの概要を説明します。

Linux 用 Chef 11.10 以前のバージョン

Linux OpsWorks スタックの Chef 11.10、11.4、および 0.9 の スタックサポートに関するドキュメントを提供します。

Linux 用 Chef 11.10 以前のバージョン

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このセクションでは、Linux OpsWorks 用 Chef 11.10、11.4、および 0.9 の スタックドキュメントの概要を説明します。

[Chef 11 Linux スタックの使用開始]

シンプルで機能的な PHP アプリケーションサーバーのスタックを作成する方法のウォークスルーを提供します。

[Node.js スタックの初回作成]

Node.js アプリケーションサーバーをサポートする Linux スタックの作成方法と、シンプルなアプリケーションのデプロイ方法について説明します。

[OpsWorks スタックのカスタマイズ]

特定の要件を満たすように OpsWorks スタックをカスタマイズする方法について説明します。

[クックブック 101]

OpsWorks スタックインスタンスのレシピを実装する方法について説明します。

[レイヤーの負荷分散]

使用可能な OpsWorks スタックロードバランシングオプションを使用する方法について説明します。

[VPC でのスタックの実行]

仮想プライベートクラウドでスタックを作成および実行する方法について説明します。

[Chef Server からの移行]

Chef Server から OpsWorks スタックへの移行に関するガイドラインを提供します。

[OpsWorks スタックレイヤーリファレンス]

使用可能な OpsWorks スタックの組み込みレイヤーについて説明します。

[クックブックのコンポーネント]

クックブックの 3 つの標準コンポーネント (属性、テンプレート、およびレシピ) について説明します。

[スタック設定およびデプロイ属性: Linux]

Linux のスタック設定およびデプロイ属性について説明します。

[組み込みクックブックの属性]

組み込みのレシピの属性を使用して、インストールしたソフトウェアの設定を制御する方法について説明します。

[Linux 用 Chef 11.10 以前のバージョンのトラブルシューティング]

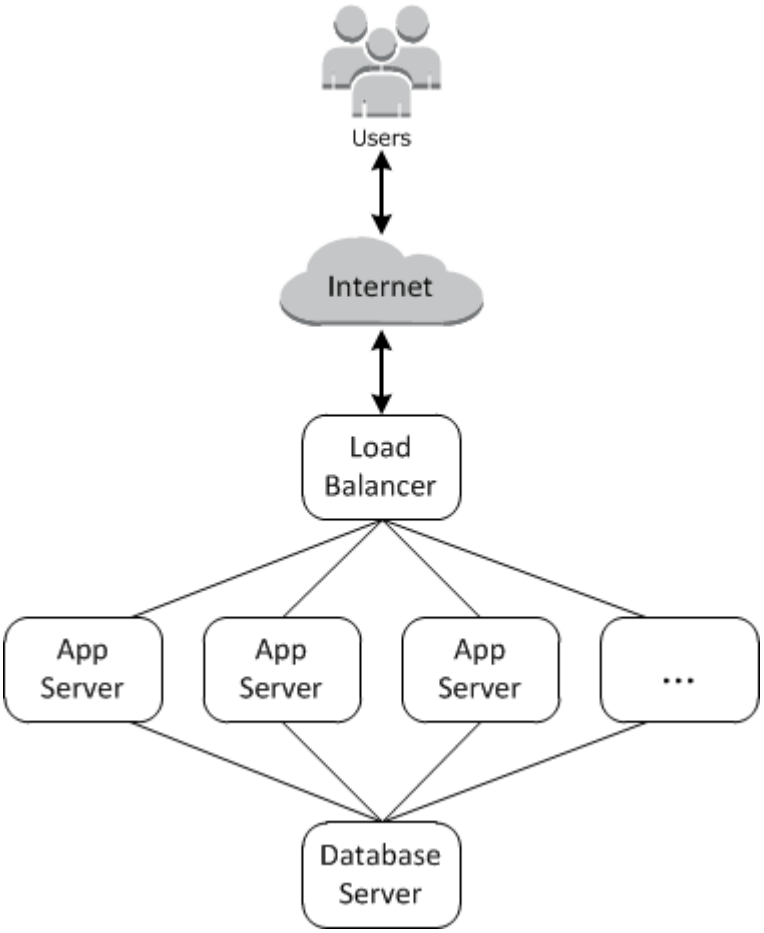
OpsWorks スタックのさまざまな問題をトラブルシューティングするアプローチについて説明します。

Chef 11 Linux スタックの使用開始

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> このセクションでは、Chef 11 を使用して Linux スタックの使用を開始する方法について説明します。Chef 12 Linux スタックの使用開始の詳細については、「入門ガイド: Linux」を参照してください。Chef 12 Windows スタックの使用開始の詳細については、「入門ガイド: Windows」を参照してください。

通常、クラウドベースのアプリケーションでは、アプリケーションサーバー、データベースサーバーなどの関連リソースのグループが必要で、一括して作成および管理する必要があります。この一連のインスタンスは スタックと呼ばれます。シンプルなアプリケーションスタックの例を以下に示します。



基本的なアーキテクチャは以下の要素で構成されます。

- ユーザーからの着信トラフィックをアプリケーションサーバーに均等に分散するロードバランサー。
- トラフィックを処理するために必要な数の一連のアプリケーションサーバーインスタンス。
- アプリケーションサーバーにバックエンドデータストアを提供するデータベースサーバー。

また、通常、アプリケーションサーバーにアプリケーションを配布する方法や、スタックを監視する方法も必要です。

OpsWorks スタックは、スタックおよび関連するアプリケーションとリソースを作成および管理するためのシンプルで簡単な方法を提供します。この章では、 OpsWorks スタックの基本とさらに高度な機能を紹介し、図表でアプリケーションサーバースタックを作成するプロセスを順を追って説明します。 OpsWorks スタックが簡単に従える増分開発モデルを使用します。基本的なスタックを設定し、正しく動作したら、フル機能の実装に到達するまでコンポーネントを追加します。

- 「ステップ 1: 前提条件を完了する」に、ウォークスルーを開始するためのセットアップ方法を示します。
- 「ステップ 2: 簡単なアプリケーションサーバースタック - Chef 11 を作成する」では、単一のアプリケーションサーバーから成る最小限のスタックを作成する方法を示します。
- 「ステップ 3: バックエンドデータストアを追加する」では、データベースサーバーを追加し、データベースサーバーをアプリケーションサーバーに接続する方法を示します。
- 「ステップ 4: MyStack の拡張」では、さらに多くのアプリケーションサーバーと、着信トラフィックを分散させるためのロードバランサーを追加することによって、増大した負荷を処理するためにスタックをスケールアウトする方法を示します。

トピック

- ステップ 1: 前提条件を完了する
- ステップ 2: 簡単なアプリケーションサーバースタック - Chef 11 を作成する
- ステップ 3: バックエンドデータストアを追加する
- ステップ 4: MyStack の拡張
- ステップ 5: MyStack を削除する

ステップ 1: 前提条件を完了する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

ウォークスルーを開始する前に、次のセットアップ手順を完了します。これらのセットアップ手順には、 AWS アカウントへのサインアップ、管理ユーザーの作成、 OpsWorks スタックへのアクセス許可の割り当てが含まれます。

すでにいずれかの「OpsWorks スタックの開始方法」ウォークスルーを完了している場合、このウォークスルーの前提条件を満たしており、省略して「ステップ 2: 簡単なアプリケーションサーバースタック - Chef 11 を作成する」に進むことができます。

トピック

- にサインアップする AWS アカウント
- 管理アクセスを持つユーザーを作成する
- ユーザーにサービスアクセス権限を割り当てる

にサインアップする AWS アカウント

がない場合は AWS アカウント、次の手順を実行して作成します。

にサインアップするには AWS アカウント

1. https://portal.aws.amazon.com/billing/signup を開きます。
2. オンラインの手順に従います。

   サインアップ手順の一環として、電話またはテキストメッセージを受け取り、電話キーパッドで検証コードを入力します。

   にサインアップすると AWS アカウント、 AWS アカウントのルートユーザー が作成されます。ルートユーザーには、アカウントのすべての AWS のサービス とリソースへのアクセス権があります。セキュリティベストプラクティスとして、ユーザーに管理アクセス権を割り当て、ルートユーザーアクセスが必要なタスクの実行にはルートユーザーのみを使用するようにしてください。

AWS サインアッププロセスが完了すると、 から確認メールが送信されます。https://aws.amazon.com/ の [マイアカウント] をクリックして、いつでもアカウントの現在のアクティビティを表示し、アカウントを管理することができます。

管理アクセスを持つユーザーを作成する

にサインアップしたら AWS アカウント、日常的なタスクにルートユーザーを使用しないように AWS アカウントのルートユーザー、 のセキュリティを確保し AWS IAM アイデンティティセンター、 を有効にして管理ユーザーを作成します。

を保護する AWS アカウントのルートユーザー

1. ルートユーザーを選択し、 AWS アカウント E メールアドレスを入力して、アカウント所有者AWS マネジメントコンソールとして にサインインします。次のページでパスワードを入力します。

ルートユーザーを使用してサインインする方法については、「AWS サインイン ユーザーガイド」の「ルートユーザーとしてサインインする」を参照してください。

2. ルートユーザーの多要素認証 (MFA) を有効にします。

   手順については、IAM ユーザーガイドの AWS アカウント 「ルートユーザー (コンソール) の仮想 MFA デバイスを有効にする」を参照してください。

管理アクセスを持つユーザーを作成する

1. IAM アイデンティティセンターを有効にします。

   手順については、「AWS IAM アイデンティティセンター ユーザーガイド」の「AWS IAM アイデンティティセンターの有効化」を参照してください。

2. IAM アイデンティティセンターで、ユーザーに管理アクセスを付与します。

   を ID ソース IAM アイデンティティセンターディレクトリ として使用する方法のチュートリアルについては、「 AWS IAM アイデンティティセンター ユーザーガイド」の「デフォルトを使用してユーザーアクセスを設定する IAM アイデンティティセンターディレクトリ」を参照してください。

管理アクセス権を持つユーザーとしてサインインする

- IAM アイデンティティセンターのユーザーとしてサインインするには、IAM アイデンティティセンターのユーザーの作成時に E メールアドレスに送信されたサインイン URL を使用します。

  IAM Identity Center ユーザーを使用してサインインする方法については、AWS サインイン 「 ユーザーガイド」の AWS 「 アクセスポータルにサインインする」を参照してください。

追加のユーザーにアクセス権を割り当てる

1. IAM アイデンティティセンターで、最小特権のアクセス許可を適用するというベストプラクティスに従ったアクセス許可セットを作成します。

   手順については、「AWS IAM アイデンティティセンター ユーザーガイド」の「アクセス許可セットを作成する」を参照してください。

2. グループにユーザーを割り当て、そのグループにシングルサインオンアクセス権を割り当てます。

手順については、「AWS IAM アイデンティティセンター ユーザーガイド」の「グループを追加する」を参照してください。

ユーザーにサービスアクセス権限を割り当てる

ロールまたはユーザーに OpsWorks `AWSOpsWorks_FullAccess`および アクセス`AmazonS3FullAccess`許可を追加して、 スタックサービス (および OpsWorks スタックが依存する関連サービス) へのアクセスを有効にします。

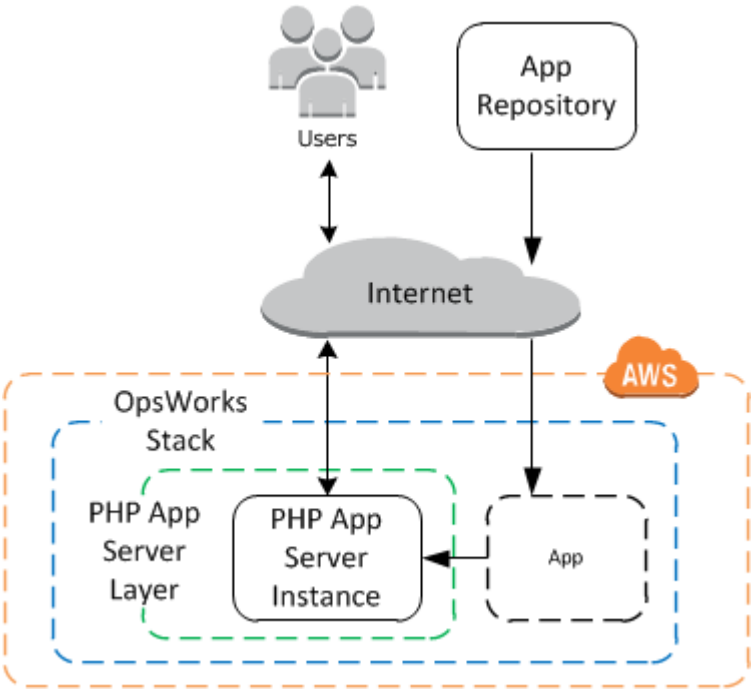
アクセス許可の追加に関する詳細については、IAM ID アクセス許可の追加 (コンソール) を参照してください。

これですべてのセットアップステップが完了したので、このウォークスルーを開始できます。

ステップ 2: 簡単なアプリケーションサーバースタック - Chef 11 を作成する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

基本的なアプリケーションサーバースタックは、ユーザーのリクエストを受信するためのパブリック IP アドレスを持つ、単一のアプリケーションサーバーインスタンスで構成されます。アプリケーションコードと関連ファイルは別々のリポジトリに保存されており、そこからサーバーにデプロイされます。そのようなスタックを次の図に示します。



スタックには次のようなコンポーネントがあります。

- レイヤー。インスタンスのグループを表し、それらの設定方法を指定します。

  この例のレイヤーは、PHP アプリケーションサーバー インスタンスのグループを表します。

- Amazon EC2 インスタンスを表す [instance] (インスタンス) です。

  この場合、インスタンスは PHP アプリケーションサーバーを実行するように設定されています。レイヤーは、任意の数のインスタンスを持つことができます。 OpsWorks スタックは、他のいくつかのアプリケーションサーバーもサポートしています。詳細については、「アプリケーションサーバーレイヤー」を参照してください。

- アプリケーションサーバーにアプリケーションをインストールするために必要な情報を含む、アプリケーション。

  コードは、Git リポジトリや Amazon S3 バケットなどのリモートリポジトリに保存されます。

以下のセクションでは、 OpsWorks スタックコンソールを使用してスタックを作成し、アプリケーションをデプロイする方法について説明します。 CloudFormation テンプレートを使用してスタックをプロビジョニングすることもできます。このトピックで説明するスタックをプロビジョニングするテンプレートの例については、「AWS OpsWorks のスニペット」を参照してください。

トピック

- ステップ 2.1: スタック - Chef 11 を作成する
- ステップ 2.2: PHP アプリケーションサーバーレイヤー - Chef 11 を追加する
- ステップ 2.3: PHP アプリケーションサーバーレイヤー - Chef 11 にインスタンスを追加する
- ステップ 2.4: アプリケーション - Chef 11 を作成してデプロイする

ステップ 2.1: スタック - Chef 11 を作成する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックプロジェクトを開始するには、インスタンスやその他のリソースのコンテナとして機能するスタックを作成します。スタック設定では、AWS リージョンやデフォルトのオペレーティングシステムなど、スタックのすべてのインスタンスで共有されるいくつかの基本的な設定を指定します。

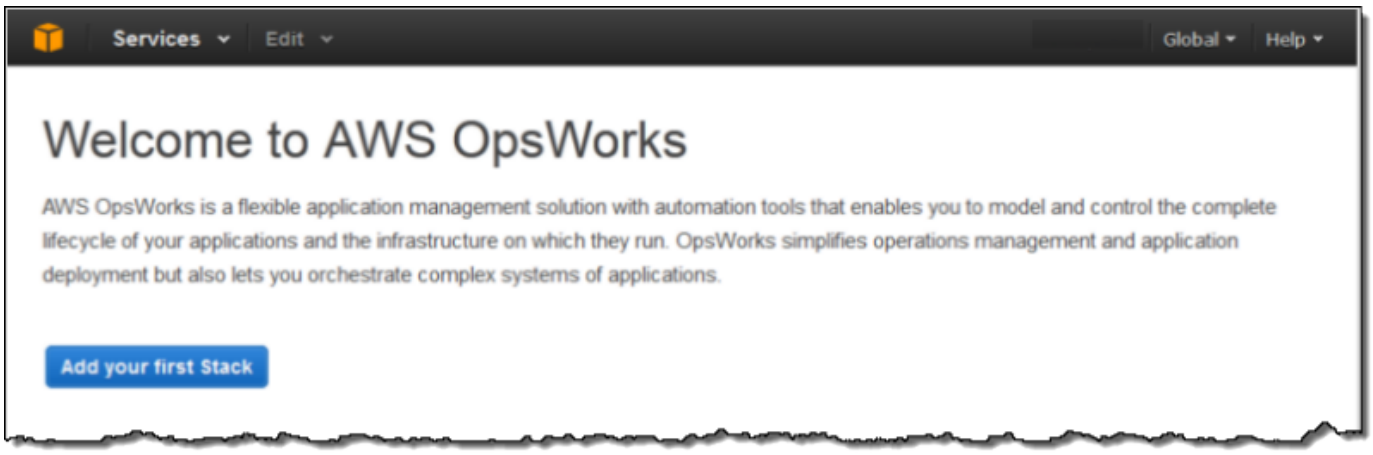
> **Note**
>
> このページは、Chef 11スタックの作成に役立ちます。Chef 12 スタックを作成する方法については、「スタックを作成する」を参照してください。

このページは、Chef 11 でのスタックの作成に役立ちます。

新しいスタックを作成するには

1. スタックの追加

   OpsWorks スタックコンソールにサインインします。アカウントに既存のスタックがない場合は、[Welcome to AWS OpsWorks] ページが表示されます。このページで、[Add your first stack] をクリックします。それ以外の場合は、 OpsWorks スタックダッシュボードが表示され、アカウントのスタックが一覧表示されます。スタックの追加をクリックします。



2. スタックの設定

   [Add Stack] ページで、[Chef 11 stack] を選択し、次の設定を指定します。

   スタック名

   スタックの名前を入力します。英数字 (a ~ z、A ~ Z および 0 ~ 9) とハイフン (-) を含めることができます。このウォークスルーで使用する例のスタック名は、**MyStack** です。

   リージョン

   スタックのリージョンとして米国西部 (オレゴン) を選択します。

   その他の設定についてはデフォルト値を受け入れて、[Add Stack] をクリックします。さまざまなスタック設定の詳細については、「新しいスタックを作成する」を参照してください。

ステップ 2.2: PHP アプリケーションサーバーレイヤー - Chef 11 を追加する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

スタックは、基本的にはインスタンスのコンテナですが、インスタンスを直接スタックに追加することはありません。関連するインスタンスのグループを表すレイヤーを追加し、そのレイヤーにインスタンスを追加します。

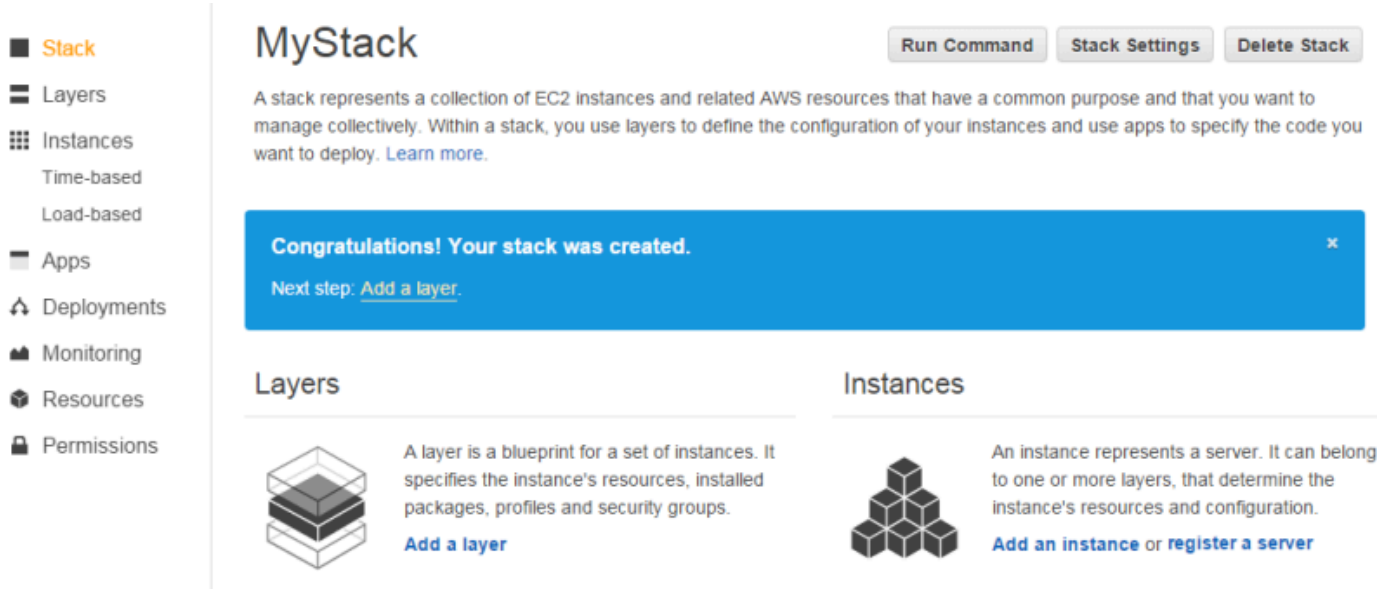
レイヤーは基本的に、同じ設定の Amazon EC2 インスタンスのセットを作成するために OpsWorks スタックが使用する設計図です。関連するインスタンスのグループごとに 1 つの Layer をスタックに追加します。 OpsWorks スタックには、MySQL データベースサーバーや PHP アプリケーションサーバーなどの標準ソフトウェアパッケージを実行しているインスタンスのグループを表す一連の組み込みレイヤーが含まれています。さらに、特定の要件に合わせて一部または全体をカスタマイズしたレイヤーを作成することもできます。詳細については、「OpsWorks スタックのカスタマイズ」を参照してください。

MyStack には、PHP アプリケーションサーバーとして機能するインスタンスのグループを表す、組み込み PHP アプリケーションサーバーレイヤーである 1 つのレイヤーがあります。組み込みレイヤーなどの詳細については、「レイヤー」を参照してください。

PHP アプリケーションサーバーレイヤーを MyStack に追加するには

1. [Add Layer] (レイヤーの追加) ページを開く

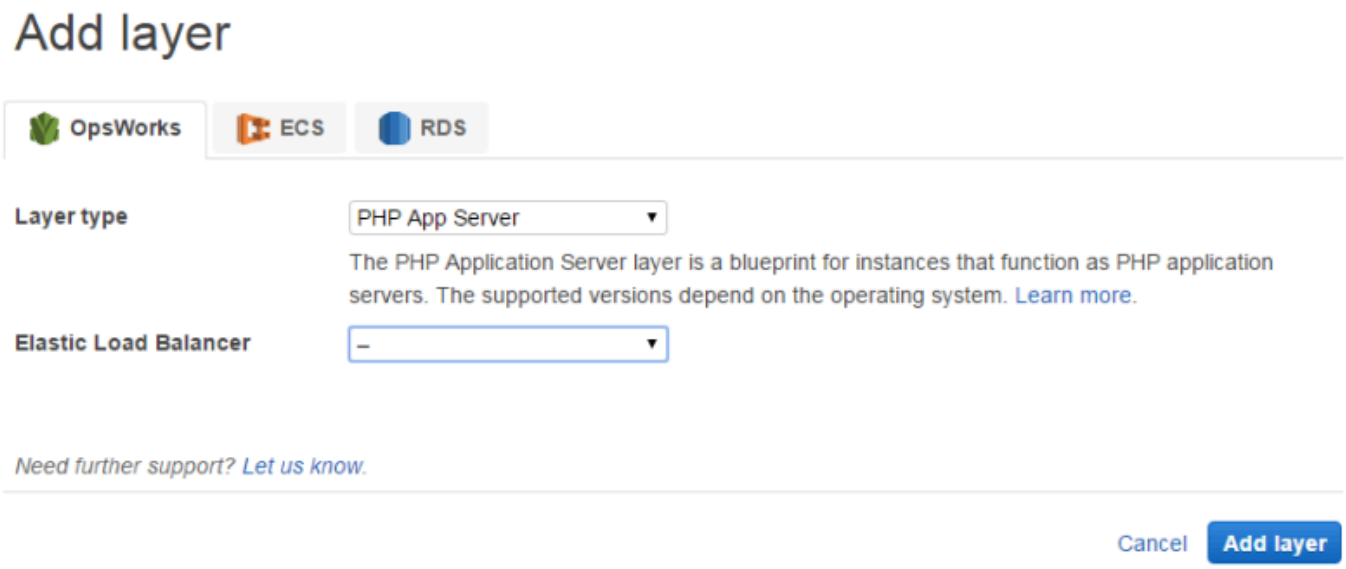
   スタックの作成が完了すると、 OpsWorks スタックにスタックページが表示されます。[Add a layer] (レイヤーの追加) をクリックして、最初のレイヤーを追加します。



2. レイヤータイプの指定とレイヤーの設定

   [Layer type] (レイヤータイプ) ボックスで、[PHP App Server] (PHP アプリケーションサーバー) を選択し、デフォルトの [Elastic Load Balancer] (Elastic ロードバランサー) 設定を受け入

れ、[Add Layer] (レイヤーの追加) をクリックします。レイヤーが作成されたら、レイヤーを編集することで、EBS ボリューム設定などの他の属性を指定できます。



ステップ 2.3: PHP アプリケーションサーバーレイヤー - Chef 11 にインスタンスを追加する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックインスタンスは、特定の Amazon EC2 インスタンスを表します。

- インスタンスの設定では、Amazon EC2 のオペレーティングシステムやサイズなどのいくつかの基本情報を指定します。実行されますが、あまり機能しません。
- インスタンスのレイヤーでは、インストールするパッケージを決定したり、インスタンスに Elastic IP アドレスがあるかどうかを指定したりすることで、インスタンスに機能を追加します。

OpsWorks スタックは、 サービスとやり取りする各インスタンスに エージェントをインストールします。インスタンスに Layer の機能を追加するには、 OpsWorks Stacks は Chef recipes と呼ばれる小さなアプリケーションを実行するようにエージェントに指示します。これにより、ア

プリケーションやパッケージのインストール、設定ファイルの作成などを行うことができます。OpsWorks Stacks は、インスタンスのライフサイクルの重要なポイントでレシピを実行します。たとえば、OpsWorks によって、インスタンスの起動完了後にソフトウェアのインストールなどのタスクを処理するための Setup レシピが実行されます。また、アプリケーションをデプロイしてコードと関連ファイルをインストールする際に、Deploy レシピが実行されます。

> **Note**
>
> レシピの仕組みに興味がある場合は、すべての OpsWorks スタック組み込みレシピがパブリック GitHub リポジトリ OpsWorks クックブックにあります。また、後述するように、独自のカスタムレシピを作成して OpsWorks スタックで実行することもできます。

MyStack に PHP アプリケーションサーバーを追加するには、前のステップで作成した PHP アプリケーションサーバーレイヤーにインスタンスを追加します。

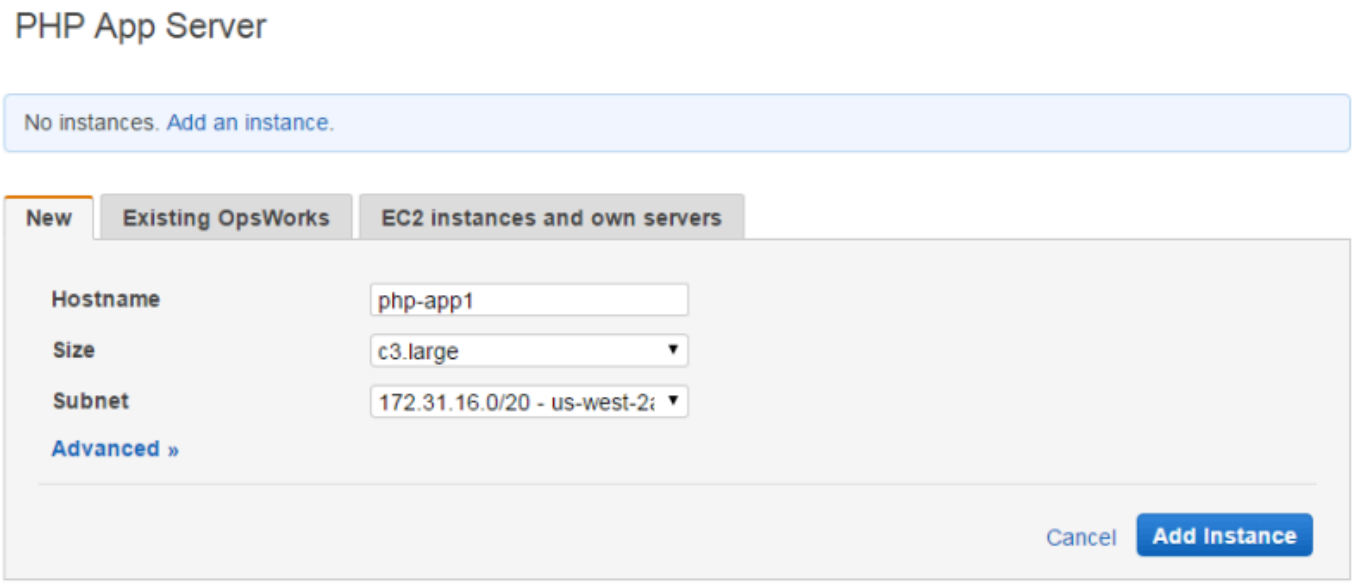
インスタンスを PHP アプリケーションサーバーレイヤーに追加するには

1. インスタンスの追加

   レイヤーの追加が完了すると、 OpsWorks スタックにレイヤーページが表示されます。ナビゲーションペインで [Instances] (インスタンス) をクリックし、[PHP App Server] (PHP アプリケーションサーバー) の下で [Add an instance] (インスタンスを追加) をクリックします。

2. インスタンスの設定

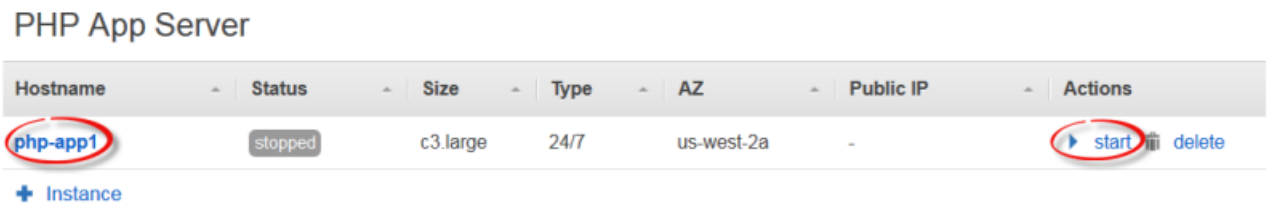
   各インスタンスには、 OpsWorks スタックによって生成されるデフォルトのホスト名があります。この例では、 OpsWorks スタックはレイヤーの短縮名に数値を追加するだけです。アベイラビリティーゾーンやオペレーティングシステムといった、スタックの作成時に指定したデフォルト設定の一部を上書きするなどして、各インスタンスを個別に設定できます。このウォークスルーでは、デフォルト設定を受け入れて [Add Instance] をクリックし、レイヤーにインスタンスを追加します。詳細については、「インスタンス」を参照してください。



3. インスタンスの作成

ここまでで、インスタンスの設定を指定しました。実行中の Amazon EC2 インスタンスを作成するには、インスタンスを起動する必要があります。 OpsWorks スタックは、設定を使用して、指定されたアベイラビリティーゾーンで Amazon EC2 インスタンスを起動します。インスタンスの起動方法の詳細は、インスタンスのスケーリングタイプによって異なります。前のステップでは、デフォルトのスケーリングタイプである 24/7 (手動で起動する必要があり、手動で停止するまで実行される) を使用してインスタンスを作成しました。時間ベースおよび負荷ベースのスケーリングタイプを作成することもできます。このスケーリングタイプは、スケジュールまたは現在の負荷に基づいて OpsWorks スタックが自動的に開始および停止します。詳細については、「時間ベースおよび負荷ベースのインスタンスによる負荷の管理」を参照してください。

[PHP App Server] (PHP アプリケーションサーバー) の [php-app1] に移動して、[Actions] (アクション) 列の [start] (開始) をクリックして、インスタンスを起動します。

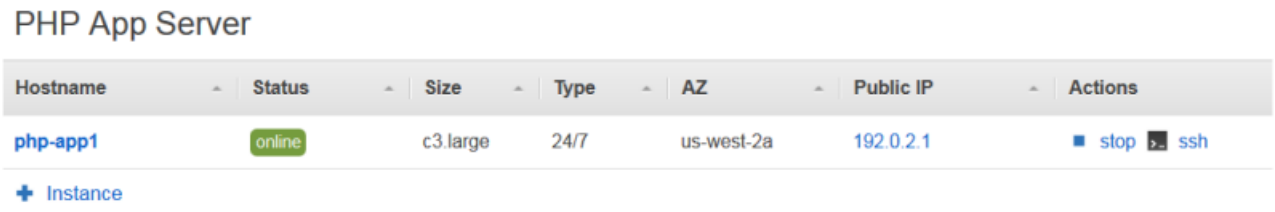


4. 起動中のインスタンスのステータスの監視

   Amazon EC2 インスタンスを起動してパッケージをインストールするには、通常数分かかります。起動処理が進行するに従って、インスタンスの [Status] フィールドに次のような一連の値が表示されます。

   1. リクエスト - OpsWorks スタックが Amazon EC2 サービスを呼び出して Amazon EC2 インスタンスを作成しました。
   2. 保留中 - OpsWorks スタックは Amazon EC2 インスタンスの起動を待っています。
   3. [booting] (起動中) - Amazon EC2 インスタンスの起動中です。
   4. running_setup - OpsWorks スタックエージェントは、パッケージの設定やインストールなどのタスクを処理する Layer の Setup レシピと、インスタンスにアプリケーションをデプロイする Deploy レシピを実行しています。
   5. online - インスタンスは利用可能です。

   php-app1 がオンライン状態になったら、[Instances] ページには次のように表示されます。



   ページの先頭には、スタックのすべてのインスタンスの簡単な要約が表示されます。ここでは、オンライン状態のインスタンスが 1 つ表示されています。php-app1 の [Actions] (アクション) 列で、[start] (開始) と [delete] (削除) が置き換えられ、インスタンスを停止する [stop] (停止) であることに注目してください。

ステップ 2.4: アプリケーション - Chef 11 を作成してデプロイする

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS

re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

MyStack をより有益にするために、PHP アプリケーションサーバー インスタンスにアプリケーションをデプロイする必要があります。アプリケーションのコードや関連ファイルは、Git などのリポジトリに保存します。これらのファイルをアプリケーションサーバーに取得するには、いくつかの手順を実行する必要があります。

> **Note**
>
> このセクションの手順は、Chef 11 スタックに適用されます。Chef 12 スタックのレイヤーにアプリを追加する方法については、「アプリケーションの追加」を参照してください。

1. アプリケーションを作成します。

   アプリケーションには、 OpsWorks スタックがリポジトリからコードと関連ファイルをダウンロードするために必要な情報が含まれています。アプリケーションのドメインなどの追加情報を指定することもできます。
2. アプリケーションサーバーにアプリケーションをデプロイします。

   アプリケーションをデプロイすると、 OpsWorks スタックはデプロイライフサイクルイベントをトリガーします。次に、エージェントによってインスタンスの Deploy レシピが実行されます。このレシピによって、サーバーの設定やサービスの再起動などの関連タスクとともにファイルが適切なディレクトリにダウンロードされます。

> **Note**
>
> 新しいインスタンスを作成すると、 OpsWorks スタックは既存のアプリケーションを自動的にインスタンスにデプロイします。ただし、新しいアプリケーションを作成したり、既存のアプリケーションを更新したりする場合は、既存のすべてのインスタンスに対して、アプリケーションまたは更新を手動でデプロイする必要があります。

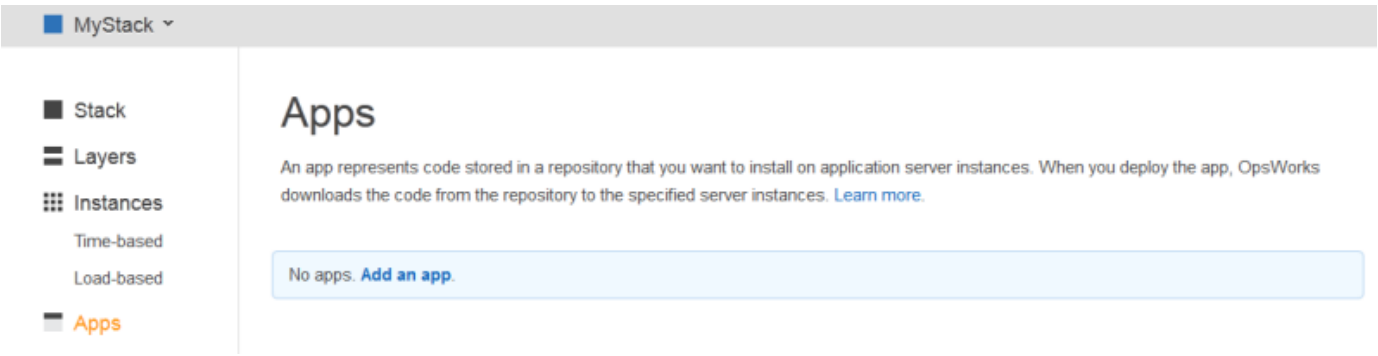
このステップでは、Git のパブリックリポジトリからアプリケーションサーバーに、サンプルアプリケーションを手動でデプロイする方法を示します。アプリケーションを確認する場合は、https://

github.com/amazonwebservices/opsworks-demo-php-simple-app を参照してください。この例で使用されるアプリケーションは version1 ブランチにあります。 OpsWorks スタックは他のいくつかのリポジトリタイプもサポートしています。詳細については、「Application Source」を参照してください。

アプリケーションを作成してデプロイするには

1. [Apps] ページを開く

   ナビゲーションペインで [Apps] をクリックし、[Apps] ページで [Add an app] をクリックします。



2. アプリケーションの設定

   [App] ページで、次の値を指定します。

   名前

   表示目的で OpsWorks スタックが使用するアプリケーションの名前。サンプルアプリケーションの名前は ですSimplePHPApp。 OpsWorks スタックは、後で説明するように、内部的および Deploy レシピによって使用される短縮名 simplephpapp も生成します。

   タイプ

   アプリケーションのデプロイ先を決定する、アプリケーションのタイプです。この例では、[PHP] を使用します。これによりアプリケーションは PHP アプリケーションサーバーインスタンスにデプロイされます。

   データソースタイプ

   関連付けられるデータベースサーバーです。今回は [None] を選択します。データベースサーバーについては、「ステップ 3: バックエンドデータストアを追加する」で説明します。

リポジトリタイプ

アプリケーションのリポジトリタイプです。この例では、アプリケーションは [Git] リポジトリに保存されています。

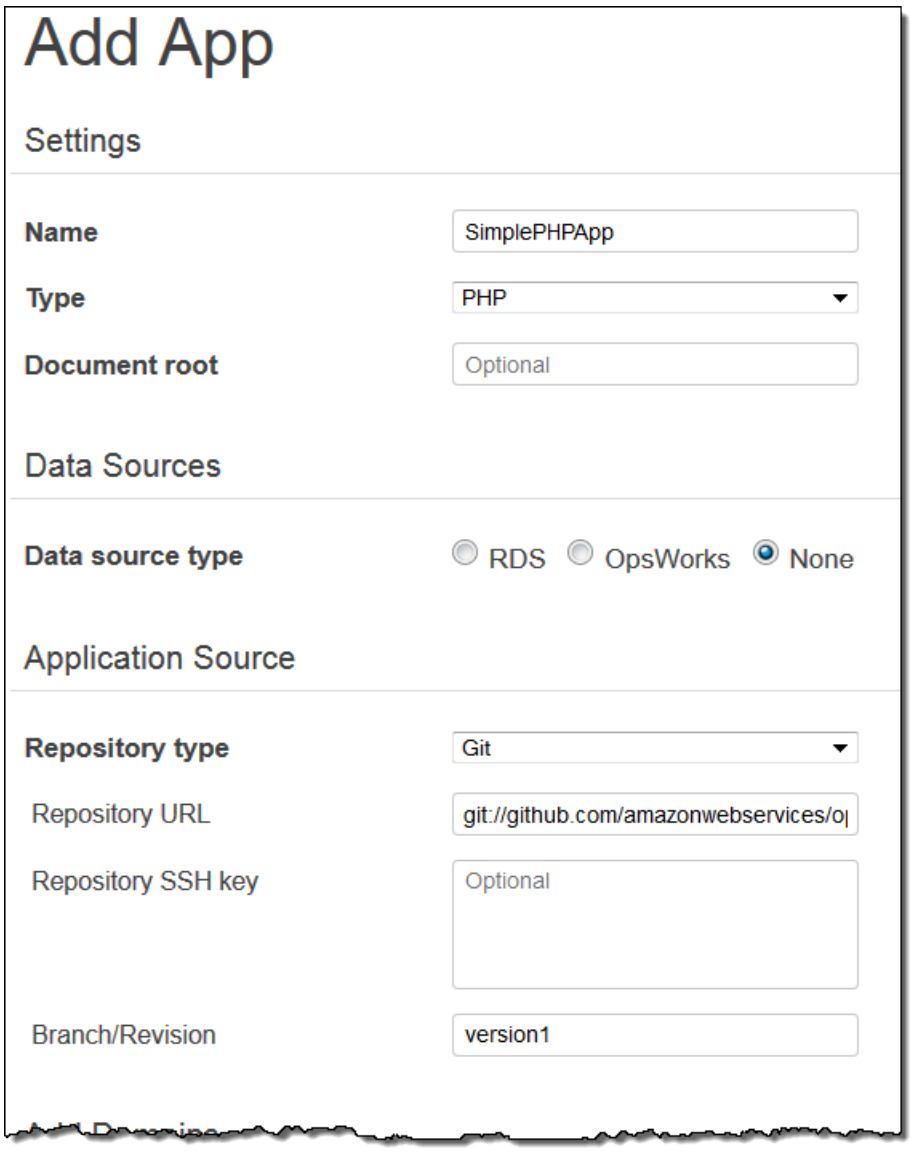
リポジトリの URL

アプリケーションのリポジトリ URL です。URL の例は **`git://github.com/awslabs/opsworks-demo-php-simple-app.git`** です。

[Branch/Revision]

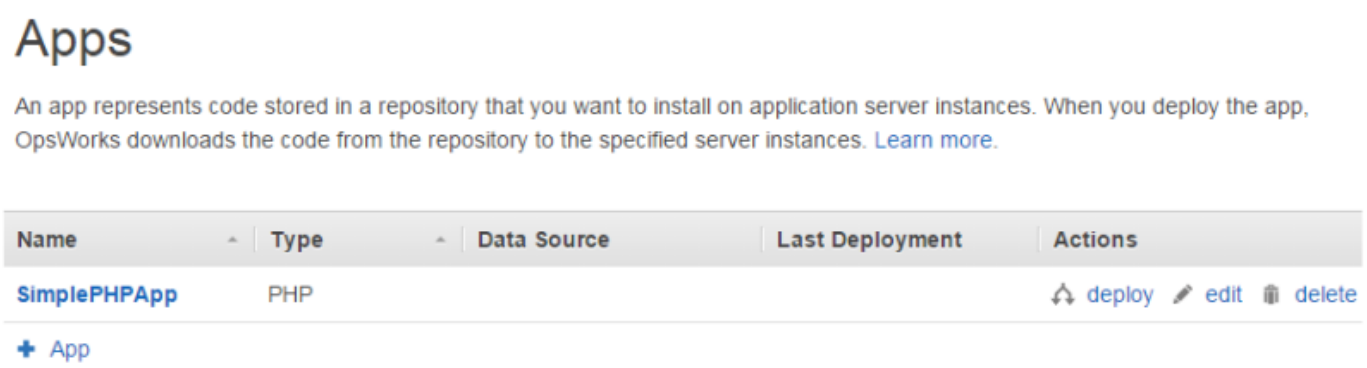
アプリケーションのブランチまたはバージョンです。このウォークスルーでは、**`version1`** ブランチを使用します。

残りの設定ではデフォルト値を受け入れ、[Add App] をクリックします。詳細については、「アプリケーションの追加」を参照してください。



3. [Deployment] ページを開く

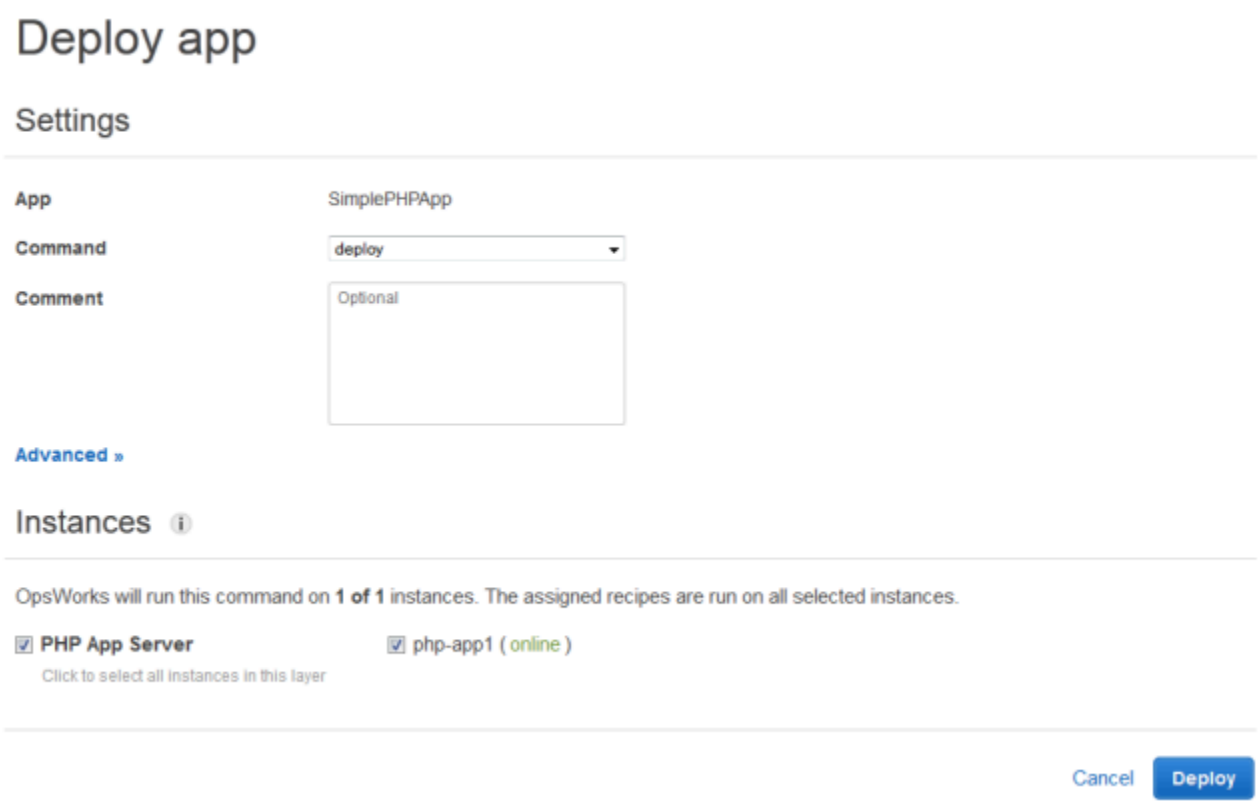
   サーバーにコードをインストールするには、アプリケーションをデプロイする必要があります。これを行うには、SimplePHPApp [Actions] (アクション) 列の [deploy] (デプロイ) をクリックします。



4. アプリケーションのデプロイ

   アプリケーションをデプロイすると、エージェントは PHP App Server インスタンスで Deploy レシピを実行します。これにより、アプリケーションがダウンロードされ構築されます。

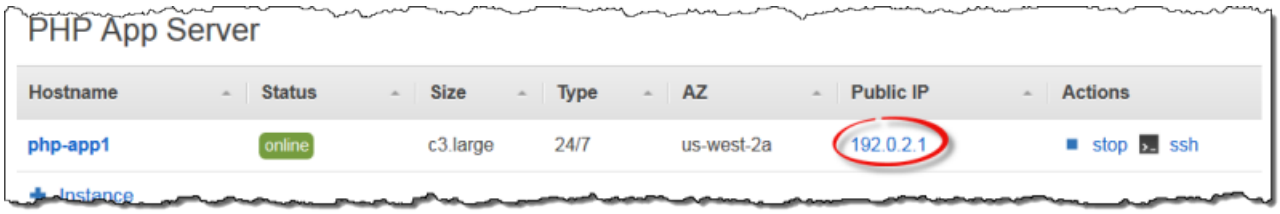
   あらかじめ [Command] が [deploy] に設定されている必要があります。その他の設定ではデフォルト値を受け入れ、[Deploy] をクリックし、アプリケーションをデプロイします。



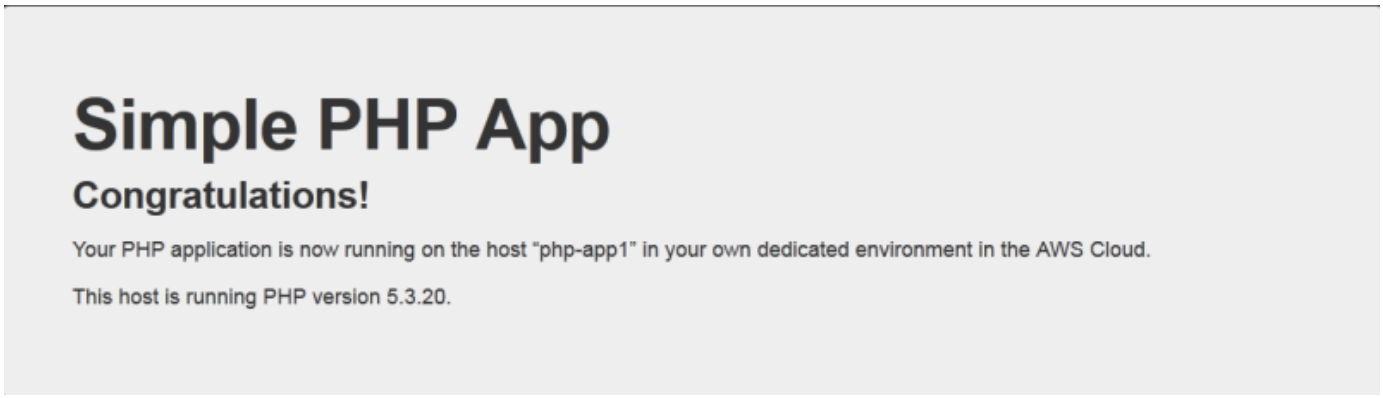
デプロイメントが完了すると、[Deployment] (デプロイ) ページの [Status] (ステータス) に [Successful] (成功) と表示され、[php-app1] (php-app1) の横に緑色のチェックマークが付きます。

5. SimplePHPApp の実行

SimplePHPApp がインストールされ、利用できるようになりました。実行するには、ナビゲーションペインで [Instances] をクリックし、[Instances] ページに移動します。次に、php-app1 インスタンスのパブリック IP アドレスをクリックします。



ブラウザに次のようなページが表示されます。

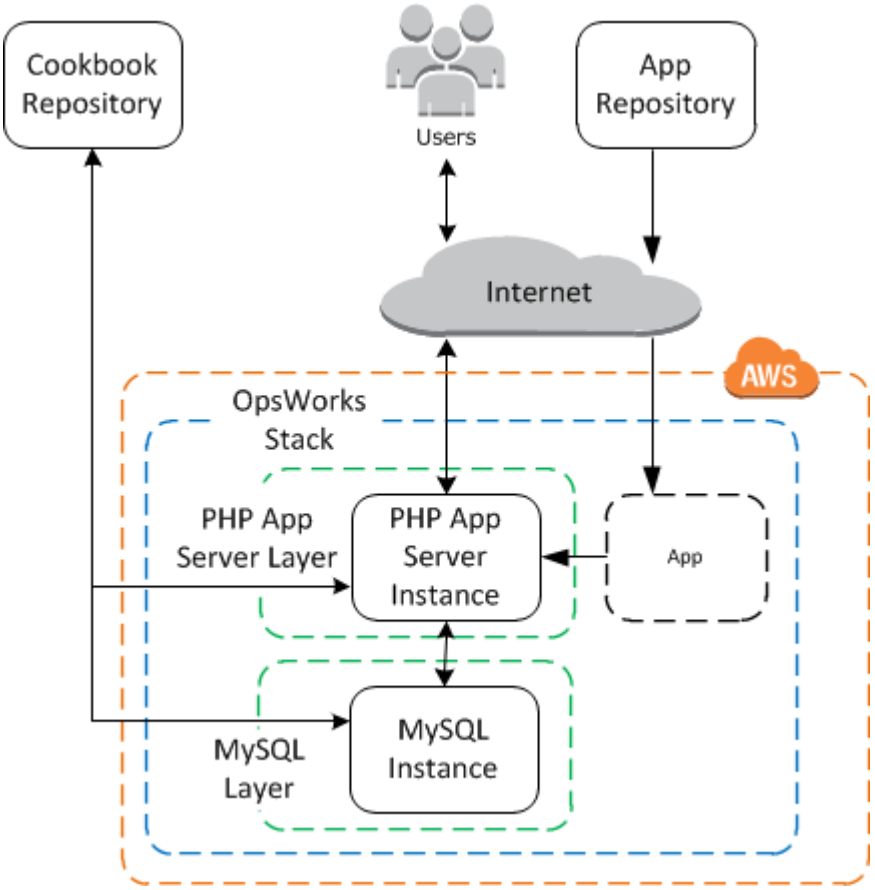


> **Note**
>
> このウォークスルーでは、次のセクションに進んで 1 回のセッションでウォークスルーをすべて完了することを想定しています。必要に応じて、いつでも停止し、後で OpsWorks スタックにサインインしてスタックを開いて続行できます。ただし、オンラインインスタンスなどの、使用する AWS リソースに対して課金が発生します。不要な課金を回避するには、インスタンスを停止します。これにより、対応する EC2 インスタンスが終了します。続行する準備が整ったら、インスタンスを再起動します。

ステップ 3: バックエンドデータストアを追加する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

「ステップ 2.1: スタック - Chef 11 を作成する」では、PHP アプリケーションを提供するスタックを作成する方法を説明しました。ただし、これは、静的なテキストを表示するだけの非常にシンプルなアプリケーションでした。本稼動アプリケーションでは、一般的にバックエンドデータストアを使用して、次の図のようなスタック設定を実現します。



このセクションでは、バックエンドの MySQL データベースサーバーを含むように MyStack を拡張する方法を示します。ただし、単に MySQL サーバーを追加すること以外にも、必要な作業があります。また、データベースサーバーと正しく通信するようにアプリを設定する必要があります。

OpsWorks スタックはこれを実行しません。このタスクを処理するには、いくつかのカスタムレシピを実装する必要があります。

トピック

- ステップ 3.1: バックエンドデータベースを追加する
- ステップ 3.2: SimplePHPApp を更新する
- 短いディグレッション: クックブック、レシピ、 OpsWorks スタック属性
- ステップ 3.3: MyStack にカスタムクックブックを追加する
- ステップ 3.4: レシピを実行する
- ステップ 3.5: SimplePHPApp バージョン 2 をデプロイする
- ステップ 3.6: SimplePHPApp を実行する

ステップ 3.1: バックエンドデータベースを追加する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

SimplePHPApp の新しいバージョンは、バックエンドデータベースにデータを保存します。OpsWorks スタックは、次の 2 種類のデータベースサーバーをサポートしています。

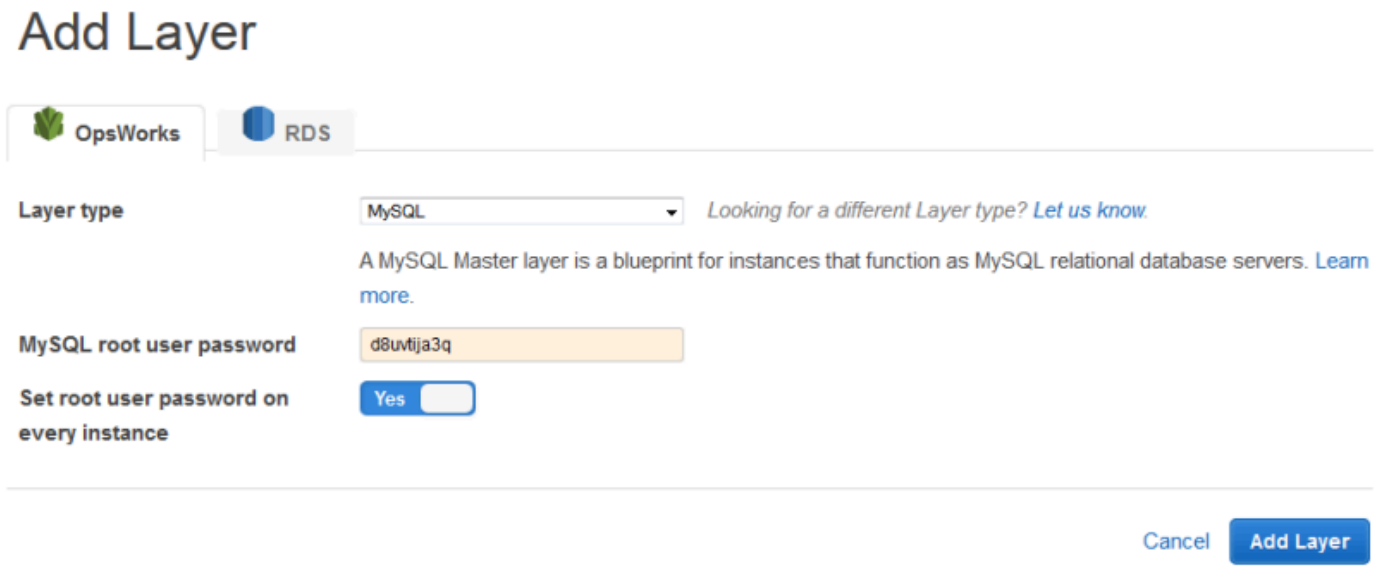
- MySQL OpsWorks スタックレイヤーは、MySQL データベースマスターをホストする Amazon EC2 インスタンスを作成するための設計図です。 MySQL
- Amazon RDS サービスレイヤーは、スタックに [Amazon RDS instance] (Amazon RDS インスタンス) を組み込む方法を提供します。

Amazon DynamoDB などの他のデータベースを使用することも、[MongoDB] などのデータベースをサポートするカスタムレイヤーを作成することもできます。詳細については、「the section called “バックエンドデータストアの使用”」を参照してください。

この例では、MySQL レイヤーを使用します。

MySQL レイヤーを MyStack に追加するには

1. [Layers] (レイヤー) ページで、[+ Layer] (+ レイヤー) をクリックします。
2. [Add Layer] ページの [Layer type] で、[MySQL] を選択し、デフォルトの設定を変更せずに [Add Layer] をクリックします。



MySQL レイヤーにインスタンスを追加するには

1. [Layers] (レイヤー) ページの [MySQL] 行で、[Add an instance] (インスタンスの追加) をクリックします。
2. [Instances] ページの [MySQL] で、[Add an instance] をクリックします。
3. デフォルト値を変更せずに [Add instance] をクリックしますが、まだ起動しないでください。

> **Note**
>
> OpsWorks スタックは、この例のアプリケーションの短縮名 simplephpapp を使用して、 という名前のデータベースを自動的に作成します。Chef レシピを使用してデータベースと対話する場合、この名前が必要になります。

ステップ 3.2: SimplePHPApp を更新する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

最初に、バックエンドサーバーのデータストアを使用する SimplePHPApp の新しいバージョンが必要です。 OpsWorks スタックでは、アプリケーションを更新することは簡単です。Git または Subversion リポジトリを使用している場合は、アプリケーションのバージョンごとに個別のリポジトリブランチを設定できます。サンプルアプリケーションでは、バックエンドデータベースを使用するアプリケーションのバージョンを、Git リポジトリの version2 ブランチに保存します。新しいブランチを指定するようにアプリケーションの設定を更新し、アプリケーションを再デプロイする必要があります。

SimplePHPApp を更新するには

1. アプリケーションの編集ページを開く

   ナビゲーションペインで、[Apps] (アプリケーション) をクリックして、続いて [SimplePHPApp] (SimplePHP アプリケーション) 行の [Actions] (アクション) 列で [edit] (編集) をクリックします。
2. アプリケーションの設定を更新する

   以下を設定を変更します。

   [Branch/Revision]

   この設定では、アプリケーションのリポジトリブランチを指定します。SimplePHPApp の最初のバージョンは、データベースに接続しませんでした。アプリケーションのデータベースに対応したバージョンを使用するには、この値を **`version2`** に設定します。

   [Document root]

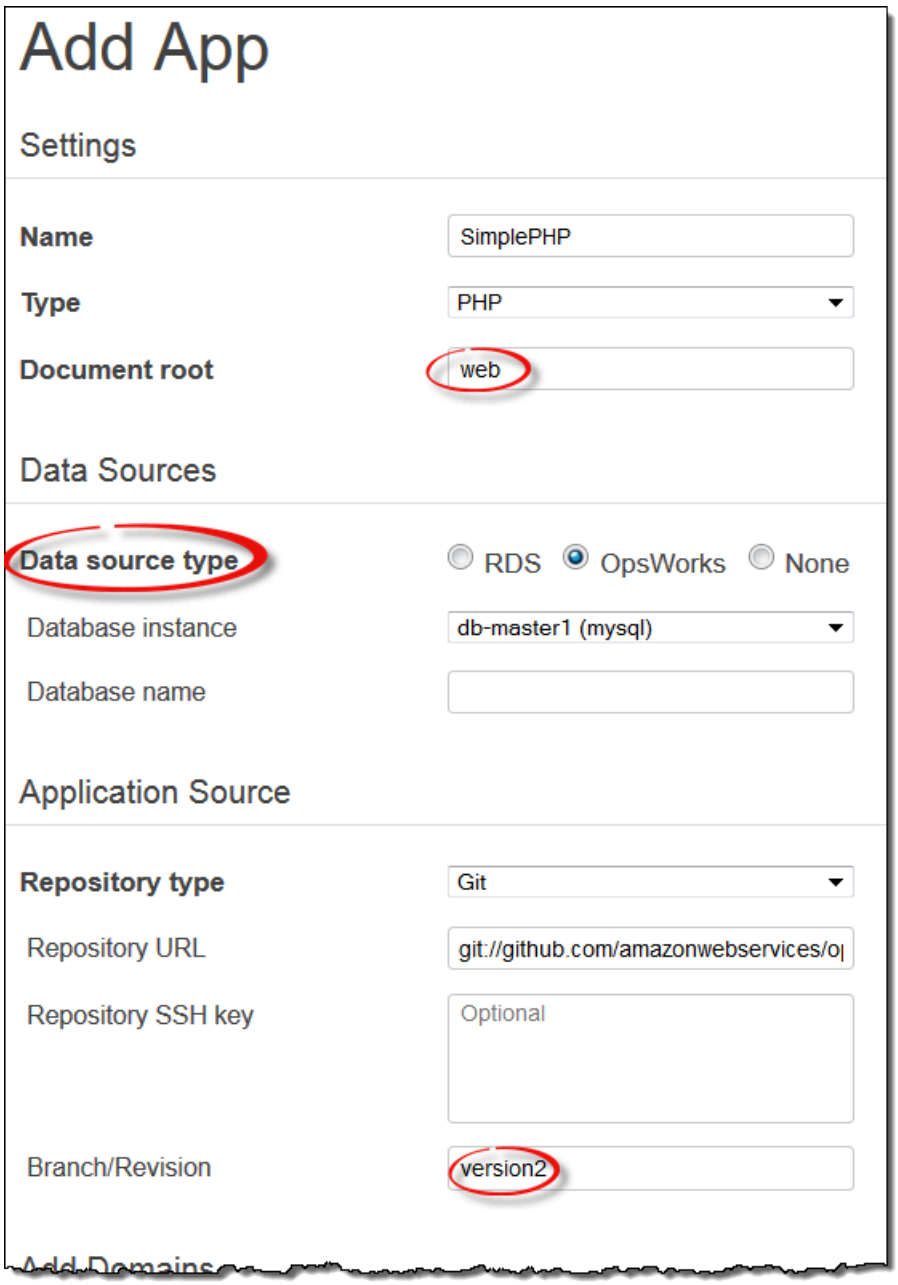
   この設定はアプリケーションのルートフォルダを指定します。SimplePHPApp の最初のバージョンではデフォルトの設定を使用していました。この設定では、サーバーの標準的なルー

トフォルダ (PHP アプリケーションの場合は `index.php`) に `/srv/www` がインストールされます。ここでサブフォルダ - 名前のみを指定した場合、先頭の '/'OpsWorks スタックはそれを標準フォルダパスに追加しません。SimplePHPApp のバージョン 2 は `/srv/www/web` に保存する必要があるため、[Document root] を **`web`** に設定します。

データソースタイプ

この設定は、データベースサーバーをアプリケーションに関連付けます。この例では、前のステップで作成した MySQL インスタンスを使用するため、[Data source type] (データデータソースタイプ) を OpsWorksに、[Database instance] (データベースインスタンス) を前のステップで作成したインスタンスである [db-master1 (mysql)] に設定します。データベース名を空のままにします。 OpsWorks スタックは、アプリケーションの短縮名 simplephpapp を使用して、 という名前のデータベースをサーバー上に作成します。

[Save] をクリックして新しい設定を保存します。



3. MySQL インスタンスを起動します。

アプリケーションを更新すると、 OpsWorks スタックは、起動時に新しいアプリケーションサーバーインスタンスに新しいアプリケーションバージョンを自動的にデプロイします。ただし、OpsWorks スタックは新しいアプリケーションバージョンを既存のサーバーインスタンスに自動的にデプロイしません。「」で説明されているように、手動でデプロイする必要がありますステップ 2.4: アプリケーション - Chef 11 を作成してデプロイする。ここで、更新された SimplePHPApp をデプロイすることもできますが、この例では、もう少し待つことをお勧めします。

短いディグレッション: クックブック、レシピ、 OpsWorks スタック属性

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

これでアプリケーションとデータベースサーバーを設定しましたが、まだ使用する準備はできていません。データベースを設定し、アプリの接続設定を構成する必要があります。 OpsWorks スタックはこれらのタスクを自動的に処理しませんが、Chef クックブック、レシピ、動的属性をサポートしています。レシピのペアを実装できます。1 つはデータベースをセットアップするため、もう OpsWorks 1 つはアプリケーションの接続設定を構成するため、 スタックで実行させることができます。

必須のレシピを含む phpapp クックブックはすでに実装されており、使用できます。必要に応じて、「ステップ 3.3: MyStack にカスタムクックブックを追加する」に進むこともできます。詳細が必要な場合は、このセクションで、クックブックとレシピの背景を紹介し、レシピの仕組みについて説明します。クックブック自体を確認するには、phpapp クックブックを参照してください。

トピック

- レシピと属性
- データベースのセットアップ
- アプリケーションをデータベースに接続する

レシピと属性

Chef レシピは基本的に、パッケージのインストール、設定ファイルの作成、シェルコマンドの実行などのタスクをインスタンスで実行する特殊な Ruby アプリケーションです。関連のレシピのグループはクックブックとしてまとめられます。クックブックには、設定ファイルを作成するためのテンプレートなどのサポートファイルも含まれます。

OpsWorks スタックには、組み込みレイヤーをサポートするクックブックのセットがあります。独自のレシピでカスタムクックブックを作成して、インスタンスでカスタムタスクを実行することもで

きます。このトピックでは、レシピについて簡単に説明し、レシピを使用してデータベースのセットアップやアプリケーションの接続の設定を行う方法を示します。クックブックとレシピの詳細については、「クックブックとレシピ」または「OpsWorks スタックのカスタマイズ」を参照してください。

レシピは通常、入力データの Chef 属性によって決まります。

- これらの属性の一部は Chef によって定義され、オペレーティングシステムなど、インスタンスに関する基本情報を提供します。
- OpsWorks スタックは、レイヤー設定などのスタックに関する情報と、アプリケーションリポジトリなどのデプロイされたアプリケーションに関する情報を含む一連の属性を定義します。

  スタックまたはデプロイにカスタム JSON を割り当てることによって、これらの属性にカスタム属性を追加できます。
- クックブックでも、クックブックに固有の属性を定義できます。

  phpapp クックブック属性は、すべて `attributes/default.rb` で定義されます。

スタック属性の完全なリストについては、 OpsWorks スタック設定およびデプロイ属性: Linux「」および「」を参照してください組み込みクックブックの属性。詳細については、「属性の上書き」を参照してください。

属性は階層構造で構成され、JSON オブジェクトとして表すことができます。

このデータを、次のような Chef ノード構文を使用することによって、アプリケーションに組み込むことができます。

```
[:deploy][:simplephpapp][:database][:username]
```

deploy ノードには、アプリケーションのデータベース、Git リポジトリなどに関する情報を含む 1 つのアプリケーションノード simplephpappノードがあります。この例は、データベースユーザー名の値を表し、この値が root に解決されます。

データベースのセットアップ

MySQLレイヤーの組み込み Setup レシピによって、アプリケーションの短縮名が付けられたアプリケーション用のデータベースが自動的に作成されるため、この例では、すでに simplephpapp という名前のデータベースが存在します。ただし、アプリケーションでデータを保存するためのテーブルを作成してセットアップを終了する必要があります。テーブルは手動で作成できますが、タスクを処理

するカスタムレシピを実装し、 OpsWorks スタックで実行することをお勧めします。このセクションでは、レシピ dbsetup.rb を実装する方法を説明します。後で、 OpsWorks スタックでレシピを実行する手順について説明します。

リポジトリ内のレシピを表示するには、dbsetup.rb に移動します。次の例に dbsetup.rb のコードを示します。

execute は、指定されたコマンドを実行する Chef リソースです。この場合は、テーブルを作成する MySQL コマンドです。not_if ディレクティブによって、指定されたテーブルがすでに存在する場合、コマンドは実行されません。Chef リソースの詳細については、「リソースおよびプロバイダについて」を参照してください。

このレシピは、前に説明したノードの構文を使用して、コマンド文字列に属性値を挿入します。たとえば、次のようにしてデータベースのユーザー名を挿入します。

```
#{deploy[:database][:username]}
```

この暗号のようなコードを展開してみましょう。

- 反復のたびに deploy は現在のアプリケーションノードに設定されるため、[:deploy][:*app_name*] に解決されます。この例では、[:deploy][:simplephpapp] に解決されます。
- 前に示したデプロイ属性値を使用して、ノード全体は root に解決されます。
- ノードを #{ } にラップして文字列に挿入します。

その他のノードの多くも同様に解決されます。#{node[:phpapp][:dbtable]} は例外で、カスタムクックブックの属性ファイルで定義され、テーブル名 urler に解決されます。MySQL インスタンスで実行される実際のコマンドは、次の通りです。

```
"/usr/bin/mysql
    -uroot
    -pvjud1hw5v8
    simplephpapp
    -e'CREATE TABLE urler(
       id INT UNSIGNED NOT NULL AUTO_INCREMENT,
       author VARCHAR(63) NOT NULL,
       message TEXT,
       PRIMARY KEY (id))'
"
```

このコマンドは、デプロイ属性の認証情報とデータベース名を使用して、ID、作成者、およびメッセージフィールドを持つ、urler という名前のテーブルを作成します。

アプリケーションをデータベースに接続する

2 番目の要素はアプリケーションです。アプリケーションはテーブルにアクセスする際にデータベースパスワードなどの接続情報が必要になります。SimplePHPApp では、事実上、作業ファイルは app.php のみです。index.php は app.php を読み込むだけです。

app.php にはデータベース接続を処理する db-connect.php が含まれていますが、このファイルはリポジトリにはありません。は特定のインスタンスに基づいてデータベースを定義するため、db-connect.phpdb-connect.php を事前に作成することはできません。代わりに、appsetup.rb レシピは、デプロイ属性の接続データを使用して db-connect.php を生成します。

リポジトリ内のレシピを表示するには、appsetup.rb に移動します。次の例に appsetup.rb のコードを示します。

dbsetup.rb と同様に、appsetup.rb は、deploy ノードでアプリケーション (ここでも simplephpapp) を繰り返し処理します。これは、script リソースと template リソースを含むコードブロックを実行します。

この script リソースは、PHP アプリケーションの依存性マネージャーである [Composer] (コンポーザー) をインストールします。次に、Composer の install コマンドを実行して、サンプルアプリケーションの依存ファイルをアプリケーションのルートディレクトリにインストールします。

template リソースは、db-connect.php を生成して、これを /srv/www/simplephpapp/current に配置します。次の点に注意してください。

- レシピでは、条件ステートメントを使用して、インスタンスのオペレーティングシステムによって異なるファイル所有者を指定します。
- only_if ディレクティブは、指定されたディレクトリが存在する場合にのみテンプレートを生成するように Chef に指示します。

template リソースは、基本的に関連ファイルと同じコンテンツと構造を持っているが、さまざまなデータ値のプレースホルダが含まれているテンプレートを操作します。source パラメータは、テンプレート db-connect.php.erb を指定します。このテンプレートは、phpapp のクックブックの templates/default ディレクトリにあり、次の内容が含まれます。

Chef はテンプレートを処理するときに、プレースホルダ <%= => を template リソース内の対応する変数の値に置き換えます。これらの変数はデプロイ属性から取得されます。したがって、生成されるファイルは次のようになります。

ステップ 3.3: MyStack にカスタムクックブックを追加する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

カスタムクックブックは、アプリケーションと同様に、リポジトリに保存します。各スタックには、1 組のカスタムクックブックを含むリポジトリを設定できます。次に OpsWorks 、スタックのインスタンスにカスタムクックブックをインストールするように スタックに指示します。

1. ナビゲーションペインで [Stack] をクリックして、現在のスタックのページを表示します。
2. [Stack Settings] をクリックし、[Edit] をクリックします。
3. スタック設定を次のように変更します。
   - Use custom Chef Cookbooks (カスタムChefクックブックを使用する) - Yes (はい)
   - Repository type (リポジトリタイプ) - Git
   - Repository URL (リポジトリの URL) - **`git://github.com/amazonwebservices/opsworks-example-cookbooks.git`**
4. [Save] をクリックしてスタック設定を更新します。

OpsWorks 次に、 スタックは、クックブックリポジトリの内容をスタックのすべてのインスタンスにインストールします。新しいインスタンスを作成すると、 OpsWorks スタックによってクックブックリポジトリが自動的にインストールされます。

> **Note**
>
> いずれかのクックブックを更新したり、リポジトリに新しいクックブックを追加したりする必要がある場合は、スタック設定に触れずに更新できます。 OpsWorks スタックは、更新されたクックブックをすべての新しいインスタンスに自動的にインストールします。ただし、OpsWorks スタックは更新されたクックブックをスタックのオンラインインスタンスに自動的にインストールしません。スタックコマンドを実行してクックブックを更新するように OpsWorks `Update Cookbooks`スタックに明示的に指示する必要があります。詳細については、「スタックコマンドの実行」を参照してください。

ステップ 3.4: レシピを実行する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

カスタムクックブックの準備ができたら、適切なインスタンスでレシピを実行する必要があります。レシピは手動で実行できます。ただし、レシピは通常、インスタンスが起動した後、またはアプリケーションをデプロイするときなど、インスタンスのライフサイクルでの予測可能なポイントで実行される必要があります。このセクションでは、 OpsWorks スタックを適切なタイミングで自動的に実行するという、よりシンプルなアプローチについて説明します。

OpsWorks スタックは、レシピの実行を簡素化する一連のライフサイクルイベントをサポートします。たとえば、Setup イベントはインスタンスが起動した後で発生し、Deploy イベントはアプリケーションをデプロイするときに発生します。各レイヤーには、各ライフサイクルに関連付けられた一連の組み込みレシピがあります。インスタンスでライフサイクルイベントが発生したときに、エージェントはインスタンスの各レイヤーに関連付けられたレシピを実行します。 OpsWorks スタック

でカスタムレシピを自動的に実行するには、それを適切なレイヤーの適切なライフサイクルイベントに追加します。組み込みレシピが完了すると、エージェントはレシピを実行します。

この例では、MySQL インスタンスに対する dbsetup.rb と、PHP アプリケーションサーバー インスタンスに対する appsetup.rb の 2 つのレシピを実行する必要があります。

> **Note**
>
> *cookbook_name*::*recipe_name* 形式を使用して、コンソールでレシピを指定します。ここで、*recipe_name* に .rb 拡張子は含まれません。例えば、dbsetup.rb は **phpapp::dbsetup** と指定します。

カスタムレシピをライフサイクルイベントに割り当てるには

1. [Layers] (レイヤー) ページで、MySQL の [Recipes] (レシピ) をクリックし、[Edit] (編集) をクリックします。
2. [Custom Chef recipes] (カスタムシェフレシピ) セクションで、[Deploy] (デプロイ) に対して **phpapp::dbsetup** と入力します。

3. [+] アイコンをクリックしてレシピをイベントに割り当て、[Save] をクリックして新しいレイヤー設定を保存します。

4. [Layers] (レイヤー) ページに戻り、この手順を繰り返して、**phpapp::appsetup** を [PHP App Server] (PHP アプリケーションサーバー) レイヤーの [Deploy] (デプロイ) イベントに割り当てます。

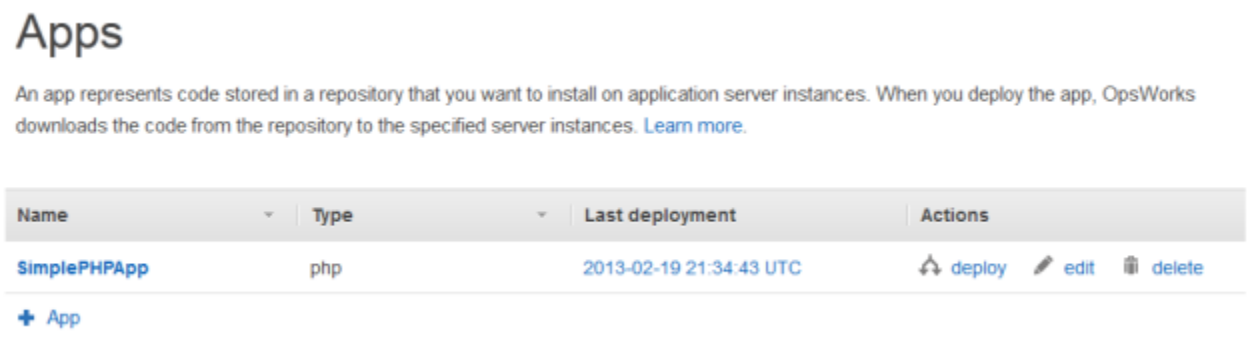
ステップ 3.5: SimplePHPApp バージョン 2 をデプロイする

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

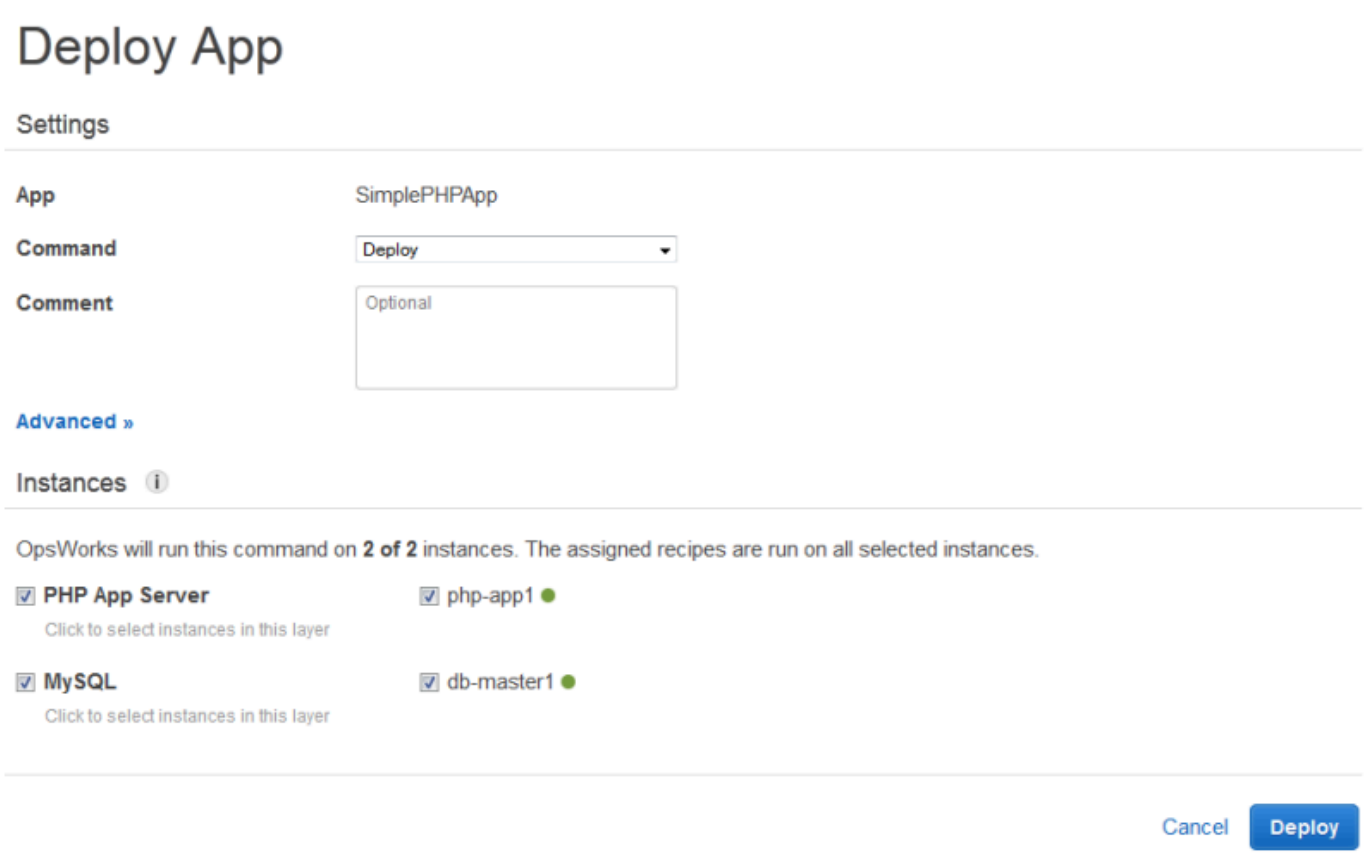
最後のステップは、SimplePHPApp の新しいバージョンをデプロイすることです。

SimplePHPApp をデプロイするには

1. [Apps] (アプリケーション) ページ上の、[SimplePHPApp] アプリケーションの [Actions] (アクション) で [deploy] (デプロイ) をクリックします。



2. デフォルト値を変更せずに、[Deploy] をクリックします。



[Deploy App (デプロイアプリケーション)] ページで [Deploy (デプロイ)] をクリックすると、デプロイの ライフサイクルイベントをトリガーし、エージェントにデプロイレシピを実行するように通知します。デフォルトでは、スタックのすべてのインスタンスでイベントをトリガーします。組み込みのデプロイレシピは、アプリケーションのタイプに適したインスタンス (この場合は PHP アプリケーションサーバー インスタンス) にのみアプリケーションをデプロイします。ただし、通常、他のインスタンスで Deploy イベントをトリガーして、アプリケーションのデプロイに応答できるようにすると便利です。この場合、MySQL インスタンスでデプロイをトリガーしてデータベースをセットアップすることもできます。

次の点に注意してください。

- PHP アプリケーションサーバー インスタンス上のエージェントは、レイヤーの組み込みレシピを実行した後、`appsetup.rb` に従って、アプリケーションのデータベース接続を設定します。
- MySQL インスタンス上のエージェントは何もインストールしませんが、`dbsetup.rb` を実行して urler テーブルを作成します。

デプロイが完了すると、[Deployment] ページで [Status] が successful に変わります。

ステップ 3.6: SimplePHPApp を実行する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

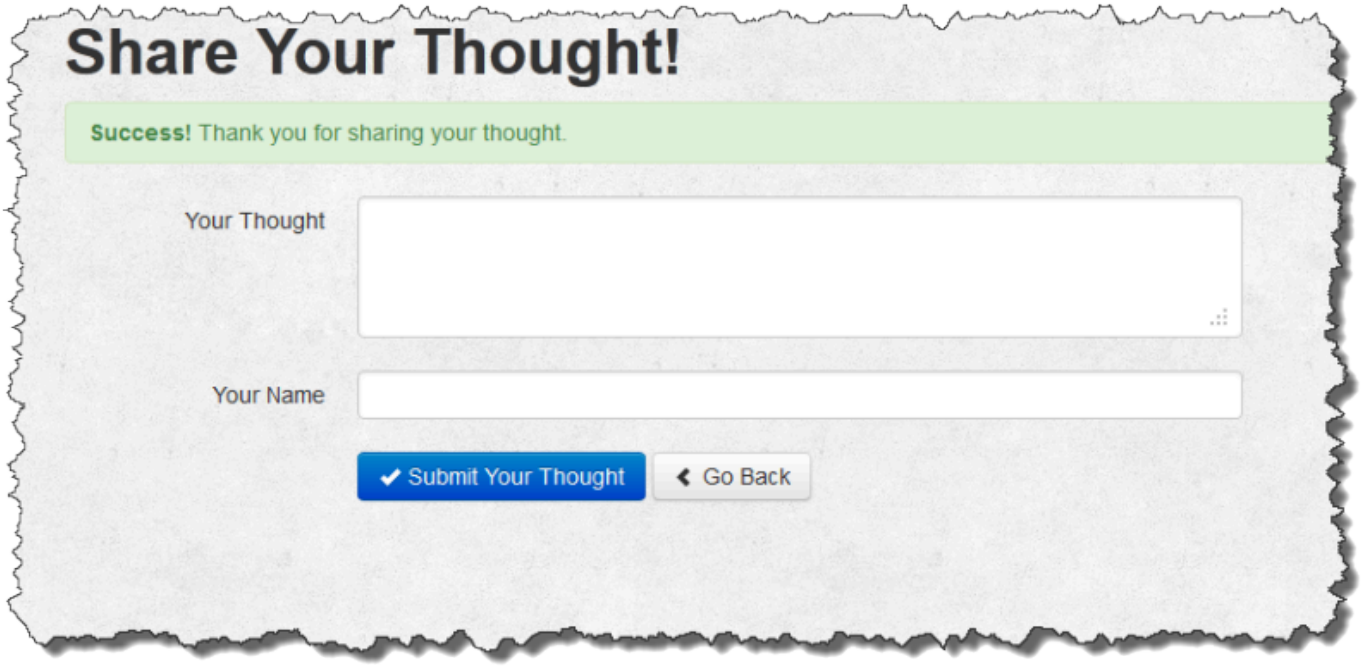
デプロイのステータスが successful に変わったら、次のようにして、SimplePHPApp の新しいバージョンを実行できます。

SimplePHPApp を実行するには

1. [Instances] ページで、[php-app1] 行のパブリック IP アドレスをクリックします。

   ブラウザに次のページが表示されます。

2. [Share Your Thought] (考えを共有) をクリックし、そして、[Your Thought] (あなたの考え) には **`Hello world!`** のようなもの、そして [Your Name] (あなたの名前) にはあなたの名前を入力します。次に、[Submit Your Thought] をクリックして、データベースにメッセージを追加します。

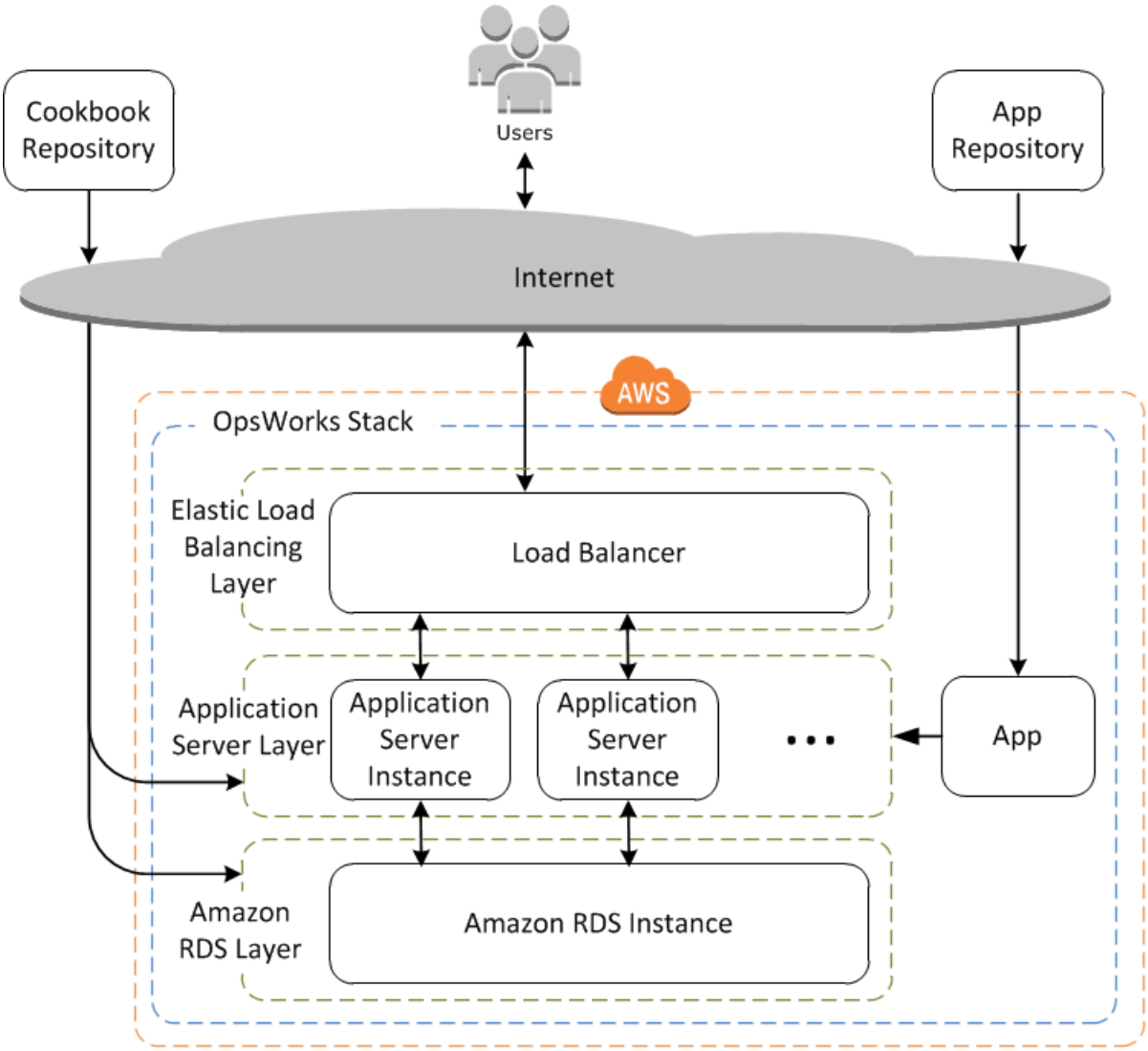


3. [Go Back] をクリックすると、データベース内のすべてのメッセージが表示されます。

ステップ 4: MyStack の拡張

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

MyStack にあるアプリケーションサーバーは現在 1 個のみです。本稼働用のスタックでは、おそらく、複数のアプリケーションサーバーで着信トラフィックを処理し、ロードバランサーでアプリケーションサーバー全体の着信トラフィックを均等に分散させる必要があります。アーキテクチャは次のようになります。



OpsWorks スタックを使用すると、スタックを簡単にスケールアウトできます。このセクションでは、2 番目の 24/7 PHP アプリケーションサーバー インスタンスを MyStack に追加し、両方のインスタンスを Elastic Load Balancing ロードバランサーの後ろに配置することにより、スタックを拡張する方法の基本について説明します。プロシージャを簡単に拡張して任意の数の 24/7 インスタンスを追加するか、時間ベースまたは負荷ベースのインスタンスを使用して OpsWorks スタックを自動的にスケーリングできます。詳細については、「時間ベースおよび負荷ベースのインスタンスによる負荷の管理」を参照してください。

ステップ 4.1: Load Balancer の追加

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソ

リューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Elastic Load Balancing は、受信アプリケーショントラフィックを複数の Amazon EC2 インスタンスに自動的に分散させる AWS サービスです。Elastic Load Balancing は、トラフィックの分散の他に、以下のことも行います。

- 健全でない Amazon EC2 インスタンスを検出します。

  問題のあるインスタンスが復旧するまで、トラフィックのルートを残りの正常なインスタンスに変更します。
- 着信トラフィックに応じて、自動的にそのリクエスト処理能力を拡張します。

> **Note**
>
> ロードバランサーで 2 つの目的を達成できます。明らかな目的は、アプリケーションサーバーで負荷を均等化することです。さらに、多くのサイトでは、ユーザーがアプリケーションサーバーおよびデータベースに直接アクセスできないようにすることが求められます。OpsWorks スタックでは、次のようにパブリックサブネットとプライベートサブネットを持つ Virtual Private Cloud (VPC) でスタックを実行することでこれを行うことができます。
>
> - アプリケーションサーバーおよびデータベースをプライベートサブネットに配置します。VPC 内の他のインスタンスはこれらにアクセスできますが、ユーザーはアクセスできません。
> - パブリックサブネット内のロードバランサーにユーザートラフィックを送ると、このトラフィックはプライベートサブネット内のアプリケーションサーバーに転送され、ユーザーにレスポンスが返されます。
>
> 詳細については、「VPC でのスタックの実行」を参照してください。このチュートリアルの例を拡張して VPC で実行する CloudFormation テンプレートについては、`OpsWorksVPCtemplates.zip` ファイルをダウンロードします。

多くの場合、Elastic Load Balancing はレイヤーと呼ばれますが、他の組み込みレイヤーとは動作が多少異なります。レイヤーを作成してインスタンスを追加する代わりに、Amazon EC2 コンソール

を使用して Elastic Load Balancing ロードバランサーを作成し、それを既存のレイヤーの 1 つ、通常はアプリケーションサーバーレイヤーにアタッチします。 OpsWorks スタックはレイヤーの既存のインスタンスをサービスに登録し、新しいインスタンスを自動的に追加します。次の手順は、ロードバランサーを MyStack の PHP アプリケーションサーバーレイヤーに追加する方法を説明しています。

> **Note**
>
> OpsWorks スタックは Application Load Balancer をサポートしていません。Classic Load Balancer は OpsWorks スタックでのみ使用できます。

ロードバランサーを PHP アプリケーションサーバーレイヤーにアタッチするには

1. Amazon EC2 コンソールを使用して、MyStack の新しいロードバランサーを作成します。アカウントで EC2 Classic をサポートするかどうかによって詳細が異なります。詳細については、「Elastic Load Balancing の開始方法」を参照してください。[Create Load Balancer] ウィザードを実行するときに、ロードバランサーを次のように設定します。

   Load Balancer の定義

   ロードバランサーに PHP-LB などのわかりやすい名前を割り当てて、 OpsWorks スタックコンソールで見つけやすくします。次に [Continue] を選択し、残りの設定のデフォルト値を受け入れます。

   [Create LB Inside] メニューから 1 つ以上のサブネットがある VPC を選択する場合は、ロードバランサーでトラフィックをルーティングするアベイラビリティーゾーンごとにサブネットを選択する必要があります。

   セキュリティグループの割り当て

   アカウントでデフォルト VPC がサポートされている場合は、このページがウィザードに表示され、ロードバランサーのセキュリティグループを決定できます。EC2 Classic の場合、このページは表示されません。

   このウォークスルーでは、[default VPC security group] を選択します。

   セキュリティ設定の構成

   [Define Load Balancer] (Load Balancer の定義) ページで、[Load Balancer Protocol] (Load Balancer プロトコル) として [HTTPS] を選択した場合、このページで証明書、暗号、および

SSL プロトコルの設定を構成します。このウォークスルーでは、デフォルト値を受け入れ、[Configure Health Check] を選択します。

ヘルスチェックの設定

ping パスに **/** を設定し、残りの設定にデフォルト値を受け入れます。

EC2 インスタンスの追加

Continue; を選択します。 OpsWorks スタックはロードバランサーにインスタンスを自動的に登録します。

タグの追加

タグを追加すると検索しやすくなります。各タグはキーと値のペアです。たとえば、このウォークスルーでは、キーとして「**Description**」、値として「**Test LB**」を指定できます。

確認

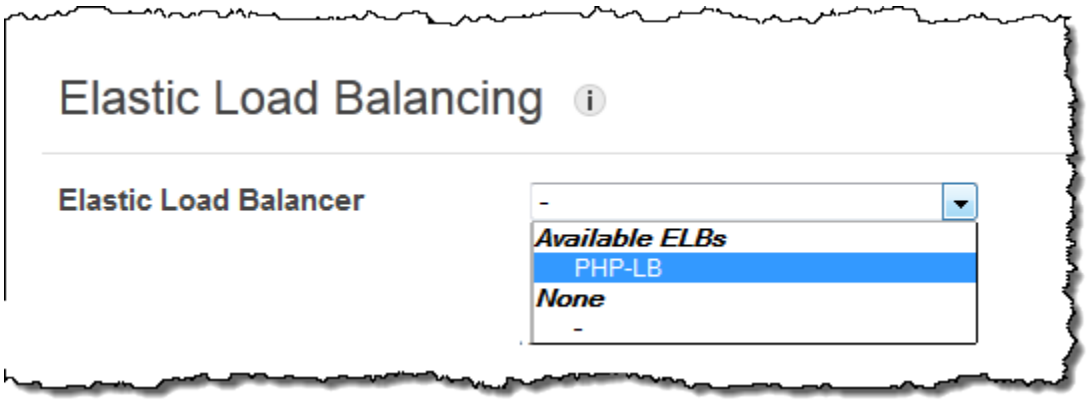
選択内容を確認して [Create] を選択し、次に [Close] を選択すると、ロードバランサーが起動します。

2. アカウントでデフォルト VPC がサポートされている場合は、ロードバランサーを起動した後で、セキュリティグループに適切な進入ルールがあることを確認する必要があります。デフォルトルールでは、着信トラフィックは受け入れられません。

   1. Amazon EC2 のナビゲーションペインで、[Security Groups] (セキュリティグループ) を選択します。
   2. [default VPC security group] を選択します。
   3. [Inbound] (インバウンド) タブで、[Edit] (編集) を選択します。
   4. このウォークスルーでは、[Source] を [Anywhere] に設定します。これにより、ロードバランサーでは任意の IP アドレスからの着信トラフィックを受け入れます。

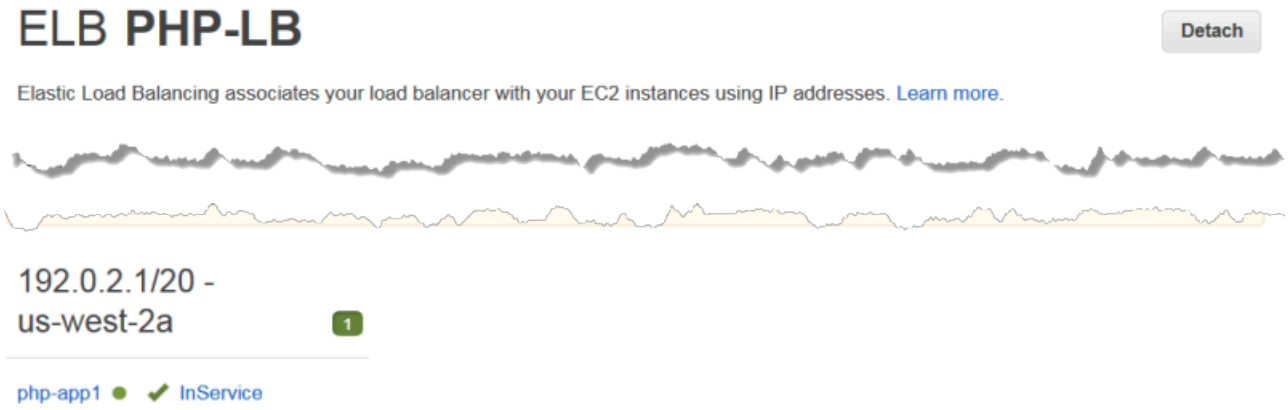
3. OpsWorks スタックコンソールに戻ります。[Layers] (レイヤー) ページで、レイヤーの [Network] (ネットワーク) リンクを選択し、[Edit] (編集) を選択します。

4. [Elastic Load Balancing] で、ステップ 1 で作成した ロードバランサーを選択し、[Save] を選択します。



ロードバランサーをレイヤーにアタッチすると、 OpsWorks Stacks はレイヤーの現在のインスタンスを自動的に登録し、オンラインになると新しいインスタンスを追加します。

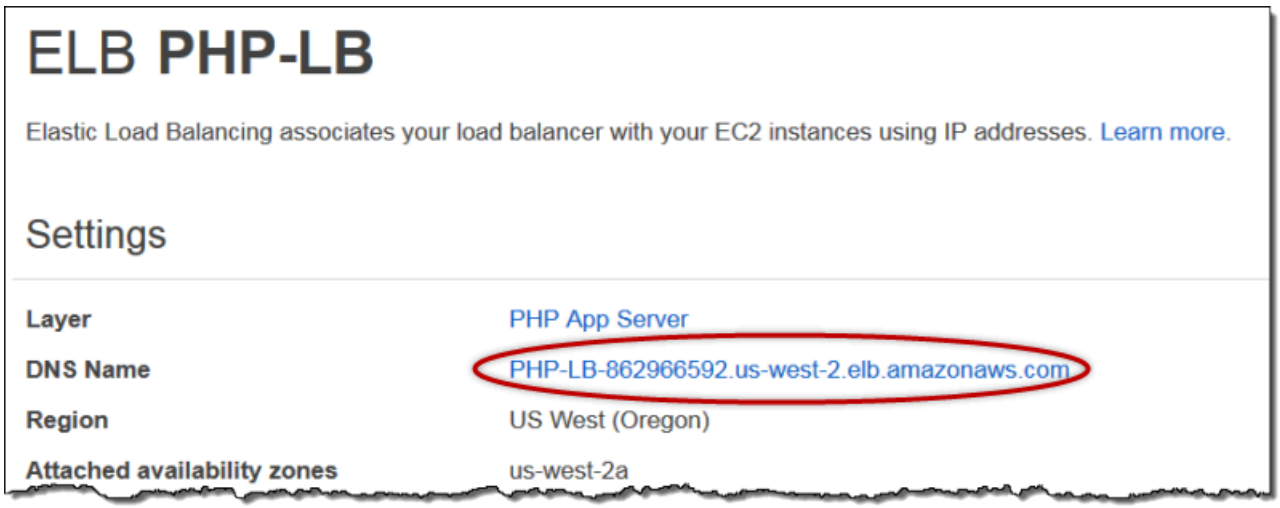
5. [Layers] (レイヤー) ページで、ロードバランサーの名前をクリックして詳細ページを開きます。登録が完了し、インスタンスがヘルスチェックに合格すると、ロードバランサーページのインスタンスの横に緑色のチェックマークが OpsWorks スタックに表示されます。



これで、ロードバランサーにリクエストを送信することによって SimplePHPApp を実行できます。

ロードバランサーを通じて SimplePHPApp を実行するには

1. ロードバランサーの詳細ページを再度開きます (開いていない場合)。
2. プロパティページで、インスタンスのヘルスチェックステータスを確認し、ロードバランサーの DNS 名をクリックして SimplePHPApp を実行します。ロードバランサーが PHP アプリケーションサーバーインスタンスにリクエストを転送すると、レスポンスが返されます。これは、PHP アプリケーションサーバーインスタンスのパブリック IP アドレスをクリックした場合とまったく同じレスポンスになるはずです。



> **Note**
>
> OpsWorks スタックは HAProxy ロードバランサーもサポートしており、一部のアプリケーションには利点がある場合があります。詳細については、「HAProxy OpsWorks スタックレイヤー」を参照してください。

ステップ 4.2: PHP アプリケーションサーバーインスタンスの追加

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

ロードバランサーが適切に配置されたので、インスタンスを PHP アプリケーションサーバーレイヤーに追加することによりスタックを拡張できます。ユーザーから見た場合、このオペレーションはシームレスです。新しい PHP App Server インスタンスがオンラインになるたびに、 OpsWorks スタックはロードバランサーに自動的に登録して SimplePHPApp をデプロイするため、サーバーは受信トラフィックの処理をすぐに開始できます。簡略にするために、このトピックでは 1 つの追加 PHP アプリケーションサーバー インスタンスの追加方法を示しますが、同じ方法で必要な数だけ追加できます。

別のインスタンスを PHP アプリケーションサーバーレイヤーに追加するには

1. [Instances] ページの [PHP App Server] (PHP アプリケーションサーバー) で [+ Instance] (+ インスタンス) をクリックします。
2. デフォルト設定を受け入れて、[Add Instance] をクリックします。
3. [start] をクリックしてインスタンスを開始します。

ステップ 4.3: MyStack の監視

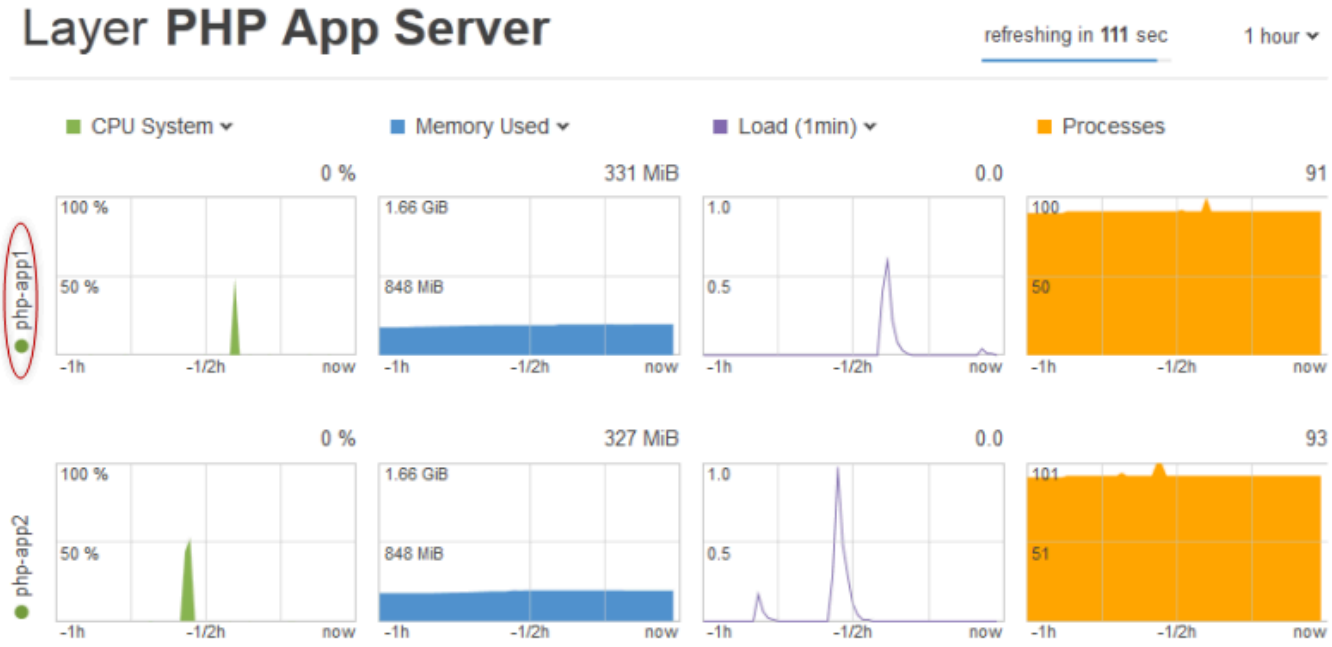
> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックは Amazon CloudWatch を使用してスタックのメトリクスを提供し、モニタリングページで便宜上要約します。スタック全体、特定のレイヤー、特定のインスタンスに対するメトリクスを閲覧することができます。

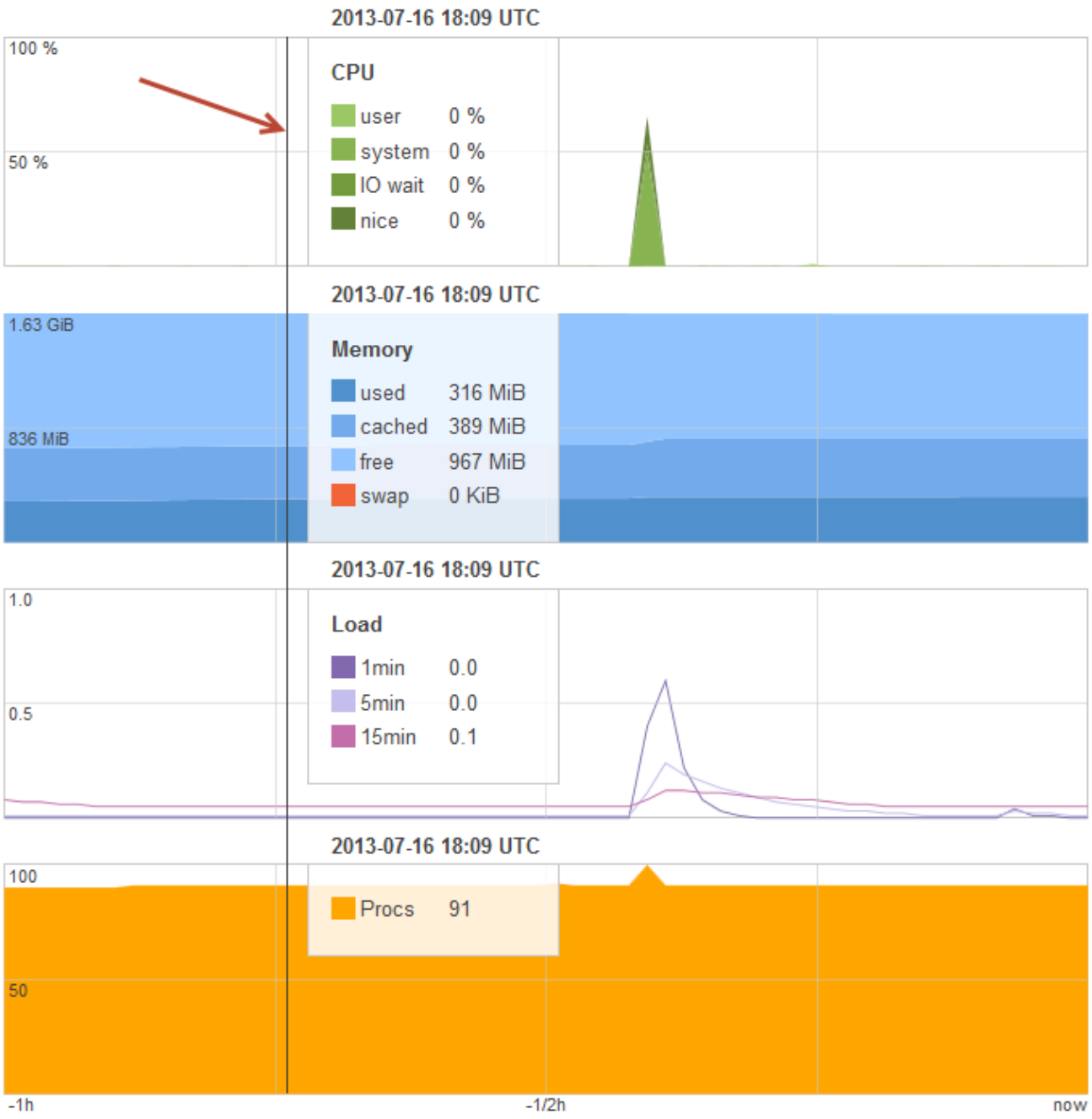
MyStack を監視するには

1. ナビゲーションペインで [Monitoring] をクリックすると、各レイヤーの平均メトリクスを含む一連のグラフが表示されます。[CPU System]、[Memory Used]、および [Load] のメニューを使用してさまざまな関連メトリクスを表示できます。

2. [PHP App Server] をクリックすると、レイヤーのインスタンスごとのメトリクスが表示されます。



3. [php-app1] をクリックすると、そのインスタンスのメトリクスが表示されます。スライダーを動かすことで、特定の時点のメトリクスを確認することができます。


Instance php-app1
refreshing in
2013-07-16 18:09 UTC
100 %
50 %
CPU
user 0 %
system 0 %
IO wait 0 %
nice 0 %
2013-07-16 18:09 UTC
1.63 GiB
836 MiB
Memory
used 316 MiB
cached 389 MiB
free 967 MiB
swap 0 KiB
2013-07-16 18:09 UTC
1.0
0.5
Load
1min 0.0
5min 0.0
15min 0.1
2013-07-16 18:09 UTC
100
50
Procs 91
-1h
-1/2h
now

> **Note**
>
> OpsWorks スタックは Ganglia モニタリングサーバーもサポートしており、一部のアプリケーションには利点がある場合があります。詳細については、「Ganglia レイヤー」を参照してください。

ステップ 5: MyStack を削除する

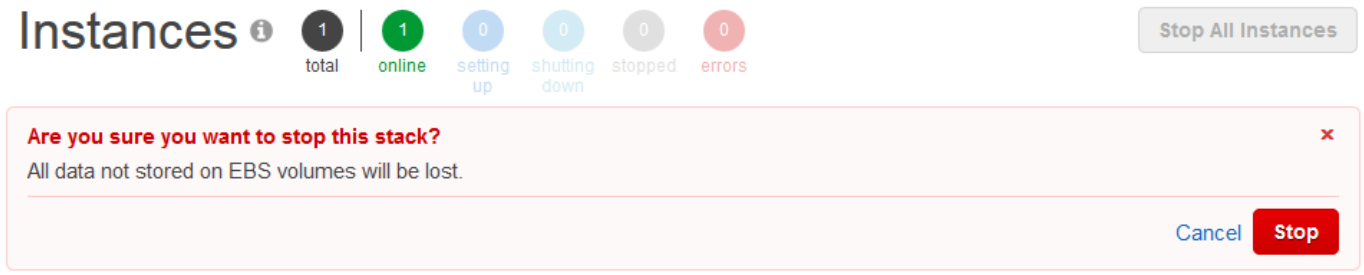
> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Amazon EC2 インスタンスなどの AWS リソースの使用を開始するとすぐに、使用量に応じて課金されます。ひとまず終了した場合は、インスタンスを停止して不要な料金が発生しないようにする必要があります。不要なスタックは、削除することができます。

MyStack を削除するには

1. すべてのインスタンスの停止

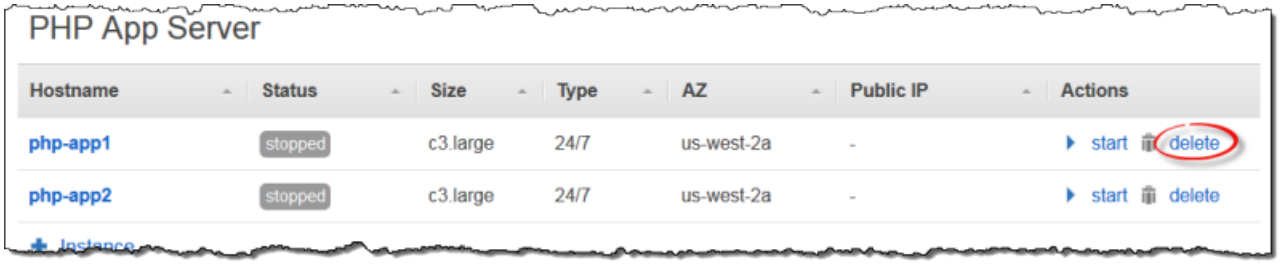
   [Instances] ページで、[Stop All Instances] をクリックして、操作の確認を求められたら [Stop] をクリックします。



   Stop をクリックすると、 OpsWorks スタックは関連付けられた Amazon EC2 インスタンスを終了しますが、Elastic IP アドレスや Amazon EBS ボリュームなどの関連付けられたリソースは終了しません。

2. すべてのインスタンスの削除

   インスタンスを停止すると、関連する Amazon EC2 インスタンスだけが終了します。インスタンスのステータスが停止になってから、各インスタンスを削除する必要があります。[PHP App Server]レイヤーにある php-app1 インスタンスの [Actions] 列で [delete] をクリックします。

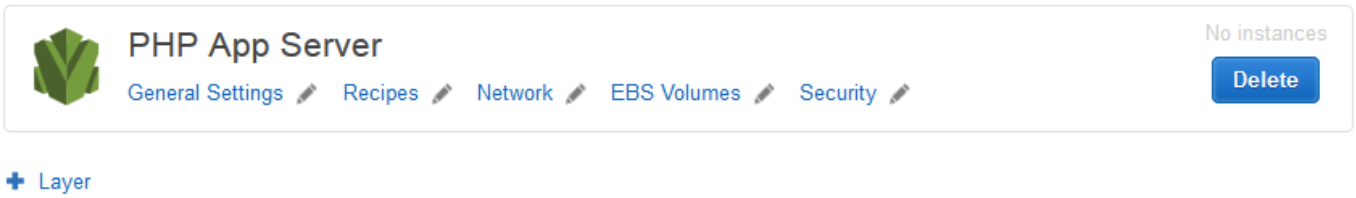


   OpsWorks その後、 スタックは削除を確認するように要求し、依存するリソースを表示します。これらのリソースの一部またはすべて保持することを選択することができます。この例では、依存リソースがないので、[Delete] をクリックします。

   php-app2 および MySQL インスタンス (db-master1) に対してこの処理を繰り返します。db-master1 には、Amazon Elastic Block Store の関連ボリュームが含まれていることに注意してください。それは、デフォルトで選択されています。選択した状態にしておくと、インスタンスと共にボリュームも削除されます。

3. レイヤーを削除します。

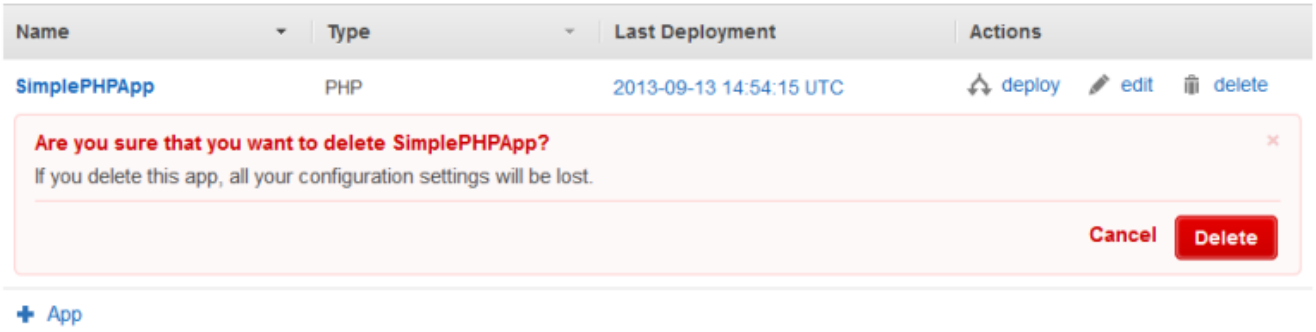
   [Layers] (レイヤー) ページで、[Delete] (削除) をクリックし、再び [Delete] (削除) をクリックして削除を確定します。



   MySQLレイヤーに対してこの処理を繰り返します。

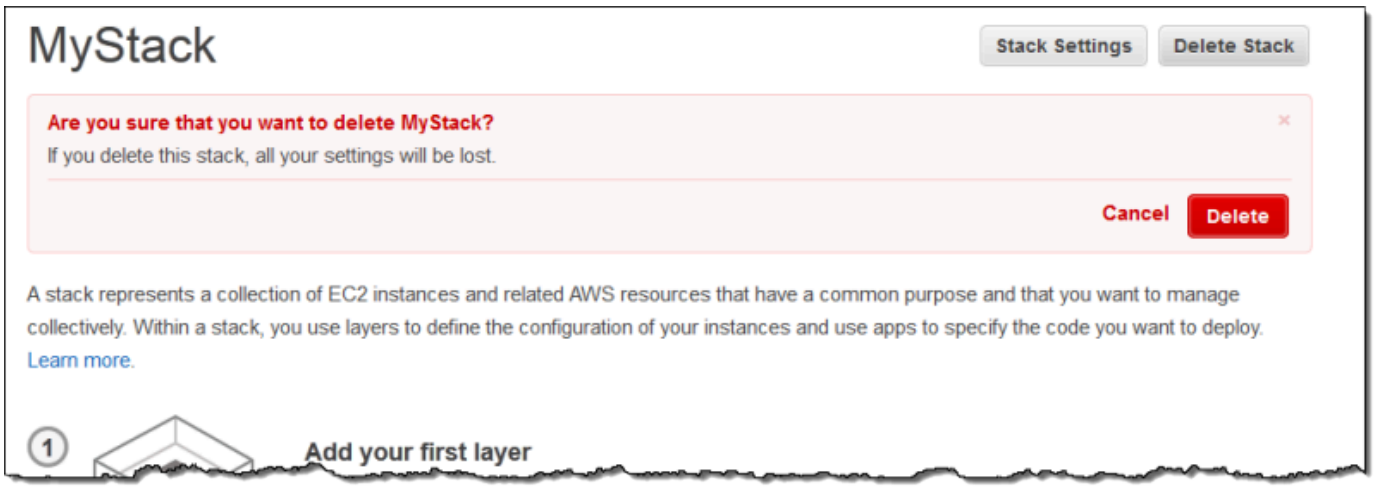
4. アプリケーションの削除

   [Apps] (アプリケーション) ページで、[SimplePHPApp] アプリケーションの [Actions] (アクション) 列で [delete] (削除) をクリックし、続いて [delete] (削除) をクリックして削除を確定します。



5. MyStack の削除

   [Stack] ページで、[Delete Stack] をクリックし、[Delete] をクリックして削除を確定します。



この演習はこれで終了です。

Node.js スタックの初回作成

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

この例では、Node.js アプリケーションサーバーをサポートする Linux スタックの作成方法と、シンプルなアプリケーションのデプロイ方法について説明します。スタックは以下のコンポーネントから構成されます。

- 2 つのインスタンスを伴う [Node.js App Server Layer] (Node.js アプリケーションサーバーレイヤー)
- アプリケーションサーバーインスタンスにトラフィックを分散させる Elastic Load Balancing (Elastic ロードバランシング)
- バックエンドデータベースが提供する Amazon Relational Database Service (Amazon RDS) service layer (Amazon Relational データベースサービス (Amazon RDS) サービスレイヤー)

トピック

- 前提条件
- アプリケーションの実装
- データベースサーバーとロードバランサーの作成
- スタックの作成
- アプリケーションのデプロイ
- 次のステップ

前提条件

このウォークスルーでは、以下のことを前提としています。

- AWS アカウントがあり、 OpsWorks スタックの使用方法の基本を理解している。

  OpsWorks スタックまたは AWS を初めて使用する場合は、「」の入門チュートリアルを完了して基本を学習してくださいChef 11 Linux スタックの使用開始。
- Node.js アプリケーションの基本的な実装方法を理解している。

  Node.js に慣れていない場合は、「Node: Up and Running」などの入門チュートリアルを完了して、基本事項を学習してください。
- この例で使用する予定の AWS リージョンで 1 つ以上のスタックを作成済みである。

  リージョンに最初のスタックを作成すると、 OpsWorks Stacks はレイヤータイプごとに Amazon Elastic Compute Cloud (Amazon EC2) セキュリティグループを作成します。Amazon RDS デー

タベース (DB) インスタンスを作成するには、これらのセキュリティグループが必要です。OpsWorks スタックを初めて使用する場合は、「」のチュートリアルに従ったときと同じリージョンをこの例に使用することをお勧めしますChef 11 Linux スタックの使用開始。新しいリージョンを使用する場合は、リージョンに新しいスタックを作成します。このスタックにレイヤーやインスタンスは必要ありません。スタックを作成するとすぐに、 OpsWorks スタックはリージョンに一連のセキュリティグループを自動的に追加します。

- デフォルトの VPC にスタックを作成する。

  このウォークスルーには EC2-Classic を使用できますが、一部の詳細はわずかに異なります。たとえば EC2-Classic では、サブネットではなくインスタンスのアベイラビリティーゾーン (AZ) を指定します。

- IAM ユーザーには OpsWorks 、 スタックに対するフルアクセス許可があります。

  セキュリティ上の理由から、ウォークスルー用にアカウントのルート認証情報を指定しないことを強くお勧めします。代わりに、 OpsWorks スタックのフルアクセス許可を持つユーザーを作成し、それらの認証情報を OpsWorks スタックで使用します。詳細については、「管理者ユーザーの作成」を参照してください。

アプリケーションの実装

このチュートリアルでは、Amazon RDS DB インスタンスに接続し、インスタンスのデータベースを一覧表示するシンプルな [Express] (エクスプレス) アプリケーションを使用します。

アプリケーションを実装するには、ワークステーション上の使いやすい場所に nodedb という名前のディレクトリを作成し、以下に示す 3 つのファイルを追加します。

トピック

- パッケージディスクリプター
- レイアウトファイル
- コードファイル

パッケージディスクリプター

アプリケーションのパッケージディスクリプターを作成するには、以下に示す内容の `package.json` というファイルを nodedb ディレクトリに追加します。`package.json` は、Express アプリケーションに必要であり、アプリケーションのルートディレクトリに配置されている必要があります。

```
{
  "name": "Nodejs-DB",
  "description": "Node.js example application",
  "version": "0.0.1",
  "dependencies": {
    "express": "*",
    "ejs": "*",
    "mysql": "*"
  }
}
```

この例の package.json は、ほぼ最小限の内容です。必要な name 属性と version 属性が定義され、従属パッケージがリストされています。

- express は、Express パッケージを参照しています。
- ejs は、テキストを HTML レイアウトファイルに挿入するためにアプリケーションで使用される EJS パッケージを参照しています。
- mysql は、RDS インスタンスに接続するためにアプリケーションで使用される node-mysql パッケージを参照しています。

パッケージディスクリプターファイルの詳細については、「package.json」を参照してください。

レイアウトファイル

アプリケーションのレイアウトファイルを作成するには、views ディレクトリに nodedb ディレクトリを追加し、以下に示す内容の views というファイルを index.html に追加します。

```
<!DOCTYPE html>
<html>
<head>
  <title>AWS Opsworks Node.js Example</title>
</head>
<body>
  <h1>AWS OpsWorks Node.js Example</h1>
    <p>Amazon RDS Endpoint: <i><%= hostname %></i></p>
    <p>User: <i><%= username %></i></p>
    <p>Password: <i><%= password %></i></p>
    <p>Port: <i><%= port %></i></p>
```

```
    <p>Database: <i><%= database %></i></p>

    <p>Connection: <%= connectionerror %></p>
    <p>Databases: <%= databases %></p>
</body>
</html>
```

この例のファイルレイアウトファイルは、Amazon RDS からのデータを表示するシンプルな HTML ドキュメントです。各 <%= ... => 要素は、次に作成するコードファイル内で定義されている変数の値を示します。

コードファイル

アプリケーションのコードファイルを作成するには、以下に示す内容の server.js ファイルを nodedb ディレクトリに追加します。

> **Important**
>
> OpsWorks スタックでは、Node.js アプリケーションのメインコードファイルの名前を指定server.jsし、アプリケーションのルートフォルダに配置する必要があります。

```
var express = require('express');
var mysql = require('mysql');
var dbconfig = require('opsworks'); //[1] Include database connection data
var app = express();
var outputString = "";

app.engine('html', require('ejs').renderFile);

//[2] Get database connection data
app.locals.hostname = dbconfig.db['host'];
app.locals.username = dbconfig.db['username'];
app.locals.password = dbconfig.db['password'];
app.locals.port = dbconfig.db['port'];
app.locals.database = dbconfig.db['database'];
app.locals.connectionerror = 'successful';
app.locals.databases = '';

//[3] Connect to the Amazon RDS instance
var connection = mysql.createConnection({
```

```
    host: dbconfig.db['host'],
    user: dbconfig.db['username'],
    password: dbconfig.db['password'],
    port: dbconfig.db['port'],
    database: dbconfig.db['database']
});

connection.connect(function(err)
{
    if (err) {
        app.locals.connectionerror = err.stack;
        return;
    }
});

// [4] Query the database
connection.query('SHOW DATABASES', function (err, results) {
    if (err) {
        app.locals.databases = err.stack;
    }

    if (results) {
        for (var i in results) {
            outputString = outputString + results[i].Database + ', ';
        }
        app.locals.databases = outputString.slice(0, outputString.length-2);
    }
});

connection.end();

app.get('/', function(req, res) {
    res.render('./index.html');
});

app.use(express.static('public'));

//[5] Listen for incoming requests
app.listen(process.env.PORT);
```

この例では、データベース接続情報を表示し、データベースサーバーに照会して、サーバーのデータベースを表示しています。これは、必要に応じてデータベースとやり取りするために簡単に一般化することができます。コード内の番号付きのコメントに対応する注釈を以下に示します。

[1] Include database connection data (データベース接続データを含める)

この require ステートメントでは、データベース接続データを含めています。後述するように、データベースインスタンスをアプリケーションにアタッチすると、 OpsWorks Stacks は接続データを という名前のファイルに配置しopsworks.jsます。これは次のようになります。

```
exports.db = {
  "host":"nodeexample.cdlqlk5uwd0k.us-west-2.rds.amazonaws.com",
  "database":"nodeexampledb",
  "port":3306,
  "username":"opsworksuser",
  "password":"your_pwd",
  "reconnect":true,
  "data_source_provider":"rds",
  "type":"mysql"}
```

opsworks.js はアプリケーションの shared/config ディレクトリ /srv/www/*app_shortname*/shared/config にあります。ただし、 OpsWorks スタックはアプリケーションのルートディレクトリopsworks.jsにシンボリックリンクを に配置するため、 のみを使用して オブジェクトを含めることができますrequire 'opsworks'。

[2] Get database connection data (データベース接続データを取得する)

これら一連のステートメントは、opsworks.js に記述されている接続データを表示します。そのために、db オブジェクトの値を一連の app.locals プロパティに割り当てています。これらのプロパティはそれぞれ、index.html ファイル内の <%= ... %> 要素のいずれかに対応しています。レンダリング後のドキュメントでは、<%= ... %> 要素が、対応するプロパティ値に置き換わります。

[3] Connect to the Amazon RDS instance (Amazon RDS インスタンスに接続する)

この例では、node-mysql を使用してデータベースにアクセスしています。データベースに接続するために、接続データを connection に渡して createConnection オブジェクトを作成し、connection.connect を呼び出して接続を確立しています。

[4] Query the database (データベースを照会する)

接続を確立した後、データベースを照会するために connection.query 呼び出します。この例では単純に、サーバーのデータベース名を照会しています。query は、データベース名を Database プロパティに割り当てて、各データベースに対応する results オブジェクトの配列

を返します。この例では、名前を連結して `app.locals.databases,` に割り当てます。これにより、レンダリングされた HTML ページに一覧が表示されます。

この例では、データベースが 5 つあります。1 つは、RDS インスタンスの作成時に指定した `nodeexampledb` データベースで、他の 4 つは、Amazon RDS によって自動的に作成されます。

[5] Listen for incoming requests（受信されるリクエストをリッスンする）

最後のステートメントは、指定されたポートで受信されるリクエストをリッスンします。明示的なポート値を指定する必要はありません。アプリケーションをスタックに追加するときは、アプリケーションが HTTP リクエストと HTTPS リクエストのどちらをサポートしているかを指定します。 OpsWorks スタックは`PORT`環境変数を 80 (HTTP) または 443 (HTTPS) に設定し、その変数をアプリケーションで使用できます。

他のポートでリッスンすることは可能ですが、Node.js App Server レイヤーの組み込みセキュリティグループである [AWS-OpsWorks-nodejs-App-Server] では、ポート 80、443、および 22 (SSH) への着信ユーザートラフィックのみが許可されています。他のポートへの着信ユーザートラフィックを許可するには、適切なインバウンドルールを使用してセキュリティグループを作成し、Node.js アプリケーション-サーバーレイヤーに割り当てます。組み込みのセキュリティグループを編集することでインバウンドルールを変更しないでください。スタックを作成するたびに、 OpsWorks スタックは組み込みセキュリティグループを標準設定で上書きするため、行った変更は失われます。

> **Note**
>
> 関連するアプリケーションを作成または更新するときに、カスタムの環境変数をアプリケーションに関連付けることができます。また、カスタムの JSON とカスタムレシピを使用してデータをアプリケーションに渡すこともできます。詳細については、「アプリケーションへのデータの引き渡し」を参照してください。

データベースサーバーとロードバランサーの作成

この例では、Amazon RDS データベースサーバーと Elastic Load Balancing ロードバランサーのインスタンスを使用しています。各インスタンスは別々に作成し、スタックに組み込む必要があります。このセクションでは、新しいデータベースとロードバランサーのインスタンスを作成する方法を説明します。既存のインスタンスを使用することもできますが、この手順を読み、そのインスタンスが正しく設定されているか確認することをお勧めします。

この例で十分使用できる、最小設定の RDS DB インスタンスを作成する方法を次に説明します。詳細については、「Amazon RDS ユーザーガイド」を参照してください。

RDS DB インスタンスを作成するには

1. コンソール を開きます。

   Amazon RDS console (Amazon RDS コンソール) を開き、リージョンを米国西部 (オレゴン)に設定します。ナビゲーションペインで [RDS Dashboard] を選択し、[Launch DB Instance] を選択します。

2. データベースエンジンを指定します。

   データベースエンジンとして、[MySQL Community Edition] を選択します。

3. マルチ AZ 配置を拒否します。

   [No, this instance...] を選択し、[Next] を選択します。この例にマルチ AZ 配置は必要ありません。

4. 基本的な設定を指定します。

   [DB Instance Details] ページで、次の設定を指定します。

   - DB Instance Class: db.t2.micro
   - Multi-AZ Deployment: No
   - ストレージ割り当て: **5** GB
   - DB インスタンス識別子: **nodeexample**
   - マスターユーザーの名前: **opsworksuser**
   - [Master Password]: 任意のパスワード

   後で使用できるようにインスタンス識別子、ユーザー名、およびパスワードを書き留め、その他のオプションについてはデフォルト設定をそのままにして、[Next] を選択します。

5. 詳細設定を指定します。

   [Configure Advanced Settings] ページで、以下の設定を指定します。

   - データベース名: **nodeexampledb**
   - DB Security Group(s): AWS-OpsWorks-DB-Master-Server

> **Note**
>
> AWS-OpsWorks-DB-Master-Server セキュリティグループでは、スタックのインスタンスからのみデータベースへのアクセスが許可されます。データベースに直接アクセスするには、適切なインバウンドルールを指定して追加のセキュリティグループを RDS DB インスタンスにアタッチします。詳細については、「Amazon RDS セキュリティグループ」を参照してください。VPC にインスタンスを配置することによってアクセスを制御することもできます。詳細については、「VPC でのスタックの実行」を参照してください。

後で使用できるようにデータベース名を書き留め、その他の設定についてはデフォルト値をそのままにして、[Launch DB Instance] を選択します。

以下の手順では、この例の Elastic Load Balancing ロードバランサーを作成する方法を説明します。詳細については、「Elastic Load Balancing ユーザーガイド」を参照してください。

ロードバランサーを作成する方法

1. Amazon EC2 コンソールを開きます。

   Amazon EC2 console (Amazon EC2 コンソール) を開き、リージョンが米国西部 (オレゴン) に設定されていることを確認します。ナビゲーションペインで、[Load Balancers] を選択し、[Create Load Balancer] を選択します。

2. ロードバランサーを定義します。

   [Define Load Balancer] ページで、以下の設定を指定します。

   - 名前 – **`Node-LB`**
   - Create LB Inside (内部にLBを作成) – My Default VPC (マイデフォルトのVPC)

   その他のオプションについてはデフォルト設定をそのままにして、[Next] を選択します。

3. セキュリティグループを割り当てます。

   [Assign Security Groups] ページで、以下のグループを指定します。

- デフォルト VPC セキュリティグループ
- AWS-OpsWorks-nodejs-App-Server

[次へ] を選択します。[Configure Security Settings] ページで、[Next] を選択します。この例にセキュアリスナーは必要ありません。

4. ヘルスチェックを設定します。

   [Configure Health Check (ヘルスチェックの設定)] ページで、[Ping Path (ping パス)] を **/** に設定し、その他の設定についてはデフォルト値をそのままにします。[次へ] を選択します。[Add EC2 Instances] ページで、[Next] を選択します。タグの追加ページで、レビューと作成を選択します。 OpsWorks スタックはロードバランサーに EC2 インスタンスを追加するタスクを処理するため、この例のタグは必要ありません。

5. ロードバランサーを作成します。

   [Review] ページで、[Create] を選択してロードバランサーを作成します。

スタックの作成

必要なコンポーネントがすべて揃ったので、スタックを作成できます。

スタックを作成するには

1. OpsWorks スタックコンソールにサインインします。

   OpsWorks スタックコンソールにサインインし、[Add Stack (スタックを追加)] を選択します。

2. スタックを作成します。

   新しいスタックを作成するには、[Chef 11 stack] を選択して、以下の設定を指定します。

   - – **`NodeStack`**
   - [リージョン] – 米国西部 (オレゴン)

     スタックは任意の AWS リージョンに作成できますが、このチュートリアルでは米国西部 (オレゴン) をお勧めします。

   [Add Stack] を選択します。スタック設定の詳細については、「新しいスタックを作成する」を参照してください。

3. ロードバランサーがアタッチされた Node.js App Server layer を追加します。

   [NodeStack] ページで [Add a layer] を追加し、次の設定を指定します。

   - Layer type (レイヤータイプ) – Node.js App Server (Node.js アプリケーションサーバー)
   - Elastic Load Balancer (Elastic ロードバランサー) – Node-LB (ノード-LB)

   その他の設定についてはデフォルト値をそのままにして、[Add Layer] を選択します。

4. インスタンスをレイヤーに追加して起動します。

   ナビゲーションペインで、[Instances] を選択し、次の手順に従って 2 つのインスタンスを Rails アプリケーションサーバーレイヤーに追加します。

   1. Node.js App Server (Node.js アプリケーションサーバー) で、Add instance (インスタンスの追加) を選択します。

      [Size] を [t2.micro] に設定し、その他の設定についてはデフォルト値をそのままにして、[Add Instance] を選択します。

   2. [+Instance] を選択し、2 番目の t2.micro インスタンスを別のサブネット内のレイヤーに追加します。

      これにより、インスタンスが別のアベイラビリティーゾーン (AZ) に配置されます。

   3. [Add instance] を選択します。
   4. 両方のインスタンスを起動するには、[Start All Instances] を選択します。

   Elastic Load Balancing ロードバランサーをこのレイヤーに割り当てました。インスタンスがオンライン状態に出入りすると、 OpsWorks Stacks はロードバランサーにインスタンスを自動的に登録または登録解除します。

   > **Note**
   >
   > 本稼働スタックでは、アプリケーションサーバーインスタンスを複数の AZ に分散することをお勧めします。分散しておくと、ユーザーが 1 つの AZ に接続できない場合、着信トラフィックがロードバランサーによって別のゾーンにルーティングされるため、サイトの機能が続行します。

5. RDS DB インスタンスをスタックに登録します。

   ナビゲーションペインで、[Resources] を選択し、次の手順に従って RDS DB インスタンスをスタックに登録します。

   1. [RDS] タブを選択し、[Show Unregistered RDS DB instances] を選択します。
   2. nodeexampledb インスタンスを選択し、以下の設定を指定します。
      - User (ユーザー) – インスタンスの作成時に指定したマスターユーザー名 (この例では、)**`opsworksuser`**。
      - [Password] (パスワード) – インスタンスの作成時に指定したマスターパスワード。
   3. [Register with Stack] (スタックに登録) を選択し、RDS DB インスタンスを [Amazon RDS service layer] (Amazon RDS サービスレイヤー) としてスタックに追加します。

   > **Warning**
   >
   > OpsWorks スタックはユーザーまたはパスワードの値を検証せず、アプリケーションに渡します。これらを誤って入力すると、アプリケーションがデータベースに接続できません。

   RDS DB インスタンスを [Amazon RDS service layer] (Amazon RDS サービスレイヤー) としてスタックに追加するには、「Register with Stack」(スタックに登録) を選択します。

アプリケーションのデプロイ

アプリケーションはリモートリポジトリに保存する必要があります。デプロイすると、 OpsWorks スタックはコードと関連ファイルをリポジトリからアプリケーションサーバーインスタンスにデプロイします。便宜上、この例では、パブリック Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) アーカイブをリポジトリとして使用していますが、Git や Subversion など、いくつか他の種類のリポジトリも使用できます。詳細については、「Application Source」を参照してください。

アプリケーションをデプロイするには

1. アプリケーションをアーカイブファイルにパッケージ化します。

   `.zip` ディレクトリおよびサブディレクトリの nodedb アーカイブを nodedb.zip という名前で作成します。gzip、bzip2、tarball など、他の種類のアーカイブファイルを使用することもでき

ます。 OpsWorks スタックは非圧縮 tarball をサポートしていないことに注意してください。詳細については、「Application Source」を参照してください。

2. アーカイブファイルを Amazon S3 にアップロードします。

   nodedb.zip を Amazon S3 バケットにアップロードし、ファイルをパブリックにして、後で使用できるようにファイルの URL をコピーします。バケットの作成方法とファイルのアップロード方法の詳細については、「Amazon Simple Storage Service の使用開始」を参照してください。

   > **Note**
   >
   > OpsWorks スタックは Amazon S3 バケットからプライベートファイルをデプロイすることもできますが、わかりやすくするために、この例ではパブリックファイルを使用します。詳細については、「Application Source」を参照してください。

3. OpsWorks スタックアプリケーションを作成します。

   OpsWorks スタックコンソールに戻り、ナビゲーションペインでアプリを選択し、アプリの追加を選択します。以下の設定を指定します。

   - [Name] (名前) – NodeDB。

     この文字列は、アプリケーションの表示名です。ほとんどの場合、アプリケーションの短縮名が必要です。これは、すべての文字を小文字に変換し、句読点を削除することで OpsWorks 、スタックが表示名から生成します。この例の場合、短縮名は nodedb になります。アプリケーションの短縮名を確認するには、アプリケーションの作成後、[Apps] ページでアプリケーションを選択して詳細ページを表示します。

   - Type (タイプ) – Node.js。
   - Data source type (データソースタイプ) – RDS。
   - Database instance (データベースインスタンス) - 登録しておいた Amazon RDS DB インスタンスを選択します。
   - Database name (データベース名) - 作成しておいたデータベースの名前を指定します (この例の場合は nodeexampledb)。
   - Repository type (リポジトリタイプ) - Http Archive。

     パブリック Amazon S3 ファイルには、このリポジトリタイプを使用する必要があります。S3 Archive は、プライベートアーカイブにのみ使用する種類です。

- Repository URL (リポジトリの URL) - アーカイブファイルの Amazon S3 URL。

残りの設定にはデフォルト値を使用し、[Add App] をクリックしてアプリケーションを作成します。

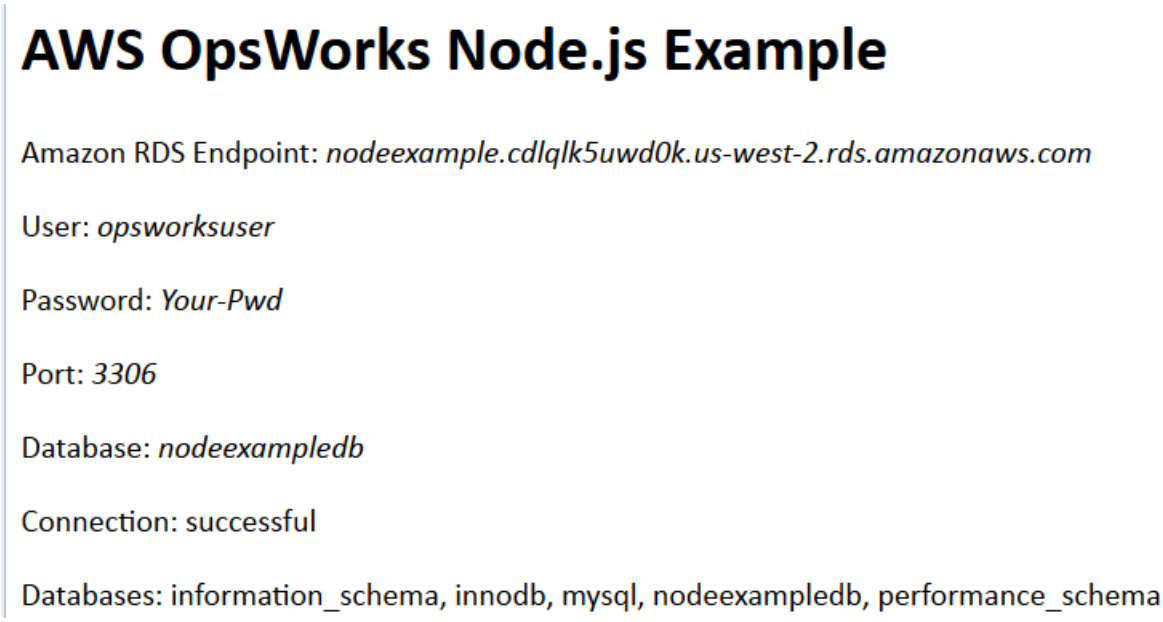
4. アプリケーションをデプロイします。

[Apps] ページに移動し、NodeDB アプリケーションの [Actions] 列で、[deploy] を選択します。次に、Deploy を選択してアプリケーションをサーバーインスタンスにデプロイします。OpsWorks スタックは各インスタンスで Deploy レシピを実行し、リポジトリからアプリケーションをダウンロードしてサーバーを再起動します。各インスタンスに緑色のチェックマークが付き、[Status] が [successful] であれば、デプロイが完了しており、アプリケーションでリクエストの処理を開始できる状態になっています。

> **Note**
>
> デプロイが失敗した場合は、[Log] (ログ) 列で [show] (表示) を選択すると、デプロイメントの Chef ログが表示されます。エラー情報は下の方にあります。

5. アプリケーションを開きます。

アプリケーションを開くには、[Layers] (レイヤー) を選択し、ロードバランサーを選択して、ロードバランサーの DNS 名を選択します。これにより、HTTP リクエストがロードバランサーに送信されます。次のような内容が表示されます。



> **Note**
>
> OpsWorks スタックは、セットアップ中に新しいインスタンスにアプリケーションを自動的にデプロイします。オンラインインスタンスに対してのみ、手動のデプロイが必要になります。詳細については、「アプリケーションのデプロイ」を参照してください。高度なデプロイ方法など、デプロイ全般については、「アプリケーションとクックブックの管理とデプロイ」を参照してください。

次のステップ

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このウォークスルーでは、シンプルな Node.js アプリケーションサーバースタックのセットアップの基本について説明しました。ここでは、次のステップに関する推奨事項をいくつか示します。

Node.js の組み込みクックブックを調べる

インスタンスの設定方法について詳しく知りたい場合は、レイヤーの組み込みクックブック「opsworks_nodejs」を参照してください。これには、 OpsWorks スタックがソフトウェアのインストールと設定に使用するレシピと関連ファイル、および OpsWorks スタックがアプリケーションのデプロイに使用するレシピを含む組み込みデプロイクックブックが含まれています。

サーバー設定をカスタマイズする

例では、基本的なスタックを使用しています。本稼働用に使用する場合は、スタックをカスタマイズすることをお勧めします。詳細については、「OpsWorks スタックのカスタマイズ」を参照してください。

SSL サポートを追加する

アプリの作成時に、アプリの SSL サポートを有効にし、適切な証明書を OpsWorks スタックに提供できます。 OpsWorks スタックは、適切なディレクトリに証明書をインストールします。詳細については、「SSL の使用」を参照してください。

メモリ内データのキャッシュを追加する

本稼働レベルのサイトでは、多くの場合、Redis や Memcache などのメモリ内キー値ストアにデータをキャッシュすることでパフォーマンスが向上します。 OpsWorks スタックスタックでは、 のいずれかを使用できます。詳細については、「ElastiCache Redis」および「Memcached」を参照してください。

高度なデプロイ方法を使用する

ここに示した例では、すべてのインスタンスに更新を同時にデプロイするというシンプルな方法でアプリをデプロイしました。このアプローチは、シンプルで高速ですが、エラーに対する許容範囲がありません。デプロイが失敗した場合や、更新に問題がある場合、本稼働スタックのすべてのインスタンスが影響を受けることがあります。問題が解決されるまで、サイトのサービスが中断されるか無効になる可能性があります。デプロイ方法の詳細については、「アプリケーションとクックブックの管理とデプロイ」を参照してください。

Node.js アプリケーションサーバーレイヤーを拡張する

レイヤーは、さまざまな方法で拡張できます。たとえば、インスタンスに対してスクリプトを実行するためのレシピや、アプリのデプロイをカスタマイズするための Chef デプロイフックを実装することができます。詳細については、「レイヤーの拡張」を参照してください。

環境変数を定義する

関連付けられたアプリケーションの環境変数を定義することによって、アプリケーションにデータを渡すことができます。アプリケーションをデプロイすると、 OpsWorks スタックはこれらの変数をエクスポートして、アプリケーションからアクセスできるようにします。詳細については、「環境変数の使用」を参照してください。

OpsWorks スタックのカスタマイズ

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックの組み込みレイヤーは、多くの目的に十分な標準機能を提供します。ただし、以下の状況が考えられます。

- 組み込みのレイヤーの標準設定では最適とは言えない場合、特定の要件に合わせて最適化することができます。

  例えば、ワーカープロセスの最大数または `keepalivetimeout` 値などの設定に独自の値を指定することで、Static ウェブサーバーレイヤーの Nginx サーバー設定を調整することができます。
- 組み込みのレイヤー機能でも問題ありませんが、追加パッケージをインストールまたはカスタムのインストールスクリプトを実行することで拡張することができます。

  例えば、Redis サーバーをインストールすることで、PHP アプリケーションサーバーレイヤーを拡張することができます。
- 組み込みのレイヤーでは扱うことのできない要件があります。

  たとえば、 OpsWorks スタックには、一部の一般的なデータベースサーバー用の組み込みレイヤーは含まれません。レイヤーのインスタンスに、それらのサーバーをインストールするカスタムレイヤーを作成することができます。
- カスタムレイヤーのみをサポートする Windows スタックを実行しています。

OpsWorks スタックには、特定の要件を満たすようにレイヤーをカスタマイズするさまざまな方法が用意されています。次の例は、複雑さと能力の低い方から高い方の順に表示されています。

> **Note**
>
> これらのアプローチのいくつかは Linux スタックにのみ当てはまります。詳細については、以下のトピックを参照してください。

- カスタム JSON を使用して、デフォルトの OpsWorks スタック設定を上書きします。
- デフォルトの スタック設定を上書きする属性ファイルを使用して、カスタム Chef OpsWorks クックブックを実装します。
- デフォルトの スタックテンプレートを上書きまたは拡張するテンプレートを使用して、カスタム Chef OpsWorks クックブックを実装します。
- シェルスクリプトを実行するシンプルなレシピが含まれるカスタムの Chef クックブックを実行します。

- ディレクトリの作成と設定、パッケージのインストール、設定ファイルの作成、アプリケーションのデプロイなどのタスクを実行するレシピを含むカスタムの Chef クックブックを実装します。

スタックの Chef バージョンおよびオペレーティングシステムに応じて、レシピを上書きすることもできます。

- Chef 0.9 および 11.4 スタックでは、クックブックやレシピが同じ名前のカスタムレシピを実装して組み込みのレシピを上書きすることはできません。

  ライフサイクルイベントごとに、 OpsWorks スタックは常に組み込みレシピを最初に実行し、その後にカスタムレシピを実行します。これらの Chef バージョンでは、クックブックやレシピが同じ名前のレシピが 2 度実行されないため、組み込みレシピが優先され、カスタムレシピは実行されません。
- Chef 11.10 スタックの組み込みレシピは上書きできます。

  詳細については、「クックブックのインストールと優先順位」を参照してください。
- Windows スタックの組み込みレシピは上書きできません。

  OpsWorks スタックが Windows スタックの Chef 実行を処理する方法では、組み込みレシピを上書きすることはできません。

> **Note**
>
> 多くの手法はカスタムクックブックを使用するため、クックブックの実装にまだ慣れクックブックとレシピていない場合は、まず「」をお読みください。 クックブックの基本では、カスタムクックブックの実装に関する詳細なチュートリアルを紹介し、 OpsWorks スタックインスタンスのクックブックの実装方法の詳細OpsWorks スタック用のクックブックの実装について説明します。

トピック

- 属性を上書きして OpsWorks スタック設定をカスタマイズする
- カスタムテンプレートを使用した OpsWorks スタック設定ファイルの拡張
- レイヤーの拡張
- カスタム Tomcat サーバーレイヤーの作成
- スタック設定およびデプロイメント属性

属性を上書きして OpsWorks スタック設定をカスタマイズする

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> Windows スタックと Chef 12 Linux スタックの場合、 OpsWorks スタックは組み込みレシピとカスタムレシピに別々の Chef 実行を使用します。つまり、このセクションで説明している手法を使用して、Windows スタックおよび Chef 12 Linux スタック用の組み込み属性を上書きすることはできません。

レシピとテンプレートは、レイヤーの設定やアプリケーションサーバーの設定など、インスタンスやスタックに固有の情報に対応するさまざまな Chef 属性に依存します。これらの属性には複数のソースがあります。

- [Custom JSON] (カスタム JSON) - オプションで、スタックを作成、更新、またはクローン化するとき、またはアプリケーションをデプロイするときに、オプションでカスタム JSON 属性を指定できます。
- スタック設定属性 –OpsWorks スタックは、コンソール設定で指定した情報など、スタック設定情報を保持するためにこれらの属性を定義します。
- Deployment attributes (デプロイ属性) - AWS OpsWorks では、Deploy イベントのデプロイ関連の属性を定義します。
- Cookbook attributes (クックブックの属性) - 組み込みのクックブックやカスタムクックブックには、通常、1 つ以上の attribute files (属性ファイル) が含まれており、属性ファイルにはアプリケーションサーバー設定などのクックブック固有の値を表す属性が含まれます。
- Chef (シェフ) - Chef の Ohai tool (Ohai ツール) は、CPU タイプやインストールされているメモリなど、さまざまなシステム設定を表す属性を定義します。

スタック設定属性、デプロイ属性、組み込みクックブック属性のリストについては、「スタック設定およびデプロイ属性: Linux」および「組み込みクックブックの属性」を参照してください。Ohai の属性の詳細については、「Ohai」を参照してください。

Deploy や Configure などの lifecycle event (ライフサイクルイベント) が発生したり、`execute_recipes` または `update_packages` などの stack command (スタックコマンド) を実行すると、 OpsWorks スタックは次のように動作します。

- 対応するコマンドを、影響を受ける各インスタンスのエージェントに送信します。

  エージェントは適切なレシピを実行します。たとえば、Deploy イベントの場合、エージェントは組み込みの Deploy レシピを実行した後、カスタム Deploy レシピを実行します。
- カスタム JSON 属性とデプロイ属性をスタック設定属性にマージし、それらの属性をインスタンスにインストールします。

カスタム JSON、スタック設定、デプロイ、クックブック、Ohai の各属性がノードオブジェクトにマージされ、属性値としてレシピに渡されます。インスタンスは、スタック設定属性に関しては、すべてのカスタム JSON を含めて基本的にステートレスです。デプロイまたはスタックコマンドを実行すると、関連付けられたレシピでは、そのコマンドでダウンロードされたスタック設定属性が使用されます。

トピック

- 属性の優先順位
- カスタム JSON を使用した属性の上書き
- カスタムクックブック属性を使用した OpsWorks スタック属性の上書き

属性の優先順位

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

属性を一意に定義した場合、Chef によってその属性はノードオブジェクトに組み込まれるだけです。ただし、任意の属性ソースが任意の属性を定義できるため、同じ属性に複数の定義が存在し、値が異なる可能性があります。たとえば、組み込みの apache2 クックブックは node[:apache][:keepalive] を定義しますが、カスタム JSON またはカスタムクックブックでこの属性を定義することもできます。属性に複数の定義がある場合、後で説明する順序に従って定義が評価され、最も優先順位の高い定義がノードオブジェクトに組み込まれます。

属性は次のように定義されます。

```
node.type[:attribute][:sub_attribute][:...]=value
```

属性に複数の定義がある場合、 タイプはどの定義が優先されるかを決定し、その定義はノードオブジェクトに組み込まれます。 OpsWorks スタックは次の属性タイプを使用します。

- default (デフォルト) - これは最も一般的なタイプであり、基本的に「この属性がまだ定義されていない場合はこの値を使用する」ことを意味します。属性のすべての定義が default タイプである場合、評価順序の最初の定義が優先され、それ以降の値は無視されます。スタックは OpsWorks 、すべてのスタック設定とデプロイ属性定義を default type に設定することに注意してください。
- normal (通常) - このタイプの属性は、評価順序で以前に定義されているすべての default または normal 属性を上書きします。たとえば、組み込みクックブックの最初の属性が default タイプであり、2 番目が normal タイプのユーザー定義属性である場合、2 番目の定義が優先されます。
- set (セット) - これは、古いクックブックに表示される可能性のある非推奨のタイプです。このタイプは、優先順位が同じである normal に置き換えられました。

Chef は、他のすべての属性定義よりも優先される automatic タイプなど、いくつかの追加属性タイプをサポートしています。Chef の Ohai ツールによって生成された属性定義は、すべて automatic タイプであるため、事実上読み取り専用です。これは通常問題ではありません。上書きする理由がなく、 OpsWorks スタックの属性とは異なるためです。ただし、カスタムクックブック属性の名前を指定するときには、Ohai 属性とは異なる名前になるように注意する必要があります。詳細については、「属性について」を参照してください。

> **Note**
>
> Ohai ツールは、コマンドラインから実行できる実行可能ファイルです。インスタンスの Ohai 属性のリストを取得するには、ターミナルウィンドウでインスタンスにログイン

し、ohai を実行します。それによって非常に長い出力が生成することに注意してください。

ノードオブジェクトにさまざまな属性定義を組み込む手順を以下に示します。

1. カスタムスタック設定属性をスタック設定属性とデプロイ属性にマージします。

   カスタム JSON の属性は、スタックまたは特定のデプロイに対して設定できます。これらの属性は最初に評価されるため、事実上 normal タイプです。1 つ以上のスタック設定 の属性がカスタム JSON でも定義されている場合、カスタム JSON の値が優先されます。それ以外の場合、OpsWorks スタックによってカスタム JSON 属性はスタック設定に組み込まれるだけです。
2. デプロイカスタム JSON 属性をスタック設定属性とデプロイ属性にマージします。

   カスタムのデプロイ JSON 属性も実際は normal タイプであるため、組み込みおよびカスタムのスタック設定 JSON や組み込みのデプロイ JSON より優先されます。
3. インスタンスのノードオブジェクトにスタック設定およびデプロイ属性をマージします。
4. インスタンスの組み込みクックブック属性をノードオブジェクトにマージします。

   組み込みクックブック属性はすべて default タイプです。1 つまたは複数の組み込みクックブック属性がスタック構成およびデプロイ属性でも定義されている場合 (通常はカスタム JSON で定義されているため)、スタック設定の定義は組み込みクックブックの定義よりも優先されます。他の組み込みクックブック属性はすべて、単にノードオブジェクトに組み込まれます。
5. インスタンスのカスタムクックブック属性をノードオブジェクトにマージします。

   カスタムクックブック属性は、通常 normal タイプまたは default タイプです。一意の属性はノードオブジェクトに組み込まれます。カスタムクックブック属性がステップ 1~3 でも定義されている場合 (通常はカスタム JSON で定義されているため)、優先順位はカスタムクックブック属性のタイプによって異なります。

   - ステップ 1~3 で定義された属性は、カスタムクックブック default 属性よりも優先されます。
   - カスタムクックブック normal 属性は、ステップ 1~3 の定義よりも優先されます。

> **Important**
>
> スタック設定属性または組み込みクックブック属性を上書きするために、カスタムクックブックの `default` 属性を使用しないでください。カスタムクックブックの属性は最後に評価されるため、`default` 属性の優先順位は最も低く、何も上書きすることができません。

カスタム JSON を使用した属性の上書き

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> スタックは、Windows OpsWorks スタックと Linux スタックでは Chef の実行処理が異なるため、このセクションで説明する手法を Windows スタックで使用することはできません。

OpsWorks スタック属性を上書きする最も簡単な方法は、カスタム JSON で定義することです。カスタム JSON は、スタック設定およびデプロイ属性だけでなく、組み込みおよびカスタムクックブック`default`属性よりも優先されます。詳細については、「属性の優先順位」を参照してください。

> **Important**
>
> スタック設定およびデプロイ属性を上書きする場合は注意が必要です。例えば、`opsworks` 名前空間の属性を上書きすると、組み込みのレシピに問題が生じる可能性があります。詳細については、「スタック設定およびデプロイメント属性」を参照してください。

カスタム JSON を使用して、通常、カスタムレシピにデータを渡すために、一意の属性を定義することもできます。属性は単にノードオブジェクトに組み込まれ、レシピは標準の Chef ノード構文を使用してオブジェクトを参照できます。

カスタム JSON を指定する方法

カスタム JSON を使用して属性値を上書きするには、最初に属性の完全修飾属性名を決定する必要があります。次に、上書きの対象となる、目的の値に設定された属性を含む JSON オブジェクトを作成します。わかりやすくするために、「スタック設定およびデプロイ属性: Linux」および「組み込みクックブックの属性」に、一般的に使用されるスタック設定、デプロイ、および組み込みのクックブックの属性、およびそれらの完全修飾名がまとめられています。

オブジェクトの親子関係は、適切な完全修飾 Chef ノードに対応している必要があります。たとえば、Apache の次の属性を変更するとします。

- ノードが `node[:apache][:keepalivetimeout]` であり、デフォルト値が `3` である `keepalivetimeout` 属性。
- ノードが `node[:apache][:logrotate][:schedule]` であり、デフォルト値が `"daily"` である `logrotate` `schedule` 属性。

この属性を上書きして、値をそれぞれ `5` と `"weekly"` に設定するために、次のカスタム JSON を使用できます。

```
{
  "apache" : {
    "keepalivetimeout" : 5,
    "logrotate" : {
       "schedule" : "weekly"
    }
  }
}
```

カスタム JSON を指定する場合

次のタスクのカスタム JSON 構造を指定できます。

- 新しいスタックを作成する
- スタックを更新する
- スタックコマンドを実行する

- スタックをクローン化する
- アプリケーションをデプロイする

OpsWorks スタックは、タスクごとにカスタム JSON 属性をスタック設定およびデプロイ属性とマージし、インスタンスに送信してノードオブジェクトにマージします。ただし、以下の点に注意してください。

- スタックの作成、クローン化、または更新時にカスタム JSON を指定する場合、それらの属性はスタック設定およびデプロイ属性にマージされ、以降のすべてのライフサイクルイベントとスタックコマンドで使用されます。
- デプロイ用にカスタム JSON を指定する場合、それらの属性は対応するイベント専用のスタック設定およびデプロイ属性にマージされます。

  以降のデプロイにそれらのカスタム属性を使用する場合は、再びカスタム JSON を明示的に指定する必要があります。

レシピによって使用される場合、属性はインスタンスにのみ影響することを覚えておく必要があります。属性値を上書きしても、それ以降のレシピでその属性が参照されない場合、その変更は有効ではありません。関連付けられたレシピが実行される前にカスタム JSON が送信されること、または適切なレシピが再実行されることを確認する必要があります。

カスタム JSON のベストプラクティス

カスタム JSON を使用して任意の OpsWorks スタック属性を上書きできますが、手動での情報の入力は多少面倒であり、ソース管理の対象ではありません。カスタム JSON は以下の目的に最適です。

- 少数の属性のみを上書きする必要があり、その他の目的でカスタムクックブックを使用する必要がない場合。

  カスタム JSON を使用すると、数個の属性を上書きするためにのみクックブックリポジトリをセットアップして維持するためのオーバーヘッドを回避できます。
- パスワードや認証キーなどの機密情報を含む値。

  クックブック属性はリポジトリに保存されるため、どの機密情報にも何らかの漏洩のリスクがあります。代わりに、ダミーの値を指定した属性を定義し、カスタム JSON を使用して実際の値を設定できます。
- 異なることが予想される値。

たとえば、本稼働用スタックを別の開発およびステージングスタックでサポートする方法が推奨されています。これらのスタックが、支払いを受け付けるアプリケーションをサポートしているとします。カスタム JSON を使用して支払いのエンドポイントを指定する場合、ステージングスタックのテスト URL を指定できます。更新されたスタックを本稼動用スタックに移行する準備ができたら、同じクックブックを使用し、カスタム JSON を使用して支払いのエンドポイントを本稼動用 URL に設定できます。

- 特定のスタックまたはデプロイコマンドに固有の値。

カスタムクックブック属性を使用した OpsWorks スタック属性の上書き

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> Windows スタックの場合、 OpsWorks スタックは組み込みレシピとカスタムレシピに別々の Chef 実行を使用します。つまり、このセクションで説明している手法を使用して、Windows スタック用の組み込み属性を上書きすることはできません。

カスタム JSON OpsWorks は、スタックスタック設定と組み込みクックブック属性を上書きする便利な方法ですが、いくつかの制限があります。特に、使用するたびに、カスタム JSON を手動で入力する必要があるため、定義を管理するための確実な方法がありません。よりよい方法として、カスタムクックブック属性ファイルを使用して組み込みの属性を上書きする方法があります。これによって、定義をソース管理の下に置くことができます。

カスタム属性ファイルを使用して OpsWorks スタック定義を上書きする手順は簡単です。

OpsWorks スタック属性定義を上書きするには

1. 「クックブックとレシピ」の説明に従ってクックブックリポジトリをセットアップします。

2. 上書きする属性を含む組み込みクックブックと同じ名前でクックブックを作成します。たとえば、Apache の属性を上書きするには、カスタムクックブックの名前を apache2 にする必要があります。
3. クックブックに `attributes` フォルダを追加し、そのフォルダに `customize.rb` という名前のファイルを追加します。
4. 上書きする組み込みクックブックの属性ごとに、優先する値に設定された属性定義をファイルに追加します。属性は `normal` タイプ以上で、対応する OpsWorks Stacks 属性とまったく同じノード名である必要があります。ノード名を含む OpsWorks スタック属性の詳細なリストについては、スタック設定およびデプロイ属性: Linux「」および「」を参照してください組み込みクックブックの属性。属性および属性ファイルの詳細については、「属性ファイルについて」を参照してください。

   > **Important**
   >
   > スタック属性を上書きするには、属性が OpsWorks `normal`型である必要があります。`default`型が優先されません。例えば、`customize.rb` ファイルに `default[:apache][:keepalivetimeout] = 5` という属性定義がある場合、組み込みの `apache.rb` 属性ファイル内の対応する属性が最初に評価され、優先されます。詳細については、「属性の上書き」を参照してください。

5. 上書きする属性を持つ組み込みクックブックごとに、ステップ 2～4 を繰り返します。
6. スタックのカスタムクックブックを有効にし、 OpsWorks スタックがクックブックをスタックのインスタンスにダウンロードするために必要な情報を提供します。詳細については、「カスタムクックブックのインストール」を参照してください。

> **Note**
>
> この手順の詳細なウォークスルーについては、「組み込み属性の上書き」を参照してください。

後続のライフサイクルイベント、デプロイコマンド、スタックコマンドで使用されるノードオブジェクトに、 OpsWorks スタック値ではなく属性定義が含まれるようになりました。

たとえば、「`keepalivetimeout`」で説明した、組み込みの の `logrotate schedule` および カスタム JSON を指定する方法 の設定を上書きするには、`apache2`apache クックブックをリポジト

リに追加し、次のような内容の customize.rb ファイルをクックブックの attributes フォルダに追加します。

```
normal[:apache][:keepalivetimeout] = 5
normal[:apache][:logrotate][:schedule] = 'weekly'
```

> **Important**
>
> 関連する組み込み属性ファイルのコピーを変更して、 OpsWorks スタック属性を上書きしないでください。例えば、apache.rb を apache2/attributes フォルダにコピーし、その設定の一部を変更すると、基本的に組み込みファイル内のすべての属性が上書きされます。レシピでは、コピーの属性定義が使用され、組み込みファイルは無視されます。 OpsWorks スタックによって後で組み込みの属性ファイルが変更された場合、手動でコピーを更新しない限り、レシピでは変更内容にアクセスできません。
> このような状況を回避するために、組み込みのすべてのクックブックには空の customize.rb 属性ファイルが含まれています。このファイルは、include_attribute ディレクティブを介してすべてのモジュールで必要です。customize.rb のコピーで属性を上書きすることによって、その特定の属性にのみ変更を反映できます。レシピは組み込みの属性ファイルから他の属性値を取得し、上書きしなかった属性の現在の値を自動的に取得します。
> このアプローチでは、クックブックリポジトリ内の属性の数を少数に抑えることができます。これにより、メンテナンスのオーバーヘッドが削減され、将来のアップグレードの管理が容易になります。

カスタムテンプレートを使用した OpsWorks スタック設定ファイルの拡張

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> スタックは、Windows OpsWorks スタックと Linux スタックでは Chef の実行処理が異なるため、このセクションで説明する手法を Windows スタックで使用することはできません。

OpsWorks スタックは テンプレートを使用して設定ファイルなどのファイルを作成します。通常、このファイルは多くの設定の属性に依存します。カスタム JSON またはカスタムクックブック属性を使用して OpsWorks スタック定義を上書きする場合、優先設定は OpsWorks スタック設定の代わりに設定ファイルに組み込まれます。ただし、 OpsWorks スタックは、可能なすべての設定に属性を指定するとは限りません。一部の設定のデフォルトを受け入れ、テンプレート内で他の設定を直接ハードコードします。対応する Stacks 属性がない場合、カスタム JSON OpsWorks またはカスタムクックブック属性を使用して優先設定を指定することはできません。

カスタムテンプレートを作成することによって、追加の設定を含めるように設定ファイルを拡張できます。次に、必要な任意の設定またはその他のコンテンツをファイルに追加し、ハードコーディングされた設定を変更できます。テンプレートの詳細については「テンプレート」を参照してください。

> **Note**
>
> opsworks-agent.monitrc.erb を除く組み込みのテンプレートを変更できます。

カスタムテンプレートを作成するには

1. 組み込みクックブックと同じ構造とディレクトリ名のクックブックを作成します。次に、カスタマイズする組み込みのテンプレートと同じ名前で、適切なディレクトリにテンプレートファイルを作成します。たとえば、カスタムテンプレートを使用して Apache の `httpd.conf` 設定ファイルを拡張するには、リポジトリに `apache2` クックブックを実装し、テンプレートファイルが `apache2/templates/default/apache.conf.erb` である必要があります。まったく同じ名前を使用すると、 OpsWorks スタックはカスタムテンプレートを認識し、組み込みテンプレートの代わりに使用できます。

   最も簡単なのは、組み込みクックブックの GitHub リポジトリから組み込みテンプレートファイルをコピーし、必要に応じて変更を加えるという方法です。

> **Important**
>
> カスタマイズするテンプレートファイル以外のファイルを、組み込みクックブックからコピーしないでください。レシピなど、他の種類のクックブックファイルをコピーすると、重複する Chef リソースが作成され、エラーの原因となる可能性があります。

クックブックにもカスタム属性、レシピ、関連ファイルを含めることができますが、そのファイル名は組み込みのファイル名と重複しないようにする必要があります。

2. テンプレートファイルをカスタマイズして、要件を満たす設定ファイルを作成します。設定の追加、既存の設定の削除、ハードコーディングされた属性の置換などを行うことができます。
3. カスタムクックブックをまだ有効にしてない場合は、スタック設定を編集してカスタムクックブックを有効にして、クックブックリポジトリを指定してください。詳細については、「カスタムクックブックのインストール」を参照してください。

> **Note**
>
> この手順の詳細なウォークスルーについては、「組み込みテンプレートの上書き」を参照してください。

テンプレートを上書きするために、レシピを実装したり、レイヤー設定にレシピを追加したりする必要はありません。 OpsWorks スタックは常に組み込みレシピを実行します。設定ファイルを作成するレシピが実行される際に、自動的に組み込みのテンプレートの代わりにカスタムテンプレートが使用されます。

> **Note**
>
> OpsWorks スタックが組み込みテンプレートに変更を加えると、カスタムテンプレートが同期しなくなり、正しく動作しなくなる可能性があります。たとえば、テンプレートが依存ファイルを参照し、ファイル名が変更されるとします。 OpsWorks スタックはそのような変更を頻繁に行うことはありません。テンプレートが変更されると、変更が一覧表示され、新しいバージョンにアップグレードするオプションが提供されます。 OpsWorks スタックリポジトリの変更をモニタリングし、必要に応じてテンプレートを手動で更新する必要があります。

レイヤーの拡張

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックの属性を変更するか、テンプレートをカスタマイズすることで処理できる範囲を拡大し、組み込みレイヤーをカスタマイズすることが必要な場合があります。たとえば、シンボリックリンクの作成、ファイルまたはフォルダのモードの設定、追加パッケージのインストールなどを行う必要があるとします。最小限の機能に加えて他の機能も提供するには、カスタムレイヤーを拡張する必要があります。その場合、カスタマイズタスクを処理する 1 つ以上のカスタムクックブックを実装する必要があります。このトピックでは、レシピを使用してレイヤーを拡張する方法を例で示します。

Chef を初めて使う場合は、最初に「クックブック 101」をお読みください。これは、クックブックを実装してさまざまな一般的なタスクを実行する方法の基本事項を紹介するチュートリアルです。カスタムレイヤーの実装方法の詳細な例については、「カスタム Tomcat サーバーレイヤーの作成」を参照してください。

トピック

- レシピを使用したスクリプトの実行
- Chef デプロイフックの使用
- Linux インスタンスでの cron ジョブの実行
- Linux インスタンスでパッケージをインストールおよび設定

レシピを使用したスクリプトの実行

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS

re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

必要なカスタマイズタスクを実行するスクリプトがすでにある場合、通常、レイヤーを拡張する最も簡単な方法は、スクリプトを実行する簡単なレシピを実装することです。その後、適切なライフサイクルイベント (通常は Setup または Deploy) にレシピを割り当てることも、execute_recipes スタックコマンドを使用してレシピを手動で実行することもできます。

以下の例では Linux インスタンスでシェルスクリプトを実行しますが、Windows PowerShell スクリプトなど他のタイプのスクリプトにも同じ方法を使用できます。

```
cookbook_file "/tmp/lib-installer.sh" do
  source "lib-installer.sh"
  mode 0755
end

execute "install my lib" do
  command "sh /tmp/lib-installer.sh"
end
```

cookbook_file リソースは、クックブックの files ディレクトリのサブディレクトリに保存されたファイルを表します。このファイルはインスタンスの指定した場所に転送されます。この例では、シェルスクリプト lib-installer.sh をインスタンスの /tmp ディレクトリに転送し、ファイルのモードを 0755 に設定します。詳細については、「cookbook_file」を参照してください。

execute リソースは、シェルコマンドなどのコマンドを表します。この例では lib-installer.sh を実行します。詳細については、「execute」を参照してください。

スクリプトをレシピに組み込んで実行することもできます。次の例では Bash スクリプトを実行しますが、Chef では Csh、Perl、Python、Ruby もサポートしています。

```
script "install_something" do
  interpreter "bash"
  user "root"
  cwd "/tmp"
  code <<-EOH
    #insert bash script
```

```
  EOH
end
```

`script` リソースはスクリプトを表します。この例では Bash インタープリタを指定し、ユーザーを `"root"` に、作業ディレクトリを `/tmp` にそれぞれ設定します。次に、`code` ブロックで Bash スクリプトを実行します。このブロックには、行を必要な数だけ含めることができます。詳細については、「script」を参照してください。

レシピを使用してスクリプトを実行する方法の詳細については、「例 7: コマンドとスクリプトの実行」を参照してください。Windows インスタンスで PowerShell スクリプトを実行する方法の例については、「Windows PowerShell スクリプトを実行する」を参照してください。

Chef デプロイフックの使用

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

必要なタスクを実行するカスタムレシピを実装し、適切なレイヤーの Deploy イベントに割り当てることで、デプロイをカスタマイズできます。特に他の目的でクックブックを実装する必要がない場合は、Chef デプロイメントフックを使用してカスタマイズコードを実行する、別のシンプルなアプローチがあります。さらに、組み込みレシピによってデプロイメントが実行された後に、カスタム Deploy レシピを実行します。デプロイフックを使用すると、デプロイメントの途中に (たとえば、アプリケーションのコードがリポジトリからチェックアウトされた後、Apache が再起動される前に) 操作することが可能になります。

Chef では、次の 4 つのステージでアプリケーションをデプロイします。

- Checkout (チェックアウト) - リポジトリからファイルをダウンロードします。
- Migrate (移行) - 必要に応じて移行を実行します。
- Symlink (シンボリックリンク) - シンボリックリンクを作成します。
- Restart (再起動) — アプリケーションを再起動します。

Chef デプロイフックを使用すると、各ステージの完了後にユーザーが提供する Ruby アプリケーションを必要に応じて実行することで、デプロイメントを簡単にカスタマイズできます。デプロイフックを使用するには、1 つ以上の Ruby アプリケーションを実装し、アプリケーションの /deploy ディレクトリに配置します。(アプリケーションに /deploy ディレクトリがない場合は、APP_ROOT レベルに 1 つ作成します)。アプリケーションには、いつ実行するかを示す次のいずれかの名前を指定する必要があります。

- before_migrate.rb – チェックアウトステージの完了後、移行ステージの前に実行します。
- before_symlink.rb – 移行ステージの完了後、シンボリックリンクステージの前に実行します。
- before_restart.rb – シンボリックリンクステージの完了後、再起動ステージの前に実行します。
- after_restart.rb – 再起動ステージの完了後に実行します。

Chef デプロイフックは標準のノード構文を使用して、レシピのようなノードオブジェクトにアクセスできます。また、デプロイフックは、指定した任意のアプリケーション環境変数の値にアクセスできます。ただし、new_resource.environment["*VARIABLE_NAME*"] を使用して、ENV["*VARIABLE_NAME*"] ではなく変数の値にアクセスする必要があります。

Linux インスタンスでの cron ジョブの実行

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Linux の cron ジョブは、指定したスケジュールで 1 つ以上のコマンドを実行するよう cron デーモンに指示します。たとえば、スタックで PHP の e コマースアプリケーションをサポートするとします。毎週指定した時刻にサーバーから販売レポートが送信されるように cron ジョブをセットアップできます。cron の詳細については、Wikipedia の「Cron」を参照してください。Linux ベースのコンピュータまたはインスタンスで直接クローンジョブを実行する方法の詳細については、Indiana University Knowledge Base Web サイトの「What are cron and crontab, and how do I use them?」を参照してください。

SSH に接続することで個別の Linux ベースのインスタンスで cron ジョブを手動でセットアップし crontab 項目を編集できますが、 OpsWorks スタックの主なメリットは、インスタンスの全レイヤーを範囲としてタスクを実行できることです。次の手順は、PHP アプリケーションサーバー レイヤーのインスタンスで cron ジョブをセットアップする方法を示していますが、どのレイヤーでも同じ方法を使用できます。

レイヤーのインスタンスで **cron** ジョブをセットアップするには

1. ジョブをセットアップする cron リソースを使用するレシピを含むクックブックを実装します。この例では、レシピ名を cronjob.rb としています。実装の詳細については後述します。クックブックとレシピの詳細については、「クックブックとレシピ」を参照してください。
2. スタックにクックブックをインストールします。詳細については、「カスタムクックブックのインストール」を参照してください。
3. 次のライフサイクルイベントに割り当てて、 OpsWorks スタックでレイヤーのインスタンスでレシピを自動的に実行させます。詳細については、「レシピを自動的に実行する」を参照してください。

   - セットアップ – このイベントcronjob.rbに割り当てると、すべての新しいインスタンスでレシピを実行するように OpsWorks スタックに指示します。
   - デプロイ – このイベントcronjob.rbに割り当てると、アプリケーションをレイヤーにデプロイまたは再デプロイするときに、すべてのオンラインインスタンスでレシピを実行するように OpsWorks スタックに指示します。

   Execute Recipes スタックコマンドを使用して、オンラインインスタンスでレシピを手動で実行することもできます。詳細については、「スタックコマンドの実行」を参照してください。

次の cronjob.rb の例では、サーバーから販売データを収集して電子メールでレポートを送信する、ユーザーが実装した PHP アプリケーションを週 1 回実行する cron ジョブをセットアップします。cron リソースの使用方法のその他の例については、「cron」を参照してください。

```
cron "job_name" do
  hour "1"
  minute "10"
  weekday "6"
  command "cd /srv/www/myapp/current && php .lib/mailing.php"
end
```

cron は、cron ジョブを表す Chef リソースです。 OpsWorks スタックがインスタンスでレシピを実行すると、関連するプロバイダーがジョブの設定の詳細を処理します。

- *job_name* は、cron ジョブのユーザー定義名 (weekly report など) です。
- hour/minute/weekday では、コマンドをいつ実行するかを指定します。この例では、毎週土曜日の午前 1 時 10 分にコマンドを実行します。
- command では、実行するコマンドを指定します。

  この例では 2 つのコマンドを実行します。まず /srv/www/myapp/current ディレクトリに移動します。2 番目のコマンドでは、販売データを収集してレポートを送信する、ユーザーが実装した mailing.php アプリケーションを実行します。

> **Note**
>
> デフォルトで、bundle コマンドでは cron ジョブを操作できません。これは、 OpsWorks スタックが /usr/local/bin ディレクトリにバンドルをインストールするためです。bundle ジョブで cron を使用するには、cron ジョブに明示的にパス /usr/local/bin を追加する必要があります。また、$PATH 環境変数が cron ジョブで展開されない場合があるため、$PATH 変数の展開に依存することなく、明示的に必要なパス情報をジョブに追加することがベストプラクティスとなります。以下の例では、bundle ジョブで cron を使用する方法を 2 種類示しています。
>
> ```
> cron "my first task" do
>   path "/usr/local/bin"
>   minute "*/10"
>   command "cd /srv/www/myapp/current && bundle exec my_command"
> end
> ```
>
> ```
> cron_env = {"PATH" => "/usr/local/bin"}
> cron "my second task" do
>   environment cron_env
>   minute "*/10"
>   command "cd /srv/www/myapp/current && /usr/local/bin/bundle exec my_command"
> end
> ```

スタックに複数のアプリケーションサーバーがある場合、PHP アプリケーションサーバーレイヤーのライフサイクルイベントに `cronjob.rb` を割り当てるのは最適な方法とは言えません。たとえば、レイヤーのすべてのインスタンスでレシピが実行されるので、ユーザーには複数のレポートが送信されることになります。この場合、適切な方法は、カスタムレイヤーを使用して 1 つのサーバーだけがレポートを送信できるようにすることです。

レイヤーの 1 つのインスタンスでのみレシピを実行するには

1. たとえば、PHPAdmin というカスタムレイヤーを作成し、Setup イベントと Deploy イベントに `cronjob.rb` を割り当てます。カスタムレイヤーでは、必ずしも多くのことを実行する必要はありません。この例では、PHPAdmin はインスタンスでカスタムレシピを 1 つ実行するだけです。
2. PHP アプリケーションサーバー インスタンスの 1 つを AdminLayer に割り当てます。インスタンスが複数のレイヤーに属している場合、 OpsWorks スタックは各レイヤーの組み込みレシピとカスタムレシピを実行します。

PHP アプリケーションサーバーと PHPAdminレイヤーに属しているインスタンスは 1 つだけであるため、`cronjob.rb` はそのインスタンスでのみ実行され、ユーザーは 1 つだけレポートレポートを受け取ります。

Linux インスタンスでパッケージをインストールおよび設定

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

組み込みレイヤーでは、特定のパッケージのみがサポートされます。詳細については、「レイヤー」を参照してください。Redis サーバーなど、他のパッケージをインストールするには、関連するセットアップ、設定、デプロイメントの各タスクを処理するカスタムレシピを実装します。組み込みレイヤーを拡張して、レイヤーの標準パッケージと共に目的のパッケージをインスタンスにインストールするのが最良の方法である場合もあります。例えば、PHP アプリケーションをサポートするスタックがあり、Redis サーバーを含めたい場合は、PHP アプリケーションサーバー レイヤーを拡張し

て、PHP アプリケーションサーバーに加えて、レイヤーのインスタンスで Redis サーバーをインストールして設定することができます。

通常、パッケージのインストールレシピでは、次のようなタスクを実行する必要があります。

- 1 つ以上のディレクトリを作成し、各ディレクトリのモードを設定する。
- テンプレートから設定ファイルを作成する。
- インストーラを実行してインスタンスにパッケージをインストールする。
- 1 つ以上のサービスを開始する。

Tomcat サーバーのインストール方法の例については、「カスタム Tomcat サーバーレイヤーの作成」を参照してください。このトピックでは、カスタム Redisレイヤーをセットアップする方法を説明していますが、ほぼ同じコードを使用して組み込みレイヤーに Redis をインストールし、設定することができます。他のパッケージのインストール方法の例については、https://github.com/aws/opsworks-cookbooks (https://github.com/aws/opsworks-cookbooks) にある組み込みクックブックを参照してください。

カスタム Tomcat サーバーレイヤーの作成

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> このトピックでは、Linux スタックのカスタムレイヤーを実装する方法について説明します。ただし、一部の基本的な原則とコードは、特に、アプリケーションのデプロイのセクションで、Windows スタックのカスタムレイヤーの実装にも当てはまります。

OpsWorks スタックインスタンスで非標準パッケージを使用する最も簡単な方法は、既存のレイヤーを拡張することです。ただし、この方法は、レイヤーのインスタンスに標準と標準外の両方のパッ

ケージをインストールして実行するため、常に望ましいわけではありません。要求が厳しくなりますがより強力な方法は、カスタムレイヤーを実装することです。そうすれば、レイヤーのインスタンスに対して、次の事項をほぼ完全にコントロールできるようになります。

- どのパッケージをインストールするか
- 各パッケージをどのように設定するか
- リポジトリからインスタンスにどのようにアプリケーションをデプロイするか

コンソールまたは API のどちらを使用する場合も、「カスタムレイヤー」で説明しているように、その他すべてのレイヤーと同様にカスタムレイヤーを作成して管理します。ただし、カスタムレイヤーの組み込みのレシピは、Ganglia クライアントをインストールして Ganglia マスターにメトリクスをレポートするなど、一部の最も基本的なタスクだけを実行します。カスタムレイヤーのインスタンスが最小限の機能にとどまらないようにするために、パッケージのインストールと設定、アプリケーションのデプロイなどのタスクを処理するための Chef レシピと関連ファイルを備えた 1 つ以上のカスタムクックブックを実装する必要があります。ただし、必ずしもすべてを最初から新しく実装する必要はありません。たとえば、標準のリポジトリの 1 つにアプリケーションを保存する場合は、組み込みのレシピを使用することで、アプリケーションをレイヤーのインスタンスにインストールする作業の多くを処理できます。

> **Note**
>
> Chef を初めて使う場合は、最初に「クックブック 101」をお読みください。これは、クックブックを実装してさまざまな一般的なタスクを実行する方法の基本事項を紹介するチュートリアルです。

次のウォークスルーでは、Tomcat アプリケーションサーバーをサポートするカスタムレイヤーの実装方法を説明します。このレイヤーは、パッケージのインストール、デプロイなどを処理するためのレシピを含む Tomcat というカスタムクックブックに基づいています。このウォークスルーは、Tomcat クックブックからの抜粋を含んでいます。このクックブック全体は、クックブックの GitHub リポジトリからダウンロードできます。Opscode Chef に慣れていない場合は、最初に「クックブックとレシピ」をお読みください。

> **Note**
>
> OpsWorks スタックには、本番稼働用のフル機能の Java App Server レイヤーが含まれています。Tomcat クックブックの目的は、カスタムレイヤーの実装方法を示すことです。した

がって、SSL などの機能を含まない限定バージョンの Tomcat のみをサポートしています。フル機能の実装の例については、組み込みの opsworks_java クックブックを参照してください。

Tomcat クックブックは、インスタンスが次の特徴を持つカスタムレイヤーをサポートします。

- インスタンスは、Apache のフロントエンドで Tomcat Java アプリケーションサーバーをサポートします。
- Tomcat は、アプリケーションが JDBC `DataSource` オブジェクトを使用して、バックエンドデータストアとして機能する個別の MySQL インスタンスに接続できるように設定されています。

このプロジェクトのクックブックには、複数の主要コンポーネントがあります。

- 属性ファイルには、さまざまなレシピで使用される設定が含まれます。
- Setup レシピは、レイヤーの Setup ライフサイクルイベントに割り当てられます。このレシピは、インスタンスの起動後に実行され、パッケージのインストールや設定ファイルの作成などのタスクを行います。
- Configure レシピは、レイヤーの Configure ライフサイクルイベントに割り当てられます。スタックの設定変更後、主にインスタンスがオンラインになったときやオフラインになったときに実行され、必要な構成変更を処理します。
- Deploy レシピは、レイヤーの Deploy ライフサイクルイベントに割り当てられます。このレシピは、Setup レシピの後、アプリケーションを手動でデプロイし、レイヤーのインスタンスでコードおよび関連ファイルをインストールするときに実行されます。また、サービスの再起動などの関連タスクを処理するためにも実行されます。

最後のセクションである「スタックの作成とアプリケーションの実行」では、Tomcat クックブックに基づいてカスタムレイヤーを含むスタックを作成する方法、および別個の MySQLレイヤーに属するインスタンスで実行中の MySQL データベースのデータを表示するシンプルな JSP アプリケーションをデプロイして実行する方法について説明します。

> **Note**
>
> Tomcat クックブックレシピは、一部の OpsWorks スタックの組み込みレシピによって異なります。各レシピのオリジンを明確にするために、このトピックでは Chef cookbookname::recipename 規則を使用してレシピを識別します。

トピック

- 属性ファイル
- Setup レシピ
- Configure レシピ
- Deploy レシピ
- スタックの作成とアプリケーションの実行

属性ファイル

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

レシピを確認する前に、最初に Tomcat クックブックの属性ファイルを調べておくと便利です。属性ファイルには、そのレシピで使用するさまざまな設定ファイルが含まれています。属性は必須ではなく、レシピやテンプレートで値を単にハードコーディングすることもできます。ただし、属性を使用して構成設定を定義する場合は、 スタックコンソールまたは API OpsWorks を使用して、カスタム JSON 属性を定義することで値を変更することができます。カスタム JSON 属性は、設定を変更するたびにレシピまたはテンプレートコードを書き直すよりも簡単で柔軟です。この方法では、たとえば、複数のスタックに同じクックブックを使用しながら、スタックごとに Tomcat サーバーを異なる設定にすることができます。属性および属性をオーバーライドする方法の詳細については、「属性の上書き」を参照してください。

次の例は、完全な属性ファイル `default.rb` を示しています。このファイルは、Tomcat クックブックの `attributes` ディレクトリにあります。

```
default['tomcat']['base_version'] = 6
default['tomcat']['port'] = 8080
default['tomcat']['secure_port'] = 8443
default['tomcat']['ajp_port'] = 8009
default['tomcat']['shutdown_port'] = 8005
```

```
default['tomcat']['uri_encoding'] = 'UTF-8'
default['tomcat']['unpack_wars'] = true
default['tomcat']['auto_deploy'] = true
case node[:platform]
when 'centos', 'redhat', 'fedora', 'amazon'
  default['tomcat']['java_opts'] = ''
when 'debian', 'ubuntu'
  default['tomcat']['java_opts'] = '-Djava.awt.headless=true -Xmx128m -XX:
+UseConcMarkSweepGC'
end
default['tomcat']['catalina_base_dir'] = "/etc/tomcat#{node['tomcat']['base_version']}"
default['tomcat']['webapps_base_dir'] = "/var/lib/tomcat#{node['tomcat']
['base_version']}/webapps"
default['tomcat']['lib_dir'] = "/usr/share/tomcat#{node['tomcat']['base_version']}/lib"
default['tomcat']['java_dir'] = '/usr/share/java'
default['tomcat']['mysql_connector_jar'] = 'mysql-connector-java.jar'
default['tomcat']['apache_tomcat_bind_mod'] = 'proxy_http' # or: 'proxy_ajp'
default['tomcat']['apache_tomcat_bind_config'] = 'tomcat_bind.conf'
default['tomcat']['apache_tomcat_bind_path'] = '/tc/'
default['tomcat']['webapps_dir_entries_to_delete'] = %w(config log public tmp)
case node[:platform]
when 'centos', 'redhat', 'fedora', 'amazon'
  default['tomcat']['user'] = 'tomcat'
  default['tomcat']['group'] = 'tomcat'
  default['tomcat']['system_env_dir'] = '/etc/sysconfig'
when 'debian', 'ubuntu'
  default['tomcat']['user'] = "tomcat#{node['tomcat']['base_version']}"
  default['tomcat']['group'] = "tomcat#{node['tomcat']['base_version']}"
  default['tomcat']['system_env_dir'] = '/etc/default'
end
```

設定自体については、関連するセクションで後ほど説明します。次の注意事項が一般的に適用されます。

- すべてのノード定義のタイプは `default` であるため、カスタム JSON 属性で上書きできます。
- このファイルは、`case` ステートメントを使用して、インスタンスのオペレーティングシステムに応じて条件付きで一部の属性値を設定します。

  `platform` ノードが Chef の Ohai ツールによって生成され、インスタンスのオペレーティングシステムを表します。

Setup レシピ

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Setup レシピは、レイヤーの Setup ライフサイクルイベントに割り当てられ、インスタンスの起動後に実行されます。このレシピは、パッケージのインストール、設定ファイルの作成、サービスの開始などのタスクを実行します。Setup レシピの実行が完了すると、 OpsWorks Stacks は Deploy レシピを実行して、新しいインスタンスにアプリケーションをデプロイします。

トピック

- tomcat::setup
- tomcat::install
- tomcat::service
- tomcat::container_config
- tomcat::apache_tomcat_bind

tomcat::setup

`tomcat::setup` レシピは、レイヤーの Setup ライフサイクルイベントに割り当てられます。

```
include_recipe 'tomcat::install'
include_recipe 'tomcat::service'

service 'tomcat' do
  action :enable
end

# for EBS-backed instances we rely on autofs
bash '(re-)start autofs earlier' do
  user 'root'
```

```
  code <<-EOC
    service autofs restart
  EOC
  notifies :restart, resources(:service => 'tomcat')
end

include_recipe 'tomcat::container_config'
include_recipe 'apache2'
include_recipe 'tomcat::apache_tomcat_bind'
```

`tomcat::setup` レシピは、主としてメタレシピです。Tomcat および関連パッケージのインストールと設定の詳細のほとんどを処理する一連の依存レシピが含まれています。`tomcat::setup` の最初の部分は、後で説明する次のレシピを実行します。

- tomcat::install レシピは、Tomcat サーバーパッケージをインストールします。
- tomcat::service レシピは、Tomcat サービスをセットアップします。

`tomcat::setup` の中央部分は、Tomcat サービスを有効にして起動します。

- Chef service リソースは、Tomcat サービスを起動時に有効にします。
- Chef bash resource (bash リソース) は、Bash スクリプトを実行して autofs デーモンを起動します。これは、Amazon EBS-backed インスタンスに必要です。次に、このリソースは、Tomcat サービスの再起動を `service` リソースに通知します。

  詳細については、「autofs」(Amazon Linux の場合) または「Autofs」(Ubuntu の場合) を参照してください。

`tomcat::setup` の最後の部分は、設定ファイルを作成し、フロントエンド Apache サーバーをインストールおよび設定します。

- tomcat::container_config レシピは、設定ファイルを作成します。
- `apache2` レシピ (の略称`apache2::default`) は、Apache サーバーをインストールして設定する OpsWorks スタックの組み込みレシピです。
- tomcat::apache_tomcat_bind レシピは、Tomcat サーバーのフロントエンドとして機能するように Apache サーバーを設定します。

> **Note**
>
> 組み込みのレシピを使用して必要なタスクの一部を実行することにより、多くの場合、時間と労力を削減できます。このレシピは、組み込みの apache2::default レシピを使用することで、Apache を最初から実装する必要なくインストールします。組み込みのレシピを使用するその他の例については、「Deploy レシピ」を参照してください。

以下のセクションでは、Tomcat クックブックの Setup レシピについてさらに詳しく説明します。apache2 レシピの詳細については、「opsworks-cookbooks/apache2」を参照してください。

tomcat::install

tomcat::install レシピは、Tomcat サーバー、OpenJDK、および Java コネクターライブラリをインストールします。Java コネクターライブラリは、MySQL サーバーへの接続を処理します。

```
tomcat_pkgs = value_for_platform(
  ['debian', 'ubuntu'] => {
    'default' => ["tomcat#{node['tomcat']['base_version']}", 'libtcnative-1',
 'libmysql-java']
  },
  ['centos', 'redhat', 'fedora', 'amazon'] => {
    'default' => ["tomcat#{node['tomcat']['base_version']}", 'tomcat-native', 'mysql-
connector-java']
  },
  'default' => ["tomcat#{node['tomcat']['base_version']}"]
)

tomcat_pkgs.each do |pkg|
  package pkg do
    action :install
  end
end

link ::File.join(node['tomcat']['lib_dir'], node['tomcat']['mysql_connector_jar']) do
  to ::File.join(node['tomcat']['java_dir'], node['tomcat']['mysql_connector_jar'])
  action :create
end

# remove the ROOT webapp, if it got installed by default
```

```
include_recipe 'tomcat::remove_root_webapp'
```

このレシピは、次のタスクを実行します。

1. インスタンスのオペレーティングシステムに応じて、インストールするパッケージのリストを作成します。
2. リストに各パッケージをインストールします。

   Chef package resource (パッケージリソース) は適切なプロバイダを使用します。yum Amazon Linux および apt-get Ubuntu の場合— インストールを処理します。package プロバイダーは、Tomcat の依存関係として OpenJDK をインストールしますが、MySQL コネクターライブラリは明示的にインストールする必要があります。
3. Chef link リソースを使用して、Tomcat サーバーの lib ディレクトリに JDK の MySQL コネクターライブラリへのシンボリックリンクを作成します。

   デフォルトの属性値を使用すると、Tomcat の lib ディレクトリは /usr/share/tomcat6/lib となり、MySQL コネクターライブラリ (mysql-connector-java.jar) は /usr/share/java/ にあります。

tomcat::remove_root_webapp レシピは、ROOT ウェブアプリケーション (デフォルトでは /var/lib/tomcat6/webapps/ROOT) を削除して、セキュリティの問題のいくつかを回避します。

```
ruby_block 'remove the ROOT webapp' do
  block do
    ::FileUtils.rm_rf(::File.join(node['tomcat']['webapps_base_dir'], 'ROOT'), :secure
 => true)
  end
  only_if { ::File.exists?(::File.join(node['tomcat']['webapps_base_dir'], 'ROOT'))
 && !::File.symlink?(::File.join(node['tomcat']['webapps_base_dir'], 'ROOT')) }
end
```

only_if ステートメントにより、このレシピは、ファイルが存在する場合にのみファイルを削除します。

> **Note**
>
> Tomcat のバージョンは、['tomcat']['base_version'] 属性で指定されます。この属性ファイルでは 6 に設定されています。Tomcat 7 をインストールする場合は、この属性を上

書きするためにカスタム JSON 属性を使用できます。スタックの設定を編集し、次の JSON を、[Custom Chef JSON] ボックスに入力するか既存のカスタム JSON に追加します。

```
{
  'tomcat' : {
    'base_version' : 7
  }
}
```

このカスタム JSON 属性により、デフォルトの属性が上書きされ、Tomcat のバージョンが 7 に設定されます。属性の上書きの詳細については、「属性の上書き」を参照してください。

tomcat::service

`tomcat::service` レシピは、Tomcat サービスの定義を作成します。

```
service 'tomcat' do
  service_name "tomcat#{node['tomcat']['base_version']}"

  case node[:platform]
  when 'centos', 'redhat', 'fedora', 'amazon'
    supports :restart => true, :reload => true, :status => true
  when 'debian', 'ubuntu'
    supports :restart => true, :reload => false, :status => true
  end

  action :nothing
end
```

このレシピは、Chef service リソースを使用して Tomcat サービス名 (デフォルトでは tomcat6) を指定し、`supports` 属性を設定して、さまざまなオペレーティングシステムでサービスの restart コマンド、reload コマンド、および status コマンドを Chef によって管理する方法を定義します。

- `true` は、Chef が init またはその他のサービスプロバイダーを使用してコマンドを実行できることを示します。
- `false` は、Chef がその他の方法でコマンドの実行を試みる必要があることを示します。

action が :nothing に設定されていることに注意してください。ライフサイクルイベントごとに、 OpsWorks スタックは Chef 実行を開始し、適切なレシピセットを実行します。Tomcat クックブックは、レシピでサービスの定義を作成するがサービスの再起動はしないという一般的なパターンに従います。Chef 実行のその他のレシピは、通常、設定ファイルの作成に使用する notifies リソースに template コマンドを含めることで、再起動を処理します。通知を使用すると、設定が変更された場合にのみサービスが再起動されるため、通知はサービスの再起動のための便利な方法です。また、Chef 実行で 1 つのサービスに対して複数の再起動通知がある場合、Chef は最大で 1 回サービスを再起動します。これにより、Tomcat のエラーの一般的原因である、完全には機能していないサービスを再起動しようとする際に発生する可能性がある問題が回避されます。

Tomcat サービスは、再起動通知を使用する任意の Chef 実行に対して定義する必要があります。したがって、tomcat::service は複数のレシピに含まれ、それぞれの Chef 実行に対してサービスが定義されることになります。Chef 実行に tomcat::service の複数のインスタンスが含まれる場合のペナルティはありません。これは、Chef ではレシピの実行回数が Chef 実行ごとに 1 回のみであるためです。

tomcat::container_config

tomcat::container_config レシピは、クックブックテンプレートファイルから設定ファイルを作成します。

```
include_recipe 'tomcat::service'

template 'tomcat environment configuration' do
  path ::File.join(node['tomcat']['system_env_dir'], "tomcat#{node['tomcat']
['base_version']}")
  source 'tomcat_env_config.erb'
  owner 'root'
  group 'root'
  mode 0644
  backup false
  notifies :restart, resources(:service => 'tomcat')
end

template 'tomcat server configuration' do
  path ::File.join(node['tomcat']['catalina_base_dir'], 'server.xml')
  source 'server.xml.erb'
  owner 'root'
  group 'root'
  mode 0644
```

```
  backup false
  notifies :restart, resources(:service => 'tomcat')
end
```

このレシピは、必要に応じてサービスを定義する tomcat::service を最初に呼び出します。このレシピの大部分は、2 つの template resources で構成され、クックブックのいずれかのテンプレートファイルから設定ファイルを作成し、ファイルのプロパティを設定し、Chef にサービスを再起動するよう通知します。

Tomcat 環境設定

最初の template リソースは、tomcat_env_config.erb テンプレートファイルを使用して Tomcat 環境設定ファイルを作成します。このファイルは、JAVA_HOME などの環境変数の設定に使用します。デフォルトのファイル名は、template リソースの引数です。tomcat::container_config は、path 属性を使用し、デフォルト値を上書きして設定ファイルに /etc/sysconfig/tomcat6 (Amazon Linux の場合) または /etc/default/tomcat6 (Ubuntu の場合) の名前を付けます。また、template リソースは、ファイルの所有者、グループ、およびモードの設定を指定し、バックアップファイルを作成しないように Chef に指示します。

ソースコードを確認すると、実際には 3 つのバージョンの tomcat_env_config.erb が存在し、それぞれ templates ディレクトリの異なるサブディレクトリ内にあります。ubuntu ディレクトリおよび amazon ディレクトリには、それぞれのオペレーティングシステムに対応するテンプレートが含まれます。default フォルダには、1 行のコメント行があるダミーのテンプレートが含まれています。このテンプレートは、サポートされていないオペレーティング システムを使用するインスタンスでこのレシピを実行しようとした場合にのみ使用されます。tomcat::container_config レシピでは、使用する tomcat_env_config.erb を指定する必要はありません。Chef は、「File Specificity」で説明されているルールに基づいて、インスタンスのオペレーティングシステム用の適切なディレクトリを自動的に選択します。

この例の tomcat_env_config.erb ファイルは、大部分がコメントで構成されています。追加の環境変数を設定するには、適切な行をコメント解除し、新しい値を指定します。

> **Note**
>
> 変更する可能性がある設定は、テンプレートにハードコーディングするのではなく、属性として定義する必要があります。そうすれば、設定を変更するためにテンプレートを書き直す必要はなく、属性を上書きするだけで済みます。

次の抜粋に示すように、Amazon Linux テンプレートは 1 つの環境変数のみを設定します。

```
...
# Use JAVA_OPTS to set java.library.path for libtcnative.so
#JAVA_OPTS="-Djava.library.path=/usr/lib"

JAVA_OPTS="${JAVA_OPTS} <%= node['tomcat']['java_opts'] %>"

# What user should run tomcat
#TOMCAT_USER="tomcat"
...
```

JAVA_OPTS を使用すると、ライブラリのパスなどの Java オプションを指定できます。デフォルトの属性値を使用すると、このテンプレートは Amazon Linux の Java オプションを設定しません。例えば、カスタム JSON 属性を使用して、`['tomcat']['java_opts']` 属性を上書きすることにより、独自の Java オプションを設定できます。例については、スタックの作成を参照してください。

次のテンプレートの抜粋に示すように、Ubuntu テンプレートは複数の環境変数を設定します。

```
# Run Tomcat as this user ID. Not setting this or leaving it blank will use the
# default of tomcat<%= node['tomcat']['base_version'] %>.
TOMCAT<%= node['tomcat']['base_version'] %>_USER=tomcat<%= node['tomcat']
['base_version'] %>
...
# Run Tomcat as this group ID. Not setting this or leaving it blank will use
# the default of tomcat<%= node['tomcat']['base_version'] %>.
TOMCAT<%= node['tomcat']['base_version'] %>_GROUP=tomcat<%= node['tomcat']
['base_version'] %>
...
JAVA_OPTS="<%= node['tomcat']['java_opts'] %>"

<% if node['tomcat']['base_version'].to_i < 7 -%>
# Unset LC_ALL to prevent user environment executing the init script from
# influencing servlet behavior.  See Debian bug #645221
unset LC_ALL
<% end -%>
```

デフォルトの属性値を使用すると、このテンプレートは次のように Ubuntu 環境変数を設定します。

- Tomcat のユーザーとグループを表す TOMCAT6_USER および TOMCAT6_GROUP は、いずれも tomcat6 に設定されます。

  ['tomcat']['base_version'] を tomcat7 に設定する場合、変数名は TOMCAT7_USER および TOMCAT7_GROUP に解決され、いずれも tomcat7 に設定されます。

- JAVA_OPTS は、-Djava.awt.headless=true -Xmx128m -XX:+UseConcMarkSweepGC に設定されます。
  - -Djava.awt.headless を true に設定すると、インスタンスがヘッドレスでコンソールがないことがグラフィック エンジンに通知されます。これにより、特定のグラフィカルアプリケーションの不良動作に対処します。
  - -Xmx128m により、JVM は適切なメモリリソース (この例では 128 MB) を確保します。
  - -XX:+UseConcMarkSweepGC は、コンカレントマークスイープガベージコレクションを指定します。これは、ガベージコレクションの一時停止を限定するのに役立ちます。

    詳細については、「コンカレントマークスイープコレクタの拡張機能」を参照してください。
- Tomcat のバージョンが 7 より前の場合、このテンプレートは、Ubuntu のバグに対処する LC_ALL を取り消します。

> **Note**
>
> デフォルトの属性を使用すると、これらの環境変数の一部が単にデフォルト値に設定されます。一方、属性に対して環境変数を明示的に設定することは、カスタム JSON 属性を定義し、デフォルトの属性を上書きしてカスタム値を指定することを意味します。属性の上書きの詳細については、「属性の上書き」を参照してください。

完全なテンプレートファイルについては、ソースコードを参照してください。

Server.xml 設定ファイル

2 番目の template リソースは、 server.xml.erb を使用して system.xml 設定ファイルを作成します。このファイルは、servlet/JSP コンテナを設定します。server.xml.erb は、オペレーティングシステム固有の設定を含まないため、template ディレクトリの default サブディレクトリに配置されています。

このテンプレートは、標準設定を使用しますが、Tomcat 6 または Tomcat 7 のいずれかに対して system.xml ファイルを作成できます。たとえば、このテンプレートのサーバーセクションの次のコードは、指定されたバージョンに合わせてリスナーを適切に設定します。

```
<% if node['tomcat']['base_version'].to_i > 6 -%>
  <!-- Security listener. Documentation at /docs/config/listeners.html
  <Listener className="org.apache.catalina.security.SecurityListener" />
  -->
<% end -%>
  <!--APR library loader. Documentation at /docs/apr.html -->
  <Listener className="org.apache.catalina.core.AprLifecycleListener" SSLEngine="on" />
  <!--Initialize Jasper prior to webapps are loaded. Documentation at /docs/jasper-
howto.html -->
  <Listener className="org.apache.catalina.core.JasperListener" />
  <!-- Prevent memory leaks due to use of particular java/javax APIs-->
  <Listener className="org.apache.catalina.core.JreMemoryLeakPreventionListener" />
<% if node['tomcat']['base_version'].to_i < 7 -%>
  <!-- JMX Support for the Tomcat server. Documentation at /docs/non-existent.html -->
  <Listener className="org.apache.catalina.mbeans.ServerLifecycleListener" />
<% end -%>
  <Listener className="org.apache.catalina.mbeans.GlobalResourcesLifecycleListener" />
<% if node['tomcat']['base_version'].to_i > 6 -%>
  <Listener className="org.apache.catalina.core.ThreadLocalLeakPreventionListener" />
<% end -%>
```

このテンプレートは、ハードコーディングされた設定の代わりに属性を使用しているため、カスタム JSON 属性を定義することで、設定を簡単に変更できます。例えば:

```
<Connector port="<%= node['tomcat']['port'] %>" protocol="HTTP/1.1"
           connectionTimeout="20000"
           URIEncoding="<%= node['tomcat']['uri_encoding'] %>"
           redirectPort="<%= node['tomcat']['secure_port'] %>" />
```

詳細については、ソースコードを参照してください。

tomcat::apache_tomcat_bind

tomcat::apache_tomcat_bind レシピは、Apache サーバーが Tomcat のフロントエンドとして動作すること、つまり、受信するリクエストを受け取って Tomcat に転送し、応答をクライアントに

返すことを可能にします。この例では、Apache のプロキシ/ゲートウェイとして mod_proxy を使用します。

```
execute 'enable mod_proxy for apache-tomcat binding' do
  command '/usr/sbin/a2enmod proxy'
  not_if do
    ::File.symlink?(::File.join(node['apache']['dir'], 'mods-enabled', 'proxy.load'))
 || node['tomcat']['apache_tomcat_bind_mod'] !~ /\Aproxy/
  end
end

execute 'enable module for apache-tomcat binding' do
  command "/usr/sbin/a2enmod #{node['tomcat']['apache_tomcat_bind_mod']}"
  not_if {::File.symlink?(::File.join(node['apache']['dir'], 'mods-enabled',
 "#{node['tomcat']['apache_tomcat_bind_mod']}.load"))}
end

include_recipe 'apache2::service'

template 'tomcat thru apache binding' do
  path ::File.join(node['apache']['dir'], 'conf.d', node['tomcat']
['apache_tomcat_bind_config'])
  source 'apache_tomcat_bind.conf.erb'
  owner 'root'
  group 'root'
  mode 0644
  backup false
  notifies :restart, resources(:service => 'apache2')
end
```

mod_proxy を有効にするには、proxy モジュールとプロトコルベースのモジュールを有効にする必要があります。プロトコルモジュールには、次の 2 つのオプションがあります。

- HTTP: proxy_http
- Apache JServ Protocol (AJP) : proxy_ajp

  AJP は、内部の Tomcat プロトコルです。

このレシピの両方の execute リソースが a2enmod コマンドを実行します。このコマンドは、必要なシンボリックリンクを作成することで、指定されたモジュールを有効にします。

- 最初の execute リソースは、proxy モジュールを有効にします。
- 2 番目の execute リソースは、デフォルトで proxy_http に設定されているプロトコルモジュールを有効にします。

  AJP の方を使用する場合は、カスタム JSON を定義し、apache_tomcat_bind_mod 属性を上書きして、proxy_ajp に設定できます。

apache2::service レシピは、Apache サービスを定義する OpsWorks スタック組み込みレシピです。詳細については、 スタック GitHub OpsWorks リポジトリのレシピを参照してください。

template リソースでは、apache_tomcat_bind.conf.erb を使用して、デフォルトで tomcat_bind.conf という名前のファイルを作成します。ファイルは、['apache']['dir']/.conf.d ディレクトリに配置されます。['apache']['dir'] 属性は、組み込みの apache2 属性ファイルで定義され、デフォルトでは /etc/httpd (Amazon Linux の場合) または /etc/apache2 (Ubuntu の場合) に設定されます。この template リソースが設定ファイルを作成または変更する場合は、notifies コマンドが Apache サービスの再起動をスケジュール設定します。

```
<% if node['tomcat']['apache_tomcat_bind_mod'] == 'proxy_ajp' -%>
ProxyPass <%= node['tomcat']['apache_tomcat_bind_path'] %> ajp://localhost:<%=
 node['tomcat']['ajp_port'] %>/
ProxyPassReverse <%= node['tomcat']['apache_tomcat_bind_path'] %> ajp://localhost:<%=
 node['tomcat']['ajp_port'] %>/
<% else %>
ProxyPass <%= node['tomcat']['apache_tomcat_bind_path'] %> http://localhost:<%=
 node['tomcat']['port'] %>/
ProxyPassReverse <%= node['tomcat']['apache_tomcat_bind_path'] %> http://localhost:<%=
 node['tomcat']['port'] %>/
<% end -%>
```

このテンプレートは、ProxyPass ディレクティブおよび ProxyPassReverse ディレクティブを使用して、Apache と Tomcat の間でトラフィックを渡すために使用するポートを設定します。両方のサーバーが同じインスタンスにあるため、1 つの localhost URL を使用することができ、どちらもデフォルトで http://localhost:8080 に設定されます。

Configure レシピ

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Configure レシピは、レイヤーの Configure ライフサイクルイベントに割り当てられます。このイベントは、スタックのすべてのインスタンスで、インスタンスがオンライン状態になったとき、またはオンライン状態から別の状態になったときに発生します。Configure レシピを使用することで、必要に応じ、変更に対応してインスタンスの設定を調整します。Configure レシピを実装するときは、スタックの設定の変更がこのレイヤーとは無関係なインスタンスに関与している場合があることに注意してください。このレシピは、適切に応答できる必要があります。それは、場合によっては何も処理を実行しないことがあることを意味します。

tomcat::configure

`tomcat::configure` レシピは、レイヤーの Configure ライフサイクルイベントに対応します。

```
include_recipe 'tomcat::context'
# Optional: Trigger a Tomcat restart in case of a configure event, if relevant
# settings in custom JSON have changed (e.g. java_opts/JAVA_OPTS):
#include_recipe 'tomcat::container_config'
```

`tomcat::configure` レシピは、2 つの依存レシピを実行するメタレシピです。

1. `tomcat::context` レシピは、ウェブアプリケーションのコンテキスト設定ファイルを作成します。

   このファイルは、次のセクションで説明するように、アプリケーションが MySQL インスタンスとの通信に使用する JDBC リソースを設定します。設定イベントに応じてこのレシピを実行すると、データベースレイヤーが変更された場合に、レイヤーでウェブアプリケーションのコンテキスト設定ファイルを更新することができます。

2. tomcat::container_config Setup レシピは、コンテナ設定のあらゆる変更をキャプチャするために再度実行されます。

include の tomcat::container_config は、この例のようにコメントアウトされます。カスタム JSON を使用して Tomcat の設定を変更する必要がある場合は、このコメントを削除できます。その後、Configure ライフサイクルイベントでは、tomcat::container_config を実行することにより「tomcat::container_config」で説明するように Tomcat 関連の設定ファイルを更新し、Tomcat サービスを再起動します。

tomcat::context

Tomcat クックブックは、J2EE DataSource オブジェクトを使用することで、別のインスタンスで実行されている場合がある MySQL データベースサーバーにアプリケーションがアクセスできるようにします。Tomcat では、各アプリケーションに対してウェブアプリケーションのコンテキスト設定ファイルを作成してインストールすることにより、接続を有効にできます。このファイルは、アプリケーションと、アプリケーションがデータベースとの通信に使用する JDBC リソースとの間の関係を定義します。詳細については、「コンテキスト コンテナ」を参照してください。

tomcat::context レシピの主な目的は、この設定ファイルを作成することです。

```
include_recipe 'tomcat::service'

node[:deploy].each do |application, deploy|
  context_name = deploy[:document_root].blank? ? application : deploy[:document_root]

  template "context file for #{application} (context name: #{context_name})" do
    path ::File.join(node['tomcat']['catalina_base_dir'], 'Catalina', 'localhost',
 "#{context_name}.xml")
    source 'webapp_context.xml.erb'
    owner node['tomcat']['user']
    group node['tomcat']['group']
    mode 0640
    backup false
    only_if { node['datasources'][context_name] }
    variables(:resource_name => node['datasources'][context_name], :webapp_name =>
 application)
    notifies :restart, resources(:service => 'tomcat')
  end
end
```

Tomcat クックブック属性に加えて、このレシピは OpsWorks 、スタックが Configure イベントでインストールするスタック設定とデプロイ属性を使用します。 OpsWorks スタックサービスは、データバッグを使用するか、各インスタンスで属性を検索してインストールすることで、レシピが通常取得する情報を含む属性を各インスタンスのノードオブジェクトに追加します。それらの属性に含まれるのは、スタック設定、デプロイされるアプリケーション、ユーザーに必要なカスタムデータに関する詳細情報です。レシピは、標準の Chef ノード構文を使用することで、スタック設定およびデプロイ属性からデータを取得できます。詳細については、「スタック設定およびデプロイメント属性」を参照してください。Chef 11.10 スタックの場合、Chef の検索を使用してスタック設定およびデプロイデータを取得することもできます。詳細については、「Chef の検索の使用」を参照してください。

deploy 属性とは、 コンソールまたは API を介して定義された、または OpsWorks スタックサービスによって生成されたデプロイ関連の属性を含む[:deploy]名前空間を指します。deploy 属性には、デプロイされる各アプリケーションの属性が含まれています。この属性の名前はアプリケーションの短縮名です。各アプリケーション属性には、ドキュメントのルート ([:deploy][:*appname*][:document_root]) など、アプリケーションの特性を示す一連の属性が含まれています。

context レシピは、最初に、tomcat::service を呼び出すことにより、この Chef 実行に対してサービスが定義されるようにします。次に、設定ファイルの名前を表す context_name 変数を定義します。拡張子の .xml は除外されます。デフォルトのドキュメントのルートを使用する場合、context_name はアプリケーションの短縮名に設定されます。それ以外の場合は、指定されたドキュメントのルートに設定されます。「スタックの作成とアプリケーションの実行」で説明する例では、ドキュメントのルートは "ROOT" に設定されるため、コンテキストは ROOT で、設定ファイルは ROOT.xml という名前になります。

レシピの大部分は、デプロイされているアプリケーションのリストを対象として機能し、各アプリケーションに対して webapp_context.xml.erb テンプレートを使用してコンテキスト設定ファイルを作成します。この例では、1 つのアプリケーションのみをデプロイしますが、deploy 属性でアプリケーションのリストとして定義する必要があります。

webapp_context.xml.erb テンプレートは、オペレーティングシステム固有でないため、templatesディレクトリの default サブディレクトリに配置されています。

このレシピは、次のように設定ファイルを作成します。

- デフォルトの属性値を使用すると、設定ファイル名は *context_name*.xml に設定され、/etc/tomcat6/Catalina/localhost/ ディレクトリにインストールされます。

スタック設定属性から取得される ['datasources'] ノードには、1 つ以上の属性が含まれます。各属性は、関連付けられたアプリケーションがデータベースとの通信に使用する JDBC データリソースにコンテキスト名をマッピングします。「スタックの作成とアプリケーションの実行」で後ほど説明するように、スタックの作成時に、ノードとそのコンテンツがカスタム JSON を使用して定義されます。この例では、ROOT コンテキスト名と jdbc/mydb という名前の JDBC リソースを関連付ける 1 つの属性を使用します。

- デフォルトの属性値を使用すると、ファイルのユーザーとグループはどちらも、Tomcat パッケージの tomcat (Amazon Linux の場合) または tomcat6 (Ubuntu の場合) によって定義された値に設定されます。
- template リソースは、['datasources'] ノードが存在し、context_name 属性を含む場合にのみ、設定ファイルを作成します。
- template リソースは、2 つの変数 resource_name と webapp_name を定義します。

  resource_name は context_name に関連付けられているリソース名に設定され、webapp_name はアプリケーションの短縮名に設定されます。
- template リソースは、Tomcat サービスを再起動し、変更を読み込んでアクティブにします。

webapp_context.xml.erb テンプレートは、属性の固有のセットを使用する Context 要素を含む Resource 要素で構成されています。

Resource 属性は、コンテキスト設定の特性を示します。

- name (名前) - JDBC リソース名。tomcat::context で定義されている resource_name 値に設定されます。

  たとえば、リソース名は jdbc/mydb に設定されます。
- auth および [type (タイプ)] - これらは JDBC DataSource 接続の標準設定です。
- maxActive (マックスアクティブ)、maxIdle (マックスアイドル)、および maxWait (マックスウェイト) - アクティブ接続およびアイドル接続の最大数、および返される接続を待機する最大時間。
- username (ユーザーネーム) および password (パスワードパスワード) - データベースのユーザー名およびルートパスワード。deploy 属性から取得されます。
- driverClassName (ドライバークラス名) - JDBC ドライバのクラス名。MySQL driver に設定されます。
- url (url) - 接続 URL。

プレフィックスはデータベースによって異なります。MySQL の場合は `jdbc:mysql` に、Postgres の場合は `jdbc:postgresql` に、SQL Server の場合は `jdbc:sqlserver` に設定する必要があります。この例では、URL を `jdbc:mysql://host_IP_Address:3306:simplejsp` に設定します。ここで、*simplejsp* はアプリケーションの短縮名です。

- factory (ファクトリ) - `DataSource` ファクトリ。MySQL データベースに必須です。

この設定ファイルの詳細については、Tomcat Wiki のトピック「DataSource の使用方法」を参照してください。

Deploy レシピ

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Deploy レシピは、レイヤーの Deploy ライフサイクルイベントに割り当てられます。これは通常、アプリケーションをデプロイするたびにスタックのすべてのインスタンスで発生しますが、オプションでイベントを指定されたインスタンスのみに制限できます。 OpsWorks スタックは、Setup レシピの完了後に、新しいインスタンスで Deploy レシピも実行します。Deploy レシピの主な目的は、コードと関連ファイルをリポジトリからアプリケーションサーバーレイヤーのインスタンスにデプロイすることです。ただし、多くの場合、その他のレイヤーでも Deploy レシピを実行します。これにより、これらのレイヤーのインスタンスで、たとえば、新しくデプロイされたアプリケーションに応じて設定を更新できるようになります。Deploy レシピを実装するときは、Deploy イベントが必ずしもアプリケーションがインスタンスにデプロイされることを意味するわけではないことに注意してください。アプリケーションがスタック内の別のインスタンスにデプロイされていることを単に通知することで、そのインスタンスで必要な更新ができるようにしているだけの場合もあります。このレシピは、適切に応答できる必要があります。それは、何も処理を実行しない場合があることを意味します。

OpsWorks スタックは、標準アプリケーションタイプのアプリケーションを対応する組み込みアプリケーションサーバーレイヤーに自動的にデプロイします。アプリケーションをカスタムレイヤーにデ

プロイするには、アプリケーションのファイルをリポジトリからインスタンスの適切な場所にダウンロードするカスタム Deploy レシピを実装する必要があります。ただし、多くの場合、組み込みのデプロイクックブックを使用してデプロイの一部の側面を処理することで、記述する必要のあるコードの量を制限することができます。たとえば、サポートされているリポジトリの 1 つにファイルを保存する場合、リポジトリからレイヤーのインスタンスへのファイルダウンロードの詳細を組み込みのクックブックで処理できます。

tomcat::deploy レシピは、Deploy ライフサイクルイベントに割り当てられます。

```
include_recipe 'deploy'

node[:deploy].each do |application, deploy|
  opsworks_deploy_dir do
    user deploy[:user]
    group deploy[:group]
    path deploy[:deploy_to]
  end

  opsworks_deploy do
    deploy_data deploy
    app application
  end
...
```

tomcat::deploy レシピは、アプリケーション固有ではないデプロイの側面に組み込みのデプロイクックブックを使用します。deploy レシピ (組み込み deploy::default レシピの省略表現) は、deploy 属性のデータに基づいてユーザー、グループなどのセットアップの詳細を処理する組み込みレシピです。

このレシピは、2 つの組み込みの Chef 定義 opsworks_deploy_dir と opworks_deploy を使用して、アプリケーションをインストールします。

opsworks_deploy_dir 定義は、アプリケーションのデプロイメント JSON のデータに基づいて、ディレクトリ構造をセットアップします。定義は、基本的にはリソース定義をパッケージするための便利な方法であり、クックブックの definitions ディレクトリに配置されています。レシピでは、リソースと同様に定義を使用できますが、この定義自体には、定義に含まれた単なるリソースである関連付けられたプロバイダーはありません。基盤となるリソース定義に渡されるレシピ内の変数は定義できます。tomcat::deploy レシピは、デプロイメント JSON のデータに基づい

て、user、group、および path の各変数を設定します。これらの変数は、定義の directory リソースに渡されます。このリソースはディレクトリを管理します。

> **Note**
>
> [:opsworks][:deploy_user][:user] 属性と [:opsworks][:deploy_user][:group] 属性により、デプロイされているアプリケーションのユーザーとグループが定義されます。これらの属性は、組み込みのデプロイクックブックの deploy.rb 属性ファイルで定義されています。[:opsworks][:deploy_user][:user] の初期値は deploy です。[:opsworks][:deploy_user][:group] のデフォルト値は、インスタンスのオペレーティングシステムによって異なります。
>
> - Ubuntu インスタンスでは、デフォルトのグループは www-data です。
> - Nginx と Unicorn を使用する Rails アプリケーションアプリケーションサーバーレイヤーのメンバーである Amazon Linux インスタンスの場合、デフォルトのグループは nginx です。
> - その他のすべての Amazon Linux インスタンスの場合、デフォルトのグループは apache です。
>
> カスタム JSON またはカスタム属性ファイルを使用して適切な属性を上書きすることにより、設定を変更できます。詳細については、「属性の上書き」を参照してください。

その他の定義 opsworks_deploy は、アプリケーションのコードとリポジトリの関連ファイルの確認、およびそれらのインスタンスへのデプロイの詳細を、deploy 属性のデータに基づいて処理します。任意のアプリケーションタイプに対してこの定義を使用できます。ディレクトリ名などのデプロイの詳細はコンソールまたは API で指定して、deploy 属性に含まれています。ただし、opsworks_deploy は、Git、Subversion、S3、および HTTP という 4 つのサポートされているリポジトリのタイプに対してのみ機能します。異なるリポジトリのタイプを使用する場合は、このコードを自分で実装する必要があります。

アプリケーションのファイルを、Tomcat の webapps ディレクトリにインストールします。一般的な方法は、ファイルを webapps に直接コピーすることです。ただし、 OpsWorks スタックのデプロイは、インスタンス上に最大 5 つのバージョンのアプリケーションを保持するように設計されているため、必要に応じて以前のバージョンにロールバックできます。したがって、 OpsWorks スタックは以下を実行します。

1. /srv/www/my_1st_jsp/releases/20130731141527 など、名前にタイムスタンプが含まれた明確に区別できるディレクトリにアプリケーションをデプロイします。
2. この一意のディレクトリに、current という名前が付いた /srv/www/my_1st_jsp/current などのシンボリックリンクを作成します。
3. webapps ディレクトリからステップ 2 で作成した current へのシンボリックリンクがまだない場合は、これを作成します。

以前のバージョンにロールバックする必要がある場合は、該当するタイムスタンプが含まれた明確に区別できるディレクトリをポイントするように current シンボリックリンクを変更します。例えば、/srv/www/my_1st_jsp/current のリンクターゲットを変更します。

tomcat::deploy の中間のセクションは、シンボリックリンクをセットアップします。

```
  ...
  current_dir = ::File.join(deploy[:deploy_to], 'current')
  webapp_dir = ::File.join(node['tomcat']['webapps_base_dir'],
deploy[:document_root].blank? ? application : deploy[:document_root])

  # opsworks_deploy creates some stub dirs, which are not needed for typical webapps
  ruby_block "remove unnecessary directory entries in #{current_dir}" do
    block do
      node['tomcat']['webapps_dir_entries_to_delete'].each do |dir_entry|
        ::FileUtils.rm_rf(::File.join(current_dir, dir_entry), :secure => true)
      end
    end
  end

  link webapp_dir do
    to current_dir
    action :create
  end
  ...
```

このレシピは、まず 2 つの変数 current_dir と webapp_dir を作成して、current ディレクトリと webapp ディレクトリをそれぞれ表します。次に、link リソースを使用して、webapp_dir を current_dir にリンクします。 OpsWorks Stacks deploy::defaultレシピは、この例に必要ではないスタブディレクトリを作成するため、抜粋の中央部分で削除します。

tomcat::deploy の最後の部分は、必要に応じて Tomcat サービスを再起動します。

```
  ...
  include_recipe 'tomcat::service'

  execute 'trigger tomcat service restart' do
    command '/bin/true'
    not_if { node['tomcat']['auto_deploy'].to_s == 'true' }
    notifies :restart, resources(:service => 'tomcat')
  end
end

include_recipe 'tomcat::context'
```

このレシピは、最初に tomcat::service を実行して、この Chef 実行に対してサービスが定義されるようにします。次に、execute リソースを使用して、再起動するようにサービスに通知しますが、それは ['tomcat']['auto_deploy'] が 'true' に設定されている場合のみです。その他の場合、Tomcat は webapps ディレクトリ内の変更をリッスンします。これにより、明示的な Tomcat サービスの再起動が不必要になります。

> **Note**
>
> execute リソースは実際には実質的なことを何も実行せず、/bin/true は単に成功コードを返すダミーのシェルスクリプトです。単に再起動通知を生成するための便利な方法として使用されています。前に説明したように、通知を使用することで、サービスが必要以上に頻繁に再起動されなくなります。

最後に、tomcat::deploy は tomcat::context を実行し、バックエンドデータベースが変更されている場合は、ウェブアプリケーションのコンテキスト設定ファイルを更新します。

スタックの作成とアプリケーションの実行

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このセクションでは、Tomcat クックブックを使用して、SimpleJSP という名前のシンプルな Java サーバー ページ (JSP) アプリケーションを実行する基本的なスタック設定を実装する方法について説明します。スタックは、TomCustom という名前の Tomcat ベースのカスタムレイヤーと MySQL で構成されます。SimpleJSP は、TomCustom にデプロイされ、MySQL データベースの一部の情報を表示します。 OpsWorks スタックの使用方法の基本をまだ理解していない場合は、まず をお読みくださいChef 11 Linux スタックの使用開始。

SimpleJSP アプリケーション

SimpleJSP アプリケーションは、データベース接続のセットアップ方法、およびスタックの MySQL データベースからデータを取得する方法の基本を示します。

```
<html>
  <head>
    <title>DB Access</title>
  </head>
  <body>
    <%@ page language="java" import="java.sql.*,javax.naming.*,javax.sql.*" %>
    <%
      StringBuffer output = new StringBuffer();
      DataSource ds = null;
      Connection con = null;
      Statement stmt = null;
      ResultSet rs = null;
      try {
        Context initCtx = new InitialContext();
        ds = (DataSource) initCtx.lookup("java:comp/env/jdbc/mydb");
        con = ds.getConnection();
        output.append("Databases found:<br>");
        stmt = con.createStatement();
        rs = stmt.executeQuery("show databases");
        while (rs.next()) {
          output.append(rs.getString(1));
          output.append("<br>");
        }
      }
      catch (Exception e) {
        output.append("Exception: ");
        output.append(e.getMessage());
        output.append("<br>");
      }
      finally {
```

```
        try {
          if (rs != null) {
            rs.close();
          }
          if (stmt != null) {
            stmt.close();
          }
          if (con != null) {
            con.close();
          }
        }
        catch (Exception e) {
          output.append("Exception (during close of connection): ");
          output.append(e.getMessage());
          output.append("<br>");
        }
      }
    %>
    <%= output.toString() %>
  </body>
</html>
```

SimpleJSP は、DataSource オブジェクトを使用して MySQL データベースと通信します。Tomcat は、ウェブアプリケーションのコンテキスト設定ファイル内のデータを使用し、DataSource オブジェクトを作成して初期化し、論理名に結合します。次に、Java Naming and Directory Interface (JNDI) ネーミングサービスで論理名を登録します。適切な DataSource オブジェクトのインスタンスを取得するには、InitialContext オブジェクトを 作成し、リソースの論理名をオブジェクトの lookup メソッドに渡します。これにより、適切なオブジェクトを取得します。SimpleJSP の例の論理名 java:comp/env/jdbc/mydb には、次のコンポーネントがあります。

- ルート名前空間の java。名前の残りの部分とはコロン (:) で区切られます。
- 任意の追加の名前空間。スラッシュ (/) で区切られます。

  Tomcat は、comp/env 名前空間にリソースを自動的に追加します。
- リソース名。ウェブアプリケーションのコンテキスト設定ファイルで定義され、名前空間とはスラッシュで区切られます。

  この例では、リソース名は jdbc/mydb です。

データベースへの接続を確立するために、SimpleJSP は次の処理を実行します。

1. DataSource オブジェクトの getConnection メソッドを呼び出し、Connection オブジェクトを返します。
2. Connection オブジェクトの createStatement メソッドを呼び出し、データベースとの通信に使用する Statement オブジェクトを作成します。
3. 適切な Statement メソッドを呼び出すことで、データベースと通信します。

   SimpleJSP は、executeQuery を呼び出し、サーバーのデータベースをリスト表示する SHOW DATABASES クエリを実行します。

executeQuery メソッドは、クエリの結果を含む ResultSet オブジェクトを返します。SimpleJSP は、返された ResultSet オブジェクトからデータベース名を取得し、それらを連結して出力文字列を作成します。最後に、この例では ResultSet、Statement、および Connection の各オブジェクトを閉じます。JSP と JDBC の詳細については、「JavaServer Pages テクノロジー」と「JDBC の基本」をそれぞれ参照してください。

スタックで SimpleJSP を使用するには、SimpleJSP をリポジトリに配置する必要があります。サポートされている任意のリポジトリを使用できますが、この後のセクションで説明する例のスタックで SimpleJSP を使用するには、SimpleJSP をパブリックの S3 アーカイブに配置する必要があります。その他の標準のリポジトリの使用方法の詳細については、「クックブックリポジトリ」を参照してください。

SimpleJSP を S3 アーカイブ リポジトリに配置するには

1. コード例を simplejsp.jsp という名前のファイルにコピーし、そのファイルを simplejsp という名前のディレクトリに配置します。
2. .zip ディレクトリの simplejsp アーカイブを作成します。
3. パブリックの Amazon S3 バケットを作成し、simplejsp.zip をそのバケットにアップロードして、ファイルをパブリックにします。

   このタスクを実行する方法については、「Amazon Simple Storage Service の使用開始」を参照してください。

スタックの作成

SimpleJSP を実行するには、次のレイヤーを含んだスタックが必要です。

- バックエンド MySQL サーバーをサポートする MySQL レイヤー。
- Tomcat サーバー インスタンスをサポートするために Tomcat クックブックを使用するカスタムレイヤー。

スタックを作成するには

1. OpsWorks スタックダッシュボードで、スタックの追加をクリックして新しいスタックを作成し、詳細 >> をクリックしてすべてのオプションを表示します。スタックを次のように設定します。

   - Name (名前) - ユーザー定義のスタック名です。この例では TomStack を使用します。
   - [Use custom Chef cookbooks] (カスタムChefのクックブックを使用) - トグルを [Yes] (はい) に設定します。いくつかの追加オプションが表示されます。
   - Repository type (リポジトリタイプ) - Git
   - Repository URL (リポジトリのURL) - `git://github.com/amazonwebservices/opsworks-example-cookbooks.git` 。
   - Custom Chef JSON (カスタムChef JSON) - 次の JSON を追加します。

     ```
     {
       "tomcat": {
         "base_version": 7,
         "java_opts": "-Djava.awt.headless=true -Xmx256m"
       },
       "datasources": {
         "ROOT": "jdbc/mydb"
       }
     }
     ```

   残りのオプションについては、デフォルトをそのまま使用できます。

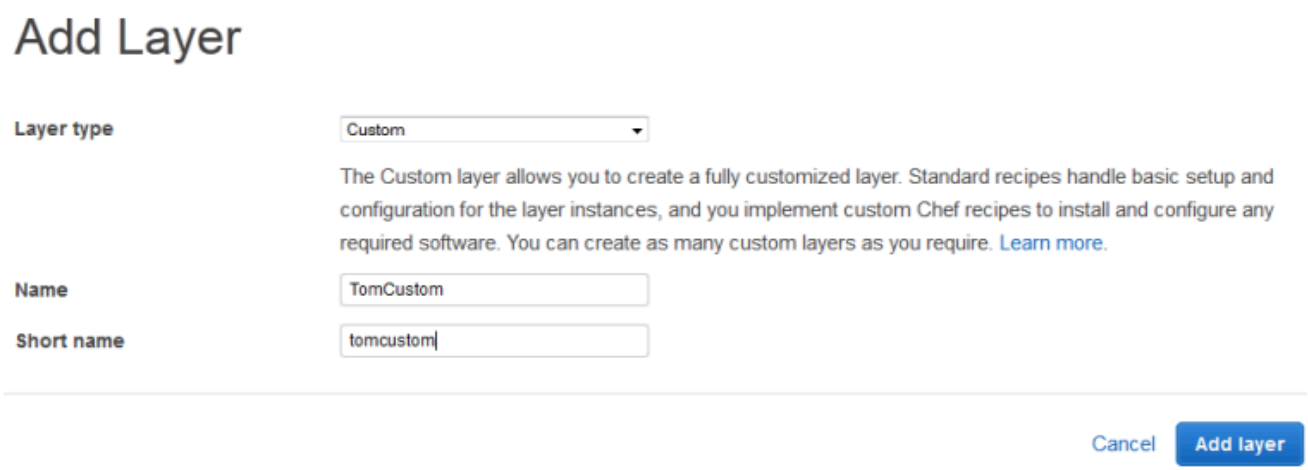
   カスタム JSON は、次の処理を実行します。

   - Tomcat クックブックの `['base_version']` 属性を上書きして Tomcat のバージョンを 7 に設定します。デフォルト値は 6 です。

- Tomcat クックブックの `['java_opts']` 属性を上書きし、インスタンスがヘッドレスであることを指定して JVM の最大ヒープサイズを 256 MB に設定します。デフォルト値では、Amazon Linux を実行しているインスタンスに対してはオプションが設定されません。
- `['datasources]` 属性値を指定します。これにより、「tomcat::context」で説明するように、JDBC リソース名 (jdbc/mydb) がウェブアプリケーションのコンテキスト名 (ROOT) に割り当てられます。

  この最後の属性にはデフォルト値はありません。カスタム JSON で設定する必要があります。

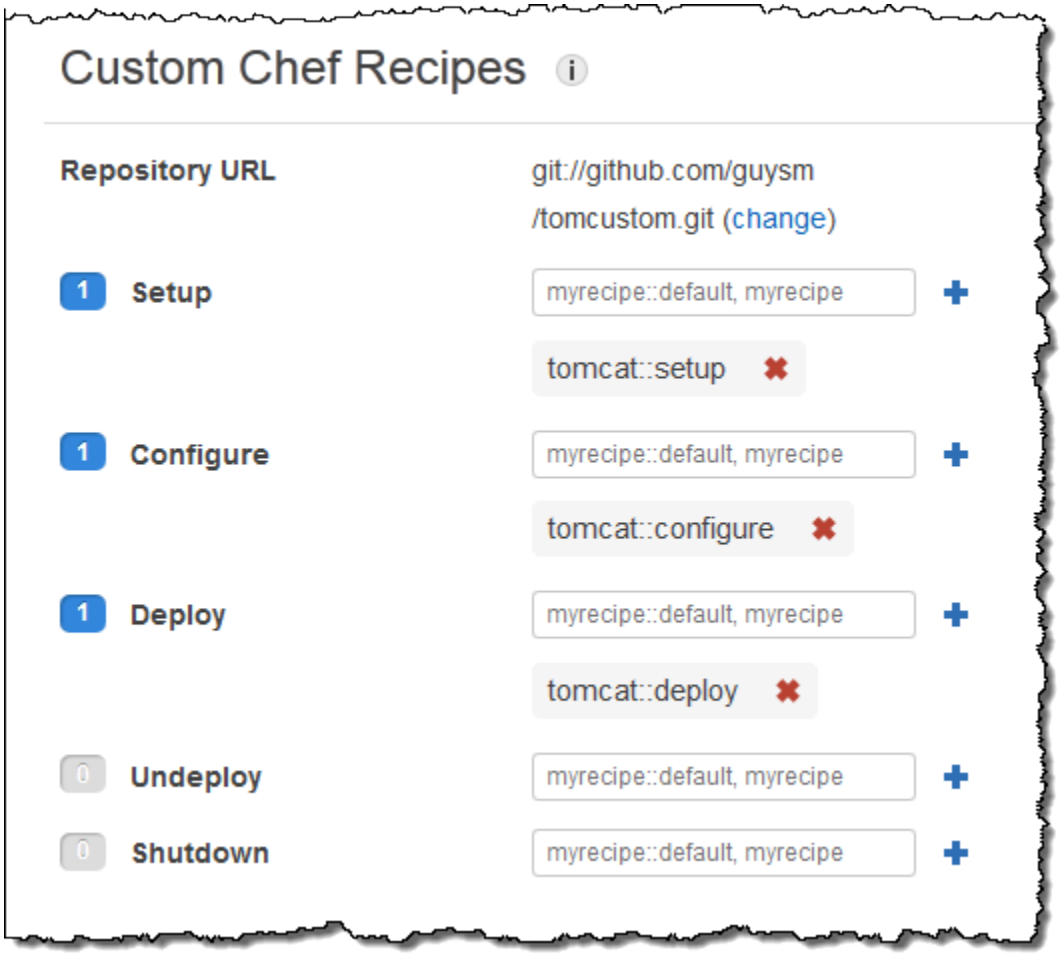
2. [Add a layer] をクリックします。[Layer type] では [MySQL] を選択します。次に、[Add Layer] をクリックします。
3. ナビゲーションペインで [Instances] をクリックし、[Add an instance] をクリックします。[Add Instance] をクリックして、デフォルトの値をそのまま使用します。インスタンスに関する行で、[start] をクリックします。
4. [Layers] (レイヤー) ページに戻り、[+ Layer] (+ レイヤー) をクリックしてレイヤーを追加します。[Layer type] では [Custom] をクリックします。このテンプレートでは、**`TomCustom`** と **`tomcustom`** を、それぞれレイヤーの名前と短縮名として使用します。



5. [Layers] (レイヤー) ページで、カスタムレイヤーに対して、[Recipes] (レシピ) をクリックし、[Edit] (編集) をクリックします。[Custom Chef Recipes] で、次のように、Tomcat クックブックのレシピをレイヤーのライフサイクルイベントに割り当てます。

   - [Setup] には **`tomcat::setup`** を入力し、[+] をクリックします。
   - [Configure] には **`tomcat::configure`** を入力し、[+] をクリックします。
   - [Deploy] には **`tomcat::deploy`** を入力し、[+] をクリックします。次に、[Save] をクリックします。

   .



6. ナビゲーションペインで [Apps] をクリックし、[Add an app] をクリックします。次のオプションを指定し、[Add App] をクリックします。

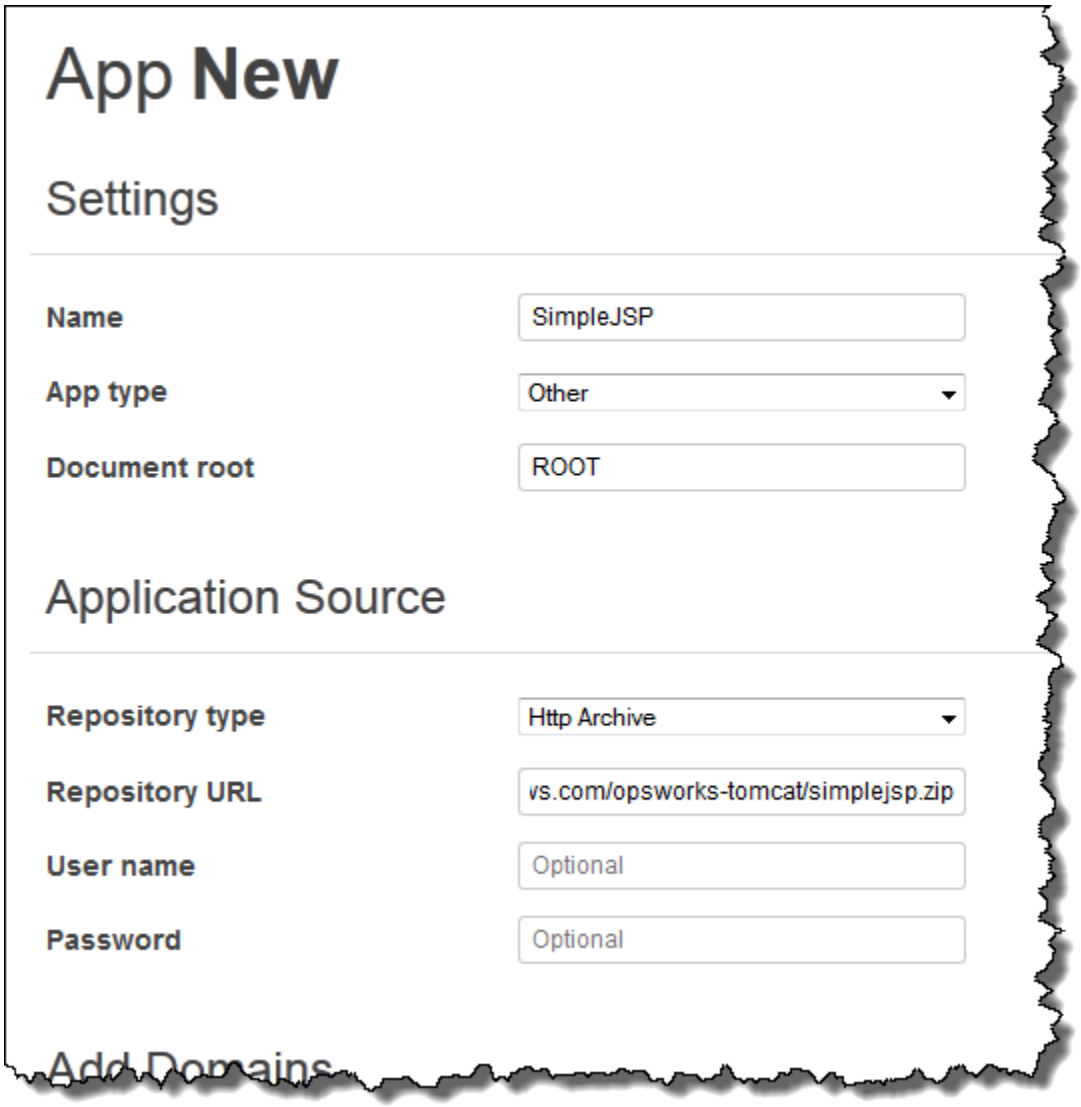
   - Name – アプリケーションの名前。この例では SimpleJSP を使用し、 スタックによって生成される短縮名は simplejsp OpsWorks になります。
   - App type (アプリケーションタイプ) - このオプションでは Other (その他) を設定します。

     OpsWorks スタックは、関連するサーバーインスタンスに標準アプリケーションタイプを自動的にデプロイします。[App type] でこれ以外を選択すると、 OpsWorks スタックは単純に Deploy レシピを実行し、このレシピでデプロイを処理することになります。
   - Document root (ドキュメントルート) - このオプションを **ROOT** に設定します。

     Document root (ドキュメントルート) の値は、コンテキスト名を指定します。
   - Repository type (リポジトリタイプ) - このオプションを [S3 Archive (S3 アーカイブ)] に設定します。

- Repository URL (リポジトリのURL) - このオプションは、先に作成したアプリケーションの Amazon S3 の URL に設定します。

その他のオプションについては、デフォルトの設定を使用します。



7. インスタンスページを使用して、TomCustom レイヤーにインスタンスを追加して起動します。OpsWorks スタックは Setup レシピの完了後に新しいインスタンスで Deploy レシピを自動的に実行するため、インスタンスを起動すると SimpleJSP もデプロイされます。
8. TomCustom インスタンスがオンラインになったら、[Instances] ページでそのインスタンス名をクリックして詳細を確認します。パブリック IP アドレスをコピーします。http://*publicIP*/tc/*appname.jsp* のように URL を作成します。たとえば、この URL は **http://50.218.191.172/tc/simplejsp.jsp** のようになります。

> **Note**
>
> リクエストを Tomcat に転送する Apache の URL は、デフォルトの `['tomcat']['apache_tomcat_bind_path']` 属性である `/tc/` に設定されます。SimpleJSP ドキュメントのルートは、`ROOT` に設定されます。これは、`/` に解決される特殊な値です。したがって URL は ".../tc/simplejsp.jsp" になります。

9. 前のステップの URL をブラウザに貼り付けます。次のように表示されます。

```
Databases found:
information_schema
simplejsp
test
```

> **Note**
>
> スタックに MySQL インスタンスがある場合、 OpsWorks Stacks はアプリごとに、アプリの短縮名で という名前のデータベースを自動的に作成します。

スタック設定およびデプロイメント属性

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックは、デプロイライフサイクルイベントに応答してデプロイコマンドなど、インスタンスでコマンドを実行すると、スタックの現在の設定を記述する属性のセットをインスタンスのノードオブジェクトに追加します。デプロイイベントと Execute Recipes スタックコマンドの場合、 OpsWorks スタックはデプロイ属性をインストールし、追加のデプロイ情報を提供します。ノードオブジェクトの詳細については、「属性の上書き」を参照してください。完全修飾ノード名な

どの、一般的に使用されるスタック設定とデプロイメント属性の一覧については、「スタック設定およびデプロイ属性: Linux」および「組み込みクックブックの属性」を参照してください。

> **Note**
>
> Linux スタックの場合、エージェントの CLI の get_json コマンドを使用して、JSON オブジェクトの形式でこれらの属性の完全なリストを取得できます。

以降のセクションでは、以下のような構成の単純なスタックの Configure イベントと Deploy イベントに関連する属性を示します。

- 2 つのインスタンスを持つ PHP アプリケーションサーバーレイヤー
- 1 つのインスタンスを持つ HAProxy レイヤー

この例は、PHP アプリケーションサーバーインスタンスの 1 つである [php-app1] のものです。属性は、わかりやすいように、JSON オブジェクトの形式で表示されます。オブジェクトの構造は属性の完全修飾名に対応付けされます。例えば、`node[:opsworks][:ruby_version]` 属性は JSON 形式では以下のように表示されます。

```
{
  "opsworks": {
    ...
    "ruby_version": "1.8.7",
    ...
  }
}
```

トピック

- 属性の設定
- デプロイ属性

属性の設定

以下の JSON オブジェクトで示しているのは Configure イベントの属性です。このイベントは、インスタンスがオンラインまたはオフラインになったときに、スタックのすべてのインスタンスで発生

します。属性には、組み込みのスタック設定属性と、イベントの前にスタック用に定義した任意のカスタム JSON 属性 (この例にはありません) が含まれます。長さの関係で編集されています。さまざまな属性の詳細な説明については、「スタック設定およびデプロイ属性: Linux」および「組み込みクックブックの属性」を参照してください。

```
{
  "opsworks": {
    "layers": {
      "php-app": {
        "id": "4a2a56c8-f909-4b39-81f8-556536d20648",
        "instances": {
          "php-app2": {
            "elastic_ip": null,
            "region": "us-west-2",
            "booted_at": "2013-02-26T20:41:10+00:00",
            "ip": "192.0.2.0",
            "aws_instance_id": "i-34037f06",
            "availability_zone": "us-west-2a",
            "instance_type": "c1.medium",
            "private_dns_name": "ip-10-252-0-203.us-west-2.compute.internal",
            "private_ip": "10.252.0.203",
            "created_at": "2013-02-26T20:39:39+00:00",
            "status": "online",
            "backends": 8,
            "public_dns_name": "ec2-192-0-2-0.us-west-2.compute.amazonaws.com"
          },
          "php-app1": {
            ...
          }
        },
        "name": "PHP Application Server"
      },
      "lb": {
        "id": "15c86142-d836-4191-860f-f4d310440f14",
        "instances": {
          "lb1": {
            ...
          }
        },
        "name": "Load Balancer"
      }
    },
```

```
    "agent_version": "104",
    "applications": [

    ],
    "stack": {
      "name": "MyStack"
    },
    "ruby_version": "1.8.7",
    "sent_at": 1361911623,
    "ruby_stack": "ruby_enterprise",
    "instance": {
      "layers": [
        "php-app"
      ],
      "region": "us-west-2",
      "ip": "192.0.2.0",
      "id": "45ef378d-b87c-42be-a1b9-b67c48edafd4",
      "aws_instance_id": "i-32037f00",
      "availability_zone": "us-west-2a",
      "private_dns_name": "ip-10-252-84-253.us-west-2.compute.internal",
      "instance_type": "c1.medium",
      "hostname": "php-app1",
      "private_ip": "10.252.84.253",
      "backends": 8,
      "architecture": "i386",
      "public_dns_name": "ec2-192-0-2-0.us-west-2.compute.amazonaws.com"
    },
    "activity": "configure",
    "rails_stack": {
      "name": null
    },
    "deployment": null,
    "valid_client_activities": [
      "reboot",
      "stop",
      "setup",
      "configure",
      "update_dependencies",
      "install_dependencies",
      "update_custom_cookbooks",
      "execute_recipes"
    ]
  },
  "opsworks_custom_cookbooks": {
```

```
    "recipes": [

    ],
    "enabled": false
  },
  "recipes": [
    "opsworks_custom_cookbooks::load",
    "opsworks_ganglia::configure-client",
    "ssh_users",
    "agent_version",
    "mod_php5_apache2::php",
    "php::configure",
    "opsworks_stack_state_sync",
    "opsworks_custom_cookbooks::execute",
    "test_suite",
    "opsworks_cleanup"
  ],
  "opsworks_rubygems": {
    "version": "1.8.24"
  },
  "ssh_users": {
  },
  "opsworks_bundler": {
    "manage_package": null,
    "version": "1.0.10"
  },
  "deploy": {
  }
}
```

情報の大部分は、名前空間とも呼ばれる opsworks 属性に含まれています。主な属性を次に示します。

- layers 属性 - それぞれの属性がスタックの 1 つのレイヤーの設定を説明している、属性のセットです。

  レイヤーは短縮名 (この例では php-app と lb) で識別されます。その他の の短縮名の詳細については、「OpsWorks スタックレイヤーリファレンス」を参照してください。
- instances 属性 - すべてのレイヤーにはインスタンスの短縮名が付けられた instances 要素があり、レイヤーのオンラインインスタンスごとに 1 つの属性が含まれています。

PHP アプリケーションサーバーレイヤーには 2 つのインスタンス (php-app1 と php-app2)があります。HAProxy レイヤーには 1 つのインスタンス (lb1) があります。

> **Note**
>
> instances 要素には、特定のスタック設定およびデプロイ属性が作成された時点でオンライン状態にあったインスタンスのみが含まれています。

- インスタンスの属性 - 各インスタンスの属性には、インスタンスのプライベート IP アドレスやプライベート DNS 名など、インスタンスを特徴づける一連の属性が含まれています。わかりやすいように、例には php-app2 属性の詳細のみを示します。他のインスタンスにも同様の情報が含まれています。
- applications - デプロイされるアプリケーションのリスト (この例では使用していません)。
- stack - スタック名 (この例では) MyStack
- instance - これらの属性がインストールされるインスタンス (この例では) php-app1 レシピは、この属性を使用して、インスタンスのパブリック IP アドレスなどの、レシピが実行されているインスタンスに関する情報を取得できます。
- activity - 属性を生成したアクティビティ (この例では Configure イベント)。
- rails_stack - Rails アプリケーションサーバーレイヤーが含まれるスタックの Rails スタックです。
- deployment - これらの属性がデプロイに関連付けられているかどうか。この例では、それらの属性が Configure イベントに関連付けられているため、null に設定されています。
- valid_client_activities - 有効なクライアントアクティビティのリストです。

opsworks 属性の後には、以下のような他の最上位属性がいくつか続きます。

- opsworks_custom_cookbooks - カスタムクックブックが有効化されているかどうかを示します。有効化されている場合、属性にはカスタムレシピのリストが含まれます。
- recipes - このアクティビティによって実行されたレシピです。
- opsworks_rubygems - インスタンスの RubyGems バージョンです。
- ssh_users - SSH ユーザーのリスト (この例にはありません)。
- opsworks_bundler - Bundler のバージョンとそれが有効化されているかどうかを示します。
- deploy - デプロイメントアクティビティに関する情報です (この例にはありません)。

デプロイ属性

Deploy イベントまたは Execute Recipes スタックコマンドの属性は、組み込みのスタック設定およびデプロイ属性と、カスタムのスタック設定またはデプロイ属性で構成されます (この例にはありません)。以下の JSON オブジェクトは、php-app1 の属性を示しています。それらの属性は、スタックの PHP インスタンスに SimplePHP アプリケーションをデプロイした Deploy イベントに関連付けられています。オブジェクトの多くは、前のセクションで説明した Configure イベントの属性に類似したスタック設定属性で構成されます。そのため、例では主にデプロイ固有の属性に焦点を当てています。さまざまな属性の詳細な説明については、「スタック設定およびデプロイ属性: Linux」および「組み込みクックブックの属性」を参照してください。

```
{
   ...
  "opsworks": {
    ...
    "activity": "deploy",
    "applications": [
      {
        "slug_name": "simplephp",
        "name": "SimplePHP",
        "application_type": "php"
      }
    ],
    "deployment": "5e6242d7-8111-40ee-bddb-00de064ab18f",
    ...
  },
  ...
{
  "ssh_users": {
  },
  "deploy": {
    "simplephpapp": {
      "application": "simplephpapp",
      "application_type": "php",
      "environment_variables": {
        "USER_ID": "168424",
        "USER_KEY": "somepassword"
      },
      "auto_bundle_on_deploy": true,
      "deploy_to": "/srv/www/simplephpapp",
      "deploying_user": "arn:aws:iam::123456789012:user/guysm",
```

```
      "document_root": null,
      "domains": [
        "simplephpapp"
      ],
      "migrate": false,
      "mounted_at": null,
      "rails_env": null,
      "restart_command": "echo 'restarting app'",
      "sleep_before_restart": 0,
      "ssl_support": false,
      "ssl_certificate": null,
      "ssl_certificate_key": null,
      "ssl_certificate_ca": null,
      "scm": {
        "scm_type": "git",
        "repository": "git://github.com/amazonwebservices/opsworks-demo-php-simple-
app.git",
        "revision": "version1",
        "ssh_key": null,
        "user": null,
        "password": null
      },
      "symlink_before_migrate": {
        "config/opsworks.php": "opsworks.php"
      },
      "symlinks": {
      },
      "database": {
      },
      "memcached": {
        "host": null,
        "port": 11211
      },
      "stack": {
        "needs_reload": false
      }
    }
  },
}
```

opsworks 属性は、前のセクションで説明した例のものとほぼ同等です。以降のセクションでは、デプロイに特に関連する属性を取り上げています。

- activity - これらの属性に関連付けられているイベント (この例では Deploy イベント)。
- applications - 各アプリケーションの属性 (アプリケーションの名前、スラグ名、タイプ) のリスト。

  スラグ名はアプリケーションの短縮名で、 OpsWorks スタックはアプリケーション名から生成します。SimplePHP のスラグ名は simplephp です。
- deployment - デプロイを一意に識別するデプロイ ID。

deploy 属性には、デプロイされるアプリケーションに関する情報が含まれています。例えば、組み込み Deploy レシピによって、deploy 属性のデータが使用されて、適切なディレクトリ内のファイルがインストールされ、データベース接続ファイルが作成されます。deploy 属性には、デプロイされる各アプリケーションの属性が含まれています。この属性の名前はアプリケーションの短縮名です。各アプリケーション属性には、以下の属性が含まれています。

- environment_variables - アプリケーションに対して定義したすべての環境変数が含まれています。詳細については、「環境可変」を参照してください。
- domains - デフォルトではアプリケーションの短縮名 (この例では simplephpapp)。カスタムドメインを割り当てている場合は、同様にそれらがここに表示されます。詳細については、「カスタムドメインの使用」を参照してください。
- application - アプリケーションの短縮名。
- scm - この要素には、リポジトリ (この例では Git リポジトリ) からアプリケーションのファイルをダウンロードするために必要な情報が含まれています。
- database - スタックにデータベースレイヤーが含まれている場合は、データベースの情報。
- document_root - ドキュメントのルートです。この例では null に設定されており、ルートがパブリックであることを示しています。
- ssl_certificate_ca、ssl_support、ssl_certificate_key - アプリケーションが SSL をサポートしているかどうかを示します。サポートしている場合、ssl_certificate_key および ssl_certificate_ca 属性は対応する証明書に設定されます。
- deploy_to - アプリケーションのルートディレクトリ。

クックブック 101

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

通常、本番稼働レベルの OpsWorks スタックスタックにはある程度のカスタマイズが必要です。これは多くの場合、1 つ以上のレシピ、属性ファイル、またはテンプレートファイルを含むカスタム Chef クックブックを実装することを意味します。このトピックは、 OpsWorks スタック用のクックブックの実装に関するチュートリアルの概要です。

OpsWorks スタックがクックブックを使用する方法の詳細については、「」を参照してくださいクックブックとレシピ。Chef レシピを実装してテストする方法の詳細については、「Chef を利用したテスト中心のインフラストラクチャ (第 2 版)」を参照してください。

チュートリアルの例は、2 つのセクションに分割されます。

- 「クックブックの基本」では、Chef に慣れていないユーザー向けの例となるウォークスルーがまとめられています。Chef に慣れたユーザーは、このセクションを省略できます。

  この例では、パッケージのインストールやディレクトリの作成など、一般的なタスクを実行するクックブックを実装するための基本方法を説明します。プロセスを簡素化するために、仮想マシンのローカルに置かれた例の多くは Vagrant と Test Kitchen という 2 つの便利なツールを使用して実行します。「クックブックの基本」を開始する前に、「Vagrant と Test Kitchen」を読んで、この 2 つのツールのインストール方法と使用方法を学習してください。Test Kitchen ではまだ Windows がサポートされていないため、例はすべて Linux に当てはまるものです。それらの例を Windows に当てはめる方法は注意に示しています。
- OpsWorks スタック用のクックブックの実装 では、Windows OpsWorks スタック用を含め、 スタック用のレシピを実装する方法について説明します。

  また、Berkshelfを使って外部のクックブックを管理する方法など、より高度な内容も含まれています。「クックブックの基本」で示している例などは、Chef の使用経験がないユーザー向けに作成されています。ただし OpsWorks 、 スタックの動作は Chef サーバーと少し異なるため、経験豊富な Chef ユーザーには、少なくともこのセクションを読むことをお勧めします。

Vagrant と Test Kitchen

Linux インスタンス用のレシピを使用する場合、Vagrant と Test Kitchen は、学習や初期の開発およびテストに非常に便利なツールです。ここでは、Vagrant と Test Kitchen について簡単に説明し、インストール方法を示します。さらに、このツールの基本的な使用方法を理解し習得するためのウォークスルーも含まれています。Vagrant では Windows がサポートされていますが、Test Kitchen ではサポートされていません。そのため、Linux の例のみをこれらのツール用に示しています。

Vagrant

Vagrant は、仮想マシンでコードを実行しテストするための一貫した環境を実現します。Vagrant ボックスと呼ばれるさまざまな環境をサポートしており、それぞれが構成されたオペレーティングシステムを表します。 OpsWorks スタックの場合、対象環境は Ubuntu、Amazon、または Red Hat Enterprise Linux (RHEL) ディストリビューションに基づいているため、例では主に という名前の Vagrant ボックスを使用しますopscode-ubuntu-12.04。

Vagrant は Linux、Windows、および Macintosh の各システムに対応しているため、好みのワークステーションを使用して、任意のサポート対象オペレーティングシステムにレシピを実装し、テストすることができます。この章の例は Ubuntu Linux システムで作成されていますが、その手順を Windows システムや Macintosh システム用に読み替えるのは簡単です。

基本的に、Vagrant は仮想化プロバイダー用のラッパーです。ほとんどの例では、VirtualBox プロバイダーを利用しています。VirtualBox は、Linux、Windows、および Macintosh の各システムで無料で利用することができます。システムに VirtualBox がまだインストールされていない場合、Vagrant のウォークスルーで VirtualBox のインストール手順を見ることができます。VirtualBox では Ubuntu ベースの環境を実行できますが、Amazon Linux を使用できるのは Amazon EC2 インスタンスのみであることに注意してください。ただし、VirtualBox 上の CentOS など、同様のオペレーティングシステムを実行できるため、初期段階の開発とテストに役立ちます。

その他のプロバイダーの詳細については、Vagrant のドキュメントを参照してください。特に、vagrant-aws プラグインプロバイダーを使用すると、Vagrant を Amazon EC2 インスタンスで使用できるようになります。このプロバイダーは、Amazon EC2 インスタンスでしか使用できない Amazon Linux でレシピをテストする際に特に役立ちます。vagrant-aws プロバイダーは無料ですが、AWS アカウントが必要です。さらに、使用する AWS リソースの費用を支払う必要があります。

次に、Vagrant の「使用開始ウォークスルー」を参照してください。このウォークスルーでは、ワークステーションに Vagrant をインストールする方法と、Vagrant の基本的な使用方法を見ることがで

きます。この章の例では Git リポジトリを使用しないため、必要に応じて、ウォークスルーの関連する部分を省略してもかまいません。

Test Kitchen

Test Kitchen は、Vagrant におけるクックブックの実行とテストのプロセスを簡略化します。実際のところ、Vagrant を直接使用する必要はほとんどありません。Test Kitchen は、以下のような最も一般的なタスクを実行します。

- Vagrant でのインスタンスの起動。
- インスタンスへのクックブックの転送。
- インスタンスでのクックブックのレシピの実行。
- インスタンスでのクックブックのレシピのテスト。
- SSH を使用した、インスタンスへのログイン。

Test Kitchen gem を直接インストールする代わりに、Chef DK をインストールすることをお勧めします。このパッケージには Chef 本体に加えて、Test Kitchen、Berkshelf、ChefSpec、さらにこれ以外の便利なツールが数種類含まれています。

次に、Test Kitchen の「使用開始ウォークスルー」を参照してください。ここでは、Test Kitchen を使用してレシピを実行し、テストするための基本的な方法が紹介されています。

> **Note**
>
> この章の例では、レシピを実行するための便利な方法として Test Kitchen を使用しています。例の実行に必要な情報は「手動確認」セクションにすべて記載されているため、このセクションを終了した後で「使用開始ウォークスルー」を中止してもかまいません。ただし、基本的に Test Kitchen は Bash 自動化テストシステム (BATS) などのテストフレームワークをサポートするテスト用プラットフォームです。Test Kitchen を使用してレシピをテストする方法を学ぶには、どこかの時点でウォークスルーの残りを実行します。

クックブックの基本

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソ

リューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

クックブックを使用して、さまざまなタスクを実現できます。以下のトピックは Chef を初めて使用する方を対象に、クックブックを使用した一般的なタスクの実行方法について説明します。Test Kitchen ではまだ Windows がサポートされていないため、例はすべて Linux に当てはまるものです。それらの例を Windows に当てはめる方法は注意に示しています。Chef を初めて使用する場合は、Windows で作業するとしても、これらの例を実行することをお勧めします。このトピックの例のほとんどは、注意に示しているように、若干の変更で Windows インスタンスに使用できます。例のすべては仮想マシンで実行されるため、Linux コンピュータは必要ありません。日常使用しているワークステーションに Vagrant と Test Kitchen をインストールするだけです。

> **Note**
>
> Windows インスタンスでこれらのレシピを実行する場合、最も簡単な方法は、Windows スタックを作成して、スタックのインスタンスのいずれかでレシピを実行することです。OpsWorks スタック Windows インスタンスでレシピを実行する方法の詳細については、「」を参照してくださいWindows インスタンスでのレシピの実行。

先に進む前に、Vagrant および Test Kitchen がインストールされていることを確認し、使用開始のウォークスルーを完了させてください。詳細については、「Vagrant と Test Kitchen」を参照してください。

トピック

- レシピの構造
- 例 1: パッケージのインストール
- 例 2: ユーザー管理
- 例 3: ディレクトリの作成
- 例 4: フロー制御の追加
- 例 5: 属性の使用
- 例 6: ファイルの作成
- 例 7: コマンドとスクリプトの実行

- 例 8: 管理サービス
- 例 9: Amazon EC2 インスタンスの使用
- 次のステップ

レシピの構造

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

クックブックは主に、インスタンス上のさまざまなタスクを実行できる一連のレシピです。レシピを実行する方法をわかりやすくするために、シンプルな例を見てみましょう。以下にあげるのは組み込み HAProxyレイヤー(HAProxy レイヤー) の設定レシピです。現時点では全体的な構造に注目して詳細にはあまり気を取られないでください。詳細は後述の例で説明します。

```
package 'haproxy' do
  action :install
end

if platform?('debian','ubuntu')
  template '/etc/default/haproxy' do
    source 'haproxy-default.erb'
    owner 'root'
    group 'root'
    mode 0644
  end
end

include_recipe 'haproxy::service'

service 'haproxy' do
  action [:enable, :start]
end
```

```
template '/etc/haproxy/haproxy.cfg' do
  source 'haproxy.cfg.erb'
  owner 'root'
  group 'root'
  mode 0644
  notifies :restart, "service[haproxy]"
end
```

> **Note**
>
> 作業レシピおよび関連ファイルのここに挙げた例やその他の例については、「OpsWorks スタック組み込みレシピ」を参照してください。

例では、以下のセクションで説明するレシピの主要な要素に焦点を当てています。

トピック

- リソース
- フロー制御
- 内包レシピ

リソース

レシピは、Chef リソースのセットの大部分を構成します。それぞれのレシピは、インストールするパッケージや開始するサービスなど、インスタンスの最終状態の特定の部分を指定します。例には 4 つのリソースがあります。

- `package` リソース。インストールされているパッケージを表します。この例では HAProxy サーバーです。
- `service` リソース。サービスを表します。この例では HAProxy サービスです。
- 2 つの `template` リソース。指定されたテンプレートから作成されるファイルを表します。この例では 2 つの HAProxy 設定ファイルです。

リソースはインスタンスの状態を指定する宣言方法を提供します。バックグラウンドで各リソースにはプロバイダーが関連付けられ、パッケージのインストール、ディレクトリの作成と設定、サービスの開始など必要なタスクを実行します。タスクの詳細が特定のオペレーティングシステムに依存する場合、リソースは複数のプロバイダーを持ってシステムに応じて使い分けます。たとえば、Red

Hat Linux システムでは package プロバイダーは yum を使用してパッケージをインストールします。Ubuntu Linux システムでは、package プロバイダーは apt-get を使用します。

以下の一般的な形式で Ruby コードブロックとしてリソースを実行します。

```
resource_type "resource_name" do
  attribute1 'value1'
  attribute2 'value2'
  ...
  action :action_name
  notifies : action 'resource'
end
```

要素は以下のとおりです。

リソースタイプ

(必須) この例では 3 個のリソースタイプを含んでいます。package、service、および template です。

リソース名

(必須) リソース名は特定のリソースを識別し、場合によっては属性のデフォルト値の 1 つとして使用されます。例では、package は haproxy という名前のパッケージリソースを示し、最初の template リソースは /etc/default/haproxy という名前の設定ファイルを表します。

属性

(オプション) 属性はリソース設定を指定するもので、リソースのタイプと設定方法によって異なります。

- 例にある template リソースは、作成されたファイルのソース、所有者、グループおよびモードを指定する一連の属性を明示的に定義します。
- 例にある package および service リソースは、どのような属性も明示的に定義しません。

  通常、リソース名は必須属性のデフォルト値で、それだけで十分な場合もあります。たとえば、リソース名は package リソースの package_name 属性のデフォルト値であり、唯一の必須属性です。

また、リソースプロバイダーを実行する時に指定される、ガード属性と呼ばれる特殊な属性がいくつかあります。例えば、only_if 属性は指定された条件が満たされる場合だけリソースプロバ

イダーにアクション実行を指示します。HAProxy レシピはガード属性を使用しませんが、以下の例のいくつかで使用されています。

アクションおよび通知

(オプション) アクションおよび通知は、プロバイダーがどのタスクを実行するかを指定します。

- `action` はインストールや作成など指定したアクションを実行するようにプロバイダーに指示します。

  各リソースには特定のリソースに依存する一連のアクションがあり、そのうちの 1 つはデフォルトのアクションです。例では、`package`リソースのアクションは `install` であり、プロバイダーにパッケージをインストールするように指示します。最初の `template` リソースには `action` 要素はないので、プロバイダーはデフォルトの `create` アクションを実行します。

- `notifies` はリソースの状態が変化した場合のみ、別のリソースのプロバイダーにアクションを実行するように指示します。

  `notifies` は通常、`template` や `file` のようなリソースとともに使用され、設定ファイルを変更した後にサービスを再起動するなどのタスクを実行します。リソースにはデフォルトの通知はありません。通知が必要な場合は、リソースに明示的な `notifies` 要素が必要です。HAProxy レシピでは、2 番目の `template` リソースが HAProxy `service` に対し、関連する設定ファイルが変更された場合に HAProxy サービスを再起動するように通知します。

リソースはオペレーティングシステムによって異なる場合があります。

- 一部のリソースは Linux または Windows システムにのみ使用できます。

  たとえば、package によって、Linux システムにパッケージがインストールされ、windows_package によって Windows システムにパッケージがインストールされます。

- 一部のリソースはいずれのオペレーティングシステムでも使用できますが、特定のシステムに固有の属性があります。

  たとえば、file リソースは、Linux または Windows システムのいずれかに使用できますが、アクセス権限を設定するための属性の個別のセットはありません。

標準的なリソースおよびそれぞれの使用可能な属性、アクション、通知についての説明は、「リソースおよびプロバイダーについて」を参照してください。

フロー制御

レシピは Ruby アプリケーションであるため、レシピにフロー制御を組み込むために Ruby の制御構造を使用できます。たとえば、レシピが異なるシステムで異なる動作をするように Ruby の条件付きロジックを使用できます。HAProxy のレシピには、レシピが Debian または Ubuntu システムで実行中の場合に限り、設定ファイルを作成するために `if` リソースを使用する `template` ブロックが含まれています。

もう 1 つの一般的なシナリオとしては、ループを使用して異なる属性設定でリソースを複数回実行します。たとえば、異なるディレクトリで `directory` リソースを複数回実行するループを使用して、一連のディレクトリを作成できます。

> **Note**
>
> Ruby になじみがない場合は、「Chef のための Ruby 基礎」を参照してください。ほとんどのレシピに必要な知識を説明しています。

内包レシピ

`include_recipe` はコードの中に他のレシピを含め、レシピをモジュール化して複数のレシピで同じコードを再利用できます。ホストのレシピを実行すると、Chef はそれぞれの `include_recipe` の要素を指定されたレシピのコードに置き換えてからホストのレシピを実行します。内包レシピは、標準の Chef 構文である `cookbook_name::recipe_name` を使用して識別されます。この `recipe_name` では `.rb` 拡張子が省略されます。例では HAProxy サービスを表す `haproxy::service` という 1 個のレシピが含まれています。

> **Note**
>
> Chef 11.10 以降で実行されているレシピに `include_recipe` を使用して他のクックブックからのレシピを含める場合、`depends` ステートメントを使用してクックブックの `metadata.rb` ファイル内の依存関係を宣言する必要があります。詳細については、「レシピの実装: Chef 11.10」を参照してください。

例 1: パッケージのインストール

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

パッケージのインストールはレシピのもっとも一般的な用途の 1 つで、パッケージによっては非常にシンプルにできます。たとえば、以下のレシピは Linux システムに Git をインストールします。

```
package 'git' do
  action :install
end
```

package リソースはパッケージのインストールを処理します。この例では、属性を指定する必要はありません。リソース名が package_name 属性のデフォルト値であり、これでパッケージを識別します。install アクションがプロバイダーにパッケージをインストールするように指示します。install を省略することでコードをよりシンプルにできます。これは package リソースのデフォルトアクションです。レシピを実行すると、Chef は適切なプロバイダーを使用してパッケージをインストールします。例として使用する Ubuntu システムでは、プロバイダーは apt-get を呼び出して Git をインストールします。

> **Note**
>
> Windows システムにソフトウェアをインストールするには、多少異なる手順が必要です。詳細については、「Windows ソフトウェアのインストール」を参照してください。

Test Kitchen を使用して Vagrant でこのレシピを実行するには、まずクックブックを設定し Test Kitchen を初期化して設定する必要があります。以下にあげるのは Linux システム用ですが、Windows および Macintosh システムでも基本的に手順は同様です。ターミナルウィンドウを開くことから始めます。この章の例ではすべてコマンドラインツールを使用します。

クックブックを準備するには

1. ホームディレクトリで、opsworks_cookbooks という名前のサブディレクトリを作成します。この章でのクックブックはすべてここに置きます。次にこのクックブック用のサブディレクトリ installpkg を作成し、そのディレクトリに移動します。
2. installpkg で、以下のコードを含む metadata.rb というファイルを作成します。

```
name "installpkg"
version "0.1.0"
```

この章の例ではわかりやすいようにクックブックの名前とバージョンのみを指定しますが、metadata.rbには幅広いクックブックのメタデータを含めることができます。詳細については、「クックブックのメタデータについて」を参照してください。

> **Note**
>
> 必ず Test Kitchen を初期化する前に metadata.rb を作成してください。デフォルトの設定ファイルを作成するためにこのデータを使用します。

3. installpkg で kitchen init を実行し、Test Kitchen を初期化してデフォルトの Vagrant ドライバをインストールします。
4. kitchen init コマンドは、installpkg という名前の .kitchen.yml に YAML 設定ファイルを作成します。お好きなテキストエディタで ファイルを開きます。.kitchen.yml には、レシピを実行するシステムを指定する platforms セクションが含まれています。Test Kitchen はインスタンスを作成して、各プラットフォームで指定されたレシピを実行します。

> **Note**
>
> デフォルトでは、Test Kitchen は一度に 1 つのプラットフォームでレシピを実行します。インスタンスを作成するいずれかのコマンドに -p 引数を追加した場合、Test Kitchen はそれぞれのプラットフォームで平行してレシピを実行します。

この例では単一のプラットフォームが有効です。したがって .kitchen.yml を編集して centos-6.4 プラットフォームを削除します。.kitchen.yml ファイルは以下のようになります。

```
---
driver:
  name: vagrant

provisioner:
  name: chef_solo

platforms:
  - name: ubuntu-12.04

suites:
  - name: default
    run_list:
      - recipe[installpkg::default]
    attributes:
```

Test Kitchen は `.kitchen.yml` の実行リストにあるレシピのみを実行します。レシピは [*cookbook_name*::*recipe_name*] 形式を使用して識別します。*recipe_name* は `.rb` 拡張子を省略します。初期状態で、`.kitchen.yml` 実行リストにはクックブックのデフォルトのレシピである `installpkg::default` が含まれています。これはこれから実行するレシピです。実行リストを変更する必要はありません。

5. `installpkg` という名前の `recipes` のサブディレクトリを作成します。

   クックブックにレシピが含まれる場合 (たいていは含まれますが)、`recipes` サブディレクトリに置かれている必要があります。

これで、クックブックにレシピを追加し、Test Kitchen を使用してインスタンスで実行できるようになりました。

レシピを実行するには

1. セクションの冒頭にある Git インストールコード例を含む `default.rb` という名前のファイルを作成し、サブディレクトリ `recipes` に保存します。
2. `installpkg` ディレクトリで `kitchen converge` を実行します。このコマンドはVagrantで新しいUbuntuインスタンスを起動し、クックブックをインスタンスにコピーし、`.kitchen.yml`の実行リストにあるレシピを実行するためにChefの実行を開始します。

3. レシピが成功したことを確認するために、`kitchen login` を実行してインスタンスへの SSH 接続を開きます。次に `git --version` を実行して、Git が正しくインストールされたことを確認します。ワークステーションに戻るには、`exit` を実行します。
4. 完了したら、`kitchen destroy` を実行してインスタンスをシャットダウンします。以下の例では、別のクックブックを使用します。

この例は手始めには適していますが、非常にシンプルです。インストールがより複雑なパッケージもあります。以下の一部またはすべてを実行しなければならない場合もあります。

- ユーザーを作成して設定します。
- データやログなどのために 1 つ以上のディレクトリを作成します。
- 1 つ以上の設定ファイルをインストールします。
- さまざまなオペレーティングシステムに対して異なるパッケージ名や属性値を指定します。
- サービスを開始し、必要に応じて再起動します。

以下の例でこれらの問題を処理する方法を説明するとともに、役に立つ操作をいくつかご紹介します。

例 2: ユーザー管理

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post または AWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

シンプルなタスクとして他にインスタンスでのユーザー管理があります。以下のレシピは Linux インスタンスに新しいユーザーを追加します。

```
user "myuser" do
  home "/home/newuser"
  shell "/bin/bash"
end
```

user を使用して、Linux と Windows の両方のシステムでユーザーを管理しますが、一部の属性は一方のシステムにのみ適用されます。例では myuser という名前のユーザーを作成し、ホームディレクトリとシェルを指定します。指定されたアクションはないので、リソースはデフォルトの create アクションを使用します。user に属性を追加して、パスワードやグループ ID などのさまざまな設定を指定できます。ユーザー設定の変更やユーザーの削除などの関連するユーザー管理タスクにも、user を使用できます。詳細については、「user」を参照してください。

レシピを実行するには

1. opsworks_cookbooks 内に newuser という名前のディレクトリを作成し、そこに移動します。
2. 以下のコードを含む metadata.rb ファイルを作成し、それを newuser に保存します。

```
name "newuser"
version "0.1.0"
```

3. 「例 1: パッケージのインストール」の説明に従って Test Kitchen を初期化して設定し、recipes ディレクトリ内に newuser ディレクトリを追加します。
4. 例のレシピの default.rb をクックブックの recipes ディレクトリに追加します。
5. kitchen converge を実行してレシピを実行します。
6. kitchen login を使用してインスタンスにログインし、cat /etc/passwd を実行して新しいユーザーが存在することを確認します。myuser ユーザーはファイルの一番下に置く必要があります。

例 3: ディレクトリの作成

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

インスタンスにパッケージをインストールするとき、多くの場合は設定ファイルを作成して適切なディレクトリに配置する必要があります。しかし、ディレクトリがまだない場合があります。また、

データやログファイル用のディレクトリを作成する必要がある場合もあります。例えば、ほとんどの例で使用する Ubuntu システムを最初に起動しますが、/srv ディレクトリにはサブディレクトリがありません。アプリケーションサーバーをインストールする際に、/srv/www/ ディレクトリや場合によってはデータファイルやログなどのためにサブディレクトリが必要になるかもしれません。以下のレシピはインスタンスで /srv/www/ を作成します。

```
directory "/srv/www/" do
  mode 0755
  owner 'root'
  group 'root'
  action :create
end
```

directory resource を使用して、Linux と Windows の両方のシステムでディレクトリを作成して設定しますが、一部の属性の使用方法はシステムによって異なります。リソース名はリソースの path 属性のデフォルト値であるため、例では /srv/www/ を作成し、mode、owner、および group プロパティを指定します。

レシピを実行するには

1. opsworks_cookbooks内に createdir という名前のディレクトリを作成し、そのディレクトリに移動します。
2. 「例 1: パッケージのインストール」の説明に従って Test Kitchen を初期化、設定し、recipes 内に createdir ディレクトリを追加します。
3. レシピコードの default.rb ファイルをクックブックの recipes サブディレクトリに追加します。
4. kitchen converge を実行してレシピを実行します。
5. kitchen login を実行して/srv に移動し、www サブディレクトリがあることを確認します。
6. exit を実行して、インスタンスを実行したままワークステーションに戻ります。

> **Note**
>
> インスタンスのホームディレクトリに関連するディレクトリを作成するには、ホームディレクトリを示すために #{ENV['HOME']} を使用します。たとえば、以下は ~/shared ディレクトリを作成します。

```
directory "#{ENV['HOME']}/shared" do
  ...
end
```

/srv/www/shared のようにさらに多層のディレクトリを作成したい時があるかもしれません。前述のレシピを以下のように変更できます。

```
directory "/srv/www/shared" do
  mode 0755
  owner 'root'
  group 'root'
  action :create
end
```

レシピを実行するには

1. default.rb のコードを前述のレシピで置き換えます。
2. kitchen converge ディレクトリから createdir を実行します。
3. ディレクトリが実際に作成されたことを確認するには、kitchen login を実行して /srv/www に移動し、そこに shared サブディレクトリが含まれていることを確認します。
4. kitchen destroy を実行してインスタンスをシャットダウンします。

kitchen converge コマンドがはるかに高速に実行されたことがわかります。これはインスタンスがすでに実行中であり、インスタンスの起動や Chef のインストールなどが必要ないためです。Test Kitchen は更新されたクックブックをインスタンスにコピーし、Chef の実行を開始するだけでいいのです。

ここで再び kitchen converge を実行して、新しいインスタンスでレシピを実行します。以下のような結果になるはずです。

```
Chef Client failed. 0 resources updated in 1.908125788 seconds
[2014-06-20T20:54:26+00:00] ERROR: directory[/srv/www/shared] (createdir::default line
 1) had an error: Chef::Exceptions::EnclosingDirectoryDoesNotExist: Parent directory /
srv/www does not exist, cannot create /srv/www/shared
```

```
[2014-06-20T20:54:26+00:00] FATAL: Chef::Exceptions::ChildConvergeError: Chef run
 process exited unsuccessfully (exit code 1)
>>>>>> Converge failed on instance <default-ubuntu-1204>.
>>>>>> Please see .kitchen/logs/default-ubuntu-1204.log for more details
>>>>>> ------Exception-------
>>>>>> Class: Kitchen::ActionFailed
>>>>>> Message: SSH exited (1) for command: [sudo -E chef-solo --config /tmp/kitchen/
solo.rb --json-attributes /tmp/kitchen/dna.json  --log_level info]
>>>>>> ----------------------
```

何が起きたのか。問題は、デフォルトでは directory リソースは一度に 1 個のディレクトリしか作成できないことです。ディレクトリのチェーンは作成できません。前のレシピがうまくいった理由は、インスタンスで最初に実行したレシピですでに /srv/www が作成されていたため、/srv/www/shared の作成ではサブディレクトリが 1 個つだけ作成されためです。

> **Note**
>
> kitchen converge を実行する場合は、レシピを実行するインスタンスが新規なのか既存のものなのかを確認してください。結果が異なる場合があります。

サブディレクトリのチェーンを作成するには、recursive 属性を directory に追加して、それを true に設定します。以下のレシピは、新しいインスタンスに /srv/www/shared を直接作成します。

```
directory "/srv/www/shared" do
  mode 0755
  owner 'root'
  group 'root'
  recursive true
  action :create
end
```

例 4: フロー制御の追加

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソ

リューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

単なる Chef リソースの連なりであるレシピもあります。この場合、レシピを実行すると単純にリソースプロバイダーを 1 つずつ順番に実行します。ただし、より洗練された実行パスを持つ方が役に立つ場合が多くあります。以下に一般的なシナリオを 2 つ示します。

- 同じリソースを異なる属性設定で複数回実行するレシピがほしい。
- さまざまなオペレーティングシステムで異なる属性設定を使用したい。

レシピに Ruby の制御構造を組み込むことで、このようなシナリオに対処できます。このセクションでは、「例 3: ディレクトリの作成」のレシピを変更して両方のシナリオに対処する方法を説明します。

トピック

- イテレーション
- 条件付きロジック

イテレーション

「例 3: ディレクトリの作成」では、directoryリソースを使用してディレクトリまたはディレクトリチェーンを作成する方法を説明しました。ただし別々の 2 つのディレクトリ、/srv/www/config と /srv/www/shared を作成したい場合があるかもしれません。各ディレクトリに別々のディレクトリリソースを実装することもできますが、非常に多数のディレクトリを作成する場合はこの方法は面倒です。以下のレシピは、このタスクを処理するよりシンプルな方法を示します。

```
[ "/srv/www/config", "/srv/www/shared" ].each do |path|
  directory path do
    mode 0755
    owner 'root'
    group 'root'
    recursive true
    action :create
  end
end
```

各サブディレクトリに対して別のディレクトリリソースを使用する代わりに、レシピではサブディレクトリのパスを含む文字列コレクションを使用します。Rubyの each メソッドはコレクションの各要素を最初のものから始めてそれぞれ 1 回ずつ実行します。要素の値はリソース内で path 変数で表されます。この場合はディレクトリパスを表します。この例を簡単に応用して、サブディレクトリをいくつでも作成できます。

レシピを実行するには

1. createdir ディレクトリにとどまります。以下のいくつかの例で、ここのクックブックを使用します。
2. kitchen destroy をまだ実行していない場合は実行して、新しいインスタンスで始められるようにします。
3. default.rb のコードを例で置き換えて、kitchen converge を実行します。
4. インスタンスにログインします。/srv の下に新しく作成されたディレクトリがあります。

ハッシュテーブルを使用して各イテレーションに 2 個の値を指定できます。以下のレシピは /srv/www/config および /srv/www/shared を、別モードでそれぞれ作成します。

```
{ "/srv/www/config" => 0644, "/srv/www/shared" => 0755 }.each do |path, mode_value|
  directory path do
    mode mode_value
    owner 'root'
    group 'root'
    recursive true
    action :create
  end
end
```

レシピを実行するには

1. kitchen destroy をまだ実行していない場合は実行して、新しいインスタンスで始められるようにします。
2. default.rb のコードを例で置き換えて、kitchen converge を実行します。
3. インスタンスにログインします。/srv の下に指定したモードで新しく作成されたディレクトリがあります。

> **Note**
>
> OpsWorks スタックレシピは通常、このアプローチを使用してスタック設定とデプロイメント JSON から値を抽出します。これは基本的に大きなハッシュテーブルであり、リソースに挿入します。例については、Deploy レシピを参照してください。

条件付きロジック

複数の実行ブランチを作成するために Ruby の条件付きロジックを使用することもできます。以下のレシピでは、`if-elsif-else` ロジックを使用して 1 つ前の例を拡張しています。`/srv/www/shared` という名前のサブディレクトリを作成しますが、Debian および Ubuntu システムに対してのみです。その他のすべてのシステムの場合は、Test Kitchen の出力に表示するエラーメッセージを記録します。

```
if platform?("debian", "ubuntu")
  directory "/srv/www/shared" do
    mode 0755
    owner 'root'
    group 'root'
    recursive true
    action :create
  end
else
  log "Unsupported system"
end
```

レシピの例を実行するには

1. インスタンスが実行中の場合は、`kitchen destroy` を実行してシャットダウンします。
2. `default.rb` のコードを例のコードで置き換えます。
3. `.kitchen.yml` を編集してプラットフォームの一覧に CentOS 6.4 システムを追加します。ファイルの `platforms` セクションはこのようになります。

```
...
platforms:
  - name: ubuntu-12.04
  - name: centos-6.4
```

```
...
```

4. `kitchen converge` を実行すると、インスタンスを作成し `.kitchen.yml` のプラットフォームごとのレシピを順次実行します。

> **Note**
>
> 1 個のインスタンスのみをコンバージする場合は、インスタンス名をパラメータとして追加します。例えば、Ubuntu プラットフォームのレシピのみをコンバージするには、`kitchen converge default-ubuntu-1204` を実行します。プラットフォーム名を忘れた場合は、`kitchen list` を実行します。

Test Kitchen の出力の CentOS 部分にログメッセージがあります。以下のようなものになります。

```
...
Converging 1 resources
Recipe: createdir::default
* log[Unsupported system] action write[2014-06-23T19:10:30+00:00] INFO: Processing
 log[Unsupported system] action write (createdir::default line 12)
[2014-06-23T19:10:30+00:00] INFO: Unsupported system

[2014-06-23T19:10:30+00:00] INFO: Chef Run complete in 0.004972162 seconds
```

これでインスタンスにログインし、ディレクトリが作成されている (または作成されていない) ことを確認できます。ただし、単純に `kitchen login` を実行することはできません。たとえば `kitchen login default-ubuntu-1204` のようにプラットフォーム名を追加してインスタンスを指定する必要があります。

> **Note**
>
> Test Kitchen コマンドがインスタンス名をとる場合、完全な名前を入力する必要はありません。Test Kitchen は Ruby の正規表現としてインスタンス名を処理しますので、ユニークな一致ができる文字数があれば十分です。例えば `kitchen converge ub` を実行して Ubuntu のインスタンスのみをコンバージすることもできますし、`kitchen login 64` を実行して CentOS のインスタンスにログインすることもできます。

ここまでで、レシピがどのように実行中のプラットフォームを見分けているか疑問に思うことでしょう。Chef は実行のたびに Ohai というツールを実行してプラットフォームを含むシステムデータを収集し、ノードオブジェクトという構造の中で一連の属性として示します。Chef `platform?` メソッドはかっこ内のシステムを Ohai のプラットフォームの値と比較して、一致すれば true を返します。

node['*attribute_name*'] を使用してコード内で直接ノード属性の値を参照できます。プラットフォームの値は、例えば、`node['platform']` で表されます。たとえば、前述の例を以下のように記述することもできます。

```
if node[:platform] == 'debian' or node[:platform] == 'ubuntu'
  directory "/srv/www/shared" do
    mode 0755
    owner 'root'
    group 'root'
    recursive true
    action :create
  end
else
  log "Unsupported system"
end
```

レシピに条件付きロジックを含める一般的な理由は、異なる Linux ファミリーが時としてパッケージやディレクトリに異なる名前を使用していることに対応するためです。たとえば Apache のパッケージ名は CentOS システムでは `httpd` であり、Ubuntu システムでは `apache2` です。

異なるシステム用に異なる文字列が必要な場合、Chef `value_for_platform` メソッドは、`if-elsif-else`よりも簡単なソリューションです。以下のレシピは CentOS システムでは `/srv/www/shared` ディレクトリ、Ubuntu システムでは `/srv/www/data` ディレクトリ、その他の場合は `/srv/www/config` を作成します。

```
data_dir = value_for_platform(
  "centos" => { "default" => "/srv/www/shared" },
  "ubuntu" => { "default" => "/srv/www/data" },
  "default" => "/srv/www/config"
)
directory data_dir do
  mode 0755
  owner 'root'
```

```
  group 'root'
  recursive true
  action :create
end
```

value_for_platform は data_dir に適切なパスを割り当て、directory リソースはその値を使用してディレクトリを作成します。

レシピの例を実行するには

1. インスタンスが実行中の場合は、kitchen destroy を実行してシャットダウンします。
2. default.rb のコードを例のコードで置き換えます。
3. kitchen converge を実行し、その後各インスタンスにログインして適切なディレクトリがあることを確認します。

例 5: 属性の使用

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

前述のセクションのレシピでは、プラットフォーム以外のすべてにハードコーディングされた値を使用しました。この方法は、たとえば複数のレシピで同じ値を使用したい場合は不便なことがあります。クックブックに属性ファイルを含めることにより、値をレシピとは別に定義できます。

属性ファイルは、1 つ以上の属性に値を割り当てる Ruby アプリケーションです。クックブックの attributes フォルダにある必要があります。Chef はノードオブジェクトに属性を組み込みます。属性を参照することでどのレシピでも属性値を使用できます。このトピックでは、「イテレーション」のレシピを変更して属性を使用する方法を説明します。参考までに、元のレシピを以下に示します。

```
[ "/srv/www/config", "/srv/www/shared" ].each do |path|
  directory path do
```

```
    mode 0755
    owner 'root'
    group 'root'
    recursive true
    action :create
  end
end
```

以下はサブディレクトリ名、モード、所有者およびグループの値の属性を定義します。

```
default['createdir']['shared_dir'] = 'shared'
default['createdir']['config_dir'] = 'config'
default['createdir']['mode'] = 0755
default['createdir']['owner'] = 'root'
default['createdir']['group'] = 'root'
```

次の点に注意してください。

- 各定義は属性タイプから始まります。

  属性が複数回定義されている場合 (おそらく異なる属性ファイルで)、属性タイプは属性の優先順位を指定し、ノードオブジェクトに組み込まれるかが決定されます。詳細については、「属性の優先順位」を参照してください。この例の定義はすべて、この目的のための通常のタイプである `default` 属性タイプです。
- 属性はネストされた名前を持ちます。

  ノードオブジェクトは基本的に任意に深くネストされたハッシュテーブルであるため、属性名もネストされたものになることがよくあります。この属性ファイルは、クックブック名でネストされた名前を使用する場合の標準的な手法に従い、`createdir` が最初の要素になります。

属性の最初の要素として createdir を使用する理由は、Chef を実行する時に Chef がクックブックからノードオブジェクトに属性を取り入れるためです。 OpsWorks スタックでは、ノードオブジェクトには、定義した属性に加えて、組み込みクックブックの多数の属性が含まれます。クックブック名を属性名に含めることで、特に属性が`port` や `user` のような名前である場合、別のクックブックからの属性名と競合する危険性を大幅に減少します。その属性値を上書きする場合を除き、属性に "`[:apache2][:user]`" のような名前をつけないでください。詳細については、「カスタムクックブック属性の使用」を参照してください。

以下の例で、ハードコードされた値の代わりに属性を使用した元のレシピを示します。

```
[ "/srv/www/#{node['createdir']['shared_dir']}", "/srv/www/#{node['createdir']
['config_dir']}" ].each do |path|
  directory path do
    mode node['createdir']['mode']
    owner node['createdir']['owner']
    group node['createdir']['group']
    recursive true
    action :create
  end
end
```

> **Note**
>
> 属性値を文字列に組み込みたい場合は、#{} でパッケージ化します。前述の例では、#{node['createdir']['shared_dir']} は "/srv/www/" に "shared" を追加しています。

レシピを実行するには

1. kitchen destroy を実行して新しいインスタンスで始められるようにします。
2. recipes/default.rb のコードを前述のレシピ例で置き換えます。
3. createdir に attributes という名前のサブディレクトリを作成して、default.rb という名前の属性定義を含むファイルを追加します。
4. .kitchen.yml を編集してプラットフォームの一覧から CentOS を削除します。
5. kitchen converge を実行し、その後インスタンスにログインして /srv/www/shared と /srv/www/config がそこにあることを確認します。

> **Note**
>
> OpsWorks スタックでは、値を属性として定義すると、さらに利点があります。カスタム JSON を使用して、スタックごと、またはデプロイごとにこれらの値を上書きできます。以下を含むさまざまな目的に便利です。
>
> - クックブックを変更せずに、設定やユーザー名などのレシピの動作をカスタマイズできます。

たとえば、異なるスタックに同じクックブックを使用しながら、カスタム JSON を使用して特定のスタックのキー設定を指定できます。これにより、クックブックを変更したりそれぞれのスタックに異なるクックブックを使用する手間を省くことができます。

- クックブックリポジトリにデータベースのパスワードなどの機密と考えられる情報を置く必要はありません。

  代わりに属性を使用してデフォルト値を定義し、カスタム JSON を使用してそこに実際の値を上書きすることができます。

カスタム JSON を使用して属性を上書きする方法の詳細については、「属性の上書き」を参照してください。

属性ファイルは Ruby アプリケーションであるため、もっともシンプルなものは `default.rb` という名前になります。これにより、たとえば条件付きロジックを使用してオペレーティングシステムに基づいて属性値を指定できます。「条件付きロジック」で、レシピで異なる Linux ファミリーに対して異なるサブディレクトリ名を指定しました。属性ファイルを使用すると、属性ファイルに条件付きロジックを配置できます。

以下の属性ファイルは、`value_for_platform` を使用してオペレーティングシステムによって異なる `['shared_dir']` 属性値を指定します。その他の条件では、Ruby の `if-elsif-else` ロジックまたは `case` ステートメントを使用できます。

```
data_dir = value_for_platform(
  "centos" => { "default" => "shared" },
  "ubuntu" => { "default" => "data" },
  "default" => "user_data"
)
default['createdir']['shared_dir'] = data_dir
default['createdir']['config_dir'] = "config"
default['createdir']['mode'] = 0755
default['createdir']['owner'] = 'root'
default['createdir']['group'] = 'root'
```

レシピを実行するには

1. `kitchen destroy` を実行して新しいインスタンスで開始できるようにします。

2. `attributes/default.rb` のコードを前述の例で置き換えます。
3. `.kitchen.yml` を編集して、「条件付きロジック」の説明に従い CentOS プラットフォームをプラットフォームセクションに追加します。
4. `kitchen converge` を実行し、その後インスタンスにログインしてディレクトリがそこにあることを確認します。

完了したら、`kitchen destroy` を実行してインスタンスを終了します。以下の例では、新しいクックブックを使用します。

例 6: ファイルの作成

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

ディレクトリを作成したら、多くの場合設定ファイルやデータファイルなどを配置する必要があります。このトピックでは、インスタンスにファイルをインストールする 2 とおりの方法を説明します。

トピック

- クックブックからのファイルのインストール
- テンプレートからのファイルの作成

クックブックからのファイルのインストール

インスタンスにファイルをインストールする最も簡単な方法は、`cookbook_file` リソースを使用してクックブックから、Linux と Windows の両方のインスタンスの指定した場所にファイルをコピーすることです。この例では、「例 3: ディレクトリの作成」のレシピを拡張して、ディレクトリの作成後に `/srv/www/shared` にファイルを追加します。参考までに、元のレシピを以下に示します。

```
directory "/srv/www/shared" do
  mode 0755
  owner 'root'
  group 'root'
  recursive true
  action :create
end
```

クックブックをセットアップするには

1. opsworks_cookbooks ディレクトリ内に createfile という名前のディレクトリを作成し、そのディレクトリに移動します。
2. createfile に、次のコンテンツを含む metadata.rb ファイルを追加します。

   ```
   name "createfile"
   version "0.1.0"
   ```

3. 「例 1: パッケージのインストール」の説明に従って Test Kitchen を初期化し設定して、platforms リストから CentOS を削除します。
4. createfile に recipes サブディレクトリを追加します。

インストールするファイルには以下の JSON データが含まれます。

```
{
  "my_name" : "myname",
  "your_name" : "yourname",
  "a_number" : 42,
  "a_boolean" : true
}
```

データファイルをセットアップするには

1. files サブディレクトリを createfile に、default サブディレクトリを files に追加します。cookbook_file と一緒にインストールするファイルは files のサブディレクトリに置く必要があります。例えば、files/default などです。

> **Note**
>
> 異なるシステムに異なるファイルを指定する場合は、システム固有のファイルを files/ubuntu のようにシステム用に名前をつけたサブフォルダに置きます。cookbook_file リソースは、適切なシステム固有のファイルが存在する場合はそれをコピーし、ない場合は default ファイルを使用します。詳細については、「cookbook_file」を参照してください。

2. 前の例から JSON で example_data.json という名前のファイルを作成し、files/default に追加します。

以下のレシピは example_data.json を指定した場所にコピーします。

```
directory "/srv/www/shared" do
  mode 0755
  owner 'root'
  group 'root'
  recursive true
  action :create
end

cookbook_file "/srv/www/shared/example_data.json" do
  source "example_data.json"
  mode 0644
  action :create_if_missing
end
```

ディレクトリリソースが /srv/www/shared を作成した後、cookbook_file リソースは example_data.json をそのディレクトリにコピーし、またファイルのユーザー、グループ、モードを設定します。

> **Note**
>
> cookbook_file リソースでは create_if_missing という新しいアクションが導入されています。create アクションも使用できますが、これは既存のファイルを上書きします。何も上書きしたくない場合は、create_if_missing を使用すると、example_data.json が存在しない場合のみこれをインストールします。

レシピを実行するには

1. kitchen destroy を実行して新しいインスタンスで開始できるようにします。
2. 前述のレシピを含む default.rb ファイルを作成し、recipes に保存します。
3. kitchen converge を実行し、その後インスタンスにログインして/srv/www/shared に example_data.json があることを確認します。

テンプレートからのファイルの作成

cookbook_file リソースはさまざまな目的に役立ちますが、クックブックにあるファイルしかインストールしません。template リソースを使えば、テンプレートから動的にファイルを作成することで、より柔軟にファイルを Windows または Linux インスタンスにインストールできます。その後で実行時にファイルの内容の詳細を検討し、必要に応じて変更できます。たとえば、インスタンスを開始する際に特定の設定をするために必要な設定ファイルがあり、あとでスタックにインスタンスを追加する際にその設定を変更する必要があるかもしれません。

この例では createfile クックブックを変更し、template リソースを使用して example_data.json をほんの少し変更したバージョンをインストールします。

インストールされたファイルはこのようになります。

```
{
  "my_name" : "myname",
  "your_name" : "yourname",
  "a_number" : 42,
  "a_boolean" : true,
  "a_string" : "some string",
  "platform" : "ubuntu"
}
```

通常、テンプレートリソースは属性ファイルとともに使用します。例では以下の値を定義するために 1 つ使用しています。

```
default['createfile']['my_name'] = 'myname'
default['createfile']['your_name'] = 'yourname'
default['createfile']['install_file'] = true
```

クックブックをセットアップするには

1. createfile クックブックの files ディレクトリおよびそのコンテンツを削除します。
2. attributes に createfile サブディレクトリを追加し、default.rb ファイルを前述の属性定義を含む attributes に追加します。

テンプレートは .erb ファイルであり、基本的に内容の一部がプレースホルダーで表される最終ファイルのコピーです。template リソースがファイルを作成する場合、テンプレートの内容を指定されたファイルにコピーし、プレースホルダーを割り当てられた値で上書きします。example_data.json のテンプレートを次に示します。

```
{
  "my_name" : "<%= node['createfile']['my_name'] %>",
  "your_name" : "<%= node['createfile']['your_name'] %>",
  "a_number" : 42,
  "a_boolean" : <%= @a_boolean_var %>,
  "a_string" : "<%= @a_string_var %>",
  "platform" : "<%= node['platform'] %>"
}
```

<%=...%> の値はプレースホルダーです。

- <%=node[...]%> はノード属性値を示します。

  この例では、"your_name" の値がクックブックの属性ファイルからの属性値の 1 つを表すプレースホルダーです。
- <%=@...%> はすでに説明したようにテンプレートリソースで定義されている変数の値を示します。

テンプレートファイルを作成するには

1. templates サブディレクトリを createfile クックブックに、defaultサブディレクトリを templates に追加します。

   > **Note**
   >
   > templates ディレクトリは files ディレクトリと似たような機能を果たします。システム固有のテンプレートを ubuntu などシステム名をつけたサブディレクトリに配置で

きます。template リソースは適切なシステム固有テンプレートがある場合はそれを使用し、ない場合は default テンプレートを使用します。

2. example_data.json.erb ディレクトリに templates/default という名前のファイルを作成します。テンプレート名は任意ですが、通常は、拡張子を含むファイル名に .erb を付けて作成します。

以下のレシピでは、template リソースを使用して /srv/www/shared/example_data.json を作成します。

```
directory "/srv/www/shared" do
  mode 0755
  owner 'root'
  group 'root'
  recursive true
  action :create
end

template "/srv/www/shared/example_data.json" do
  source "example_data.json.erb"
  mode 0644
  variables(
    :a_boolean_var => true,
    :a_string_var => "some string"
  )
  only_if {node['createfile']['install_file']}
end
```

template リソースはテンプレートから example_data.json を作成して /srv/www/shared にインストールします。

- テンプレートの名前 /srv/www/shared/example_data.json は、インストールされているファイルのパスと名前を指定します。
- source 属性は、ファイルの作成に使用したテンプレートを指定します。
- mode 属性は、インストールされているファイルのモードを指定します。
- リソースは、2 つの変数 a_boolean_var と a_string_var を定義します。

リソースが example_data.json を作成する際、テンプレートのプレースホルダーをリソースの対応する値で上書きします。

- only_if ガード属性は ['createfile']['install_file'] が true に設定されている時のみファイルを作成するようにリソースに指示します。

レシピを実行するには

1. kitchen destroy を実行して新しいインスタンスで開始できるようにします。
2. recipes/default.rb のコードを前述の例で置き換えます。
3. kitchen converge を実行し、その後インスタンスにログインしてファイルが /srv/www/shared に存在し内容が正しいことを確認します。

完了したら、kitchen destroy を実行してインスタンスをシャットダウンします。以下のセクションでは新しいクックブックを使用します。

例 7: コマンドとスクリプトの実行

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Chef リソースはインスタンスのさまざまタスクを処理できますが、シェルコマンドまたはスクリプトを使用した方がいい場合もあります。たとえば、特定のタスクを実行するスクリプトをすでに使用していて、新しいコードを実装するよりもそれを使い続ける方が簡単な場合もあります。このセクションでは、インスタンスでコマンドまたはスクリプトを実行する方法を説明します。

トピック

- コマンドの実行
- スクリプトの実行

コマンドの実行

script リソースは、1 つ以上のコマンドを実行します。また、csh、bash、Perl、Python、Ruby のコマンドインタープリターがサポートされているため、適切なインタープリターがインストールされていれば、Linux または Windows のいずれかのシステムで使用できます。このトピックでは、Linux インスタンスで単純な Bash コマンドを実行する方法について説明します。Chef では、powershell_script と batch もサポートされており、Windows でのスクリプトの実行に使用できます。詳細については、「Windows PowerShell スクリプトを実行する」を参照してください。

開始するには、以下の手順を実行します。

1. opsworks_cookbooks ディレクトリ内に script という名前のディレクトリを作成し、そのディレクトリに移動します。
2. script に、次のコンテンツを含む metadata.rb ファイルを追加します。

```
name "script"
version "0.1.0"
```

3. 「例 1: パッケージのインストール」の説明に従って Test Kitchen を初期化し設定して、platforms リストから CentOS を削除します。
4. script 内に、recipesという名前のディレクトリを作成します。

script リソース自体を使用してコマンドを実行することもできますが、Chef はまた、インタープリタ名をつけた一連のリソースのコマンドインタープリタ固有バージョンをサポートします。以下のレシピは bash リソースを使用して、シンプルな Bash スクリプトを実行します。

```
bash "install_something" do
  user "root"
  cwd "/tmp"
  code <<-EOH
    touch somefile
  EOH
  not_if do
    File.exists?("/tmp/somefile")
  end
end
```

bash リソースは以下のように設定されます。

- デフォルトのアクション run を使用して code ブロックでコマンドを実行します。

  この例では 1 個のコマンド touch somefile がありますが、codeブロックには複数のコマンドを含めることができます。
- user 属性は、コマンドを実行するユーザーを指定します。
- cwd 属性は、作業ディレクトリを指定します。

  この例では、touchは /tmp ディレクトリにファイルを作成します。
- not_if ガード属性はファイルがすでに存在する場合はリソースにアクションを取らないよう指示します。

レシピを実行するには

1. 前述の例のコードを含む default.rb ファイルを作成し、recipes に保存します。
2. kitchen converge を実行し、その後インスタンスにログインして /tmp にファイルがあることを確認します。

スクリプトの実行

script リソースは、特に 1 つか 2 つのコマンドのみを実行する必要がある場合に便利ですが、ファイルにスクリプトを保存してそのファイルを実行する方がいい場合も多くあります。execute リソースによって、スクリプトファイルなど指定した実行可能ファイルが Linux または Windows で実行されます。このトピックでは、前述の例から script クックブックを変更し、execute を使用して単純なシェルスクリプトを実行します。簡単に例をより複雑なスクリプトや別のタイプの実行ファイルに拡張できます。

スクリプトファイルを設定するには

1. files サブディレクトリを script に、default サブディレクトリを files に追加します。
2. 以下を含む touchfile という名前のファイルを作成し、そのファイルを files/default へ追加します。この例では、一般的な Bash インタプリタラインが使用されています。必要に応じてシェル環境に対応するインタプリタを代入してください。

```
#!/usr/bin/env bash
touch somefile
```

スクリプトファイルには、任意の数のコマンドを含めることができます。わかりやすいように、このスクリプトの例には 1 つの touch コマンドのみを使用しています。

以下のレシピはスクリプトを実行します。

```
cookbook_file "/tmp/touchfile" do
  source "touchfile"
  mode 0755
end

execute "touchfile" do
  user "root"
  cwd "/tmp"
  command "./touchfile"
end
```

cookbook_file リソースは /tmp にスクリプトファイルをコピーし、ファイルを実行可能にするモードを設定します。execute リソースはその後以下のようにファイルを実行します。

- user 属性はコマンドのユーザーを指定します (この例では root)。
- cwd 属性は作業ディレクトリ (この例では /tmp) を指定します。
- command 属性は作業ディレクトリにある実行すべきスクリプト (この例では touchfile) を指定します。

レシピを実行するには

1. recipes/default.rb のコードを前述の例で置き換えます。
2. kitchen converge を実行し、その後インスタンスにログインして、/tmp にスクリプトファイルが含まれており、モードが 0755 に設定されていて、かつ somefile があることを確認します。

完了したら、kitchen destroy を実行してインスタンスをシャットダウンします。以下のセクションでは新しいクックブックを使用します。

例 8: 管理サービス

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

通常、アプリケーションサーバーなどのパッケージには、開始、停止、再起動などを行う必要がある関連サービスがあります。たとえばパッケージをインストールしたりインスタンスの起動が完了した後は Tomcat サービスを開始する必要があり、また設定ファイルを変更するたびにこのサービスを再起動する必要があります。このトピックでは、例として Tomcat アプリケーションサーバーを使用し、Linux インスタンスでのサービスの管理方法の基礎を説明します。サービスリソースは、詳細に多少の違いはあるものの、多くの Windows インスタンスで同じように動作します。詳細については、「`service`」を参照してください。

> **Note**
>
> 例では、Tomcat のインストールを必要最小限にして `service` リソースの使用方法の基礎を提示します。より機能的な Tomcat サーバーのレシピを実行する方法の例は、「カスタム Tomcat サーバーレイヤーの作成」を参照してください。

トピック

- サービスの定義と起動
- 通知を使用したサービスの開始または再起動

サービスの定義と起動

このセクションでは、サービスの定義と起動方法を説明します。

開始するには、以下の手順を実行します。

1. `opsworks_cookbooks` ディレクトリ内に `tomcat` という名前のディレクトリを作成し、そのディレクトリに移動します。

2. tomcat に、次のコンテンツを含む metadata.rb ファイルを追加します。

```
name "tomcat"
version "0.1.0"
```

3. 「例 1: パッケージのインストール」の説明に従って Test Kitchen を初期化し設定して、platforms リストから CentOS を削除します。
4. tomcat に recipes サブディレクトリを追加します。

service リソースを使ってサービスを管理します。以下のデフォルトのレシピは Tomcat をインストールしサービスを起動します。

```
execute "install_updates" do
  command "apt-get update"
end

package "tomcat7" do
    action :install
end

include_recipe 'tomcat::service'

service 'tomcat' do
  action :start
end
```

このレシピでは、以下のような処理を実行します。

- execute リソースは apt-get update を実行して現在のシステム更新をインストールします。

  この例で使用されている Ubuntu のインスタンスでは、Tomcat をインストールする前に更新をインストールする必要があります。その他のシステムでは異なる要件がある場合があります。
- package リソースは Tomcat 7 をインストールします。
- 中に含まれる tomcat::service レシピはサービスを定義します。説明は後述します。
- service リソースは Tomcat サービスを開始します。

  このリソースでサービスの停止や再起動などの他のコマンドを発行することもできます。

以下の例で tomcat::service レシピを説明します。

```
service 'tomcat' do
  service_name "tomcat7"
  supports :restart => true, :reload => false, :status => true
  action :nothing
end
```

レシピは、Tomcat サービスの定義を以下のように作成します。

- リソース名 tomcat は他のレシピがサービスを参照するために使用されます。

  例えば、default.rb は tomcat を参照してサービスを開始します。
- service_name リソースは サービス名を指定します。

  インスタンスでサービスをリストする場合は、Tomcat サービスは tomcat7 という名前になります。
- supports は Chef がサービスのrestart、reload、および status コマンドを管理する方法を指定します。
  - true は、Chef が init またはその他のサービスプロバイダーを使用してコマンドを実行できることを示します。
  - false は、Chef がその他の方法でコマンドの実行を試みる必要があることを示します。

action が :nothing に設定され、リソースにアクションを取らないよう指示していることに注意してください。サービスリソースはもちろん start や restart などのアクションをサポートしています。ただし、このクックブックではサービス定義を使用する標準的な手法をとっており、どこにあるサービスであってもアクションをとらずに開始または再起動を行います。サービスを開始または再起動するレシピはまずそれを定義します。したがって最もシンプルな方法は、サービス定義を別のレシピに配置して必要に応じてそれを他のレシピにも含めることです。

> **Note**
>
> わかりやすいように、この例のデフォルトのレシピでは service リソースを使用してサービス定義を実行した後にサービスを開始します。本番の実装では通常、後述のように notifies を使用してサービスを開始または再開します。

レシピを実行するには

1. デフォルトのレシピ例を含む default.rb ファイルを作成して、recipes に保存します。
2. サービス定義の例を含む service.rb ファイルを作成し、recipes に保存します。
3. kitchen converge を実行し、その後インスタンスにログインします。以下のコマンドを実行し、サービスが実行中であることを確認します。

```
sudo service tomcat7 status
```

> **Note**
>
> service.rb を default.rb とは別に実行した場合、.kitchen.yml を編集して実行リストに tomcat::service を追加する必要がある場合があります。ただしレシピを含む場合は、コードはレシピが実行される前に親レシピに組み込まれます。したがって service.rb は基本的に default.rb の一部であり、あらためて実行リストに追加する必要ではありません。

通知を使用したサービスの開始または再起動

本番の実装では、サービスの開始や再起動に通常は service は使用しません。代わりに、notifies を任意のリソースに追加します。例えば、設定ファイルを変更した後サービスを再起動する場合、notifies を関連する template リソースに含めます。notifies を使用すると、service リソースを使用した明示的なサービスの再起動に対して以下の利点があります。

- notifies 要素は、関連する設定ファイルが変更された場合にのみサービスを再起動するので、必要のない時にサービスが再起動されるリスクを避けられます。
- Chef は、実行されるサービスに含まれる notifies の数に関係なく、各実行の最後に必要に応じて 1 度だけサービスを再起動します。

  たとえば、Chef の実行に含まれる複数のテンプレートリソースがそれぞれ異なる設定ファイルを変更し、ファイルが変更された場合にはサービスの再起動を要求する可能性があります。しかし、サービスの再起動は Chef の実行の最後に 1 度だけにしたいものでしょう。そうしないと、先の再起動からまだ完全に機能が立ち上がらないうちにまたサービスを再起動することになり、エラーが発生する可能性があります。

この例では tomcat::default を変更して、template を使用してサービスを再起動する notifies リソースを含めます。実際の例では、テンプレートリソースを使用して Tomcat 設定ファイルの 1 つをカスタマイズしたバージョンを作成しますが、それは非常に長く複雑なものになります。わかりやすいように、例では「テンプレートからのファイルの作成」のテンプレートリソースを使用します。Tomcat とは関係ありませんが、notifies の使用方法をわかりやすく説明できます。テンプレートを使用して Tomcat の設定ファイルを作成する方法の例は、「Setup レシピ」を参照してください。

クックブックをセットアップするには

1. templates サブディレクトリを tomcat に、default サブディレクトリを templates に追加します。
2. example_data.json.erb クックブックから createfile テンプレートを templates/default ディレクトリへコピーします。
3. attributes に tomcat サブディレクトリを追加します。
4. default.rb クックブックから createfile 属性ファイルを attributes ディレクトリへコピーします。

以下のレシピは notifies を使用して Tomcat サービスを再起動します。

```
execute "install_updates" do
  command "apt-get update"
end

package "tomcat7" do
    action :install
end

include_recipe 'tomcat::service'

service 'tomcat' do
  action :enable
end

directory "/srv/www/shared" do
  mode 0755
  owner 'root'
  group 'root'
  recursive true
```

```
  action :create
end

template "/srv/www/shared/example_data.json" do
  source "example_data.json.erb"
  mode 0644
  variables(
    :a_boolean_var => true,
    :a_string_var => "some string"
  )
  only_if {node['createfile']['install_file']}
  notifies :restart, resources(:service => 'tomcat')
end
```

この例は、「テンプレートからのファイルの作成」のレシピを前述のセクションのレシピにマージします。2 つの大幅な変更があります。

- service リソースは依然として同じ場所にありますが、別の用途で使用されます。

  :enable アクションで、起動時に Tomcat サービスが有効になります。
- これでテンプレートリソースに notifies が含まれ、example_data.json が変更された場合には Tomcat サービスを再起動します。

  これで、Tomcat が最初にインストールされた時および設定が変更されるたびに再起動した時に、確実にサービスが開始されます。

レシピを実行するには

1. kitchen destroy を実行して新しいインスタンスで始められるようにします。
2. default.rb のコードを前述の例で置き換えます。
3. kitchen converge を実行し、その後インスタンスにログインしてサービスが実行中であることを確認します。

> **Note**
>
> サービスを再起動したいがレシピに template をサポートする notifies などのリソースが含まれていない場合、代わりにダミーの execute リソースを使用できます。例

```
execute 'trigger tomcat service restart' do
  command 'bin/true'
  notifies :restart, resources(:service => 'tomcat')
end
```

execute リソースには、command を実行する手段としてのみリソースを使用している場合でも、notifies 属性が必要です。この例では、/bin/true を実行することでこの要件を回避しています。これは単純に成功コードを返すだけのシェルコマンドです。

例 9: Amazon EC2 インスタンスの使用

Important

この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

ここまでは、インスタンスを VirtualBox でローカルに実行していました。これは迅速かつ簡単ですが、最終的には Amazon EC2 インスタンスでレシピをテストすることになります。特に Amazon Linux でのレシピの実行する場合は Amazon EC2 でのみ可能です。予備的な実装やテストには CentOS などのような類似システムを使用できますが、Amazon Linux のレシピを完全にテストするには、Amazon EC2 インスタンスを使用するしかありません。

このトピックでは Amazon EC2 インスタンスでレシピを実行する方法を説明します。前述のセクションとほとんど同じ方法で Test Kitchen や Vagrant を使用しますが、2 つ違いがあります。

- ドライバは Vagrant ではなく `kitchen-ec2` です。
- クックブックの `.kitchen.yml` ファイルには、Amazon EC2 インスタンスの起動に必要な情報で設定する必要があります。

> **Note**
>
> 代替手段として、`vagrant-aws` Vagrant プラグインを使用する方法があります。詳細については、「Vagrant AWS プロバイダ」を参照してください。

Amazon EC2 インスタンスを作成するには、AWS 認証情報が必要です。AWS アカウントを持っていない場合は、以下のように取得できます。

にサインアップする AWS アカウント

がない場合は AWS アカウント、次の手順を実行して作成します。

にサインアップするには AWS アカウント

1. https://portal.aws.amazon.com/billing/signup を開きます。
2. オンラインの手順に従います。

   サインアップ手順の一環として、電話またはテキストメッセージを受け取り、電話キーパッドで検証コードを入力します。

   にサインアップすると AWS アカウント、 AWS アカウントのルートユーザー が作成されます。ルートユーザーには、アカウントのすべての AWS のサービス とリソースへのアクセス権があります。セキュリティベストプラクティスとして、ユーザーに管理アクセス権を割り当て、ルートユーザーアクセスが必要なタスクの実行にはルートユーザーのみを使用するようにしてください。

AWS サインアッププロセスが完了すると、 から確認メールが送信されます。https://aws.amazon.com/ の [マイアカウント] をクリックして、いつでもアカウントの現在のアクティビティを表示し、アカウントを管理することができます。

管理アクセスを持つユーザーを作成する

にサインアップしたら AWS アカウント、日常的なタスクにルートユーザーを使用しないように AWS アカウントのルートユーザー、 を保護し AWS IAM アイデンティティセンター、 を有効にして管理ユーザーを作成します。

を保護する AWS アカウントのルートユーザー

1. ルートユーザーを選択し、 AWS アカウント E メールアドレスを入力して、アカウント所有者AWS マネジメントコンソールとして にサインインします。次のページでパスワードを入力します。

   ルートユーザーを使用してサインインする方法については、「AWS サインイン ユーザーガイド」の「ルートユーザーとしてサインインする」を参照してください。
2. ルートユーザーの多要素認証 (MFA) を有効にします。

   手順については、IAM ユーザーガイドの AWS アカウント「ルートユーザー (コンソール) の仮想 MFA デバイスを有効にする」を参照してください。

管理アクセスを持つユーザーを作成する

1. IAM アイデンティティセンターを有効にします。

   手順については、「AWS IAM アイデンティティセンター ユーザーガイド」の「AWS IAM アイデンティティセンターの有効化」を参照してください。
2. IAM アイデンティティセンターで、ユーザーに管理アクセスを付与します。

   を ID ソース IAM アイデンティティセンターディレクトリ として使用する方法のチュートリアルについては、「 AWS IAM アイデンティティセンター ユーザーガイド」の「デフォルトを使用してユーザーアクセスを設定する IAM アイデンティティセンターディレクトリ」を参照してください。

管理アクセス権を持つユーザーとしてサインインする

- IAM アイデンティティセンターのユーザーとしてサインインするには、IAM アイデンティティセンターのユーザーの作成時に E メールアドレスに送信されたサインイン URL を使用します。

  IAM Identity Center ユーザーを使用してサインインする方法については、AWS サインイン「 ユーザーガイド」の AWS 「 アクセスポータルにサインインする」を参照してください。

追加のユーザーにアクセス権を割り当てる

1. IAM アイデンティティセンターで、最小特権のアクセス許可を適用するというベストプラクティスに従ったアクセス許可セットを作成します。

手順については、「AWS IAM アイデンティティセンター ユーザーガイド」の「アクセス許可セットを作成する」を参照してください。

2. グループにユーザーを割り当て、そのグループにシングルサインオンアクセス権を割り当てます。

   手順については、「AWS IAM アイデンティティセンター ユーザーガイド」の「グループを追加する」を参照してください。

Amazon EC2 にアクセスするためのアクセス許可を持つ IAM ユーザーを作成し、ユーザーのアクセスキーとシークレットキーをワークステーション上の安全な場所に保存する必要があります。Test Kitchen はインスタンスを作成するためにこれらの認証情報を使用します。Test Kitchen に認証情報を提供するには、ワークステーションの以下の環境変数にキーを割り当てることをお勧めします。

> **Warning**
>
> IAM ユーザーは長期認証情報を保有するため、セキュリティ上のリスクが生じます。このリスクを軽減するために、これらのユーザーにはタスクの実行に必要な権限のみを付与し、不要になったユーザーは削除することをお勧めします。

- AWS_ACCESS_KEY – ユーザーのアクセスキー。 のようになります AKIAIOSFODNN7EXAMPLE。
- AWS_SECRET_KEY – ユーザーのシークレットキー。 のようになりますwJalrXUtnFEMI/K7MDENG/bPxRfiCYEXAMPLEKEY。

この手法によって、たとえば認証情報を含むプロジェクトを公開リポジトリにアップロードしてしまうなど不慮の事故でアカウントが侵害される機会が減ります。

クックブックをセットアップするには

1. `kitchen-ec2` ドライバを使用するには、`ruby-dev`パッケージがシステムにインストールされている必要があります。以下の例のコマンドで `aptitude` を使用して Ubuntu システムでパッケージをインストールする方法を説明します。

   ```
   sudo aptitude install ruby1.9.1-dev
   ```

2. `kitchen-ec2` ドライバは gem です。以下のようにインストールします。

```
gem install kitchen-ec2
```

ワークステーションによっては、このコマンドで sudo が必要になる場合があります。また、RVM などの Ruby 環境マネージャを使用することもできます。この手順は、kitchen-ec2 ドライバーのバージョン 0.8.0 でテスト済みですが、より新しいバージョンがあります。特定のバージョンをインストールするには、gem install kitchen-ec2 -v <*version number*> を実行します。

3. Test Kitchen がインスタンスへの接続に使用できる Amazon EC2 SSH キーペアを指定する必要があります。Amazon EC2 キーペアがない場合、作成方法の詳細については、「Amazon EC2 キーペア」(Amazon EC2 キーペア) を参照してください。キーペアがインスタンスと同じ AWS リージョンに属している必要があることに注意してください。この例では、米国西部 (北カリフォルニア) を使用します。

   キーペアを選択したら、opsworks_cookbooks のサブディレクトリ ec2_keys を作成し、そのサブディレクトリにキーペアのプライベートキー (.pem) ファイルをコピーします。ec2_keys にプライベートキーを配置するのはコードをほんの少し簡素化する便宜上のものです。システムのどこに配置してもかまいません。

4. createdir-ec2 という名前の opsworks_cookbooks のサブディレクトリを作成し、そのディレクトリに移動します。

5. createdir-ec2 に、次のコンテンツを含む metadata.rb ファイルを追加します。

   ```
   name "createdir-ec2"
   version "0.1.0"
   ```

6. 「例 1: パッケージのインストール」に説明したように Test Kitchen を初期化します。以下のセクションでは .kitchen.yml を設定する方法を説明します。Amazon EC2 インスタンスでは際立って複雑です。

7. createdir-ec2 に recipes サブディレクトリを追加します。

Amazon EC2 用の .kitchen.yml の設定

kitchen-ec2 ドライバが適切に設定された Amazon EC2 インスタンスを起動するために必要な情報を使用して .kitchen.yml を設定します。以下に示しているのは、米国西部 (北カリフォルニア) リージョンにある Amazon Linux インスタンス用の .kitchen.yml ファイルの例です。

```
driver:
  name: ec2
  aws_ssh_key_id: US-East1
  region: us-west-1
  availability_zone: us-west-1c
  require_chef_omnibus: true
  security_group_ids: sg........
  subnet_id: subnet-.........
  associate_public_ip: true
  interface: dns

provisioner:
  name: chef_solo

platforms:
  -name: amazon
  driver:
    image_id: ami-xxxxxxxx
  transport:
    username: ec2-user
    ssh_key: ../ec2_keys/US-East1.pem

suites:
  - name: default
    run_list:
      - recipe[createdir-ec2::default]
    attributes:
```

provisioner および suites セクションにデフォルト設定を使用できますが、デフォルトの driver と platforms の設定は変更する必要があります。この例では、最小限の設定リストを使用して残りはデフォルト値を受け入れます。kitchen-ec2 設定の詳細なリストについては、「Kitchen::Ec2: Amazon EC2 用の Test Kitchen ドライバ」を参照してください。

例では以下の driver 属性を設定します。前に説明したように、ユーザーのアクセスキーおよびシークレットキーは標準的な環境変数に割り当てられていることを前提とします。ドライバはこれらのキーをデフォルトで使用します。それ以外の場合、適切なキー値に設定した aws_access_key_id および aws_secret_access_key を driver 属性に追加して、明示的にキーを指定する必要があります。

名前

(必須) この属性は ec2 に設定する必要があります。

aws_ssh_key_id

(必須) Amazon EC2 SSH キーペア名です。この例では US-East1 と名付けられます。

transport.ssh_key

(必須) aws_ssh_key_id で指定したキーのプライベートキー (.pem) ファイルです。US-East1.pem 属性は作業ディレクトリ (この例では ../opsworks/ec2_keys) を指定します。

リージョン

(必須) インスタンスの AWS リージョンです。この例では、us-west-1 で表される米国西部 (北カリフォルニア) を使用しています。

availability_zone

(オプション) インスタンスの利用可能ゾーンです。この設定を省略した場合、指定されたリージョン、米国西部 (北カリフォルニア)のデフォルトのアベイラビリティーゾーンの us-west-1b が Test Kitchen で使用されます。ただし、デフォルトのゾーンがお使いのアカウントでは使用できない場合があります。その場合は、明示的に利用可能ゾーンを指定する必要があります。ちょうど、この例を用意するために使用したアカウントは us-west-1b をサポートしていないため、例では明示的に us-west-1c を指定しています。

require_chef_omnibus

true に設定すると、この設定は、オムニバス形式のインストーラが chef-client をすべてのプラットフォームインスタンスにインストールするときに必ず使用されるようにします。

security_group_ids

(オプション) インスタンスに適用されるセキュリティグループ ID のリストです。この設定は、default セキュリティグループをそのインスタンスグループに適用します。セキュリティグループの進入ルールがインバウンド SSH 接続を許可していることを確認してください。許可されていないと Test Kitchen がインスタンスと通信できません。default セキュリティグループを使用する場合、適宜編集する必要がある可能性があります。詳細については、「Amazon EC2 セキュリティグループ」を参照してください。

subnet_id

インスタンスのターゲットサブネットの ID (該当する場合)。

associate_public_ip

インターネットからインスタンスにアクセスできるようにする場合は、Amazon EC2 でインスタンスにパブリック IP アドレスを関連付けます。

インターフェイスからリクエスト

インスタンスにアクセスするために使用したホスト名設定タイプ。有効な値は dns、public、private、または private_dns です。この属性の値を指定しない場合、kitchen-ec2 は次の順序でホスト名設定を指定します。この属性を省略すると、設定タイプが設定されていません。

1. [DNS 名]
2. パブリック IP アドレス
3. プライベート IP アドレス
4. プライベート DNS 名

> **Important**
>
> アクセスキーとシークレットキーにアカウントの認証情報を使用するよりも、ユーザーを作成してその認証情報を Test Kitchen に提供することをお勧めします。詳細については、「AWS アクセスキーを管理するためのベストプラクティス」を参照してください。GitHub または Bitbucket の公開リポジトリにアップロードするなど、パブリックにアクセス可能な場所に .kitchen.yml を置かないように注意してください。ご自分の認証情報が公開され、アカウントのセキュリティが侵害される恐れがあります。

kitchen-ec2 ドライバは以下のプラットフォームをデフォルトでサポートします。

- Ubuntu-10.04
- Ubuntu-12.04
- Ubuntu-12.10
- Ubuntu-13.04
- Ubuntu-13.10
- Ubuntu-14.04
- CentOS 6.4
- Debian-7.1.0
- windows-2012r2
- windows-2008r2

これらのプラットフォームを 1 つ以上使用する場合は、適切なプラットフォーム名を platforms に追加します。kitchen-ec2 ドライバは自動的に適切な AMI を選択し、SSH ユーザー名を生成します。他のプラットフォーム (この例では Amazon Linux を使用) を使用できますが、以下の platforms 属性を明確に指定する必要があります。

名前

プラットフォーム名。この例では Amazon Linux を使用しているので、name は amazon に設定します。

ドライバー

driver 属性です。以下のものが含まれます。

- image_id - プラットフォームの AMI です。指定したリージョンに属している必要があります。この例では、米国西部 (北カリフォルニア) リージョンの Amazon Linux AMIである ami-ed8e9284 を使用します。
- transport.username - SSH ユーザー名です。Test Kitchen がインスタンスとの通信に使用します。

  Amazon Linux には ec2-user を使用します。その他の AMI では別のユーザー名になる場合があります。

.kitchen.yml のコードを例で置き換え、aws_access_key_id などのアカウント固有の属性に適切な値を割り当てます。

レシピの実行

この例では、「イテレーション」のレシピを使用します。

レシピを実行するには

1. 以下のコードとともにdefault.rb という名前のファイルを作成してクックブックの recipes フォルダに保存します。

```
directory "/srv/www/shared" do
  mode 0755
  owner 'root'
  group 'root'
  recursive true
```

```
  action :create
end
```

2. `kitchen converge` を実行してレシピを実行します。このコマンドは、Amazon EC2 インスタンスを起動および初期化に時間がかかるため、これまでの例よりも時間がかかることに注意してください。
3. [Amazon EC2 console] (Amazon EC2 コンソール) に移動し、米国西部 (北カリフォルニア) リージョンを選択して、ナビゲーションペインで [Instances] (インスタンス) をクリックします。リストに新しく作成されたインスタンスが表示されます。
4. VirtualBox で実行中のインスタンスに対して行ったのと同じように `kitchen login` を実行してインスタンスにログインします。`/srv` の下に新しく作成したディレクトリがあるはずです。お好きな SSH クライアントを使用してインスタンスに接続することもできます。

次のステップ

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

この章では Chef クックブックを実行する方法の基本を見てきましたが、まだ他にもたくさんあります。

- 例では、よく使用されるリソースの使用方法を説明してきましたが、まだ他にもたくさんあります。

  説明したリソースや使用した例は、使用できる属性やアクションのほんの一部でしかありません。詳細については、「リソースおよびプロバイダについて」を参照してください。
- 例ではクックブックの主要な要素、`recipes`、`attributes`、`files`、および `templates` を使用したのみです。

  クックブックには、`libraries`、`definitions`、および `specs` などのさまざま要素を含めることができます。詳細については、「Chef のドキュメント」を参照してください。

- 例では、Test Kitchen をインスタンスの開始、レシピの実行、インスタンスへのログインを行うための便利な方法としてのみ使用しました。

  テスト台所は基本的にはレシピでさまざまなテストを実行するために使用するテストプラットフォームです。もしまだであれば「Test Kitchen ウォクスルー」の残りの部分をご一読ください。テスト機能について説明しています。
- OpsWorks スタック用のクックブックの実装 では、より高度な例をいくつか紹介し、 OpsWorks スタック用のクックブックを実装する方法を示します。

OpsWorks スタック用のクックブックの実装

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

「クックブックの基本」では、クックブックとレシピを紹介しました。このセクションの例は設計上シンプルで、 スタックインスタンスを含む Chef OpsWorks をサポートするすべてのインスタンスで機能します。 OpsWorks スタック用により高度なクックブックを実装するには、通常、さまざまな点で標準の Chef とは異なる OpsWorks スタック環境を最大限に活用する必要があります。

このトピックでは、 OpsWorks スタックインスタンスのレシピを実装するための基本について説明します。

> **Note**
>
> クックブックの実装に慣れていない場合は、先に「クックブックの基本」をご覧ください。

トピック

- スタック Linux OpsWorks インスタンスでのレシピの実行
- Windows インスタンスでのレシピの実行
- Windows PowerShell スクリプトを実行します

- Vagrant でのスタック設定およびデプロイ属性の模倣
- スタック設定およびデプロイ属性値の使用
- Linux インスタンスでの外部クックブック Berkshelf の使用
- SDK for Ruby を使用する: Amazon S3 からファイルをダウンロード
- Windows ソフトウェアのインストール
- 組み込み属性の上書き
- 組み込みテンプレートの上書き

スタック Linux OpsWorks インスタンスでのレシピの実行

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Test Kitchen と Vagrant は、クックブックを実装するシンプルで効率的な方法を提供しますが、クックブックのレシピが本番環境で正しく実行されることを確認するには、 OpsWorks スタックインスタンスで実行する必要があります。このトピックでは、カスタムクックブックを OpsWorks スタックの Linux インスタンスにインストールし、単純なレシピを実行する方法について説明します。また、レシピのバグを効率的に修正するためのヒントも紹介します。

Windows インスタンスでレシピを実行する方法の詳細については、「Windows インスタンスでのレシピの実行」を参照してください。

トピック

- レシピの作成と実行
- レシピの自動実行
- レシピのトラブルシューティングと修正

レシピの作成と実行

最初に、スタックを作成する必要があります。以下に、この例のスタックを作成する方法を簡単に示します。詳細については、「新しいスタックを作成する」を参照してください。

スタックを作成するには

1. OpsWorks スタックコンソールを開いて [Add Stack] をクリックします。
2. 次の設定を指定し、その他の設定はデフォルト値を受け入れて、[Add Stack] をクリックします。

   - Name (名前) - OpsTest
   - Default SSH key (デフォルト SSH キー) - Amazon EC2 キーペア

   Amazon EC2 キーペアの作成が必要な場合は、「Amazon EC2 Key Pairs」(Amazon EC2 キーペア) を参照してください。キーペアがインスタンスと同じ AWS リージョンに属している必要があることに注意してください。この例では、デフォルトに米国西部(オレゴン) リージョンを使用します。
3. [Add a layer] をクリックし、次の設定を使用してスタックにカスタムレイヤーを追加します。

   - Name (名前) - OpsTest
   - Short name (短縮名) - opstest

   Linux スタックの場合、どのレイヤータイプでも実際には動作しますが、この例は他のレイヤータイプによってインストールされるパッケージを必要としないので、カスタムレイヤーが最も簡単なアプローチです。
4. デフォルト設定でレイヤーに 24/7 インスタンスを追加し、起動します。

インスタンスの起動中に (通常は数分かかります)、クックブックを作成できます。この例では、「条件付きロジック」のレシピをわずかに変更したバージョンを使用して、データディレクトリを作成します。ディレクトリの名前は、プラットフォームに依存します。

クックブックをセットアップするには

1. `opsworks_cookbooks` 内に `opstest` という名前のディレクトリを作成し、そこに移動します。
2. 以下の内容で `metadata.rb` ファイルを作成し、`opstest` に保存します。

```
name "opstest"
version "0.1.0"
```

3. recipes 内に opstest ディレクトリを作成します。
4. 次のレシピで default.rb ファイルを作成し、recipes ディレクトリに保存します。

```
Chef::Log.info("******Creating a data directory.******")

data_dir = value_for_platform(
  "centos" => { "default" => "/srv/www/shared" },
  "ubuntu" => { "default" => "/srv/www/data" },
  "default" => "/srv/www/config"
)

directory data_dir do
  mode 0755
  owner 'root'
  group 'root'
  recursive true
  action :create
end
```

レシピによってメッセージが記録されますが、そのために Chef::Log.info が呼び出されることに注意してください。この例では Test Kitchen を使用していないため、 logメソッドはあまり有用ではありません。 Chef::Log.info はメッセージを Chef ログに配置します。これは Chef の実行が完了した後に読み取ることができます。 OpsWorks スタックでは、後で説明するように、これらのログを簡単に表示できます。

> **Note**
>
> Chef ログには、通常、多くの日常的で比較的重要ではない情報が含まれています。メッセージテキストを「*」文字で囲んでおくと、見分けるのが容易になります。

5. opsworks_cookbooks の .zip アーカイブを作成します。 OpsWorks スタックインスタンスにクックブックをインストールするには、そのクックブックをリポジトリに保存し、インスタンスにクックブックをダウンロードするために必要な情報を OpsWorks スタックに提供する必要があります。サポートされている任意のリポジトリのタイプにクックブックを保存できます。こ

の例では、クックブックを含むアーカイブファイルを Amazon S3 バケットに保存します。クックブックリポジトリの詳細については、「クックブックリポジトリ」を参照してください。

> **Note**
>
> わかりやすいように、この例では opsworks_cookbooks ディレクトリ全体をアーカイブします。ただし、1 OpsWorks つのクックブックしか使用しない場合でも、 スタックは のすべてのクックブックをインスタンスopsworks_cookbooksにダウンロードします。例のクックブックのみをインストールするには、別の親ディレクトリを作成し、そのディレクトリに opstest を移動します。次に、親ディレクトリの .zip アーカイブを作成し、opsworks_cookbooks.zip の代わりに使用します。
> Amazon S3 バケットに配信されるコンテンツには、カスタマーコンテンツが含まれている場合があります。機密データの削除の詳細については、「S3 バケットを空にする方法」または「S3 バケットを削除する方法」を参照してください。

6. Amazon S3 バケットにアーカイブをアップロードし、アーカイブを公開して、アーカイブの URL を記録します。

これで、クックブックをインストールし、レシピを実行できるようになりました。

レシピを実行するには

1. カスタムクックブックを有効にするようにスタックを編集し、以下の設定を指定します。

   - Repository type (リポジトリタイプ) - S3 Archive (S3 アーカイブ)
   - Repository URL (リポジトリの　URL) - 前の手順で記録したクックブックアーカイブ URL

   その他の設定にはデフォルト値を使用し、[Save] をクリックしてスタック設定を更新します。
2. [Update Custom Cookbooks] スタックコマンドを実行します。スタックのインスタンスにあるカスタムクックブックの最新バージョンがインストールされます。以前のバージョンのクックブックがある場合は、このコマンドによって上書きされます。
3. 実行するレシピを **opstest::default** に設定してレシピの実行スタックコマンドを実行することで、レシピを実行します。このコマンドは、opstest::default から成る実行リストで Chef 実行を開始します。

レシピが正常に実行された後で、それを検証できます。

opstest を検証するには

1. 最初のステップは、Chef ログを調べることです。opstest1 インスタンスの [Log] (ログ) 列の [show] (表示) をクリックして、ログを表示します。下へスクロールすると、下部にログメッセージが表示されます。

```
...
[2014-07-31T17:01:45+00:00] INFO: Storing updated cookbooks/opsworks_cleanup/
attributes/customize.rb in the cache.
[2014-07-31T17:01:45+00:00] INFO: Storing updated cookbooks/opsworks_cleanup/
metadata.rb in the cache.
[2014-07-31T17:01:46+00:00] INFO: ******Creating a data directory.******
[2014-07-31T17:01:46+00:00] INFO: Processing template[/etc/hosts] action create
 (opsworks_stack_state_sync::hosts line 3)
...
```

2. SSH を使用してインスタンスにログインし、/srv/www/ の内容を一覧表示します。

すべてのステップを実行した場合は、予期していた /srv/www/config ディレクトリではなく、/srv/www/shared ディレクトリが表示されます。次のセクションでは、このようなバグをすばやく修正するためのガイドラインについて説明します。

レシピの自動実行

[Execute Recipes] コマンドは、カスタムレシピをテストするための便利な方法であるため、ここでの例のほとんどで使用しています。ただし、実際には、インスタンスの起動後やアプリケーションのデプロイ時など、インスタンスのライフサイクルの標準ポイントでレシピを実行します。 OpsWorks スタックは、各レイヤーの一連のライフサイクルイベント、セットアップ、設定、デプロイ、デプロイ解除、シャットダウンをサポートすることで、インスタンスでのレシピの実行を簡素化します。適切なライフサイクルイベントにレシピを割り当てることで、 OpsWorks スタックでレイヤーのインスタンスでレシピを自動的に実行させることができます。

通常は、インスタンスの起動が完了したら (Setup イベント)、すぐにディレクトリを作成します。以下に示しているのは、前の例で作成した同じスタックを使用して、セットアップ時にサンプルレシピを実行する方法です。他のイベントにも同じ手順を使用できます。

セットアップ時にレシピを自動的に実行するには

1. ナビゲーションペインで、[Layer] を選択し、OpsTestレイヤーの [Recipes] リンクの横にある鉛筆のアイコンを選択します。

2. **opstest::default** をレイヤーの セットアップ レシピに追加します。次に、[+] をクリックしてレイヤーに追加し、保存を選択して設定を保存します。
3. [Instances] を選択し、レイヤーに別のインスタンスを追加して、そのインスタンスを起動します。

   インスタンスの名前を opstest2 に変更する必要があります。起動が完了すると、 OpsWorks スタックは を実行しますopstest::default。
4. opstest2 インスタンスがオンラインになった後、/srv/www/shared があることを確認します。

> **Note**
>
> Setup、Configure、または Deploy イベントにレシピを割り当てた場合は、スタックコマンド (Setup および Configure) またはデプロイコマンド (Deploy) を使用してイベントをトリガーすることで、それらのレシピを手動で実行することもできます。イベントに複数のレシピが割り当てられている場合、これらのコマンドによってそれらのレシピがすべて実行されます。

レシピのトラブルシューティングと修正

予期した結果が得られなかったり、レシピが正常に実行されなかったりする場合、通常は Chef ログの調査からトラブルシューティングを始めます。これには、実行の詳細な説明と、レシピからのインラインログメッセージが含まれます。ログは、レシピが単純に失敗した場合に、特に便利です。そのような場合には、エラーが記録されます (スタックトレースなど)。

この例のようにレシピが成功した場合、Chef ログはあまり有用ではありません。この場合は、次のように特にレシピの最初の数行を詳しく調べることで、問題の原因を把握できます。

```
Chef::Log.info("******Creating a data directory.******")

data_dir = value_for_platform(
  "centos" => { "default" => "/srv/www/shared" },
  "ubuntu" => { "default" => "/srv/www/data" },
  "default" => "/srv/www/config"
)
...
```

Vagrant でレシピをテストしている場合は CentOS が Amazon Linux の適切な代役ですが、ここでは実際の Amazon Linux インスタンスで実行しています。Amazon Linux のプラットフォーム値は amazon です。この値は value_for_platform 呼び出しには含まれていないため、レシピはデフォルトで /srv/www/config を作成します。トラブルシューティングの詳細については、デバッグとトラブルシューティングのガイド を参照してください。

これで問題を特定できたので、レシピを更新し、修正を検証する必要があります。元のソースファイルに戻り、default.rb を更新し、新しいアーカイブを Amazon S3 にアップロードするなどの操作を行うことができます。ただし、そのプロセスには手間と時間がかかる場合があります。以下に、例のバグのような単純なレシピのバグで特に便利な、よりすばやいアプローチを示します。インスタンスのレシピを編集する方法です。

インスタンスのレシピを編集するには

1. SSH を使用してインスタンスにログインし、sudo su を実行して権限を昇格させます。クックブックディレクトリにアクセスするには、ルート権限が必要です。
2. OpsWorks スタックはクックブックを に保存するため/opt/aws/opsworks/current/site-cookbooks、 に移動します/opt/aws/opsworks/current/site-cookbooks/opstest/recipes。

   > **Note**
   >
   > OpsWorks スタックはクックブックのコピーも に保存します/opt/aws/opsworks/current/merged-cookbooks。そのクックブックは編集しないでください。レシピを実行すると、 OpsWorks スタックはクックブックを から .../site-cookbooks にコピーするため.../merged-cookbooks、 で行った変更は上書き.../merged-cookbooksされます。

3. インスタンスでテキストエディタを使用して default.rb を編集し、centos を amazon に置き換えます。これで、レシピは次のようになります。

```
Chef::Log.info("******Creating a data directory.******")

data_dir = value_for_platform(
  "amazon" => { "default" => "/srv/www/shared" },
  "ubuntu" => { "default" => "/srv/www/data" },
  "default" => "/srv/www/config"
)
```

```
...
```

修正を検証するには、もう一度 Execute Recipe スタックコマンドを実行して、レシピを実行します。現在、インスタンスに `/srv/www/shared` ディレクトリがあるはずです。レシピをさらに変更する必要がある場合は、Execute Recipe を何度でも実行できます。コマンドを実行するたびにインスタンスを停止および再開する必要はありません。レシピが正常に動作していることを確認できたら、ソースクックブックのコードも必ず更新してください。

> **Note**
>
> レシピをライフサイクルイベントに割り当てて OpsWorks スタックが自動的に実行する場合は、いつでも Execute Recipe を使用してレシピを再実行できます。 OpsWorks スタックコンソールを使用して適切なイベントを手動でトリガーすることで、インスタンスを再起動することなく、必要な回数だけレシピを再実行することもできます。ただしこのアプローチでは、イベントのすべてのレシピが実行されます。次の点に注意してください。
>
> - Setup または Configure イベントをトリガーするには、スタックコマンドを使用します。
> - Deploy または Undeploy イベントをトリガーするには、デプロイコマンドを使用します。

Windows インスタンスでのレシピの実行

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このトピックでは、基本的に「Linux インスタンスでのレシピの実行」の簡略版であり、Windows スタックでレシピを実行する方法を示しています。最初に「Linux インスタンスでのレシピの実行」を参照することをお勧めします。より詳細に説明されており、内容の大部分がいずれかのタイプのオペレーティングシステムに関連しているためです。

OpsWorks Stacks Linux インスタンスでレシピを実行する方法については、「」を参照してくださいLinux インスタンスでのレシピの実行。

トピック

- RDP アクセスの有効化
- レシピの作成と実行
- レシピの自動実行

RDP アクセスの有効化

この操作の開始前に、セキュリティグループをまだ設定していない場合は、インスタンスへの RDP アクセスを許可するインバウンドルールを使用して、セキュリティグループを設定する必要があります。スタックを作成するとき、そのグループが必要になります。

リージョンで最初のスタックを作成すると、 OpsWorks スタックは一連のセキュリティグループを作成します。これには、 のような名前のものが含まれます。これは`AWS-OpsWorks-RDP-Server`、RDP アクセスを許可するために OpsWorks スタックがすべての Windows インスタンスにアタッチします。ただし、デフォルトでは、このセキュリティグループにはルールが存在しないため、インスタンスへの RDP アクセスを許可するインバウンドルールを追加する必要があります。

RDP アクセスを許可するには

1. Amazon EC2 console (Amazon EC2 コンソール) を開き、スタックのリージョンに設定して、ナビゲーションペインから [Security Groups] (セキュリティーグループ) を選択します。
2. [AWS-OpsWorks-RDP-Server]、[Inbound]、[Edit] の順に選択します。
3. 以下の設定でルールを追加します。

    - Type (タイプ) - RDP
    - Source (ソース) – 許可される送信元 IP アドレス。

      通常は、自身の IP アドレスまたは指定した IP アドレス範囲 (社内の IP アドレス範囲が一般的) へのインバウンド RDP リクエストを許可します。

> **Note**
>
> 後で説明するように、通常のユーザーに対して RDP アクセスを許可するようにユーザーアクセス権限を編集する必要があります。

詳細については、「RDP でのログイン」を参照してください。

レシピの作成と実行

以下に、この例のスタックを作成する方法を簡単に示します。詳細については、「新しいスタックを作成する」を参照してください。

Stack を作成する

1. OpsWorks スタックコンソールを開いて [Add Stack] を選択します。以下の設定を指定し、その他の設定はデフォルト値を受け入れて、[Add Stack] を選択します。

   - Name (名前) – WindowsRecipeTest
   - リージョン – 米国西部 (オレゴン)

     この例はいずれのリージョンでも動作しますが、チュートリアルでは米国西部 (オレゴン) を使用することをお勧めします。
   - Default operating system (デフォルトのオペレーティングシステム) – Microsoft Windows Server 2012 R2
2. [Add a layer] を選択し、以下の設定を使用してスタックにカスタムレイヤーを追加します。

   - Name (名前) – RecipeTest
   - Short name (短縮名) – recipetest
3. デフォルト設定で RecipeTestレイヤーに 24/7 インスタンスを追加し、起動します。

   OpsWorks スタックは、このインスタンスに自動的に `AWS-OpsWorks-RDP-Server`を割り当てます。これにより、承認されたユーザーはインスタンスにログインできます。
4. [Permissions]、[Edit]、[SSH/RDP]、[sudo/admin] の順に選択します。通常のユーザーは、インスタンスにログインするために、`AWS-OpsWorks-RDP-Server` セキュリティグループに加えて、この権限が必要です。

   > **Note**
   >
   > 管理者としてログインすることもできますが、それには別の手順が必要です。詳細については、「RDP でのログイン」を参照してください。

インスタンスの起動中に (通常は数分かかります)、クックブックを作成できます。この例のレシピによってデータディレクトリが作成されます。これは基本的に「例 3: ディレクトリの作成」からのレシピであり、Windows 用に修正しています。

> **Note**
>
> OpsWorks スタックの Windows インスタンスにクックブックを実装する場合、スタックの Linux OpsWorks インスタンスにクックブックを実装する場合とは少し異なるディレクトリ構造を使用します。詳細については、「クックブックリポジトリ」を参照してください。

クックブックをセットアップするには

1. windowstest という名前のディレクトリを作成し、そのディレクトリに移動します。
2. 以下の内容で metadata.rb ファイルを作成し、windowstest に保存します。

```
name "windowstest"
version "0.1.0"
```

3. recipes 内に windowstest ディレクトリを作成します。
4. 次のレシピで default.rb ファイルを作成し、recipes ディレクトリに保存します。

```
Chef::Log.info("******Creating a data directory.******")

directory 'C:\data' do
  rights :full_control, 'instance_name\username'
  inherits false
  action :create
end
```

[*username*] を自身のユーザー名に置き換えます。

5. リポジトリへのクックブックの保存

OpsWorks スタックインスタンスにクックブックをインストールするには、そのクックブックをリポジトリに保存し、インスタンスにクックブックをダウンロードするために必要な情報を OpsWorks スタックに提供する必要があります。S3 バケットまたは Git リポジトリにアーカイブファイルとして Windows のクックブックを保存できます。この例では、S3 バケットを使用しているため、windowstest ディレクトリの .zip アーカイブを作成する必要があります。クックブックリポジトリの詳細については、「クックブックリポジトリ」を参照してください。

6. S3 バケットにアーカイブをアップロードし、アーカイブを公開して、アーカイブの URL を記録しておきます。プライベートアーカイブを使用することもできますが、この例ではパブリックアーカイブで十分であり、作業がいくらか簡単になります。

   Amazon S3 バケットに配信されるコンテンツには、カスタマーコンテンツが含まれている場合があります。機密データの削除の詳細については、「S3 バケットを空にする方法」または「S3 バケットを削除する方法」を参照してください。

これで、クックブックをインストールし、レシピを実行できるようになりました。

レシピを実行するには

1. カスタムクックブックを有効にするようにスタックを編集し、以下の設定を指定します。

   - Repository type (リポジトリタイプ) – S3 Archive (アーカイブ)
   - Repository URL (リポジトリの URL) - 前の手順で記録したクックブックアーカイブ URL

   その他の設定ではデフォルト値を受け入れ、[Save] を選択してスタック設定を更新します。
2. [Update Custom Cookbooks] スタックコマンドを実行します。カスタムクックブックの最新バージョンがスタックのインスタンス (オンラインインスタンスを含む) にインストールされます。以前のバージョンのクックブックがある場合は、このコマンドによって上書きされます。
3. カスタムクックブックの更新が終了したら、実行するレシピ を **windowstest::default** に設定してレシピの実行スタックコマンドを実行することで、レシピを実行します。このコマンドによって Chef 実行が開始され、レシピで構成される実行リストが渡されます。

レシピが正常に実行された後で、それを検証できます。

windowstest を検証するには

1. Chef ログを調べます。opstest1 インスタンスの [Log] (ログ) 列で [show] (表示) を選択すると、ログが表示されます。下へスクロールすると、下部にログメッセージが表示されます。

```
...
[2014-07-31T17:01:45+00:00] INFO: Storing updated cookbooks/opsworks_cleanup/
attributes/customize.rb in the cache.
[2014-07-31T17:01:45+00:00] INFO: Storing updated cookbooks/opsworks_cleanup/
metadata.rb in the cache.
```

```
[2014-07-31T17:01:46+00:00] INFO: ******Creating a data directory.******
[2014-07-31T17:01:46+00:00] INFO: Processing template[/etc/hosts] action create
 (opsworks_stack_state_sync::hosts line 3)
...
```

2. Instances (インスタンス) を選択し、インスタンスの Actions (アクション) 列で [rdp] を選択し、適切な有効期限を持つ RDP パスワードを要求します。DNS 名、ユーザー名、パスワードをコピーします。Windows Remote Desktop Connection クライアントなどの RDP クライアントでその情報を使用して、インスタンスにログインし、`c:\data` があることを確認できます。詳細については、「RDP でのログイン」を参照してください。

> **Note**
>
> レシピが正しく実行されない場合、トラブルシューティングのヒントについては「レシピのトラブルシューティングと修正」を参照してください。それらのヒントのほとんどは Windows インスタンスにも当てはまります。インスタンスでレシピを編集して修正をテストする場合は、 OpsWorks スタックがカスタムクックブックをインストールする `C:\chef\cookbooks` ディレクトリでクックブックを探します。

レシピの自動実行

[Execute Recipes] コマンドは、カスタムレシピをテストするための便利な方法であるため、ここでの例のほとんどで使用しています。ただし、実際には、インスタンスの起動完了後やアプリケーションのデプロイ時など、インスタンスのライフサイクルの標準ポイントでレシピを実行します。OpsWorks スタックは、各レイヤーの一連のライフサイクルイベント、セットアップ、設定、デプロイ、デプロイ解除、シャットダウンをサポートすることで、インスタンスでのレシピの実行を簡素化します。適切なライフサイクルイベントにレシピを割り当てることで、 OpsWorks スタックでレイヤーのインスタンスでレシピを自動的に実行させることができます。

通常は、インスタンスの起動が完了したら (Setup イベント)、すぐにディレクトリを作成します。以下に示しているのは、前の例で作成した同じスタックを使用して、セットアップ時にサンプルレシピを実行する方法です。他のイベントにも同じ手順を使用できます。

セットアップ時にレシピを自動的に実行するには

1. ナビゲーションペインで [Layer] を選択し、RecipeTestレイヤーの [Recipes] リンクの横にある鉛筆のアイコンを選択します。

2. **`windowstest::default`** をレイヤーの Setup (セットアップ) レシピに追加します。次に、[+] を選択してレイヤーに追加し、[Save] (保存) を選択して設定を保存します。
3. [Instances] を選択し、レイヤーに別のインスタンスを追加して、そのインスタンスを起動します。

   インスタンスの名前を `recipetest2` に変更する必要があります。起動が完了すると、OpsWorks スタックは を実行しますwindowstest::default。
4. `recipetest2` インスタンスがオンラインになった後、`c:\data` があることを確認します。

> **Note**
>
> Setup、Configure、または Deploy イベントにレシピを割り当てた場合は、スタックコマンド (Setup および Configure) またはデプロイコマンド (Deploy) を使用してイベントをトリガーすることで、それらのレシピを手動で実行することもできます。イベントに複数のレシピが割り当てられている場合、これらのコマンドによってそれらのレシピがすべて実行されます。

Windows PowerShell スクリプトを実行します

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> 以下の例では、「Windows インスタンスでのレシピの実行」の例を実行済みであることを前提としています。実行済みでない場合は、最初にその例を実行する必要があります。特に、インスタンスへの RDP アクセスを有効にする方法について説明しています。

レシピに Windows インスタンス上のタスク (特に対応する Chef リソースがないタスク)を実行させる 1 つの方法は、レシピで Windows PowerShell スクリプトを実行させることです。このセクションでは、そのための基礎を紹介するために、Windows PowerShell スクリプトを使用して Windows の機能をインストールする方法について説明します。

powershell_script リソースは、Windows PowerShell コマンドレットをインスタンスで実行します。以下の例では、Install-WindowsFeature cmdlet コマンドレットを使用して、インスタンスに XPS ビューアーをインストールしています。

以下に、この例のスタックを作成する方法を簡単に示します。詳細については、「新しいスタックを作成する」を参照してください。

Stack を作成する

1. OpsWorks スタックコンソールを開いて [Add Stack] を選択します。次の設定を指定し、その他の設定はデフォルト値を受け入れて、[Add Stack] をクリックします。

   - Name (名前) – PowerShellTest
   - リージョン – 米国西部 (オレゴン)

     この例はいずれのリージョンでも動作しますが、チュートリアルでは米国西部 (オレゴン) を使用することをお勧めします。
   - Default operating system (デフォルトのオペレーティングシステム) – Microsoft Windows Server 2012 R2
2. [Add a layer] を選択し、以下の設定を使用してスタックにカスタムレイヤーを追加します。

   - Name (名前) – PowerShell
   - Short name (短縮名) – powershell
3. デフォルト設定で PowerShellレイヤーに 24/7 インスタンスを追加し、起動します。
4. [Permissions]、[Edit]、[SSH/RDP]、[sudo/admin] の順に選択します。通常のユーザーとしてインスタンスにログインするには、AWS-OpsWorks-RDP-Server セキュリティグループに加えて、この権限が必要です。

インスタンスの起動中に (通常は数分かかります)、クックブックを作成できます。この例のレシピによってデータディレクトリが作成されます。これは基本的に「例 3: ディレクトリの作成」からのレシピであり、Windows 用に修正しています。

クックブックをセットアップするには

1. powershell という名前のディレクトリを作成し、そのディレクトリに移動します。
2. 以下の内容で metadata.rb ファイルを作成し、windowstest に保存します。

```
name "powershell"
version "0.1.0"
```

3. recipes 内に powershell ディレクトリを作成します。
4. 次のレシピで default.rb ファイルを作成し、recipes ディレクトリに保存します。

```
Chef::Log.info("******Installing XPS.******")

powershell_script "Install XPS Viewer" do
  code <<-EOH
    Install-WindowsFeature XPS-Viewer
  EOH
  guard_interpreter :powershell_script
  not_if "(Get-WindowsFeature -Name XPS-Viewer).installed"
end
```

   - powershell_script リソースによって、[XPS] ビューアーをインストールするコマンドレットが実行されます。

     この例では、1 つのコマンドレットのみを実行していますが、code ブロックには任意の数のコマンドラインを含めることができます。
   - guard_interpreter 属性を指定すると、Chef によって Windows PowerShell の 64 ビットバージョンが使用されます。
   - not_if ガード属性を指定すると、Chef によってインストール済みの機能はインストールされません。
5. .zip ディレクトリの powershell アーカイブを作成します。
6. Amazon S3 バケットにアーカイブをアップロードし、アーカイブを公開して、アーカイブの URL を記録します。プライベートアーカイブを使用することもできますが、この例ではパブリックアーカイブで十分であり、作業がいくらか簡単になります。

Amazon S3 バケットに配信されるコンテンツには、カスタマーコンテンツが含まれている場合があります。機密データの削除の詳細については、「S3 バケットを空にする方法」または「S3 バケットを削除する方法」を参照してください。

これで、クックブックをインストールし、レシピを実行できるようになりました。

レシピを実行するには

1. カスタムクックブックを有効にするようにスタックを編集し、以下の設定を指定します。

   - Repository type (リポジトリタイプ) – S3 Archive (アーカイブ)
   - Repository URL (リポジトリの URL) - 前の手順で記録したクックブックアーカイブ URL

   その他の設定ではデフォルト値を受け入れ、[Save] を選択してスタック設定を更新します。
2. [Update Custom Cookbooks] スタックコマンドを実行して、カスタムクックブックの最新バージョンをインスタンスにインストールします。
3. カスタムクックブックの更新が終了したら、実行するレシピを **`powershell::default`** に設定してレシピの実行スタックコマンドを実行することで、レシピを実行します。

> **Note**
>
> この例では、便宜上 Execute Recipes を使用していますが、通常、適切なライフサイクルイベントに割り当てることで OpsWorks 、 スタックでレシピを自動的に実行します。このようなレシピは、イベントを手動でトリガーすることによって実行できます。Setup および Configure イベントをトリガーするにはスタックコマンドを使用し、Deploy および Undeploy イベントをトリガーするにはデプロイコマンドを使用できます。

レシピが正常に実行された後で、それを検証できます。

PowerShell レシピを確認するには

1. Chef ログを調べます。powershell1 インスタンスの [Log] (ログ) 列の [show] (表示) をクリックすると、ログが表示されます。下へスクロールすると、下部にログメッセージが表示されます。

```
...
[2015-04-27T18:12:09+00:00] INFO: Storing updated cookbooks/powershell/metadata.rb
 in the cache.
[2015-04-27T18:12:09+00:00] INFO: ******Installing XPS.******
[2015-04-27T18:12:09+00:00] INFO: Processing powershell_script[Install XPS Viewer]
 action run (powershell::default line 3)
[2015-04-27T18:12:09+00:00] INFO: Processing powershell_script[Guard resource]
 action run (dynamically defined)
[2015-04-27T18:12:42+00:00] INFO: powershell_script[Install XPS Viewer] ran
 successfully
...
```

2. RDP を使用してインスタンスにログインし、[Start] メニューを開きます。XPS Viewer が [Windows Accessories] に表示されていることを確認できます。

Vagrant でのスタック設定およびデプロイ属性の模倣

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> このトピックは Linux インスタンスにのみ当てはまります。Test Kitchen はまだ Windows をサポートしていないため、すべての Windows の例を OpsWorks スタックインスタンスで実行します。

OpsWorks スタックは、すべてのライフサイクルイベントについて、スタック内の各インスタンスのノードオブジェクトにスタック設定とデプロイ属性を追加します。これらの属性から、各レイヤーの設定とそのオンラインインスタンス、デプロイされた各アプリケーションの設定など、スタック設定のスナップショットが渡されます。これらの属性はノードオブジェクトにあるため、任意のレシピからアクセスできます。 スタックインスタンスのほとんどのレシピは、これらの属性の 1 OpsWorks つ以上を使用します。

Vagrant ボックスで実行されているインスタンスは OpsWorks スタックによって管理されないため、そのノードオブジェクトにはデフォルトでスタック設定およびデプロイ属性は含まれません。ただし、適切な属性のセットを Test Kitchen 環境に追加できます。その後、Test Kitchen は属性をインスタンスのノードオブジェクトに追加し、レシピは OpsWorks スタックインスタンスと同様に属性にアクセスできます。

このトピックでは、適切なスタック設定およびデプロイ属性のコピーを取得し、インスタンスにインストールして、属性にアクセスする方法について説明します。

> **Note**
>
> レシピのテストを Test Kitchen で実行している場合は、スタック設定およびデプロイ JSON を模倣する代替方法が fauxhai によって提供されます。

クックブックをセットアップするには

1. `printjson` という名前の `opsworks_cookbooks` のサブディレクトリを作成し、そのディレクトリに移動します。
2. 「例 1: パッケージのインストール」で説明されているとおりに Test Kitchen を初期化および設定します。
3. `printjson` と `recipes` にサブディレクトリを 2 つ追加します`environments`.。

適切な定義で属性ファイルをクックブックに追加することで、スタック設定およびデプロイ属性を模倣することができますが、より良いアプローチは Test Kitchen 環境を使用することです。通常は、次のいずれかの方法でログインします。

- `.kitchen.yml` に属性定義を追加します。

  このアプローチは、属性の数がほんの数個の場合に最も便利です。詳細については、「kitchen.yml」を参照してください。
- 環境ファイルで属性を定義し、そのファイルを `.kitchen.yml` で参照します。

  このアプローチは通常、スタック設定およびデプロイ属性に適しています。環境ファイルがすでに JSON 形式であるためです。属性のコピーは、適切な スタックインスタンスから JSON OpsWorks 形式で取得し、貼り付けるだけです。すべての例で環境ファイルを使用します。

クックブックのスタック設定およびデプロイ属性を作成するための最も簡単な方法は、適切に設定したスタックを作成し、インスタンスから JSON 形式で属性のコピーを取得することです。Test Kitchen 環境ファイルを管理しやすい状態に保つには、レシピで必要になる属性のみを含むように、JSON を編集できます。この章の例は、「Chef 11 Linux スタックの使用開始」からのスタックに基づいています。ロードバランサー、PHP アプリケーションサーバー、MySQL データベースサーバーが属する PHP アプリケーションサーバースタックです。

スタック設定およびデプロイメント JSON を作成するには

1. SimplePHPApp のデプロイなど、「Chef 11 Linux スタックの使用開始」での説明に従って MyStack を作成します。希望する場合は、「ステップ 4: MyStack の拡張」で指示されている 2 番目の PHP アプリケーションサーバー インスタンスは、省略してもかまいません。例ではこれらの属性を使用しません。
2. php-app1 インスタンスがまだ開始されていない場合は開始してから、SSH を使用してログインします。
3. ターミナルウィンドウで、以下のエージェント CLI コマンドを実行します。

   ```
   sudo opsworks-agent-cli get_json
   ```

   このコマンドは、インスタンスの最新のスタック設定およびデプロイ属性を JSON 形式でターミナルウィンドウに出力します。
4. JSON を .json ファイルにコピーし、ワークステーションの便利な場所に保存します。詳細は、SSH クライアントによって異なります。例えば、Windows で PuTTY を使用している場合は、Copy All to Clipboard コマンドを実行できます。このコマンドは、Windows クリップボードにターミナルウィンドウのすべてのテキストをコピーします。その後、.json ファイルに内容を貼り付け、ファイルを編集して余分なテキストをすべて削除できます。
5. 必要に応じて MyStack JSON を編集します。スタック設定およびデプロイ属性は多数あるため、クックブックでは通常、その一部しか使用しません。環境ファイルを管理しやすい状態に保つには、元の構造を保持しながら、クックブックで実際に使用される属性のみを含むように、JSON を編集できます。

   この例では、['opsworks']['stack'] と ['id] という 2 つの ['name'] 属性だけが含まれている、MyStack JSON の大幅に編集されたバージョンを使用します。次のような、MyStack JSON 編集バージョンを作成します。

   ```
   {
   ```

```
  "opsworks": {
    "stack": {
      "name": "MyStack",
      "id": "42dfd151-6766-4f1c-9940-ba79e5220b58",
    },
  },
}
```

この JSON をインスタンスのノードオブジェクトに含めるには、Test Kitchen 環境に追加する必要があります。

スタック設定およびデプロイ属性を Test Kitchen 環境に追加するには

1. 以下の内容で `test.json` という名前の環境ファイルを作成し、クックブックの `environments` フォルダに保存します。

```
{
  "default_attributes": {
    "opsworks" : {
      "stack" : {
        "name" : "MyStack",
        "id" : "42dfd151-6766-4f1c-9940-ba79e5220b58"
      }
    }
  },
  "chef_type" : "environment",
  "json_class" : "Chef::Environment"
}
```

   環境ファイルには以下の要素があります。

   - `default_attributes` – JSON 形式のデフォルトの属性です。

     これらの属性は、`default` 属性タイプのノードオブジェクトに追加されます。このタイプは、スタック設定とデプロイメント JSON のすべての属性に使用されます。この例では、前に示したスタック設定とデプロイメント JSON の編集されたバージョンを使用します。
   - `chef_type` – この要素を`environment` に設定します。
   - `json_class` – この要素を`Chef::Environment` に設定します。
2. `.kitchen.yml` を編集して、Test Kitchen 環境を次のように定義します。

```
---
driver:
  name: vagrant

provisioner:
  name: chef_solo
  environments_path: ./environments

platforms:
  - name: ubuntu-12.04

suites:
  - name: printjson
    provisioner:
      solo_rb:
        environment: test
    run_list:
      - recipe[printjson::default]
    attributes:
```

kitchen init によって作成されたデフォルトの .kitchen.yml に以下の要素を追加して、環境を定義します。

provisioner

以下の要素を追加します。

- name – この要素をchef_solo に設定します。

  OpsWorks スタック環境をより厳密にレプリケートするには、Chef solo の代わりに Chef クライアントローカルモードを使用できます。ローカルモードは、リモートサーバーではなくインスタンスでローカルに実行される Chef サーバー の軽量バージョン (Chef Zero) を使用する Chef Client オプションです。これによって、レシピはリモートサーバーに接続しなくても、検索やデータバッグなどの Chef サーバー機能を使用できます。

- environments_path – クックブックのサブディレクトリです。この例では、環境ファイル ./environments が含まれています。

suites:provisioner

solo_rb 要素を環境ファイル名 (.json 拡張子は含めない) に設定し、environment 要素を追加します。この例では、environment を test に設定します。

3. 以下の内容で default.rb という名前のレシピファイルを作成し、クックブックの recipes ディレクトリに保存します。

```
log "Stack name: #{node['opsworks']['stack']['name']}"
log "Stack id: #{node['opsworks']['stack']['id']}"
```

このレシピは、環境に追加した 2 個のスタック設定およびデプロイメント 値を単純に記録します。レシピは仮想ボックスでローカルに実行されていますが、これらの属性は、レシピが OpsWorks スタックインスタンスで実行されている場合と同じノード構文を使用して参照します。

4. kitchen converge を実行します。次のような口グ出力が表示されます。

```
...
Converging 2 resources
Recipe: printjson::default
  * log[Stack name: MyStack] action write[2014-07-01T23:14:09+00:00] INFO:
 Processing log[Stack name: MyStack] action write (printjson::default line 1)

[2014-07-01T23:14:09+00:00] INFO: Stack name: MyStack

  * log[Stack id: 42dfd151-6766-4f1c-9940-ba79e5220b58] action
 write[2014-07-01T23:14:09+00:00] INFO: Processing log[Stack id:
 42dfd151-6766-4f1c-9940-ba79e5220b58] action write (printjson::default line 2)

[2014-07-01T23:14:09+00:00] INFO: Stack id: 42dfd151-6766-4f1c-9940-ba79e5220b58

...
```

スタック設定およびデプロイ属性値の使用

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

レシピでは、スタック設定やデプロイされたアプリケーションに関する情報がしばしば必要になります。たとえば、設定ファイルを作成するためにスタックの IP アドレスのリストが必要になったり、ログディレクトリを作成するためにアプリケーションのデプロイメントディレクトリが必要になることがあります。このデータを中央サーバーに保存する代わりに、 OpsWorks Stacks は、ライフサイクルイベントごとに各インスタンスのノードオブジェクトにスタック設定とデプロイ属性のセットをインストールします。これらの属性は、デプロイされるアプリケーションを含め、現在のスタックの状態を表します。その後、レシピは必要なデータをノードオブジェクトから取得できます。

> **Note**
>
> アプリケーションで、スタック設定およびデプロイ属性値のようなノードオブジェクトからの情報が必要になることもあります。しかし、アプリケーションはノードオブジェクトにアクセスできません。ノードオブジェクトのデータをアプリケーションに渡すために、必要な情報をノードオブジェクトから抽出し、利用しやすい形式でファイルに追加するレシピを実装できます。そうすれば、アプリケーションはこのファイルからデータを読み取れるようになります。詳細と例については、「アプリケーションへのデータの引き渡し」を参照してください。

以下のように、レシピによってノードオブジェクトからスタック設定およびデプロイ属性値が取得されるようにできます。

- 属性の完全修飾名を使用して直接。

  このアプローチは Linux スタックには使用できますが、Windows スタックには使用できません。
- ノードオブジェクトに対して属性値のクエリを実行できる Chef の検索で。

このアプローチは Windows スタックと Chef 11.10 Linux スタックに使用できます。

> **Note**
>
> Linux スタックの場合、エージェント CLI を使用すると、インスタンスから JSON 形式でスタック設定およびデプロイ属性のコピーを取得できます。詳細については、「Vagrant でのスタック設定およびデプロイ属性の模倣」を参照してください。

トピック

- 属性値の直接取得
- Chef の検索での属性値の取得

属性値の直接取得

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post または AWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> このアプローチは Linux スタックにのみ使用できます。

「Vagrant でのスタック設定およびデプロイ属性の模倣」では、特定の属性を直接参照するためのノード構文を使用して、スタック設定およびデプロイ属性を取得する方法について説明しています。これが最良のアプローチである場合もあります。しかし、多くの属性は、内容や名前がスタックごとに違ったり、特定のスタックでも時間と共に変化したりするコレクションまたはリストで定義されています。例えば、deploy 属性には、アプリケーションの属性のリストが含まれており、アプリケーションの短縮名が付けられています。アプリケーションの属性名を含むこのリストは通常、スタックによっても、デプロイによっても異なります。

リストまたはコレクション内の属性を列挙して必要なデータを取得する方法が便利なことが多く、この方法でなければならないこともあります。たとえば、スタックのインスタンスのパブリック IP アドレスを知りたいとします。その情報は ['opsworks']['layers'] 属性にありますが、この属性はスタックのレイヤーごとにレイヤーの短い名前を持つ 1 個の要素を含んでいるハッシュテーブルに設定されています。各レイヤー要素が、レイヤーの属性を含むハッシュテーブルに設定されます。属性の 1 つが ['instances'] です。次に、その要素が、レイヤーのインスタンスごとにインスタンスの短い名前を持っている属性を含んでいる別のハッシュテーブルに設定されます。各インスタンス属性は、パブリック IP アドレスを表す ['ip'] などのインスタンス属性を含む、さらに別のハッシュテーブルに設定されます。これの視覚化に問題がある場合は、以下の手順にある JSON 形式の例を参照してください。

この例では、スタックのレイヤーのスタック設定およびデプロイメント JSON からデータを取得する方法を示します。

クックブックをセットアップするには

1. opsworks_cookbooks 内に listip という名前のディレクトリを作成し、そこに移動します。
2. 「例 1: パッケージのインストール」で説明されているとおりに Test Kitchen を初期化および設定します。
3. listip: recipes と environments にディレクトリを 2 つ追加します。
4. 関連する属性を含む MyStack 設定およびデプロイ属性を編集して JSON バージョンを作成します。次のようになります。

```
{
  "opsworks": {
    "layers": {
      "php-app": {
        "name": "PHP App Server",
        "id": "efd36017-ec42-4423-b655-53e4d3710652",
        "instances": {
          "php-app1": {
            "ip": "192.0.2.0"
          }
        }
      },
      "db-master": {
        "name": "MySQL",
        "id": "2d8e0b9a-0d29-43b7-8476-a9b2591a7251",
```

```
        "instances": {
          "db-master1": {
            "ip": "192.0.2.5"
          }
        }
      },
      "lb": {
        "name": "HAProxy",
        "id": "d5c4dda9-2888-4b22-b1ea-6d44c7841193",
        "instances": {
          "lb1": {
            "ip": "192.0.2.10"
          }
        }
      }
    }
  }
}
```

5. test.json という名前の環境ファイルを作成し、例の JSON を default_attributes に貼り付けて、ファイルをクックブックの environments フォルダに保存します。ファイルは以下のようになります (簡潔にするために、例の JSON のほとんどを省略符号で表しています)。

```
{
  "default_attributes" : {
    "opsworks": {
      "layers": {
        ...
      }
    }
  },
  "chef_type" : "environment",
  "json_class" : "Chef::Environment"
}
```

6. .kitchen.yml のテキストを以下に置き換えます。

```
---
driver:
  name: vagrant
```

```
provisioner:
  name: chef_zero
  environments_path: ./environment

platforms:
  - name: ubuntu-12.04

suites:
  - name: listip
    provisioner:
      client_rb:
        environment: test
    run_list:
      - recipe[listip::default]
    attributes:
```

クックブックをセットアップすると、レイヤー ID を記録する次のレシピを使用できます。

```
node['opsworks']['layers'].each do |layer, layerdata|
  log "#{layerdata['name']} : #{layerdata['id']}"
end
```

レシピは ['opsworks']['layers'] 内のレイヤーを列挙し、各レイヤーの名前と ID を記録します。

レシピを記録しながらレイヤーID を実行するには

1. 例のレシピで default.rb という名前のファイルを作成し、recipes ディレクトリに保存します。
2. kitchen converge を実行します。

出力の関連する部分は次のようになります。

```
Recipe: listip::default
  * log[PHP App Server : efd36017-ec42-4423-b655-53e4d3710652] action
 write[2014-07-17T22:56:19+00:00] INFO: Processing log[PHP App Server : efd36017-
ec42-4423-b655-53e4d3710652] action write (listip::default line 4)
```

```
[2014-07-17T22:56:19+00:00] INFO: PHP App Server : efd36017-ec42-4423-b655-53e4d3710652



  * log[MySQL : 2d8e0b9a-0d29-43b7-8476-a9b2591a7251] action
 write[2014-07-17T22:56:19+00:00] INFO: Processing log[MySQL : 2d8e0b9a-0d29-43b7-8476-
a9b2591a7251] action write (listip::default line 4)
[2014-07-17T22:56:19+00:00] INFO: MySQL : 2d8e0b9a-0d29-43b7-8476-a9b2591a7251



  * log[HAProxy : d5c4dda9-2888-4b22-b1ea-6d44c7841193] action
 write[2014-07-17T22:56:19+00:00] INFO: Processing log[HAProxy : d5c4dda9-2888-4b22-
b1ea-6d44c7841193] action write (listip::default line 4)
[2014-07-17T22:56:19+00:00] INFO: HAProxy : d5c4dda9-2888-4b22-b1ea-6d44c7841193
```

インスタンスの IP アドレスを一覧表示するには、次のような入れ子のループが必要です。

```
node['opsworks']['layers'].each do |layer, layerdata|
  log "#{layerdata['name']} : #{layerdata['id']}"
  layerdata['instances'].each do |instance, instancedata|
    log "Public IP: #{instancedata['ip']}"
  end
end
```

内側のループで各レイヤーのインスタンスを反復処理して、IP アドレスを記録します。

レシピを記録しながらインスタンス IP を実行するには

1. `default.rb` 内のコードを例のレシピに置き換えます。
2. `kitchen converge` を実行してレシピを実行します。

出力の関連する部分は次のようになります。

```
  * log[PHP App Server : efd36017-ec42-4423-b655-53e4d3710652] action
 write[2014-07-17T23:09:34+00:00] INFO: Processing log[PHP App Server : efd36017-
ec42-4423-b655-53e4d3710652] action write (listip::default line 2)
[2014-07-17T23:09:34+00:00] INFO: PHP App Server : efd36017-ec42-4423-b655-53e4d3710652
```

```
  * log[Public IP: 192.0.2.0] action write[2014-07-17T23:09:34+00:00] INFO: Processing
 log[Public IP: 192.0.2.0] action write (listip::default line 4)
[2014-07-17T23:09:34+00:00] INFO: Public IP: 192.0.2.0


  * log[MySQL : 2d8e0b9a-0d29-43b7-8476-a9b2591a7251] action
 write[2014-07-17T23:09:34+00:00] INFO: Processing log[MySQL : 2d8e0b9a-0d29-43b7-8476-
a9b2591a7251] action write (listip::default line 2)
[2014-07-17T23:09:34+00:00] INFO: MySQL : 2d8e0b9a-0d29-43b7-8476-a9b2591a7251


  * log[Public IP: 192.0.2.5] action write[2014-07-17T23:09:34+00:00] INFO: Processing
 log[Public IP: 192.0.2.5] action write (listip::default line 4)
[2014-07-17T23:09:34+00:00] INFO: Public IP: 192.0.2.5


  * log[HAProxy : d5c4dda9-2888-4b22-b1ea-6d44c7841193] action
 write[2014-07-17T23:09:34+00:00] INFO: Processing log[HAProxy : d5c4dda9-2888-4b22-
b1ea-6d44c7841193] action write (listip::default line 2)
[2014-07-17T23:09:34+00:00] INFO: HAProxy : d5c4dda9-2888-4b22-b1ea-6d44c7841193


  * log[Public IP: 192.0.2.10] action write[2014-07-17T23:09:34+00:00] INFO: Processing
 log[Public IP: 192.0.2.10] action write (listip::default line 4)
[2014-07-17T23:09:34+00:00] INFO: Public IP: 192.0.2.10
```

完了したら、kitchen destroy を実行します。次のトピックでは、新しいクックブックを使用します。

> **Note**
>
> スタック設定およびデプロイメント JSON のコレクションを列挙する最も一般的な理由の 1 つは、デプロイメントディレクトリなど、デプロイされた特定のアプリのデータを取得することです。例については、Deploy レシピを参照してください。

Chef の検索での属性値の取得

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソ

リューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> このアプローチは Windows スタックと Chef 11.10 Linux スタックに使用できます。

スタック設定およびデプロイ属性値をノードオブジェクトから直接取得する操作は複雑になる場合があり、Windows スタックでは使用できません。別のアプローチは、Chef の検索を使用して目的の属性のクエリを実行することです。Chef サーバーに精通している場合は、Chef 検索が OpsWorks スタックと少し異なることがわかります。 OpsWorks スタックはローカルモードで Chef-client を使用するため、Chef 検索は Chef-0 と呼ばれる Chef サーバーのローカルバージョンに依存するため、検索はリモートサーバーではなくインスタンスのノードオブジェクトにローカルに保存されているデータで動作します。

実際には、 OpsWorks スタックインスタンスのノードオブジェクトにスタック設定とデプロイ属性が含まれているため、検索をローカルに保存されているデータに制限することは通常は重要ではありません。通常、レシピが Chef サーバーから取得し、同じ名前を使用するデータの大部分が含まれているわけではないため、通常は スタックインスタンスで Chef OpsWorks サーバー用に記述された検索コードを変更せずに使用できます。詳細については、「Chef の検索の使用」を参照してください。

以下に示しているのは、検索クエリの基本構造です。

```
result = search(:search_index, "key:pattern")
```

- 検索インデックスでは、クエリが適用される属性と、返されるオブジェクトのタイプを指定します。
- キーでは、属性名を指定します。
- パターンでは、取得する属性の値を指定します。

  特定の属性値のクエリを実行したり、ワイルドカードを使用して属性値の範囲のクエリを実行したりできます。

- 結果として、クエリに一致するオブジェクトのリストが返されます。各オブジェクトは、複数の関連属性が保存されているハッシュテーブルです。

  例えば、node の検索インデックスを使用した場合、クエリによってインスタンスオブジェクトのリストが返され、各オブジェクトはクエリに一致した各インスタンスに対応しています。各オブジェクトは、インスタンスの設定 (ホスト名や IP アドレスなど) を定義する属性のセットが保存されているハッシュテーブルです。

たとえば、以下のクエリでは node 検索インデックスを使用しています。これは、スタックのインスタンス (Chef の用語ではノード) に適用される標準の Chef インデックスです。そのクエリでは `myhost` のホスト名とインスタンスが検索されます。

```
result = search(:node, "hostname:myhost")
```

検索によって、ホスト名が `myhost` であるインスタンスオブジェクトのリストが返されます。たとえば、最初のインスタンスのオペレーティングシステムが必要な場合、クエリは `result[0][:os]` で表すことになります。クエリで複数のオブジェクトが返される場合は、それらのオブジェクトのリストを取得して、必要な情報を得ることができます。

レシピで検索を使用する方法の詳細は、使用しているのが Linux スタックか Windows スタックかによって異なります。以下のトピックでは、両方のスタックタイプの例を示しています。

トピック

- Linux スタックでの検索の使用
- Windows スタックでの検索の使用

Linux スタックでの検索の使用

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

この例は、1 つの PHP アプリケーションサーバーが属する Linux スタックに基づいています。Chef の検索を使用してサーバーのパブリック IP アドレスを取得し、アドレスを /tmp ディレクトリのファイルに保存します。基本的には「属性値の直接取得」と同じ情報をノードオブジェクトから取得しますが、コードは大幅に簡素になり、スタック設定およびデプロイ属性の構造の詳細に依存しません。

以下に、この例のスタックを作成する方法を簡単に示します。詳細については、「新しいスタックを作成する」を参照してください。

> **Note**
>
> OpsWorks スタックインスタンスでカスタムレシピを実行したことがない場合は、まずこのLinux インスタンスでのレシピの実行例を実行する必要があります。

Stack を作成する

1. OpsWorks スタックコンソールを開いて [Add Stack] をクリックします。
2. 次の設定を指定し、その他の設定はデフォルト値を受け入れて、[Add Stack] をクリックします。

   - Name (名前) – SearchJSON
   - Default SSH key (デフォルト SSH キー) - Amazon EC2 キーペア

   Amazon EC2 キーペアの作成が必要な場合は、「Amazon EC2 Key Pairs」(Amazon EC2 キーペア) を参照してください。キーペアがインスタンスと同じ AWS リージョンに属している必要があることに注意してください。この例では、米国西部 (オレゴン) リージョンを使用します。
3. [Add a layer] (レイヤーの追加) をクリックし、デフォルト設定でスタックに [add a PHP App Server layer] (PHP アプリケーションサーバーレイヤー) を追加します。
4. デフォルト設定でレイヤーに 24/7 インスタンスを追加し、起動します。

クックブックをセットアップするには

1. opsworks_cookbooks 内に searchjson という名前のディレクトリを作成し、そこに移動します。
2. 以下の内容で metadata.rb ファイルを作成し、opstest に保存します。

```
name "searchjson"
version "0.1.0"
```

3. recipes 内に searchjson ディレクトリを作成します。
4. 次のレシピで default.rb ファイルを作成し、recipes ディレクトリに保存します。

```
phpserver = search(:node, "layers:php-app").first
Chef::Log.info("**********The public IP address is: '#{phpserver[:ip]}'**********")

file "/tmp/ip_addresses" do
  content "#{phpserver[:ip]}"
  mode 0644
  action :create
end
```

Linux スタックの場合、node 検索インデックスがサポートされています。レシピによって、このインデックスが使用されて、php-app レイヤーのインスタンスのリストが取得されます。レイヤーのインスタンスは 1 つのみであることがわかっているため、レシピによって最初のインスタンスが phpserver に渡されます。レイヤーに複数のインスタンスがある場合は、それらのインスタンスのリストを取得して、必要な情報を得ることができます。リストの各オブジェクトは、インスタンスの属性のセットが保存されているハッシュテーブルです。ip 属性をインスタンスのパブリック IP アドレスに設定しているため、以降のレシピコードではそのアドレスを phpserver[:ip] として参照できます。

Chef ログへのメッセージの追加後、レシピによって file リソースが使用されて、ip_addresses という名前のファイルが作成されます。content 属性は phpserver[:ip] の文字列表現で設定します。Chef によって ip_addresses が作成されるとき、その文字列がファイルに追加されます。

5. opsworks_cookbooks の .zip アーカイブを作成して [アーカイブを Amazon S3 バケットにアップロードし、アーカイブを公開して、アーカイブの URL を記録しておきます。クックブックリポジトリの詳細については、「クックブックリポジトリ」を参照してください。

Amazon S3 バケットに配信されるコンテンツには、カスタマーコンテンツが含まれている場合があります。機密データの削除の詳細については、「S3 バケットを空にする方法」または「S3 バケットを削除する方法」を参照してください。

これで、クックブックをインストールし、レシピを実行できるようになりました。

レシピを実行するには

1. カスタムクックブックを有効にするようにスタックを編集し、以下の設定を指定します。

   - Repository type (リポジトリタイプ) – Http Archive (Http アーカイブ)
   - Repository URL (リポジトリの URL) - 前の手順で記録したクックブックアーカイブ URL

   その他の設定にはデフォルト値を使用し、[Save] をクリックしてスタック設定を更新します。
2. カスタムレイヤー設定を編集し、レイヤーのセットアップイベントに を割り当てsearchjson::defaultます。 OpsWorks スタックは、インスタンスの起動後、またはセットアップイベントを明示的にトリガーした場合にレシピを実行します。
3. [Update Custom Cookbooks] スタックコマンドを実行します。スタックのインスタンスにあるカスタムクックブックリポジトリの最新バージョンがインストールされます。以前のバージョンのリポジトリがある場合は、このコマンドによって上書きされます。
4. Setup スタックコマンドを実行してレシピを実行します。このコマンドによってインスタンスの Setup イベントがトリガーされ、`searchjson::default` が実行されます。[Running command setup page] を開いたままにしておきます。

レシピが正常に実行された後で、それを検証できます。

searchjson を検証するには

1. 最初のステップは、最新の Setup イベントの Chef ログを調べることです。[Running command setup page] (コマンドセットアップを実行ページ) で、php-app1 インスタンスの [Log] (ログ) 列の [show] (表示) をクリックすると、ログが表示されます。下にスクロールすると、中央近くに次のようなログメッセージが表示されます。

```
...
[2014-09-05T17:08:41+00:00] WARN: Previous
 bash[logdir_existence_and_restart_apache2]: ...
[2014-09-05T17:08:41+00:00] WARN: Current
 bash[logdir_existence_and_restart_apache2]: ...
[2014-09-05T17:08:41+00:00] INFO: **********The public IP address is:
 '192.0.2.0'**********
```

```
[2014-09-05T17:08:41+00:00] INFO: Processing directory[/etc/sysctl.d] action create
 (opsworks_initial_setup::sysctl line 1)
...
```

2. SSH を使用してインスタンスにログインし、/tmp の内容を一覧表示します。この一覧には、IP アドレスが含まれている ip_addresses という名前のファイルがあるはずです。

Windows スタックでの検索の使用

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックには、Windows スタックで検索を使用するための 2 つのオプションがあります。

- 標準の Chef の属性のセットのクエリを実行するために使用できる node 検索インデックス。

  を使用する検索コードを持つ既存のレシピがある場合node、通常は変更なしで OpsWorks スタックスタックで動作します。
- OpsWorks スタックに固有の属性と一部の標準属性のセットのクエリに使用できる検索インデックスの追加セット。

  これらのインデックスについては、「Windows OpsWorks スタックでのスタック固有の検索インデックスの使用」で説明しています。

ホスト名や IP アドレスなど標準の情報を取得するには、node を使用することをお勧めします。そのアプローチにより、レシピは標準の Chef 手法に従うようになります。 OpsWorks スタック検索インデックスを使用して、 OpsWorks スタックに固有の情報を取得します。

トピック

- Windows スタックでのノード検索インデックスの使用
- Windows OpsWorks スタックでのスタック固有の検索インデックスの使用

Windows スタックでのノード検索インデックスの使用

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> この例では、「Windows インスタンスでのレシピの実行」の例を実行済みであることを前提としています。実行済みでない場合は、最初にその例を実行する必要があります。特に、インスタンスへの RDP アクセスを有効にする方法について説明しています。

1 つのインスタンスが属するカスタムレイヤーから成る Windows スタックに基づいています。Chef の検索で node 検索インデックスを使用してサーバーのパブリック IP アドレスを取得し、アドレスを `C:\tmp` ディレクトリのファイルに保存します。以下に、この例のスタックを作成する方法を簡単に示します。詳細については、「新しいスタックを作成する」を参照してください。

Stack を作成する

1. OpsWorks スタックコンソールを開いて [Add Stack] を選択します。
2. 以下の設定を指定し、その他の設定はデフォルト値を受け入れて、[Add Stack] を選択します。
   - Name (名前) – NodeSearch
   - Region (リージョン) – 米国西部 (オレゴン)

     この例はいずれのリージョンでも動作しますが、チュートリアルでは米国西部 (オレゴン) を使用することをお勧めします。
   - Default operating system (デフォルトのオペレーティングシステム) – Microsoft Windows Server 2012 R2
3. [Add a layer] を選択し、以下の設定を使用してスタックにカスタムレイヤーを追加します。
   - Name (名前) – IPTest

- Short name (短縮名) – iptest

4. デフォルト設定で IPTestレイヤーに 24/7 t2.micro インスタンスを追加し、起動します。そのインスタンスの名前は iptest1 になります。

   OpsWorks スタックは、このインスタンスに自動的に AWS-OpsWorks-RDP-Serverを割り当てます。これにより、承認されたユーザーはインスタンスにログインできます。

5. [Permissions]、[Edit]、[SSH/RDP]、[sudo/admin] の順に選択します。通常のユーザーは、インスタンスにログインするために、AWS-OpsWorks-RDP-Server セキュリティグループに加えて、この権限が必要です。

> **Note**
>
> 管理者としてログインすることもできますが、それには別の手順が必要です。詳細については、「RDP でのログイン」を参照してください。

クックブックをセットアップするには

1. nodesearch という名前のディレクトリを作成し、そのディレクトリに移動します。
2. 以下の内容で metadata.rb ファイルを作成し、opstest に保存します。

```
name "nodesearch"
version "0.1.0"
```

3. recipes 内に nodesearch ディレクトリを作成します。
4. 次のレシピで default.rb ファイルを作成し、recipes ディレクトリに保存します。

```
directory 'C:\tmp' do
  rights :full_control, 'Everyone'
  recursive true
  action :create
end

windowsserver = search(:node, "hostname:iptest*").first
Chef::Log.info("**********The public IP address is:
 '#{windowsserver[:ipaddress]}'**********")
```

```
file 'C:\tmp\addresses.txt' do
  content "#{windowsserver[:ipaddress]}"
  rights :full_control, 'Everyone'
  action :create
end
```

このレシピでは、以下のような処理を実行します。

1. ディレクトリリソースを使用して、ファイルの C:\tmp ディレクトリを作成します。

   このリソースの詳細については、「例 3: ディレクトリの作成」を参照してください。

2. Chef の検索で node 検索インデックスを使用して、ノード (インスタンス) と iptest で始まるホスト名のリストを取得します。

   レイヤーの短縮名に整数を追加することでホスト名を作成する、デフォルトのテーマを使用する場合、このクエリによって IPTestレイヤーのすべてのインスタンスが返されます。この例では、レイヤーのインスタンスは 1 つのみであることがわかっているため、レシピによって最初のインスタンスが windowsserver に渡されます。複数のインスタンスがある場合は、それらのインスタンスのリストを取得できます。

3. IP アドレスを含むメッセージをこの実行のために Chef のログに追加します。

   windowsserver オブジェクトはハッシュテーブルであるため、その ipaddress 属性がインスタンスのパブリック IP アドレスに設定されているため、以降のレシピコードでそのアドレスを windowsserver[:ipaddress] として参照できます。レシピによって、対応する文字列がメッセージに挿入され、Chef ログに追加されます。

4. file のリソースを使用して、その IP アドレスを含むファイルを C:\tmp\addresses.txt という名前で作成します。

   リソースの content 属性には、ファイルに追加する内容 (この場合はパブリック IP アドレス) を指定します。

5. nodesearch の .zip アーカイブを作成してアーカイブを S3 バケットにアップロードし、アーカイブを公開して、アーカイブの URL を記録しておきます。

   Amazon S3 バケットに配信されるコンテンツには、カスタマーコンテンツが含まれている場合があります。機密データの削除の詳細については、「S3 バケットを空にする方法」または「S3 バケットを削除する方法」を参照してください。

これで、クックブックをインストールし、レシピを実行できるようになりました。

クックブックをインストールし、レシピを実行するには

1. カスタムクックブックを有効にするようにスタックを編集し、以下の設定を指定します。

   - Repository type (リポジトリタイプ) – S3 Archive (アーカイブ)
   - Repository URL (リポジトリの URL) - 前の手順で記録したクックブックアーカイブ URL

   その他の設定ではデフォルト値を受け入れ、[Save] を選択してスタック設定を更新します。
2. [Update Custom Cookbooks] スタックコマンドを実行します。カスタムクックブックの最新バージョンがスタックのインスタンス (オンラインインスタンスを含む) にインストールされます。以前のバージョンのクックブックがある場合は、このコマンドによって上書きされます。
3. カスタムクックブックの更新が終了したら、実行するレシピを **nodesearch::default** に設定してレシピの実行スタックコマンドを実行することで、レシピを実行します。このコマンドによって Chef 実行が開始され、レシピで構成される実行リストが渡されます。execute_recipes ページを開いたままにします。

レシピが正常に実行された後で、それを検証できます。

nodesearch を検証するには

1. 最新の execute_recipes イベントについて Chef ログを調べます。[Running command execute_recipes page] (コマンドexecute_recipes実行ページ) で、iptest1 インスタンスの [Log] (ログ) 列の [show] (表示) を選択すると、ログが表示されます。下にスクロールすると、末尾近くに以下のようなログメッセージが見つかります。

```
...
[2015-05-13T18:55:47+00:00] INFO: Storing updated cookbooks/nodesearch/recipes/
default.rb in the cache.
[2015-05-13T18:55:47+00:00] INFO: Storing updated cookbooks/nodesearch/metadata.rb
 in the cache.
[2015-05-13T18:55:47+00:00] INFO: **********The public IP address is:
 '192.0.0.1'**********
[2015-05-13T18:55:47+00:00] INFO: Processing directory[C:\tmp] action create
 (nodesearch::default line 1)
[2015-05-13T18:55:47+00:00] INFO: Processing file[C:\tmp\addresses.txt] action
 create (nodesearch::default line 10)
...
```

2. RDP を使用してインスタンスにログインし、C:\tmp\addresses.txt の内容を調べます。

Windows OpsWorks スタックでのスタック固有の検索インデックスの使用

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> この例では、「Windows インスタンスでのレシピの実行」の例を実行済みであることを前提としています。実行済みでない場合は、最初にその例を実行する必要があります。特に、インスタンスへの RDP アクセスを有効にする方法について説明しています。

OpsWorks スタックには、 に加えて次の検索インデックスが用意されていますnode。

- aws_opsworks_stack – スタック設定。
- aws_opsworks_layer – スタックのレイヤー設定。
- aws_opsworks_instance – スタックのインスタンス設定。
- aws_opsworks_app – スタックのアプリケーション設定。
- aws_opsworks_user – スタックのユーザー設定。
- aws_opsworks_rds_db_instance – 登録済み RDS インスタンスの接続情報。

これらのインデックスには標準の Chef 属性が含まれていますが、主に OpsWorks スタック固有の属性を取得することを目的としています。例えば、aws_opsworks_instance には、status など、インスタンスのステータスを渡す online 属性が含まれます。

> **Note**
>
> 可能であれば node を使用して、レシピが標準の Chef 手法に従うようにすることをお勧めします。例については、Windows スタックでのノード検索インデックスの使用を参照してください。

この例では、 スタックインデックスを使用して OpsWorks OpsWorks スタック固有の属性の値を取得する方法を示します。この例は、1 つのインスタンスが属するカスタムレイヤーから成る Windows スタックに基づいています。Chef 検索を使用してインスタンスの OpsWorks スタック ID を取得し、結果を Chef ログに配置します。

以下に、この例のスタックを作成する方法を簡単に示します。詳細については、「新しいスタックを作成する」を参照してください。

Stack を作成する

1. OpsWorks スタックコンソールを開いて [+ Stack] を選択します。以下の設定を指定し、その他の設定はデフォルト値を受け入れて、[Add Stack] を選択します。

   - Name (名前) – IDSearch
   - リージョン – 米国西部 (オレゴン)

     この例はいずれのリージョンでも動作しますが、チュートリアルでは米国西部 (オレゴン) を使用することをお勧めします。
   - Default operating system (デフォルトのオペレーティングシステム) – Microsoft Windows Server 2012 R2
2. [Add a layer] を選択し、以下の設定を使用してスタックにカスタムレイヤーを追加します。

   - Name (名前) – IDCheck
   - Short name (短縮名) – idcheck
3. デフォルト設定で IDCheckレイヤーに 24/7 t2.micro インスタンスを追加し、起動します。そのインスタンスの名前は iptest1 になります。

   OpsWorks スタックは、このインスタンスに自動的に `AWS-OpsWorks-RDP-Server`を割り当てます。 RDP アクセスの有効化 は、許可されたユーザーがインスタンスにログインできるようにするインバウンドルールをこのセキュリティグループに追加する方法について説明します。

4. [Permissions]、[Edit]、[SSH/RDP]、[sudo/admin] の順に選択します。通常のユーザーは、インスタンスにログインするために、AWS-OpsWorks-RDP-Server セキュリティグループに加えて、この権限が必要です。

> **Note**
>
> 管理者としてログインすることもできますが、それには別の手順が必要です。詳細については、「RDP でのログイン」を参照してください。

クックブックをセットアップするには

1. idcheck という名前のディレクトリを作成し、そのディレクトリに移動します。
2. 以下の内容で metadata.rb ファイルを作成し、opstest に保存します。

```
name "idcheck"
version "0.1.0"
```

3. recipes 内に idcheck ディレクトリを作成し、以下のレシピを保存した default.rb ファイルをそのディレクトリに追加します。

```
windowsserver = search(:aws_opsworks_instance, "hostname:idcheck*").first
Chef::Log.info("**********The public IP address is:
 '#{windowsserver[:instance_id]}'**********")
```

このレシピでは、aws_opsworks_instance 検索インデックスを持つChef検索を使用して、スタック内のホスト名が idcheck で始まる各インスタンスの [instance attributes (インスタンス属性)] を取得します。レイヤーの短縮名に整数を追加することでホスト名を作成する、デフォルトのテーマを使用する場合、このクエリによって IDCheckレイヤーのすべてのインスタンスが返されます。この例では、レイヤーのインスタンスは 1 つのみであることがわかっているため、レシピによって最初のインスタンスが windowsserver に渡されます。複数のインスタンスがある場合は、それらのインスタンスのリストを取得できます。

レシピでは、スタックにこのホスト名のインスタンスが 1 つしかないことがわかっているため、最初の結果が正しくなります。スタックに複数のインスタンスがある場合は、他の属性で検索すると、複数の結果が返されることがあります。インスタンスの属性のリストについては、「インスタンスデータバッグ (aws_opsworks_instance)」を参照してください。

インスタンス属性は基本的にハッシュテーブルであり、インスタンスの OpsWorks スタック ID は `instance_id` 属性に割り当てられるため、ID を と参照できますwindowsserver[:instance_id]。レシピによって、対応する文字列がメッセージに挿入され、Chef ログに追加されます。

4. `ipaddress` クックブックの `.zip` アーカイブを作成し、アーカイブを Amazon S3 バケットにアップロードして、アーカイブの URL を記録しておきます。クックブックリポジトリの詳細については、「クックブックリポジトリ」を参照してください。

   Amazon S3 バケットに配信されるコンテンツには、カスタマーコンテンツが含まれている場合があります。機密データの削除の詳細については、「S3 バケットを空にする方法」または「S3 バケットを削除する方法」を参照してください。

これで、クックブックをインストールし、レシピを実行できるようになりました。

クックブックをインストールし、レシピを実行するには

1. カスタムクックブックを有効にするようにスタックを編集し、以下の設定を指定します。

   - Repository type (リポジトリタイプ) – S3 Archive (アーカイブ)
   - Repository URL (リポジトリの URL) - 前の手順で記録したクックブックアーカイブ URL

   その他の設定ではデフォルト値を受け入れ、[Save] を選択してスタック設定を更新します。
2. [Update Custom Cookbooks] スタックコマンドを実行します。カスタムクックブックの最新バージョンがスタックのインスタンス (オンラインインスタンスを含む) にインストールされます。以前のバージョンのクックブックがある場合は、このコマンドによって上書きされます。
3. カスタムクックブックの更新が終了したら、実行するレシピ を **`idcheck::default`** に設定してレシピの実行スタックコマンドを実行することで、レシピを実行します。このコマンドによって Chef 実行が開始され、レシピで構成される実行リストが渡されます。execute_recipes ページを開いたままにします。

レシピが正常に実行された後、最新の execute_recipes イベントの Chef ログを調べることで、その結果を確認できます。[Running command execute_recipes page] (コマンド execute_recipes 実行ページ) で、iptest1 インスタンスの [Log] (ログ) 列の [show] (表示) を選択すると、ログが表示されます。下にスクロールすると、末尾近くに以下のようなログメッセージが見つかります。

```
...
[2015-05-13T20:03:47+00:00] INFO: Storing updated cookbooks/nodesearch/recipes/
default.rb in the cache.
[2015-05-13T20:03:47+00:00] INFO: Storing updated cookbooks/nodesearch/metadata.rb in
 the cache.
[2015-05-13T20:03:47+00:00] INFO: **********The instance ID is: 'i-8703b570'**********
[2015-05-13T20:03:47+00:00] INFO: Chef Run complete in 0.312518 seconds
...
```

Linux インスタンスでの外部クックブック Berkshelf の使用

Important

この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Note

Berkshelf は Chef 11.10 Linux スタックにのみ使用できます。

クックブックを実装する前に、Chef Community Cookbooks を確認してください。ここには、Chef コミュニティのメンバーによってさまざまな目的で作成されたクックブックがあります。これらのクックブックの多くは、変更せずに OpsWorks スタックで使用できるため、すべてのコードを自分で実装するのではなく、一部のタスクで活用できます。

インスタンスで外部クックブックを使用するには、それをインストールし、依存関係を管理する方法が必要です。最適なアプローチは、依存関係マネージャをサポートする、Berkshelf という名前のクックブックを実装することです。Berkshelf は スタックインスタンスを含む Amazon EC2 OpsWorks インスタンスで動作しますが、Test Kitchen や Vagrant でも動作するように設計されています。ただし、Vagrant の使用法は OpsWorks スタックの使用法と少し異なるため、このトピックには両方のプラットフォームの例が含まれています。Berkshelf の使用方法の詳細については、「Berkshelf」を参照してください。

トピック

- Test Kitchen および Vagrant での Berkshelf の使用
- スタックでの Berkshelf OpsWorks の使用

Test Kitchen および Vagrant での Berkshelf の使用

この例では、Berkshelf を使用して getting-started コミュニティクックブックをインストールし、そのレシピを実行する方法を示します。このレシピは、短いテキストファイルをインスタンスのホームディレクトリにインストールします。

Berkshelf をインストールし、クックブックを初期化するには

1. ワークステーションで、Berkshelf gem を次のようにインストールします。

   ```
   gem install berkshelf
   ```

   ワークステーションによっては、このコマンドで sudo が必要になる場合があります。また、RVM などの Ruby 環境マネージャを使用することもできます。Berkshelf が正常にインストールされたことを確認するには、`berks --version` を実行します。
2. このトピックのクックブックは、external_cookbook という名前です。以前のトピックで採用した手動のアプローチの代わりに、Berkshelf を使用して、初期化されたクックブックを作成できます。そのためには、`opsworks_cookbooks` ディレクトリに移動して、次のコマンドを実行します。

   ```
   berks cookbook external_cookbook
   ```

   このコマンドによって、`external_cookbook` ディレクトリといくつかの標準的な Chef および Test Kitchen サブディレクトリ (`recipes`、`test` など) が作成されます。さらに、次のような多数の標準ファイルのデフォルトバージョンも作成されます。

   - `metadata.rb`
   - Vagrant、Test Kitchen、および Berkshelf の設定ファイル
   - `default.rb` ディレクトリにある空の `recipes` レシピ

> **Note**
>
> `kitchen init` を実行する必要はありません。それらのタスクは `berks cookbook` コマンドによって処理されます。

3. `kitchen converge` を実行します。新しく作成したクックブックは、この時点では興味深いことを何もしませんが、集中を行います。

> **Note**
>
> また、`berks init` を使用して、Berkshelf を使用するように既存のクックブックを初期化できます。

Berkshelf を使用してクックブックの外部依存関係を管理するには、クックブックのルートディレクトリに `Berksfile` が含まれている必要があります。これは、Berkshelf がどのように依存関係を管理するかを指定する設定ファイルです。`berks cookbook` クックブックを作成するために `external_cookbook` を使用した場合、以下の内容の `Berksfile` が作成されます。

```
source "https://supermarket.chef.io"
metadata
```

このファイルには、以下の宣言があります。

- `source` – クックブックソースの URL。

  Berksfile は、任意の数の `source` 宣言を持つことができます。各宣言は、依存クックブックのデフォルトのソースを指定します。クックブックのソースを明示的に指定しない場合、Berkshelf はデフォルトのリポジトリで同じ名前のクックブックを探します。デフォルト Berksfile には、コミュニティクックブックリポジトリを指定する単一の `source` 属性が含まれています。そのリポジトリには getting-started クックブックが含まれているので、行を変更する必要はありません。
- `metadata` – クックブックの `metadata.rb` ファイルで宣言されているクックブックの依存関係を取り込むように Berkshelf に指示します。

また、後で説明するように、cookbook 属性を取り込むことによって、Berksfile で依存クックブックを宣言できます。

クックブックの依存関係を宣言するには、次の 2 つの方法があります。

- cookbook 宣言を Berksfile に含めます。

  これは OpsWorks スタックで使用されるアプローチです。たとえば、この例で使用されている getting-started クックブックを指定するには、Berksfile に cookbook "getting-started" を含めます。そうすると、Berkshelf はデフォルトリポジトリでその名前のクックブックを探します。また、cookbook を使用して、明示的にクックブックソースと特定のバージョンを指定することもできます。詳細については「Berkshelf」を参照してください。

- metadata 宣言を Berksfile に含め、依存関係を metadata.rb で宣言します。

  この宣言は、metadata.rb で宣言されているクックブックの依存関係を取り込むように Berkshelf に指示します。たとえば、getting-started の依存関係を宣言するには、クックブックの depends 'getting-started' ファイルに metadata.rb 宣言を追加します。

この例では、 OpsWorks スタックとの一貫性を保つために、最初のアプローチを使用します。

getting-started クックブックをインストールするには

1. デフォルト Berksfile を編集して、metadata 宣言を cookbook の getting-started 宣言に置き換えます。内容は次のようになります。

   ```
   source "https://supermarket.chef.io"

   cookbook 'getting-started'
   ```

2. berks install を実行すると、コミュニティクックブックリポジトリからワークステーションの Berkshelf ディレクトリ (通常は ~/.berkshelf) に getting-started クックブックがダウンロードされます。このディレクトリは、多くの場合、単に Berkshelf と呼ばれます。Berkshelf の cookbooks ディレクトリを見ると、クックブックのディレクトリ (getting-started-0.4.0getting-started- のような名前のディレクトリ) が表示されるはずです。

3. external_cookbook::default 実行リスト内の .kitchen.yml を getting-started::default に置き換えます。この例は external_cookbook のどのレシピも実

行しません。基本的には、単に getting-started クックブックを使用するための手段です。.kitchen.yml ファイルは次のようになっているはずです。

```
---
driver:
  name: vagrant

provisioner:
  name: chef_solo

platforms:
  - name: ubuntu-12.04

suites:
  - name: default
    run_list:
      - recipe[getting-started::default]
    attributes:
```

4. kitchen converge を実行してから kitchen login を使用してインスタンスにログインします。ログインディレクトリには、次のような内容の chef-getting-started.txt という名前のファイルが含まれているはずです。

```
Welcome to Chef!

This is Chef version 11.12.8.
Running on ubuntu.
Version 12.04.
```

Test Kitchen によって、インスタンスの /tmp/kitchen/cookbooks ディレクトリ内のクックブックがインストールされます。このディレクトリの内容を一覧表示すると、external_cookbook と getting-started という 2 つのクックブックが表示されます。

5. kitchen destroy を実行して、インスタンスをシャットダウンします。次の例では、OpsWorks スタックインスタンスを使用します。

スタックでの Berkshelf OpsWorks の使用

OpsWorks スタックは、オプションで Chef 11.10 スタックの Berkshelf をサポートします。スタックで Berkshelf を使用するには、以下の操作を実行する必要があります。

- スタックの Berkshelf を有効にします。

  OpsWorks 次に、スタックはスタックのインスタンスに Berkshelf をインストールする詳細を処理します。
- クックブックリポジトリのルートディレクトリに Berksfile を追加します。

  Berksfile には、すべての依存クックブックの `source` および `cookbook` 宣言が含まれている必要があります。

OpsWorks スタックがインスタンスにカスタムクックブックリポジトリをインストールすると、Berkshelf を使用して、リポジトリの Berksfile で宣言されている依存クックブックをインストールします。詳細については、「Berkshelf の使用」を参照してください。

この例では、Berkshelf を使用して、 OpsWorks スタックインスタンスに入門コミュニティクックブックをインストールする方法を示します。また、指定したディレクトリ内にファイルを作成する、createfile カスタムクックブックのバージョンもインストールします。createfile の動作の詳細については、「クックブックからのファイルのインストール」を参照してください。

> **Note**
>
> OpsWorks スタックスタックにカスタムクックブックを初めてインストールする場合は、まずLinux インスタンスでのレシピの実行例を参照してください。

以下にまとめたように、スタックの作成から始めます。詳細については、「新しいスタックを作成する」を参照してください。

Stack を作成する

1. OpsWorks スタックコンソールを開いて [Add Stack] をクリックします。
2. 次の設定を指定し、その他の設定はデフォルト値を受け入れて、[Add Stack] をクリックします。

   - Name (名前) – BerksTest

- Default SSH key (デフォルト SSH キー) - Amazon EC2 キーペア

  Amazon EC2 キーペアの作成が必要な場合は、「Amazon EC2 Key Pairs」(Amazon EC2 キーペア) を参照してください。キーペアがインスタンスと同じ AWS リージョンに属している必要があることに注意してください。この例では、デフォルトに米国西部(オレゴン) リージョンを使用します。

3. [Add a layer] をクリックし、次の設定を使用してスタックにカスタムレイヤーを追加します。

   - Name (名前) – BerksTest
   - Short name (短縮名) – berkstest

   この例では、実際には任意のレイヤータイプを使用できます。しかし、この例では他のレイヤーによってインストールされるパッケージは必要ないので、カスタムレイヤーが最もシンプルなアプローチです。

4. デフォルト設定で BerksTestレイヤーに 24/7 インスタンスを追加します。ただし、まだ起動しないでください。

OpsWorks スタックでは、クックブックは標準のディレクトリ構造を持つリモートリポジトリにある必要があります。次に、 スタックにダウンロード情報を提供します OpsWorks 。これにより、起動時にスタックの各インスタンスにリポジトリが自動的にダウンロードされます。わかりやすくするために、この例のリポジトリはパブリック Amazon S3 アーカイブですが、 OpsWorks スタックは HTTP アーカイブ、Git リポジトリ、および Subversion リポジトリもサポートしています。詳細については、「クックブックリポジトリ」を参照してください。

Amazon S3 バケットに配信されるコンテンツには、カスタマーコンテンツが含まれている場合があります。機密データの削除の詳細については、「S3 バケットを空にする方法」または「S3 バケットを削除する方法」を参照してください。

クックブックリポジトリを作成するには

1. opsworks_cookbooks ディレクトリに berkstest_cookbooks という名前のディレクトリを作成します。このディレクトリは、リポジトリにアップロードするため、都合のよい任意の場所に作成することもできます。
2. 以下の内容で、Berksfile という名前のファイルを berkstest_cookbooks に追加します。

```
source "https://supermarket.chef.io"

cookbook 'getting-started'
```

このファイルは、getting-started クックブックの依存関係を宣言し、それをコミュニティクックブックサイトからダウンロードするように Berkshelf に指示します。

3. 以下を含む createfile に berkstest_cookbooks ディレクトリを追加します。

   - 以下の内容の metadata.rb ファイル。

     ```
     name "createfile"
     version "0.1.0"
     ```

   - 以下のコンテンツを持つ files/default ファイルが含まれている example_data.json ディレクトリ。

     ```
     {
       "my_name" : "myname",
       "your_name" : "yourname",
       "a_number" : 42,
       "a_boolean" : true
     }
     ```

     ファイルの名前および内容は任意です。レシピは単に、指定された場所にファイルをコピーします。

   - 以下のレシピコードを持つ recipes ファイルが含まれている default.rb ディレクトリ。

     ```
     directory "/srv/www/shared" do
       mode 0755
       owner 'root'
       group 'root'
       recursive true
       action :create
     end

     cookbook_file "/srv/www/shared/example_data.json" do
       source "example_data.json"
       mode 0644
     ```

```
  action :create_if_missing
end
```

このレシピは、/srv/www/shared を作成し、クックブックの example_data.json ディレクトリからそのディレクトリに files をコピーします。

4. berkstest_cookbooks の .zip アーカイブを作成して [アーカイブを Amazon S3 バケットにアップロードし、アーカイブを公開して、アーカイブの URL を記録しておきます。

これで、クックブックをインストールし、レシピを実行できるようになりました。

クックブックをインストールし、レシピを実行するには

1. カスタムクックブックを有効にするようにスタックを編集し、以下の設定を指定します。

   - Repository type (リポジトリタイプ) – Http Archive (Http アーカイブ)
   - Repository URL (リポジトリの URL) – 前の手順で記録したクックブックのアーカイブの URL
   - Manage Berkshelf (Berkshelf の管理) – Yes (はい)

   最初の 2 つの設定は、クックブックリポジトリをインスタンスにダウンロードするために必要な情報を OpsWorks スタックに提供します。最後の設定は、Berkshelf サポートを有効にします。これによって、getting-started クックブックがインスタンスにダウンロードされます。その他の設定ではデフォルト値を受け入れ、[Save] をクリックしてスタック設定を更新します。
2. BerksTestレイヤーを編集して、レイヤーのSetup ライフサイクルイベントに以下のレシピを追加します。

   - getting-started::default
   - createfile::default
3. インスタンスを起動します。Setup イベントは、インスタンスの起動が完了した後に発生します。 OpsWorks スタックはクックブックリポジトリをインストールし、Berkshelf を使用して入門クックブックをダウンロードし、 getting-started::defaultおよび を含むレイヤーのセットアップおよびデプロイレシピを実行しますcreatefile::default。
4. インスタンスがオンラインになったら、SSH を使用してログインします。次のように表示されます。

   - /srv/www/shared には example_data.json が含まれている必要があります。
   - /root には chef-getting-started.txt が含まれている必要があります。

OpsWorks スタックはレシピをルートとして実行するため、getting-started はホーム/rootディレクトリではなく ディレクトリに ファイルをインストールします。

SDK for Ruby を使用する: Amazon S3 からファイルをダウンロード

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

AWS サービスとのやり取りのように、Chef リソースでは処理できないタスクがあります。たとえば、ファイルをリモートで保存し、レシピによってインスタンスにダウンロードすることが望ましい場合があります。その場合は、remote_file リソースを使用して、リモートサーバーからファイルをダウンロードできます。ただし、Amazon S3 bucket (Amazon S3のバケット) にファイルを保存している場合は、ACL がオペレーションを許可している場合にのみ、remote_file はそれらのファイルをダウンロードすることができます。

レシピは、AWS SDK for Ruby を使用して、ほとんどの AWS サービスにアクセスできます。このトピックでは、SDK for Ruby を使用して S3 バケットからファイルを にダウンロード する方法について説明します。

> **Note**
>
> AWS SDK for Ruby を使用して暗号化と復号を処理する方法の詳細については、「AWS::S3::S3Object」を参照してください。Amazon S3 バケットに配信されるコンテンツには、カスタマーコンテンツが含まれている場合があります。機密データの削除の詳細については、「S3 バケットを空にする方法」または「S3 バケットを削除する方法」を参照してください。

トピック

- Vagrant インスタンスでの SDK for Ruby を使用します

- スタック Linux インスタンスでの SDK for Ruby OpsWorks の使用
- スタック Windows インスタンスでの SDK for Ruby OpsWorks の使用

Vagrant インスタンスでの SDK for Ruby を使用します

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このトピックでは、Vagrant インスタンスで実行されているレシピで AWS SDK for Ruby を使用して Amazon S3 からファイルをダウンロードする方法を説明します。開始する前に、レシピが Amazon S3 にアクセスできるようにするアクセスキーとシークレットアクセスキーの一連の AWS 認証情報が必要です。

> **Important**
>
> この目的でルートアカウントの認証情報を使わないことを強くお勧めします。代わりに、適切なポリシーで ユーザーを作成し、レシピにこれらの認証情報を提供します。
> 認証情報を含むファイルを GitHub や Bitbucket の公開リポジトリにアップロードするなど、認証情報 (IAM ユーザーの認証情報も含む)を一般にアクセス可能な場所に置かないように注意してください。ご自分の認証情報が公開され、アカウントのセキュリティが侵害される恐れがあります。
> EC2Amazon EC2 インスタンスで実行されるレシピでは、「スタック Linux インスタンスでの SDK for Ruby OpsWorks の使用」で説明しているように、より便利なアプローチとして IAM ロールを使用できます。
> Amazon S3 バケットに配信されるコンテンツには、カスタマーコンテンツが含まれている場合があります。機密データの削除の詳細については、「S3 バケットを空にする方法」または「S3 バケットを削除する方法」を参照してください。

まだ適切な ユーザーが存在しない場合は、次のようにして作成できます。詳細については、[IAM とは]を参照してください。

> **Warning**
>
> IAM ユーザーは長期認証情報を保有するため、セキュリティ上のリスクが生じます。このリスクを軽減するために、これらのユーザーにはタスクの実行に必要な権限のみを付与し、不要になったユーザーは削除することをお勧めします。

IAM ユーザーを作成するには

1. にサインイン AWS マネジメントコンソール し、https://console.aws.amazon.com/iam/ で IAM コンソールを開きます。
2. ナビゲーションペインで ユーザー を選択し、必要に応じて ユーザーの追加 を選択して、新しい管理ユーザーを作成します。
3. 許可を設定 ページで、ポリシーを直接アタッチする を選択します。
4. 許可ポリシー の検索ボックスに **S3** と入力すると、Amazon S3 のポリシーが表示されます。

   AmazonS3ReadOnlyAccess 必要であれば、[AmazonS3FullAccess] などのより広範なアクセス権限を付与することもできますが、標準的な手法では必要なアクセス権限だけを付与します。この場合、レシピはファイルをダウンロードするだけなので、読み取り専用アクセスで十分です。
5. [次へ] を選択します。
6. ユーザーの作成 を選択します。
7. 次に、ユーザーのアクセスキーを作成します。IAM アクセスキーの詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「Managing access keys for IAM users」(IAM ユーザーのアクセスキーの管理) を参照してください。

次に、ダウンロードされるファイルを用意する必要があります。この例では、新たに作成した `myfile.txt` という名前の S3 バケットに `cookbook_bucket` という名前のファイルが保存してあることを前提としています。

ダウンロード用ファイルを提供するには

1. 以下のテキストを持つ `myfile.txt` という名前のファイルを作成し、ワークステーションの便利な場所に保存します。

   ```
   This is the file that you just downloaded from Amazon S3.
   ```

2. Amazon S3 console (Amazon S3 コンソール) で、[Standard] (標準) リージョンに cookbook_bucket という名前のバケットを作成し、バケットに myfile.txt をアップロードします。

クックブックを以下のようにセットアップします。

クックブックをセットアップするには

1. opsworks_cookbooks 内に s3bucket という名前のディレクトリを作成し、そこに移動します。
2. 「例 1: パッケージのインストール」で説明されているとおりに Test Kitchen を初期化および設定します。
3. .kitchen.yml のテキストを以下に置き換えます。

```
---
driver:
  name: vagrant

provisioner:
  name: chef_solo
  environments_path: ./environments

platforms:
  - name: ubuntu-14.04

suites:
  - name: s3bucket
    provisioner:
      solo_rb:
        environment: test
    run_list:
      - recipe[s3bucket::default]
    attributes:
```

4. s3bucket: recipes と environments にディレクトリを 2 つ追加します。
5. 以下の default_attributes セクションを持つ test.json という名前の環境ファイルを作成し、access_key および secret_keyの値をユーザーの対応するキーに置き換えます。クックブックの environments フォルダにファイルを保存します。

```
{
  "default_attributes" : {
    "cookbooks_101" : {
      "access_key": "AKIAIOSFODNN7EXAMPLE",
      "secret_key" : "wJalrXUtnFEMI/K7MDENG/bPxRfiCYEXAMPLEKEY"
    }
  },
  "chef_type" : "environment",
  "json_class" : "Chef::Environment"
}
```

インスタンスで実行されているレシピに認証情報を提供するには、さまざまな方法があります。重要な注意点は、誤ってキーを公開し、アカウントのセキュリティが侵害される可能性を減らす必要があることです。そのため、コードで明示的なキー値を使用することはお勧めできません。例では、代わりにキー値をノードオブジェクトに保存します。その場合、レシピはリテラル値を公開せずに、ノード構文を使用してキー値を参照できます。ノードオブジェクトにアクセスするには、ルート権限が必要です。そのため、キーが公開される可能性を制限できます。詳細については、「AWS アクセスキーを管理するためのベストプラクティス」を参照してください。

> **Note**
>
> 例では入れ子になった属性 (最初の要素は cookbooks_101) が使用されていることに注意してください。これにより、ノードオブジェクト内に他の access_key または secret_key 属性がある場合に、名前の競合の可能性が制限されます。

次のレシピは、myfile.text バケットから cookbook_bucket をダウンロードします。

```
gem_package "aws-sdk ~> 3" do
  action :install
end

ruby_block "download-object" do
  block do
    require 'aws-sdk'

    s3 = Aws::S3::Client.new(
```

```
          :access_key_id => "#{node['cookbooks_101']['access_key']}",
          :secret_access_key => "#{node['cookbooks_101']['secret_key']}")

    myfile = s3.bucket['cookbook_bucket'].objects['myfile.txt']
    Dir.chdir("/tmp")
    File.open("myfile.txt", "w") do |f|
      f.write(myfile.read)
      f.close
    end
  end
  action :run
end
```

レシピの最初の部分では、gem パッケージである SDK for Ruby をインストールします。gem_package リソースは、レシピや他のアプリケーションによって使用される gem をインストールします。

> **Note**
>
> インスタンスには 2 つの Ruby インスタンスがあり、このインスタンスは通常バージョンが異なります。1 つは Chef Client によって使用される専用インスタンスです。もう 1 つは、インスタンスで実行されているアプリケーションとレシピによって使用されます。gem パッケージをインストールする際に、この相違点を理解しておくことが重要です。gem をインストールするリソースには、gem_package と chef_gem という 2 つの種類があるためです。アプリケーションまたはレシピが gem パッケージを使用する場合には、gem_package でインストールします。chef_gem は、Chef クライアントが使用する gem パッケージに限り使用します。

レシピの残りの部分は、ruby_block リソースです。これには、ファイルをダウンロードする Ruby コードが含まれています。レシピは Ruby アプリケーションであるため、コードをレシピに直接記述できると考えられがちです。しかし、Chef 実行はリソースを実行する前にすべてのコードをコンパイルします。例のコードをレシピに直接記述すると、Ruby は `require 'aws-sdk'` リソースを実行する前に gem_package ステートメントを解決しようとします。SDK for Ruby はまだインストールされていないため、コンパイルは失敗します。

ruby_block リソースのコードは、そのリソースが実行されるまでコンパイルされません。この例では、ruby_block リソースが SDK for Ruby のインストールを終了した後で、gem_package リソースが実行されます。そのため、コードが正常に実行されます。

ruby_block 内のコードは、次のように動作します。

1. サービスインターフェイスを提供する、新しい Aws::S3 オブジェクトを作成します。

   アクセスキーとシークレットキーは、ノードオブジェクトに保存されている値を参照することによって指定されます。
2. S3 オブジェクトの bucket.objects アソシエーションを呼び出します。このアソシエーションは、myfile.txt を表す myfile という名前のAws::S3::Object オブジェクトを返します。
3. Dir.chdir を使用して、/tmp に作業ディレクトリを設定します。
4. myfile.txt という名前のファイルを開き、myfile の内容を書き込んで、ファイルを閉じます。

レシピを実行するには

1. 例のレシピで default.rb という名前のファイルを作成し、recipes ディレクトリに保存します。
2. kitchen converge を実行します。
3. kitchen login を実行してインスタンスにログインし、ls /tmp を実行します。いくつかの Test Kitchen ファイルおよびディレクトリと共に、myfile.txt が表示されるはずです。

   ```
   vagrant@s3bucket-ubuntu-1204:~$ ls /tmp
   install.sh  kitchen  myfile.txt  stderr
   ```

   ファイルの内容が正しいことを検証するために、cat /tmp/myfile.txt を実行することもできます。

完了したら、kitchen destroy を実行してインスタンスを終了します。

スタック Linux インスタンスでの SDK for Ruby OpsWorks の使用

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS

re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このトピックでは、 スタックの Linux OpsWorks インスタンスで SDK for Ruby を使用して Amazon S3 バケットからファイルをダウンロードする方法について説明します。 OpsWorks スタックは、すべての Linux インスタンスに SDK for Ruby を自動的にインストールします。ただし、サービスのクライアントオブジェクトを作成するときは、AWS の一連の認証情報 `AWS::S3.new` または他のサービスの同等の情報を指定する必要があります。

Amazon S3 バケットに配信されるコンテンツには、カスタマーコンテンツが含まれている場合があります。機密データの削除の詳細については、「S3 バケットを空にする方法」または「S3 バケットを削除する方法」を参照してください。

Vagrant インスタンスでの SDK for Ruby を使用します「」では、認証情報をノードオブジェクトに保存し、レシピコードで属性を参照することによって、認証情報が公開されるリスクを軽減する方法について説明しています。Amazon EC2 インスタンスでレシピを実行する場合は、[IAM ロール] の使用をお勧めします。

IAM ロールは、IAM ユーザーとほぼ同様に動作します。さまざまな AWS サービスを使用するためのアクセス許可を与えるポリシーがアタッチされています。ただし、ロールは個人ではなく Amazon EC2 インスタンスに割り当てます。そのようにすると、そのインスタンスで実行されているアプリケーションは、アタッチされたポリシーによって付与されたアクセス許可を取得できます。ロールを使用することで、認証情報はコード内に出現しなくなります。間接的に出現することもありません。このトピックでは、IAM ロールを使用して Amazon EC2 インスタンスで「Vagrant インスタンスでの SDK for Ruby を使用します」のレシピを実行する方法について説明します。

このレシピは、「例 9: Amazon EC2 インスタンスの使用」で説明したように、kitchen-ec2 ドライバーを使用して Test Kitchen で実行することができます。ただし、Amazon EC2 インスタンスに SDK for Ruby OpsWorks をインストールするのは少し複雑であり、 スタックで心配する必要はありません。すべての OpsWorks スタック Linux インスタンスには、デフォルトで SDK for Ruby がインストールされています。したがって、わかりやすくするために、この例では OpsWorks スタックインスタンスを使用します。

最初のステップは、IAM ロールをセットアップすることです。この例では、最も簡単なアプローチを取ります。つまり、最初のスタックの作成時に OpsWorks スタックが作成する Amazon EC2 ロールを使用します。その名前は `aws-opsworks-ec2-role` です。ただし、 OpsWorks スタックはそのロールにポリシーをアタッチしないため、デフォルトではアクセス許可を付与しません。

AmazonS3ReadOnlyAccess ポリシーを aws-opsworks-ec2-role ロールにアタッチして、適切な権限を付与する必要があります。ポリシーを IAM エンティティにアタッチする方法の詳細については、IAM ユーザーガイドの「IAM ID アクセス許可の追加 (コンソール)」を参照してください。

スタックを作成または更新する際に、ロールを指定します。「Linux インスタンスでのレシピの実行」で説明したように、カスタムレイヤーを持つスタックをセットアップします。ただし、1 つだけ追加の操作があります。スタックの追加ページで、デフォルトの IAM インスタンスプロファイルが aws-opsworks-ec2-role に設定されていることを確認します。その後、 OpsWorks スタックはそのロールをスタックのすべてのインスタンスに割り当てます。

クックブックをセットアップする手順は、「Linux インスタンスでのレシピの実行」で使用した手順に似ています。以下に簡単なまとめを示します。詳細については、例を参照してください。

クックブックをセットアップするには

1. s3bucket_ops という名前のディレクトリを作成し、そのディレクトリに移動します。
2. 以下の内容で metadata.rb ファイルを作成し、s3bucket_ops に保存します。

```
name "s3bucket_ops"
version "0.1.0"
```

3. recipes 内に s3bucket_ops ディレクトリを作成します。
4. 次のレシピで default.rb ファイルを作成し、recipes ディレクトリに保存します。

```
Chef::Log.info("******Downloading a file from Amazon S3.******")

ruby_block "download-object" do
  block do
    require 'aws-sdk'

    s3 = AWS::S3.new

    myfile = s3.buckets['cookbook_bucket'].objects['myfile.txt']
    Dir.chdir("/tmp")
    File.open("myfile.txt", "w") do |f|
      f.syswrite(myfile.read)
      f.close
    end
  end
```

```
  action :run
end
```

5. s3bucket_ops の .zip アーカイブを作成し、アーカイブを Amazon S3 バケットにアップロードします。わかりやすいよう、アーカイブを公開し、後で使用できるようアーカイブの URL を記録しておきます。また、クックブックをプライベート Amazon S3 アーカイブやその他のタイプのリポジトリに保存することもできます。詳細については、「クックブックリポジトリ」を参照してください。

このレシピは、前の例で使用したレシピに似ていますが、以下の点が異なります。

- OpsWorks スタックは既に SDK for Ruby をインストールしているため、chef_gemリソースは削除されました。
- レシピが AWS::S3.new に認証情報を渡しません。

  認証情報はインスタンスのロールに基づいてアプリケーションに自動的に割り当てられます。
- レシピは Chef::Log.info を使用して Chef ログにメッセージを追加します。

以下のようにこの例のスタックを作成します。既存の Windows スタックを使用することもできます。後で説明するように、クックブックを更新するだけです。

スタックを作成するには

1. OpsWorks スタックコンソールを開いて [Add Stack] をクリックします。
2. 次の設定を指定し、その他の設定はデフォルト値を受け入れて、[Add Stack] をクリックします。

   - Name (名前) – RubySDK
   - Default SSH key (デフォルト SSH キー) - Amazon EC2 キーペア

   Amazon EC2 キーペアの作成が必要な場合は、「Amazon EC2 Key Pairs」(Amazon EC2 キーペア) を参照してください。キーペアがインスタンスと同じ AWS リージョンに属している必要があることに注意してください。この例では、デフォルトに米国西部(オレゴン) リージョンを使用します。
3. [Add a layer] をクリックし、次の設定を使用してスタックにカスタムレイヤーを追加します。

   - Name (名前) – S3Download

- Short name (短縮名) – s3download

Linux スタックの場合、どのレイヤータイプでも実際には動作しますが、この例は他のレイヤータイプによってインストールされるパッケージを必要としないので、カスタムレイヤーが最も簡単なアプローチです。

4. デフォルト設定でレイヤーに 24/7 インスタンスを追加し、起動します。

これで、レシピをインストールして実行できるようになりました

レシピを実行するには

1. カスタムクックブックを有効にするようにスタックを編集し、以下の設定を指定します。

   - Repository type (リポジトリタイプ) – Http Archive (Http アーカイブ)
   - Repository URL (リポジトリの URL) – 前の手順で記録したクックブックのアーカイブ の URL。

   その他の設定にはデフォルト値を使用し、[Save] をクリックしてスタック設定を更新します。

2. [Update Custom Cookbooks] スタックコマンドを実行します。スタックのインスタンスにあるカスタムクックブックの最新バージョンがインストールされます。以前のバージョンのクックブックがある場合は、このコマンドによって上書きされます。
3. 実行するレシピを **`s3bucket_ops::default`** に設定してレシピの実行スタックコマンドを実行することで、レシピを実行します。このコマンドは、`s3bucket_ops::default` から成る実行リストで Chef 実行を開始します。

> **Note**
>
> 通常 OpsWorks 、 スタックは適切なライフサイクルイベントに割り当てることでレシピを自動的に実行します。このようなレシピは、イベントを手動でトリガーすることによって実行できます。Setup および Configure イベントをトリガーするにはスタックコマンドを使用し、Deploy および Undeploy イベントをトリガーするにはデプロイコマンドを使用できます。

レシピが正常に実行された後で、それを検証できます。

s3bucket_ops を検証するには

1. 最初のステップは、Chef ログを調べることです。スタックに、opstest1 という名前の 1 つのインスタンスがあるはずです。[Instances] (インスタンス) ページで、インスタンスの [Log] (ログ) 列の [show] (表示) をクリックして、Chef ログを表示します。下へスクロールすると、下部にログメッセージが表示されます。

```
...
[2014-07-31T17:01:45+00:00] INFO: Storing updated cookbooks/opsworks_cleanup/
attributes/customize.rb in the cache.
[2014-07-31T17:01:45+00:00] INFO: Storing updated cookbooks/opsworks_cleanup/
metadata.rb in the cache.
[2014-07-31T17:01:46+00:00] INFO: ******Downloading a file from Amazon S3.******
[2014-07-31T17:01:46+00:00] INFO: Processing template[/etc/hosts] action create
 (opsworks_stack_state_sync::hosts line 3)
...
```

2. SSH を使用してインスタンスにログインし、/tmp の内容を一覧表示します。

スタック Windows インスタンスでの SDK for Ruby OpsWorks の使用

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> この例では、「Windows インスタンスでのレシピの実行」の例を実行済みであることを前提としています。実行済みでない場合は、最初にその例を実行する必要があります。特に、インスタンスへの RDP アクセスを有効にする方法について説明しています。

> Amazon S3 バケットに配信されるコンテンツには、カスタマーコンテンツが含まれている場合があります。機密データの削除の詳細については、「S3 バケットを空にする方法」または「S3 バケットを削除する方法」を参照してください。

このトピックでは、 スタックの Windows OpsWorks インスタンスAWS SDK for Rubyで を使用して S3 バケットからファイルをダウンロードする方法について説明します。

Ruby アプリケーションから AWS リソースにアクセスする必要がある場合は、適切なアクセス権限がある AWS の認証情報を提供する必要があります。レシピの場合、AWS 認証情報を提供する最適なオプションは、 AWS Identity and Access Management (IAM) ロールを使用することです。IAM ロールは、さまざまな AWS サービスを使用するアクセス許可を付与するポリシーがアタッチされている IAM ユーザーとよく似ています。ただし、ロールは個人ではなく Amazon Elastic Compute Cloud (Amazon EC2) インスタンスに割り当てます。そのようにすると、そのインスタンスで実行されているアプリケーションは、アタッチされたポリシーによって付与されたアクセス許可を取得できます。ロールを使用することで、認証情報はコード内に出現しなくなります。間接的に出現することもありません。

最初のステップは、IAM ロールをセットアップすることです。この例では、最も簡単なアプローチを取ります。つまり、最初のスタックの作成時に OpsWorks スタックが作成する Amazon EC2 ロールを使用します。その名前は `aws-opsworks-ec2-role` です。ただし、 OpsWorks スタックはそのロールにポリシーをアタッチしないため、デフォルトではアクセス許可を付与しません。

`AmazonS3ReadOnlyAccess` ポリシーを `aws-opsworks-ec2-role` ロールにアタッチして、適切な権限を付与する必要があります。ポリシーを IAM エンティティにアタッチする方法の詳細については、IAM ユーザーガイドの「IAM ID アクセス許可の追加 (コンソール)」を参照してください。

スタックを作成または更新する際に、ロールを指定します。「Windows インスタンスでのレシピの実行」で説明したように、カスタムレイヤーを持つスタックをセットアップします。ただし、1 つだけ追加の操作があります。スタックの追加ページで、デフォルトの IAM インスタンスプロファイルが aws-opsworks-ec2-role に設定されていることを確認します。その後、 OpsWorks スタックはそのロールをスタックのすべてのインスタンスに割り当てます。

クックブックをセットアップする手順は、「Linux インスタンスでのレシピの実行」で使用した手順に似ています。以下に簡単なまとめを示します。詳細については、例を参照してください。

クックブックをセットアップするには

1. `s3bucket_ops` という名前のディレクトリを作成し、そのディレクトリに移動します。

2. 以下の内容で metadata.rb ファイルを作成し、s3bucket_ops に保存します。

```
name "s3download"
version "0.1.0"
```

3. recipes 内に s3download ディレクトリを作成します。
4. 以下のレシピで default.rb ファイルを作成し、recipes ディレクトリに保存します。*windows-cookbooks* を、ダウンロードするファイルの保存に使用する S3 バケットの名前に置き換えます。

```
Chef::Log.info("******Downloading an object from S3******")

chef_gem "aws-sdk-s3" do
  compile_time false
  action :install
end

ruby_block "download-object" do
  block do
    require 'aws-sdk-s3'

    Aws.use_bundled_cert!

    s3_client = Aws::S3::Client.new(region:'us-west-2')

    s3_client.get_object(bucket: 'windows-cookbooks',
                         key: 'myfile.txt',
                         response_target: '/chef/myfile.txt')
  end
  action :run
end
```

5. s3download の .zip アーカイブを作成し、ファイルを S3 バケットにアップロードします。そのファイルを公開し、後で使用できるようにその URL を記録します。
6. myfile.txt という名前のテキストファイルを作成し、S3 バケットにアップロードします。これは、レシピによってダウンロードされるファイルであるため、便利なバケットを使用できます。

このレシピによって以下のタスクが実行されます。

1: SDK for Ruby v2 をインストールします。

この例では、SDK for Ruby を使用してオブジェクトをダウンロードします。ただし、 OpsWorks スタックはこの SDK を Windows インスタンスにインストールしないため、レシピの最初の部分では`chef_gem`リソースを使用してそのタスクを処理します。このリソースを使用して、レシピを含む gem が Chef 用にインストールされるようにします。

2: ファイルをダウンロードする。

レシピの 3 番目の部分で、`ruby_block` リソースを使用して、SDK for Ruby v2 コードを実行します。このコードを使用して、`myfile.txt` という名前の S3 バケットからインスタンスの *`windows-cookbooks`* ディレクトリに `/chef` をダウンロードします。*`windows-cookbooks`* を `myfile.txt` を含むバケットの名前に変更します。

> **Note**
>
> レシピは Ruby アプリケーションであるため、Ruby コードをレシピの本文内に記述できます。`ruby_block` リソース内に記述する必要はありません。しかし、Chef によってレシピの本文内の Ruby のコードが最初に実行され、その後、各リソースが順番に実行されます。例えば、レシピの本文内に記述したダウンロードコードは失敗します。そのコードが SDK for Ruby に依存しており、SDK をインストールする `chef_gem` リソースがまだ実行されていないためです。`ruby_block` リソース内のコードが実行されるのは、`chef_gem` リソースによって SDK for Ruby がインストールされた後に発生します。

以下のようにこの例のスタックを作成します。既存の Windows スタックを使用することもできます。後で説明するように、クックブックを更新するだけです。

Stack を作成する

1. OpsWorks スタックコンソールを開いて [Add Stack] を選択します。以下の設定を指定し、その他の設定はデフォルト値を受け入れて、[Add Stack] を選択します。

   - Name (名前) – S3Download
   - リージョン – 米国西部 (オレゴン)

     この例はいずれのリージョンでも動作しますが、チュートリアルでは米国西部 (オレゴン) を使用することをお勧めします。

- Default operating system (デフォルトのオペレーティングシステム) – Microsoft Windows Server 2012 R2

2. [Add a layer] を選択し、以下の設定を使用してスタックにカスタムレイヤーを追加します。

   - Name (名前) – S3Download
   - Short name (短縮名) – s3download

3. デフォルト設定で S3Downloadレイヤーに 24/7 インスタンスを追加し、起動します。

これで、レシピをインストールして実行できるようになりました

レシピを実行するには

1. カスタムクックブックを有効にするようにスタックを編集し、以下の設定を指定します。

   - Repository type (リポジトリタイプ) – S3 Archive (アーカイブ)
   - Repository URL (リポジトリの URL) – 前の手順で記録したクックブックのアーカイブ の URL。

   その他の設定ではデフォルト値を受け入れ、[Save] を選択してスタック設定を更新します。

2. [Update Custom Cookbooks] スタックコマンドを実行します。スタックのオンラインインスタンスにカスタムクックブックの最新バージョンがインストールされます。以前のバージョンのクックブックがある場合は、このコマンドによって上書きされます。

3. 実行するレシピを **`s3download::default`** に設定してレシピの実行スタックコマンドを実行することで、レシピを実行します。このコマンドは、`s3download::default` から成る実行リストで Chef 実行を開始します。

   > **Note**
   >
   > 通常 OpsWorks 、 スタックは適切なライフサイクルイベントに割り当てることでレシピを自動的に実行します。このようなレシピは、イベントを手動でトリガーすることでも実行できます。Setup および Configure イベントをトリガーするにはスタックコマンドを使用し、Deploy および Undeploy イベントをトリガーするにはデプロイコマンドを使用できます。

レシピが正常に実行された後で、それを検証できます。

s3download を検証するには

1. 最初のステップは、Chef ログを調べることです。スタックに s3download1 という名前の 1 つのインスタンスがあります。Instances ページで、インスタンスの ログ 列の 表示 を選択すると、Chef のログが表示されます。下にスクロールすると、末尾近くに以下のようなログメッセージが見つかります。

```
...
[2015-05-01T21:11:04+00:00] INFO: Loading cookbooks [s3download@0.0.0]
[2015-05-01T21:11:04+00:00] INFO: Storing updated cookbooks/s3download/recipes/
default.rb in the cache.
[2015-05-01T21:11:04+00:00] INFO: ******Downloading an object from S3******
[2015-05-01T21:11:04+00:00] INFO: Processing chef_gem[aws-sdk] action install
 (s3download::default line 3)
[2015-05-01T21:11:05+00:00] INFO: Processing ruby_block[download-object] action run
 (s3download::default line 8)
...
```

2. RDP を使用してインスタンスにログインし、c:\chef の内容を調べます。

Windows ソフトウェアのインストール

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> 以下の例では、「Windows インスタンスでのレシピの実行」の例を実行済みであることを前提としています。実行済みでない場合は、最初にその例を実行する必要があります。特に、インスタンスへの RDP アクセスを有効にする方法について説明しています。

Windows インスタンスは Windows Server 2012 R2 Standard で起動されるため、通常、いくつかのソフトウェアをインストールする必要があります。詳細はソフトウェアのタイプによって異なります。

- Windows の機能は、.NET frameworks や Internet Information Services (IIS) など、オプションのシステムコンポーネントであり、インスタンスにダウンロードできます。
- サードパーティのソフトウェアは通常、MSI ファイルなどのインストーラパッケージで提供され、インスタンスにダウンロードして実行する必要があります。

  一部の Microsoft ソフトウェアもインストーラパッケージで提供されます。

このセクションでは、Windows の機能とパッケージをインストールするクックブックを実装する方法について説明します。また、Chef Windows クックブックも紹介します。このクックブックには、Windows インスタンスの実装レシピを簡素化するリソースやヘルパー関数が含まれています。

トピック

- Windows の機能のインストール: IIS
- Windows Instance でのパッケージのインストール

Windows の機能のインストール: IIS

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Windows の機能は、.NET Framework や Internet Information Services (IIS) など、一連のオプションのシステムコンポーネントです。このトピックでは、一般的に使用される機能として Internet Information Services (IIS) をインストールするクックブックを実装する方法について説明します。

> **Note**
>
> 「パッケージのインストール」では、MSI ファイルなどのインストーラパッケージに付属していて、インスタンスにダウンロードして実行する必要のあるソフトウェアをインストールする方法を示しています。IIS クックブック

「Windows インスタンスでのレシピの実行」では、powershell_script リソースを使用して Windows の機能をインストールする方法を示しています。この例では、別のアプローチとして、Chef の Windows クックブックの windows_feature リソースを使用しています。このクックブックには、デプロイイメージサービスおよび管理を使用して Windows でさまざまなタスク (機能のインストールなど) を実行する一連のリソースが含まれています。

> **Note**
>
> Chef には、IIS の管理に使用できる IIS のクックブックも用意されています。詳細については、「IIS クックブック」を参照してください。

クックブックをセットアップするには

1. windows cookbook GitHub リポジトリに移動し、windows クックブックをダウンロードします。

   この例では、windows リポジトリを .zip ファイルとしてダウンロードしますが、必要に応じてリポジトリを複製できることも前提としています。
2. chef_handler cookbook GitHub リポジトリに移動し、chef-handler クックブックをダウンロードします。

   windows クックブックは chef_handler に依存しており、直接使用することはありません。この例では、chef_handler リポジトリを .zip ファイルとしてダウンロードしますが、必要に応じてリポジトリを複製できることも前提としています。
3. windows と chef_handler という名前のディレクトリに windows および chef_handler クックブックを抽出します。
4. install-iis という名前のクックブックディレクトリ内にディレクトリを作成し、そのディレクトリに移動します。
5. install-iis に、次のコンテンツを含む metadata.rb ファイルを追加します。

```
name "install-iis"
version "0.1.0"

depends "windows"
```

depends ディレクティブにより、レシピで windows クックブックのリソースを使用できます。

6. recipes ディレクトリを install-iis に追加し、以下のレシピコードを保存した default.rb という名前のレシピファイルをそのディレクトリに追加します。

```
%w{ IIS-WebServerRole IIS-WebServer }.each do |feature|
  windows_feature feature do
    action :install
  end
end

service 'w3svc' do
  action [:start, :enable]
end
```

レシピによって windows クックブックの windows_feature リソースが使用されて、以下のものがインストールされます。

1. IIS Web Server ロール
2. IIS Web Server

その後、レシピによって service リソースが使用されて、IIS サービス (W3SVC) が有効になります。

> **Note**
>
> 利用可能な Windows の機能の完全なリストについては、RDP を使用してインスタンスにログインし、コマンドプロンプトウィンドウを開き、以下のコマンドを実行してください。リストは非常に長くなっています。

```
dism /online /Get-Features
```

7. `install-iis`、`chef_handler`、および `windows` クックブックを含む `.zip` アーカイブを作成し、アーカイブを S3 バケットにアップロードします。アーカイブを公開し、後で使用できるようにその URL を記録します。この例では、アーカイブ名を `install-iis.zip` としています。詳細については、「クックブックリポジトリ」を参照してください。

   Amazon S3 バケットに配信されるコンテンツには、カスタマーコンテンツが含まれている場合があります。機密データの削除の詳細については、「S3 バケットを空にする方法」または「S3 バケットを削除する方法」を参照してください。

以下のようにこの例のスタックを作成します。既存の Windows スタックを使用することもできます。後で説明するように、クックブックを更新するだけです。

Stack を作成する

1. OpsWorks スタックコンソールを開いて [Add Stack] を選択します。以下の設定を指定し、その他の設定はデフォルト値を受け入れて、[Add Stack] を選択します。

   - Name (名前) – InstallIIS
   - リージョン – 米国西部 (オレゴン)

     この例はいずれのリージョンでも動作しますが、チュートリアルでは米国西部 (オレゴン) を使用することをお勧めします。
   - Default operating system (デフォルトのオペレーティングシステム) – Microsoft Windows Server 2012 R2
2. [Add a layer] を選択し、以下の設定を使用してスタックにカスタムレイヤーを追加します。

   - Name (名前) – IIS
   - Short name (短縮名) – iis
3. デフォルト設定で IISレイヤーに 24/7 インスタンスを追加し、起動します。

これで、クックブックをインストールし、レシピを実行できるようになりました。

クックブックをインストールし、レシピを実行するには

1. カスタムクックブックを有効にするようにスタックを編集し、以下の設定を指定します。

   - Repository type (リポジトリタイプ) – S3 Archive (アーカイブ)
   - Repository URL (リポジトリの URL) – 前の手順で記録したクックブックのアーカイブの URL

   その他の設定ではデフォルト値を受け入れ、[Save] を選択してスタック設定を更新します。
2. [Update Custom Cookbooks] スタックコマンドを実行します。スタックのオンラインインスタンスにカスタムクックブックの最新バージョンがインストールされます。以前のバージョンのクックブックがある場合は、このコマンドによって上書きされます。
3. カスタムクックブックの更新が終了したら、実行するレシピを **`install-iis::default`** に設定してレシピの実行スタックコマンドを実行することで、レシピを実行します。このコマンドによって Chef 実行が開始され、指定したレシピが実行されます。

   > **Note**
   >
   > この例では、便宜上 Execute Recipes を使用していますが、通常 OpsWorks 、適切なライフサイクルイベントに割り当てることで、 スタックでレシピを自動的に実行します。このようなレシピは、イベントを手動でトリガーすることによって実行できます。Setup および Configure イベントをトリガーするにはスタックコマンドを使用し、Deploy および Undeploy イベントをトリガーするにはデプロイコマンドを使用できます。

4. インストールを確認するには、RDP を使用してインスタンスに接続し、Windows Explorer を開きます。ファイルシステムに `C:\inetpub` ディレクトリがあることを確認できます。[Administrative Tools Control Panel] アプリケーションでサービスのリストを確認する場合、IIS は末尾近くで見つかります。ただし、IIS ではなく World Wide Web Publishing Service という名前になります。

Windows Instance でのパッケージのインストール

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS

re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> この例では、「Windows インスタンスでのレシピの実行」の例を実行済みであることを前提としています。実行済みでない場合は、最初にその例を実行する必要があります。特に、インスタンスへの RDP アクセスを有効にする方法について説明しています。

ソフトウェアが MSI ファイルなどのインストーラパッケージで提供されている場合は、そのファイルをインスタンスにダウンロードして実行する必要があります。この例では、関連する環境変数を定義する方法など、MSI パッケージ、Python ランタイムをインストールするクックブックを実装する方法を示しています。IIS など Windows の機能をインストールする方法の詳細については、「Windows の機能のインストール: IIS」を参照してください。

クックブックをセットアップするには

1. `installpython` という名前のディレクトリを作成し、そのディレクトリに移動します。
2. `installpython` に、次のコンテンツを含む `metadata.rb` ファイルを追加します。

```
name "installpython"
version "0.1.0"
```

3. `installpython` に `recipes` ディレクトリと `files` ディレクトリを追加して、ファイルに `default` ディレクトリを追加します。
4. Python Releases for Windows からクックブックの `files\default` ディレクトリに Python パッケージをダウンロードします。この例では、`python-3.4.3.amd64.msi` という名前の MSI インストーラを使用して、Python 3.5.0a3 の Windows x86-64 バージョンをインストールします。
5. 以下のレシピコードを保存した `default.rb` という名前のファイルを `recipes` ディレクトリに追加します。

```
directory 'C:\tmp' do
  rights :full_control, 'Everyone'
```

```
  recursive true
  action :create
end

cookbook_file 'C:\tmp\python-3.4.3.amd64.msi' do
  source "python-3.4.3.amd64.msi"
  rights :full_control, 'Everyone'
  action :create
end

windows_package 'python' do
  source 'C:\tmp\python-3.4.3.amd64.msi'
  action :install
end

env "PATH" do
  value 'c:\python34'
  delim ";"
  action :modify
end
```

このレシピでは、以下のような処理を実行します。

1. ディレクトリリソースを使用して、C:\tmp ディレクトリを作成します。

   このリソースの詳細については、「例 3: ディレクトリの作成」を参照してください。

2. cookbook_file リソースを使用して、クックブックの files\default ディレクトリから C:\tmp にインストーラをコピーします。

   このリソースの詳細については、「クックブックからのファイルのインストール」を参照してください。

3. windows_package リソースを使用して、c:\python34 に Python をインストールする MSI インストーラを実行します。

   インストーラによって必要なディレクトリを作成され、ファイルがインストールされますが、システムの PATH 環境変数は変更されません。

4. env リソースを使用して、システムパスに c:\python34 を追加します。

   env リソースを使用して、環境変数を定義します。この例では、レシピによって c:\python34 がパスに追加されて、コマンドラインから Python スクリプトを簡単に実行できるようになります。

- この例では、リソース名に環境変数の名前 PATH を指定します。
- この例では、value 属性に変数の値 c:\\python34 を指定します (\ 文字をエスケープする必要があります)。
- :modify アクションによって、指定した値が変数の現在の値に付加されます。
- delim 属性には、既存の値と新しい値を区切る記号 (この例では ;) を指定します。

6. .zip の installpython アーカイブを作成し、S3 バケットにアップロードして、公開します。後で使用できるように、アーカイブの URL を記録します。詳細については、「クックブックリポジトリ」を参照してください。

   Amazon S3 バケットに配信されるコンテンツには、カスタマーコンテンツが含まれている場合があります。機密データの削除の詳細については、「S3 バケットを空にする方法」または「S3 バケットを削除する方法」を参照してください。

以下のようにこの例のスタックを作成します。既存の Windows スタックを使用することもできます。後で説明するように、クックブックを更新するだけです。

Stack を作成する

1. OpsWorks スタックコンソールを開いて [Add Stack] を選択します。以下の設定を指定し、その他の設定はデフォルト値を受け入れて、[Add Stack] を選択します。

   - Name (名前) – InstallPython
   - リージョン – 米国西部 (オレゴン)

     この例はいずれのリージョンでも動作しますが、チュートリアルでは米国西部 (オレゴン) を使用することをお勧めします。
   - Default operating system (デフォルトのオペレーティングシステム) – Microsoft Windows Server 2012 R2

2. [Add a layer] を選択し、以下の設定を使用してスタックにカスタムレイヤーを追加します。

   - Name (名前) – Python
   - Short name (短縮名) – python

3. デフォルト設定で Pythonレイヤーに 24/7 インスタンスを追加し、起動します。

インスタンスがオンラインになった後、クックブックをインストールし、レシピを実行できます

クックブックをインストールし、レシピを実行するには

1. カスタムクックブックを有効にするようにスタックを編集し、以下の設定を指定します。

   - Repository type (リポジトリタイプ) – S3 Archive (アーカイブ)
   - Repository URL (リポジトリの URL) – 前の手順で記録したクックブックのアーカイブ の URL。

   その他の設定ではデフォルト値を受け入れ、[Save] を選択してスタック設定を更新します。

2. [Update Custom Cookbooks] スタックコマンドを実行します。スタックのオンラインインスタンスにカスタムクックブックの最新バージョンがインストールされます。以前のバージョンのクックブックがある場合は、このコマンドによって上書きされます。

3. カスタムクックブックの更新が終了したら、実行するレシピを **`installpython::default`** に設定してレシピの実行スタックコマンドを実行することで、レシピを実行します。このコマンドは、`installpython::default` から成る実行リストで Chef 実行を開始します。

   > **Note**
   >
   > この例では、便宜上 Execute Recipes を使用していますが、通常 OpsWorks 、適切なライフサイクルイベントに割り当てることで、 スタックでレシピを自動的に実行します。このようなレシピは、イベントを手動でトリガーすることによって実行できます。Setup および Configure イベントをトリガーするにはスタックコマンドを使用し、Deploy および Undeploy イベントをトリガーするにはデプロイコマンドを使用できます。

4. インストールを確認するには、RDP を使用してインスタンスに接続し、Windows Explorer を開きます。

   - ファイルシステムに `C:\Python34` ディレクトリがあることを確認できます。
   - コマンドラインから `path` を実行した場合は、`PATH=c:\python34;C:\Windows\system32;...`のようになります。
   - コマンドラインから `python --version` を実行した場合は、`Python 3.4.3` が返されます。

組み込み属性の上書き

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> このトピックは Linux スタックにのみ当てはまります。Windows スタックの組み込み属性は上書きできません。

OpsWorks スタックは、各インスタンスに一連の組み込みクックブックをインストールします。組み込みのクックブックの多くは組み込みのレイヤーをサポートしており、属性ファイルは Apache サーバー設定のような、さまざまなデフォルト システムとアプリケーション設定を定義します。属性ファイルにこれらの設定を指定することで、以下の方法のいずれかで、対応する組み込み属性を上書きすることにより多くの設定をカスタマイズできます。

- カスタム JSON の属性を定義します。

  このアプローチには、シンプルかつ柔軟であるという利点があります。ただし、カスタム JSON を手動で入力する必要があるため、属性定義を管理する堅牢な方法はありません。
- カスタムクックブックを実装して、`customize.rb` 属性ファイルの属性を定義します。

  このアプローチは、カスタム JSON を使用する方法よりも柔軟性には劣りますが、ソース管理の下にカスタムクックブックを配置することができるため、より堅牢な方法となります。

このトピックでは、Apache サーバーを例として、カスタムクックブック属性ファイルを使用して組み込み属性を上書きする方法について説明します。カスタム JSON を使用して属性を上書きする方法の詳細については、「カスタム JSON の使用」を参照してください。属性を上書きする方法の全般的な説明については、「属性の上書き」を参照してください。

> **Note**
>
> 属性を上書きすることは設定をカスタマイズする優れた方法ですが、設定は常に属性で表されるものではありません。その場合は、設定ファイルを作成するために組み込みのレシピが使用するテンプレートを上書きすることで、設定ファイルをカスタマイズしてことができます。例については、組み込みテンプレートの上書きを参照してください。

組み込みの属性は、通常設定ファイルを作成するためにセットアップレシピが使用するテンプレートファイルの値を示します。例えば、apache2 セットアップレシピの一つである `default.rb` では、`apache2.conf.erb` テンプレートを使用して Apache サーバーの主要な設定ファイルである `httpd.conf` (Amazon Linux) または `apache2.conf` (Ubuntu) を作成します。以下は、テンプレートファイルからの抜粋です。

```
...
#
# MaxKeepAliveRequests: The maximum number of requests to allow
# during a persistent connection. Set to 0 to allow an unlimited amount.
# We recommend you leave this number high, for maximum performance.
#
MaxKeepAliveRequests <%= node[:apache][:keepaliverequests] %>
#
# KeepAliveTimeout: Number of seconds to wait for the next request from the
# same client on the same connection.
#
KeepAliveTimeout <%= node[:apache][:keepalivetimeout] %>
##
## Server-Pool Size Regulation (MPM specific)
##

...
```

この例の `KeepAliveTimeout` 設定は、`[:apache][:keepalivetimeout]` 属性の値です。この属性のデフォルト値は、以下の抜粋に示す、apache2 クックブックの `apache.rb` 属性ファイルで定義されます。

```
...
# General settings
```

```
default[:apache][:listen_ports] = [ '80','443' ]
default[:apache][:contact] = 'ops@example.com'
default[:apache][:log_level] = 'info'
default[:apache][:timeout] = 120
default[:apache][:keepalive] = 'Off'
default[:apache][:keepaliverequests] = 100
default[:apache][:keepalivetimeout] = 3
...
```

> **Note**
>
> よく使われる組み込みの属性の詳細については、「組み込みクックブックの属性」を参照してください。

組み込み属性の上書きをサポートするために、すべての組み込みクックブックには customize.rb 属性ファイルが含まれています。このファイルは、include_attribute ディレクティブを介してすべてのモジュールに組み込まれます。組み込みクックブックの customize.rb ファイルには属性定義は含まれておらず、組み込み属性には影響を与えません。組み込み属性を上書きするには、同じ名前のカスタムクックブックを組み込みクックブックとして作成して、customize.rb という名前が付けられている属性ファイルにカスタム属性定義として配置します。そのファイルは組み込みバージョンに優先され、関連する各モジュールに含まれます。customize.rb に組み込み属性を定義すると、対応する組み込み属性が上書きされます。

この例では、組み込み [:apache][:keepalivetimeout] 属性を設定して、その値に 3 の代わりに 5 を設定する方法を示します。すべての組み込み属性に対して同様の方法を使用できます。ただし、上書きする属性には注意が必要です。例えば、opsworks 名前空間の属性を上書きすると、組み込みのレシピで問題が発生する場合があります。

> **Important**
>
> 組み込み属性ファイル自体のコピーを変更することで、組み込み属性を上書きしないでください。例えば、apache.rb のコピーをカスタムクックブックの apache2/attributes フォルダに配置して、その設定の一部を変更することができます。ただし、このファイルは組み込みバージョンを上書きしてしまうため、組み込みレシピは新たなバージョンの apache.rb を使用するようになります。 OpsWorks スタックが後で組み込みapache.rbファイルを変更した場合、手動でバージョンを更新しない限り、レシピは新し

い値を取得しません。customize.rb を使用することで、指定した属性のみを上書きできます。組み込みレシピは、引き続き上書きしていない属性の最新の値を自動的に取得します。

開始するには、カスタムクックブックを作成します。

クックブックを作成するには

1. opsworks_cookbooks ディレクトリ内に、apache2 というクックブックのディレクトリを作成して、そこに移動します。

   組み込み属性を上書きするには、カスタムクックブックは組み込みのクックブックと同じ名前である必要があります。この例では apache2 です。
2. apache2 ディレクトリに attributes ディレクトリを作成します。
3. customize.rb ファイルを attributes ディレクトリに追加し、それを使用して上書きする組み込みクックブックの属性を定義します。この例では、ファイルには以下のものが含まれます。

   ```
   normal[:apache][:keepalivetimeout] = 5
   ```

   > **Important**
   >
   > 組み込みの属性を上書きするには、カスタム属性のタイプが normal 以上であり、対応する組み込み属性名と正確に同じである必要があります。normal タイプでは、すべての default タイプの組み込み属性にカスタム属性が優先されます。詳細については、「属性の優先順位」を参照してください。
4. opsworks_cookbooks.zip という名前の opsworks_cookbooks の .zip アーカイブを作成し、Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) バケットにそのアーカイブをアップロードします。わかりやすいよう、ファイルを公開します。後で使用できるように、URL を記録しておきます。また、クックブックをプライベート Amazon S3 アーカイブやその他のタイプのリポジトリに保存することもできます。詳細については、「クックブックリポジトリ」を参照してください。

   Amazon S3 バケットに配信されるコンテンツには、カスタマーコンテンツが含まれている場合があります。機密データの削除の詳細については、「S3 バケットを空にする方法」または「S3 バケットを削除する方法」を参照してください。

カスタム属性を使用するには、スタックを作成し、カスタムクックブックをインストールします。

カスタム属性を使用する

1. OpsWorks スタックコンソールを開いて [Add Stack] を選択します。
2. 以下の標準設定を指定できます。

   - Name (名前) – ApacheConfig
   - リージョン) – 米国西部 (オレゴン)

     いずれのリージョンにもスタックを配置できますが、チュートリアルでは米国西部 (オレゴン) をお勧めします。
   - Default SSH key (デフォルト SSH キー) - Amazon EC2 キーペア

     EC2 キーペアの作成が必要な場合は、Amazon EC2 キーペアを参照してください。キーペアがスタックと同じ AWS リージョンに属している必要があることに注意してください。

   [Advanced>>] を選択し、[Use custom Chef cookbooks] を [Yes] に設定して、以下の設定を指定します。

   - Repository type (リポジトリタイプ) – Http Archive (Http アーカイブ)
   - Repository URL (リポジトリの URL) – 前の手順で記録したクックブックのアーカイブの URL

   そのほかの設定のデフォルト値を受け入れ、[Add Stack] を選択してスタックを作成します。

   > **Note**
   >
   > この例では、デフォルトのオペレーティングシステムである Amazon Linux を使用します。希望に応じて、Ubuntu を使用することもできます。唯一の相違点は Ubuntu システムであるということで、組み込みセットアップレシピが `apache2.conf` という同じ名前の設定ファイルを作成し、それを `/etc/apache2` ディレクトリに配置します。

3. レイヤーの追加 を選択してから、デフォルト設定でスタックに Java アプリケーションアプリケーションサーバーレイヤーを追加します。
4. デフォルト設定でレイヤーに 24/7 インスタンスを追加し、インスタンスを起動します。

   この例では、t2.micro インスタンスで十分です。

5. インスタンスをオンラインにしたら、、SSHでインスタンスに接続します。httpd.conf ファイルは、/etc/httpd/conf ディレクトリにあります。ファイルを確認すると、カスタム KeepAliveTimeout 設定が表示されます。残りの設定には、組み込みの apache.rb ファイルからのデフォルト値があります。httpd.conf の関連する部分は以下のようになります。

```
...
#
# KeepAliveTimeout: Number of seconds to wait for the next request from the
# same client on the same connection.
#
KeepAliveTimeout 5
...
```

組み込みテンプレートの上書き

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> このトピックは Linux スタックにのみ当てはまります。Windows スタックの組み込みテンプレートは上書きできません。

OpsWorks スタックの組み込みレシピでは、 テンプレートを使用してインスタンスにファイルを作成します。主に Apache などのサーバーの設定ファイルです。例えば、apache2 レシピでは、apache2.conf.erb テンプレートを使用して Apache サーバーのプライマリ設定ファイルである httpd.conf (Amazon Linux) または apache2.conf (Ubuntu) を作成します。

これらのテンプレートの設定のほとんどは属性によって表されるため、設定ファイルをカスタマイズする主な方法は、適切な組み込み属性を上書きすることです。例については、組み込み属性の上書

きを参照してください。ただし、カスタマイズする設定が組み込み属性で表されない場合、またはテンプレート内にない場合は、テンプレート自体を上書きする必要があります。このトピックでは、組み込みテンプレートを上書きして、カスタム Apache 設定を指定する方法について説明します。

ErrorDocument 設定を httpd.conf ファイルに追加することで、Apache にカスタムラー応答を提供することができます。apache2.conf.erb には、以下のようないくつかのコメントアウトされた例だけがあります。

```
...
#
# Customizable error responses come in three flavors:
# 1) plain text 2) local redirects 3) external redirects
#
# Some examples:
#ErrorDocument 500 "The server made a boo boo."
#ErrorDocument 404 /missing.html
#ErrorDocument 404 "/cgi-bin/missing_handler.pl"
#ErrorDocument 402 http://www.example.com/subscription_info.html
...
```

これらの設定はハードコードコメントであるため、属性を上書きすることでカスタム値を指定することはできません。テンプレート自体を上書きする必要があります。ただし、属性とは異なり、テンプレート ファイルに含まれる特定の部分を上書きする方法はありません。組み込みバージョンと同じ名前でカスタムクックブックを作成し、テンプレートファイルを同じサブディレクトリにコピーして、必要に応じてファイルを変更します。このトピックでは、apache2.conf.erb を上書きしてカスタム応答にエラー 500 を提供する方法について説明します。テンプレートの上書きについての全般的な説明については、「カスタムテンプレートの使用」を参照してください。

> **Important**
>
> 組み込みテンプレートを上書きする場合、組み込みレシピは、組み込みバージョンではなくカスタマイズされたバージョンのテンプレートを使用します。 OpsWorks スタックが組み込みテンプレートを更新すると、カスタムテンプレートは同期されず、正しく動作しない可能性があります。 OpsWorks スタックはそのような変更を頻繁に行うことはありません。テンプレートが変更されると、 OpsWorks スタックは変更を一覧表示し、新しいバージョンにアップグレードするオプションを提供します。OpsWorks スタックのリポジトリの変更をモニタリングし、必要に応じてテンプレートを手動で更新することをお勧めします。リポジト

リに、サポートされている Chef バージョンにそれぞれ個別のブランチがあり、正しいブランチにいることを確認します。

開始するには、カスタムクックブックを作成します。

クックブックを作成するには

1. opsworks_cookbooks ディレクトリ内に、apache2 というクックブックのディレクトリを作成して、そこに移動します。組み込みテンプレートを上書きするには、カスタムクックブックは組み込みのクックブックと同じ名前である必要があります。この例では apache2 です。

   > **Note**
   >
   > すでに「組み込み属性の上書き」ウォークスルーを完了している場合は、この例で同じ apache2 クックブックを使用して、ステップ 2 をスキップできます。

2. 以下の内容で metadata.rb ファイルを作成し、apache2 ディレクトリに保存します。

   ```
   name "apache2"
   version "0.1.0"
   ```

3. apache2 ディレクトリに templates/default ディレクトリを作成します。

   > **Note**
   >
   > templates/default ディレクトリは、デフォルトの apache2.conf.erb テンプレートを使用する Amazon Linux インスタンスで動作します。Ubuntu 14.04 インスタンスは、オペレーティングシステム固有の apache2.conf.erb テンプレートを使用します。これは templates/ubuntu-14.04 ディレクトリにあります。Ubuntu 14.04 インスタンスにカスタム設定を適用する場合は、そのテンプレートも上書きする必要があります。

4. templates/default ディレクトリに、[built-in apache2.conf.erb template (組み込みテンプレート)] をコピーします。テンプレートファイルを開いて ErrorDocument 500 行をコメントアウトすると、以下の様なカスタムエラーメッセージが表示されます。

```
...
ErrorDocument 500 "A custom error message."
#ErrorDocument 404 /missing.html
...
```

5. opsworks_cookbooks.zip という名前の opsworks_cookbooks の .zip アーカイブを作成し、ファイルを Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) バケットにアップロードします。わかりやすいよう、アーカイブを公開します。後で使用できるように、アーカイブの URL を記録します。また、クックブックをプライベート Amazon S3 アーカイブやその他のタイプのリポジトリに保存することもできます。詳細については、「クックブックリポジトリ」を参照してください。

   Amazon S3 バケットに配信されるコンテンツには、カスタマーコンテンツが含まれている場合があります。機密データの削除の詳細については、「S3 バケットを空にする方法」または「S3 バケットを削除する方法」を参照してください。

> **Note**
>
> わかりやすいように、この例では、テンプレートにハードコード化されたエラーメッセージを追加します。これを変更するには、テンプレートを変更して、クックブックを再インストールする必要があります。より柔軟な方法として、デフォルトカスタム属性をカスタムクックブック customize.rb 属性のエラー文字列に定義して、その属性の値を ErrorDocument 500 に割り当てることができます。例えば、属性に [:apache][:custom][:error500] という名前を付けると、apache2.conf.erb の対応する行は以下のようになります。
>
> ```
> ...
> ErrorDocument 500 <%= node[:apache][:custom][:error500] %>
> #ErrorDocument 404 /missing.html
> ...
> ```
>
> [:apache][:custom][:error500] を上書きすることで、カスタムエラーメッセージをいつでも変更できます。「カスタム JSON を使用して属性を上書き」した場合は、カスタムクックブックに手を加える必要はありません。

カスタムテンプレートを使用するには、スタックを作成し、カスタムクックブックをインストールします。

カスタムテンプレートを使用する

1. OpsWorks スタックコンソールを開いて [Add Stack] を選択します。
2. 以下の標準設定を指定できます。

   - Name (名前) – ApacheTemplate
   - リージョン – 米国西部 (オレゴン)
   - Default SSH key — Amazon Elastic Compute Cloud (Amazon EC2) キーペア

     Amazon EC2 キーペアの作成が必要な場合は、「Amazon EC2 Key Pairs」(Amazon EC2 キーペア) を参照してください。キーペアがインスタンスと同じ AWS リージョンに属している必要があることに注意してください。

   [Advanced>>] を選択し、[Use custom Chef cookbooks] を選択して、以下の設定を指定します。

   - Repository type (リポジトリタイプ) – Http Archive (Http アーカイブ)
   - Repository URL (リポジトリの URL) – 前の手順で記録したクックブックのアーカイブの URL

   そのほかの設定のデフォルト値を受け入れ、[Add Stack] を選択してスタックを作成します。
3. [Add a layer] (レイヤーの追加) を選択してから、デフォルト設定でスタックに [add a Java App Server layer] (Java アプリケーションサーバーレイヤーを追加) します。
4. デフォルト設定でレイヤーに 24/7 インスタンスを追加し、インスタンスを起動します。

   この例では、t2.micro インスタンスで十分です。
5. インスタンスをオンラインにしたら、、SSHでインスタンスに接続します。`httpd.conf` ファイルは、`/etc/httpd/conf` ディレクトリにあります。ファイルには、以下のようなカスタムの `ErrorDocument`設定が含まれています。

```
...
# Some examples:
ErrorDocument 500 "A custom error message."
#ErrorDocument 404 /missing.html
#ErrorDocument 404 "/cgi-bin/missing_handler.pl"
#ErrorDocument 402 http://www.example.com/subscription_info.html
```

```
...
```

レイヤーの負荷分散

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックには、Elastic Load Balancing と HAProxy の 2 つの負荷分散オプションが用意されています。これらは通常、アプリケーションサーバーレイヤーのインスタンス間で負荷を分散するために使用されます。このトピックでは、レイヤーに負荷分散を追加するときのオプションの選択に役立つように、各オプションの利点と制限事項について説明します。場合によって、両方のオプションの使用をお勧めします。

SSL ターミネーション

SSL ターミネーションは組み込み HAProxyLayer で処理されません。サーバーで SSL を終了させる必要があります。このアプローチの利点は、トラフィックがサーバーに到達するまで暗号化されることです。ただし、サーバーによる復号の処理が必要であり、それによりサーバーの負荷が増えます。また、アプリケーションサーバーに SSL 証明書を配置し、ユーザーからアクセスできるようにする必要があります。

Elastic Load Balancing を使用して SSL をロードバランサーで終了することができます。これにより、アプリケーションサーバーの負荷は低減されますが、ロードバランサーとサーバーとの間のトラフィックは暗号化されません。Elastic Load Balancing でサーバーで SSL を終了することもできますが、設定がやや複雑です。

スケーリング

受信トラフィックが HAProxy ロードバランサーの容量を超える場合は、その容量を手動で増やす必要があります。

Elastic Load Balancing は、着信トラフィックを処理するように自動的にスケーリングされます。最初にオンラインになったときに想定負荷を処理するための容量を十分に確保するには、Elastic Load Balancing ロードバランサーを事前ウォーミングします。

ロードバランサーの障害

HAProxy サーバーをホストしているインスタンスに障害が発生した場合、インスタンスを再起動できるようになるまで、サイト全体をオフラインにすることができます。

Elastic Load Balancing は、HAProxy よりも高い耐障害性を備えています。たとえば、EC2 インスタンスを登録している各アベイラビリティーゾーンで負荷分散ノードがプロビジョニングされます。1 つのゾーンでサービスが中断された場合は、他のノードで受信トラフィックの処理が継続されます。詳細については、「Elastic Load Balancing Concepts」(Elastic Load Balancing のコンセプト) を参照してください。

アイドルタイムアウト

指定したアイドルタイムアウト値よりも長い時間アイドル状態になった場合、両方のロードバランサーによって接続が終了されます。

- HAProxy – アイドルタイムアウト値には上限はありません。
- Elastic Load Balancing – デフォルトのアイドルタイムアウト値は 60 秒で、最大値は 3600 秒 (60 分) です。

Elastic Load Balancing のアイドル時間の制限は、ほとんどの目的に対して十分たります。それより長いアイドルタイムアウトが必要な場合は、HAProxy を使用することをお勧めします。例えば:

- HTTP 接続を長時間開いたままにして、プッシュ通知を行う場合。
- 管理インターフェイスを使用して、60 分を超える可能性のあるタスクを実行する場合。

URL ベースのマッピング

ロードバランサーで、リクエストの URL に基づいて、特定のサーバーに受信リクエストを転送することが必要な場合があります。たとえば、オンラインコマースアプリケーションをサポートする 10 台のアプリケーションサーバーのグループがあるとします。そのうちの 8 台のサーバーではカタログを処理し、2 台のサーバーでは支払いを処理します。リクエスト URL に基づいて、すべての支払い関連の HTTP リクエストを支払サーバーに割り振ります。この場合、"payment" または "checkout" を含むすべての URL を支払サーバーのいずれかに割り振ります。

HAProxy では、URL ベースのマッピングを使用して、指定した文字列を含む URL を特定のサーバーに割り振ることができます。 OpsWorks スタックで URL ベースのマッピングを使用するには、haproxy組み込みクックブックのhaproxy-default.erbテンプレートを上書きしてカ

スタム HAProxy 設定ファイルを作成する必要があります。詳細については、HAProxy 設定マニュアルと「カスタムテンプレートの使用」を参照してください。HTTPS リクエストに URL ベースのマッピングを使用することはできません。HTTPS リクエストは暗号化されているため、HAProxy にはリクエスト URL を調べる方法がありません。

Elastic Load Balancing では、URL マッピングのサポートが制限されています。詳細については、「Listener Configurations for Elastic Load Balancing」(Elastic Load Balancing のリスナー設定) を参照してください。

[Recommendation:] (推奨事項:) HAProxy でしか処理できない要件がある場合を除き、負荷分散には Elastic Load Balancing for load balancing を使用することをお勧めします。その場合は、一連の HAProxy サーバーに受信トラフィックを分散させるフロントエンドロードバランサーとして Elastic Load Balancing を使用し、この 2 つを組み合わせるのが最適なアプローチになるはずです。これを実行するには:

- スタックの各アベイラビリティーゾーンの HAProxy インスタンスを設定して、ゾーンのアプリケーションサーバーにリクエストが割り振られるようにします。
- Elastic Load Balancing ロードバランサーに HAProxy インスタンスを割り当て、このロードバランサーから HAProxy ロードバランサーに受信リクエスト分散させます。

このアプローチでは、HAProxy の URL ベースのマッピングを使用して、さまざまなタイプのリクエストを適切なアプリケーションサーバーに割り振ることができます。ただし、HAProxy サーバーのいずれかがオフラインになっても、Elastic Load Balancing ロードバランサーが、受信トラフィックを正常な HAProxy サーバーに自動的に分散させるため、サイトは継続して機能します。フロントエンドロードバランサーとして Elastic Load Balancing を使用する必要があり、HAProxy サーバーによって他の HAProxy サーバーにリクエストを分散させることはできないことに注意してください。

Chef Server から OpsWorks スタックへの移行

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックは Chef に基づいているため、Chef Server から OpsWorks スタックへの移行は比較的簡単です。このトピックでは、 OpsWorks スタックで動作するように Chef Server コードを変更するためのガイドラインを示します。

> **Note**
>
> 11.10 より前のバージョンの Chef を使用したスタックの移行はお勧めしません。それらのバージョンは chef-solo に基づいており、Chef 検索やデータバッグがサポートされていないためです。

トピック

- レイヤーへのロールのマッピング
- データバッグの使用
- Chef の検索の使用
- クックブックとレシピの管理
- Chef 環境の使用

レイヤーへのロールのマッピング

Chef Server では、ロールを使用して、目的と設定が同じインスタンス (Java アプリケーションサーバーをホストするインスタンスのセットなど) を定義および管理します。OpsWorks スタックレイヤーは基本的に Chef ロールと同じ目的を果たします。レイヤーは、設定、インストールされるパッケージ、アプリケーションのデプロイ手順などが同じ Amazon Elastic Compute Cloud (Amazon EC2) インスタンスのセットを作成するためのブループリントです。

OpsWorks スタックには、複数のタイプのアプリケーションサーバー、HAProxy ロードバランサー、MySQL データベースマスター、Ganglia モニタリングマスター用の一連の組み込みレイヤーが含まれています。例えば、組み込み Java App Server (Java アプリケーションサーバー) レイヤーは、Tomcat サーバーをホストするインスタンスを作成するためのブループリントです。

OpsWorks スタックに移行するには、各ロールを同等の機能を提供するレイヤーに関連付ける必要があります。ロールによっては、いずれかの組み込みレイヤーのみ使用できる場合があります。また、さまざまな程度のカスタマイズが必要になる場合があります。まずは、組み込みレイヤーの機能と各レイヤーに関連付けられているレシピを調べることで、最低限必要なロールの機能が用意されているかどうかを確認します。組み込みレイヤーの詳細については、「レイヤー」と「OpsWorks スタック

レイヤーリファレンス」を参照してください。組み込みレシピを確認するには、OpsWorks 「Stacks public GitHub repository」を参照してください。

この後の作業の進め方は、以下のように、レイヤーが各ロールにどの程度一致するかによって異なります。

組み込みレイヤーがロールのすべての機能をサポートする

必要に応じて若干のカスタマイズにより、組み込みレイヤーを直接使用できます。例えば、ロールが Tomcat サーバーをサポートしている場合、Java アプリケーションサーバーレイヤーのレシピはすでに、若干のカスタマイズにより、そのロールのすべてのタスクを処理するようになっていることがあります。たとえば、レイヤーの組み込みレシピで、カスタム Tomcat または Apache 設定が使用されるように、該当する属性またはテンプレートを上書きできます。

組み込みレイヤーがロールの一部の機能のみをサポートする

レイヤーの拡張により、組み込みレイヤーを使用できる場合があります。この拡張には一般的に、不足している機能をサポートするカスタムレシピの実装と、レイヤーのライフサイクルイベントへのそれらのレシピの割り当てが含まれます。たとえば、Tomcat サーバーをホストする同じインスタンスに Redis サーバーをインストールするロールがあるとします。レイヤーのインスタンスに Redis をインストールするカスタムレシピを実装し、そのレシピをレイヤーの Setup イベントに割り当てることで、ロールの機能と一致するように Java アプリケーションサーバーレイヤーを拡張できます。

組み込みレイヤーがロールの機能を適切にサポートしない

カスタムレイヤーを実装します。たとえば、MongoDB データベースサーバーをサポートするロールがあり、この機能がいずれの組み込みレイヤーでもサポートされていないとします。必要なパッケージのインストールやサーバーの設定などを行うレシピを実装し、そのレシピをカスタムレイヤーのライフサイクルイベントに割り当てることで、レイヤーでこの機能がサポートされるようにできます。一般的に、少なくともロールのレシピのいくつかはこの目的に使用できます。カスタムレイヤーを実装する方法の詳細については、「カスタム Tomcat サーバーレイヤーの作成」を参照してください。

データバッグの使用

Chef Server では、データバッグを使用してユーザー定義のデータをレシピに渡すことができます。

- クックブックにデータを保存すると、Chef によってそのデータは各インスタンスにインストールされます。
- パスワードなどの機密データには、暗号化されたデータバッグを使用できます。

OpsWorks スタックはデータバッグをサポートします。レシピは Chef Server とまったく同じコードを使用してデータを取得できます。ただし、このサポートには以下の制限と違いがあります。

- データバッグは Chef 11.10 Linux 以降のスタックでのみサポートされています。

  Chef の以前のバージョンを実行している Windows スタックと Linux スタックでは、データバッグはサポートされていません。
- データバッグはクックブックのリポジトリに保存しません。

  その代わりに、カスタム JSON を使用してデータバッグのデータを管理します。
- OpsWorks スタックは、暗号化されたデータバッグをサポートしていません。

  パスワードや証明書などの機密データを暗号化された形式で保存する必要がある場合は、プライベート S3 バケットに保存することをお勧めします。これで、Amazon SDK for Ruby を使用するカスタムレシピを作成できます。例については、 SDK for Ruby を使用するを参照してください。

詳細については、「データバッグの使用」を参照してください。

Chef の検索の使用

Chef Server では、IP アドレスやロール設定などのスタック設定情報がサーバーに保存されます。レシピは Chef 検索を使用してこのデータを取得します。 OpsWorks スタックは少し異なるアプローチを使用します。たとえば、Chef 11.10 Linux スタックは Chef クライアントのローカルモードに基づいています。このモードは Chef クライアントのオプションの 1 つであり、インスタンスでローカルに Chef Server の軽量バージョン (Chef Zero) が実行されます。Chef Zero では、インスタンスのノードオブジェクトに保存されたデータに対する検索がサポートされています。

OpsWorks スタックは、リモートサーバーにスタックデータを保存する代わりに、ライフサイクルイベントごとにスタック設定とデプロイ属性のセットを各インスタンスのノードオブジェクトに追加します。これらの属性は、スタック設定のスナップショットとなります。Chef Server と同じ構文を使用して、サーバーからのレシピの取得に必要なデータの大部分を定義します。

多くの場合、 OpsWorks スタックのレシピの検索依存コードを変更する必要はありません。Chef 検索はスタック設定とデプロイ属性を含むノードオブジェクトで動作するため、 スタックの検索クエリは通常 Chef Server OpsWorks とまったく同じように機能します。

主な例外は、スタック設定属性とデプロイ属性に、インスタンスに属性をインストールするときに OpsWorks スタックが認識するデータのみが含まれていることです。特定のインスタンスで属性をローカルに作成または変更した場合、それらの変更は OpsWorks スタックに伝達されず、他のイン

スタンスにインストールされているスタック設定およびデプロイ属性に組み込まれません。検索を使用して、そのインスタンス上の属性値のみを取得できます。詳細については、「Chef の検索の使用」を参照してください。

Chef Server との互換性のために、 OpsWorks Stacks はノードオブジェクトに一連のrole属性を追加します。各属性にはスタックのレイヤー属性の 1 つが含まれます。レシピで検索キーとして roles を使用している場合、検索コードを変更する必要はありません。クエリによって、対応するレイヤーのデータが自動的に返されます。たとえば、以下の両方のクエリによってレイヤーphp-appの属性が返されます。

```
phpserver = search(:node, "layers:php-app").first
```

```
phpserver = search(:node, "roles:php-app").first
```

クックブックとレシピの管理

OpsWorks スタックと Chef Server では、クックブックとレシピの処理が多少異なります。Chef Server の場合:

- すべてのクックブックは独自に実装するかコミュニティクックブックを使用することで用意します。
- クックブックはサーバーに保存します。
- レシピは手動でまたは定期的なスケジュールで実行します。

OpsWorks スタックの場合:

- OpsWorks スタックは、組み込みレイヤーごとに 1 つ以上のクックブックを提供します。これらのクックブックによって、組み込みレイヤーのソフトウェアのインストールと設定、アプリケーションのデプロイなど、標準的なタスクが処理されます。

  組み込みクックブックによって実行されないタスクを処理するには、カスタムクックブックをスタックに追加するか、またはコミュニティクックブックを使用します。
- OpsWorks スタッククックブックは、S3 バケットや Git リポジトリなどのリモートリポジトリに保存します。

  詳細については、「クックブックの保存」を参照してください。

- レシピは手動で実行できますが、通常 OpsWorks 、インスタンスのライフサイクル中にキーポイントで発生する一連のライフサイクルイベントに応じて、 スタックでレシピを実行します。

  詳細については、「レシピの実行」を参照してください。
- OpsWorks スタックは Chef 11.10 スタックでのみ Berkshelf をサポートします。Berkshelf を使用してクックブックの依存関係を管理する場合、Chef 11.4 以前のバージョンを実行しているスタックを使用することはできません。

  詳細については、「Berkshelf の使用」を参照してください。

トピック

- クックブックの保存
- レシピの実行

クックブックの保存

Chef Server では、クックブックをサーバーに保存し、サーバーからインスタンスにデプロイします。 OpsWorks スタックでは、S3 または HTTP アーカイブ、Git または Subversion リポジトリなどのリポジトリにクックブックを保存します。クックブックをインストールするときに OpsWorks 、スタックがリポジトリからスタックのインスタンスにコードをダウンロードするために必要な情報を指定します。

Chef Server から移行するには、これらのリポジトリのいずれかにクックブックを配置する必要があります。クックブックのリポジトリを構築する方法については、「クックブックリポジトリ」を参照してください。

レシピの実行

OpsWorks スタックでは、各レイヤーにセットアップ、設定、デプロイ、デプロイ解除、シャットダウンの一連のライフサイクルイベントがあり、それぞれがインスタンスのライフサイクル中のキーポイントで発生します。カスタムレシピを実行するには、一般的に、そのレシピを該当するレイヤーのイベントに割り当てます。そのイベントが発生すると、割り当てられたレシピが OpsWorks スタックによって実行されます。たとえば、インスタンスの起動の完了後に Setup イベントが発生するため、一般的にこのイベントに、パッケージのインストールと設定やサービスの開始などのタスクを実行するレシピを割り当てます。

Execute Recipes スタックコマンドを使用して、レシピを手動で実行できます。このコマンドは開発やテストに便利ですが、このコマンドを使用して、ライフサイクルイベントに割り当てられてい

ないレシピを実行することもできます。また、Execute Recipes コマンドを使用して、Setup および Configure イベントを手動でトリガーすることもできます。

OpsWorks スタックコンソールに加えて、AWS CLI または SDKs を使用してレシピを実行できます。これらのツールは、すべての OpsWorks スタック API アクションをサポートしていますが、API よりも簡単に使用できます。create-deployment CLI コマンドを使用して、割り当てられたすべてのレシピを実行するライフサイクルイベントをトリガーします。このコマンドを使用して、イベントをトリガーすることなく、1 つ以上のレシピを実行することもできます。同等の SDK コードは、特定の言語に依存しますが、一般的に CLI コマンドに似ています。

以下の例で説明しているのは、`create-deployment` CLI コマンドを使用して、アプリケーションのデプロイを自動化する 2 つの方法です。

- 1 つのインスタンスが属するカスタムレイヤーをスタックに追加することで、アプリケーションを定期的にデプロイします。

  インスタンスで `cron` ジョブを作成して、指定したスケジュールでそのコマンドを実行する、カスタム Setup レシピをレイヤーに追加します。`cron` ジョブを作成するレシピの使用方法の例については、「Linux インスタンスでの cron ジョブの実行」を参照してください。
- `create-deployment` CLI コマンドを使用してアプリケーションをデプロイするタスクを、継続的統合パイプラインに追加します。

Chef 環境の使用

OpsWorks スタックは Chef 環境をサポートしていません。 `node.chef_environment` は常に を返します`_default`。

OpsWorks スタックレイヤーリファレンス

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックがデプロイするすべてのインスタンスは、スタック内のインスタンスのロールを定義し、インスタンスのセットアップと設定、パッケージのインストール、アプリケーションのデプロイなどの詳細を制御する、少なくとも 1 つのレイヤーのメンバーである必要があります。OpsWorks スタックを使用してレイヤーを作成および管理する方法の詳細については、「」を参照してくださいレイヤー。

各レイヤーの説明には、レイヤーのライフサイクルイベントごとに OpsWorks スタックが実行する組み込みレシピのリストが含まれます。それらのレシピは https://github.com/aws/opsworks-cookbooks に保存されています。リストには、 OpsWorks スタックによって直接実行されるレシピのみが含まれていることに注意してください。それらのレシピは、依存レシピを実行する場合があります。それら依存レシピはリストされていません。依存レシピやカスタムレシピを含む特定のイベントのレシピの完全なリストを参照するには、適切なライフサイクルイベントの Chef ログの実行リストを確認してください。

トピック

- HAProxy レイヤーリファレンス
- HAProxy OpsWorks スタックレイヤー
- MySQL レイヤーリファレンス
- MySQL OpsWorks レイヤー
- アプリケーションサーバーレイヤーリファレンス
- アプリケーションサーバーレイヤー
- ECS クラスタレイヤーリファレンス
- カスタムレイヤーリファレンス
- その他のレイヤーリファレンス
- その他のレイヤー

HAProxy レイヤーリファレンス

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> このレイヤーは、Linux ベースのスタックでのみ使用できます。

HAProxy レイヤーは、信頼性の高い高性能 TCP/HTTP ロードバランサーである HAProxy を使用して、TCP および HTTP ベースのアプリケーションに高可用性のロードバランシングとプロキシサービスを提供します。永続性やレイヤー7 処理を必要とする一方で、非常に高い負荷でクロールする必要のあるウェブサイトに特に役立ちます。

HAProxy はトラフィックを監視し、関連するインスタンスの統計と正常性をウェブページに表示します。デフォルトでは、URI は、http://*DNSName*/haproxy?stats で、*DNSName* は インスタンスの DNS 名になります。

Short name: lb

Compatibility: (互換性) HAProxyレイヤーは、custom、db-master、および memcached のレイヤーと互換性があります。

Open ports: (開いているポート:) HAProxy はポート 22 (SSH)、80 (HTTP)、および 443 (HTTPS) へのパブリックアクセスを許可します。

Autoassign Elastic IP addresses: デフォルトで On

Default EBS volume: No

Default security group: AWS-OpsWorks-LB-Server

Configuration: (構成) HAProxyレイヤーを設定するには、次を指定する必要があります。

- ヘルスチェック URI （ デフォルト: http://*DNSName*/ ）
- 統計 URI (デフォルト: http://*DNSName*/haproxy?stats)
- 統計パスワード (オプション)
- ヘルスチェック方法 (オプション) デフォルトでは、HAProxy は HTTP OPTIONS 方法を使用します。GET または HEAD を指定することも可能です。
- 統計の有効化 (オプション)
- ポート。デフォルトでは、 OpsWorks スタックは HTTP トラフィックと HTTPS トラフィックの両方を処理するように HAProxy を設定します。Chef 設定テンプレート (`haproxy.cfg.erb`) を上書きすることで、いずれか 1 つだけを処理するように HAProxy を設定することができます。

Setup recipes:

- opsworks_initial_setup
- ssh_host_keys
- ssh_users
- mysql::client
- dependencies
- ebs
- opsworks_ganglia::client
- haproxy

Configure recipes:

- opsworks_ganglia::configure-client
- ssh_users
- agent_version
- haproxy::configure

Deploy recipes:

- deploy::default
- haproxy::configure

Shutdown recipes:

- opsworks_shutdown::default
- haproxy::stop

インストール:

- OpsWorks スタックは、インスタンスのパッケージインストーラを使用して HAProxy をデフォルトの場所にインストールします。
- 指定した場所にログファイルを保存するように syslog を設定する必要があります。詳細については、「HAProxy」を参照してください。

HAProxy OpsWorks スタックレイヤー

> **Note**
>
> このレイヤーは、Chef 11 以前の Linux ベースのスタックでのみ使用できます。

OpsWorks スタック HAProxy レイヤーは、信頼性の高い高性能 OpsWorks TCP/HTTP ロードバランスである HAProxy サーバーをホストするインスタンスの設計図を提供する スタックレイヤーです。通常は、1 つのスモールインスタンスで、すべてのアプリケーションサーバートラフィックを十分に処理できます。

> **Note**
>
> スタックは 1 つのリージョンに制限されます。アプリケーションを複数のリージョンに分散させるには、リージョンごとに個別のスタックを作成する必要があります。

HAProxy レイヤーを作成するには

1. ナビゲーションペインで、[Layers] (レイヤー) をクリックします。
2. [Layers] (レイヤー) ページで [Add a Layer] (レイヤーの追加) または [+ Layer] (+ レイヤー) をクリックします。[Layer type] で [HAProxy] を選択します。

レイヤーには、次の設定があります。すべてがオプションです。

HAProxy statistics

レイヤーが統計を収集および表示するかどうか。デフォルト値は [Yes] です。

Statistics URL

統計ページの URL パス。完全な URL は、http://*DNSName*/*StatisticsPath* の形式になっています (*DNSName* は、関連付けられているインスタンスの DNS 名)。*StatisticsPath* (統計パス) のデフォルト値は /haproxy?stats です。例えば、http://ec2-54-245-151-7.us-west-2.compute./haproxy?stats のようになります。

Statistics user name

統計ページのユーザー名。統計ページを表示するために指定する必要があります。デフォルト値は、「opsWorks」です。

Statistics password

統計ページのパスワード。統計ページを表示するには、指定する必要があります。デフォルト値はランダムに生成される文字列です。

Health check URL

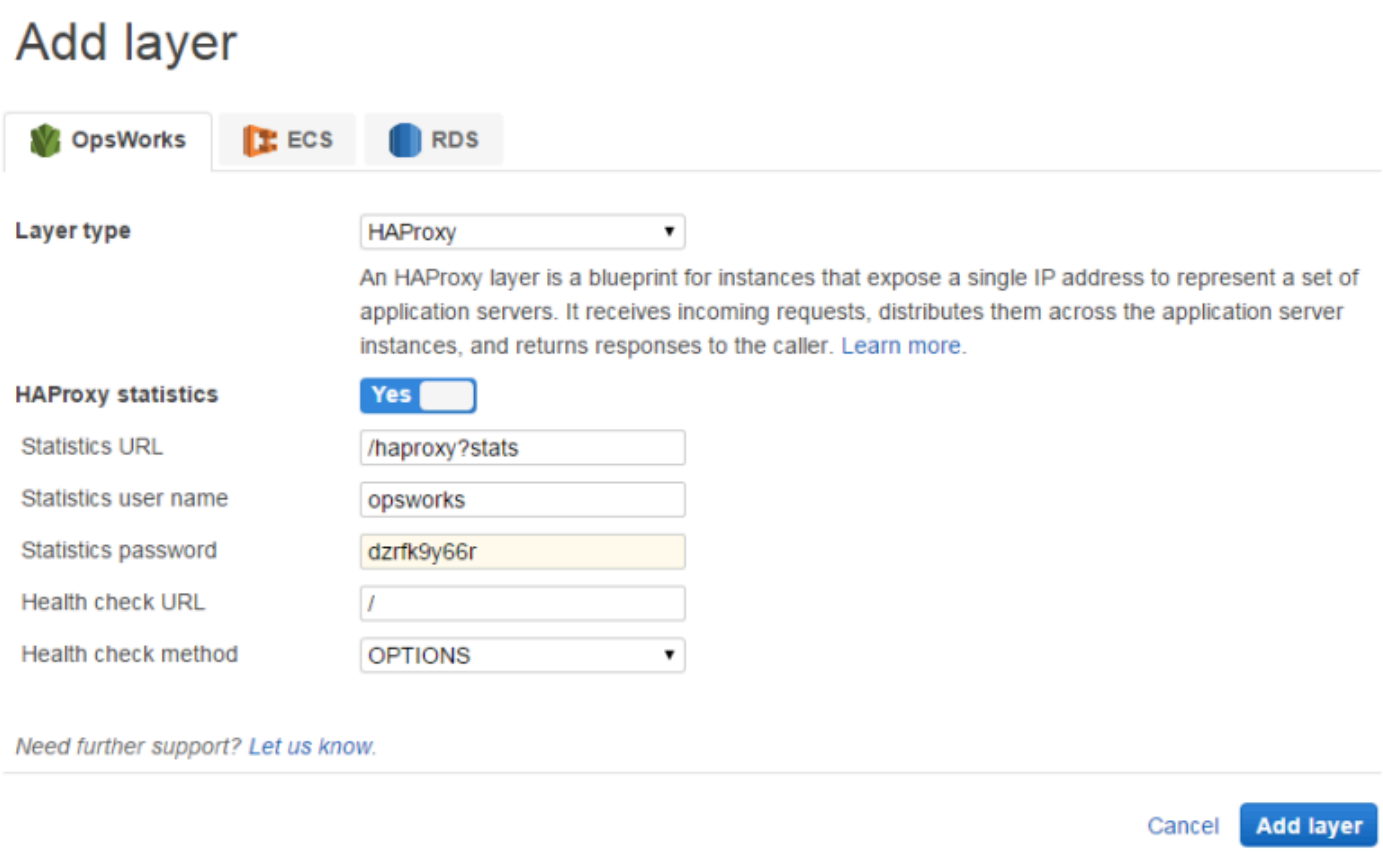
ヘルスチェック URL サフィックス。HAProxy はこの URL を使用して定期的に各アプリケーションサーバーインスタンスの HTTP メソッドを呼び出し、インスタンスが機能しているかどうかを判断します。ヘルスチェックが失敗した場合、HAProxy は手動で、または自動ヒーリングによってインスタンスが再開されるまで、インスタンスへのトラフィックのルーティングを停止します。URL サフィックスのデフォルト値は "/" です。これは、サーバーインスタンスのホームページ http://*DNSName*/ に対応しています。

Health check method

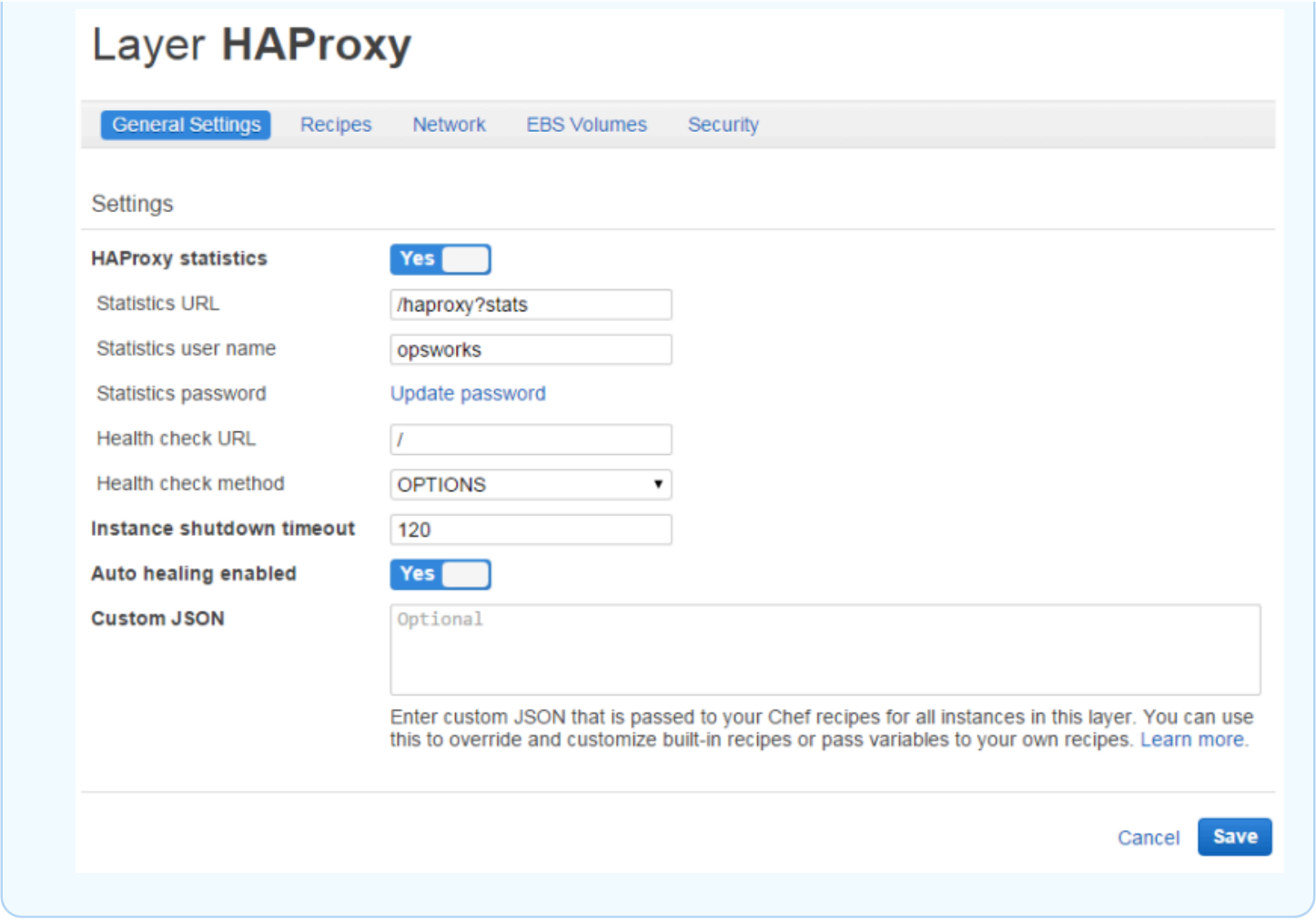
インスタンスが機能しているかどうかを確認するために使用される HTTP メソッド。デフォルト値は OPTIONS で、GET または HEAD を指定することもできます。詳細については、「httpchk」を参照してください。

Custom security groups

この設定は、組み込み OpsWorks の スタックセキュリティグループをレイヤーに自動的に関連付けないことを選択した場合に表示されます。レイヤーに関連付けるセキュリティグループを指定する必要があります。グループが正しく設定され、レイヤー間のトラフィックが許可されていることを確認します。詳細については、「新しいスタックを作成する」を参照してください。



> **Note**
>
> 後で使用するためにパスワードを記録します。 OpsWorks スタックでは、レイヤーの作成後にパスワードを表示することはできません。ただし、レイヤーの [Edit] (編集) ページにアクセスし、[General Settings] (一般設定) タブの [Update password] (パスワードパスワードの更新) をクリックすることによって、パスワードを更新することはできます。



HAProxyレイヤーWorks のしくみ

デフォルトで、HAProxy は以下のように動作します。

- HTTP ポートと HTTPS ポートのリクエストをリッスンします。

  Chef 設定テンプレート (`haproxy.cfg.erb`) をオーバーライドすることによって、HTTP または HTTPS ポートだけをリッスンするように HAProxy を設定できます。
- 任意のアプリケーションサーバーレイヤーのメンバーであるインスタンスに受信トラフィックをルーティングします。

  デフォルトでは、 OpsWorks Stacks は HAProxy を設定して、任意のアプリケーションサーバーレイヤーのメンバーであるインスタンスにトラフィックを分散します。例えば、スタックに Rails アプリケーションアプリケーションサーバー と PHP アプリケーションアプリケーションサーバーレイヤーの両方のレイヤーを持たせることができ、HAProxy マスターはトラフィックを両方のレイ

ヤーのインスタンスに分散させます。カスタムレシピを使用すると、デフォルトルーティングを設定できます。

- 複数のアベイラビリティーゾーンにトラフィックをルーティングします。

  1 つのアベイラビリティーゾーンがダウンした場合、ロードバランサーは他のゾーン内のインスタンスに受信トラフィックをルーティングするので、アプリケーションは中断せずに実行できます。そのため、推奨される方法は、複数のアベイラビリティーゾーンにアプリケーションサーバーを分散することです。

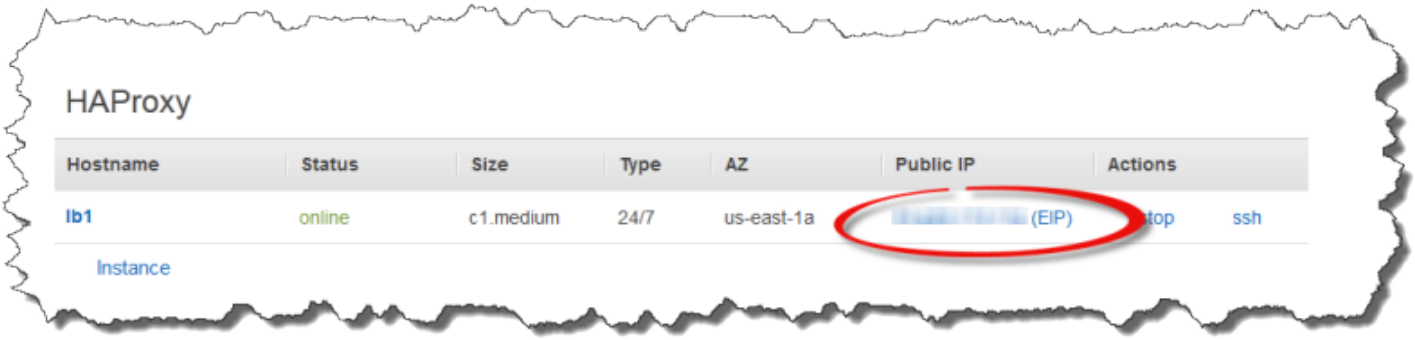
- 指定されたヘルスチェックメソッドを各アプリケーションサーバーインスタンスに対して定期的に実行し、正常性を評価します。

  メソッドが指定されたタイムアウト期間内に返らない場合、インスタンスは失敗したと見なされ、HAProxy はインスタンスへのリクエストのルーティングを停止します。 OpsWorks スタックは、失敗したインスタンスを自動的に置き換える方法も提供します。詳細については、「自動ヒーリングの使用」を参照してください。レイヤーを作成する際に、ヘルスチェックメソッドを変更できます。

- 統計情報を収集し、オプションでウェブページに表示します。

> **Important**
>
> ヘルスチェックがデフォルトの OPTIONS メソッドで正しく動作するには、アプリケーションが 2xx または 3xx ステータスコードを返す必要があります。

デフォルトでは、HAProxy レイヤーにインスタンスを追加すると、 OpsWorks Stacks はそのインスタンスにアプリケーションを表す Elastic IP アドレスを割り当てます。これは世界に公開されています。HAProxy インスタンスの Elastic IP アドレスは、アプリケーションのパブリックに公開される URL に過ぎないため、基盤となるアプリケーションサーバーインスタンスのためのパブリックドメイン名を作成および管理する必要はありません。次の図に示すように、[Instances] ページに移動し、インスタンスのパブリック IP アドレスを調べることで、アドレスを取得することもできます。"(EIP)" の前に表示されているアドレスが Elastic IP アドレスです。Elastic IP アドレスの詳細については、「Elastic IP アドレス (EIP)」を参照してください。



HAProxy インスタンスを停止すると、 OpsWorks スタックは Elastic IP アドレスを保持し、再起動時にインスタンスに再割り当てします。HAProxy インスタンスを削除すると、デフォルトでは、OpsWorks スタックはそのインスタンスの IP アドレスを削除します。アドレスを保持するには、次の図に示されているように、[Delete instance's Elastic IP] オプションをオフにします。

このオプションは、削除されたインスタンスと置き換えるために新しいインスタンスをレイヤーに追加したときに何が起こるかに影響します。

- 削除されたインスタンスの Elastic IP アドレスを保持した場合、 OpsWorks スタックはそのアドレスを新しいインスタンスに割り当てます。
- それ以外の場合、 OpsWorks スタックはインスタンスに新しい Elastic IP アドレスを割り当てます。新しいアドレスにマッピングするように DNS レジストラ設定を更新する必要があります。

アプリケーションサーバーインスタンスがオンラインになったり、オフラインになったりした場合 (手動で、または automatic scaling (自動スケーリング) または auto healing (自動ヒーリング) の結果として)トラフィックを現在のオンラインインスタンスのセットにルーティングするには、ロードバ

ランサー設定を更新する必要があります。このタスクは、レイヤーの組み込みレシピによって自動的に処理されます。

- 新しいインスタンスがオンラインになると、 OpsWorks スタックは Configure ライフサイクルイベントをトリガーします。HAProxy レイヤーの組み込み設定レシピは、リクエストを任意の新しいアプリケーションサーバーインスタンスにも分散するようにロードバランサー設定を更新します。
- インスタンスがオフラインになるか、インスタンスがヘルスチェックに失敗すると、 OpsWorks スタックは Configure ライフサイクルイベントもトリガーします。HAProxy Configure レシピはロードバランサー設定を更新して、トラフィックを残りのオンラインインスタンスのみにルーティングします。

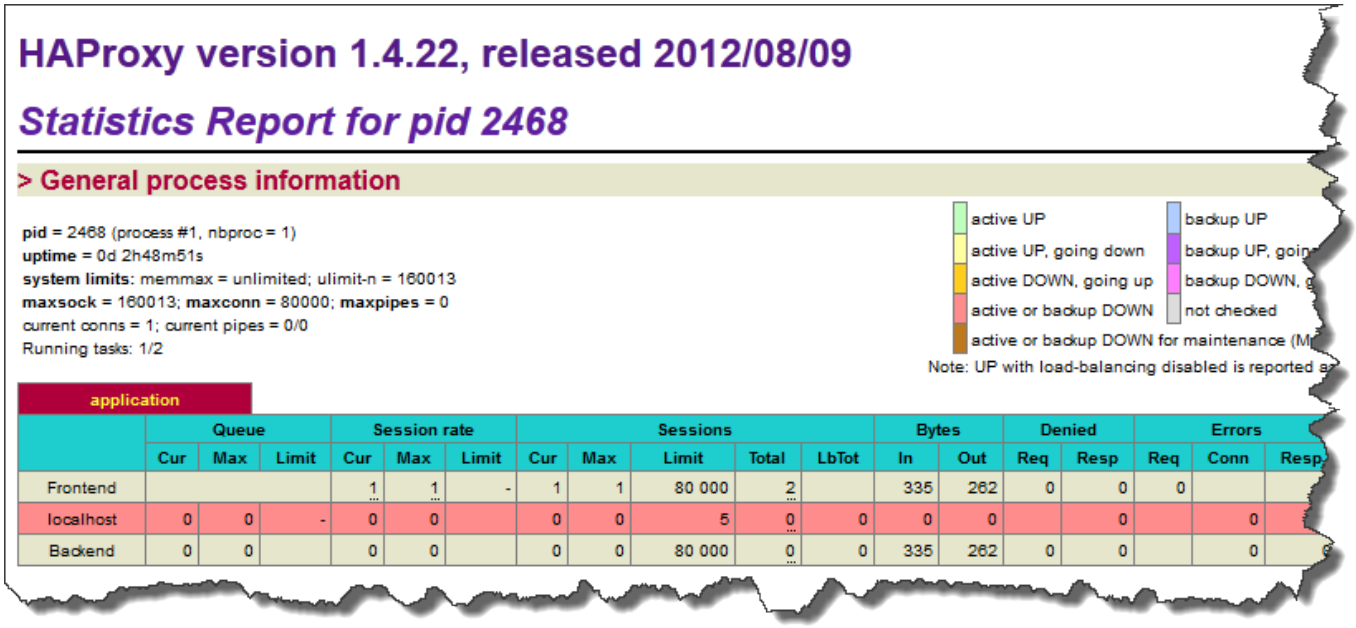
最後に、HAProxyレイヤーでカスタムドメインを使用することもできます。詳細については、「カスタムドメインの使用」を参照してください。

統計ページ

統計ページを有効にした場合、HAProxy は指定された URL のさまざまなメトリックスを含むページを表示します。

HAProxy 統計を表示するには

1. HAProxy インスタンスの Public DNS (パブリックDNS) の名前をインスタンスの [Details] (詳細) ページから取得し、それをコピーします。
2. [Layers] (レイヤー) ページの [HAProxy] をクリックし、そのレイヤーの詳細ページを開きます。
3. レイヤーの詳細から統計の URL を取得し、それをパブリック DNS 名に追加します。例えば、**`http://ec2-54-245-102-172.us-west-2.compute.amazonaws.com/haproxy?stats`** とします。
4. 前の手順の URL をブラウザに貼り付け、レイヤーを作成したときに指定したユーザー名とパスワードを使用して統計ページを開きます。



HAProxy version 1.4.22, released 2012/08/09

Statistics Report for pid 2468

> General process information

pid = 2468 (process #1, nbproc = 1)
uptime = 0d 2h48m51s
system limits: memmax = unlimited; ulimit-n = 160013
maxsock = 160013; maxconn = 80000; maxpipes = 0
current conns = 1; current pipes = 0/0
Running tasks: 1/2

active UP
active UP, going down
active DOWN, going up
active or backup DOWN
active or backup DOWN for maintenance (M
backup UP
backup UP, goin
backup DOWN, g
not checked
Note: UP with load-balancing disabled is reported a

application

	Queue			Session rate			Sessions					Bytes		Denied		Errors		
	Cur	Max	Limit	Cur	Max	Limit	Cur	Max	Limit	Total	LbTot	In	Out	Req	Resp	Req	Conn	Resp
Frontend				1	1	-	1	1	80 000	2		335	262	0	0	0		
localhost	0	0	-	0	0		0	0	5	0	0	0	0		0		0	
Backend	0	0		0	0		0	0	80 000	0	0	335	262	0	0		0	

MySQL レイヤーリファレンス

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> このレイヤーは、Linux ベースのスタックでのみ使用できます。

MySQL レイヤーは、広く使用されているリレーショナルデータベース管理システムである MySQL をサポートしています。 OpsWorks スタックは、オペレーティングシステムに応じて利用可能な最新バージョンをインストールします。MySQL インスタンスを追加する場合は、必要なアクセス情報がアプリケーションサーバーレイヤーに提供されます。マスター–マスターまたはマスター–スレーブ構成をセットアップするにはカスタム Chef レシピを書き込む必要があります。

Short name: db-master

Compatibility: (互換性:) MySQL レイヤーは custom、lb、memcached、monitoring-master、nodejs-app、php-app、rails-app、および web のレイヤーと互換性があります。

Open ports: (開いているポート:) MySQL レイヤーは、ポート 22 (SSH)、およびスタックのウェブサーバー、カスタムサーバー、さらには Rails、PHP、Node.js アプリケーションサーバーからのすべてのポートへのパブリックアクセスを許可します。

Autoassign Elastic IP addresses: デフォルトで Off

Default EBS volume: `/vol/mysql` で Yes

Default security group: AWS-OpsWorks-DB-Master-Server

Configuration: (互換性:) MySQLレイヤーを設定するには、以下を指定する必要があります。

- root ユーザーのパスワード
- MySQL エンジン

Setup recipes:

- opsworks_initial_setup
- ssh_host_keys
- ssh_users
- mysql::client
- dependencies
- ebs
- opsworks_ganglia::client
- mysql::server
- dependencies
- deploy::mysql

Configure recipes:

- opsworks_ganglia::configure-client
- ssh_users

- agent_version
- deploy::mysql

Deploy recipes:

- deploy::default
- deploy::mysql

Shutdown recipes:

- opsworks_shutdown::default
- mysql::stop

インストール:

- OpsWorks スタックはインスタンスのパッケージインストーラを使用して、MySQL とそのログファイルをデフォルトの場所にインストールします。詳細については、MySQL に関するドキュメントを参照してください。

MySQL OpsWorks レイヤー

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> このレイヤーは、Chef 11 以前の Linux ベースのスタックでのみ使用できます。

MySQL OpsWorks レイヤーは、MySQL データベースマスターとして機能する Amazon EC2 インスタンスのブループリントを提供します。アプリケーションサーバーレイヤーにデプロイされた各アプリケーションには、組み込みのレシピによってデータベースが作成されます。たとえば、"myapp" という PHP アプリケーションをデプロイした場合、"myapp" というデータベースが作成されます。

MySQLレイヤーには以下の構成設定があります。

MySQL root user password

(必須) root ユーザーのパスワード。

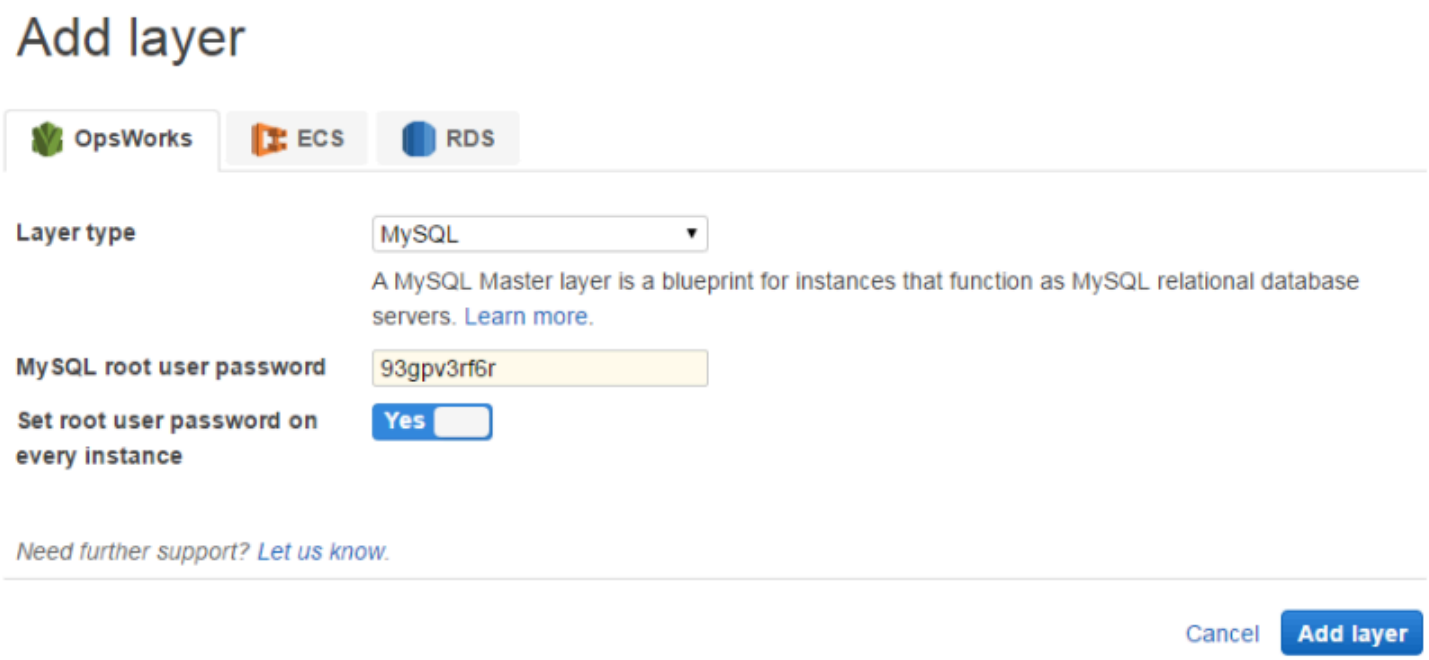
Set root user password on every instance

(オプション) root ユーザーのパスワードが、スタックの各インスタンスにインストールされているスタック設定およびデプロイ属性に含まれているかどうか。デフォルトの設定は、[Yes] です。

この値を No に設定すると、 OpsWorks スタックはルートパスワードをアプリケーションサーバーインスタンスにのみ渡します。

Custom security groups

(オプション)レイヤーに関連付けるカスタムセキュリティグループ。詳細については、「新しいスタックを作成する」を参照してください。



レイヤーには 1 つ以上のインスタンスを追加することができ、それぞれのインスタンスは別個の MySQL データベースマスターを表します。その後、インスタンスをアプリケーションにアタッチすると、そのアプリケーションサーバーに必要な接続情報がインストールされます。アプリケーションは、この接続情報を使用して、インスタンスのデータベースサーバーに接続することができます。

アプリケーションサーバーレイヤーリファレンス

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post または AWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックは、複数の異なるアプリケーションサーバーと静的ウェブページサーバーをサポートしています。

トピック

- AWS フロー (Ruby) レイヤーリファレンス
- Java アプリケーションサーバーレイヤーリファレンス
- Node.js アプリケーションサーバーレイヤーリファレンス
- PHP アプリケーションサーバーレイヤーリファレンス
- Rails アプリケーションサーバーレイヤーリファレンス
- 静的 ウェブサーバーレイヤーリファレンス

AWS フロー (Ruby) レイヤーリファレンス

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post または AWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> このレイヤーは、Linux ベースのスタックでのみ使用できます。

AWS Flow (Ruby) レイヤーは、Amazon Simple ワークフローサービスのアクティビティとワークフローワーカーをホストするインスタンスのブループリントとなります。

[Short name:] aws-flow-ruby

Compatibility: (互換性) AWS フロー (Ruby) レイヤーは、PHP アプリケーションサーバー、MySQL、Memcached、Ganglia、およびカスタムレイヤーと互換性があります。

[Open ports:] なし。

IAM ロール: aws-opsworks-ec2-role-with-swf は、リクエストに応じて OpsWorks スタックが作成する標準の AWS フロー (Ruby) ロールです。

Autoassign Elastic IP addresses: デフォルトで Off

Default EBS Volume: No

[Default security group:] AWS-OpsWorks-AWS-Flow-Ruby-Server

Setup recipes:

- opsworks_initial_setup
- ssh_host_keys
- ssh_users
- mysql::client
- dependencies
- ebs
- opsworks_ganglia::client
- opsworks_aws_flow_ruby::setup

Configure recipes:

- opsworks_ganglia::configure-client
- ssh_users

- mysql::client
- agent_version
- opsworks_aws_flow_ruby::configure

Deploy recipes:

- deploy::default
- deploy::aws-flow-ruby

Undeploy recipes:

- deploy::aws-flow-ruby-undeploy

Shutdown recipes:

- opsworks_shutdown::default

Java アプリケーションサーバーレイヤーリファレンス

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> このレイヤーは、Linux ベースのスタックでのみ使用できます。

Java アプリケーションサーバーレイヤーは、Apache Tomcat 7.0 アプリケーションサーバーをサポートしています。

Short name: java-app

Compatibility: (互換性) Java アプリケーションサーバーレイヤーは、custom、db-master および memcached のレイヤーと互換性があります。

Open ports: (開いているポート) Java アプリケーションサーバーレイヤーは、ポート 22 (SSH)、80 (HTTP)、443 (HTTPS)、ロードバランサーからのすべてのポートへのパブリックアクセスを許可します。

Autoassign Elastic IP addresses: デフォルトで Off

Default EBS Volume: No

Default security group: AWS-OpsWorks-Java-App-Server

Setup recipes:

- opsworks_initial_setup
- ssh_host_keys
- ssh_users
- mysql::client
- dependencies
- ebs
- opsworks_ganglia::client
- opsworks_java::setup

Configure recipes:

- opsworks_ganglia::configure-client
- ssh_users
- agent_version
- opsworks_java::configure

Deploy recipes:

- deploy::default
- deploy::java

Undeploy recipes:

- deploy::java-undeploy

Shutdown recipes:

- opsworks_shutdown::default
- deploy::java-stop

インストール:

- Tomcat を `/usr/share/tomcat7` にインストールします。
- ログファイルの生成方法の詳細については、「Tomcat にログインする」を参照してください。

Node.js アプリケーションサーバーレイヤーリファレンス

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> このレイヤーは、Linux ベースのスタックでのみ使用できます。

Node.js アプリケーションサーバーレイヤーは [Node.js] アプリケーションサーバーをサポートします。これは、拡張性の高いネットワークアプリケーションサーバーを実装するプラットフォームです。プログラムは JavaScript で記述され、イベント駆動型の非同期 I/O を使用して、オーバーヘッドを最小化し、拡張性を最大限に高めます。

Short name: nodejs-app

Compatibility: (互換性) Node.js アプリケーションサーバーレイヤーは、custom、db-master、memcached および monitoring-master のレイヤーと互換性があります。

Open ports: (開いているポート) Node.js アプリケーションサーバーレイヤーは、ポート 22 (SSH)、80 (HTTP)、443 (HTTPS) およびロードバランサーからのすべてのポートへのパブリックアクセスを許可します。

Autoassign Elastic IP addresses: デフォルトで Off

Default EBS volume: No

Default security group: AWS-OpsWorks-nodejs-App-Server

Setup recipes:

- opsworks_initial_setup
- ssh_host_keys
- ssh_users
- mysql::client
- dependencies
- ebs
- opsworks_ganglia::client
- opsworks_nodejs
- opsworks_nodejs::npm

Configure recipes:

- opsworks_ganglia::configure-client
- ssh_users
- agent_version
- opsworks_nodejs::configure

Deploy recipes:

- deploy::default
- opsworks_nodejs
- opsworks_nodejs::npm

- deploy::nodejs

Undeploy recipes:

- deploy::nodejs-undeploy

Shutdown recipes:

- opsworks_shutdown::default
- deploy::nodejs-stop

インストール:

- Node.js を `/usr/local/bin/node` にインストールします。
- ログファイルの生成方法の詳細については、Nodejitsu ウェブサイトの「How to log in node.js」を参照してください。

Node.js application configuration:

- Node.js によって実行される主ファイルは、`server.js` という名前で、デプロイされたアプリケーションのルートディレクトリにあります。
- Node.js アプリケーションは、ポート 80 (または該当する場合、ポート 443) でリッスンするように設定する必要があります。

> **Note**
>
> Express を実行する Node.js のアプリケーションは、一般的に次のコードを使用してリッスンするポートを設定します。ここで、`process.env.PORT` はデフォルトポートを表し、80 に解決します。
>
> ```
> app.set('port', process.env.PORT || 3000);
> ```
>
> OpsWorks スタックでは、次のようにポート 80 を明示的に指定する必要があります。
>
> ```
> app.set('port', 80);
> ```

PHP アプリケーションサーバーレイヤーリファレンス

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> このレイヤーは、Linux ベースのスタックでのみ使用できます。

PHP アプリケーションサーバーレイヤーは mod_php で Apache2 を使用することで、PHP アプリケーションサーバーをサポートします。

Short name: php-app

Compatibility: (互換性) PHP アプリケーションサーバーレイヤーは、custom、db-master、memcached、monitoring-master および rails-app のレイヤーと互換性があります。

Open ports: (開いているポート) PHP アプリケーションサーバーレイヤーは、ポート 22 (SSH)、 80 (HTTP)、443 (HTTPS) およびロードバランサーからのすべてのポートへのパブリックアクセスを許可します。

Autoassign Elastic IP addresses: デフォルトで Off

Default EBS volume: No

Default security group: AWS-OpsWorks-PHP-App-Server

Setup recipes:

- opsworks_initial_setup
- ssh_host_keys
- ssh_users

- mysql::client
- dependencies
- ebs
- opsworks_ganglia::client
- mysql::client
- dependencies
- mod_php5_apache2

Configure recipes:

- opsworks_ganglia::configure-client
- ssh_users
- agent_version
- mod_php5_apache2::php
- php::configure

Deploy recipes:

- deploy::default
- deploy::php

Undeploy recipes:

- deploy::php-undeploy

Shutdown recipes:

- opsworks_shutdown::default
- apache2::stop

インストール:

- OpsWorks スタックは、インスタンスのパッケージインストーラを使用して、Apache2、mod_php、および関連するログファイルをデフォルトの場所にインストールしま

す。インストールの詳細については、「Apache」を参照してください。ログ記録の詳細については、「ログファイル」を参照してください。

Rails アプリケーションサーバーレイヤーリファレンス

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> このレイヤーは、Linux ベースのスタックでのみ使用できます。

Rails アプリケーションサーバーレイヤーは Ruby on Rails アプリケーションサーバーをサポートします。

Short name: rails-app

Compatibility: (互換性) Rails アプリケーションサーバーレイヤーは、custom、db-master、memcached、monitoring-master および php-app のレイヤーと互換性があります。

Ports: (ポート) Rails アプリケーションサーバーレイヤーは、ポート 22 (SSH)、80 (HTTP、443 (HTTPS) およびロードバランサーからのすべてのポートへのパブリックアクセスを許可します。

Autoassign Elastic IP addresses: デフォルトで Off

Default EBS volume: No

Default security group: AWS-OpsWorks-Rails-App-Server

Configuration: (構成) Rails アプリケーションサーバーレイヤーを構成するには、以下を指定する必要があります。

- Ruby バージョン

- Rails スタック
- Rubygems バージョン
- Bundler をインストールおよび管理するかどうか
- Bundler バージョン

Setup recipes:

- opsworks_initial_setup
- ssh_host_keys
- ssh_users
- mysql::client
- dependencies
- ebs
- opsworks_ganglia::client
- apache2 apache2::mod_deflate
- passenger_apache2
- passenger_apache2::mod_rails
- passenger_apache2::rails

Configure recipes:

- opsworks_ganglia::configure-client
- ssh_users
- agent_version
- rails::configure

Deploy recipes:

- deploy::default
- deploy::rails

Undeploy recipes:

- deploy::rails-undeploy

Shutdown recipes:

- opsworks_shutdown::default
- apache2::stop

インストール:

- OpsWorks スタックは、インスタンスのパッケージインストーラを使用して、mod_passenger、mod_rails、および関連するログファイルを含む Apache2 をデフォルトの場所にインストールします。インストールの詳細については、「Phusion Passenger」を参照してください。ログ記録の詳細については、「ログファイル」を参照してください。

静的 ウェブサーバーレイヤーリファレンス

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> このレイヤーは、Linux ベースのスタックでのみ使用できます。

静的ウェブサーバーレイヤーは、JavaScript などのクライアント側コードを含めることができる静的な HTML ページを提供します。それは、オープンソース HTTP、リバースプロキシ、メールのプロキシサーバーである Nginx に基づいています。

Short name: web

Compatibility: (互換性) 静的ウェブサーバーレイヤーは、custom、db-master、および memcached のレイヤーと互換性があります。

Open ports: (開いているポート) 静的ウェブサーバーレイヤーは、ポート 22 (SSH)、80 (HTTP、443 (HTTPS) およびロードバランサーからのすべてのポートへのパブリックアクセスを許可します。

Autoassign Elastic IP addresses: デフォルトで Off

Default EBS volume: No

Default security group: AWS-OpsWorks-Web-Server

Setup recipes:

- opsworks_initial_setup
- ssh_host_keys
- ssh_users
- mysql::client
- dependencies
- ebs
- opsworks_ganglia::client
- nginx

Configure recipes:

- opsworks_ganglia::configure-client
- ssh_users
- agent_version

Deploy recipes:

- deploy::default
- deploy::web

Undeploy recipes:

- deploy::web-undeploy

Shutdown recipes:

- opsworks_shutdown::default
- nginx::stop

インストール:

- Nginx を `/usr/sbin/nginx` にインストールします。
- Nginx ログファイルは `/var/log/nginx` に保存されます。

アプリケーションサーバーレイヤー

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> これらのレイヤーは、Chef 11 以前の Linux ベースのスタックでのみ使用できます。

OpsWorks スタックは、「application」に静的ウェブページが含まれている複数の異なるアプリケーションサーバーをサポートしています。各タイプのサーバーには個別の OpsWorks スタックレイヤーがあり、アプリケーションサーバーおよび関連するパッケージを各レイヤーのインスタンスにインストールしたり、アプリケーションをデプロイしたりする処理を行う組み込みレシピがあります。例えば、Java アプリケーションサーバーレイヤーは Apache、Tomcat、OpenJDK を含む複数のパッケージをインストールし、レイヤーの各インスタンスに Java アプリケーションをデプロイします。

アプリケーションサーバーレイヤーを使用するための基本的な手順は次のとおりです。

1. 使用可能なアプリケーションサーバーレイヤータイプのうちの 1 つを作成します。
2. レイヤーに 1 つ以上のインスタンスを追加します。
3. アプリケーションを作成し、インスタンスにデプロイします。詳細については、「アプリケーション」を参照してください。

4. (オプション) レイヤーに複数のインスタンスがある場合は、受信トラフィックを各インスタンスに分散するロードバランサーを追加できます。詳細については、「HAProxy OpsWorks スタックレイヤー」を参照してください。

トピック

- AWS フロー (Ruby) レイヤー
- Java App Server OpsWorks スタックレイヤー
- Node.js App Server OpsWorks スタックレイヤー
- PHP App Server OpsWorks スタックレイヤー
- Rails App Server OpsWorks スタックレイヤー
- 静的ウェブサーバー OpsWorks スタックレイヤー

AWS フロー (Ruby) レイヤー

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> このレイヤーは、Linux ベースのスタックでのみ使用できます。

AWS フロー (Ruby) レイヤーは、Amazon OpsWorks SWF アクティビティとワークフローワーカーをホストするインスタンスの設計図を提供する スタックレイヤーです。 Amazon SWF このワーカーの実装に使用される [AWS Flow Framework for Ruby] は、Amazon SWF のすべてのメリットを実現しながら、分散非同期アプリケーションの実装プロセスを単純化するプログラミングフレームワークです。このフレームワークは、業務プロセス、メディアエンコーディング、長期タスク、バックグラウンド処理など、幅広いシナリオに対応するアプリケーションの実装に適しています。

AWS フロー (Ruby) レイヤーには、次の設定があります。

Rubygems バージョン

フレームワークの Gem のバージョン。

[Bundler version (Bundler のバージョン)]

Bundler のバージョン。

EC2 インスタンスプロファイル

レイヤーのインスタンスで使用される、ユーザー定義の Amazon EC2 インスタンスプロファイル。このプロファイルでは、レイヤーのインスタンスで実行され、Amazon SWF にアクセスするアプリケーションにアクセス許可を付与する必要があります。

アカウントに適切なプロファイルがない場合は、SWF アクセスを持つ新しいプロファイルを選択して OpsWorks 、 のプロファイルを スタックで更新するか、IAM コンソールを使用して自分で更新できます。その後で、更新されたプロファイルを以降すべての AWS Flowレイヤーに使用できます。次に、IAM コンソールを使用してプロファイルを作成する方法を簡単に説明します。詳細については、「Amazon Simple Workflow ServiceのID とアクセスの管理」を参照してください。

AWS フロー (Ruby) インスタンスのプロファイルの作成

1. IAM コンソール (https://console.aws.amazon.com/iam/) を開きます。
2. ナビゲーションペインの ポリシー を選択し、ポリシーを作成 ポリシーをクリックして、新しいカスタマー管理ポリシーを作成します。
3. [サービス] では、[SWF] を選択します。
4. 「アクション」では、「すべての SWF アクション (swf:*)」を選択します。
5. Amazon Resource Name (ARN) には、Amazon リソースネーム (ARN)) ワーカーがアクセスできる Amazon SWF ドメインを指定する ARNを入力します。「**`All resources`**」を選択して、すべてのドメインへのアクセスを許可します。
6. [次へ] を選択します。
7. オプションで、ポリシーを識別するタグを入力します。
8. [次へ] を選択します。
9. 完了したら、ポリシーの作成 を選択します。
10. ナビゲーションペインで [ロール] を選択した後、[ロールの作成] を選択します。
11. ロール名を指定して、次のステップ を選択します。ロールを作成した後に名前を変更することはできません。
12. AWS のサービス、EC2 の順に選択します。

13. [次へ] を選択します。
14. アクセス許可ポリシーリストから、以前に作成したポリシーを選択します。
15. [次へ] を選択します。
16. ロール名を入力し、[ロールの作成] を選択します。ロールを作成した後に名前を変更することはできません。
17. スタックで AWS フロー (Ruby) OpsWorks レイヤーを作成するときに、このプロファイルを指定します。

Java App Server OpsWorks スタックレイヤー

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> このレイヤーは、Linux ベースのスタックでのみ使用できます。

Java App Server レイヤーは、Java OpsWorks アプリケーションサーバーとして機能するインスタンスの設計図を提供する スタックレイヤーです。このレイヤーは Apache Tomcat 7.0 と Open JDK 7 に基づいています。 OpsWorks スタックは Java コネクタライブラリもインストールします。これにより、Java アプリケーションは JDBC `DataSource` オブジェクトを使用してバックエンドのデータストアに接続できます。

インストール: Tomcat は `/usr/share/tomcat7` にインストールされます。

[Add Layer] ページには、以下の設定オプションがあります。

Java VM Options

この設定を使用すると、カスタム Java VM オプションを指定できます。デフォルトオプションはありません。たとえば、一般的なオプションのセットは `-Djava.awt.headless=true -`

`Xmx128m -XX:+UseConcMarkSweepGC` です。Java VM オプションを使用する場合は、有効なオプションセットを渡してください。 OpsWorks スタックは文字列を検証しません。無効なオプションを渡そうとすると、通常は Tomcat サーバーが開始に失敗し、セットアップが失敗します。その場合は、インスタンスのセットアップ Chef ログで詳細を確認できます。Chef ログを表示および解釈する方法の詳細については、「Chef ログ」を参照してください。

Custom security groups

この設定は、組み込み OpsWorks の スタックセキュリティグループをレイヤーに自動的に関連付けないことを選択した場合に表示されます。レイヤーに関連付けるセキュリティグループを指定する必要があります。詳細については、「新しいスタックを作成する」を参照してください。

[Elastic Load Balancer]

レイヤーのインスタンスに、Elastic Load Balancing のロードバランサーをアタッチできます。詳細については、「Elastic ロードバランシングレイヤー」を参照してください。

カスタム JSON またはカスタム属性ファイルを使用して、その他の設定を指定できます。詳細については、「カスタム設定」を参照してください。

> **Important**
>
> Java アプリケーションが SSL を使用する場合は、CVE-2014-3566 で説明されている脆弱性に対応するために、可能であれば SSLv3 を無効にすることをお勧めします。詳細については、「Apache サーバーに対する SSLv3 の無効化」を参照してください。

トピック

- Apache サーバーに対する SSLv3 の無効化
- カスタム設定
- Java アプリケーションのデプロイ

Apache サーバーに対する SSLv3 の無効化

SSLv3 を無効にするには、Apache サーバーの `ssl.conf` ファイルの `SSLProtocol` 設定を変更する必要があります。そのためには、組み込みの apache2 cookbook's (apache2 クックブック) の `ssl.conf.erb` テンプレートファイルをオーバーライドする必要があります。このテンプレートファイルは、Java アプリケーションアプリケーションサーバーレイヤーの Setup レシピで

ssl.conf を作成するために使用されます。詳細は、レイヤーのインスタンスに指定するオペレーティングシステムによって異なります。以下に、Amazon Linux または Ubuntu システムに必要な変更内容を示します。SSLv3 では、Red Hat Enterprise Linux (RHEL) システムが自動的に無効になっています。組み込みテンプレートのオーバーライドの詳細については、「カスタムテンプレートの使用」を参照してください。

Amazon Linux

これらのオペレーティングシステムの ssl.conf.erb ファイルは、apache2 クックブックの apache2/templates/default/mods ディレクトリにあります。組み込みファイルの関連する部分を次に示します。

```
...
#SSLCipherSuite ALL:!ADH:!EXPORT56:RC4+RSA:+HIGH:+MEDIUM:+LOW:+SSLv2:+EXP:+eNULL

# enable only secure protocols: SSLv3 and TLSv1.2, but not SSLv2
SSLProtocol all -SSLv2
</IfModule>
```

ssl.conf.erb をオーバーライドし、SSLProtocol 設定を次のように変更します。

```
...
#SSLCipherSuite ALL:!ADH:!EXPORT56:RC4+RSA:+HIGH:+MEDIUM:+LOW:+SSLv2:+EXP:+eNULL

# enable only secure protocols: SSLv3 and TLSv1.2, but not SSLv2
SSLProtocol all -SSLv3 -SSLv2
</IfModule>
```

Ubuntu 14.04 LTS

このオペレーティングシステムの ssl.conf.erb ファイルは、apache2 クックブックの apache2/templates/ubuntu-14.04/mods ディレクトリにあります。組み込みファイルの関連する部分を次に示します。

```
...
# The protocols to enable.
# Available values: all, SSLv3, TLSv1.2
```

```
# SSL v2 is no longer supported
SSLProtocol all
...
```

この設定を次のように変更します。

```
...
# The protocols to enable.
# Available values: all, SSLv3, TLSv1.2
# SSL v2 is no longer supported
SSLProtocol all -SSLv3 -SSLv2
...
```

カスタム設定

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックは、追加の設定を組み込み属性として公開します。これらはすべて `opsworks_java`名前空間にあります。カスタム JSON またはカスタム属性ファイルを使用して組み込み属性をオーバーライドし、カスタム値を指定できます。たとえば、JVM と Tomcat のバージョンは、組み込みの `jvm_version` と `java_app_server_version` 属性によって表され、どちらも 7 に設定されます。カスタム JSON またはカスタム属性ファイルを使用して、どちらか一方または両方を 6 に設定できます。次の例は、カスタム JSON を使用して、両方の属性を 6 に設定します。

```
{
  "opsworks_java": {
    "jvm_version": 6,
    "java_app_server_version" : 6
  }
```

```
}
```

詳細については、「カスタム JSON の使用」を参照してください。

カスタム設定のもう 1 つの例では、`use_custom_pkg_location`、`custom_pkg_location_url_debian`、および `custom_pkg_location_url_rhel` 属性をオーバーライドすることによって、カスタム JDK をインストールします。

> **Note**
>
> 組み込みクックブックをオーバーライドすると、これらのコンポーネントを自分で更新しなければならなくなります。

属性および属性をオーバーライドする方法の詳細については、「属性の上書き」を参照してください。組み込み属性の一覧については、「opsworks_java 属性」を参照してください。

Java アプリケーションのデプロイ

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

以下のトピックでは、Java アプリケーションサーバーレイヤーのインスタンスにアプリケーションをデプロイする方法について説明します。例は JSP アプリケーション用ですが、他の種類の Java アプリケーションのインストールにもほぼ同じ手順を使用できます。

サポートされている任意のリポジトリから JSP ページをデプロイできます。WAR ファイルをデプロイする場合、 OpsWorks スタックは Amazon S3 または HTTP アーカイブからデプロイされた WAR ファイルを自動的に抽出しますが、Git または Subversion リポジトリからは抽出しないことに注意してください。WAR ファイルのために Git または Subversion を使用する場合は、次のいずれかの操作を行います。

- 抽出されたアーカイブをリポジトリに保存します。
- 次の例で示すように、WAR ファイルをリポジトリに保存し、Chef デプロイメントフックを使用してアーカイブを抽出します。

Chef デプロイメントフックを使用すると、4 つのデプロイメントステージのうちの任意のステージのインスタンスでユーザー提供の Ruby アプリケーションを実行できます。アプリケーション名によってステージが決まります。次の例では、Ruby アプリケーションの名前が `before_migrate.rb` です。このアプリケーションは、デプロイされた WAR ファイルを Git または Subversion リポジトリから抽出します。アプリケーションは、名前によって Checkout デプロイメントフックに関連付けられているので、デプロイメント操作の開始時に、コードのチェック後、移行の前に実行されます。この例を使用する方法の詳細については、「Chef デプロイフックの使用」を参照してください。

```
::Dir.glob(::File.join(release_path, '*.war')) do |archive_file|
  execute "unzip_#{archive_file}" do
    command "unzip #{archive_file}"
    cwd release_path
  end
end
```

> **Note**
>
> JPS アプリケーションの更新プログラムをデプロイする際に、Tomcat は更新プログラムを認識せず、アプリケーションの既存のバージョンを継続して実行する可能性があります。これが発生するのは、JSP ページのみが含まれている .zip ファイルとしてアプリケーションをデプロイする場合などです。Tomcat が、デプロイされた最新バージョンを確実に実行するようにするには、プロジェクトのルートディレクトリに、`web.xml` ファイルを含む WEB-INF ディレクトリを含める必要があります。`web.xml` ファイルはさまざまなコンテンツを含むことができますが、Tomcat が確実に更新プログラムを認識し、現在デプロイされているアプリケーションのバージョンを実行するようにするには、次のコンテンツで十分です。各更新プログラムのバージョンを変更する必要はありません。Tomcat は、バージョンが変更されていない場合でも更新プログラムを認識します。
>
> ```
> <context-param>
>   <param-name>appVersion</param-name>
>   <param-value>0.1</param-value>
> ```

```
</context-param>
```

トピック

- JSP アプリケーションのデプロイ
- バックエンドデータベースでの JSP アプリケーションのデプロイ

JSP アプリケーションのデプロイ

JSP アプリケーションをデプロイするには、名前とリポジトリ情報を指定します。また、オプションでドメインおよび SSL 設定を指定できます。アプリケーションの作成方法の詳細については、「アプリケーションの追加」を参照してください。次の手順は、公開の Amazon S3 アーカイブから、シンプルな JSP ページを作成およびデプロイする方法を示しています。プライベートの Amazon S3 アーカイブなど、他のリポジトリの種類の使用方法の詳細については、「Application Source」を参照してください。

次の例は、単にいくつかのシステム情報を表示する JSP ページを示しています。

```
<%@ page import="java.net.InetAddress" %>
<html>
<body>
<%
    java.util.Date date = new java.util.Date();
    InetAddress inetAddress = InetAddress.getLocalHost();
%>
The time is
<%
    out.println( date );
    out.println("<br>Your server's hostname is "+inetAddress.getHostName());
%>
<br>
</body>
</html>
```

> **Note**
>
> 次の手順では、スタックの作成、レイヤーへのインスタンスの追加などの基本操作にすでに慣れていることを前提としています。 OpsWorks スタックを初めて使用する場合は、まず「」を参照してくださいChef 11 Linux スタックの使用開始。

Amazon S3 アーカイブから JSP ページをデプロイするには

1. Java アプリケーションサーバーのレイヤーを持つスタックを作成 し、レイヤーに 24/7 のインスタンスを追加して起動します。
2. コードを `simplejsp.jsp` という名前のファイルにコピーし、ファイルを `simplejsp` という名前のフォルダに保存して、そのフォルダの `.zip` アーカイブを作成します。名前は任意です。ファイル名とフォルダ名を自由に指定できます。gzip、bzip2、tarball、Java WAR ファイルなど、他の種類のアーカイブも使用できます。 OpsWorks スタックは非圧縮 tarball をサポートしていないことに注意してください。複数の JSP ページをデプロイするには、それらを同じアーカイブに含めます。
3. Amazon S3 バケットにアーカイブをアップロードし、ファイルを公開します。後で使用できるように、ファイルの URL をコピーします。バケットの作成方法とファイルのアップロード方法の詳細については、「Amazon Simple Storage Service の使用開始」を参照してください。
4. スタックにアプリケーションを追加し、次の設定を指定します。

   - 名前 – `SimpleJSP`
   - App type (アプリケーションタイプ) - `Java`
   - Repository type (リポジトリタイプ) – `Http Archive`
   - Repository URL (リポジトリのURL) – アーカイブファイルのAmazon S3 の URL。

   残りの設定にはデフォルト値を使用し、[Add App] をクリックしてアプリケーションを作成します。
5. Java アプリケーションサーバーインスタンスにアプリケーションをデプロイします。

これで、アプリケーションの URL に移動し、アプリケーションを表示できます。ドメインを指定しなかった場合は、インスタンスのパブリック IP アドレスまたはパブリック DNS 名を使用して、URL を作成できます。インスタンスのパブリック IP アドレスまたはパブリック DNS 名を取

得するには、 OpsWorks スタックコンソールに移動し、インスタンスページでインスタンス名をクリックして詳細ページを開きます。

URL の残りは、アプリケーションの短縮名によって異なります。短縮名は、アプリケーションの作成時に指定したアプリケーション名から OpsWorks スタックが生成する小文字の名前です。たとえば、SimpleJSP の短縮名は simplejsp です。アプリケーションの短縮名は、詳細ページで取得できます。

- 短縮名が `root` である場合は、`http://`*`public_DNS`*`/`*`appname`*`.jsp` または `http://`*`public_IP`*`/`*`appname`*`.jsp` を使用できます。
- それ以外の場合は、`http://`*`public_DNS`*`/`*`app_shortname`*`/`*`appname`*`.jsp` または `http://`*`public_IP`*`/`*`app_shortname`*`/`*`appname`*`.jsp` を使用できます。

アプリケーションのドメインを指定した場合、URL は `http://`*`domain`*`/`*`appname`*`.jsp` です。

たとえば、URL は `http://192.0.2.0/simplejsp/simplejsp.jsp` のようになります。

同じインスタンスに複数のアプリケーションをデプロイする場合は、短縮名として `root` を使用しないでください。使用すると URL の競合が発生し、アプリケーションが正しく動作しない場合があります。その代わりに、各アプリケーションに異なるドメイン名を割り当てます。

バックエンドデータベースでの JSP アプリケーションのデプロイ

JSP ページは、JDBC `DataSource` オブジェクトを使用して、バックエンドデータベースに接続できます。このようなアプリケーションを作成およびデプロイするには、前のセクションの手順を使用しますが、接続をセットアップするステップが 1 つ追加されます。

次の JSP ページは、`DataSource` オブジェクトに接続する方法を示しています。

```
<html>
  <head>
    <title>DB Access</title>
  </head>
  <body>
    <%@ page language="java" import="java.sql.*,javax.naming.*,javax.sql.*" %>
    <%
      StringBuffer output = new StringBuffer();
      DataSource ds = null;
      Connection con = null;
      Statement stmt = null;
```

```
      ResultSet rs = null;
      try {
        Context initCtx = new InitialContext();
        ds = (DataSource) initCtx.lookup("java:comp/env/jdbc/mydb");
        con = ds.getConnection();
        output.append("Databases found:<br>");
        stmt = con.createStatement();
        rs = stmt.executeQuery("show databases");
        while (rs.next()) {
          output.append(rs.getString(1));
          output.append("<br>");
        }
      }
      catch (Exception e) {
        output.append("Exception: ");
        output.append(e.getMessage());
        output.append("<br>");
      }
      finally {
        try {
          if (rs != null) {
            rs.close();
          }
          if (stmt != null) {
            stmt.close();
          }
          if (con != null) {
            con.close();
          }
        }
        catch (Exception e) {
          output.append("Exception (during close of connection): ");
          output.append(e.getMessage());
          output.append("<br>");
        }
      }
    %>
    <%= output.toString() %>
  </body>
</html>
```

OpsWorks スタックはDataSourceオブジェクトを作成および初期化し、論理名にバインドして、Java 命名およびディレクトリインターフェイス (JNDI) 命名サービスに名前を登録します。完全な論理名は、java:comp/env/*user-assigned-name* です。以下で説明するように、['opsworks_java']['datasources'] 属性を定義するために、スタック設定およびデプロイ属性にカスタム JSON 属性を追加して、名前のユーザー割り当て部分を指定する必要があります。

MySQL データベースに接続する JSP ページをデプロイするには

1. Java アプリケーションサーバーのレイヤーを持つ スタックを作成し、各レイヤーに 24/7 インスタンスを追加して開始します。
2. スタックにデータベースレイヤーを追加します。詳細は、使用しているデータベースによって異なります。

   この例で MySQL インスタンスを使用するには、スタックにMySQL レイヤーを追加し、レイヤーに 24/7 インスタンスを追加して開始します。

   この例で Amazon RDS (MySQL) インスタンスを使用するには:

   - インスタンスの MySQL データベースエンジンを指定します。
   - AWS-OpsWorks-DB-Master-Server (***security_group_id***) および AWS-OpsWorks-Java-App-Server (***security_group_id***) セキュリティグループをインスタンスに割り当てます。OpsWorks スタックは、リージョンで最初のスタックを作成するときに、これらのセキュリティグループを作成します。
   - simplejspdb という名前のデータベースを作成します。
   - マスターユーザー名とパスワードに & または Tomcat エラーの原因になる他の文字が含まれていないことを確認します。

     特に、起動中に Tomcat はウェブアプリケーションのコンテキストファイルを解析する必要があります。このファイルは、マスターパスワードとユーザー名を含む XML ファイルです。いずれかの文字列に & 記号が含まれる場合、XML パーサーはそれを不正な形式の XML エンティティとして扱い、解析の例外をスローします。その結果、Tomcat は起動できません。ウェブアプリケーションのコンテキストファイルの詳細については、「tomcat::context」を参照してください。
   - Java アプリケーションサーバーレイヤーにMySQL ドライバを追加します。
   - RDS インスタンスをスタックに登録します。

スタックで Amazon RDS OpsWorks インスタンスを使用する方法の詳細については、「」を参照してくださいAmazon RDS サービスレイヤー。

3. サンプルコードを `simplejspdb.jsp` という名前のファイルにコピーし、ファイルを `simplejspdb` という名前のフォルダに保存して、そのフォルダの `.zip` アーカイブを作成します。名前は任意です。ファイル名とフォルダ名を自由に指定できます。gzip、bzip2、tarball など、他の種類のアーカイブも使用できます。複数の JSP ページをデプロイするには、それらを同じアーカイブに含めます。他のリポジトリタイプのアプリケーションをデプロイする方法の詳細については、「Application Source」を参照してください。
4. Amazon S3 バケットにアーカイブをアップロードし、ファイルを公開します。後で使用できるように、ファイルの URL をコピーします。バケットの作成方法とファイルのアップロード方法の詳細については、「Amazon Simple Storage Service の使用開始」を参照してください。
5. スタックにアプリケーションを追加し、次の設定を指定します。

   - 名前 – `SimpleJSPDB`
   - App type (アプリケーションタイプ) – `Java`
   - Data source type (データソースタイプ) - OpsWorks (MySQL インスタンスの場合) または RDS (Amazon RDS インスタンスの場合)。
   - データベースインスタンス - 前に作成した MySQL インスタンスで、通常は db-master1(mysql) という名前ですが、Amazon RDS インスタンスでは ***`DB_instance_name`*** (mysql) という名前になります。
   - Database name (データベース名) – `simplejspdb`
   - Repository type (リポジトリタイプ) – `Http Archive`
   - Repository URL (リポジトリのURL) – アーカイブファイルのAmazon S3 の URL。

   残りの設定にはデフォルト値を使用し、[Add App] をクリックしてアプリケーションを作成します。
6. 次のカスタム JSON 属性をスタック設定属性に追加します。ここで、simplejspdb はアプリケーションの短縮名です。

```
{
  "opsworks_java": {
    "datasources": {
      "simplejspdb": "jdbc/mydb"
```

```
    }
  }
}
```

OpsWorks スタックはこのマッピングを使用して、必要なデータベース情報を含むコンテキストファイルを生成します。

カスタム JSON 属性をスタック設定属性に追加する方法の詳細については、「カスタム JSON の使用」を参照してください。

7. Java アプリケーションサーバーインスタンスにアプリケーションをデプロイ)します。

これで、アプリケーションの URL を使用してアプリケーションを表示できるようになりました。URL を作成する方法については、「JSP アプリケーションのデプロイ」を参照してください。

たとえば、URL は `http://192.0.2.0/simplejspdb/simplejspdb.jsp` のようになります。

> **Note**
>
> `datasources` 属性には、複数の属性を含めることができます。各属性はアプリケーションの短縮名によって名付けられ、論理名の適切なユーザー割り当て部分に設定されます。複数のアプリケーションがある場合は、個別の論理名を使用できます。そのためには、以下のようなカスタム JSON が必要です。
>
> ```
> {
>   "opsworks_java": {
>     "datasources": {
>       "myjavaapp": "jdbc/myappdb",
>       "simplejsp": "jdbc/myjspdb",
>       ...
>     }
>   }
> }
> ```

Node.js App Server OpsWorks スタックレイヤー

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> このレイヤーは、Linux ベースのスタックでのみ使用できます。

Node.js アプリケーションサーバーレイヤーは、Node.js OpsWorks アプリケーションサーバーとして機能するインスタンスの設計図を提供する スタックレイヤーです。 OpsWorks スタックは Express もインストールするため、レイヤーのインスタンスは標準アプリケーションと Express アプリケーションの両方をサポートします。

インストール: Node.js は `/usr/local/bin/node` にインストールされます。

[Add Layer] ページには、以下の設定オプションがあります。

Node.js バージョン

現在サポートされているバージョンのリストについては、「OpsWorks スタックオペレーティングシステム」を参照してください。

Custom security groups

この設定は、組み込み OpsWorks の スタックセキュリティグループをレイヤーに自動的に関連付けないことを選択した場合に表示されます。レイヤーに関連付けるセキュリティグループを指定する必要があります。詳細については、「新しいスタックを作成する」を参照してください。

[Elastic Load Balancer]

レイヤーのインスタンスに Elastic Load Balancing のロードバランサーをアタッチできます。

> **Important**
>
> Node.js アプリケーションが SSL を使用する場合は、CVE-2015-8027 で説明されている脆弱性に対応するために、可能であれば SSLv3 を無効にすることをお勧めします。そのためには、[Node.js version] を `0.12.9` に設定する必要があります。

Node.js アプリケーションのデプロイ

OpsWorks スタック用にシンプルな Node.js アプリケーションを実装してそれをスタックにデプロイする方法の手順については、「Node.js スタックの初回作成」を参照してください。一般に、OpsWorks スタック用の Node.js アプリケーションは、以下の条件を満たす必要があります。

- メインファイルは `server.js` という名前にして、デプロイされたアプリケーションのルートディレクトリに置く必要があります。
- Express アプリケーションには、アプリケーションのルートディレクトリに `package.json` ファイルを含める必要があります。
- デフォルトでは、アプリケーションはポート 80 (HTTP) またはポート 443 (HTTPS) でリッスンする必要があります。

  他のポートでリッスンすることは可能ですが、Node.js App Server レイヤーの組み込みセキュリティグループである AWS-OpsWorks-nodejs-App-Server では、ポート 80、443、および 22 (SSH) への着信ユーザートラフィックのみが許可されています。他のポートへの着信ユーザートラフィックを許可するには、適切なインバウンドルールを使用してセキュリティグループを作成し、Node.js アプリケーション-サーバーレイヤーに割り当てます。組み込みのセキュリティグループを編集することでインバウンドルールを変更しないでください。スタックを作成するたびに、 OpsWorks スタックは組み込みセキュリティグループを標準設定で上書きするため、行った変更は失われます。

> **Note**
>
> OpsWorks スタックは PORT 環境変数を 80 (デフォルト) または 443 (SSL を有効にする場合) に設定するため、次のコードを使用してリクエストをリッスンできます。

```
app.listen(process.env.PORT);
```

SSL をサポートするように Node.js アプリを設定する場合は、キーと証明書を指定する必要があります。 OpsWorks スタックは、次のように、各アプリケーションサーバーインスタンスのデータを/srv/www/*app_shortname*/shared/configディレクトリ内の個別のファイルとして配置します。

- ssl.crt – SSL 証明書。
- ssl.key – SSL キー。
- ssl.ca – チェーン証明書 (指定した場合)。

アプリケーションで、この各ファイルから SSL のキーと証明書を取得できます。

PHP App Server OpsWorks スタックレイヤー

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> このレイヤーは、Linux ベースのスタックでのみ使用できます。

PHP アプリケーションサーバーレイヤーは、PHP OpsWorks アプリケーションサーバーとして機能するインスタンスの設計図を提供する スタックレイヤーです。PHP アプリケーションサーバーレイヤーは、mod_php 付きの Apache2 に基づいており、標準設定オプションはありません。PHP および Apache のバージョンは、レイヤーのインスタンスに指定するオペレーティングシステムによって異なります。

オペレーティングシステム	PHP バージョン	Apache のバージョン
Amazon Linux 2018.03	5.3	2.2
Amazon Linux 2017.09	5.3	2.2

オペレーティングシステム	PHP バージョン	Apache のバージョン
Amazon Linux 2017.03	5.3	2.2
Amazon Linux 2016.09	5.3	2.2
Amazon Linux 2016.03	5.3	2.2
Amazon Linux 2015.09	5.3	2.2
Amazon Linux 2015.03	5.3	2.2
Amazon Linux 2014.09	5.3	2.2
Ubuntu 14.04 LTS	5.5	2.4

インストール: OpsWorks スタックはインスタンスのパッケージインストーラを使用して、デフォルトの場所に Apache2 と をインストールmod_phpします。インストールの詳細については、「Apache」を参照してください。

[Add Layer] ページには、以下の設定オプションがあります。

Custom security groups

この設定は、組み込み OpsWorks の スタックセキュリティグループをレイヤーに自動的に関連付けないことを選択した場合に表示されます。レイヤーに関連付けるセキュリティグループを指定する必要があります。詳細については、「新しいスタックを作成する」を参照してください。

[Elastic Load Balancer]

レイヤーのインスタンス に Elastic Load Balancing のロードバランサーをアタッチできます。

カスタム JSON またはカスタム属性ファイルを使用して、いくつかの Apache 設定を変更できます。詳細については、「属性の上書き」を参照してください。オーバーライドできる Apache 属性の一覧については、「apache2 属性」を参照してください。

PHP アプリケーションのデプロイ方法や、アプリケーションをバックエンドデータベースに接続する方法の例については、「Chef 11 Linux スタックの使用開始」を参照してください。

> **Important**
>
> PHP アプリケーションが SSL を使用する場合は、CVE-2014-3566 で説明されている脆弱性に対応するために、可能であれば SSLv3 を無効にすることをお勧めします。そのためには、Apache サーバーの `SSLProtocol` ファイルの `ssl.conf` 設定を変更する必要があります。この設定を変更する方法の詳細については、「Apache サーバーに対する SSLv3 の無効化」を参照してください。

Rails App Server OpsWorks スタックレイヤー

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> このレイヤーは、Linux ベースのスタックでのみ使用できます。

Rails App Server レイヤーは、Rails OpsWorks アプリケーションサーバーとして機能するインスタンスの設計図を提供する スタックレイヤーです。

インストール: OpsWorks スタックはインスタンスのパッケージインストーラを使用して、サーバーパッケージをデフォルトの場所にインストールします。Apache/Passenger のインストールの詳細については、「Phusion Passenger」を参照してください。ログ記録の詳細については、「ログファイル」を参照してください。Nginx/Unicorn のインストールの詳細については、「Unicorn」を参照してください。

[Add Layer] ページには、以下の設定オプションがあります。いずれもオプションです。

Ruby Version

アプリケーションで使用される Ruby バージョン。デフォルト値は 2.3 です。

[:opsworks][:ruby_version] 属性を上書きすることで、目的の Ruby のバージョンを指定することもできます。

> **Note**
>
> OpsWorks スタックは、レシピとインスタンスエージェントで使用する別の Ruby パッケージをインストールします。詳細については、「Ruby のバージョン」を参照してください。

Rails Stack

デフォルト Rails スタックは、Apache2 と Phusion Passenger です。また、Nginx と Unicorn を使用することもできます。

> **Note**
>
> Nginx と Unicorn を使用する場合は、以下の例のように、アプリケーションの Gemfile に unicorn gem を追加する必要があります。
>
> ```
> source 'https://rubygems.org'
> gem 'rails', '3.2.15'
> ...
> # Use unicorn as the app server
> gem 'unicorn'
> ...
> ```

Passenger Version

Apache2/Passenger を指定した場合は、Passenger のバージョンを指定する必要があります。デフォルト値は 5.0.28 です。

[Rubygems Version (Rubygems のバージョン)]

デフォルトの Rubygems バージョンは 2.5.1 です。

[Install and Manage Bundler (Bundler のインストールと管理)]

Bundler をインストールおよび管理するかどうかを選択できます。デフォルト値は [Yes] です。

[Bundler version (Bundler のバージョン)]

デフォルトの Bundler バージョンは 1.12.5 です。

Custom security groups

この設定は、組み込み OpsWorks の スタックセキュリティグループをレイヤーに自動的に関連付けないことを選択した場合に表示されます。レイヤーに関連付けるセキュリティグループを指定する必要があります。詳細については、「新しいスタックを作成する」を参照してください。

[Elastic Load Balancer]

レイヤーのインスタンスに Elastic Load Balancing のロードバランサーをアタッチできます。

カスタム JSON またはカスタム属性ファイルを使用して、一部の設定を変更できます。詳細については、「属性の上書き」を参照してください。オーバーライドできる Apache、Nginx、Phusion Passenger、および Unicorn 属性の一覧については、「組み込みクックブックの属性」を参照してください。

> **Important**
>
> Ruby on Rails アプリケーションが SSL を使用する場合は、CVE-2014-3566 で説明されている脆弱性に対応するために、可能であれば SSLv3 を無効にすることをお勧めします。詳細については、「Rails サーバーに対する SSLv3 の無効化」を参照してください。

トピック

- Rails サーバーに対する SSLv3 の無効化
- データベースへの接続
- Rails アプリケーションの Ruby のデプロイ

Rails サーバーに対する SSLv3 の無効化

Rails サーバーに対して SSLv3 を無効にするには、レイヤーの [Ruby Version (Ruby のバージョン)] 設定を 2.1 以上に更新します。これにより、アプリケーションが使用するバージョンとして Ruby 2.1.4 以上がインストールされます。

- レイヤーの [Ruby Version (Ruby のバージョン)] 設定を 2.1 以上に更新します。
- Rails スタックの設定ファイルを以下のように更新します。

Apache と Phusion Passenger

「SSLProtocol」で説明しているように、Apache Server の ssl.conf ファイルの Apache サーバーに対する SSLv3 の無効化 設定を更新します。

Nginx と Unicorn

Nginx サーバーの ssl_protocols ファイルに明示的な nginx.conf ディレクティブを追加します。SSLv3 を無効にするには、組み込みの [nginx cookbook's (nginx クックブック) の nginx.conf.erb テンプレートファイルをオーバーライドします。そのテンプレートファイルを使用して、Rails アプリケーションサーバー レイヤーの Setup レシピで nginx.conf が作成され、以下のディレクティブが追加されます。

```
ssl_protocols TLSv1.2;
```

nginx.conf の設定方法の詳細については、「HTTPS サーバーの設定」を参照してください。組み込みテンプレートのオーバーライドの詳細については、「カスタムテンプレートの使用」を参照してください。

データベースへの接続

アプリケーションをデプロイすると、 OpsWorks スタックはアプリケーションのdeploy属性からの情報を使用して新しいdatabase.ymlファイルを作成します。MySQL または Amazon RDS インスタンスをアプリケーションにアタッチすると、 OpsWorks Stacks は接続情報をdeploy属性に追加し、 に正しい接続データdatabase.ymlが自動的に含まれるようにします。

アプリにデータベースがアタッチされていない場合、デフォルトでは、 OpsWorks Stacks はdeploy属性に接続情報を追加せず、 を作成しませんdatabase.yml。別のデータベースを使用する場合は、カスタム JSON を使用して、接続情報と共にアプリケーションの deploy 属性にデータベース属性を追加できます。属性はすべて の下にあり["deploy"]["*appshortname*"]["database"]、*appshortname* はアプリケーションの短縮名であり、 OpsWorks スタックはアプリケーション名から生成します。カスタム JSON で指定する値は、デフォルト設定をオーバーライドします。詳細については、「アプリケーションの追加」を参照してください。

OpsWorks スタックは、次の[:...][:database]属性値を に組み込みますdatabase.yml。必要な属性は特定のデータベースによって異なりますが、host属性が必要です。そうしないと OpsWorks 、スタックは を作成しませんdatabase.yml。

- [:adapter] (String) – データベースアダプタ (mysql など)。

- [:database] (文字列)– データベース名。
- [:encoding] (文字列)– 通常は utf8 に設定されるエンコード。
- [:host] (文字列)– ホスト URL (railsexample.cdlqlk5uwd0k.us-west-2.rds.amazonaws.com など)。
- [:reconnect] (ブール)– 接続が存在しなくなった場合にアプリケーションを再接続するかどうか。
- [:password] (文字列)– データベースのパスワード。
- [:port] (数値)。– データベースのポートナンバー。アダプタによって設定されるデフォルトのポート番号をオーバーライドするには、この属性を使用します。
- [:username] (文字列) – データベースユーザー名。

次の例は、短縮名が myapp であるアプリケーションのカスタム JSON を示しています。

```
{
  "deploy" : {
    "myapp" : {
      "database" : {
        "adapter" : "adapter",
        "database" : "databasename",
        "host" : "host",
        "password" : "password",
        "port" : portnumber
        "reconnect" : true/false,
        "username" : "username"
      }
    }
  }
}
```

カスタム JSON の指定方法については、「カスタム JSON の使用」を参照してください。database.yml を作成するために使用したテンプレート (database.yml.erb) を見るには、組み込みクックブックリポジトリにアクセスしてください。

Rails アプリケーションの Ruby のデプロイ

サポートされている任意のリポジトリから Rails アプリケーションの Ruby をデプロイすることができます。以下に、Apache/Passenger Rails スタックを実行しているサーバーにサンプルの Rails アプ

リケーションの Ruby をデプロイする方法を示します。サンプルコードはパブリックの GitHub リポジトリに保存されますが、基本的な手順は、サポートされている他のリポジトリでも同じです。アプリケーションの作成およびデプロイの方法の詳細については、「アプリケーション」を参照してください。詳細なコメントが含まれているサンプルコードを表示するには、https://github.com/awslabs/opsworks-demo-rails-photo-share-app にアクセスしてください。

GitHub リポジトリから Rails アプリケーションの Ruby をデプロイするには

1. Rails スタックとして Apache/Passenger を使用した Rails アプリケーションサーバーレイヤーでスタックを作成し、その層に 24/7 インスタンスを追加して、開始します。
2. インスタンスがオンラインになってから、スタックにアプリケーションを追加し、以下の設定を指定します。

   - Name (名前) – 任意の名前。この例では `PhotoPoll` を使用しています。

     OpsWorks スタックは、表示目的でこの名前を使用し、内部使用のための短縮名を生成し、スタック設定およびデプロイ属性でアプリケーションを識別します。たとえば、PhotoPoll の短縮名は photopoll です。

   - App type (アプリケーションタイプ) –Ruby on Rails (Ruby on Rails)。
   - Rails environment (Rails 環境) – 使用可能な環境はアプリケーションによって決定されます。

     この例のアプリケーションには、**`development`**、**`test`**、**`production`** の 3 つの環境があります。この例では、環境を **`development`** に設定します。各環境の説明については、サンプルコードを参照してください。

   - Repository type (リポジトリタイプ) – サポートされている任意のリポジトリタイプ。この例では `Git` を指定します。
   - Repository URL (リポジトリの URL) – コードのデプロイ元となるリポジトリ。

     この例では、この URL を **`git://github.com/awslabs/opsworks-demo-rails-photo-share-app`** に設定します。

   残りの設定にはデフォルト値を使用し、[Add App] をクリックしてアプリケーションを作成します。
3. Rails アプリケーションサーバーインスタンスにアプリケーションをデプロイします。
4. デプロイが完了したら、[Instances] (インスタンス) ページに移動して、Rails アプリケーションサーバー インスタンスのパブリック IP アドレスをクリックします。次のように表示されます。

静的ウェブサーバー OpsWorks スタックレイヤー

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> このレイヤーは、Linux ベースのスタックでのみ使用できます。

静的ウェブサーバーレイヤーは、インスタンスが静的 HTML ページを提供するテンプレートを提供する OpsWorks スタックレイヤーです。これには、クライアント側のスクリプティングが含まれる場合があります。このレイヤーは Nginx に基づいています。

インストール: Nginx は `/usr/sbin/nginx` にインストールされます。

[Add Layer] ページには、以下の設定オプションがあります。

Custom security groups

この設定は、組み込み OpsWorks の スタックセキュリティグループをレイヤーに自動的に関連付けないことを選択した場合に表示されます。レイヤーに関連付けるセキュリティグループを指定する必要があります。詳細については、「新しいスタックを作成する」を参照してください。

[Elastic Load Balancer]

レイヤーのインスタンスに Elastic Load Balancing のロードバランサーをアタッチできます。

カスタム JSON またはカスタム属性ファイルを使用して、いくつかの Nginx 設定を変更できます。詳細については、「属性の上書き」を参照してください。オーバーライドできる Apache 属性の一覧については、「nginx 属性」を参照してください。

Important

ウェブアプリケーションが SSL を使用する場合は、CVE-2014-3566 で説明されている脆弱性に対応するために、可能であれば SSLv3 を無効にすることをお勧めします。
SSLv3 を無効にするには、Nginx サーバーの `nginx.conf` ファイルを変更する必要があります。そのためには、組み込みのnginx クックブックの `nginx.conf.erb` テンプレートファイルをオーバーライドします。これにより、Rails アプリケーションサーバーレイヤーのセットアップレシピは、`nginx.conf` を作成し、次のディレクティブを追加します。

```
ssl_protocols TLSv1.2;
```

`nginx.conf` の設定方法の詳細については、「HTTPS サーバーの設定」を参照してください。組み込みテンプレートのオーバーライドの詳細については、「カスタムテンプレートの使用」を参照してください。

ECS クラスタレイヤーリファレンス

Note

このレイヤーは、Linux ベースのスタックでのみ使用できます。

ECS クラスタレイヤーは、[Amazon Elastic Container Service (Amazon ECS) クラスター] を表し、クラスタ管理を簡略化します。

Short name: ecs クラスター

Compatibility: (互換性) Amazon ECS service (Amazon ECS サービス) レイヤーはカスタムレイヤーとのみ互換性があります

Open ports: (開いているポート) ECS クラスターは ポート 22 (SSH) に対するパブリックアクセスを許可します

Autoassign Elastic IP addresses: デフォルトで Off

Default EBS volume: No

[Default security group:] AWS-OpsWorks-ECS-App-Server

Configuration: (構成) ECS クラスターレイヤーを設定するには、次を指定する必要があります。

- コンテナインスタンスにパブリック IP アドレスまたは Elastic IP アドレスを許可するかどうか
- コンテナインスタンスのインスタンスプロファイル

Setup recipes:

- opsworks_initial_setup
- ssh_host_keys
- ssh_users
- mysql::client
- dependencies
- ebs
- opsworks_ganglia::client
- opsworks_ecs::setup

Configure recipes:

- opsworks_ganglia::configure-client
- ssh_users
- mysql::client
- agent_version
- opsworks_ecs::configure

Deploy recipes:

- deploy::default
- opsworks_ecs::deploy

Undeploy recipes:

- opsworks_ecs::undeploy

Shutdown recipes:

- opsworks_shutdown::default
- opsworks_ecs::shutdown

インストール:

- OpsWorks スタックはインスタンスのパッケージインストーラを使用して、Docker をデフォルトの場所にインストールします。
- セットアップイベントの Chef ログは、Amazon ECS エージェントが正しくインストールされたかどうか記録します。それ以外の場合、 OpsWorks スタックによって提供されるログには Amazon ECS エラーログ情報は含まれません。Amazon ECS エラーを処理する方法については、「Amazon ECS のトラブルシューティング」を参照してください。

カスタムレイヤーリファレンス

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

標準のレイヤーが要件を満たさない場合、カスタムレイヤーを作成することができます。スタックには、複数のカスタムレイヤーを含ませることができます。デフォルトでは、カスタムレイヤーによっ

て、基本機能をサポートする一部の標準レシピのみが実行されます。ライフサイクルイベントごとに一連のカスタムの Chef のレシピを実装してレイヤーのソフトウェアの設定などを行うことで、レイヤーの主要機能を実装できます。カスタムレシピは、各イベントの標準 OpsWorks Stacks レシピの後に実行されます。

Short name: ユーザー定義。スタック内のカスタムレイヤーごとに別の短縮名が必要です。

Open ports: デフォルトでは、カスタム サーバーレイヤーは、ポート 22 (SSH)、80 (HTTP)、443 (HTTPS)、およびスタックの Rails と PHP アプリケーションサーバーレイヤーからのすべてのポートへのパブリックアクセスを許可します。

Autoassign Elastic IP Addresses: デフォルトで Off

Default EBS volume: No

Default Security Group: AWS-OpsWorks-Custom-Server

Compatibility: カスタムレイヤーは custom、db-master、lb、memcached、monitoring-master、nodejs-app、php-app、rails-app、および web のレイヤーと互換性があります。

Configuration: カスタムレイヤーを設定するには、次を指定する必要があります。

- レイヤーの名前
- レイヤーの短縮名。Chef のレシピのレイヤーを識別し、a ~ z と数字のみを使用します。

Linux スタックの場合、カスタムレイヤーでは、以下のレシピを使用します。

Setup recipes:

- opsworks_initial_setup
- ssh_host_keys
- ssh_users
- mysql::client
- dependencies
- ebs
- opsworks_ganglia::client

Configure recipes:

- opsworks_ganglia::configure-client
- ssh_users
- agent_version

Deploy recipes:

- deploy::default

Shutdown recipes:

- opsworks_shutdown::default

その他のレイヤーリファレンス

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックは、次のレイヤーもサポートしています。

トピック

- Ganglia レイヤーリファレンス
- Memcached レイヤーリファレンス

Ganglia レイヤーリファレンス

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS

re:Post または AWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> このレイヤーは、Linux ベースのスタックでのみ使用できます。

Ganglia レイヤーは、インスタンスメトリックスのストレージと可視化を管理する分散管理システムである Ganglia をサポートします。これは、階層インスタンストポロジで動作するように設計されており、インスタンスのグループにとって特に便利です。Ganglia には、次の 2 つの基本コンポーネントがあります。

- 低オーバーヘッド顧客。スタックの各インスタンスにインストールされ、マスターにメトリクスを送信します。
- マスターは、クライアントからメトリクスを収集し、それらを Amazon EBS ボリュームに保存します。また、メトリクスをウェブページに表示します。

OpsWorks スタックには、管理する各インスタンスに Ganglia モニタリングエージェントがあります。スタックに Ganglia レイヤーを追加して起動すると、各インスタンスの Ganglia エージェントはインスタンスにメトリックスをレポートします。Ganglia を使用するには、1 つのインスタンスを持つ Ganglia レイヤーをスタックに追加します。マスターの IP アドレスで Ganglia のバックエンドにログインして、データにアクセスできます。Chef レシピを記述して、追加メトリックス定義を提供することができます。

Short name: monitoring-master

Compatibility: (互換性) Ganglia レイヤーは、custom、db-master、memcached、php-app、rails-app のレイヤーと互換性があります。

Open ports: ロードバランサーは、ポート 22 (SSH)、80 (HTTP)、および 443 (HTTPS) へのパブリックアクセスを許可します。

Autoassign Elastic IP addresses: デフォルトで Off

Default EBS volume: `/vol/ganglia` で Yes

Default security group: AWS-OpsWorks-Monitoring-Master-Server

Configuration: (構成) Ganglia レイヤーを設定するには、次を指定する必要があります。

- 監視グラフへのアクセスを提供する URI デフォルト値は http://*DNSName*/ganglia で、*DNSName* は Ganglia インスタンスの DNS 名になります。
- 監視統計へのアクセスを制御するユーザー名とパスワード

Setup recipes:

- opsworks_initial_setup
- ssh_host_keys
- ssh_users
- mysql::client
- dependencies
- ebs
- opsworks_ganglia::client
- opsworks_ganglia::server

Configure recipes:

- opsworks_ganglia::configure-client
- ssh_users
- agent_version
- opsworks_ganglia::configure-server

Deploy recipes:

- deploy::default
- opsworks_ganglia::configure-server
- opsworks_ganglia::deploy

Shutdown recipes:

- opsworks_shutdown::default
- apache2::stop

インストール:

- Ganglia クライアントは、`/etc/ganglia` にインストールされています。
- Ganglia ウェブフロントエンドは、`/usr/share/ganglia-webfrontend` にインストールされています。
- Ganglia logtailer は、`/usr/share/ganglia-logtailer` にインストールされています。

Memcached レイヤーリファレンス

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> このレイヤーは、Linux ベースのスタックでのみ使用できます。

Memcached は、任意のデータの分散メモリキャッシュシステムです。文字列およびオブジェクトを RAM のキーおよび値としてキャッシュして、外部データソースが読み取られる回数を減らすことでウェブサイトを高速化します。

Memcached をスタックで使用するには、Memcached レイヤーを作成して、1 つ以上のインスタンスを追加します。そのインスタンスは、Memcached サーバーとして機能します。インスタンスにより Memcached は自動的にインストールされ、スタックの他のインスタンスは、Memcached サーバーにアクセスしてそれを使用できます。Rails App Server レイヤーを使用する場合、 OpsWorks Stacks はレイヤー内の各インスタンスの設定ディレクトリに設定`memcached.yml`ファイルを自動的に配置します。このファイルから Memcached サーバーとポートナンバーを取得することができます。

Short name: memcached

Compatibility: (互換性) Memcached レイヤーは custom、db-master、lb、monitoring-master、nodejs-app、php-app、rails-app およびウェブのレイヤーと互換性があります。

Open ports: (開いているポート) Memcached レイヤーは、ポート 22 (SSH)、およびスタックのウェブサーバー、カスタムサーバー、さらには Rails、PHP、Node.js アプリケーションサーバーからのすべてのポートへのパブリックアクセスを許可します。

Autoassign Elastic IP addresses: デフォルトで Off

Default EBS volume: No

Default security group: AWS-OpsWorks-Memcached-Server

Memcached レイヤーを設定するには、キャッシュサイズ (MB) を指定する必要があります。

Setup recipes:

- opsworks_initial_setup
- ssh_host_keys
- ssh_users
- mysql::client
- dependencies
- ebs
- opsworks_ganglia::client
- memcached

Configure recipes:

- opsworks_ganglia::configure-client
- ssh_users
- agent_version

Deploy recipes:

- deploy::default

Shutdown recipes:

- opsworks_shutdown::default
- memcached::stop

インストール:

- OpsWorks スタックはインスタンスのパッケージインストーラを使用して、Memcached とそのログファイルをデフォルトの場所にインストールします。

その他のレイヤー

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> これらのレイヤーは、Chef 11 以前の Linux ベースのスタックでのみ使用できます。

OpsWorks スタックは、Ganglia レイヤーと Memcached レイヤーもサポートしています。

トピック

- Ganglia レイヤー
- Memcached

Ganglia レイヤー

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソ

リューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> このレイヤーは、Chef 11 以前の Linux ベースのスタックでのみ使用できます。

OpsWorks スタックは、インスタンスとボリュームのすべてのメトリクスを Amazon CloudWatch に送信します。これにより、グラフの表示とアラームの設定が容易になり、リソースの状態に基づいてトラブルシューティングや自動アクションを実行するのに役立ちます。Ganglia OpsWorks スタックレイヤーを使用して、選択したメトリクスの保存などの追加のアプリケーションモニタリングオプションを使用することもできます。

Ganglia レイヤーは、Ganglia 分散モニタリングを使用してスタックを監視するインスタンスのブループリントです。スタックに置かれる Ganglia インスタンスは通常 1 つだけです。Ganglia レイヤーには、次のオプション構成があります。

Ganglia URL

統計情報の URL のパス。完全な URL は、http://*DNSName*/*URLPath* の形式になっています (*DNSName* は、関連付けられているインスタンスの DNS 名)。*URLPath* のデフォルト値は「/ganglia」で、http://ec2-54-245-151-7.us-west-2.compute./ganglia のように対応しています。

Ganglia user name

統計情報のウェブページのユーザー名。ページを表示するにはユーザー名を準備する必要があります。デフォルト値は、「opsWorks」です。

Ganglia password

統計情報のウェブページへのアクセスを制御するパスワード。ページを閲覧する際はパスワードを指定する必要があります。デフォルト値はランダムに生成される文字列です。

> **Note**
>
> 後で使用するためにパスワードを記録します。 OpsWorks スタックでは、レイヤーの作成後にパスワードを表示することはできません。ただし、レイヤーの [Edit] ページにアク

セスし、[Update password] をクリックすることによって、パスワードを更新することはできます。

Custom security groups

この設定は、組み込み OpsWorks の スタックセキュリティグループをレイヤーに自動的に関連付けないことを選択した場合に表示されます。レイヤーに関連付けるセキュリティグループを指定する必要があります。詳細については、「新しいスタックを作成する」を参照してください。

[Elastic Load Balancer]

レイヤーのインスタンス に Elastic Load Balancing のロードバランサーをアタッチできます。

Important

スタックに Ganglia レイヤーが含まれる場合は、[CVE-2014-3566] で説明されている脆弱性に対応するために、可能であれば SSLv3 を無効にすることをお勧めします。そのためには、Apache サーバーの `ssl.conf.erb` テンプレートをオーバーライドして、`SSLProtocol` 設定を変更する必要があります。詳細については、「Apache サーバーに対する SSLv3 の無効化」を参照してください。

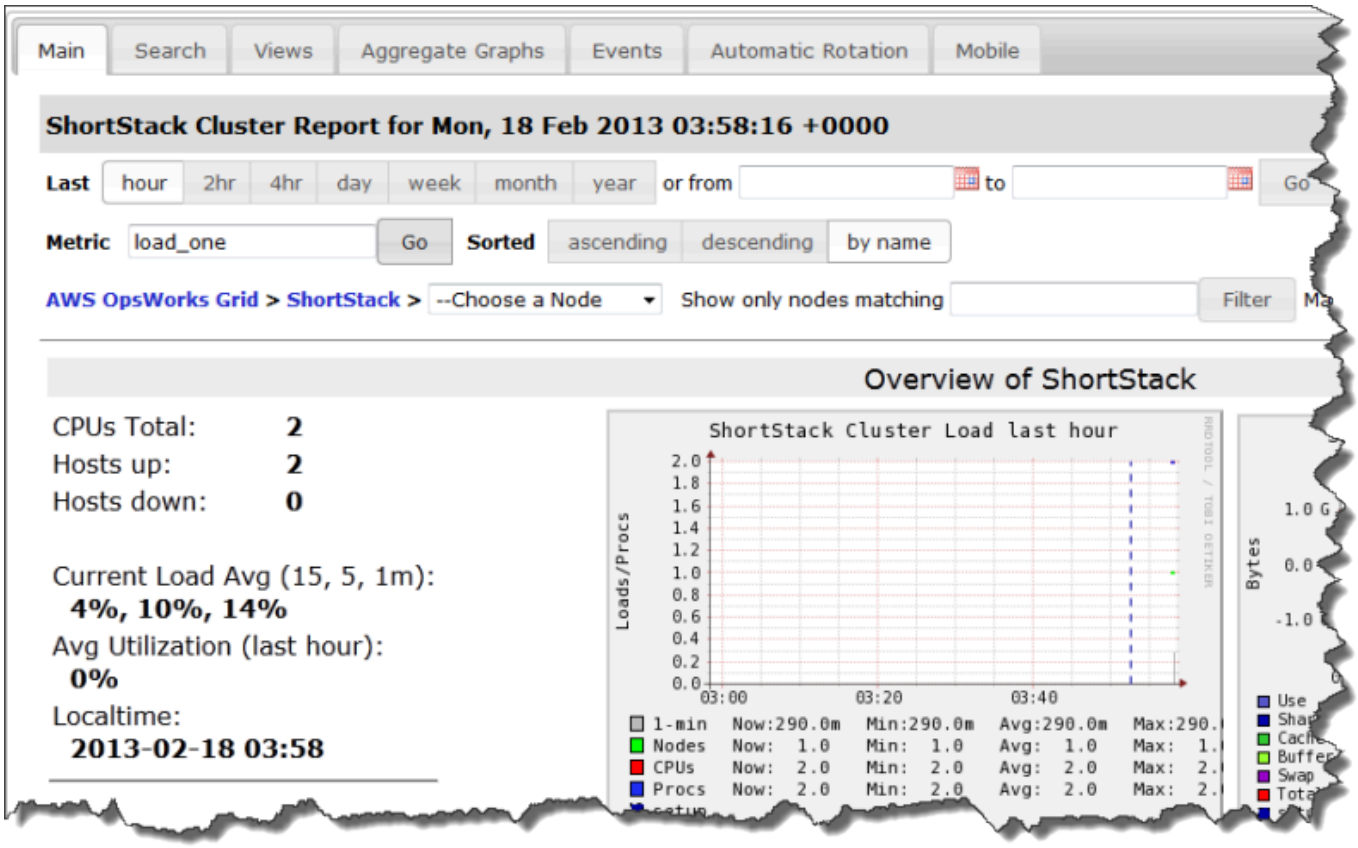
Ganglia の統計情報の表示

OpsWorks スタックレシピは、すべてのインスタンスに低オーバーヘッドの Ganglia クライアントをインストールします。スタックに Ganglia レイヤーが含まれている場合、インスタンスがオンラインになった時点ですぐに、Ganglia クライアントによって Ganglia へのレポートが自動的に開始されます。Ganglia は、クライアントデータを使用してさまざまな統計を算出し、その結果を統計情報ウェブページでグラフィカルに表示します。

Ganglia の統計情報を閲覧するには

1. [Layers] (レイヤー) ページの [Ganglia] をクリックし、そのレイヤーの詳細ページを開きます。
2. ナビゲーションペインの [Instances] をクリックします。[Ganglia] (Ganglia) でインスタンス名をクリックします。
3. インスタンスのパブリック DNS 名をコピーします。
4. DNS 名を使用して統計情報の URL を作成すると、http://ec2-54-245-151-7.us-west-2.compute./ganglia のようになります。

5. 作成した URL をブラウザに貼り付けてそのページに移動し、Ganglia のユーザー名とパスワードを入力してページを表示します。以下に例を示します。



Memcached

Important

この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post または AWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Note

このレイヤーは、Chef 11 以前の Linux ベースのスタックでのみ使用できます。

Memcached レイヤーは、任意のデータ用の分散メモリキャッシュシステムである Memcached サーバーとして機能するインスタンスの設計図を提供する OpsWorks スタックレイヤーです。Memcached レイヤーには、次の環境設定があります。

Allocated memory (MB)

(オプション)レイヤーのインスタンスごとのキャッシュメモリのサイズ (MB)です。デフォルトでは 512 MB です。

Custom security groups

この設定は、組み込み OpsWorks の スタックセキュリティグループをレイヤーに自動的に関連付けないことを選択した場合に表示されます。レイヤーに関連付けるセキュリティグループを指定する必要があります。詳細については、「新しいスタックを作成する」を参照してください。

クックブックのコンポーネント

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

クックブックには通常、基本となる次のコンポーネントが含まれています。

- 属性ファイルには、レシピやテンプレートによって使用される値を表す一連の属性が含まれています。
- テンプレートファイルは、他のファイル (設定ファイルなど) を作成する際のひな型としてレシピで使用されます。

  通常、テンプレートファイルでは、設定ファイルを書き換えるのではなく、クックブックに触れることなく属性をオーバーライドして、設定ファイルを変更できます。インスタンスの設定ファイルをわずかでも変更する場合は、テンプレートファイルを使用するのが一般的です。
- レシピファイルは、フォルダの作成と設定、パッケージのインストールと設定、サービスの開始など、システムを設定するうえで必要なあらゆる事柄を定義する Ruby アプリケーションです。

クックブックに 3 つのコンポーネントがすべて含まれているとは限りません。属性ファイルまたはテンプレートファイルだけを使用した、もっと簡単なカスタマイズ方法があります。さらに、クックブックには、必要に応じて他のファイルタイプ (定義、仕様など) を追加することもできます。

このセクションでは、3 つ標準的なクックブックのコンポーネントについて説明します。詳細 (特にレシピの実装方法) については、「Opscode」を参照してください。

トピック

- 属性
- テンプレート
- recipe

属性

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

レシピとテンプレートは、設定を指定するさまざまな値に依存しています。それらの値をレシピやテンプレートに直接ハードコードするのではなく、各値を表す属性が記載された属性ファイルを作成します。レシピとテンプレートには、明示的な値ではなく、この属性を指定します。属性を使用する利点は、クックブックに変更を加えることなしに、値を上書きできることです。このような理由から、次に示すタイプの値の定義には、常に属性を使用するようにしてください。

- ユーザー名などの、スタックごとに異なる、または時間とともに変化する値。

  このような値をハードコードした場合は、値を変更するたびにレシピやテンプレートを変更する必要が生じます。これらの値の定義に属性を使用することで、すべてのスタックに対して同じクックブックを使用し、該当する属性のみを上書きすることができます。
- パスワードやシークレットキーなどの機密情報を含む値。

  クックブックに機密情報を明示的に入力すると、漏洩の危険が増します。代わりに、ダミーの値を指定した属性を定義し、実際の値は上書きで設定するようにします。値を上書きする最良の方法

は、カスタム JSON を使用することです。詳細については、「カスタム JSON の使用」を参照してください。

属性および属性を上書きする方法の詳細については、「属性の上書き」を参照してください。

次の例は、属性ファイルの例の一部です。

```
...
default["apache"]["listen_ports"] = [ '80','443' ]
default["apache"]["contact"] = 'ops@example.com'
default["apache"]["timeout"] = 120
default["apache"]["keepalive"] = 'Off'
default["apache"]["keepaliverequests"] = 100
default["apache"]["keepalivetimeout"] = 3
default["apache"]["prefork"]["startservers"] = 16
default["apache"]["prefork"]["minspareservers"] = 16
default["apache"]["prefork"]["maxspareservers"] = 32
default["apache"]["prefork"]["serverlimit"] = 400
default["apache"]["prefork"]["maxclients"] = 400
default["apache"]["prefork"]["maxrequestsperchild"] = 10000
...
```

OpsWorks スタックは、次の構文を使用して属性を定義します。

```
node.type["attribute"]["subattribute"]["..."]=value
```

次のように、コロン (:) を使用することもできます。

```
node.type[:attribute][:subattribute][:...]=value
```

属性の定義には、次のようなコンポーネントが含まれます。

node.

node. プレフィックスはオプションです。例に示すように、通常は省略されます。

type

タイプは、属性を上書きできるかどうかを制御します。 OpsWorks スタック属性は通常、次のいずれかのタイプを使用します。

- `default` は、属性の上書きが許可されるため、最も一般的に使用されるタイプです。
- `normal` は、標準の OpsWorks スタック属性値のいずれかを上書きする属性を定義します。

> **Note**
>
> Chef は追加のタイプをサポートしています。これは OpsWorks スタックには必要ありませんが、プロジェクトに役立つ場合があります。詳細については、「属性について」を参照してください。

attribute name

属性名には、Chef の標準ノード構文である [:*attribute*][:*subattribute*][...] を使用します。属性には、希望する任意の名前を使用することができます。ただし、「属性の上書き」で説明されているように、カスタムクックブック属性は、スタック設定とデプロイ属性、および Chef の Ohai ツールとともに、インスタンスのノードオブジェクト内にマージされます。port や user などは、一般的に使用される設定名であるため、さまざまなクックブックに出現する可能性があります。

名前の競合を避けるためには、命名規則に従います。例に示すように、少なくとも 2 つの要素を使用して修飾した属性名を作成します。1 つ目は、Apache のように、通常は製品名に基づいた一意の要素を使用します。次に、[:user] や [:port] などの、特定の値を識別できる 1 つ以上のサブ属性が続きます。プロジェクトの要件に合った数のサブ属性を使用することができます。

value

属性は、次のようなタイプの値に設定することができます。

- `default[:apache][:keepalive] = 'Off'` のような文字列。
- `default[:apache][:timeout] = 120` のような数値 (引用符なし)。
- `true` または `false` のブール値 (引用符なし)。
- `default[:apache][:listen_ports] = [ '80','443' ]` のような値のリスト。

属性ファイルは Ruby アプリケーションです。そのため、ノード構文と論理演算子を使用して、他の属性に基づいた値を割り当てることもできます。属性の定義方法の詳細については、「属性について」を参照してください。属性ファイルの動作例については、https://github.com/aws/opsworks-cookbooks OpsWorks の スタック組み込みクックブックを参照してください。

テンプレート

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

多くのパッケージは、設定ファイルを作成してそれを適切なディレクトリに配置することによって設定されます。設定ファイルをクックブックに含めて目的のディレクトリにコピーすることもできますが、レシピを使用してテンプレートから設定ファイルを作成する方が、より柔軟性の高い方法です。テンプレートを使用する利点は、属性を使用してテンプレートの値を定義できることです。たとえば、カスタム JSON を使用して該当する属性値を上書きできるため、クックブックに変更を加えることなしに、設定ファイルを変更できます。

テンプレートの内容と構造は、基本的に、関連付けられたファイルと同じです。以下に `httpd.conf` ファイルの例を示します。

```
ServerRoot "<%= node[:apache][:dir] %>"
<% if node[:platform] == "debian" || node[:platform] == "ubuntu" -%>
  LockFile /var/lock/apache2/accept.lock
<% else -%>
   LockFile logs/accept.lock
<% end -%>
PidFile <%= node[:apache][:pid_file] %>
Timeout <%= node[:apache][:timeout] %>
KeepAlive <%= node[:apache][:keepalive] %>
MaxKeepAliveRequests <%= node[:apache][:keepaliverequests] %>
KeepAliveTimeout <%= node[:apache][:keepalivetimeout] %>
<IfModule mpm_prefork_module>
    StartServers          <%= node[:apache][:prefork][:startservers] %>
    MinSpareServers       <%= node[:apache][:prefork][:minspareservers] %>
    MaxSpareServers       <%= node[:apache][:prefork][:maxspareservers] %>
    ServerLimit           <%= node[:apache][:prefork][:serverlimit] %>
    MaxClients            <%= node[:apache][:prefork][:maxclients] %>
    MaxRequestsPerChild   <%= node[:apache][:prefork][:maxrequestsperchild] %>
</IfModule>
```

```
...
```

次の例は、Ubuntu インスタンス用に生成された httpd.conf ファイルです。

```
ServerRoot "/etc/httpd"
LockFile logs/accept.lock
PidFile /var/run/httpd/httpd.pid
Timeout 120
KeepAlive Off
MaxKeepAliveRequests 100
KeepAliveTimeout 3
<IfModule mpm_prefork_module>
    StartServers          16
    MinSpareServers       16
    MaxSpareServers       32
    ServerLimit           400
    MaxClients            400
    MaxRequestsPerChild   10000
</IfModule>
...
```

テンプレートに含まれるテキストの多くは、テンプレートから httpd.conf ファイルに単にコピーされます。ただし、<%= ... %> の内容については、次のように処理されます。

- Chef によって、<%= node[:attribute][:sub_attribute][:...]%> が属性の値で置き換えられます。

  例えば、StartServers <%= node[:apache][:prefork][:startservers] %> は、StartServers 16 では httpd.conf になります。
- 条件付きで値を選択するには、<%if-%>, <%else-%>, and <%end-%> を使用します。

  この例では、プラットフォームに応じて、accept.lock の異なるファイルパスを設定します。

> **Note**
>
> 使用できる属性は、クックブックの属性ファイルに設定された属性のみに制限されているわけではありません。インスタンスのノードオブジェクトで属性を使用できます。たとえ

ば、Ohai と呼ばれる Chef ツールによって生成され、ノードオブジェクトに組み込まれます。属性の詳細については、「属性の上書き」を参照してください。

Ruby コードの組み込み方法など、テンプレートの詳細については、「テンプレートについて」を参照してください。

recipe

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

レシピは、システムの設定を定義する Ruby アプリケーションです。これを使用して、パッケージのインストール、テンプレートからの設定ファイルの作成、シェルコマンドの実行、ファイルとディレクトリの作成などを行います。通常 OpsWorks 、インスタンスでライフサイクルイベントが発生したときに スタックによってレシピが自動的に実行されますが、Execute Recipes スタックコマンドを使用していつでも明示的に実行することもできます。詳細については、「レシピについて」を参照してください。

通常、レシピの大部分は、それぞれがシステムのある側面の目的の状態を表す、一連のリソースで構成されます。各リソースには、目的の状態の定義と実行するアクションの指定を行う、一連の属性が含まれています。Chef によって、アクションを実行する適切なプロバイダーに各リソースが関連付けられます。詳細については、「リソースおよびプロバイダーリファレンス」を参照してください。

package リソースは、Linux インスタンスのソフトウェアパッケージを管理するのに役立ちます。次の例では、Apache パッケージをインストールします。

```
...
package 'apache2' do
  case node[:platform]
  when 'centos','redhat','fedora','amazon'
    package_name 'httpd'
```

```
  when 'debian','ubuntu'
    package_name 'apache2'
  end
  action :install
end
...
```

Chef は、プラットフォーム用の適切なパッケージプロバイダーを使用します。通常、リソース属性には、単に値が割り当てられるだけですが、Ruby の論理演算子を使用して、条件付き割り当てを実行することもできます。例では、case 演算子を使用しています。これは、node[:platform] を使用してインスタンスのオペレーティングシステムを識別し、それに応じて package_name 属性を設定します。標準の Chef ノード構文を使用して、レシピに属性を挿入できます。属性は Chef によって、関連付けられている値に置き換えられます。ノードオブジェクトでは、クックブックにある属性だけでなく、任意の属性を使用できます。

適切なパッケージ名を判別したら、コードセグメントはパッケージをインストールする install アクションを実行して終了します。このリソースに対するアクションには、他に upgrade や remove などがあります。詳細については、「package」を参照してください。

インストールや設定を行う複雑なタスクを 1 つ以上のサブタスクに分割し、それぞれを別個のレシピとして実装して、適切なタイミングでプライマリレシピで実行すると効率的です。次の例は、前述の例に続くコード行を示しています。

```
include_recipe 'apache2::service'
```

レシピで子レシピを実行するには、include_recipe キーワードを使用し、その後ろにレシピ名を指定します。レシピは、標準の Chef 構文である *CookbookName*::*RecipeName* を使用して識別されます。この *RecipeName* では .rb 拡張子が省略されます。

> **Note**
>
> include_recipe ステートメントは、プライマリレシピにおいて、その時点のレシピを効率的に実行します。ただし、実際には、プライマリレシピの実行前に、Chef によって各 include_recipe ステートメントが指定されたレシピのコードで置き換えられます。

directory リソースはディレクトリ (パッケージのファイルが含まれるディレクトリなど) を表します。次に示す default.rb リソースは、Linux ログディレクトリを作成します。

```
directory node[:apache][:log_dir] do
    mode 0755
    action :create
end
```

ログディレクトリは、クックブックの属性ファイルのいずれかで定義されています。リソースでは、ディレクトリのモードを 0755 に指定し、create アクションを使用してディレクトリを作成します。詳細については、「directory」を参照してください。また、Windows インスタンスでもこのリソースを使用できます。

execute リソースは、シェルコマンドやスクリプトなどのコマンドを表します。module.load ファイルを生成する例を次に示します。

```
execute 'generate-module-list' do
  if node[:kernel][:machine] == 'x86_64'
    libdir = 'lib64'
  else
    libdir = 'lib'
  end
  command "/usr/local/bin/apache2_module_conf_generate.pl /usr/#{libdir}/httpd/
modules /etc/httpd/mods-available"
  action :run
end
```

リソースは、最初に CPU タイプを判別します。[:kernel][:machine] は、さまざまなシステムプロパティ (ここでは CPU タイプ) を表すために Chef が生成する、もう 1 つの自動属性です。次に、コマンド (Perl スクリプト) を指定し、run アクションを使用してスクリプトを実行します。これにより、module.load ファイルが生成されます。詳細については、「execute」を参照してください。

template リソースは、クックブックのテンプレートファイルの 1 つから生成されるファイル (通常は設定ファイル) を意味します。次の例では、httpd.conf で説明した apache2.conf.erb テンプレートから テンプレート 設定ファイルが 作成されます。

```
template 'apache2.conf' do
  case node[:platform]
  when 'centos','redhat','fedora','amazon'
```

```
    path "#{node[:apache][:dir]}/conf/httpd.conf"
  when 'debian','ubuntu'
    path "#{node[:apache][:dir]}/apache2.conf"
  end
  source 'apache2.conf.erb'
  owner 'root'
  group 'root'
  mode 0644
  notifies :restart, resources(:service => 'apache2')
end
```

リソースは、インスタンスのオペレーティングシステムに基づいて、生成されるファイルの名前と場所を決定します。次に、ファイルの生成に使用するテンプレートとして apache2.conf.erb を指定し、ファイルの所有者、グループ、およびモードを設定します。notify アクションを実行して、Apache サーバーを表す service リソースに、サーバーを再起動するよう通知します。詳細については、「template」を参照してください。

スタック設定およびデプロイ属性: Linux

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このトピックでは、最もよく使われるスタック設定およびデプロイ属性と、関連するノード構文を紹介します。これは、Linux スタックにより使用されるスタック設定名前空間構造により整理されています。同じ属性名が異なる目的で使用され、異なる名前空間で発生する場合があることに注意してください。例えば、id は スタック ID、レイヤー ID、アプリケーション ID などを示すことができるため、この属性値を使用するには完全修飾名が必要です。このデータは、JSON オブジェクトとして視覚化するのが便利です。例については、「スタック設定およびデプロイメント属性」を参照してください。

> **Note**
>
> Linux インスタンスでは、 OpsWorks スタックはノードオブジェクトにデータを追加することに加えて、各インスタンスにこの JSON オブジェクトをインストールします。これは、エージェント CLI の `get_json` コマンドを使用して取得できます。

トピック

- opsworks 属性
- opsworks_custom_cookbooks 属性
- dependencies 属性
- ganglia 属性
- mysql 属性
- passenger 属性
- opsworks_bundler 属性
- deploy 属性
- その他の最上位属性

opsworks 属性

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

`opsworks` 要素 — `opsworks` 名前空間と呼ばれることもあります。基本的なスタック設定を定義する一連の属性が含まれます。

> **Important**
>
> opsworks 名前空間内の属性値を上書きすることは推奨されません。上書きすると、組み込みのレシピが失敗する可能性があります。

トピック

- アプリケーション
- instance 属性
- レイヤー属性
- rails_stack 属性
- stack 属性
- その他の最上位の opsworks 属性

アプリケーション

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

スタックに対して存在するアプリケーションごとに、1 個の埋め込みオブジェクトのリストが含まれます。各埋め込みオブジェクトには、アプリケーション設定を記述する次の属性が含まれます。

> **Note**
>
> これらの属性の一般的なノード構文を次に示します。ここで、*i* はインスタンスの 0 から始まるリストインデックスを指定します。
>
> ```
> node["opsworks"]["applications"]["i"]["attribute_name"]
> ```

application_type

アプリケーションのタイプ (文字列)。可能な値は以下のとおりです。

- php: PHP アプリケーション
- `rails`: Ruby on Rails アプリケーション
- `java`: Java アプリケーション
- `nodejs`: Node.js アプリケーション
- `web`: 静的な HTML ページ
- `other`: その他のすべてのアプリケーションタイプ

```
node["opsworks"]["applications"]["i"]["application_type"]
```

名前

ユーザー定義の表示名 (`"SimplePHP"` など) (文字列)。

```
node["opsworks"]["applications"]["i"]["name"]
```

slug_name

OpsWorks がアプリケーション名から生成した、すべて小文字の短縮名 (`"simplephp"` など) (文字列)。

```
node["opsworks"]["applications"]["i"]["slug_name"]
```

instance 属性

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

`instance` 属性には、このインスタンスの設定を指定する属性のセットが含まれます。

アーキテクチャ	availability_zone	backends
aws_instance_id	hostname	id
instance_type	ip	レイヤー
private_dns_name	private_ip	public_dns_name
リージョン		

アーキテクチャ

インスタンスのアーキテクチャ ("i386" など) (文字列)。

```
node["opsworks"]["instance"]["architecture"]
```

availability_zone

インスタンスのアベイラビリティーゾーン ("us-west-2a" など) (文字列)。

```
node["opsworks"]["instance"]["availability_zone"]
```

backends

バックエンドウェブプロセスの数 (文字列)。たとえば、HAProxy が Rails バックエンドに転送する同時接続の数を決定します。デフォルト値は、インスタンスのメモリおよびコアの数によって決まります。

```
node["opsworks"]["instance"]["backends"]
```

aws_instance_id

EC2 インスタンス ID (文字列)。

```
node["opsworks"]["instance"]["aws_instance_id"]
```

hostname

ホスト名 ("php-app1" など) (文字列)。

```
node["opsworks"]["instance"]["hostname"]
```

id

インスタンス ID。インスタンスを一意に識別する OpsWorks スタック生成の GUID (文字列) です。

```
node["opsworks"]["instance"]["id"]
```

instance_type

インスタンスのタイプ ("c1.medium" など) (文字列)。

```
node["opsworks"]["instance"]["instance_type"]
```

ip

パブリック IP アドレス (文字列)。

```
node["opsworks"]["instance"]["ip"]
```

レイヤー

短縮名で識別されるインスタンスのレイヤーのリスト ("lb"、"db-master" など) (文字列のリスト)。

```
node["opsworks"]["instance"]["layers"]
```

private_dns_name

プライベート DNS 名 (文字列)。

```
node["opsworks"]["instance"]["private_dns_name"]
```

private_ip

プライベート IP アドレス (文字列)。

```
node["opsworks"]["instance"]["private_ip"]
```

public_dns_name

パブリック DNS 名 (文字列)。

```
node["opsworks"]["instance"]["public_dns_name"]
```

リージョン

AWS リージョン ("us-west-2" など) (文字列)。

```
node["opsworks"]["instance"]["region"]
```

レイヤー属性

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

`layers` 属性には、スタックのレイヤーごとに 1 個 のレイヤー属性のセットが含まれ、レイヤーの短縮名で名前が付けられます (php-app など)。スタックは組み込みレイヤーごとに最大 1 個を保持することができます。短縮名は次のとおりです。

- `db-master`: MySQL レイヤー
- `java-app`: Java アプリケーションサーバーレイヤー
- `lb`: HAProxyレイヤー
- `monitoring-master`: Gangliaレイヤー
- `memcached`: Memcachedレイヤー
- `nodejs-app`: Node.js アプリケーションサーバーレイヤー
- `php-app`: PHP アプリケーションサーバーレイヤー
- `rails-app`: Rails アプリケーションサーバーレイヤー

- web: 静的ウェブサーバーレイヤー

スタックには、ユーザー定義の短縮名を持つ、任意の数のカスタムレイヤーを含めることができます。

各レイヤー属性には、次の属性が含まれます。

- id
- インスタンス
- [名前]

id

OpsWorks によって生成される GUID であり、レイヤーを一意に識別するレイヤー ID (文字列)。

```
node["opsworks"]["layers"]["layershortname"]["id"]
```

インスタンス

instances 要素には、レイヤーのオンラインインスタンスごとに 1 個の instance 属性のセットが含まれます。これらは、php-app1 などインスタンスのホスト名で名前が付けられます。

> **Note**
>
> instances 要素には、特定のスタック設定およびデプロイ属性が作成された時点でオンライン状態にあったインスタンスのみが含まれています。

各インスタンス要素には、次の属性が含まれます。

availability_zone	aws_instance_id	backends
booted_at	created_at	elastic_ip
instance_type	ip	private_ip
public_dns_name	private_dns_name	リージョン
ステータス		

availability_zone

アベイラビリティーゾーン ("us-west-2a" など) (文字列)。

```
node["opsworks"]["layers"]["layershortname"]["instances"]["instancehostname"]
["availability_zone"]
```

aws_instance_id

EC2 インスタンス ID (文字列)。

```
node["opsworks"]["layers"]["layershortname"]["instances"]["instancehostname"]
["aws_instance_id"]
```

backends

バックエンドウェブプロセスの数 (数値)。たとえば、HAProxy が Rails バックエンドに転送する同時接続の数を決定します。デフォルト値は、インスタンスのメモリおよびコアの数によって決まります。

```
node["opsworks"]["layers"]["layershortname"]["instances"]["instancehostname"]
["backends"]
```

booted_at

UTC の yyyy-mm-dddThh:mm:ss+hh:mm 形式で示される EC2 インスタンスが起動された時間 (文字列)。例えば、"2013-10-01T08:35:22+00:00" は 2013 年 10 月 10 日 8:35:22 (タイムゾーンオフセットなし) に対応します。詳細については、ISO 8601 を参照してください。

```
node["opsworks"]["layers"]["layershortname"]["instances"]["instancehostname"]
["booted_at"]
```

created_at

UTC の yyyy-mm-dddThh:mm:ss+hh:mm 形式で示される EC2 インスタンスが作成された時間 (文字列)。例えば、"2013-10-01T08:35:22+00:00" は 2013 年 10 月 10 日 8:35:22 (タイムゾーンオフセットなし) に対応します。詳細については、ISO 8601 を参照してください。

```
node["opsworks"]["layers"]["layershortname"]["instances"]["instancehostname"]
["created_at"]
```

elastic_ip

Elastic IP アドレス (文字列)。インスタンスにアドレスがない場合は null に設定されます。

```
node["opsworks"]["layers"]["layershortname"]["instances"]["instancehostname"]
["elastic_ip"]
```

instance_type

インスタンスのタイプ ("c1.medium" など) (文字列)。

```
node["opsworks"]["layers"]["layershortname"]["instances"]["instancehostname"]
["instance_type"]
```

ip

パブリック IP アドレス (文字列)。

```
node["opsworks"]["layers"]["layershortname"]["instances"]["instancehostname"]
["ip"]
```

private_ip

プライベート IP アドレス (文字列)。

```
node["opsworks"]["layers"]["layershortname"]["instances"]["instancehostname"]
["private_ip"]
```

public_dns_name

パブリック DNS 名 (文字列)。

```
node["opsworks"]["layers"]["layershortname"]["instances"]["instancehostname"]
["public_dns_name"]
```

private_dns_name

プライベート DNS 名 (文字列)。

```
node["opsworks"]["layers"]["layershortname"]["instances"]["instancehostname"]
["private_dns_name"]
```

リージョン

AWS リージョン ("us-west-2" など) (文字列)。

```
node["opsworks"]["layers"]["layershortname"]["instances"]["instancehostname"]
["region"]
```

ステータス

ステータス (文字列)。可能な値は以下のとおりです。

- "requested"
- "booting"
- "running_setup"
- "online"
- "setup_failed"
- "start_failed"
- "terminating"
- "terminated"
- "stopped"
- "connection_lost"

```
node["opsworks"]["layers"]["layershortname"]["instances"]["instancehostname"]
["status"]
```

名前

コンソール内のレイヤーを表すために使用されるレイヤーの名前 (文字列)。ユーザー定義も使用でき、一意である必要はありません。

```
node["opsworks"]["layers"]["layershortname"]["name"]
```

rails_stack 属性

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソ

リューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

名前

rails スタックを指定し、"apache_passenger" または "nginx_unicorn" に設定されます (文字列)。

```
node["opsworks"]["rails_stack"]["name"]
```

recipe

関連付けられたレシピ (文字列)。Passenger または Unicorn のどちらを使用しているかによって異なります。

- Unicorn: "unicorn::rails"
- Passenger: "passenger_apache2::rails"

```
node["opsworks"]["rails_stack"]["recipe"]
```

restart_command

再起動コマンド (文字列)。Passenger または Unicorn のどちらを使用しているかによって異なります。

- Unicorn: "../../shared/scripts/unicorn clean-restart"
- Passenger: "touch tmp/restart.txt"

サービス

サービス名 (文字列)。Passenger または Unicorn のどちらを使用しているかによって異なります。

- Unicorn: "unicorn"
- Passenger: "apache2"

```
node["opsworks"]["rails_stack"]["service"]
```

stack 属性

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

`stack` 属性は、サービスレイヤー設定などスタック設定の一部の側面を指定します。

- elb-load-balancers
- id
- 名前
- rds_instances
- vpc_id

elb-load-balancers

スタックの Elastic Load Balancing ロードバランサーごとに、1 個の埋め込みオブジェクトのリストが含まれます。各埋め込みオブジェクトには、ロードバランサー設定を記述する次の属性が含まれます。

> **Note**
>
> これらの属性の一般的なノード構文を次に示します。ここで、*i* はインスタンスの 0 から始まるリストインデックスを指定します。
>
> ```
> node["opsworks"]["stack"]["elb-load-balancers"]["i"]["attribute_name"]
> ```

dns_name

ロードバランサーの DNS 名 (文字列)。

```
node["opsworks"]["stack"]["elb-load-balancers"]["i"]["dns_name"]
```

名前

ロードバランサーの名前 (文字列)。

```
node["opsworks"]["stack"]["elb-load-balancers"]["i"]["name"]
```

layer_id

ロードバランサーがアタッチされるレイヤーの ID (文字列)。

```
node["opsworks"]["stack"]["elb-load-balancers"]["i"]["layer_id"]
```

id

スタック ID (文字列)。

```
node["opsworks"]["stack"]["id"]
```

名前

スタック名 (文字列)。

```
node["opsworks"]["stack"]["name"]
```

rds_instances

スタックに登録されている Amazon RDS インスタンスごとに、1 個の埋め込みオブジェクトのリストが含まれます。各埋め込みオブジェクトには、インスタンスの設定を定義する属性のセットが含まれます。Amazon RDS コンソールまたは API を使用してインスタンスを作成する場合は、これらの値を指定します。また、インスタンスが作成された後で、Amazon RDS コンソールまたは API を使用して一部の設定を編集することもできます。詳細については、「Amazon RDS ドキュメント」を参照してください。

> **Note**
>
> これらの属性の一般的なノード構文を次に示します。ここで、*i* はインスタンスの 0 から始まるリストインデックスを指定します。

```
node["opsworks"]["stack"]["rds_instances"]["i"]["attribute_name"]
```

次の例は、スタックに複数の Amazon RDS インスタンスがある場合にレシピ内の特定のインスタンスを使用する方法です。

```
if my_rds = node["opsworks"]["stack"]["rds_instances"].select{|rds_instance|
 rds_instance["db_instance_identifier"] == 'db_id' }.first
  template "/etc/rds.conf" do
    source "rds.conf.erb"
    variables :address => my_rds["address"]
  end
end
```

アドレス	allocated_storage	arn
auto_minor_version_upgrade	availability_zone	backup_retention_period
db_instance_class	db_instance_identifier	db_instance_status
db_name	db_parameter_groups	db_security_groups
db_user	engine	instance_create_time
license_model	multi_az	option_group_memberships
port	preferred_backup_window	preferred_maintenance_window
publicly_accessible	read_replica_db_instance_identifiers	リージョン
status_infos	vpc_security_groups	

アドレス

インスタンス URL (opsinstance.ccdvt3hwog1a.us-west-2.rds.amazonaws.com など) (文字列)。

```
node["opsworks"]["stack"]["rds_instances"]["i"]["address"]
```

allocated_storage

割り当て済みストレージ (GB 単位) (数値)。

```
node["opsworks"]["stack"]["rds_instances"]["i"]["allocated_storage"]
```

arn

インスタンスの ARN (文字列)。

```
node["opsworks"]["stack"]["rds_instances"]["i"]["arn"]
```

auto_minor_version_upgrade

自動的にマイナーバージョンアップグレードを適用するかどうか (ブール)。

```
node["opsworks"]["stack"]["rds_instances"]["i"]["auto_minor_version_upgrade"]
```

availability_zone

インスタンスのアベイラビリティーゾーン (us-west-2a など) (文字列)。

```
node["opsworks"]["stack"]["rds_instances"]["i"]["availability_zone"]
```

backup_retention_period

バックアップ保持期間 (日数) (数値)。

```
node["opsworks"]["stack"]["rds_instances"]["i"]["backup_retention_period"]
```

db_instance_class

DB インスタンスクラス (db.m1.small など) (文字列)。

```
node["opsworks"]["stack"]["rds_instances"]["i"]["db_instance_class"]
```

db_instance_identifier

ユーザー定義の DB インスタンス識別子 (文字列)。

```
node["opsworks"]["stack"]["rds_instances"]["i"]["db_instance_identifier"]
```

db_instance_status

インスタンスのステータス (文字列)。詳細については、「DB インスタンス」を参照してください。

```
node["opsworks"]["stack"]["rds_instances"]["i"]["db_instance_status"]
```

db_name

ユーザー定義の DB 名 (文字列)。

```
node["opsworks"]["stack"]["rds_instances"]["i"]["db_name"]
```

db_parameter_groups

パラメータグループごとに 1 個の埋め込みオブジェクトのリストを含む、インスタンスの DB パラメータグループ。詳細については、「DB パラメータグループの操作」を参照してください。各オブジェクトには、次の属性が含まれます。

db_parameter_group_name

グループ名 (文字列)。

```
node["opsworks"]["stack"]["rds_instances"]["i"]["db_parameter_groups"][j"]
["db_parameter_group_name"]
```

parameter_apply_status

適用のステータス (文字列)。

```
node["opsworks"]["stack"]["rds_instances"]["i"]["db_parameter_groups"][j"]
["parameter_apply_status"]
```

db_security_groups

セキュリティグループごとに 1 個の埋め込みオブジェクトのリストを含む、インスタンスのデータベースセキュリティグループ。詳細については、「DB セキュリティグループの操作」を参照してください。各オブジェクトには、次の属性が含まれます。

db_security_group_name

セキュリティグループ名 (文字列)。

```
node["opsworks"]["stack"]["rds_instances"]["i"]["db_security_groups"][j]
["db_security_group_name"]
```

ステータス

ステータス (文字列)。

```
node["opsworks"]["stack"]["rds_instances"]["i"]["db_security_groups"][j]
["status"]
```

db_user

ユーザー定義のマスターユーザー名 (文字列)。

```
node["opsworks"]["stack"]["rds_instances"]["i"]["db_user"]
```

engine

データベースエンジン (`mysql(5.6.13)` など) (文字列)。

```
node["opsworks"]["stack"]["rds_instances"]["i"]["engine"]
```

instance_create_time

インスタンス作成時間 (`2014-04-15T16:13:34Z` など) (文字列)。

```
node["opsworks"]["stack"]["rds_instances"]["i"]["instance_create_time"]
```

license_model

インスタンスのライセンスモデル (`general-public-license` など) (文字列)。

```
node["opsworks"]["stack"]["rds_instances"]["i"]["license_model"]
```

multi_az

マルチ AZ 配置を有効にするかどうか (ブール)。

```
node["opsworks"]["stack"]["rds_instances"]["i"]["multi_az"]
```

option_group_memberships

オプショングループごとに 1 個の埋め込みオブジェクトのリストを含む、インスタンスのオプショングループメンバーシップ。詳細については、「オプショングループの操作」を参照してください。各オブジェクトには、次の属性が含まれます。

option_group_name

グループの名前 (文字列)。

```
node["opsworks"]["stack"]["rds_instances"]["i"]["option_group_memberships"]
[j"]["option_group_name"]
```

ステータス

グループのステータス (文字列)。

```
node["opsworks"]["stack"]["rds_instances"]["i"]["option_group_memberships"]
[j"]["status"]
```

port

データベースサーバーのポート (数値)。

```
node["opsworks"]["stack"]["rds_instances"]["i"]["port"]
```

preferred_backup_window

日ごとの優先バックアップ時間 (06:26-06:56 など) (文字列)。

```
node["opsworks"]["stack"]["rds_instances"]["i"]["preferred_backup_window"]
```

preferred_maintenance_window

週ごとの優先メンテナンス時間 (thu:07:13-thu:07:43 など) (文字列)。

```
node["opsworks"]["stack"]["rds_instances"]["i"]["preferred_maintenance_window"]
```

publicly_accessible

データベースをパブリックにアクセス可能にするかどうか (ブール)。

```
node["opsworks"]["stack"]["rds_instances"]["i"]["publicly_accessible"]
```

read_replica_db_instance_identifiers

リードレプリカのインスタンス識別子のリスト (文字列のリスト)。詳細については、「リードレプリカの使用」を参照してください。

```
node["opsworks"]["stack"]["rds_instances"]["i"]
["read_replica_db_instance_identifiers"]
```

リージョン

AWS リージョン (us-west-2 など) (文字列)。

```
node["opsworks"]["stack"]["rds_instances"]["i"]["region"]
```

status_infos

ステータス情報のリスト (文字列のリスト)。

```
node["opsworks"]["stack"]["rds_instances"]["i"]["status_infos"]
```

vpc_security_groups

VPC セキュリティグループのリスト (文字列のリスト)。

```
node["opsworks"]["stack"]["rds_instances"]["i"]["vpc_security_groups"]
```

vpc_id

VPC ID (文字列)。インスタンスが VPC 内にない場合、この値は null です。

```
node["opsworks"]["stack"]["vpc_id"]
```

その他の最上位の opsworks 属性

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このセクションでは、子属性のない opsworks 属性を紹介します。

アクティビティ

deploy (文字列) など、属性に関連付けられたアクティビティ。

```
node["opsworks"]["activity"]
```

agent_version

インスタンスの OpsWorks エージェントのバージョン (文字列)。

```
node["opsworks"]["agent_version"]
```

deploy_chef_provider

デプロイされたアプリケーションのディレクトリ構造に影響を与える Chef のデプロイプロバイダー (文字列)。この属性は、次のいずれかに設定できます。

- Branch
- Revision
- Timestamped (デフォルト値)

```
node["opsworks"]["deploy_chef_provider"]
```

ruby_stack

Ruby スタック (文字列)。デフォルト設定はエンタープライズバージョンです (ruby_enterprise)。MRI バージョンの場合は、この属性を ruby に設定します。

```
node["opsworks"]["ruby_stack"]
```

ruby_version

アプリケーションで使用される Ruby バージョン (文字列)。メジャーバージョンおよびマイナーバージョンのみを指定する場合に、この属性を使用できます。パッチバージョンを指定するには、該当する ["ruby"] 属性を使用する必要があります。バージョンの指定方法と例については、「Ruby のバージョン」を参照してください。 OpsWorks スタックで Ruby バージョンを特定する方法の詳細については、組み込みの属性ファイル ruby.rb を参照してください。

```
node["opsworks"]["ruby_version"]
```

run_cookbook_tests

Chef 11.4 クックブックで minitest-chef-handler テストを実行するかどうか (ブール)。

```
node["opsworks"]["run_cookbook_tests"]
```

sent_at

このコマンドがインスタンスにいつ送信されたか (数値)。

```
node["opsworks"]["sent_at"]
```

トラブルシューティング

これらの属性がデプロイアクティビティに関連付けられている場合、deployment はデプロイメント ID に設定されます。これは OpsWorks スタックにより生成され、デプロイメントを一意に識別する GUID (文字列) です。それ以外の場合、属性は null に設定されます。

```
node["opsworks"]["deployment"]
```

opsworks_custom_cookbooks 属性

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post または AWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

スタックのカスタムクックブックを指定する属性が含まれます。

有効

カスタムクックブックが有効になっているかどうか (ブール)。

```
node["opsworks_custom_cookbooks"]["enabled"]
```

recipes

このコマンドで実行されるレシピのリスト (文字列)。*cookbookname*::*recipename* 形式を使用したカスタムレシピが含まれます。

```
node["opsworks_custom_cookbooks"]["recipes"]
```

dependencies 属性

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post または AWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

`update_dependencies` スタックコマンドに関連するいくつかの属性が含まれます。

gem_binary

Gems バイナリの場所 (文字列)。

upgrade_debs

Debs パッケージをアップグレードするかどうか (ブール)。

update_debs

Debs パッケージを更新するかどうか (ブール)。

ganglia 属性

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Ganglia 統計ウェブページのアクセス方法を指定するいくつかの属性を含む、web 属性が含まれます。

password

統計ページにアクセスするために必要なパスワード (文字列)。

```
node["ganglia"]["web"]["password"]
```

url

統計ページの URL パス ("/ganglia" など) (文字列)。完全な URL は `http://`*`DNSNameURLPath`* です。ここで、*`DNSName`* は関連するインスタンスの DNS 名です。

```
node["ganglia"]["web"]["url"]
```

ユーザー

統計ページにアクセスするために必要なユーザー名 (文字列)。

```
node["ganglia"]["web"]["user"]
```

mysql 属性

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

MySQL データベースサーバー設定を指定する属性のセットが含まれます。

クライアント

クライアント IP アドレスのリスト (文字列のリスト)。

```
node["mysql"]["clients"]
```

server_root_password

ルートパスワード (文字列)。

```
node["mysql"]["server_root_password"]
```

passenger 属性

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Phusion Passenger 設定を指定する属性のセットが含まれます。

gem_bin

Ruby バイナリの場所 (文字列)。"/usr/local/bin/gem" など。

```
node["passenger"]["gem_bin"]
```

max_pool_size

最大プールサイズ (数値)。

```
node["passenger"]["max_pool_size"]
```

ruby_bin

Ruby バイナリの場所。"/usr/local/bin/ruby" など。

```
node["passenger"]["ruby_bin"]
```

バージョン

Passenger のバージョン (文字列)。

```
node["passenger"]["version"]
```

opsworks_bundler 属性

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Bundler サポートを指定する要素が含まれます。

manage_package

Bundler をインストールおよび管理するかどうか (ブール)。

```
node["opsworks_bundler"]["manage_package"]
```

バージョン

Bundler のバージョン (文字列)。

```
node["opsworks_bundler"]["version"]
```

deploy 属性

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

属性が Deploy イベントまたは Execute Recipes スタックコマンドに関連付けられている場合、deploy 属性には、デプロイされた各アプリケーションの属性が含まれます (アプリケーションの短縮名から名前が付けられます)。各アプリケーション属性には、次の属性が含まれます。

アプリケーション	application_type	auto_bundle_on_deploy
データベース	deploy_to	domains
document_root	environment_variables	グループ
keep_releases	memcached	移行
mounted_at	purge_before_symlink	rails_env
restart_command	scm	ssl_certificate

ssl_certificate_ca	ssl_certificate_key	ssl_support
スタック	symlink_before_migrate	symlinks
ユーザー		

アプリケーション

アプリケーションのスラグ名 ("simplephp" など) (文字列)。

```
node["deploy"]["appshortname"]["application"]
```

application_type

アプリケーションタイプ (文字列)。可能な値は以下のとおりです。

- java: Java アプリケーション
- nodejs: Node.js アプリケーション
- php: PHP アプリケーション
- rails: Ruby on Rails アプリケーション
- web: 静的な HTML ページ
- other: その他のすべてのアプリケーションタイプ

```
node["deploy"]["appshortname"]["application_type"]
```

auto_bundle_on_deploy

Rails アプリケーションで、デプロイメント中に Bundler を実行するかどうか (ブール)。

```
node["deploy"]["appshortname"]["auto_bundle_on_deploy"]
```

データベース

アプリケーションのデータベースを接続するために必要な情報を含みます。アプリにデータベースレイヤーがアタッチされている場合、 OpsWorks Stacks はこれらの属性に適切な値を自動的に割り当てます。

アダプター

データベースアダプタ (mysql など) (文字列)。

```
node["deploy"]["appshortname"]["database"]["adapter"]
```

データベース

データベース名 (文字列)。通常は "simplephp" のようなアプリケーションのスラグ名です。

```
node["deploy"]["appshortname"]["database"]["database"]
```

data_source_provider

データソース (mysql または rds) (文字列)。

```
node["deploy"]["appshortname"]["database"]["data_source_provider"]
```

ホスト

データベースホストの IP アドレス (文字列)。

```
node["deploy"]["appshortname"]["database"]["host"]
```

password

データベースのパスワード (文字列)。

```
node["deploy"]["appshortname"]["database"]["password"]
```

port

データベースポート (数値)。

```
node["deploy"]["appshortname"]["database"]["port"]
```

reconnect

Rails アプリケーションで、接続が存在しなくなった場合にアプリケーションを再接続するかどうか (ブール)。

```
node["deploy"]["appshortname"]["database"]["reconnect"]
```

username

ユーザー名 (文字列)。

```
node["deploy"]["appshortname"]["database"]["username"]
```

deploy_to

アプリケーションがデプロイされる場所 (文字列)。"/srv/www/simplephp"など。

```
node["deploy"]["appshortname"]["deploy_to"]
```

domains

アプリケーションのドメインのリスト (文字列のリスト)。

```
node["deploy"]["appshortname"]["domains"]
```

document_root

デフォルト以外のルートを指定する場合はドキュメントのルート、デフォルトルートを使用する場合は null (文字列)。

```
node["deploy"]["appshortname"]["document_root"]
```

environment_variables

アプリケーションに対して定義されたユーザー指定の環境変数を表す最大 20 個の属性の集合です。アプリケーション環境変数の定義方法の詳細については、「アプリケーションの追加」を参照してください。各属性名が環境変数名に設定され、対応する値が変数の値に設定されます。したがって以下の構文を使用して特定の値を参照できます。

```
node["deploy"]["appshortname"]["environment_variables"]["variable_name"]
```

グループ

アプリケーションのグループ (文字列)。

```
node["deploy"]["appshortname"]["group"]
```

keep_releases

OpsWorks スタックが保存するアプリケーションデプロイの数 (数値) 。この属性は、アプリケーションをロールバックできる回数を制御します。デフォルトでは、グローバル値の deploy_keep_releases に設定されます。このデフォルト値は 5 です。keep_releases を上書きして、特定のアプリケーションの保存したデプロイメントの数を指定することができます。

```
node["deploy"]["appshortname"]["keep_releases"]
```

memcached

memcached 設定を定義する 2 つの属性が含まれます。

ホスト

Memcached サーバーインスタンスの IP アドレス (文字列)。

```
node["deploy"]["appshortname"]["memcached"]["host"]
```

port

memcached サーバーがリッスンするポート (数値)。

```
node["deploy"]["appshortname"]["memcached"]["port"]
```

移行

Rails アプリケーションで、移行を実行するかどうか (ブール)。

```
node["deploy"]["appshortname"]["migrate"]
```

mounted_at

デフォルト以外のマウントポイントを指定する場合はアプリケーションのマウントポイント、デフォルトのマウントポイントを使用する場合は null です (文字列)。

```
node["deploy"]["appshortname"]["mounted_at"]
```

purge_before_symlink

Rails アプリケーションでは、シンボリックリンク (文字列のリスト) を作成する前に消去されるパスの配列。

```
node["deploy"]["appshortname"]["purge_before_symlink"]
```

rails_env

Rails アプリケーションサーバー インスタンスでは、"production" (文字列)などの rails 環境です。

```
node["deploy"]["appshortname"]["rails_env"]
```

restart_command

アプリケーションが再開されたときに実行されるコマンド ("echo 'restarting app'" など)。

```
node["deploy"]["appshortname"]["restart_command"]
```

scm

ソース管理リポジトリからアプリケーションをデプロイするために OpsWorks で使用される情報を指定する属性のセットが含まれます。この属性はリポジトリのタイプによって異なります。

password

プライベートリポジトリの場合はパスワード、パブリックリポジトリの場合は null (文字列)。プライベート Amazon S3 バケットでは、この属性はシークレットキーに設定されます。

```
node["deploy"]["appshortname"]["scm"]["password"]
```

リポジトリ

リポジトリの URL ("git://github.com/amazonwebservices/opsworks-demo-php-simple-app.git" など) (文字列)。

```
node["deploy"]["appshortname"]["scm"]["repository"]
```

revision

リポジトリに複数のブランチがある場合、その属性はアプリケーションのブランチまたはバージョンを指定します ("version1" など) (文字列)。それ以外の場合は、null に設定されます。

```
node["deploy"]["appshortname"]["scm"]["revision"]
```

scm_type

リポジトリのタイプ (文字列)。可能な値は以下のとおりです。

- "git": Git リポジトリ
- "svn": Subversion リポジトリ
- "s3": Amazon S3 バケット
- "archive": HTTP アーカイブ
- "other": 別のリポジトリのタイプ

```
node["deploy"]["appshortname"]["scm"]["scm_type"]
```

ssh_key

プライベート Git リポジトリにアクセスする場合はデプロイ SSH キー、パブリックリポジトリの場合は null (文字列) 。

```
node["deploy"]["appshortname"]["scm"]["ssh_key"]
```

ユーザー

プライベートリポジトリの場合はユーザー名、パブリックリポジトリの場合は null (文字列) 。プライベート Amazon S3 バケットでは、この属性はアクセスキーに設定されます。

```
node["deploy"]["appshortname"]["scm"]["user"]
```

ssl_certificate

SSL サポートを有効にした場合は SSL 証明書、それ以外の場合は null (文字列)。

```
node["deploy"]["appshortname"]["ssl_certificate"]
```

ssl_certificate_ca

SSL が有効である場合は、中間認証局キーまたはクライアント認証を指定するための属性 (文字列)。

```
node["deploy"]["appshortname"]["ssl_certificate_ca"]
```

ssl_certificate_key

SSL サポートを有効にした場合はアプリケーションの SSL プライベートキー、それ以外の場合は null (文字列)。

```
node["deploy"]["appshortname"]["ssl_certificate_key"]
```

ssl_support

SSL がサポートされているかどうか (ブール)。

```
node["deploy"]["appshortname"]["ssl_support"]
```

スタック

デプロイメント中にアプリケーションサーバーを再読み込みするかどうかを指定するブール属性 needs_reload が含まれます。

```
node["deploy"]["appshortname"]["stack"]["needs_reload"]
```

symlink_before_migrate

Rails アプリケーションでは、移行を実行する前に作成されるシンボリックリンクが "*link*":"*target*" ペアとして含まれます。

```
node["deploy"]["appshortname"]["symlink_before_migrate"]
```

symlinks

デプロイメントのシンボリックリンクが "*link*":"*target*" ペアとして含まれます。

```
node["deploy"]["appshortname"]["symlinks"]
```

ユーザー

アプリケーションのユーザー (文字列)。

```
node["deploy"]["appshortname"]["user"]
```

その他の最上位属性

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このセクションでは、子属性のない最上位スタック設定属性を紹介します。

rails 属性

サーバーの最大プールサイズを指定する max_pool_size 属性が含まれます (数値)。属性値は OpsWorks スタックによって設定され、インスタンスタイプによって異なりますが、カスタム JSON またはカスタム属性ファイルを使用して上書きできます。

```
node["rails"]["max_pool_size"]
```

recipes 属性

"*cookbookname*::*recipename*" 形式を使用して、このアクティビティにより実行された組み込みレシピのリスト (文字列のリスト)。

```
node["recipes"]
```

opsworks_rubygems 属性

RubyGems バージョンを指定する version 要素が含まれます (文字列)。

```
node["opsworks_rubygems"]["version"]
```

languages 属性

インストールした各言語に対して、言語に由来する名前が付けられた属性が含まれます (ruby など)。この属性は、インストールフォルダ (など) を指定する属性 (ruby_bin"/usr/bin/ruby" など) を含むオブジェクトです。

ssh_users 属性

属性のセットが含まれ、1 つの属性によって SSH アクセス許可が個別に付与されたユーザーの 1 人が記述されます。各属性には、ユーザーの Unix ID で名前が付けられます。 OpsWorks スタックは、 など、2000-4000 の範囲の各ユーザーに一意の ID を生成し"2001"、その ID を持つユーザーをすべてのインスタンスに作成します。 OpsWorks は 2000-4000 の範囲を予約するため、の外部で作成したユーザー OpsWorks (クックブックレシピを使用するか、IAM OpsWorks からにユーザーをインポートするなど) は、別のユーザーの OpsWorks スタックによって上書きされる UIDs を持つことができます。ベストプラクティスとして、 OpsWorks スタックコンソールでユーザーを作成し、アクセスを管理します。 OpsWorks スタックの外部でユーザーを作成する場合は、4000 を超える *UnixID* 値を使用します。

各属性には、次の属性が含まれます。

E メール

ユーザーの E メールアドレス (文字列)。

```
node["ssh_users"]["UnixID"]["email"]
```

public_key

ユーザーのパブリック SSH キー (文字列)。

```
node["ssh_users"]["UnixID"]["public_key"]
```

sudoer

ユーザーに sudo アクセス許可があるかどうか (ブール)。

```
node["ssh_users"]["UnixID"]["sudoer"]
```

名前

ユーザー名 (文字列)。

```
node["ssh_users"]["UnixID"]["name"]
```

組み込みクックブックの属性

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> これらの属性のほとんどは Linux スタックにのみ使用できます。

組み込みのレシピのほとんどには、さまざまな設定を定義する 1 つ以上の属性ファイルがあります。カスタムレシピ内のこれらの設定にアクセスし、カスタム JSON を使用して上書きすることができます。通常、 OpsWorks スタックでサポートされているさまざまなサーバーテクノロジーの設定を制御する属性にアクセスまたは上書きする必要があります。このセクションでは、これらの属性の概要を示します。完全な属性ファイルと関連のレシピおよびテンプレートは、https://github.com/aws/opsworks-cookbooks.git で入手できます。

> **Note**
>
> 組み込みのレシピの属性はすべて `default` 型です。

トピック

- apache2 属性
- deploy 属性
- haproxy 属性
- memcached 属性
- mysql 属性
- nginx 属性

- opsworks_berkshelf 属性
- opsworks_java 属性
- passenger_apache2 属性
- ruby 属性
- unicorn 属性

apache2 属性

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> これらの属性は Linux スタックにのみ使用できます。

apache2 属性は、Apache HTTP サーバー設定を指定します。詳細については、「Apache コア機能」を参照してください。組み込み属性を上書きしてカスタム値を指定する方法の詳細については、「属性の上書き」を参照してください。

バイナリ	問い合わせ	deflate_types
dir	document_root	グループ
hide_info_headers	icondir	init_script
keepalive	keepaliverequests	keepalivetimeout
lib_dir	libexecdir	listen_ports
log_dir	logrotate 属性	pid_file

prefork 属性	serversignature	servertokens
タイムアウト	traceenable	ユーザー
バージョン	worker 属性	

バイナリ

Apache バイナリの場所 (文字列)。デフォルト値は '/usr/sbin/httpd' です。

```
node[:apache][:binary]
```

問い合わせ

E メールの連絡先 (文字列)。デフォルト値はダミーのアドレス 'ops@example.com' です。

```
node[:apache][:contact]
```

deflate_types

Mime タイプがブラウザでサポートされている場合は、指定した Mime タイプで圧縮を有効にするために mod_deflate を指定します (文字列のリスト)。デフォルト値は次のとおりです。

```
['application/javascript',
 'application/json',
 'application/x-javascript',
 'application/xhtml+xml',
 'application/xml',
 'application/xml+rss',
 'text/css',
 'text/html',
 'text/javascript',
 'text/plain',
 'text/xml']
```

> **Warning**
>
> 圧縮によってセキュリティリスクが生じる可能性があります。圧縮を完全に無効にするには、この属性を次のように設定します。

```
node[:apache][:deflate_types] = []
```

```
node[:apache][:deflate_types]
```

dir

サーバーのルートディレクトリ (文字列)。デフォルト値は次のとおりです。

- Amazon Linux および Red Hat Enterprise Linux (RHEL) : '/etc/httpd'
- Ubuntu: '/etc/apache2'

```
node[:apache][:dir]
```

document_root

ドキュメントのルート (文字列)。デフォルト値は次のとおりです。

- Amazon Linux および RHEL: '/var/www/html'
- Ubuntu: '/var/www'

```
node[:apache][:document_root]
```

グループ

グループ名 (文字列)。デフォルト値は次のとおりです。

- Amazon Linux および RHEL: 'apache'
- Ubuntu: 'www-data'

```
node[:apache][:group]
```

hide_info_headers

HTTP ヘッダーからバージョンおよびモジュール情報を省略するかどうか ('true'/'false') (文字列)。デフォルト値は 'true' です。

```
node[:apache][:hide_info_headers]
```

icondir

アイコンのディレクトリ (文字列)。デフォルト値は次のとおりです。

- Amazon Linux および RHEL: `'/var/www/icons/'`
- Ubuntu: `'/usr/share/apache2/icons'`

```
node[:apache][:icondir]
```

init_script

初期化スクリプト (文字列)。デフォルト値は次のとおりです。

- Amazon Linux および RHEL: `'/etc/init.d/httpd'`
- Ubuntu: `'/etc/init.d/apache2'`

```
node[:apache][:init_script]
```

keepalive

キープアライブ接続を有効にするかどうか (文字列)。指定できる値は `'On'` および `'Off'` です (文字列)。デフォルト値は `'Off'` です。

```
node[:apache][:keepalive]
```

keepaliverequests

Apache が同時に処理するキープアライブリクエストの最大数 (数値)。デフォルト値は `100` です。

```
node[:apache][:keepaliverequests]
```

keepalivetimeout

Apache は、接続を閉じる前にリクエストを待機します (数値)。デフォルト値は `3` です。

```
node[:apache][:keepalivetimeout]
```

lib_dir

オブジェクトコードライブラリを含むディレクトリ (文字列)。デフォルト値は次のとおりです。

- Amazon Linux (x86) : '/usr/lib/httpd'
- Amazon Linux (x64) および RHEL: '/usr/lib64/httpd'
- Ubuntu: '/usr/lib/apache2'

```
node[:apache][:lib_dir]
```

libexecdir

プログラム実行可能ファイルを含むディレクトリ (文字列)。デフォルト値は次のとおりです。

- Amazon Linux (x86) : '/usr/lib/httpd/modules'
- Amazon Linux (x64) および RHEL: '/usr/lib64/httpd/modules'
- Ubuntu: '/usr/lib/apache2/modules'

```
node[:apache][:libexecdir]
```

listen_ports

サーバーがリッスンするポートのリスト (文字列のリスト)。デフォルト値は ['80','443'] です。

```
node[:apache][:listen_ports]
```

log_dir

ログディレクトリ (文字列)。デフォルト値は次のとおりです。

- Amazon Linux および RHEL: '/var/log/httpd'
- Ubuntu: '/var/log/apache2'

```
node[:apache][:log_dir]
```

logrotate 属性

これらの属性は、ログファイルを更新する方法を指定します。

delaycompress

次のローテーションサイクルの開始まで、閉じられたログファイルの圧縮を遅らせるかどうか ('true'/'false') (文字列)。デフォルト値は 'true' です。

```
node[:apache][:logrotate][:delaycompress]
```

グループ

ログファイルのグループ (文字列)。デフォルト値は `'adm'` です。

```
node[:apache][:logrotate][:group]
```

モード

ログファイルのモード (文字列)。デフォルト値は `'640'` です。

```
node[:apache][:logrotate][:mode]
```

owner (オーナー)

ログファイルの所有者 (文字列)。デフォルト値は `'root'` です。

```
node[:apache][:logrotate][:owner]
```

rotate

閉じられたログファイルが削除される前のローテーションサイクルの数 (文字列)。デフォルト値は `'30'` です。

```
node[:apache][:logrotate][:rotate]
```

スケジュール

更新スケジュール (文字列)。可能な値は以下のとおりです。

- `'daily'`
- `'weekly'`
- `'monthly'`

デフォルト値は `'daily'` です。

```
node[:apache][:logrotate][:schedule]
```

pid_file

デーモンのプロセス ID を含むファイル (文字列)。デフォルト値は次のとおりです。

- Amazon Linux および RHEL: `'/var/run/httpd/httpd.pid'`
- Ubuntu: `'/var/run/apache2.pid'`

```
node[:apache][:pid_file]
```

prefork 属性

これらの属性は事前分岐設定を指定します。

maxclients

供給される同時リクエストの最大数 (数値)。デフォルト値は `400` です。

> **Note**
>
> この属性は、Amazon Linux または RHEL を実行しているインスタンスに対してのみ使用します。インスタンスで Ubuntu 14.04 LTS を実行している場合は、maxrequestworkers を使用します。

```
node[:apache][:prefork][:maxclients]
```

maxrequestsperchild

子サーバープロセスが処理するリクエストの最大数 (数値)。デフォルト値は `10000` です。

```
node[:apache][:prefork][:maxrequestsperchild]
```

maxrequestworkers

供給される同時リクエストの最大数 (数値)。デフォルト値は `400` です。

> **Note**
>
> この属性は、Ubuntu 14.04 LTS を実行しているインスタンスに対してのみ使用します。インスタンスが Amazon LinuxまたはRHELを実行している場合は、maxclients を使用します。

```
node[:apache][:prefork][:maxrequestworkers]
```

maxspareservers

アイドル状態の子サーバープロセスの最大数 (数値)。デフォルト値は 32 です。

```
node[:apache][:prefork][:maxspareservers]
```

minspareservers

アイドル状態の子サーバープロセスの最小数 (数値)。デフォルト値は 16 です。

```
node[:apache][:prefork][:minspareservers]
```

serverlimit

設定できるプロセスの最大数 (数値)。デフォルト値は 400 です。

```
node[:apache][:prefork][:serverlimit]
```

startservers

起動時に作成される子サーバープロセスの数 (数値)。デフォルト値は 16 です。

```
node[:apache][:prefork][:startservers]
```

serversignature

サーバーで生成されたドキュメントの末尾のフッターを設定するかどうか、および設定方法を指定します (文字列)。指定できる値は 'On'、'Off'、および 'Email' です。デフォルト値は 'Off' です。

```
node[:apache][:serversignature]
```

servertokens

レスポンスヘッダーに含まれるサーバーバージョン情報のタイプを指定します (文字列)。

- 'Full': 完全な情報。たとえば、「Server: Apache/2.4.2 (Unix) PHP/4.2.2 MyMod/1.2」のようになります。

- 'Prod': 製品名。たとえば、「Server: Apache」のようになります。
- 'Major': メジャーバージョン。たとえば、「Server: Apache/2」のようになります。
- 'Minor': メジャーバージョンとマイナーバージョン。たとえば、「Server: Apache/2.4」のようになります。
- 'Min': 最小バージョン。たとえば、「Server: Apache/2.4.2」のようになります。
- 'OS': バージョンとオペレーティングシステム。たとえば、「Server: Apache/2.4.2 (Unix)」のようになります。

デフォルト値は 'Prod' です。

```
node[:apache][:servertokens]
```

タイムアウト

Apache が I/O を待機する時間 (数値)。デフォルト値は 120 です。

```
node[:apache][:timeout]
```

traceenable

TRACE リクエストを有効にするかどうか (文字列)。指定できる値は 'On' および 'Off' です。デフォルト値は 'Off' です。

```
node[:apache][:traceenable]
```

ユーザー

ユーザー名 (文字列)。デフォルト値は次のとおりです。

- Amazon Linux および RHEL: 'apache'
- Ubuntu: 'www-data'

```
node[:apache][:user]
```

バージョン

Apache のバージョン (文字列)。デフォルト値は次のとおりです。

- Amazon Linux: 2.2
- Ubuntu 14.04 LTS: 2.4

- RHEL: 2.4

```
node[:apache][:version]
```

worker 属性

これらの属性は、ワーカープロセス設定を指定します。

startservers

起動時に作成される子サーバープロセスの数 (数値)。デフォルト値は 4 です。

```
node[:apache][:worker][:startservers]
```

maxclients

供給される同時リクエストの最大数 (数値)。デフォルト値は 1024 です。

```
node[:apache][:worker][:maxclients]
```

maxsparethreads

アイドル状態のスレッドの最大数 (数値)。デフォルト値は 192 です。

```
node[:apache][:worker][:maxsparethreads]
```

minsparethreads

アイドル状態のスレッドの最小数 (数値)。デフォルト値は 64 です。

```
node[:apache][:worker][:minsparethreads]
```

threadsperchild

子プロセスごとのスレッドの数 (数値)。デフォルト値は 64 です。

```
node[:apache][:worker][:threadsperchild]
```

maxrequestsperchild

子サーバープロセスが処理するリクエストの最大数 (数値)。デフォルト値は 10000 です。

```
node[:apache][:worker][:maxrequestsperchild]
```

deploy 属性

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

組み込みのデプロイクックブックの deploy.rb 属性ファイルは、opsworks 名前空間の以下の属性を定義します。デプロイディレクトリの詳細については、「Deploy レシピ」を参照してください。組み込み属性を上書きしてカスタム値を指定する方法の詳細については、「属性の上書き」を参照してください。

deploy_keep_releases

スタックが保存するアプリケーションデプロイの数 (数値) OpsWorks のグローバル設定。デフォルト値は 5 です。この値は、アプリケーションをロールバックできる回数を制御します。

```
node[:opsworks][:deploy_keep_releases]
```

グループ

(Linux のみ) アプリケーションのデプロイディレクトリに対する group 設定 (文字列)。デフォルト値は、インスタンスのオペレーティングシステムによって決まります。

- Ubuntu インスタンスでは、デフォルト値は www-data です。
- Nginx およびユニコーンを使用する Rails アプリケーションサーバーレイヤーのメンバーである Amazon Linux または RHEL インスタンスの場合、デフォルト値は nginx です。
- その他のすべての Amazon Linux または RHEL インスタンスの場合、デフォルト値は apache です。

```
node[:opsworks][:deploy_user][:group]
```

ユーザー

(Linux のみ) アプリケーションのデプロイディレクトリに対する user 設定 (文字列)。デフォルト値は deploy です。

```
node[:opsworks][:deploy_user][:user]
```

haproxy 属性

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> これらの属性は Linux スタックにのみ使用できます。

haproxy 属性は HAProxy サーバー設定を指定します。詳細については、「HAProxy ドキュメント」を参照してください。組み込み属性を上書きしてカスタム値を指定する方法の詳細については、「属性の上書き」を参照してください。

balance	check_interval	client_timeout
connect_timeout	default_max_connections	global_max_connections
health_check_method	health_check_url	queue_timeout
http_request_timeout	maxcon_factor_nodejs_app	maxcon_factor_nodejs_app_ssl
maxcon_factor_php_app	maxcon_factor_php_app_ssl	maxcon_factor_rails_app

maxcon_factor_rails_app_ssl	maxcon_factor_static	maxcon_factor_static_ssl
retries	server_timeout	stats_url
stats_user		

balance

サーバーを選択するためにロードバランサーが使用するアルゴリズムです (文字列)。デフォルト値は `'roundrobin'` です。その他のオプションは次のとおりです。

- 'static-rr'
- 'leastconn'
- 'source'
- 'uri'
- 'url_param'
- 'hdr(name)'
- 'rdp-cookie'
- 'rdp-cookie(name)'

これらの引数の詳細については、「balance」を参照してください。

```
node[:haproxy][:balance]
```

check_interval

ヘルスチェックの間隔 (文字列)。デフォルト値は `'10s'` です。

```
node[:haproxy][:check_interval]
```

client_timeout

クライアントを非アクティブにすることができる最大時間 (文字列)。デフォルト値は `'60s'` です。

```
node[:haproxy][:client_timeout]
```

connect_timeout

HAProxy がサーバー接続試行の成功を待機する最大時間 (文字列)。デフォルト値は '10s' です。

```
node[:haproxy][:connect_timeout]
```

default_max_connections

接続の最大数のデフォルト値 (文字列)。デフォルト値は '80000' です。

```
node[:haproxy][:default_max_connections]
```

global_max_connections

接続の最大数 (文字列)。デフォルト値は '80000' です。

```
node[:haproxy][:global_max_connections]
```

health_check_method

ヘルスチェックの方法 (文字列)。デフォルト値は 'OPTIONS' です。

```
node[:haproxy][:health_check_method]
```

health_check_url

サーバの状態を確認するために使用される URL パス (文字列)。デフォルト値は '/' です。

```
node[:haproxy][:health_check_url ]
```

queue_timeout

無料接続を待機する最大時間 (文字列)。デフォルト値は '120s' です。

```
node[:haproxy][:queue_timeout]
```

http_request_timeout

HAProxy が完全な HTTP リクエストを待機する最大時間 (文字列)。デフォルト値は '30s' です。

```
node[:haproxy][:http_request_timeout]
```

retries

サーバー接続が失敗した後の再試行の数 (文字列)。デフォルト値は `'3'` です。

```
node[:haproxy][:retries]
```

server_timeout

クライアントを非アクティブにすることができる最大時間 (文字列)。デフォルト値は `'60s'` です。

```
node[:haproxy][:server_timeout]
```

stats_url

統計ページの URL パス (文字列)。デフォルト値は `'/haproxy?stats'` です。

```
node[:haproxy][:stats_url]
```

stats_user

統計ページのユーザー名 (文字列)。デフォルト値は `'opsworks'` です。

```
node[:haproxy][:stats_user]
```

`maxcon` 属性は、HAProxy がバックエンドに対して許可する最大接続数の計算に使用される負荷要因の乗数を表します。たとえば、`backend`値が 4 の小さなインスタンスに Rails アプリケーションサーバーがあるとします。つまり、スタックはそのインスタンスに 4 OpsWorks つの Rails プロセスを設定します。`maxcon_factor_rails_app` のデフォルト値の 7 を使用した場合、HAProxy は Rails サーバーに対する 28 個 (4 x 7) の接続を処理します。

maxcon_factor_nodejs_app

Node.js アプリケーションサーバーの maxcon 要素 (数値)。デフォルト値は `10` です。

```
node[:haproxy][:maxcon_factor_nodejs_app]
```

maxcon_factor_nodejs_app_ssl

SSL を使用する Node.js アプリケーションサーバーの maxcon 要素 (数値)。デフォルト値は 10 です。

```
node[:haproxy][:maxcon_factor_nodejs_app_ssl]
```

maxcon_factor_php_app

PHP アプリケーションサーバーの maxcon 要素 (数値)。デフォルト値は 10 です。

```
node[:haproxy][:maxcon_factor_php_app]
```

maxcon_factor_php_app_ssl

SSL を使用する PHP アプリケーションサーバーの maxcon 要素 (数値)。デフォルト値は 10 です。

```
node[:haproxy][:maxcon_factor_php_app_ssl]
```

maxcon_factor_rails_app

Rails アプリケーションサーバーの maxcon 要素 (数値)。デフォルト値は 7 です。

```
node[:haproxy][:maxcon_factor_rails_app]
```

maxcon_factor_rails_app_ssl

SSL を使用する Rails アプリケーションサーバーの maxcon 要素 (数値)。デフォルト値は 7 です。

```
node[:haproxy][:maxcon_factor_rails_app_ssl]
```

maxcon_factor_static

静的ウェブサーバーの maxcon 要素 (数値)。デフォルト値は 15 です。

```
node[:haproxy][:maxcon_factor_static]
```

maxcon_factor_static_ssl

SSL を使用する静的ウェブサーバーの maxcon 要素 (数値)。デフォルト値は 15 です。

```
node[:haproxy][:maxcon_factor_static_ssl]
```

memcached 属性

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> これらの属性は Linux スタックにのみ使用できます。

memcached 属性は Memcached サーバー設定を指定します。組み込み属性を上書きしてカスタム値を指定する方法の詳細については、「属性の上書き」を参照してください。

メモリ	max_connections	pid_file
port	start_command	stop_command
ユーザー		

メモリ

使用する最大メモリ (MB 単位) (数値)。デフォルト値は 512 です。

```
node[:memcached][:memory]
```

max_connections

接続の最大数 (文字列)。デフォルト値は '4096' です。

```
node[:memcached][:max_connections]
```

pid_file

デーモンのプロセス ID を含むファイル (文字列)。デフォルト値は 'var/run/memcached.pid' です。

```
node[:memcached][:pid_file]
```

port

リッスンするポート (数値)。デフォルト値は 11211 です。

```
node[:memcached][:port]
```

start_command

開始コマンド (文字列)。デフォルト値は '/etc/init.d/memcached start' です。

```
node[:memcached][:start_command]
```

stop_command

停止コマンド (文字列)。デフォルト値は '/etc/init.d/memcached stop' です。

```
node[:memcached][:stop_command]
```

ユーザー

ユーザー (文字列)。デフォルト値は 'nobody' です。

```
node[:memcached][:user]
```

mysql 属性

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソ

リューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> これらの属性は Linux スタックにのみ使用できます。

mysql 属性は MySQL マスター設定を指定します。詳細については、「サーバーシステム変数」を参照してください。組み込み属性を上書きしてカスタム値を指定する方法の詳細については、「属性の上書き」を参照してください。

basedir	bind_address	クライアント
conf_dir	confd_dir	datadir
grants_path	mysql_bin	mysqladmin_bin
pid_file	port	root_group
server_root_password	ソケット	tunable 属性

basedir

ベースディレクトリ (文字列)。デフォルト値は `'/usr'` です。

```
node[:mysql][:basedir]
```

bind_address

MySQL がリッスンするアドレス (文字列)。デフォルト値は `'0.0.0.0'` です。

```
node[:mysql][:bind_address]
```

クライアント

クライアントのリスト (文字列のリスト)。

```
node[:mysql][:clients]
```

conf_dir

設定ファイルを含むディレクトリ (文字列)。デフォルト値は次のとおりです。

- Amazon Linux および RHEL: '/etc'
- Ubuntu: '/etc/mysql'

```
node[:mysql][:conf_dir]
```

confd_dir

追加の設定ファイルを含むディレクトリ (文字列)。デフォルト値は '/etc/mysql/conf.d' です。

```
node[:mysql][:confd_dir]
```

datadir

データディレクトリ (文字列)。デフォルト値は '/var/lib/mysql' です。

```
node[:mysql][:datadir]
```

grants_path

許可のテーブルの場所 (文字列)。デフォルト値は '/etc/mysql_grants.sql' です。

```
node[:mysql][:grants_path]
```

mysql_bin

mysql バイナリの場所 (文字列)。デフォルト値は '/usr/bin/mysql' です。

```
node[:mysql][:mysql_bin]
```

mysqladmin_bin

mysqladmin の場所 (文字列)。デフォルト値は '/usr/bin/mysqladmin' です。

```
node[:mysql][:mysqladmin_bin]
```

pid_file

デーモンのプロセス ID を含むファイル (文字列)。デフォルト値は `'/var/run/mysqld/mysqld.pid'` です。

```
node[:mysql][:pid_file]
```

port

サーバーがリッスンするポート (数値)。デフォルト値は `3306` です。

```
node[:mysql][:port]
```

root_group

ルートグループ (文字列)。デフォルト値は `'root'` です。

```
node[:mysql][:root_group]
```

server_root_password

サーバーのルートパスワード (文字列)。デフォルト値はランダムに生成されます。

```
node[:mysql][:server_root_password]
```

ソケット

ソケットファイルの場所 (文字列)。デフォルト値は `'/var/lib/mysql/mysql.sock'` です。デフォルト値は次のとおりです。

- Amazon Linux および RHEL: `'/var/lib/mysql/mysql.sock'`
- Ubuntu: `'/var/run/mysqld/mysqld.sock'`

```
node[:mysql][:socket]
```

tunable 属性

調整可能な属性はパフォーマンス調整に使用されます。

back_log	innodb_additional_mem_pool_size	innodb_buffer_pool_size

innodb_flush_log_at_trx_commit	innodb_lock_wait_timeout	key_buffer
log_slow_queries	long_query_time	max_allowed_packet
max_connections	max_heap_table_size	net_read_timeout
net_write_timeout	query_cache_limit	query_cache_size
query_cache_type	thread_cache_size	thread_stack
wait_timeout	table_cache	

back_log

未処理のリクエストの最大数 (文字列)。デフォルト値は '128' です。

```
node[:mysql][:tunable][:back_log]
```

innodb_additional_mem_pool_size

Innodb が内部データ構造を保存するために使用するプールのサイズ (文字列)。デフォルト値は '20M' です。

```
node[:mysql][:tunable][:innodb_additional_mem_pool_size]
```

innodb_buffer_pool_size

Innodb バッファープールサイズ (文字列)。属性値は OpsWorks スタックによって設定され、インスタンスタイプによって異なりますが、カスタム JSON またはカスタム属性ファイルを使用して上書きできます。

```
node[:mysql][:tunable][:innodb_buffer_pool_size]
```

innodb_flush_log_at_trx_commit

Innodb がログバッファーをフラッシュする頻度 (文字列)。デフォルト値は '2' です。詳細については、「innodb_flush_log_at_trx_commit」を参照してください。

```
node[:mysql][:tunable][:innodb_flush_log_at_trx_commit]
```

innodb_lock_wait_timeout

Innodb トランザクションが行ロックを待機する最大時間 (秒数) (文字列)。デフォルト値は '50' です。

```
node[:mysql][:tunable][:innodb_lock_wait_timeout]
```

key_buffer

インデックスバッファーサイズ (文字列)。デフォルト値は '250M' です。

```
node[:mysql][:tunable][:key_buffer]
```

log_slow_queries

スロークエリのログファイルの場所 (文字列)。デフォルト値は '/var/log/mysql/mysql-slow.log' です。

```
node[:mysql][:tunable][:log_slow_queries]
```

long_query_time

クエリを長いクエリとして指定するための時間 (秒) (文字列)。デフォルト値は '1' です。

```
node[:mysql][:tunable][:long_query_time]
```

max_allowed_packet

許容される最大パケットサイズ (文字列)。デフォルト値は '32M' です。

```
node[:mysql][:tunable][:max_allowed_packet]
```

max_connections

同時クライアント接続の最大数 (文字列)。デフォルト値は '2048' です。

```
node[:mysql][:tunable][:max_connections]
```

max_heap_table_size

ユーザーが作成した MEMORY テーブルの最大サイズ (文字列)。デフォルト値は '32M' です。

```
node[:mysql][:tunable][:max_heap_table_size]
```

net_read_timeout

接続からの追加のデータを待機する時間 (秒) (文字列) デフォルト値は '30' です。

```
node[:mysql][:tunable][:net_read_timeout]
```

net_write_timeout

接続に書き込まれるブロックを待機する時間 (秒) (文字列)。デフォルト値は '30' です。

```
node[:mysql][:tunable][:net_write_timeout]
```

query_cache_limit

キャッシュした各クエリの最大サイズ (文字列)。デフォルト値は '2M' です。

```
node[:mysql][:tunable][:query_cache_limit]
```

query_cache_size

クエリのキャッシュのサイズ (文字列)。デフォルト値は '128M' です。

```
node[:mysql][:tunable][:query_cache_size]
```

query_cache_type

クエリのキャッシュのタイプ (文字列)。指定できる値は次のとおりです。

- '0': キャッシュなし、またはキャッシュしたデータの取得なし。
- '1': SELECT SQL_NO_CACHE で開始されないキャッシュのステートメント。
- '2': SELECT SQL_CACHE で開始されるキャッシュのステートメント。

デフォルト値は '1' です。

```
node[:mysql][:tunable][:query_cache_type]
```

thread_cache_size

再利用のためにキャッシュされるクライアントのスレッドの数 (文字列)。デフォルト値は '8' です。

```
node[:mysql][:tunable][:thread_cache_size]
```

thread_stack

各スレッドのスタックのサイズ (文字列)。デフォルト値は '192K' です。

```
node[:mysql][:tunable][:thread_stack]
```

wait_timeout

非対話形式の接続で待機する時間 (秒)。デフォルト値は '180' です (文字列)。

```
node[:mysql][:tunable][:wait_timeout]
```

table_cache

開いたテーブルの数 (文字列)。デフォルト値は '2048' です。

```
node[:mysql][:tunable][:table_cache]
```

nginx 属性

Important

この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> これらの属性は Linux スタックにのみ使用できます。

nginx 属性は Nginx 設定を指定します。詳細については、「ディレクティブインデックス」を参照してください。組み込み属性を上書きしてカスタム値を指定する方法の詳細については、「属性の上書き」を参照してください。

バイナリ	dir	gzip
gzip_comp_level	gzip_disable	gzip_http_version
gzip_proxied	gzip_static	gzip_types
gzip_vary	keepalive	keepalive_timeout
log_dir	ユーザー	server_names_hash_bucket_size
worker_processes	worker_connections	

バイナリ

Nginx バイナリの場所 (文字列)。デフォルト値は `'/usr/sbin/nginx'` です。

```
node[:nginx][:binary]
```

dir

設定ファイルなどのファイルの場所 (文字列)。デフォルト値は `'/etc/nginx'` です。

```
node[:nginx][:dir]
```

gzip

gzip 圧縮が有効であるかどうか (文字列)。指定できる値は `'on'` および `'off'` です。デフォルト値は `'on'` です。

> **Warning**
>
> 圧縮によってセキュリティリスクが生じる可能性があります。圧縮を完全に無効にするには、この属性を次のように設定します。
>
> ```
> node[:nginx][:gzip] = 'off'
> ```

```
node[:nginx][:gzip]
```

gzip_comp_level

圧縮レベルは、1～9 の値域を定めることができ、1 は最小圧縮 (文字列)に対応します。デフォルト値は '2' です。

```
node[:nginx][:gzip_comp_level]
```

gzip_disable

指定したユーザーエージェントに対して gzip 圧縮を無効にします (文字列)。値は正規表現で、デフォルト値は 'MSIE [1-6].(?!.*SV1)' です。

```
node[:nginx][:gzip_disable]
```

gzip_http_version

指定した HTTP バージョンに対して gzip 圧縮を有効にします (文字列)。デフォルト値は '1.0' です。

```
node[:nginx][:gzip_http_version]
```

gzip_proxied

プロキシリクエストへのレスポンスを圧縮するかどうか、およびその方法。次のいずれかの値になります (文字列)。

- 'off': プロキシされたリクエストを圧縮しない
- 'expired': 有効期限切れヘッダーでキャッシングが妨げられる場合は圧縮する

- 'no-cache': キャッシュ制御ヘッダーが「no-cache」に設定されている場合は圧縮する
- 'no-store': キャッシュ制御ヘッダーが「no-store」に設定されている場合は圧縮する
- 'private': のキャッシュ制御ヘッダーが「private」に設定されている場合は圧縮する
- 'no_last_modified': [Last-Modified] が設定されていない場合は圧縮する
- 'no_etag': リクエストに ETag ヘッダーがない場合は圧縮する
- 'auth': リクエストに認可ヘッダーが含まれる場合は圧縮する
- 'any': すべてのプロキシされたリクエストを圧縮する

デフォルト値は 'any' です。

```
node[:nginx][:gzip_proxied]
```

gzip_static

gzip 静的モジュールが有効であるかどうか (文字列)。指定できる値は 'on' および 'off' です。デフォルト値は 'on' です。

```
node[:nginx][:gzip_static]
```

gzip_types

圧縮する MIME タイプのリスト (文字列のリスト)。デフォルト値は ['text/plain', 'text/html', 'text/css', 'application/x-javascript', 'text/xml', 'application/xml', 'application/xml+rss', 'text/javascript'] です。

```
node[:nginx][:gzip_types]
```

gzip_vary

Vary:Accept-Encoding レスポンスヘッダーを有効にするかどうか (文字列)。指定できる値は 'on' および 'off' です。デフォルト値は 'on' です。

```
node[:nginx][:gzip_vary]
```

keepalive

キープアライブ接続を有効にするかどうか (文字列)。指定できる値は 'on' および 'off' です。デフォルト値は 'on' です。

```
node[:nginx][:keepalive]
```

keepalive_timeout

キープアライブ接続を開いたままにする最大時間 (秒) (数値)。デフォルト値は 65 です。

```
node[:nginx][:keepalive_timeout]
```

log_dir

ログファイルの場所 (文字列)。デフォルト値は '/var/log/nginx' です。

```
node[:nginx][:log_dir]
```

ユーザー

ユーザー (文字列)。デフォルト値は次のとおりです。

- Amazon Linux および RHEL: 'www-data'
- Ubuntu: 'nginx'

```
node[:nginx][:user]
```

server_names_hash_bucket_size

32、64、または 128 に設定できるサーバー名のハッシュテーブルのバケットサイズ (数値)。デフォルト値は 64 です。

```
node[:nginx][:server_names_hash_bucket_size]
```

worker_processes

ワーカープロセスの数 (数値)。デフォルト値は 10 です。

```
node[:nginx][:worker_processes]
```

worker_connections

ワーカー接続の最大数 (数値)。デフォルト値は 1024 です。クライアントの最大数は worker_processes * worker_connections に設定されます。

```
node[:nginx][:worker_connections]
```

opsworks_berkshelf 属性

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> これらの属性は Linux スタックにのみ使用できます。

opsworks_berkshelf 属性は Berkshelf 設定を指定します。詳細については「Berkshelf」を参照してください。組み込み属性を上書きしてカスタム値を指定する方法の詳細については、「属性の上書き」を参照してください。

デバッグ

Chef ログに Berkshelf デバッグ情報を含めるかどうかを指定します (ブール値)。デフォルト値は `false` です。

```
node['opsworks_berkshelf]['debug']
```

opsworks_java 属性

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS

re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> これらの属性は Linux スタックにのみ使用できます。

opsworks_java 属性は Tomcat サーバー設定を指定します。詳細については、「Apache Tomcat 設定リファレンス」を参照してください。組み込み属性を上書きしてカスタム値を指定する方法の詳細については、「属性の上書き」を参照してください。

datasources	java_app_server_version	java_shared_lib_dir
jvm_pkg 属性	custom_pkg_location_url_debian	java_home_basedir
custom_pkg_location_url_rhel	use_custom_pkg_location	jvm_options
jvm_version	tomcat 属性	

datasources

JNDI リソース名を定義する属性のセット (文字列)。この属性を使用する方法の詳細については、「バックエンドデータベースでの JSP アプリケーションのデプロイ」を参照してください。デフォルト値は空のハッシュです。アプリケーションの短縮名と JNDI 名とのカスタムマッピングによって値を入力できます。詳細については、「バックエンドデータベースでの JSP アプリケーションのデプロイ」を参照してください。

```
node['opsworks_java']['datasources']
```

java_app_server_version

Java アプリケーションサーバーバージョン (数値)。デフォルト値は 7 です。この属性を上書きしてバージョン 6 を指定することができます。デフォルトではない JDK をインストールしている場合、この属性は無視されます。

```
node['opsworks_java']['java_app_server_version']
```

java_shared_lib_dir

Java 共有ライブラリのディレクトリ (文字列)。デフォルト値は `/usr/share/java` です。

```
node['opsworks_java']['java_shared_lib_dir']
```

jvm_pkg 属性

デフォルトではない JDK をインストールするために上書きできる属性のセット。

use_custom_pkg_location

OpenJDK の代わりにカスタム JDK をインストールするかどうか (ブール)。デフォルト値は `false` です。

```
node['opsworks_java']['jvm_pkg']['use_custom_pkg_location']
```

custom_pkg_location_url_debian

Ubuntu インスタンスにインストールする JDK パッケージの場所 (文字列)。デフォルト値は `'http://aws.amazon.com/'` です。これは単なる初期値であり、特別な意味はありません。デフォルトではない JDK をインストールする場合は、この属性を上書きして適切な URL に設定する必要があります。

```
node['opsworks_java']['jvm_pkg']['custom_pkg_location_url_debian']
```

custom_pkg_location_url_rhel

Amazon Linux および RHEL インスタンスにインストールする JDK パッケージの場所 (文字列)。デフォルト値は `'http://aws.amazon.com/'` です。これは単なる初期値であり、特別な意味はありません。デフォルトではない JDK をインストールする場合は、この属性を上書きして適切な URL に設定する必要があります。

```
node['opsworks_java']['jvm_pkg']['custom_pkg_location_url_rhel']
```

java_home_basedir

JDK パッケージの抽出先となるディレクトリ (文字列)。デフォルト値は /usr/local です。この設定を RPM パッケージに指定する必要はありません。パッケージには完全なディレクトリ構造が含まれます。

```
node['opsworks_java']['jvm_pkg']['java_home_basedir']
```

jvm_options

ヒープサイズなどの設定を指定できる JVM コマンドラインオプション (文字列)。オプションの一般的な設定は -Djava.awt.headless=true -Xmx128m -XX:+UseConcMarkSweepGC です。デフォルト値にオプションはありません。

```
node['opsworks_java']['jvm_options']
```

jvm_version

OpenJDK バージョン (数値)。デフォルト値は 7 です。この属性を上書きして OpenJDK バージョン 6 を指定することができます。デフォルトではない JDK をインストールしている場合、この属性は無視されます。

```
node['opsworks_java']['jvm_version']
```

tomcat 属性

デフォルトの Tomcat 設定をインストールするために上書きできる属性のセット。

ajp_port	apache_tomcat_bind_mod	apache_tomcat_bind_path
auto_deploy	connection_timeout	mysql_connector_jar
port	secure_port	shutdown_port
threadpool_max_threads	threadpool_min_spare_threads	unpack_wars
uri_encoding	use_ssl_connector	use_threadpool

userdatabase_pathname		

ajp_port

AJP ポート (数値)。デフォルト値は 8009 です。

```
node['opsworks_java']['tomcat]['ajp_port']
```

apache_tomcat_bind_mod

プロキシモジュール (文字列)。デフォルト値は proxy_http です。この属性を上書きして AJP プロキシモジュールを指定することができます (proxy_ajp)。

```
node['opsworks_java']['tomcat]['apache_tomcat_bind_mod']
```

apache_tomcat_bind_path

Apache Tomcat のバインドパス (文字列)。デフォルト値は / です。この属性を上書きしないでください。バインドパスを変更すると、アプリケーションの動作が停止する場合があります。

```
node['opsworks_java']['tomcat]['apache_tomcat_bind_path']
```

auto_deploy

自動デプロイするかどうか (ブール)。デフォルト値は true です。

```
node['opsworks_java']['tomcat]['auto_deploy']
```

connection_timeout

接続タイムアウト (ミリ秒) (数値)。デフォルト値は 2000020 秒です。

```
node['opsworks_java']['tomcat]['connection_timeout']
```

mysql_connector_jar

MySQL コネクターライブラリの JAR ファイル (文字列)。デフォルト値は mysql-connector-java.jar です。

```
node['opsworks_java']['tomcat]['mysql_connector_jar']
```

port

標準ポート (数値)。デフォルト値は 8080 です。

```
node['opsworks_java']['tomcat]['port']
```

secure_port

安全なポート (数値)。デフォルト値は 8443 です。

```
node['opsworks_java']['tomcat]['secure_port']
```

shutdown_port

シャットダウンポート (数値)。デフォルト値は 8005 です。

```
node['opsworks_java']['tomcat]['shutdown_port']
```

threadpool_max_threads

スレッドプールのスレッドの最大数 (数値)。デフォルト値は 150 です。

```
node['opsworks_java']['tomcat]['threadpool_max_threads']
```

threadpool_min_spare_threads

スレッドプールの予備のスレッドの最小数 (数値)。デフォルト値は 4 です。

```
node['opsworks_java']['tomcat]['threadpool_min_spare_threads']
```

unpack_wars

WAR ファイルを解凍するかどうか (ブール値)。デフォルト値は true です。

```
node['opsworks_java']['tomcat]['unpack_wars']
```

uri_encoding

URI エンコード (文字列)。デフォルト値は UTF-8 です。

```
node['opsworks_java']['tomcat]['uri_encoding']
```

use_ssl_connector

SSL コネクターを使用するかどうか (ブール値)。デフォルト値は false です。

```
node['opsworks_java']['tomcat]['use_ssl_connector']
```

use_threadpool

スレッドプールを使用するかどうか (ブール値)。デフォルト値は false です。

```
node['opsworks_java']['tomcat]['use_threadpool']
```

userdatabase_pathname

ユーザーデータベースのパス名 (文字列)。デフォルト値は conf/tomcat-users.xml です。

```
node['opsworks_java']['tomcat]['userdatabase_pathname']
```

passenger_apache2 属性

Important

この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Note

これらの属性は Linux スタックにのみ使用できます。

passenger_apache2 属性は Phusion Passenger 設定を指定します。詳細については、「Phusion Passenger ユーザーガイド、Apache バージョン」を参照してください。組み込み属性を上書きしてカスタム値を指定する方法の詳細については、「属性の上書き」を参照してください。

friendly_error_pages	gem_bin	gems_path
high_performance_mode	root_path	max_instances_per_app
max_pool_size	max_requests	module_path
pool_idle_time	rails_app_spawner_idle_time	rails_framework_spawner_idle_time
rails_spawn_method	ruby_bin	ruby_wrapper_bin
stat_throttle_rate	バージョン	

friendly_error_pages

アプリケーションが起動に失敗した場合に、わかりやすいエラーページを表示するかどうかを指定します (文字列)。この属性は、'on' または 'off' に設定できます。デフォルト値は 'off' です。

```
node[:passenger][:friendly_error_pages]
```

gem_bin

Gem バイナリの場所 (文字列)。デフォルト値は '/usr/local/bin/gem' です。

```
node[:passenger][:gem_bin]
```

gems_path

gems パス (文字列)。デフォルト値は、Ruby のバージョンによって異なります。例えば:

- Ruby バージョン 1.8: '/usr/local/lib/ruby/gems/1.8/gems'
- Ruby バージョン 1.9: '/usr/local/lib/ruby/gems/1.9.1/gems'

```
node[:passenger][:gems_path]
```

high_performance_mode

Passenger の高パフォーマンスモードを使用するかどうか (文字列)。指定できる値は 'on' および 'off' です。デフォルト値は 'off' です。

```
node[:passenger][:high_performance_mode ]
```

root_path

Passenger ルートディレクトリ (文字列)。デフォルト値は、Ruby および Passenger のバージョンによって異なります。Chef 構文では、この値は "#{node[:passenger][:gems_path]}/passenger-#{passenger[:version]}" です。

```
node[:passenger][:root_path]
```

max_instances_per_app

アプリケーションごとのアプリケーションプロセスの最大数 (数値)。デフォルト値は 0 です。詳細については「PassengerMaxInstancesPerApp」を参照してください。

```
node[:passenger][:max_instances_per_app]
```

max_pool_size

アプリケーションプロセッサの最大数 (数値)。デフォルト値は 8 です。詳細については、「PassengerMaxPoolSize」を参照してください。

```
node[:passenger][:max_pool_size]
```

max_requests

リクエストの最大数 (数値)。デフォルト値は 0 です。

```
node[:passenger][:max_requests]
```

module_path

モジュールのパス (文字列)。デフォルト値は次のとおりです。

- Amazon Linux および RHEL: "#{node['apache']['libexecdir']}/mod_passenger.so"

- Ubuntu: "#{passenger[:root_path]}/ext/apache2/mod_passenger.so"

```
node[:passenger][:module_path]
```

pool_idle_time

アプリケーションプロセスをアイドル状態にすることができる最大時間 (秒) (数値)。デフォルト値は 14400 (4 時間) です。詳細については、「PassengerPoolIdleTime」を参照してください。

```
node[:passenger][:pool_idle_time]
```

rails_app_spawner_idle_time

Rails アプリケーションのスポナーの最大アイドル時間 (数値)。この属性をゼロに設定した場合、アプリケーションのスポナーはタイムアウトになりません。デフォルト値は 0 です。詳細については、「Spawning Methods Explained」を参照してください。

```
node[:passenger][:rails_app_spawner_idle_time]
```

rails_framework_spawner_idle_time

Rails フレームワークのスポナーの最大アイドル時間 (数値)。この属性がゼロに設定されている場合、フレームワークのスポナーはタイムアウトになりません。デフォルト値は 0 です。詳細については、「Spawning Methods Explained」を参照してください。

```
node[:passenger][:rails_framework_spawner_idle_time]
```

rails_spawn_method

Rails のスポーンの手法 (文字列)。デフォルト値は 'smart-lv2' です。詳細については、「Spawning Methods Explained」を参照してください。

```
node[:passenger][:rails_spawn_method]
```

ruby_bin

Ruby バイナリの場所 (文字列)。デフォルト値は '/usr/local/bin/ruby' です。

```
node[:passenger][:ruby_bin]
```

ruby_wrapper_bin

Ruby ラッパースクリプトの場所 (文字列)。デフォルト値は '/usr/local/bin/ruby_gc_wrapper.sh' です。

```
node[:passenger][:ruby_wrapper_bin]
```

stat_throttle_rate

Passenger がファイルシステムチェックを実行するレート (数値)。デフォルト値は 5 です。これは、チェックが最大でも 5 秒ごとに実行されることを意味します。詳細については、「PassengerStatThrottleRate」を参照してください。

```
node[:passenger][:stat_throttle_rate]
```

バージョン

バージョン (文字列)。デフォルト値は '3.0.9' です。

```
node[:passenger][:version]
```

ruby 属性

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> これらの属性は Linux スタックにのみ使用できます。

ruby 属性は、アプリケーションで使用する Ruby バージョンを指定します。Ruby 2.1 でセマンティクスのバージョニングが導入されたことにより、属性の使用方法が変わったことに注意して

ください。バージョンの指定方法と例については、「Ruby のバージョン」を参照してください。OpsWorks スタックが Ruby バージョンを決定する方法の詳細については、組み込み属性ファイル ruby.rb を参照してください。組み込み属性を上書きしてカスタム値を指定する方法の詳細については、「属性の上書き」を参照してください。

full_version

完全なバージョン番号 (文字列)。この属性を上書きしないでください。代わりに [:opsworks][:ruby_version] と適切なパッチバージョン属性を使用してバージョンを指定してください。

```
[:ruby][:full_version]
```

major_version

メジャーバージョン番号 (文字列)。この属性を上書きしないでください。代わりに [:opsworks][:ruby_version] を使用してメジャーバージョンを指定してください。

```
[:ruby][:major_version]
```

minor_version

マイナーバージョン番号 (文字列)。この属性を上書きしないでください。代わりに [:opsworks][:ruby_version] を使用してマイナーバージョンを指定してください。

```
[:ruby][:minor_version]
```

patch

パッチレベル (文字列)。この属性は Ruby バージョン 2.0.0 以前で有効です。それより後の Ruby バージョンでは、patch_version 属性を使用します。

```
[:ruby][:patch]
```

パッチ番号の前に p を置く必要があります。たとえば、次のカスタム JSON を使用してパッチレベル 484 を指定します。

```
{
  "ruby":{"patch":"p484"}
}
```

patch_version

パッチの数 (文字列)。この属性は Ruby バージョン 2.1 以降で有効です。それより前の Ruby バージョンでは、patch 属性を使用します。

```
[:ruby][:patch_version]
```

pkgrelease

パッケージのリリース番号 (文字列)。

```
[:ruby][:pkgrelease]
```

unicorn 属性

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> これらの属性は Linux スタックにのみ使用できます。

unicorn 属性はユニコーン設定を指定します。詳細については、「Unicorn::Configurator」を参照してください。組み込み属性を上書きしてカスタム値を指定する方法の詳細については、「属性の上書き」を参照してください。

accept_filter	backlog	delay
tcp_nodelay	tcp_nopush	preload_app
タイムアウト	tries	バージョン

worker_processes		

accept_filter

承認フィルタの 'httpready' または 'dataready' (文字列)。デフォルト値は 'httpready' です。

```
node[:unicorn][:accept_filter]
```

backlog

キューが保持できるリクエストの最大数 (数値)。デフォルト値は 1024 です。

```
node[:unicorn][:backlog]
```

delay

ソケットのバインドの再試行を待機する時間 (秒) (数値)。デフォルト値は 0.5 です。

```
node[:unicorn][:delay]
```

preload_app

ワーカープロセスを分岐する前に、アプリケーションを事前ロードするかどうか (ブール値)。デフォルト値は true です。

```
node[:unicorn][:preload_app]
```

tcp_nodelay

TCP ソケットに対して Nagle のアルゴリズムを無効にするかどうか (ブール値)。デフォルト値は true です。

```
node[:unicorn][:tcp_nodelay]
```

tcp_nopush

TCP_CORK を有効にするかどうか (ブール値)。デフォルト値は false です。

```
node[:unicorn][:tcp_nopush]
```

タイムアウト

ワーカーが各リクエストで使用できる最大時間 (秒) (数値)。タイムアウト値を超えたワーカーは終了します。デフォルト値は `60` です。

```
node[:unicorn][:timeout]
```

tries

ソケットへのバインドの再試行の最大数 (数値)。デフォルト値は `5` です。

```
node[:unicorn][:tries]
```

バージョン

ユニコーンバージョン (文字列)。デフォルト値は `'4.7.0'` です。

```
node[:unicorn][:version]
```

worker_processes

ワーカープロセスの数 (数値)。デフォルト値は `max_pool_size` (存在する場合)、それ以外の場合は `4` です。

```
node[:unicorn][:worker_processes]
```

Linux 用 Chef 11.10 以前のバージョンのトラブルシューティング

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> トラブルシューティングの詳細については、「デバッグとトラブルシューティングのガイド」を参照してください。

Linux 用 Chef 11.10 以前のバージョンの Chef ログ

OpsWorks スタックは、各インスタンスの Chef ログを `/var/lib/aws/opsworks/chef` ディレクトリに保存します。このディレクトリにアクセスするには、sudo 権限が必要です。各実行のログは、*YYYY*-*MM*-*DD*-*HH*-*MM*-*SS*-*NN*.log という名前のファイルにあります。

詳細については、次を参照してください。

- コンソールを使用した Chef ログの表示
- CLI または API を使用した Chef ログの表示
- Chef ログの解釈
- Chef ログの一般的なエラー

他の AWS サービスでの OpsWorks スタックの使用

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックスタックで実行されているアプリケーションサーバーには、スタックと直接統合されていないさまざまな AWS OpsWorks サービスを使用できます。例えば、アプリケーションサーバがバックエンドのデータベースとしてAmazon RDS を使用することができます。このようなサービスにアクセスするための一般的な方法は、次のとおりです。

1. AWS コンソール、API、または CLI を使用して AWS サービスの作成と設定を行い、アプリケーションからサービスにアクセスするために必要となるホスト名やポートなどの設定データを記録します。
2. 1 つ以上のカスタムレシピを作成して、アプリケーションからサービスにアクセスできるように設定します。

   レシピは、「スタック設定とデプロイメント JSON」で示された属性 (レシピを実行する前にカスタム JSON で設定) から設定データを取得します。
3. アプリケーションサーバーレイヤーの Deploy ライフサイクルイベントにカスタムレシピを割り当てます。
4. 設定データ属性に適切な値を割り当てるカスタム JSON オブジェクトを作成し、これをスタック設定とデプロイメント JSON に追加します。
5. アプリケーションをスタックにデプロイします。

   デプロイメントによって実行されるカスタムレシピは、カスタム JSON で定義した設定データの値を使用して、アプリケーションからサービスにアクセスできるように設定します。

このセクションでは、 OpsWorks スタックアプリケーションサーバーがさまざまな AWS のサービスにアクセスする方法について説明します。ここでは、Chef クックブックや、レシピでスタックと設定 JSON 属性を使用してアプリケーションを設定する方法 (通常は設定ファイルを作成) について、ユーザーがすでに知識を持っていることを前提としています。知識を持っていない場合は、最初に「クックブックとレシピ」と「OpsWorks スタックのカスタマイズ」をお読みください。

トピック

- バックエンドデータストアの使用
- インメモリ key-value ストアとしての ElastiCacheRedis の使用
- Amazon S3 バケットの使用する
- スタック AWS CodePipeline での OpsWorks の使用

バックエンドデータストアの使用

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソ

リューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

アプリケーションサーバースタックには通常、バックエンドデータストアを提供するデータベースサーバーが含まれています。 OpsWorks スタックはMySQL レイヤーを介した MySQL サーバーと、Amazon Relational Database Service (Amazon RDS) レイヤーを介したいくつかのタイプのデータベースサーバーの統合サポートを提供します。ただし、アプリケーションサーバーが Amazon DynamoDB や MongoDB などの他のデータベースサーバーを使用できるようにスタックを簡単にカスタマイズできます。このトピックでは、アプリケーションサーバーを AWS データベースサーバーに接続するための基本的な手順について説明します。「Chef 11 Linux スタックの使用開始」のスタックおよびアプリケーションを使用して、PHP のアプリケーションサーバーを RDS データベースに手動で接続する方法示します。この例は Linux スタックに基づいていますが、基本的な原則は Windows スタックにも適用されます。MongoDB のデータベースサーバーをスタックに組み込む方法の例については、「、MongoDB を OpsWorks でデプロイする」を参照してください。

> **Note**
>
> このトピックでは、ちょうどいい例として Amazon RDS を使用します。ただし、スタックで Amazon RDS データベースを使用する場合、Amazon RDSレイヤーを使用する方がはるかに簡単です。

トピック

- データベース接続をセットアップする方法
- アプリケーションサーバーのインスタンスを Amazon RDS に接続する方法

データベース接続をセットアップする方法

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS

re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

カスタムレシピを使用して、アプリケーションサーバーとバックエンドデータベース間の接続をセットアップします。レシピによりアプリケーションサーバーが必要に応じて設定されます。通常、設定ファイルを作成して設定されます。レシピは、スタックがすべてのインスタンスに OpsWorks インストールするスタック設定およびデプロイ属性の一連の属性から、ホストやデータベース名などの接続データを取得します。

例えば、Chef 11 Linux スタックの使用開始 のステップ 2 は、2 つのレイヤー(それぞれに 1 つのインスタンスを含む PHP App Server および MySQL) がある MyStack という名前のスタックに基づいています。SimplePHPApp という名前のアプリケーションを PHP App Server インスタンスにデプロイし、バックエンドデータストアとして MySQL インスタンスでデータベースを使用します。アプリケーションをデプロイすると、 OpsWorks スタックによって、データベース接続情報を含むスタック設定およびデプロイ属性がインストールされます。以下の例は、JSON として表されたデータベース接続属性を示しています。

```
{
  ...
  "deploy": {
    "simplephpapp": {
      ...
      "database": {
        "reconnect": true,
        "password": null,
        "username": "root",
        "host": null,
        "database": "simplephpapp"
        ...
      },
      ...
    }
  }
}
```

属性値は OpsWorks スタックによって提供され、生成されるか、ユーザーが提供した情報に基づいています。

SimplePHPApp がデータストアにアクセスするのを許可するには、appsetup.rb という名前のカスタムレシピを レイヤーのデプロイ [lifecycle event] (ライフサイクルイベント) に割り当てることで、PHP アプリケーションサーバーと MySQL データベース間の接続を設定する必要があります。SimplePHPApp をデプロイすると、 OpsWorks Stacks は を実行しappsetup.rb、次の抜粋に示すように、接続db-connect.phpを設定する という名前の設定ファイルを作成します。

```
node[:deploy].each do |app_name, deploy|
  ...
  template "#{deploy[:deploy_to]}/current/db-connect.php" do
    source "db-connect.php.erb"
    mode 0660
    group deploy[:group]

    if platform?("ubuntu")
      owner "www-data"
    elsif platform?("amazon")
      owner "apache"
    end

    variables(
      :host =>     (deploy[:database][:host] rescue nil),
      :user =>     (deploy[:database][:username] rescue nil),
      :password => (deploy[:database][:password] rescue nil),
      :db =>       (deploy[:database][:database] rescue nil),
      :table =>    (node[:phpapp][:dbtable] rescue nil)
    )
    ...
  end
end
```

接続を特徴づける変数 host、user などには、deploy JSON's (JSON をデプロイする) [:deploy][:app_name][:database] 属性から対応する値が設定されます。わかりやすいように、この例では、urler という名前のテーブルが作成されており、そのテーブル名はクックブックの属性ファイルでは [:phpapp][:dbtable] で表されることを前提としています。

このレシピにより、PHP アプリケーションサーバーは MySQL レイヤーのメンバーだけでなく任意の MySQL データベースサーバーに実際に接続されます。別の MySQL サーバーを使用するには、[:database]属性をサーバーに適した値に設定する必要があります。これを行うには、カスタム JSON を使用します。 OpsWorks スタックは、これらの属性と値をスタック設定とデプロイ属性に組み込み、それらappsetup.rbを使用して接続を設定するテンプレートを作成します。スタック

設定およびデプロイメント JSON の上書きの詳細については、「属性の上書き」を参照してください。

アプリケーションサーバーのインスタンスを Amazon RDS に接続する方法

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このセクションでは、「Chef 11 Linux スタックの使用開始」の MyStack をカスタマイズして、PHP のアプリケーションサーバーを RDS のインスタンスに接続できるようにする方法について説明します。

トピック

- Amazon RDS MySQL データベースを作成する
- RDS データベースに接続するためにスタックをカスタマイズする

Amazon RDS MySQL データベースを作成する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Amazon RDS コンソールの起動 DB インスタンスウィザードを使用して見本としての RDS データベースを作成する準備が整いました。次の手順は、必要な詳細についての要約です。データベースを作成する方法の詳細については、『Amazon RDS の入門ガイド』を参照してください。

Amazon RDS データベースを作成するには

1. RDS データベースを初めて作成する場合は、[Get Started Now] をクリックします。それ以外の場合は、ナビゲーションペインで [RDS Dashboard] をクリックして、[Launch a DB Instance] をクリックします。
2. DB インスタンスとして [MySQL Community Edition] を選択します。
3. [本番稼働用にこのデータベースを使用する予定はありますか?] では、[このインスタンスは本番環境以外...] を選択します。この例ではこれで十分です。本稼働環境で使用する場合は、[Yes, use Multi-AZ Deployment...] を選択する必要のある場合もあります。[Next Step] をクリックします。
4. [Specify DB Details] ページで、次の設定を指定します。

   - DB Instance Class: db.t2.micro
   - Multi-AZ Deployment: No
   - ストレージ割り当て: **5** GB
   - DB インスタンス識別子: **rdsexample**
   - マスターユーザーの名前: **opsworksuser**
   - [Master Password]: 適切なパスワードを指定し、後で使用できるように記録しておきます。

   他のオプションのデフォルト設定を受け入れ、[Next Step] をクリックします。
5. [Configure Advanced Settings] ページで、以下の設定を指定します。

   - [Network & Security] で、[VPC Security Group(s)] の [phpsecgroup (VPC)] を選択します
   - [データベースの設定] セクションで、[データベースの名前] に「**rdsexampledb**」と入力します
   - [Backup] セクションで、このウォークスルーでは [Backup Retention Period] を [0] に設定します。

   他のオプションのデフォルト設定を受け入れ、[Launch DB Instance] をクリックします。
6. [View Your DB Instances] を選択して DB インスタンスのリストを表示します。
7. リストの rdsexample インスタンスを選択し、矢印をクリックしてインスタンスのエンドポイントおよびその他の詳細を表示します。後で使用できるように、エンドポイントを記録しておきます。`rdsexample.c6c8mntzhgv0.us-west-2.rds.amazonaws.com:3306` のようになります。DNS 名を記録します。ポート番号は必要ではありません。

8. MySQL Workbench などのツールを使用して `urler` データベースに `rdsexampledb` という名前のテーブルを作成するには、次の SQL コマンドを使用します。

```
CREATE TABLE urler(id INT UNSIGNED NOT NULL AUTO_INCREMENT,author VARCHAR(63) NOT
 NULL,message TEXT,PRIMARY KEY (id))
```

RDS データベースに接続するためにスタックをカスタマイズする

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

PHP アプリケーションサーバーのバックエンドデータベースとして使用するように RDS インスタンスを作成したら、Chef 11 Linux スタックの使用開始 から MyStack をカスタマイズできます。

PHP アプリケーションサーバーを RDS データベースに接続するには

1. 「」で説明されているように OpsWorks 、 スタックコンソールを開き、1 つのインスタンスを含む PHP App Server レイヤーを使用してスタックを作成し、SimplePHPApp をデプロイしますChef 11 Linux スタックの使用開始。このスタックは SimplePHPApp の version1 を使用します。これは、データベース接続を使用しません。
2. スタック設定を更新し、`appsetup.rb` レシピ、関連するテンプレートや属性ファイルを含むカスタムクックブック使用します。

   1. [Use custom Chef cookbooks] を [Yes] に設定します。
   2. [Repository type] を [Git] に、[Repository URL] を [`git://github.com/amazonwebservices/opsworks-example-cookbooks.git`] に設定します。
3. 次をスタックの [Custom Chef JSON] ボックスに追加し、`[:database]` が設定ファイルを作成するのに使用する `appsetup.rb` 属性にRDS 接続データを割り当てます。

```
{
```

```
  "deploy": {
    "simplephpapp": {
      "database": {
        "username": "opsworksuser",
        "password": "your_password",
        "database": "rdsexampledb",
        "host": "rds_endpoint",
        "adapter": "mysql"
      }
    }
  }
}
```

次の属性値を使用します。

- username: RDS インスタンスの作成時に指定したマスターユーザー名

  この例では `opsworksuser` を使用します。

- [password]: RDS のインスタンスの作成時に指定したマスターパスワード

  指定したパスワードを入力します。

- database: RDS インスタンスの作成時に作成したデータベース

  この例では `rdsexampledb` を使用します。

- host: RDS インスタンスのエンドポイント。前のセクションでインスタンスを作成した際に、RDS コンソールから取得しています。ポート番号は必要ありません。

- adapter: アダプタ

  この例の RDS インスタンスは MySQL を使用するため、[adapter] は [`mysql`] に設定されます。その他の属性とは異なり、[adapter] は [`appsetup.rb`] で使用されません。代わりに、別の構成ファイルを作成するために PHP App Server レイヤーの組み込み構成レシピにより使用されます。

4. SimplePHPApp 設定を編集して、次のように、バックエンドデータベースを使用する SimplePHPApp のバージョンを指定します。

   - Document root: このオプションを `web` に設定します。
   - Branch/Revision: このオプションを `version2` に設定します。

   残りのオプションは変更しません。

5. [Edit the PHP App Server layer] (PHP アプリケーションサーバーレイヤーを編集) し、phpapp::appsetup をレイヤーのデプロイレシピに追加することでデータベース接続を設定します。
6. SimplePHPApp の新しいバージョンをデプロイします。
7. SimplePHPApp がデプロイされるとき、[Instances] ページに進み、php-app1 インスタンスのパブリック IP アドレスをクリックして、アプリケーションを実行します。ブラウザに次のページが表示されるので、そこでテキストを入力し、それをデータベースに保存します。

> **Note**
>
> スタックに MySQL レイヤーがある場合、 OpsWorks Stacks は対応する接続データを[:database]属性に自動的に割り当てます。ただし、スタックに異なる [:database] 値を定義するカスタム JSON を割り当てると、デフォルト値は上書きされます。[:deploy] 属性は、すべてのインスタンスにインストールされているため、[:database] 属性に依存するレシピは MySQL レイヤーのデータではなくカスタム接続データを使用します。特定のアプリケーションサーバーのレイヤーがカスタム接続データを使用するようにする場合、カスタム JSON をレイヤーのデプロイイベントに割り当て、そのレイヤーにそのデプロイメントを制限します。デプロイメント属性の使用方法の詳細については、「アプリケーションのデプロイ」を参照してください。 OpsWorks スタックの組み込み属性のオーバーライドについては、「属性の上書き」を参照してください。

インメモリ key-value ストアとしての ElastiCacheRedis の使用

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> このトピックは、Linux スタックに基づいていますが、Windows スタックでも Amazon ElastiCache (ElastiCache) を使用できます。Windows インスタンスで ElastiCache を使用する方法の例については、「ElastiCache as an ASP.NET Session Store」(ASP.NET セッションストアとしての ElastiCache) を参照してください。

多くの場合、キャッシュサーバーを使用して文字列などの小さなデータ項目に対してインメモリ key-value ストアを提供することで、アプリケーションサーバーのパフォーマンスを向上させることができます。Amazon ElastiCache は、Memcached または Redis キャッシュエンジンを使用して、アプリケーションサーバーのキャッシュサポートを簡単に提供できる AWS のサービスです。OpsWorks スタックは、Memcached の組み込みサポートを提供します。ただし、Redis が要件に適している場合は、アプリケーションサーバーで ElastiCache Redis を使用するようにスタックをカスタマイズできます。

このトピックでは、Rails アプリケーションサーバーの使用を例に、Linux スタックに ElastiCache Redis キャッシュサポートを追加する基本的な手順について説明します。ここでは、適切な Ruby on Rails アプリケーションがすでにあることを前提としています。ElastiCache の詳細については、「What Is Amazon ElastiCache?」 (Amazon ElastiCache とは) を参照してください。

トピック

- ステップ 1： ElastiCache の Redis クラスターを作成します
- ステップ 2: Rails スタックをセットアップする
- ステップ 3: カスタムクックブックを作成してデプロイする
- ステップ 4: レシピをライフサイクルイベントに割り当てる

- ステップ 5: スタック設定 JSON にアクセス情報を追加する
- ステップ 6: アプリをデプロイして実行する

ステップ 1： ElastiCache の Redis クラスターを作成します

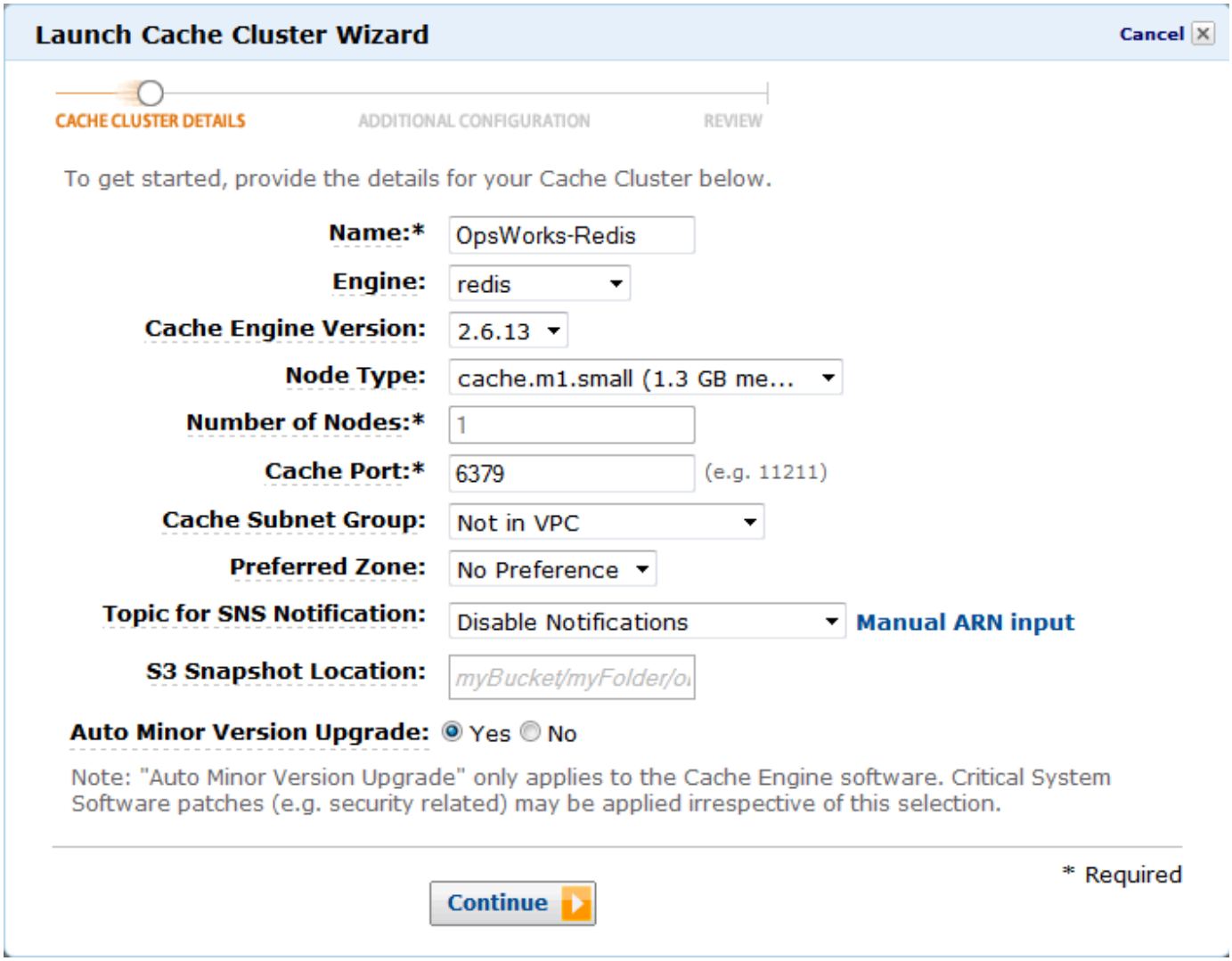
> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

ElastiCache コンソール、API または CLI を使用して、あらかじめ Amazon ElastiCache Redis クラスターを作成する必要があります。コンソールを使用してクラスターを作成する方法を以下に示します。

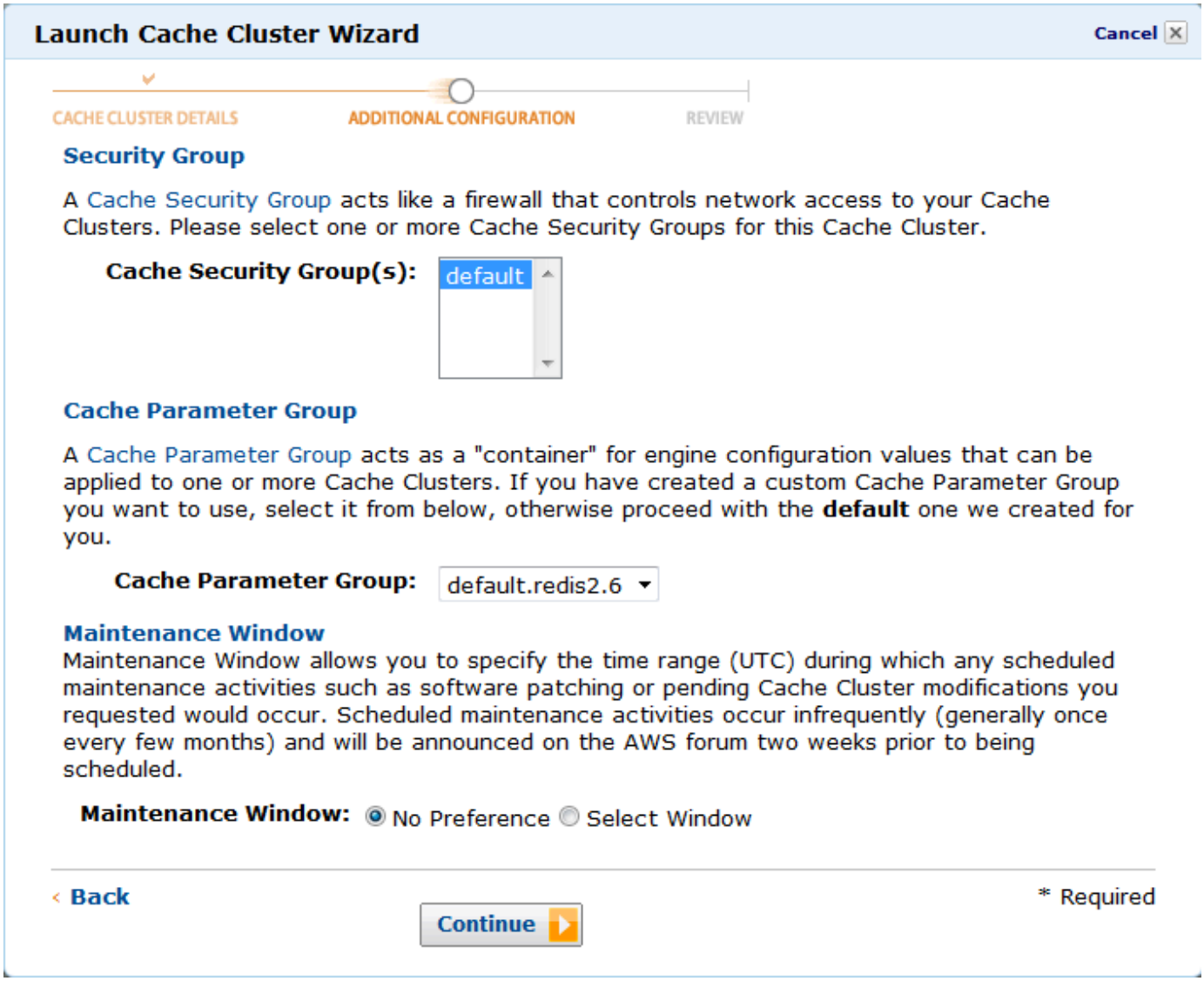
ElastiCache の Redis クラスターを作成します。

1. [ElastiCache console] (ElastiCache コンソール) に移動し、[Launch Cache Cluster] (キャッシュクラスターを起動) をクリックして Cache Cluster ウィザードを起動します。
2. [Cache Cluster Details] ページで次の操作を実行します。
   - [Name] でキャッシュサーバー名を指定します。

     この例では、OpsWorks-Redis を使用します。
   - [Engine] を [redis] に設定します。
   - [Topic for SNS Notification] を [Disable Notifications] に設定します。
   - その他の設定にはデフォルト値をそのまま使用し、[Continue] をクリックします。



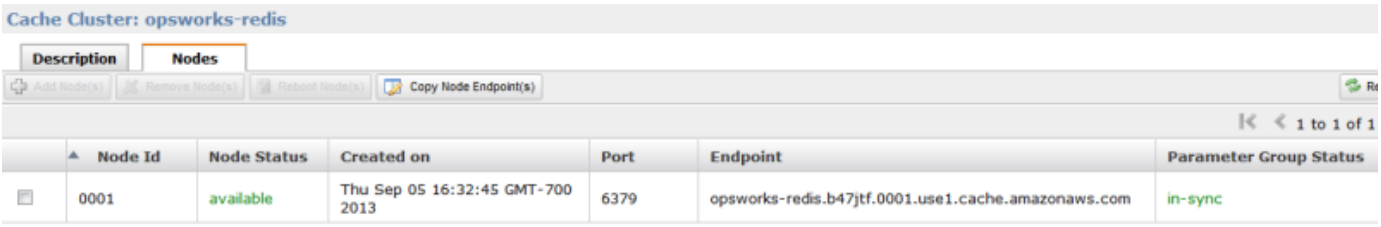
3. [Additional Configuration] ページでデフォルト値をそのまま使用し、[Continue] をクリックします。



4. [Launch Cache Cluster] をクリックしてクラスターを作成します。

> **Important**
>
> この例ではデフォルトのキャッシュセキュリティグループで十分ですが、本稼働環境で使用する場合は、環境に適したグループを作成する必要があります。詳細については、「キャッシュセキュリティグループの管理」を参照してください。

5. クラスターが起動したら、名前をクリックして詳細ページを開き、[Nodes] タブをクリックします。後で使用できるように、クラスターの [Port] と [Endpoint] の値を書き留めておきます。



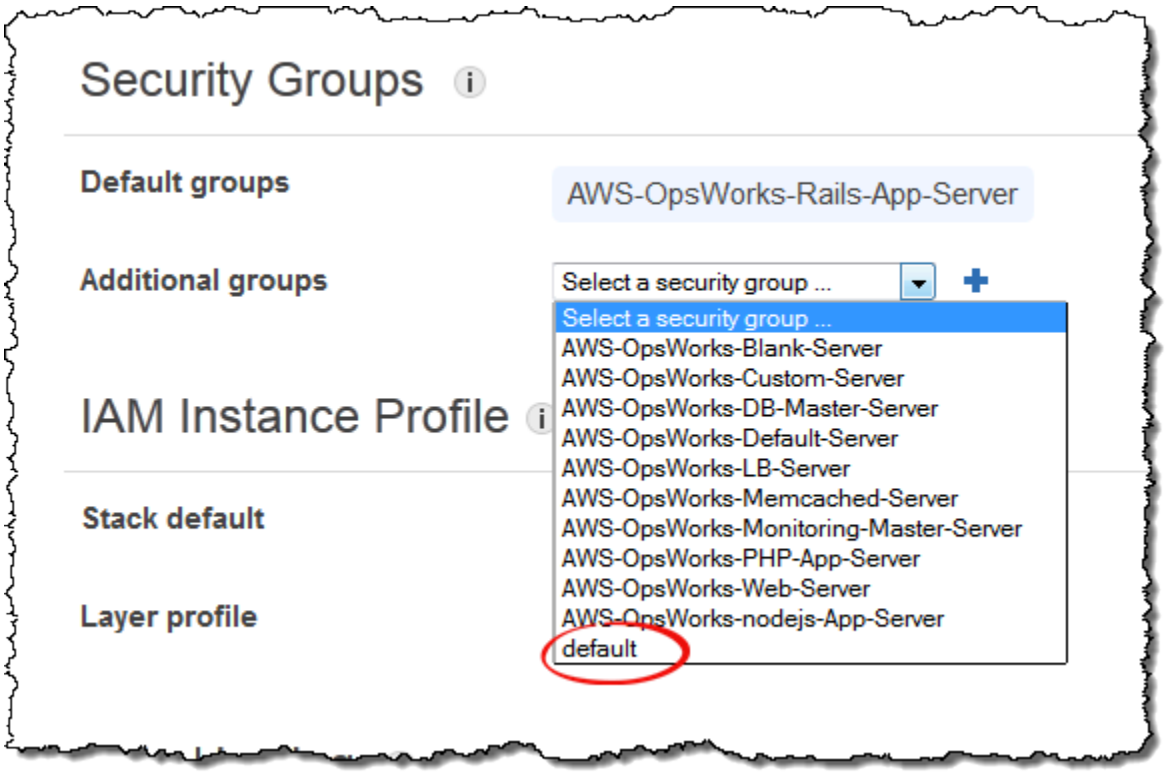
ステップ 2: Rails スタックをセットアップする

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Rails アプリケーションサーバーレイヤーをサポートするスタックの作成に加え、Rails サーバーが Redis サーバーと正常に通信できるように、レイヤーのセキュリティグループも設定する必要があります。

スタックをセットアップするには

1. 新しいスタック **RedisStack** (を参照)を作成するには、Rails アプリケーションサーバーレイヤーを追加します。両方にデフォルト設定を使用します。詳細については、「新しいスタックを作成する」および「OpsWorks レイヤーの作成」を参照してください。
2. [Layers] (レイヤー) ページで、Rails App Server に対して、[Security] (セキュリティー) をクリックし、続いて [Edit] (編集) をクリックします。
3. [Security Groups] (セキュリティグループ) セクションに移動し、ElastiCache クラスターのセキュリティグループを [Additional groups] (グループの追加) に追加します。この例では、[default] セキュリティグループを選択し、[+] をクリックしてレイヤーに追加します。次に、[Save] をクリックして新しい設定を保存します。



4. Rails アプリケーションサーバーレイヤーにインスタンスを追加し、起動します。インスタンスを追加して起動する方法の詳細については、「レイヤーへのインスタンスの追加」を参照してください。

ステップ 3: カスタムクックブックを作成してデプロイする

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

現時点では、スタックはまだ完全には機能していません。アプリケーションが Redis サーバーにアクセスできるようにする必要があります。最も柔軟性のある方法は、アクセス情報が含まれた YAML ファイルをアプリケーションの `config` サブフォルダに配置することです。そうすれば、アプリケーションはこのファイルから情報を取得できるようになります。この方法を使用すると、アプリケーションを書き直して再デプロイすることなく接続情報を変更できます。この例では、ファイルに

redis.yml という名前を付ける必要があり、次のように ElastiCache クラスターのホスト名とポートを含めます。

```
host: cache-cluster-hostname
port: cache-cluster-port
```

このファイルをサーバーに手動でコピーすることはできますが、Chef レシピを実装してファイルを生成し、すべてのサーバーで OpsWorks スタックでレシピを実行することをお勧めします。Chef レシピは、 OpsWorks スタックがパッケージのインストールや設定ファイルの作成などのタスクをインスタンスで実行するために使用する特殊な Ruby アプリケーションです。レシピはクックブックにパッケージ化されます。クックブックには、複数のレシピと関連ファイル (設定ファイルのテンプレートなど) を含めることができます。クックブックは GitHub などのリポジトリに配置されます。クックブックには標準のディレクトリ構造が必要です。カスタムクックブックリポジトリがまだない場合、これをセットアップする方法の詳細については、「クックブックリポジトリ」を参照してください。

この例では、redis-config という名前のクックブックを、次の内容でクックブックリポジトリに追加します。

```
my_cookbook_repository
  redis-config
    recipes
      generate.rb
    templates
      default
        redis.yml.erb
```

recipes フォルダには、次のように generate.rb からアプリケーションの設定ファイルを生成する、redis.yml.erb というレシピが保存されています。

```
node[:deploy].each do |app_name, deploy_config|
  # determine root folder of new app deployment
  app_root = "#{deploy_config[:deploy_to]}/current"

  # use template 'redis.yml.erb' to generate 'config/redis.yml'
  template "#{app_root}/config/redis.yml" do
    source "redis.yml.erb"
    cookbook "redis-config"
```

```
    # set mode, group and owner of generated file
    mode "0660"
    group deploy_config[:group]
    owner deploy_config[:user]

    # define variable “@redis” to be used in the ERB template
    variables(
      :redis => deploy_config[:redis] || {}
    )

    # only generate a file if there is Redis configuration
    not_if do
      deploy_config[:redis].blank?
    end
  end
end
```

レシピは OpsWorks 、各インスタンスにインストールされ、スタックとデプロイされたアプリケーションに関する詳細情報を含む スタックスタック設定およびデプロイ JSON オブジェクトのデータによって異なります。このオブジェクトの deploy ノードの構造は次のとおりです。

```
{
   ...
  "deploy": {
    "app1": {
      "application" : "short_name",
      ...
    }
    "app2": {
      ...
    }
    ...
  }
}
```

deploy ノードには、デプロイする各アプリケーションに対応し、そのアプリケーションの短縮名が付けられた一連の埋め込み JSON オブジェクトが含まれます。各アプリケーションオブジェクトには、アプリケーションの設定 (ドキュメントのルートやアプリケーションタイプなど) を定義する一連の属性が含まれます。deploy 属性のリストについては、「deploy 属性」を参照してください。レ

シピでは、Chef の属性構文を使用して、スタック設定およびデプロイメント JSON の値を表すことができます。例えば、[:deploy][:app1][:application] は、app1 アプリケーションの短縮名を表します。

[:deploy] の各アプリケーションでは、レシピによって関連するコードブロックが実行されます。コードブロックでは、deploy_config がアプリケーション属性を表します。レシピでは、まず app_root をアプリケーションのルートディレクトリ [:deploy][:*app_name*][:deploy_to]/current に設定します。次に、Chef のテンプレートリソースを使用して redis.yml.erb から設定ファイルを生成し、app_root/config に配置します。

通常、設定ファイルは、Chef 属性によって定義された設定が多数含まれたテンプレートから作成されます。属性を使用すると、テンプレートファイルを書き換えるのではなく、後述するカスタム JSON を使用して設定を変更できます。redis.yml.erb テンプレートには、次の行が含まれます。

```
host: <%= @redis[:host] %>
port: <%= @redis[:port] || 6379 %>
```

<%... %> 要素は、属性値を表すプレースホルダーです。

- <%= @redis[:host] %> は、キャッシュクラスターのホスト名である redis[:host] の値を表します。
- <%= @redis[:port] || 6379 %> は、redis[:port] の値を表します。この属性が定義されていない場合は、デフォルトのポート値である 6379 が使用されます。

template リソースは、次のように機能します。

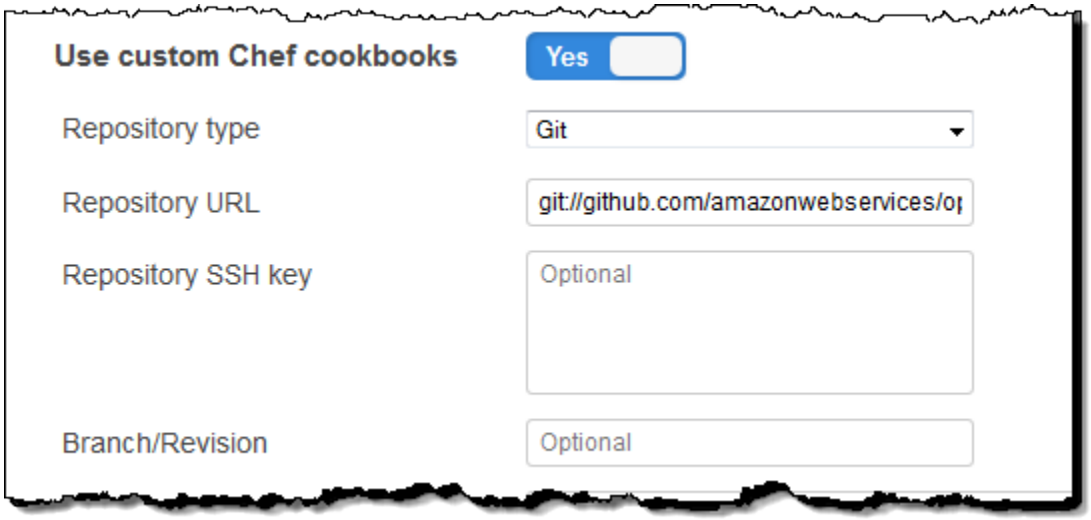
- source と cookbook は、それぞれテンプレート名とクックブック名を指定します。
- mode、group、および owner は、設定ファイルにアプリケーションと同じアクセス権を与えます。
- variables セクションでは、テンプレートで使用する @redis 変数をアプリケーションの [:redis] 属性値に設定します。

  [:redis] 属性の値は、後述するカスタム JSON を使用して設定されます。これは、アプリケーションの標準属性ではありません。
- not_if ディレクティブは、設定ファイルがすでに存在する場合にレシピで設定ファイルを生成しないことを示します。

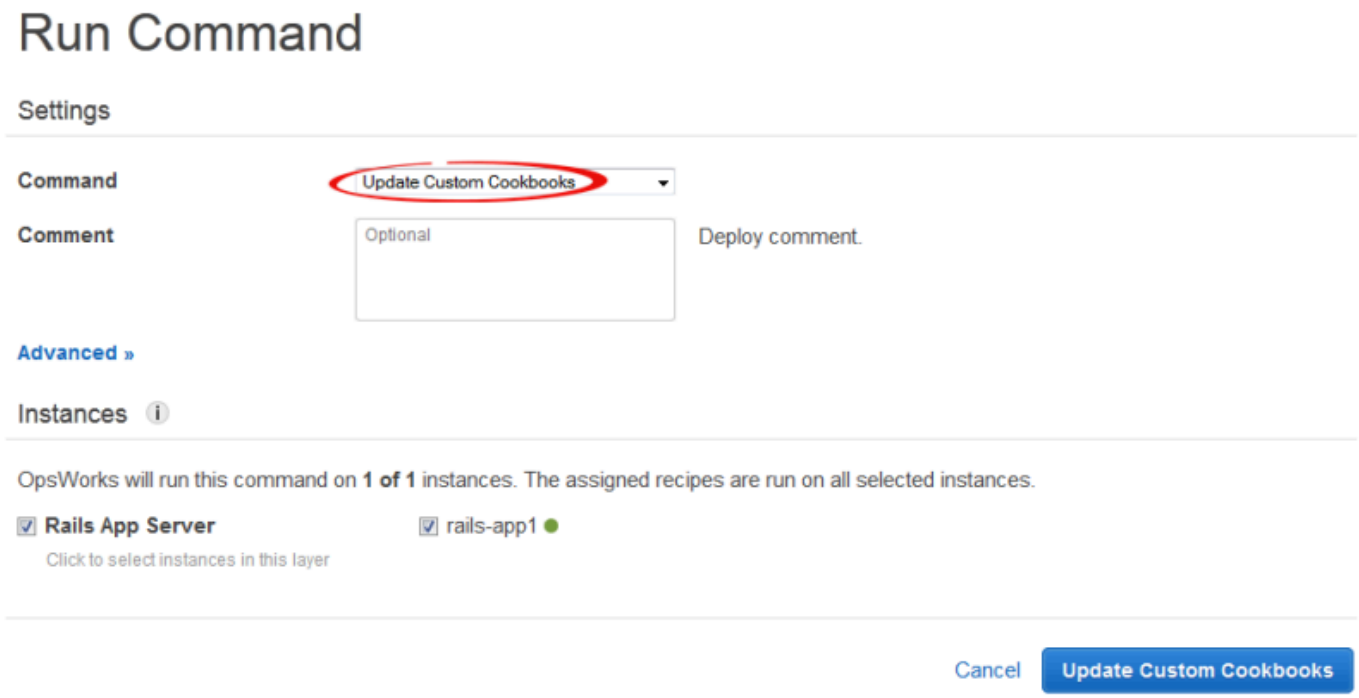
クックブックを作成したら、各インスタンスのクックブックキャッシュにデプロイする必要があります。このオペレーションではレシピは実行されません。スタックのインスタンスに新しいクックブックをインストールするだけです。後述するように、通常はレイヤーのライフサイクルイベントにレシピを割り当てることによってレシピを実行します。

カスタムクックブックをデプロイするには

1. OpsWorks スタックスタックページで、スタック設定をクリックし、編集します。
2. [Configuration Management] (構成の管理) セクションで、[Use custom Chef cookbooks] (カスタム　Chef のクックブックを使用) を [Yes] (はい) に設定し、クックブックリポジトリの情報を入力します。次に、[Save] (保存) をクリックしてスタック設定を更新します。



3. [Stack] (スタック) ページで [Run Command] (コマンドの実行) をクリックし、[Update Custom Cookbooks] (カスタムクックブックの更新) スタックコマンドを選択します。次に、[Update Custom Cookbooks] (カスタムクックブックの更新) をクリックして、インスタンスのクックブックキャッシュに新しいクックブックをインストールします。



クックブックを変更した場合は、[Update Custom Cookbooks] をもう一度実行して、最新バージョンをインストールします。この手順の詳細については、「カスタムクックブックのインストール」を参照してください。

ステップ 4: レシピをライフサイクルイベントに割り当てる

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

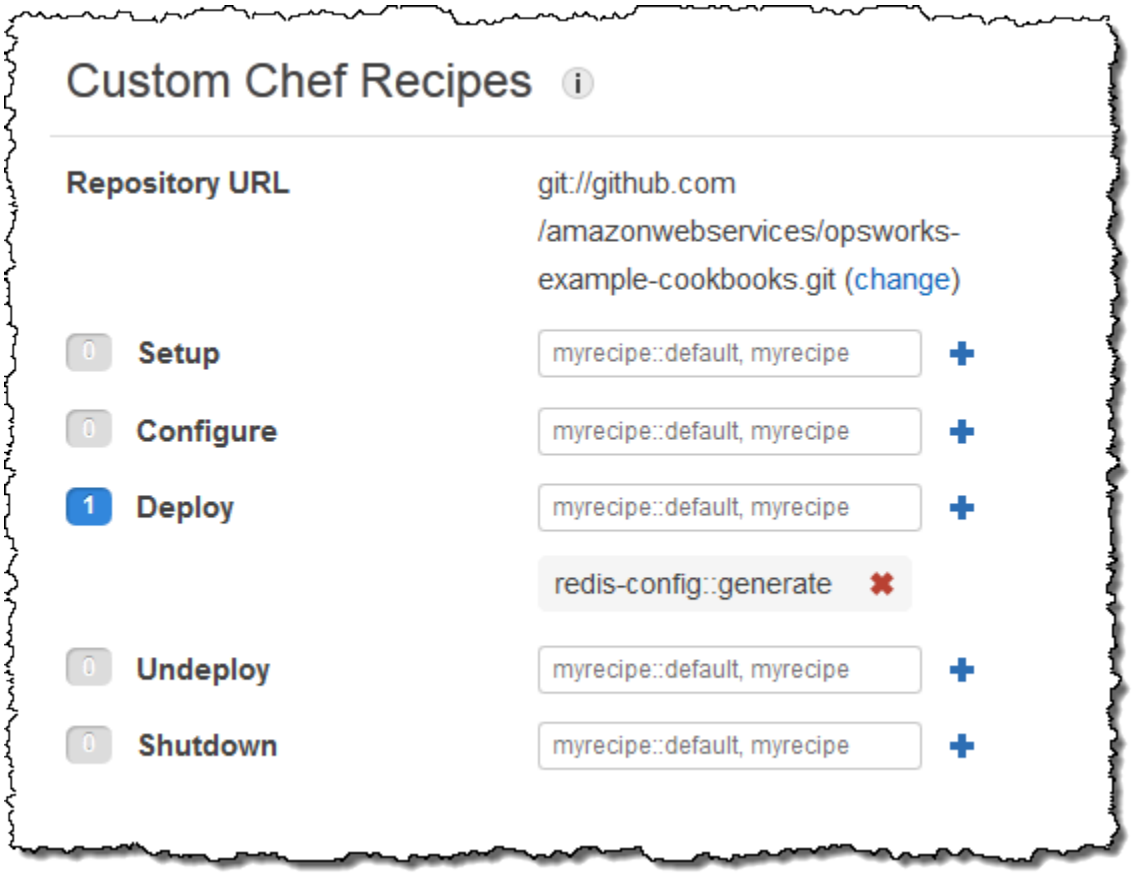
カスタムレシピは手動で実行できますが、通常は OpsWorks スタックで自動的に実行することをお勧めします。すべてのレイヤーには、5 つの [lifecycle events] (ライフサイクルイベント) (セットアップ、設定、デプロイ、アンデプロイおよびシャットダウン) のそれぞれに割り当てられたレシピが組み込まれています。インスタンスに対してイベントが発生するたびに、 OpsWorks スタックによってインスタンスの各レイヤーの関連付けられたレシピが実行され、対応するタスクが処理されます。たとえば、インスタンスの起動が完了すると、 OpsWorks スタックは Setup イベントをトリガーし

ます。このイベントでは、関連付けられたレイヤーの Setup レシピが実行され、通常はパッケージのインストールと設定などのタスクが処理されます。

適切なライフサイクルイベントにレシピを割り当てることで、 OpsWorks スタックにレイヤーのインスタンスでカスタムレシピを実行させることができます。この例では、Rails App Server Layer の Deploy イベントに`generate.rb`レシピを割り当てる必要があります。その後、起動時、Setup レシピが完了した後、およびアプリケーションをデプロイするたびに、 OpsWorks スタックは Layer のインスタンスでレシピを実行します。詳細については、「レシピを自動的に実行する」を参照してください。

Rails アプリケーションサーバーレイヤーのデプロイイベントにレシピを割り当てるには

1. OpsWorks スタックレイヤーページの Rails App Server で、レシピをクリックし、編集をクリックします。
2. [Custom Chef Recipes] で、完全修飾レシピ名を Deploy イベントに追加し、[+] をクリックします。完全修飾レシピ名では、*`cookbookname`*`::`*`recipename`* の形式を使用します。*`recipename`* には `.rb` 拡張子は含まれません。この例では、完全修飾名は `redis-config::generate` です。次に、[Save] をクリックしてレイヤー設定を更新します。



ステップ 5: スタック設定 JSON にアクセス情報を追加する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

`generate.rb` レシピは、Redis サーバーのホスト名とポートを表すスタック設定およびデプロイメント JSON の属性ペアによって異なります。これらの属性は標準`[:deploy]`名前空間の一部ですが、 OpsWorks スタックでは自動的に定義されません。代わりに、カスタム JSON オブジェクトをスタックに追加して属性とその値を定義します。次の例は、この例のカスタム JSON を示しています。

スタック設定およびデプロイメント JSON にアクセス情報を追加するには

1. OpsWorks スタックスタックページで、スタック設定をクリックし、編集します。
2. [Configuration Management] セクションで、[Custom Chef JSON] ボックスにアクセス情報を追加します。以下の変更を加えると、次の例のようになります。

   - `elasticache_redis_example` をアプリケーションの短縮名で置き換えます。
   - `host` と `port` の値を、「ステップ 1： ElastiCache の Redis クラスターを作成します」で作成した ElastiCacheRedis サーバーインスタンスの値で置き換えます。

```
{
  "deploy": {
     "elasticache_redis_example": {
       "redis": {
         "host": "mycluster.XXXXXXXXX.amazonaws.com",
         "port": "6379"
       }
     }
  }
}
```

このアプローチの利点は、カスタムクックブックに触れずにポートまたはホスト値をいつでも変更できることです。 OpsWorks スタックはカスタム JSON を組み込み JSON にマージし、後続のすべてのライフサイクルイベントのスタックのインスタンスにインストールします。これにより、アプリケーションは、「ステップ 3: カスタムクックブックを作成してデプロイする」で説明した Chef ノード構文を使用して属性値にアクセスできるようになります。次回アプリケーションをデプロイするときには、 OpsWorks スタックによって、新しい定義が含まれたスタック設定およびデプロイメント JSON がインストールされ、`generate.rb` によって、ホストとポートの値が更新された設定ファイルが作成されます。

> **Note**
>
> `[:deploy]` にはデプロイするすべてのアプリケーションの属性が自動的に含まれるので、スタック設定 JSON には `[:deploy][elasticache_redis_example]` がすでに含まれています。ただし、 `[:deploy][elasticache_redis_example]` には `[:redis]` 属性が含まれず、カスタム JSON で定義して OpsWorks 、 スタックにそれらの属性を に追加するように指示します`[:deploy][elasticache_redis_example]`。カスタム JSON を使用して既存の属性を上書きすることもできます。詳細については、「属性の上書き」を参照してください。

ステップ 6: アプリをデプロイして実行する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

この例では、Redis を使用する Ruby on Rails アプリケーションがあることを前提としています。設定ファイルにアクセスするには、次のように、`redis` で `config/initializers/redis.rb` gem を Gem ファイルに追加し、Rails 初期化子を作成します。

```
REDIS_CONFIG = YAML::load_file(Rails.root.join('config', 'redis.yml'))
$redis = Redis.new(:host => REDIS_CONFIG['host'], :port => REDIS_CONFIG['port'])
```

次に、アプリケーションを示すための [create an app] (アプリケーションを作成) し、Rails アプリケーションサーバーレイヤーのインスタンスに [deploy it] (それをデプロイ) します。これにより、アプリケーションコードが更新され、`generate.rb` が実行されて設定ファイルが生成されます。アプリケーションを実行すると、ElastiCacheRedis インスタンスがインメモリ key-value ストアとして使用されます。

Amazon S3 バケットの使用する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

アプリケーションは、イメージやその他のメディアファイルなどの大きなアイテムを保存するために Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) バケットをよく使用します。 OpsWorks スタック

は Amazon S3 の統合サポートを提供しませんが、アプリケーションが Amazon S3 ストレージを使用できるようにスタックを簡単にカスタマイズできます。このトピックでは、PHP アプリケーションサーバーが属する Linux スタックの使用を例に、アプリケーションに Amazon S3 へのアクセス権限を与える基本的な手順について説明します。基本的な原則は Windows スタックにも当てはまります。

Amazon S3 バケットに配信されるコンテンツには、カスタマーコンテンツが含まれている場合があります。機密データの削除の詳細については、「S3 バケットを空にする方法」または「S3 バケットを削除する方法」を参照してください。

トピック

- ステップ 1: Amazon S3 バケットを作成する
- ステップ 2: PHP アプリケーションサーバースタックを作成する
- ステップ 3: カスタムクックブックを作成してデプロイする
- ステップ 4: レシピをライフサイクルイベントに割り当てる
- ステップ 5: スタック設定およびデプロイ属性にアクセス情報を追加する
- ステップ 6: PhotoApp をデプロイおよび実行する

ステップ 1: Amazon S3 バケットを作成する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

まず Amazon S3 バケットを作成する必要があります。これは、Amazon S3 コンソール、API、または CLI を使用することで直接作成することができますが、 CloudFormation テンプレートを使用すると、より簡単にリソースを作成できます。次のテンプレートでは、この例の Amazon S3 バケットを作成し、バケットに対する無制限のアクセスを許可する IAM ロールを伴う インスタンスプロファイルをセットアップします。次に、レイヤー設定を使用して、スタックのアプリケーションサーバーのインスタンスにインスタンスプロファイルをアタッチします。これにより、後述のようにアプリケー

ションがバケットにアクセスできるようになります。インスタンスプロファイルは、Amazon S3 ばかりでなく、さまざまな AWS サービスを統合する場合にも役立ちます。

```
{
   "AWSTemplateFormatVersion" : "2010-09-09",
   "Resources" : {
      "AppServerRootRole": {
         "Type": "AWS::IAM::Role",
         "Properties": {
            "AssumeRolePolicyDocument": {
               "Statement": [ {
                  "Effect": "Allow",
                  "Principal": {
                     "Service": [ "ec2.amazonaws.com" ]
                  },
                  "Action": [ "sts:AssumeRole" ]
               } ]
            },
            "Path": "/"
         }
      },
      "AppServerRolePolicies": {
         "Type": "AWS::IAM::Policy",
         "Properties": {
            "PolicyName": "AppServerS3Perms",
            "PolicyDocument": {
               "Statement": [ {
                  "Effect": "Allow",
                  "Action": "s3:*",
                  "Resource": { "Fn::Join" : ["", [ "arn:aws:s3:::", { "Ref" :
 "AppBucket" } , "/*" ]
                  ] }
               } ]
            },
            "Roles": [ { "Ref": "AppServerRootRole" } ]
         }
      },
      "AppServerInstanceProfile": {
         "Type": "AWS::IAM::InstanceProfile",
         "Properties": {
            "Path": "/",
            "Roles": [ { "Ref": "AppServerRootRole" } ]
```

```
          }
       },
      "AppBucket" : {
       "Type" : "AWS::S3::Bucket"
       }
   },
   "Outputs" : {
       "BucketName" : {
           "Value" : { "Ref" : "AppBucket" }
       },
       "InstanceProfileName" : {
           "Value" : { "Ref" : "AppServerInstanceProfile" }
       }
   }
}
```

テンプレートを起動すると、以下の項目が実行されます。

- AWS::S3::Bucket リソースは Amazon S3 バケットを作成します。
- AWS::IAM::InstanceProfile リソースは、アプリケーションサーバーインスタンスに割り当てられるインスタンスプロファイルを作成します。
- AWS::IAM::Role リソースによってインスタンスプロファイルのロールが作成されます。
- AWS::IAM::Policy リソースは Amazon S3 バケットへの無制限アクセスを許可するアクセス許可をロールに設定します。
- テンプレートを起動すると、Outputs コンソールの [CloudFormation] セクションに、バケット名およびインスタンスプロファイル名が表示されます。

  これらの値は、スタックとアプリケーションをセットアップするために必要です。

CloudFormation テンプレートの作成方法の詳細については、「テンプレートの基本を学ぶ」を参照してください。

Amazon S3 バケットを作成するには

1. システムのテキストファイルにサンプルテンプレートをコピーします。

   この例では、ファイル名を appserver.template としています。
2. CloudFormation コンソールを開き、[スタックの作成] を選択します。
3. [Stack Name] ボックスに、スタック名を入力します。

この例では、名前を **AppServer** としています。

4. [Upload template file]、[Browse] の順に選択し、ステップ 1 で作成した `appserver.template` ファイルを選択して、[Next Step] を選択します。
5. [Specify Parameters] ページで、[I acknowledge that this template may create IAM resources] を選択し、最後のページに到達するまで、ウィザードの各ページで [Next Step] を選択します。[作成] を選択します。
6. [AppServer] スタックが [CREATE_COMPLETE] ステータスになったら、これを選択して [Outputs] タブを選択します。

   場合によっては、何回か更新してステータスをアップデートする必要があります。
7. [Outputs] タブで、[BucketName] と [InstanceProfileName] の値を書き留めます。これらの値は後で必要になります。

> **Note**
>
> CloudFormation はスタックという用語を使用して、テンプレートから作成されたリソースのコレクションを参照します。 OpsWorks スタックスタックとは異なります。

ステップ 2: PHP アプリケーションサーバースタックを作成する

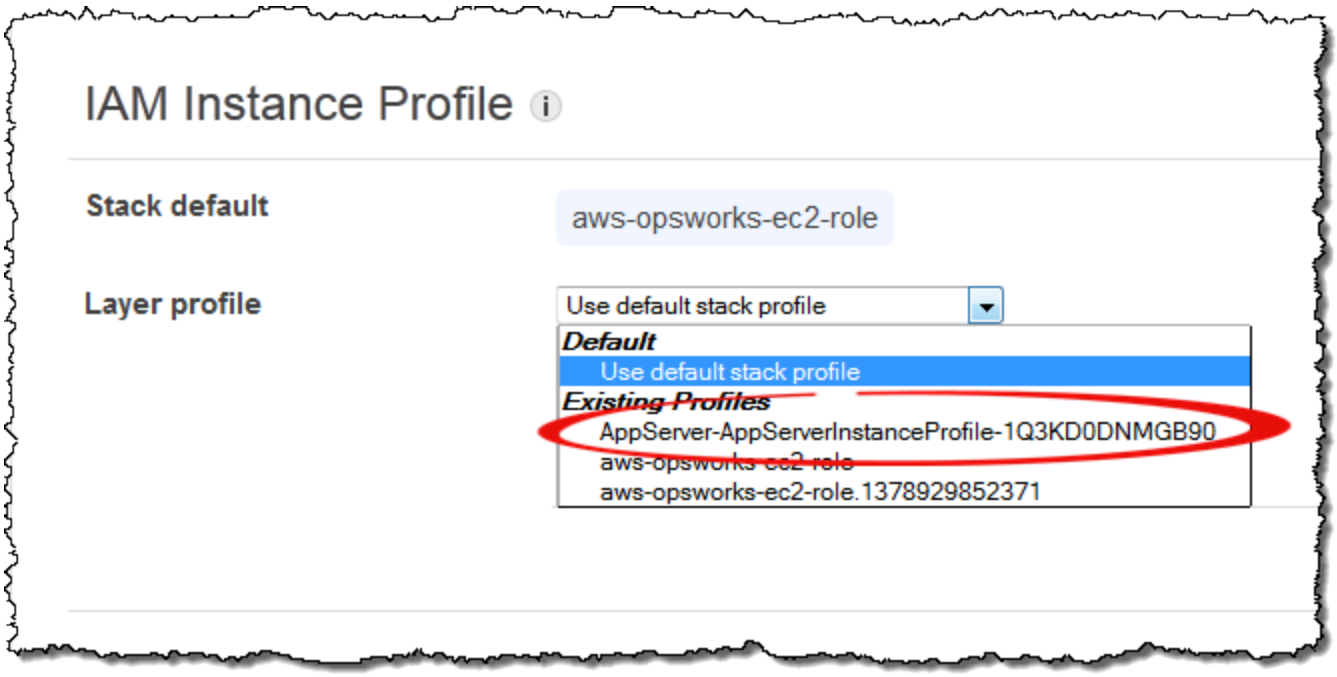
> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

スタックは、PHP アプリケーションサーバーと MySQL の 2 つのレイヤーで構成されており、それぞれに 1 つのインスタンスが存在します。アプリケーションは、Amazon S3 バケットに写真を保存しますが、各写真のメタデータを保持するためのバックエンドデータストアとしては MySQL インスタンスを使用します。

Amazon S3 バケットに配信されるコンテンツには、カスタマーコンテンツが含まれている場合があります。機密データの削除の詳細については、「S3 バケットを空にする方法」または「S3 バケットを削除する方法」を参照してください。

スタックを作成するには

1. 新しいスタック **PhotoSite** (を参照) を作成するには、PHP アプリケーションサーバーレイヤーを追加します。両方にデフォルト設定を使用します。詳細については、「新しいスタックを作成する」および「OpsWorks レイヤーの作成」を参照してください。
2. [Layers] (レイヤー) ページで、PHP アプリケーションサーバーに対して、[Security] (セキュリティー) を選択し、[Edit] (編集) を選択します。
3. Layer Profile セクションで、AppServer CloudFormation スタックを起動した後、前に記録したインスタンスプロファイル名を選択します。これは のようなものですAppServer-AppServerInstanceProfile-1Q3KD0DNMGB90。 OpsWorks スタックはこのプロファイルをレイヤーのすべての Amazon EC2 インスタンスに割り当て、レイヤーのインスタンス で実行されているアプリケーションに Amazon S3 バケットにアクセスするアクセス許可を付与します。



4. PHP アプリケーションサーバーレイヤーにインスタンスを追加し、起動します。インスタンスを追加して起動する方法の詳細については、「レイヤーへのインスタンスの追加」を参照してください。
5. スタックに MySQL レイヤーを追加し、インスタンスを追加して起動します。レイヤーとインスタンスの両方にデフォルト設定を使用します。特に、MySQL インスタンスは Amazon S3 バ

ケットにアクセスする必要がないため、デフォルトで選択されている標準の OpsWorks スタックインスタンスプロファイルを使用できます。

ステップ 3: カスタムクックブックを作成してデプロイする

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

スタックは、まだ完全には準備できていません。

- アプリケーションが MySQL データベースサーバーと Amazon S3 バケットにアクセスするためには、データベースのホスト名や Amazon S3 バケット名などの情報が必要です。
- MySQL データベースサーバーにデータベースをセットアップし、写真のメタデータを保持するためのテーブルを作成する必要があります。

これらのタスクは手動で処理できますが、Chef レシピを実装し、適切なインスタンスで OpsWorks スタックでレシピを自動的に実行することをお勧めします。Chef レシピは、 OpsWorks スタックがパッケージのインストールや設定ファイルの作成などのタスクをインスタンスで実行するために使用する特殊な Ruby アプリケーションです。レシピは、クックブックにパッケージ化されます。クックブックには、複数のレシピと関連ファイル (設定ファイルのテンプレートなど) を含めることができます。クックブックは GitHub などのリポジトリに保存されます。また、クックブックには標準ディレクトリ構造が必要です。カスタムクックブックリポジトリがまだない場合、これをセットアップする方法の詳細については、「クックブックリポジトリ」を参照してください。

この例では、クックブックはすでに実装されており、GitHub のパブリックリポジトリに保存されています。このクックブックには、`appsetup.rb` と `dbsetup.rb` という 2 つのレシピと、`db-connect.php.erb` というテンプレートファイルが含まれています。

`appsetup.rb` レシピは、アプリケーションがデータベースおよび Amazon S3バケットにアクセスするために必要となる情報を含む設定ファイルを作成します。これは基本的に アプリケーションを

データベースに接続する で説明した appsetup.rb レシピを軽微に修正したものです。主な違いはテンプレートに渡される変数であり、これらはアクセス情報を表します。

最初の 4 つの属性はデータベース接続設定を定義し、MySQL インスタンスの作成時に OpsWorks スタックによって自動的に定義されます。

これらの変数には、元のレシピの変数と異なる点が 2 つあります。

- 元のレシピと同じように、table 変数は dbsetup.rb によって作成されたデータベーステーブルの名前を表し、クックブックの属性ファイルで定義された属性の値に設定されます。

  ただし、その属性名は [:photoapp][:dbtable] という異なる名前になります。
- s3bucket 変数はこの例に固有のものであり、Amazon S3 バケット名 [:photobucket] を表す属性の値に設定されます。

  [:photobucket] は、後述するように、カスタム JSON を使用して定義されます。属性の詳細については、「属性」を参照してください。

属性の詳細については、「属性」を参照してください。

dbsetup.rb レシピは、各写真のメタデータを保持するためのデータベーステーブルをセットアップします。これは、基本的には dbsetup.rb レシピに若干の変更を加えたものです。このレシピの詳細については、「データベースのセットアップ」を参照してください。

この例と元のレシピの唯一の相異点はデータベーススキーマでです。このデータベーススキーマには、Amazon S3 バケットに保存される各写真の ID、URL およびキャプションが含まれる 3 つの列があります。

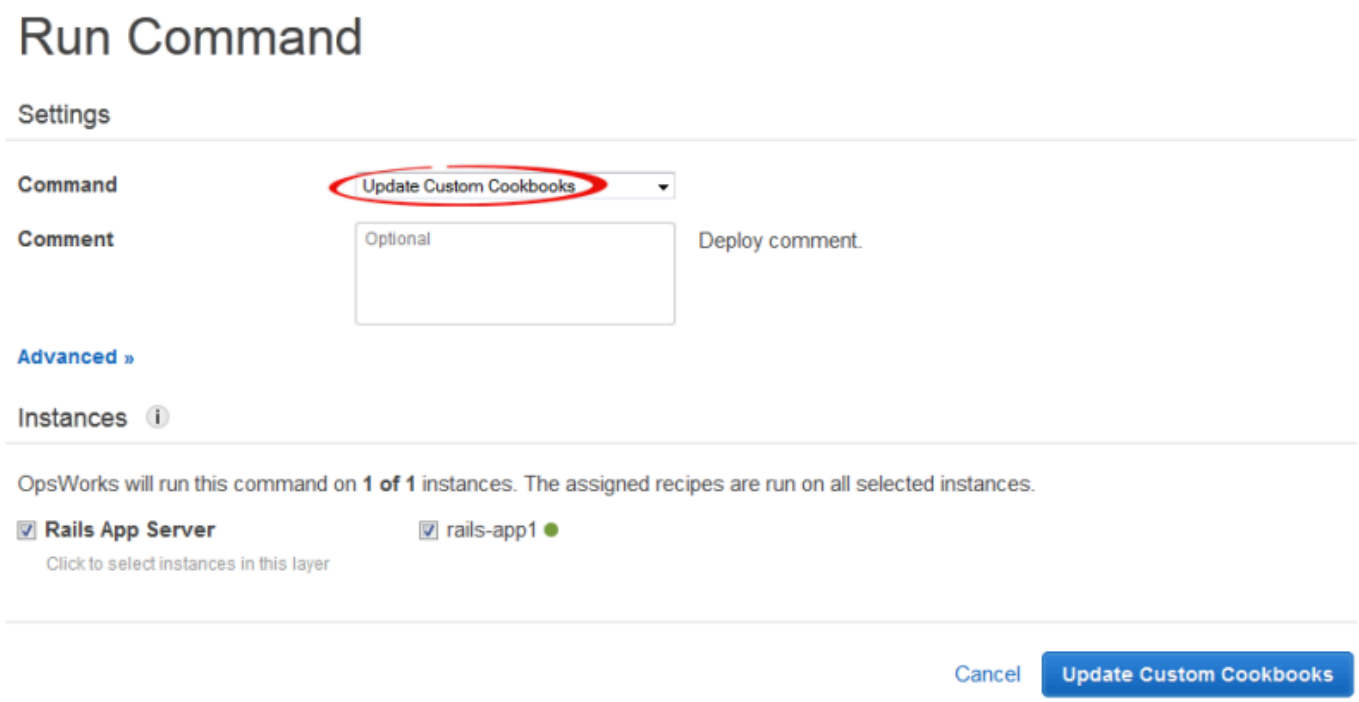
レシピはすでに実装されているため、フォトアプリケーションクックブックを各インスタンスのクックブックキャッシュにデプロイする必要があります。 OpsWorks スタックは、後述するように、適切なライフサイクルイベントが発生したときにキャッシュされたレシピを実行します。

photoapp クックブックをデプロイするには

1. OpsWorks スタックスタックページで、スタック設定を選択し、編集を選択します。
2. [Configuration Management] セクションで、次のように設定します。
   - [Use custom Chef cookbooks] を [Yes] に設定します。
   - [Repository type] を Git に設定します。

- Repository URL を **`git://github.com/amazonwebservices/opsworks-example-cookbooks.git`** に設定します。

3. [Stack] (スタックスタック) ページで [Run Command] (コマンドの実行) を選択し、[Update Custom Cookbooks] (カスタムクックブックの更新) スタックコマンドを選択します。次に、[Update Custom Cookbooks] (カスタムクックブックの更新) を選択して、インスタンスクックブックキャッシュに新しいクックブックをインストールします。



ステップ 4: レシピをライフサイクルイベントに割り当てる

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post または AWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

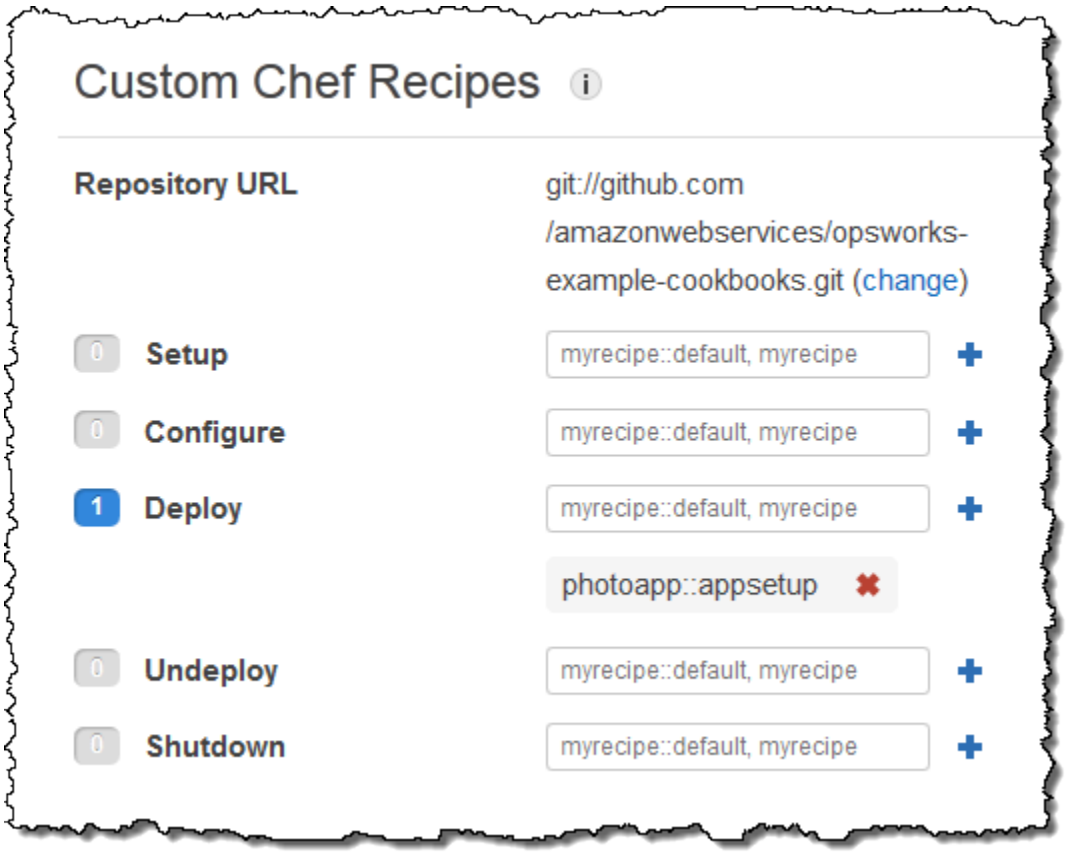
カスタムレシピは手動で実行できますが、通常は OpsWorks スタックで自動的に実行することをお勧めします。すべてのレイヤーには、5 つの [lifecycle events] (ライフサイクルイベント) (セットアップ、設定、デプロイ、アンデプロイ、およびシャットダウン) のそれぞれに割り当てられたレシピが

組み込まれています。インスタンスでイベントが発生するたびに、 OpsWorks Stacks はインスタンスのレイヤーごとに関連するレシピを実行し、必要なタスクを処理します。たとえば、インスタンスの起動が完了すると、 OpsWorks スタックは Setup イベントをトリガーして Setup レシピを実行します。これは通常、パッケージのインストールや設定などのタスクを処理します。

OpsWorks スタックは、各レシピを適切なライフサイクルイベントに割り当てることで、レイヤーのインスタンスでカスタムレシピを実行できます。 OpsWorks スタックは、レイヤーの組み込みレシピが完了した後にカスタムレシピを実行します。この例では、 `appsetup.rb`を PHP App Server Layer の Deploy イベント`dbsetup.rb`と MySQL Layer の Deploy イベントに割り当てます。OpsWorks スタックは、起動時、組み込み Setup レシピの完了後、およびビルドされた Deploy レシピの完了後にアプリケーションをデプロイするたびに、関連する Layer のインスタンスでレシピを実行します。詳細については、「レシピを自動的に実行する」を参照してください。

レイヤーの Deploy イベントにカスタムレシピを割り当てるには

1. OpsWorks スタックレイヤーページで、PHP アプリサーバーでレシピを選択し、編集を選択します。
2. [Custom Chef Recipes] で、レシピ名を Deploy イベントに追加し、[+] を選択します。名前は、Chef の *`cookbookname`*`::`*`recipename`* 形式の名前である必要があります。*`recipename`* には `.rb` 拡張子は含まれません。この例では、`photoapp::appsetup` と入力します。次に、[Save] を選択してレイヤー設定を更新します。



3. [Layers] (レイヤー) ページで、MySQL レイヤーの [Actions] (アクション) 列で [edit] (編集) を選択します。
4. レイヤーの Deploy イベントに `photoapp::dbsetup` を追加し、新しい設定を保存します。

ステップ 5: スタック設定およびデプロイ属性にアクセス情報を追加する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

`appsetup.rb` レシピは OpsWorks 、各インスタンスにインストールされ、スタックとデプロイされたアプリケーションに関する詳細情報を含む、スタックスタックの設定属性とデプロイ属性のデー

タによって異なります。オブジェクトの deploy 属性は以下の構造になっており、わかりやすいように、JSON オブジェクトの形式で表示されます。

```
{
   ...
  "deploy": {
    "app1": {
      "application" : "short_name",
      ...
    }
    "app2": {
      ...
    }
    ...
  }
}
```

deploy ノードには、デプロイされる各アプリケーションの属性が含まれます。この属性の名前はアプリケーションの短縮名です。各アプリケーション属性には、アプリケーションの設定 (ドキュメントのルートやアプリケーションタイプなど) を定義する属性のセットが含まれています。deploy 属性のリストについては、「deploy 属性」を参照してください。レシピにスタック設定およびデプロイ属性値を記述するには、Chef 属性構文を使用します。例えば、`[:deploy][:app1][:application]` は、app1 アプリケーションの短縮名を表します。

カスタムレシピは、データベースおよび Amazon S3 のアクセス情報を表すいくつかのスタック構成およびデプロイメント属性によって異なります。

- などのデータベース接続属性は`[:deploy][:database][:host]`、MySQL レイヤーの作成時に OpsWorks スタックによって定義されます。
- テーブル名属性 `[:photoapp][:dbtable]` は、カスタムクックブックの属性ファイルで定義され、`foto` に設定されます。
- バケット名属性 `[:photobucket]` を定義するには、カスタム JSON を使用して、その属性をスタック設定およびデプロイ属性に追加する必要があります。

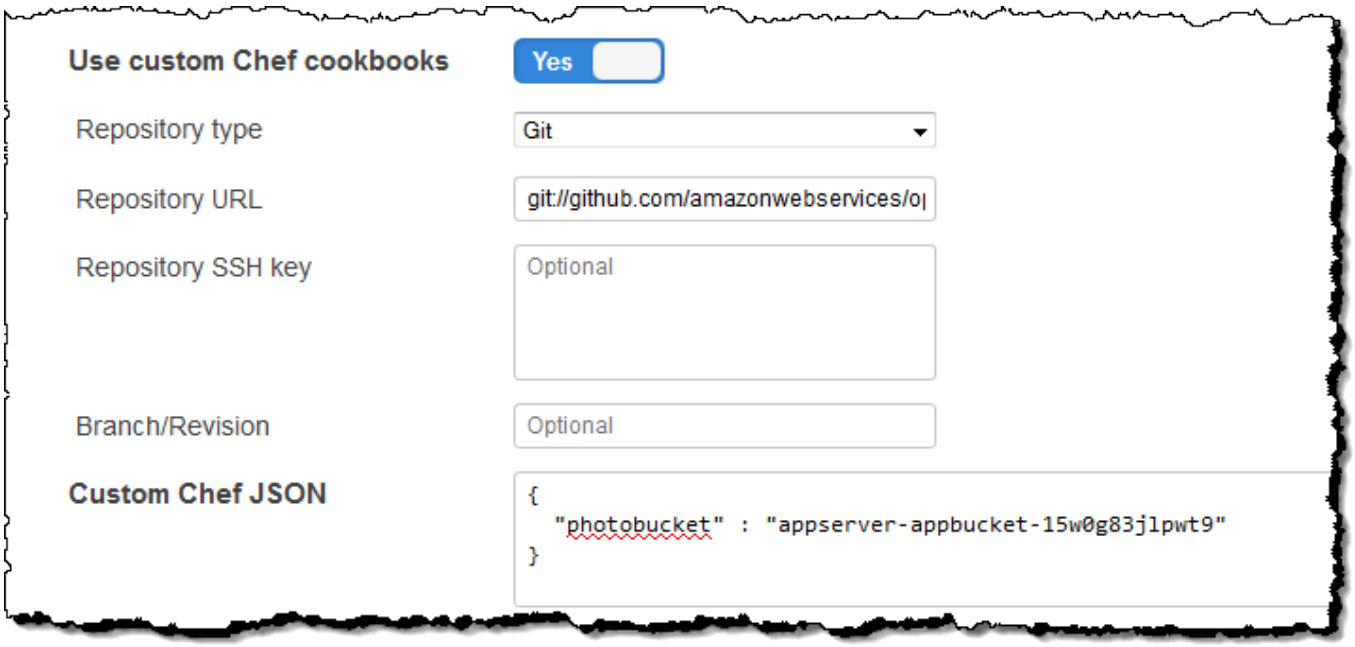
Amazon S3 バケット名属性を定義するには

1. OpsWorks スタックスタックページで、スタック設定を選択し、編集します。

2. [Configuration Management] セクションで、[Custom Chef JSON] ボックスにアクセス情報を追加します。次のようになります。

```
{
  "photobucket" : "yourbucketname"
}
```

[*yourbucketname*] を、「ステップ 1: Amazon S3 バケットを作成する」で書き留めたバケット名で置き換えます。



OpsWorks スタックは、スタックのインスタンスにカスタム JSON をインストールする前に、カスタム JSON をスタック設定およびデプロイ属性にマージします。その後、`[:photobucket]` 属性からバケット名を取得`appsetup.rb`できます。バケットを変更する場合は、レシピに変更を加える必要はありません。新しいバケット名を渡すように属性を上書きするだけです。

ステップ 6: PhotoApp をデプロイおよび実行する

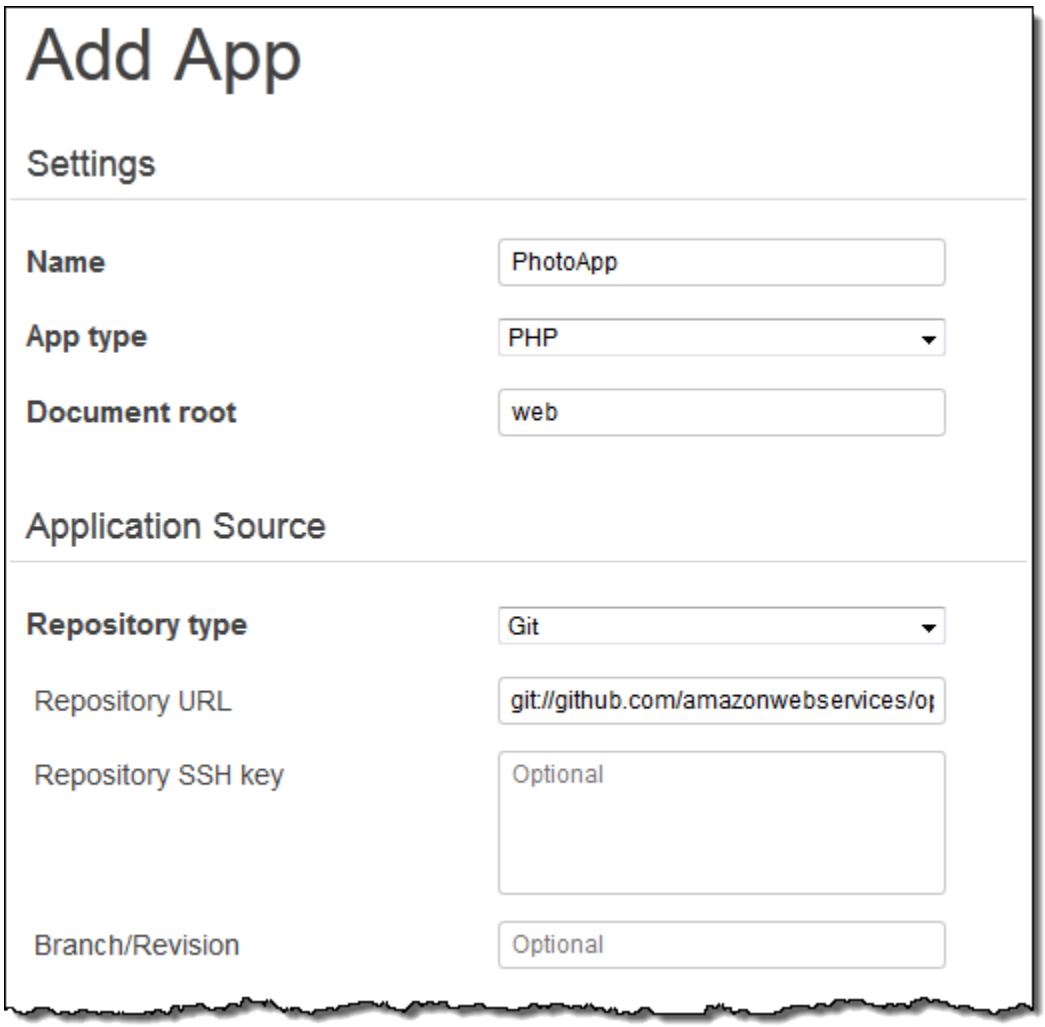
> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS

re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

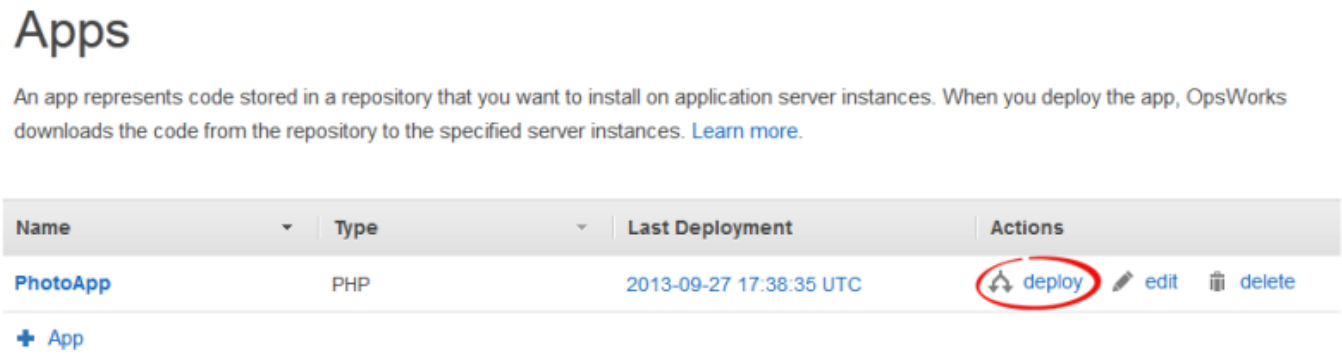
この例では、アプリケーションもすでに実装されており、GitHub のパブリックリポジトリに保存されています。必要な処理は、アプリケーションをスタックに追加し、アプリケーションサーバーにデプロイして実行することだけです。

アプリケーションをスタックに追加してアプリケーションサーバーにデプロイするには

1. [Apps] ページを開き、[Add an app] を選択します。
2. [Add App] ページで、次のように設定します。
   - [Name] を [**PhotoApp**] に設定します。
   - [App type] を [PHP] に設定します。
   - [Document root] を [**web**] に設定します。
   - [Repository type] を [Git] に設定します。
   - Repository URL を **`git://github.com/awslabs/opsworks-demo-php-photo-share-app.git`** に設定します。
   - [Add App] を選択し、その他の設定はデフォルト値を受け入れます。

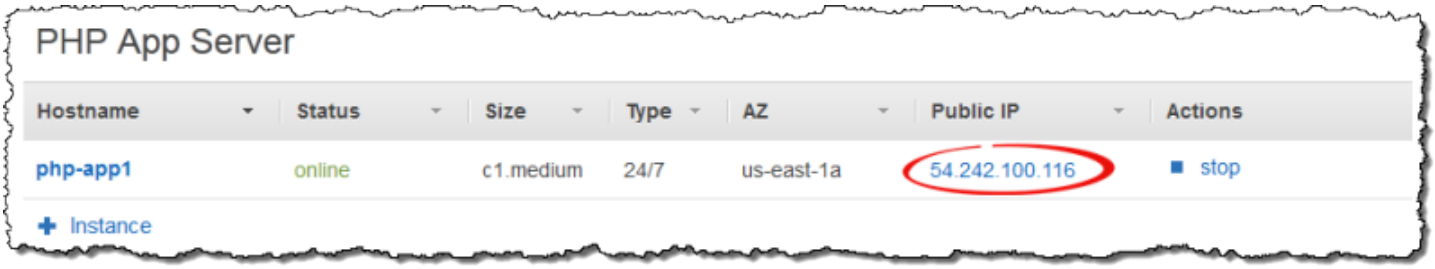


3. [Apps] ページで、PhotoApp アプリケーションの [Actions] 列で [deploy] を選択します。



4. デフォルト値を受け入れ、[Deploy] を選択してアプリケーションをサーバーにデプロイします。

PhotoApp を実行するには、[Instances] (インスタンス) ページに移動して PHP アプリケーションサーバー インスタンスのパブリック IP アドレスを選択します。



次のようなユーザーインターフェイスが表示されます。Amazon S3 バケットに写真を保存し、バックエンドデータストアにメタデータを保存するには、[Add a Photo] (写真を追加) を選択します。

スタック AWS CodePipeline での OpsWorks の使用

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

AWS CodePipeline により、トラックコードがCodeCommit、Amazon Simple Storage Service (Amazon S3)、GitHubなどのソースから変更される継続的デリバリーパイプラインを作成できます。CodePipeline を使用して、Chef 11.10、Chef 12、Chef 12.2 OpsWorks スタック上の スタックへの Chef クックブックとアプリケーションコードのリリースを自動化できます。このセクションでは、 スタックレイヤーで実行するコードのデプロイツールとして CodePipeline OpsWorks からシンプルなパイプラインを作成して使用する方法について説明します。

> **Note**
>
> CodePipeline OpsWorks と スタックの統合は、Chef 11.4 以前のスタックへのデプロイではサポートされていません。

トピック

- AWS CodePipeline OpsWorks スタックあり - Chef 12 スタック
- AWS CodePipeline OpsWorks スタックあり - Chef 11 スタック

AWS CodePipeline OpsWorks スタックあり - Chef 12 スタック

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

AWS CodePipeline により、トラックコードがCodeCommit、Amazon Simple Storage Service (Amazon S3)、GitHubなどのソースから変更される継続的デリバリーパイプラインを作成できます。このトピックの例では、CodePipeline からシンプルなパイプラインを作成し、 OpsWorks スタックレイヤーで実行するコードのデプロイツールとして使用する方法を説明します。この例では、シンプルな Node.js アプリケーションのパイプラインを作成し、Chef 12 OpsWorks スタック (この場合は 1 つのインスタンス) のレイヤー内のすべてのインスタンスでアプリケーションを実行するように スタックに指示します。

> **Note**
>
> このトピックでは、パイプラインを使用して Chef 12 スタックでアプリケーションを実行および更新する方法について説明します。パイプラインを使用して Chef 11.10 スタックでアプリケーションを実行および更新する方法については、「AWS CodePipeline OpsWorks スタックあり - Chef 11 スタック」を参照してください。Amazon S3 バケットに配信されるコンテンツには、カスタマーコンテンツが含まれている場合があります。機密データの削除の

詳細については、「S3 バケットを空にする方法」または「S3 バケットを削除する方法」を参照してください。

トピック

- 前提条件
- サポートされている他のシナリオ
- ステップ 1: スタックに OpsWorks スタック、レイヤー、インスタンスを作成する
- ステップ 2: カスタムクックブックを使用するようにスタックとレイヤーを設定する
- ステップ 3: アプリケーションコードを Amazon S3 バケットにアップロードする
- ステップ 4: アプリケーションを OpsWorks スタックに追加する
- ステップ 5 : CodePipeline でパイプラインを作成する
- ステップ 6: OpsWorks スタックでアプリケーションのデプロイを確認する
- ステップ 7 (オプション): アプリケーションコードを更新し、CodePipeline が自動的にアプリケーションを再デプロイすることを確認します。
- ステップ 8 (オプション): リソースをクリーンアップする

前提条件

このウォークスルーを開始する前に、次のすべてのタスクを実行するための管理者権限があることを確認してください。[AdministratorAccess] ポリシーが適用されているグループのメンバーになることができるか、次の表に示された権限やポリシーを持つグループのメンバーになることができる。セキュリティのベストプラクティスとして、必要な権限を個別のユーザーアカウントに割り当てるのではなく、次のタスクを実行する権限を持つグループにユーザーが属している必要があります。

IAM でセキュリティグループを作成し、権限をグループに割り当てる方法の詳細については、「Creating IAM User Group」(IAM ユーザーグループの作成) を参照してください。 OpsWorks スタックのアクセス許可の管理の詳細については、「ベストプラクティス: アクセス許可の管理」を参照してください。

権限	グループにアタッチすることが推奨されるポリシー
スタックで OpsWorks スタック、レイヤー、インスタンスを作成および編集します。	AWSOpsWorks_FullAccess

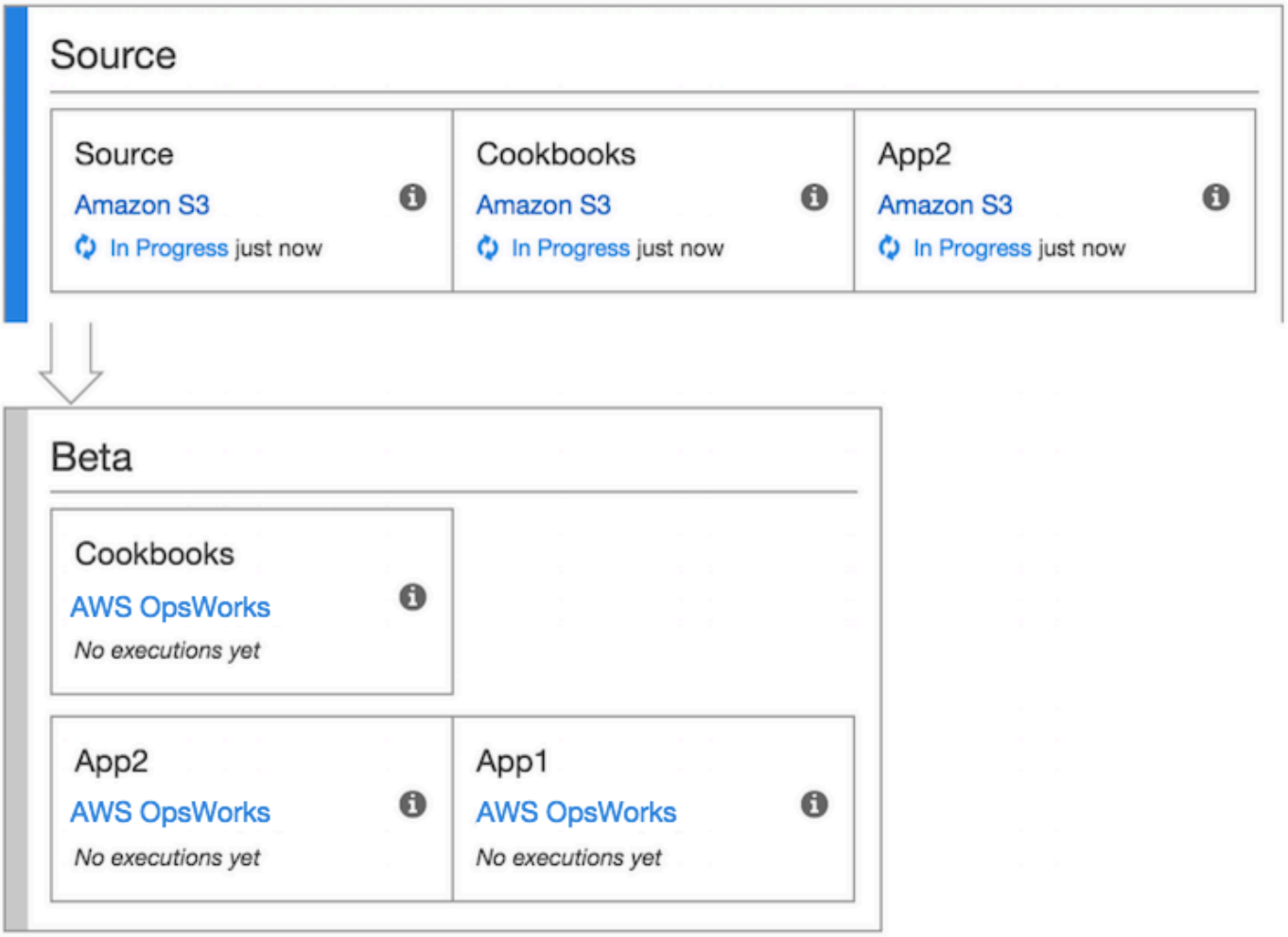
権限	グループにアタッチすることが推奨されるポリシー
CloudFormationでテンプレートを作成、編集、実行します。	AmazonCloudFormationFullAccess
Amazon S3 バケットの作成、編集、アクセスを行います。	AmazonS3FullAccess
CodePipeline でパイプライン、特に Stacks OpsWorks をプロバイダーとして使用するパイプラインを作成、編集、実行します。	AWSCodePipeline_FullAccess

Amazon EC2 キーペアも備える必要があります。このウォークスルーでサンプルスタック、レイヤー、インスタンスを作成する CloudFormation テンプレートを実行するときに、このキーペアの名前を指定するように求められます。Amazon EC2 コンソールでの key pair 取得の詳細については、Amazon EC2 ドキュメントの「Create a Key Pair」(キーペアの作成) を参照してください キーペアは、米国東部 (バージニア北部) リージョンにある必要があります。そのリージョンに既存のキーペアがある場合は、そのキーペアを使用できます。

サポートされている他のシナリオ

このウォークスルーでは、[Source] を 1 つ、[Deploy] ステージを 1 つ含むシンプルなパイプラインを作成します。ただし、 OpsWorks スタックをプロバイダーとして使用する、より複雑なパイプラインを作成できます。サポートされているパイプラインとシナリオの例を以下に示します。

- パイプラインを編集し、Chef クックブックを [Source] ステージに、更新されたクックブックの関連ターゲットを [Deploy] に追加できます。この場合は、ソースを変更した際にクックブックの更新をトリガーする [デプロイ] アクションを追加します。更新されたクックブックは、アプリの前にデプロイされます。
- カスタムクックブックと複数のアプリケーションを使用して複雑なパイプラインを作成し、OpsWorks スタックスタックにデプロイできます。パイプラインはアプリケーションソースとクックブックソースの両方の変化を追跡し、変更を行った際に再デプロイを行います。同様の複雑なパイプラインの例を以下に示します。



CodePipeline の使用方法のについての詳細は、「CodePipeline User Guide」(CodePipeline ユーザーガイド) を参照してください。

ステップ 1: スタックに OpsWorks スタック、レイヤー、インスタンスを作成する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックをパイプラインのデプロイプロバイダーとして使用するには、まずスタック、レイヤー、およびレイヤーに少なくとも 1 つのインスタンスが必要です。「Linux スタックの開始方法」または「Windows スタックの開始方法」の手順に従って OpsWorks スタックを作成できますが、時間を節約するために、この例では AWS CloudFormation テンプレートを使用して Linux ベースの Chef 12 スタック、レイヤー、インスタンスを作成します。このテンプレートで作成されたインスタンスは、Amazon Linux 2016.03 を実行します。インスタンスタイプは `c3.large` です。テンプレートにより カスタムクックブックを使用するようにスタックが設定されませんが、チュートリアルの後半でこのように設定します。

> **Important**
>
> CloudFormation テンプレートは、後でアプリケーションをアップロードする Amazon S3 バケットと同じリージョンと、後で CodePipeline でパイプラインを作成するリージョンに保存して実行する必要があります。現時点では、CodePipeline は米国東部 (バージニア北部) リージョン (us-east-1) の OpsWorks スタックプロバイダーのみをサポートしています。このチュートリアルのすべてのリソースは、米国東部 (バージニア北部) リージョンで作成する必要があります。
>
> スタックの作成が失敗した場合は、アカウントで許可されている IAM ロールの最大数に達している可能性があります。またスタックの作成は、アカウントがインスタンスを `c3.large` インスタンスタイプで起動できないときに、失敗する場合があります。例えば、 AWS 無料利用枠を使用している場合に、`Root device type: must be included in EBS`などのエラーが発生することがあります。 AWS 無料利用枠によって課される制限など、アカウントで作成が許可されているインスタンスタイプに制限がある場合は、テンプレートのインスタンスブロックの `InstanceType`パラメータの値を、アカウントで使用できるインスタンスタイプに変更してみてください。

を使用してスタック、レイヤー、インスタンスを作成するには CloudFormation

1. 次の CloudFormation テンプレートを新しいプレーンテキストドキュメントにコピーします。ファイルの保存場所をローカルコンピュータ上の使いやすい場所に指定し、[NewOpsWorksStack.template] などの使いやすい名前を付けます。

```
{
  "AWSTemplateFormatVersion": "2010-09-09",
  "Mappings": {
    "Region2Principal": {
      "us-east-1": {
```

```
        "EC2Principal": "ec2.amazonaws.com",
        "OpsWorksPrincipal": "opsworks.amazonaws.com"
      },
      "us-west-2": {
        "EC2Principal": "ec2.amazonaws.com",
        "OpsWorksPrincipal": "opsworks.amazonaws.com"
      },
      "us-west-1": {
        "EC2Principal": "ec2.amazonaws.com",
        "OpsWorksPrincipal": "opsworks.amazonaws.com"
      },
      "eu-west-1": {
        "EC2Principal": "ec2.amazonaws.com",
        "OpsWorksPrincipal": "opsworks.amazonaws.com"
      },
      "ap-southeast-1": {
        "EC2Principal": "ec2.amazonaws.com",
        "OpsWorksPrincipal": "opsworks.amazonaws.com"
      },
      "ap-northeast-1": {
        "EC2Principal": "ec2.amazonaws.com",
        "OpsWorksPrincipal": "opsworks.amazonaws.com"
      },
      "ap-northeast-2": {
        "EC2Principal": "ec2.amazonaws.com",
        "OpsWorksPrincipal": "opsworks.amazonaws.com"
      },
      "ap-southeast-2": {
        "EC2Principal": "ec2.amazonaws.com",
        "OpsWorksPrincipal": "opsworks.amazonaws.com"
      },
      "sa-east-1": {
        "EC2Principal": "ec2.amazonaws.com",
        "OpsWorksPrincipal": "opsworks.amazonaws.com"
      },
      "cn-north-1": {
        "EC2Principal": "ec2.amazonaws.com.cn",
        "OpsWorksPrincipal": "opsworks.amazonaws.com.cn"
      },
      "eu-central-1": {
        "EC2Principal": "ec2.amazonaws.com",
        "OpsWorksPrincipal": "opsworks.amazonaws.com"
      }
    }
```

```
 },
 "Parameters": {
   "EC2KeyPairName": {
  "Type": "String",
  "Description": "The name of an existing EC2 key pair that lets you use SSH to
connect to the OpsWorks instance."
 }
 },
 "Resources": {
"CPOpsDeploySecGroup": {
  "Type": "AWS::EC2::SecurityGroup",
  "Properties": {
    "GroupDescription" : "Lets you manage OpsWorks instances to which you deploy
apps with CodePipeline"
  }
},
"CPOpsDeploySecGroupIngressHTTP": {
  "Type": "AWS::EC2::SecurityGroupIngress",
  "Properties" : {
    "IpProtocol" : "tcp",
       "FromPort" : "80",
       "ToPort" : "80",
       "CidrIp" : "0.0.0.0/0",
 "GroupId": {
   "Fn::GetAtt": [
     "CPOpsDeploySecGroup", "GroupId"
   ]
 }
     }
},
"CPOpsDeploySecGroupIngressSSH": {
  "Type": "AWS::EC2::SecurityGroupIngress",
  "Properties" : {
    "IpProtocol" : "tcp",
       "FromPort" : "22",
       "ToPort" : "22",
       "CidrIp" : "0.0.0.0/0",
 "GroupId": {
   "Fn::GetAtt": [
     "CPOpsDeploySecGroup", "GroupId"
   ]
 }
  }
},
```

```
"MyStack": {
     "Type": "AWS::OpsWorks::Stack",
     "Properties": {
       "Name": {
         "Ref": "AWS::StackName"
       },
       "ServiceRoleArn": {
         "Fn::GetAtt": [
           "OpsWorksServiceRole",
           "Arn"
         ]
       },
 "ConfigurationManager" : { "Name": "Chef","Version": "12" },
 "DefaultOs": "Amazon Linux 2016.03",
       "DefaultInstanceProfileArn": {
         "Fn::GetAtt": [
           "OpsWorksInstanceProfile",
           "Arn"
         ]
       },
 "UseCustomCookbooks": "false"
     }
   },
   "MyLayer": {
     "Type": "AWS::OpsWorks::Layer",
     "Properties": {
       "StackId": {
         "Ref": "MyStack"
       },
       "Name": "Node.js App Server",
 "Type": "custom",
       "Shortname": "app1",
 "EnableAutoHealing": "true",
       "AutoAssignElasticIps": "false",
       "AutoAssignPublicIps": "true",
 "CustomSecurityGroupIds": [
   {
     "Fn::GetAtt": [
             "CPOpsDeploySecGroup", "GroupId"
     ]
   }
  ]
     },
     "DependsOn": [
```

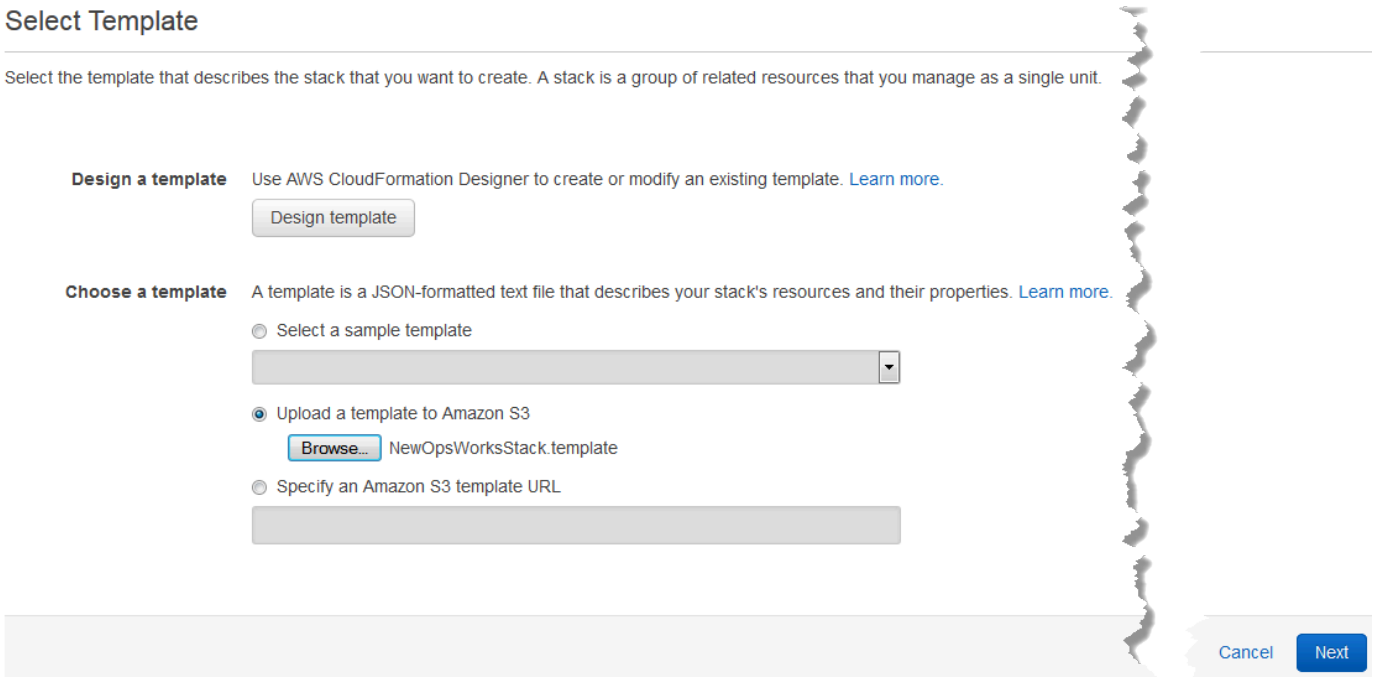
```
        "MyStack",
        "CPOpsDeploySecGroup"
      ]
    },
    "OpsWorksServiceRole": {
      "Type": "AWS::IAM::Role",
      "Properties": {
        "AssumeRolePolicyDocument": {
          "Statement": [
            {
              "Effect": "Allow",
              "Principal": {
                "Service": [
                  {
                    "Fn::FindInMap": [
                      "Region2Principal",
                      {
                        "Ref": "AWS::Region"
                      },
                      "OpsWorksPrincipal"
                    ]
                  }
                ]
              },
              "Action": [
                "sts:AssumeRole"
              ]
            }
          ]
        },
        "Path": "/",
        "Policies": [
          {
            "PolicyName": "opsworks-service",
            "PolicyDocument": {
              "Statement": [
                {
                  "Effect": "Allow",
                  "Action": [
                    "ec2:*",
                    "iam:PassRole",
                    "cloudwatch:GetMetricStatistics",
                    "elasticloadbalancing:*"
                  ],
```

```
                "Resource": "*"
              }
            ]
          }
        }
      ]
    }
  },
  "OpsWorksInstanceProfile": {
    "Type": "AWS::IAM::InstanceProfile",
    "Properties": {
      "Path": "/",
      "Roles": [
        {
          "Ref": "OpsWorksInstanceRole"
        }
      ]
    }
  },
  "OpsWorksInstanceRole": {
    "Type": "AWS::IAM::Role",
    "Properties": {
      "AssumeRolePolicyDocument": {
        "Statement": [
          {
            "Effect": "Allow",
            "Principal": {
              "Service": [
                {
                  "Fn::FindInMap": [
                    "Region2Principal",
                    {
                      "Ref": "AWS::Region"
                    },
                    "EC2Principal"
                  ]
                }
              ]
            },
            "Action": [
              "sts:AssumeRole"
            ]
          }
        ]
```

```
      },
      "Path": "/",
"Policies": [
       {
         "PolicyName": "s3-get",
         "PolicyDocument": {
           "Version": "2012-10-17",
           "Statement": [
             {
               "Effect": "Allow",
               "Action": [
                 "s3:GetObject"
               ],
               "Resource": "*"
             }
           ]
         }
       }
     ]
   }
  },
  "myinstance": {
    "Type": "AWS::OpsWorks::Instance",
    "Properties": {
      "LayerIds": [
        {
          "Ref": "MyLayer"
        }
      ],
      "StackId": {
        "Ref": "MyStack"
      },
      "InstanceType": "c3.large",
      "SshKeyName": {
  "Ref": "EC2KeyPairName"
}
    }
  }
},
"Outputs": {
  "StackId": {
    "Description": "Stack ID for the newly created AWS OpsWorks stack",
    "Value": {
      "Ref": "MyStack"
```

```
        }
      }
    }
  }
```

2. にサインイン AWS マネジメントコンソール し、https://console.aws.amazon.com/cloudformation で CloudFormation コンソールを開きます。
3. CloudFormation ホームページで、スタックの作成を選択します。
4. [Select Template] ページの [Choose a template] エリアで、[Upload a template to Amazon S3]、[Browse] の順に選択します。
5. ステップ 1 で保存した CloudFormation テンプレートを参照し、開くを選択します。[テンプレートを選択] ページで、[次へ] を選択します。

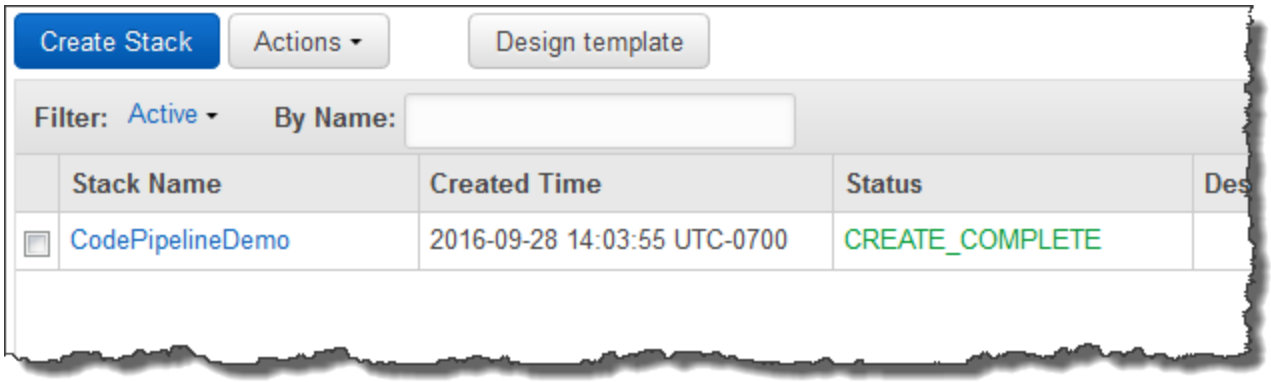


6. [Specify Details] ページで、スタックに CodePipelineDemo など、アカウントに固有な名前を付けます。スタックに別の名前を付ける場合は、このウォークスルー中のスタック名スループットを変更してください。
7. パラメータ領域で、作成後に スタックインスタンスへのアクセスに使用する EC2 OpsWorks キーペアの名前を指定します。[次へ] を選択します。
8. [Options(オプション)] ページで、[Next(次へ)] を選択します。(このページの設定はこのウォークスルーでは必要ありません)
9. このチュートリアルで使用する CloudFormation テンプレートは、IAM ロール、インスタンスプロファイル、インスタンスを作成します。

> **Important**
>
> Create を選択する前に、このテンプレートでリソースを作成するために発生する可能性のある料金を見積 AWS もるコストを選択します。

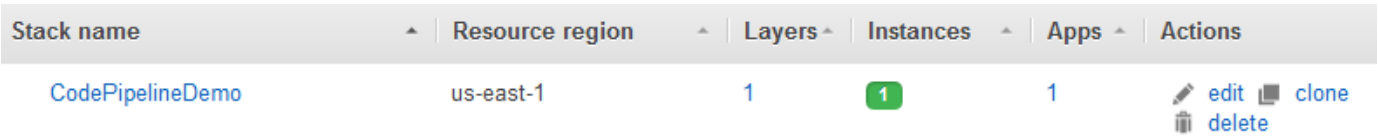
IAM リソースの作成が許容される場合は、このテンプレートによって AWS CloudFormation が IAM リソースを作成する可能性があることを承諾するチェックボックスを選択し、作成を選択します。IAM リソースの作成が受入不可能な場合は、この手順を続行することはできません。

10. CloudFormation ダッシュボードでは、スタックの作成の進行状況を表示できます。次のステップに進む前に、[Status] 列に [CREATE_COMPLETE] が表示されるまで待機します。



スタックでの OpsWorks スタックの作成を確認するには

1. https://console.aws.amazon.com/opsworks/ で OpsWorks コンソールを開きます。
2. OpsWorks スタックダッシュボードで、作成したスタックを表示します。



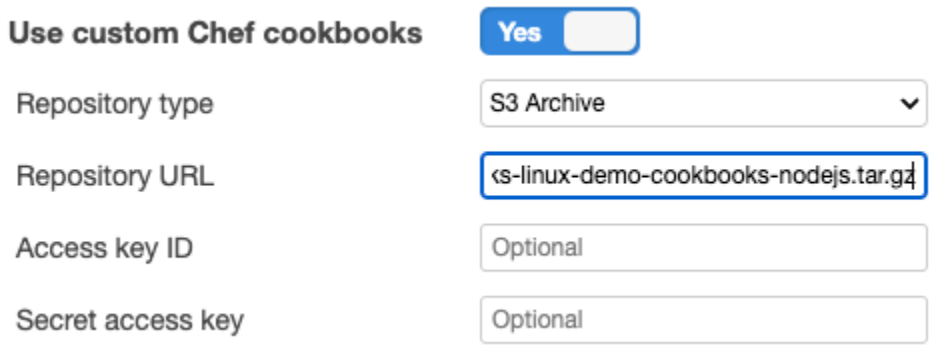
3. スタックを開き、レイヤーとインスタンスを表示します。レイヤーとインスタンスが、CloudFormation テンプレートで指定された名前やその他のメタデータで作成されたことを確認します。カスタム Chef クックブックとレシピを使用するようにスタックとレイヤーを設定する準備ができました。

ステップ 2: カスタムクックブックを使用するようにスタックとレイヤーを設定する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

スタックの Chef 12 OpsWorks スタックでは、カスタムアプリケーションレイヤーを構築するために、独自のクックブックまたはコミュニティで作成されたクックブックが必要です。このチュートリアルでは、Chef のクックブックとレシピのセットが含まれたリポジトリーを参照できます。これらのレシピにより、Node.js パッケージとその依存関係がインスタンスにインストールされます。他の Chef レシピを使用して、「ステップ 4: アプリケーションを OpsWorks スタックに追加する」で用意することになる Node.js アプリケーションをデプロイします。このステップでは、指定する Chef レシピは、アプリケーションの新しいバージョンが CodePipeline によってデプロイされるたびに実行されます。

1. OpsWorks スタックコンソールで、 で作成したスタックを開きますステップ 1: スタックに OpsWorks スタック、レイヤー、インスタンスを作成する。[Stack Settings]、[Edit] の順に選択します。
2. [Use custom Chef cookbooks] を [Yes] に設定します。これにより、関連するカスタムクックブック設定が表示されます。
3. [Repository type] ドロップダウンリストから、[S3 Archive] を選択します。CodePipeline と の両方を使用するには OpsWorks、クックブックソースが S3 である必要があります。
4. [Repository URL] 用に、**`https://s3.amazonaws.com/opsworks-demo-assets/opsworks-linux-demo-cookbooks-nodejs.tar.gz`** を指定します。設定は以下のようになります。



5. [保存] を選択します。
6. ナビゲーションペインで [Layers] (レイヤー) を選択します。
7. ステップ 1: スタックに OpsWorks スタック、レイヤー、インスタンスを作成する で作成したレイヤー の [設定] を選択します。
8. [General Settings] タブで、レイヤー名が Node.js App Server で、レイヤーの短い名前が app1 であることを確認します。[Recipes] を選択します。
9. [Recipes] (レシピ) タブで、[Deploy] (デプロイ) のライフサイクルイベント中に実行するレシピとして **`nodejs_demo`** を指定します。[保存] を選択します。
10. [Security] タブで、[Security groups] ドロップダウンリストから [AWS-OpsWorks-Webapp] セキュリティグループを選択します。
11. [保存] を選択します。

ステップ 3: アプリケーションコードを Amazon S3 バケットにアップロードする

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

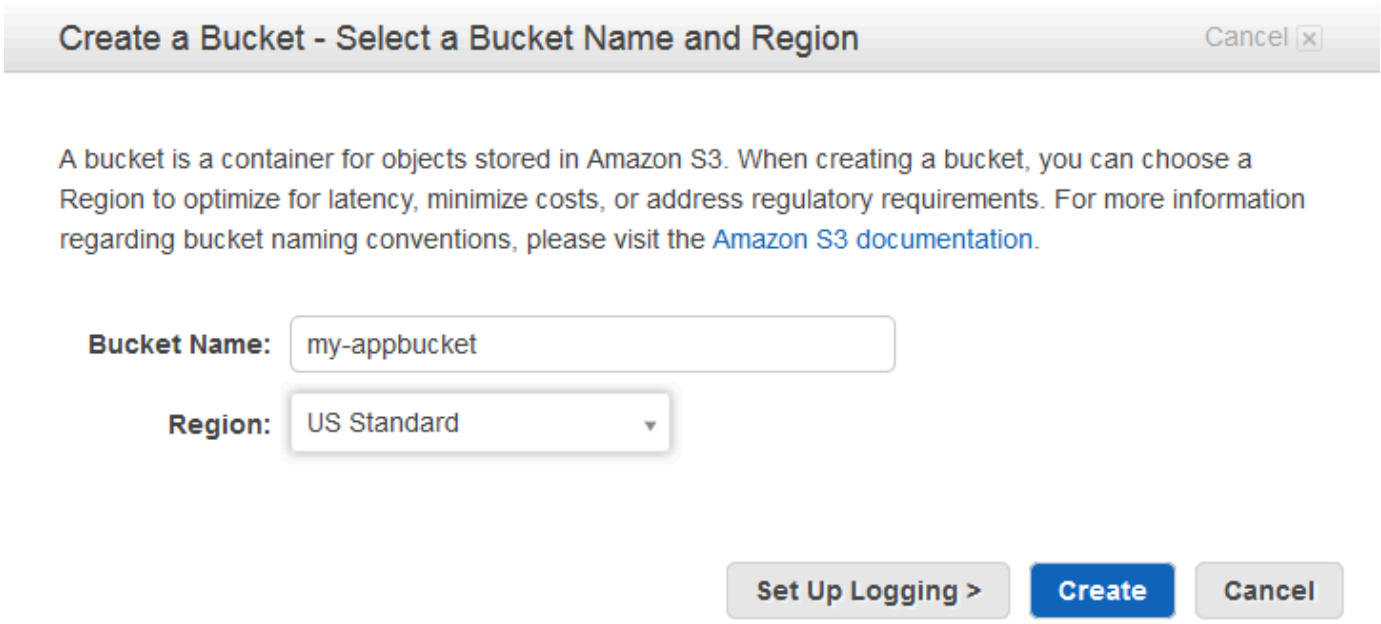
パイプラインの設定の一部としてコードリポジトリへのリンクを指定する必要があるため、パイプラインを作成する前にコードリポジトリを準備してください。このウォークスルーでは、Node.js アプリケーションを Amazon S3 バケットにアップロードします。

CodePipeline は、GitHub または CodeCommit から直接ソースとしてコードを使用できますが、このチュートリアルでは Amazon S3 バケットの使用方法を説明します。このチュートリアルでは、サンプル [Node.js app] (Node.js アプリケーション) を自分の Amazon S3 バケットにアップロードして、アプリケーションを変更できるようにします。このステップで作成する Amazon S3 バケットにより、CodePipeline はアプリケーションコードの変更を検出し、変更されたアプリケーションを自動的にデプロイできます。必要に応じて、既存のバケットを使用できます。バケットが CodePipeline ドキュメントの「Simple Pipeline Walkthrough (Amazon S3 Bucket)」(シンプルなパイプラインのチュートリアル(Amazon S3 バケット)) で説明されている基準を満たしていることを確認します。

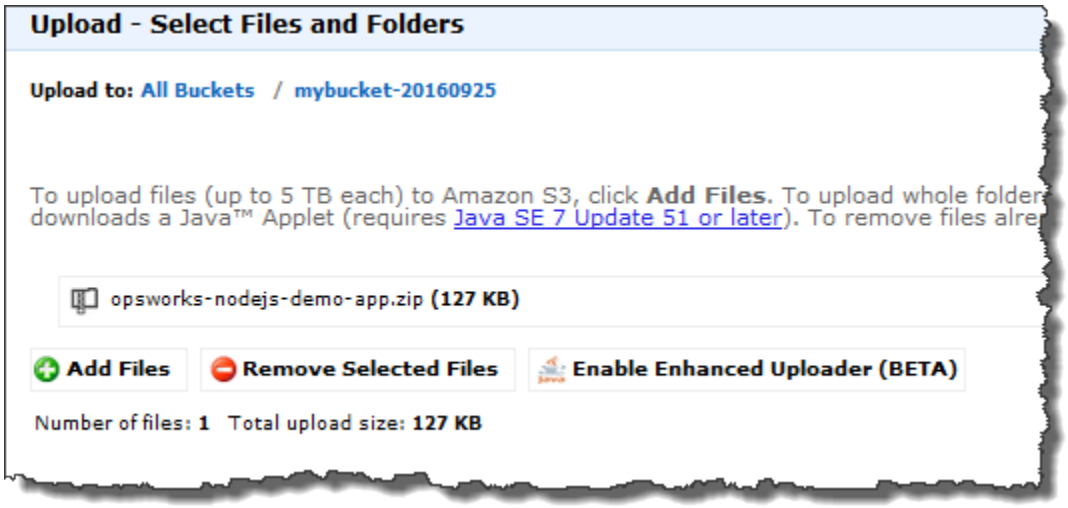
> **Important**
>
> Amazon S3 バケットは、後でパイプラインを作成する同じリージョンに存在する必要があります。現時点では、CodePipeline は米国東部 (バージニア北部) リージョン (us-east-1) の OpsWorks スタックプロバイダーのみをサポートしています。このチュートリアルのすべてのリソースは、米国東部 (バージニア北部) リージョンで作成する必要があります。バケットは、CodePipeline にはバージョニングされたソースが必要なため、バージョニングされている必要もあります。詳細については、「バージョニングの使用」を参照してください。

アプリケーションを Amazon S3 バケットにアップロードするには

1. スタックサンプル Node.js OpsWorks アプリの ZIP ファイルをダウンロードし、ローカルコンピュータの便利な場所に保存します。 samples/opsworks-nodejs-demo-app.zip
2. Amazon S3 コンソール (https://console.aws.amazon.com/s3/) を開きます。
3. バケットの作成 を選択します。
4. [Create a Bucket - Select a Bucket Name and Region] ページの [Bucket Name] で、バケットの一意の名前を入力します。バケット名は、自分の AWS アカウントだけでなく、すべてのアカウントで一意である必要があります。このウォークスルーでは **`my-appbucket`** という名前を使用していますが、`my-appbucket-`*`yearmonthday`* を使用して一意のバケット名にすることができます。[Region] ドロップダウンリストで、[US Standard]、[Create] の順に選択します。[US Standard] は、`us-east-1` と同等です。



5. 作成したバケットを [All Buckets] リストから選択します。
6. バケットのページで [Upload] を選択します。
7. [Upload - Select Files and Folders] ページで、[Add files] を選択します。ステップ 1 で保存した ZIP ファイルを参照し、[Open]、[Start Upload] の順に選択します。



8. アップロードの完了後、バケットのファイルリストから ZIP ファイルを選択し、[Properties] を選択します。
9. [Properties] ペインで、ZIP ファイルへのリンクをコピーし、リンクをメモします。パイプラインを作成するには、このリンクに含まれるバケット名と ZIP ファイル名の一部が必要です。

ステップ 4: アプリケーションを OpsWorks スタックに追加する

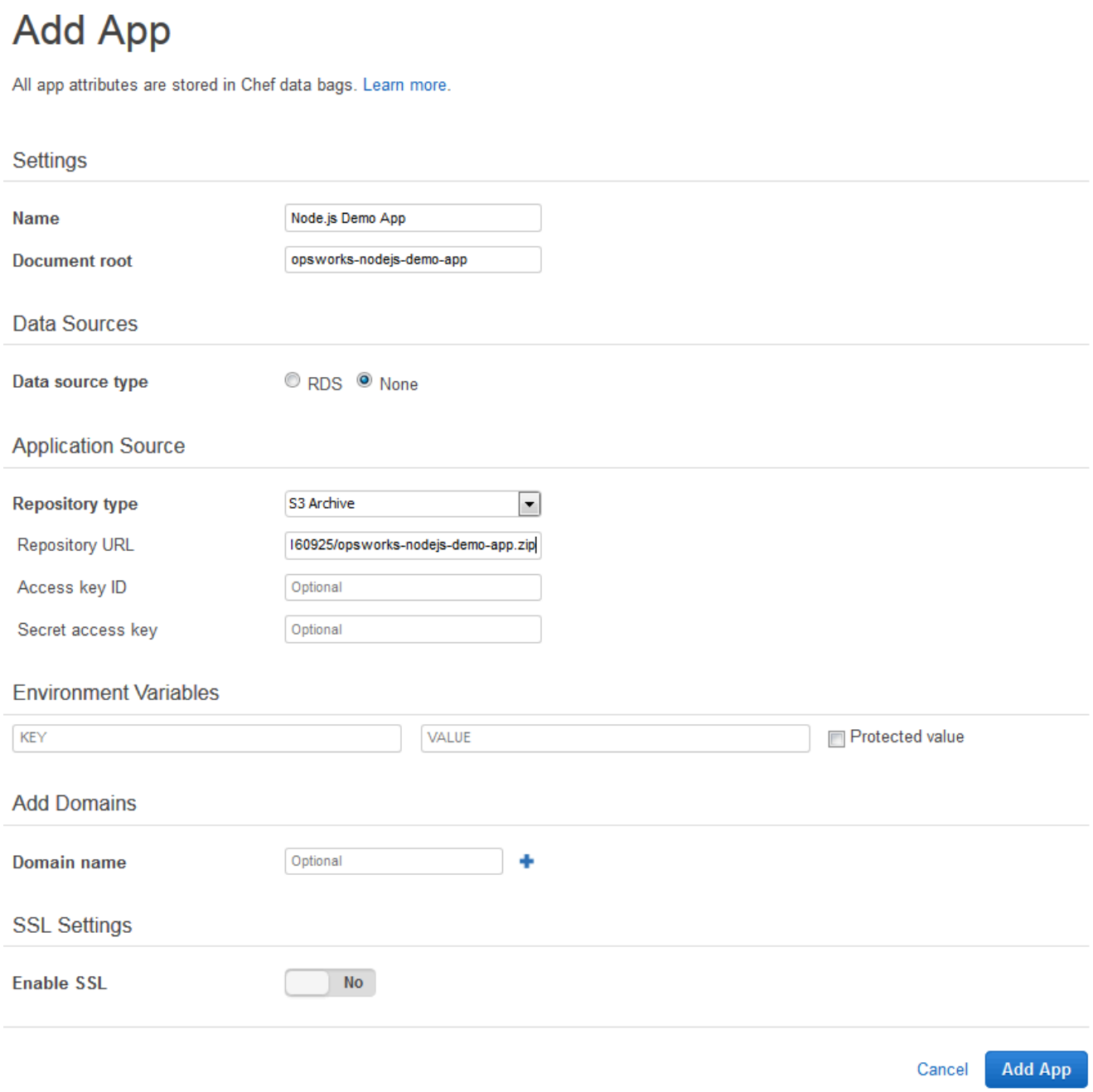
> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

CodePipeline でパイプラインを作成する前に、Node.js テストアプリケーションを OpsWorks スタックに追加します。パイプラインを作成するときは、 OpsWorks スタックに追加したアプリを選択する必要があります。

前の手順のステップ 9 の Amazon S3 バケットリンクを準備してください。この手順を完了するには、テストアプリケーションを保存したバケットへのリンクが必要です。

アプリケーションを OpsWorks スタックに追加するには

1. OpsWorks スタックコンソールで CodePipelineDemo を開き、ナビゲーションペインで Apps を選択します。
2. [Add app] を選択します。
3. [Add App] ページで、以下の情報を入力します。
   a. アプリの名前を指定します。このウォークスルーでは、名前に `Node.js Demo App` を使用します。
   b. [Data source type] で [None] を選択します。このアプリには、外部データベースやデータソースは必要ありません。
   c. [Repository type] ドロップダウンリストで、[S3 Archive] を選択します。
   d. [Repository URL] 文字列ボックスに、「ステップ 3: アプリケーションコードを Amazon S3 バケットにアップロードする」のステップ 9 でコピーした URL を貼り付けます。フォームは次のようになります。



4. このフォームでは、他の設定を変更する必要はありません。[Add App] を選択します。
5. [Apps] (アプリケーション) ページのリストに [Node.js Demo App] (Node.js デモアプリケーション) が表示されたら、次の手順 ステップ 5 : CodePipeline でパイプラインを作成する に進みます。

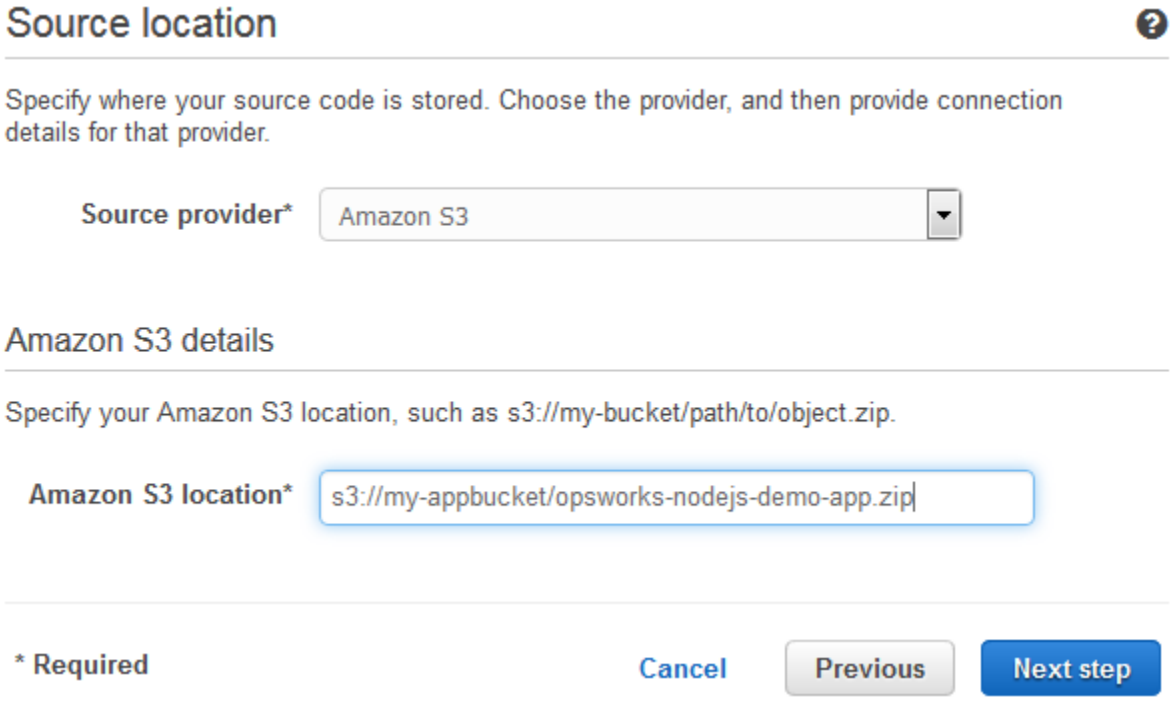
ステップ 5 : CodePipeline でパイプラインを作成する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

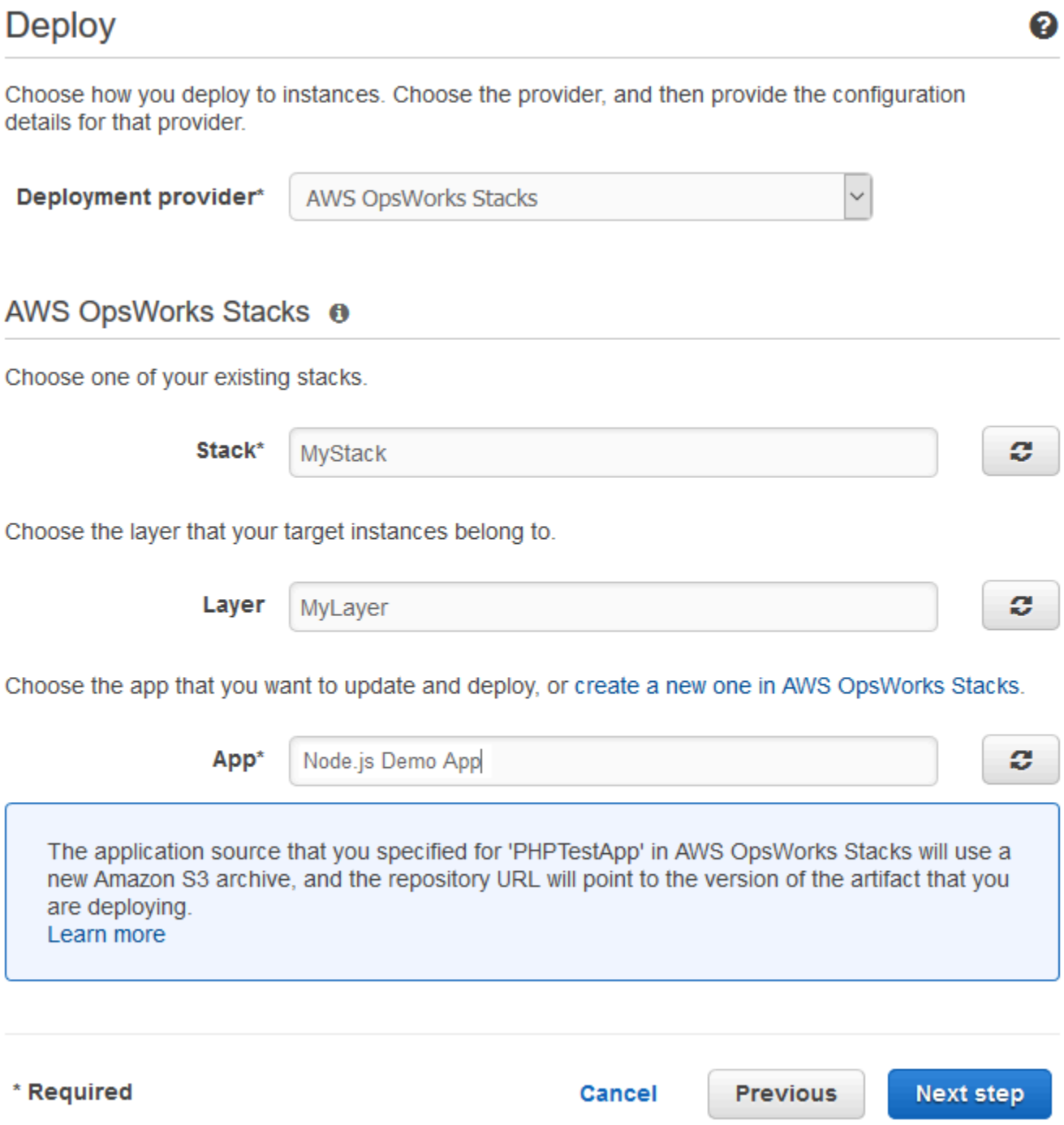
レイヤーと スタックで少なくとも 1 OpsWorks つのインスタンスが設定されたスタックを作成したら、アプリケーションまたは Chef OpsWorks クックブックを スタックリソースにデプロイするプロバイダーとして、 スタックを使用して CodePipeline OpsWorks にパイプラインを作成します。

パイプラインを作成するには

1. CodePipeline コンソール (https://console.aws.amazon.com/codepipeline/) を開きます。
2. パイプラインの作成 を選択します。
3. [Getting started with CodePipeline] (コードパイプラインの使用開始) ページで、タイプ [**MyOpsWorksPipeline**] など、アカウントに一意なパイプライン名を入力した後、[Next step] (次のステップ) を選択します。
4. [Source Location] (送信元の場所) ページで、[Source provider] (送信元のプロバイダー) ドロップダウンリストからの [Amazon S3] を選択します。
5. [Amazon S3 details] (Amazon S3 詳細) 領域で、使用する Amazon S3 バケットパスを **s3://*bucket-name*/*file name*** という形式で入力します。ステップ 3: アプリケーションコードを Amazon S3 バケットにアップロードする のステップ 9で記したリンクを参照してください。このウォークスルーでは、パスは `s3://my-appbucket/opsworks-nodejs-demo-app.zip` になります。[次のステップ] を選択します。



6. [Build] ページのドロップダウンリストで、[No Build]、[Next step] の順に選択します。
7. [デプロイ] ページで、デプロイプロバイダーとして [OpsWorks Stacks] を選択します。



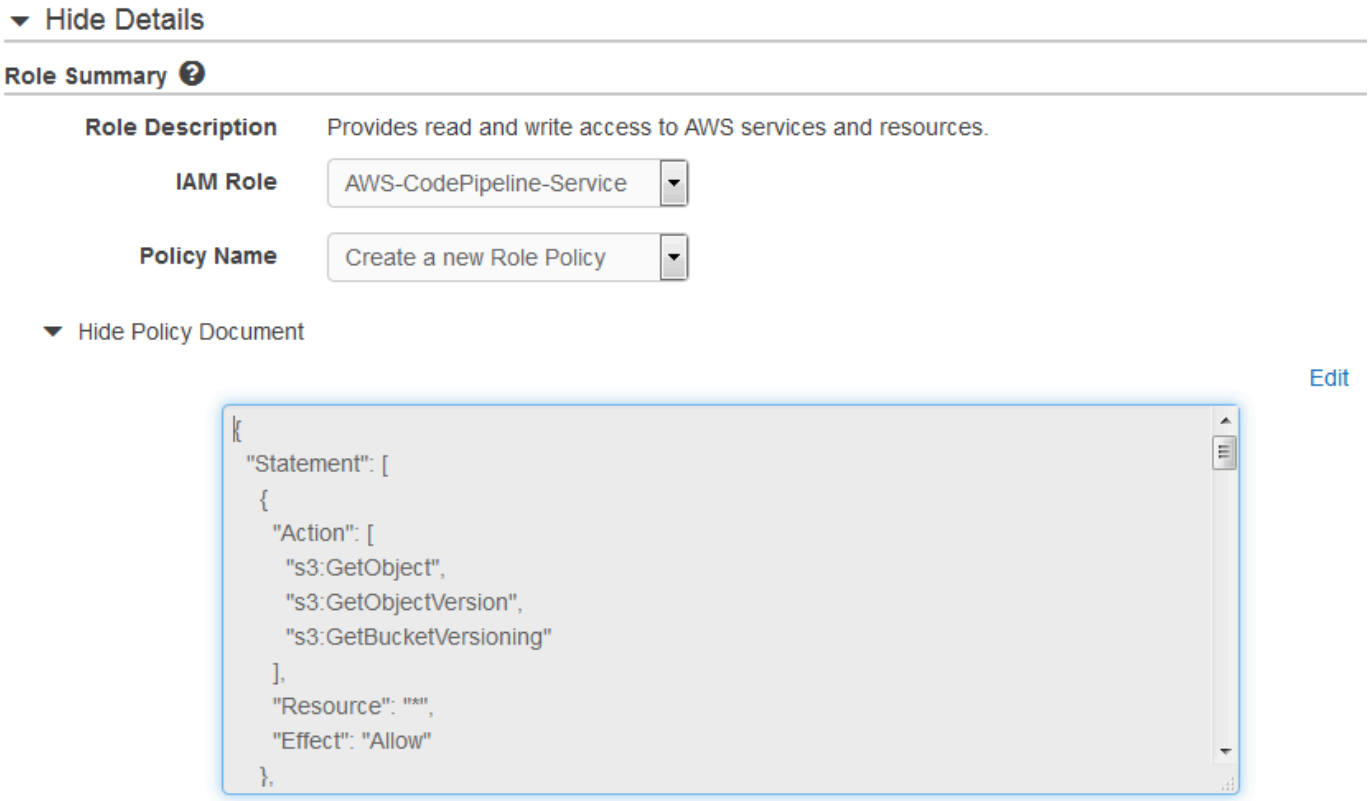
8. [Stack] フィールドに、`CodePipelineDemo` または ステップ 1: スタックに OpsWorks スタック、レイヤー、インスタンスを作成する で作成したスタックの名前を入力します。
9. [Layer] (レイヤー) フィールドに、「`Node.js App Server`」と入力するか、「ステップ 1: スタックに OpsWorks スタック、レイヤー、インスタンスを作成する」で作成したレイヤーの名前を入力します。

10. [App] (アプリケーション) フィールドで、ステップ 3: アプリケーションコードを Amazon S3 バケットにアップロードする で Amazon S3 にアップロードしたアプリケーションを選択してから、[Next step] (次のステップ) を選択します。
11. AWS サービスロール ページで、ロールの作成 を選択します。

    ユーザーに作成されるロール (AWS-CodePipeline-Service) を説明する IAM コンソールページとともに新しいページが開きます。[Policy name] ドロップダウンリストで、[Create new policy] を選択します。ポリシードキュメントに次のコンテンツがあることを確認します。[Edit] を選択し、必要に応じてポリシードキュメントを変更します。

```
{
    "Statement": [
        {
            "Action": [
                "s3:GetObject",
                "s3:GetObjectVersion",
                "s3:GetBucketVersioning"
            ],
            "Resource": "*",
            "Effect": "Allow"
        },
        {
            "Action": "opsworks:*",
            "Resource": "*",
            "Effect": "Allow"
        }
    ]
}
```

    ポリシードキュメントへの変更が完了したら、[Allow] を選択します。変更が IAM コンソールに表示されます。



> **Note**
>
> ロールの作成に失敗した場合は、[AWS-CodePipeline-Service] (AWS-CodePipeline サービス) という名前の IAM ロールがすでにある可能性があります。2016 年 5 月より前に AWS-CodePipeline-Service ロールを使用している場合、ロールにはデプロイプロバイダーとして OpsWorks スタックを使用するアクセス許可がない可能性があります。この場合、このステップで見たようにポリシーステートメントを更新する必要があります。エラーメッセージが表示された場合は、この手順の最初に戻ってから、[Create role] (ロールの作成) の代わりに [Use existing role] (既存のロールを使用する) を選択します。既存のロールを使用する場合は、このステップに示される権限を含むポリシーがロールにアタッチされている必要があります。サービス ロールとそのポリシーステートメントの詳細については、IAM サービスロールのポリシーを編集するを参照してください。

12. ロール作成プロセスが成功すると、IAM ページが閉じ、AWS サービスロール ページに戻ります。[次のステップ] を選択します。
13. [Review your pipeline] ページで、ページに表示される選択肢を確認した後、[Create pipeline] を選択します。

14. 準備ができたパイプラインは、自動的にソースコードを見つけ、アプリケーションをスタックにデプロイし始めます。この処理には数分かかることもあります。

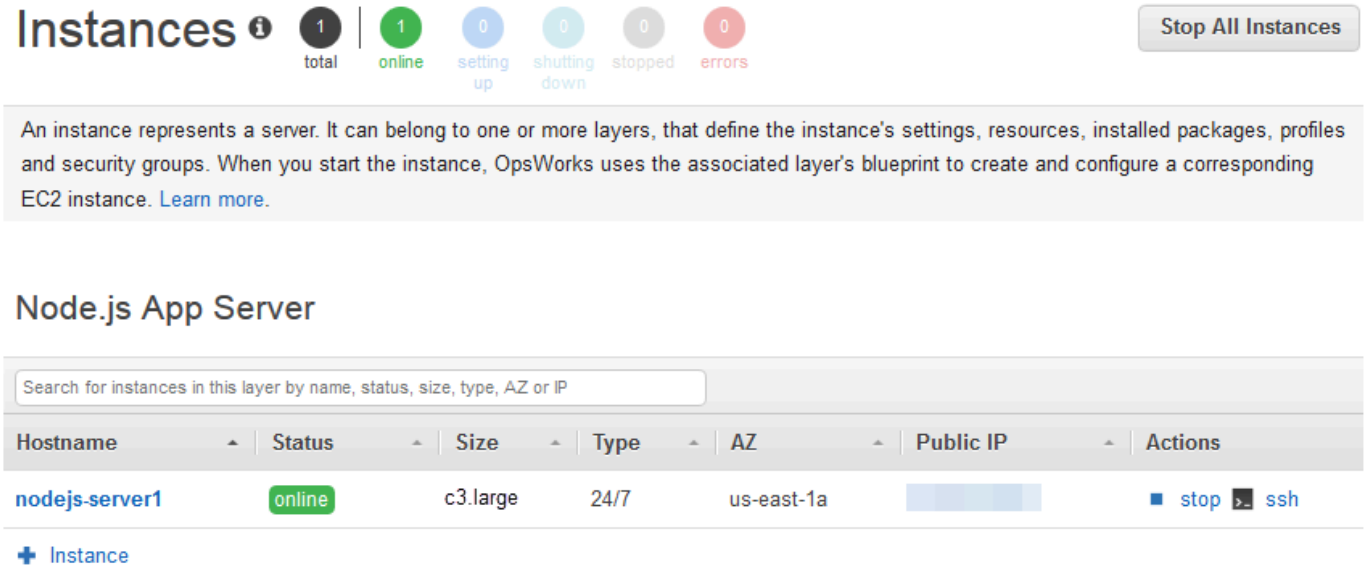
ステップ 6: OpsWorks スタックでアプリケーションのデプロイを確認する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

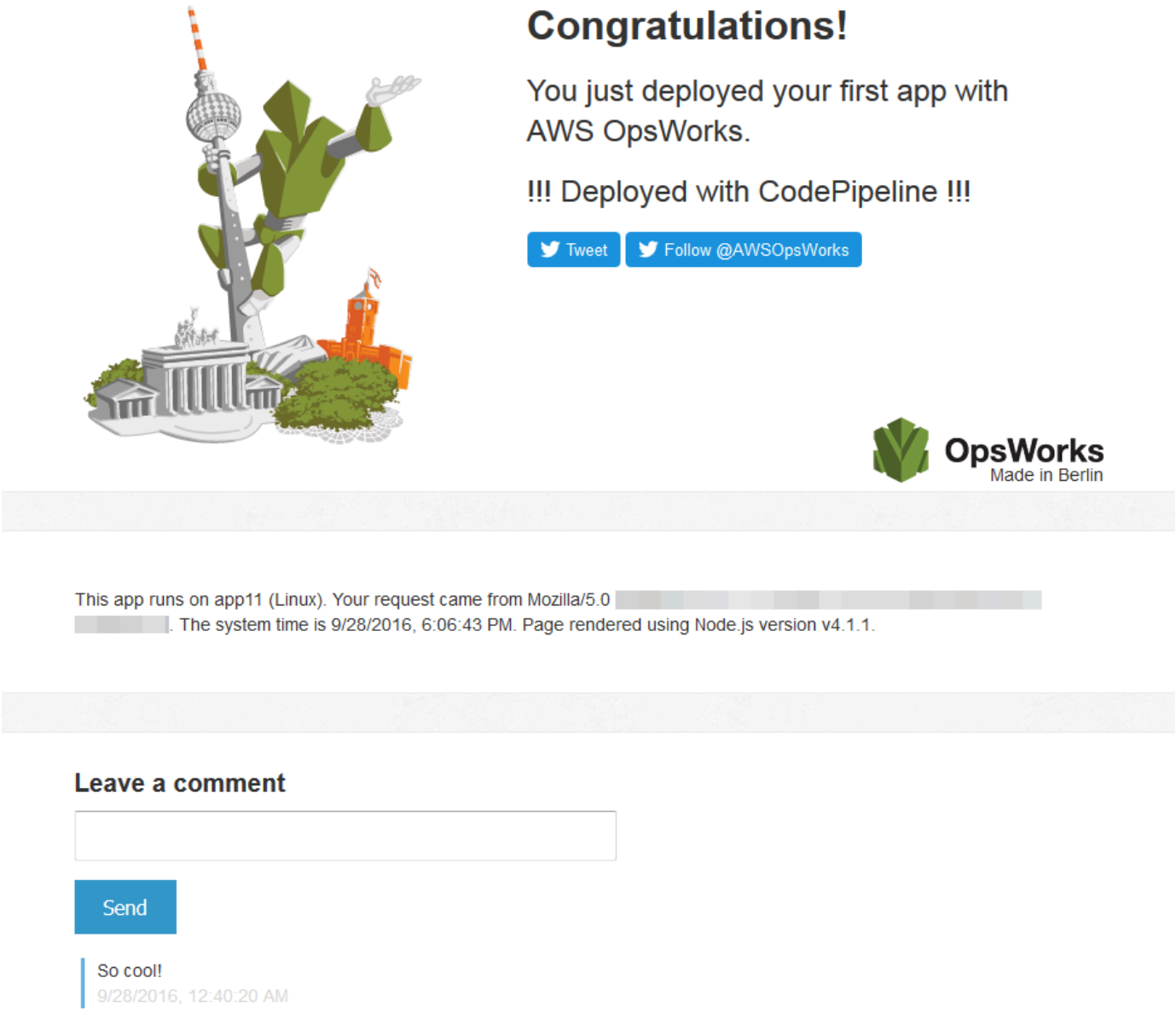
CodePipeline がスタックに Node.js アプリケーションをデプロイしたことを確認するには、「ステップ 1: スタックに OpsWorks スタック、レイヤー、インスタンスを作成する」で作成したインスタンスにサインインします。Node.js ウェブアプリケーションを表示して使用できる必要があります。

OpsWorks スタックインスタンスでアプリケーションのデプロイを確認するには

1. https://console.aws.amazon.com/opsworks/ で OpsWorks コンソールを開きます。
2. OpsWorks スタックダッシュボードで、CodePipelineDemo を選択し、Node.js App Server を選択します。
3. ナビゲーションペインで [Instances] を選択した後、作成したインスタンスのパブリック IP アドレスを選択し、ウェブアプリケーションを表示します。



アプリケーションが新しいブラウザタブに表示されます。



ステップ 7 (オプション): アプリケーションコードを更新し、CodePipeline が自動的にアプリケーションを再デプロイすることを確認します。

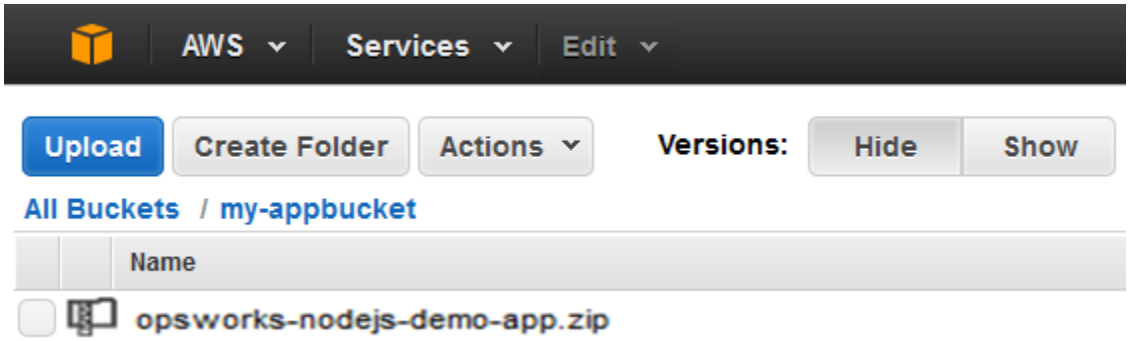
> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS

re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

CodePipeline を使用してデプロイしたアプリケーションまたはクックブックのコードを変更すると、更新されたアーティファクトは CodePipeline によってターゲットインスタンス (この場合はターゲットスタックスタック) OpsWorks に自動的にデプロイされます。このセクションでは、サンプル Node.js アプリケーションでコードを更新した際の自動再デプロイを示します。このウォークスルー用のアプリケーションコードがまだローカルに保存してあり、ウォークスルーを開始してから他の誰もコードを変更していない場合は、この手順のステップ 1~4 をスキップできます。

サンプルアプリケーションでコードを編集するには

1. にサインイン AWS マネジメントコンソール し、https://console.aws.amazon.com/s3/ で Amazon S3 コンソールを開きます。
2. サンプル Node.js アプリケーションを保存しているバケットを開きます。

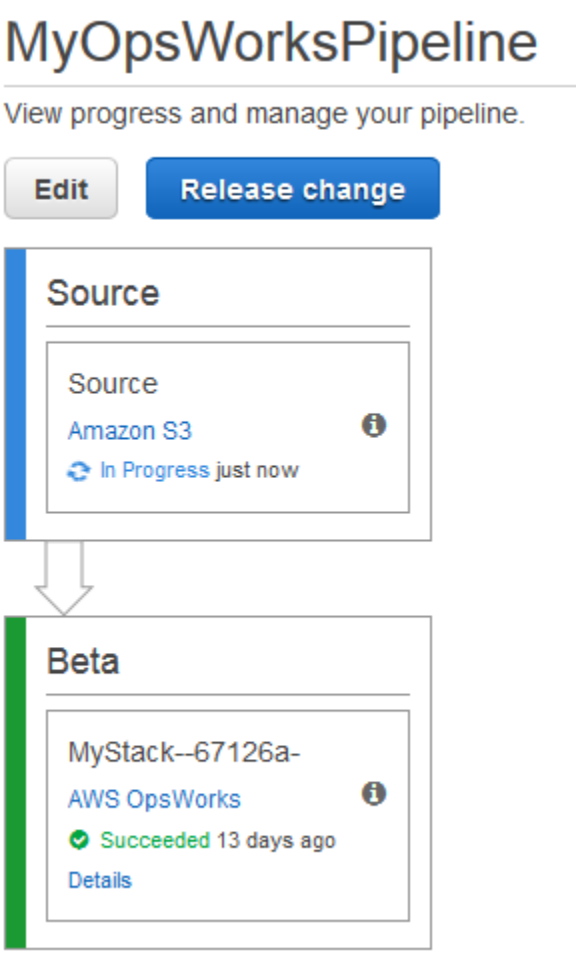


3. アプリケーションを含む ZIP ファイルを選択します。[Actions] メニューで、[Download] を選択します。
4. ダイアログボックスでコンテクストメニューを開き (右クリック)、[Download] を選択して ZIP ファイルを使いやすい場所に保存します。[OK] を選択してください。
5. ZIP ファイルのコンテンツを使いやすい場所に展開します。展開したフォルダとそのサブフォルダやコンテンツで権限を変更し、編集を許可することが必要な場合があります。[opsworks-nodejs-demo-app\views] フォルダで、編集する [header.html] ファイルを開きます。
6. 「`You just deployed your first app with`」という語句で検索します。`deployed` という単語を `updated` に置き換えます。次の行で `OpsWorks.` を `OpsWorks and AWS CodePipeline.` に変更します。テキスト以外の部分を編集しないでください。

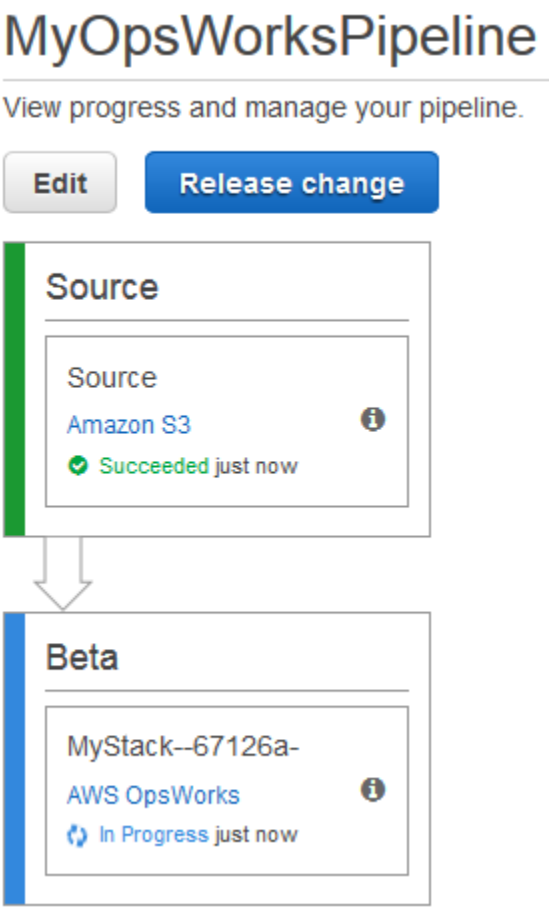
```
<div id="main" role="main">LF
  <div class="container">LF
    <div class="hero-unit">LF
      <div class="robot">LF
        <h1>Congratulations!</h1>LF
        <h2>LF
          You just updated your first app with<br/>LF
          AWS OpsWorks and AWS CodePipeline.LF
        </h2>LF
```

7. header.html ファイルを保存して閉じます。
8. opsworks-nodejs-demo-app フォルダを圧縮し、ZIP ファイルを便利な場所に保存します。ZIP ファイルの名前は変更しないでください。
9. 新しい ZIP ファイルを Amazon S3 バケットにアップロードします。このウォークスルーでは、バケット名は my-appbucket です。
10. CodePipeline コンソールを開き、スタックパイプライン (MyOpsWorksPipeline) OpsWorks を開きます。[Release Change] を選択します。

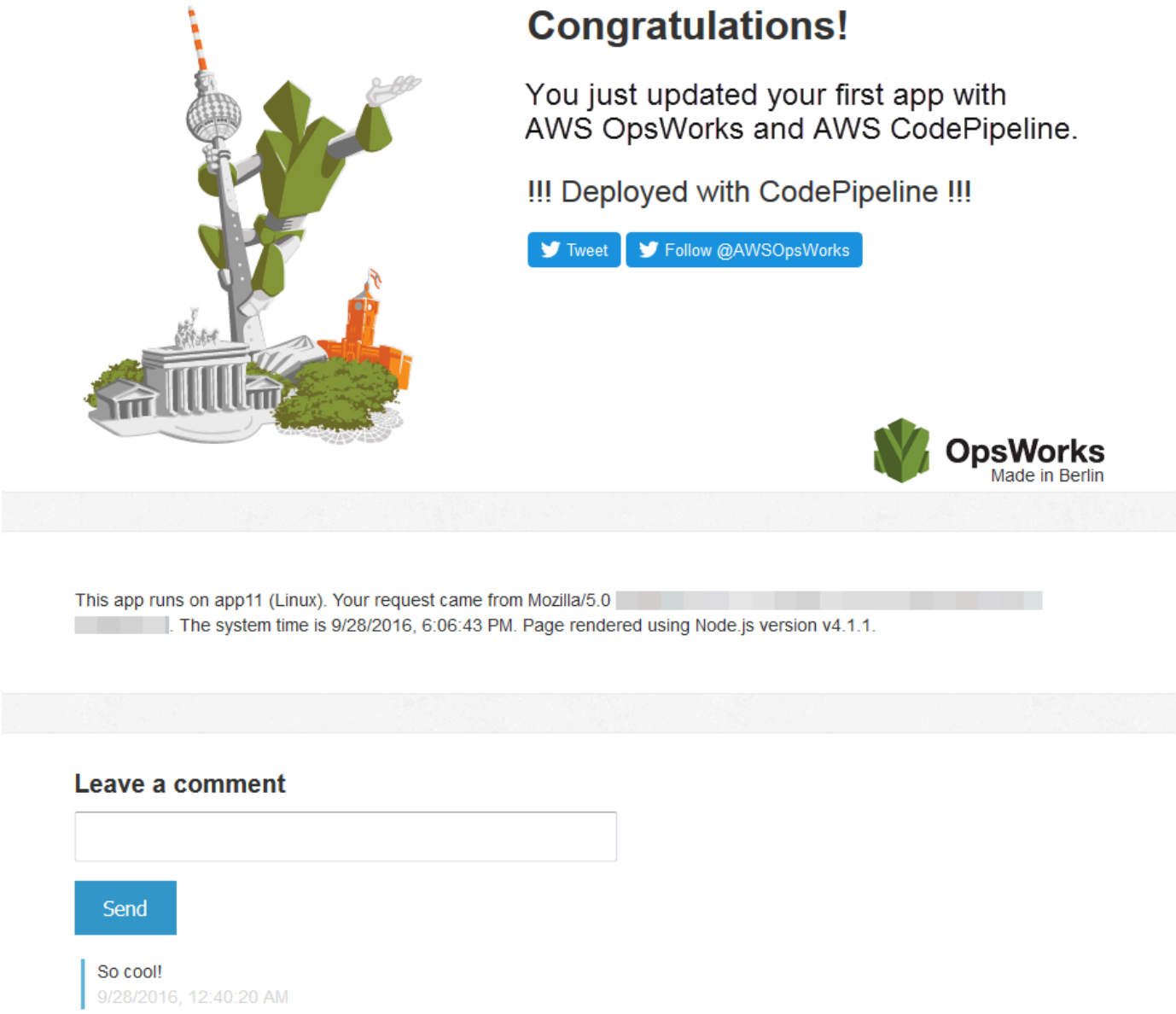
    (Amazon S3 バケット内のアプリケーションの更新バージョンから CodePipeline がコード変更を検出するまで待機できます。時間を節約するために、このチュートリアルでは、単に [Release Change] (変更をリリース) を選択するように指示します)。
11. パイプラインのステージを通じて CodePipeline が実行される様子を確認します。最初に、CodePipeline はソースアーティファクトに対する変更を検出します。



CodePipeline は、更新されたコードを OpsWorks スタックのスタックにプッシュします。



12. パイプラインの両ステージが正常に完了したら、 OpsWorks スタックでスタックを開きます。
13. スタックのプロパティページで、[Instances] を選択します。
14. [Public IP] 列で、インスタンスのパブリック IP アドレスを選択し、更新されたアプリケーションのテキストを表示します。



ステップ 8 (オプション): リソースをクリーンアップする

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS

re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

AWS アカウントへの不要な請求を防ぐために、このウォークスルーに使用した AWS リソースを削除できます。これらの AWS リソースには、 OpsWorks スタックスタック、IAM ロールとインスタンスプロファイル、CodePipeline で作成したパイプラインが含まれます。ただし、 スタックと CodePipeline OpsWorks の詳細については、これらの AWS リソースを引き続き使用することをお勧めします。これらのリソースを保持すりには、このウォークスルーを完了する必要があります。

アプリケーションをスタックから削除するには

CloudFormation テンプレートの一部としてアプリを作成または適用しなかったため、スタックを削除する前に Node.js テストアプリを削除します CloudFormation。

1. OpsWorks スタックコンソールのサービスナビゲーションペインで、アプリを選択します。
2. [Apps] ページで [Node.js Demo App] を選択した後、[Actions] で [delete] を選択します。確認を求めるプロンプトが表示されたら、Delete. OpsWorks Stacks を選択するとアプリが削除されます。

スタックを削除するには

CloudFormation テンプレートを実行してスタックを作成したため、テンプレートが作成したレイヤー、インスタンス、インスタンスプロファイル、セキュリティグループなどのスタックを CloudFormation コンソールで削除できます。

1. CloudFormation コンソールを開きます。
2. CloudFormation コンソールダッシュボードで、作成したスタックを選択します。[Actions] メニューで、[Delete Stack] を選択します。確認を求められたら [Yes, Delete] を選択します。
3. スタックの [Status] 列に [DELETE_COMPLETE] と表示されるまで待機します。

パイプラインを削除するには

1. CodePipeline コンソールを開きます。
2. CodePipeline ダッシュボードで、このチュートリアルで作成したパイプラインを選択します。
3. パイプラインページで、[Edit] を選択します。
4. [Edit] ページで、[Delete] を選択します。確認を求められたら [Delete] (削除) を選択します。

AWS CodePipeline OpsWorks スタックあり - Chef 11 スタック

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

AWS CodePipeline により、トラックコードがCodeCommit、Amazon Simple Storage Service (Amazon S3)、GitHubなどのソースから変更される継続的デリバリーパイプラインを作成できます。このトピックの例では、CodePipeline からシンプルなパイプラインを作成し、 OpsWorks スタックレイヤーで実行するコードのデプロイツールとして使用する方法を説明します。この例では、シンプルな PHP アプリケーションのパイプラインを作成し、Chef 11.10 OpsWorks スタック (この場合は 1 つのインスタンス) のレイヤー内のすべてのインスタンスでアプリケーションを実行するように スタックに指示します。

> **Note**
>
> このトピックでは、パイプラインを使用して Chef 11.10 スタックでアプリケーションを実行および更新する方法について説明します。パイプラインを使用して Chef 12 スタックでアプリケーションを実行および更新する方法については、「AWS CodePipeline OpsWorks スタックあり - Chef 12 スタック」を参照してください。Amazon S3 バケットに配信されるコンテンツには、カスタマーコンテンツが含まれている場合があります。機密データの削除の詳細については、「S3 バケットを空にする方法」または「S3 バケットを削除する方法」を参照してください。

トピック

- 前提条件
- サポートされている他のシナリオ
- ステップ 1: OpsWorks スタックでスタック、レイヤー、インスタンスを作成する
- ステップ 2 : アプリケーションコードを Amazon S3 バケットにアップロードする
- ステップ 3: アプリケーションを OpsWorks スタックに追加する

- ステップ 4 : CodePipeline でパイプラインを作成する
- ステップ 5: OpsWorks スタックでのアプリケーションのデプロイを検証する
- ステップ 6 (オプション): アプリケーションコードを更新し、CodePipeline が自動的にアプリケーションを再デプロイすることを確認します。
- ステップ 7 (オプション): リソースをクリーンアップする

前提条件

このウォークスルーを開始する前に、以下のすべてのタスクを実行するための管理者権限があることを確認してください。[AdministratorAccess] ポリシーが適用されているグループのメンバーになることができるか、次の表に示された権限やポリシーを持つグループのメンバーになることができる。セキュリティのベストプラクティスとして、必要な権限を個別のユーザーアカウントに割り当てるのではなく、次のタスクを実行する権限を持つグループにユーザーが属している必要があります。

IAM でセキュリティグループを作成し、権限をグループに割り当てる方法の詳細については、「Creating IAM User Group」(IAM ユーザーグループの作成) を参照してください。 OpsWorks スタックのアクセス許可の管理の詳細については、「ベストプラクティス: アクセス許可の管理」を参照してください。

権限	グループにアタッチすることが推奨されるポリシー
スタックで OpsWorks スタック、レイヤー、インスタンスを作成および編集します。	AWSOpsWorks_FullAccess
CloudFormationでテンプレートを作成、編集、実行します。	AmazonCloudFormationFullAccess
Amazon S3 バケットの作成、編集、アクセスを行います。	AmazonS3FullAccess
CodePipeline でパイプライン、特に OpsWorks スタックをプロバイダーとして使用するパイプラインを作成、編集、実行します。	AWSCodePipeline_FullAccess

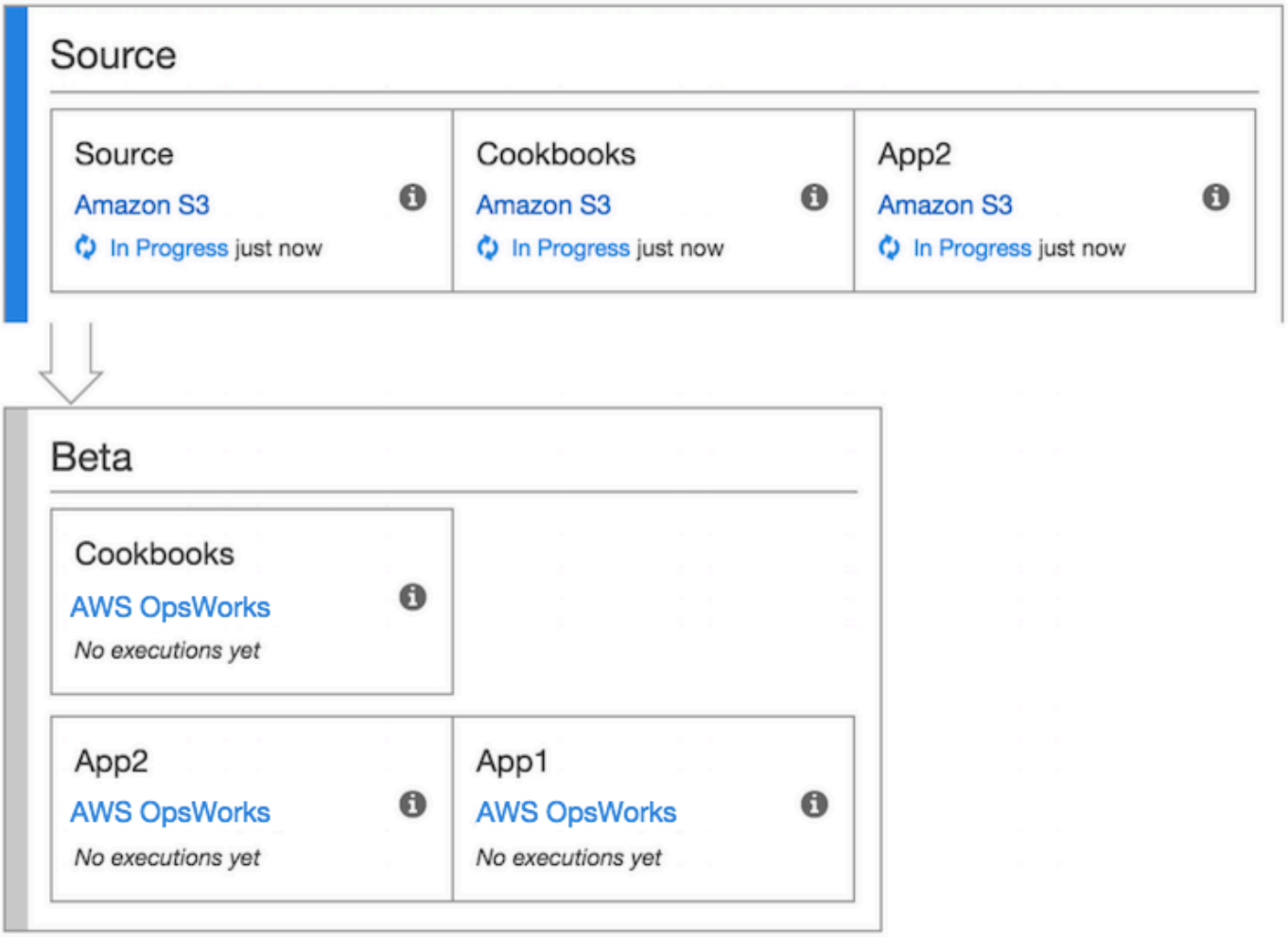
Amazon EC2 キーペアも備える必要があります。このウォークスルーでサンプルスタック、レイヤー、インスタンスを作成する CloudFormation テンプレートを実行するときに、このキーペアの

名前を指定するように求められます。Amazon EC2 コンソールでのキーペア 取得の詳細については、Amazon EC2 ドキュメントの「Create a Key Pair」(キーペアの作成) を参照してください。キーペア は、米国東部 (バージニア北部) リージョンにある必要があります。そのリージョンに既存のキーペアがある場合は、そのキーペアを使用できます。

サポートされている他のシナリオ

このウォークスルーでは、[Source] を 1 つ、[Deploy] ステージを 1 つ含むシンプルなパイプラインを作成します。ただし、 OpsWorks スタックをプロバイダーとして使用する、より複雑なパイプラインを作成できます。サポートされているパイプラインとシナリオの例を以下に示します。

- パイプラインを編集し、Chef クックブックを [Source] ステージに、更新されたクックブックの関連ターゲットを [Deploy] に追加できます。この場合は、ソースを変更した際にクックブックの更新をトリガーする [デプロイ] アクションを追加します。更新されたクックブックは、アプリの前にデプロイされます。
- カスタムクックブックと複数のアプリケーションを使用して複雑なパイプラインを作成し、OpsWorks スタックスタックにデプロイできます。パイプラインはアプリケーションソースとクックブックソースの両方の変化を追跡し、変更を行った際に再デプロイを行います。同様の複雑なパイプラインの例を以下に示します。



CodePipeline の使用方法の詳細については、「CodePipeline」を参照してください。

ステップ 1: OpsWorks スタックでスタック、レイヤー、インスタンスを作成する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックをパイプラインのデプロイプロバイダーとして使用するには、まずスタック、レイヤー、およびレイヤーに少なくとも 1 つのインスタンスが必要です。「Linux スタックの開始方法」または「Windows スタックの開始方法」の手順に従って OpsWorks スタックを作成できますが、時間を節約するために、この例では AWS CloudFormation テンプレートを使用して Linux ベースの Chef 11.10 スタック、レイヤー、インスタンスを作成します。このテンプレートで作成されたインスタンスは、Amazon Linux 2016.03 を実行します。インスタンスタイプは `c3.large` です。

> **Important**
>
> CloudFormation テンプレートは、後でアプリケーションをアップロードする Amazon S3 バケットと同じリージョンと、後で CodePipeline でパイプラインを作成するリージョンに保存して実行する必要があります。現時点では、CodePipeline は米国東部 (バージニア北部) リージョン (us-east-1) の OpsWorks スタックプロバイダーのみをサポートしています。このチュートリアルのすべてのリソースは、米国東部 (バージニア北部) リージョンで作成する必要があります。
>
> スタックの作成が失敗した場合は、アカウントで許可されている IAM ロールの最大数に達している可能性があります。またスタックの作成は、アカウントがインスタンスを `c3.large` インスタンスタイプで起動できないときに、失敗する場合があります。例えば、 AWS 無料利用枠を使用している場合に、`Root device type: must be included in EBS`などのエラーが発生することがあります。 AWS 無料利用枠によって課される制限など、アカウントで作成が許可されているインスタンスタイプに制限がある場合は、テンプレートのインスタンスブロックの `InstanceType`パラメータの値を、アカウントで使用できるインスタンスタイプに変更してみてください。

を使用してスタック、レイヤー、インスタンスを作成するには CloudFormation

1. 次の CloudFormation テンプレートを新しいプレーンテキストドキュメントにコピーします。ファイルの保存場所をローカルコンピュータ上の使いやすい場所に指定し、[NewOpsWorksStack.template] などの使いやすい名前を付けます。

```
{
  "AWSTemplateFormatVersion": "2010-09-09",
  "Mappings": {
    "Region2Principal": {
      "us-east-1": {
        "EC2Principal": "ec2.amazonaws.com",
        "OpsWorksPrincipal": "opsworks.amazonaws.com"
      },
```

```
      "us-west-2": {
        "EC2Principal": "ec2.amazonaws.com",
        "OpsWorksPrincipal": "opsworks.amazonaws.com"
      },
      "us-west-1": {
        "EC2Principal": "ec2.amazonaws.com",
        "OpsWorksPrincipal": "opsworks.amazonaws.com"
      },
      "eu-west-1": {
        "EC2Principal": "ec2.amazonaws.com",
        "OpsWorksPrincipal": "opsworks.amazonaws.com"
      },
      "ap-southeast-1": {
        "EC2Principal": "ec2.amazonaws.com",
        "OpsWorksPrincipal": "opsworks.amazonaws.com"
      },
      "ap-northeast-1": {
        "EC2Principal": "ec2.amazonaws.com",
        "OpsWorksPrincipal": "opsworks.amazonaws.com"
      },
      "ap-northeast-2": {
        "EC2Principal": "ec2.amazonaws.com",
        "OpsWorksPrincipal": "opsworks.amazonaws.com"
      },
      "ap-southeast-2": {
        "EC2Principal": "ec2.amazonaws.com",
        "OpsWorksPrincipal": "opsworks.amazonaws.com"
      },
      "sa-east-1": {
        "EC2Principal": "ec2.amazonaws.com",
        "OpsWorksPrincipal": "opsworks.amazonaws.com"
      },
      "cn-north-1": {
        "EC2Principal": "ec2.amazonaws.com.cn",
        "OpsWorksPrincipal": "opsworks.amazonaws.com.cn"
      },
      "eu-central-1": {
        "EC2Principal": "ec2.amazonaws.com",
        "OpsWorksPrincipal": "opsworks.amazonaws.com"
      }
    }
  },
  "Parameters": {
    "EC2KeyPairName": {
```

```
  "Type": "String",
  "Description": "The name of an existing EC2 key pair that allows you to use SSH
to connect to the OpsWorks instance."
 }
 },
 "Resources": {
"CPOpsDeploySecGroup": {
  "Type": "AWS::EC2::SecurityGroup",
  "Properties": {
    "GroupDescription" : "Lets you manage OpsWorks instances deployed to by
CodePipeline"
  }
},
"CPOpsDeploySecGroupIngressHTTP": {
  "Type": "AWS::EC2::SecurityGroupIngress",
  "Properties" : {
    "IpProtocol" : "tcp",
       "FromPort" : "80",
       "ToPort" : "80",
       "CidrIp" : "0.0.0.0/0",
 "GroupId": {
   "Fn::GetAtt": [
     "CPOpsDeploySecGroup", "GroupId"
   ]
 }
     }
},
"CPOpsDeploySecGroupIngressSSH": {
  "Type": "AWS::EC2::SecurityGroupIngress",
  "Properties" : {
    "IpProtocol" : "tcp",
       "FromPort" : "22",
       "ToPort" : "22",
       "CidrIp" : "0.0.0.0/0",
 "GroupId": {
   "Fn::GetAtt": [
     "CPOpsDeploySecGroup", "GroupId"
   ]
 }
  }
},
"MyStack": {
     "Type": "AWS::OpsWorks::Stack",
     "Properties": {
```

```
        "Name": {
          "Ref": "AWS::StackName"
        },
        "ServiceRoleArn": {
          "Fn::GetAtt": [
            "OpsWorksServiceRole",
            "Arn"
          ]
        },
  "ConfigurationManager" : { "Name": "Chef","Version": "11.10" },
  "DefaultOs": "Amazon Linux 2016.03",
        "DefaultInstanceProfileArn": {
          "Fn::GetAtt": [
            "OpsWorksInstanceProfile",
            "Arn"
          ]
        }
      }
    },
    "MyLayer": {
      "Type": "AWS::OpsWorks::Layer",
      "Properties": {
        "StackId": {
          "Ref": "MyStack"
        },
        "Name": "MyLayer",
        "Type": "php-app",
  "Shortname": "mylayer",
        "EnableAutoHealing": "true",
        "AutoAssignElasticIps": "false",
        "AutoAssignPublicIps": "true",
  "CustomSecurityGroupIds": [
    {
      "Fn::GetAtt": [
              "CPOpsDeploySecGroup", "GroupId"
      ]
          }
        ]
      },
      "DependsOn": [
        "MyStack",
        "CPOpsDeploySecGroup"
      ]
    },
```

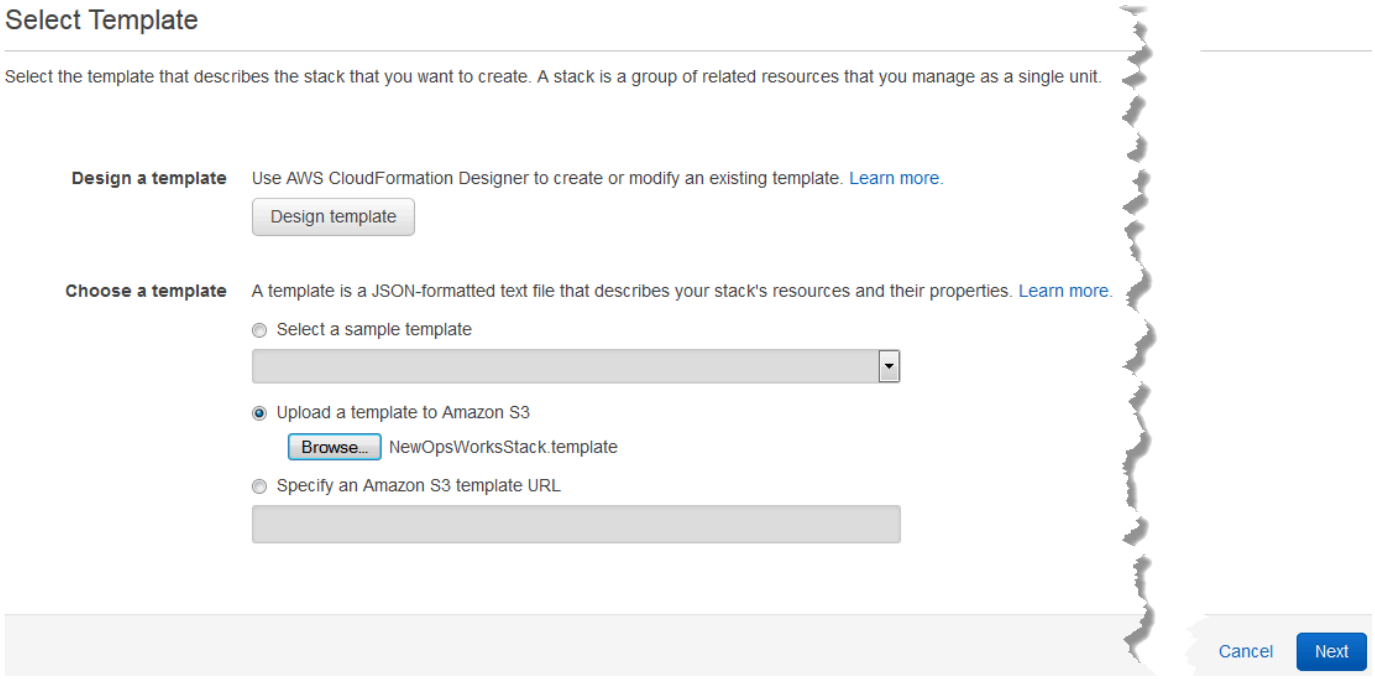
```
    "OpsWorksServiceRole": {
      "Type": "AWS::IAM::Role",
      "Properties": {
        "AssumeRolePolicyDocument": {
          "Statement": [
            {
              "Effect": "Allow",
              "Principal": {
                "Service": [
                  {
                    "Fn::FindInMap": [
                      "Region2Principal",
                      {
                        "Ref": "AWS::Region"
                      },
                      "OpsWorksPrincipal"
                    ]
                  }
                ]
              },
              "Action": [
                "sts:AssumeRole"
              ]
            }
          ]
        },
        "Path": "/",
        "Policies": [
          {
            "PolicyName": "opsworks-service",
            "PolicyDocument": {
              "Statement": [
                {
                  "Effect": "Allow",
                  "Action": [
                    "ec2:*",
                    "iam:PassRole",
                    "cloudwatch:GetMetricStatistics",
                    "elasticloadbalancing:*"
                  ],
                  "Resource": "*"
                }
              ]
            }
```

```
          }
        ]
      }
    },
    "OpsWorksInstanceProfile": {
      "Type": "AWS::IAM::InstanceProfile",
      "Properties": {
        "Path": "/",
        "Roles": [
          {
            "Ref": "OpsWorksInstanceRole"
          }
        ]
      }
    },
    "OpsWorksInstanceRole": {
      "Type": "AWS::IAM::Role",
      "Properties": {
        "AssumeRolePolicyDocument": {
          "Statement": [
            {
              "Effect": "Allow",
              "Principal": {
                "Service": [
                  {
                    "Fn::FindInMap": [
                      "Region2Principal",
                      {
                        "Ref": "AWS::Region"
                      },
                      "EC2Principal"
                    ]
                  }
                ]
              },
              "Action": [
                "sts:AssumeRole"
              ]
            }
          ]
        },
        "Path": "/",
  "Policies": [
          {
```

```
            "PolicyName": "s3-get",
            "PolicyDocument": {
              "Version": "2012-10-17",
              "Statement": [
                {
                  "Effect": "Allow",
                  "Action": [
                    "s3:GetObject"
                  ],
                  "Resource": "*"
                }
              ]
            }
          }
        ]
      }
    },
    "myinstance": {
      "Type": "AWS::OpsWorks::Instance",
      "Properties": {
        "LayerIds": [
          {
            "Ref": "MyLayer"
          }
        ],
        "StackId": {
          "Ref": "MyStack"
        },
        "InstanceType": "c3.large",
        "SshKeyName": {
    "Ref": "EC2KeyPairName"
  }
      }
    }
  },
  "Outputs": {
    "StackId": {
      "Description": "Stack ID for the newly created AWS OpsWorks stack",
      "Value": {
        "Ref": "MyStack"
      }
    }
  }
```

```
}
```

2. にサインイン AWS マネジメントコンソール し、https://console.aws.amazon.com/cloudformation で CloudFormation コンソールを開きます。
3. CloudFormation ホームページで、スタックの作成を選択します。
4. [Select Template] ページの [Choose a template] エリアで、[Upload a template to Amazon S3]、[Browse] の順に選択します。
5. ステップ 1 で保存した CloudFormation テンプレートを参照し、開くを選択します。[テンプレートを選択] ページで、[次へ] を選択します。

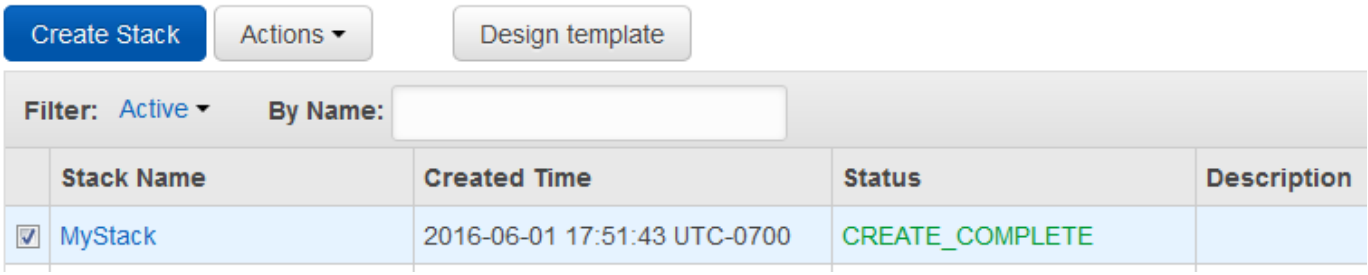


6. [Specify Details] ページで、スタックに [MyStack] などのアカウントに固有なスタック名を付けます。スタックに別の名前を付ける場合は、このウォークスルー中のスタック名スループットを変更してください。
7. パラメータ領域で、作成後に スタックインスタンスへのアクセスに使用する EC2 OpsWorks キーペアの名前を指定します。[次へ] を選択します。
8. [Options(オプション)] ページで、[Next(次へ)] を選択します。(このページの設定はこのウォークスルーでは必要ありません)
9. このチュートリアルで使用する CloudFormation テンプレートは、IAM ロール、インスタンスプロファイル、インスタンスを作成します。

> **Important**
>
> Create を選択する前に、このテンプレートでリソースを作成するために発生する可能性のある料金を見積 AWS もるコストを選択します。

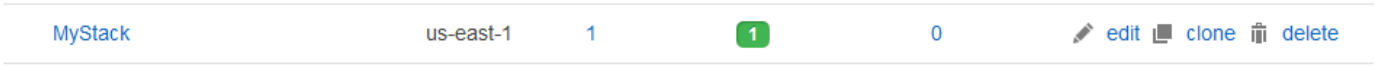
IAM リソースの作成が受け入れ可能であれば、[I acknowledge that this template might cause AWS CloudFormation to create IAM resources] (このテンプレートでは AWS CloudFormation によって IAM リソースが作成される場合があることを承認します) の チェックボックスを選択し、続いて [Create] (作成) を選択します。IAM リソースの作成が受入不可能な場合は、この手順を続行することはできません。

10. CloudFormation ダッシュボードでは、スタックの作成の進行状況を表示できます。次のステップに進む前に、[Status] 列に [CREATE_COMPLETE] が表示されるまで待機します。



スタックでの OpsWorks スタックの作成を確認するには

1. https://console.aws.amazon.com/opsworks/ で OpsWorks コンソールを開きます。
2. OpsWorks スタックダッシュボードで、作成したスタックを表示します。



3. スタックを開き、レイヤーとインスタンスを表示します。レイヤーとインスタンスが、CloudFormation テンプレートで指定された名前やその他のメタデータで作成されたことを確認します。これでアプリケーションを Amazon S3 バケットにアップロードできます。

ステップ 2 : アプリケーションコードを Amazon S3 バケットにアップロードする

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

パイプラインの設定の一部としてコードリポジトリへのリンクを指定する必要があるため、パイプラインを作成する前にコードリポジトリを準備してください。このチュートリアルでは、PHP アプリケーションを Amazon S3 バケットにアップロードします。

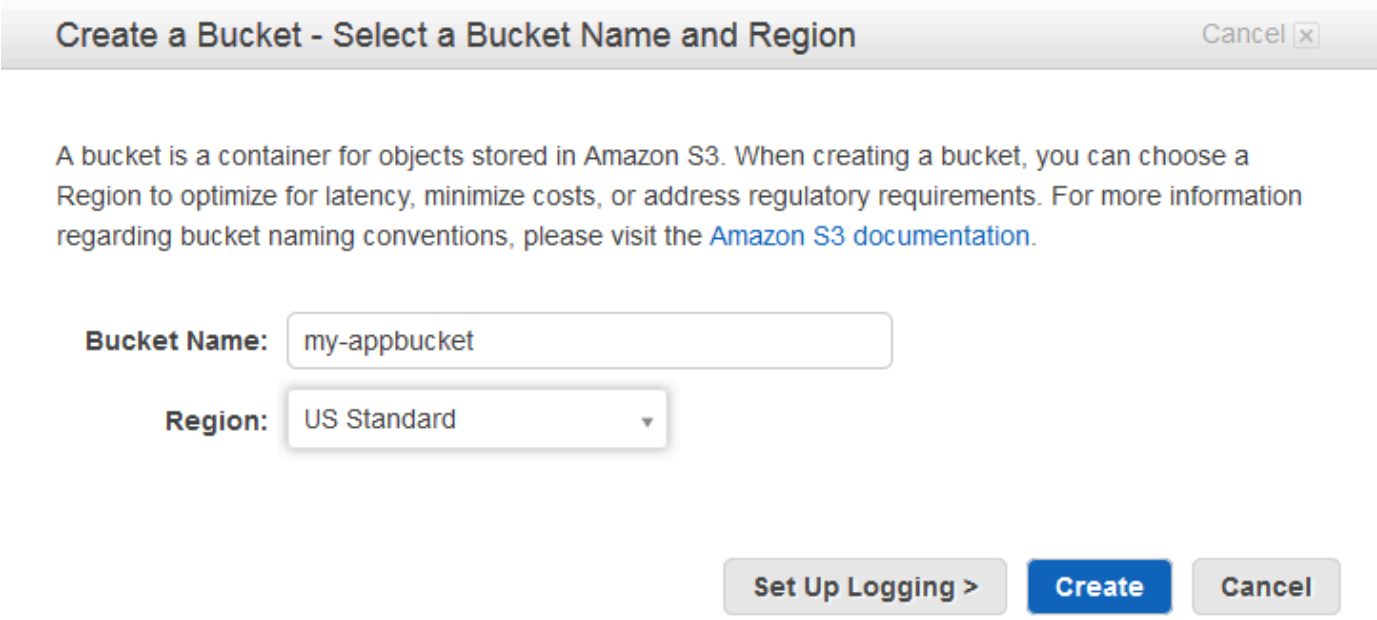
CodePipeline は、GitHub または から直接ソースとしてコードを使用しますが、このチュートリアルでは Amazon S3 バケットの使用方法を説明します。Amazon S3 バケットは、CodePipeline を有効化してアプリケーションコードの変更を検出し、変更されたアプリケーションを自動的にデプロイします。必要に応じて、既存のバケットを使用できます。バケットがドキュメントの「Simple Pipeline Walkthrough (Amazon S3 Bucket) (シンプルなパイプラインのウォークスルー (Amazon S3 バケット)」で説明されている CodePipeline の基準を満たしていることを確認します。

> **Important**
>
> Amazon S3 バケットは、後でパイプラインを作成するリージョンと同じリージョンに存在する必要があります。現時点では、CodePipeline は米国東部 (バージニア北部) リージョン (us-east-1) の OpsWorks スタックプロバイダーのみをサポートしています。このチュートリアルのすべてのリソースは、米国東部 (バージニア北部) リージョンで作成する必要があります。バケットは、CodePipeline にはバージョニングされたソースが必要なため、バージョニングされている必要もあります。詳細については、「バージョニングの使用」を参照してください。

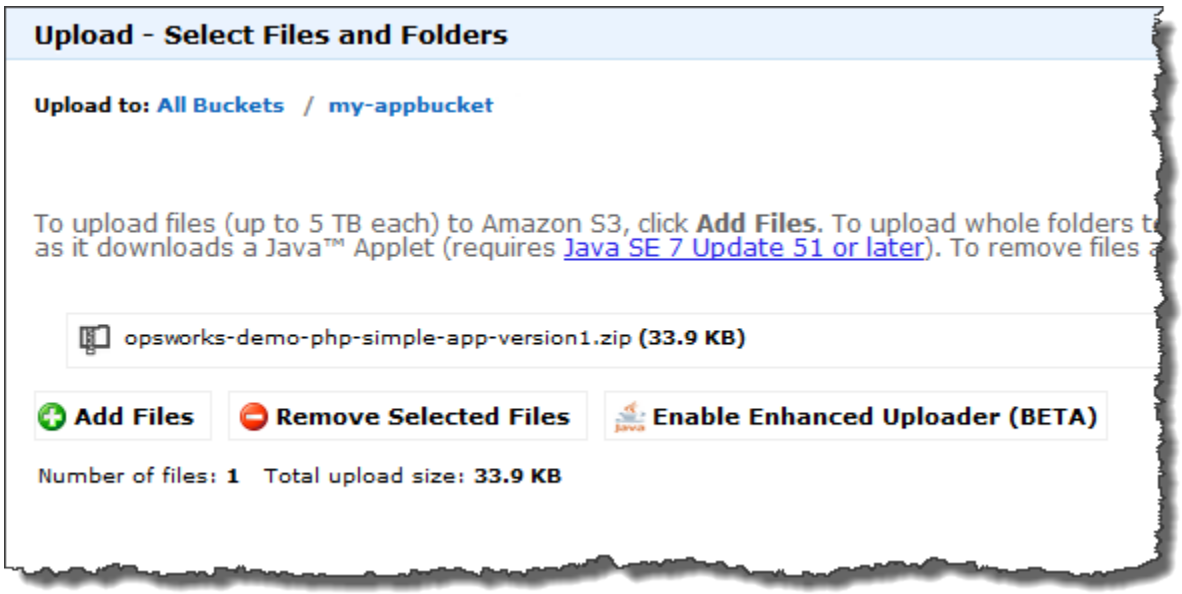
アプリケーションを Amazon S3 バケットにアップロードするには

1. GitHub ウェブサイトから、 スタックサンプル PHP OpsWorks アプリの ZIP ファイルをダウンロードし、ローカルコンピュータの便利な場所に保存します。

2. [index.php] と [ASSETS] フォルダが、ダウンロードされた ZIP ファイルのルートレベルにあることを確認します。ルートレベルにない場合はファイルを解凍し、これらのファイルをルートレベルに持つ新しい ZIP ファイルを作成します。
3. Amazon S3 コンソール (https://console.aws.amazon.com/s3/) を開きます。
4. バケットの作成 を選択します。
5. [Create a Bucket - Select a Bucket Name and Region] ページの [Bucket Name] で、バケットの一意の名前を入力します。バケット名は、自分の AWS アカウントだけでなく、すべてのアカウントで一意である必要があります。このウォークスルーでは **my-appbucket** という名前を使用していますが、`my-appbucket-yearmonthday` を使用して一意のバケット名にすることができます。[Region] ドロップダウンリストで、[US Standard]、[Create] の順に選択します。[US Standard] は、`us-east-1` と同等です。



6. 作成したバケットを [All Buckets] リストから選択します。
7. バケットのページで [Upload] を選択します。
8. [Upload - Select Files and Folders] ページで、[Add files] を選択します。ステップ 1 で保存した ZIP ファイルを参照し、[Open]、[Start Upload] の順に選択します。



9. アップロードの完了後、バケットのファイルリストから ZIP ファイルを選択し、[Properties] を選択します。
10. [Properties] ペインで、ZIP ファイルへのリンクをコピーし、リンクをメモします。パイプラインを作成するには、このリンクに含まれるバケット名と ZIP ファイル名の一部が必要です。

ステップ 3: アプリケーションを OpsWorks スタックに追加する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

CodePipeline でパイプラインを作成する前に、PHP テストアプリケーションを OpsWorks スタックに追加します。パイプラインを作成するときは、 OpsWorks スタックに追加したアプリを選択する必要があります。

前の手順のステップ 10 の Amazon S3 バケットリンクを準備してください。この手順を完了するには、テストアプリケーションを保存したバケットへのリンクが必要です。

アプリケーションを OpsWorks スタックに追加するには

1. OpsWorks スタックコンソールで MyStack を開き、ナビゲーションペインでアプリを選択します。
2. [Add app] を選択します。
3. [Add App] ページで、以下の情報を入力します。

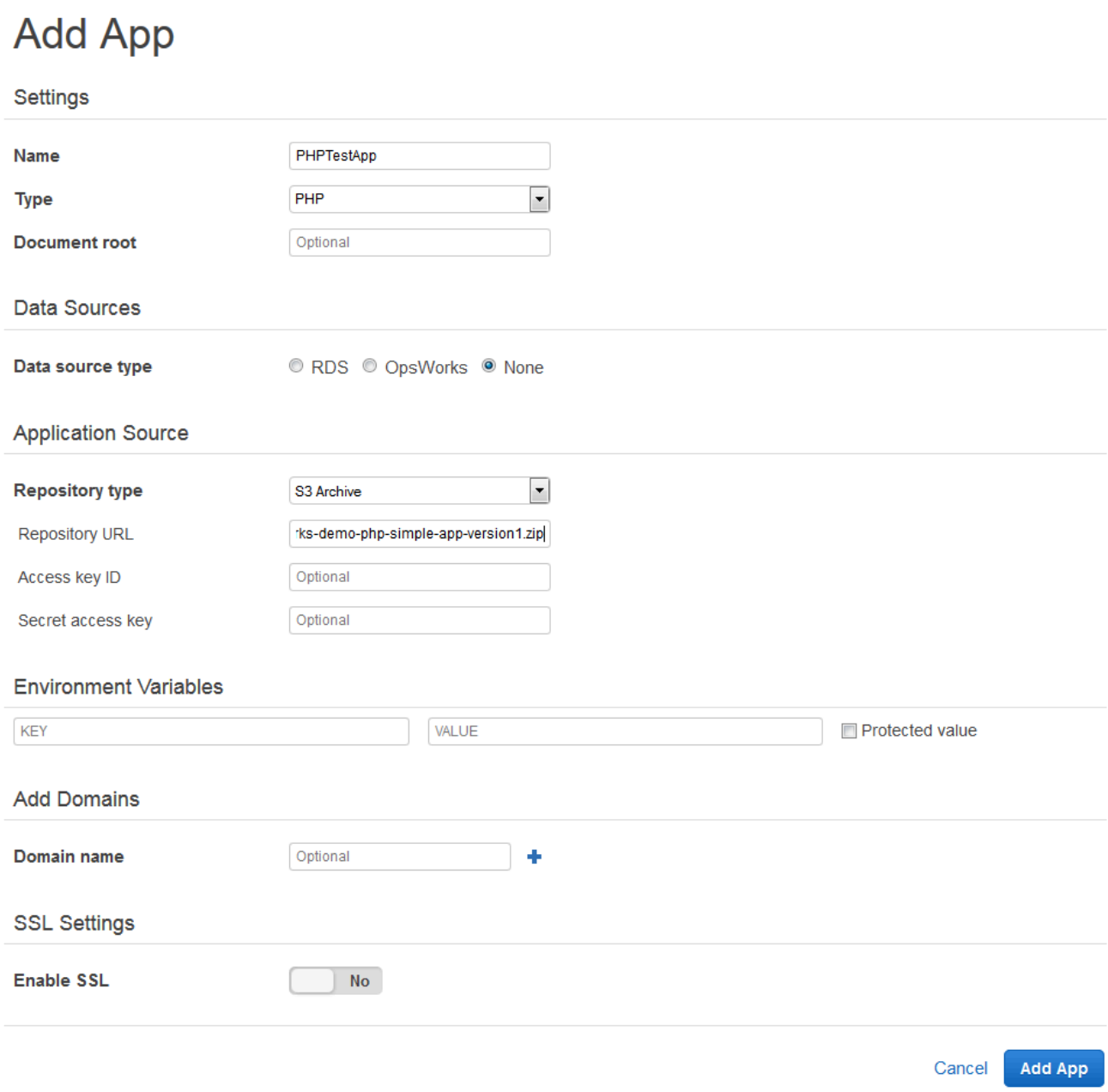
   a. アプリの名前を指定します。このウォークスルーでは、名前に `PHPTestApp` を使用します。

   b. [Type] ドロップダウンリストで、[PHP] を選択します。

   c. [Data source type] で [None] を選択します。このアプリには、外部データベースやデータソースは必要ありません。

   d. [Repository type] ドロップダウンリストで、[S3 Archive] を選択します。

   e. [Repository URL] 文字列ボックスに、「ステップ 2 : アプリケーションコードを Amazon S3 バケットにアップロードする」のステップ 10 でコピーした URL を貼り付けます。フォームは次のようになります。



4. このフォームでは、他の設定を変更する必要はありません。[Add App] を選択します。
5. [Apps] ページのリストに [PHPTestApp] アプリケーションが表示されたら、次の手順 ステップ 4 : CodePipeline でパイプラインを作成する に進みます。

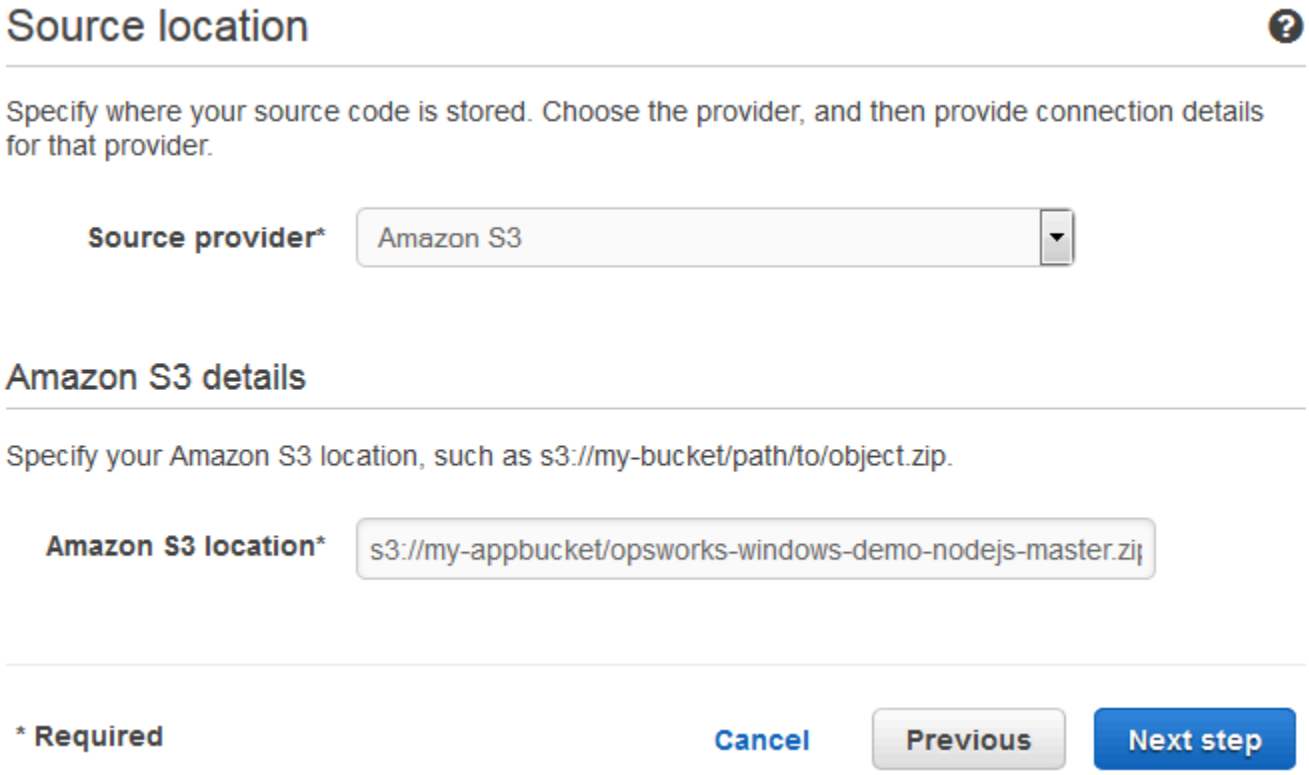
ステップ 4 : CodePipeline でパイプラインを作成する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

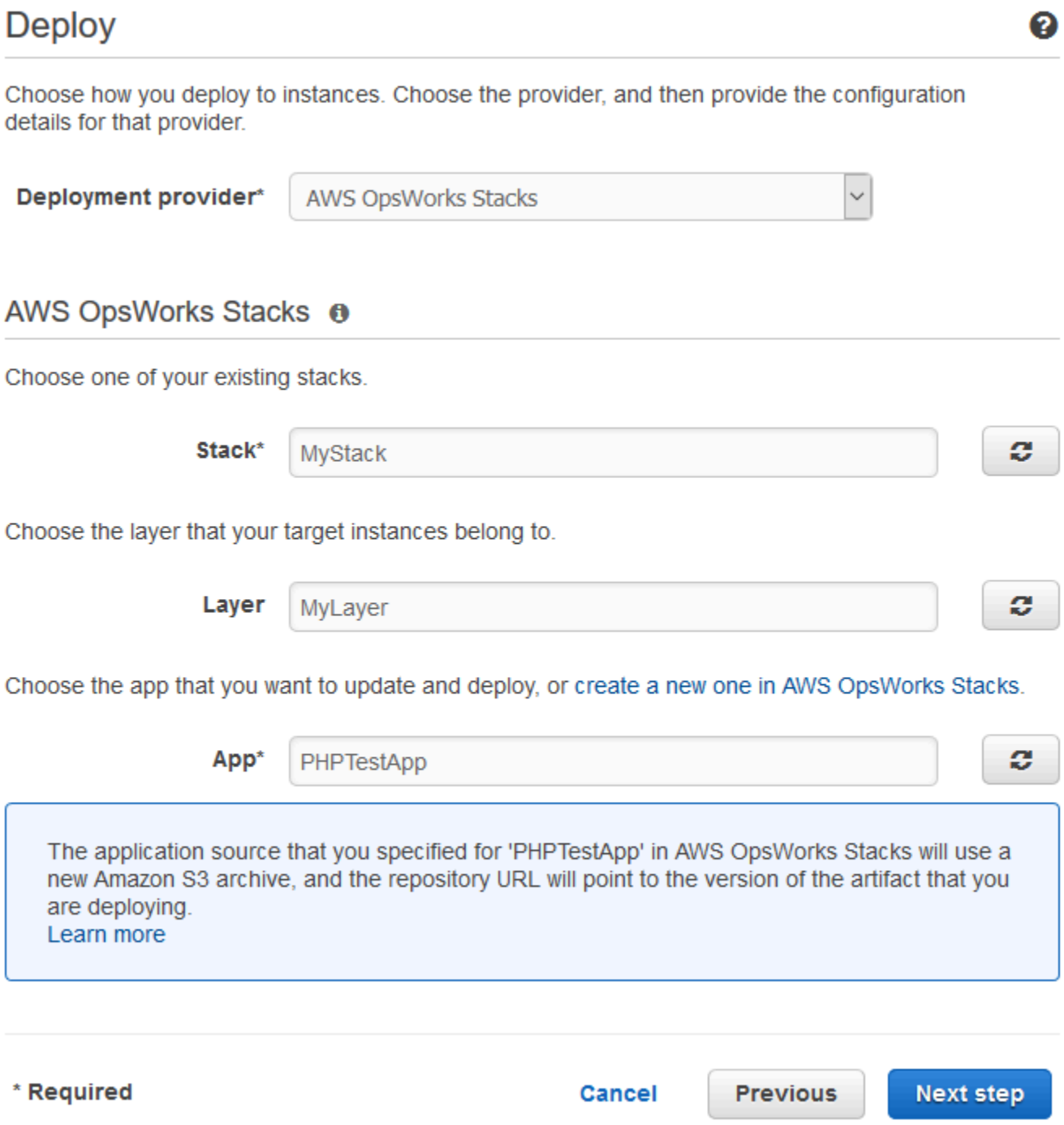
レイヤーと スタックで少なくとも 1 OpsWorks つのインスタンスが設定されたスタックを作成したら、アプリケーションまたは Chef OpsWorks クックブックを スタックリソースにデプロイするプロバイダーとして、 スタックを使用して CodePipeline OpsWorks にパイプラインを作成します。

パイプラインを作成するには

1. CodePipeline コンソール (https://console.aws.amazon.com/codepipeline/) を開きます。
2. パイプラインの作成 を選択します。
3. [Getting started with CodePipeline] (コードパイプラインの使用開始) ページで、タイプ [**MyOpsWorksPipeline**] など、アカウントに一意なパイプライン名を入力した後、[Next step] (次のステップ) を選択します。
4. [Source Location] (送信元の場所) ページで、[Source provider] (送信元のプロバイダー) ドロップダウンリストからの [Amazon S3] を選択します。
5. [Amazon S3 details] (Amazon S3 詳細) 領域で、使用する Amazon S3 バケットパスを **s3://*bucket-name*/*file name*** という形式で入力します。ステップ 10 (ステップ 2 : アプリケーションコードを Amazon S3 バケットにアップロードする。このウォークスルーでは、パスは `s3://my-appbucket/opsworks-demo-php-simple-app-version1.zip` になります。[次のステップ] を選択します。



6. [Build] ページのドロップダウンリストで、[No Build]、[Next step] の順に選択します。
7. [デプロイ] ページで、デプロイプロバイダーとして [OpsWorks Stacks] を選択します。



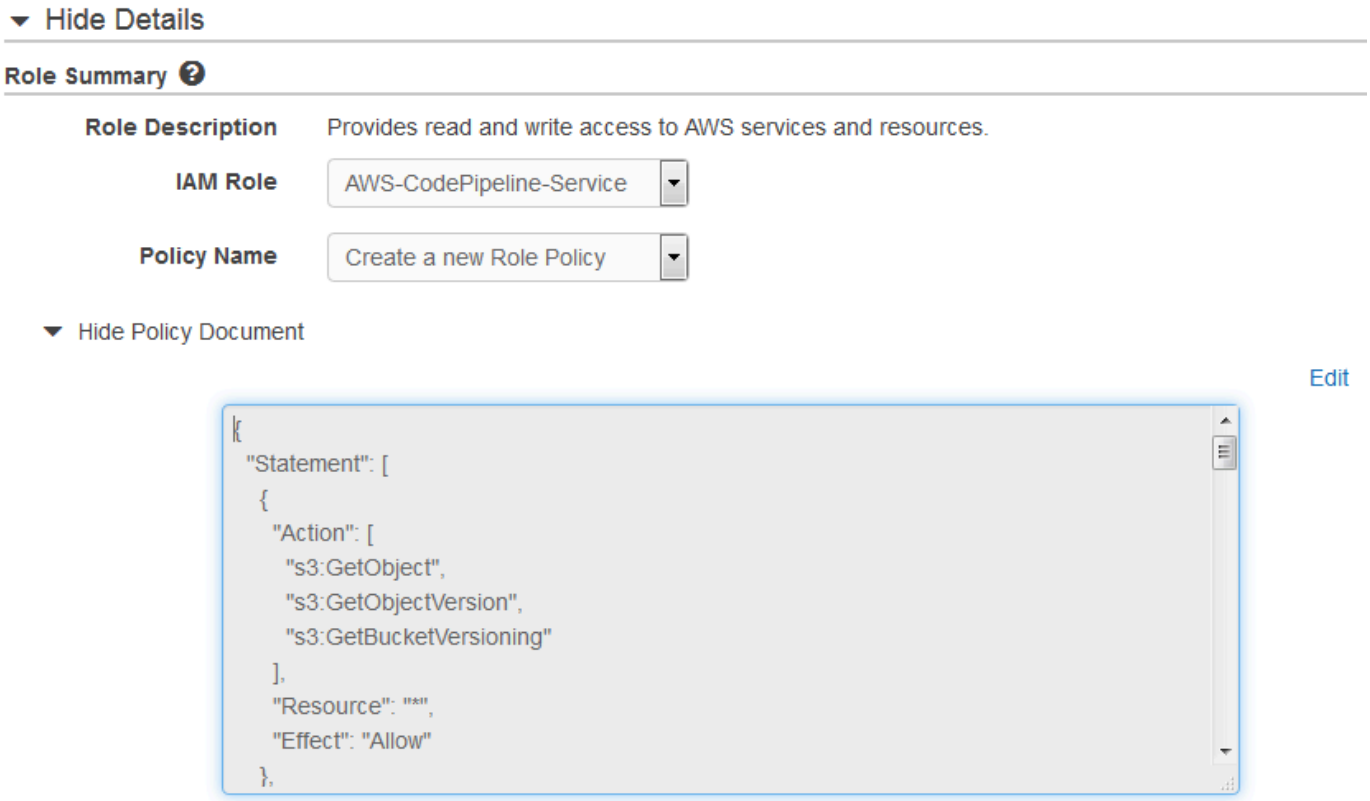
8. [Stack] フィールドに、`MyStack` または ステップ 1: OpsWorks スタックでスタック、レイヤー、インスタンスを作成する で作成したスタックの名前を入力します。
9. [Layer] (レイヤー) フィールドに、「`MyLayer`」と入力するか、「ステップ 1: OpsWorks スタックでスタック、レイヤー、インスタンスを作成する」で作成したレイヤーの名前を入力します。

10. [App] (アプリケーション) フィールドで、ステップ 2 : アプリケーションコードを Amazon S3 バケットにアップロードする で Amazon S3 にアップロードしたアプリケーションを選択してから、[Next step] (次のステップ) を選択します。
11. [AWS Service Role] ページで、[Create Role] を選択します。

    ユーザーに作成されるロール (AWS-CodePipeline-Service) を説明する IAM コンソールページとともに新しいページが開きます。[Policy name] ドロップダウンリストで、[Create new policy] を選択します。ポリシードキュメントに次のコンテンツがあることを確認します。[Edit] を選択し、必要に応じてポリシードキュメントを変更します。

```
{
    "Statement": [
        {
            "Action": [
                "s3:GetObject",
                "s3:GetObjectVersion",
                "s3:GetBucketVersioning"
            ],
            "Resource": "*",
            "Effect": "Allow"
        },
        {
            "Action": "opsworks:*",
            "Resource": "*",
            "Effect": "Allow"
        }
    ]
}
```

    ポリシードキュメントへの変更が完了したら、[Allow] を選択します。変更が IAM コンソールに表示されます。



> **Note**
>
> ロールの作成に失敗した場合は、[AWS-CodePipeline-Service] (AWS-CodePipeline サービス) という名前の IAM ロールがすでにある可能性があります。2016 年 5 月より前に AWS-CodePipeline-Service ロールを使用している場合、ロールにはデプロイプロバイダーとして OpsWorks スタックを使用するアクセス許可がない可能性があります。この場合、このステップに示すようにポリシーステートメントを更新する必要があります。エラーメッセージが表示された場合は、この手順の最初に戻ってから、[Create role] (ロールの作成) の代わりに [Use existing role] (既存のロールを使用する) を選択します。既存のロールを使用する場合は、このステップに示される権限を含むポリシーがロールにアタッチされている必要があります。サービス ロールとそのポリシーステートメントの詳細については、IAM サービスロールのポリシーを編集するを参照してください。

12. ロール作成プロセスが成功すると、IAM ページが閉じ、[AWS Service Role] (AWS サービスロール) ページに戻ります。[次のステップ] を選択します。
13. [Review your pipeline] ページで、ページに表示される選択肢を確認した後、[Create pipeline] を選択します。

We will create your pipeline with the following resources.

Source Stage

Source provider Amazon S3

Amazon S3 location s3://my-appbucket0/opsworks-demo-php-simple-app-version1.zip

Build Stage

Build provider No Build

Beta Stage

Deployment provider AWS OpsWorks

Stack MyStack

App PHPTestApp

Layer MyLayer

Pipeline settings

Pipeline name MyOpsWorksPipeline

Artifact location s3://codepipeline-us-east-
AWS CodePipeline will use this existing S3 bucket to store artifacts for this pipeline. Depending on the size of your artifacts, you might be charged for storage costs. For more information, see Amazon S3 storage pricing.

Role name AWS-CodePipeline-Service

To save this configuration with these resources, choose Create pipeline.

Would you like to create this pipeline?

Cancel Previous Create pipeline

14. 準備ができたパイプラインは、自動的にソースコードを見つけ、アプリケーションをスタックにデプロイし始めます。この処理には数分かかることもあります。

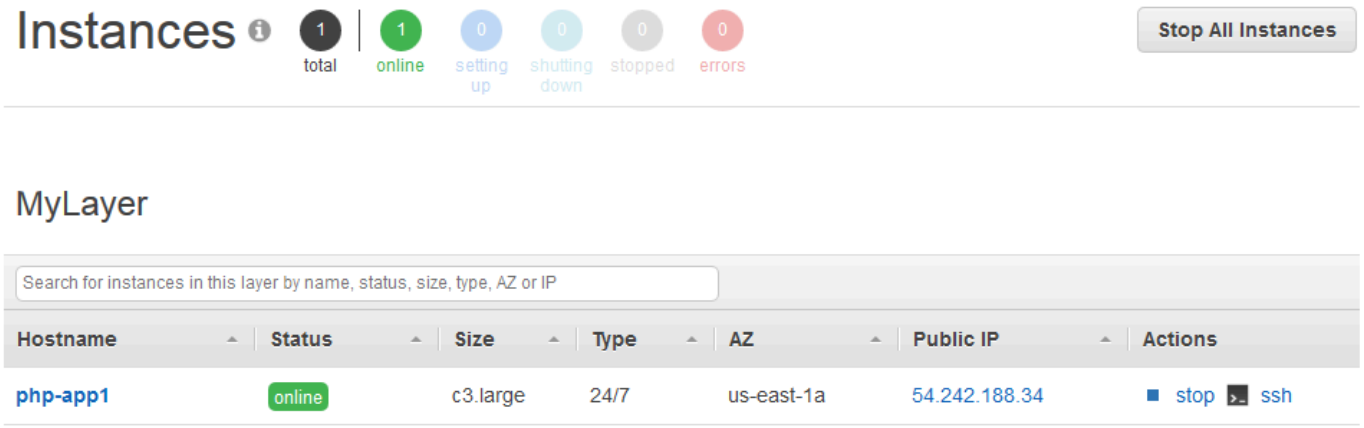
ステップ 5: OpsWorks スタックでのアプリケーションのデプロイを検証する

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

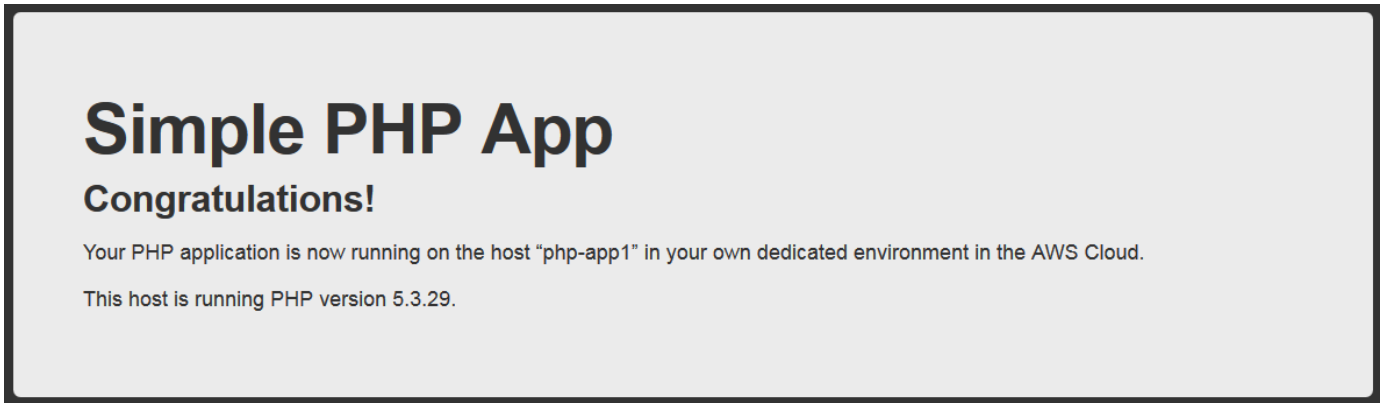
CodePipeline によってスタックに PHP アプリケーションがデプロイされたことを確認するには、ステップ 1: OpsWorks スタックでスタック、レイヤー、インスタンスを作成する で作成したインスタンスにサインインします。PHP ウェブアプリケーションを表示して使用できる必要があります。

OpsWorks スタックインスタンスでのアプリケーションのデプロイを確認するには

1. https://console.aws.amazon.com/opsworks/ で OpsWorks コンソールを開きます。
2. OpsWorks スタックダッシュボードで、MyStack を選択し、MyLayer を選択します。
3. ナビゲーションペインで [Instances] を選択した後、作成したインスタンスのパブリック IP アドレスを選択し、ウェブアプリケーションを表示します。



アプリケーションが新しいブラウザタブに表示されます。



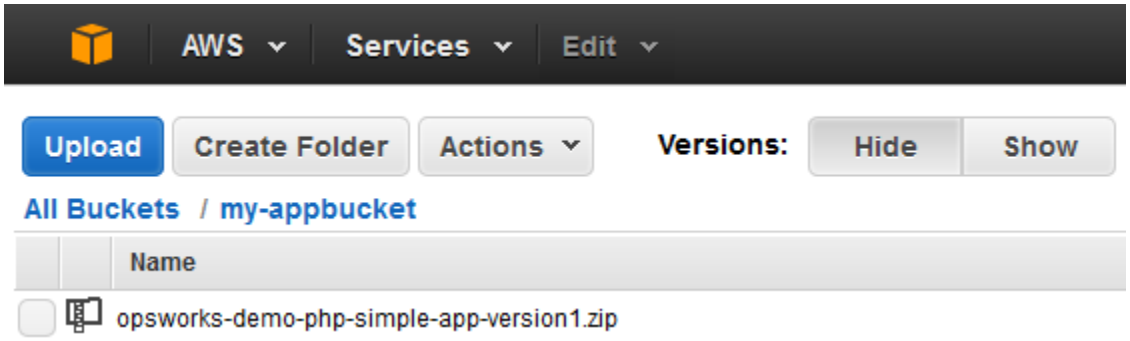
ステップ 6 (オプション): アプリケーションコードを更新し、CodePipeline が自動的にアプリケーションを再デプロイすることを確認します。

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

CodePipeline を使用してデプロイしたアプリケーションまたはクックブックのコードを変更すると、更新されたアーティファクトは CodePipeline によってターゲットインスタンス (この場合はターゲットスタックスタック) OpsWorks に自動的にデプロイされます。このセクションでは、サンプル PHP アプリケーションでコードを更新した際の自動再デプロイを示します。

サンプルアプリケーションでコードを編集するには

1. にサインイン AWS マネジメントコンソール し、https://console.aws.amazon.com/s3/ で Amazon S3 コンソールを開きます。
2. サンプル PHP アプリケーションを保存しているバケットを開きます。



3. アプリケーションを含む ZIP ファイルを選択します。[Actions] メニューで、[Download] を選択します。
4. ダイアログボックスでコンテクストメニューを開き (右クリック)、[Download] を選択して ZIP ファイルを使いやすい場所に保存します。[OK] を選択してください。
5. ZIP ファイルのコンテンツを使いやすい場所に展開します。展開したフォルダとそのサブフォルダやコンテンツで権限を変更し、編集を許可することが必要な場合があります。[opsworks-demo-php-simple-app-version1] フォルダで、編集する [index.php] ファイルを開きます。
6. 「Your PHP application is now running」という語句で検索します。「Your PHP application is now running」というテキストを「You've just deployed your first app to AWS OpsWorks with AWS CodePipeline,」に置き換えます。変数は編集しないでください。

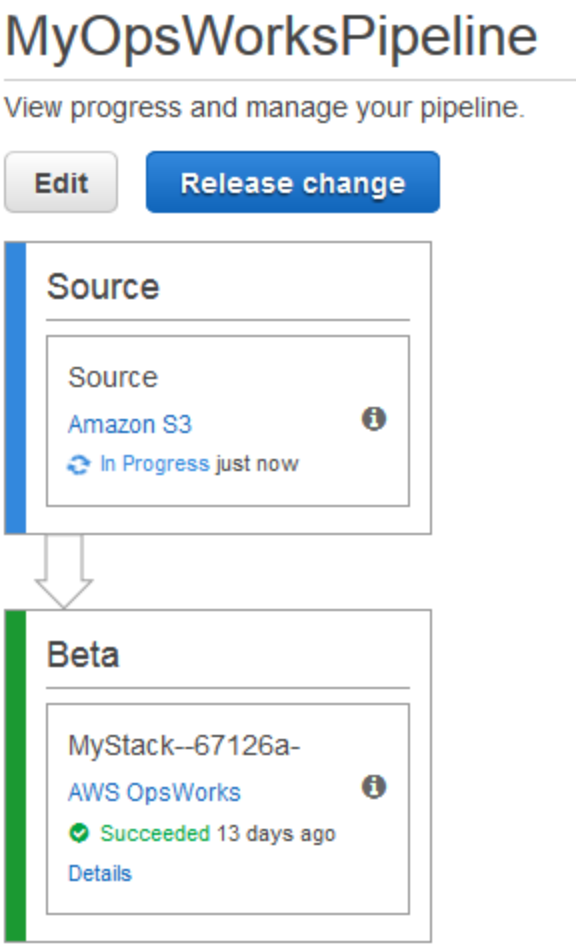
```
<body>
    <div class="container">
        <div class="hero-unit">
            <h1>Simple PHP App</h1>
            <h2>Congratulations!</h2>
            <p>You've just deployed your first app to AWS OpsWorks with AWS CodePipeline,</p>
            <p>on the host &ldquo;<?php echo gethostname(); ?>&rdquo; </p>
            <p>in your own dedicated environment in the AWS Cloud.</p>
            <p>This host is running PHP version <?php echo phpversion(); ?>.</p>
        </div>
    </div>

    <script src="//ajax.googleapis.com/ajax/libs/jquery/1.8.3/jquery.min.js"></script>
    <script src="assets/js/bootstrap.min.js"></script>
</body>
```

7. index.php ファイルを保存して閉じます。
8. opsworks-demo-php-simple-app-version1 フォルダを圧縮し、ZIP ファイルを便利な場所に保存します。ZIP ファイルの名前は変更しないでください。
9. 新しい ZIP ファイルを Amazon S3 バケットにアップロードします。このウォークスルーでは、バケット名は my-appbucket です。

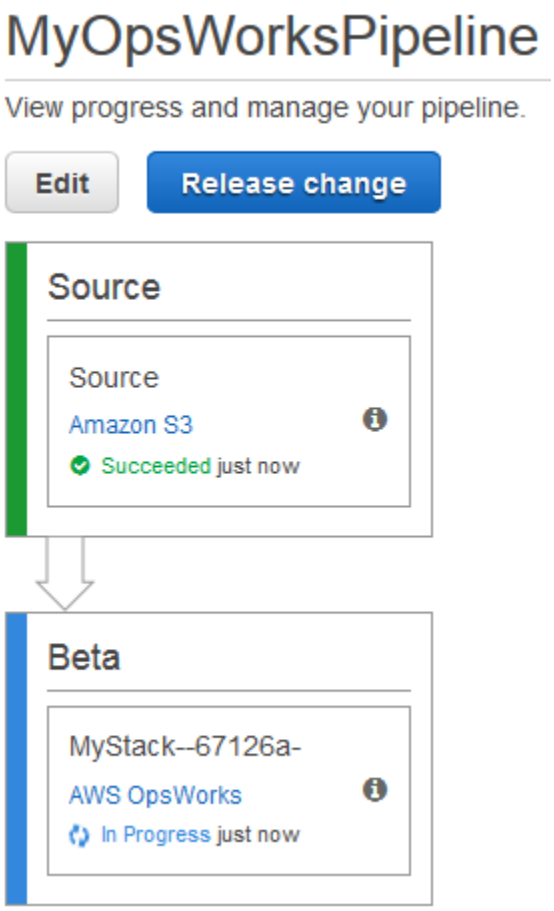
10. CodePipeline コンソールを開き、スタックパイプライン (MyOpsWorksPipeline) OpsWorks を開きます。[Release Change] を選択します。

    (Amazon S3 バケット内のアプリケーションの更新バージョンから CodePipeline がコード変更を検出するまで待機できます。時間を節約するために、このチュートリアルでは、単に [Release Change] (変更をリリース) を選択するように指示します)。

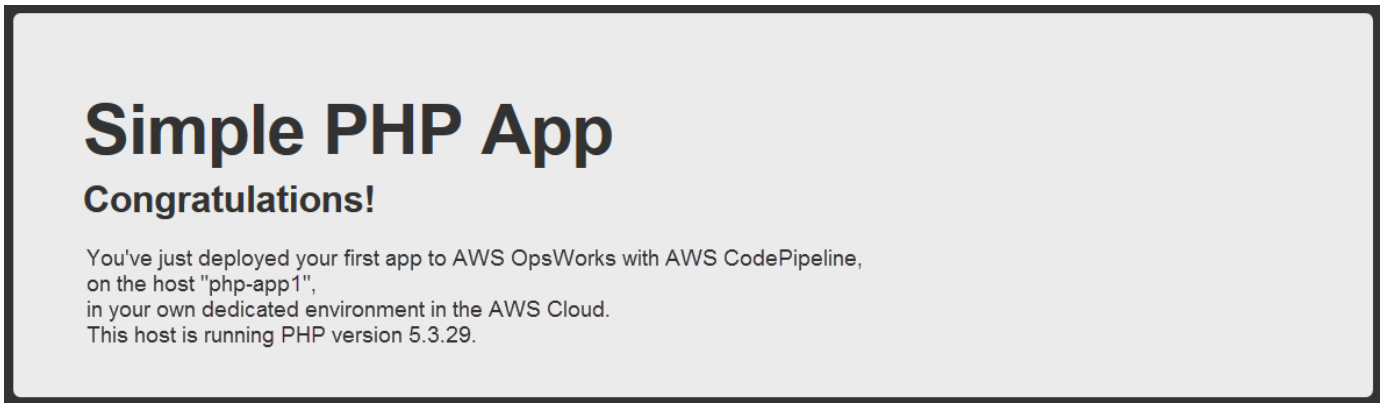
11. パイプラインのステージを通じて CodePipeline が実行される様子を確認します。最初に、CodePipeline はソースアーティファクトに対する変更を検出します。



CodePipeline は、更新されたコードを OpsWorks スタックのスタックにプッシュします。



12. パイプラインの両ステージが正常に完了したら、 OpsWorks スタック (MyStack) でスタックを開きます。
13. [MyStack] プロパティページで、[Instances] を選択します。
14. [Public IP] 列で、インスタンスのパブリック IP アドレスを選択し、更新されたアプリケーションのテキストを表示します。



ステップ 7 (オプション): リソースをクリーンアップする

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

AWS アカウントへの不要な請求を防ぐために、このウォークスルーに使用した AWS リソースを削除できます。これらの AWS リソースには、 OpsWorks スタックスタック、IAM ロールとインスタンスプロファイル、CodePipeline で作成したパイプラインが含まれます。ただし、 スタックと CodePipeline OpsWorks の詳細については、これらの AWS リソースを引き続き使用することをお勧めします。これらのリソースを保持すりには、このウォークスルーを完了する必要があります。

アプリケーションをスタックから削除するには

CloudFormation テンプレートの一部としてアプリを作成または適用しなかったため、スタックを削除する前に PHP テストアプリを削除します CloudFormation。

1. OpsWorks スタックコンソールのサービスナビゲーションペインで、アプリを選択します。
2. [Apps] ページで [PHPTestApp] を選択した後、[Actions] で [delete] を選択します。確認を求めるプロンプトが表示されたら、Delete を選択します。 OpsWorks スタックはアプリを削除します。

スタックを削除するには

CloudFormation テンプレートを実行してスタックを作成したため、テンプレートが作成したレイヤー、インスタンス、インスタンスプロファイル、セキュリティグループなどのスタックを CloudFormation コンソールで削除できます。

1. CloudFormation コンソールを開きます。
2. CloudFormation コンソールダッシュボードで、作成したスタック (MyStack) を選択します。[Actions] メニューで、[Delete Stack] を選択します。確認を求められたら [Yes, Delete] を選択します。
3. スタックの [Status] 列に [DELETE_COMPLETE] と表示されるまで待機します。

パイプラインを削除するには

1. CodePipeline コンソールを開きます。
2. CodePipeline ダッシュボードで、このチュートリアルで作成したパイプラインを選択します。
3. パイプラインページで、[Edit] を選択します。
4. [Edit] ページで、[Delete] を選択します。確認を求められたら [Delete] (削除) を選択します。

スタック OpsWorks CLI の使用

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックコマンドラインインターフェイス (CLI) はコンソールと同じ機能を提供し、さまざまなタスクに使用できます。スタック CLI OpsWorks は の一部です AWS CLI。のインストール方法や設定方法などの詳細については、「AWS コマンドラインインターフェイスとは AWS CLI」を参照してください。各コマンドの詳細な説明については、「OpsWorks スタックリファレンス」を参照してください。

> **Note**
>
> Windows ベースのワークステーションを使用している場合は、 AWS Tools for Windows PowerShell を実行して、コマンドラインから OpsWorks スタックオペレーションを実行することもできます。詳細については、「AWS Tools for Windows PowerShell」を参照してください。

OpsWorks スタックコマンドの一般的な形式は次のとおりです。

```
aws opsworks --region us-west-1 opsworks command-name [--argument1 value] [...]
```

引数値が JSON オブジェクトである場合は、" 文字を エスケープする必要があります。そうしないと、コマンドから JSON が有効でないというエラーが返されます。例えば、JSON オブジェクトが "{"somekey":"somevalue"}" である場合は、"{\"somekey\":\"somevalue\"}" という形式にします。別のアプローチは、JSON オブジェクトをファイルに保存し、file:// を使用してコマンドラインでそのファイルを指定することです。以下の例では、appsource.json に保存されたアプリケーションソースオブジェクトを使用して、アプリケーションを作成しています。

```
aws opsworks --region us-west-1 create-app --stack-id 8c428b08-a1a1-46ce-a5f8-
feddc43771b8 --name SimpleJSP --type java --app-source file://appsource.json
```

ほとんどの場合、コマンドから JSON オブジェクトとしてパッケージ化された 1 つ以上の値が返されます。以下のセクションでは、いくつかの例を示します。各コマンドの戻り値の詳細については、「OpsWorks スタックリファレンス」を参照してください。

> **Note**
>
> AWS CLI コマンドでは、例に示すようにリージョンを指定する必要があります。-- リージョンパラメータの有効値を次の表に示します。 OpsWorks Stacks コマンド文字列を簡素化するには、 `--region`パラメータを省略できるように、デフォルトのリージョンを指定するように CLI を設定します。通常、複数のリージョンエンドポイントで作業する場合は、デフォルトのリージョンエンドポイントを使用する AWS CLI ように を設定しないでください。カナダ (中部) リージョンエンドポイントは API AWS CLI でのみ使用できます。 で作成したスタックでは使用できません AWS マネジメントコンソール。詳細については、「AWS リージョンの設定」を参照してください。

リージョン名	コマンドコード
米国東部(オハイオ州)リージョン	us-east-2
米国東部 (バージニア州北部) リージョン	us–east–1
米国西部 (北カリフォルニア) リージョン	us-west-1
米国西部 (オレゴン州) リージョン	us-west-2
カナダ (中部) リージョン	ca-central-1
欧州 (アイルランド) リージョン	eu-west-1

リージョン名	コマンドコード
欧州 (ロンドン) リージョン	eu-west-2
欧州 (パリ) リージョン	eu-west-3
欧州 (フランクフルト) リージョン	eu-central-1
アジアパシフィック (東京) リージョン	ap-northeast-1
アジアパシフィック (ソウル) リージョン	ap-northeast-2
アジアパシフィック (ムンバイ) リージョン	ap-south-1
アジアパシフィック (シンガポール) リージョン	ap-southeast-1
アジアパシフィック (シドニー) リージョン	ap-southeast-2
南米 (サンパウロ) リージョン	sa-east-1

CLI コマンドを使用するには、適切なアクセス許可が必要です。 OpsWorks スタックのアクセス権限の詳細については、「ユーザー許可の管理」を参照してください。特定のコマンドに必要なアクセス許可を調べるには、「OpsWorks スタックリファレンス」のコマンドリファレンスのページを参照してください。

以下のセクションでは、 OpsWorks スタック CLI を使用してさまざまな一般的なタスクを実行する方法について説明します。

インスタンスの作成 (create-instance)

Important

この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

create-instance コマンドを使用して、指定したスタックにインスタンスを作成します。

トピック

- デフォルトのホスト名を使用したインスタンスの作成
- テーマ付きホスト名のインスタンスの作成
- カスタム AMI を使用したインスタンスの作成

デフォルトのホスト名を使用したインスタンスの作成

```
C:\>aws opsworks --region us-west-1 create-instance --stack-id 935450cc-61e0-4b03-
a3e0-160ac817d2bb
    --layer-ids 5c8c272a-f2d5-42e3-8245-5bf3927cb65b --instance-type m1.large --os
 "Amazon Linux"
```

引数は次のとおりです。

- `stack-id` – スタック ID は、コンソールのスタック設定ページ (「OpsWorks ID」を参照) か、[describe-stacks] を呼び出すことで、取得できます。
- `layer-ids` – レイヤー ID は、コンソールのレイヤー詳細ページ (「OpsWorks ID」を参照) か、[describe-layers] を呼び出すことで、取得できます。この例では、インスタンスは 1 つのレイヤーにのみ属しています。
- `instance-type` – インスタンス (この例では)`m1.large` のメモリ、CPU、ストレージ容量、および時間あたりのコストの定義を指定します。
- os - インスタンスのオペレーティングシステム (この例では Amazon Linux) です。

次に示すように、インスタンス ID を含む JSON オブジェクトがコマンドから返されます。

```
{
    "InstanceId": "5f9adeaa-c94c-42c6-aeef-28a5376002cd"
}
```

この例では、デフォルトのホスト名 (整数のみ) を持つインスタンスが作成されます。以下のセクションでは、テーマから生成されたホスト名を持つインスタンスを作成する方法を説明します。

テーマ付きホスト名のインスタンスの作成

テーマ付きホスト名のインスタンスを作成することもできます。スタックを作成する際にテーマを指定します。詳細については、「新しいスタックを作成する」を参照してください。インスタンスを作成するには、まず get-hostname-suggestion を呼び出して名前を生成します。例えば：

```
C:\>aws opsworks get-hostname-suggestion --region us-west-1 --layer-id 5c8c272a-
f2d5-42e3-8245-5bf3927cb65b
```

デフォルトの Layer Dependent テーマを指定した場合は、get-hostname-suggestion によってレイヤーの短縮名に単に数字が付加されます。詳細については、「新しいスタックを作成する」を参照してください。

コマンドによって生成されたホスト名が返されます。

```
{
    "Hostname": "php-app2",
    "LayerId": "5c8c272a-f2d5-42e3-8245-5bf3927cb65b"
}
```

生成された名前を create-instance に渡すには、次のように hostname 引数を使用します。

```
c:\>aws --region us-west-1 opsworks create-instance --stack-id 935450cc-61e0-4b03-
a3e0-160ac817d2bb
   --layer-ids 5c8c272a-f2d5-42e3-8245-5bf3927cb65b --instance-type m1.large --os
 "Amazon Linux" --hostname "php-app2"
```

カスタム AMI を使用したインスタンスの作成

次の create-instance コマンドは、カスタム AMI を使用してインスタンスを作成します。これは、スタックのリージョンからのものである必要があります。 OpsWorks スタックのカスタム AMI を作成する方法の詳細については、「」を参照してくださいカスタム AMI の使用。

```
C:\>aws opsworks create-instance --region us-west-1 --stack-id c5ef46ce-3ccd-472c-
a3de-9bec94c6028e
   --layer-ids 6ff8a2ac-c9cc-49cf-9c67-fc852539ade4 --instance-type c3.large --os
 Custom
```

```
    --ami-id ami-6c61f104
```

引数は次のとおりです。

- `stack-id` – スタック ID は、コンソールのスタック設定ページ (「OpsWorks ID」を参照) か、[describe-stacks] を呼び出すことで、取得できます。
- `layer-ids` – レイヤー ID は、コンソールのレイヤー詳細ページ (「OpsWorks ID」を参照) か、[describe-layers] を呼び出すことで、取得できます。この例では、インスタンスは 1 つのレイヤーにのみ属しています。
- `instance-type` - この値はインスタンスのメモリ、CPU、ストレージ容量、および時間あたりのコストを定義します。AMI と互換性がある必要があります (この例では `c3.large` を参照)。
- `os` – インスタンスのオペレーティングシステムです。カスタム AMI に対して `Custom` に設定する必要があります。
- `ami-id` – AMI ID です。`ami-6c61f104` のようになります

> **Note**
>
> カスタム AMI を使用すると、ブロックデバイスマッピングはサポートされず、`--block-device-mappings` オプションに指定した値は無視されます。

次に示すように、インスタンス ID を含む JSON オブジェクトがコマンドから返されます。

```
{
    "InstanceId": "5f9adeaa-c94c-42c6-aeef-28a5376002cd"
}
```

アプリケーションのデプロイ (create-deployment)

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS

re:Post または AWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

create-deployment コマンドを使用して、指定したスタックにアプリケーションをデプロイします。

トピック

- アプリケーションのデプロイ

アプリケーションのデプロイ

```
aws opsworks --region us-west-1 create-deployment --stack-id cfb7e082-ad1d-4599-8e81-
de1c39ab45bf
   --app-id 307be5c8-d55d-47b5-bd6e-7bd417c6c7eb --command "{\"Name\":\"deploy\"}"
```

引数は次のとおりです。

- stack-id - コンソールのスタック設定ページで (「OpsWorks ID」を参照)、または describe-stacks を呼び出すことで、スタック ID を取得できます。
- app-id – アプリケーション ID は、 アプリケーションの詳細ページ (「OpsWorks ID」を参照) か、[describe-apps] を呼び出すことで、取得できます。
- command – 引数は、コマンド名を deploy に設定する JSON オブジェクトを取ります。このコマンドは、指定したアプリケーションをスタックにデプロイします。

  JSON オブジェクトの " 文字がすべてエスケープされていることに注意してください。そうしないと、JSON が無効であるというエラーがコマンドから返されます。

次に示すように、デプロイメント ID を含む JSON オブジェクトがコマンドから返されます。

```
{
    "DeploymentId": "5746c781-df7f-4c87-84a7-65a119880560"
}
```

> **Note**
>
> 前述の例では、スタックのすべてのインスタンスにデプロイします。インスタンスの指定したサブセットにデプロイするには、`instance-ids` 引数を追加し、インスタンス ID をリストします。

スタックのアプリケーションのリストを取得する (describe-apps)

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

describe-apps コマンドを使用して、スタックのアプリケーションのリストまたは指定したアプリケーションに関する詳細を取得します。

```
aws opsworks --region us-west-1 describe-apps --stack-id 38ee91e2-abdc-4208-
a107-0b7168b3cc7a
```

前述の例では、各アプリケーションの情報を含む JSON オブジェクトが返されます。この例では、対象となるアプリケーションは 1 つのみです。各パラメータの説明については、「describe-apps」を参照してください。

```
{
  "Apps": [
    {
      "StackId": "38ee91e2-abdc-4208-a107-0b7168b3cc7a",
      "AppSource": {
        "Url": "url",
        "Type": "archive"
      },
      "Name": "SimpleJSP",
      "EnableSsl": false,
```

```
      "SslConfiguration": {},
      "AppId": "da1decc1-0dff-43ea-ad7c-bb667cd87c8b",
      "Attributes": {
        "RailsEnv": null,
        "AutoBundleOnDeploy": "true",
        "DocumentRoot": "ROOT"
      },
      "Shortname": "simplejsp",
      "Type": "other",
      "CreatedAt": "2013-08-01T21:46:54+00:00"
    }
  ]
}
```

スタックのコマンドのリストを取得する (describe-commands)

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

describe-commands コマンドを使用して、スタックのコマンドのリストまたは指定したコマンドに関する詳細を取得します。次の例では、指定されたインスタンスで実行されたコマンドに関する情報を取得します。

```
aws opsworks --region us-west-1 describe-commands --instance-id
 8c2673b9-3fe5-420d-9cfa-78d875ee7687
```

各コマンドの詳細を含む JSON オブジェクトがコマンドから返されます。この例では、コマンド名、デプロイまたはデプロイ解除が Type パラメータによって識別されます。その他のパラメータの説明については、「describe-commands」を参照してください。

```
{
  "Commands": [
    {
```

```
      "Status": "successful",
      "CompletedAt": "2013-07-25T18:57:47+00:00",
      "InstanceId": "8c2673b9-3fe5-420d-9cfa-78d875ee7687",
      "DeploymentId": "6ed0df4c-9ef7-4812-8dac-d54a05be1029",
      "AcknowledgedAt": "2013-07-25T18:57:41+00:00",
      "LogUrl": "https://s3.amazonaws.com/prod_stage-log/logs/008c1a91-
ec59-4d51-971d-3adff54b00cc?AWSAccessKeyId=AIDACKCEVSQ6C2EXAMPLE
 &Expires=1375394373&Signature=HkXil6UuNfxTCC37EPQAa462E1E%3D&response-cache-
control=private&response-content-encoding=gzip&response-content- type=text%2Fplain",
      "Type": "undeploy",
      "CommandId": "008c1a91-ec59-4d51-971d-3adff54b00cc",
      "CreatedAt": "2013-07-25T18:57:34+00:00",
      "ExitCode": 0
    },
    {
      "Status": "successful",
      "CompletedAt": "2013-07-25T18:55:40+00:00",
      "InstanceId": "8c2673b9-3fe5-420d-9cfa-78d875ee7687",
      "DeploymentId": "19d3121e-d949-4ff2-9f9d-94eac087862a",
      "AcknowledgedAt": "2013-07-25T18:55:32+00:00",
      "LogUrl": "https://s3.amazonaws.com/prod_stage-log/
logs/899d3d64-0384-47b6-a586-33433aad117c?AWSAccessKeyId=AIDACKCEVSQ6C2EXAMPLE
 &Expires=1375394373&Signature=xMsJvtLuUqWmsr8s%2FAjVru0BtRs%3D&response-cache-
control=private&response-content-encoding=gzip&response-conten t-type=text%2Fplain",
      "Type": "deploy",
      "CommandId": "899d3d64-0384-47b6-a586-33433aad117c",
      "CreatedAt": "2013-07-25T18:55:29+00:00",
      "ExitCode": 0
    }
  ]
}
```


スタックのデプロイメントのリストを取得する (describe-deployments)

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

describe-deployments コマンドを使用して、スタックのデプロイメントのリストを取得するか、指定したデプロイメントに関する詳細を取得します。

```
aws opsworks --region us-west-1 describe-deployments --stack-id 38ee91e2-abdc-4208-
a107-0b7168b3cc7a
```

前述のコマンドでは、指定したスタックの各デプロイメントの詳細を含む JSON オブジェクトがコマンドから返されます。各パラメータの説明については、「describe-deployments」を参照してください。

```
{
  "Deployments": [
      {
          "StackId": "38ee91e2-abdc-4208-a107-0b7168b3cc7a",
          "Status": "successful",
          "CompletedAt": "2013-07-25T18:57:49+00:00",
          "DeploymentId": "6ed0df4c-9ef7-4812-8dac-d54a05be1029",
          "Command": {
              "Args": {},
              "Name": "undeploy"
          },
          "CreatedAt": "2013-07-25T18:57:34+00:00",
          "Duration": 15,
          "InstanceIds": [
              "8c2673b9-3fe5-420d-9cfa-78d875ee7687",
              "9e588a25-35b2-4804-bd43-488f85ebe5b7"
          ]
      },
      {
          "StackId": "38ee91e2-abdc-4208-a107-0b7168b3cc7a",
          "Status": "successful",
          "CompletedAt": "2013-07-25T18:56:41+00:00",
          "IamUserArn": "arn:aws:iam::444455556666:user/example-user",
          "DeploymentId": "19d3121e-d949-4ff2-9f9d-94eac087862a",
          "Command": {
              "Args": {},
              "Name": "deploy"
          },
          "InstanceIds": [
              "8c2673b9-3fe5-420d-9cfa-78d875ee7687",
              "9e588a25-35b2-4804-bd43-488f85ebe5b7"
          ],
          "Duration": 72,
```

```
            "CreatedAt": "2013-07-25T18:55:29+00:00"
        }
    ]
}
```

スタックの Elastic IP アドレスのリストの取得 (describe-elastic-ips)

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

describe-elastic-ips コマンドを使用して、スタックに登録した Elastic IP アドレスのリストを取得するか、指定した Elastic IP アドレスに関する詳細を取得します。

```
aws opsworks --region us-west-2 describe-elastic-ips --instance-id b62f3e04-e9eb-436c-a91f-d9e9a396b7b0
```

前述のコマンドでは、指定したインスタンスの各 Elastic IP アドレス (この例では 1 つ) の詳細を含む JSON オブジェクトがコマンドから返されます。各パラメータの説明については、「describe-elastic-ips」を参照してください。

```
{
  "ElasticIps": [
      {
          "Ip": "192.0.2.0",
          "Domain": "standard",
          "Region": "us-west-2"
      }
  ]
}
```

スタックのインスタンスのリストを取得する (describe-instances)

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

describe-instances コマンドを使用して、スタックのインスタンスのリストを取得するか、指定したインスタンスに関する詳細を取得します。

```
C:\>aws opsworks --region us-west-2 describe-instances --stack-id 38ee91e2-abdc-4208-
a107-0b7168b3cc7a
```

前述のコマンドでは、指定したスタックの各インスタンスの詳細を含む JSON オブジェクトがコマンドから返されます。各パラメータの説明については、「describe-instances」を参照してください。

```
{
  "Instances": [
      {
          "StackId": "38ee91e2-abdc-4208-a107-0b7168b3cc7a",
          "SshHostRsaKeyFingerprint":
 "f4:3b:8e:27:1b:73:98:80:5d:d7:33:e2:b8:c8:8f:de",
          "Status": "stopped",
          "AvailabilityZone": "us-west-2a",
          "SshHostDsaKeyFingerprint":
 "e8:9b:c7:02:18:2a:bd:ab:45:89:21:4e:af:0b:07:ac",
          "InstanceId": "8c2673b9-3fe5-420d-9cfa-78d875ee7687",
          "Os": "Amazon Linux",
          "Hostname": "db-master1",
          "SecurityGroupIds": [],
          "Architecture": "x86_64",
          "RootDeviceType": "instance-store",
          "LayerIds": [
              "41a20847-d594-4325-8447-171821916b73"
          ],
          "InstanceType": "c1.medium",
```

```
            "CreatedAt": "2013-07-25T18:11:27+00:00"
        },
        {
            "StackId": "38ee91e2-abdc-4208-a107-0b7168b3cc7a",
            "SshHostRsaKeyFingerprint":
 "ae:3a:85:54:66:f3:ce:98:d9:83:39:1e:10:a9:38:12",
            "Status": "stopped",
            "AvailabilityZone": "us-west-2a",
            "SshHostDsaKeyFingerprint":
 "5b:b9:6f:5b:1c:ec:55:85:f3:45:f1:28:25:1f:de:e4",
            "InstanceId": "9e588a25-35b2-4804-bd43-488f85ebe5b7",
            "Os": "Amazon Linux",
            "Hostname": "tomcustom1",
            "SecurityGroupIds": [],
            "Architecture": "x86_64",
            "RootDeviceType": "instance-store",
            "LayerIds": [
                "e6cbcd29-d223-40fc-8243-2eb213377440"
            ],
            "InstanceType": "c1.medium",
            "CreatedAt": "2013-07-25T18:15:52+00:00"
        }
    ]
}
```


アカウントのスタックのリストを取得する (describe-stacks)

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

describe-stacks コマンドを使用して、アカウントのスタックのリストを取得するか、指定したスタックに関する詳細を取得します。

```
aws opsworks --region us-west-2 describe-stacks
```

前述のコマンドでは、アカウントの各スタック (この例では 2 つ) の詳細を含む JSON オブジェクトがコマンドから返されます。各パラメータの説明については、「describe-stacks」を参照してください。


```
{
    "Stacks": [
        {
            "ServiceRoleArn": "arn:aws:iam::444455556666:role/aws-opsworks-service-
role",
            "StackId": "aeb7523e-7c8b-49d4-b866-03aae9d4fbcb",
            "DefaultRootDeviceType": "instance-store",
            "Name": "TomStack-sd",
            "ConfigurationManager": {
                "Version": "11.4",
                "Name": "Chef"
            },
            "UseCustomCookbooks": true,
            "CustomJson": "{\n  \"tomcat\": {\n    \"base_version\": 7,\n
 \"java_opts\": \"-Djava.awt.headless=true -Xmx256m\"\n  },\n  \
"datasources\": {\n    \"ROOT\": \"jdbc/mydb\"\n  }\n}",
            "Region": "us-west-2",
            "DefaultInstanceProfileArn": "arn:aws:iam::444455556666:instance-profile/
aws-opsworks-ec2-role",
            "CustomCookbooksSource": {
                "Url": "git://github.com/example-repo/tomcustom.git",
                "Type": "git"
            },
            "DefaultAvailabilityZone": "us-west-2a",
            "HostnameTheme": "Layer_Dependent",
            "Attributes": {
                "Color": "rgb(45, 114, 184)"
            },
            "DefaultOs": "Amazon Linux",
            "CreatedAt": "2013-08-01T22:53:42+00:00"
        },
        {
            "ServiceRoleArn": "arn:aws:iam::444455556666:role/aws-opsworks-service-
role",
            "StackId": "40738975-da59-4c5b-9789-3e422f2cf099",
            "DefaultRootDeviceType": "instance-store",
            "Name": "MyStack",
            "ConfigurationManager": {
                "Version": "11.4",
```

```
                "Name": "Chef"
            },
            "UseCustomCookbooks": false,
            "Region": "us-west-2",
            "DefaultInstanceProfileArn": "arn:aws:iam::444455556666:instance-profile/
aws-opsworks-ec2-role",
            "CustomCookbooksSource": {},
            "DefaultAvailabilityZone": "us-west-2a",
            "HostnameTheme": "Layer_Dependent",
            "Attributes": {
                "Color": "rgb(45, 114, 184)"
            },
            "DefaultOs": "Amazon Linux",
            "CreatedAt": "2013-10-25T19:24:30+00:00"
        }
    ]
}
```

スタックのレイヤーのリストを取得 (describe-layers)

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

describe-layers コマンドを使用して、スタックのレイヤーのリストを取得するか、指定したレイヤーの詳細を取得します。

```
aws opsworks --region us-west-2 describe-layers --stack-id 38ee91e2-abdc-4208-
a107-0b7168b3cc7a
```

前述のコマンドでは、指定したスタック (この例では MySQL レイヤーとカスタムレイヤー) の詳細を含む JSON オブジェクトがコマンドから返されます。各パラメータの説明については、「describe-layers」を参照してください。

```
{
```

```
  "Layers": [
      {
          "StackId": "38ee91e2-abdc-4208-a107-0b7168b3cc7a",
          "Type": "db-master",
          "DefaultSecurityGroupNames": [
              "AWS-OpsWorks-DB-Master-Server"
          ],
          "Name": "MySQL",
          "Packages": [],
          "DefaultRecipes": {
              "Undeploy": [],
              "Setup": [
                  "opsworks_initial_setup",
                  "ssh_host_keys",
                  "ssh_users",
                  "mysql::client",
                  "dependencies",
                  "ebs",
                  "opsworks_ganglia::client",
                  "mysql::server",
                  "dependencies",
                  "deploy::mysql"
              ],
              "Configure": [
                  "opsworks_ganglia::configure-client",
                  "ssh_users",
                  "agent_version",
                  "deploy::mysql"
              ],
              "Shutdown": [
                  "opsworks_shutdown::default",
                  "mysql::stop"
              ],
              "Deploy": [
                  "deploy::default",
                  "deploy::mysql"
              ]
          },
          "CustomRecipes": {
              "Undeploy": [],
              "Setup": [],
              "Configure": [],
              "Shutdown": [],
              "Deploy": []
```

```
        },
        "EnableAutoHealing": false,
        "LayerId": "41a20847-d594-4325-8447-171821916b73",
        "Attributes": {
            "MysqlRootPasswordUbiquitous": "true",
            "RubygemsVersion": null,
            "RailsStack": null,
            "HaproxyHealthCheckMethod": null,
            "RubyVersion": null,
            "BundlerVersion": null,
            "HaproxyStatsPassword": null,
            "PassengerVersion": null,
            "MemcachedMemory": null,
            "EnableHaproxyStats": null,
            "ManageBundler": null,
            "NodejsVersion": null,
            "HaproxyHealthCheckUrl": null,
            "MysqlRootPassword": "*****FILTERED*****",
            "GangliaPassword": null,
            "GangliaUser": null,
            "HaproxyStatsUrl": null,
            "GangliaUrl": null,
            "HaproxyStatsUser": null
        },
        "Shortname": "db-master",
        "AutoAssignElasticIps": false,
        "CustomSecurityGroupIds": [],
        "CreatedAt": "2013-07-25T18:11:19+00:00",
        "VolumeConfigurations": [
            {
                "MountPoint": "/vol/mysql",
                "Size": 10,
                "NumberOfDisks": 1
            }
        ]
    },
    {
        "StackId": "38ee91e2-abdc-4208-a107-0b7168b3cc7a",
        "Type": "custom",
        "DefaultSecurityGroupNames": [
            "AWS-OpsWorks-Custom-Server"
        ],
        "Name": "TomCustom",
        "Packages": [],
```

```
            "DefaultRecipes": {
                "Undeploy": [],
                "Setup": [
                    "opsworks_initial_setup",
                    "ssh_host_keys",
                    "ssh_users",
                    "mysql::client",
                    "dependencies",
                    "ebs",
                    "opsworks_ganglia::client"
                ],
                "Configure": [
                    "opsworks_ganglia::configure-client",
                    "ssh_users",
                    "agent_version"
                ],
                "Shutdown": [
                    "opsworks_shutdown::default"
                ],
                "Deploy": [
                    "deploy::default"
                ]
            },
            "CustomRecipes": {
                "Undeploy": [],
                "Setup": [
                    "tomcat::setup"
                ],
                "Configure": [
                    "tomcat::configure"
                ],
                "Shutdown": [],
                "Deploy": [
                    "tomcat::deploy"
                ]
            },
            "EnableAutoHealing": true,
            "LayerId": "e6cbcd29-d223-40fc-8243-2eb213377440",
            "Attributes": {
                "MysqlRootPasswordUbiquitous": null,
                "RubygemsVersion": null,
                "RailsStack": null,
                "HaproxyHealthCheckMethod": null,
                "RubyVersion": null,
```

```
            "BundlerVersion": null,
            "HaproxyStatsPassword": null,
            "PassengerVersion": null,
            "MemcachedMemory": null,
            "EnableHaproxyStats": null,
            "ManageBundler": null,
            "NodejsVersion": null,
            "HaproxyHealthCheckUrl": null,
            "MysqlRootPassword": null,
            "GangliaPassword": null,
            "GangliaUser": null,
            "HaproxyStatsUrl": null,
            "GangliaUrl": null,
            "HaproxyStatsUser": null
        },
        "Shortname": "tomcustom",
        "AutoAssignElasticIps": false,
        "CustomSecurityGroupIds": [],
        "CreatedAt": "2013-07-25T18:12:53+00:00",
        "VolumeConfigurations": []
    }
  ]
}
```

レシピの実行 (create-deployment)

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

create-deployment コマンドを使用して、スタックコマンドとデプロイメントコマンドを実行します。次の例では、指定されたスタックでカスタムレシピを実行するためのスタックコマンドを実行します。

```
aws opsworks --region us-west-1 create-deployment --stack-id 935450cc-61e0-4b03-
a3e0-160ac817d2bb
```

```
    --command "{\"Name\":\"execute_recipes\", \"Args\":{\"recipes\":[\"phpapp::appsetup
\"]}}"
```

command 引数は、次のような形式の JSON オブジェクトを取得します。

- Name - コマンド名を指定します。この例で使用した execute_recipes コマンドは、指定されたレシピをスタックのインスタンス上で実行します。
- Args - 引数とそれらの値のリストを指定します。この例では、1 つの引数 recipes を使用しています。これには、実行するレシピ (phpapp::appsetup) が指定されています。

JSON オブジェクトの " 文字がすべてエスケープされていることに注意してください。そうしないと、JSON が無効であるというエラーがコマンドから返されます。

コマンドは、describe-commands などのその他の CLI コマンドでこのコマンドを識別するために使用できる、デプロイメント ID を返します。

```
{
    "DeploymentId": "5cbaa7b9-4e09-4e53-aa1b-314fbd106038"
}
```

インストールの依存関係 (create-deployment)

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

create-deployment コマンドを使用して、スタックコマンドとデプロイメントコマンドを実行します。次の例では、スタックのインスタンスの依存関係を更新するための update_dependencies スタックコマンドを実行します。

```
aws opsworks --region us-west-1 create-deployment --stack-id 935450cc-61e0-4b03-
a3e0-160ac817d2bb
--command "{\"Name\":\"install_dependencies\"}"
```

command 引数は、Name パラメータが指定された JSON オブジェクトを取得します。この例では、パラメータの値にコマンド名 install_dependencies が指定されています。JSON オブジェクトの " 文字がすべてエスケープされていることに注意してください。そうしないと、JSON が無効であるというエラーがコマンドから返されます。

コマンドは、describe-commands などのその他の CLI コマンドでこのコマンドを識別するために使用できる、デプロイメント ID を返します。

```
{
    "DeploymentId": "aef5b255-8604-4928-81b3-9b0187f962ff"
}
```

スタック設定の更新 (update-stack)

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

update-stack コマンドを使用して、指定したスタックの設定を更新します。以下の例では、スタックを更新してカスタム JSON をスタック設定属性に追加します。

```
aws opsworks --region us-west-1 update-stack --stack-id 935450cc-61e0-4b03-
a3e0-160ac817d2bb
   --custom-json "{\"somekey\":\"somevalue\"}" --service-role-arn
 arn:aws:iam::444455556666:role/aws-opsworks-service-role
```

JSON オブジェクトの " 文字がすべてエスケープされていることに注意してください。そうしないと、JSON が無効であるというエラーがコマンドから返されます。

> **Note**
>
> また、この例では、スタック用のサービスロールを指定しています。service-role-arn を有効なサービスロール ARN に設定する必要があります。そうしないと、アクションは失

敗します。デフォルト値はありません。必要に応じて、スタックの現在のサービスロール ARN を指定することもできますが、その場合は明示的に指定する必要があります。

update-stack コマンドから返される値はありません。

デバッグとトラブルシューティングのガイド

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

レシピをデバッグしたり、サービスの問題をトラブルシューティングしたりする必要がある場合、通常、以下の手順を順番に実行するのが最も適切な方法です。

1. 現在の問題が「一般的なデバッグとトラブルシューティングの問題」に掲載されていないかを確認します。
2. OpsWorks スタックフォーラムを検索して、その問題が議論されていないか確認します。

   フォーラムには経験豊富なユーザーが多数含まれており、 OpsWorks スタックチームによってモニタリングされています。
3. レシピの問題については、「レシピのデバッグ」を参照してください。
4. OpsWorks スタックサポートに問い合わせるか、 OpsWorks スタックフォーラムに問題を投稿してください。

以下のセクションでは、レシピをデバッグするためのガイダンスを提供します。最終セクションでは、一般的なデバッグやトラブルシューティングに関する問題とその解決方法について説明します。

> **Note**
>
> 各 Chef はログを作成します。このログは、実行の詳細な説明を提供する有用なトラブルシューティングリソースとなります。ログの詳細情報の量を指定するには、目的のログレベ

ルを指定するカスタムレシピに、`Chef::Log.level` ステートメントを追加します。デフォルト値は `:info` です。次の例では、Chef ログレベルを `:debug` に設定する方法を示します。この場合、実行の最も詳細な説明が提供されます。

```
Chef::Log.level = :debug
```

Chef ログを表示および解釈する方法の詳細については、「Chef ログ」を参照してください。

トピック

- レシピのデバッグ
- 一般的なデバッグとトラブルシューティングの問題

レシピのデバッグ

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

ライフサイクルイベントが発生したときや、[Execute Recipes] (レシピの実行) スタックコマンドを実行したときに、 OpsWorks スタックは [agent] (エージェント) に対してコマンドを発行し、指定されたインスタンスで [Chef Solo] (ソロシェフ) の実行を開始して、適切なレシピ (カスタムレシピも含む) を実行します。このセクションでは、失敗したレシピをデバッグする方法について説明します。

トピック

- 障害が発生したインスタンスへのログイン
- Chef ログ
- スタックエージェント OpsWorks CLI の使用

障害が発生したインスタンスへのログイン

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

レシピが失敗すると、インスタンスはオンラインではなく `setup_failed` 状態になります。インスタンスは OpsWorks スタックに関してオンラインではありませんが、EC2 インスタンスは実行されており、問題のトラブルシューティングのために口グインすると便利です。たとえば、アプリケーションまたはカスタムクックブックが正しくインストールされているかどうかを確認できます。OpsWorks スタックの SSH および RDP ログインの組み込みサポートは、オンライン状態のインスタンスでのみ使用できます。ただし、インスタンスに SSH キーペアを割り当てている場合は、以下のように口グインできます。

- Linux インスタンス – SSH キーペアのプライベートキーを使用して、OpenSSH や PuTTY のようなサードパーティ SSH クライアントで口グインします。

  そのために、EC2 キーペアまたは個人 SSH キーペアを使用できます。
- Windows インスタンス – EC2 キーペアのプライベートキーを使用して、インスタンスの管理者パスワードを取得します。

  そのパスワードを使用して、目的の RDP クライアントで口グインします。詳細については、「管理者として口グイン」を参照してください。個人 SSH キーペアを使用して、管理者パスワードを取得することはできません。

Chef 口グ

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS

re:Post または AWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Chef ログは、特にレシピをデバッグするための主要なトラブルシューティングリソースの 1 つです。 OpsWorks スタックは各コマンドの Chef ログをキャプチャし、インスタンスの最新の 30 個のコマンドのログを保持します。実行はデバッグモードであるため、ログには Chef 実行の詳細 (`stdout` や `stderror` に送信されたテキストなど) が含まれます。レシピが失敗した場合、ログには Chef スタックトレースが含まれます。

OpsWorks スタックには、Chef ログを表示するいくつかの方法があります。ログ情報を入手したら、その情報を使用して失敗したレシピをデバッグできます。

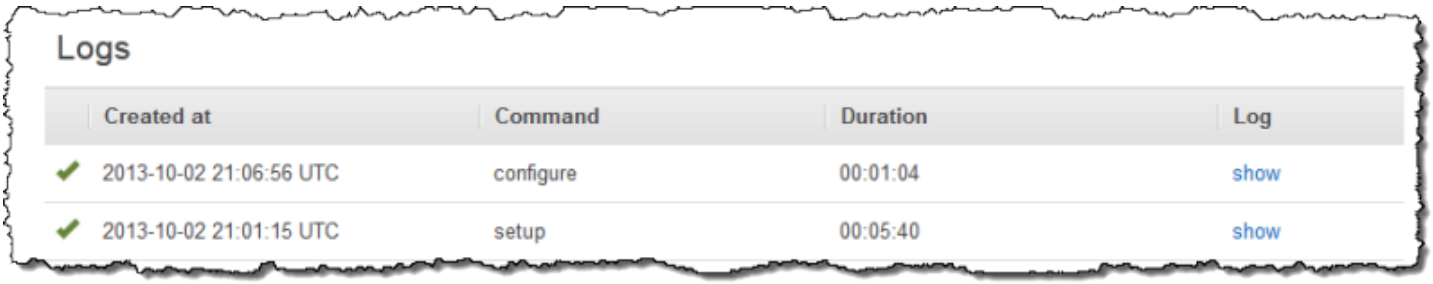
> **Note**
>
> SSH を使用してインスタンスに接続し、エージェント CLI の `show_log` コマンドを実行することで、指定したログの末尾を表示することもできます。詳細については、「Chef ログの表示」を参照してください。

トピック

- コンソールを使用した Chef ログの表示
- CLI または API を使用した Chef ログの表示
- インスタンスの Chef ログの表示
- Chef ログの解釈
- Chef ログの一般的なエラー

コンソールを使用した Chef ログの表示

Chef ログを表示する最も簡単な方法は、インスタンスの詳細ページを参照することです。[Logs] セクションには、各イベントと Execute Recipes コマンドのエントリが含まれています。Configure および Setup の各ライフサイクルイベントに対応する configure コマンドと setup コマンドが含まれた、インスタンスの [Logs] セクションを次に示します。



該当するコマンドの [Log] 列で [show] をクリックすると、対応する Chef ログが表示されます。エラーが発生した場合、 OpsWorks スタックはエラーのログを自動的に開きます。これは通常、ファイルの最後にあります。

CLI または API を使用した Chef ログの表示

Stacks CLI `describe-commands` コマンドまたは `DescribeCommands` API アクションを使用して、Amazon OpsWorks S3 バケットに保存されているログを表示できます。 Amazon S3 次に、CLI を使用して、指定したインスタンスの現在のログファイルセットを表示する方法を示します。`DescribeCommands` を使用する場合の手順は基本的にほぼ同じです。

OpsWorks スタックを使用してインスタンスの Chef ログを表示するには

1. インスタンスの詳細ページを開き、OpsWorks ID 値をコピーします。
2. 次のように、ID 値を使用して `describe-commands` CLI コマンドを実行します。

```
aws opsworks describe-commands --instance-id 67bf0da2-29ed-4217-990c-d895d51812b9
```

コマンドは、 OpsWorks スタックがインスタンスで実行した各コマンドの埋め込みオブジェクトを含む JSON オブジェクトを、最新のものを最初に返します。Type パラメータには、各組み込みオブジェクトのコマンドタイプ (この例では `configure` コマンドと `setup` コマンド) が含まれます。

```
{
    "Commands": [
        {
            "Status": "successful",
            "CompletedAt": "2013-10-25T19:38:36+00:00",
            "InstanceId": "67bf0da2-29ed-4217-990c-d895d51812b9",
            "AcknowledgedAt": "2013-10-25T19:38:24+00:00",
            "LogUrl": "https://s3.amazonaws.com/prod_stage-log/logs/
b6c402df-5c23-45b2-a707-ad20b9c5ae40?AWSAccessKeyId=AKIAIOSFODNN7EXAMPLE
```

```
&Expires=1382731518&Signature=YkqS5IZN2P4wixjHwoC3aCMbn5s%3D&response-cache-
control=private&response-content-encoding=gzip&response-content-
type=text%2Fplain",
            "Type": "configure",
            "CommandId": "b6c402df-5c23-45b2-a707-ad20b9c5ae40",
            "CreatedAt": "2013-10-25T19:38:11+00:00",
            "ExitCode": 0
        },
        {
            "Status": "successful",
            "CompletedAt": "2013-10-25T19:31:08+00:00",
            "InstanceId": "67bf0da2-29ed-4217-990c-d895d51812b9",
            "AcknowledgedAt": "2013-10-25T19:29:01+00:00",
            "LogUrl": "https://s3.amazonaws.com/prod_stage-log/logs/2a90e862-
f974-42a6-9342-9a4f03468358?AWSAccessKeyId=AKIAIOSFODNN7EXAMPLE
&Expires=1382731518&Signature=cxKYHO8mCCd4MvOyFb6ywebeQtA%3D&response-cache-
control=private&response-content-encoding=gzip&response-content-
type=text%2Fplain",
            "Type": "setup",
            "CommandId": "2a90e862-f974-42a6-9342-9a4f03468358",
            "CreatedAt": "2013-10-25T19:26:01+00:00",
            "ExitCode": 0
        }
    ]
}
```


3. LogUrl 値をブラウザにコピーしてログを表示します。

インスタンスに数個以上のコマンドがある場合は、describe-commands にパラメータを追加して、応答オブジェクトに含めるコマンドをフィルタできます。詳細については、「describe-commands」を参照してください。

インスタンスの Chef ログの表示

> **Note**
>
> このセクションのトピックは、Chef 12 に適用されます。Chef 11.10 以前リリースの Chef のログの場所については、「Linux 用 Chef 11.10 以前のバージョンのトラブルシューティング」を参照してください。

Linux インスタンス

OpsWorks スタックは、各インスタンスの Chef ログを /var/chef/runs ディレクトリに保存します。(Linux インスタンスの場合、このディレクトリには、JSON 形式のファイルとして保存される、関連データバッグも含まれます)。このディレクトリにアクセスするには、sudo 権限が必要です。各実行のログは、個別の実行のサブディレクトリ内にある chef.log という名前のファイルにあります。

OpsWorks スタックは内部ログをインスタンスの /var/log/aws/opsworksフォルダに保存します。通常、この情報はトラブルシューティングにはあまり役立ちません。ただし、これらのログは OpsWorks スタックのサポートに役立ちます。サービスで問題が発生した場合は、ログの提供を求められることがあります。Linux のログも、トラブルシューティングに役立つデータを提供する場合があります。

Windows インスタンス

エージェントログ

Windows インスタンスでは、OpsWorks のログは次のような ProgramData のパスに保存されます。数値にはタイムスタンプが含まれます。

```
C:\ProgramData\OpsWorksAgent\var\logs\number
```

> **Note**
>
> デフォルトでは、ProgramData は非表示フォルダです。非表示を解除するには、[Folder Options] に移動します。[View] で、非表示のファイルを表示するオプションを選択します。

次の例では、エージェントは Windows インスタンスにログオンします。

```
Mode                 LastWriteTime     Length Name
----                 -------------     ------ ----
-a---         5/24/2015  11:59 PM     127277 command.20150524.txt
-a---         5/25/2015  11:59 PM     546772 command.20150525.txt
-a---         5/26/2015  11:59 PM     551514 command.20150526.txt
-a---         5/27/2015   9:43 PM     495181 command.20150527.txt
-a---         5/24/2015  11:59 PM      24353 keepalive.20150524.txt
-a---         5/25/2015  11:59 PM     106232 keepalive.20150525.txt
-a---         5/26/2015  11:59 PM     106208 keepalive.20150526.txt
-a---         5/27/2015   8:54 PM      92593 keepalive.20150527.txt
```

```
-a---         5/24/2015   7:19 PM       3891 service.20150524.txt
-a---         5/27/2015   8:54 PM       1493 service.20150527.txt
-a---         5/24/2015  11:59 PM     112549 wire.20150524.txt
-a---         5/25/2015  11:59 PM     501501 wire.20150525.txt
-a---         5/26/2015  11:59 PM     499640 wire.20150526.txt
-a---         5/27/2015   8:54 PM     436870 wire.20150527.txt
```

Chef ログ

Windows インスタンスでは、Chef のログは次のような `ProgramData` のパスに保存されます。数値にはタイムスタンプが含まれます。

```
C:\ProgramData\OpsWorksAgent\var\commands\number
```

> **Note**
>
> このディレクトリには、最初の (OpsWorks が所有する) Chef の実行の出力のみが含まれます。

次の例は、Windows インスタンスで OpsWorks が所有する Chef ログを示しています。

```
 Mode                 LastWriteTime            Name
 ----                 -------------            ----
 d----         5/24/2015   7:23 PM
 configure-7ecb5f47-7626-439b-877f-5e7cb40ab8be
 d----         5/26/2015   8:30 PM            configure-8e74223b-d15d-4372-aeea-
a87b428ffc2b
 d----         5/24/2015   6:34 PM            configure-
c3980a1c-3d08-46eb-9bae-63514cee194b
 d----         5/26/2015   8:32 PM            grant_remote_access-70dbf834-1bfa-4fce-
b195-e50e85402f4c
 d----         5/26/2015  10:30 PM            revoke_remote_access-1111fce9-843a-4b27-
b93f-ecc7c5e9e05b
 d----         5/24/2015   7:21 PM            setup-754ec063-8b60-4cd4-
b6d7-0e89d7b7aa78
 d----         5/26/2015   8:27 PM            setup-af5bed36-5afd-4115-
af35-5766f88bc039
 d----         5/24/2015   6:32 PM            setup-d8abeffa-24d4-414b-
bfb1-4ad07319f358
 d----         5/24/2015   7:13 PM            shutdown-c7130435-9b5c-4a95-
be17-6b988fc6cf9a
```

```
d----         5/26/2015   8:25 PM
sync_remote_users-64c79bdc-1f6f-4517-865b-23d2def4180c
d----         5/26/2015   8:48 PM
update_custom_cookbooks-2cc59a94-315b-414d-85eb-2bdea6d76c6a
```

ユーザーの Chef ログ

Chef の実行ログは、次の図のように、番号が付けられた Chef コマンドに関連する名前のフォルダの、`logfile.txt` という名前のファイルにあります。

C:/chef └── runs └── command-12345 ├── attribs.json ├── client.rb └── logfile.txt

Chef ログの解釈

ほとんどの場合、ログの先頭には内部 Chef ログが含まれています。

```
# Logfile created on Thu Oct 17 17:25:12 +0000 2013 by logger.rb/1.2.6
[2013-10-17T17:25:12+00:00] INFO: *** Chef 11.4.4 ***
[2013-10-17T17:25:13+00:00] DEBUG: Building node object for php-app1.localdomain
[2013-10-17T17:25:13+00:00] DEBUG: Extracting run list from JSON attributes provided on
 command line
[2013-10-17T17:25:13+00:00] INFO: Setting the run_list to
 ["opsworks_custom_cookbooks::load", "opsworks_custom_cookbooks::execute"] from JSON
[2013-10-17T17:25:13+00:00] DEBUG: Applying attributes from json file
[2013-10-17T17:25:13+00:00] DEBUG: Platform is amazon version 2013.03
[2013-10-17T17:25:13+00:00] INFO: Run List is [recipe[opsworks_custom_cookbooks::load],
 recipe[opsworks_custom_cookbooks::execute]]
[2013-10-17T17:25:13+00:00] INFO: Run List expands to [opsworks_custom_cookbooks::load,
 opsworks_custom_cookbooks::execute]
[2013-10-17T17:25:13+00:00] INFO: Starting Chef Run for php-app1.localdomain
[2013-10-17T17:25:13+00:00] INFO: Running start handlers
[2013-10-17T17:25:13+00:00] INFO: Start handlers complete.
[2013-10-17T17:25:13+00:00] DEBUG: No chefignore file found at /opt/aws/opsworks/
releases/20131015111601_209/cookbooks/chefignore no files will be ignored
[2013-10-17T17:25:13+00:00] DEBUG: Cookbooks to compile: ["gem_support", "packages",
 "opsworks_bundler", "opsworks_rubygems", "ruby", "ruby_enterprise", "dependencies",
 "opsworks_commons", "scm_helper", :opsworks_custom_cookbooks]
[2013-10-17T17:25:13+00:00] DEBUG: Loading cookbook gem_support's library file: /
opt/aws/opsworks/releases/20131015111601_209/cookbooks/gem_support/libraries/
current_gem_version.rb
[2013-10-17T17:25:13+00:00] DEBUG: Loading cookbook packages's library file: /opt/aws/
opsworks/releases/20131015111601_209/cookbooks/packages/libraries/packages.rb
```

```
[2013-10-17T17:25:13+00:00] DEBUG: Loading cookbook dependencies's library file: /
opt/aws/opsworks/releases/20131015111601_209/cookbooks/dependencies/libraries/
current_gem_version.rb
[2013-10-17T17:25:13+00:00] DEBUG: Loading cookbook opsworks_commons's library file: /
opt/aws/opsworks/releases/20131015111601_209/cookbooks/opsworks_commons/libraries/
activesupport_blank.rb
[2013-10-17T17:25:13+00:00] DEBUG: Loading cookbook opsworks_commons's library file: /
opt/aws/opsworks/releases/20131015111601_209/cookbooks/opsworks_commons/libraries/
monkey_patch_chefgem_resource.rb
...
```

ファイルのこの部分は Chef の専門家に非常に役立ちます。ほとんどのコマンドは多数のレシピに関連していますが、実行リストに含まれるレシピは 2 つに限られます。この 2 つのレシピでは、他のすべての組み込みレシピとカスタムレシピをロードして実行するタスクを処理します。

通常、ファイルで最も関心を引く部分は末尾にあります。実行が正常に終了すると、次のような内容が表示されます。

```
...
[Tue, 11 Jun 2013 16:00:50 +0000] DEBUG: STDERR:
[Tue, 11 Jun 2013 16:00:50 +0000] DEBUG: ---- End output of /sbin/service mysqld
 restart ----
[Tue, 11 Jun 2013 16:00:50 +0000] DEBUG: Ran /sbin/service mysqld restart returned 0
[Tue, 11 Jun 2013 16:00:50 +0000] INFO: service[mysql]: restarted successfully
[Tue, 11 Jun 2013 16:00:50 +0000] INFO: Chef Run complete in 84.07096 seconds
[Tue, 11 Jun 2013 16:00:50 +0000] INFO: cleaning the checksum cache
[Tue, 11 Jun 2013 16:00:50 +0000] DEBUG: removing unused checksum cache file /var/chef/
cache/checksums/chef-file--tmp-chef-rendered-template20130611-4899-8wef7e-0
[Tue, 11 Jun 2013 16:00:50 +0000] DEBUG: removing unused checksum cache file /var/chef/
cache/checksums/chef-file--tmp-chef-rendered-template20130611-4899-1xpwyb6-0
[Tue, 11 Jun 2013 16:00:50 +0000] DEBUG: removing unused checksum cache file /var/chef/
cache/checksums/chef-file--etc-monit-conf
[Tue, 11 Jun 2013 16:00:50 +0000] INFO: Running report handlers
[Tue, 11 Jun 2013 16:00:50 +0000] INFO: Report handlers complete
[Tue, 11 Jun 2013 16:00:50 +0000] DEBUG: Exiting
```

> **Note**
>
> エージェント CLI を使用して、実行中または実行後にログの末尾を表示できます。詳細については、「Chef ログの表示」を参照してください。

レシピが失敗した場合は、次のように、例外の後に Chef スタックトレースが続く ERROR レベルの出力を探す必要があります。

```
...
Please report any problems with the /usr/scripts/mysqlbug script!

[  OK  ]
MySQL Daemon failed to start.
Starting mysqld:  [FAILED]STDERR: 130611 15:07:55 [Warning] The syntax '--log-slow-
queries' is deprecated and will be removed in a future release. Please use '--slow-
query-log'/'--slow-query-log-file' instead.
130611 15:07:56 [Warning] The syntax '--log-slow-queries' is deprecated and will be
 removed in a future release. Please use '--slow-query-log'/'--slow-query-log-file'
 instead.
---- End output of /sbin/service mysqld start ----

/opt/aws/opsworks/releases/20130605160141_122/vendor/bundle/ruby/1.8/gems/
chef-0.9.15.5/bin/../lib/chef/mixin/command.rb:184:in `handle_command_failures'
  /opt/aws/opsworks/releases/20130605160141_122/vendor/bundle/ruby/1.8/gems/
chef-0.9.15.5/bin/../lib/chef/mixin/command.rb:131:in `run_command'
  /opt/aws/opsworks/releases/20130605160141_122/vendor/bundle/ruby/1.8/gems/
chef-0.9.15.5/bin/../lib/chef/provider/service/init.rb:37:in `start_service'
  /opt/aws/opsworks/releases/20130605160141_122/vendor/bundle/ruby/1.8/gems/
chef-0.9.15.5/bin/../lib/chef/provider/service.rb:60:in `action_start'
  /opt/aws/opsworks/releases/20130605160141_122/vendor/bundle/ruby/1.8/gems/
chef-0.9.15.5/bin/../lib/chef/resource.rb:406:in `send'
  /opt/aws/opsworks/releases/20130605160141_122/vendor/bundle/ruby/1.8/gems/
chef-0.9.15.5/bin/../lib/chef/resource.rb:406:in `run_action'
  /opt/aws/opsworks/releases/20130605160141_122/vendor/bundle/ruby/1.8/gems/
chef-0.9.15.5/bin/../lib/chef/runner.rb:53:in `run_action'
  /opt/aws/opsworks/releases/20130605160141_122/vendor/bundle/ruby/1.8/gems/
chef-0.9.15.5/bin/../lib/chef/runner.rb:89:in `converge'
  /opt/aws/opsworks/releases/20130605160141_122/vendor/bundle/ruby/1.8/gems/
chef-0.9.15.5/bin/../lib/chef/runner.rb:89:in `each'
  /opt/aws/opsworks/releases/20130605160141_122/vendor/bundle/ruby/1.8/gems/
chef-0.9.15.5/bin/../lib/chef/runner.rb:89:in `converge'
  /opt/aws/opsworks/releases/20130605160141_122/vendor/bundle/ruby/1.8/gems/
chef-0.9.15.5/bin/../lib/chef/resource_collection.rb:94:in `execute_each_resource'
  /opt/aws/opsworks/releases/20130605160141_122/vendor/bundle/ruby/1.8/gems/
chef-0.9.15.5/bin/../lib/chef/resource_collection/stepable_iterator.rb:116:in `call'
```

```
  /opt/aws/opsworks/releases/20130605160141_122/vendor/bundle/ruby/1.8/gems/
chef-0.9.15.5/bin/../lib/chef/resource_collection/stepable_iterator.rb:116:in
 `call_iterator_block'
  /opt/aws/opsworks/releases/20130605160141_122/vendor/bundle/ruby/1.8/gems/
chef-0.9.15.5/bin/../lib/chef/resource_collection/stepable_iterator.rb:85:in `step'
  /opt/aws/opsworks/releases/20130605160141_122/vendor/bundle/ruby/1.8/gems/
chef-0.9.15.5/bin/../lib/chef/resource_collection/stepable_iterator.rb:104:in `iterate'
  /opt/aws/opsworks/releases/20130605160141_122/vendor/bundle/ruby/1.8/gems/
chef-0.9.15.5/bin/../lib/chef/resource_collection/stepable_iterator.rb:55:in
 `each_with_index'
  /opt/aws/opsworks/releases/20130605160141_122/vendor/bundle/ruby/1.8/gems/
chef-0.9.15.5/bin/../lib/chef/resource_collection.rb:92:in `execute_each_resource'
  /opt/aws/opsworks/releases/20130605160141_122/vendor/bundle/ruby/1.8/gems/
chef-0.9.15.5/bin/../lib/chef/runner.rb:84:in `converge'
  /opt/aws/opsworks/releases/20130605160141_122/vendor/bundle/ruby/1.8/gems/
chef-0.9.15.5/bin/../lib/chef/client.rb:268:in `converge'
  /opt/aws/opsworks/releases/20130605160141_122/vendor/bundle/ruby/1.8/gems/
chef-0.9.15.5/bin/../lib/chef/client.rb:158:in `run'
  /opt/aws/opsworks/releases/20130605160141_122/vendor/bundle/ruby/1.8/gems/
chef-0.9.15.5/bin/../lib/chef/application/solo.rb:190:in `run_application'
  /opt/aws/opsworks/releases/20130605160141_122/vendor/bundle/ruby/1.8/gems/
chef-0.9.15.5/bin/../lib/chef/application/solo.rb:181:in `loop'
  /opt/aws/opsworks/releases/20130605160141_122/vendor/bundle/ruby/1.8/gems/
chef-0.9.15.5/bin/../lib/chef/application/solo.rb:181:in `run_application'
  /opt/aws/opsworks/releases/20130605160141_122/vendor/bundle/ruby/1.8/gems/
chef-0.9.15.5/bin/../lib/chef/application.rb:62:in `run'
  /opt/aws/opsworks/releases/20130605160141_122/vendor/bundle/ruby/1.8/gems/
chef-0.9.15.5/bin/chef-solo:25
  /opt/aws/opsworks/current/bin/chef-solo:16:in `load'
  /opt/aws/opsworks/current/bin/chef-solo:16
```

ファイルの末尾が Chef スタックトレースです。また、例外の直前の出力も調べる必要があります。この部分には `package not available` などのシステムエラーが含まれていることが多く、失敗の原因の特定に役立つ場合もあります。この例では、MySQL デーモンの起動に失敗しています。

Chef ログの一般的なエラー

Chef ログの一般的なエラーとその対処方法を以下に示します。

ログは見つかりませんでした

Chef の実行が開始されると、インスタンスは署名付き Amazon S3 URL を受け取ります。この URL により、Chef の実行が終了したときにウェブページでログを表示することができます。こ

の URL は 2 時間で失効するため、Chef の実行に 2 時間以上かかると、Chef の実行中に何も問題が起きていない場合であっても、Amazon S3 サイトにログはアップロードされません。ログを作成するコマンドは成功しますが、ログが表示されるのはインスタンス上だけで、署名済み URL では表示されません。

ログが突然終了する

成功が示されることも、エラー情報が表示されることもなく、Chef ログが突然終了した場合、メモリ不足の状態が発生したために Chef がログを完了できなかったと考えられます。このような場合は、大規模なインスタンスでもう一度試してみてください。

クックブックまたはレシピが見つからない

Chef 実行時にクックブックキャッシュにないクックブックまたはレシピに遭遇した場合、次のような内容が表示されます。

```
DEBUG: Loading Recipe mycookbook::myrecipe via include_recipe
ERROR: Caught exception during execution of custom recipe: mycookbook::myrecipe:
   Cannot find a cookbook named mycookbook; did you forget to add metadata to a
 cookbook?
```

このエントリは、mycookbook というクックブックがクックブックキャッシュにないことを示しています。Chef 11.4 では、metadata.rb で依存関係を正しく宣言していない場合にも、このエラーが発生する可能性があります。

OpsWorks スタックは、インスタンスのクックブックキャッシュからレシピを実行します。インスタンスの起動時に、リポジトリからこのキャッシュにクックブックがダウンロードされます。ただし、後でリポジトリ内のクックブックを変更しても、 OpsWorks スタックはオンラインインスタンスのキャッシュを自動的に更新しません。インスタンスの起動以降にクックブックの変更や新しいクックブックの追加を行った場合は、次の手順を実行します。

1. 変更がリポジトリにコミットされていることを確認します。
2. Update Cookbooks スタックコマンド を実行して、リポジトリの最新バージョンでクックブックキャッシュを更新します。

ローカルコマンドのエラー

Chef の execute リソースが指定されたコマンドを実行できない場合、次のような内容が表示されます。

```
DEBUG: ---- End output of ./configure --with-config-file-path=/ returned 2
```

```
ERROR: execute[PHP: ./configure] (/root/opsworks-agent/site-cookbooks/php-fpm/
recipes/install.rb line 48) had an error:
   ./configure --with-config-file-path=/
```

ログをスクロールアップすると、コマンドの stderr および stdout 出力が表示されます。これらの出力は、コマンドが失敗した理由を突き止める際に役立ちます。

パッケージのエラー

パッケージのインストールに失敗した場合、次のような内容が表示されます。

```
ERROR: package[zend-server-ce-php-5.3] (/root/opsworks-agent/site-cookbooks/
zend_server/recipes/install.rb line 20)
   had an error: apt-get -q -y --force-yes install zend-server-ce-php-5.3=5.0.4+b17
 returned 100, expected 0
```

ログをスクロールアップすると、コマンドの STDOUT および STDERROR 出力が表示されます。これらの出力は、パッケージのインストールに失敗した理由を突き止める際に役立ちます。

スタックエージェント OpsWorks CLI の使用

Important

この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Note

エージェントの CLI は Linux インスタンスにのみ使用できます。

すべてのオンラインインスタンスで、 OpsWorks スタックは サービスと通信する エージェントをインストールします。次に OpsWorks 、 スタックサービスはエージェントにコマンドを送信して、ライフサイクルイベントが発生したときにインスタンスで Chef 実行を開始するなどのタスクを実行し

ます。Linux インスタンス用に、エージェントにはトラブルシューティングに役立つコマンドライン インターフェイス (CLI) が用意されています。エージェント CLI コマンドを実行するには、SSH を使用してインスタンスに接続します。その後、次のようなさまざまなタスクを行うエージェント CLI コマンドを実行します。

- レシピを実行する。
- Chef ログを表示する。
- スタック設定およびデプロイメント JSON を表示する。

インスタンスへの SSH 接続をセットアップする方法の詳細については、「SSH でのログイン」を参照してください。SSH とスタックに対する sudo 権限も必要です。

このセクションでは、エージェント CLI をトラブルシューティングに使用する方法について説明します。詳細およびコマンドリファレンスについては、「OpsWorks スタックエージェント CLI」を参照してください。

トピック

- レシピの実行
- Chef ログの表示
- スタック設定およびデプロイメント JSON の表示

レシピの実行

エージェント CLI の `run_command` コマンドは、以前に実行したコマンドを再実行するようエージェントに指示します。トラブルシューティングに最も役立つコマンド (`setup`、`configure`、`deploy`、`undeploy`) は、それぞれライフサイクルイベントに対応しています。これらのコマンドは、Chef 実行を開始して関連付けられたレシピを実行するようエージェントに指示します。

> **Note**
>
> `run_command` コマンドで実行されるのは、指定されたコマンドに関連付けられたレシピ (通常はライフサイクルイベントに関連付けられたレシピ) のグループに限られています。このコマンドを使用して特定のレシピを実行することはできません。指定した 1 つ以上のレシピを実行するには、Execute Recipes スタックコマンドを使用するか、同等の CLI または API アクション (`create-deployment` および `CreateDeployment`) を使用します。

run_command コマンドは、カスタムレシピ (特に、コンソールから直接トリガーできない、Setup および Configure の各ライフサイクルイベントに割り当てられたレシピ) をデバッグする際に役立ちます。run_command を使用すると、インスタンスを起動または停止しなくても、必要な頻度で特定のイベントのレシピを実行できます。

> **Note**
>
> OpsWorks スタックは、クックブックリポジトリではなく、インスタンスのクックブックキャッシュからレシピを実行します。 OpsWorks スタックは、インスタンスの起動時にクックブックをこのキャッシュにダウンロードしますが、その後クックブックを変更してもオンラインインスタンスのキャッシュは自動的に更新されません。インスタンスの起動以降にクックブックを変更した場合は、Update Cookbooks スタックコマンドを実行して、リポジトリの最新バージョンでクックブックキャッシュを更新する必要があります。

エージェントは最新のコマンドだけをキャッシュに入れます。これらのコマンドを表示するには、キャッシュされたコマンドと各コマンドの実行時刻のリストを返す list_commands を実行します。

```
sudo opsworks-agent-cli list_commands
2013-02-26T19:08:26        setup
2013-02-26T19:12:01        configure
2013-02-26T19:12:05        configure
2013-02-26T19:22:12        deploy
```

最新のコマンドを再実行するには、次のコマンドを実行します。

```
sudo opsworks-agent-cli run_command
```

指定したコマンドの最新のインスタンスを再実行するには、次のコマンドを実行します。

```
sudo opsworks-agent-cli run_command command
```

たとえば、Setup レシピを再実行するには、次のコマンドを実行します。

```
sudo opsworks-agent-cli run_command setup
```

各コマンドには、そのコマンドの実行時のスタックとデプロイメントの状態を表すスタック設定およびデプロイメント JSON が関連付けられています。このデータは次のコマンドまでの間に変更される可能性があるため、コマンドの古いインスタンスは最新のデータとは多少異なるデータを使用している場合があります。コマンドの特定のインスタンスを再実行するには、list_commands の出力から時刻をコピーし、次のコマンドを実行します。

```
sudo opsworks-agent-cli run_command time
```

前の例はすべて、デフォルトの JSON (そのコマンド用にインストールされた JSON) を使用してコマンドを再実行しています。次のように、任意の JSON ファイルに対してコマンドを再実行できます。

```
sudo opsworks-agent-cli run_command -f /path/to/valid/json.file
```

Chef ログの表示

エージェント CLI の show_log コマンドは、指定されたログを表示します。このコマンドが完了すると、ユーザーはファイルの末尾を確認すると考えられます。そのため、show_log コマンドでは、一般にユーザーがエラー情報を確認する場所であるログの末尾が表示されます。スクロールアップすると、ログの前の部分を表示できます。

現在のコマンドのログを表示するには、次のコマンドを実行します。

```
sudo opsworks-agent-cli show_log
```

特定のコマンドのログを表示することもできますが、エージェントがキャッシュに入れるのは、最新 30 個のコマンドのログだけであることに注意してください。インスタンスのコマンドを一覧表示するには、キャッシュされたコマンドと各コマンドの実行時刻のリストを返す list_commands を実行します。例については、レシピの実行を参照してください。

直近に実行された特定のコマンドのログを表示するには、次のコマンドを実行します。

```
sudo opsworks-agent-cli show_log command
```

command パラメータは、setup、configure、deploy、undeploy、start、stop、または restart に設定できます。これらのコマンドのほとんどはライフサイクルイベントに対応しており、関連付けられているレシピを実行するようエージェントに指示します。

実行された特定のコマンドのログを表示するには、list_commands の出力から日付をコピーし、次のコマンドを実行します。

```
sudo opsworks-agent-cli show_log date
```

コマンドがまだ実行中の場合、show_log はログの現在の状態を表示します。

> **Note**
>
> show_log を使用してエラーやメモリ不足の問題のトラブルシューティングを行う 1 つの方法として、次のように実行中にログの末尾を表示します。
>
> 1. run_command を使用して、適切なライフサイクルイベントをトリガーします。詳細については、「レシピの実行」を参照してください。
> 2. show_log を繰り返し実行して、ログの書き込み中にログの末尾を表示します。
>
> Chef がメモリ不足になったり、予期せず終了した場合は、ログが突然終了します。レシピが失敗した場合、ログは例外とスタック トレースで終了します。

スタック設定およびデプロイメント JSON の表示

レシピで使用するデータの大半は、スタック設定およびデプロイメント JSON から取得されます。JSON は、スタック設定、デプロイメント、およびユーザーが追加できるオプションのカスタム属性の詳細な記述である一連の Chef 属性を定義したものです。コマンドごとに、 OpsWorks Stacks はコマンド の時点でスタックとデプロイ状態を表す JSON をインストールします。詳細については、「スタック設定およびデプロイメント属性」を参照してください。

カスタムレシピでスタック設定およびデプロイ JSON からデータを取得した場合、JSON を調べることでデータを確認できます。スタック設定およびデプロイ JSON を表示する最も簡単な方法は、JSON オブジェクトの書式設定されたバージョンを表示する、エージェント CLI の get_json コマンドを実行することです。標準的な出力の最初の数行を次に示します。

```
{
  "opsworks": {
    "layers": {
      "php-app": {
```

```
        "id": "4a2a56c8-f909-4b39-81f8-556536d20648",
        "instances": {
          "php-app2": {
            "elastic_ip": null,
            "region": "us-west-2",
            "booted_at": "2013-02-26T20:41:10+00:00",
            "ip": "10.112.235.192",
            "aws_instance_id": "i-34037f06",
            "availability_zone": "us-west-2a",
            "instance_type": "c1.medium",
            "private_dns_name": "ip-10-252-0-203.us-west-2.compute.internal",
            "private_ip": "10.252.0.203",
            "created_at": "2013-02-26T20:39:39+00:00",
            "status": "online",
            "backends": 8,
            "public_dns_name": "ec2-10-112-235-192.us-west-2.compute.amazonaws.com"
...
```

最新のスタック設定およびデプロイメント JSON を表示するには、次のコマンドを実行します。

```
sudo opsworks-agent-cli get_json
```

指定したコマンドの最新のスタック設定およびデプロイメント JSON を表示するには、次のコマンドを実行します。

```
sudo opsworks-agent-cli get_json command
```

command パラメータは、`setup`、`configure`、`deploy`、`undeploy`、`start`、`stop`、または `restart` に設定できます。これらのコマンドのほとんどはライフサイクルイベントに対応しており、関連付けられているレシピを実行するようエージェントに指示します。

特定のコマンド実行のスタック設定およびデプロイメント JSON を表示するには、次のようにコマンドの日付を指定します。

```
sudo opsworks-agent-cli get_json date
```

このコマンドを使用する最も簡単な方法は次のとおりです。

1. インスタンスで実行されたコマンドと各コマンドが実行された日付のリストを返す、`list_commands` を実行します。

2. 該当するコマンドの日付をコピーし、`get_json` の *`date`* 引数として使用します。

一般的なデバッグとトラブルシューティングの問題

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このセクションでは、一般的なデバッグやトラブルシューティングに関する問題とその解決方法について説明します。

トピック

- OpsWorks スタックのトラブルシューティング
- インスタンス登録の問題のトラブルシューティング

OpsWorks スタックのトラブルシューティング

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このセクションでは、よく発生する OpsWorks スタックの問題とその解決策について説明します。

トピック

- インスタンスを管理できない
- Chef の実行後にインスタンスが起動しない

- Elastic Load Balancing ヘルスチェックでレイヤーのインスタンスがすべて失敗する
- Elastic Load Balancing のロードバランサーと通信できない
- インポートしたオンプレミスインスタンスで再起動後にボリュームの設定を完了できない
- 再起動後、EBS ボリュームが再アタッチされない
- OpsWorks スタックセキュリティグループを削除できない
- OpsWorks スタックセキュリティグループが誤って削除されました
- Chef のログが突然終了する
- クックブックが更新されない
- インスタンスが起動中のステータスでスタックする
- インスタンスが予期せずに再起動する
- opsworks-agent プロセスがインスタンスで実行されている
- 予期しない execute_recipes コマンド

インスタンスを管理できない

問題: 以前に管理可能であったインスタンスを管理できなくなった。場合によっては、次のような エラーがログに表示される。

```
Aws::CharlieInstanceService::Errors::UnrecognizedClientException - The security token
 included in the request is invalid.
```

原因: インスタンスが依存している OpsWorks 外部のリソースが編集または削除された場合に、この問題が発生する可能性があります。インスタンスとの通信を遮断する可能性があるリソースの変更例を次に示します。

- インスタンスに関連付けられた IAM ユーザーまたはロールが、 OpsWorks スタックの外部で誤って削除されました。これにより、インスタンスにインストールされている OpsWorks エージェントと スタックサービス間の通信が失敗します OpsWorks 。インスタンスの存続中は、インスタンスに関連付けられた ユーザーが必要です。
- インスタンスがオフラインの間にボリュームまたはストレージの設定を編集すると、インスタンスを管理できなくなる場合があります。
- EC2 インスタンスを ELB に手動で追加します。 は、インスタンスがオンライン状態に出入りするたびに、割り当てられた Elastic Load Balancing ロードバランサー OpsWorks を再設定します。 は、既知のインスタンス OpsWorks のみを有効なメンバーと見なします。 の外部 OpsWorksまた

は他のプロセスによって追加されたインスタンスは削除されます。その他のインスタンスはすべて削除されます。

解決策: インスタンスが依存している IAM ユーザーまたはロールを削除しないようにします。可能であれば、依存しているインスタンスが実行中の間のみ、ボリュームまたはストレージの設定を編集します。 OpsWorks を使用して、 OpsWorks インスタンスのロードバランサーまたは EIP メンバーシップを管理します。`--use-instance-profile` ユーザーが誤って削除された場合に登録済みインスタンスの管理に関する問題が発生するのを回避するために、 `register`コマンドに パラメータを追加して、代わりにインスタンスの組み込みインスタンスプロファイルを使用します。

Chef の実行後にインスタンスが起動しない

問題: カスタムクックブックを使用するように設定されている Chef 11.10 以前のスタックで、コミュニティクックボックを使用した Chef の実行後、インスタンスが起動しません。ログメッセージが、レシピがコンパイルに失敗したことを示すか (「Recipe Compile Error」)、依存関係を見つけられないことを理由にロードされない可能性があります。

原因: もっとも可能性の高い原因は、カスタムクックブックまたはコミュニティクックブックが、スタックの使用する Chef バージョンをサポートしていないことです。`apt` や `build-essential` などの一般的なコミュニティクックブックには、Chef 11.10 との互換性に問題があることが知られているものがあります。

解決策: カスタム Chef クックブックの使用設定が有効になっている OpsWorks スタックでは、カスタムクックブックまたはコミュニティクックブックは常にスタックが使用する Chef のバージョンをサポートしている必要があります。コミュニティクックブックを、スタック設定で設定されている Chef のバージョンと互換性があるバージョンにピンしてください (クックブックのバージョンを特定のバージョンに設定します)。サポートされているクックブックバージョンを探すには、コンパイルに失敗したクックブックの変更ログを表示し、スタックでサポートされているクックブックの最新バージョンのみを使用します。クックブックのバージョンをピンするには、カスタムクックブックリポジトリの Berkfile にバージョン番号を正確に指定します。例えば、`cookbook 'build-essential', '= 3.2.0'`。

Elastic Load Balancing ヘルスチェックでレイヤーのインスタンスがすべて失敗する

問題: アプリケーションサーバーレイヤーに Elastic Load Balancing ロードバランサーをアタッチしましたが、すべてのインスタンスがヘルスチェックで失敗します。

原因: Elastic Load Balancing ロードバランサーを作成するときに、インスタンスが正常であるかどうかを判断するためにロードバランサーが呼び出す ping のパスを指定する必要があります。アプリ

ケーションに適切な ping パスを指定してください。デフォルト値は /index.html です。アプリケーションに `index.html` が含まれていない場合、適切なパスを指定する必要があります。指定しない場合、ヘルスチェックは失敗します。たとえば、「Chef 11 Linux スタックの使用開始」で使用されている SimplePHPApp は index.html を使用しません。これらのサーバーに適した ping パスは / です。

解決策: ロードバランサーの ping パスを編集します。詳細については、「Elastic Load Balancing」を参照してください。

Elastic Load Balancing のロードバランサーと通信できない

問題: Elastic Load Balancing ロードバランサーを作成し、アプリケーションサーバーレイヤーにアタッチしても、ロードバランサーの DNS 名または IP アドレスをクリックしてアプリケーションを実行すると、「リモートサーバーが応答していません」というエラーが表示されます。

原因: スタックがデフォルトの VPC で実行されている場合、そのリージョンに Elastic Load Balancing ロードバランサーを作成するときに、セキュリティグループを指定する必要があります。セキュリティグループには、IP アドレスからのインバウンドトラフィックを許可する進入ルールが必要です。デフォルトの VPC セキュリティグループを指定する場合、デフォルトの進入ルールはインバウンドトラフィックを許可しません。

解決策: 適切な IP アドレスからのインバウンドトラフィックを許可するようにセキュリティグループの進入ルールを編集します。

1. Amazon EC2 コンソール ナビゲーションペインの [Security Groups] (セキュリティグループ) をクリックします。
2. ロードバランサーのセキュリティグループを選択します。
3. [Inbound] (インバウンド) タブで [Edit] (編集) をクリックします。
4. [Source] を適切な CIDR に設定して進入ルールを追加します。

   たとえば、[Anywhere] を指定すると、CIDR が 0.0.0.0/0 に設定され、任意の IP アドレスからの着信トラフィックを許可するようにロードバランサーに指示できます。

インポートしたオンプレミスインスタンスで再起動後にボリュームの設定を完了できない

問題: スタックにインポートした EC2 OpsWorks インスタンスを再起動すると、インスタンスのステータスとして OpsWorks スタックコンソールが表示されなくなります。これは、Chef 11 または Chef 12 のインスタンスで発生する場合があります。

原因:OpsWorks スタックでの設定プロセス中に、インスタンスにボリュームをアタッチできなかった可能性があります。1 つの原因として、 OpsWorks コマンドの実行時に、`setup` スタックによってインスタンスのボリューム設定が上書きされていることが考えられます。

解決策: インスタンスの [Details] ページを開き、[Volumes] エリアでボリューム設定を確認します。ボリューム設定を変更できるのは、インスタンスのステータスが [stopped] の場合のみであることに注意してください。すべてのボリュームにマウントポイントと名前が指定されていることを確認します。インスタンスを再起動する前に OpsWorks 、 スタックの設定で正しいマウントポイントが指定されていることを確認します。

再起動後、EBS ボリュームが再アタッチされない

問題: Amazon EC2 コンソールを使用して Amazon EBS ボリュームをインスタンスにアタッチしても、インスタンスを再起動すると、ボリュームはアタッチされません。

原因: OpsWorks スタックは、認識している Amazon EBS ボリュームのみを再アタッチできます。ただし、以下の制限があります。

- OpsWorks スタックによって作成されたボリューム。
- [Resources] ページを使用して、明示的にスタックに登録したアカウントのボリューム。

解決策: スタックコンソール、API、または CLI OpsWorks を使用してのみ Amazon EBS ボリュームを管理します。自分のアカウントの Amazon EBS ボリュームの 1 つをスタックで使用する場合は、スタックの [Resources] (リソースリソース) ページを使用してボリュームを登録し、インスタンスにアタッチします。詳細については、「リソース管理」を参照してください。

OpsWorks スタックセキュリティグループを削除できない

問題: スタックを削除すると、削除できない多くの OpsWorks スタックセキュリティグループが残ります。

原因: セキュリティグループは、特定の順序で削除する必要があります。

解決策: まず、どのインスタンスもセキュリティグループを使用していないことを確認します。その後、以下のセキュリティグループが存在する場合は、次の順序で任意のセキュリティグループを削除します。

1. AWS-OpsWorks-Blank-Server
2. AWS-OpsWorks-Monitoring-Master-Server

3. AWS-OpsWorks-DB-Master-Server
4. AWS-OpsWorks-Memcached-Server
5. AWS-OpsWorks-Custom-Server
6. AWS-OpsWorks-nodejs-App-Server
7. AWS-OpsWorks-PHP-App-Server
8. AWS-OpsWorks-Rails-App-Server
9. AWS-OpsWorks-Web-Server
10. AWS-OpsWorks-Default-Server
11. AWS-OpsWorks-LB-Server

OpsWorks スタックセキュリティグループが誤って削除されました

問題: スタックセキュリティグループの 1 OpsWorks つを削除し、再作成する必要があります。

原因: これらのセキュリティグループは誤って削除されることがよくあります。

解決策: 再作成されたグループは、グループ名の大文字と小文字を含め、元のグループとまったく同じである必要があります。グループを手動で再作成する代わりに、 OpsWorks スタックでこのタスクを実行する方法をお勧めします。同じ AWS リージョンに新しいスタックを作成するだけで、OpsWorks VPC が存在する場合は、削除したセキュリティグループを含むすべての組み込みセキュリティグループが自動的に再作成されます。その後、今後使用しないスタックを削除します。セキュリティグループは残ります。

Chef のログが突然終了する

問題: Chef のログが突然終了します。ログの最後には、正常な実行は示されず、例外やスタックトレースも表示されません。

原因: この動作は、通常、メモリが不十分であることによって発生します。

解決策: より大きいインスタンスを作成し、エージェント CLI の `run_command` コマンドを使用してレシピを再度実行します。詳細については、「レシピの実行」を参照してください。

クックブックが更新されない

問題: クックブックを更新しましたが、スタックのインスタンスはまだ古いレシピを実行しています。

原因: OpsWorks スタックは各インスタンスでクックブックをキャッシュし、リポジトリではなくキャッシュからレシピを実行します。新しいインスタンスを起動すると、 OpsWorks スタックは リポジトリからインスタンスのキャッシュにクックブックをダウンロードします。ただし、その後でカスタムクックブックを変更した場合、 OpsWorks スタックはオンラインインスタンスのキャッシュを自動的には更新しません。

解決策: クックブックの更新スタックコマンドを実行して、オンラインインスタンスのクックブックキャッシュを更新するように OpsWorks スタックに明示的に指示します。

インスタンスが起動中のステータスでスタックする

問題: インスタンスを再起動したとき、または自動ヒーリングが自動的にインスタンスを再起動したときに、起動オペレーションが `booting` ステータスで停止します。

原因: この問題の 1 つの原因として考えられるのは、デフォルト VPC を含む VPC 設定です。インスタンスは、 OpsWorks スタックサービス、Amazon S3、パッケージ、クックブック、アプリケーションリポジトリと常に通信できる必要があります。たとえば、デフォルト VPC からデフォルトゲートウェイを削除すると、インスタンスは OpsWorks スタックサービスへの接続を失います。OpsWorks スタックはインスタンスエージェントと通信できなくなるため、インスタンスは失敗として扱われ、自動修復されます。ただし、接続がない場合、 OpsWorks スタックは修復されたインスタンスにインスタンスエージェントをインストールできません。エージェントがない場合、OpsWorks スタックはインスタンスで Setup レシピを実行できないため、スタートアップオペレーションが「ブート中」ステータスを超えることはできません。

解決策: インスタンスが必要な接続を利用できるように、VPC の設定を変更します。

インスタンスが予期せずに再起動する

問題: 停止されたインスタンスが予期せずに再起動します。

原因 1: インスタンスの [auto healing] (オートヒーリング) を有効にしている場合、 OpsWorks スタックは関連付けられた Amazon EC2 インスタンスで定期的にヘルスチェックを実行し、異常なインスタンスを再起動します。Amazon EC2 コンソール、 OpsWorks API、または CLI を使用して スタックマネージドインスタンスを停止または終了した場合、 OpsWorks スタックには通知されません。代わりに、停止されたインスタンスを異常と見なし、自動的に再起動します。

解決策: OpsWorks スタックコンソール、API、または CLI を使用することによってのみインスタンスを管理します。 OpsWorks スタックを使用してインスタンスを停止または削除する場合、インスタンスは再起動されません。詳細については、「24/7 インスタンスの手動による起動、停止、再起動」および「OpsWorks スタックインスタンスの削除」を参照してください。

原因 2: インスタンスは、さまざまな理由で失敗する可能性があります。自動ヒーリングが有効になっている場合、 OpsWorks スタックは自動的に失敗したインスタンスを再起動します。

解決策: これは通常のオペレーションです。失敗したインスタンスを OpsWorks スタックで再起動したくない場合を除き、何もする必要はありません。自動的に再起動しない場合は、自動ヒーリングを無効にする必要があります。

opsworks-agent プロセスがインスタンスで実行されている

問題: インスタンスで複数の opsworks-agent プロセスが実行されています。例えば:

```
aws 24543 0.0 1.3 172360 53332 ? S Feb24 0:29 opsworks-agent: master 24543
aws 24545 0.1 2.0 208932 79224 ? S Feb24 22:02 opsworks-agent: keep_alive of master
 24543
aws 24557 0.0 2.0 209012 79412 ? S Feb24 8:04 opsworks-agent: statistics of master
 24543
aws 24559 0.0 2.2 216604 86992 ? S Feb24 4:14 opsworks-agent: process_command of master
 24
```

原因: これらは、エージェントの通常のオペレーションに必要とされる正当なプロセスです。これらは、デプロイの処理や、サービスへのキープアライブメッセージの送信などのタスクを実行します。

解決策: これは正常な動作です。これらのプロセスを停止しないでください。停止すると、エージェントのオペレーションに支障が生じます。

予期しない execute_recipes コマンド

問題: インスタンスの詳細ページの [Logs] (ログ) セクションに、予期しない execute_recipes コマンドが表示されます。予期しない execute_recipes コマンドは、[Stack] (スタック) ページや [Deployments] (デプロイ) ページにも表示される場合があります。

原因: この問題は通常、アクセス許可の変更によって発生します。ユーザーまたはグループの SSH または sudo アクセス許可を変更すると、 OpsWorks スタックは execute_recipesを実行してスタックのインスタンスを更新し、Configure イベントもトリガーします。execute_recipes コマンドのもう 1 つのソースは、インスタンスエージェントを更新している OpsWorks スタックです。

解決策: これは通常のオペレーションです。何もする必要はありません。

execute_recipes コマンドが実行したアクションを確認するには、[Deployments] (デプロイ) ページに移動し、コマンドのタイムスタンプをクリックします。これによりコマンドの詳細ページが開

き、実行されたキーレシピがリスト表示されます。例えば、次の詳細ページは、execute_recipes を実行して SSH アクセス許可を更新する ssh_users コマンドのためのページです。

すべての詳細を表示するには、コマンドの [Log] (ログ) 列で [show] (表示) をクリックすると、関連付けられた Chef ログが表示されます。のログを検索します**Run List**。 OpsWorks スタックメンテナンスレシピは の下にありますOpsWorks Custom Run List。たとえば、次は、前のスクリーンショットに示した execute_recipes コマンドの実行リストで、コマンドに関連付けられたすべてのレシピが表示されます。

```
[2014-02-21T17:16:30+00:00] INFO: OpsWorks Custom Run List:
 ["opsworks_stack_state_sync",
  "ssh_users", "test_suite", "opsworks_cleanup"]
```

インスタンス登録の問題のトラブルシューティング

このセクションでは、インスタンスの登録の一般的な問題とその解決方法を示します。

> **Note**
>
> 登録の問題が発生した場合、register 引数を使用して --debug を実行します。これにより、デバッグの詳細情報を取得できます。

トピック

- EC2User Is Not Authorized to Perform: ... (EC2User に以下を実行する権限がありません: ...)
- Credential Should Be Scoped to a Valid Region (認証情報の範囲を有効なリージョンに限定する必要があります)

EC2User Is Not Authorized to Perform: ... (EC2User に以下を実行する権限がありません: ...)

問題: `register` コマンドで、次のような結果が返されます。

```
A client error (AccessDenied) occurred when calling the CreateGroup operation:
User: arn:aws:iam::123456789012:user/ImportEC2User is not authorized to
perform: iam:CreateGroup on resource:
arn:aws:iam::123456789012:group/AWS/OpsWorks/OpsWorks-b583ce55-1d01-4695-b3e5-
ee19257d1911
```

原因: `register` コマンドは、必要なアクセス権限を付与しないユーザーの認証情報で実行されています。ユーザーのポリシーでは、数あるアクションの中で `iam:CreateGroup` アクションが許可されている必要があります。

ソリューション: `register` を必要なアクセス権限が付与された IAM ユーザー認証情報で指定します。詳細については、「AWS CLIのインストールおよび設定」を参照してください。

Credential Should Be Scoped to a Valid Region (認証情報の範囲を有効なリージョンに限定する必要があります)

問題: `register` コマンドにより、以下のような出力が返されます。

```
A client error (InvalidSignatureException) occurred when calling the
DescribeStacks operation: Credential should be scoped to a valid region, not 'cn-
north-1'.
```

原因: コマンドのリージョンは、有効な OpsWorks スタックリージョンである必要があります。サポートされているリージョンのリストについては、「リージョンのサポート」を参照してください。通常、このエラーは、次のいずれかの原因により発生します。

- スタックが別のリージョンにあり、スタックのリージョンをコマンドの `--region` 引数に割り当てた場合。

  スタックリージョンを指定する必要はありません。 OpsWorks スタックはスタック ID から自動的に決定します。
- `--region` 引数を省略したことにより、暗黙的にデフォルトのリージョンが指定されたものの、デフォルトのリージョンが OpsWorks スタックでサポートされていません。

解決策: サポートされている OpsWorks スタックリージョン`--region`に明示的に設定するか、`config` ファイルを編集してデフォルトのリージョンをサポートされている OpsWorks スタック

リージョンに変更します AWS CLI 。詳細については、「AWS コマンドラインインターフェイスの設定」を参照してください。

OpsWorks スタックエージェント CLI

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

> **Note**
>
> この機能は、Linux インスタンスでのみご利用いただけます。

OpsWorks スタックがすべてのインスタンスにインストールするエージェントは、コマンドラインインターフェイス (CLI) を公開します。SSH を使用してインスタンスにログインすると、CLI を使用して次の操作を実行できます。

- Chef 実行のログファイルにアクセスする。
- OpsWorks スタックコマンドにアクセスします。
- Chef レシピを手動で実行する。
- インスタンスレポートを表示する。
- エージェントレポートを表示する。
- スタック設定およびデプロイ属性の制限されたセットを表示する。

> **Important**
>
> エージェント CLI コマンドは、root として実行するか、sudo を使用して実行します。

基本的なコマンド構文は次のとおりです。

```
sudo opsworks-agent-cli [--help] [command [activity] [date]]
```

4 つの引数は次のとおりです。

help

(オプション) 単独で使用した場合は、使用可能なコマンドの簡単な概要が表示されます。コマンドと共に `help` を使用した場合は、そのコマンドの説明が表示されます。

コマンド

(オプション) エージェント CLI コマンド。次のいずれかに設定する必要があります。

- agent_report
- get_json
- instance_report
- list_commands
- run_command
- show_log
- stack_state

activity

(オプション) 一部のコマンドで引数として使用して、 OpsWorks スタックの特定のアクティビティ (`setup`、`configure`、`deploy`、`undeploy`、`start`、`stop`、`restart` のいずれか) を指定します。

date

(オプション) 一部のコマンドで引数として使用して、特定の OpsWorks スタックコマンドの実行を指定します。コマンドの実行を指定するには、date をコマンドが実行されたタイムスタンプに設定します。時刻には、*`yyyy-mm-ddThh:mm:ss`* の形式 (一重引用符を含む) を使用します。たとえば、2013 年 2 月 5 日火曜日 10 時 31 分 55 秒の場合、`'2013-02-05T10:31:55'` を使用します。特定の OpsWorks Stacks コマンドがいつ実行されたかを確認するには、 を実行しますlist_commands。

> **Note**
>
> エージェントが同じ OpsWorks スタックアクティビティを複数回実行した場合は、アクティビティと実行時刻の両方を指定して、特定の実行を選択できます。アクティビティを指定

し、時刻を省略すると、エージェント CLI コマンドはそのアクティビティの最新の実行に適用されます。両方の引数を省略すると、エージェント CLI コマンドは最新のアクティビティに適用されます。

以下のセクションでは、各コマンドと関連する引数について説明します。簡潔に示すために、構文セクションでは、どのコマンドでも使用できる省略可能な `--help` オプションを省略しています。

トピック

- agent_report
- get_json
- instance_report
- list_commands
- run_command
- show_log
- stack_state

agent_report

Important

この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

エージェントレポートを返します。

```
sudo opsworks-agent-cli agent_report
```

configure アクティビティを直近に実行したインスタンスの出力例を次に示します。

```
$ sudo opsworks-agent-cli agent_report
```

```
AWS OpsWorks Instance Agent State Report:

  Last activity was a "configure" on 2015-12-01 18:19:23 UTC
  Agent Status: The AWS OpsWorks agent is running as PID 30998
  Agent Version: 4004-20151201152533, up to date
```

get_json

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Chef の実行に関する情報を JSON オブジェクトとして返します。

```
sudo opsworks-agent-cli get_json [activity] [date] [-i | --internal | --no-i | --no-internal]
```

デフォルトでは、get_json は最後に実行された Chef の実行について、ユーザーが提供した情報を表示します。特定の情報セットを指定するには、次のオプションを使用します。

activity

最後に指定されたアクティビティに関連付けられた Chef の実行に関する情報を表示します。有効なアクティビティのリストを取得するには、list_commands を実行します。

date

指定されたタイムスタンプに対して実行されたアクティビティに関連付けられている Chef の実行についての情報を表示します。有効なタイムスタンプのリストを取得するには、list_commands を実行します。

-i, --internal

Chef の実行に OpsWorks スタックが内部的に使用する情報を表示します。

--no-i, --no-internal

Chef を実行するためにユーザーが提供した情報を明示的に表示します。これは、それ以外の方法で指定されない場合のデフォルトです。

> **Note**
>
> Chef 12 Linux インスタンスの場合、このコマンドを実行すると、インスタンスのスタック設定やデプロイ属性など、有効な情報が返されます。ただし、詳細な情報を取得するには、OpsWorks スタックがインスタンスで作成する Chef データバッグを参照してください。詳細については、「OpsWorks スタックデータバッグリファレンス」を参照してください。

次の出力例は、最新の configure アクティビティに対して最後に実行された Chef の実行についてユーザーが提供した情報を示しています。

```
$ sudo opsworks-agent-cli get_json configure

{
  "run_list": [
    "recipe[opsworks_cookbook_demo::configure]"
  ]
}
```

次の出力例は、指定されたタイムスタンプに対して実行される Chef 実行に OpsWorks スタックが内部的に使用する情報を示しています。

```
$ sudo opsworks-agent-cli get_json 2015-12-01T18:20:24 -i

{
  "aws_opsworks_agent": {
    "version": "4004-20151201152533",
    "valid_client_activities": [
      "reboot",
      "stop",
      "deploy",
      "grant_remote_access",
      "revoke_remote_access",
      "update_agent",
      "setup",
```

```
      "configure",
      "update_dependencies",
      "install_dependencies",
      "update_custom_cookbooks",
      "execute_recipes",
      "sync_remote_users"
    ],
    "command": {
      "type": "configure",
      "args": {
        "app_ids": [

        ]
      },
      "sent_at": "2015-12-01T18:19:23+00:00",
      "command_id": "5c2113f3-c6d5-40eb-bcfa-77da2885eeEX",
      "iam_user_arn": null,
      "instance_id": "cfdaa716-42fe-4e3b-9762-fef184ddd8EX"
    },
    "resources": {
      "apps": [

      ],
      "layers": [
        {
          "layer_id": "93f50d83-1e73-45c4-840a-0d4f07cda1EX",
          "name": "MyCookbooksDemoLayer",
          "packages": [

          ],
          "shortname": "cookbooks-demo",
          "type": "custom",
          "volume_configurations": [

          ]
        }
      ],
      "instances": [
        {
          "ami_id": "ami-d93622EX",
          "architecture": "x86_64",
          "auto_scaling_type": null,
          "availability_zone": "us-west-2a",
          "created_at": "2015-11-18T00:21:05+00:00",
```

```
          "ebs_optimized": false,
          "ec2_instance_id": "i-a480e960",
          "elastic_ip": null,
          "hostname": "cookbooks-demo1",
          "instance_id": "cfdaa716-42fe-4e3b-9762-fef184ddd8EX",
          "instance_type": "c3.large",
          "layer_ids": [
            "93f50d83-1e73-45c4-840a-0d4f07cda1EX"
          ],
          "os": "Amazon Linux 2015.09",
          "private_dns": "ip-192-0-2-0.us-west-2.compute.internal",
          "private_ip": "10.122.69.33",
          "public_dns": "ec2-203-0-113-0.us-west-2.compute.amazonaws.com",
          "public_ip": "192.0.2.0",
          "root_device_type": "ebs",
          "root_device_volume_id": "vol-f6f7e8EX",
          "ssh_host_dsa_key_fingerprint": "f2:...:15",
          "ssh_host_dsa_key_public": "ssh-dss AAAAB3Nz...a8vMbqA=",
          "ssh_host_rsa_key_fingerprint": "0a:...:96",
          "ssh_host_rsa_key_public": "ssh-rsa AAAAB3Nz...yhPanvo7",
          "status": "online",
          "subnet_id": null,
          "virtualization_type": "paravirtual",
          "infrastructure_class": "ec2",
          "ssh_host_dsa_key_private": "-----BEGIN DSA PRIVATE KEY-----
\nMIIDVwIB...g5OtgQ==\n-----END DSA PRIVATE KEY-----\n",
          "ssh_host_rsa_key_private": "-----BEGIN RSA PRIVATE KEY-----
\nMIIEowIB...78kprtIw\n-----END RSA PRIVATE KEY-----\n"
        }
      ],
      "users": [

      ],
      "elastic_load_balancers": [

      ],
      "rds_db_instances": [

      ],
      "stack": {
        "arn": "arn:aws:opsworks:us-west-2:80398EXAMPLE:stack/040c3def-b2b4-4489-bb1b-
e08425886fEX/",
        "custom_cookbooks_source": {
          "type": "s3",
```

```
          "url": "https://s3.amazonaws.com/amzn-s3-demo-bucket/opsworks-cookbook-
demo.tar.gz",
          "username": "AKIAJUQN...WG644EXA",
          "password": "O5v+4Zz+...rcKbFTJu",
          "ssh_key": null,
          "revision": null
        },
        "name": "MyCookbooksDemoStack",
        "region": "us-west-2",
        "stack_id": "040c3def-b2b4-4489-bb1b-e08425886fEX",
        "use_custom_cookbooks": true,
        "vpc_id": null
      },
      "ecs_clusters": [

      ],
      "volumes": [

      ]
    },
    "chef": {
      "customer_recipes": [
        "opsworks_cookbook_demo::configure"
      ],
      "customer_json": "e30=\n",
      "customer_data_bags": "e30=\n"
    }
  }
}
```

instance_report

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

拡張インスタンスレポートを返します。

```
sudo opsworks-agent-cli instance_report
```

インスタンスの出力例を次に示します。

```
$ sudo opsworks-agent-cli instance_report

AWS OpsWorks Instance Agent State Report:

  Last activity was a "configure" on 2015-12-01 18:19:23 UTC
  Agent Status: The AWS OpsWorks agent is running as PID 30998
  Agent Version: 4004-20151201152533, up to date
  OpsWorks Stack: MyCookbooksDemoStack
  OpsWorks Layers: MyCookbooksDemoLayer
  OpsWorks Instance: cookbooks-demo1
  EC2 Instance ID: i-a480e9EX
  EC2 Instance Type: c3.large
  Architecture: x86_64
  Total Memory: 3.84 Gb
  CPU: 2x  Intel(R) Xeon(R) CPU E5-2680 v2 @ 2.80GHz

Location:

  EC2 Region: us-west-2
  EC2 Availability Zone: us-west-2a

Networking:

  Public IP: 192.0.2.0
  Private IP: 198.51.100.0
```

list_commands

Important

この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このインスタンスで実行された各アクティビティの時刻を表示します。これらの時刻を使用して、他のエージェント CLI コマンドで特定の実行を指定できます。

```
sudo opsworks-agent-cli list_commands  [activity] [date]
```

設定、セットアップ、およびカスタムクックブックの更新の各アクティビティを実行したインスタンスの出力例を次に示します。

```
$ sudo opsworks-agent-cli list_commands

2015-11-24T21:00:28        update_custom_cookbooks
2015-12-01T18:19:09        setup
2015-12-01T18:20:24        configure
```

run_command

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks Stacks コマンドを実行します。これは、Stacks アクティビティ (セットアップ、設定、デプロイなど) の実行に必要な情報を含む Chef OpsWorks 実行リストを含む JSON ファイルです。run_command コマンドにより、ログエントリが生成されます。ログエントリを表示するには、show_log を実行します。このオプションは開発のみを目的としているため、 OpsWorks スタックは変更を追跡しません。

```
sudo opsworks-agent-cli run_command [activity] [date] [/path/to/valid/json.file]
```

デフォルトでは、 は最新の OpsWorks スタックコマンドrun_commandを実行します。特定のコマンドを指定するには、次のオプションを使用します。

activity

指定された OpsWorks Stacks コマンドを実行します:
`setup`、`configure`、`deploy`、`undeploy`、`start`、`stop`、または `restart`。

date

指定されたタイムスタンプに実行された AWS OpsWorks コマンドを実行します。有効なタイムスタンプのリストを取得するには、list_commands を実行します。

file

指定されたコマンド JSON ファイルを実行します。コマンドのファイルパスを取得するには、get_json を実行します。

次のインスタンスの出力例では configure コマンドを実行しています。

```
$ sudo opsworks-agent-cli run_command configure

[2015-12-02 16:52:53]  INFO [opsworks-agent(21970)]: About to re-run 'configure' from
 2015-12-01T18:20:24
...
[2015-12-02 16:53:02]  INFO [opsworks-agent(21970)]: Finished Chef run with exitcode 0
```

show_log

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

コマンドのログファイルを返します。

```
sudo opsworks-agent-cli show_log [activity] [date]
```

デフォルトでは、`show_log` は最新のログファイルの末尾を表示します。特定のコマンドを指定するには、次のオプションを使用します。

activity

指定されたアクティビティのログファイルを表示します。

date

指定されたタイムスタンプに実行されたアクティビティのログファイルを表示します。有効なタイムスタンプのリストを取得するには、list_commands を実行します。

次の出力例は、最新のログを示しています。

```
$ sudo opsworks-agent-cli show_log

[2015-12-02T16:52:59+00:00] INFO: Storing updated cookbooks/opsworks_cookbook_demo/
opsworks-cookbook-demo.tar.gz in the cache.
...
[2015-12-02T16:52:59+00:00] INFO: Report handlers complete
```

stack_state

Important

この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

スタックが最新の Chef OpsWorks 実行のために内部的に使用する情報を表示します。

```
opsworks-agent-cli stack_state
```

Note

Chef 12 Linux インスタンスの場合、このコマンドを実行すると、インスタンスのスタック設定やデプロイ属性など、有効な情報が返されます。ただし、詳細な情報を取得するには、OpsWorks スタックがインスタンスで作成する Chef データバッグを参照してください。詳細については、「OpsWorks スタックデータバッグリファレンス」を参照してください。

インスタンスの出力例を次に示します。

```
$ sudo opsworks-agent-cli stack_state

{
  "last_command": {
    "sent_at": "2015-12-01T18:19:23+00:00",
    "activity": "configure"
  },
  "instance": {
    "ami_id": "ami-d93622EX",
    "architecture": "x86_64",
    "auto_scaling_type": null,
    "availability_zone": "us-west-2a",
    "created_at": "2015-11-18T00:21:05+00:00",
    "ebs_optimized": false,
    "ec2_instance_id": "i-a480e9EX",
    "elastic_ip": null,
    "hostname": "cookbooks-demo1",
    "instance_id": "cfdaa716-42fe-4e3b-9762-fef184ddd8EX",
    "instance_type": "c3.large",
    "layer_ids": [
      "93f50d83-1e73-45c4-840a-0d4f07cda1EX"
    ],
    "os": "Amazon Linux 2015.09",
    "private_dns": "ip-192-0-2-0.us-west-2.compute.internal",
    "private_ip": "10.122.69.33",
    "public_dns": "ec2-203-0-113-0.us-west-2.compute.amazonaws.com",
    "public_ip": "192.0.2.0",
    "root_device_type": "ebs",
    "root_device_volume_id": "vol-f6f7e8EX",
    "ssh_host_dsa_key_fingerprint": "f2:...:15",
    "ssh_host_dsa_key_public": "ssh-dss AAAAB3Nz...a8vMbqA=",
    "ssh_host_rsa_key_fingerprint": "0a:...:96",
    "ssh_host_rsa_key_public": "ssh-rsa AAAAB3Nz...yhPanvo7",
    "status": "online",
    "subnet_id": null,
    "virtualization_type": "paravirtual",
    "infrastructure_class": "ec2",
    "ssh_host_dsa_key_private": "-----BEGIN DSA PRIVATE KEY-----\nMIIDVwIB...g5OtgQ==
\n-----END DSA PRIVATE KEY-----\n",
    "ssh_host_rsa_key_private": "-----BEGIN RSA PRIVATE KEY-----\nMIIEowIB...78kprtIw
\n-----END RSA PRIVATE KEY-----\n"
  },
```

```
  "layers": [
    {
      "layer_id": "93f50d83-1e73-45c4-840a-0d4f07cda1EX",
      "name": "MyCookbooksDemoLayer",
      "packages": [

      ],
      "shortname": "cookbooks-demo",
      "type": "custom",
      "volume_configurations": [

      ]
    }
  ],
  "applications": null,
  "stack": {
    "arn": "arn:aws:opsworks:us-west-2:80398EXAMPLE:stack/040c3def-b2b4-4489-bb1b-
e08425886fEX/",
    "custom_cookbooks_source": {
      "type": "s3",
      "url": "https://s3.amazonaws.com/amzn-s3-demo-bucket/opsworks-cookbook-
demo.tar.gz",
      "username": "AKIAJUQN...WG644EXA",
      "password": "O5v+4Zz+...rcKbFTJu",
      "ssh_key": null,
      "revision": null
    },
    "name": "MyCookbooksDemoStack",
    "region": "us-west-2",
    "stack_id": "040c3def-b2b4-4489-bb1b-e08425886fEX",
    "use_custom_cookbooks": true,
    "vpc_id": null
  },
  "agent": {
    "valid_activities": [
      "reboot",
      "stop",
      "deploy",
      "grant_remote_access",
      "revoke_remote_access",
      "update_agent",
      "setup",
      "configure",
      "update_dependencies",
```

```
      "install_dependencies",
      "update_custom_cookbooks",
      "execute_recipes",
      "sync_remote_users"
    ]
  }
}
```

OpsWorks スタックデータバッグリファレンス

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

OpsWorks スタックは、Chef データバッグコンテンツとしてレシピにさまざまな設定を公開します。このリファレンスでは、このデータバッグコンテンツを一覧で示します。

データバッグは Chef の概念です。データバッグはインスタンスで JSON データとして保存されるグローバル変数です。JSON データは Chef からアクセス可能です。たとえば、データバッグは、アプリケーションのソース URL、インスタンスのホスト名、関連するスタックの VPC 識別子などのグローバル変数を保存できます。 OpsWorks スタックは、各スタックのインスタンスにデータバッグを保存します。Linux インスタンスでは、 OpsWorks スタックはデータバッグを `/var/chef/runs/`*`run-ID`*`/data_bags` ディレクトリに保存します。Windows インスタンスでは、&OPS; スタックはデータバッグを *`drive`*`:\chef\runs\`*`run-id`*`\data_bags` ディレクトリに保存します。どちらの場合も、*`run-ID`* は スタックがインスタンスで実行される各 Chef OpsWorks に割り当てる一意の ID です。これらのディレクトリにはデータバッグ (サブディレクトリ) のセットが含まれています。各データバッグには、ゼロ個以上のデータバッグアイテムが含まれ、これらはデータバッグコンテンツのセットを含む JSON 形式のファイルです。

> **Note**
>
> OpsWorks スタックは、暗号化されたデータバッグをサポートしていません。パスワードや証明書などの機密データを暗号化された形式で保存するには、プライベート S3 バケットに

保存することをお勧めします。これで、Amazon SDK for Ruby を使用するカスタムレシピを作成できます。例については、 SDK for Ruby を使用するを参照してください。

データバッグのコンテンツには、次のいずれかを含めることができます。

- 標準の Ruby 構文に従う String コンテンツ。一重引用符または二重引用符を使用できますが、一部の特殊文字を含む文字列は二重引用符が必要です。詳細については、Ruby のドキュメントのサイトを参照してください。
- [Boolean] (ブール値) コンテンツのどちらか `true` または `false` (引用符なし)。
- [Number] (数値) などの整数または10進数のいずれかコンテンツ、`4` または `2.5` (引用符なし)。
- [List] (リスト) コンテンツは、角カッコ (引用符なし)で囲まれたカンマ区切り値の形式をとります。`[ '80', '443' ]`
- `"my-app": {"elastic_ip": null,...}`などの追加のデータバッグコンテンツを含む [JSON objects] (JSON オブジェクト)。

Chef レシピは、Chef 検索を通じて、または直接データバッグ、データバッグ項目、およびデータバッグコンテンツにアクセスできます。以下では、両方のアクセス方法を使用する方法を説明します (ただし、Chef 検索をお勧めします)。

Chef 検索からデータバッグにアクセスするには、検索方法を使用して目的の検索インデックスを指定します。 OpsWorks スタックには、次の検索インデックスが用意されています。

- スタック用のデプロイ済みアプリケーションのセットを表す aws_opsworks_app。
- スタックで実行されたコマンドのセットを表す aws_opsworks_command。
- スタック用のクラスターインスタンスのセットを表す [aws_opsworks_ecs_cluster] Amazon Elastic Container Service (Amazon ECS)。
- スタック用の一連の Elastic Load Balancing ロードバランサーを表す [aws_opsworks_elastic_load_balancer]。
- スタック用のインスタンスのセットを表す aws_opsworks_instance。
- スタック用のレイヤーのセットを表す aws_opsworks_layer。
- スタック用の Amazon Relational Database Service (Amazon RDS) インスタンスのセットを表す [aws_opsworks_rds_db_instance]。
- スタックを表す aws_opsworks_stack。

- スタック用のユーザーのセットを表す aws_opsworks_user。

検索インデックス名がわかれば、その検索インデックスのデータバッグのコンテンツにアクセスできます。例えば、次のレシピコードは aws_opsworks_app 検索インデックスを使用して、aws_opsworks_app データバッグ (aws_opsworks_appディレクトリ) の最初のデータバッグ項目 (最初の JSON ファイル) のコンテンツを取得します。次に、コードは 2 つのメッセージを Chef ログに書き込みます。1 つはアプリケーションの短縮名のデータバッグコンテンツ (JSON ファイルの文字列) で、もう 1 つはアプリケーションのソース URL データバッグコンテンツ (JSON ファイルの別の文字列) です。

```
app = search("aws_opsworks_app").first
Chef::Log.info("********** The app's short name is '#{app['shortname']}' **********")
Chef::Log.info("********** The app's URL is '#{app['app_source']['url']}' **********")
```

ここで、['shortname'] と ['app_source']['url'] は、対応する JSON ファイルの次のデータバッグコンテンツを指定します。

```
{
  ...
  "shortname": "mylinuxdemoapp",
  ...
  "app_source": {
    ...
    "url": "https://s3.amazonaws.com/opsworks-demo-assets/opsworks-linux-demo-
nodejs.tar.gz",
  },
  ...
}
```

検索できるデータバッグコンテンツのリストについては、このセクションのリファレンストピックを参照してください。

また、データバッグのデータバッグ項目のセットを反復的に処理することもできます。たとえば、次のレシピコードは前の例と似ています。複数のデータバッグ項目があると、データバッグの各データバッグ項目を反復処理します。

```
search("aws_opsworks_app").each do |app|
  Chef::Log.info("********** The app's short name is '#{app['shortname']}' **********")
  Chef::Log.info("********** The app's URL is '#{app['app_source']['url']}'
 **********")
```

```
end
```

特定のデータバッグコンテンツが存在することがわかっている場合は、次の構文で対応するデータバッグ項目を検索できます。

```
search("search_index", "key:value").first
```

例えば、次のレシピコードでは、aws_opsworks_app 検索インデックスを使用して、mylinuxdemoapp のアプリケーションの短縮名を含むデータバッグを検索します。次に、対応するアプリケーションの短縮名とソース URL とともに、データバッグ項目のコンテンツを使用して Chef ログにメッセージを書き込みます。

```
app = search("aws_opsworks_app", "shortname:mylinuxdemoapp").first
Chef::Log.info("********** For the app with the short name '#{app['shortname']}', the
 app's URL is '#{app['app_source']['url']}' **********")
```

aws_opsworks_instance 検索インデックスのみについて、self:true を指定して、レシピを実行中のインスタンスを表すことができます。次のレシピコードは、対応するデータバッグ項目の内容を使用して、対応するインスタンスの スタック生成 ID OpsWorks とオペレーティングシステムを含むメッセージを Chef ログに書き込みます。

```
instance = search("aws_opsworks_instance", "self:true").first
Chef::Log.info("********** For instance '#{instance['instance_id']}', the instance's
 operating system is '#{instance['os']}' **********")
```

Chef 検索を使用してデータバッグ、データバッグ項目、データバッグコンテンツにアクセスする代わりに、それらに直接アクセスできます。そのためには、それぞれ data_bag および data_bag_item メソッドを使用して、データバッグおよびデータバッグ項目にアクセスします。たとえば、次のレシピコードは前の例と同じことを行いますが、単一のデータバッグ項目にアクセスしてから、複数の項目がある場合は複数のデータ項目にアクセスします。

```
# Syntax: data_bag_item("the data bag name", "the file name in the data bag without the
 file extension")
app = data_bag_item("aws_opsworks_app", "mylinuxdemoapp")
Chef::Log.info("********** The app's short name is '#{app['shortname']}' **********")
Chef::Log.info("********** The app's URL is '#{app['app_source']['url']}' **********")

data_bag("aws_opsworks_app").each do |data_bag_item|
  app = data_bag_item("aws_opsworks_app", data_bag_item)
```

```
  Chef::Log.info("********** The app's short name is '#{app['shortname']}' **********")
  Chef::Log.info("********** The app's URL is '#{app['app_source']['url']}'
 **********")
end
```

これらの 2 つの方法のうち、Chef 検索を使用することをお勧めします。このガイドの関連する例では、すべてこの方法を示します。

トピック

- アプリケーションデータバッグ (aws_opsworks_app)
- コマンドデータバッグ (aws_opsworks_command)
- Amazon ECS クラスターデータバッグ (aws_opsworks_ecs_cluster)
- Elastic Load Balancing データバッグ (aws_opsworks_elastic_load_balancer)
- インスタンスデータバッグ (aws_opsworks_instance)
- レイヤーデータバッグ (aws_opsworks_layer)
- Amazon RDS データバッグ (aws_opsworks_rds_db_instance)
- スタックデータバッグ (aws_opsworks_stack)
- ユーザーデータバッグ (aws_opsworks_user)

アプリケーションデータバッグ (aws_opsworks_app)

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Deploy イベントまたは Execute Recipes スタックコマンドでは、アプリケーションの設定を表します。

以下の例は、Chef 検索を使用して単一のデータバッグ項目を通じて検索を実行し、次に複数のデータバッグ項目を使用して、アプリケーションの短縮名とソース URL とともに Chef ログにメッセージを書き込む方法を示しています。

```
app = search("aws_opsworks_app").first
Chef::Log.info("********** The app's short name is '#{app['shortname']}' **********")
Chef::Log.info("********** The app's URL is '#{app['app_source']['url']}' **********")

search("aws_opsworks_app").each do |app|
  Chef::Log.info("********** The app's short name is '#{app['shortname']}' **********")
  Chef::Log.info("********** The app's URL is '#{app['app_source']['url']}'
 **********")
end
```

app_id	app_source	data_sources
デプロイ	属性	domains
enable_ssl	環境	名前
shortname	ssl_configuration	型

app_id

アプリケーション ID (文字列)。アプリケーションを識別する GUID。

app_source

ソースコントロールリポジトリからアプリケーションをデプロイするために OpsWorks スタックが使用する情報を指定するコンテンツのセット。コンテンツはリポジトリのタイプによって異なります。

password

プライベートリポジトリの場合はパスワード、パブリックリポジトリの場合は "null" (文字列)。プライベート S3 バケットでは、このコンテンツはシークレットキーに設定されます。

revision

リポジトリに複数のブランチがある場合、そのコンテンツはアプリケーションのブランチまたはバージョンを指定します"version1" (など) (文字列)。それ以外の場合は、"null" に設定されます。

ssh_key

プライベート Git リポジトリにアクセスする場合はデプロイ SSH キー、パブリックリポジトリの場合は (文字列)。"null"

型

アプリケーションのソースの場所 (文字列)。有効な値を次に示します。

- "archive"
- "git"
- "other"
- "s3"

url

アプリケーションが存在する場所 (文字列)。

ユーザー

プライベートリポジトリの場合はユーザー名、パブリックリポジトリの場合は "null" (文字列)。プライベート S3 バケットでは、このコンテンツはアクセスキーに設定されます。

属性

アプリのディレクトリ構造と内容を説明する一連のコンテンツ。

document_root

ドキュメントツリーのルートディレクトリです。デプロイメントディレクトリに関連するドキュメントルートへのパス (またはアプリケーションのホームページの場所 (home_html など)) を定義します。この属性を指定しない場合、document_root はデフォルトの public になります。document_root の値は、必ず、a-z、A-Z、0-9、_ (アンダースコア) または - (ハイフン) で始まります。

data_sources

アプリケーションのデータベースに接続するために必要な情報。アプリにデータベースレイヤーがアタッチされている場合、 OpsWorks Stacks はこのコンテンツに適切な値を自動的に割り当てます。

data_sources の値は配列で、配列はキーではなく整数の補正値によってアクセスされます。例えば、アプリの最初のデータソースにアクセスするには、app[:data_sources][0][:type] を使用します。

database_name

データベース名 (文字列)。通常はアプリケーションの短縮名です。

型

データベースインスタンスのタイプ。通常は "RdsDbInstance" (文字列) です。

arn

データベースインスタンスの Amazon リソースネーム (ARN) (文字列)。

デプロイ

アプリケーションを展開する必要があるかどうか (ブール)。Deploy ライフサイクルイベントでは、デプロイする必要があるアプリケーションに対して true です。Setup ライフサイクルイベントで、このコンテンツはすべてのアプリケーションに対して true になります。いずれのアプリケーションをインスタンスにデプロイする必要があるかを調べるには、インスタンスが属するレイヤーを確認します。

domains

アプリケーションのドメインのリスト (文字列のリスト)。

enable_ssl

SSL のサポートが有効かどうか (ブール)。

環境

アプリケーションに対して定義されたユーザー指定の環境変数の集合。アプリケーション環境変数の定義方法の詳細については、「アプリケーションの追加」を参照してください。各コンテンツ名が環境変数名に設定され、対応する値が変数の値に設定されます。

名前

表示の目的で使用されるアプリケーションの名前 (文字列)。

shortname

アプリケーションの短縮名。名前 (文字列) から OpsWorks スタックによって生成されます。内部的に、およびレシピでは短縮名が使用されます。短縮名は、アプリファイルのインストール先ディレクトリ名として使用されます。

ssl_configuration

証明書

SSL サポートを有効にした場合はアプリケーションの SSL 証明書、それ以外の場合は "null" (文字列)。

chain

SSL が有効である場合は、中間認証局キーまたはクライアント認証を指定するためのコンテンツ (文字列)。

private_key

SSL サポートを有効にした場合はアプリケーションの SSL プライベートキー、それ以外の場合は "null" (文字列)。

型

Chef 12 Linux と Chef 12.2 Windows スタックでは常に "other" に設定されるアプリケーションのタイプ (文字列)。

コマンドデータバッグ (aws_opsworks_command)

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

スタックが 1 OpsWorks つ以上のインスタンスで実行するコマンドの設定を表します。

以下の例は、Chef 検索を使用して単一のデータバッグ項目を通じて検索を実行し、次に複数のデータバッグ項目を使用して、コマンドのタイプと送信されるタイミングとともに Chef ログにメッセージを書き込む方法を示しています。

```
command = search("aws_opsworks_command").first
Chef::Log.info("********** The command's type is '#{command['type']}' **********")
Chef::Log.info("********** The command was sent at '#{command['sent_at']}' **********")

search("aws_opsworks_command").each do |command|
  Chef::Log.info("********** The command's type is '#{command['type']}' **********")
  Chef::Log.info("********** The command was sent at '#{command['sent_at']}'
 **********")
```

```
end
```

args	command_id	iam_user_arn
instance_id	sent_at	型

args

コマンドの引数 (文字列)。

command_id

OpsWorks スタックによって割り当てられたコマンドのランダムな一意の識別子 (文字列) 。

iam_user_arn

コマンドがユーザーによって作成された場合、コマンドを作成したユーザーの Amazon リソース名 (ARN) (文字列)。

instance_id

コマンドが実行されたインスタンスの識別子 (文字列)。

sent_at

OpsWorks スタックがコマンドを実行したときのタイムスタンプ (文字列) 。

型

コマンドのタイプ (文字列)。有効な値を次に示します。

- `"configure"`
- `"deploy"`
- `"deregister"`
- `"execute_recipes"`
- `"grant_remote_access"`
- `"install_dependencies"`
- `"restart"`
- `"revoke_remote_access"`
- `"rollback"`

- "setup"
- "shutdown"
- "start"
- "stop"
- "sync_remote_users"
- "undeploy"
- "update_agent"
- "update_custom_cookbooks"
- "update_dependencies"

Amazon ECS クラスターデータバッグ (aws_opsworks_ecs_cluster)

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Amazon ECS クラスターの設定を示します。

以下の例は、Chef 検索を使用して単一のデータバッグ項目を通じて検索してから、複数のデータバッグ項目を検索して、Amazon ECS クラスターの名前と Amazon リソースネーム (ARN) とともにメッセージを Chef ログに書き込む方法を示しています。

```
ecs_cluster = search("aws_opsworks_ecs_cluster").first
Chef::Log.info("********** The ECS cluster's name is
 '#{ecs_cluster['ecs_cluster_name']}' **********")
Chef::Log.info("********** The ECS cluster's ARN is '#{ecs_cluster['ecs_cluster_arn']}'
 **********")

search("aws_opsworks_ecs_cluster").each do |ecs_cluster|
  Chef::Log.info("********** The ECS cluster's name is
 '#{ecs_cluster['ecs_cluster_name']}' **********")
```

```
  Chef::Log.info("********** The ECS cluster's ARN is
 '#{ecs_cluster['ecs_cluster_arn']}' **********")
end
```

ecs_cluster_arn	ecs_cluster_name

ecs_cluster_arn

クラスターの Amazon リソースネーム (ARN) (文字列)。

ecs_cluster_name

クラスターの名前 (文字列)。

Elastic Load Balancing データバッグ (aws_opsworks_elastic_load_balancer)

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Elastic Load Balancing ロードバランサーの設定を示します。

以下の例は、Chef 検索を使用して単一のデータバッグ項目を通じて検索してから、複数のデータバッグ項目を検索して、 Elastic Load Balancing のロードバランサーの名前と DNS 名とともにメッセージを Chef ログに書き込む方法を示しています。

```
elastic_load_balancer = search("aws_opsworks_elastic_load_balancer").first
Chef::Log.info("********** The ELB's name is
 '#{elastic_load_balancer['elastic_load_balancer_name']}' **********")
Chef::Log.info("********** The ELB's DNS name is '#{elastic_load_balancer['dns_name']}'
 **********")
```

```
search("aws_opsworks_elastic_load_balancer").each do |elastic_load_balancer|
  Chef::Log.info("********** The ELB's name is
 '#{elastic_load_balancer['elastic_load_balancer_name']}' **********")
  Chef::Log.info("********** The ELB's DNS name is
 '#{elastic_load_balancer['dns_name']}' **********")
end
```

elastic_load_balancer_name	dns_name	layer_id

elastic_load_balancer_name

ロードバランサーの名前 (文字列)。

dns_name

ロードバランサーの DNS 名 (文字列)。

layer_id

ロードバランサーが割り当てられているレイヤーの OpsWorks スタック ID (文字列) 。

インスタンスデータバッグ (aws_opsworks_instance)

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

インスタンスの設定を表します。

以下の例は、Chef 検索を使用して単一のデータバッグ項目を通じて検索を実行し、次に複数のデータバッグ項目を使用して、インスタンスのホスト名と ID とともに Chef ログにメッセージを書き込む方法を示しています。

```
instance = search("aws_opsworks_instance").first
```

```
Chef::Log.info("********** The instance's hostname is '#{instance['hostname']}'
 **********")
Chef::Log.info("********** The instance's ID is '#{instance['instance_id']}'
 **********")

search("aws_opsworks_instance").each do |instance|
  Chef::Log.info("********** The instance's hostname is '#{instance['hostname']}'
 **********")
  Chef::Log.info("********** The instance's ID is '#{instance['instance_id']}'
 **********")
end
```

以下の例は、Chef 検索を使用して複数のデータバッグ項目を検索し、指定された Amazon EC2 インスタンス ID を含むデータバッグ項目を見つけるためのさまざまな方法を示しています。次に、データバッグ項目のコンテンツを使用して、対応するインスタンスのパブリック IP アドレスとともに Chef ログにメッセージを書き込みます。

```
instance = search("aws_opsworks_instance", "ec2_instance_id:i-12345678").first
Chef::Log.info("********** For instance '#{instance['ec2_instance_id']}', the
 instance's public IP address is '#{instance['public_ip']}' **********")

search("aws_opsworks_instance").each do |instance|
  if instance['ec2_instance_id'] == 'i-12345678'
    Chef::Log.info("********** For instance '#{instance['ec2_instance_id']}', the
 instance's public IP address is '#{instance['public_ip']}' **********")
  end
end
```

次の例では、Chef 検索で `self:true` を使用して、レシピを実行しているインスタンスに関連する情報を含むデータバッグ項目を検索する方法を示しています。この例では、データバッグ項目の内容を使用して、対応するインスタンスの OpsWorks スタック生成 ID とインスタンスのパブリック IP アドレスを含むメッセージを Chef ログに書き込みます。

```
instance = search("aws_opsworks_instance", "self:true").first
Chef::Log.info("********** For instance '#{instance['instance_id']}', the instance's
 public IP address is '#{instance['public_ip']}' **********")
```

ami_id	アーキテクチャ	auto_scaling_type
availability_zone	created_at	ebs_optimized

ec2_instance_id	elastic_ip	hostname
instance_id	instance_type	layer_ids
os	private_dns	private_ip
public_dns	public_ip	root_device_type
root_device_volume_id	self	ssh_host_dsa_key_fingerprint
ssh_host_dsa_key_private	ssh_host_dsa_key_public	ssh_host_rsa_key_fingerprint
ssh_host_rsa_key_private	ssh_host_rsa_key_public	ステータス
subnet_id	virtualization_type	

ami_id

インスタンスの AMI (Amazon Machine Image) ID (文字列)。

アーキテクチャ

インスタンスのアーキテクチャ (文字列)。常に `"x86_64"` に設定されます。

auto_scaling_type

インスタンスのスケーリングタイプ: `null`、`timer`、または `load` (文字列)。

availability_zone

インスタンスのアベイラビリティーゾーン (AZ) (`"us-west-2a"` など) (文字列)。

created_at

UTC の "*yyyy*-*mm*-*ddd*T*hh*:*mm*:*ss*+*hh*:*mm*" 形式で示されるインスタンスが作成された時間 (文字列)。例えば、`"2013-10-01T08:35:22+00:00"` は 2013 年 10 月 10 日 8:35:22 (タイムゾーンオフセットなし) に対応します。詳細については、ISO 8601 を参照してください。

ebs_optimized

インスタンスが EBS 最適化されているかどうか (ブール値)。

ec2_instance_id

EC2 インスタンス ID (文字列)。

elastic_ip

Elastic IP アドレス (文字列)。インスタンスに Elastic IP アドレスがない場合は "null" に設定されます。

hostname

ホスト名 ("demo1" など) (文字列)。

instance_id

インスタンス ID。インスタンスを一意に識別する OpsWorks スタック生成の GUID (文字列) です。

instance_type

インスタンスのタイプ ("c1.medium" など) (文字列)。

layer_ids

一意の ID (307ut64c-c7e4-40cc-52f0-67d5k1f9992c など) で識別されるインスタンスのレイヤーのリスト。

os

インスタンスのオペレーティングシステム (文字列)。有効な値を次に示します。

- "Amazon Linux 2"
- "Amazon Linux 2018.03"
- "Amazon Linux 2017.09"
- "Amazon Linux 2017.03"
- "Amazon Linux 2016.09"
- "Custom"
- "Microsoft Windows Server 2022 Base"
- "Microsoft Windows Server 2022 with SQL Server Express"
- "Microsoft Windows Server 2022 with SQL Server Standard"
- "Microsoft Windows Server 2022 with SQL Server Web"
- "Microsoft Windows Server 2019 Base"
- "Microsoft Windows Server 2019 with SQL Server Express"
- "Microsoft Windows Server 2019 with SQL Server Standard"

- "Microsoft Windows Server 2019 with SQL Server Web"
- "CentOS 7"
- "Red Hat Enterprise Linux 7"
- "Ubuntu 20.04 LTS"
- "Ubuntu 18.04 LTS"
- "Ubuntu 16.04 LTS"
- "Ubuntu 14.04 LTS"

private_dns

プライベート DNS 名 (文字列)。

private_ip

プライベート IP アドレス (文字列)。

public_dns

パブリック DNS 名 (文字列)。

public_ip

パブリック IP アドレス (文字列)。

root_device_type

ルートデバイスのタイプ (文字列)。有効な値を次に示します。

- "ebs
- "instance-store"

root_device_volume_id

ルートデバイスのボリューム ID (文字列)。

self

このデータバッグ項目に、レシピを実行中のインスタンスに関する情報が含まれている場合は true。それ以外の場合は false (ブール型)。この値は、 スタック API OpsWorks ではなく、レシピでのみ使用できます。

ssh_host_dsa_key_fingerprint

長い DSA パブリックキー (文字列) を特定するバイトの短いシーケンス。

ssh_host_dsa_key_private

インスタンスの SSH 認証用の DSA で生成されたプライベートキー (文字列)。

ssh_host_dsa_key_public

インスタンスの SSH 認証用の DSA で生成されたパブリックキー (文字列)。

ssh_host_rsa_key_fingerprint

長い RSA パブリックキー (文字列) を特定するバイトの短いシーケンス。

ssh_host_rsa_key_private

インスタンスの SSH 認証用の RSA で生成されたプライベートキー (文字列)。

ssh_host_rsa_key_public

インスタンスの SSH 認証用の RSA で生成されたパブリックキー (文字列)。

ステータス

インスタンスのステータス (文字列)。有効な値を次に示します。

- `"requested"`
- `"booting"`
- `"running_setup"`
- `"online"`
- `"setup_failed"`
- `"start_failed"`
- `"terminating"`
- `"terminated"`
- `"stopped"`
- `"connection_lost"`

subnet_id

インスタンスのサブネット ID (文字列)。

virtualization_type

インスタンスの仮想化タイプ (文字列)。

レイヤーデータバッグ (aws_opsworks_layer)

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

レイヤーの設定を表します。

以下の例は、Chef 検索を使用して単一のデータバッグ項目を通じて検索を実行し、次に複数のデータバッグ項目を使用して、レイヤーの名前および短縮名とともに Chef ログにメッセージを書き込む方法を示しています。

```
layer = search("aws_opsworks_layer").first
Chef::Log.info("********** The layer's name is '#{layer['name']}' **********")
Chef::Log.info("********** The layer's shortname is '#{layer['shortname']}'
 **********")

search("aws_opsworks_layer").each do |layer|
  Chef::Log.info("********** The layer's name is '#{layer['name']}' **********")
  Chef::Log.info("********** The layer's shortname is '#{layer['shortname']}'
 **********")
end
```

ecs_cluster_arn	layer_id	名前
パッケージ	shortname	型
volume_configurations		

ecs_cluster_arn

レイヤーに Amazon ECS クラスターが割り当てられている場合は、Amazon ECS クラスターの Amazon リソースネーム (ARN) (文字列)。

暗号化

EBS ボリュームが暗号化されている場合は `true`。それ以外の場合は `false` (ブール値)。

layer_id

レイヤー ID。 OpsWorks スタックによって生成され、レイヤーを一意に識別する GUID (文字列) です。

名前

コンソール内のレイヤーを表すために使用されるレイヤーの名前 (文字列)。ユーザー定義も使用でき、一意である必要はありません。

パッケージ

インストールされるパッケージのリスト (文字列のリスト)。

shortname

ユーザー定義のレイヤーの短縮名 (文字列)。

型

Chef 12 Linux と Chef 12.2 Windows では常に `"custom"` に設定されるレイヤーのタイプ (文字列)。

volume_configurations

Amazon EBS ボリューム設定のリスト。

iops

ボリュームがサポートできる 1 秒あたりの I/O オペレーションの数。

mount_point

ボリュームのマウントポイントディレクトリ。

number_of_disks

ボリュームのディスク数。

raid_level

ボリュームの RAID 設定レベル。

サイズ

GiB 単位のボリュームサイズ。

volume_type

ボリュームのタイプ: 汎用、マグネティック、プロビジョンド IOPS、スループット最適化 HDD、Cold HDD。

Amazon RDS データバッグ (aws_opsworks_rds_db_instance)

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

以下のような、Amazon Relational Database Service (Amazon RDS) インスタンスの設定を指定するデータバッグコンテンツのセット。

アドレス	db_instance_identifier	db_password
db_user	engine	rds_db_instance_arn
リージョン		

以下の例は、Chef 検索を使用して単一のデータバッグ項目を通じて検索を実行し、次に複数のデータバッグ項目を使用して、Amazon RDS インスタンスの アドレスおよびデータベースエンジンタイプとともに Chef ログにメッセージを書き込む方法を示しています。

```
rds_db_instance = search("aws_opsworks_rds_db_instance").first
Chef::Log.info("********** The RDS instance's address is
 '#{rds_db_instance['address']}' **********")
Chef::Log.info("********** The RDS instance's database engine type is
 '#{rds_db_instance['engine']}' **********")

search("aws_opsworks_rds_db_instance").each do |rds_db_instance|
  Chef::Log.info("********** The RDS instance's address is
 '#{rds_db_instance['address']}' **********")
```

```
  Chef::Log.info("********** The RDS instance's database engine type is
 '#{rds_db_instance['engine']}' **********")
end
```

アドレス

インスタンスの DNS 名。

port

インスタンスのポートです。

db_instance_identifier

インスタンスの ID。

db_password

インスタンスのマスターパスワード。

db_user

インスタンスのマスターユーザー名。

engine

インスタンスのデータベースエンジン (`mysql` など)。

rds_db_instance_arn

インスタンスの Amazon リソースネーム (ARN)。

リージョン

インスタンスの AWS リージョン (`us-west-2` など)。

スタックデータバッグ (aws_opsworks_stack)

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

スタックの設定を表します。

以下の例では、Chef 検索を使用して、スタックの名前とクックブックのソース URL とともに、メッセージを Chef ログに書き込む方法を示しています。

```
stack = search("aws_opsworks_stack").first
Chef::Log.info("********** The stack's name is '#{stack['name']}' **********")
Chef::Log.info("********** The stack's cookbook URL is
 '#{stack['custom_cookbooks_source']['url']}' **********")
```

arn	custom_cookbooks_source	名前
リージョン	stack_id	use_custom_cookbooks
vpc_id		

arn

スタックの Amazon リソースネーム (ARN) (文字列)

custom_cookbooks_source

カスタムクックブックのソースリポジトリを指定するコンテンツのセット。

型

リポジトリのタイプ (文字列)。有効な値を次に示します。

- `"archive"`
- `"git"`
- `"s3"`

url

リポジトリの URL (`"git://github.com/amazonwebservices/opsworks-demo-php-simple-app.git"` など) (文字列)。

username

プライベートリポジトリの場合はユーザー名、パブリックリポジトリの場合は `null` (文字列)。プライベート Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) バケットの場合、このコンテンツにはアクセスキーに設定されます。

password

プライベートリポジトリの場合はパスワード、パブリックリポジトリの場合は null (文字列)。プライベート S3 バケットでは、このコンテンツはシークレットキーに設定されます。

ssh_key

プライベート Git リポジトリにアクセスする場合はデプロイ SSH キー、パブリックリポジトリの場合は (文字列)。null

revision

リポジトリに複数のブランチがある場合、そのコンテンツはアプリケーションのブランチまたはバージョンを指定します"version1" (など) (文字列)。それ以外の場合は、null に設定されます。

名前

スタックの名前 (文字列)。

リージョン

スタックの AWS リージョン (文字列)。

stack_id

スタックを識別する GUID (文字列)。

use_custom_cookbooks

カスタムクックブックが有効になっているかどうか (ブール)。

vpc_id

スタックが VPC で実行されている場合は VPC ID (文字列)。

ユーザーデータバッグ (aws_opsworks_user)

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

ユーザーの設定を表します。

以下の例は、Chef 検索を使用して単一のデータバッグ項目を検索してから、複数のデータバッグ項目を検索して、ユーザーのユーザー名と Amazon リソースネーム (ARN) とともにメッセージを Chef ログに書き込む方法を示しています。

```
user = search("aws_opsworks_user").first
Chef::Log.info("********** The user's user name is '#{user['username']}' **********")
Chef::Log.info("********** The user's user ARN is '#{user['iam_user_arn']}'
 **********")

# Or...

search("aws_opsworks_user").each do |user|
  Chef::Log.info("********** The user's user name is '#{user['username']}' **********")
  Chef::Log.info("********** The user's user ARN is '#{user['iam_user_arn']}'
 **********")
end
```

administrator_privileges	iam_user_arn	remote_access
ssh_public_key	unix_user_id	username

administrator_privileges

ユーザーが管理者アクセス権限を持っているかどうか (ブール値)。

iam_user_arn

ユーザーの Amazon リソースネーム (ARN) (文字列)。

remote_access

ユーザーが RDP を使用してインスタンスにログインできるかどうか (ブール値)。

ssh_public_key

スタックコンソールまたは API (文字列) OpsWorks を介して提供されるユーザーのパブリックキー。

unix_user_id

ユーザーの UNIX ID (数値)。

username

ユーザー名 (文字列)。

OpsWorks エージェントの変更

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

Chef 12 エージェントリリース

次の表は、 AWS OpsWorks Stacks が管理するインスタンスにインストールする Chef 12 エージェントの重要な変更点を説明しています。

エージェントのバージョン	説明	リリース日
4042	• このエージェントリリースには小さな変更のみが含まれており、新特徴量はない	2023 年 2 月 7 日
4041	• このエージェントリリースには小さな変更のみが含まれており、新特徴量はない • Amazon CA 証明書の更新	2023 年 1 月 27 日
4040	• このエージェントリリースには小さな変更のみが含まれており、新特徴量はない	2022 年 7 月 22 日
4039	• Ubuntu AMI の ECS インテグレーションの修正	2020 年 4 月 30 日
4038	• DST 変更中にインスタンス統計を送信するときのバグを修正	2020 年 3 月 5 日

エージェントのバージョン	説明	リリース日
	• エージェントのダウンロードおよびインストール中に no_proxy 環境変数を優先	
4037	• SigV4 を使用してリージョンなしで S3 URL へのリクエストに署名するためのサポートを追加 • SigV2 を使用して S3 リクエストに署名するためのサポートを削除	2019 年 6 月 4 日
4035	• ECS 設定中のバグを修正 • インスタンスタイプ変更後の fstab エントリの重複を修正	2019 年 5 月 8 日
4033	• Ubuntu 18.04 のサポートを追加 • Amazon Linux 2 用のエージェントのインストール時のバグを修正	2018 年 11 月 26 日
4032	• Amazon Linux 2 のサポートを追加	2018 年 10 月 24 日
4031	• Amazon Linux 2018.03 のサポートを追加する • 別のアカウントでホストされているパブリック S3 アーカイブのサポート	2018 年 8 月 15 日
4030	• c5d インスタンスのボリューム処理を修正	2018 年 5 月 31 日
4029	• Ubuntu 14.04 に nvme-cli をインストール • c5 および m5 インスタンスでボリュームのマウントを修正 • 再起動時に常にホスト名を保持	2018 年 5 月 2 日
4028	• CentOS の monit 設定を修正	2018 年 3 月 20 日

エージェントのバージョン	説明	リリース日
4027	• Ubuntu 14.04 上で NVMe ボリュームをマウントするサポート (`nvme-cli` が手動でインストールされている必要があります) • ボリュームに `name` プロパティは必要ではありません。	2018 年 2 月 17 日
4026	• EBS ボリューム ID を使用した、NVMe ベースの EBS ボリュームのマウント • i3 インスタンスで EBS ボリュームのマウントを修正 • c5 および m5 インスタンスで EBS ボリュームをマウントする順序を修正	2018 年 1 月 31 日
4025	• NVMe デバイスの処理を修正	2017 年 13 月 12 日
4024	• Amazon Linux 2017.09 のサポートを追加する	2017 年 5 月 12 日
4023	• CloudWatch ログの統合のサポートを追加	2017 年 4 月 2 日
4022	• Chef クライアントバージョンを 12.18.31 に更新する	2017 年 2 月 1 日
4021	• プロキシ処理の向上	2016 年 12 月 16 日
4020	• Chef クライアントバージョンを 12.16.42 に更新する	2016 年 12 月 8 日

エージェントのバージョン	説明	リリース日
4019	• エージェントのインストール中のソースプロキシ変数 • Red Hat Enterprise Linux 7 では `systemd` の代わりに `monit` を使用する • Red Hat Enterprise Linux 7 で EPEL をセットアップしない • プロセスをロックするために `flock` ではなく `lockrun.c` を使用する • `ps -p1` を確認するときの `systemd` の異常な出力を回避する	2016 年 10 月 19 日
4018	• Chef クライアントバージョンを 12.13.37 に更新する • Amazon Linux 2016.09 のサポートを追加する	2016 年 8 月 25 日
4017	• Chef クライアントバージョンを 12.12.15 に更新する	2016 年 8 月 10 日
4016	• `monit` が使用されていないシステムのエージェントのアンインストールを修正します	2016 年 6 月 23 日
4015	• Amazon Linux 2016.03 の ECS 設定を固定する	2016 年 6 月 17 日
4011	• Chef クライアントバージョンを 12.10.24 に更新する • ログのアップロード処理を向上させる	2016 年 5 月 19 日
4008	• Amazon Linux 2016.03 のサポートを追加する • バンドルインストールにタイムアウトを追加する • xfs が存在する場合は /etc/filesystems に追加する	2016 年 3 月 16 日

エージェントのバージョン	説明	リリース日
4007	• Chef クライアントバージョンを 12.7.2 に更新する • オンプレミスインスタンス用のエラー処理を向上させる (AWS 外でホストされるサーバー) • 最新 chef-sugar との互換性を向上させる • デプロイのアーカイブのダウンロードを再試行する	2016 年 3 月 4 日
4006	• Chef クライアントバージョンを 12.6.0 に更新する • エージェントインストールに libxml2-devel/libxml2-dev パッケージと libxslt-devel/libxslt-dev パッケージをインストールしない	2016 年 1 月 21 日
4005	• ec2 インフラストラクチャ用 Ohai で常に ec2 データを有効化することで ec2 インポートを固定する	2015 年 12 月 17 日
4004	• OpsWorks Chef 12 Linux- Chef Client 12.5.1 のスタックサポート	2015 年 12 月 3 日

Chef 11.10 エージェントリリース

次の表は、 AWS OpsWorks Stacks が管理するインスタンスにインストールする Chef 11.10 エージェントの重要な変更点を説明しています。

エージェントのバージョン	説明	リリース日
3456	• このエージェントリリースには小さな変更のみが含まれており、新特徴量はない • Amazon CA 証明書の更新	2023 年 1 月 27 日
3455	• このエージェントリリースには小さな変更のみが含まれており、新特徴量はない	2022 年 11 月 1 日
3454	• Ubuntu AMI の ECS インテグレーションの修正	2020 年 4 月 28 日

エージェントのバージョン	説明	リリース日
3453	• DST 変更中にインスタンス統計を送信するときのバグを修正 • RHEL7 セットアップでパッケージが不足しているバグを修正 • エージェントのダウンロードおよびインストール中に no_proxy 環境変数を優先	2020 年 3 月 5 日
3452	• us-east-1 の場合、Amazon S3 仮想パス URL からそのリージョンを除外 • 内部クックブックを抽出してステージのリージョン固有のバケットにアップロード • Chef 11.10 の fstab エントリを修正 • S3 に対する SigV2 の使用を削除し、リクエストでバケットのリージョンを取得	2019 年 8 月 13 日
3451	• Ruby 2.6.1 のサポートを追加	2019 年 3 月 20 日
3450	• デフォルトの EBS 属性を修正 • Amazon Linux 2 用の CloudWatchLogs エージェントのインストールを修正 • 2.6.14 より新しいバージョンの rubygem 用のバンドラーのインストールを修正 • パブリック S3 アーカイブのサポートを修正	2018 年 12 月 3 日
3449	• c5d インスタンスのボリューム処理を修正 • NVMe デバイスインスタンスの RAID アレイのサポートを修正	2018 年 6 月 5 日

エージェントのバージョン	説明	リリース日
3448	• Ruby のデフォルト 2.3 バージョンを 2.3.7 にアップグレード • Ubuntu 14.04 インスタンスの NVMe ベースのインスタンスにマウントされた EBS ボリュームの修正 • 別のアカウントでホストされている公開 Amazon S3 アーカイブをサポートします • Red Hat Enterprise Linux インスタンスにおける `opsworks-agent` 起動時の問題を修正	2018 年 5 月 8 日
3447	• EBS ボリューム ID を使用した、NVMe ベースの EBS ボリュームのマウント • i3 インスタンスで EBS ボリュームのマウントを修正 • c5 および m5 で EBS ボリュームをマウントする順序を修正 • Ruby のデフォルト 2.3 バージョンを 2.3.6 に更新	2018 年 1 月 31 日
3446	• NVMe デバイスの処理を修正 • Ruby のデフォルト 2.3 バージョンを 2.3.5 に更新	2017 年 12 月 14 日
3445	• Amazon Linux 2017.09 のサポートを追加する • Ruby のデフォルト 2.2 バージョンを 2.2.8 に更新	2017 年 10 月 31 日
3444	• CloudWatch ログのサポートを追加します	2017 年 4 月 1 日
3443	• プロキシ処理の向上	2016 年 12 月 15 日
3442	• Ruby のデフォルト 2.3 バージョンを 2.3.3 に更新 • Ruby のデフォルト 2.2 バージョンを 2.2.6 に更新	2016 年 6 月 12 日
3441	• エージェントのインストール中のソースプロキシ変数	2016 年 10 月 21 日

エージェントのバージョン	説明	リリース日
3440	• Amazon Linux 2016.09 のサポートを追加する	2016 年 9 月 13 日
3439	• 小さな変更。新機能はありません	2016 年 7 月 29 日
3438	• Ruby 2.3.1 のサポートを追加 • IAM インスタンスプロファイルの認証情報によるインスタンスの登録の改善 • `s3curl.pl` の残りを削除 • Amazon Linux 2016.03 の ECS 設定を固定する	2016 年 6 月 17 日
3437	• Ruby のデフォルト 2.2 バージョンを 2.2.5 に更新	2016 年 5 月 4 日
3436	• Red Hat Enterprise Linux の EPEL URL のアップデート 重要: この変更なしでは、Red Hat Enterprise Linux インスタンスの起動は失敗します。	2016 年 4 月 18 日
3435	• Ruby のデフォルト 2.1 バージョンを 2.1.9 に更新 • Amazon S3 とアーカイブのデプロイメントの処理を改善します	2016 年 4 月 6 日
3434	• Amazon Linux 2016.03 のサポートを追加する • パッケージのインストールの再試行	2016 年 3 月 16 日
3433	• オンプレミスインスタンス (の外部でホストされるサーバー AWS) のいくつかの改善点 • 最新 との互換性を向上させる`chef-sugar` • デプロイのアーカイブのダウンロードを再試行する • Ruby gem のインストール URL の修正	2016 年 2 月 27 日

エージェントのバージョン	説明	リリース日
3432	• バケット名で特殊文字を処理する改善 • s3_file をバージョン 2.6.6 に更新 • 指定されたマウントポイントがないボリュームのスキップ • 停止して開始する代わりに、常に unicorn を再起動して、デプロイ中のダウンタイムを防止する • setup コマンドで常にカスタムクックブックを更新する • RAID アレイを作成した後で initramfs を更新して、再起動時のマッピング問題を防止する	2016 年 1 月 20 日
3431	• Rails レイヤーにおける passenger および unicorn gem のインストール問題が修正されました • Ruby の デフォルト 2.0、2.1 および 2.2 バージョンを 2.0.0p648、2.1.8 および 2.2.4 に更新 • postgres パッケージ名がカスタム JSON で設定されることが可能 • Node.js のデフォルトバージョンを 0.12.9 に更新	2015 年 12 月 22 日
3430	• 小さな変更。新機能はありません	2015 年 11 月 25 日
3429	• OpsWorks エージェントのデーモン化の改善 (stdout/stderr を閉じる) • s3_file リソースの堅牢性の向上 (再試行、キャッチされた例外)	2015 年 18 月 11 日
3428	• Gemfile に基づく postgres アダプタ検出の追加によって、https://github.com/aws/opsworks-cookbooks/issues/136 を修正	2016 年 6 月 17 日

エージェントのバージョン	説明	リリース日
3427	• エージェントでにおける認証情報の取得に関する問題を修正しました • Ruby の デフォルト 2.0、2.1 および 2.2 バージョンを 2.0.0p647、2.1.7 および 2.2.3 に更新	2015 年 9 月 11 日
3426	• aws-sdk を 1.65.0 に更新しました • s3curl を s3_file cookbook に置き換えることで、 Amazon S3 からのダウンロードを改善します • Node.js のデフォルトバージョンを 0.12.7 に変更 • Node.js アプリにログ記録が追加されました。STDERR および STDOUT が shared/log ディレクトリに口グされ、ローテーションされました • カスタムクックブックのサブモジュールが明示的に更新をチェックアウトするようになりました • deploy ディレクトリが作成される前にバインドのマウントが実行されたことを確認する https://github.com/aws/opsworks-cookbooks/issues/213 の回避策が追加されました	2015 年 8 月 27 日
3425	• Amazon Linux および Ubuntu への ECS のサポート	2015 年 7 月 27 日
3424	• 小さな変更。新機能はありません	2015 年 7 月 9 日
3422	• Red Hat Enterprise Linux 7 の完全サポート • /etc/hosts 世代のエラーに対する回復力を高めました	2015 年 6 月 29 日
3421	• Red Hat Enterprise Linux 7 のデータベースパッケージ名の上書きオプション • systemd が kill 信号を monit によってモニタリングされるプロセスに送信することを回避するために、 monit systemd 設定が更新されました。	2015 年 6 月 11 日

OpsWorks スタックリソース

> **Important**
>
> この AWS OpsWorks Stacks サービスは 2024 年 5 月 26 日にサポート終了となり、新規および既存のお客様の両方で無効になっています。できるだけ早くワークロードを他のソリューションに移行することを強くお勧めします。移行についてご質問がある場合は、AWS re:Post またはAWS プレミアムサポートを通じて AWS サポート チームにお問い合わせください。

このサービスを利用する際に役立つ関連リソースは次のとおりです。

リファレンスガイド、ツール、およびサポートリソース

複数の有益なガイド、フォーラム、連絡先情報、およびその他のリソースを OpsWorks スタックとアマゾン ウェブ サービスで利用可能です。

- OpsWorks スタック API リファレンス – 一般的なパラメータやエラーコードなど、 OpsWorks スタックアクションとデータ型に関する説明、構文、使用例。
- OpsWorks Stacks Technical FAQ – 開発者がこの製品について尋ねた上位の質問。
- OpsWorks Stacks Release Notes (スタックリリースノート) – 最新リリースのハイレベルな概要。このドキュメントでは、新機能、修正内容、および既知の問題について特に説明します。
- AWS Tools for PowerShell – PowerShell 環境で の機能を公開する Windows AWS SDK for .NET PowerShell コマンドレットのセット。
- AWS Command Line Interface (AWS コマンドラインインターフェイス) – AWS サービスにアクセスするための統一コマンドライン構文。AWS CLI は、サポートされているすべてのサービスにアクセスできるように、単一セットアッププロセスを使用します。
- OpsWorks スタックコマンドラインリファレンス – コマンドラインプロンプトで使用する OpsWorks スタック固有のコマンド。

- クラスとワークショップ – AWS スキルを磨き、実践的な経験を積むために、セルフペースラボに加えて、ロールベースおよび専門コースへのリンク。
- AWS デベロッパーセンター – チュートリアルを調べ、ツールをダウンロードし、デ AWS ベロッパーイベントについて学習します。

- AWS 開発者ツール – AWS アプリケーションを開発および管理するための開発者ツール、SDKs、IDE ツールキット、コマンドラインツールへのリンク。
- 入門リソースセンター – をセットアップし AWS アカウント、 AWS コミュニティに参加して、最初のアプリケーションを起動する方法について説明します。
- ハンズオンチュートリアル - ステップ バイ ステップのチュートリアルに従って、最初のアプリケーションを AWSで起動します。
- AWS ホワイトペーパー – ソリューションアーキテクトや他の技術専門家によって AWS 作成されたアーキテクチャ、セキュリティ、経済学などのトピックを網羅した、技術 AWS ホワイトペーパーの包括的なリストへのリンク。
- AWS サポート センター – AWS サポート ケースを作成および管理するためのハブ。フォーラム、技術的なFAQs、サービスのヘルスステータスなど、その他の役立つリソースへのリンクも含まれています AWS Trusted Advisor。
- サポート – クラウドでのアプリケーションの構築と実行に役立つ サポート one-on-one の高速応答サポートチャネルである に関する情報のプライマリウェブページ。
- お問い合わせ – AWS の請求、アカウント、イベント、不正使用、その他の問題などに関するお問い合わせの受付窓口です。
- AWS サイト規約 – 当社の著作権と商標、お客様のアカウント、ライセンス、サイトアクセス、およびその他のトピックに関する詳細情報。

AWS ソフトウェア開発キット

Amazon Web Services には、さまざまなプログラミング言語から OpsWorks スタックにアクセスするためのソフトウェア開発キットが用意されています。SDK ライブラリは、サービスリクエストに対する署名の暗号化、リクエストの再試行、エラーレスポンスの処理など、多数の一般的なタスクを自動化します。

- AWS SDK for Java – Setup (セットアップ) とother documentation (その他のドキュメント)
- AWS SDK for .NET – Setup (セットアップ)と other documentation (その他のドキュメント)。
- AWS SDK for PHP – ドキュメント
- AWS SDK for Ruby – Documentation (ドキュメント)
- その他の文書
- AWS SDK for Python (Boto) – Setup (セットアップ) と other documentation (その他のドキュメント)

ソースソフトウェアを開く

OpsWorks スタックには、それぞれのライセンスによって管理されるさまざまなオープンソースソフトウェアパッケージが含まれています。詳細については次を参照してください:

- Chef 12 の Linux インスタンスの場合、インスタンスの `/opt/aws/opsworks/current` ディレクトリで `THIRD_PARTY_LICENSES` ファイルを開きます。
- Linux 用の Chef 11.10 以前のバージョンについては、「OpsWorks Linux エージェント属性に関するドキュメント」という PDF をダウンロードしてください。

OpsWorks ドキュメント履歴

変更	説明	日付
非推奨の AWS 管理ポリシー	が廃止されたため、次の AWS 管理ポリシー AWS OpsWorks for Chef Automate は廃止されました: AWSOpsWorksCMServiceRole および AWSOpsWorksCMInstanceProfileRole 。	2025 年 5 月 26 日
AWS OpsWorks スタックの更新	Detach in Place ツールを使用して OpsWorks スタックサービスから OpsWorks インスタンスをデタッチできるようになりました。このガイドのAWS OpsWorks Stacks「Detach in Place ツールの使用」を参照してください。	2024 年 4 月 11 日
AWS OpsWorks スタックの更新	移行スクリプトを使用して AWS OpsWorks 、 スタックを AWS Systems Manager Application Manager に移行できるようになりました。詳細については、このガイドのAWS OpsWorks Stacks 「アプリケーションの Application Manager への移行 AWS Systems Manager」を参照してください。	2022 年 12 月 22 日
AWS OpsWorks for Chef Automate および の更新 AWS OpsWorks for Puppet Enterprise	AWS OpsWorks for Chef Automate または OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーのシステムメンテナンスが失	2022 年 9 月 29 日

	敗した場合に実行できる操作を説明するトラブルシューティング手順が利用可能になりました。詳細については、このガイドの「Chef Automate サーバーのシステムメンテナンス失敗」または「Puppet Enterprise サーバーのシステムメンテナンス失敗」を参照してください。	
AWS OpsWorks for Chef Automate および の更新 AWS OpsWorks for Puppet Enterprise	AWS OpsWorks for Chef Automate または OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーが `Connection lost` 状態になった場合に、トラブルシューティング手順を使用できるようになりました。詳細については、本ガイドの「Chef Automate サーバーが `Connection lost` の状態にある」または「Puppet Enterprise サーバーが `Connection lost` の状態にある」を参照してください。	2022 年 3 月 23 日

AWS OpsWorks スタックの更新	セキュリティのベストプラクティスとして、 `aws:SourceArn` または `aws:SourceAccount` 条件キー (またはその両方) AWS OpsWorks を追加して、 スタックが他の AWS サービスでタスクを実行できるようにする信頼関係ポリシーを追加できるようになりました。詳細については、本ガイドの「 AWS OpsWorks スタックにおけるクロスサービスでの混乱した代理処理を防止するを参照してください。	2022 年 3 月 4 日
AWS OpsWorks for Chef Automate および の更新 AWS OpsWorks for Puppet Enterprise	セキュリティのベストプラクティスとして、 `aws:SourceArn` と OpsWorks for Puppet Enterprise が他の AWS サービスでタスクを実行できるようにする信頼関係ポリシーに または AWS OpsWorks for Chef Automate `aws:SourceAccount` 条件キー (またはその両方) を追加できるようになりました。詳細については、Cross-service confused deputy preventionを参照してください。	2022 年 1 月 10 日

AWS OpsWorks for Chef Automate および の更新 AWS OpsWorks for Puppet Enterprise	AWS OpsWorks for Chef Automate と OpsWorks for Puppet Enterprise は、管理ポリシー`AWSOpsWorksCMServiceRole` と を更新し`AWSOpsWorksCMInstanceProfileRole` 、シークレットを保存する AWS Secrets Managerようになりました。	2021 年 5 月 3 日
への更新 AWS OpsWorks for Puppet Enterprise	コンソールで作成する OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーのエンジンバージョンは 2019.8.5 になっています。API を使用することで、Puppet Enterprise サーバーを作成する際に、`2019` または `2017` のどちらのバージョンも指定することができます `DescribeServers` API は、その結果に `PUPPET_API_CRL` という属性を返すようになりました。この属性は、内部使用のための証明書取り消しリストを含んでいます。	2021 年 4 月 28 日

OpsWorks スタックが新しい管理ポリシーを使用する	OpsWorks スタックは、 スタックですべてのアクションを実行するアクセス許可を含む OpsWorks 管理ポリシーを変更しました。新しい方針は [AWSOpsWorks_FullAccess] です。このポリシーのアクセス権限についての詳細は、「Example policies」(ポリシーの例) を参照してください。	2021 年 2 月 19 日
EC2-Classic から VPC に AWS OpsWorks Stacks スタックを移行する	EC2-Classic から VPC に AWS OpsWorks Stacks スタックを移行する方法を説明するドキュメントが追加されました。	2020 年 9 月 29 日
AWS OpsWorks for Chef Automate および のスターターキットを再生成する AWS OpsWorks for Puppet Enterprise	AWS OpsWorks for Chef Automate または AWS OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーのスターターキットを再生成する方法を説明するドキュメントが追加されました。	2020 年 7 月 29 日
AWS OpsWorks for Puppet Enterprise では、カスタムドメイン、証明書、プライベートキーを使用するサーバーを作成できます。	カスタムドメイン、証明書、プライベートキーを使用する OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーを作成できるようになりました。既存のサーバーのバックアップからサーバーを作成することで、カスタムドメインを使用するように既存の Puppet Enterprise サーバーを更新できます。	2020 年 4 月 17 日

AWS OpsWorks for Chef Automate と がコンソールでのタグ付けをサポートする AWS OpsWorks for Puppet Enterprise ようになりました	または を使用して、AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーまたは AWS OpsWorks for Puppet Enterprise マスター、またはサーバーバックアップにタグを追加できるようになりました AWS マネジメントコンソール AWS CLI。詳細については、「タグを使用する (Chef)」または「タグを使用する (Puppet)」を参照してください。	2020 年 2 月 26 日
AWS OpsWorks for Chef Automate 既存の Chef Automate 1 サーバーから Chef Automate 2 へのアップグレードを簡素化	Chef Automate 1 を実行している対象 AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーを Chef Automate 2 にアップグレードするには、コンソールのサーバーの詳細ページでアップグレードを開始するを選択するか、 `StartMaintenance` API アクションを実行します。詳細については、AWS OpsWorks for Chef Automate 「サーバーを Chef Automate 2 にアップグレードする」を参照してください。	2020 年 1 月 24 日
AWS OpsWorks for Chef Automate および AWS OpsWorks for Puppet Enterprise	CM のセキュリティ (AWS OpsWorks for Chef Automate および AWS OpsWorks for Puppet Enterprise) OpsWorks に関する新しい章がガイドに追加されました。	2019 年 12 月 23 日

AWS OpsWorks for Chef Automate と がタグ付け AWS OpsWorks for Puppet Enterprise をサポート	を使用して、 AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーまたは AWS OpsWorks for Puppet Enterprise マスター、またはサーバーバックアップにタグを追加できるようになりました AWS CLI。OpsWorks CM はタグベースの認可をサポートするようになりました。	2019 年 12 月 18 日
AWS OpsWorks for Chef Automate では、カスタムドメイン、証明書、プライベートキーを使用するサーバーを作成できます。	カスタムドメイン、証明書、プライベートキーを使用する AWS OpsWorks for Chef Automate 2.0 サーバーを作成できるようになりました。既存のサーバーのバックアップからサーバーを作成することで、既存の Chef Automate 2.0 サーバーをカスタムドメインを使用するように更新できます。	2019 年 10 月 22 日
OpsWorks スタックが Ruby 2.6.1 をサポートするようになりました	OpsWorks スタックは、Chef 11.10 スタックの Rails App Server レイヤーで Ruby 2.6.1 をサポートします。	2019 年 5 月 2 日
AWS OpsWorks for Chef Automate Chef Automate 2.0 をサポートするようになりました	新しい AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーは Chef Automate 2.0 を実行します。これには、Chef InSpec の更新、コンプライアンススキャンとレポートにおける新機能、Chef Infra が含まれます。	2019 年 4 月 30 日

AWS OpsWorks for Chef Automate および AWS OpsWorks for Puppet Enterprise	CloudFormation を使用して AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーまたは AWS OpsWorks for Puppet Enterprise マスターサーバーを作成できるようになりました。	2019 年 1 月 24 日
OpsWorks スタック	OpsWorks スタックは、Chef 12 スタックで Ubuntu 18.04 LTS を実行するインスタンスをサポートするようになりました。	2018 年 12 月 18 日
AWS OpsWorks for Puppet Enterprise	CodeCommit を使用するコントロールリポジトリへの SSH ベースの接続を設定するための手順が追加されました。	2018 年 12 月 3 日
OpsWorks スタック	OpsWorks スタックは、Chef 12 スタックで Amazon Linux 2 を実行するインスタンスをサポートするようになりました。	2018 年 11 月 15 日
OpsWorks スタック	OpsWorks スタックは、Chef 11.10 スタックで Amazon Linux 2018.03 を実行するインスタンスをサポートするようになりました。	2018 年 10 月 23 日
OpsWorks スタック	OpsWorks スタックは、Chef 12 スタックで Amazon Linux 2018.03 を実行するインスタンスをサポートするようになりました。	2018 年 8 月 23 日

AWS OpsWorks for Chef Automate および OpsWorks for Puppet Enterprise	OpsWorks for Puppet Enterprise が PE 2018.1.2 にアップグレードされました。Chef Automate 1.8.68 にアップグレード AWS OpsWorks for Chef Automate されました。	2018 年 6 月 29 日

- AWS OpsWorks for Chef Automate および OpsWorks for Puppet Enterprise API バージョン: 2016-11-01
- OpsWorks スタック API バージョン: 2016-03-08
- ドキュメントの最終更新日: 2024-04-11

以前の更新

次の表に、2018 年 6 月以前の「OpsWorks ユーザーガイド」の各リリースにおける重要な変更点を示します。

説明	日付
OpsWorks Windows ベースのスタックの Stacks Chef バージョンが 12.22 にアップグレードされました。Ruby バージョンは 2.3.6 になりました。	2018 年 4 月 19 日
を使用して AWS OpsWorks for Chef Automate サーバーまたは OpsWorks for Puppet Enterprise マスターを作成する新しい手順 AWS CLI。	2018 年 3 月 23 日
Chef Automate バージョンを 1.8 に更新しました。`opsworks-audit` クックブックを追加し Chef Compliance セットアップを簡素化しました。	2018 年 3 月 5 日
Amazon CloudWatch Events OpsWorks の スタックイベントのサポートが追加されました。	2018 年 2 月 20 日

説明	日付
スタックの新しい EBS OpsWorks ボリュームタイプのサポートと、新しい API である DescribeOperatingSystems が追加されました。	2018 年 1 月 25 日
OpsWorks for Puppet Enterprise および では、サーバーの作成時に複数のセキュリティグループの選択がサポートされる AWS OpsWorks for Chef Automate ようになりました。	2018 年 1 月 18 日
欧州 (パリ) リージョンの OpsWorks スタックのサポートが追加されました。	2017 年 12 月 19 日
6 つの追加リージョンで AWS OpsWorks for Chef Automate と OpsWorks for Puppet Enterprise のサポートを追加し、 で AWS OpsWorks for Chef Automate と OpsWorks for Puppet Enterprise サーバーのバックアップを作成する手順を追加しました AWS マネジメントコンソール。	2017 年 12 月 18 日
新しい OpsWorks for Puppet Enterprise サービスとドキュメントが追加されました。	2017 年 11 月 16 日
スタックに Amazon Linux 2017.09 OpsWorks のサポートを追加しました。	2017 年 11 月 7 日
Chef Compliance のサポートが に追加されました AWS OpsWorks for Chef Automate。	2017 年 10 月 25 日
Amazon Linux 2017.09 のサポートを に追加しました AWS OpsWorks for Chef Automate。	2017 年 10 月 9 日
システムメンテナンスのトピックを AWS OpsWorks for Chef Automate 章に追加しました。	2017 年 7 月 28 日
OpsWorks スタックのタグのサポートが追加されました。	2017 年 6 月 6 日
CloudWatch Logs との統合が追加されました。	2017 年 4 月 10 日
新しい AWS OpsWorks for Chef Automate サービスとドキュメントを追加しました。	2016 年 12 月 1 日

説明	日付
米国東部 (オハイオ) リージョンのリージョンエンドポイントへのサポートが追加されました。	2016 年 10 月 12 日
Amazon Linux 2016.09 オペレーティングシステムを実行するスタックとインスタンスのサポートが追加されました。	2016 年 9 月 30 日
アジアパシフィック (ソウル)と 9 つの追加リージョンエンドポイントへのサポートが追加されました。	2016 年 8 月 15 日
組み込みレイヤーで Node.js 0.12.15 と Ruby 2.3 のサポートが追加されました。	2016 年 7 月 6 日
アジアパシフィック (ムンバイ) リージョンへのサポートが追加されました。	2016 年 6 月 28 日
CentOS 7 オペレーティングシステムを実行するスタックとインスタンスのサポートが追加されました。	2016 年 6 月 22 日
CodePipeline と OpsWorks スタックの統合を説明するチュートリアルを追加しました。	2016 年 6 月 2 日
Ubuntu 16.04 LTS オペレーティングシステムを実行するスタックとインスタンスのサポートが追加されました。	2016 年 6 月 1 日
Chef 12 Linux のサポートと関連ドキュメントを追加しました。	2015 年 12 月 3 日
「ご利用開始にあたって」に Node.js walkthrough を追加しました。	2015 年 7 月 14 日
2 つの新しいクックブックの例をクックブック 101 に追加しました。	2015 年 7 月 14 日
エージェントバージョン管理のサポートを追加しました。	2015 年 6 月 23 日
エージェントバージョンを管理するためのサポートを追加しました。	2015 年 6 月 24 日
カスタム Windows AMI のサポートが追加されました。	2015 年 6 月 22 日
ベストプラクティスに関する新しいトピックを 3 つ追加しました。	2015 年 6 月 11 日
Windows スタックのサポートが追加されました。	2015 年 5 月 18 日

説明	日付
ベストプラクティスに関する章を追加しました。	2014 年 12 月 15 日
Elastic Load Balancing の Connection Draining とカスタム Shutdown タイムアウトのサポートが追加されました。	2014 年 12 月 15 日
AWS OpsWorks Stacks の外部で作成されたインスタンスの登録に対するサポートが追加されました。	2014 年 12 月 9 日
Amazon SWF に対するサポートが追加されました。	2014 年 9 月 4 日
アプリケーションへの環境変数の関連付けのサポートと、増補したクックブック 101 を追加しました。	2014 年 7 月 16 日
クックブックを実装するチュートリアルの説明である、クックブック 101 を追加しました。	2014 年 7 月 16 日
CloudTrail へのサポートが追加されました。	2014 年 6 月 4 日
Amazon RDS に対するサポートが追加されました。	2014 年 5 月 14 日
Chef 11.10 と Berkshelf のサポートが追加されました。	2014 年 3 月 27 日
Amazon EBS の PIOPS ボリューム に対するサポートが追加されました。	2013 年 12 月 16 日
リソースベースの権限が追加されました。	2013 年 12 月 5 日
リソース管理が追加されました。	2013 年 10 月 7 日
VPC のサポートが追加されました。	2013 年 8 月 29 日
カスタム AMI と Chef 11.4 のサポートが追加されました。	2013 年 7 月 24 日
インスタンスごとに複数のレイヤーのコンソールサポートが追加されました。	2013 年 7 月 1 日
Amazon EBS でバックアップされたインスタンス、Elastic Load Balancing、および Amazon CloudWatch モニタリングのサポートが追加されました。	2013 年 5 月 14 日

説明	日付
AWS OpsWorks Stacks ユーザーガイドの初回リリース。	2013 年 2 月 18 日

翻訳は機械翻訳により提供されています。提供された翻訳内容と英語版の間で齟齬、不一致または矛盾がある場合、英語版が優先します。